

# 【完結】 Fate/Epic of Gilgamesh

kaizer

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

狂った第五次聖杯戦争。衛宮士郎が召喚したのは、金髪碧眼の少女騎士ではなく、黄金の英雄王だった――。最弱の人間と最強の英霊が紡ぐ、正義と友情の物語。それは歴史に語られぬ、もう一つの『ギルガメシユ叙事詩』。



|      |         |  |
|------|---------|--|
| 2 4. | ヘラの栄光   |  |
| 2 5. | 死の逃避行   |  |
| 2 6. | 影の器     |  |
| 2 7. | 正義の在処   |  |
| 2 8. | 宿命の鎖    |  |
| 2 9. | 英雄王     |  |
| 3 0. | 悪意      |  |
| 3 1. | 遺産の価値   |  |
| 3 2. | 輝いていたもの |  |
| 3 3. | 王道、激突   |  |
| 3 4. | 進撃      |  |
| 3 5. | 決戦の地    |  |
| 3 6. | 神話再臨    |  |

1692164616011537149014441389133512741232118311311078

|      |         |  |
|------|---------|--|
| 3 7. | この世全ての悪 |  |
| 3 8. | 黎明の星    |  |
|      | エピローグ   |  |

187918141752

# プロローグ

——現代から遡ること、四千年以上前の話。

人類はこの時、黎明期を迎えていた。

地球を支配していた神々。地上を跋扈していた魔獣。宇宙を運営していた法則。それまで星を形作っていたものは、次々と姿を消し、生まれ変わっていった。

それらに代わって地上を統べたのは、人間たちだった。文明が生まれ、進み、新たな法則が星を支配していく。

……そう。それはまさに、時代の変わり目。神から人へと支配者が変わる、躍動の季節だった。

そんな時代。

世界が生まれ変わるその時代に、その王は誕生した。

生まれながらの王にして、半神半人の魔人。

これまでの支配者であった神。これからの支配者である人。そのどちらでもない新たな存在として、その王は君臨した。

彼ははじめ、神を敬い人を愛した。

彼はやがて、神を廃し人を憎んだ。

究極の中立者として生まれた彼は、絶対の裁定者として生きる道を選んだ。

自らを唯一の王として。自らの基準だけを法として、彼は全てを処断した。

人も神も、敵も味方も、強きも弱きも例外なく。天地の全てを平等に、彼は無慈悲に裁き続けた。

あらゆる財宝をその蔵に収めた。あらゆる人間をその下で治めた。あらゆる大悪をその手で誅した。

彼は、人の欲望を肯定した。

それこそを諫めよと、神に命じられたにも関わらず。彼は、人の未来を見定めると決めた。

太古から脈々と、神々と獣たちに育まれてきた自然。その自然を暴いていく人間の醜さを、彼は笑つて是認した。

後に残されたのは、荒れ果てた大地。人類の欲望が織り成す、破壊と惨劇の数々。

こんなはずではなかったと、嘆く女がいた。もっと先へ進めと、雄叫びを上げる男がいた。

その全てを、彼は玉座から見つめていた。人間たちが何かを育み、壊していく様を、彼は冷厳に見据えていた。

ある者は暴君と、彼を恐れた。  
ある者は賢君と、彼を畏れた。

人と神と、その双方の視点を持つ王。彼の思考は、他の誰にも理解できなかつた。  
ただの一度の敗北もなく。  
ただの一度も理解されない。

彼の王はただ独り、熾天の玉座に君臨した。

並び立つ者など不要。先を行く者など皆無。ただの一人として、彼に比肩する者など存在しない。

人も神も星すらも。誰一人として、彼から目を離せなかつた。

不可能などない。掴めぬ物などない。全てを知り、全てを能う超越者。

唯一にして絶対。完全にして無欠。誰もが一度は夢見た理想、完璧な王こそ彼だつた。

人類最古の英雄がいた。

古代ウルクに君臨した魔人がいた。

人を裁き、神を廃し、この世の全てを統べた王がいた。

彼の者の名こそ——『英雄王』ギルガメツシュ。

——そう。この物語<sup>はなし</sup>は……歴史に語られぬ、もう一つのギルガメッシュ叙事詩。



## 0. 運命の夜

じりじり、じりじり、じりじり。

脳を揺らす、不快な音。

眠い。寝たい。

このまま寝ていろと本能が囁くが、じりじりという派手な音がそれを許してくれない。

「……なによ、もう。うっさいわね。もうちよつと寝かせてくれても……」

ただでさえ、わたし——遠坂凜は朝が弱い。

だというのに、昨日は……いや、今日になるまで、十年前に亡くなった父の遺言を解読していたのだ。体力も頭脳もフルに使って、へとへとに疲れている。

「もうちよつと……」

目覚まし時計の音に揺さぶられながら、時間帯を思い出す。いつも設定している時間は、六時半。学校の始業時間を考えると、少しぐらい寝ていてもまだ貯金は残っている。うん、もう少しだけ寝ていよう。これを見越して、昨日は目覚まし時計を三十分後に

セツトしていたのだ。

——あれ。これって、なんかおかしくない？

「つてことは、もう七時じゃない……!」

回らない頭を喝を入れ、慌ててベッドから起き上がる。

正直に言えば、七時でもまだ時間に余裕はあるのだが、ギリギリの生活は家訓に反する。

どんな時でも、余裕を持って優雅たれ——。

随分と風変わりな家訓だと思うが、わたしはこれを入っている。

余裕のない人生なんて、なんというかこう、カツコ悪い。できれば、家計にももつと余裕が欲しいのだけれど——。

——自慢ではないが、わたしの家は『魔術』を伝える魔術師の一族だ。

家柄自体も古く、当然のように資産もある。だが、魔術というのはとにかくお金が消えていくもので……そんなわけで、わたしは年中資金繰りに奔走している。

魔術、というのは読んで字の通り。呪文を唱えたり、怪しげなお香を使ったりして、ヘンなことを起こすのである。

こう言ってみると、ファンタジーで神秘的な香りがするのだが、実際にはそう愉快なものではない。色々と制約もあるし、命の危険なんてしよつちゆうだし、「わたし、魔術

師なんですー！」と吹聴するのは論外だ。

それに、どんなに凄い魔術でも、時間と技術さえあれば別の手段で代替できてしまう。例えば、火を出したり空を飛んだりなんてコトは、一見凄いものに見えるかもしれないが、わたしたちは同じことを魔術を使わずもつと簡単にできてしまう。ライターや飛行機があれば、わざわざ小難しい魔術なんてものは使わなくても良い。

つまり、魔術師というのは採算の合わない職種なのだ。色々手間を掛けて魔術を用いても、現代の科学技術はもつと簡単に同じ事象を再現することができる。それでも何故、世間に顔を出せないようなモノを研究しているのかというところ——。

話は変わるが、次元論の頂点、この世の外側には『根源』というモノがある。

この世の全てが記録されており、知識の全てが内包されているという事象の出発点。そこへ至ることこそが、全ての魔術師に共通の目的だ。

何とも胡散臭い話だが、『魔法使い』という存在が、『根源』の存在を逆説的に証明している。

『魔法』とは何かというところ……これは、魔術とは似て非なるものだ。

文字通りの、魔法。その時代の文明の力ではどれほど努力しても辿り着けない、再現不可能な『奇跡』。それが魔法であり、それを用いる者が魔法使いだ。

根源から湧き出たモノが魔法であり、魔法を使えるということは、即ち根源に至って

いるのと同義。

人類史上でもほんの数人しか存在しない魔法使いだが、それでも確かに彼らは存在する。そして、それを目指すのが魔術師であるわたしたちの最終目的である。

そんなことを思い出しながら、顔を洗い、朝食を済ませる。学校に行くために鞆を持ったところで、ふと昨夜のことを思い出した。

遠坂の魔術師は、宝石魔術を得意とする家系だ。

本来、魔力という概念は貯蔵が難しい。だが、宝石は比較的魔力を溜めておきやすい性質を持つ。そして、魔力のストックがあれば、様々なことに応用ができる。まあ、少々お金がかかりすぎるのが欠点ではあるのだが……。

それはさておき。昨日の夜はとんでもないものを見つけてしまったのだ。父の遺言を解読して手に入れた、百年ものの宝石。

魔術に使う道具は、年月を経ていけばいるほど良い。百年ものの、しかも魔力を大量に蓄えた宝石は、まさに宝と言ってもいいかもしれない。

今のわたし、十年分の魔力の詰まった宝石。他にも宝石はあるが、これに比べれば石ころのそれに等しい。

……と、いつのまにか危ない時間になっていた。

手で弄んでいた宝石をしまつて、鞆を持つ。学校に行かないと、そろそろまずい時間

かもしれない。

\*\*\*

煌々と輝く夕日の中、玄関の鍵を開けて慣れ親しんだ居間に入る。

特に何も変わったことはなく、今日も平穏な学校生活を終えた。波乱万丈な学生生活なんて、小説かアニメの中にしか存在しない。実際の学校というものは、わりと味気ないものだ。

……そう思うのは、わたしが変わっているからなのかもしれないが。

学校でのわたしは、自分で言うのもなんだが、完璧な優等生として振舞っている。

遠坂の名を貶めるなんてもつてのほかだし、何よりわたし自身、やるからには一番がいい。というワケで、学業においても手抜きは一切していない。

でも、それだけ。

学校でわたしの評価を聞いても、「優等生」以上の答えは返ってこないだろう。友人はそれなりにいるが、それでも休日くらいしか付き合いはない。他人が嫌いなわけではなく、極力他人と付き合い合わないようにしているのだ。

魔術師というのは、秘匿されるべき存在。

色々理由はあるのだが、基本的に魔術というものは表の世界へ出してはならないものだ。当然、一般人に魔術の存在を知られることも避けなくてはならない。

そして、魔術という神秘を知ってしまった一般人は、消すのがセオリーだ。

当然、わたしはそんなことはしたくない。

特定の間との付き合いが深くなれば、何かの拍子で魔術師であることがバレてしまいかもしれない。そんなことにならないためにも、波風を立てないように日々の生活を送っている。

「——む」

そんなわたしを出迎えたのは、留守番電話のランプ。

家に電話がかかってくるなんて滅多にないのだが……まあ、大体中身の想像は付いた。はあ、とため息をついて、再生のボタンを押すと……程なくして、男の音が流れ始めた。

『私だ。解っているとは思いますが、期限は明日までだぞ凜。あまり悠長に構えられては困る。残る席はあと二つだ。早々にマスターを揃えねばならん』

うん、この面白味のない台詞。やっぱり綺礼か。

言峰綺礼。

わたしの父——遠坂時臣の弟子であり、わたしにとっては兄弟子にあたる。神に仕え

る神父でありながら、魔術師に師事したという何とも珍しい経歴の男のだけれど……  
まあそれは置いておこう。

『マスターの権利を放棄するというのなら今日中に連絡しろ。予備の魔術師を派遣するにも時間がかかる』

ムカつくけど、この男、声だけはいいと思う。

重厚で、静かに響く声。改めて聞くと、本当に聖職者らしい声だ。……声だけけど。  
『おまえには既に令呪の兆しが現れているのだ。さつさとサーヴァントを召喚し令呪を開け。』

——もつとも、聖杯戦争に参加しないというのなら話は別だ。命が惜しいのなら、早々に教会に駆け込むがいい』

そこで、留守電は切れていた。

ふん。戦うのならさつさと支度しろ、そうでないならリタイアしろ、という催促か。  
アイツにとつては、どちらでもいいのだろうけど——わたしには、とつくに戦う準備が  
できている。後はもう、最後の準備に臨むだけなのだが……。

「聖杯戦争、か……」

その重々しい響きを口にすると、わたしはそつと瞼を閉じた。

——それは、十年前の話。

『それでは行くが。後のことは解っているな』

背が高く、彫りの深い顔立ち。何か大事なコトを考えながら、その人はわたしの頭を撫でていた。

いや……撫でている、というよりは。頭をぐりぐりと搦んでいる、と言うべきか。

それもそうだろう。だってこの人は、たぶん初めてわたしの頭を撫でてくれたのだから。

慣れない手つきでわたしを撫でながらちよつと考え込んだ後、その人は矢継ぎ早に話を始めた。

家宝のこと。

大師父のこと。

地下室の管理のこと。

今までは教えてくれなかったことを話すその姿を見て、わたしはわかってしまった。

人間は、死の間際には変わった行動に及ぶという。だから、わたしはもう——この人と、会えることはないだろう。

戦争だった。

国家同士の戦争ではなく、個人と個人……七人の魔術師が互いを狙い合う、冷酷無比なバトルロイヤル。



その内の一人が、この人。

この人も誰かを殺し、殺される立場に立っている。それだけは、幼いわたしにもわかっていた。

『凜、いずれ聖杯は現れる。アレを手に入れるのは遠坂の義務であり、何より——魔術師であろうとするのなら、避けては通れない道だ』

そして、最後に。優しくわたしの頭を撫でて、その人は去って行った。

遠坂時臣。

わたしの父であり、師であり——そして聖杯戦争のマスターであった人の、最後の姿。わたしは、あの人のことが好きだった。父親としても魔術師としても、あの人はとても優れていた。

わたしのことを愛してくれて、厳しく指導してくれた。

だから、ずっと前から決めていた。その人が最期に残した言葉で、わたしは自分の道を選ぶのだと——。

「そっか。もう始まるんだ……」

目を開くと、そこにあるのは父の姿ではなかった。時計の音だけが、静かな部屋に響いている。

聖杯戦争。

何でも願いを叶えるという聖杯を巡って起こる、七人の魔術師たちの殺し合い。

そんな便利なモノなら、みんな使えばいいじゃない！ ……と思わなくもないのだが、世の中そう上手くはない。聖杯を手に行けるのは、一人だけ。その所有権はただ一人のみに与えられ、その聖杯はただ一人の願いしか叶えない。

しかし、聖杯を召喚するには七人の魔術師が必要だった。にも関わらず、ただ一人の願いしか叶えられないというのなら——七人の魔術師が、お互いを殺し合い始めるのは時間の問題だった。

それが、聖杯戦争の発端。

聖杯戦争に参加する魔術師は、『マスター』と呼ばれる。

マスターの証は、二つ。

使い魔——『サーヴァント』と呼ばれる存在を召喚し、それを従わせること。

また、サーヴァントを律するための、三つの聖痕を宿すことだ。

マスターは召喚したサーヴァントと協力し、最後の一人になるまで他の魔術師・サーヴァントと殺し合う。

このルールが肝心なところで、いかに魔術師として優れた技量を持っていようとも、サーヴァントを従えていない限り、聖杯戦争に参加する資格はない。

使い魔と聞くと、フクロウだのネズミだの、そういう小動物が頭に浮かぶ。だけど、こ

の聖杯戦争の使い魔は桁が違う。召喚方法も使役方法も、通常のそれとは次元が異なる。

英霊、という存在がいる。

英霊とは、要するに英雄の魂だ。

大国を治めた王様、歴史の教科書に載っている英雄、有名な物語の豪傑——そういった、歴史に名を刻んだ超人たちは、死後に英霊の座という場所に召し上げられる。

英霊として祭り上げられた彼らは、ある種の精霊へと昇格し、人間の守護者となる。神話伝承、史実虚偽を問わず、人々に信じられてさえいれば彼らは英霊になる。人間の想念が、彼らを英雄としてカタチにする。そして、そんな途轍もない奴らを使い魔として引つ張って来るのが……この、冬木の聖杯戦争というわけだ。

彼らは、人間を超越した存在だ。例え魔法使いであろうとも、そんな存在を使役することなどできるわけがない。

しかし、そんな規格外を召喚し、人間の使い魔にできてしまうのが聖杯だ。これだけでも、この冬木にある聖杯がとんでもない代物だとわかるだろう。あらゆる年代、あらゆる地域を問わず、英雄たちをこの現代に復活させ、最強を競い合う殺し合い。それが、この冬木の聖杯戦争だ。

……ここで、その召喚が問題になってくる。

英霊は、本来世界の外側に在る存在。それを現世に引つ張つて来ようというのだから、それ相応の準備が必要になるのは当然だ。故に、聖杯は彼らが形になりやすい器——クラスを設け、そこに適合する英霊を選別し、召喚する。

予め用意されたクラスは、七つ。

剣の騎士、セイバー。

槍の騎士、ランサー。

弓の騎士、アーチャー。

騎乗兵、ライダー。

魔術師、キャスター。

暗殺者、アサシン。

狂戦士、バーサーカー。

召喚された英霊は、この七つのクラスのどれかに振り分けられ、サーヴァントとして具現化する。だが、サーヴァントを召喚するには、その人物に縁のある品物が必要だ。

つまり、その人物が持っていた剣や盾、或いは着ていた服や鎧。そういうものが必要になってくる。

実は、そういった聖遺物がなくても、サーヴァントを召喚できないことはない。ただ、どその場合は、どんな英霊が出て来るのかわからない。

ひよつとしたら、とんでもなく有名な大英雄を引き当ててしまふのかもしれないし、逆にマイナーで弱つちい奴が現れるかもしれない。要するに、ギャンブルなのだ。命を賭けた戦いで、そんな運試しはしたくない。

「ふ、ふふ。ふふふふふふ……」

もう既に、サーヴァントを呼び出す事自体はできる。この遠坂邸は、霊地として一級品。他の魔術師なんかには遅れを取らない。問題だったのは、サーヴァントの縁の品だけだったのだが……。

「やったわ。これで、セイバーが出て来るのは確實。さすが父さんね、まさかこんなものを遺してくれてるなんて思わなかったわ」

わたしの目の前にあるのは、箱に収まった木の破片。

見た感じ、そのへんの木をむしって取ってきたものと言っても違和感は無い。ぶつちやけ、ただのゴミにしか見えない。しかし——これは聖遺物として、最上級の逸品だ。

——円卓の破片。それが、この木屑の正体だった。

イギリスを起源とする、アーサー王伝説。何を隠そう、この木屑は、そのアーサー王が提案した円卓の欠片なのだ。

英霊というのは、単純に有名であればあるほど強い。そして、アーサー王と円卓の騎士の名前を知らない者など、世界規模で見ても少数だろう。

アーサー王を筆頭に、『湖の騎士』ランスロット。『太陽の騎士』ガウエイン。そして、『叛逆の騎士』モードレッド――。

誰も彼も、その伝説を歴史に刻んだ勇者だ。そんな英雄たちに纏わる遺物は、この聖杯戦争では最高の宝と言つてもいい。

何せ、これを触媒としてサーヴァントをすれば、誰が召喚されても外れがないのだ。強力なサーヴァントを呼べるのは、それだけで絶大なアドバンテージになる。

十年前の聖杯戦争で、父さんは別の聖遺物を使ってサーヴァントを召喚したらしい。遺言によれば、これはその時の予備として確保しておいたものだという。

予備でこの逸品なのだから、本命のサーヴァントはどれ程の聖遺物を使って召喚されたものなのだろう……と思わなくもないが、今は素直に喜んでおこう。

昨夜解読した遺言で、わたしはこの破片と、切り札となる赤い宝石を手に入れた。これさえあれば、準備は万端だ。今夜万全の状態でサーヴァントを召喚して、最強のセイバーを引き当ててやるんだから……！

\*\*\*

深夜。

わたしにとって最も相性のいい時間帯は、午前二時ジャスト。その時刻に合わせて、準備を整えた。

ちらりと時計に目をやると、短針が三に差し掛かろうとしていた。

実は今朝、わたしは七時半に家を出たはずなのだが、学校に着いた時には七時過ぎの時間だったのだ。

それでは辻褄が合わない……と疑問に思っ、帰宅してから時計を確認してみれば、案の定時刻がずれていた。しかも、ずれていた時計は一つだけではない。示し合わせたかのように、家にある全ての時計がびったり一時間進んでいた。

どういふことなのかはわからないが、家中の時計を直すのも時間がかかるので、まあいいか、とひとまずは放置している。ひよつとしたら、お父様がなにかしてたのかしら。もしこれに気付いていなかったら……と考えると恐ろしい。そうなる、わたしは一時間ずれた時間に儀式を始めようとしていたワケで……うっ、考えるのは止めよう。

さて……そろそろ、時間だ。

綺礼は、「残る席はあと二つ」と言っていた。ということは、もうわたし以外に五人の魔術師が準備を整えていることになる。遠坂の魔術師として、これ以上遅れを取るわけにはいかない。

慎重な手つきで、地下室の床に陣を刻んでいく。





「Anfang」

体の中にある、見えないスイッチを入れる。途端に起動する、わたしの魔力回路。励起した魔力回路を通じて、わたしの全身に魔力が行き渡る。この大気に含まれる、膨大にして純然たる魔力。これを変換して、別なカタチにする。

全ての魔術に共通のこの手順。身体に走る鈍い痛みは、魔術を使うための代償だ。本来人に成しえない神秘を成す対価として、この鈍痛は永劫付き纏う。

それでも、集中を緩めない。痛みを堪え、自分を抑え、魔力を編んだその先に、わたしが求める道がある――！

「――告げる」

準備は万端。

魔力は完璧。

失敗なんて許さない。

変換した魔力を召喚陣に注ぎ込み、彼らを呼ぶためだけにこの身を動かす。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

空気が、変わる。

膨大な魔力は渦を巻き、ただ見えずともその猛威を感じさせる。

わたしはとつくに目を閉じている。こんな状態で目を見開いていたら、それだけで失明しかねない。

もう後戻りはできない。後はただ、終わりまで突っ走るだけだ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

——来た！

よしつ、かんつべき！間違はなく最強のカードを引き当てた……！

我ながら最高の手応え、会心の一撃つてもんよ！ああもう、どんなのが来たのかしら……！?

期待七割、不安三割の状態で目を開ける。

すると、そこには——

「——問おう。貴方が、私のマスターか」

鈴のような、少女の声。

宝石のような翠の瞳は、静かにわたしに向けられている。

確認もなく、一目で判った。これがわたしの欲しがっていたカード。サーヴァント中

最優の、劍の英靈。

身を包む白銀の鎧は、光の届かぬ地下であつても尚燦然と輝く。僅かに靡く金砂の髪は、触れば零れてしまいそう。

その美しい出で立ちに、呆然と見惚れてしまう。

でも、仕方がないと思う。だってその女の子は綺麗で、ちよつと悔しいくらいに可愛かつたんだから――

\*\*\*

――結論から言うと。わたしが召喚したサーヴァントは、間違いなく最高のカードだった。

アーサー王。

かつてブリテンの王として君臨し、幾多の戦いを勝ち抜き、サクソン人の侵攻を撃退したとされる大英雄。

中世においては九偉人の一人として崇められ、現代に至るまで世界各地にその名を残す騎士の王。

その手に握られた聖劍はあらゆるものを両断し、聖劍の鞘は不老不死の力を持つと伝

えられる。

そんな破格の英雄を召喚できたのだ、飛び上がって喜んでもいい場面だろうが……一つ、重大な問題があった。

アーサー王だと名乗ったこのサーヴァントは、わたしとそう年の変わらない女の子だったのだ。

どーゆーことなのよ、と叫びたい気持ちを抑えて、まずは冷静に自分の体を確かめる。……うん、確かにわたしの体から魔力の何割かが目の前の女の子に流れて行っている。やっぱり、この女の子がわたしのサーヴァント——セイバーで、間違いないようだった。

「――」  
契約を確認するために、自分の右手を見下ろす。サーヴァントと契約した今、わたしの右手には不思議な紋様が刻まれている。

これが、令呪。

サーヴァントを従えた証にして、サーヴァントを律するための三画の鎖。

令呪には強大な魔力が凝縮され、自分のサーヴァントに三度まで命令を下すことができる。その命令は、文字通りの絶対。人間を超越した存在である英霊を、問答無用で跪かせる切り札だ。

例えばそれが、”自殺しろ”という不条理極まりないものであったとしても、サーヴァントはそれに逆らう事はできない。

しかしこれは、サーヴァントを縛るためだけの鎖、という訳ではない。場合によっては、彼らを支援する強力な武器にもなる。「わたしの所へ来い」と命じれば、遠くに離れていても一瞬でわたしの近くまで移動して来ることができる。また、「今あの敵から逃げろ」と命じれば、どんなに不利な状況でも逃げ出せる可能性が見えてくるのだ。

「——マスター」

その声で、はっと正気に戻った。

頭をふるふると振って正面を見る。翡翠色の瞳が、わたしを静かに見つめていた。

何かを問うようなその視線に、はてな、と首を傾げる。

……ああ。そういうえば、大事な事を忘れていた。

「ごめん、自己紹介がまだだったわ。……わたし、遠坂凛よ。貴女の好きなように呼んでいいわ、セイバー」

「それでは、凛と。ええ、私としては、この発音の方が好ましい」

少し変わった発音で、わたしの名前を呟くセイバー。

けど、不思議と悪い気分はしない。彼女の声はとつても綺麗で、ただ名前を呼ばれているだけでも穏やかな気分になる。

……うん。この娘を召喚して、本当に良かった。

召喚の儀式の後、女の子が出てきたのにはびっくりしたけど、セイバーはちゃんとした英雄だし。正直、今の所はケチの付けようがない。実体から霊体に移れない、というのはちよつと問題だけど、それを差し引いても十分お釣りがくる。

考えてみれば、四六時中ごっつい男がくつついてくるのはアレだし。第一、筋肉ムキムキの英雄つて、ちよつとわたしの趣味じゃない。

一人で頷いていると、セイバーが再び口を開いた。

「凜。こうして召喚された以上、私は貴女のサーヴァントだ。しかし、主の望みを知らなければ私も剣を預けられない。聖杯に託す、貴女の願いを聞かせてほしい」

……あ、そうか。

聖杯を手に入れた時、そのマスターが何を望むかはサーヴァントにも関係がある。いくら聖杯が凄い力を持っていても、やる気のない英雄を引っ張ってくることは難しい。現世に召喚されるサーヴァントには、皆何かしらの願いがあつた。

古来より、英雄譚というものは悲劇的な結末が多い。裏切りや不運が原因で、目的を果たせずに命を落としたという逸話には事欠かない。

そんな彼らに、再び願いを叶えるチャンスを与えるのが聖杯戦争。なら、その魅力的な条件に飛びつかないはずがない。

こうしてわたしに質問してきたことは、セイバーにも聖杯に託す願いがあるのだろう。アーサー王伝説も、悲劇の結末を迎えた逸話の一つなのだから。

マスターとサーヴァントは、願いを叶えたいという共通の目的を持つ。なら、当然マスターであるわたしは——

「願い？　ないわよ、そんなもの」

「……は？」

「ぼかん、とあつげに取られるセイバー。」

ややしばらくして、呆然としていた少女は慌てたように矢継ぎ早に喋りだした。

「そ、そんなはずはありません。聖杯とは、願いを叶える万能の杯。マスターであるのなら、貴女も聖杯に託す望みがあるはずだ」

「だからないって、そんなもの。いい、セイバー？　聖杯が万能だっていうなら、そりやあ何だつてできるでしょう。だけど、勝手に望みが叶っちゃうなんて面白くないわ」

「……では、貴女は何の為に戦うのですか」

「そんなの決まつてるじゃない。——勝つためよ。ついでに、もらえるものももらつておく。聖杯つてのが何なのかは知らないけど、あつて困る物でもないでしょ」

「ぱちぱち、と綺麗な瞳を瞬かせるセイバー。けれど、それは一瞬のもので——彼女は静かに、柔らかな笑みを浮かべた。」

「……参りました、凜。貴女は、確かに私のマスターに相応しい」

そう穏やかに言うセイバーに、図らずもわたしは見惚れてしまった。

……つて、あれ？なんでさつきから、わたしはこんななぼーつとしてるんだろう。

セイバーの顔をぼんやりと眺めた後で、ようやく原因に思い当たった。つい先ほど、わたしはサーヴァントの召喚なんて途方もない儀式を終えたばかりなのだ。魔力も大分持つていかれてるし、疲れていないわけがない。

というかそもそも、ここ数日はろくに寝ていない。普通なら、倒れているかもしれないような状況だ。まだやることは残っているけど、とりあえず一番の大仕事は終わった。なら、もう休んでもいいかもしれない。

「……ごめん、なんだか疲れたみたい。先に休むわね、セイバー」

「では、後は私が。——ご安心を、マスター。私がいる限り、敵サーヴァントが貴女を傷付けることはありません」

凜とした口調で宣言するセイバー。その表情は確固とした自信に溢れている。

その言葉に偽りは無い。例えどんなサーヴァントが現れようと、わたしのセイバーの敵ではないだろう。

見た目は可愛らしい少女だが、彼女が内包する魔力は桁が違う。なにせ彼女は、このわたし、遠坂凜のサーヴァントだ。傲慢じゃないけど、そんじよそこの魔術師には負



ける気がしない。うん、今夜は安心して寝られそう。

「おやすみなさい、セイバー」

「はい。おやすみなさい、凜」

軽く会釈をするセイバーに踵を返し、地下室から抜け出して二階にある自室を指す。

一世一代の儀式をこなしたせい、サーヴァントに魔力を送っているせい、どうにも眠気が酷い。ああ、今夜はぐっすり眠れそう――。

\*\*\*

サーヴァントを召喚した翌日は、まる一日を使って市内の案内をした。

セイバーに町の様子や地形を教えつつ、ついでに他のマスターやサーヴァントを炙り出してやろうという心積もりだったのだが……世の中、そう幸運は転がっていないものらしい。

まあ、無為に一日を過ごしたというワケでもない、その点では良かったと考えるべきだろう。収穫もそれなりにはあったのだし。

……それで。一晩ぐっすり眠った後、わたしは居間でセイバーと向かい合っていた。

「——で、学校に行こうと思うんだけど」

「……は？」

わたしの宣言に、セイバーは目を丸くした。

その驚いた表情を見て、説明が足りなかったかな、と言葉を付け加える。

「あ、ひよつとして学校のこと知らない？ ええと、学校っていうのは——」

「いえ、その情報は知識として知っています。サーヴァントは、聖杯から現世の知識を与えられる」

そういえばそうだった。

英霊というのは、基本的には古代に生きて人間たちだ。中には、未来の英霊というヤツも居るのかもしれないが、ほとんどの英霊は神話・伝承の中の人物。つまり、大昔に存在した者たちだ。

だけど、そんな時代に生きていた連中が突然この現代に現れて、上手く適応できる訳がない。そこで、聖杯はサーヴァントに知識を授ける。この時代の一般常識を叩き込んで、色々と不都合が出ないようにするわけだ。

「私の疑問はそこではありません。凜、マスターであるからには貴女は敵の攻撃を警戒しなくてはならない。学校という場所は、敵を迎え撃つには不適切です」

「そうかしら。いい、セイバー？ わたしは、聖杯戦争中だからって今まで通りの生活を

変えるつもりはないわ。それに、学校は公共の施設よ。何百人という生徒がいる前で、わたしに襲い掛かる勇気があるヤツがいると思う?」

「……可能性としては、考えられます」

気のせいかな。どこか暗い表情で、セイバーはそう呟いた。

「凜。マスターになった人物は、貴女のように高潔な人間とは限らない。中には、他人を巻き込むことを厭わない者もいるでしょう」

「……む」

うん、確かにそうだ。

ガス漏れ事故に見せかけるとか、校舎の老朽化による事故に見せかけるとか。はたまた、テロリストの爆弾テロに仕立て上げるとか。一般人なんて関係ないと割り切つてしまえば、学校の中にいるわたしを狙うなんていくらでもできる。

基本的に、『神秘の秘匿』という一点さえ守られていれば魔術師の戦いはルール無用だ。そういう手を使ってくる外道がいらないとは言えない。

「それに……仮定の話になりますが。学校の中に敵がいた場合、私はマスターを守ることでできません。霊体化ができず、気配遮断のスキルを持たない私が学び舎の中に入るのには難しいでしょう」

ん……確かにセイバーの言うとおりかも。でも、学内にマスターが潜んでいる可能

性は限りなく零に近い。

遠坂家は、冬木市一帯を管理している特別な家系だ。当然、他の魔術師の家系も確認しているが、この街には遠坂以外に魔導に関わる家は一つしかない。その家も既に没落し、今代の後継者は魔術師としての素養すら持ち合わせていないという。当然、聖杯戦争のマスターになどなれるはずもないのだ。

となると、今回の聖杯戦争に参加する魔術師の大半は、冬木市の外からやって来ることになる。そんな連中が、学校までいちいち調べている余裕があるとは思えない。

わたしが学校にいる間、セイバーは学校の近くに居てもらえれば大丈夫だろう。近い距離なら、わたしに何かあってもセイバーが間に合うし、逆にセイバーの方が襲われたとしても、わたしのセイバーはそう簡単にやられるほど弱くはない。

それに、わたしとセイバーが別行動を取っている事による利点もある。例えば、情報。二手に分かれていればそれだけで手に入る情報が増すし、逆に敵のマスターやサーヴァントからしてみれば、片方を発見したとしてももう片方の情報が掴めない。

それをセイバーに話すと、難しい表情が返ってきた。

「マスターがそう仰るのですしたら、私は従うまでですが……どうか気を付けてください、マスター。戦というのは、何が起きるか判らないものですから」

真剣な瞳でこちらを見つめるセイバー。その言葉には、確かな実感がある。

——アーサー王。かつて戦場を馳せ、十二の会戦を勝ち抜いた騎士の王。その本人が言うのだから、忠告には従うべきだろう。

「わかったわ。ありがとう、セイバー。……つと、そろそろ行かなきゃ。わたしが学校に行ってる間は、打ち合わせ通りによろしくね」

「はい。いつてらっしゃい、凜」

セイバーの見送りを受けて、わたしは玄関へと足を向けた。

\*\*\*

また、新たな一日が終わる。

太陽はとうの昔に沈み、街は静かな闇に覆われている。

時刻は、既に夜の八時。学校に残っているのは、わたしと……横にいる、甲冑姿の少女だけ。

目の前の異物を見下ろしながら、わたしは静かに口を開く。

「セイバー。貴方たちってそういうモノ？」

「……………」

対するセイバーは、無言。その沈黙が、何よりも雄弁な答えだった。

——結界。

古来より存在する魔術であり、基本的には術者を守る働きを持つ。一定の区域に作用し、範囲内への人目を避けるものから、踏み入った者へ何らかの束縛を与えるものまで、その効果は様々だ。その中でも最上位のモノが、わたしの目の前には存在している。

堂々と描かれた刻印は、魔術師にしか見ることができない。刻まれた文字は見たことも、聞いたことすらないカタチだ。

魔術師であるわたしの知識にないモノ。だがそれでも、これが桁違いの技術で張られたモノであることは理解できる。更に厄介なのは……この結界の性質は「攻撃」であることだ。

おそらくは、生命活動に干渉する結界。まだ未完成のようだが、こんなものが完成すれば、一般人はひとたまりもない。

しかし、これは魔術師にはほとんど無意味な結界だ。結界というのはあくまで地形・場所に作用するもので、自分の体に魔力を通して魔術師には効きにくい。

ということは……この結界の狙いは、マスターやサーヴァントではない。標的になっているのは学校全体……つまり、この学校に通う生徒そのものだ。

「……………」

朝のうちに異物の存在を探知したわたしは、夜になるのを待つてからセイバーと合流

し、こうして結界を調べていた。

この屋上で、結界の起点、所謂呪刻は七つ。当然全てを解除した……と言いたいところだが、これはもうわたしの手には負えない。発動の妨害くらいはできるが、呪刻そのものの撤去はできない。

「――」

セイバーは口を結んだまま開かない。しかしその険しい表情が、彼女の怒りを示している。

それも当然と言えば当然だ。こんなモノ、まっとうな人間なら許容できるはずもない。発動したが最後、この結界は内部の人間を殺し尽くす。

魔力を奪う、活動を制限する、なんて生易しいモノじゃない。精神力や体力ではなく、魂そのものを奪う血の結界。ブラッドフォート

だが、魂なんてモノを手に入れたところで、それを扱える魔術師は存在しない。魂という概念は扱いが難しく、それを確立させた者は歴史上たった一人しか確認されていないのだ。

そんな集める意味のないモノを、大規模な結界を設置してまで奪おうとする目的。一般人にも、魔術師にも使い道のない魂が必要だとすれば、それは――

「――サーヴァントのエネルギ源、か。どう、セイバー。わたしの予想、当たってる？」

「はい。サーヴァントは霊体ですから、人間の魂はそのまま魔力として転用することができます。」

——純正の英霊が、このような蛮行に及ぶとは考えたくありませんが」

……やっぱり。

当たって欲しくはなかったが、わたしの推測は的中していたらしい。

確かに、手段としては確実だろう。学校の生徒を丸ごと魔力にできるのだ、効率だけを考えれば確かに優れている。

だけど、これを張ったヤツは何も考えていない。

何百人もの一般人を巻き込む結界に、神秘の秘匿なんて要素は見当たらない。そんな基本すら無視する魔術師なんて、余程の馬鹿か、或いはとんでもなく自信がある者だけだ。

「——潰すわ。こんなものをわたしの土地で使おうなんて、癩に触るつたらありやしな  
い」

「同感です、凜。私はサーヴァントですが、その前に一人の騎士だ。騎士として、無辜の民を犠牲にするやり方は見過ごせません」

セイバーと領き合い、地面に描かれた呪刻に向き直る。

左腕を突き出すと、刻まれた魔術刻印が淡く光った。魔道書そのものであるこの刻印



は、ただ魔力を流して必要な一節を読み込むだけで効果を發揮する。

地面に直接左手をつけ、結界消去の呪文を詠唱。慣れ親しんだ感觸と共に、魔力がわたしの体から流れていく。迸る魔力はそのまま、呪刻に宿っていた魔力をも押し流す。

……さて。これで、一時的に結界の完成を妨害できたはずなのだ——。

「なんだよ。消しちゃまうのか、勿体ねえ」

その声に、身体が咄嗟に動いた。

振り返る。

気配は、わたしの斜め上。給水塔の上で、若い男がこちらを見下ろしていた。

身を包むのは、青い鎧。

愉快そうに吊り上った口元は、粗野でありながらもどこか親しみ深さを感じさせる。

顔は笑っているが、こちらに向けられた視線は鋭い。そこに込められた殺気は、この男が歴戦の戦士であることを示していた。

だが何よりも先に、その圧倒的な存在感が、それが人間ではないと告げている——！  
「まあ、オレにとつちやあどつちでもいいんだが。用があるのは、そつちの姉ちゃんの方

だ」

隣に立っているセイバーが、ぴくりと身じろぎする。セイバーに用……ということ  
は、コイツやつぱり——!

「サーヴァント……!」

「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんは、オレの敵ってコトでいいのかな?」  
背筋が凍る。

何でもないという風に、まるで世間話のように告げられたその一言。だがその言葉の  
意味は、他の何より恐ろしかった。

まるで、蛇が鎌首を擡げているような。そんな、危険な感覚。

……まずい。何がまずいのかも判らない。ただ、ここで戦うのだけは、絶対に危険だ  
と本能が警鐘を鳴らす……!

「……ほう、大したもんだ。年の割には度胸が据わってる。こりゃあ、ひよつとしたら楽  
しめるかもな?」

男の腕が静かに上がる。

その、一瞬。

次の刹那、何も握られていなかったその手には……血のように、不気味な槍が現れて  
いた。

「まず——っ!」

横に飛ぶ。

考えるよりも先に、身体が動いていた。とにかく一瞬でも早く、この屋上から離脱する……！

「——！」

きいん、と甲高く響く音。

瞬きの間に突っ込んできたソレは、容赦なくわたしを狙い——その直前、白銀の少女に叩き伏せられた。

「は、いい腕してるじゃねえか、姉ちゃん……！」

青い旋風が向き直る。

確認している暇はないが、男の一撃はセイバーが防いでくれたらしい。

「下がってくださいマスター、このサーヴァントは私が！」

「ごめん、ちよつと任せた……！」

頼りになる言葉に踵を返し、左腕の魔術刻印を走らせる。

組み上げた魔術は、身体の軽量化と重力調整。ほんの一瞬で、わたしは後方に跳躍し

——そのまま、フェンスを跳び越えた。

背後に響く音は、剣戟。セイバーがアイツを防いでくれてる間に、広い場所へ移動す

る……！

飛翔の最中、更に幾つかの魔術を発動し、着地の勢いを殺す。地面に足が付いた瞬間、遮二無二走り出す。

——とにかく、あの場所はまずい。

セイバーの武器は、あんな狭い場所では使えるものじゃない。もつと自由な空間がないと、アレは使えない。なら、遮蔽物のない、とにかく広い所に移動しないと……！

強化魔術を発動。脚力を強化し、百メートル以上を一瞬で走り抜ける。この速度は、オリンピック選手すら凌駕しているだろう。

……背後に、猛烈な悪寒。

直感のまま、右に身を投げ出す。その直後、旋風が髪を舞い上げた。

まさに、危機一髪。

一秒前まで、わたしが居た空間。それを抉り取るように、男の槍が振るわれていた。

「——っ！ 申し訳ありません、マスター！」

空気を軋ませる魔力の波動。それがセイバーだと理解するより先に、男が反応していた。

わたしを追撃しようとした槍は、矛先を変えてセイバーへと迫る。稲妻のように男を猛追してきたセイバーは、裂帛の気合を以て槍を防ぐ。

その隙に、わたしは距離を取る。危なかった……一瞬とはいえ、あの男はセイバーを

振り切ってわたしに追いついたのだ。

「——ハッ」

攻撃を防がれた男は、口元を綻ばせると掌でくるくると槍を弄ぶ。

「いいねえ、そうこなくつちや。逃げられると厄介なんでマスターを追ったわけだが……まさか、オレの脚にあつきり追いつかれるとはな。マスターもサーヴァントも、どっちも楽しませてくれそうじゃねえか」

不敵な笑みを浮かべ、男が槍を構える。どこまでも真紅に輝くソレは、紛れもなくその男の武器だった。

「ランサーの、サーヴァント——！」

「如何にも。そういうアンタのサーヴァントは、セイバーに相違ないな」

槍兵——ランサーの問いに、セイバーは無言で構えを取る。

その手に握られているのは、透明な何か。微かに空気を歪める、一振りの武器。剣士セイバーである以上、得物は剣に違いないが……その形状も刃渡りも、何一つ確認することができない。

それこそが、あの宝具の能力。無色透明の風の鞘、『風王結界』インレジナル・エア。

——宝具とは、伝説の象徴だ。

伝説の剣豪ならば、その剣技が。

名立たる戦士であれば、その武器が。

人々の「かくあれかし」と信じる想念で編まれた、究極の逸品。英雄ならば遍く誰もが持つ、築き上げた伝説の具現。力という一点に於いて精霊にすら匹敵、或いは凌駕する能力を秘める、英雄たちの切り札。

わたしのサーヴァント、セイバー……彼女が持つ宝具の一つが、この透明な鞘だった。ならば——それと対峙するランサーも、当然のように宝具を持っている。槍兵のクラスで召喚されたからには、十中八九あの槍が宝具だろう。

「セイバー」

その小さな背中に、静かに語り掛ける。

「手助けはしないわ。貴女の力、ここで見せて」

「——分かりました、マスター。必ずや、貴女に勝利を」

そう力強く応えると、白銀の騎士は剣を構えた。

正眼に構えた剣の標的は、槍兵。その槍ごと捻じ伏せると、迸る闘気が語っている。

「ハッ、面白え——！」

先に動いたのは、ランサー。

予備動作すらしに、最速で槍を突き出す。狙い違わず放たれる、神速の穂先。剣で捻じ伏せると言うのなら、その剣ごと貫き穿つと言わんばかりの槍撃。その速度は、わ

たしを狙ったものの比ではない。

迸る稲妻に、セイバーが呼応する。振るわれた一閃が、槍の穂先を叩きつける。

返す刀で距離を詰めるセイバー。その速度は、槍より尚速く。魔槍が戻されるより先に、青の戦士は斬り伏せられる――！

「たわけ、その程度かセイバー――！」

しかし。セイバーが風の速度で奔るなら、ランサーは音すら凌駕する。

長柄の武器というのは、攻撃の後に隙が生じる。槍で刺突を放った後は、再び手元に戻すまでに僅かな時間が必要だ。

……だが、この男にそんな条理は通用しない。

セイバーの反応を超える速度で引き戻される槍。瞬きの間すらなく、次の刺突がセイバーの首元を狙う。

「く――っ！」

白の騎士が止まる。

槍という武器は、剣に比べて射程距離が長い。だがその代償として、敵に距離を詰められると対応が難しい。

故に、ランサーはセイバーを近づけさせない。自らに有利な距離を保ち、セイバーを迎撃する。

その槍は、さながら豪雨の如く。頭、喉、首、胸、腕、脚。間断なく容赦なく、あらゆる箇所を穿たと降り注ぐ。

連撃に次ぐ連撃。隙など欠片も見当たらない。音すら遥か置き去りにして、紅い雷撃が放たれていく。あれだけの速度、あれだけの重み。どんなに堅牢な鎧でも、あれを受けては瞬時に細切れにされるだろう。

——だが。ランサーが最速のサーヴァントならば、セイバーは最優のサーヴァント。その程度の槍撃、避けることなど造作もない——！

「は——！」

刺突を避け、払いを弾き、雷撃の如き三閃を打ち落とす。

ランサーが繰り出す槍撃。その全てを、こともなげにセイバーは凌ぎ切った。

……いや、凌いだというのは語弊がある。攻守は既に逆転している。セイバーの劍撃をこそ、ランサーは渾身の連撃を以て防いでいる……！！

「ちっ、面妖なモンを使いやがって……！！」

漏れるは舌打ち。

ランサーが使う槍は、強力な武器だ。穂先は鋭く、射程は広い。白兵戦において、リーチの長さはそのまま優位と成り得る。

だが同時に、槍という武器はポピュラーだ。有名であるということは当然、槍を用い



た戦術も知れ渡っているということになる。

——故に、攻撃を読むのは容易い。

如何に速力や攻撃力を持つようと、使われる攻撃手段は決まっている。ならばそれを予測し、防ぐことは十分可能だ。

あのランサーが神域の戦士であろうとも、こちらのセイバーもまた伝説の英雄。攻撃の先読みなど、優れた直感を持つセイバーにとつては容易いことだ。

「卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か——！」

そして。セイバーのもう一つの優位性は、武器の特性だ。

あの剣は、視認することができない透明な武器。それ故に、間合いも長さも鋭さも、何一つ読み取ることができない。

無論、ランサーとてサーヴァント。セイバーの体の動きから、剣の軌道を読む程度は可能だろう。

しかし、そこまで。相手の武装に確証が持てない以上、ランサーは常にそれを警戒せざるを得ない。

そして最後に——この二人は、基本性能が違い過ぎた。

「はア——ッ！」

「チッ……！」

セイバーから放たれる颯風。一撃ごとに、セイバーの身体から魔力が迸る。

少女が振るう剣を受けた瞬間、ランサーの槍に光が宿る。絶大な魔力が、ランサーの槍を軋ませているのだ。あんなもの、受けるだけでも衝撃が走るだろう。

魔力の上乗せを以て放たれた剣撃を、ランサーは辛うじて凌ぐ。今や守勢に回っているのは、確実にランサーの方だった。

そもそも、セイバーは基礎能力からして桁が違う。ほぼ全てのステータスが最高値▲ランクと同等以上で、有する能力もまた優秀だ。

対するランサーは、瞬発力でこそセイバーを上回るが、それ以外の能力はほとんどセイバーを下回る。その差は、武器や技量で埋められるものではない。

「――」  
息もつかせぬ連撃。

ランサーの槍は、際限なしに速度を上げていく。どこまでギアが上がるのか、推し量ることすらできはしない。

あまりの速さに、宙に残る残像すらブレていく。一体どれが本物の槍なのか、それすら傍からは分からない。

刺突だけではなく、打撃・薙ぎ払いすら織り交ぜた戦い方は、まさしく獣のそれだ。あらゆる暴力を以て、ランサーはセイバーを迎え撃つ。

だが、無差別の攻撃に見えて、その狙いは正確。緩急など付けず、ただ只管に槍の豪雨が降り注ぐ。

応じるセイバーは、無言。僅かずつ後退していくランサーを、正確な剣撃で追い詰める。

神槍の暴虐を以てして、騎士王の攻勢は止められない。刺突を打撃を打ち落とし、それらを圧倒する逆撃を繰り出していく。

刀身こそ見えずとも、その軌跡は文字通りの必殺。秒間数十と放たれる剣撃は、伴う風圧だけでランサーを刻んでいく。

——これが、聖杯戦争。

人間では手の届かない、英霊という超越者たちを使役する戦争。

わたしでは、この戦いには介入できない。セイバーを掩護する間も、ランサーを攻撃する隙も見当たらない。

知らないうちに、わたしはその戦いに見入っていた。

時間にすれば、僅か一瞬。しかし、長く果てしない応酬の後、一際甲高い鋼の音が響く。ランサーの槍が跳ね上げられたのだと知覚するより先に、セイバーが突貫した。

今度こそ、絶体絶命。セイバーの剣は、一片の躊躇も無くランサーの首を狙う……！

「くそ——！」

男の口から悪態が漏れる。

セイバーの斬撃を防ぐには、同等の槍撃を用いるしかない。だがその槍は大きく跳ね上げられ、手元に戻す間もなく男は切り伏せられるだろう。

先程の剣戟とは異なり、セイバーの速度はランサーをすら上回る。ならば、槍を戻すことなどできはしない。

故に、ランサーが採った手段は単純。

槍が使えぬのならと、己の脚でセイバーの刀身を蹴り上げた――！

「な――!?!」

セイバーの驚愕。しかしその僅かな時間で、ランサーは確かに生き延びた。

一瞬にして間合いが離れる。不利に陥った戦況を立て直すためか、常軌を逸した速度でランサーは離脱する。セイバーの一撃は、僅かにランサーの頭髪を薙ぐに留まった。

「――」

鬼気迫る形相で、ランサーはセイバーを睨みつける。

それも当然か。彼の槍は、その悉くが打ち落とされた。正しく全力を以て挑んだにも関わらず、その槍は造作もなくセイバーに防がれている。

一方のセイバーには、疲労した様子すら見られない。あれ程の槍撃を凌ぎ切り、圧倒しておきながら、まだセイバーには余裕がある。

確信した。わたしのセイバーは——文句なしに、最強だ。

「——どうしたランサー。御身の槍、その程度の物ではないでしょう」

「ほざけセイバー。貴様の剣こそ、その風の中に何を隠してやがる？ ……つと。やり

合う前に、一つ提案だ」

予想外の言葉。ランサーの言葉に驚いたのか、セイバーが眉を顰める。

「お互い初見だしよ、ここらで分けつて気はねえか？ そのの嬢ちゃんは惚けてやがるし、オレのマスターとて姿を晒せぬ腑抜けときた。お互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいと思うが——」

「——断る。貴方はここで斃れる、ランサー」

鎧袖一触。間髪を入れず、セイバーは槍兵の提案を切り伏せた。

当然だ。こちらが有利なのに、何故わざわざ敵の提案を受けなければならないのか。

このまま押し切れば、セイバーの勝利は揺るがない。

その答えを予想していたのか、ランサーは、そうかよ、と一言呟くと——

「……じゃあな。その心臓、貰い受ける——！」

轟、と空気が震えた。

今まで構えらしい構えを取らなかつたランサーが、初めて構えを取った。

槍の穂先は、地を舐めるかのように伏せられている。一分の隙もないその姿は、今ま

でのそれを尚上回る。

——まずい。そう直感した刹那、ランサーの姿が沈んだ。

槍が傾いた途端、空気がねじ曲がる。

莫大な魔力が、槍に吸い上げられていく。まるでそれを主と仰ぐかのように、マナが一点に収束していく。

あれこそが、あの男の切り札。唯一無二の必殺兵器、『宝具』。ランサーは、それを解放しようとしている。

宝具とは、ただそれだけで他を圧倒する武器だ。しかしその真髄は、『真名』を以てその力を発動させることにある。

かつて、魔を討ち、邪を断ち、神を殺した英雄たちの武器。サーヴァントは、自らの魔力によってその真価を再現する。

それはまさに、伝説の具現。数々の偉業を成し遂げ、世界に名を刻んだ、英雄たちの究極の奥義。

ランサーが放とうとしている攻撃は、間違いなくその類だ。アレが何の宝具かは知らないが、発動されたが最後、セイバーは倒される。

アレは多分、そういうものだ。いかにセイバーが優れていようと関係なしに、アレはセイバーを殺すだろう。

「セイバーの顔が強張る。彼女の直感もまた、己の死期を悟ったのか。

ランサーに呼応して、セイバーの剣から風が迸る。事此処に至って、セイバーに油断はない。宝具には宝具を以て、セイバーもまた自らの最終兵装を解き放とうとしている

「……………っ」

指一本、動かすことができない。

ここは、正しく死地だった。ランサーの槍が奔るか、セイバーの剣が唸るか。一瞬の後に、決着はつくだろう。

次に立っているのはランサーか、セイバーか。どちらかの敗北を、塗り替えることができたとすれば、それは――

「誰だ……………!!!」

わたしたちが見逃していた、第三者という存在に他ならなかった。

「……………え？」

呆然とする。一瞬だけ見えたその姿は、確かに学生服だった。

うそ。まだ学校に、生徒が残ってたなんて……………!

失敗した。ランサーにばかり気を取られて、周囲の状況に気を配っていなかった。何

かの事情で、遅くまで学校に居残っていたヤツがいたとしても不思議じゃない——！

一瞬の自失の後、正気に戻るとランサーが消えていた。

慌てて周囲を見渡すと、今にも走り出しそうな姿勢でセイバーが待機している。その視線は、何かを待つようにわたしを真っ直ぐ貫いていた。

セイバーはわたしのサーヴァント。律義な彼女は、ランサーを追撃せず、ぼうつとしていたわたしの指示を待っていたのだ。

なんて、迂闊。許可もなしに、セイバーがマスターの側から離れるわけがない……！  
「やば——！セイバー、今すぐランサーを追って！」

こくり、と頷くセイバー。こちらに向き直りすらせず、セイバーはランサーを追って消えた。

彼女にも解っている。神秘の目撃者を消すのが、魔術師の一番基本のルール。あのランサーは、セイバーとの決着を後回しにしても、自らを目撃した学生を殺しに行ったに違いない——！

ああ、くそつ、なんて間抜けなわたし……！

今まで十何年、ずっとそんな失敗はしなかったのに、よりによってなんで今日に限って……っ！



\*\*\*

冷たい廊下。月明かりすら差し込まぬその場所で、セイバーは静かに佇んでいた。

唇は噛み締められ、憤りを抑えるように俯いている。その足元には……物言わぬ軀が、一つ転がっていた。

……つんと鼻を突く、錆びた鉄の臭い。

廊下に溢れた血だまりは、つい先ほどまで、その軀が生きていたことを物語っていた。「……追って、セイバー。ランサーはマスターの所に戻るはず。こいつの手当ては、わたし引き受けるわ」

「……分かりました」

苦渋の眩きを残し、セイバーは走り去る。

その一言に含まれていた苦悩は重い。たった数日の付き合いでも、彼女の責任感の強さは解っていた。だけど……この責任は彼女ではなく、わたしにある。

わたしがもつと気を配っていれば。わたしがもつと早く指示を下していれば——こんな事態は、きつと避けられたに違いない。

だから、これはわたしの責任。魔術師の道に善悪はない以上、いつかこんな日が来ると、とうの昔に覚悟は決めていた。

決めていた、はずだというのに――。

「っ――」

手が震える。

何故なのか……落ち着いているはずのわたしは、その実、手を動かすことさえできなかった。

うつ伏せになって倒れているその生徒を確認するのが――怖い。

責任を見つめるのが怖い。

全部おまえのせいだと、そう死者に告げられるのが怖い。

いつだって、こうなるのだと覚悟していたくせに……わたしは、ひどく自分勝手に怯えていた。

「……ごめんね。看取るくらいは、してあげる」

震える指を無理やり押さえつけて。わたしは、その生徒の顔を確認した。

「――え？」

時間が、止まる。

「嘘でしょ。なんで、アンタがここに――」

頭に来た。

一瞬前の恐怖なんか忘れて、ただひたすらに頭に来た。

……わかつている、全部わたしのせいだ。

ランサーがコイツを殺したのは、当然のこと。目撃者を消すのは基本中の基本なのだから、それを責められる筋合いはない。

だけど、こんな日に限ってこんな場所に居合わせたコイツが、とにかく憎らしくて腹が立つ——！

「——」

けど——なんて、幸運。

そいつはまだ、死んでいない。

貫かれたのが頭なら、問答無用で即死していた。だけどこいつが穿たれたのは、心臓だった。

ただの一刺し。

綺麗に破壊された心臓からは、思ったより血液が吐き出されていない。

だけど、脳に血液が回らなくなれば、それで終わり。何の奇跡か、こいつはまだ息があるけど……数秒と経たずに、その息も止まるだろう。

……方法は、ある。

現代の医学では、こいつを生かすことなんてできない。それでもわたしには、どうにかできる手段があった。

わたしの切り札。それを使えば、どうにかできるかもしれない。

けれど……そこまでする意味は、あるのだろうか。

こいつの死は、わたしの責任だ。だが、元はといえば、こんな時に学校に残っていたこいつが悪いのだ。

第一これは、わたしの父さんが、わたしだけに残しておいてくれたもの。強力な魔力の結晶。こんな切り札を、おいそれと使ってしまうなんてこと――

「――だからなんだってのよ、ばか」

そう呟いて、わたしは死にかけのそいつに屈みこんだ。

\*\*\*

「……あーあ、やっちゃった」

後悔と共に、軽くなってしまったペンダントを持ち上げる。あの後家に帰ってきたわたしは、ソファアーに座りこんで絶賛落ち込み中だった。

うっかり忘れそうになって、慌てて拾ってきたこの宝石。まだそこそこ魔力が残ってはいるけど……最初に蓄えられていた魔力と比べると、スツカラカンと言ってもいい。切り札の一つを、こんな前哨戦で使ってしまった。

そりやそうだ、心臓があれだけ壊されてたヤツを生き返らせるなんて、とんでもない無茶をした。それが成功したのだから、宝石の一つや二つ、安いものかもしれないが……。

宝石が持っていた価値を考えると、流石のわたしも凹む。あれだけの魔力があれば、大抵のコトはできただろうに……。

「ま、いつか。やっちゃったものは仕方ない。反省」

セイバーには、念話を通じて自宅に戻っていることを伝えてある。時間が経てば、彼女も戻って来るだろう。

使っちゃったものは戻ってこないのだから、後悔しても仕方ない。もっと有意義な時間を使い方をしよう。

うんうん、と無理やり自分を納得させて、思考を切り替える。

先に考えるべきは、ランサーとの戦いだ。初めての対サーヴァント戦、あれはわたしの想像を遥かに超えたものだったのだから。

「実際、なんにもできなかつたのよね……」

セイバーとランサーの戦い。

わたしのセイバーが圧倒していたからいいようなものの、ランサーがもつと強かつたら……と考えると、ぞつとしない。ただ突っ立っているだけのマスターじゃ役立たず

だ。次からは、もつと戦略を練る必要がある。

……それに、ランサーが発動した宝具。如何にセイバーの方が有利でも、アレが発動されたら、コロつと倒されてしまう可能性もある。

英雄の宝具はそれだけ強力なのだ。物語に出てくる伝説の武器、それがそのまま使われるということなのだから。

「でも、使われてれば誰だか判ったのよね、あいつ」

宝具には、弱点もある。

サーヴァントとは、即ち英霊。人々の信仰によってカタチを成す存在が英霊ならば、その伝説は当然歴史に刻まれている。ならそれをたどつていけば、サーヴァントの能力も経歴も、ことによっては弱点すらも判ってしまう。

故に、サーヴァントは本名を晒さない。ランサー、セイバーといったクラス名は、本名の隠蔽のためでもある。やすやすと宝具が使えないのは、その解放が即ち正体の露見と同義だからだ。

軽々しく宝具を使うなんて下策も下策。自分のサーヴァントの正体を隠しつつ、如何に敵のサーヴァントの正体を見破るか……それが、この聖杯戦争のカギを握ると言っても過言ではない。

……だが、サーヴァントの強さは宝具のみならず、他の条件によっても決まる。

例えばそれは、英霊の格。より偉大な功績を残した英雄、より優れた武器を持つ英雄が強いのは言うまでもない。

その点、わたしのセイバーは最高クラスの知名度を誇る。イングランドの大英雄、アーサー王。彼——実際には女性だったが——の格は、間違いなく最上級のものだ。

けれども、この聖杯戦争にはそれ以外の要因が絡む。それが七つのクラスと、それに付加される特殊能力だ。相性によっては、格下のサーヴァントでも格上を打倒する可能性を持つ。実際、過去にはそういった事例もあったらしい。

「——」  
そんな事を考えていると、いつの間にか深夜になっていた。

丁度セイバーも帰ってきたので、どうだったのか成果を聞いてみる。わたしの問いに、セイバーは申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「申し訳ありません、凛。相手は、余程用心深いマスターのようです。ランサーの姿も、途中で見失ってしまいました」

「ご苦労さま、セイバー。……はあ、やっぱり簡単にはいかないか」  
はあ、とため息をつく。

そのわたしをどう思ったのか、む、とセイバーが眉を吊り上げた。

「凛、此度の一戦でランサーを倒せなかった原因は、私の不手際にあります。今すぐに彼

を探し出し、先程の決着をつけるのも吝かではありません」

あれ。心なしか、セイバーが怒っているように見える。

……ひよつとして、本当に自分に落ち度があったと思っっているのだろうか。

苦笑を浮かべて、ちがうちがう、と手を横に振る。

「セイバー。さっきの戦い、貴女はよくやってくれたと思うわ。だから落ち度があったとすれば、それはわたしの方。そもそも、まだマスターの数が揃ってないのに、勝手に戦うことになっちゃったのが問題だしね」

聖杯戦争は、七人のマスターが揃って初めて開始される。まだ数が揃っていない——揃ったならば、綺礼が何らかのアクションを起こすはず——以上、その前に戦うのは本来なら避けたかった。

でもまあ、やってしまったものは仕方がない。

考えようによっては、今回は幸運だったのかもしれない。可能性は低いけど、あのランサーが積極的にわたしを狙って来たり、或いは敵のマスターがランサーと一緒に行動していたとしたら……わたしは今ここに居なかったかもしれないのだから。

今回だって、ランサーの宝具が発動していれば危なかった。セイバーも宝具で迎え撃とうとしたようだが、確実にランサーの方が早かった。ランサーが、アイツを追う事を優先したから引き分けのまま終わったわけで……って、ちよつと待て。



「——やばいかも」

待て。もう一回冷静に考えてみる、遠坂凜。

そういえば、わたしは戦いを覗き見たアイツの記憶を操作していない。

ランサーはわたしたちとの決着を差し置いてでも、目撃者の抹殺を優先した。もしかしたら、宝具でセイバーを倒せる可能性があったにも関わらず。そこまでして目撃者を消したかったランサー……或いは、ランサーのマスターが、アイツが生き残っていたと知ったらどうするか。

「そんなヤツ、生かしておかない——！」

慌ててソファァーから立ち上がる。時計に目を向けると、あれから三時間余りが経過していた。

時間的には、かなりまずい。ひよつとしたら間に合わないかもしれないけど、間に合わなかったら切り札を使ってまで助けた意味がない——！

目を丸くするセイバーを尻目に、わたしは夜の街に飛び出した。

\*\*\*

走る。

走る。

全力で走る。

明日の新聞に載つてもおかしくない速きで、わたしは街を走り抜ける。

幸いというべきか、アイツの自宅は知っている。道に迷うことがなかったのは、僥倖と言つてもいい。

「――」

わたしに追従するセイバーは無言。

しかしその表情は、真剣そのもの。おそらく彼女も、わたしが気付いたのと同じ結論に至っている。

サーヴァントは、マスターに似た性質のものが呼び出されると言うが……まさか二人揃つて、アイツがこの後どうなるかに考えが及ばなかったなんて、笑い話にもならない。

――午前零時。

曇天の夜の下、わたしたちは目的地へ到着した。

住宅街の隅っこにあるこの武家屋敷。何度か見ただけのある家だったが――今この場には、明らかに異様な雰囲気か漂っていた。

「つ………！ 下がってください、凜！」

息を切らせて屋敷に進もうとしたわたしを、セイバーが制する。その右手には、再び

透明な剣が握られていた。

止められて、初めて気づいた。……あの中には、サーヴァントがいる。

この気配は間違いなく、さっきのランサーだ。わたしたちより一足早く、ランサーはアイツを追って来たのだ……！

「こうなったら、先手必勝……！ セイバー、アイツを——」

戦闘準備を整えたセイバーに指示を出そうとした、その刹那。

——昼と見違えるような閃光が、屋敷から迸った。

「!?!」

感知できたのは、その力だけ。

直接確認せずとも、屋敷の壁越しでも判る膨大な魔力。一瞬にして現れたそれは、たちまち実体化し……間違いなく、そこに召喚された。

「嘘でしょ——」

信じられない。

だが、信じるしかない。

わたしがぼうつとしていているうちに、脱兎の如く屋敷から逃げて行ったランサーが、何よりの証拠だった。

「セイバー、これって——」

「——はい。おそらく、七人目のサーヴァントでしょう」

剣を構え、油断なく塀を睨むセイバー。その眼光は、塀の内にいるまだ見ぬ何者かに向けられている。

隙のないセイバーに対して、わたしは何もできない。雪崩のように引き起こされた幾つもの事態は、わたしの思考能力を超えていた。

風が吹く。

空を覆っていた雲が晴れ、月明かりが差し込んでくる。

その光に照らされて——予想外のモノが、塀の上に立っていた。

「——無礼者。凡夫雑種の分際で、<sup>オレ</sup>我の許しなくして<sup>オレ</sup>我を見るな」

目を眩ませるような光。

ソレは、空に浮かぶ月輪の輝きではなく——目の前にいる、金色の男の輝きだった。

月に照らされるのではなく、月を従えるように。黄金の甲冑を纏った男は、酷薄な瞳でこちらを見下ろしていた。

「貴様ら俗人が我を見ることは許さん。我に請うことも許さん。我と語ることも許さん。」

——雜種。我を覗き見た大罪、その命を以て償うがいい」

あまりにも尊大。

あまりにも傲岸。

ただ聞いているだけでこちらが凍り付くほどの、冷酷で残忍な声。

絶対的な存在感を放つ、その男こそが——第五次聖杯戦争における、七人目のサーヴァントだった。

## 1. 黄金の邂逅

——そこは、黄金の都だった。

高く積まれた金塊の輝き。山と溢れる宝石の煌き。

ここには絵画がある。そこには楽器がある。あちらには食器がある。こちらには輝舟がある。

地平の果てまで、数限りなく広がる財宝の群れ。その一つを目にしただけでも、超一級の宝物だとわかる。

人の認識できる領域をとうに超越した、無限の宝。おそらくここには、この世全ての財が収められているに違いない。

人間は、本能的な欲望を持つ。煌びやかな財宝を目にして、手に取つてみたいと思わない者は極少数だろう。だが、ここはそんな欲望を抱かせずらしい圧倒的な世界だった。その威容には、ただ驚嘆するしかない。

無数の財宝が広がる黄金郷。<sup>エルドラド</sup>おとぎ話に語られる黄金の国とは、きつとここを示しているのだろう。

名剣があつた。宝槍があつた。魔斧があつた。神槌があつた。

一つとして同じ物はなく、無数に散らばる武器の数々。神話に語られ、英雄が用いた武器と言つても疑う者は居ないだろう。

この武器のそれぞれが、空を裂き、海を割り、地を穿ち、或いは魔を断ち、邪を討ち、神を殺すに十分な力を宿している事は疑いようもない。

例えば、そこに刺さつた真紅の槍。

禍々しさすら感じさせるそれは、魔槍と呼ぶに相応しい。投撃したが最後、それはどこまでも獲物を追いかけて、その心臓を刺し穿つのだろう。

例えば、ここに転がる黄金の槌。

その重厚さ、常人では持ち上げることすらできないだろう。しかしそれを手にする勇者が居たならば、その一撃は万象を砕き、巨人の頭蓋すら打ち破るに違いない。

——しかし。これの前では、それすら有象無象の塵芥だつた。

黄金の柄。鏢は大きな円錐状で、この世ならぬ文字が刻まれている。

三段に分かれた黒い刀身。紅の紋様が刻まれたそれもまた円錐状で、淡く光輝を放つている。

先端には、振れた刃。鈍い光沢を放つそこもまた、黄金に彩られていた。

そして何より——その在り方が異様だつた。

何もかもを斬り裂き、根絶しようという絶大な力。「他の全てを殲滅する」という意思すら滲み出ている。おそらくこの剣は、世界そのものすら断つことが可能だろう。

『死』という概念そのものが具現化したようなその物体からは、恐怖と絶望しか感じられない。

だが、だというのに俺は……衛宮士郎は、その剣に見惚れてしまっていた。

それを、剣と呼んで良いものかどうか。俺の知る限りのカテゴリーに当てはまらないそれは、何と形容していいのかわからない。しかし、それでも——それは、剣と呼ぶに相応しいモノだと直感した。

神剣も魔剣も、この世界には数限りなく存在する。けれどもその剣群の中で、それは紛れもなく王者だった。

——名付けるとすればそれは、世界を分かっ■■剣。

この世界を統べる、王者のみに許された絶対の剣。それはとても凄惨なことなのだけれど……同時に、とても寂しいことだと。俺は、そう感じてしまった。

\*\*\*

——欠けた夢を、見ていたようだ。



「先輩、またこんなところで寝ちやつてたんですか？ 風邪を引いちゃいますよ？」

鈴を鳴らすような声に、ゆつくりと目を開く。視界に移るのは、馴染み深い灰色の空。それが天井だと気付くのに、少し時間がかかった。

視線を移すと、解体された機械たちが飛び込んできた。細かい部品がそこかしこに転がっており、まさに作業中だったのだと主張している。

そこまでをぼんやりと眺めて、自分が何をしてたのかようやく思い出した。

俺が寝ていたのは我が家……つまり、衛宮邸の土蔵だ。ここで魔術の鍛錬をしているうちに意識を失い、気が付いたら朝になっていたらしい。わりと散らかっているのは、寝ているうちにどこかにぶつかっていたせいだろう。ガラクタばかりのこの土蔵は、下手に衝撃を与えると色々なものが降ってくる。

よいしょ、と腰を上げて立ち上がる。石の床で寝ていたからか、或いはどこかにぶつけたせいか、どうも足腰が痛む。作業をしているうちに眠ってしまうのはよくある事だが、最近は頻度が多いように感じる。疲れているのかもしれないな、と寝起きの頭で漠然と考える。

もう一度視線を移すと、澄んだ瞳とぱつちり目があった。

少し紫がかった、細くて綺麗な黒髪。十人中九人は振り返るであろう、整った美貌。口元には、優しい微笑が浮かんでいる。

「おはようございませす、先輩」

陽光が降り注ぐ、土蔵の入口。綺麗な笑顔で、その少女は頭を下げた。

大和撫子と呼んでも遜色ないこの美少女は、間桐桜。ちよつとした事情で、一年半ほど前から我が家に通つてくれるようになった俺の後輩であり、今では家族も同然だ。

「ああ。おはよう、桜」

寝ぼけた声で返事をする。俺の挨拶に嬉しそうに顔を綻ばせた桜だったが、それはすぐに不機嫌な表情に変わった。

「寝るときはちゃんと部屋で寝てくださいって言ったのに……どうしてわたしの言うことを聞いてくれないんですか？」

わたし怒ってますよー、と不満を滲ませた声。

桜は怒鳴るとか暴れるといった言動とは縁がない。不機嫌な時も、こうして穏やかに話しかけてきてくれる。この穏やかさ、どこぞの騒がしい虎にも見習つてほしいものがある。

……と、冗談はさておき。

当然ながら我が家の住人は、俺が土蔵で寝起きすることを快く思っていない。しよつちゆう注意されているし、俺自身も気を付けているのだが、たまにこうしてうつかり寝過ごしてしまうことがある。そのたびにぐうたらな先輩を起こしに来てくれる桜には、

本当に頭が上がらない。

「悪い、うっかりしてたみたいだ。ガラクタイじりをしてたはずなんだが、いつの間にか寝てたらしい。次からは気を付ける」

両手を合わせて、素直に謝る。そんな俺に桜は、仕方のない先輩ですね、と苦笑を浮かべて許してくれた。

「朝ごはん、もう用意できてますよ。藤村先生も、お待ちになられていると思います」  
「げ、もうそんな時間か」

我ながら、随分と寝過ぎしていたらしい。本当なら、俺が朝食を作らなければいけないのだが……こうして俺が寝過ぎした時も、起こしに来てくれるばかりか朝食まで作ってくれる桜は、俺には勿体ない後輩だ。

献身的、と言っても良いかもしれない。だが、それに甘えているようではダメ人間になる一方だ。人間、自分のコトは自分でやらなきゃいかんのである。

桜が朝食を作ってくれた、ということはもう六時半を過ぎていることになる。早めに朝食を平らげないと、時間的に余裕がない。

この惨状をほったらかしというのも気が引けるが、物事には優先順位というものがあ。俺以外に土蔵を使う人間もないし、ここの片付けは学校から帰ってきてからでも問題ないだろう。そして何より……あの虎をこれ以上待たせておくと、大惨事が起きか

ねない。またご近所様に迷惑をかける羽目になりかねないので、それだけは回避したい。

「いつも悪い、桜。顔を洗って、着替えてから行くから、先に待っていてくれ」

「いえ、気にしないでください。それじゃ、後で居間に来てくださいね」

にこりと笑みを残して、桜は去っていった。その笑顔に見惚れていた自分に気づき、ふるふると頭を振る。

最近、桜は成長したと思う。後輩の成長は先輩としては嬉しいのだが、男としてはこう、色々と複雑なのである。

「……と、顔を洗ってこなきゃ」

流石にこれ以上ぼーっとしていたのでは、頼りない先輩という汚名を被りかねない。喝、と友人の口癖を唱えて、雑念を振り払う。

いつも通りの青空が、寝起きの顔に心地よかった。

\*\*\*

着替えと洗顔を終えて、居間に向かう。廊下まで漂ってくる美味そうな匂いに、自然と顔が綻ぶ。

「しーろーうー！ お姉ちゃん、お腹減ったよおー！」

居間に入った途端、がおーと吼える虎……ではなく、藤ねえ。

正しくは、藤村大河。姉には違いはないのだが血縁関係はなく、後見人、或いは保護者という呼び方が相応しいだろう。足をじたばたさせて吼える様子からは想像もできないが、これでも二十五歳。立派な社会人である。弟分としては、そろそろ彼氏の一人でも見つけろよと言いたいところなのだが、このタイガーを恋人にできるような猛者はちよつと想像がつかない。

何を間違えたのか、高校の英語教師として勤めているあたり、世の不条理さを感じなくもない。意外にも生徒からの人気は高いあたりが、世の中の不可思議さを物語っている。

「だったら自分で作ればいいだろ。作ってもらってる身分なんだから、贅沢言うな」

ぴしやりと切り捨て、自分の定位置に腰を下ろす。下手に甘やかすと、後々本人のためにならないのだ。

「お姉ちゃんが料理できないの知ってるくせにー！ えーん、太郎がいじめるうー！」

よよよ、と朝食を運んできた桜に縋りつく藤ねえ。

桜も慣れたもので、はいはい、と適当にあやしなから朝食を並べていく。……と、黙って見ている場合じゃない。

「悪い桜、俺も手伝うよ」

「いいんですよ、先輩。先輩はいつも頑張ってますから、たまにはわたしにお仕事させてください」

えへん、と豊かな胸を張る桜。

俺の顔を立ててくれてるが、桜は本当に頑張ってくれていると思う。日々の努力の結果、料理の腕もめきめき上達している。師匠としては鼻が高いが、そのうちに抜かれてしまうんじゃないかとヒヤヒヤしている。まだ抜かれてやる気はないが、今日みたいに料理を任せてしまう日が続くと、いつかコロつと逆転されかねない。

むむむ……明日からは早起きしよう、とこっそり決意。

「いつもありがとうね、桜ちゃん。士郎はあれでちよつと抜けてるトコがあるから、桜ちゃんのおかげで助かってるわ」

うむうむ、と偉そうな虎。アナタ、ちよつとは手伝おうと思わないんですか。

「そんなことありませんよ。わたしの方が、いつも先輩に助けてもらってばかりです」

「そうかしら？ 桜ちゃん、とつても立派だと思うけど。いいお嫁さんになれるわよー」  
ニヤリ、と擬音が聞こえてきそうな笑いを浮かべて、意味ありげに俺を見つめてくる藤ねえ。

うんうん、と俺も相槌を打つ。

見た目が可愛いだけではなく、料理の腕も立派で、立ち居振る舞いにも品がある。そして何より、穏やかで優しい性格。比較対象が藤ねえなのもあるかもしれないが、それを差し置いても今日日ここまでのいい子は見当たらない、と思う。こんな子をお嫁さんにできた男は、それはもう幸せ者だろう。

「……………」

「……………」

……………うん？ 何やら、二人揃ってため息をついている。

「はあ……………。こりや、まだまだ前途多難か。頑張つてね、桜ちゃん」

「え？ あ、はい、頑張りますっ」

……………。俺、何かマズいことをしただろうか。

\*\*\*

「……………まったく、藤ねえのやつ」

はあ、とため息をつきながら食器を洗っていく俺。隣で苦笑を浮かべる桜は、食器を拭く担当だ。

……………事の次第は、朝食の時に遡る。率直に言えば、藤ねえがまた悪巧みをしたのだ。

とろろに醤油をかけようとした時、俺の醤油がいつもと違う事に気が付いた。その時は、間違えてソースを持ってきたかな？　と思ひ、桜の醤油を貸してもらうことにしたのだが……新聞を読む、などという虎にあるまじき行為に及んでいた藤ねえがここで爆発した。

「な、なんでよー……………！　なんで自分のお醤油かけないのよー……………!!!」

不審に思つて白状させると、どうやら藤ねえは、俺の醤油にこつそりオイスターソースを混ぜていたらしい。

なんでも、この間タイガー呼ばわりしたことに対する復讐だとか。それが失敗に終わつて騒ぎ始めたらしい。うん、半ば藤ねえの自業自得だ。

この藤村大河、名前も生態も虎そのもの、しかも好きな動物も虎、普段着も虎柄という拘りようのくせに、自分が虎と呼ばれると怒り出すのである。困つたものだ。

しかし、俺にも非があるとはいへ、醤油にソースを混ぜて意味不明な調味料を生み出した藤ねえの罪は重い。調味料もタダではないのだ。食費もロクに入れないくせに、調味料を無駄にするとは言語道断。

……というコトで、罰として藤ねえのとろろには醤油とソースを混ぜたモノがかけられることになった。ぎゃあぎゃあ騒いでいた藤ねえだったが、それでも完食してしまうあたり、虎の生態とはつくづく不思議である。



そう首を捻りながら皿を洗っていると、不意に左手に激痛が走った。

「痛ッ——!?!」

ぼーっとしながら皿洗いを続けていたから、手を切ったのだろうか。そう思つて皿を置くと、心配そうにこちらを見つめる桜と目が合った。

「——先輩。その傷、どうしたんですか?」

言われて、目線を手に向ける。そこで、ようやく異常に気が付いた。

「なんだ、これ……?」

包丁か何かで手を切ったにしては、この傷は異常だ。切り傷と言うよりは、蚯蚓腫れと言つた方が相応しい。酷い火傷でも負つたような、そんな傷。

見ようによつては、不思議な紋様が刻まれているようにも見える。が、俺はこんな傷を負つた記憶はない。第一、さつきまで俺の左手は普通だった。

……いや。ひよつとしたら、昨日のガラクタいじりで火傷を負つていたのかもしれない。それ位しか、思い当たる節はない。

それに、もう痛みは消えている。左手を開閉するが、特に問題はないようだ。後で、消毒液と包帯で治療しておけばいいだろう。

そんなことより、今重要なのは——

「大丈夫か、桜……?」

自分が大怪我をしたかのように、顔を青ざめさせ、硬直している桜。その視線の先には、俺の左手。

俺の怪我を心配してくれているにしても、その表情は異常だった。

恐怖と絶望が一緒くたになったような。それを見ている者にすら、焦燥を抱かせるような。そう、それはまるで――

――あつてはならないモノを、見つけてしまったような。

「桜……」

肩を揺さぶると、桜はハツとした表情を浮かべて正気に戻った。

その瞳には、さっきまでの暗い色はない。さっきの桜の様子は、尋常ではなかった。

「本当に大丈夫か、桜？」

「い、いえ、大丈夫です」

首を横に振る桜。いつもの桜に戻ったのを確認して安心し、掴んでいた肩を放す。

ふう、と安堵のため息をつく。俺の方が逆に心配してしまつたが……そこまで驚かれるような傷だっただろうか、これは。

いずれにせよ、この傷が桜を怖がらせてしまつたのは事実だ。俺自身は痛みを感じな

いが、第三者から見れば相当痛そうに見えるのだろう。

このままでは、桜だけではなく他の皆にも心配をかけてしまう。洗い物を終えたら、すぐに包帯を巻いておこう。

……そんな俺を、桜は黙って見つめていた。

\*\*\*

後片付けが終わると、桜と藤ねえは一足早くこの屋敷を後にした。

桜は弓道部の部員で、藤ねえはその顧問。二人とも朝練があるため、自由な時間は限られている。

以前までは、俺も弓道部に所属していたのだが……色々とあつて、今はこうして帰宅部に甘んじている。

「これでよし……と。そろそろ俺も出かけないとな」

帰宅部とはいえ、朝練組とそんなに時間が違うわけでもない。あんまりのんびりしていると、遅刻の憂き目に遭うことになる。

入念に火の元を確認し、戸締りを確認。

最近、ここ冬木市では、ガス漏れ事故が多発している。強盗が出ただの、不審な外国

人がいたのだの、集団昏睡事件があったのだの、他にも良くないニュースには事欠かない。テレビのニュースキャスターが話していたが、十年前にも似たような事件が多発していたらしい。

——十年前。その単語に、ちくりと胸が騒いだ。

一面の炎。

音を立てて崩れ落ちていく家。絶叫し、焼け焦げていく人々。

どこまで逃げてても、赤からは逃げられない。炎の紅。血の朱。

これは悪い夢に違いないと。そう信じたい程の光景が、目の前に広がっていた。

人が死ぬ。死んでいく。ボロ雑巾のように打ち捨てられた躯体が、其処彼処に転がっていく。

四方八方、三百六十度、どこを向いても広がっているのは■■■の山。そこで、感じてしまった。

——ああ。これを地獄と呼ぶのか、と。

助けてくれ、と叫ぶ男の声が聞こえた。

娘だけでも、と縋る女の声が聞こえた。

それら全てに背を向けて、ひたすら逃げ続けた。

生きなくちゃ、と。

死んでいった人たちの分まで生きなくちゃ、と。

それだけを胸に抱いて、走り続けた。どこまで行っても、**■**だらけの中。涙さえも枯れ果てて、俺は彷徨い続けた。

気が付くと、炎は消えていた。

曇った空が、火照った顔には眩しく映る。そこでようやく、自分が倒れていたのだと知った。

視界に広がるのは、一面の白。雲の合間から煌めく陽光を目にして、そこで初めて、自分がからっぽなことに気付いた。それを悲しいと感じる心すら、もう残ってはいなかった。

考えてみれば、当然のことだった。幼い体はこれ以上ないほど傷ついていて——体を生かす代償に、心の方が消えてしまった。

ああ、だからきつと——**■**士郎は、一度ここで死んだのだ。

何もない心に映ったのは、あの表情だけ。

ポロポロになった自分を見て、生きていてくれてよかった、と。心から嬉しそうに涙を流した、その表情だけが——。

「……つと、いけね」

しばしば、と瞬きをして過去の光景を振り払う。あれはもう、終わったことだ。今の

自分がどうこう考えても仕方がない。

それより、今は学校に遅刻しないことの方が大切だ。戸締りも終わったし、玄関を出ることにする。

外に出ると、肌寒い冷気が沁みた。

真冬だから当然だが、それを差し引いても今日は寒い気がする。もつと厚着をしてくれば良かったかもしれない。

少し震えながら、慣れた通学路を歩いていく。制服姿もちらほら見えてきたので、遅刻はせずに済みそうだ。

……と、途中でおかしなものを見た。

真っ赤なコートに身を包み、二つにまとめた黒い髪を従える美少女。

——遠坂凜。

容姿端麗、成績優秀と、完璧超人を地で行く優等生だ。当然ながら、学校での人気も非常に高い。

と、他人事のように語る俺だが、内心ではちよつと憧れていたりもする。

普段、この通学路で彼女を見掛けることはないのだが……まあ、時にはこういう事もあるかもしれない。

そんな変わった経験に遭遇しながらも、いつものように学校へ到着。教室へ入り、

ホームルームの時間を待つ。

正確には、ホームルームの時間はもう始まっている。ただ、担任が時間通りに来ないだけだ。もう皆も慣れたもので、クラスメイトたちの表情にはまたか、という感想が浮かんでいる。

数分ほどぼーつとしてしていると、どつどつどつどうど……と、どこかで聞いた事があるような足音が聞こえてくる。程なくして、豪快に開かれる扉。

「みんなー、おっはよー！」

勢いよく飛び込んでくるのは、我らが藤ねえ……ではなく、藤村大河教諭。一体何がどうなったのかわからないが、こうしてウチのクラスの担任をしているワケである。

そして、いつものように教壇に向かい――

「あ」

ガシャーン、と。それはもう、盛大にずっこけた。

こけただけならまだしも、教卓の角に頭が思い切りめり込んでいます。アレ、普通なら死ぬんじゃないだろうか。

……ところが、普通じゃないのがタイガー。虎の生命力は人間以上なのである。これ位でへこたれることは、まずない。

「タイガー、今度こそ死んだんじゃないね？」

「せんせーい、大丈夫ですかー?」  
教師が動かなくなったというのに、緊張感の欠片もない我らが2年C組。こんな感じで、今日も平凡な一日が始まった。

\*\*\*

そうこうしているうちに、あつという間に放課後になった。

今日は土曜日なので、授業自体は半日で終わっている。帰宅部の俺は、早めに帰ることもできたのだが……備品の修理やら友人の頼みやらで、こうして夕方まで居残っていた。

外を見ると、もう夕日が街並みを照らしている。

夕飯の買い出しは昨日のうちに済ませていたので、今日はもう帰るだけだ。バイトの予定も、今日は入っていないからはずだ。

さて、晩飯は何にするかと考えながら廊下を歩いていると、唐突に声を掛けられた。

「やあ、衛宮。お前、今暇かい?」

声の主に向き直ると、見知った顔がそこにあつた。

——間桐慎二。



成績優秀で、スポーツもそつなくこなす優等生。珍しい青みがかった髪に、美男子と呼んで差し支えない顔立ちをしており、黙っていれば十分にモテるだろう。名字でわかるとおり、桜の兄でもある。

「ん、暇だぞ。今帰ろうとしてたところだ。慎二の方は、今日は弓道部はいいのか」

「つ——それ、おまえになにか関係があるわけ？ 部外者のくせにさ」

含みありげに言い放つ慎二。俺は元々弓道部員だったのだが……バイト中の事故で骨折してしまい、大会に出られなくなってしまった経験がある。

その折に部員の皆には迷惑をかけてしまったし、中でも慎二には、人の迷惑を考えろと強く怒られた。結局その一件が原因で、俺は弓道部を辞め、今では帰宅部になっている。

実は今、うちに桜が来てくれているのはそれが原因だったりするのだが、なんにせよ弓道部のことを俺が口にして慎二の気分がよくなるはずもなかった。

「まあ、それもそうだな。悪い」

「……ああ、そうそう。一つ頼まれてくれないかな、衛宮」

謝ると、慎二はなんとも言い難い顔になったが、ふと何かを思い出したようにそんなことを口にしてきた。

なんだかんだでこいつとは長い付き合いだし、部活のことや桜に世話になっているこ

ともある。いいけどなんだ、と内容を訊ねてみると。

「くだらない弓道部の、くだらない後片付けさ。あいにく僕は忙しくてね——助けてくれよ、衛宮」

「……わかった、引き受けるよ」

特段の用事もないし、少し考えて引き受けると。なぜか慎二が、一瞬不快げな表情を見せた気がした。

俺の見間違いだったのか、次の瞬間には笑顔に戻った慎二は、こちらの肩を叩くそのまま去っていく。あいつ、確かにそういう仕事嫌がるからな……。

まあ俺も弓道部を辞めて以来、弓道場にはあまり顔を出していなかった。弓を引くわけでもないし、久々に足を運ぶにはいい機会かもしれない。

\*\*\*

「……つと。もうこんな時間か」

真つ暗になってしまった空を見上げ、まずいな、と顎に手を当てる。

見上げた空は白い雲に覆われ、月明かりを完全に遮ってしまった。おかげで、今が何時ぐらいなのか判らない。

軽い片付けだけで済ませるはずだったのだが、久しぶりに弓道場に来たということもあり、ついつい気合を入れて掃除に励んでしまった。

その甲斐あつてか、床には埃一つない。次に誰かがここに来て、気持ちよく過ごすことができるだろう。

自分の努力で、他人が報われるならそれでいい。滅私奉公、といえば聞こえはいいが、単に俺が好きないようにやっているだけだ。

「早めに帰らないとまずいな。最近、なんか物騒だし」

頭に浮かぶのは、今朝のニュースで特集していたガス漏れ事件。ただでさえ、最近は物騒な事件が多いのだ。早いところ帰るに越したことはないが……。

『……先輩。今日は、早めに帰ってきていただけませんか？』

そういえば。掃除に夢中になって、桜にそう言われていたことをすっかり忘れていた。

俺の怪我を見た後から様子がおかしかったから、心配して言ってくれていたのだと思うが……せつかくの心遣いを、完全に無下にしてしまった。

しまったなあ、と思いつながら弓道場に鍵をかける。みんな早々と帰宅してしまつたのか、周囲を見渡してみても、猫の子一匹見当たらない。奇妙な静けさに、なんとなく不気味な気分になりながら踵を返すと、冷たい風が肌に突き刺さつた。

夜になって、ますます冷え込んできたようだ。体はそれなりに鍛えているつもりだが、昨日は土蔵で寝てしまったことだし、風邪を引かないとも限らない。早く帰って温まろう、と、歩いていくと――

——キーン、と。甲高い音が聞こえた。

最初は、何か風でぶつかったのだろう、と気にも留めなかった。

だが、音は一度や二度では収まらない。空気を冷たく震わせるこの音は、何かの金属音だろうか。

首を傾げて、音の聞こえてくる方向に向き直る。どうやら、この音は校庭から響いているらしいが……なんだか、時代劇でよく聞くアレに似ている。侍が刀を打ち合わせている時の、あの音だ。

しかし、それはテレビの中だからこそ響く音であって、現実で聞いたことは一度もない。この現代に、刀でチャンバラをやるなんて荒唐無稽な事が――

「――あ」

——空気が、凍った。

校庭の中心。つい数時間前まで、体育の授業が行われていたその場所が、異次元と化している。

爆音を轟かせ、激しく交わり合う二人のヒトガタ。青と金。二つの影が、目にも留ま

らぬ速度で激突していた。

アレは——殺し合いだ。

いくら目が良いとはいえ、離れた場所から見ている俺にすら、その異常さは理解できなかった。

俺は、ただの高校生に過ぎない。何か武術を極めている訳ではないし、これといつて博識でもない。しかし、そんな俺でも、目の前で戦っているアレらが、人間ではないと一目で判った。

アレは人間じゃない。あんなモノが、人間である道理がない。

人間には、秒間に数十発も突きを放つなど不可能だ。人間には、剣の一振りで衝撃波を放つことなどできない。

だとすれば——アレは一体何なのか。

青い奇妙な鎧に身を包んだ男。

粗野とも取れる風貌は喜びに歪み、筋肉に覆われた体躯は一瞬ごとに激しく躍動している。

その手から繰り出されるのは、朱い軌跡。

あれは、槍か。十や二十ではきかない数の刺突を、瞬きの間に放つその力量。槍に触れたことすらない俺にも、それは人間を超越したものだと解る。

あんな槍撃。例え武道の達人であっても、あれを見切ることなどできまい。人間の域を遙かに逸脱した速度の槍は、秒間の内にヒトを細切れにするだろう。

ならば——それと打ち合っているモノも、また人間では有り得まい。

流れるような、金砂の髪。

強い意志の光を秘めた翠緑の瞳は、彫刻のように整った容貌と相まって、絶世の美貌を醸し出している。

超一流の陶芸師が手掛けた、完璧な人形とも言える美少女。ドレスに身を包めばさぞや輝くだろうという少女はしかし、白銀の鎧を纏っていた。

その手に握るのは……透明な、何か。

あれは、剣なのだろうか。よく見えないが、手に持つ何かで、少女は戦っていた。槍の瀑布を悉く打ち落とし、跳ね返し、槍ごと切り刻まんというその気迫。振るう一撃ごとに空気を軋ませるその少女は、男の連撃に全く圧されていない。

どちらも、凄過ぎる。あんなもの、人間にできる技ではない。

そこで、はたと気づいてしまった。……あんな連中に気付かれたが最後。もしあいつらが自分を殺す気ならば、抵抗すらできず、自分は死んでいるだろう。

逃げなければ。

逃げなければ。

逃げなければ――。

焦燥で、心臓が早鐘のように鳴る。しかし強迫感とは裏腹に、足は動いてくれない。腰から先が別の生き物になってしまったかのように、自分の意思では動かせない。

だが、底知れぬ恐怖に囚われながら……俺は何故か、その戦いから目が逸らせなかつた。

青い方の男の槍術は、凄まじいの一言に尽きた。

突く。払う。槍だけではなく、時には蹴り、殴打すらない交ぜ、獰猛な獣の如く攻め立てる。

身体能力もそうだが、その技量は最早人間の域ではない。視認すらできぬその速さ、達人と呼ぶことさえ憚られる。

金の少女の剣術も、男に劣るものではない。

重みなど感じぬかのように、縦横無尽に振るわれる無色の剣。男の槍撃の全てを薙ぎ払い、返す刀でその身を刻まんと唸りを上げる。

それは、さながら重戦車の如く。あらゆる攻撃を弾き返し、力強い剣撃で攻め返す。その怒涛の斬撃に、リーチで勝る男の方が押されていた。

気が付けば――俺はいつの間にか、その少女をじつと見つめていた。

美しい少女だ。けれど、俺が見ていたのは外見ではなかった。何故だろうか……その

少女の戦い振りを見てみると、心がざわめく。そう、これはまるで――。

大切な何かが、心に浮かんだ瞬間。永遠に続くかと思われた刃の応酬は、唐突に終わっていた。大振りな一撃を振った後、男が距離を取る。

それまで、時には片手で、或いは両手で振るわれていた真紅の槍。それを静かに構えて――男は、槍を傾けた。

瞬間、空気が変わる。

鳴動する紅い槍。轟、と唸りを上げて、ソレは周囲の魔力を吸い上げていく。

空気から、大地から、供物のように捧げられていく魔力。その収束地である槍がどれ程の神秘を宿しているのかは、想像するに余りある。

限界を通り越して、全てから魔力が搾取されていく。一種の神々しさすら感じさせる光景を目にして、俺は理解してしまった。

――アレが振るわれれば、終わる。

奇妙な夢に登場した、真紅の槍。若干形状は異なるが、アレは同じ類のものだ。あの槍が迸ったが最後、獲物の心臓は食い破られているだろう。

あの少女騎士は、或いは全力を出していないのかもしれない。今以上の臂力を、速力を、或いは心眼を有しているのかもしれない。だが、そんなものは関係ない。あの一撃は躲せない。男が次の一撃を振るえば、少女は確実に死に至る。



極限まで張りつめた緊張感。戦場の空気の中てられたのか、足がゆらりと震える。その先には、一枚の枯れ葉が落ちており――

「誰だ……………!!!」

――俺の所在を示すかのように、カサリ、と音を立てていた。

「まず――つ!!!」

恐怖を超えた絶望で、硬直していた体が動くようになった。

青い男の目が、こちらを見る。その真紅の瞳を見た途端、ひつ、と情けない声が漏れた。

わかってしまった。

あの男の標的は、俺だ。一瞬後には、あの金髪の少女ではなく――俺が、殺されている。

「つ……………!!!」

足が勝手に走り出す。

一度動いてしまえば、後は簡単だった。ギアを上げていく時間すら惜しく、エンジンは最初から全力全開。自分の全てを、逃げるという行為に注ぎ込む。

走る。

走る走る走る。

走る走る走る走る走る。

どこをどう走ったのかも解らない。恐怖に震える体を突き動かすのは、原初の本能。死にたくないというその一念で、ひたすらに走り続けた。

「は——あ、はっ、はあ、はあ、く………っ」

ふと気が付くと、見慣れた校舎の中にいた。

馬鹿か、と後悔の念が浮かぶ。わざわざ袋小路に飛び込んでしまった。校外に出れば、助けを求めることもできたかもしれないというのに。

身体はもう動かない。限界を超えて走っていたせいで、肺が悲鳴を上げていた。

だが、その甲斐あつてか、俺を追ってくる足音はもう聞こえない。はは、どうやら逃げ切れたらし——

「——よう。わりと遠くまで走ったな、お前」

絶望が、声となって耳朵を震わせた。

声の主は、男。

青い鎧に、紅い槍。その特徴は紛れもなく、人外の死闘を繰り広げていたバケモノのものだった。

息ができない。

思考が止まる。

氷結した時間の中で、俺は——これで死ぬのだな、と実感した。

「何やってたのか知らねえが、運のねえ小僧だ。悪いんだが——見られたからには、死んでくれや」

ワカラナイ。

男が何を言っているのか、ワカリタクナイ。

死ぬ？ 俺が？ なんで？

パニックに陥った思考は、口を開かせない。凝固した俺を見下ろし、男が無造作に腕を振るった刹那——

ずぶり。

冷たい感触を、胸に感じた。

「か——は、っ」

動く事さえできなかつた。一度だけ、口から血を吐き出す。

力が抜ける。

目が見えない。

耳も聞こえない。

世界の全てが、壊れていく。

ああ、なるほど——これが、『死』か。

不思議と、痛みは感じない。薄れていく思考の中、心臓を貫かれたことだけを理解した。

知っている。

この、世界が失われていく感覚。炎の中で、俺は一度これを味わっている。

男が何か言っている。だが、もう何も聞こえない。音を聞く機能は、もう壊れてしまっていた。

冷たい床の感触を最後に……俺の意識は、そこで途切れた。

\*\*\*

黄金の、夢を見る。

剣だ。

荒野の中心。遮る物などない世界に、一振りの剣が突き刺さっている。

複雑な装飾で彩られたそれは、儀礼用としては申し分ない。どこかの王様が持っている剣だと言っても、疑う者は居ないだろう。

どこか優美ささえ感じさせるその剣は、実用にも十分耐えうる代物だろう。

芸術的にも、実用的にも一流の剣。だが、何より俺の目を惹きつけたのは、その在り

方だった。

とても素直で、美しいとすら感じられる在り方の黄金の剣。

こんな剣を使っていた持ち主は、さぞかし良い人物だったのだろう、と。そう思わせ  
てしまう、綺麗な剣。

——しかし、その情景は切り替わる。

灼熱の、夢を見る。

剣だ。

地獄の中心。生命など何一つない世界で、一振りの剣が輝いている。

およそ剣とは感じられない、ドリルと呼んだ方がまだしっくりくるであろう一振り。  
こんなモノ、何に使うのかすら判らない。

しかしそれでも、それは剣だった。

轟々と唸りを上げ、灼熱の溶岩が流れていく。それに呼応するかのように、極寒の冷  
気が吹き荒ぶ。

まさにそれは、原初の地獄。生命活動、いや、存在事項すら許されない絶対の世界。そ  
の中心に在り、地獄を作り上げているのがこの真紅の剣だった。

やがて、元素は混じり、固まり、万象織りなす星を生む。天地が分けられ、海が創られ、世界そのものができ上がっていく。

何もかもが生まれ変わった、新世界。その剣だけが、変わらず煌々と輝いていた。

\*\*\*

「……………」

ぼちり、と目を覚ます。

ぼうつとする目を凝らすと、冷たい床が飛び込んできた。俺、なんでこんなとこに倒れて——

——途端。死ぬほどの激痛と吐き気が、俺を襲った。

「が——はっ、げほ、げ、げ、ぎいっ……………」

虫のような、唸り声。

それが自分の口から出たものだど気付く前に、俺は床を転がっていた。

「うえっ、うげええっ、がは、が、は、ひ……」

苦しい。なんだ、これは。

「がはっ、(い)ぼ……………(い)ぼっ、(い)ぼっ、(い)ぼっー！」

吐き気がする。何を吐き出したいのかもわからないのに、吐き気がする。

「ぜ……はあ、ぜつ……ひゅううつ、が……」

深呼吸。呼吸だ、呼吸をしよう。

のたうち回りながら、必死に口を開く。脳が、肺が、体中が酸素を求めていた。

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ……」

喘ぐような呼吸が、なんとか収まってきた。落ち着きを取り戻すと同時に、身体の痛みも治まってくる。

ごろり、と寝返りを打つ。

白い天井。ひんやりとした空気。胸と背中には、冷たい感触。そして、鼻をつんとつくこの臭いは……

思考回路が回復していくにつれて、記憶も蘇ってきた。

青い男。金の少女。紅い槍。透明な剣。恐怖。絶望。冷たい感触。失われていく、世界。

——なるほど。衛宮士郎は、「また」死んだのか。ならばここは、死後の世界なのだろうか？

「……違う。俺は、生きてる……!」

現実感のない、走馬灯のような光景の数々。あんな馬鹿げた話が、現実であつてたま

るものか。

よっ、と体を起こして立ち上がる。悪い夢を見たのだろう。さっさと家に帰らないとぬるり。

床についた右手が、何か冷たいものに触れた。

視線を下ろす。タイミングよく差し込んできた月明かりは――

――血に染まった、見慣れた廊下を映し出した。

「嘘、だろ――っ」

恐る恐る、視線を下に移す。信じたくないことに――俺の制服は、鮮血で真っ赤に濡れていた。

ふらり、とそれだけで倒れそうになるが……違和感に気づく。確かに血まみれではあるが、どうしてか、刺されたはずの傷が見つからない。

「なんで生きてるんだ、俺……？」

ほう、と安堵感のため息をつく。実感が全く湧かないが、嘘のような出来事は本当で……でも何故か、俺は生きていた。あんな傷、生きていられるはずがないのに。

頭がぐるぐると回る。

脳みそは動いてくれないくせに、手だけは勝手に動いていた。ロッカーを開き、雑巾



を手に取り、床を擦り始める。

はは、何やってるんだ、俺。

掃除をしなきゃ、なんてわけの分からない思考が湧いてくる。それ程までに、俺は混乱していた。

冷静な部分は状況を整理しようと訴えるが、そんな余裕は何処にもない。

ぐるぐる、ぐるぐると、全く落ち着いてくれない脳みそが導き出した結論は――

「……とりあえず、家に帰ろう」

\*\*\*

まだ頭は浮ついているが、身体の方は動いてくれた。どこをどう通ったのかも覚えていないが、数年間で体に叩き込んだ動きは、こんな状況でも正確な道筋を辿ってくれたらしい。

街路灯と月明かりだけが照らす道を、急ぎ足で歩いていく。

こんな日に限って、人どころか野良犬すら見かけない。本当に死後の世界に迷い込んでしまったような、そんな違和感。

考えてみれば、それも当然だ。月の高さから見て、もう今は真夜中に近い。

こんな時間帯に出歩いている高校生は、見つかったら補導されてしまうだろう。それは困るな、と漠然とした思考が浮かぶ。

流星に、我が家にはもう誰も残っていないだろう。桜も藤ねえも、俺の家に宿泊しているわけではない。それぞれに帰る家があるのだから、こんな時間まで残っていたら逆に驚く。

「ただいまー」

予想通り、と言うべきか。

我が家まで辿り着いても、電気之光は見当たらない。変わり映えのない門を潜り、鍵を開け、慣れた道を進んでいく。

居間に到着し、電気をつけたところで、ようやく安心して力が抜けた。

「ふう……」

いつもの部屋。

何年も見慣れているはずの居間が、得難いものに見えるなんて。でもそれほどまでに、今日という日はイカれていた。

一体、俺は何と遭遇したのか。

俺は、何故殺されかけたのか。

そして——何故、今こうして生きているのか。

「……………わからん」

むう、と小さく唸る。俺はそんなに頭が回る方でもないし、今はまだ混乱している。こういう時は、まず落ち着かなくてはいけない。

「——よう」

ぱちん、と頬を叩いて、立ち上がる。

俺の帰りが遅い時は、大抵桜が夕食を作ってくれている。それでも食べながら、落ち着いて考えよう。

「……………桜の言う通り、早く帰ってくるんだったな」

まだどこか浮ついた脳みそのまま、桜が用意してくれたであろう夕食を並べる。ぐだぐだと遅くまで残っていないければ、こんなわけのわからない事態にもならず済んだだろうし、桜や藤ねえと温かい食卓を囲めただろう。

一人寂しく夕食を食べ、片付けを終え、洗い物まできちんと終えて。疲れた体を休めるために、居間に戻ってごろりと横になる。

——脳裏に蘇るのは、数時間前のあの光景。

「あいつら、一体何なんだよ……」

分かっていること。あいつらは、人間ではない。

見た目は紛れもなく人間だったが、中身が違い過ぎる。あんなモノは表の世界ではな

く、魔術の理に属するものだ。

切嗣おやしが時々言っていた死徒……いわゆる、吸血鬼というヤツだろうか。でも、それにしては違和感を覚える。吸血鬼同士が、あんな得物を振り回して戦うだろうか。

そもそも、ここは極東の島国である。世界有数の経済大国である日本だが、魔術の中枢は西洋。神道系の組織もあるらしいが、そんなに魔術に関わりが深いとは思えない。

それに、そんな奴らが何故殺し合いをしていたのか。殺し合いをするからには、当然原因があるのだろうか……奴らが何者であるかも判然としない現状では、考えようもない。

……何から何まで理解不能だが、一つだけ確信したことがある。

最近多発している、ガス漏れ事件。

平和な冬木市には似つかわしくない、強盗事件。

全国規模でも早々聞かない、集団昏睡事件。

そして、不審な外国人。

これらは全て、あの連中に関係している。それだけは、直感的に理解できた。

だけど、魔術師としては半人前。財力があるわけでも、頭がいいわけも、何よりこの事件に巻き込まれた学生に過ぎない俺には、それ以上は理解できない。

「……………寝よう」

うん、困ったときはそうするに限る。一晚寝れば、頭もすつきりするに違いない。でもその前に、風呂呂に入らなければと身体を起こした刹那――

――からん、と。鳴子のような音が響き渡った。

ぞつ、と背筋を冷たいもので撫でられたような感触。

魔術師としてはへつぽこで、工房なんてものも作れない俺だが、この家には一つだけ魔術的な備えがある。

それが、この結界。悪意を持つて家の敷地内に現れた者が現れば警告する、という、それだけの結界だ。

だが、今このタイミングでそれが動いたということ。偶然と考えるにはあまりにでき過ぎて……十中八九、あの人外のどちらかだろう。

まずい。わざわざ家まで追いかけてきた理由――どう考えても、口封じとしか考えられない。

何故かは知らないが、こうして生きていく俺を見つけたのだ。次は入念に殺しにかかるに違いない。そうなっても生きていられると思うのは、余程の馬鹿者だけだろう。

「くそつ。まずは、武器をどうにかしないと……」

なんとかして戦うしかない。

縮み上がる心臓を宥めながら、きよろきよろと周囲を見回す。包丁？ 駄目だ。台所

まで取りに行く時間はない。もっとこう、手近に何か——

「あった」

見つけた。藤ねえが置いていったポスター。

藤ねえのいつもの気まぐれに違いないが、今この時ばかりは幸運に感謝した。

ポスターを両手で握り、目を瞑る。集中しろ。今の俺にできる事は、ただ一つだけなのだから……！

「同調、開始——」

集中する。

やるべきことは単純。このポスター武器に魔力を流すだけ。

俺にはこれだけしかできない。故に、俺がやるべきこともただ一つ。衛宮士郎が唯一使うことのできる魔術——物体の強化だ。

「構成材質、解明」

構造を把握する。ポスターの造形を読み込み、空いている隙間に魔力を流し、一時的にその強度を上げる。

こんな簡単なことですら、今の俺には難しい。

けれど、それすら満足にできないのなら、今まで俺は何をやつて来たというのだ——

！

「構成材質、補強」

……手応えを感じる。

ポスターの隅々まで魔力が行き渡る。奇妙な確信と共に、俺は工程を終える——  
トレス・オフ  
 「全工程、完了——！」

できた。ポスターに完璧に魔力が通つたのを感じる。これで、少しはマシになった。滅多に成功しない強化魔術。強度を上げるというただそれだけの魔術だが、成功したのは何年振りだろう。

良かった。紙を丸めたポスターだが、鉄パイプくらいの威力にはなっているだろう。だが、その心強さは——

「よっ、と」

——青色の絶望に塗り潰された。

窓からでも玄関でもなく、天井裏を突き破つて現れたその男。

青い鎧を纏い、真紅の槍を捧げ持つその姿は、間違いなく俺を襲つたやつだった。肩をこきこき鳴らしているその姿からは、緊張感というものは感じられない。

それもそうだろう。狩る者と狩られる者、強者と弱者。その立場は、何一つ変わることはないのだから。

「……まったく、一体全体どういうカラクリだ？ 確かに殺したと思つたんだが——坊

主、お前なんで生きてやがる？」

紅い槍を弄びながら、瞳を細めて俺に問う男。

その問いに、俺は答えられない。否、そもそも口を開くような余裕など存在しない。

そんな俺を半眼で見下ろし、まあどうでもいいか、と呟くと。男は、退屈そうに腕を上げ――

「じゃあな。今度こそ迷うなよ、坊主」

無造作に突き出された槍。しかし――過たず心臓を穿つはずの一撃は、予期していた俺によつて弾かれた。

来ることが見え見えだったから、辛うじて凌げただけの一撃。男にとっては軽く突き出しただけなのだろうが、防いだ俺にとっては既に限界だった。

遊びの一撃で、腕が痺れている。これ程までの膂力を、まともに受けたらどうなるのか。

「――ほう。変わった芸風だな、おい」

す、と男の目が細まる。その体軀から立ち上るのは、紛れもない殺気。

……殺される。

自分は、この男に殺される。

心臓が貫かれている幻影が、まざまざと脳裏に浮かび上がる。それほどまでに、この



男の殺気は恐ろしかった。

間違いない。今の一撃で……この男は、本気になった。

「やるじゃねえか、坊主。少しは楽しませてくれよう?」

獯猛な笑みを浮かべて、じりじりと近寄る男。

——まずい。

こいつは、正真正銘の怪物だ。次の一撃は本気で来る。そんなもの、俺に防げるわけがない。

しくじった。最初から逃げておくべきだった。こんな相手にポスターで立ち向かうとしたなんて、度し難いにも程がある……! !

恐怖で震える足に喝を入れる。こんなの、戦いにもならない。なら——

「チイツ——!」

——逃げるしかない!

真横に身を投げ出し、窓を突き破って転げ落ちる。

落ちていく途中に、闇雲にポスターを振るう。会心の手応えと共に、何か細長いものにぶち当たった。

運がいいことに、辛うじて男の追撃を凌げたらしい——貴重な一瞬を無駄にせず、受け身を取って地面に転がる。

「ぐうっ……………」

無様に転げ落ちた衝撃は、想像以上に痛かった。だがこの程度、あの槍に貫かれるのに比べれば余程マシだ。

考えるより先に、立ち上がる。あの怪物から、逃げなければ。

まず、障害物。あの槍を遮るものが欲しい。

そして、武器。槍を弾いた拍子に、ポスターはどこかに飛んで行ってしまった。

ああ、くそっ、くそっ、くそっ！ なんだってこんなことに……………！

「ちくしょう、なんなんだよ……………」

悪態をつきながら、走る。額によぎったのは、土蔵。

あそこなら、何かしら武器はあるだろう。強化もできれば、槍の一撃にも耐えられるはずだ——

ぞくり。

死神もかくやという殺気が、背中を貫いた。

恐怖に負けて振り返ってしまった俺を、真紅の瞳が射抜く。

嘘だろ、なんでもう後ろにいやがるんだよオマエ……………！

「——飛べ」

ごき、と音が鳴った。

「…………え？」

激痛。痛みなんて生易しいものじゃない。腹が消し飛んだかのような痛みで、思考が真つ白になった。

背中が、何か堅いものに激突する。そこでようやく、自分が蹴り飛ばされたのだと気が付いた。

くそつ、あのヤロウ、人をサッカーボールみたいに……！

恐怖。怒り。苦痛。ぐつぐつと煮えたぎる頭。もう何を考えるかもぐしやぐしやで、冷静さなんて欠片も残ってない。

けれど……………なんて、悪運。俺が激突したのは、土蔵の入口だった。なら、中に入りさえしてしまえば、何か武器はある……！

「チ、男ならしゃんと立ってる……！」

男の悪態を後ろに、最後の力を振り絞って、転がるように土蔵に入る。朝方扉を開けっ放しにしていた自分を、褒めてやりたい気分だ。

武器。

武器、武器、武器、武器、何か身を守れるような何かを探せ……………！

「あつた！」

手に丁度収まる太さの、鉄パイプ。なんでこんなものがあつたのかは知らないが、こ

れなら何とかなるだろう。

もう時間はない。無理やりにも、こいつを武器にする。一手間違えば、自分が殺される。後のことなど考えるな。

今日二回目の、生命の危機。

考えろ。自分は今まで何をやってきた。何年もの間、毎日何を積み重ねてきた。こんな時に役に立たないなら、一体何の為に鍛錬をしていた。

構造材質を解明。強化。細かい過程なんか吹っ飛ばせ。魔力だ、魔力を流せ、隙間すら見せずに俺の魔力を叩きこめ……！

「同調、開始——！」  
トレスオン

できた……！

会心の手応えと共に、武器を手にして向き直る。

これで何とかなる。強化された鉄パイプは、単なる鉄以上の硬度を持つ。これなら、あの槍とだつて打ち合え——

「わりと頑張ったな、坊主」

べきり。

そんな軽薄な音を立てて。俺の唯一の武器は、あつけなく折れてしまっていた。

「あ——」

「だが、所詮はこの程度か。もう少し楽しませてくれると思っただが、もうネタもねえようだしな——おとなしく死んでおけ、小僧」

その、ゴミを見るような目を向けられて。絶望に、身体が凍った。

俺が強化した鉄パイプは、決して生温い堅さじゃなかった。それをこの男は、槍の穂先を振るっただけで何の抵抗もないかの如く破碎した。

——だめだ。

こんなバケモノ、俺なんかにどうこうできるわけがない。

震える足で、一步後ろに下がる。

背中に触れた冷たい感触。それが壁なのだ、現実を受け入れられない自分がいた。

絶望を取り越して、頭が真っ白になる。からっぽになった心に残ったのは……理不尽を受け入れられない、猛るような怒りだった。

ふざけるな。

何故俺がこんな目に遭わなきゃならない。

俺が命を狙われる理由はない。

だというのに——何故俺は、二度も同じ男に殺されようとしているのか。

おかしい。間違っている。こんな結末は、間違っている。

青い悪鬼が、槍を構える。推し量るまでもなく、その狙いは俺の心臓だ。だが、そんなものはどうでもいい。

この胸にあるのは、怒り。理不尽な現実に対する、激しい憎しみだけ。かつて、死んでいった人たちがいた。

俺なんかよりもずっと立派で、胸を張って生きていたであろう、大勢の人たち。でも、彼らは死んだ。死んでしまった。

なら——助けられたこの命には、きっと意味がある。かつて、助けてくれた人がいた。

生きていてくれてありがとう、と言ってくれた人がいた。

正義の味方になりたかった、と笑っていた人がいた。

あの人は、最期まで笑っていた。俺の約束を聞いて、安心した、と。そう言って、あの人は去っていった。

——爺さんの夢は、俺が——。

ああ、そうだ。

まだ俺は、何一つ果たしちやいない。

助けられたなら、助けなくちやいけない。そんなことすら、今の俺にはできていない。

なら、今はまだ、死ねない。

あの約束を果たすために。

この理想を貫くために。

今ここで、殺されてやるわけにはいかない――

!!!!!!

その、瞬間。

「――酷い顔だ。冥界の悪鬼にでも出くわしたか、はたまた裁定を待つ罪人か。悪趣味な夢に浸っていた結果か。どうだ？ その萎えた魂に、我の命を聞く気骨は残っているか？」

それは、英雄ヒーローのように現れた。

「なに……………?!？」

驚愕し、後退する男。その驚きは、眩い光に対してか、現れた人影に対してか。

「――本気か、七人目のサーヴァントだと……………?!？」

思考が止まる。

突如として現れたソレは、紛れもなくヒトの形をしていた。

だが、同時に——それは、ヒトでは有り得なかった。

一目で分かる。コレは、人間と呼ばれるモノではない。この覇気、この光輝、この圧力は、人のものでは有り得ない。

突然の怪異に、男が距離を取る。

その刹那、現れた人影が動いた。

一瞬だけ見えた、黄金の波紋。次の瞬間、そいつの手には金色の『何か』が握られていた。

躊躇うことなく踏み込む黄金の影。それと連動し、男に向かって振りぬかれる『何か』。

「チィ——!!」

男の舌打ち。

目にも留まらぬ速度で、今にも突き出されんとしていた男の槍を、『何か』が薙ぎ払った。

二度、三度、と剣戟の音が響き渡る。後退する男を逃がさず、黄金の人影は距離を詰める。その攻防に見惚れながらも、俺は人影の持つソレに目を奪われていた。

黄金の剣。



いや——劍というより、あれは刀に近いだろう。日本刀より幅は広いが、あの形状は斬ることを重視している。

夢見た黄金の劍とは違う。アレは多分、崇高な目的の為に作られた、誇り高い劍。それに対してこの劍は、実用性に特化している。柄の部分こそ普通の劍とは異なるが、これは敵を倒すため、目的を果たすために創られた劍。

構造理念が、決定的に違っている——。

そんなおかしなことを思っているうちに、現れた何かは男を追い詰めていく。

予想外の戦闘に、男は明らかに困惑していた。

見たところ、現れた人影が振るっているのは劍だ。だが、力強さこそあっても、そこには高い技量を感じられない。

勿論、俺なんかとは比べ物にならない腕前だ。しかし、校庭で透明な劍を振るっていた少女と比べると、脅威の度合いが何段も違う。

それでも——そいつは、青い男を押ししていた。

「くそっ——！」

己の不利を悟ったのか、大きく槍を一閃すると、男は土蔵の外に跳躍していった。

これは——助かった、のか……？

へなへな、と力が抜ける。壁によりかかって、情けなく座り込んでしまった。

——それはまるで、骨の軋むように幽しずかな夜。

いつの間にか、月が出ていた。雲の間から差し込む銀光が、その男の姿を照らし出す。月光を背にした姿は、黄金。

太陽さえ恥じ入るような輝きを放つ、黄金色の髪。

どこまでも深い真紅の瞳は、何もかもを見透かすかのよう。

金色の甲冑で武装した男は、酷薄な笑みを浮かべて俺を見下ろしていた。

「——問おう。不遜にも、貴様が我オレの光輝オレに縋オレらんとする魔術師マスタか」

黄金の英雄は、そう、嘲るように口にした。

## 2. 廻り始めた歯車

「——問おう。不遜にも、貴様が我の光輝に縋らんとする魔術師か」

冷酷な声。およそ情というものを感じさせないその声で、傲然と男は口にした。

「は……マス、ター……？」

冷たい瞳に射竦められ、呆然とそう口を開く。

頭の中はもうパンク寸前で、何が起こっているのかなんて判らない。

ただ、一つだけ判っているのは——この黄金の男は、青い鎧の男と同じモノだということ。

いや——本当に、同じモノなのか？

ただ見下ろされているだけだというのに、震えが止まらない。

恐ろしい。

コイツの目は、悪鬼のそれだ。ルビーのような双眸には、何の感情も浮かんでいない。解ってしまった。一つ答えを間違えれば、一片の躊躇もなく、コイツは俺を殺すだろう。

これなら、槍男の殺気の方が余程マシだ。この男はただ立っているだけで、この上な

い恐怖を感じさせる。

——格が違う。

そう本能的に感じ取れるほどに、その男の威圧感は強大だった。

「……………」

言葉が出ない。カラカラに渴いている喉からは、何も声が出ない。

男も俺を観察するように見下ろすばかりで、何も口にしない。

数瞬の静寂の後、男は微かに肩を竦めた。

「——フン。まだ己の立場に理解が追いつかんのか。呆れた愚鈍さよな……我を呼び出した無礼者が、どんな猛者かと思ってみれば。ただの雑種に過ぎんとは、度し難いにも程がある」

「な——」

絶句する。

男の言い回しは、古風で難解だ。それでも今、この上なく見下された事は解った。

だが、未だに混乱している俺は動けない。それを嘲笑うかのように鼻を鳴らすと、男は俺から視線を逸らす。

——それだけで、どこか安心してしまった自分がいた。

目を合わせているだけで、死の恐怖を感じさせる。そんなモノと相対しているだけ

で、俺はもう限界だった。

「——っ」

気が抜けた瞬間、左手に鋭い痛みが走った。

思わず、左手の甲を押さえつける。焼きごてを突き付けられているかのような痛みで、額から脂汗が滲む。

激痛の発生源に視線を向けると……今朝の蚯蚓腫れが、煌々と紅く輝いていた。その異常さに、痛みを忘れて見入ってしまう。

悠然と立つ黄金の騎士は、そんな俺を一顧だにせず、視線を別のものに向けていた。

——視線の先には、槍を構えた男。

土蔵の外。紅い槍を構えた男が、警戒心も露わに黄金の男を睨んでいる。その殺気は、俺に向けられていたものの比ではない。

先程俺を追い詰めていた時も、あの男は恐ろしかった。しかし、あんなものは遊びに過ぎなかったのだと——そう言われても納得してしまうほど、今のアイツは本気だった。

倒す。

斃す。

殺す。

そう全身から溢れる意思是、絶対零度の冷氣となって黄金の男を刺し貫く。心臓の弱い者なら、それだけで心臓が止まってしまふような、規格外の殺意の波動。

そして、その敵意を向けられている黄金の男は――

「……………」

微動だにせず、堂々とそこに立っていた。

柳が風を受け流すように、その威圧感も微塵も揺らがない。いや……この男はあれほどの敵意を向けられているというのに、何の脅威も感じていない。

紅い瞳には、値踏みするかのような色。手に持つ剣は構えられもせず、自然体でぶらりと下がっている。

――次の瞬間。目にも留まらぬ速さで、男は外へと飛び出した。

\*\*\*

「  
」  
空白の思考。

状況が理解出来ず、俺は呆然としていた。

気が付いた時には、黄金の男の姿はなく……月明かりだけが、誰も居ない空間を寂し

く照らしていた。

「くそっ」

悪態をついて、立ち上がる。

蹴られた脇腹に、ぶつけた背中。痛まない部分なんてないほどボロボロだけど、そんなのはどうでもいい。

あの金ぴか男が何者かなんて知らない。途轍もなく恐ろしい男だったし、あの冷たい瞳には、俺のことなんて何とも映ってはいないだろう。

それでも——あいつは、俺を助けてくれたのだ。

あと一瞬。あいつの剣が遅ければ、俺は今頃槍で串刺しにされていただろう。そんな意図などなかったにしても、結果的に俺の命が救われたことに変わりはない。なら……助けられたまま、黙っていることなんてできない。

立ち上がった勢いのまま、土蔵の出口へ走り出す。何を言いたいのかも分からないまま、声を出そうとした口は——

「な……………っ!?!」

意味を為さず、そのままの状態で固まっていた。

「なんだ、あいつ——?」

それは、神話の再現だった。

響き渡る金属音。

飛び散る火花。

月光は雲の合間に隠れ、世界は再び闇に染まる。

影に覆われた庭が、伝説の戦場へと変貌していた。

土蔵から飛び出した黄金の男。対する青い男は、極限の敵意を叩きつけ、瞬時にそれに飛びかかったのだ。

その一撃を、黄金は苦も無く弾き返す。手にした剣を横薙ぎに払い、男の槍を跳ね除けると、距離を詰めて刺突を放つ。

しかし、男もさるもの。弾かれた勢いをそのままに、右足を支点に回転。黄金の剣に貫かれる刹那、神速の薙ぎ払いが剣を地に叩きつけた。

「  
」  
なんだ、これは。

力量の差などないかのように、黄金の男は青い男と打ち合っている。

見惚れるような槍術を振るう男には、一種の優美さすら感じられる。その動きは、校庭で見たものと遜色ない。

目にも留まらぬ、とは正にこのこと。紅い軌跡が迸った後に、一瞬遅れて風を斬る音が響く。音すら置き去りにする速度は、到底視認することなどできない。



その圧倒的なまでの技量。あれは天賦の才だけでも、極限の努力だけでも辿り着けない。その双方で頂点に立たねば、あの域には至れぬだろう。

槍に縁などないが、見ただけで断言出来る。これ程の槍術は、神話の中でしか見られない。

突き、突き、突き、突き、突き。

愚直なまでに繰り返される、紅の前後運動。その常軌を逸した速度の前に、小手先の戦術など必要ない。点の一撃である筈の刺突は面となつて、雨霰と降り注ぐ。

ならば——それを防ぎきる黄金の騎士もまた、尋常な腕ではなかつた。

素人目にすら判る。黄金の男は、青い方の男に遠く及ばない。

剣術と槍術、という違いはある。リーチの差、という相性もある。しかしそれを差し引いたとしても、黄金の騎士の力量は遥かに劣っている。

無論、その腕は常人を遥かに上回る。力強さ、スピード、精確さ。どれを取っても、間違いなく一流だろう。

だが、単なる一流は超一流の前に後れを取る。神域にまで至っている男の槍に、ただ優れているだけの男の剣では到底及ぶ道理がない。

にも関わらず——刺突は防がれ、打突は払われ、薙ぎ払いが打ち返される。二人の戦いは、全くの互角だった。

その理由の一つは、武器の特性。

青い男が手にする得物は、二メートルを超す長槍。

そのリーチは確かに脅威だ。射程距離が長いということは、それだけで大きなアドバンテージに成り得る。

しかし逆に言えば、それは戦い方を予め知らせているのと同義。槍の基本戦術は、刺突・打突・薙ぎ払い。幅と長さ、穂先の鋭さが判っていれば、対策を講じることも可能だろう。

一方、黄金の男が手に執る武器は、鎧と同じ黄金の剣。

しかしその剣は、通常のそれでは有り得ない。刀身のみならず、柄の部分より生える鋭利な棘。一方向にのみ飛び出した二本のそれは、戦士の槍をいなし、弾き、変則的な動きを以て穂先を絡め取る。

そしてもう一つの理由は、双方の戦い方にあった。

青い男は、攻めきれない。

リーチや技量で上回っていても、二人の身体能力にはそう大差があるようには見えな  
い。

なら、優劣を決定するもう一つの要素は武器だ。その影響が、この攻防には如実に現れていた。

結果として、一見攻勢であるように見えながら、青い男は守勢に回っている。それに対して、黄金の男は常に的確に動いている。

視えている。相手の視線の先、筋肉の動き、槍の軌道。それだけではない。風の流れ、地形、月の光。そういった全ての要素を、あの男は俯瞰している――。

そう思えてしまうほどに、黄金の騎士の動きは正確無比だった。明らかに視界の外からの攻撃にすら、予め計算していたような動きで対処している。

戦略的な戦い方、とても言うべきか。一手一手が次の行動への布石であるかのよう  
に、男は斬撃を振るう。技量の差を、この男は武器の性能と眼力のみで補っている。

故に、この戦いは互角だった。

まさしくそれは千日手。戦況の膠着をよそに、響く剣戟の音は、上限知らずに高くなっていく。

だが……この状況が続く限り、戦いは終わらない。そんなことは、当事者である二人  
が一番理解しているだろう。

ならば、どちらかが必ず動く。己が勝利を掴み取るため、決め手に訴える。

「おおお——ッ!!!」

先に動いたのは、青い男だった。

身を震わせるほどの怒声。

斜めに振るわれた黄金の剣に対し、勢いよく槍を叩きつけた男は、後方に大きく跳躍して距離を開ける。

前傾姿勢を取ると、槍を正確に構え直す。守勢から攻勢に回るための、仕切り直しのつもりか。

男の狙いは心臓。槍の穂先は寸分の違いもなく、甲冑に守られた胸部を狙っている。対する黄金の騎士は、無言。貫けるものなら貫いてみると、傲岸な覇気が語っていた。「そろそろそろそろそろそろそろそろそろアアア——ツ!!!」

空気が爆発したと、そう錯覚させるような突撃。

繰り出される槍の速度は、先程までの比ではない。際限など知らぬとでも言うように、どこまでも速さが上がっていく。

瞬きの内に攻守が交代する。今や、守勢に回っているのは黄金の男の方だった。

後退する黄金を、青い男が攻め立てる。一瞬前まで捌き切れていたはずの槍撃が、弾くだけで精一杯になっていく。

「オラアッ！」

青い戦士の雄叫び。

一瞬遅れて、甲高い擦過音が響いた。

飛び散る火花。

黄金の甲冑に、槍の穂先が掠めたのか。宵闇の中、ストロボのように点滅する光は、一瞬ごとく煌めきを増していく。

打ち落とすことすらできない。弾き損ねた槍の連撃は、瀑布となつて黄金の鎧を襲つていた。

しかし、騎士は踏み止まる。鎧の性能もあるのだろうが、紅い閃光は男の体を貫けない。

唐突に、連撃が止む。

次の瞬間、強烈な踏み込みと共に紅い稲妻が閃いた。逆るは、天も裂けよと言わんばかりの横薙ぎの一撃。

一際甲高い音と共に、黄金の剣が舞った。

持ち主の手から弾き飛ばされたのだと理解するより先に、青い男が叫ぶ。

「貫った——!!!」

槍が狙うのは、顔面。

男の槍は、黄金の鎧を貫けない。数十、いや数百の槍撃を受けたにも関わらず、その光沢には歪みすら見られない。

だが、頭部は別だ。鎧に守られていない頭部は、あの一撃を受けたが最後、柘榴のように砕け散るだろう。

黄金の男は無手。劍が弾き飛ばされた今、男を守る武器は何もない。

「まよ………」

い、と続けようとした口は、今日幾度目かの驚愕に固まった。

——現れたのは、黄金の波紋。

宙に一瞬だけ見えた光。錯覚かと疑うほど短い時間の後、重い衝突音が響いた。

突き出された槍。

黄金の男を屠るべく放たれた必殺の一撃は、その左手に握られた劍によつて防がれていた。

その劍もまた、黄金。

両手劍に匹敵する長さの刀身は、片面のみの刃を持つ。叩き切るのではなく、ただ斬ることを目的とした武装。

反りも鏢もなく、刀身の根本に二本の刃が付いているそれは——間違はなく、先程吹き飛ばされたはずの劍と同じものだった。

僅かな時間、二つの武器が鏢競り合う。その時間で、俺は紅い槍が凌がれていたもう一つの理由に気が付いた。

込められている神秘。纏っている魔力の量が、男の槍を遥かに上回っている。そのあまりの濃度に、攻撃した側の槍の方が微かに軋みを上げていた。

有り得ない。

どこからあんなものを出したのか。第一、男の武器は失われたはずではなかったか。俺が驚いている間に、黄金の男が動きを見せる。瞬きの後、男の右手には、弾き飛ばされたはずのもう一本の剣が握られていた。落ちてきた剣を掴んだのだと把握するより早く、男が疾風となって再び走る。

捻られる双剣。踏み込むと同時に、槍に絡んだ二筋の黄金が対の方向に動いた。左の剣で穂先を逸らし、右の剣が柄を滑り、青の腕を斬り落とさんと奔る——！

「チツ、双剣使いか——！」

青い男は甘くはなかった。

柄を滑って迫る剣。その軌道を読むや否や、槍を手首で半回転。双剣を跳ね上げつつ、回転した勢いそのまま石突で頭部を狙い返す、カウンターの一撃。

己の頭蓋を砕かんとするそれを、黄金は自由になつた右の剣で防御。槍の底部を弾くと同時に、反動のままに後部へ跳躍。

——神域の攻防。

つい数時間前の校庭での戦いも凄かったが、この戦いはそれを上回る。

あの時の青い男と金の少女の戦いは、遠目には互角に見えた——いや、それは正確ではない。青い男は槍のリーチを活かして立ち回っていたが、終始金の少女に押されてい

た。

金の少女の攻撃は、重戦車のそれだ。一撃一撃の力が尋常ではなく、ただ振るうだけで衝撃波を伴う。

それに加えて、不可視の剣。それを扱う技量も、こちらが見惚れる程に凄まじかった。自らを上回る身体能力、不利な武器の特性、超級の技量。それらを相手にして互角に戦っていた青い男は、賞賛に値するだろう。

しかし、この黄金の騎士にはそれらが無い。

青い男の身体能力と大差はなく、技量では遥かに劣る。ならば、圧倒的な力を持つ金の少女とすら互角に渡り合った戦士に、黄金の男が勝てる道理はない。

にも関わらず——ただ己の戦略のみで、この男は拮抗して見せた。

おそらく……土蔵を飛び出した直後から今の攻防に至るまで、この男は全てを計算して戦っていたのだ。そうでなければ、あの緻密な戦いぶりはありません。

驚嘆すべきは、この男の眼力だ。天地程の技量の差を埋めるその戦い方、一体如何な視野で戦場を視ているのか。

気付けば俺は、その黄金の男に魅入っていた。

天賦の才。そんなものを持たずとも、戦い方次第で、あんな超人と戦うことができるのかと——。



「——チツ」

「——フン」

舌打ちを漏らすと、青い男は殺意も露わに黄金を睨む。その怒気に、空間そのものが軋むよう。

対する黄金は、挑発に近い嘲笑を浮かべて見せた。これ程の殺意を前に、微塵も揺らがぬその自信。その胆力は、どれほど人間離れしたものなのか。

——無音の静寂。

青い男の敵意に対し、黄金の男は揺らがない。その覇気に根負けしたかのように苦々しげな表情で、青の戦士は口を開いた。

「——テメエ、一体何者だ」

「ほうっ？」

男の問いに、騎士の眉が跳ね上がる。

双剣を無造作に提げたまま、どこまでも傲慢に、黄金の男は戦士を見下ろした。

「問いを投げるか。雑種風情が、よもやこの我オレに向けて？」

ぎちり、と空が歪む。

そう錯覚してしまうかのような殺意が、黄金の男から放たれていた。

戦士の問いの、一体何が気に食わなかったのか。視界に入ること自体が不快だと告げ

るように、男の殺意は膨れ上がっていく。

「身の程を知れ、雑種。飼犬風情が一端の口を叩き、あまつさえこの我に問いを投げる非礼。本来なら手討ちにするところだが——力を振るえぬ雑種など、我が手を下すまでもない」

黄金の殺意にも動じぬ男。だがその一言で、青い男の表情が変わった。

その動きを、黄金の男はどう取ったのか。空間を歪めるほどの殺気を唐突に消し、戦士を噛うかのように酷薄に口の端を歪める。

「——判るのか。テメエの能力か宝具かは知らねえが、どういふ目をしてやがる」

「たわけ、私の目を侮るな雑種。ああ、貴様は確かに全力だろうさ。だが十全ではない。その程度、手に取るように判る」

意味の解らない会話の応酬。

黄金の断言に、青の戦士は忌々しげに舌打ちする。その様子を見るに、黄金の男の指摘は凶星らしい。

だが……青い男が、あれで力を振るえていない、だと？

困惑し、立ち尽くす俺を蚊帳の外に、人外たちの話は続いていく。

「解せねえな。見た所剣使いのようだが、剣士とはオレが一戦交えてきたばかりだ。何より——セイバーのクラスがこの程度なら、興奮めにも程がある。

その戦い方からすると……真つ当な一騎討ちをする戦士には見えねえ。テメエ、やはりアーチャー  
り弓兵か」

「フン。クラスなど、然したる問題ではなかるうに。その程度の瑣事も逐一気に病まねばならぬとは——飼い犬の辛さか。哀れな事だな、槍兵」  
ランサー

「抜かせアーチャー。弓兵風情が剣で戦おうなんざ、いい度胸じゃねえか」

ランサー。アーチャー。

ここに来てようやく、この二人の名前が判明した。

青い男の挑発に、黄金の騎士——アーチャーと呼ばれた男が、不愉快そうに鼻を鳴らす。

「下賤な狗には、これでも過ぎた恩寵よ。餌をくれてやったのだ、狗らしく無様に這い蹲るがいい」

「——狗と呼んだか、貴様」

ランサーの顔から、表情が消えた。

しかし、その強靱な体軀からは燃えるような怒気が立ち上っている。

能面に近い無表情は、激怒を凌駕する殺意によるものか。憎悪すら滲ませ、槍兵は黄金を睨みつける。

それだけで射殺せそうな目線は、アーチャーを捉えて離さない。弓兵の一言は、何か

越えてはならない一線を越えたに違いなかった。

「ならば受けるか、我が槍の一撃を」

最後通牒とも取れる、ランサーの言葉。

それ程の感情が籠った一言を——アーチャーは、嗤って斬り捨てた。

「貴様ごときの槍が、この我に届くだど？ 笑わせるな雑種。一つ教授してやろう——  
そういう物はな、負け犬の遠吠えと言うのだ」

その嘲笑は、他の何よりも冷たかった。

無駄だと。

全ては無駄だと。

お前の攻撃は己には届かぬと——あれ程の力量の差にも関わらず、アーチャーは奇妙な確信を持っている。

しかし、これ以上ない侮辱にも関わらず、ランサーは口を開かない。

言葉を交わすだけ無駄だと感じたのか。語るべきは槍だと告げるように、ゆつくりと得物を傾けていく。

その構えに、俺は見覚えがあった。それは間違いない……あの校庭で、この男が放とうとした一撃だった。

ランサーの動きが止まる。その瞬間——大地が鳴動した。

堰を切ったように、槍へと収斂する魔力。根こそぎ奪い尽くせと言わんばかりに、その槍は魔力を吸い上げる。

全てを蹂躪する、力の奔流。捧げられた魔力の束は、ただその量だけで脅威だった。

「その心臓、貫い受ける——！」

ランサーの宣言。

そこに偽りなどないのだと、何よりも槍が断言していた。

放たれる前から理解してしまう。あの一撃から逃れる者など存在しない。狙った得物は過たず穿たれる、文字通りの必殺。

槍兵が地を蹴る。その速度は、先程までの比ではない。

まるで瞬間移動をしたかのように、アーチャーの眼前に現れるランサー。

しかし、それは俺から見ても下策だった。あの間合いでは、槍など振るえまい。事実アーチャーは、間合いに入ったランサーに肉薄し、その首を獲らんと双剣を振り上げる

——！  
その、瞬間。

「刺し穿つ——」

轟、と槍が唸る。

それ自体が、強力な魔力を帯びた言葉と共に——

「死棘ポルの槍ク——！」

——彗星が迸った。

間合いなど知らぬと、振るえぬはずの槍が振るわれる。

下から捲き上げるように、神速の槍撃を放ったランサー。全霊を賭して放たれたそれは、音を遥か置き去りにして怨敵を狙う。

穿つべきは黄金の心臓。真紅の魔槍が、弓兵を打ち砕かんと吼える。

直前の動きはフェイントだったのか、自ら後方に跳ねるアーチャー。振り上げられていた双剣は交差され、槍を弾くべく防御の構えを取っている。

胸元へと迫る朱槍。他の何よりも速い一撃は、見切ることすら能うまい。

しかし、それすら読んでいた黄金の騎士。必殺の槍撃は、双剣に阻まれる——そう思った瞬間、

「な、に——!?!」

アーチャーの驚愕。如何なる攻撃にも動じなかった男が、この時初めて驚きを露わにした。

槍が曲がった。

いや、正確には——槍の軌道が変わっていた。

直線を描く槍撃は、双剣に防がれる寸前、物理的に有り得ぬ方向に捻じ曲げられた。

それは、起こり得ぬはずの一撃。

物理法則を超えたその神秘は、奇跡と呼ばれる類のものだろう。まるで元々そうであったかのように、ランサーの槍は、双剣の守りを超えて黄金の甲冑に喰らい付いた。

今までにない一撃に、軋みを上げる鎧。鎧ごと心臓を貫かんと、朱い魔槍が高らかに  
叫ぶ——!!!

「——」

魔力と魔力が鬨ぎ合う。渾身の一撃で穿たんとする槍兵と、鎧と双剣で防がんとする弓兵。永遠とも思える攻防は、しかし一瞬にして終わりを迎えた。

響き渡る、金属の悲鳴。

ランサーの朱槍はアーチャーの鎧を削り穿ち——その堅牢さの前に、必滅の穂先を逸らされた。

その攻防は、僅かに一瞬。黄金の鎧を貫けなかった魔槍は、双剣によつて叩き伏せられた。

ク、と頬を歪め、アーチャーが愉快げに呟く。

「ほう、因果逆転の呪詛か。なかなか面白いものを持つているな、ランサー」

その声に浮かぶのは、勝者の余裕。

ランサーの槍は、確かに最強だった。その一撃は正確にして無比、その速度は正しく

神速。

そして、あろうことか……その槍は突如軌道を変え、有り得ぬ方向、有り得ぬ形に伸びていた。

あまりにも奇怪な一撃。有り得ないはずの軌道。だから、それはきつと——軌道ではなく、事実を書き換えたのだ。

奇妙な言葉と共に放たれた槍は、『既に心臓を貫いている』という結果を持つ。結果が決まっている以上、過程はそれに追従するだけだ。

あの槍の前では、あらゆる防御が意味を為さない。狙われた時点で、運命を決定する魔槍。放てば必ず心臓を貫くという、どこまでも出鱈目な槍。

——故に、あれは必殺。あらゆる敵を刺し穿つ、死棘イバラの槍。

だが、その必殺は必殺足り得なかった。

最高の幸運。先読みの慧眼。黄金の鎧の防御。恐らくは、幾つもの結果が作用したのだろう。

致命傷どころか、傷すら負う事無く黄金の弓兵は必殺の名を地に落とした。

ギリ、とランサーの口から歯軋りの音が響く。

無駄だ、と。



届かぬ、と。

そう傲然と宣言したアーチャー。因果改竄の神槍を、その魔性を尚上回る幸運。

それは俄かに信じられぬ光景。地獄から響くような唸りを以て、ランサーはアーチャーを睨みつけていた。

「——防いだなアーチャー。我が必殺のゲイ・ボルク一撃を」

「馬鹿め。死力を尽くさずしてこの我を倒そうとは、不敬にも程がある。

——克蘭の猛犬よ、貴様には失望したぞ」

興味をなくした、とでも告げるように。アーチャーは、感情の籠らない瞳でランサーを見下ろす。

対するは、渾身の一撃を防がれたランサー。極限の怒りの眼差しは、未だ無傷のアーチャーの心臓に向けられていた。

黄金の鎧はその胸部を、槍によって穿たれていた。その傷は深く、衝撃で甲冑全体が歪んでいる。だがそれでも、男の槍は肉体まで届かなかったのだ。

紛れもない必殺の槍撃を以て、敵を打ち倒せなかつたのだ。敵が生き残っている以上、必殺の槍は必殺足り得ない。

その屈辱は、果たしてどれほどのものか。

「……ちつ。こいつを出すからには、必殺でなけりやマズいつてのにな。有名過ぎるっ

てのも考え物だ」

ランサーの顔が曇る。先程までの殺気が、嘘のように消えていく。

舌打ちを一つ残し……くるりと槍を回すと、ランサーは黄金に背を向けた。

「己の正体を悟られたなら、相手を消すのが聖杯戦争の常道だが……オレのマスターはとことん腰抜けでな。倒せなかったのなら戻ってこい、と抜かしてやがる」

予想外のランサーの言葉に、思わず目を見開く。

必殺の一撃を防がれたとはいえ、アーチャーの鎧は中破している。このまま攻め立てられれば、防御力を失ったアーチャーはランサーに倒されるだろう。

しかし、有利な状況にあるにも関わらず、ランサーは動かない。それどころか、アーチャーに背すら向けている。

追い打ちをかけようともしないランサーを、アーチャーは紅蓮の双眸で見据えている。僅かな間の後、悠然とアーチャーは頷いた。

「良い、逃亡を許すぞク・フリーン。全力を出せぬ雑種を潰したところで、面白みの欠片もない」

「——覚えていろ、アーチャー。貴様の心臓、次は必ず貫い受ける」

恨みの籠った台詞を残し、青い槍兵は跳躍する。

音も無く扉を跳び越え、消えていくランサーを黙って見つめるアーチャー。その表情

は冷たく、何一つ語るべきものを持たない。

数瞬の後、ランサーの気配は完全に消えた。後に残されたのは、素性も判らぬ黄金の男だけ。

「  
」  
傲然と立つアーチャーは、どこまでも冗談みたいな奴だった。

黄金の光沢を放つ鎧は、紛れも無く本物の甲冑だ。あれだけの攻撃を受けて微塵も揺るがぬその硬さ、一体何で出来ているのか。

驚くべきことに、ランサーの魔槍を受けて破損した部分すら、鎧の内側までは穴が開いていない。確かに損傷はしているが……その傷すらも淡い光と共に、勝手に塞がれていつている。アレがどれ程の神秘で括られた物なのかは、想像を遥かに超えている。

……いや。何よりも冗談みたいなのは、そいつの存在感だった。

神々しい、とでも言うべきか。

燦然と輝くその金髪は天を衝くように逆立ち、男の俺すら見惚れるほどに整った美貌。

そして——人のモノでは有り得ない、真紅の双眸。そこに宿る神威は、そいつが紛れもなく人を超越した存在であると知らしめる。

そこで、はっと気が付いた。

コイツは……とんでもない奴だ。さっきのランサーもわけの分からない奴だったが、この男はそれすら凌駕している。

俺を殺そうとしたランサーを撃退してくれた以上、敵ではないのだろうか……味方だとは、絶対に思えない。

「——おまえ、一体何者だ」

「——」

男は黙して答えない。数瞬の沈黙の後、その紅い瞳がこちらに向けられた。

それだけで、背筋が硬直する。ただ俺を見ているだけだというのに、何故か恐怖が湧き上がる。

嫌でも解つてしまう。コイツは、俺を人間だと思っていない。こんな冷たい視線は、ヒトに向けられるものではない。

「つ……い……」

気圧される。

何かを口にすれば、次の瞬間には、自分の首が飛んでいる気がする。

けれど、黙っているだけでは何も変わらない。せめて、今何が起きているのか、それだけでも把握しなくては——

「——む」

思い切つて口を開こうとした瞬間、アーチャーが目を逸らした。

黄金の雰囲気は僅かに変わる。その視線は、近くの塀を鋭く見据えている。

いや——塀ではなく、その向こう。俺には見えない何者かを、アーチャーの紅い瞳は睨み付けていた。

整つた口角が、微かに吊り上がる。先ほどランサーと対峙していた時のように、何かを愉しむような邪悪な微笑。

「——」。まだ雑種が潜んでいたか」

言つて、アーチャーは軽やかに跳躍した。がしゃん、という甲冑の音が微かに響く。後に残されたのは、ぼかんと口を開けている俺だけ。

「まだ、潜んでいる……?」

そう、呆然と口にして。一瞬遅れて、どんな状況なのかを理解した。

「ちよつと待て、まだあんなヤツがいるつてのか——!」

後先考えずに、門の方へと走り出す。もうわけが分からないが、ただ黙っているなんてできない。

アイツが敵か味方かは知らないが、少なくとも俺を助けてくれたのは事実だ。鎧も壊されたというのに、アイツはまだ戦おうとしている。

俺はどうすればいいのかも分からないけど、今はただ、全力でアイツを追いかける——

「アーチャー、どこだ……!?」

門を外すのもどかしく、門を飛び出し、周囲を慌てて見渡す。

こんな時に限って、月も出ていない。電灯も少ないこの地域は、夜になれば真っ暗だ。視界には何も入らない。けれど——聴覚は、その音を捉えてくれた。

「そこか——!」

近くの小道に走り寄る。

そこに滑り込んだ瞬間、雲から月が顔を出す。天から降り注ぐ光が、幾つかの人影を照らし出した。

「——無礼者。凡夫雑種の分際で、我の許しなくして我を見るな」

塀の上に傲然と立っているのは、先程現れた黄金の騎士。

月の光すら圧倒するその偉容は、壮麗にして絢爛。堂々と佇むその姿は、ただそれだけで周囲の闇を吹き飛ばす。

それで、再び理解した。あの存在は、人の上に君臨するものだ。

およそ人間と称するには、あまりに異質なあの男。あれは何だ。人間でないとする

ば、アイツは一体何なんだ。

「貴様ら俗人が我を見る事は許さん。我に請う事も許さん。我と語る事も許さん。

——雑種。我を覗き見た大罪、その命を以て償うがいい」

あまりの暴言に、思わず体が固まる。

状況も何も判らない。だけどアイツは言った。命を以て償えと、確かにそう口にした。つまり——アイツは、誰かを殺すと言ったのか。

——意識が凍る。

ほんの僅かに、天から月明かりが漏れている。それで、アーチャーと相對している相手が人の形をしていると判った。

それが誰なのかは判らない。先程のランサーの仲間なのか、それとも別の人外バケモノなのか。

あの弓兵に容赦はない。殺すと宣言したならば、次の瞬間にはアイツは人を殺している。

人が死ぬ。

衛宮士郎の前で、人が死ぬ。

圧倒的な暴力。理不尽な猛威。助けることも叶わず、人が死ぬ。殺される。

血の幻視。返り血が舞う光景すら、脳裏に浮かび上がってくる。その光景は、まるで

——十年前の地獄ではなかったか。

「ほう。私の威容を目にして尚その気概、雑種にしては見所があるが——今の我は機嫌が悪い。塵は疾く塵になるがいい」

アーチャーが何か言っている。

知らない。アイツの言葉なんか知らない。

ただ俺の目に入るのは、アイツが振りかぶった黄金の双剣だけ——！

「止めろ————っ  
!!!!!!」

叫ぶ。

力の限りに叫ぶ。

ヤツの剣先が、俺に向くなら構わない。それでも——俺の目の前で、人が殺されるのだけは、断じて許せない。

「——貴様」



ぎろり、とアーチャーがこちらを睨む。

その迫力。ただ睨まれただけで、心臓が竦み上がるのを感じた。

一瞬遅れて、恐怖と後悔が胸を襲う。

黙っていたれば良かった。

隠れていれば良かった。

そんな臆病な心に目を瞑って——俺は、もう一度アーチャーに話しかけた。

「頼む。お願いだから、殺すなんてことは止めてくれ」

冷酷な双眸。

炎より尚紅いその瞳を見据えて、真っ向からそう口にした。

「——」

アーチャーの瞳には、何も浮かばない。

宝玉のようなその真紅。憤怒を向けられると覚悟していたが……意外にも、一瞬前ま

での怒りは消えていた。

俺を観察するような目線。

冷静に、冷徹に。遠い何かを思い出そうとするかのように——黄金の騎士は、俺を真

剣に見つめていた。

予想外の反応に、俺も口を開けない。睨み合ったままで、数秒の時間が流れる。

「——ッ」  
静寂を破ったのは、音だった。

踏みしめられた砂利が鳴る。俺とアーチャーは、同時にその方向に目を向けた。

——風が吹く。

曇天の切れ間。螺旋を描く夜空に、三度月が顔を覗かす。

地を撫でる優しい光。青白く降り注ぐその光を見て、俺は僅かに息を飲んだ。

月光に照らされる白銀の甲冑。その下に纏われた紺碧は、銀に良く調和している。

風に揺れる金砂の髪。柔らかかささえ感じさせるそれは、まるで人形のように。

凛々しく澄み渡った翡翠の瞳が、真っ直ぐこちらを見つめている。

幻想的なまでに可憐な少女。見目麗しく美しい騎士が、名画のように立っていた。その清廉な輝きは、傲然と聳える黄金と比して尚劣らない。

「——ほう」

不意に。

俺を見ていたはずの黄金の男が、驚いたように声を漏らした。

その目の色は、先程俺に向けられていたものとは全く違う。あれは観察者ではなく、品評者の目だ。

まるで、よくできた人形を検分するかのよう……舐めるような目で少女を見た後、

アーチャーは軽い笑みを浮かべた。

ランサーに向けていた、皮肉げな笑みではない。子供が玩具で遊ぶ時のように、純真で——しかし、羽虫を潰す時のように、邪悪な笑み。

親愛とも取れる微笑に、悪意とも取れる愉悅を乗せて。アーチャーは、その少女を見下ろしていた。

「まさか、貴方は……………アー、チャー——！」

黄金を見つめる少女の目には、驚愕の色。

信じられないものを見たという表情。その体軀は、予想外の衝撃に微かに震えている。

死者と再会してしまったような、そんな顔。昔馴染みに出会ったように、少女は呆然とアーチャーを見上げて——

——待て。あの黄金の男は、一度でも自分がアーチャーだと名乗ったか。

「ん？ 我を知っているのか、女」

違和感に気付いたのか、アーチャーが眉を顰める。先程までの酷薄な笑顔は消え、少女の真意を探るように冷淡な瞳を向ける。

その反応からして、アーチャーがあ少女を知っているとは思えない。しかし少女の方は、明らかにアーチャーを見知っていた。

状況が混乱しすぎていて、頭が追いつかない。一体、何がどうなっているんだ。

呆然と立ち尽くす俺をよそに、二人は見つめ合う。僅かに、しかし確実に互いの目を見つめていた二人は、やがてどちらともなく視線を外した。

少女の表情に、既に驚きの色はない。あるのはただ、怒気を孕んだ警戒心のみ。

軽い金属音を立てて、少女が何かを握る。それは紛れもなく——あの校庭で見せた、視えない剣の柄だった。

白銀の具足が、アスファルトを踏みしめる。地面に罅が入る脚力は、その矮躯の何処から生まれるのか。

清涼ささえ感じさせる翡翠の瞳が、黄金の男を睨みつける。怒気すら凌駕する殺意を以て、少女はアーチャーを敵視していた。

——空間すら軋ませて、少女の体から膨大な魔力が迸る。

それだけで見る者を圧倒する青い魔力は、今や可視化できるほどに立ち上っている。夜の冷気が、少女の殺意を具現化するような熱気へと変わっていく。

「——良い憎悪だ。貴様が何者かは知らぬが、その清廉な闘気……事によると、存外に価値ある宝かもしれぬ」

あれだけの殺意を向けられて尚、黄金の男は揺るがない。

憎悪すら宿した緑の瞳。切り刻むような魔力の余波。激情を露にする白銀の少女を

見下ろし、アーチャーは静かに独語する。

その手に握られた双剣は、構えすら見せる気配がない。不可視の剣先からほんの十数歩の距離だというのに、アーチャーは傲然と立ったまま。

——だが、その紅い瞳。

人間のものでは有り得ない残忍な双眸だけが、激怒に震える少女を観察していた。

「貴方は……時を越え、空を越えてまで尚、私の前に立ち塞がるのですか。そこまで——  
そこまで私を貶めたいのですか、アーチャーッ!!!」

気合一閃。

黄金に向けられていた剣先が、力任せに叩き付けられる。

少女の怒りの一撃を受けた大地は、トラックが激突したかのような轟音を残して爆ぜ割れた。

その規格外の膂力に、背筋に震えが走る。さつき俺を蹴り飛ばしたランサーの力など、あれに比べれば子供の遊びだ。大地すら砕けるその力、戦車の砲弾と何が違うというのか。

「——良いだろう。ならば、今度こそ貴方を斬り伏せるまで。貴方がどんな宝具を取り出そうとも、その悉くを打ち砕いて見せましょう!」

ゆらり、と剣が再び持ち上がる。その狙いは今度こそ、黄金の弓兵だ。

少女から立ち上る威圧感は、アーチャーに勝るとも劣らない。神話のように淡く輝くその威容は、怒れる女神のそれに等しいだろう。

その脅威を見て取ったのか、黄金の具足が僅かに動く。

先ほどまで見せていた、余裕の笑みは消えている。細められたその瞳は、少女の一拳手一投足を見逃さない。

此処に至って、アーチャーも認識したのだ。一瞬でも目を離せば、倒されているのは己の方だと。

アーチャーの鎧は今、ランサーの魔槍で破損している。高度な魔術が働いているのか、勝手に修復されているようだが、その動きは遅々として進まない。

少女の膂力は、見て取っただけで異常に過ぎる。あの力で振るわれる一撃は、中破した鎧など粉塵と化して尚余りあるだろう。

黄金の双剣が、静かに掲げられていく。絶大なまでの威圧感はそのままに、アーチャーもまた臨戦態勢を整えていた。

「口を開けない。いや、身動き一つすら出来ない。」

二人が相対する空間は真空のようで、触れただけで切り刻まれそうだ。

……情けない。

人が殺し合うのを止めるために飛び出してきたのに、俺には何もできないのか。一体俺は、何の為に出来たんだ。立っているだけなら、カカシと同じだ。

震える体を根性で無理やり抑える。

恐ろしさも臆病さも封じ込め、拳を握りしめる。

何が起きているのか、あの少女は何者なのか、何故二人は戦おうとしているのか。

——知らない。そんな事はどうでもいい。

ただ認められないのは、衛宮士郎の前で人が死ぬこと。それを止めるためだけに、俺はもう一度口を開く——！

その、瞬間。

「ストーーーーーッブ!!! ちよつと待ちなさいよ、アンタ達!!!」

第三者の少女の声が、殺意の戦場を霧散させた。

今にも斬り合いを始めようと睨み合っていた二人が、呆気に取られたように固まり、その声に視線を向けた。

自然と、口を開いた間抜け面のままで俺もその方向を見る事になる。どこから出てきたのか、腕を組み、憤然としているその姿は……つて、え、あれ!?

赤いコートに、特徴的なツインテール。見間違えるはずもない、ここにいるはずがない  
アイツは——

「お、おまえ遠坂……!?!」

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

につこり、と学校で出会った時のように極上の笑みを浮かべる遠坂凜。

そのあまりの自然さに、つい俺も返事をしそうになる。……って、そうじゃない。

なんでこんな時間に、こんな場所に遠坂がいるんだ？あの少女の隣に立つてる、って

ことはつまり、ええと、どういう……!?!

「……………はあ」

オロオロしている俺を見て、遠坂の口から呆れたようなため息が漏れた。

「いいから話は中でしましよ。どうせ何も解ってないんだろうし、一から説明してあげ

るわ。

——セイバー、その金ぴかと戦うのは少し待って頂戴。こいつ、わたしの知り合いな

のよ」

さらりとおかしなことを言って、ずんずん歩いていく遠坂。

あまりの情報量に脳が処理できる容量を超え、ぽかんとその背中を見つめてしまう。

遠坂の行動に呑まれたのか、白銀の少女は驚いたように硬直していた。遠坂を追うそ



の視線からは、あれだけの殺意が嘘のように消えている。

一方、塀の上に立ったままの黄金の男。少女に向けていた警戒心は既に消えている。その顔色は一瞬前とは打って変わり、面白い物を見たと言うように、口元に愉悅の色を宿している。

……つて、待て、ちよつと待て——！

「と、遠坂、わけわかんないぞ、なに考えてんだおまえ……！」

俺の詰問に、遠坂がくるりと振り向く。

その顔は、さつきまでの笑顔とは別物だった。冷たい、見知らぬ別人のような表情。

「バカね、色々考えてるわよ。だから話をしようって言ってるんじゃない。衛宮くん、突然の事態に驚くのもいいけど、素直に認めないと——」

——いつか、死ぬことになるわよ。

そう冷たく口にした遠坂。こちらを睨む瞳から、目が離せない。

ごくり、と息を飲む。その迫力は、学校で見ている姿とはまるで別人だった。

「そ。分かればよろしい。それじゃ行こつか、衛宮くんのおうちにね」

自分の家に入るかのような気楽さで、遠坂は我が家の門を潜っていく。気のせいか、その体からは怒気が立ち上っているようにも見えた。

……いや、気のせいじゃない。あいつ、すつごく怒ってる。

「……………」

自分の家に勝手に入られたというのに、俺の体は動かない。後に続くべきだと冷静な部分と言っているが、驚きを越えた驚きで、冗談のように体が硬直してしまっている。

だが……僥倖、と言うべきか。心臓を竦ませる殺意の波動は、予想外の少女の登場で、綺麗に消えてしまっていた。

動けない俺の代わりに、まず動き出したのは黄金のアーチャーだった。

泰然自若を地で行くように、優雅ささえ感じさせて地面に降り立つ。握っていた双剣はどこに仕舞われたのか、影も形も消えている。

その口元に宿るのは、どこか不気味さを感じさせる笑み。嘲るように、愉しむように、紅い眼差しは遠坂の後ろ姿を見つめている。

悠然とした足取りで、俺を置き去りにして門を潜っていく男。今になって気付いたが、アイツが歩きたびに、がしやんがしやんと鎧が擦れる音が響いている。

……というか、アレ。わざわざ門へ向かわずとも、扉を内側に降りれば良かったんじゃないだろうか。

次に動いたのは、金砂の少女。

黄金の男と同じように、その手に握られていた剣は既がない。凜然とした表情のまま、毅然と門を潜っていく。

その横顔に見惚れていると、少女の瞳と目が合った。

アーチャーの冷酷な緋色とは違う、静かで透き通った美しい翡翠。宝石めいたその瞳は、何かを推し量るように俺を見つめていた。

邂逅は、僅かに一瞬。やがて少女は踵を返し、静かに衛宮邸へと消えて行った。

「

一人取り残された俺は、呆然と立ち竦む。一瞬の後、はっと我を取り戻して、門へと歩き出した。

体は動いてくれたようだが、頭は全然回っていない。

今夜、一体何が起きたのか。

俺は、一体何に巻き込まれてしまったのか。

ランサーと呼ばれた青い戦士が襲ってきて。

アーチャーと呼ばれた黄金の青年が現れて。

名前も知らない白銀の少女は、アーチャーを知っているかのようで。

そして……密かに憧れていたアイドル、遠坂凛までもが非日常の列に加わった。

もうなんか異次元空間に迷い込んだのではないかという状況だが、このまま腑抜けてはいられない。俺だつて一応、魔術師の端くれなのだ。

遠坂は、俺に説明すると言った。ならまずは、その話を聞かなければならない。

疑問も疑念も追いやつて、俺は門を潜つていく。慣れ親しんだはずの我が家が——まるで、魔物の巣窟のように感じられた。

——この夜。俺の知っている場所で、俺の知らない何かがある、確実に始まろうとしていた。

### 3. 聖杯戦争

——聖杯戦争。

マスターと呼ばれる、七人の魔術師の闘争。他のマスターを全て殺し尽くすまで終わらない、命賭けのゲーム。

それぞれのマスターは、サーヴァントと呼ばれる使い魔を召喚する。戦闘代行者であるサーヴァントを使役し、他のマスターを全て倒し、最後まで残ったただ一人に、聖杯と呼ばれる景品が与えられる。

聖杯とは、所有者の願いを叶えるモノ。万能の願望器という、有り得ぬはずの秘宝。つまり。冬木の聖杯戦争とは、聖杯を巡るバトルロイヤルに他ならない——。

——要約すれば。遠坂凜の語った説明は、そういう内容だった。

「……待て。なんだよ、それ。いきなり何言い始めるんだ、遠坂」

震える声で、遠坂の説明を遮る。

正直、信じられない。半人前とはいえ、俺だつて魔術師だ。常識をひっくり返すのが魔術であることくらいは知っている。だけど……これは、あまりにも荒唐無稽だ。

「信じられない気持ちには解るわ。

——けどね、衛宮くん。貴方、もう巻き込まれてるのよ。その令呪と、そこにいるサーヴァントが何よりの証拠だわ」

そう言つて、アーチャーと呼ばれた青年を示す遠坂。

居間の壁に寄りかかり、腕を組んでいる黄金の男。無造作に部屋に入つてからというもの、アイツは口を開かず、ただ無表情にこちらを見ている。

アーチャーの眩しいばかりの威容から目を逸らし、遠坂が口にした情報を整理する。令呪を宿し、マスターに選ばれたという自分。

同じく、マスターであると名乗つた遠坂。

サーヴァントだという、黄金の男と小柄な少女。

確かに、遠坂の言うとおりなら説明はつく。でも、いくら証拠を突きつけられたからと言つて、そう簡単には受け入れられない。第一、俺はその聖杯戦争なんていうバカげた名前すら知らなかったのだ。

そう告げると……やれやれとばかりに、遠坂は肩を竦めた。

「——呆れた。貴方、もう逃げられないって解つてる？ ランサーに襲われたこと、もう忘れたのかしら」

遠坂の話によれば、俺はそのマスターなんてものになってしまっているらしい。

聖杯戦争という儀式が、マスターを殺し尽くすことよって成り立っているなら……マスターである俺は、既に他の魔術師の標的になっている。

つまり——どんなに現実を拒否したところで、連中は俺を付け狙う。

先程の邂逅を思い出す。

俺を襲ったランサーの、圧倒的なまでの力。あんなものに抵抗するなど、出来る訳がない。

俺が今まで積み重ねて来た鍛錬なんて、アイツの前では無意味に過ぎる。鼠がいかにも暴れようと、猫の前では殺されるだけの弱者なのだから。

「……まあ、無理もないか。ガラスの修復も出来ないような素人だし……聖杯戦争のことも知らないなんて、重症だわ」

「……………」

呆れた目で俺を見下ろす遠坂。それもまあ、当然の話だと思う。

俺がぶち割ったガラスは、遠坂の手によって修復された。俺にはさっぱり分からないそれが、どれほど高度な魔術なのかと思つたら……魔術の中では初歩の初歩、寧ろできないのがおかしい、というレベルらしい。

俺にできる魔術は、たった一つだけ。その強化魔術も、遠坂曰く「微妙なモノ」との

ことで、哀れみを通り越して生温い視線を向けられた。

「そんなヤツ相手に、一方的にどうこうするのも不公平な話だし。ま、一通りの説明はしてあげるわ」

ふん、と偉そうに腕を組む遠坂。

………なんというか。俺が想像していた姿と遠坂の本性は、随分とかけ離れていたらしい。

ただ損得だけを考えるのなら、まるつきり素人に近い俺を倒してしまえばいい。聖杯戦争の仕組みを聞く限り、サーヴァントはマスターが倒されれば存在できないのだという。なら、俺を殺してしまえばアーチャーも道連れにできる。労せずして、遠坂は敵の一人を倒せたはずなのだ。

しかし………遠坂はそうしなかった。俺を傷付ける事もせず、ただ不公平だと言って、右も左も分からない俺に、状況を説明してくれた。

それは間違いなく——俺が憧れた、遠坂凜という少女だった。

そんなことを考えていると、遠坂の隣に控えていた少女とぼつちり目が合ってしまった。その宝石のような瞳には、アーチャーに見せた敵意の色は映っていない。

遠坂は、あの女の子を使い魔サーヴァントと呼んだ。

サーヴァントとは、死亡した英雄——人間を超え、精霊の域に達した超人たちを引つ



張つてきて、聖杯の力によって実体化させた存在なのだという。その話が本当なら、セイバーと呼ばれたあの少女も英雄だった人間なのだろうか？

もう一人のサーヴァント、俺の横で壁にもたれかかっているアーチャーが英雄だというなら、まあ分からなくもない。あんな甲冑を着た人間が現代の一般人であるワケがないし、何よりも存在感が桁違いだ。

けれど、この少女。遠坂の用いた、英霊は怪物じみているという比喻が、この少女にも当てはまるなんてどうにも気に食わない。

聖杯戦争が殺し合いだというのなら……この少女も、誰かを傷付け、或いは誰かに殺される側の存在なのだろうか。

サーヴァントの力は確かに強大だ。俺はランサーに、ろくな抵抗すらできず二度も殺されかけた。

あれだけの力を持つ連中——それは、地震や津波と同じ脅威だ。普通の人間に、あんなモノに対抗するなどできるわけがない。

理不尽で、不条理なまでの暴力。

魔術師たちの闘争とはいえ、この儀式は「戦争」なのだ。運悪くそれに巻き込まれる人間がいればどうなるか、その結果を俺は身を以て味わった。

俺の脳裏に浮かぶのは、必死に逃げようと、或いは立ち向かおうとする人々。

しかし、絶対的な暴力の前に、人の努力など意味を為さない。人間の営みは容易く蹂躪され、凌辱され、崩壊する。

ああ、その光景は正に――

――十年前の大火災、そのものだ。

「……気に食わない。そんなバカげた儀式なんて、一体誰が始めたんだ」

「それは、私が答えることじゃないわ。その辺りはいずれ、この聖杯戦争を監督してるヤツに聞きなさい。

わたしから言えることは――貴方はもう、戦うしかない。そして、サーヴァントは貴方の手札だから、上手く使えってことだけよ」

それだけ言うと、遠坂は俺から顔を背けた。その視線の先には、傲然と壁に背を預ける黄金の男。

気のせいかな、遠坂の表情には微かな緊張を感じる。何かを躊躇うかのように目を動かすと、遠坂は静かに口を開いた。

「さて、衛宮くんへの説明はこの辺りにして。今度は貴方に質問するわ、アーチャー」  
滑らかに俺に説明していた時とは違う、硬質な声。

明らかな緊張感を見せる遠坂に、隣に控える少女も反応する。その翡翠の瞳は、油断なくアーチャーの挙動を監視していた。

「貴方——いつたい、何者なの」

サーヴァントは英雄である以上、歴史上に弱点や能力といった情報を残している。故に、サーヴァントの正体は秘匿しなければならない。

そう言ったその口で、遠坂はアーチャーに問いかけた——おまえは何者か、と。

先ほど、俺も同じ問いをアーチャーに投げた。しかし、俺と遠坂では質問の意味合いが違う。

わけもわからず、ただ自分の状況を知りたいためだけに口を開いた俺。だが遠坂は、明確な目的を以て、確固たる意思の下にアーチャーを詰問していた。

「——ほう」

半眼で俺たちを眺めていた黄金の男が、僅かに口の端を歪める。

そこに浮かんでいるのは、微笑。この場の緊張感には不釣り合いな笑みを浮かべて、アーチャーは端整な唇を開いた。

「娘。貴様はその小僧に、サーヴァントの名は伏せておけと言ったばかりではないか」

「違うわ。わたしが聞いているのは、そんな単純なことじゃない。

——貴方、本当にサーヴァントなの？」

え？

おかしい。遠坂の説明だと、コイツは俺が召喚したというサーヴァントのはずだ。

俺はコイツを召喚した覚えなんかないけど、あの土蔵で突然現れたことと、ランサーのサーヴァントから俺を助けてくれた事実……そして、コイツが明らかに人間以上の存在であることに疑いはない。

にも関わらず、奇妙な質問をする遠坂。そこに重大な意味が隠されているような気がして——気が付けば、勝手に鳥肌が立っていた。

「遠坂。それ、どういう意味だ」

「言葉通りの意味よ。衛宮くん、サーヴァントについての説明は聞いてたでしょう？」

ああ、と頷く。

サーヴァントは、聖杯の力で呼び出された過去の英雄だ。

言ってしまうえば幽霊みたいなものだが、何の力も持たない霊などとは格が違う。魂を再現し、固定化した、確たる英霊の現身。

故にサーヴァントは、霊体と実体を使い分ける能力を持つ。普段は目に見えない霊体として控えているが、必要とあれば実体化し、今そこにいるセイバーやアーチャーのよ

うに現れることもできる。

……という内容を、遠坂がさつき説明してくれた。

「そう。つまり、サーヴァントつていうのは基本的に霊体なの。実体化することもできるけど、その本質は変わらない。

けれど——そのアーチャーは、霊体なんかじゃない。アイツには、確固とした肉体があるわ」

「……は？」

断言する遠坂に、思わず間拔けな返事をしてしまう。

俺には判らない。遠坂の横にいるセイバーも、壁際で佇むアーチャーも、霊体とか実体とかいう違いがあるようには見えない。

けど、遠坂が嘘をついているようにも見えない。その顔は緊張で強張っているし、控えているセイバーの厳しい瞳も、遠坂の言葉が真実なのだと言っている。

……頭がこんがらがってきた。一回、落ち着いて情報を整理しよう。

サーヴァントが霊体だというなら、それに肉体があつてはおかしい。聖杯の力で実体化はしているも、それはあくまで仮初の生命に過ぎないはずだ。

なら、確固とした肉体があるというのはどういうことか。それでは、アーチャーはサーヴァントという存在ではなく、全く別のナニカだという結論になってしまう。

しかし、それこそおかしな話だ。

人間を超えた英雄であるサーヴァントと戦えるのは、同じサーヴァント以外には有り得ない。その理屈が合うなら、先程ランサーと剣を交えていたアーチャーは、まぎれもないサーヴァントだ。

そして何より……薄く、今にも千切れそうに細いものではあるけど、俺とアイツの間には何か繋がりのようなものを感じる。左手の令呪の輝きが、その何よりの証拠だ。

ここまで情報を整理して——ようやく、遠坂が警戒している理由を理解した。

サーヴァントでありながら、サーヴァントでは有り得ない存在。そんなヤツがいること自体、おかしいに決まってる。

やっと納得した俺をよそに、遠坂はアーチャーをじつと睨んでいる。その隣に控えるセイバーも、明らかな警戒心と敵意をむき出しにして、遠坂を庇うようにアーチャーの前に立ちをはだかる。

今にも斬りかかれてもおおしくもない間合いだというのに、アーチャーは壁にもたれたまま動かない。一体何がおかしいのか、口の端に浮かんだ笑みは一層深まっている。

その明らかな余裕に、遠坂はむっとした表情を浮かべる。

「衛宮くんは訊いても意味がないだろうから、もう一度貴方に聞くわ。何者なのか、今すぐ答えなさい。場合によっては——」

「——セイバーに襲わせる、か？」

ふん……無粋ではあるが、そも力とはそうして使うものだ。道化の類かと思つたが、中々どうして頭の回る女よ」

鷹揚に頷くアーチャー。

品定めをするように、遠坂を冷たく観察すると……アーチャーは、腕組みを解いて壁を離れた。

一歩足を踏み出したアーチャーに、セイバーが立ち塞がる。いつの間に取り出したのか、手に握られた透明な剣は弓兵の首元に向けられていた。

セイバーとアーチャーの距離は、数歩と離れていない。もしセイバーがアーチャーに襲い掛かれれば、反応すらできずにアーチャーは斬り伏せられるだろう。

そんな状況にも関わらず——黄金の弓兵は、悠然とそこに立っていた。

「剣を引けセイバー。そんな雑種の厚顔ぶりに免じて、今の問いに答えてやろうではないか」

どこまでも傲慢に、セイバーを見下ろす黄金の青年。その超然とした余裕は、一体どこから生まれるのだろうか。

その余裕ぶりに何かを感じたのか、セイバーは剣を一層強く握り締める。武器も持たずに佇む男が、何よりの脅威であるというように——セイバーは、最大級の警戒心を

アーチャーに向けていた。

自分に向けられる敵意を意にも介さず、不満げに鼻を鳴らすアーチャー。まあいい、と小さく呟くと、男はセイバーの背後に立つ遠坂へ向き直った。

「私の正体を知りたいと言ったな、小娘。では教えてやろうではないか。私の正体は——」

ゆらり、と男が右手を上げる。

意味の解らぬその動作に、全員がそこに注目する。まるで指揮者のように優雅な動きは、一見何の意味もなさそうで……それ故に、この状況では不気味だった。

自分に向けられた三つの視線を受け、傲然と胸を張るアーチャー。絶対的な自信を以て、青年は再び口を開く——！

「——秘密だ」

……空気が、凍った。

おい、ちよつと待て。

あれだけ自信满满にしておきながら、コイツ今、絶対有り得ないコトを言った気がするぞ——!?



「——ふざけるな、アーチャー。この期に及んで戯れ言を弄するか!」

全員の怒りを代弁するように、セイバーがアーチャーを一喝する。

怒りをぶつけられたアーチャーはというと、深刻そうに眉を寄せている。その態度からは、先程までの自信は感じられない。

「たわけ、これがふざけているように見えるかセイバー。……はて。我は誰だ?」

むむ、と首を傾げている黄金の英霊。

口になっている言葉こそおかしいが、その表情はあくまで真剣だ。今まで傲然と周囲を見下していたアーチャーは……困惑するように、その顔を曇らせていた。

青年の挙措には、あれだけ見せていた余裕など見られない。その異様さに、セイバーが訝しがるような視線を向ける。

当たり前だ。突然、「自分は誰だ?」なんて言い出すヤツは、怪しいなんてもんじやない。誰がどう見ても、明らかな不審者だ。

「アーチャー。それはどういう意味ですか」

「うむ。普遍的な知識やこの時代の常識、聖杯戦争などという遊戯については理解している。

だが……肝心の、自分が何者かという部分が抜け落ちているな。素性どころか、名前までもが思い出せぬ。まあ、然したる問題ではないが」

うむうむ、と何やら一人で頷いているアーチャー。

……つて、記憶がないって、そりや大問題じゃないのか——!?

「はあああああ!?! なによそれ、アンタわたしのことバカにしてるワケ?!」

あまりに予想を超えた告白に、遠坂が声を荒げる。

俺だつて混乱している。いきなり出てきた訳の分からないヤツが、自分が誰かも判らない、などのたまつたのだ。

俺たちの視線をどう受け取つたのか、アーチャーはふてぶてしく腕を組むと、傲然たる態度を取り戻してこちらを見下ろした。

「ふん。大方、召喚の際に不手際があつたのだらうよ。そんな雑種は、サーヴァントを召喚する意思すらなかつたのであろう? そんな状況で、十全なサーヴァントを呼び出せる道理もない。いわば、不完全な召喚のツケというヤツだ」

じろり、と睨まれる。

ぐ……確かに、アーチャーの言うとおりかもしれない。俺はそもそも聖杯戦争なんて知らなかつたし、サーヴァントなんてものを召喚する気もなかつた。

考えてみれば、聖杯戦争では英霊などという規格外の魂を召喚するのだ。そんな大それた儀式にはそれ相応の準備が必要はずだ。

それをたまたま、正規のマスターどころか一人前の魔術師ですらない俺が、何かの偶

然でサーヴァントを召喚できてしまった。準備すらない、事故にも等しい強引な召喚で、呼び出された側の英霊に不具合が生じないと考える方がどうかしている。

つまり……アーチャーの記憶喪失の原因は、俺のせいか。

「……はあ。マスターがマスターなら、サーヴァントもサーヴァントか。まあいいわ、そっちのサーヴァントの正体については不問にしましょう。記憶がないヤツに聞いてもどうしようもないでしょうし」

半眼で俺を睨んでいた遠坂が、呆れたように口を開く。その視線が「へっぽこ」と言っているような気がして、思わず気圧される。

そんな冷たい目を向けながらも——遠坂は、真剣に俺を見ていた。

「貴方たち、この後どうやって戦っていくわけ？」

トドメを刺すような、遠坂の詰問。それは、冷たい現実を突きつけたものだった。

マスターに選ばれたという俺は、聖杯戦争についての知識どころか、魔術師としての力すらろくに持っていない。

サーヴァントとして呼び出されたアーチャーの方は、自身の記憶が欠けている。それだけではなく、生身の肉体を持っているという規格外。

控えめに見ても、この組み合わせは異常に過ぎた。だからこそ——俺はその問いに、明確な答えを持ってない。

そもそも、俺はこの聖杯戦争とかいうバカげた儀式に巻き込まただけだ。好き好んでマスターに選ばれたわけじゃない。戦わなければ殺されるからといって、はいそうですかと言えるものか。こんなふざけた戦いは、やりたい奴だけがやればいい。

だが……事実として、俺はサーヴァントを召喚してしまっている。遠坂の話によれば、英霊は自分の願いを聖杯に託すために、サーヴァントとして召喚されるのだという。そうだとすれば、この黄金の青年にも大切な願いがあるはずだ。

俺が「戦わない」と言うのは簡単だ。だが、マスターとサーヴァントは二人で一組。マスターである俺が、戦いを放棄するということは——それはサーヴァントであるアーチャーの心を、土足で踏み躪るのと同じことだ。

ランサーと戦い、俺を助けてくれたアーチャーの願いを、自分勝手なエゴの為に犠牲にする……そんな決断が、できるわけがない。

押し黙る俺の代わりに口を開いたのは——どこまでも偉そうな、黄金の英霊だった。「その前に一つ言っておこう、雑種ども。」

——これは私の戦いではない。我はただ、その小僧の道化ぶりを愉しむのみ」その言葉に、再び空間が凍り付く。

理解が出来ず、呆然と立ち尽くすセイバーと遠坂を退屈そうに一瞥し……アーチャーは、俺に向き直った。

「その雑種——衛宮士郎、と言ったな。我は貴様の思想、価値観に毛ほどの興味もない。単に、貴様という人間を觀賞するだけだ」

アーチャーの紅い瞳は、俺だけを冷たく見つめている。情など一片も感じさせない、冷酷な裁定者の瞳。

——理解できない。

こいつは本気で、「衛宮士郎を觀賞する」と言っている。

確証はないが、断言できる。忘れている自らの記憶にすら、この英霊は執着していない。

「それは……どういう意味だ、アーチャー。アンタは、サーヴァントなんじゃないのか」「たわけ。貴様にとつて、我は頼り奉る者。それ以外の何者でもない。間違つても味方などと思わぬことだ。

——フン、まあ安心するがいい。今のところ、貴様の置かれた立場は面白い。聖杯などという願望器に興味はないが、当面は貴様のサーヴァントとして力を振るうとしよう」

そう皮肉げに呟くとアーチャーは、無聊の慰みにはなろうからな——と一言付け加えた。

嘲笑と共に向けられた台詞に、絶句する。

驚くべきことに、こいつは「聖杯に興味はない」と言い放った。記憶がないと言い張る以上……こんなヤツが何故召喚されたのかすら、俺には判らない。

アーチャーの興味は、ただ自分の愉悅のみに向けられている。

今すぐ契約を打ち切りたいという衝動に駆られるが……自身にとって不要になったと断じれば、この男は躊躇いなく俺を殺すだろう。

——恐ろしい。

未知のモノへの恐怖で、背筋に冷や汗が伝う。

召喚された英霊は、何かしらの望みを持っているのではなかったか。たとえ記憶を失っているにせよ、この男も聖杯に託すだけの願望があったから、召喚に応じたのではないのか。

にも関わらず……この男は、そんなものに微塵の関心も寄せていない。聖杯戦争という大儀式すら、この英霊は暇潰しと言い切ったのだ。

このサーヴァントは、常軌を逸した存在だ。その思考、価値基準は、俺に理解できるモノではない。

「アーチャー。その少年は貴方のマスターでしょう。それを、味方ではないと言うのなら——貴方は、なんのために召喚に応じたのですか」

黄金の男の異常性に、セイバーが怒りも露わに詰め寄る。返答如何では斬り捨てる

と、言葉ではなく激怒を以て告げている。

その光景に、アーチャーが微笑を浮かべる。それは俺に向けられていた嘲笑でも、冷笑でもなく——この男には不釣り合いな、優しいとも形容出来る笑み。

だからこそ、それは不気味だった。一体こいつが、何を考えているのか解らない。

男の雰囲気呑まれまいと、不可視の剣を突き付けるセイバーを見下ろし……アーチャーは、愉快げに喉を鳴らした。

「知らぬ。そもそも、我は聖杯などに興味はない。記憶こそ持たぬが、それは断言できる。

だが——この聖杯戦争という遊戯は、中々に痛快だ。英霊どもが潰し合う姿を見るのも悪くはない」

嘲笑と共に放たれた言葉に、セイバーが凍り付く。

このサーヴァントは、異常過ぎる。聖杯戦争を遊戯と言い切ただけでなく——この青年は、他のサーヴァントたちが殺し合う様すら暇潰しの娯楽としか考えていない。

「な——聖杯を求めて集った、我ら総ての英霊の願いを侮辱するかアーチャー！ 御身とて、サーヴァントとして現界した英霊のはず！」

そうセイバーが詰め寄った瞬間、高らかな哄笑が響いた。

少女の真剣さを、まるで道化の冗談とでも取ったかの如き笑い。最早嘲笑を越え、侮

辱としか思えぬ高笑いは、叩き付けるようにセイバーを蹴っていた。

いつそ悪辣と言つても過言ではないアーチャーの態度に、セイバーの面持ちが怒りに染まる。その何が楽しいのか、黄金の青年は額に手を当てて大笑している。

黄金の英霊が見せた余りの狂態に、遠坂も俺も動けない。屈辱に震えるセイバーだけが、アーチャーに激情の眼差しを向けていた。

永遠に続くかとも思わせる爆笑の後、アーチャーは息も絶え絶えに口を開いた。

「ハ——願いと云つたか、セイバー？ この我を、凡百の英霊どもと一緒にしたにするな。我は小僧の苦楽に付き合ひ、戦いを肩代わりし、顛末を楽しむのみ。願望器風情に託す願いなど、端から持ち合わせておらぬ」

そう言い切ると……アーチャーは、徐に意味ありげな目つきをしてみせた。

ねつとりと絡みつくような、おぞましさを感ぜさせる視線。黄金の青年は、喜悦に歪んだ笑みを宿してセイバーの肢体を舐め回していた。

その邪悪な双眸を向けられた刹那、稲妻のようにセイバーが動いた。

これ以上の侮辱は耐えきれぬとばかりに、アーチャーの首筋に突き付けられる剣。その先端は皮膚を突き破り、僅かに流血を強いている。

だが——ここに来てもアーチャーは、顔色一つ変えなかつた。今にも首を貫かれようとしているにも関わらず、その表情には余裕さえ見せている。



その傲岸不遜ぶりに、セイバーが齒軋りする。無抵抗の相手を傷付けるのは躊躇われるのか、ギリギリの所で少女は踏み止まっている。

止めるべきだと理解していても、止められない。今のセイバーは、それ程までに真剣に怒っていた。

「アーチャー、貴方は……貴方はまた——ッ！」

「あーはいはい、分かったから二人とも落ち着いて。ケンカはその辺にして、そろそろ行くわよ」  
と。

険悪な状況を仲裁しようとしたのか、二人を遮り、遠坂はいきなりわけのわからないことを言い出した。

その言葉に我に返ったのか、セイバーは渋々と剣を収める。アーチャーもまた、肩を竦めて口を閉ざした。これ以上の論争は無益だと、二人とも悟ったのだろう。

アーチャーに言いたいことはあるが……今の話を続けるのは傍目に見てもまずい。何もなかったような自然さを装い、俺は遠坂に向き直った。

「……ん？　行くつて、どこに行くんだ？」

「貴方が巻き込まれた聖杯戦争について、良く知ってるヤツのところよ。衛宮君、聖杯戦争の理由について知りたいんでしょ？」

もちろん、と頷く。

聖杯戦争の理由だけじゃない。他にも、訊きたいことは山ほどある。

何より——あの、理解を超えたサーヴァント。聖杯戦争について詳しい人物だというのなら、サーヴァントについての知識も持っているに違いない。

今の遠坂の説明だけでは……正直、俺は聖杯戦争というものに対して明確な認識を持ってない。巻き込まれてしまった、というのは理解しているが……この後、自分がどう振舞うべきなのか。アーチャーという男に、自分はどう接したら良いのか。今の俺には、それすら判らないのだ。

状況を判断するためには、正確な知識と情報が必要だ。時間は既に深夜を過ぎているが、今すぐ聖杯戦争に詳しい人間を訪ねるといふ選択肢は間違つてはいないだろう。

帰りが遅くなることが心配だが、幸い明日は日曜日だ。徹夜したところで、大した問題ではない。

覚悟を決めた俺を見て、遠坂は満足げに微笑んだ。

「じゃ、行きましようか。行き先は、隣町の言峰教会。そこがこの戦いを監督してる、エセ神父の居所よ」

\*\*\*

深夜の街を歩く。

既に日付は変わり、時刻は午前一時。

人どころか鳥や犬すら見当たらない、寝静まった夜の街。なんとなく不気味な気分になり、隣にいる連れを振り返る。

「俺のすぐ隣を歩いているのは、黄金の弓兵。」

しかし、あの甲冑は纏っていない。あの鎧は目立つし、何よりも金属音がうるさい。親父の古いクローゼットを漁ったところ、よくバイクに乗っている人が着ているような革の服——ライダースーツという服だろう——を見つけたので、アーチャーにはそれを着てもらうことにした。

あの鎧はアーチャーの魔力で編まれたものとの事で、脱着は本人の意思で自由に出来るらしい。必要とあれば服の上から鎧を纏うことも可能らしく、中々に便利だ。

「……………」

その一方……奇怪な格好をしているのは、俺のすぐ後ろに続くセイバーだった。

どうしても鎧は脱がないと主張したため、仕方なく鎧の上から雨合羽を着てもらったのだが………なんというか、怪しすぎる格好になってしまっている。

だが——外見こそ奇妙でも、彼女の緊張感はどこまでも本物だ。

隣の遠坂を守るように、甲冑姿のまま夜道を歩くセイバー。その緊張と警戒心は、敵意の眼光となつてアーチャーを穿っていた。

先程のやり取りからすれば、それも無理のない話だろうが……アーチャーの隣を歩く俺からすると、どうも居心地が良くない。

俺と遠坂、或いはそれに加えてセイバーの三人なら、弾む話もあつたのかもしれないが……このサーヴアントの影響で、俺たちと遠坂たちの間には微妙な距離がある。そのせいで、俺たちは沈黙を保つたまま歩き続けていた。

真夜中とはいえ、この辺りの道は知り尽くしている。歩くこと自体に抵抗はないが、互いに口を開けない緊張感俺の精神にとつて良くない。

意を決して、隣を歩くアーチャーに声を掛けてみる。

「なあ、アーチャー。アンタは——あのセイバーと、知り合いなのか？」  
「知らぬ」

俺の方を見ることすらなく、アーチャーは冷たく切り捨てる。

コイツとは、まともな会話すら困難なのか……と諦めにも似た感情が湧き上がるが——予想外にも、アーチャーは口元に笑みを湛えていた。

「我にはそもそも記憶がない。故に、あの女が何者であるかは知らぬ。だが——英霊の

座という概念を念頭に置けば、彼奴が我を見知っていた理由にも想像は付く」

「それって……もしかして、生前の知り合い、ってことか？」

遠坂の受け売りになってしまいが、英霊という連中は、生前に偉大な功績を残した英雄や豪傑だ。

歴史の教科書を読めば判るが、英雄というのは何も一時代に一人だけではない。物語の中にしたって、例えば三国志などは、短い時代の話でありながらも大勢の英雄が描かれている。

その理屈が正しいなら、生前に顔見知りだった英雄が、聖杯戦争に召喚されている……という可能性もあるはずなのだ。

それなら、セイバーの反応にも納得が行く。宿敵だったとか、裏切られたとか……このアーチャーとの間に、そういう関係があったとしても不思議ではない。

俺の言葉に、アーチャーは軽く驚いたような表情を浮かべた。

「ほう？　存外に頭が回るではないか、小僧。だが、貴様は一つ失念している」  
……ん？

我ながら、いいところを突いたのではないかと思つたが……何か、俺はヘンなことを言つただろうか。

はてな、と首を傾げる俺を見て、アーチャーは上機嫌に笑みを浮かべて見せた。

「解らぬか。では糸口を与えてやろう——雑種、貴様が今巻き込まれている遊戯は何だ？」

「……聖杯戦争、じゃないのか？」

「然り。時に問うが——貴様は、此度の聖杯戦争が何度目だと思う？」

「——な」

アーチャーの質問。その意味を理解して……衝撃のあまり、その場に躓き掛けた。

聖杯戦争は、英霊という存在をサーヴァントとして召喚する儀式だ。

それが過去にも行われているというのなら……セイバーとアーチャーが、何度か前の聖杯戦争で戦っていたという可能性も確かにある。その仮定が正しいとすれば、セイバーがアーチャーを知っていた事にも納得が行く。

「まあ、それは些か考えにくいが。この聖杯戦争は、『本物』の英霊を呼び出しているわけではない。当世の概念で言えばクローンに近い存在故、サーヴァントの記憶が『本体』、或いは別に召喚されたサーヴァントに完全に引き継がれるという可能性は低からう」

何の気紛れか、アーチャーは歩きながら親切に説明してくれている。

だが——俺の耳には、その言葉は入ってこない。それ以上の衝撃が、俺の脳を揺るがしていた。

アーチャーは、「この聖杯戦争は何度目だ？」と言った。それは、つまり……過去にも、この凄惨な殺し合いが行われてきたということではないのか。

サーヴァントという規格外の怪物が、互いを狙い合う大儀式。

そんなものが、何度も行われているならば……そこに巻き込まれた人間が、存在しないわけがない。

ランサーの槍を見た。

アーチャーの双剣を見た。

セイバーの剣を見た。

俺はこの目で、三人のサーヴァントの武器を見てきた。故に、断言できる。アレは武器という範疇に収まるモノではなく……桁外れの、「兵器」だ。

ただ振り回すだけで、大地に罅を入れ衝撃波を発生させる異形。巻き込むつもりがなくとも、アレはただの余波ですら人を切り刻める。

事実、俺はランサーとセイバーの戦いを見ていただけで殺されかけた。過去に、サーヴァント同士の戦いを見てしまった者が口封じをされているとすれば……こんな規模の戦いが、今まで話題にも上らなかつたことの説明もつく。

思い返してみれば、冬木市では行方不明事件や原因不明の……それこそ、オカルトのようなニューースも多い。与太話にしか思えなかつたそれらは——もしかすると、聖杯戦

争に関係しているのではないか。

「……………」

ぞつとする。

聖杯なんてものを奪い合うためだけに、一体どれほどの人間が殺されてきたのだろう。

馬鹿げている。こんなものは、馬鹿げている。

一体誰が、何のためにこんなことを――

「あれ。衛宮くん、そっち、道が違うんじゃない?」

その遠坂の声で、はつと我に返った。

後ろを振り向くと、遠坂とセイバーが、小道に入っていく俺を怪訝そうに見つめていた。

……あ、そうか。無意識のうちに入ってしまったけれど、この道を知らない人は結構多いのだ。

「橋に出ればいいんだろ? なら、こっちの方が近道だぞ」

アーチャーを睨むセイバーに気圧され、つつけんどんな口調になってしまう。俺に向けられた視線でないとはいえ、近くに居る側からすると心臓によくない。

踵を返して小道を進むと、二人は素直に付いてきた。セイバーの警戒心を向けられる



アーチャーはというと、どこ吹く風という様で周りの民家を眺めながら歩いている。

……まったく。その豪胆さ、少し俺にも分けてほしい。

ランサーと戦った時も、セイバーに剣を向けられた時も、アーチャーは眉一つすら動かさなかった。冷静というより、胆力そのものが違い過ぎる。

テレビに出ている腹黒そうな政治家にも、コイツほど豪胆な奴は居ないだろう。というか、アーチャー程に自信と余裕に満ち溢れた存在を、俺は今まで見たことがない。

なんとなく偉そうだし、コイツ、何処かの王様や指揮官なんかがびつたりじゃないだろうか。

……と、そんなことを考えながらしばらく進むと、川辺の公園に出た。

ここは結構な広さを持つ公園で、昼間には元気な小学生たちで賑わっている。で、ここから見える大きな橋を渡って、隣町の新都へ向かうのだが――

「へえ、こんな道あったんだ。こっちは滅多に通らないから、思わぬ発見つてところね」  
驚いたように、橋を見上げる遠坂。新しい発見に喜んでいるその横顔に、思わず見惚れてしまう。

「さつさと行くぞ、遠坂。気になるんだつたら、また今度来ればいいだろ」

遠坂に声を掛けると、橋へ向かって再び歩き出す。通り慣れた階段を上り、一直線に続く長い歩道橋へと足を踏み入れる。

予想はしていたが、相変わらずここは人通りが少ない。

というのも、そもそもここを歩いて通ろうとする人はほとんどいないからだ。新都までは距離が離れすぎているため、電車かバスを使って行くのが普通だ。

……でも、そういうえば、うちの学校の陸上部が昔ここを走ってトレーニングしてたという噂を聞いた事がある。

わざわざ好き好んでこんなボロい橋に来る連中が居るとは思えないが、この橋はやたら長い。ひよつとしたら、長距離走のトレーニングに使うような猛者もいるのかもしれない。デートなんかでここを通るよりは、そっちの方がまだ可能性がありそうにも思える。

「……………」

デート、という単語を思い浮かべて、ふと後ろの二人を振り返ってしまった。

上機嫌そうに橋を歩く遠坂は、夜というシチュエーションのせいか、いつもより綺麗に見える。美人だと思っではいたけど、こうして改めて見ると、なんというか……学校で見ていた時よりも可愛く見えて、まいる。

その隣を歩くセイバーは、緊張感に身を包んだままだが……橋から見える夜景のせいか、先程よりも幾分か和らいだように感じる。凛々しい雰囲気がとても似合っているけど、静かに街並みを眺めている横顔も、もう文句なしに可愛い。

……つて、馬鹿らしい。何考えてんだ、俺。

後ろからついてくる二人を意識しないように、歩く速度を速める。気のせいか、隣のアーチャーがニヤニヤ笑っているように思えて少し腹が立った。

\*\*\*

橋を渡り終えると、新都に着いた。

てつきり、駅前のおフィス街に行くのかと思つたが……郊外に向けて案内し出した遠坂を見て、目的地の場所を思い出した。

——言峰教会。

その場所だけは、一応俺も知っていた。といつても、あそこが昔孤児院だった、という情報を知っている程度だが。

なだらかに続く坂道を登っていくと、あれだけあつた建物の数も徐々に減っていく。代わりに見えてくるのは、無数の墓標。

……そう。この丘の斜面には、外人墓地が建てられているのだ。

「この上が教会ね。」

……あそこの神父、一筋縄じゃいかないから、衛宮くんも気を引き締めた方がいいわ

「よ」

それだけ告げると、セイバーを引き連れた遠坂はほとんど先へ進んでいく。

その方向を追っていくと……ぼんやり、建物らしき影が見えた。おそらく、あそこが目的地の教会なのだろう。

しかし、遠坂に「エセ神父」「一筋縄じゃいかない」と評されるとは、その神父は一体どんな人物なのか少し気になる。

神父という職業は、信仰心の厚く、敬虔な人物にこそ相応しいというイメージがあるが……遠坂がああ言うのだから、俺の想像している人物像とは違うのだろう。

ふと思いつ出したが、以前商店街で「すごいバイクに乗った神父がいた!」と話題になっていたことがあった。まさかとは思うが、アレは事実だったのだろうか?

「——む。見てみる雑種」

そうアーチャーに促され、考え込んでいた頭を上げる。すると、そこには——  
「うわ——すごいな、これ」

とんでもなく豪華な教会が、夜の闇に浮かび上がっていた。

この高台の殆どが教会の土地なのか、丘の上は見渡す限り平らに整地されている。

その奥に建てられた教会は、夜にも関わらず、荘厳な雰囲気醸し出して……迫力というか、威圧感を感じさせる。

信仰心の薄い俺には、今まで縁の無かった建物だが……これだけの厳肅さを前にすると、本当に神様という存在が居るようにも錯覚してしまうから不思議だ。

これからこの中に入るのだろうか、それには少しばかり勇気が要りそうだ。何とな、隣のアーチャーを振り返ってしまふ。

――  
黄金の青年は、難しい顔をして教会を睨み付けていた。

その顔は妙に真剣で、声を掛けることすら躊躇われてしまふ。何を考えているのか、アーチャーは眉根を寄せて立ち尽くしている。

首を傾げているところから見ても、何か疑問を抱いているようだが……この教会に、何か不思議な点があるのだろうか。

数秒ほど悩んでいたアーチャーは、何処か釈然としない表情を浮かべながらも、俺を見て静かに口を開いた。

「雑種。我は此処に残る。所用があるなら、貴様だけで済ませて来るがいい」

「……え？ 折角ここまで来たのに、アーチャーだけ置いてけぼりなんてできないだろ」

「たわけ。我は教会に赴いたのではなく、享樂がてら貴様の行脚に付き合つてやつたに過ぎぬ。

それに——此処に残るのは、どうやら我だけではないらしい」

そう嘯き、意味ありげに横に目を向けるアーチャー。その視線の先には、甲冑姿の少女。

……ああ、そういうことか。

遠坂もセイバーも、この黄金のサーヴァントを信用していない。俺と遠坂が教会に行く間は、セイバーがアーチャーを見張っているつもりなのだろう。

あちらの立場からしてみれば、それは当然の判断だが……先程のセイバーの様子を見る限り、この二人だけが残って何も起こらないとは思えない。

俺は遠坂と戦うつもりはないし、今のところはあちらも同様だと信じたい。だから……できるなら、揉め事を起こして欲しくはない。

「アーチャー。アンタ、セイバーと仲が悪いみたいだけど……俺は、遠坂たちと事を構えるつもりはない。だから、アンタからは手を出さないで貰えるか？」

「ほう」

俺の頼みに、アーチャーは興味深げな目を向けてきた。

……これでも、譲歩はしたつもりだ。

本来互いを殺し合うはずのサーヴァントに「戦うな」と頼んでいるのだ。今は戦い合っていないが、公然と戦わないと明言したわけではない以上、どう事態が動くかは判らない。

だから、俺は「絶対に戦うな」とは言えない。この英霊が俺の頼みを素直に聞くとは思えないが、それでも筋は通しておきたい。

そんな俺の葛藤を見て取ったのか……俺を一瞥すると、黄金の英雄は鷹揚に頷いた。

「良かろう。我はセイバーには剣を向けぬ」

「……えっ？」

予想外の言葉に、思わず目を見開く。

この傲岸な男のことだから、俺の話など無視するか、或いは一蹴されるかのどちらかだと思っていたのだが……。

「なんだ、貴様はあの女どもと戦わぬつもりなのであろう？　これが我の戦ならば一切の容赦なく殲滅しているが、所詮は遊興に過ぎん。マスターの意向には、それなりに従ってやるさ」

本当に従ってやろうなどとは欠片も思っていない口調で、アーチャーは傲然と呟いた。

……よく分からないが、とりあえずは聞き入れてくれたらしい。安堵で、僅かに息が漏れた。

頼みを無視されていたら、正直俺にはどうしようもなかった。コイツは俺なんか足元にも及ばないほどの力を持っているし、この左手に光る令呪も、正直使えるかどうか判

らない。

この男のことは、まだほとんど理解できてはいない。しかし……何故だかは解らないが、何となく、コイツは自分が口にした言葉は守る人間なのだろう、という確信があった。

「それに、この場所は——いや、言うまい。雑種に一々拝聴を許す事でもなからう」  
どこまでも倨傲に振舞う金色のサーヴァント。

だが……気のせいか、この一瞬。謎の言葉を紡いだ僅かな一瞬だけ、傲慢な威圧感が薄らいだように思えた。

目を瞬いてみれば、アーチャーは再び無表情に腕を組んでいる。その圧倒的なまでの存在感は、この青年が人を超えた英霊なのだと改めて実感させる。

きつと、気のせいに違いない。まさかこの男が——懐かしいものに出会ったように、無防備な表情を見せるなど。

「——さて。そつちも話は纏まったみたいね。じゃあ行きましようか、衛宮くん」

セイバーと何やら話し込んでいた遠坂が、こちらを見計らったようなタイミングで声を掛けてきた。

おう、とそれに返事をする、アーチャーに一声掛けておくのも忘れない。

「じゃあ、行ってくる。ちよつと待っていてくれ、アーチャー」



俺の言葉に、アーチャーは反応を返さない。その無言を肯定と受け取り、俺は立ち尽くす青年に背を向けて教会へと歩き出した。

待つていてくれた遠坂に続き、教会に向かう。その直前、静かに佇むセイバーがふと気になってしまった。

「――」

黄色い雨合羽に包まれたセイバーは、張り詰めた雰囲気のまま、少し離れた場所です立っていた。

珍妙な格好と刃のような警戒心は見事に噛み合っていないが、セイバーはそんな瑣事を気にしてはいない。彼女が気にしているのは――傲然と腕を組む、黄金のサーヴァントだけ。

本来は戦い合うサーヴァント同士、警戒するのは至極当然。しかし、それにしてもセイバーのそれは、度が過ぎて思うように思う。

セイバーとアーチャーの会話を聞いている限り、どうもあの二人は相性が良くないようだ……セイバーの敵意は、多分それだけが原因ではない。

実際、アーチャーの方はセイバーの敵意を欠片も気にしていない。それどころか、愉快な視線すらあの少女に向けていた。

サーヴァントであるという一点を除いて、殺意に近い敵愾心を向けられるほど、アー

チャーに非があるとは思えないが……あの二人には、過去に何かあったのだろうか。  
一抹の不安を覚えながら、俺は遠坂に続いて教会の扉を潜った。

## 4. 願いと想い

予想通り、と言うべきか。

礼拝堂の内部は、見た目に違わず荘厳だった。

何列にも及ぶ長椅子。中央に控える祭壇。それらが絶妙に調和し、神に祈る為の神聖な空間を作り上げている。

だが——おかしい。

教会というからには、そこに漂う空気は純然なものであるべきだ。神に仕え、神に祈りを捧げる人々が集うならば、そこは自然と清涼な空間になるはずだ。にも関わらず——  
——この空気は、これ以上ないほどに淀んでいた。

物理的に汚れている、というわけではない。外見も中身も、この教会は清潔さが保たれている。しかし……この空間は、それ自体が禍々しかった。

純粹でありながら、邪悪。壮麗でありながら、醜穢。内清外濁ならぬ、内濁外清とも言うのだろうか。この教会は、存在そのものが歪んでいる——。

「——綺礼。そこにいるんでしょう、出てきなさい」

益体のない直感を、遠坂の声が振り払った。

見たところ、この礼拝堂に人はいない。だが遠坂は、確信を持って中央の祭壇を見据えていた。

「——やれやれ。相変わらず、師を敬わぬ弟子だ」  
響く足音。

一体、いつからそこに現れていたのか。祭壇の裏から、長身の人物がこちらに歩み寄って来ていた。

よく鍛え上げられた瘦身を包む僧衣。胸に下げられた十字架。そして——どこか威圧的な、その空気。

一目で判った。この男こそが、この教会の神父。遠坂の言っていた、聖杯戦争の監督役に他ならない。

「ふむ。呼び出しに応じぬかと思えば、また変わった客を連れてきたものだ。ということとは……そうか。彼が最後のマスターか、凜」

「そ。一応は魔術師だけど、ほとんど素人だから見てられなくて。マスターになった人間は、ここに届けを出すのが決まりでしょ？ そのついでに、アンタから聖杯戦争について教えてやって」

「なるほど。では、その少年に感謝しなくてはな」

そう言うのと、長身の神父はゆっくりと俺に視線を向けた。その目に、背筋が強張るのを感じる。

どこまでも昏い、地獄のような双眸。

アーチャーの、人のモノではない血の双眸とは違う。人間でありながら、同時に非人間的なモノを感じさせる、薄暗く歪んだ汚泥。能面のような無表情と相まって、それは重厚な威圧感を醸し出していた。

直感する。コイツは——きつと、危険なヤツだ。

「ようこそ、言峰教会へ。私は、この教会を任されている言峰綺礼という者だ。君の名前はなんとこのうのかな、少年」

鷹揚に、右手を広げながら歓待の意を示す神父。

だが……その動作にすら、俺は危険を感じてしまう。重圧に負けまいと、腹に力を込めて男を睨みながら口を開く。

「——衛宮士郎だ」

「衛宮——士郎」

鳥肌が立った。

何の事はない。言峰という神父は、ただ確認するように俺の名を繰り返したただけだ。

だが——その笑み。静かに口元を歪ませたその微笑が、例えようもない悪寒を感じさせ

せた。

まるで、何か喜ばしいモノに出会ったとでも言うような。しかし、その喜びは……猫が鼠を見つけた時のように、微かな嗜虐を宿していた。

「礼を言おう、衛宮。よく凜をここに連れてきてくれた。君がいなければ、アレは最後までここに訪れなかっただろう」

慇懃な神父の声。その言葉に、遠坂が憤然と肩を竦める。

「ふん。わたしだって、ここに来る気なんかなかったわよ。だけど、素人をほっとくわけにも行かないでしょ。その辺りの対処、アンタなら得意でしょうし、一からしつけてやっつて」

「——ほう。これはこれは、そういうことか。良かろう、おまえが私を頼ったのはこれが初めてだ。衛宮士郎には、感謝をしてもし足りないな」

クク、と低く笑う言峰神父。

……なんだろう。言葉とは裏腹に、この男が俺に感謝しているとは少しも思えない。

表層では笑顔を見せながら、内心ではこちらを嘲笑しているような——そんな、薄気味悪い想像すら浮かんでしまう。

内心の怯えを抑え、顔に表情を出さないよう強張っている俺を……神父は、再び悠然と見下ろした。

「では、始めよう。衛宮、君は聖杯戦争についてのどの程度の知識を持っている？」

「遠坂から聞いた話だけ……聖杯戦争は、願いを叶える聖杯を奪い合う魔術師たちの儀式。魔術師たちはマスターと呼ばれ、それぞれ使い魔サルヴァントを召喚して戦う……つてことは、一応。

「ただ俺は、そんなことを言われてもてんで分からない。マスターつていうのがちゃんとした魔術師がなるモノなら、他に選びなおした方がいい」

「……なるほど。君は、本当に何も知らないのだな」

ふむ、とこちらを吟味するように見つめる神父。気のせいか、その目には哀れみすら浮かんでいるように感じる。

「それでは、その辺りの説明からしていくとしよう」

「そう言うと。言峰神父は、訥々と言葉を紡ぎ始めた。

——曰く。

俺に宿った令呪は聖痕であり、聖杯を手に入れるまでは消えることはない。マスターを辞めたいのなら、聖杯を手に入れる他はない。

聖杯は自らを所有するに相応しい者たちを選び、彼らを競い合わせ、唯一人の持ち主を選定する。

聖杯は霊体である為、マスターでは触れることが叶わない。聖杯戦争にサーヴァント

が必要な原因の一つがこれだ。

そして、自分のサーヴァント以外に聖杯に触れられる者……即ち、他のサーヴァントを全て排除するという行為がこの儀式の要になる。

しかし、サーヴァントは『英霊』だ。ヒトを超えた存在である以上、如何な魔術師であれサーヴァントを真つ向から倒すのは不可能に近い。

故に、聖杯戦争に於いては、サーヴァントのみならずマスターの命も狙われる。マスターが存在しなければ、サーヴァントは現世に留まる力を失うからだ。

だが仮に自分のサーヴァントが倒されてしまったとしても、令呪さえ残っていればマスターは他のサーヴァントと契約することもできる。だから、マスターを殺しておくところこそが、最も効率の良い戦い方なのだ——。

と、ここまで語り終えた神父。事前にある程度遠坂が説明してくれていたおかげか、その話はすんなり理解できた。

……が、ここで一つ疑問がある。

神父は、令呪こそがマスターの資格だと説明した。ならば、令呪を使い切ってしまったら、それはマスターではなくなるという意味なのではないだろうか？

「——ああ、一つ忘れていた。マスターであるのならば、令呪は大切にしておくことだ」  
俺の疑問を見透かしたように、言峰が付け加えた。



「……なんでだよ。令呪を使い切ってしまえば、そいつはもうマスターじゃないし、契約がなくなつたサーヴァントは他のマスターを探すだろ」

「その通りだ。令呪がなくては、その者は最早マスターではない。だが、令呪はそれ自体が強力な魔術だ。それを使い潰す者がいるとすれば——それは、救いようのない愚か者だろうよ」

むつとして語調を荒げた俺を見下すように、言峰が鼻で笑う。

……こいつ、やつぱり気に食わない。

俺の無知を嘲笑っているのか、或いはこの状況を楽しんでいるのか。どちらにせよ、コイツの性根が善であるはずがない。

「衛宮士郎。令呪とは、それ自体がサーヴァントを繋ぎ止める楔でもある。

——時に。君は、自分のサーヴァントと戦つて勝てると思うか？」

「？」

そんなの、できるわけがない。

神父の質問の意図が読めないが……あの黄金のサーヴァントは、俺なんかとは比べ物にならないほど強い。

未来が読めているとしか思えない先読みの方に、ランサーの魔槍すら防いだ黄金の鎧。例えアーチャーが無防備だとしても、傷付けることすらできるかどうか。

「ではもう一つ訊ねよう。つまらぬ仮定だが——仮に、君がサーヴァントとして召喚されたとして。君は聖杯に託す望みを持ち、聖杯を勝ち取る覚悟を持つてこの地に現界した。

——ところが。君のマスターは、契約を打ち切ると言い出した。

マスターとの繋がりが断られたところで、サーヴァントはある程度現世に留まることができる。しかし、そう都合よく新たなマスターが見つかるとは思えない。

君の目の前には、君の望みを切り捨て、君を裏切った元マスター。放っておけば、もしかすると敵として立ち塞がる相手になるかもしれない。

既に、自分を縛る令呪はない。そんな状況で——君ならどう動くかね？」

「——あ」

絶句する。

令呪さえなければ……マスターとは、サーヴァントに劣る存在でしかない。つまり、簡単に殺されてしまうのだ。

契約を打ち切った時点で、サーヴァントとの関係もなくなる。契約を断られたサーヴァントが、まだ聖杯を掴むつもりだったとしたら……サーヴァント使役魔を裏切った主は、マスター復讐を受けてもおかしくはない。

——アーチャーの、紅蓮の瞳を思い出す。

アイツは、聖杯に興味などないと言い切った。だが同時に……アイツは、この上なく冷酷だった。

マスターでなくなった俺は、アイツにとって何の価値もない。そうなれば、即座に俺は殺されるだろうという確信がある。

「それでもマスターを放棄したいというのなら、それも良からう。

その場合、聖杯戦争が終わるまで君の安全は保証する——私とて、おまえに構うほど暇ではないが、これも決まりでな」

「決まり？ 一体、誰がそんな事を決めたんだ」

「無論、聖堂教会だ。そうでなければ、神に仕える私が監督役として派遣されると思うか？」

聖堂教会。

世界に広がる一大宗教の裏側、普通に生きていれば関わり合いにならなくて済む組織。

その役割は様々だが、その内の一つには『聖遺物』の回収というものが含まれる。

つまり——この冬木市で確認された聖杯。魔術師たちが関わっているモノだとしても、それが聖遺物絡みとあれば教会は黙っていることなどできない。

それで、納得がいった。監督役と言ったが、この神父は聖杯戦争の監視役も兼ねてい

るのだろうか。

「聖堂教会は、三度目の聖杯戦争から監督役を派遣している。

此度の聖杯戦争は、通算五度目だな。前回は十年前であるから、これは今までで最短期のサイクルになるが」

そう呟くと。何かを思い出したように、言峰は唐突に笑みを浮かべた。

「前回といえは——君は、十年前の出来事を覚えているかね？」

「え——」

その微笑。

十年前という、その単語。

ただそれだけで、直感した。コイツは何か——良くないことを口にしようとしている。

「前回の聖杯戦争の最後、聖杯に触れたマスターがいた。その者が何を望んでいたのかは知らん。だがその結果、あの出来事が起きた。

——死傷者約五百名、焼け落ちた建物は百棟以上。未だ原因不明とされるあの大火災こそ、聖杯戦争の爪痕だ」

「——」

言葉を、失う。

それは。

それは、つまり。

——悶え苦しむ人々。

——崩れ落ちる建物。

——荒れ果てた大地。

延々と続く——死体。シタイ。したい。

そう、その地獄こそ。

あの惨状こそが、聖杯戦争の現実。

聖杯を手にした者が、ただ願っただけで——五百もの人命が、ボロ雑巾のように棄てられた。

そんな非道すらも、この聖杯戦争では罷り通ってしまう。

問題だったのは、この儀式に召喚されるサーヴァントたちだけではない。聖杯とはそれ自体が、これ以上なく危険な兵器に成り得るのだ。

こんな——こんなふざけたモノを放っておくなんて、できるものか。

「衛宮くん? ……ちよつと、貴方大丈夫? 顔色が真っ白だし——その、なんなら休んだりする?」

立ち尽くす俺を心配したのか、遠坂が声を掛けてくれる。その一声で、何とか吐き気

を抑えられた。

「サンキユ、遠坂。もう大丈夫だ」

こちらを不安そうに見つめる遠坂に手を振り、問題ないと告げる。

そんな俺を、言峰は愉快げに見下ろしている。

……確信する。コイツは、俺の苦悩を楽しんでいる。

それに気付いて、臓腑が怒りで煮えわたった。こんな男が、聖杯戦争の監督だつて？

——ふざけやがつて。俺は、おまえなんかの世話になるものか。

おまえが俺を見て楽しむというのなら、俺はおまえを利用してやる。せめて、俺の質問くらいには答えやがれつてんだ。

「なあ。アンタ、聖杯に触れたマスターがいる、つて言っただけど……それつて、過去に願いを叶えたヤツがいたつてことか？」

「……いや」

その瞬間、初めてこの神父の顔から余裕が消えた。

遠い昔を思い出すかのように、その視線は上方に向けられている。余りに真剣なその表情に、一瞬毒気を抜かれてしまう。

「聖杯を勝ち取った者は、確かにいた。いや——勝ち取ることができた者、と言うべきか。」

だが、最後の最後でその男は心変わりした。

その者が何を考えていたのかは知らん。だが事実として……聖杯は完成せず、残されたモノはあの災害だけだった」

朗々と語る言峰。

だが、その口調には……隠しきれない悔恨と、僅かな自嘲が滲んでいた。

まるでそれを見て来たかのような、遠い目。俺の方を見ていながら、この男は俺を見ていない。

黙り込んだ神父に何を感じたのか、遠坂はふん、と不満そうに吐き捨てた。

「そりゃあ詳しいわよね、アンタ。なにせ、前回のマスターの一人だったんだから」

「え——!?!」

驚きで、声漏れる。

それはおかしい。この男は、自分が聖杯戦争の監督役だと言った。だというのなら、それがマスターであってはならない。

審判自身が、ゲームに加わっているようなものなのだ。それでは、ゲーム自体が成り立たなくなってしまう。

俺の疑問に感づいたのか、言峰は両手を後ろで組むと、再び説明を始めた。

「——ああ、前回の監督役は私ではなく、私の父だった。」

監督役の息子がマスターになるなど、それ自体があつてはならぬことだったのでう。私は真つ先にサーヴァントを失い、そのまま父に保護された。

父は、その折に亡くなつた。以後、私は監督役を引き継ぎ、この教会を任されている」  
そう言う。言峰は、静かに俺の目を見つめてきた。

その昏い瞳には、何の感情も宿っていない。あるのはただ、衛宮士郎という人間を鑑定する冷静さだけ。

「話はここまでだ、衛宮士郎。これ以上、説明の必要はあるまい。

この戦い——聖杯戦争に参加するかを、ここで決めよ」  
重圧すら感じさせる、神父の詰問。

……わかつている。今の俺が取るべき道は、ただ一つだけだ。

未だに実感はないが、俺はマスターとして選ばれた。逃げ道など、もう残っていないのだから——俺は、立ち向かうまでだ。

それに……今はもう、戦う目的も意思も生まれている。俺は魔術師だ。ならば俺は、他の魔術師やサーヴァントたちの脅威を止めなければならぬ。

それこそが——正義の味方の、あるべき姿だ。

深呼吸をする。

もう、俺には迷いはない。後はただ、この覚悟を口にするだけ。



「——戦う。俺はもう、十年前のような出来事を起こさせるわけにはいかない」

その俺の宣言を、どう受け取ったのか。言峰綺礼は、満足げな笑みを浮かべて頷いた。「結構。それでは君を、七人目のマスターと認めよう。」

この瞬間に、今回の聖杯戦争は受理された。

——これより最後の一人になるまで、この街における魔術戦を許可する。各々が自分の誇りに従い、存分に競い合え」

重々しく、その言葉が教会に響く。

その瞬間に、理解した。俺はもう、後戻りをする道は残されていない。

自分の記憶を持たない、あの傲慢なサーヴァント。俺は今この時から、アイツと共に聖杯戦争を勝ち抜く他なくなった。

小刻みに、身体が震えているのを感じる。

だけど、俺は決めたのだ。一度決めたのなら、もう怯えているわけにはいかない。

「——そう。それじゃ、これで聖杯戦争が始まったわけね。行くわよ、衛宮くん」

それだけ言うと、遠坂はくるりと神父に背を向けた。その呆気なさに、思わず神父の顔を見てしまう。

言峰神父の方も、あっさり去って行った弟子を無感情に見つめている。この男も、遠坂に向ける言葉は残っていないのだろう。

ふう、とため息をついて、遠坂の後を追う。短い時間だったが、とても疲れた。

……この、言峰綺礼と名乗った神父。

俺はどうも、コイツとは相性が悪いらしい。なんというか、無性に癪に障るのだ。そのくせ、コイツの言葉は妙に耳に残る。

神父の威圧感から逃れようと、遠坂に続いて出口に向かう。いつの間にか、遠坂は外に出てしまっていた。

教会の扉を潜り、外界に足を踏み出す。もう、この場所に用はない。後はただ、夜の街を帰るだけ。

——その、瞬間。

「——喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う」

そう、祝のろうように神父は告げた。

\*\*\*

時間は僅かに遡る。

衛宮士郎と、遠坂凜。第五次聖杯戦争に於ける二人のマスターが、教会の内へと消えていった後——残されたのは、その二人が従えるサーヴァントだった。

傲然と腕を組む長身の青年。

現代の衣服に身を包んでも、その金色の煌きは隠しきれるものではない。

真紅の双眸は伏せられ、天を衝くように逆立っていた黄金の髪は、端正な容貌を彩るように下ろされている。

しかし、様相に多少の変化があろうとも、強大な威圧感は微塵も損なわれていない。夜の闇すら寄せ付けぬ圧倒的な輝きは、教会という場所と相まって威厳に満ちた神聖さすら漂わせていた。

その鮮烈なまでの存在感は、ただそれだけでこの青年が破格の英霊なのだとしめる。一身でありながら誇る大山の如き威容は、並の英霊では有り得まい。

だが、このサーヴァントが異様だと言うのなら——もう一人のサーヴァントも、また尋常では有り得なかった。

凜と佇む、小柄な少女。

白銀の甲冑の上から黄色の合羽を羽織るといふ風体でありながら、身に纏う緊張感はどこまでも鋭い。

翡翠色の眼差しは、一片の淀みも無く澄み渡っている。最高級の宝石ですら、この瞳の前には曇るだろう。

絹糸のような柔らかさを感じさせる、結われた美しい金髪。瑞々しく整った面持ちは、黄金の青年に劣らぬ美貌を見せていた。

しかしその美しさは、妖艶なそれとは位相が異なる。どこまでも清涼なその雰囲気は、寧ろ名剣のような純粹ささえ感じさせる。

まるで神代の彫像のような、希代の美少女。その視線は、刃となって黄金の英霊を鋭く貫いていた。

「……………アーチャー」

ぼつり、と可憐な唇から言葉が漏れる。その声音は、紛れも無く敵意の色を含んでいた。

何も、不思議な話ではない。この地に現界したサーヴァントは、須く互いを殺し合う宿命にある。故にサーヴァントは、互いを敵視こそすれ友好視などするべくもない。

しかし——聖杯戦争に於いては、戦略こそが物を言う。状況によつては、サーヴァン

ト同士・マスター同士が手を組むことすら起こり得る。

それも道理だろう。サーヴァントは、その一人一人が災害にも匹敵する脅威。一人のサーヴァントを打倒出来ぬのなら、複数の力を束ねれば良いのだ。

今のセイバーの状況は、それと似て非なるものと言える。

セイバーの主とアーチャーの主は、厳密には手を結んでいるわけではない。暗黙の裡に休戦状態になってはいるが、誰一人としてそれを明言してはいないのだ。

だが、アーチャーのマスター……衛宮士郎という少年は、偶然この聖杯戦争に巻き込まれたという、異端中の異端。

通常の魔術師ならば、これを好機と見做し、何も解らぬ少年を打ち倒すことで聖杯戦争の一角を潰しにかかるだろう。

だが——彼女の主、遠坂凜はそうしなかった。

戦う覚悟のある者ならば、凜とて容赦はすまい。年齢こそ若いが、彼女は希代の才能を秘めた一流の魔術師。聖杯戦争への覚悟など、とうの昔に終えている。

にも関わらず——凜には、ただの素人を無慈悲に刈り取るような真似はできなかった。

表面を取り繕ってこそいるが、遠坂凜という少女は善人だ。相手がマスターであれ公明正大に接する気性は、セイバーとて好ましく思っている。

サーヴァントとして現界しているが、その前にセイバーは一人の騎士だ。彼女が守るべきは無辜の民であり、それは例えマスターとなった少年であつても例外ではない。聖杯戦争について最低限の知識を与え、自らと平等のステージに立たせるという凜の決断は、彼女の騎士道に照らし合わせても正しいものだった。

しかし——あのサーヴァント。黄金の英霊だけは、彼女の矜持とは相容れない。

セイバーという英霊が聖杯戦争に加わったのは、実はこれが最初ではない。この時代より十年前、第四次聖杯戦争の際にも、彼女は剣士セイバーのクラスとして現世に召喚されている。

その際に、敵対するサーヴァントの一人。弓兵アーチャーとして立ち塞がったのが、彼女の視線の先に立つ黄金の青年だった。

前回の聖杯戦争に於いて、セイバーは数多のサーヴァントと戦った。アーチャーの氣質や戦法も、ある程度は心得ている。

だが、その在り方は常識の埒外。思想、行動、宝具に至るまで、その全てがセイバーの想像を超えていた。

彼女が思い出すのは、アーチャーの戦闘方法。英霊にとつて最終兵器であるはずの宝具を、まるで石礫の如く擲つ異様。彼女の記憶が正しければ、飛行宝具すら所有していた。

視認出来ただけでも、彼の英雄の用いた武器は数十を超える。前回の最後の戦いで、セイバーは膨大な物量の前に一方的に黽まれるだけだった。

そして何より……あの英雄の思考、思想。自分以外の全てを見下すその在り方は、セイバーには決して受け入れられない。

今剣を交えたところで、セイバーは今度こそ負けぬという自負がある。今回のマスターは、前回と異なり相性が良い。供給される魔力すら、以前の主を上回る。

だが、それでも。セイバーは、あの男に対して必勝を確信出来なかつた。

正体すら未だ判然とせぬ異端の英霊。最上級の英霊である自分にすら、底の掴めぬその力。故にセイバーは——この男こそを、最大限に警戒していた。

「——フン。また随分と猛々しい面構えではないか、セイバー」

そんな彼女の感情を見通したのか。昂然と胸を張るアーチャーは、僅かに目を細めてセイバーの動向を観察していた。

揶揄するようなアーチャーの口調に、白銀の籠手に力が入る。この英霊の前に於いて、セイバーには僅かな油断もない。

「……やれやれ、そう怖い顔をするな。同じサーヴァントの誼だ、言葉を交わしたところで問題はあまるまい」

黙して口を開かぬセイバーに呆れたのか、アーチャーが鼻を鳴らした。

「——貴方に語ることなど何も無い。我らはサーヴアント、交わすべきは言葉ではなく剣だ、アーチャー」

「ほう——ならばその剣で我と遊ぶか、セイバー」

す、とアーチャーの瞳が妖しい色を帯びる。その血の輝きが放つのは、紛れも無く殺意の色。

どれほど気に入った相手であれ、必要と断ずれば殺す。黄金の英霊の仮借無さは、ただその絶大な殺気のみで十二分に伝わった。

全身が凍えるような、空間すら捻じ曲げる殺意。常人ならば、その空気の中てられただけでも正気を失うだろう。

だが、セイバーは凡百の人間とは程遠い。殺意や憎悪の視線など、数え切れぬほど受けている。騎士の王たる彼女は、アーチャーの視線にも身動き一つしなかった。

息の詰まるような、僅かな静寂。ややしばらくして、セイバーは静かに首を振った。

「……いいえ。私の主は、貴方のマスターと戦うことを望んでいない。そちらが手を出すというのなら容赦はしませんが、マスターの命令がない限り、私は貴方がたに剣を向けるつもりはありません」

「——違うな。間違っているぞ、セイバー」

その否定に、虚を突かれるセイバー。



アーチャーの予想外の返答に、刹那の間思考が止まる。その間隙を縫うように、黄金の青年は表情を変えた。

嗤うように。

翔るように。

邪悪な、しかし確信に満ちた微笑を浮かべて……アーチャーは、セイバーを見下ろした。

「お前は、我が怖いのだろうか？」

途端。アーチャーの眼前の床に、鋭い亀裂が走った。

地を割った要因は一目瞭然。セイバーが、憤怒を以て剣を叩き付けたまでのこと。

挑発とも取れるアーチャーの暴言に、翡翠の瞳が怒りに染まる。空間を支配する殺意は、今やセイバーのものとなっていた。

「戯れ言を。私を侮辱するつもりか、アーチャー」

「そう思うのなら、その剣で挑み掛かって来れば良からう。サーヴァントが交えるべきは剣だと、今その口で述べたばかりではないか」

「……………」

武器すら構えず、腕を組んだまま立つアーチャー。

だが、無防備な姿を取っていたとしても……セイバーは、この仇敵に挑みかかることはできなかった。

前回の聖杯戦争を思い出す。この英雄は、宝具を弾丸として撃ち出すという規格外の戦い方を見せていた。

宝具を自ら手放すなど正気の沙汰とは思えないが、脅威である事は疑いようもない。宝具の弾丸は音速を超え、ただの一撃で山すら崩す。

しかし、アーチャーの真の脅威はそんな物ではない。この英霊は、宝具と思われるその武器を無数に所持しているのだ。

宝具の射出攻撃として、一本や二本では恐れるには能わない。セイバーの聖剣と身体能力を以てすれば、ただ弾くだけで事足りる。それが五本、十本と増えようとも、彼女の自信は揺らがない。

では——二十本、三十本になればどうか。

セイバーが記憶している限り、前回の戦いで、アーチャーは三十二本もの宝具を同時展開していた。それが彼の限界だと思えるほど、樂觀視ができるはずもない。

それ程の宝具の攻撃を受ければ、如何にセイバーとて無事では済まない。今この瞬間にも、頭上から、側面から、足元から、背後から、アーチャーの宝具が向けられている

かもしれないのだ。

セイバーの首筋に、緊張感で汗が流れる。極限まで高まった警戒心は、無暗にアーチャーに挑む選択を愚策と断言していた。

「やはり、か——。セイバー、お前は我を知っているな？」

冷たく、確信と共に放たれたその一言。

ただ雰囲気のみで場を塗り潰す青年は、紅い瞳でセイバーを射抜いていた。

「だが、それにしても奇妙だ。記憶が失われているとはいえ、生前の知己ならば、貴様と見えて何かを感じぬ道理はない。

それに、貴様は我を真名ではなく『アーチャー』と呼んだ。知己であるならば、我を真名で呼ぶはず。つまり——」

冷静に、冷徹に。

尋常ならざる鑑識眼を以て、アーチャーはセイバーを分析する。

自らと初めて合見えた時の、セイバーの反応。

幾ら隙を見せても、自らの命を奪いに来ない警戒心。

明らかに「何かが来る」と知っているような、不自然な足運び。

言葉の節々から漏れる、過剰なまでの敵意。

幾つもの点は線となつて、アーチャーの中で一つに纏まる。自らの記憶を持たずと

も、この英霊はその頭脳と鑑識眼のみを以て、セイバーの状態を看破していく。数瞬の内、アーチャーは結論を導いた。

「——セイバー。お前は、何度聖杯戦争に参加している？」

青年の問いに、少女は沈黙を以て応じる。その反応こそが、何よりも雄弁に真実を語っていた。

黙り込むセイバー。それを嘲弄するように、黄金の青年は辛辣に笑った。

「これは面白い。同じ英雄が、幾度も斯様な遊戯に興じていようとはな。貴様に縁の品が、それ程現世に散逸しているのか。或いは、貴様はそれだけ高名な英霊なのか。それとも——」

アーチャーの視線が、セイバーの体を撫でる。

舐め回すような、淫靡で卑猥な瞳。それを向けられる不快感に、セイバーの体が強張る。

そのセイバーの反応すら愉快なのか、アーチャーの笑みは一層深まっていく。最早嘲笑を隠そうともせず、アーチャーは笑みに歪んだ口を開いた。

「——それほどまでに、聖杯に託したい願いがあるのか」

表情と相反する冷徹な声音に、セイバーは顔を伏せる。その小柄な体は小刻みに震え、剣を握る手には一層力が込められる。

それを見下ろす青年は、凍て付いた眼差しを向けたまま。どこまでも冷たいその瞳は、一切の感情を宿さない。

アーチャーは口を開かず、セイバーもまた顔を髪で覆い隠したまま動かない。僅かに吹く風だけが、空間に響く音だった。

やがて……俯いたまま、少女は微かに首を振った。

「……貴方には解らないだろう。私の願いは、貴方には永劫解らない」

少女の言葉に、先程までの力強さはない。零れるように弱々しい声色に宿るのは、紛れもない苦渋。

その声を聞き、青年の眉が吊り上る。セイバーを嘲笑う笑みを掻き消し、アーチャーはやれやれとばかりに首を振った。

「それは早計だなセイバー。願望には種類がある。余りに小さすぎる願い、身の程を超えた望み、自己を顧みぬ悲願。人の数だけ願望はあるが、その本質はどれも変わらぬ。それは即ち——『こうあつて欲しい』という、人間の希望だ。善悪や大小の差こそあれ、そこに貴賤などあるまい」

アーチャーの語りに、セイバーが驚いたように顔を上げる。

人を嘲笑い、他者を見下すことしかしなかつた黄金の青年。この男が他人を認めるような発言をするなど、それだけで驚きだった。

だが……同時に、違和感もある。つい先ほど。マスターであるあの少年の家で、この男は何と言った。

「アーチャー。貴方は、私たち英霊の願いを嘲笑ったばかりではないですか」

それにも関わらず、何故今度は願いを認めるようなことを言うのか——。セイバーの非難の瞳に、アーチャーの顔が不快げに歪んだ。

「たわけ。我が嗤ったのは、願望ではなくその実現手段だ。願いを叶えてくれる聖杯だと？ 馬鹿馬鹿しいにも程がある。

よいかセイバー。夢とは己の力で掴み取るものであり、願いとは己の力で叶えるもの。然したる代償も払わずに、結果だけを享受しようなど虫が良すぎると思わぬか。

第一——望んだだけで物事を好き勝手に変えようなど、それは人の道ではない。それこそ、そこに祀られている下らん神どもと同じではないか。

世を乱し、世を正すは人の役割。神の紛い物など、それだけで虫唾が走る」

そう言い捨て、黄金の青年は忌々しげに横に聳える教会を見やった。その態度に、神に対する畏敬の念など微塵も感じられない。

あるのはただ、嫌悪感のみ。神が気に食わぬ、と。アーチャーは、全身でそう物語つ

ていた。

「またも意表を突かれ、翡翠の瞳に驚きを浮かべるセイバー。まじまじと自分の顔を見つめてくる少女に、アーチャーは肩を竦めてみせた。」

「なんだセイバー。我の話はそこまで意外だったか？」

「……いえ。貴方の言うことは正しい、と思います」

十年前。

かつての聖杯戦争で、セイバーはこの男の言動を、一片たりとも理解できなかつた。

ただ只管に傲慢で、常軌を逸しているとしか思えぬその思考。聖杯を己の物と断言し、自らの願いを嘲笑い、拳句には自らに求婚すらしてみせた黄金の英霊。この男と対峙して、不快以外の感情を覚えたことなどない。

だが——今この男が語った言葉は、不思議な程にセイバーの胸に響いた。それを正しいと感じている自分に、セイバーは何より驚いていた。

願いは、自分の力で叶えるもの。

ああ、確かにそうだろう。結果を出すには、努力をしなければならぬ。利益を得たいのなら、代償を払わなければならない。それは至極当たり前のルールだ。

しかし——努力をしても。代償を払っても。それでも対価を得られなかつた者は、一体何に縋れば良いのか。

「……それでも、私は聖杯に託す願いがある」

セイバーの唇から、ぼつりと言葉が漏れる。

以前のアーチャーは、自分の願いを嘲笑った。だが、このアーチャーは以前の彼と同じではない。

聖杯戦争のシステム。全容は解せずとも、召喚された英雄としてセイバーはある程度の知識を持っている。聖杯によって召喚されたサーヴァントは『本体』の現身であり、当然ながら聖杯戦争が起きるたびにサーヴァントは『本体』から複製され直す。記憶を維持し続けているセイバーこそが、サーヴァントとしての特例なのだ。

ならば。願いに貴賤はないと語った今のアーチャーなら、以前とは別の答えを返してくれるかもしれない。

あの戦いを越えて、セイバーの願いは変わった。アーチャーに嗤われ、ライダーに諭され、バーサーカーに砕かれた彼女は、かつての願いだけでなく、自分自身にすら自信を持ってなくなってしまうた。

そんな余裕のなさが、彼女を突き動かしたのか。今度こそ、自分の願いは正しいという確証を望んでいたのか。

気付けばセイバーは、自分を嘲笑った男に再び自分の願いを語ろうとしていた。

「……私はかつて、王として国を守っていました。しかし——私は、王に相応しい人間で



はなかつた。私の過ちの結果、その国は滅びてしまった。

だから私は——あの選定をやり直したい。聖杯が万能だと言うのなら、私より相応しい王を選び直すことも可能でしょう」

再び、あの嘲笑を向けられるかもしれない。

その恐れは、確かにセイバーの裡にあつた。だが……それ以上に、セイバーの心には渴望があつた。

どこまでも自分を貫く、自信と余裕に満ち溢れた英霊。この青年なら、或いは自分とは違う答えを持っているかもしれない。

自分を見下し、嗤うというのならそれで良い。誰に笑われようとも、誰に解つて貰えずとも、セイバーはただ自分の悲願を貫く心積もりだつた。

しかし——それでも尚。セイバーは、アーチャーの言葉に僅かな期待を寄せていた。

「——ふむ」

予想外、と言うべきか。

笑うことも、嘲ることもなく。ただ無表情に、アーチャーはセイバーを見下ろしていた。自然と、セイバーはそれを見上げる形になる。

交錯する、紅と翠の瞳。数瞬の時の後、紅の瞳が微かに動いた。

「なるほど。己の過ちを、なかつたことにしたいと願うか。それは、人ならば誰もが一度

は持つ願い。『あの時、ああしておけば良かった』と、思わぬ者などおらぬだろう」

肯定とも取れるその言葉に、セイバーの表情が驚きに染まる。

それを冷然と見下ろして。だが、とアーチャーは言葉を続けた。

「だがな、セイバー。それは、歴史の改竄という神の奇跡だ。強大な力には、それ相応の責任が伴う。その意味を——お前は、本当に理解しているのか？」

「え——」

再び絶句するセイバー。

力に責任が伴う？ そんなことは、言われずとも百も承知している。

だから自分には、民を統治する責任があつた。外敵を防ぎ、国土を守り、民衆を救う。その義務を果たそうと、その責任を果たそうと、セイバーはいつでも走り続けて来た。

しかし——現実には、どこまでも非情だった。守つたはずの民草は彼女を詰り、轡を並べた戦友は彼女を裏切つた。

それでも。

それでも良いと、思っていた。

例え何があるうとも……笑っていた人たちが、確かにいた。それなら良いと、ただそれだけを思つて彼女は剣を振るい続けた。

けれど——最後に残つたのは、地獄だけ。

悲嘆に暮れる人々。荒野に斃れる騎士。そして……息子の血に塗れた、自分の体。

こんな結果は。こんな結末は、間違っている。こんな終わりが、認められるはずがない。

故に、やり直しを。今度こそ、正しい結末に。みんなが笑って暮らせるように、願うのだ。次は——自分のように、間違った者が王位に就かぬよう。

「王であつたと言つたな、セイバー。暴君であつたにしろ賢君であつたにしろ、お前は英雄として歴史に名を残す功績を上げたはずだ。つまり、お前は数多くの人間どもを救い、そやつらに英雄として崇められたわけだ。でなければ、英霊として今此処に立っている道理がない」

アーチャーの言葉に、少女の体が強張る。

セイバーは、自分がそれに相応しい結果を出したとは思っていない。だが事実として、彼女は英霊として『世界』と契約する資格を持つ功績を打ち立てた。

それこそが、何よりも間違っている。自分より優れた、自分より相応しい王が、必ずどこかにいたはずだ。それを考えると、彼女はいたたまれなくなる。

ごめんなさい、と。

私なんか王になつてしまつて、ごめんなさい。

貴方たちを死なせてしまつて、ごめんなさい。

何度も何度も、彼女は心の中で謝ってきた。時間の止まったあの丘でも、彼女は何度も謝った。

けれど——それに応えてくれる者もういない。許してくれる者など残っていない。彼女が守ろうとした人は、誰も彼も死んでしまった。

だからこそ、自分はやり直したい。聖杯に縋ってでも、この身を焼き尽くしてでも、あんな結末は変えなければならぬ——。

「セイバー。お前の願いは、お前を信じた者たちへの裏切りではないのか？」

——故に。

その言葉は、他の何よりも鋭く少女の心を穿った。

「な、にを……」

打ちのめされ、呆然と目を見開くセイバー。

侮蔑や嘲笑なら、とうに覚悟していた。自分の選んだ道と、この英霊の在り方は相容れぬと、初めから分かっていた。

だけど。こんな形の否定は、予想もしていなかった。

この英霊が。傲岸不遜な、この青年が……哀れむような、沈鬱な表情で自分を見つめ

ているなど、考えることすらできなかつた。

怒りも憎しみもなく、ただ驚きのままにセイバーはアーチャーの瞳を見つめる。その態度も、その言葉も、今のセイバーには、到底理解が及ばなかつた。

あるのはただ、微かな胸の痛みだけ。けれど、一体自分が何故痛みを覚えているのか、彼女にはそれすら解らない。

気付けば条件反射的に、セイバーは反発の言葉を紡いでいた。

「——貴方に、私の何が解るといふのですか」

「馬鹿め、貴様の事情など知った事か。貴様の人生など知らぬし、背負ってきた重みも、犯した過ちも私の知るところではない。それを知るのは当人たる貴様のみだろうよ。

——だがな。貴様のみが知り、貴様のみが担う責を、貴様は自ら放擲すると宣言したのだぞ。

これが、お前を王と崇めた民どもへの裏切りでなくて何だと言うのだ、セイバー」  
間髪を入れずに喝破するアーチャー。威厳に満ち燦然と輝くその姿は、言い放たれた言葉と相まって、セイバーの心を強かに打ちのめした。

民への裏切り？ 馬鹿な。そんなことこそ有り得ない。

こんな間違つた人間が王位に就き、国を統べ——その果てに、守るべき民も、国すらも滅ぼしてしまった事実こそが、何よりの裏切りではないのか。

それを……その結末を変えるために。人々のために、国家のために、自分はこうして聖杯を求めている。その何処が間違っていると言うのだ？

そもそも、人を嘲笑うばかりのこの傲慢な英霊に、自分のことが解るわけがない。人々に、国家に身を捧げ、安寧と繁栄を約束するのが、彼女が王として在りたいと思つた姿。ただ自分のみがあるだけのこの男の姿とは、相容れる道理がない。

——だというのに。セイバーは、この黄金の英雄に反論する言葉が浮かばなかった。色を失い、青ざめた顔で立ち尽くす少女に何を感じたのか。小刻みに震えるその肩を見下ろし、アーチャーは微かに鼻を鳴らした。

「解らぬか。ならば良い。どちらにせよ、そろそろ頃合いだ」

その言葉に、セイバーが教会に向き直る。今まで貝殻のように閉じていたはずの扉が、いつの間にか大きく開け放たれていた。

興味を失つたように、再び腕を組むアーチャー。その視線の先には、歩いて来る二人の人影。

向かってくる自分の主を見ても、セイバーの心には何も浮かばない。出迎えの言葉すら、今の彼女は思いつけなかった。

彼女の心に渦巻くのは、アーチャーの言葉。

暗い瞳とともに向けられた、「裏切り」という単語。その一言が、霧となって少女の心

を覆っていた。

「——私は。間違つてなど、いない」

ぼつりと弱々しく漏らしたのは、果たして彼女の本心だったのか。少女の言葉は風と成つて、夜の闇に消えていった。

\*\*\*

こつり、こつり。

誰もいない空間に、静かな足音が響く。

足音の主以外に、この静謐な礼拝堂にいる者は居ない。あるのはただ、像として安置された神の子だけ。

堅い足音を立てて歩くその男は、やがて像の前まで歩み寄ると、ゆつくりとその顔を上げた。視線の先には、十字架に磔にされた救世主。

昏い眼差しで、ぼんやりと像を見上げながら。僧衣姿の男は、歪に嗤つて独語した。

「——衛宮士郎。あの男の息子がマスターとは、数奇な運命もあつたものだ」

能面のような表情に浮かぶのは、喜悅。

その手は、祈りを捧げるように十字を切っているが……その愉悅に歪んだ笑みは、神

に祈る者の態度とは程遠い。

一体何が可笑しいのか。堪え切れぬとばかりに喉から笑い声を零しながら、抱擁するように男は両手を広げてみせた。

「ああ——やはり、私は答えを知らねばならぬらしい」

改めて、自己の内心を確認するように発せられた声。

事実、それは男にとっては目的の再確認であり——同時に、神への誓言でもあった。

歪んだ笑みと、深淵を思わせる瞳を見せながら。この男はどこまでも敬虔に、神への感謝を捧げ続ける。

善悪はどうあれ、この男は確かに神を信じていた。その信仰はまぎれもなく本物であり、この神父は聖職者として疑う余地などどこにもない。

「For what profit is it to a man  
if he gains the whole world,  
and loses his own soul?」

男の口から零れるのは、新約聖書に収められし福音書の一節。

マタイ福音書、第16章。

神の子がその弟子たちに説いた、数多ある教えの一欠片。この章で救世主は、弟子たちに命の価値について問うた。



「Or<sup>また</sup>の魂<sup>そ</sup>を<sup>の</sup>買<sup>い</sup>戻<sup>す</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>で</sup>き<sup>る</sup>wha<sup>人</sup>t<sup>は</sup>ど<sup>ん</sup>na<sup>代</sup>の<sup>を</sup>代<sup>価</sup>を<sup>払</sup>っ<sup>て</sup>man<sup>な</sup>give<sup>魂</sup>in<sup>を</sup>ex<sup>買</sup>ch<sup>戻</sup>an<sup>す</sup>ge<sup>こ</sup>for<sup>と</sup>his<sup>が</sup>sou<sup>で</sup>l<sup>き</sup>?」

世界の全てを手にしたとしても、死ねばそれまで。

是非もない。それは唯一不変の理であり、そうだからこそ世界は正しく回っている。命を購う術など、未だ嘗てこの星には在りはしない。故に、世界よりも命の方が価値がある。

だが……それはあくまで、命にこそ価値があるという、一つの視点からの考え方だ。この神父は神に仕えながら、また別の視点、別の価値基準——即ち、命よりも重いと感じるモノを持っている。

そう。それは例えば——世界の全てを犠牲にしても、その目で確かめたい答え。十年前。男は自らの答えを見極め、そして、その在り方を良しとした。

しかし……それは、答えであって答えではなかった。方程式の解だけを手渡されても、そこに至る過程が見えねば、納得できるものではない。

ならば、今度こそ答えを。結果だけでなく、それに至った道筋を。それを知るためならば——ああ。自分は、神すらこの手で問い殺そう。

自らの道を確認し、己の目的を定めた時。神父が信仰を捧げた父なる神は現れなかったが——神に最も近い王は、この男の姿を見つめていた。

人ではなく、神でもない。

人であるには余りに歪み、神に仕えるには余りに穢れた聖職者。求道のため、世界すら代償にする心算を持つこの男を認めめたのは、世界の総てを手にし、超越者として天地を続べた、ただ一人の王だけだった。

「これもまた、主の導きということか」

契約者として神父の道を見定め、裁定すると宣言した王。

彼の王の思考は、この神父にも理解できなかつたが……その在り方の一端は、十年の歳月を過ごす内に掴めていた。

しかし——そんな彼をしても、今回の彼の行動は異常だった。

数日前に、忽然と姿を消したあの男。

気紛れなあの青年は、断りもなしに姿を消すなど日常茶飯事。一月ほど姿を見せなかつたと思えば、ある日突然現れて旅から戻ったなどと嘯くこともしばしばだった。

それにしても、このタイミングで彼が姿を消すなど有り得ない。何故ならば、彼の王がこの十年心待ちにしていたのはこの聖杯戦争だけだったからだ。

異常なのはそれだけではなく……自分と彼の間には結ばれていたパスすらも、影すら残さず消えてしまっている。

いつもの気紛れか、何らかの理由を持つ決断か、はたまた彼にすら想定外の事故か――

―。憶測は幾つかできるが、今神父に残されているのは結果だけ。

あの男が、かつて戦いを共にした自分ではなく――仇敵の息子のサーヴァントになつたという、ただそれだけの事実。

そもそも、あの王の在り方は大嵐のそれだ。凡百の人には予想も対抗もできる物ではなく、ただ災害が過ぎ去るのを待つしかない。

ならば、その災害すら飲み干し利用しよう。自分はただ、答えを追い求めると決めたのだから。

「それが私の道だ――ギルガメッシュ英雄王よ」

くつくつと、哄笑を滲ませながら。言峰綺礼は、静かに神への祈りを捧げていた。

## 5. 英雄たちの戦い

教会の外へ出た途端、居心地の悪さは嘘のように消え去った。

やはり——勘違いではない。この教会は、間違いなく魔窟の類だ。踏み込んだが最後、戻って来ることなど望めはしまい。

それでも、今俺がここに立っていられるのは……存外の幸運か、或いは付き添ってくれた遠坂のおかげか。余りにも感じの悪かった教会のせいか、外に出られた今は、あの偉そうなアーチャーの顔すら救いに見えた。

「——ほう、戻ったか雑種」

俺の視線に気付いたのか、アーチャーがこちらに向き直る。その傲慢な態度は、俺が教会に入る前と何ら変わらない。

教会の中で何があつたのか、俺がどんな決断をしたのか……この男は、それを気にする素振りすら見せない。俺の方を見てこそいるが……このサーヴァントの興味は、俺ではなく他の物へ向いている。

そこまで考えたところで、俺はようやくやくせいバーの異変に気が付いた。

凜と佇み、アーチャーに警戒心と敵意を向けていたはずの剣の騎士。しかし、その少女は——表情を覆い隠すように、暗く俯いていた。

何一つ変わらないアーチャーに対して、その変貌振りは一目瞭然だ。あれほど覇気に溢れていたセイバーは、今や敵愾心の欠片もなく立ち尽くしている。その打ちひしがれた様子から察するに……アーチャーが、またセイバーに何か言ったのだろうか。

いくらサーヴァントとは言っても、セイバーは女の子だ。それを、こんなに落ち込ませるようなことをするなんて、この男は一体何を考えているんだ。

俺の咎めるような目に何を感じたのか、アーチャーがふん、と鼻で笑った。

「なんだ、そんな小娘に同情したか？ 敵対するサーヴァントに肩入れするとは、つくづく愚かしい男よ」

「な——！」

一目で俺の考えを見抜いたアーチャー。俺を嘲るようなその口調に、むつと腹が立つた。

何か言い返してやろうと、反射的に口を開くが……俺の口から出てきたのは、意味を持たない無音だけだった。

腹の立つことに……このサーヴァントの言葉は、何も間違っていない。今は剣を交えていないとはいえ、セイバーはいずれ倒すべきサーヴァントだ。俺が戦う道を選んだ以

上、遅かれ早かれ彼女と戦うことになるのは目に見えている。

「だけど——それでも。女の子にあんな顔をさせるなんて、そんなのは間違っている。

「はいはい、ケンカはそこまで。町に戻るまでは一緒だし、とっとと行くわよ」

向かい合う俺たちに呆れたのか、遠坂は一人でさっさと歩きだしてしまふ。

それに一瞬遅れて、落ち込んでいたセイバーが気を取り直し、主を守るように付き従う。残されたのは、数メートルの距離を置いて睨み合う俺とアーチャーだけだった。

このまま睨み合っているわけにもいかず、遠坂の背を追って俺も歩き出す。その後ろからアーチャーも、渋々といった感じで着いてきた。

教会の敷地を出る前に、最後に一度だけ後ろを振り向く。

夜の丘に聳える、豪華な教会。しかし——教会というものが、何処もこの場所のように、見掛けとは裏腹な陰湿で邪悪な雰囲気を持つているのなら。俺はおそらく、二度と教会に足を運ぶことはないだろう。

歪な建物を一瞥して。俺は、今度こそ教会を立ち去った。

\*\*\*

遠坂とセイバーが、軽やかに坂を下っていく。明らかにそれに遅れる形で、俺とアー

チャーが後に続く。

俺たちと彼女たちの間にある、見えずとも明確に分けられた境目。それが一体何なのか、今では俺も理解していた。

教会での宣言。あれは、衛宮士郎が魔術師として踏み出すという誓いであると同時に……敵対する魔術師やサーヴァントと戦うと、そう告げたことに他ならない。

そして遠坂とセイバーは、聖杯戦争のマスターとサーヴァント。俺とアーチャーもまた同種の存在である以上、もう俺たちの間に馴れ合う理由はない。

だが——頭で理解はしていても。やっぱり、こんなのは嫌だった。

第一、俺と遠坂たちが敵同士だと言っても……俺は、彼女たちを傷付けたくはない。こんな事を言うと、またアーチャーに侮蔑の目を向けられると思うが、それでもこれは俺の本心だった。

そもそも俺は、十年前のような出来事を起こさないために、聖杯戦争に加わると決めた。だけど、遠坂やセイバーがあんな非道を行うような人間とは到底思えない。

「——ふん。下らぬ事で一々悩むな、雑種」

いつの間に、俺の隣に来ていたのか。歩調を合わせていたアーチャーが、俺を見もせず吐き捨てた。先ほどの確執もあり、自然と敵意の籠った目で睨み付けてしまう。

「下らない、ってなんだよ。おまえにとってはそうかもしれないけど、俺にとっては大事

なことなんだ」

「たわけ、それが下らぬと言っているのだ。貴様は自分の進むべき道を見定めたのであろう。ならば、それ以外の道など考えるに能わぬ」

……む。

一々言い回しが難しいが……つまりこの男は、戦うと決めたのなら余計なことは考えな、と言っているのだろうか。

それは即ち——遠坂たちと戦う覚悟を決める、という意味なのか。

「——」

駄目だ。イメージできない。

初めから遠坂たちが問答無用で攻撃してきたなら、まだ踏ん切りがついたのかもしれない。当然俺は倒されていただろうけど、それでも彼女たちを『敵』と認識することぐらいはできたはずだ。

だけど……遠坂は、右も左も分からない俺に、最低限の説明をしてくれた。

それは義務感でも責任感でもなく、何も知らない俺の立場を変えようという善意によるもの。他人から善意を向けられてあっさり手の平を返せるほど、俺は薄情な人間じゃない。

肩入れしてくれた人間と、戦う。



同級生だった少女と、殺し合う。

魔術師であれば、持って然るべき当然の決意。だがその認識を、俺は未だに持っていない——。

——そうして、来た道に戻っていく。

まるで、非日常の世界から在るべき日常へと引き戻されるように。今日この夜から、俺の日常は殺し合いへと切り替わる。平穏な生活こそが、マスターにとっては非日常なのだ。

見慣れたはずの冬木市の街並みが、遠い光景の夜に感じられる。聖杯戦争を知った今となつては、この街の明かりすらも、得難い奇跡のように思えてしまう。

そんな中を、アーチャーと共に歩いていく。恐らくはこの先も、俺はこうしてこのサーヴァントと進むことになるのだろう。

半人前の魔術師と、記憶を持たないサーヴァント。

遠坂の言う通り、確かに似合いの組み合わせだ。他のマスターやサーヴァントからすれば、俺たちの陣営はさぞひ弱に見えるに違いない。

けれど——だからといって、諦めてやるつもりはない。

俺の道は。

進むべき未来は。

十年前から、決まっているのだから——。

「——じゃ、ここでお別れね、衛宮くん」

交差点まで辿り着くと、遠坂は唐突に喋り出した。その隣には、彼女を守るようにセイバーが付き添っている。

……そうか。ここから先は、それぞれの家へ続く道。衛宮士郎と遠坂凜は、ここで別れなければならない。

本来、聖杯戦争のマスターは互いの命を狙い合うもの。親身に付き合ってくれた遠坂と、何も知らなかった俺こそが、この舞台では異端なのだ。

だが、それもここまで。

実感が湧かなかったとしても、現実はそのなものを待つてはくれない。ランサーのように、俺を狙いに来る敵は必ず現れる。今日の前に立っている遠坂も、マスターの一人。戦うと決めた以上、いつ俺やアーチャーに攻撃を仕掛けてきたとしてもおかしくはない。

だけど——損得勘定を考えもせず、ただ善意だけで、未熟な俺の面倒を見てくれた。そんな女の子に敵意を持ってっていう方がどうかしている。

セイバーだってそうだ。遠坂の命令を無視して、俺やアーチャーを斬り伏せることだってできたはずなのに、結局彼女はそうしなかった。

……うん。なんだかんで、悪い人間じゃなかったんだ。それで、少し安心した。

「ああ。でも、できれば敵同士にはなりたくない。おまえ、やっぱりいいヤツだからな」  
「な——っ」

何故かぎよつとしたように目を見開くと、そのまま遠坂は黙ってしまった。……俺をじつと見つめてくるセイバーの視線が痛い。仕方がないので、そのまま遠坂の顔を見つめているとぱつちり目が合った。

途端に、怒りの表情を浮かべる遠坂。何が気に食わなかったのか、つんと横を向かれる。

「ふ、ふん。おだてたつて手は抜かないんだからね。もう貴方とは敵同士なんだから、精々気を付けなさい」

そう言うのと、背を向けて歩き出す遠坂。だが数歩歩いたところで、何かを思い出したようにその足取りが止まった。

「——あ、忘れてた。サーヴァントがやられたら、さっきの教会に逃げ込みなさいよ。そうすれば、命だけは助かるんだから」

「……ほう、この我が倒されると抜かしたか。つくづく身の程を弁えぬ小娘よ」

今まで腕を組んで突っ立っていたアーチャーが、遠坂の言葉を聞いた瞬間不穏な言葉を漏らした。が、それとは裏腹に、青年の顔には苦笑が浮かんでいる。……怒ったのか

と思ったが、どうも違ったようだ。

姿を見られただけで怒ったと思えば、自分を殺そうとした相手を見逃す。ひたすらにプライドが高いのかと思えば、そう簡単にも怒らない。

今はまだ、何も知らないアーチャーという男。このサーヴァントの性格は、どうもちよつとやさつとじや理解できないものらしい。

「——。ま、いいわ。帰るわよ、セイバー」

アーチャーに何か言おうとする素振りを見せた遠坂だが、諦めたように首を振る。それきりこちらには振り返りもせず、待つていたセイバーを伴うと、再び背を向けて歩き出——

「——ねえ、お話は終わり？」

その声に、全員の動きが止まった。

今の声は、誰が発したものでもない。今この場に立つ人間の中に、幼い少女など誰一人いない。ならば、その声の持ち主は——。

今、下つて来たばかりの坂。確信に近い直感と共に、迷わずその上を仰ぎ見る。

あれ程空を覆っていた雲は、不吉な直感に怯えるかのように消え失せている。残され

たのは、爛々と丘に降り注ぐ月の光。

——そこに。在ってはならない存在が、立っていた。

どこまでも巨大な筋肉。全身から迸る力の躍動と、狂気すら感じさせる淀んだ瞳。そこから感じ取れるのは、死の直感に他ならない。

一目で判る。アレこそ、四人目のサーヴァント。英霊が具現化した、災害にも匹敵する脅威。

アレは……化け物だ。

アーチャーの人を超越した威圧感とも、セイバーの凜然と張り詰めた存在感とも違う。ただそこに存在するだけで、鳥肌の立つような恐怖の具現。

最早この空間に、日常の残滓など欠片もない。あるのはただ、濃密なまでの死の気配だけ。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは初めてかな？　もう、待ちくたびれちゃったよ」

黒く聳えるような、鋼の巨人。その異形の傍らで、可憐な少女が佇んでいた。

白い雪を連想させる、年端も行かぬ女の子。どこまでも無邪気に微笑むその姿は——だからこそ、何よりも不気味だった。

異形と少女。余りにも不釣り合いなその組み合わせは、今この瞬間、地獄とも呼べる

恐怖を撒き散らしていた。

殺される。

少しでも動けば、一步でも下がれば、この首は飛んでいる。理屈など抜きにして、そう納得できてしまった。

だが……あまりにも絶望的なモノを前にしているせいか、不思議と恐怖感はない。もう何をしても無駄なのだという、諦めの境地。

しかし、その異常のせいか。俺の頭は、一週回って冷静になっていた。そのおかげで……少女の放った言葉への違和感にも、すぐに気付くことができた。

「……おまえ、一体誰だ？」

緊張で上ずる声を抑えながら、こちらに微笑んでくる少女の瞳を見返す。

あの少女は、俺を見て「待ちくたびれた」と言った。ということは、彼女は俺を知っているのだろうか……俺の方は、あの少女にも、横に聳える異形にも全く見覚えがない。

——だが、氷のような無表情を浮かべたその顔を見て。この返答が、致命的な間違いだったのだと悟った。

虎の尾を踏んだような、竜の巢に飛び込んだような、そんな危険な感覚が、じりじりと背筋を焦がす。

気付けば、ごくりと生唾を飲み込んでいた。この場に張り詰めた緊張感は、それだけ

で気分が悪くなる。

「——やっばい。セイバー以上の能力値って、どんな怪物よアイツ」

俺より少し先で立ち竦んでいる遠坂が、呆然とそう声を漏らす。既に身構えているだけ、俺よりは幾分かマシなようだが、それがどれほどの助けになるか。

これだけの距離が離れていても、彼女が感じている絶望が窺える。それも当然だろう——あんなモノは、人が相対していい存在ではない。

「……バーサーカー」

聞きなれない言葉を口にするセイバー。

遠坂を庇うように立つ彼女は、既に臨戦態勢を整えている。透明な剣は油断なく、巖の巨人に向けられていた。

白銀と紺碧に彩られた、輝く甲冑。圧倒的なまでの絶望の中、その姿はどこまでも力強く煌く。

その小柄な体が放つ闘気は、アーチャーに向けられていたものを尚上回る。あの敵がどれほどの脅威なのかは、その背に宿る緊迫感だけで十二分に計り知れた。

——そして、この場に立つもう一人のサーヴァント。

逆る魔力を感じて横を見ると、アーチャーの表情が変わっていた。

自信と余裕を併せ持つその雰囲気には違いないが、紅蓮の瞳は鋭く細められている。

いつの間にか、ライダースーツから魔力で編まれた黄金の鎧へと服装が変わっていた。ランサーに破壊された鎧は、その胸部が大きく凹んでいる。先ほど見た時よりも修復は進んでいるようだが、損傷具合は見ただけで判る。

だが、この鎧を纏ったということは……このサーヴァントもまた、あの巨人に脅威を感じているに違いない。事実、その両手には既に黄金の双剣が握られている。

アーチャーの鋭い目は、あの巨人を冷静に観察している。人知を超えたその観察眼は、絶望以外の何を見据えているのだろうか。

巨人の脅威の前に動けぬ四人を見て取り、余裕を感じたのか。それまで冷たい表情を浮かべていた雪の少女は、それが嘘のように相好を崩した。

んー、と年相応の可憐さで、口元に指を当てている。けれど、殺意が渦巻くこの状況の中、それは悪夢のような光景だった。

「うーん……最初なんだから、ご挨拶をしなくちゃいけないよね。」

はじめまして。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば分かるでしょ？」

そんな俺たちを見て、何を考えたのか。巨人の傍らに立つ少女は、行儀良くスカートを持ち上げて、丁寧に挨拶を試みさせた。

少女の名前を聞いて、遠坂とセイバーの体が微かに動く。あの二人は、その名に聞き



覚えがあつたのだろうか。

答えずとも反応だけで伝わったのか、言葉すらない俺たちを、少女は嬉しそうに見下ろし――

「――じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

歌うように、死刑判決を突き付けた。

――瞬間。黒い巨影が、夜の路地を埋め尽くした。

一瞬遅れて、認識する。あの丘、あの頂点から、僅か一足である巨人は跳躍してみせたのだ――！

「セイバー、お願い！」

遠坂が叫ぶと同時に、セイバーが迅雷となつて疾駆した。

空を塗り潰すように、異形の戦士が迫る。断罪の大剣が振り下ろされる刹那、白銀の騎士が渾身の力で迎え撃つ――！

轟音、閃光。

バーサーカーが持つ暴力の塊は強烈な音を、セイバーの握る不可視の剣は魔力の光を迸らせ、束の間の拮抗を作り上げていた。

だが、巨人の筋力は桁が違う。その猛威を受け止めたセイバーもまた驚愕すべき膂力の持ち主だが、大剣の直撃によって僅かに体勢を崩していた。その一瞬は、この敵の前

では度し難い隙となる。

当然、敵サーヴァントがそれを見逃すはずもなく。獰猛なまでの凶悪さを以て、岩塊の如き刃が少女の体を薙ぎ払うべく迫り、

「はア——ッ！」

それと同位の剣閃が、敗北の運命を塗り替えた。

倒れ伏すかに思われたセイバーは、爆発的な魔力の奔流によつて体勢を立て直し、その勢いのままバーサーカーの剣を打ち返してみせたのだ。

剣を弾かれた狂戦士。そのがら空きの胴体を両断すべく、セイバーが透明な剣を袈裟懸けに振るう。

しかし……巨体の戦士は、その逆撃をも捻じ伏せる。巨軀からは想像し難い俊敏さを以て、跳ね上げられた剣を切り返すように、バーサーカーは大剣を叩き付けた。

「く……い！」

再び、脅威を剣で受け止めるセイバー。

あれだけの打撃をまともに防ぎ、斬り返すセイバーの力は、あの巨人に劣つてはいない。驚くべきことに、小柄な少女はバーサーカーと互角に打ち合っていた。

その理由は、傍目にも判るほどの絶大な魔力。セイバーの体から迸る魔力は、そのまま彼女の筋力や速力に上乘せされる。ただ筋力のみで絶大な破壊を生み出すバーサー

カーに対し、セイバーは魔力を噴射する事で対抗していた。

つまり、セイバーはその一挙手一投足に至るまで、魔力による後押しによって運動能力を向上させている。いわばそれは、魔力を用いたブースター。

だが——その力を以てして尚、この巨人は強大だった。

セイバーのように魔力の恩恵があるわけでもなく、己の肉体性能のみで圧倒的な力と速度を見せつけるバーサーカー。

理性など欠片も感じられぬにも関わらず、鋼の巨人はただ本能のみで空間ごとセイバーを蹂躪しようとする。その腕から繰り出される大剣は、死神の鎌に他ならぬ。

僅かずつ押され、後退していくセイバー。灰色の異形は破竹の勢いで爆進し、次々と大剣を叩き付ける。

ただの余波でアスファルトが割れ、ブロック塀が舞い、電柱が砕ける。紙屑の如く、周囲の全てが崩壊し散乱していく。破壊の衝撃で、空気すら悲鳴を上げていた。

それは、さながら台風の如く。ただの打ち合いに過ぎぬはずのこの一戦は、地を穿ち鉄を刻み空を割り、瞬く間に街路を蹂躪していく。

「——ッ！」

鬼気迫る気合を以て、少女と巨人が切り結ぶ。

力と速度に於いて、あの巨獣はセイバーをも上回る。その攻撃に技巧などあるはずもないが、そんな物はバーサーカーにとつて必要ない。そもそも技とは、弱者と強者の差を埋めるために編み出されたもの。それを凌駕する圧倒的な差の前では、小手先の技など何の意味を為そうか。

莫大な魔力放出によつて、瞬間的な出力ではバーサーカーに拮抗、或いは上回つて見えるセイバー。しかし基本性能で劣っている以上、セイバーはどうしても攻勢に転じえない。

勝機を見据えるべく剣を交えるセイバーだが、このままでは埒が開かぬことなど彼女とて理解していよう。時間を掛ければ掛けるほど、総合力で劣るセイバーは不利になつていく。

だが、嵐のようなバーサーカーの猛攻に、隙など欠片も見当たらない。一撃一撃の全てが必殺というその規格外を前にして、受けに回る以外の選択肢など存在しない。

故に——あと一手。

この状況を変える為には、あと一手が必要だった。

ならば——あの死闘に一石を投じることができるのは、同じサーヴァント以外に有り得ない。

「  
」

傲然と聳える、黄金のサーヴァント。

鎧を纏い、双剣を手にしてこそいるが、この青年は戦闘が始まった後、一步たりとも動いていない。

あの巨人とセイバーは今のところ互角に戦っているが、このままではセイバーが追い詰められていく一方なのは目に見えている。セイバーが屈してしまつたら、灰色の異形の次の標的はこのアーチャーに違いない。にも関わらずこの英霊は、戦うでもなく、逃げるでもなく、ただ悠然と佇むまま。

その間にも、セイバーは戦い続ける。しかし、機先を制され、続く剣戟にも活路を見出せぬ彼女は、今や誰がどう見ても劣勢だった。

まずい。

既にあれは戦いではなく、一秒後の死を引き延ばすだけの抵抗に過ぎない。必死に生きようと足掻く、延命行為。

一撃剣を振るうごとに、一度身を躲すごとに、セイバーは少しずつ後退していく。やがては追い詰められ、あの岩塊に押し潰される未来は素人目にも明白。

……そんな、小さな女の子に戦わせて。俺は、一体何をやっている。

戦うと、覚悟を決めた。その闘志を向けるべき相手は——あの巨人のような、天災の如き猛威ではないのか。

けれど俺には、あの怪物と戦う術はない。凡百の人間に過ぎない俺には、超絶的な権能も、反則的な剛力も、何一つとして存在しない。

故に、俺にできることはただ一つ。

戦う手段がないのなら、それを余所から持ってくる。魔術師の基本にして教訓である、その一点のみ——！

「アーチャー……！」

焦りを抑えきれず、横に立つ青年へと視線を向ける。

「このままだと、セイバーが——」

「——下がっている、雑種。不本意ではあるが、あのような肉達磨にこれ以上騒がれては暑苦しい」

忌々しげにそう言うと、アーチャーは右手に握る黄金の剣を逆手に持ち替えた。左手の剣は順手、右手の剣は逆手に握るといふ、奇妙な構え。だがその謎は、アーチャーが双剣の柄を連結した瞬間に解けた。

出来上がったモノは、双刃の剣。長い柄の両端から刃が伸びるといふ、通常の刀剣では有り得ぬ異端だった。

あんな特殊な武器は、使っている本人にこそ危険が及ぼう。だがそんな常道は知らぬとばかりに、アーチャーは易々とその剣を片手で持ち上げる。あの男は、まさかアレを

片手で振るおうという心算なのだろうか。

……いや、待て。

あの形状には見覚えがある。結合された柄の部分が僅かに変形し、やがて現れた見慣れた形は――。

「弓、か……？」

驚くべきことに。あの双剣は、身の丈ほどもある大弓へと変貌を遂げていた。何時の間に現れたのか、魔力で編まれたらしき弦すら見える。

その光景を見て、このサーヴァントのクラスを思い出した。

今までは双剣で戦っていたが、この黄金の青年は剣士ではない。剣士セイバーのサーヴァントは、今バーサーカーと戦っている彼女だ。

つまり――この長弓こそが、この男の本来の武器。狙った心臓を必ず穿つ、あのランサーの魔槍にも匹敵する武器に違いない。

――しかし、何故だろう。理屈とはまた違う部分で、これはこの男の本当の武器ではないと、そう何かが告げていた。

そんな俺の困惑をよそに、アーチャーは大弓を構える。空気を軋ませる魔力と共に、顕現するのは眩い鍔。アレもまた、魔力で形作られたモノなのだろう。

それで理解した。この男の戦場は、あそこではない。

ランサーとの一戦で、この英霊は双剣を用いて戦った。その第一印象から、それこそがアーチャーの戦法だと錯覚していたが、それは大きな間違いだった。このサーヴァントにとって、あの一戦は召喚直後の戦い。戦略で盤面を制したものの、その盤面自体を選ぶ余地はアーチャーにはなかった。

だが、今は違う。セイバーがバーサーカーと打ち合っている今なら、あの時とは違って余裕がある。そう——盤面を選び、必勝の策を紡ぐまでの余裕が。

アーチャーに有利な盤面こそが、この位置、この距離。弓を引く者にとっての戦場とは、敵の牙が届かぬ地にこそ他ならない。

きりきりと、静かに引き絞られていく弓。しかし、その矢は未だ放たれる気配を見せない。

必殺の一撃とは、易々と放って良い物ではない。如何な魔力の矢といえど、好機を捉えなければあの狂戦士には届かない。

故に、アーチャーは待つ。

絶好の機会を、必滅の瞬間を。その刹那の間に向けて、極限まで意識を張り巡らせる。紅蓮の慧眼は、巨人の一挙一動全てを見据える。

極限まで魔力の充填された筈。今にも張り裂けそうなほどに、力の込められた弦。巨軀の英霊を穿つべく、魔弓が空気すら軋ませて唸りを上げる。戦場を鋭く睨むアー





その一瞬を好機と見たのか、狂える巨人が前へ出る。大きく振り上げられた大剣は、紛れもなく終幕の一撃。この戦闘に終止符を打つ、絶対の終焉に他ならない。

よろめいたセイバーは、間に合わない。あの攻撃範囲から逃れることなど叶わず、バランスを崩した今の彼女はあの斧剣を受けきれない。

故に、これで終わり。

セイバーというサーヴアントは、バーサーカーという鬼神の前に斬り伏せられ——  
「死にたくなければ伏せろ、セイバー」

——瞬間。アーチャーの玲瓏な声が、どこまでも冷たく響き渡った。

思考する間すらなく、セイバーが傾いた勢いのままに横に倒れ込む。それは、自ら隙を生み出す愚策にして下策。無防備なそのコンマ数秒は、あの巨人の前では致命的なまでの誤り。

だがそれは、この場にいる者が二人きりであった場合。アーチャーという第三要素が加わった今、その判断は英断へと変わる……！

「な……!?!」

その驚きは、誰が漏らしたものだっただのか。

——止まった時間の中。迸る流星が、夜の闇を貫いた。

埒外と呼ぶに相応しい、絶大な魔力の奔流。否、事実魔力そのものであるその一撃は、



遠坂が投げ込んだ宝石が、狂戦士の周囲で爆裂する。須臾の後、漆黒の帯のようなものが広がったかと思うと、バーサーカーの全身が巻き取られた。魔力の縛鎖が英霊を封じ、回避の道すら取らせない——！

——炸裂する衝撃。

爆発に等しい光と熱の奔流は、それを見る者の目と耳を一時的に麻痺させる。矢の激突は余波となり、斧剣の暴虐をも上回る神撃となつて、その周囲にあつた物の全てを木端微塵に吹き飛ばした。

冗談のような破壊力。アーチャーの狙撃は、文字通りの必殺だ。ただの余波ですら、強烈な波動となつて空間そのものを震わせ揺るがす。

「——」  
あれほどの力を乗せた一撃。避けることも、防ぐことも能わぬとあれば、異形の英霊といえど死を免れまい。

攻撃の残滓か、破壊された街路の欠片が煙となつて空を舞う。視界は不明瞭になつていくが、それでも何一つ動くものが存在しないことは明らかだった。

あの攻撃を受け、巖の巨人は沈黙した。恐らくは、跡形もなく消し飛ばされたに違いない。

——だが。

「あははははは！ やるじゃない、わたしのバーサーカーに傷をつけるなんて！」  
一体、何がおかしいのか。

闇の中、軽やかな笑い声が響き渡る。その声は、巨人の隣に立っていた白い少女から発せられたものだろう。

年端も行かぬあの少女が……おそらくは、バーサーカーのマスターに違いない。その事実も異常に過ぎたが、今この場ではそれ以上に奇怪なものがある。

イリヤと名乗った、小さな少女。己の従者が滅ぼされたにも関わらず、あの少女は何故楽しそうに笑っているのか。

「でも、そこまでよ。ちよつと驚いたけど、あなたたち程度じゃ——」  
ぞくり。

冷たい視線が、俺の体を確かに射抜いた。

溢れる殺意は風となり、極寒の殺気と灼熱の闘気とを伴って宙を舞う粉塵を吹き飛ばしていく。

「——わたしのバーサーカーには勝てないわ」

煙が晴れる。

街路を覆っていた障害物は、暴風の前に遙かな空へと逃げていく。そうしなければ、自らが塵すら残されないと悟っているかのように。

その、骨の髄まで凍らせるような殺意の風を生み出しているのは——胸に大きな傷を持った、鉛色の巨人だった。

暴力を体現したような瞳が、俺とアーチャーを冷たく見据える。あの英霊は……今この瞬間、俺たちを倒すべき標的と認識した。

「嘘でしょ、どんな体してるのよアイツ……!」

遠坂が驚愕に固まる。その驚きは、後退して体勢を立て直したセイバーも同様だった。

アーチャーの魔力の矢。紛れもない必殺の一撃は、確かにバーサーカーに直撃していた。それは、あの胸の傷からも確信できる。

だがそれは、あれだけの攻撃力を見せた矢には似つかわしくない、僅かな傷。確かに大きな傷ではあるが、あの程度、巨人の体軀からすれば然程の問題にはなるまい。

……計算が合わない。余波ですらあれだけの衝撃を撒き散らしたというのだから、放たれた矢の攻撃力は生半可なものではなかったはずだ。あれを急所に受けて、生きていられる道理がない。

歯車が噛み合わない。理屈が通らない。法則に反している。あのバーサーカーは、剥き出しの筋肉の他に防具を持たぬはず——待て。何故あの傷は、先見た時より小さくなっているのか……!?

「——それが貴様の宝具か、狂犬。なるほど、これは我も分が悪いか」  
矢を放った直後、残心のままに立っていたアーチャーが、苦虫を噛み潰したような顔でそう漏らす。

攻撃を凌がれたことで、激昂するかと思ったアーチャーだったが、この男は不可思議な現状のクラクリを見抜いたらしい。掲げられたままの大弓に、次の矢を番える素振りすら見せずにただバーサーカーを睨み付けている。

アーチャーが何を言っているのか、その意味は俺には解らない。確かなのは、あのバーサーカーの何かをアーチャーが見抜いたということだけ。

「……アーチャー。宝具ってなんだ？」

理解出来なかった、不可解な単語を問う。だが俺の質問に口を開いたのは、セイバーの背後に立つ遠坂だった。

「簡単に言えば、サーヴァントの必殺技よ。」

……あ、そういうことか。なんてデタラメなのよ、あの怪物——！」

こちらを見もせずに答える遠坂。だが、彼女もまた何かに気付いたのか、歯軋りすら見せて聳える巨人を睨み付けた。

そうしているうちにも、あの狂戦士の傷は徐々に塞がっていき——あろうことか、完全に治癒してしまった。どういう理屈かは判らないが、あいつの持つ宝具とやらが、反

則的な再生能力を付与しているらしい。

コンクリートを易々と砕く怪力に、小柄なセイバーをも凌駕する敏捷性。加えて、アーチャーの矢ですら殺しきれない再生能力。そんなバケモノ、一体どうやったら倒せるのか。

硬直する俺を、丘の上に立つ少女が陶然と見下ろした。その小さな瞳には、隠しきれない愉悅の色が浮かんでいる。

アレは……見覚えがある。子供が虫を潰すように、抵抗できない命を刈り取る嗜虐の笑み。あの少女は確かに、硬直する俺たちを眺めて楽しんでいた。

「うふふ、わかった？ わたしのバーサーカーは最強なんだから。傷は付けられても、あなたたち程度が使役できる英雄じゃ、ヘラクレスは倒せないわ」

「な——!?!」かの半神の大英雄が、このサーヴァントだと言うのですか……!」

少女が放った言葉に、今まで冷静だったセイバーが初めて戦慄の表情を浮かべた。……無理もない。可憐に微笑む少女は、俺たちに残酷な現実を突き付けてきたのだから。

大英雄ヘラクレス。

その名前は、日本人の俺ですらよく知っている。

ギリシヤ神話における最大の英雄で、十二の試練を乗り越え、幾多の神々や魔物と戦



い抜いたと謳われる半神半人の豪傑。山脈を砕いた、海峡を作り上げた、その途方もない偉業はこの現代に於いても様々な物語や映画となって語り継がれている。

その本人が、あそこに立っている巨人だというのは何か。それが真実なら——狂戦士と化している今、アレは真正正銘の怪物だ。

あれだけの力を持っているセイバーが、打ち勝てないのも頷ける。神話が本当なら、あの英雄は神や怪物にすら何度も勝利している。だとすれば、人に過ぎない俺たちがアレに敵う道理などない。

がしやり、と甲冑の音を立てて。セイバーが、一步前へと踏み出した。

それは死線に飛び込むのと同義。絶望的な事実を明かされて尚、セイバーはバーサーカーに打ち勝つ覚悟でいる。

敵うはずのない怪物。神話伝承に謳われる大英雄。そんな魔物を前にして、彼女は逃げるどころか立ち向かう決意を固めた。その闘志は、離れたこの場所からでも伝わってくる。

勝ち目などない。戦えば負ける。

けれども——セイバーは、前へと進んだ。どうしても、命を賭してでもアレを倒さねばならない目的があるとしても言うように。

だが、どうすれば勝てるのか。否、そもそもどうすれば対抗出来るのか。

今まで出会った三人のサーヴァントと、あのバーサーカーは桁が違う。ただアレが馳せるだけで、人の街が崩壊していくのだ。あの存在は、いわば災害そのもの。

「アーチャー。その宝具つてヤツ、アンタは使えないのか？」

先程、この黄金のサーヴァントが見せた弓。

双剣の柄を連結させるといふ規格外の動きを見せたあの武器が、弓兵の宝具に違いない。あれをもう一度使えば、或いはあの怪物を打倒することもできるのではないか。

……けれど、この胸に感じる違和感は何だ。

アーチャーというクラスである以上、この英雄の武器は弓に相違ない。だが何故か、心のどこかに違和感があった。

理屈を無視した、本能の領域で燻る異物。それが、確かに吼えるのだ……この青年の宝具は、そんなモノではないと。

黄金のサーヴァントに相応しい武器。そう、それは例えば。あの夢の中で見た、紅い剣のような――。

俺の困惑を、アーチャーはどう感じ取ったのか。普段の余裕は何処へやら、黄金の英雄は深刻な瞳で俺を見つめた。

「――判らん」

「……ええ？」

「判らん、と言ったのだ。今の我は、自らの名前すら思い出せぬ状態だ。宝具など、そもそも使える道理がなかるう」

憤然と言い捨てるアーチャー。

遠坂は、宝具はサーヴァントの必殺技だと言った。でもこの男は………宝具が、使えない——!?

「え、じゃあさつききの剣とか弓は何なんだよ」

「知らぬ。アレは知識ではなく、本能を以て引き抜いた物に過ぎん。今の我には、アレ以上の物は使えぬ。」

——ふむ、まあ弱者の境地とやらを味わうのも一興か。喜べ雑種、この身は貴様に似合いのサーヴァントのようだぞ?」

クク、と笑みすら浮かべて見せる黄金の英霊。

怒り出すのかと思えば……このサーヴァントは、自分の状態の異常さすらも愉しんでいるようだ。

わけがわからない。挙句の果てには、「喜べ」と来た。傲岸不遜なこの青年には、今の窮地すら愉悦の糧でしかないとも言えるのか。

明白なのは、アーチャーにさつききの弓以上の武器はない——つまり、あのバーサーカーを打倒する手段は持ち合わせていないという、冷酷な現実。

果敢にも、勝てぬと判った巨人に透明な剣を向けるセイバー。

手の内に何かを握り締め、敵意と共にバーサーカーを睨み付ける遠坂。

そして……呆然と立ち尽くす、何も出来ない俺。

その三人を、笑みを深めながら順番に見回したところで……白い少女の顔が、不意に凍り付いた。

少女の視線の先にあるのは、大弓を構えたまま、不敵な笑みを浮かべるアーチャー。その姿を見咎めた少女は、信じられぬ物を見たという表情で固まった。

現実を否定するように、青ざめたまま首を横に振る少女。蒼白なその顔は、今や髪の色と同じ雪色と化していた。

余裕の笑みは、一体どこに消えたのか。真つ直ぐにアーチャーだけを見下ろして、小さな少女は震えすら見せていた。

「——貴方、一体何者なの」

怯えすら混じる声で、アーチャーに問いかける少女。

一体、アーチャーの何が気にかかったのか。幽霊でも見たような瞳で、少女は黄金のサーヴァントを見つめる。

「答えなさい。わたしの知らないサーヴァントなんか、いちやいけないんだから！」

悠然と佇み、笑みを見せるアーチャーに苛立ったのか、癩癩を起こしたように少女が

叫ぶ。

だが……その言葉を聞き届けた青年は、不愉快そうに眉を吊り上げた。それ以外には興味すら持たなかったのか、今までバーサーカーだけを睨んでいた紅蓮の瞳が、殺意を宿して少女を貫いた。

その威圧感に、空間が軋む。狂える戦士すら凌ぐ膨大な殺気が、立ち竦む少女に叩き付けられた。

存在そのものが気に食わぬとでも言うように。間に立ちはだかるバーサーカーすら意に介さず、アーチャーは燃えるような怒りを少女に向ける。

「小娘が——身の程を弁えろ。雑種の分際で我を見下ろすばかりか、命ずるとは何事か！」

響き渡るアーチャーの怒声。

その迫力に気圧されたのか、これだけの距離が離れているにも関わらず、少女は一步退いた。その顔には、紛れもない恐怖が浮かんでいる。

……それも当然だろう。このサーヴァントの放つ殺気は、常軌を逸している。バーサーカーのように敵と見做すのではなく、羽虫や汚物にでも向けるような、人を人とも思わぬ殺意。

意志の弱い者が近寄れば、ただそれだけで心臓が止まりそうな威圧感。絶体絶命の窮

地にあつて尚、アーチャーの存在感は変わらず絶大だった。

「っ——！」

しかし、少女の忘我は一瞬。

恐怖を怒りで塗り替えると小さな指をアーチャーに突き付け、佇む己がサーヴァントを強い瞳で見下ろした。

「もういいわ、みんなやつつけちゃえ——狂いなさい、バーサーカー！」

そう、少女が叫んだ瞬間。それまでに倍増する殺意が、鉛色の巨人から放たれた。

触れるどころか、その姿を視界に収めるだけで消し飛ばされそうな暴力。先程までの圧力など、これに比べればまだマシだった。今のバーサーカーに溢れる殺気は、それだけで人を殺せる武器となる。

殺される。

碎かれる。

刻まれる。

そんな脅迫観念染みた確信すら、胸の奥底に湧いている。勝てる、勝てないという問題ではない。あの巨人の前では、存在自体が許されまい。

アレこそは正に、暴虐の化身。十年前の死地を、遙かに上回る脅威。怒れる半神の恐怖が、今宵此処に顕現していた。



三度、バーサーカーが吼える。

それと同時に、弾丸の如く巨人が奔った。その勢いは、戦車砲すら凌駕しよう。

異形の狙いは、中途に立ちはだかるセイバー。コンマ一秒の間に十数メートルもの距離を詰め、音より尚速く大剣を振り下ろす——！

「馬鹿な、今までは完全な『狂化』すらしていなかったとでも言うのですか……！」

歯噛みするセイバー。今のバーサーカーは、セイバーの力を確実に上回っている。

迎え撃とうとする透明な剣を、爆弾染みた破壊力で打ち落とすバーサーカー。拮抗すら叶わずに、セイバーの剣は弾き飛ばされた。

際限など知らぬとばかり、更なる速度で大剣が叩き付けられる。一撃ごとに防御を破られ、体勢を崩しながらも、セイバーは無理矢理攻撃を凌ぎ続ける。

あれ程の暴力の前には、回避行動など意味を為さない。掠めただけでも、アレは人体を肉片に変えるだろう。それを解っているが故に、セイバーは防御に回り続けるしかない。

だが、それは一秒後の死を二秒後に引き延ばすだけの行為。いずれ終わりが来ることなど、当人が誰よりも知っていよう。

巨人の衝撃に、セイバーの小柄な体が震える。

莫大な魔力を放出することで、セイバーは絶大な筋力と敏捷性を獲得している。それでもバーサーカーの衝撃は受け止めきれず、一瞬ごとに彼女は後退する。

セイバーの必死な顔には、悲愴感すら漂っている。このままでは——背後に守る遠坂マスターすら、あの斬撃に打ち砕かれてしまうのだから。

彼女の体は、既に傷だらけだ。斧剣の直撃を受けずとも、その衝撃と風圧のみでセイバーの体は傷ついていく。どこかを斬り裂かれたのか、宙に舞う鮮血すら視界に飛び込んできた。

——それを見て。自分の無力さに、反吐が出るほど腹が立った。

「逃げる遠坂、セイバー……！」

腹に力を込めて叫ぶ。

あの巨人には勝てない。アーチャーにバーサーカーを倒す武器はなく、セイバーもまた圧倒されている。二対一でも勝てぬ以上、残された結末は敗北のみ。

……ならば。あれから逃げることは、至極当然の判断だ。

そもそも、天災に立ち向かおうとするのが間違っている。途方もない災害を前にして人が採れる決断は、あらゆる手段を以てしての回避のみ。

——けれど。俺の声が聞こえぬはずもないだろうに、セイバーは巨人に挑み続ける。

セイバーのみならず、遠坂もまた同様に、一步も退かずバーサーカーを睨み続けるま



ま。

その足は小刻みに震え、何かを握りしめた拳には汗すら流れている。緊張感と恐怖を漂わせて……それでも尚、彼女も戦いから目を離さない。

己の従者の勝利を信じるように。その視線は、どこまでも前を見据えている。

「——引き時だな。業腹だが、撤退するぞ雑種」

一つ舌打ちして、アーチャーがこちらに向き直る。その言葉にむつとして、反射的に口を開いた。

「な……遠坂とセイバーを見捨てろって言うのか!?!」

「フン。あの女どもは、そもそも貴様の敵であろう。セイバーを喪うのは我とて惜しいが、敵に情けを掛けるなど愚の骨頂。労せずして敵の一角を屠れるのだ、寧ろ僥倖と言うべきだろうよ」

「おまえ——」

何かを言い返そうとしたが、言葉が出てこない。

腹が立つ。こいつの言葉は、なんでもいつも正しいんだ。それが正しいと解っているからこそ、尚更腹が立ってしょうがない。

理屈だけを、効率だけを考えれば、確かにアーチャーの言う通りだ。遠坂は自分たちを「敵」と言った。聖杯戦争がバトルロイヤルである以上、遠坂とセイバーはいずれ立

ちはだかる壁になる。

視点を変えてみれば、今の状況は好機かもしれない。バーサーカーとセイバーが戦っている今、俺とアーチャーがこの場を抜け出すことは簡単だ。そして、そうなれば……セイバーは確実に、あの巨人に討ち取られるだろう。自分の手を汚さずに、俺たちはサーヴァントの一人を打倒できる。

残ったバーサーカーは確かに強敵だが、何も俺たちがアレと戦わなければならない理由はない。アーチャー以外のサーヴァントが、アレを打倒する可能性だってあるのだ。

——けれど、それは。正義の味方の道では有り得ない。

遠坂とセイバーは、何も知らない俺を攻撃しなかった。親切に事情を説明し、教会への案内までしてくれたのだ。ここで彼女たちを見捨てることは、その好意への裏切りに他ならない。

今の戦いだってそうだ。逆に俺たちを見捨てることだつてできただろうに、遠坂たちはそうしなかった。死力を振り絞つてまで、今もセイバーは戦い続けている。

アーチャーの狙撃の瞬間にも、遠坂は掩護をしてくれた。敵だ何だと言いながらも、彼女たちは俺たちを味方として見てくれていた。

それに第一——女の子を見捨てて自分だけ逃げるなんて、そんな卑怯な真似が出来るものか。

俺は、苦しんでいる誰かを放っておくなんてできない。正義の味方は、困っていて、苦しんでいる人を助ける為の存在だ。

五年前の、あの日。あの夜、俺はそうなると決めたはずではなかったか。

「——しぐといわね。いいわよバーサーカー。そいつ再生するみたいだから、首を刎ねてから犯しなさい」

笑いながら放たれた声に、背筋が凍った。今——あの少女は、一体何と言った。

アーチャーに向けていた目を、戦場へと引き戻す。

——その瞬間。闇に散る鮮血が、俺の視界を紅く染め上げた。

地に倒れ伏したセイバー。動きを止めたバーサーカー。

その光景の示す意味は、ただ一つ。即ち……セイバーは、バーサーカーに斬り伏せられたのだ。愉快そうに細められた少女の瞳が、ボロボロになったサーヴァントを冷たく見つめる。

セイバーはまだ、死んではいない。傷だらけになりながらも、彼女はまだ立ち上がるうとしている。

……けれど。その小さな体に、もう戦う力など残ってはいまい。血の滲むほど握りしめられた遠坂の拳が、何よりもそれを語っていた。

そんな。そんなになってまで戦おうとする少女に。バーサーカーのマスターは、一体

何をしろと命じた。

首を刎ねろと。

犯せと。

幼い子供には思いつきもせぬはずの残酷さで、あの少女は、信じ難い残忍な命令を下していた。

その命令を実行するべく、バーサーカーが再び動き出す。一際高く振り上げられたのは、少女の身の丈ほどもある岩剣。

逃れようもない死の刃。あんな物を受けては、人の形すら残るまい。一瞬後には、セイバーはただの肉片へと成り果てる。懸命に戦っていた少女が、無残にも殺される幻視を見て、俺は――

「愚か者、血迷ったか雑種！」

考えるよりも先に、全力で走り出していった。

アーチャーが何か怒鳴っている。だが、そんな声など知らない。そんな些事よりも、今はあの少女の命が大事だ。

俺には、怪物染みた英雄をどうにかすることなんてできない。だから、問題はそこではなく。あの化け物を倒すより先に、セイバーをあの刃から救わなければ――

「――え」

ざくり、という衝撃。

それが背中を駆け抜けた瞬間、足の力が抜けた。

目の前には、呆然と俺を見つめる綺麗な瞳。よかった、セイバーを助けられたみたいだ。後はただ、ここから全速力で逃げるだけ。

そうだ、逃げなければならぬ。

逃げなければ、俺がバーサーカーに殺される。セイバーを助けられたというのに、それでは何の意味もない。

けれど。

けれど、なんで。

動くべき足が、俺の体にはついていないんだ——？

「!？」

息を飲む音。それが誰の口から漏れたものなのか、今の俺には判らない。

俺を見つめるセイバーか。

愕然と立ち尽くす遠坂か。

それとも——目を丸くして俺を見下ろす、イリヤという少女か。

おかしいな。なんでみんな、そんなに俺を見ているんだ。

「ちよつと士郎、アンタ、お腹が……!」

震える遠坂。口元を覆った両手は、一体何を意味するものなのか。

自分の体を見下ろす。そこに広がっているのは、目を閉ざしたくなるような地獄。

散乱する内臓。

溢れ出す鮮血。

突き出た肋骨。

ぐちゃぐちゃに、ミキサーにでも突っ込んだようになっていくソレらは、一瞬前まで、俺の体についていた物だった。

「マジ、かよ……」

はは、と笑みが漏れる。

なんて間抜けな。セイバーを助けておいて、俺は自分だけ逃げ損ねたらしい。これじゃ、俺が馬鹿みたいじゃないか。

恐ろしいことに、これだけの傷を負って尚、不思議と痛みは感じられない。それはもう——痛みを感じる器官すら、壊れてしまったということか。

でもまあ、それでもいいかもしれない。

馬鹿一人と引き換えに、セイバーを助けられた。小さな体で巨人に立ち向かってくれた、綺麗な女の子。この子を殺させずに済んだのだから、良くやったと言うべきなのかもしれない。

……あ、まずい。視界が歪み始めた。

「——何よ、これ」

トドメを刺すでもなく、ぼんやりと少女が眩いた。何が気に食わなかったのか、少女はぷうと頬を膨らませる。

「……つまんない。もういい、帰る。来なさい、バーサーカー」

それだけを言い残して。冗談のように、少女は背を向けた。

命令に付き従い、攻撃もせぬままに引き返していく巨人。忠実な従者を伴って、小さな少女はあっさり立ち去って行った。

それを確認した直後……血の赤に染まっていた俺の視界は、一転して黒に染まった。

視力もなくしたのか、と実感するより先に、意識の方が消えていく。腹から下が消し飛んだのだから、それも当然の帰結だろう。

遠坂とセイバーが、必死に何かを叫んでいる。怒っているようなその声に、悪いコトをしたかな、と微かな罪悪感が浮かんだ。

困った。死んでしまうのは仕方ないとしても、彼女たちを怒らせてしまったのはまずかったかもしれない。この口が開けば、謝ることもできたかもしれないけれど。

——ごめん。

消えていく意識。薄れていく自我の中、最後に残ったのは……どこまでも冷たい烈火

の瞳と、どこからかキチキチと響く虫の音だけだった。

\*\*\*

今宵開かれた戦端。

正に激闘と呼べるそれを、何処からか見ていた姿があった。

サーヴァントの死闘を俯瞰する以上、それもまた聖杯戦争に関わる何者かに他ならぬ。  
い。

セイバー、アーチャー、ランサー、バーサーカー。

此度の聖杯戦争では、既に四騎のサーヴァントが表へ姿を晒している。前回の戦いほどではないとはいえ、序盤から四騎もの英霊が駆け巡るこの展開は、予測も付かないと言つて良い。

しかし、未だに三騎のサーヴァントが現れぬ今。淀み廻る盤面が、更なる展開へと進むのは必至。

残るサーヴァントは、いずれも権謀術数を得意とするクラス。強豪ばかりが揃う戦場へ如何なる一石を投じるのか、神でもなければ見通せまい。

——それを。人の身でありながら、見通そうとする影が此処にあった。



「——何々々々々。ようやく、この老骨にも運氣が巡つて来おつたわ」  
いや……それを、人と呼んで良いものか。

外見は、何処にでもいる老人に過ぎない。腰が曲がり杖に寄り掛かるその姿は、誰が見てもひ弱な存在だ。その年齢は、とうに還暦を過ぎていよう。

だが真実、この男がただの老人ならば——これほどの妖気、これ程の腐臭は有り得まい。

人でありながら、どこまでも人ではない異端。英霊の具現たるサーヴァントとはまた別の形で、この存在もまた人間からは程遠かった。

「六十年後を待つつもりであつたのじゃがのう……中々どうして、番狂わせというものは起きるものよ」

暗黒に支配された室内。老人の声が、闇を妖しく染めていく。

キチキチ、キイキイ。

蝶番の軋むような無数の音が、矮躯の老人の声に答える。それを雑音の如く無視し、老人は皺の寄る手で顎を掴んだ。

「さて、どう出たものかのう？」

老人は思案する。彼の頭に過るのは、今し方行われた英霊たちの死闘。

何某かの方法で、この老人はあの戦場を見通していた。それは即ち、用いられたサー

ヴァントの武具や、明かされた真名すらも手に入れているということ。

聖杯戦争に於いて最強の武器とも呼べる、情報収集能力。恐るべきその力を、この翁は保有している。

戦争で最も重要なのは、物量でも兵站でも武器でもない。敵の正体、敵の弱点、敵の拠点。それらが明らかになっていけば、敵を屠るなど造作もない。

——故に。情報こそが、戦場全体を左右する鍵を握る。

先程の戦闘。街路を破壊しつくした一戦の、余すところなくその全てがこの老人によつて分析されていく。

セイバーの能力。

アーチャーの武器。

バーサーカーの真名。

幾つか不確定要素はあるものの、最小限の力で想定以上の情報を手に入れることができた。この戦果は、謀略に秀でる翁にとつて大きな優位をもたらすだろう。

今手に入れた情報と、既に手に入れている情報。手持ちの駒と、今動いている駒。それらを統合し、最適な戦略を編み出していく。

今宵現れたサーヴァントは、何れも強敵。誰一人として、弱兵などは存在しない。

ならば、どうやって敵を打倒するか。

如何にして、牙城を突き崩すか。

最強の駒とて、条件次第では最弱の駒にも討ち取られる。ならば重要なのは、どの駒をどのタイミングで動かすか。あらゆる条件、あらゆる布石。全ての要素を視野に入れ、老人は盤面を構築していく。

厄介な敵は複数。可能なら、互いに潰し合うのが望ましい。

だが自分の手を汚さずに、物事が思い通りになると思う程この老人は耄碌していない。どこでどの手を、どのように打つか。その頭脳はどこまでも、冷たく鋭く冴え渡る。

誰も知らぬ闇の中、独り黙考する老いた男。全てはただ、己の悲願を遂げるために。

どれ程の時間が経ったのか。時すら判然とせぬ暗室で、老人は唐突に面を上げた。その表情には、隠しようもない邪悪な笑み。

「この辺りで、手を打つことにしようか——お主の出番じゃぞ、  
■■■■」

誰も居らぬはずの闇に向けて、喜色を含んだ声が掛けられる。

影の中、確かに何かの領いた気配を感じて。聖杯を待ち望む老人は、満足げに笑みを深めた。

\*\*\*

——こうして、最初の夜が更ける。

魔術師たちの思惑。英雄たちの戦意。様々な物を覆い隠して、時間はゆつくりと進んでいく。

やがて彼らが辿り着くのは、望んだ栄光か望まぬ破滅か。煌々と輝く月光だけが、静かに闇を照らしていた。

## 6. 作戦会議

——遠い、夢を見る。

此処ではない、どこか。

現在いまではない、いつか。

異世界と言っても疑いようのない、どこまでも異なる世界。しかし、遙かな彼方に続く森林、日の照り返す砂漠は、そこが紛れもなく地球なのだと示している。

そんな自然に覆われた地平の中央に、巨大な街があつた。強固な城壁に守られ、幾多の建造物が立ち並ぶ、大きな都市。

整備された街路を歩くのは、活気に溢れた人々。店舗では見たこともない物が売られ、工廠では聞いたこともない物が作られていく。

そんな中。一際高く聳える城の中で、その男は立っていた。

地の全てを見通すかのように、世界を睥睨する真紅の瞳。

陽光を受けて燦然と輝き、空を照らすかのように逆立つ黄金の髪。

人では有り得ぬ容貌を持つその男は、全身から威圧感を放ち、世界そのものを畏怖させる。背後にある黄金の玉座は、その存在こそがこの世界の支配者——即ち、王である

と万人に知らしめる。

王の背後にて侍り、傳き、阿るのは数え切れぬ程の人々。

十や二十ではきかない。

百や二百には届かない。

だが実数がどうであれ、人に数え切れぬのであらば、それは無限と呼ばれるだろう。

その威光に怯えるように、跪き恭順の姿勢を示す人間たち。誰一人として例外なく、彼らは王を畏れ敬っていた。

ただの一度も判断を誤らず、冷酷に冷徹に、全てを裁断していく王。敵なるものは悉く打ち滅ぼし従属させ、財宝を技術を文明を、何もかもを収奪する絶対王者。

人間には理解が及ばぬ、遙かな先を見据える王。その半身に神の血を受け継ぎ、今や神ですら手出しのできぬ存在となったその男。

神にも等しい存在を前にして。人の採れる選択肢は、ただ従う以外に有り得ない。抵抗も叛逆も交渉すらも、この王の前には許されない。

天地を統べる王者は、誰にも理解されぬままに全てを支配していく。

その在り方は、鋭利にして純然。ただまっすぐに、ただひたすらに、男は自分の道を歩み続ける。

——それを。まるで、劍のようだと思った。

\*\*\*

……目が覚める。

じりじりと体を焼く日差しは、心なしかいつもより明るい気がする。ひよつとして、寝過ごしてしまったのだろうか。

まあ、そんな事は後回しでいい。今重要なのは――

「――なんだったんだ、あれ」

今の今まではつきり見えていた、おかしな夢。

夢にしては、妙な現実感が残っている。だというのに起きてみれば、靄がかかったように要所を思い出せない。

でも、ただ一つ覚えているのは、あの姿。

――黄金の王。

細かい所はよく覚えていないし、それ以外の物になんて見覚えはない。

けれど……見違えるはずもない。あれは、間違いなく――

「……………つ、あ……………」

それを思い出した途端。何の前触れもなく、目の前の視界が歪んだ。

口の中に感じるのは、鉄の味。鼻血とかが出ると、喉に回って来た時に感じるアレだ。なんで口の中が血塗れになっているのかは知らないが、ただ息をするだけで気持ち悪い。この感じからすると、多分胃の中にも血が溜まっている。

……むかむかと、吐き気がする。

あまりの不快感に、脂汗すら浮かんでいる。体中が濁った血液になってしまったような苦痛。目眩に吐き気に胃の痛みと、体調不良の三点セット。

一体、何がどうしてこうなったのだろう。いたって健康で体も鍛えているはずの俺が、ここまで具合が悪いというのは尋常ではない。最近はずいぶん寒いし、何か悪い病気でも貫ってきたのだろうか。それとも、胃や喉に響くような怪我でも――

「――ふん、我より目覚めが遅いとはな。つくづく礼儀を知らぬ男だ、貴様は」と。

金髪の青年が、すっごく偉そうな態度で壁に寄り掛かっていた。

「は――!?」

咄嗟に、そんな間拔けな声が漏れる。直後、無理に口を開いたせいか、せり上がってくる嘔吐感。

その衝撃で一気に思い出した。この黄金の男は、アーチャー。俺が昨日召喚したという、人間を超越した英<sup>サヴァント</sup>霊。



黄金に彩られた甲冑ではなく、裾の短い黒のライダースーツの下に、白いシャツを着込むという簡素な平服。だがこの豪華絢爛な男が纏うと、それすら至上の礼服のように錯覚してしまう。

そうだ。昨夜俺はこのサーヴァントと、遠坂凛と、セイバーと一緒にいたはずだ。

そして、バーサーカーと戦って……殺されそうになったセイバーを助けようとして、俺はあの斧剣に叩き斬られたのだ。

「……………なんで生きてるんだ、俺？」

自問自答する。

確か、昨日も同じようなことを言った気がするが……間違いなく、これは夢じゃない。臆げだが、昨夜の最後の記憶を思い出す。

自分の内臓が吹き飛んでいるのを、確かにこの目で見た。俺の腰から下は、ぐちゃぐちゃに砕け散ったはずなのだ。その感覚を、俺は確かに覚えている。

……思い出したら、無性に吐き気が込み上げてきた。無理矢理に唾を飲み込み、込み上げてきたものを押し戻す。

恐る恐る視線を下ろすと、俺の腹部には包帯が巻かれている。どうやら、誰かが手当てをしてくれたようだが……それにしておかしい。昨夜の傷は、果たしてこんな包帯程度で隠せるようなものだったか。いや、そもそも、腰から下が付いていること自体が

おかしい。

そういえば、聞いたことがある。事故や何かで手足がなくなった人間は、現実から逃避したいがために、手足がまだついているような錯覚を起こすケースがあるらしい。じゃあ……ひよつとして、今俺が見ている物って——？

「あ、アーチャー。俺の足、ちゃんとかくつついてるか!？」

恐ろしい想像をしてしまい、思わず踏ん反り返っているアーチャーに聞いてしまう。

「——」

急に慌て出した俺を見て、どう思ったのか。黄金の青年は、一つため息をつくど、呆れたような目を俺に向けてきた。

「たわけ、見て判らぬか。多少の傷は残っていようが、粗方の傷は既に治癒している。

——何の取り柄もない雑種かと思ってみれば、どうやらそうでもなかったらしい。随分と、面白いモノを持っている」

そう言うどアーチャーは笑みを見せ、淡々と昨夜のことを話し出した。

なんでも、俺がセイバーを助けようとして斬られた後、バーサーカーとそのマスターは去って行ってしまったらしい。

その後、ぐちゃぐちゃになっていた俺の体は勝手に再生し始め、あつという間に元通りになってしまった。

生き返ったはいいものの、昏倒したままの俺は、セイバーが担いで運んでくれたようだ。……自分のマスターを運ぼうともしなかったサーヴァントに嫌味やら文句やらを言われたが、うん、今のところは無視しておこう。それより重要なことが、まだ幾つも残っている。

まず最初に。何故俺が生き残っているのか、ということだ。

あの傷は間違いなく致命傷だったはずだし、俺には治癒や回復の魔術なんて使えない。そして俺の知る限り、現代の医学ではあそこまで壊された人間を一晩で治すことなどできない。

となると、誰かが助けてくれたとしか思えないのだが……まさか、この黄金のサーヴァントが何かしてくれたのだろうか。

そう聞くと、アーチャーは不愉快そうに鼻を鳴らした。

「勘違いするな、貴様は自分の力で助かったのだ。そこに我の介入する余地はなかった。少なくとも今の我には、死にかけの貴様を蘇生させる術などない。自分自身の力で、貴様はその腹を治したのだ。

——いや、それにはちと語弊があるか。何にせよ、貴様は中々に頑丈な雑種のようにだふふん、と上機嫌に微笑むアーチャー。

相変わらず、この男の発言は人を煙に巻くようで解り難い。けれど……自分の力で治

した、とは一体どういうことなのか。

昨日ランサーに刺された時も、確かに心臓を穿たれていたはずなのに、気が付けば元通りになっていた。一度ならず二度までも死の淵から戻って来るなんて、偶然では有り得ない。俺の体には、何らかの力が働いている。

便利と言えば便利かもしれないが、俺には全く心当たりがない。知らない所で体が変になっっているのは、どうにも気持ちが悪い。

アーチャーの口ぶりからして、この男はその正体に心当たりがあるようだ。答えてくれるかどうかは判らないが、思い切って訊いてみよう——

「——ところで」

その瞬間。笑っていたアーチャーの瞳が、鋭く細められた。

身に纏う雰囲気が一変する。血の色に濡れた双眸が、俺の目をまっすぐに見つめていた。

「雑種。貴様は、何故セイバーを助けた？」

嘘など許さぬ、と言外に含ませた問い。その鋭い眼光の圧力に、思わず生唾を飲み込む。

過程を飛び越えて理解した。一つ選択肢を誤れば、瞬きの後に自分の体は消し飛んでいる。ただこの男が口を開いただけで、自分は殺されるという直感。

昨夜バーサーカーに直面した時に匹敵する恐怖が、今日の前に顕現している。黙つていても、死の運命は免れない。

ならば。

ならば、どうするか。

道はただ一つ、このサーヴァントが気に召す答えを返すだけ。しかし俺には、この男の気性など知らない。どんな言葉がアーチャーの逆鱗に触れるか、予想すらできない。考えろ。考えろ。考えろ。

この男は何と言った。俺が何故セイバーを助けたのか、と訊いた。

そんなもの、考えるまでもない。理由などない。ただ俺は、セイバーを放っておけないと思っただけ。女の子を見捨てておけるほど残酷になれる人間じゃなかったという、それだけのことだ。

それ以外には何もない。衛宮士郎が衛宮士郎である限り、俺は何度でもセイバーを助けるだろう。

嘘などつけない。誤魔化す事などできない。なら、自分の心をそのまま言葉に乗せるだけ。アーチャーから目を逸らさず、震える体を押さえて口を開く。

「……女の子を助けるのに、何か理由が要るのか？」

「ハ——貴様の目は節穴か。アレこそはサーヴァント、神話伝承に語られし英雄、人類の

守護者にして英霊よ。

英雄とはな、不可能を可能にし、人の身で奇跡を起こし、己が視野に映る全てを背負うもの。雑種風情とは比較するのも烏滸がましい。

——それを、貴様ごときが助けるだと？ 妄言も甚だしいわ、雑種」

背筋の凍るような怒りと共に向けられる、アーチャーの侮蔑。

この英霊は、身の程を弁えろと言っているのだろう。俺のように凡庸な人間が、英雄を助けようなどという考え自体が不遜。また、そんな人間に助けられることは、それだけで英雄にとっては侮辱だと。

唯我独尊を地で行くこのサーヴァントにとっては、確かにそうかもしれない。明らかに他者を見下しているアーチャーは、他人の手助け自体を拒絶するに違いない。

——けれど、それがどうしたと言うのだ。

「それでも、セイバーだって人間だ。助けられるものなら、助けたいと思うのは当たり前だろ」

「ふん。貴様は盲目か、それとも埒外の阿呆か？

——本来なら死んでいたぞ、雑種。あの狗畜生バクサーカーめに近寄ってどうなるか、それすら理解できなかつたのか」

「それは——」

いや。

理解していた。

あの暴力、あの暴風、あの暴威。その一片でも受ければ死ぬと、見ただけで解っていた。

——しかし。そんなことよりも、セイバーを助けることの方が俺にとっては大事だった。

バーサーカーに殺される？ 大剣で体を両断される？

知らない。そんなことは知らない。あの女の子が殺されることに比べればどうだっていい。目の前で、人に死なれるよりはずっといい。俺が殺されるよりも、セイバーが傷つくことの方がずっと恐ろしい。

何よりも。目の前で他人を見捨てるなんて、正義の味方にとっては有り得ない。

あの地獄、あの十年前とは違う。あの時とは違って、俺にはセイバーを助けられる可能性があった。なら、俺はそれに賭けるだけ。

五年前。あの日、あの時。衛宮士郎は、正義の味方になると誓ったのだ。それを裏切るようなことをすれば、衛宮士郎は正義の味方自分を貫けなくなってしまう——。

「——よもや。自分の命より、他人の命の方が重いなどとも言うつもりか、小僧」  
俺の葛藤を見抜いたように。アーチャーが、冷酷無比な声を叩きつけた。

その言葉に言い返せず、口を噤む。それを見下ろすアーチャーは、不愉快そうに眉を顰めた。

「たわけめ。自らを犠牲にする行為など全て偽りに過ぎぬ。自分の命を秤に乗せずには他者を救える者などいるものか。

仮に、そのような者が存在したとするならば——それは聖者でも英雄でもなく、救世主と呼ばれる最もおぞましい人間だ。

貴様のごとき雑種が、救世主の真似事だど？ 道化ぶりも大概にするがいい」

「……いや、俺だって死ぬのは怖いぞ。あの時は体が勝手に動いただけで、正直どうかした。思い出すだけで体が震えるし、そんな聖人なんかにはなれっこない」

「ほう。では貴様は、何も考えずにセイバーを救ったということか。打算も計算もなく、ただ自然に助けたと？」

——それこそ異常だ、雑種。

死の恐怖を前にして、凡百の人間が採り得る選択肢は数少ない。だが貴様は、サーヴァントの脅威など視野にも入らぬとばかり、身を挺してまで自らの敵を庇ったのだぞ。

信念もなく、目的もなく、ただ人を助けたいというのならそれは狂人だ。否——例えば譲れぬ物を持ち合わせていたにせよ、その在り方は歪んでいる」



紅蓮の瞳。血より尚紅いその眼に、ぞつとする程の凄みが宿る。

鑑定するように。裁定するように。息の詰まるような真剣さで、黄金の男は俺を譴責していた。

狂っていると。

歪んでいると。

無言の圧力が、俺の体を責め苛む。

それに反発しようとして……俺は、アーチャーの言葉が何も間違っていないことに気が付いた。

昨日出会ってからというもの、この男は腹が立つほどまっすぐな正論しか言わない。俺は何度も論破され、一度たりとも明確に反論できていない。この男の慧眼は、いつも遙かな先を見つめている。

けれど——何と言われようと、俺はこの在り方を変えるつもりはない。

俺にとって。誰かの死とは、自分の死よりも遥かに重い。誰かを見捨てるなんてこと、衛宮士郎には許されない。

十年前の、あの日。世界が業火で焼き尽くされた、あの日。俺は、数えきれない人間を見捨てた。

力が足りなかった。方法がなかった。時間がなかった。今更幾ら泣き叫ぼうとも、俺

が人間を見殺しにしたという事実は変わらない。

あの声を、覚えてる。

助けてくれ、死にたくない。そう叫んで手を伸ばした男は、建物に押し潰されて死んだ。ぐちゃり、という冗談みたいな音と、肉片が飛び散る光景を、微かに覚えている。

自分はいいから、子供だけでも。そう言つて縋つた女は、生きたまま焼かれて死んだ。赤子と共に焦げていくその残像が、今も脳裏に焼き付いている。

それは、俺が犯した罪の記憶。他の全てをなくしても。この記憶だけは、いつまでも永遠に残り続ける。

現実的に考えれば、俺が彼らを助けようとしたところで、死体が一つ増えるだけだっただろう。だがそれでも、彼らを助けることができたかもしれないという可能性は残っていた。

それを。俺は、他ならぬ自らの手で握り潰したのだ。彼らに背を向けて。ごめんなさいと、何の助けにもならない自分勝手な謝罪だけを残して、俺は逃げたのだ。

後に残ったのは、怨嗟の声。理不尽に憎悪し、現実恐怖し、神を呪う数多の人間の叫びだけ。

その全てに背を向けて。死にたくないという、その一心だけで走り続けた。……俺が見捨てた人たちも、同じように思っていたにも関わらず。

逃げて、逃げて、逃げて。どこまでも逃げ続けた。

他人を助けようとした人は、死んだ。誰かを救おうとした人も、死んだ。そうして——みんなを見捨てて一人だけ逃げた、俺だけが生き残った。一番死ぬべきだった、卑怯な人間だけが生き残ってしまった。

忘れることなどできない。これは俺の罪だ。逃避など許されず、死者たちの想念はいつまでも俺を呪い続ける。間接的にはあるが、俺は人を殺したのだ。その罪過は、未永劫この身に付き纏う。

故に——俺はもう、人を見殺しにすることはできない。例え何と言われようとも、俺は人を助けて——正義の味方になると、そう決めたのだから。

救世主なんかじゃない。俺は、そんな高尚な人間じゃない。これはただの、独り善がりな贖罪に過ぎない。

いくら他人を助けたところで、過去は変えられない。事実が変わらないし、死者は蘇らない。そんな事は理解している。とつくの昔に、俺は知っている。

だけど、約束した。

俺は約束したのだ。

正義の味方そのものだった、父の前で。俺は最後に、誓ったのだ。

「——フン、偽善者が狂人の類かと思ったが、存外に芯は強いらしい。」

貴様は余程珍妙なマスターのようだな、雑種。我ながら、星の巡り合わせが悪かったと見える」

不機嫌そうに鼻を鳴らすと、アーチャーは腕を組んで再び壁にもたれかかった。会話を拒絶するように、その双眸は閉ざされている。

どこまでも傲慢に振舞うこの男に、俺の意思は伝わらないだろう。またアーチャーの考え方も、今の自分には理解できそうにない。

合理的で、必要とあればどんな物でも切り捨てる。情など微塵もなく、ただ冷血に物事を判断するこの英霊は、誰よりも冷酷で残忍だろう。

だけど……それが悪と詰れるかと言えば、そうでもない。何と言うか、この男はこの男なりに筋が通っているような部分がある。事実、このサーヴァントの振舞いには冷徹さこそ感じられても、醜悪さや陰湿さといったものは欠片もない。

記憶がないという状態でこれなのだから、本当のアーチャーはどのような人間だったのだろう。少なくとも、気軽に付き合えるような相手ではないことは確かだ。

「……………ん？」

ぴくり、とアーチャーが身動きした。その直後、廊下の方で足音が聞こえてくる。

一呼吸おいて、がらりと開けられる扉。清涼な空気と共に、姿を現したのは――。

「あ、起きてたのね。具合はどう、衛宮くん？」

その姿を、見違えるはずもない。

夜の丘。つい数時間前、セイバーを従えあのバーサーカーと戦っていた、遠坂凜という少女だった。

\*\*\*

その後。

居間に降りた俺とアーチャーは、遠坂とセイバーを交えて色々なことを話し合った。まず驚いたのは、遠坂が「私たちと同盟を組まない？」などと提案してきたことだ。どういう風の吹き回しかと思っただが、どうも昨日のバーサーカーが原因らしい。

遠坂の説明にもあったが、英雄というのは基本的に、有名であればあるほど強くなる。昨夜のヘラクレスなど、最高クラスの大英雄と呼んでも過言ではない。並大抵のサーヴァントでは、まともに戦う事すらできないだろう。

勿論、セイバーだって強力なサーヴァントだ。けれどそれでも、あのバーサーカーの前には一歩劣る。

加えて、あの異様な再生能力。おそらくは宝具なのだろうが、傷を与えても回復されるのではなかったものではない。

とはいえ。バーサーカーに宝具があるなら、こちらのサーヴァントも同様の物を持っている。記憶を失っているアーチャーは宝具を使えないと言っているが、十全の状態で召喚されているセイバーにはそんな問題はない。

しかし、必殺技だという宝具をポンポン撃てるわけもなく。基礎能力のほぼ全てで劣っている以上、どうやっても単独でバーサーカーへ勝利できる確証が持てない。そこで、バーサーカーを倒すまでの間、俺たちと同盟を組むことにした……という流れだ。俺としても遠坂やセイバーと戦いたくはない。彼女たちと戦う心構えなんてできていないし、知識も技術も情報も、戦うための準備は何一つとして揃っちゃいない。

少しの間だとしても、遠坂たちが味方になってくれるのなら心強い。俺の未熟な魔術についても指南してくれるということなので、ありがたく同盟の申し出を受けることにした。

「——じゃ、これで契約成立ね。バーサーカーを倒すまでは、味方同士ってことで」  
よろしく、と差し出される手。華奢なその手を、しっかりと握り返す。

「ああ。よろしくな、遠坂」

俺の答えに、遠坂は満足そうに微笑んだ。その自然な笑みに、思わずドキツとする。

学校での姿とは全然違うけど、こっちの遠坂も断然魅力的だ。今まで忘れていたけど、俺は女の子と手を握る機会なんてなかったから、こうして握手すること自体がレア

だ。

女の子と全然関わりがないわけではないが、桜は後輩だし、藤ねえは……アレは、そもそも女子という範疇に含まれるのかどうかも怪しい。

まあ、それはともかくとして。同盟を組むことになる女の子は、遠坂一人だけじゃない。ちゃんとセイバーにも挨拶しておかなくちゃいけないだろう。

遠坂から向き直り、セイバーに右手を差し出す。アーチャーと同じように私服姿に着替えているセイバーは、こうして見ると普通の女の子にしか見えない。

「……？」

不思議そうに、俺の手を見つめてくるセイバー。

……そういえば。彼女には、まだ自己紹介すらしていないかった。

「まだ、セイバーにはちゃんと挨拶もしてなかったしな。俺は衛宮士郎。これからよろしく頼む、セイバー」

それを聞いて、納得の行ったという表情を浮かべるセイバー。柔らかい微笑みを浮かべて、俺の手をしっかりと握り返してくる。

「ええ。よろしくお願ひします、シロウ」

落ち着いた声が、耳朶に心地よく響き渡る。

穏やかにこちらを見つめてくる翡翠の瞳は、見たこともないほど綺麗で。不覚にも、

心臓の鼓動が速まった。

今更だけど、セイバーはとんでもなく美人だ。アーチャーも人間離れた美貌だ。あれは何というか、どこか普通とは隔絶したものを感じさせる。感嘆するよりも先に、畏れや怯えといった感情が湧いてくるのだ。

でも、セイバーは違う。自然な美貌、とても言うのだろうか。人間味に溢れながらも、完璧な人形のような造形。そんな子が目の前で微笑んでいるのだから、破壊力は抜群だ。

「——シロウ。同盟を組む前に、言っておきたいことがあります」

唐突に。氷のように冷たい声で、セイバーは怒りを向けてきた。その豹変ぶりに、思わず気圧される。

「シロウ。何故貴方は、私を庇ったのですか」

「なんでって、そりや——」

そうしなければ、セイバーが死んでいたから。

先ほども、アーチャーに問い詰められたばかりの内容。また同じ話を蒸し返されることに不快感を覚えるが、セイバーが俺にそれを聞くのは当然だ。

アーチャーに答えたのと同じ言葉を、セイバーにも返す。誰に何度聞かれようと、俺の本心は変わらない。



すると。ますます不機嫌な表情を浮かべて、セイバーは俺をむっと睨んだ。

「貴方はアーチャーのマスターでしょう。私のマスターだというのなら、まだ私を助けてようとしたことも理解できる。」

ですが、私は本来なら貴方と敵対するサーヴァントです。敵を助けようなどという行動は、控えて貰わないと困ります」

「でも、セイバーは味方になってくれるんだろ？なら、助けるのは当たり前じゃないか」「いいえ。サーヴァントにとっては、マスターとしての役割に徹して頂けることが何よりの助けになります。戦闘は私の領分なので、シロウも私を庇おうなどとは思わないで下さい。その必要はありませんし、そんなことで無駄死にをされては、いくらサーヴァントでも守りきれません」

遠回しではあるが。助け自体が迷惑だと、セイバーは暗に告げていた。

アーチャーも言った通り、英霊とは存在自体が人間より高位にあるモノ。そもそも、彼らにとって人間の助力など必要ないのだ。昨夜のようなことは、有り得ないはずの事態。

理解している。何の力もない俺が、サーヴァントを助けるなんてできるわけがない。昨日のあれは、あくまでも偶然。砂漠から一粒の金砂を掴み取るような、そんな途方もない幸運が作用しただけのこと。もう一度同じ状況になれば、俺は確実に死んでいる

し、セイバーを助けることもできないだろう。

でも、それでも。

俺の目の前で誰かが……女の子が、傷ついていて。それを何もせず放っておくなんていうのはおかしい。

——血を流して、ボロボロになったセイバー。

あんな光景を、何度も見ることになるなんて。そんな現実には、到底許容できない。

どんな魔術が働いたのか、今のセイバーは至って普通の状態だけど。治るからといって、傷ついて良いという問題じゃない。

「——は。忠言耳に逆らう、とはこの事よな。無駄な説教は止めておけ、セイバー。そんな雑種は、お前の言葉など聞きません」

一人だけ、泰然と座っていたアーチャー。

同盟についての相談を持ちかけても、好きにするがいい、としか答えなかったサーヴァント。こちらに興味すら見せなかつた男は、諫めるようにセイバーに視線を向けていた。その瞳に、昨夜のように押搦するような色は見られない。

一体、どんな心変わりをしたのか。至って真剣に、アーチャーはセイバーを止めていた。

「それはどういう意味ですか、アーチャー。不適切なマスターの行動は、本来サーヴァン

トである貴方が止めるべきでしよう」

「ふん。その小僧は、貴様が考えているような人間ではないという事だ、セイバー。」

——もつとも、素質すら持たずに聖杯戦争などという遊戯に選ばれた男だ。まともである道理がなからう」

睨み合う二人の英霊。紅と翠の瞳が、互いに互いを見つめ合う。目の前で自分のことを議論されているにも関わらず、二人の雰囲気の前には口を挟めない。

……昨夜から思っていたが、どうもこの二人は相性が良くないらしい。口を開けば、すぐに口論を始めてしまう。

謹厳実直なセイバーと、傲岸不遜なアーチャー。どこまでも対照的な二人は、その性格も真逆のようだ。

「あーもう、なんですぐケンカするのよ、アンタたちは」

はあ、と遠坂が盛大にため息をつく。

昨夜から、二人のサーヴァントの諍いを止めているのは遠坂だ。一般人の喧嘩と英霊の争いは文字通り次元が違う。下手をすれば昨夜のような大破壊を招く羽目になる以上、遠坂の気苦労は並大抵ではないだろう。

アーチャーのあの偉そうな態度も揉め事の原因なのだから、マスターである俺も止めるべきなのだろうが……誰あろう俺について言い争っている以上、張本人が介入しては

より事態をややくしくするだけだ。

「衛宮くんのごことは措いておいて、もうちよつと建設的な話をしない？ 例えば、これからの方針とか」

やつてらんない、と言わんばかりの表情を浮かべて、遠坂がこちらに向き直る。

「ん？ バーサーカーを倒すまでは手を組もう、つてことじゃないのか？」

「だから、その方法よ。どうやつてバーサーカーを倒すのか、その話を全然してないじゃない」

む。言われてみればそうだった。

セイバーとアーチャーの、二人がかりでも敵わなかったあの巨人。何の策も持たずに挑めば、蹴散らされるだけなのは明白だ。

今考えるべきなのは、現実的な脅威にどう立ち向かうか。この同盟も、あくまでバーサーカーを倒すために結んだものなのだから、その前提を忘れてはいけないだろう。

「結論から言うと。わたしたちだけじゃ、あのバーサーカーには勝てないわ」

断言する遠坂。その内容に、思わず絶句する。

隣のセイバーが浮かべている沈痛な表情からして、それは真実なのだろう。しかし……勝つのが難しい、ではなく勝てない、とはどういうことなのか。

昨日、セイバーはバーサーカーと互角に戦っていた。最終的には斬り伏せられたとし

ても、セイバーはバーサーカーとまともに打ち合っていたのだ。

確かに終始押されていたとはいえ、それはバーサーカーが先手を打ち、その後もセイバーが反撃する隙を与えなかったからだ。こちらから機先を制すれば、勝負がどう転ぶかは判らない。

「もちろん、負けるとは思わない。あつちのサーヴァントが強力だとしても、わたしのセイバーだって特別よ。

でも、規格外なのはバーサーカーだけじゃない。そのマスター……あの、イリヤスフィールって娘も普通じゃないわ。寧ろ、どちらかといえばそっちの方がおかしいかも」

「え——？」

思い出す。バーサーカーの傍らに立っていた、雪のような白い少女。

あの小さな女の子が聖杯戦争に参加したマスターということ自体が信じ難いが、魔道の世界に常識は通用しない。そういうモノなのだ、理解するしかないのだ。

けれど——それを納得できるかといえ、そんなわけではない。あんな女の子が人殺しの戦争に参加するなんて、そんなのは何か間違っている。

「貴方とアーチャーは色々と特別みたいだけど、普通、サーヴァントの現界にはマスターの魔力が必要なの。」

サーヴァントはこの世界の住人じゃないから、留めておくには楔が要るわけ。それが、マスターとその魔力。聖杯の補助があっても、サーヴァントを現世に留め続けるのは簡単なことじゃないわ。

サーヴァントが強力な英霊であるほど、マスターの消費する魔力は増えていく。サーヴァントが十分な能力を発揮するためには、それだけ多くの魔力が必要なの。いくら速い車だって、ガソリンがなくちゃ走れないでしょ？」

要するに。サーヴァントを車だとすると、マスターはガソリンタンクで、魔力はガソリンだという事なのだろう。

車を速く、長く走らせようとすればそれだけ多くの燃料が必要になる。マスターとサーヴァントの関係も、要約するとそれと同じだ。

「あの子が召喚していた英雄は、かの有名なヘラクレスよ。あんな英霊、ただ維持しているだけでもマスターの負担は尋常じゃないわ。

——それを。あの子は、よりによってバーサーカーのクラスで召喚して、サーヴァントとして従えてる。これがどういうことなのか、解るわよね？」

バーサーカー。

このクラスで召喚されたサーヴァントは、理性を剥奪される。その代償として、バーサーカーのサーヴァントは本来のステータス以上の性能を発揮できるようになる。

本来は、ステータスの低い英霊を強化するクラスらしい。だが、マスターの魔力消費量が膨大になるという欠点も持ち合わせている。

ただでさえ凄まじい英霊であるヘラクレスを、本来の性能以上に強化する。その脅威がどれほどのものなのかは、昨夜十分過ぎるほどに思い知った。

しかし。狂戦士のサーヴァントを使役するあの少女は、あれ程バーサーカーが戦つていても、何ら辛そうな素振りを見せなかった。つまりそれは——あの少女は、莫大な魔力を消費する英雄を何の問題もなく従えているという証拠に他ならない。

……なんてことだ。

遠坂に指摘されるまで気が付かなかったが、凄まじいのはバーサーカーだけではない。そのマスターも、桁違いの能力を持っている。

立場を置き換えてみる。アーチャーが肉体を持っているせいか、俺は魔力の消費を感じていないが、もしそんなイレギュラーが起ころなかつたとすれば……半人前の俺ではアーチャーへ魔力を供給し続ける事など不可能だろう。

「サーヴァントかマスター、どちらか片方だけが優れているなら、わたしとセイバーが負ける理由はないわ。

……でも、その両方がわたしたちより上つていうのは厳しい。真正面からぶつかつても、勝つのは難しいでしょうね。

というわけで、どうにかしてあの怪物をやつつける方法を考えなくちゃいけないんだけど……一番厄介なのは、あの再生能力ね」

むう、と遠坂が唸る。

そうだ。いくら高い攻撃力を持っていても、殴られる前に倒してしまえばいいだけの話だ。当たらなければ、銃も剣も意味を持たないのだから。

しかし、あのサーヴァントが反則的なのは、アーチャーの矢を以てすら殺しきれないどころか、すぐに傷を塞いでしまった回復力。あれをどうにかしない限り、こちらに勝ち目はない。

「それだけではない。あの狗畜生バースーカーめの宝具は、再生能力など副産物に過ぎん」

「何か知っているのですか、アーチャー？」

口を挟んできたアーチャーに、セイバーが質問する。やはりアーチャーとは反りが合わないのか、その口調は固いまま。

一方、悠然と胡坐を組む黄金の青年は、飄々とした笑みを浮かべてセイバーへと視線を送る。一体何が楽しいのか、このサーヴァントがセイバーを相手にしている時は常に上機嫌だ。

「知っている、と言うよりは看破した、と言うべきか。あの肉達磨は、貴様らの想像より上に行く。」



貴様らは煙で見えていなかったようだが、私の矢はバーサーカーを一度殺している。にも関わらず、アレは立ち所に死から蘇った。

ふん——斬ろうが焼こうが倒れぬ英雄は珍しくもないが、よもや本当に死から蘇る男がいるとはな。あの狂犬めは、一度や二度殺した程度では滅びぬらしい」

「は——!?!」

セイバーの表情が驚愕で固まった。有り得ない、と言わんばかりに見開かれた瞳。

「え、それって……!?!」

冗談だろ、おい。

セイバーが必死に傷ついて戦って、アーチャーがあれだけの武器を使って、遠坂が掩护してくれて、それでやっと一撃が届いたんだぞ。そもそも攻撃が届くかさえも怪しいのに、それを何回も殺すだって？

サーヴァントが二人がかりでも相手にならない程の能力を持った怪物。そんなヤツが、一度や二度殺したくらいでは死なないときた。出鱈目にもほどがある。

なら、どうやったらアレを倒せると言うのか。そんな不可能を可能にする存在が居たら、そいつは神様みたいなものだろう。同じ英霊であるはずのセイバーとアーチャーを易々と凌駕したあの実力、上回るなどできるはずがない。

「……って、ちよっと待った。アンタ、どうやってそんなの見抜いたのよ」

衝撃でぼかんとしていた遠坂が、思い出したようにアーチャーを睨む。

それに対し……座ったままのアーチャーは、あろうことか、退屈そうに欠伸すらして見せた。

「さてな。如何な理屈かは知らぬが、私の眼は大抵の事柄を見抜くようだ。

あの男のあれは、逸話を宝具として昇華したものだろう。その真価は再生ではなく蘇生能力。かつて乗り越えた試練の数だけ、ヤツは命の貯蔵を持つというわけだ。

神どもがヤツに与えた祝福<sup>呪い</sup>、十二の試練<sup>ゴッドハンド</sup>。死へ至らせようにも、あの肉体は生半な攻撃など通すまい。

ハッ——私の知ったことではないが、バーサーカーめに立ち向かうのであれば相応の策を講じねばならぬだろうよ。精々足掻くことだな」

あくまでも他人事のように振舞うアーチャー。

真剣な俺たち三人に対して、その雰囲気はどこまでも軽い。退屈な映画を眺めているように、興味なさげな瞳をこちらに向けている。

とんでもない情報を暴露しておきながらの無関心な態度に、セイバーが怒りを露にした視線を叩き付ける。遠坂ですら、むっとした表情でアーチャーを睨んでいた。

みるみるうちに険悪になっていく空気。このままでは、結んだばかりの同盟がご破算になってしまいかねない。

……正直に言うと、俺も少しイラツと来た。いくらアーチャーにやる気がなくても、俺たち三人は真面目に話し合っているのだ。自分は関係ない、というあからさまな態度を見せつけられては、一体何様なのだと言いたくもなる。

「アーチャー。おまえ、無関係だって言ってるけど、それじゃあ聖杯戦争なんかどうでもいいって言うのか」

セイバーがアーチャーを叱責しようと口を開いた瞬間、それを遮って問いかける。すると、何を今更と言わんばかりに、アーチャーは冷笑を浮かべて見せた。

「言ったであろう、元よりこの戦いは我の物ではない。自らの戦でない以上、我は一切の執着を持たぬ。」

勝利も敗北も貴様の物だ、雑種。貴様の道は、貴様自身が決めるが良い」

自分の戦いではないから、勝とうが負けようがどうでもいい——。

信じられないことを言い放ったアーチャーを、セイバーがますます怒りの籠った目で睨む。生真面目な彼女にとつて、アーチャーの言動は見過ごせないのだろう。

だが……不思議と、俺はその言葉に怒りを覚えなかった。

乱暴に突き放すような言葉ではあるが、つまりこの男は、俺の好きにしろと言つただ。背中を押してくれるようにも思えるその内容に、続けようとした言葉が止まってしまう。

どうでもいいと言いながら、バーサーカーの情報を見せてくれる。

自分の戦いではないと言いながら、未熟なマスターのサーヴァントとして戦ってくれる。

執着はしないと言いながら、後押しをするようなことをしてくれる。

この黄金の英霊は、本当にわけがわからない。矛盾だらけかと思えば筋が通っているし、合理的かと思うと一貫性がない。理解を超えた存在と言うのは、多分この男のような人間を指すのだろう。……いや、そもそもコイツは英霊だけだ。

「はあ……まあいいわ。アーチャー、バーサーカーの宝具の話って本当なのよね？」  
怒りを堪えるセイバーや口を閉ざした俺に代わって、遠坂がアーチャーに質問を続ける。

「うむ。我は嘘は吐かぬ、信じるが良い。最上級の武具を以てすれば、あるいはヤツの命を削る事も可能だろうよ」

その言葉を聞いた遠坂が、うげ、と女の子にあるまじき響きを漏らす。……うん、そう言いたいの俺も同じだ。

反則だろ、それ。

作戦を練って、幸運が重なれば、ひよっとしたら一回か二回くらいはあの怪物を倒すこともできるかもしれない。こちらには二人のサーヴァントがいるし、アーチャーの矢

もバーサーカーを傷付けることはできた。なら、致命傷を与えられる可能性はある。

しかし——それを十二回と言われると、どう考えても不可能だ。

最上級の武器を使えたつて、アーチャーの武器は確かに通用したが、同じ手が何度か通じる相手じゃないだろう。そんなもの、いったいどこで用意すればいいというのか。

どうしたものか、と首を捻る。遠坂も、俺と同じように難しい顔で唸っている。

「とんでもない反則宝具ね……ランサーの槍がまだ可愛く見えるわ。」

あなたは、なにかそういう宝具を使えたりはしないわけ？　アーチャー。記憶がないつて言ってたけど、少しは何か思い出した？」

「——いや」

遠坂がそう訊ねた途端、アーチャーの顔が曇る。

「武器を使った所から察するに、この肉体は過去を覚えているようだ。となれば、いずれ記憶も思い出すだろうよ。」

——だが、それが何時になるかは断言できん。一時間後か、一日後か、一週間後か。忌々しいが、それすら判然とせぬ。

記憶が戻らぬ以上、我の宝具は使えぬ。故に、我の助力は期待せぬ事だ」

はあ、と今日何度目かのため息をつく遠坂。ため息を吐くと幸せが逃げるぞ、と言い

たいが、藪蛇を突くのは止めておく。

「……こいつ使えねー」

「ん？ 何か言ったか、小娘」

「何でもないわよ。」

……ふう。アーチャーの記憶が戻るまでは、こっちで何とかするしかないか」

そう諦めたように首を振ると、遠坂はてきぱきと方針を纏め出した。

セイバーによると、彼女の宝具はあのバーサーカーを打倒できる可能性を持っているらしい。が、燃費が悪い上に攻撃範囲が広すぎ、昨日のように住宅街が近くにある場所でおいそれと使えるようなものではないとのことだ。

一方でアーチャーの方はというと、宝具こそ思い出せないものの、昨日見せたあの双剣は自由に使えるようだ。弓にもなる双剣と、黄金の強固な鎧が今の弓兵の手札。これだけで、どうにかやりくりするしかない。

一応、サーヴァントを度外視した戦術として、マスターであるイリヤスフィールを倒すという手段もあるが……それは難しいだろうし、何より俺自身が絶対にやりたくない。

というわけで、作戦が決まった。

こちらからは打って出ず、有利な場所——つまり、セイバーの宝具を使えるような場

所にバーサーカーを誘い込む。

首尾よく誘いに乗ってきたら、アーチャーの掩護を受けたセイバーが宝具を使つてバーサーカーを倒す……という算段だ。

……とはいえ、急場凌ぎで立てただけのこの基本方針は穴だらけだ。

第一に、バーサーカーを誘い込めなかつたらその時点で計画が破綻してしまう。昨日のように先手を打たれると、何もできないままあの暴力に蹂躪されるのがオチだろう。

第二に、確実にバーサーカーを仕留められる保証はない。セイバーの宝具は強力だというが、アーチャーの推測が確かなら、あの英霊は防御力と蘇生能力を持ち合わせるといふ。それを上回れなかつた場合、俺たちの方が返り討ちに遭う。

そして第三に、俺たちには情報がない。あのサーヴァントが他にも宝具や能力を持っていた場合、何も知らない状況ではそちらへの対抗手段を講じることができないからだ。

真名が判っている以上、そこから推測すれば良いという案も出たが、ここに来てもあるの英霊がどれだけ規格外なのかが判る。数々の魔物や神々と戦つた十二の試練の逸話に加えて、棍棒に弓矢、黄金の杯といった用いた道具の数々。これらを宝具として持っているのならば、ますます旗色が悪くなるばかりだ。

こんな不利な状況でも、俺たちは戦うしかない。例え俺たちに戦う意思がなかったと

しても、向こうは確実に俺たちを殺しに来るのだから。

当面の間は、あの<sup>ヘラクレス</sup>大英雄が聖杯戦争の壁となるだろう。

それを乗り越えた時、俺はどうすればいいのか。遠坂やセイバーと、戦うことはできるのか。まだ、何も答えは出せていない。

——今はただ、十年前のような惨劇を繰り返させないという、その覚悟があるだけ。それさえあれば、俺は前に進んでいける。

\*\*\*

深夜。

誰もが寝静まった夜、一人土蔵で息を吐く。澄んだ夜の空気が、隅々まで沁み渡って気持ち良い。

昨日のように、ランサーに襲われることもなく。また、アーチャーが突然現れることもない。あの騒ぎが嘘のように、この場所は普段通りの静寂を保っている。

あんな出来事があった後でも、ここはいつもと変わらない。十年近くもの間、俺が遊び場にしてきた土蔵。他のどんな場所よりも、ここにしていると心が落ち着く。

午前中に色々と話した後、同盟を組むのだからという理由で、しばらくの間遠坂と



セイバーは俺の家に住むことになった。

部屋は余るほどあるので、彼女たちには別棟を使ってもらうことにした。自宅から遠坂が何やら運び込んでいたようだが、魔改造されていないことを祈りたい。

遠坂たちもやはり疲れているのか、大分前から別棟の電気は消えている。神経が太いと言うか何というか、あの御仁はあつという間にうちの環境に慣れてしまったらしい。

アーチャーも、俺の隣の部屋にいるはずだ。あの偉そうなサーヴァントは、事もあろうに俺の家を陋屋呼ばわりした挙句、与えられた部屋も嫌がるという我儘振りを見せてくれたが、怒り心頭のセイバーに根負けする形で我が家の一室に住むことになった。

聖杯を巡った戦争の渦中にある以上、全員が眠っているのはどうかと思わなくもないが、この家には結界があるし、サーヴァントは少しでも異常があれば感知できるらしい。本来、サーヴァントは眠らなくても問題はないそうだが、昨夜のダメージがまだ残っているようで、魔力を回復させるためにセイバーも今日は休むと言っていた。

「……………」

深呼吸をして、雑念に満ちた心を落ち着ける。夜の冷涼な空気が、意識をクリアにしていく。

今俺がここに来ているのは、昨日サボってしまった魔術の鍛錬を再開するためだ。

実を言うと、今日一日ぐらい休んでしまってもいいかという考えもあったのだが、そ

んな甘い考えでは死んだ親父に申し訳が立たない。

そして何より……鍛錬によって鍛えられるのは自分自身だ。それはつまり、鍛錬を止めれば自分が鈍り切っていくということ。そんな怠惰は、衛宮士郎には許されない。自分の誓いも守れない奴が誰かを助けようだなんて、思い上がりも甚だしい。ましてや、高々「忙しい」という理由で自己の鍛錬を投げ出すなど、それこそ絶対に許せない。

理想を目指す、戦うと決めた。なら、こんなところで立ち止まっていられるか。

決意も新たに、近くに転がっていた古いラジオに手を伸ばす。

これは、いつものように藤ねえがどこからか持ってきたものだ。直せばまだ使えるだろうと考えて、何日か前に引つ張り出しておいた。今日の鍛錬は、これを修理することだ。

……と言っても、ただ直すだけじゃない。当然だが、俺が修理に使うのは魔術。

物体の解析。今日俺が訓練するのはそれだ。

と言っても、大したことじゃない。他の魔術師なら、きつと当たり前のようにできること。けれど俺にとっては、使える魔術の数自体が少ない。だから、こうして手持ちの技術を鍛えるのだ。

強化や投影といった魔術も一応は使えるが、まずは基本から入る。一日サボったのに、いきなり難しい分野から始めて上手く行ったらそれこそ驚きだ。

頭を現実に戻して、手に握ったラジオに意識を集中する。全身に魔力を通した  
ら、やることはただ一つだけ。

「――同調、開始」

構造を解析する。機械の全てを見渡し、壊れている部分を把握。

……よし、判った。

電波を音声に変換する、変波回路の調子が悪いようだ。多分、何かの拍子に壊れてしま  
ったのだろう。

修理すべき場所さえ判ればあとは簡単で、いつものドライバーを手際よく使い、ラジ  
オを分解していく。破損しているコンデンサを取り除き、新しいものに取り換える。以  
前、何かのついでに部品屋で買ってきておいたのが役に立った。

一通りの作業が終わったところで、電池を交換。スイッチを押すと、若干古ぼけたス  
ピーカーから音が流れ出した。

うん、好調。部品がイカれていたせいで、今までは上手く電波を拾えなかったみたい  
だが、この通り元気に動き出した。

最近はいンターネットの普及でラジオを聞く人も少なくなつたようだが、俺はこれが  
嫌いじゃない。画面を見ていると目が疲れるけど、ラジオならその心配はない。

今の時間帯は何をやっているのだろう、と考えながらチャンネルを合わせる。……日

付が変わるから、そろそろニュースをやっている頃だろう。

たまに聞くローカル番組の周波数にチャンネルを切り替える。ほどなくして、慣れ親しんだ音楽とともに今日のニュースが流れ出した。

「——昨日未明、冬木市南部で『不審な人影を見た』と警察に通報がありました。

警察官が駆け付けたところ、通報があった家の敷地内に血痕が残されていたことから、警察は連絡が取れなくなっている斉藤さんご夫妻が何らかの事件に巻き込まれた可能性が高いと見て調査を進めています。

また事件当時、斉藤さん宅には鍵が掛かっていたため、警察では計画的な犯行との見方を強めています。

冬木市では、最近同様の事件が多発しており——」

……ん？

何らいつもと変わりのない、事件の報道。でも、何故か奇妙な違和感を覚えた。

住人からの通報。

鍵が掛かっていたのに、通報したはずの人間は行方不明。

残されたのは血痕。

加えて、最近こんな事件が多発している——？

「サーヴァントの仕業か……？」

考えられる可能性。その中で一番高いのは、間違はなくそれだ。

最近頻発し出した奇妙な事件は、全て聖杯戦争絡みだと見ていいだろう。何も知らない普通の人間からすれば、魔術が関わった不可解な事柄でも「変な事件」としか思わない。日々のニュースにも、もつとよく気を配っておくべきかもしれない。

しかし……やはり、一般の人が巻き込まれているのか。何の目的かは知らないが、同様の事件が何度も起きているということは、下手人は明らかに何らかの目的を持っている。

直ぐにでも止めに行きたいが、今の俺はあまりに無力だ。できることなど何もなし、闇雲に動くこともできない。

だから、今はただ……自分を鍛えて、人を救えるような正義の味方を目指すだけ。普通の人を巻き込むような奴が居るなら、俺が必ず止めてやる。

聖杯戦争が、全てのサーヴァントを蹴落とすものである以上——こんな事件を引き起こしているヤツとも、いずれ必ず会うことになる。その時こそ、そんな蛮行に終止符を打つ時だ。

気合を入れて、自己の精神に埋没する。いつも以上に、今日は集中できそうだ。

——キイキイと鳴く、虫の音。それだけが、妙に耳障りだった。

## 7. 固まる決意

——翌日の朝。

意外にも、藤ねえと桜への説明はあつさりと済んだ。

アーチャーたちを見た瞬間に凍り付いた桜と藤ねえだったが、俺の説明と遠坂のサポートの甲斐あつて、何とか三人が居候することを納得させられた。

曰く、セイバーとアーチャーは遠坂の外国での知人。この度遠坂に会うために冬木市にやって来たのだが、折しも遠坂の家は改装中。というわけで、事情を聞いた俺が、我が家を提供することにした——という建前だ。

よくよく考えてみれば、何故日本に来るのに連絡を寄越さなかったのか、何故遠坂に外国人の知人がいるのか、とツツコミどころが満載なのだが、そこはそれ。遠坂の演技力には舌を巻いた、と言うほかない。アイツ、本当に学校では猫を被つていやがった。

ちなみに、一番面倒臭そうなアーチャーについては、旧い貴族の出身だからちよつとワガママ、というデタラメを桜と藤ねえに吹き込んである。あの金ぴかが偉そうな態度を取つても、これで怪しまれることはない……はずだ。たぶん。

そんなわけで二人への説明を済ませると、一気に賑やかになった朝食が始まった。

今までは俺と桜、藤ねえの三人で食べていたのだが、人数が一気に倍になったので、作る量も二倍になる。今朝は何とか間に合ったが、これは明日にでも買い出しに行かないとまずいかもしれない。

「どうぞ、先輩」

「ん。……サンキユ、桜」

居間の一角で、差し出された茶碗を受け取る。白米の温度が、陶器越しに腕に伝わってくる。

……結局、今朝の食事の用意は大半を桜に任せてしまった。このままでは申し訳ないし、今夜からはきちんと腕を振るわなければ。人数が倍に増えたので、俺としても思う存分料理ができるのは楽しみだ。

それに、遠坂たちに不甲斐ない家主だと思われたままなのも癪だ。桜が料理を作っている、と聞いた瞬間のあの生温かい目線、絶対にアイツはろくなことを考えていない。

「——ふむ。この卵焼き、砂糖が一匙多いようだな。今少し減ずれば主菜との調和が取れよう。精進せよ、娘」

「えっ、一口食べただけなのに、そんなことまで判っちゃうんですか？ 貴族の方って凄いですね。」

実は私も、今朝はちよつと入れ過ぎたかな、って思ってたんです。細かい味の調整と

かは、まだまだ先輩には敵いません……。

「ありがとうございます、アーチャーさん。次は気を付けますね」

「アーチャー。作って頂いた食事に対して、その傲慢な態度は何なのですか。

……気にしなくて構いません、桜。私には、この味が心地良い」

「ハッ。料理の機微を解さぬとは、器が知れるぞセイバー。さては貴様、満足に調理を学んだこともあるまい？」

「なっ……！ 私の調理経験など、貴方には関係ないでしょう！」

「……貴方たち。食事の時くらい、ケンカしないで食べない？」

「今日は賑やかねー。うちの若い衆も、この位元気に食べればいいのに。やっぱ若い

子は元気が一番よねー」

……なんだ、この混沌<sup>カオス</sup>。

衛宮家史上、かつてない程の複雑怪奇な食卓が出来上がってしまったている。人数が増えると、食事とはかくも騒々しくなるものなのだろうか。何というか、果物も野菜も関係なしにごった煮にして鍋に放り込んだような状況である。要するに、收拾がつかない。

どうすればいいのか判らず、一人黙々と箸を進める。会話……になっているのかどうかは謎だが、言葉の応酬には加わらず次々とおかずを口に運んでいく。



アーチャーは偉そうに、料理一品一品を口にごとに文句やら注文やらを細かく言っている。おまえ、少しは客の立場というものを理解してくれ。

それを聞いている桜は予想外にも、ふむふむ、と頷きながらメモなんかを取っている。いや、アーチャーの意見は確かに参考になるんだが、どうしてこうやる気を出しているんだ。

セイバーはアーチャーを諷めようとしていつの間にか口喧嘩になってしまっている。その合間にも箸の動きを止めないあたり、余程お腹が減っていたのだろうか。

遠坂はと言うと、この騒乱ぶりに慣れたのか、諦めたように時々口を挟みながら、的確におかずを平らげていく。その牛肉の時雨煮、高かったんだから一人で独占するんじゃない。

藤ねえは基本的に騒がしいのが好きな人なので、何時にも増して上機嫌だ。一旦遠坂たちを居候と認めてしまうと、人数が増えたことで楽しくて仕方がないらしい。いつも以上にご飯の減りが早いので、そろそろ胃が心配になってくるが、アレは虎なので大丈夫だろう。

うん。まあ、それはさておき。食事の必要のないサーヴァントが何故普通に朝食を食べているのかと言うと、それには当然理由がある。

サーヴァントは霊的な存在であるため、食事だけでなく睡眠の必要もない。しかし、

食事や睡眠は僅かながら魔力消費を抑える効果があるらしい。ないよりはマシといった程度だが、一円を笑うものは一円に泣くとも言う。後々困らないためにも、細かい部分まで気を使っておくべきだろう。肝心な時に、魔力が切れてガス欠になってしまうのは困る。

それにセイバーはともかく、アーチャーは現実の肉体を持つている。普通の人間とは異なるようだが、それでも多少腹は減るようだ。アーチャーとの間には最低限のパスしか繋がっていない以上、アイツの状態がどうなっているのかは未知数だが、できる手は打っておくに越したことはない。

……それに。俺たちが食事をしている中、アーチャーとセイバーだけが仲間外れというのは、何となく嫌だ。本人たちはよくても、それでは俺の気分が悪い。

——と。そんなこんなで騒がしかった朝食を終えて、後片付けも済ませてしまった。桜は弓道部の朝練があるし、藤ねえはうちの学校の教師なので、いつも俺より一足先に学校へ行ってしまうている。となると、残りの家事の担当は俺になるわけだ。

なんとも朝から慌ただしいせいとか、時間の経過が早いように感じる。いつの間にか、洗う物の時間になってしまっていた。

人数が増えた分だけ食器も増えているが、まあ大した負担にはならない。朝は時間に余裕があるから、少しくらい洗う物が増えたところでどうってことはない。

「——次のニュースです。多発している冬木市新都での行方不明事件ですが、今朝になって新たな行方不明者が判明したという情報が入ってきました。警察では、海外の人身売買組織が関係しているとの見方を強めており……」

居間にいる誰かが、テレビの電源を入れたらしい。たまに見ている朝のローカルニュースが、よくない情報を伝えてきた。

「ん？ まだこのニュースやってたんだ。」

……馬鹿ね。こんなの、深山町でも起きてるっていうのに」

——と。遠坂が、聞き捨てならない言葉を呟いた。

それを聞き逃せず、皿を洗っていた手を止める。居間の方を振り向くと、不機嫌そうに腕を組む遠坂の姿が視界に映った。

「遠坂。それ、どういう意味だ」

「そのままの意味よ。ここ数日、新都での行方不明事件が報道されてるけど、それはあつちだけの話じゃない。深山町でも、何人か行方不明者が出てる」

「おい、それって——」

聖杯戦争に関係しているんじゃないか。

そう続けようとした口は、遠坂の冷たい視線を前に固まった。

「ええ、衛宮くんの想像通り。十中八九、マスターかサーヴァントが関係していると思っ

ていいでしょうね」

「——ふん。此度の聖杯戦争、随分と愚鈍な鼠が紛れ込んでいるようではないか」

遠坂に続いて、つまらなそうな顔をしたアーチャーが吐き捨てる。その言葉の意味は、未熟な俺でも嫌でも分かった。

魔術師というものは、世間に神秘が漏洩するのを極端に恐れる。理由は様々だが、これは常識以前の問題、神秘に携わる者ならば誰しもが持つている共通認識と言っている。魔術師を束ねる魔術協会も、そもそも『神秘の秘匿』の一点のみを守るために作られた組織だ。

にも関わらず。こうしてニユースになるほど、大々的に何かを……しかも、一般人を行方不明にするような何かをしでかしている魔術師がいる。この騒動が更に広まれば、魔術協会の執行者——即ち、ルールに反した魔術師を殺すための処刑人が派遣されてもおかしくはない。

魔術師としての最低限の法を無視するとは、俺よりも物事を知らぬ愚者か、或いは魔術協会の制裁すら恐れぬ豪傑に違いない。

「これだけじゃないわ。まだ噂程度だけど、最近ガス漏れ事件が頻発してるのは知ってるでしょ？ あれも多分、サーヴァントの仕業よ。被害者は、揃って魔力を抜かれてる。

町の人たちから少しずつ、生命力という魔力を奪い取ってるのよ。難しいけど、魔術

師としてのルールにも触れていないし、確実な方法ではあるわ。」

「な——」

瞠目する。

それは……他のマスターやサーヴァントは、一般人を巻き込むことを厭わないとも言うのか。

絶対に賛同など出来ないが、魔術師にとっては神秘が秘匿さえされていけば後はどうでもいい。一般人が何人死のうが、世間に露呈しなければ構わないという、自分勝手な奴らが魔術師なのだ。

しかし、それにしてもこれは異常だ。

ニュースになっていているという時点で、犯人は既にギリギリのラインを踏み越えている。それでも事件が続いているということは、尋常では有り得ない。

「今回の聖杯戦争、何かキナ臭いわ。一人くらいならおかしなのがいても解るけど、行方不明事件の犯人とガス漏れ事件の犯人は多分別々よ。」

ガス漏れ事件の方は、やり方は気に食わないけど、下手人はきちんとルールを守っている。被害にあった人間も命に別状はないし、何日かすれば元気になるでしょう。世間では、単なる事故と判断されて終わりでしょうね。

——でも、行方不明事件の方は違う。こっちは、本気で頭の悪い三流の仕業よ。神秘

の漏洩なんて、端から気にかけてもいない」

「……遠坂。その犯人、誰だか判るか?」

「判つてたらこつちからぶん殴りに行つてるわよ。わたしの町でこんなふざけた真似しようなんて、聖杯戦争以前の問題だわ」

憤然と吐き捨てる遠坂。この状況に怒っているのは、俺一人ではなかつたらしい。その様子を見て、少し安心した。

アーチャーは相変わらず無表情のまま座っているが、セイバーは鋭い視線でニューズ画面を睨んでいる。自分を騎士だと言っていた彼女も、こんなふざけた事を見過ごしてはおけないのだろう。

戦いを覚悟している者が巻き込まれたのなら、まだいい。聖杯戦争に参加している者同士が争うなら、それは解る。それぞれに聖杯を求めるだけの理由がある以上、他の参加者を蹴落とすべく策を巡らすのは当たり前だ。敵のマスターを攫う、意識を失わせる、或いは……その命を奪う。どんな手法を使おうとも、賛同はできないが理解はできる。

——だが。何も知らない普通の人を巻き込むなんて、そんなのは間違っている。

巻き込まれた人にも、生活があつたはずだ。それぞれに仕事があり、家庭があり、友人があつたに違いない。明日もまたいつも通りの一日をこなそうと、そう生きていたは

ずなのだ。

……しかし。その生活は、理不尽によって打ち砕かれる。

サーヴァントの暴威。人を超えた存在による暴力。そんなものは、天災と何も変わらぬ。普通の人間には、抗えるはずもない。最悪なのは、これが意思持たぬ自然災害ではなく、人の欲望によって生み出された惨劇だということ。

十年前。前回の聖杯戦争の結果、この町は前代未聞の被害を被った。何百人もの人々が、不条理な欲望の犠牲になったのだ。そんなことは、もう二度と繰り返させるわけにはいかない。

そんなヤツを止めるために、俺は聖杯戦争へ参加する覚悟を決めたのではなかったか。

——喜べ、少年。

なのに、なんで。

——君の願いは、ようやく叶う。

アイツ  
言峰の声が、こんなにも耳に残るんだ。

「……前回の聖杯戦争でも、犠牲を厭わぬ輩はいました」

その声に、無意識に伏せていた顔を上げる。

声の主はセイバー。正座したまま、何かを悔やむように暗い表情を浮かべた少女は、

僅かに肩を震わせていた。

「え、ちよつと待ってセイバー。貴女、前にもサーヴァントとして召喚されてたつて言うの？」

「はい。私がこの聖杯の争いに参加するのは二度目です。前回の時も——無差別に子供を攫い、殺害していたサーヴァントがいました。

余りにも被害が拡大し過ぎたため、監督役の判断で聖杯戦争は一時中断され、そのサーヴァントは全陣営から敵と見なされた。

最後は私の宝具で決着をつけましたが、そのサーヴァントを倒すまでの間、無辜の民に少なくとも犠牲が出たのは事実です」

「そっか、監督役……この件は綺礼も確認してるだろうし、アイツが何か手を打つかも……借りを作るのには癪だけど、どうにか……」

むう、と何やら考え始めた遠坂。その間に中途半端になっていた洗い物を終え、居間へと足を運ぶ。

「……………」

ぶつぶつ唸っている遠坂と、深刻な顔で座っているセイバー。それぞれ何かを考えているようで、俺が来たことにも気付いていないようだ。前回の聖杯戦争にも参加していた、と言ったセイバーに訊きたいこともあるが、今の彼女は話をしたくない、という雰



困気を放っている。後で、改めて訊いた方がいいだろう。

となると……自然と、俺の視線はアーチャーに向くことになる。

退屈そうな表情で、流れ続けるニュースを追う黄金の青年。禁忌を破った聖杯戦争の関係者がいると聞いても、興味も関心もない、所詮は他人事という態度のままだ。冷酷無比なこの男にとっては、一般人の生死すら何も感じないのだろうか。

「アーチャー。おまえ、この事件についてどう思ってるんだ？」

気付けば。思わず、そんな言葉を口にしていた。

テレビの画面を見つめていた紅い瞳が、こちらに向けられる。相変わらず、そこには何の感情も宿っていない。あるのはただ、無関心という冷たさのみ。

「別段思うところはない。人間とは、犠牲がなくては生を謳歌できぬ獣の名だ。己が欲望の為ならば、弱者を踏み躪り、平然と女子供を犯し殺す。

加えて、此度の遊戯は『何でも願いが叶う』などという願望器の争奪戦だ。その謳い文句に目が眩んだ雑種は、法を無視してでも己が本懐を遂げるべく動こうよ。

——ふん、まあ良い。それよりも、気付いたか雑種。このガス漏れ事件とやら、裏に潜んでいるのは中々腕の立つ魔術師らしい」

アーチャーに促され、テレビの画面を見る。

いつの間にか、ニュースの内容は新しいものに切り替わっていた。最近ではガス漏れが

多いので気を付けましょう、というそれだけの短いニュース。

先程の連続行方不明事件と比べると、そのインパクトは小さい。マスコミの方も、単なる事故としか認識していないようで、早々にニュースを終えると天気予報のコーナーへと移ってしまつた。

——人間とは獣の名、か。

確かに、アーチャーの言う通りかもしれない。人間は身勝手で、我儘な生き物だ。もし欲望を抑える手段がなければ、人類はあつという間に自滅することだろう。

けれど……そうならないために、法律や道徳というブレーキが存在するのだ。倫理、宗教、哲学、規範。様々な基準があるが、どれも大概同じことを言っている。即ち——『他人に危害を加えるのはやめよう』と。

人は、数多の他人が構成する社会という基盤の上に成り立つ存在だ。自分一人だけの世界にいるのではない以上、自由気儘に生きていくことなどできない。

だけど、偶にそういったルールを理解せず、犯罪に手を染める者が現れる。当然ながら、そういった人間は社会組織によって速やかに裁かれる。他者に危害を加える者を放置しておいては、それは社会全体にとって害悪となるからだ。

——ならば。人の域に留まらぬ『悪』とは、一体誰が裁けば良いのか。

「どうやら深山町側のみならず、新都でも同様の事件が起きていたようだ。町二つ分が

射程範囲とは、雑種にしては腕が良い。

だが、些か手際が良すぎるな——安直な結論ではあるが、魔術師キヤスターのサーヴァントの仕業と見るべきか」

「……キヤスター？」

俺の反芻に、然り、とアーチャーは頷く。

「キヤスターは、魔術に長けた英霊のサーヴァントだ。人間ならば規格外の所業でも、太古の時代に生きた英霊にとってこの程度は兇戯に等しい。

この事件の下手人がキヤスターと仮定するならば、雑種どもから周到に魔力を掻き集めている理由にも納得がいく。魔術以外に取り柄を持たぬクラスである以上、その燃料は幾らあっても困らぬからな」

第五のサーヴァント、キヤスター。

遠坂の説明によると、武器を使いこなすセイバーやアーチャーとは違い、キヤスターは文字通り魔術を用いて戦うサーヴァントだ。現代の魔術を易々と凌駕する神秘を引き起こす、本物の大魔術師のクラス。そいつが、町の人たちを巻き込んだ事件を引き起こしているのだろうか。

でも……先程報じられていたニュースは、一つだけじゃない。寧ろ、ガス漏れ事件の方はおまけに過ぎなかった。昨日の夜も報道され、今も特集が組まれていたニュースは

——多発する、謎の行方不明事件。

「そつちの犯人がキャスターだつて言うんなら……じゃあ、行方不明事件の方は？」

「さてな。如何に我とて、情報がなければ結論を導けぬ……が、推論はできよう。

考えてみよ雑種。その狭隘さを脱し、消息を絶つた人間どもを『道具』としての視点から見るがいい。

血、肉、骨、魔力——そら。単なる材料として見れば、人間という生物は魔術師好みのモノであろうに」

そう言い放つたアーチャー。その残忍さよりも先に、言葉の内容に怖気が走つた。

俺は、『人間が消えている』という事件にしか目を向けず、それが何故引き起こされているのか、という原因には思い当たらなかつた。それを考えれば、その事件の根本に辿り着けるかもしれない。

古来より、魔術には代償が付き物だ。神秘の世界に於いては、動物や植物、或いは人間そのものを捧げる儀式など珍しくもない。

聖杯戦争に参加したマスター、或いはサーヴァントが、人間を使って何かをしようとしてしている——。

——ふざけている。そんな蛮行を、見過ごしておけるはずもない。

他人に迷惑をかける、どころの話ではない。拉致された一般人は、恐らく帰ってくる

ことはないだろう。犯人にとっては、彼らは『道具』でしかないのだから。

単なる殺人などではない。そこに人間の尊厳などない。何が目的なのかは知らないが、普通の人を攫つて材料にするなど、許されていい道理がない。

止めなければ。

こんなことは、止めなければならぬ。

たとえ、マスターやサーヴァントを倒すことになったとしても。衛宮士郎は、そのために戦うと決めたのだから。

怒りを抑えて、拳を握りしめる。酷薄な笑みを浮かべたアーチャーは、冷たい瞳で俺の様子を見つめていた。

「他人の命が大切なのだろう、小僧？　ならば、歩むべき道はただ一つ。それを、努々忘れぬ事だ」

確かな非情さを滲ませて、そう告げたアーチャー。これ以上話す気はないのか、その視線は再びテレビの画面に向けられている。

賑やかだったはずの、朝食。だが……分かっていたことだったが、聖杯戦争の話になった途端、各人の纏う空気が冷たくなった。四人もの人間が集まっているというのに、今やこの空間に響くのはテレビの空虚な音声だけ。

自分の家だと言うのに、どこか居心地の悪さを感じる。そんな状態のまま、朝の時間

は静かに過ぎていった。

\*\*\*

——学校での、昼休み。

今まで授業を受けていたはずだったが、頭の中には何も入ってこない。今考えるべきなのは学校の勉強などではないと、俺自身が何より知っている。

授業中もずっと考えていたのは、他ならぬ聖杯戦争のことだ。

今までに出会ったサーヴァント。

マスターだという、遠坂凛とイリヤスフィールという少女。

冬木市で引き起こされた、数々の事件。

それらに、俺はどう立ち向かえばいいのか。覚悟を決めたとはいえ、素人に近い俺には、どうすれば良いのか具体的な形が浮かび上がってこない。ずっと考えていたのだが……一人で悩んでいても、結局答えは見つからなかった。

なら、他人に相談してみるしかない。幸い、今の俺は一人じゃない。一時的な同盟とはいえ、頼れる仲間がいるのだから、こんなに心強いことはない。

折しも、今日は遠坂から屋上に来るよう誘われている。向こうでも何か話があるのだ

ろうが、俺からも彼女に訊いておきたい話は山ほどある。

……というわけで、昼食を買ってから屋上に向かう。

本当なら、昼食はいつも自分で作っているのだが、今日は朝食の用意が忙しかったせいで作っている暇がなかったのだ。最近は桜が手伝ってくれることもあるが、部活の朝練がある後輩に頼ってばかりというのも申し訳ない。

――  
屋上の扉を開ける。途端、吹き込んできた冷たい風で身体が震えた。

見渡す限り、人の姿は確認できない。そもそも、冬場に屋上に出てくるような物好きは滅多にいないだろう。こんな場所でのんびりしていた日には、風邪を引くこと間違いなしだ。

でも——人がいないからこそ、大声でできないような話も堂々とできるわけで。

「遅い！ 何してたのよ士郎！」

隅の方で小さくなっている遠坂と、こうしてこっさり会うこともできるのだ。

「悪い。おまえの分も昼飯とコーヒー買ってきてやったから、それで勘弁してくれ」

「あれ……アンタ、意外と気が利くのね」

ずい、とサンドイッチとコーヒーを差し出すと、きよとんとした顔を見せた遠坂。でもそれは一瞬で、失礼なコトを言いながら何の遠慮もなく差し入れを攫っていった。

震えながら缶コーヒーを握りしめ、ふーふーと息を吐いている。それが小動物のようで、何となく微笑ましかった。

「意外って……まあいいけど。それより遠坂、一つ気になってたんだが——」  
「ん？」

「俺の呼び方。何時の間に、『衛宮くん』から『士郎』になってたんだ？」

意識してみても、初めて気が付いたが。呼び方だけでなく、どことなく態度も親しげになつていような気がする。

「あ、なんだ。そんなこと？ 協力関係になったんだし、いつまでも他人行儀じゃよくないかなー、と思つて。嫌なら戻すけど？」

「……いや、そのままでもいい。ちよつと気になつただけだから、遠坂がそれでいいつて言うならそれでいい」

何と言うか。女の子に名字ではなく名前と呼ばれることが滅多にないせいとか、どうにも落ち着かない。必要以上に遠坂を意識しないよう、一度深呼吸する。

桜は俺を先輩、としか呼ばないし、藤ねえは……あれは、異性の人と言うより異星の人だ。改めて、俺は人付き合いが上手い方じゃないんだな、と実感した。

そんな俺を不思議そうに見ていた遠坂だったが、コーヒーを一口飲むと、唐突にニタリと笑みを浮かんで見せた。



今わたし悪いコト考えてますよー、と全力主張しているような笑い方。多分、人を騙そうとしている悪魔はこんな感じに笑うのだろう。さながら、今の遠坂はあかいあくまでも言うべきか。

「ははーん、そういうコトか。なるほどなるほど。」

……さては。女の子に名前前で呼ばれたことないんでしょ、士郎」

「……………」

それが真実だけに、言葉に詰まる。というか、何でそれを見抜いたんだコイツ——!? 「ほうほう。やっぱりそっかー」

口を噤んだ俺を見て、益々笑みを深める遠坂。この悪辣さ、悪の組織の幹部だと言っても疑う者はいないだろう。何日か前まで、コイツの被った猫に騙されていた俺を引叩いてやりたい気分だ。

すす、と僅かに距離を開ける俺。このままでは何か邪悪なものに移る。悪霊とか不運とか、よくないものがやってくるに違いない。

……ところが、何故か俺へ寄ってくる遠坂。もう一度距離を開けると、更に距離を詰めてくる。ええい、何かいい匂いはするし、そんなに近寄ってこられるとこっちはドキドキするんだっての——!

「士郎。わたし寒いんだけど、そっちへ寄ってもいいかしら?」

「ちよ、おまえ、何でこっちに来るんだおい——!？」

狼狽する俺を見て、けらけらと笑う遠坂。間違いない、コイツ超楽しんでる。純真な男子をからかって楽しむ、いじめっ子タイプに違いあるまい。

俺が独り確信を深めている合間にも、楽しそうに俺の全身を眺めてくる。間違いない、今の俺はこの悪魔に弄ばれている。

……ややしばらくして。手に持ったままだったコーヒーを更に一口飲むと、遠坂は空気を切り替えるように真剣な表情を向けてきた。

「——さて、お遊びはこれぐらいにして、と。それじゃ本題に入ろうかしら。」

「単刀直入に言うけど。士郎、この学校の結界には気付いてる？」

「——?」

「結界? 遠坂が何の事を言っているのか、今一つ判らない。」

首を傾げる俺を、あからさまに呆れた顔を浮かべる遠坂。やれやれと言わんばかりに、ため息さえついて見せた。

「マスターかサーヴァントか、どっちの作業かは判らないけど。この学校の敷地全体に、強力な結界が仕掛けられてるのよ。」

それも、外界からの防御じゃなくて、内部の人間の生命力を奪うっていうあくどいヤツ。発動はまだ先になると思うけど、それでも何かおかしいって判らなかつた?」

……そう言われてみれば。

ここ数日、学校全体に妙な違和感があった。どことなく元気がないと言うか、活気が失われていると言うか。最近寒くなってきたせいだと思っていたのだが、どうも原因は違つたらしい。

でも、ここに結界を張つたという事は——それは、即ち。学校の内部にマスターが潜んでいる、という証明なのではないか。

そう気付いた瞬間、鳥肌が立つ。すぐ近くに敵が隠れているなら、いつサーヴァントが襲つてきてもおかしくはない。アーチャーやセイバーを連れていない今の俺たちは、敵にとっては格好の標的だろう。

「こここのところ、妙な魔力を校舎から感じるのよ。多分、そいつが敵のマスターだと思う。」

ま、向こうはわたしたちの存在には気付いてないみたいなんだけどね。こつちも相手のマスターが判らない以上、どうしようもないんだけど……今回の聖杯戦争、ホントにおかしいかも」

「……? おかしい、つて何がだ?」

「ルールを守つてない奴が多すぎるのよ。普通の魔術師なら、こんなこと有り得ないわ。今朝、ガス漏れ事件と行方不明事件の話が出たじゃない。それって、多分別々のヤツ

が犯人だって言ってたわよね。この結界も、そのどつちかの仕業だと思ってたんだけど……よく考えてみたら、その二つとは別の魔術師が裏に居るかも。

ガス事件の方は、多分慎重なマスターが後ろにいるわ。よく考えてるからハマもしないし、あれだけ大規模に魔力を集めていても世間は事故としか思っていない。それだけ隠蔽が上手いのね。

行方不明の方は、何考えてるのかも判らない。騒ぎになるほど一般人を攫うなんて、よっぽどトチ狂ってるわよ、そいつ。このまま放っておいたら、何をしでかすか想像できなない」

ん？

俺は、行方不明事件を起こしているサーヴァント……或いは、そのマスターがこの結界を仕掛けたのではないかと思っていたが、違うのだろうか。

今朝のアーチャーの推測が正しいなら、その犯人は人体を必要としている。何の魔術や儀式に使うのかは判らないが、碌なものではないだろう。そこまで手段を選ばないヤツだったら、学校を標的にしてもおかしくはない。

この結界は、人の生命力を奪うモノだという。犯人がそれを求めて事件を引き起こしているのだとすれば、多くの人間が集まる学校は宝の山に思えるだろう。

「こんな結界を張れるなら、そもそも人を攫う必要なんかないのよ。一度発動させてし

まあ、数百人規模の人間を取り込めるんだから、わざわざ余計なリスクを犯して何人か一般人を使う意味がない。

ガス事件の方の奴が裏に居るとしても、こんな大胆な手段に出る理由が思いつかないわ。バレないようにこっそり魔力を集めてるのに、こんな博打に訴える理由がない。こんなもの、他のマスターが見たら一発でおかしいって判るわよ」

「それって、つまり——今回の聖杯戦争は、他人を巻き込むようなヤツが三人もいるってことか？」

「そ。本来はこうならないように、監督役がいるんだけど……綺礼の奴、一体何やってるのかしら」

ふん、と荒々しくコーヒーを飲み干す遠坂。このふざけた状況に、彼女も苛立っているのが判る。

「本当、厄介なのが多すぎるわ。バーサーカーだけでもててこ舞いだって言うのに、他のサーヴァントまで変なのばっかりだと始末に負えないわ」

確かにその通りだ。

バーサーカーは桁違いに強力なサーヴァントだが、理性が存在しない以上、正面から突っ込んでくるパワータイプとしての戦い方しかできないだろう。その性能は凄まじい一言に尽きるが、逆に言えば戦いやすい相手でもある。

しかし、他のサーヴァント……或いはそのマスターが、手段を選ばないような者だとすると状況は複雑になる。勝つためにルールを無視するような輩なら油断など存在しないだろうし、ルールを守って戦うつもりで俺や遠坂は、戦略の幅が狭まるだけ相対的に不利になっていく。

加えて、俺と遠坂が手を組んでいるとはいえ、俺は半人前の魔術師だし、アーチャーに至っては記憶がないために全力を発揮することができない。そのため、他のサーヴァントと比べて著しく不利なのだ。

こんな状況の中、最強の敵であるバーサーカーと、魔槍を使うランサー……それに、まだ見ぬ三人のサーヴァントを相手にしなければならぬ。しかも、その内の三人は平然と他人を巻き込めるようなヤツなのだ。

「とにかく、この結界を張ったヤツだけでも早めに倒さないとまずいわ。」

この結界、ほとんど魔法の領域よ。解除は不可能に近いし、放っておけば何百人もの犠牲が出る。一刻も早く、これを仕掛けたマスターかサーヴァントを見つけ出さなくちゃ」

その意見に同意する。他の二つの事件も気になるが、この結界は桁が違う。これを張ったヤツは、大勢の人間を殺すことに何の疑問も抱かないような外道だ。

遠坂があまりに普通だったから忘れていたけど……魔術師というのは、そもそもそう

いう奴らだった。バレなければ、何をやってもいいと言う論理破綻した連中。世間に露見しないようにしているのも、結局は自分の不利益を招くからに過ぎない。一般人の命なんて、何とも思つてはいないのだ。

……甘かった。俺は心のどこかで、他のマスターも最低限のルールを守るものだと思つていた。自分が戦うことになるとすれば、それは自己防衛のためだけだ。十年前、何が起きたのかを身を以て知つているにも関わらず、そんな楽観がどこかに残つていた。

だが、現実はどうだ。

バーサーカーのマスターは、街路の破壊など厭わず俺たちに強襲を仕掛けてきた。

ガス漏れ事件の犯人も、人を攫つているヤツも、この結界を仕掛けた外道も皆同じだ。誰も彼も、ルールなんか守つちやいない。自分さえ良ければ、そいつらはきつとそれで良いのだ。

願いを叶えるという、聖杯。それを手に入れるためだけに、他のマスターやサーヴァントは平然と他人を巻き込むつもりだ。そんな無法が、罷り通つて良いはずがない。

——倒すしかない。

そんな大量殺戮者は、排除されるべき敵だ。無関係の人間を殺すような下種に、手加減してやる理由は何処にもない。

『貴様は自分の進むべき道を見定めたのであろう。ならば、それ以外の道など考えるに能わぬ』

ああ、アーチャーの言うとおりで。衛宮士郎は——正義の味方として、戦う。

\*\*\*

午後の授業も、結局頭に入らないままだった。気が付けばホームルームが終わり、放課後になっていた。

特に用事もないので、まっすぐ家に帰る。ひよつとすると、帰り道に襲われるのではないかと不安があり、なるべくサーヴァントが攻撃してこなさそうな人通りの多い道を選んで帰ったため、いつもよりも多少時間がかかってしまった。

杞憂だと思いが、人を巻き込んでも気にしないという連中が敵である以上、警戒しておくに越したことはない。いくらなんでも、人で賑わっている道で襲い掛かってくるような愚か者はいないだろう。

そんな風に気を引き締めながら、家にたどり着いた。

「ただいまー」

一声かけて、我が家の玄関に入る。



……中にはアーチャーとセイバーがいるはずだが、返事がない。声が届かないような場所に居るのだろうか？

はてな、と首を傾げながら靴を脱ぎ、居間に移動する。帰ったぞー、と言いなながら慣れ親しんだ畳を踏むと――

「……………へ？」

そこには、予想外の光景が広がっていた。

こちらの現実感を突き崩すような、それでいて現実味に溢れた光景。奇妙と言うか奇異と言うか、想像を遙か斜め上に突き抜けた現実がここにある。

「――王手。ふん、また私の勝利か。手温いぞ、セイバー」

「ぐっ……………！　今のは卑怯でしょう、アーチャー！　私を動揺させ、隙を突くなど……………」

「たわけ。戦に卑怯もハチの頭もあるか。それだけ貴様が未熟だったという事よ。」

――は。無様な敗北を喫しておいて、まだ我に挑みかかる気か、セイバー？

「無論です。今度こそ貴方を倒して見せよう、アーチャー――！」

サーヴァント。

神話伝承に語られる、人類史に名を刻んだ英雄。人の身でありながら、偉業を成し遂げ大敵を打ち倒し、時には神すらも滅ぼして見せる霊長最強の存在。

それが。

それが、どうして。

我が家の居間で、将棋なんかやっついていらっしやるのでしょいか……!?

「……えっと。何やっつてんだ、二人とも?」

このまま突っ立っているわけにもいかなないので、躊躇いながらも声を掛ける。

すると、盛り上がっていた二人は今初めて気づいたように、同時に俺を見上げてきた。

「む?」戻ったか雑種。丁度暇を持って余していな、貴様も付き合うが良い」

「おかえりなさい、シロウ。」

……勝手に将棋盤を使っしまい、申し訳ありません」

相変わらず偉そうなアーチャーと、小さくなつて頭を下げるセイバー。一体、何がどうしてこうなったのだろうか?

話を聞いたところ、家の奥にあった将棋盤をアーチャーが勝手に引つ張り出してきたらしい。それで退屈凌ぎにと、街の巡回から戻ったセイバーを付き合わせて遊んでいたようだ。ご丁寧に、古くなったルールブックまで転がっている。

セイバーの方も、初めは嫌々付き合っていたのだが、アーチャーとの対戦で負けが込むにつれて熱くなり、気付けば勝負に熱中していたとのこと。彼女は冷静な性格だと思っていたのだが、意外にも負けず嫌いのようだ。

下手をすれば、俺と遠坂が学校に行っている間にまた揉めているのではないかと

こつそり心配していたのだが、どうやらそうでもなかったようで少し安心した。この二人は相性が悪いように感じていたが、仲良く将棋に熱中していたあたり、ひよつとしたら気が合う部分もあるのかもしれない。

……まあ、それはさておき。

「アーチャー。将棋強いんだな、アンタ」

セイバーと十回目の対局に臨んでいるアーチャーだが、傍から見てもその上手さは歴然だ。どう見ても、昨日今日将棋を始めた人間の動きじゃない。

おまけに、ほとんど考え込む時間がない。セイバーが一手一手考えながら駒を動かしているのに対し、アーチャーはセイバーが駒を置いた次の瞬間には手を打っている。まるで、初めからセイバーがどう動くかが判っているような迷いのなさ。

前に確か、何かの機会で将棋の達人とコンピュータの対戦を見たのだが、もしかしたらあれよりも速いかもれない。それほど将棋に熟達しているのか、或いは頭の回転がコンピュータ並なのか。

過去の英雄であるサーヴァントが将棋のルールを知っているわけではないし、そこに置いてあるルールブックには明らかに読まれた痕跡がある。ということは、あの英霊はただルールに目を通しただけで今プロ顔負けのゲームを行っているのか。俺も少しは将棋の経験があるから、その異常性が理解できる。

このサーヴァントは底が知れないと思っていたが、改めて驚嘆する。英霊という奴らは、頭の出来も常人とは次元が違うのだろうか？

「ふん。勝負とは先を読むものではなく、常に俯瞰して視るもの。」

戦場全体、或いはその更に外側から全貌を把握すれば、何がどう動くかなど手に取るように判る。

小手先の一手、二手などに意味はない。重要なのは瑣末な戦術ではなく、盤面全てを動かす戦略よ」

角行を動かし、自身の桂馬を牽制していた飛車を討ち取るアーチャー。その動きには一点の曇りもない。一方で、強力な手駒を奪われたセイバーは渋い顔になる。

見た感じ、セイバーも初心者とは思えない……いや、明らかに俺よりも上手いレベルで駒を動かしている。しかし、どれ程アーチャーの駒を牽制しようと、一体どういうウラクリなのか、いつの間にかセイバーの守りが突破されていくのだ。アーチャーの駒を奪ったと思っても、それは十手先でセイバーの駒を奪う為の布石だった、などということもしばしばだ。

あつという間にアーチャーの軍勢は勢力を増していき、セイバーの玉将は呆気なく討ち取られてしまった。

ぐ、と悔しそうに呻き声を漏らすセイバー。それに対して、アーチャーは余裕綽々。

どこから持ってきたのか、勝負の合間に缶ビールを飲む豪胆さすら見せている。……あれ、確かこの間藤ねえの爺さんが送ってくれたヤツなんだが、勝手に飲んでいいのかおまえ。

「……………」

ふるふる、と震えるセイバー。どうやら、アーチャーに連敗しているのが相当悔しいようだ。

正直、これは相手が悪すぎた。でも、セイバーだつてかなり上手く立ち回っていたようにも思うのだが……。最終的には負けてしまったが、要所所ではアーチャーが配置しておいた重要な駒を奪い取ったり、鋭い牽制でアーチャーが切り込む隙を与えないように動いていた。

アーチャーが規格外すぎるだけで、こつちも腕が立つと思う。俺が相手をして、勝てるビジョンが見えてこない。セイバーは明らかに西洋圏出身の外見をしているが、まさか将棋をしたことがあるのだろうか？

「セイバーは、将棋の経験があるのか？」

将棋は東洋のゲームなんだけど、と内心で思いながら質問してみる。

「ええ。ルールは異なりますが、よく似たものなら私の時代にもありました。この時代では、チェスとして親しまれている遊びですね」

「あ、そうなのか。そりや、道理で強いわけだ」

よく、チェスは西洋将棋などと言われたりしているが、それには理由がある。

元々、将棋もチェスもその起源は同じと言われている。大昔のインドにあったチャトランガというゲームが東西に伝わり、それぞれの形で発展していった、という説を前に何かの本でちらつと読んだ。

つまり、チェスが強い人間は大抵将棋の腕も立つというわけだ。それなら、セイバーが強いのも頷ける。確か、大昔のロシアやヨーロッパにもチェスの元になったゲームが伝わっていたというから、セイバーもそれを嗜んでいたのだろう。

「……あれ？　じゃあ、アーチャーはどうなんだ？」

「本来の我には経験があつたやもしれぬが、今の我には記憶が欠けている。だがこの程度の遊戯、一目見れば理解できよう」

うわ。とんでもないコト言いやがった、このサーヴァント。一目見て理解できるつて、絶対コイツ人間じゃない。

唾然としている俺をつまらなさそうに一瞥し、缶ビールを飲み干すアーチャー。空になった缶を机の上に置くと、黄金の英霊は再びこちらに向き直った。

「まあそんなことは良い。それよりも雑種、貴様は学校とやらに出向いたのであろう？　戦果を語り聞かせてみるが良い」

「そうですね。私が学校近くに居る間は異常は察知できませんでしたが、あの学校には特殊な結界が張られている。シロウの目から見て、何か変わったことがあれば教えてほしい」

座り込んだ俺を、二人がじっと見つめてくる。だが、セイバーの言葉を聞いた途端、アーチャーは訝しがるように眉を顰めた。

「——ん？ 結界と言ったか、セイバー？」

「はい。シロウとリンが通う学校には、大規模な結界が張られています。リンの見立てでは、発動すれば内部の人間を生贄にする物だと」

「ふん……つまらん仕掛けだ。三流らしい頭の悪さよ、斯様な動きを見せれば他のマスター共の関心を惹く事など一目瞭然であろうに。」

しかし——セイバーよ、そのような情報を知っていたならば、そのの雑種に教えておく程度の親切心を見せても良かったのではないか？

その小僧は、結界とやらについて何ら聞き及んでおらぬ。我も今初めて知った事実だが、下手をすれば死んでいたぞ」

予想外の言葉に、思わず目を見開く。

まさか……この傲岸不遜なサーヴァントが、少しでもマスターの身を案じるようなことを言うなんて、それ自体が驚きだ。てつきり、俺の生死すらも無関心に違いないと確

信じていただけに、衝撃を隠しきれない。

だがあの結界について、アーチャーも知らなかったとはどういう意味だろうか？ 確かに直接見ていない以上、アーチャーが結界の存在を知る理由はないが、遠坂やセイバーから話を聞いていかなかったのだろうか。

俺と同じく、驚きの表情を浮かべているセイバー。そちらに目を向けると、おそろおそろといった様子で少女は口を開いた。

「……シロウ。貴方は、あの結界について知りながら学校へ行つたのではないのですか？」

「いや、全然。今日、学校で遠坂に言われて初めて気づいた」

「な——」

セイバーが絶句する。

その驚きようから察するに、彼女は俺が結界の存在を知っているものと早合点していいらしい。アーチャーに伝えなかったのも、俺が既に伝えていると思つていたが故のこと。

遠坂が、昼休みに呆れていた理由にも想像がつく。恐らく、彼女たちの想像以上に俺は魔術師として未熟だったのだろう。

そういうえば……遠坂は、あの結界を見たマスターは一発で気付く、というようなこと



を言っていた。つまり、学校に張られた結界は普通の魔術師なら即座に看破できる物だったのだ。

「……申し訳ありません。知らなかったとはいえ、シロウを危険に晒してしまった」

元気を失くして俯くセイバー。伝えておけばよかった、という後悔がありありと伝わってくる。

「いや、セイバーが悪いんじゃないから気にしなくていい。

俺の方こそ、へっぽこでごめんな。何かおかしいっては知ってたんだが、アレが結界だなんて気付かなかったんだ」

申し訳なきような顔を見せるセイバーを見て、罪悪感が湧いてくる。

協力関係になったと言うのに、俺は何もできていない。それどころか、早速二人の足を引つ張ってしまった。

俺が悪いのに、責任感の強いセイバーはすっかり落ち込んでしまっている。女の子にこんな顔をさせるなんて、つくづく自分の未熟さが嫌になる。

「——ふん、下らん戯れ合いはそこまでしておけ。貴様らにとっては、その結界とやらをどう止めるかが先決であろう。放っておけば、巻き込まれた雑種が死ぬぞ」

王将の駒を掌で弄んでいたアーチャーが、見下した口調で吐き捨てる。その威圧感に、はっとセイバーが顔を上げた。

「……そうですね。貴方の言う通りです、アーチャー。」

あれだけの規模の結界は、完成までに時間がかかる。あれが高度な魔術や宝具だとしても、最低でも十日は必要でしょう。リンによると、あの結界は二日前には張られていたそうですから——」

「——あと八日。それまでに結界を止めないとまずい、つてことか」

遠坂は、結界の解除は不可能だった、と口にしてた。止めるには犯人のマスターかサーヴァントを倒すしかない、とも。

だが、マスターは学校の中に潜んでいるらしい。それさえ判れば、大分敵が絞り込めてくる。つまり——生徒か教師のどちらかが、マスターである可能性が高い。

しかし、それ以上絞り込むことは難しい。結界が既に張られている以上、相手が易々と出てくるわけがない。後は隠れていれば、勝手に結界が起動するのだから。

こちらとしては頭が痛いところだ。せめて、敵のマスターかサーヴァントが表へ出てくれば手の打ちようもあるのだが……。

「そうだ。あの結界、遠坂が言うにはほとんど魔法の領域らしいけど、サーヴァントにとつちやアレも簡単なことなのか？」

「いいえ。あれほどの結界の構築は、それこそキャスターのクラスのサーヴァントでなければ難しい。純粋な魔術ではないとすれば、何らかの宝具を使っているという可能性

もありませんが……」

宝具、か。

その単語を聞いて真つ先に連想したのは、ランサーの紅い槍。放てば必ず心臓を穿つ、絶対必中の魔槍。

因果を改竄するというその効力がどれ程の神秘に括られているのか、半人前の魔術師に過ぎない俺には想像すら及ばない。

英雄とは、一人につき最低でも一つの宝具を持つと言う。宝具にはそれぞれ特殊効果があり、ランサーの槍のような攻撃系宝具、或いはバーサーカーの肉体のような防御系宝具と、その種類・用途も多岐に亘る。英雄の必殺技という表現は、誇張でも何でもないので。

その中に、もしかしたら結界を張るような種類の物があるかもしれない。魔術の技量ではなく、宝具の効果によって結界を展開しているのなら、アレを張った者はキャスターのサーヴァントとは限らないのではないだろうか。

「それって、ランサーの槍みたいない宝具で、あの結界が作られたかもしれないってことか？ だったら——」

「——いや。案外、下手人はそのランサーかもしれないけど、雑種」

返事はセイバーではなく、アーチャーから聞こえてきた。何か知っている風なアー

チャーに、俺とセイバーの視線が集中する。

「アーチャー。アンタ、ランサーについて何か知ってるのか？」

二日前の戦闘を思い返す。

ランサーが宝具を使った時、そういえばアーチャーは何か言っていた。克蘭の猛犬、とかなんとか。

そういえば、ランサーが使っていたあの槍は、ゲイ・ボルクという名だった。本人がそう言っていたのだから、間違いないだろう。本やゲームで時々聞く名前だし、それを辿ればランサーの素性が判るのではないだろうか。

「ランサーめが用いたあの槍は、海獣の骨から創られた後、影の国の女王スカサハの手に渡った逸品だ。投げれば必ず命中し、鏃となって敵を屠る棘の槍。

——アレの使い手たる男の英雄は、ただ一人しかおるまい」

「——クー・フリーン。ランサーの正体は、アイルランドの光の御子ですか」

セイバーが感嘆する。俺は聞いたことがない名前だが、ランサーはそんなに凄い英雄なのだろうか。

「えつと……強いのか、そいつ」

「はい。幾多の魔物や軍勢を一人で退けたと言われる、半神半人の大英雄です。槍の英霊としては、間違いなく最強の一角に入るでしょう」

断言するセイバー。けれど、何故かその言葉に違和感を覚える。

二日前の校庭で、俺はランサーとセイバーが戦っているのを見た。しかし、傍目にも判るほどランサーは圧倒されていた。もう一度戦ったとしても、ランサーがセイバーに勝つことは有り得まい。あの宝具を使われたらセイバーが負けるかもしれないが、基礎能力での実力差は明白だ。

アーチャーと戦った時もそうだ。ランサーは、明らかにアーチャーより技量で勝っていたが、それでもアーチャーを打倒する事が出来なかつた。それどころか、発動した宝具すらも防がれる始末だ。確かにアーチャーの方が不利だったが、ランサーが最強だと言われると容易には領けない。

どうにも腑に落ちない。そんな俺の困惑を見て取ったのか、セイバーが話を続ける。「私たちサーヴァントの強さは、人々の信仰度に比例します。私の真名はこの国でもよく知られているものですが、今のシロウがそうだったように、ランサーの真名はほとんど知られていない。その影響で、彼の性能はかなり劣化しています」  
「加えて、彼奴は何らかの——おそらくは、令呪による縛りを受けている。そのせいで、更に質が落ちているのだろうよ。」

……ふん。生前ばかりか死後も制約に囚われるとは、つくづく運のない男よな」  
セイバーに続いて、アーチャーが嘲るように語る。

このサーヴァント、自身の記憶は思い出せないと言っていたが、それ以外の物事については随分と博識なようだ。現代の知識については聖杯から情報が渡される、という話は聞いていたが、これもその一つなのだろうか。

それに……ランサーが令呪で縛られていた、とはどういうことだろう。その事実を見抜いたアーチャーの眼力も凄まじいが、それ以上にその一節が引つかかる……が、今はアーチャーの話の聞いておこう。

「クー・フリーンの伝承は数多いが、その中でも有名な一文がある。曰く——彼の者は影の国で、武芸とルーンの魔術を学んだ、とな」

「それって……つまり、ランサーが魔術で学校の結界を張ったのかもしれない、って事か？」

然り、と頷くアーチャー。

そう言われてみれば……結界が張られたという二日前に、俺はあの学校でランサーの姿を見ているではないか。校庭でセイバーと戦っていたのも、結界を張った後で鉢合わせしたか何かだと考えれば納得がいく。

どうやら同じ結論に至ったようで、セイバーも同意するような表情を浮かべている。

「確かに、あの英霊は全身に高度なルーンの守りを纏っていました。彼自身はあのような結界を好む性質には見えませんでした。彼のマスターはそうではないかもしれない

い。マスターとサーヴァントの方針が食い違うのは、そう珍しいことではありません」  
感情の籠った声で、そう低く呟く少女。心なしか、その顔には陰りが生まれているようにも見える。

「——とすれば、些か面倒だな。ただの雑種と侮ったが、大規模な結界を築ける程魔術に長けているなら話は別だ」

そう嘯きながら、アーチャーが将棋の駒を盤面に並べていく。またセイバーと一戦しようというつもりなのか、と見ていると、将棋盤を見てみると促された。

「意図が分からずに首を傾げる俺とセイバー。注目が集まったのを確認すると、アーチャーは盤上から一つの駒を摘み上げた。」

「サーヴァントとは、ある意味では将棋の駒にも似ている。例えばこのように——」  
言いつつ、手を動かすアーチャー。相手側の手番など無視して、黄金の青年に操られた香車が只管前へと進んでいく。

「香車は、前方に好きだけ動かせるという性質を持つ。飛車なら縦横、王将なら全方向。桂馬のように、変わった位置にしか動けぬ駒も存在する」

「我々にも、同様の性質があるという事です。私なら剣、貴方なら弓、ランサーならば槍。それぞれに、異なつた特長がある」

「うむ。そして、歩兵でも王将を討ち取れる可能性を持つように、どの駒も等しく互いを

倒す事のできる能力を持つ。

——となれば、重要になって来るのは手駒の長所をどう活かすか、相手の短所をどう突くかよ。その点に於いて、複数の能力を持つ敵は厄介だ」

それを聞いて、何かを思いついたようにセイバーが動く。その右手にはアーチャーと同様、将棋の駒が握られている。

盤面に置かれた駒は、角行。しかし、斜めにしか動けぬはずの角行は、セイバーによって前方に動かされていた。

「本来なら一つの動作しか出来ない駒が、このように別の駒の特長を備えている。取られる戦略の幅が広がる以上、その相手をする側はより慎重にならざるを得ない。

あのランサーは、おそらくキャスターのクラスの適正も持ち合わせているのでしよう。あれだけ高位の魔術を駆使できるとすれば、確かに強敵です」

む、と考え込むセイバー。

ランサーの魔術の腕前が推測通りだとすれば、容易に侮れない相手だ。槍しか使えないという先入観に囚われていては、裏を搔かれることにもなりかねない。

単純な戦闘能力ではセイバーに圧倒されていたランサーだが、それだけの魔術を使えるとなれば話は変わってくる。あの宝具の能力とも相まって、奴が強力な英霊だということも頷ける。能力が劣化しているという日本でこれなのだから、聖杯戦争の開催地が他



国だったらもつと強力なサーヴァントとして召喚されていたのかもしれない。

「だが、彼奴だと断定できる確証がないのもまた事実だ。まだ見ぬサーヴァントの仕業という可能性も高い。」

——せいぜい警戒しておけ、雑種。我にとつては遊びに過ぎぬが、貴様にとつては身命を賭した戦い。凡俗なら凡俗なりに、無様に足掻いて見せるが良い」

そう言い捨てると、アーチャーは弄んでいた香車を元の位置に戻した。傲慢な発言を咎める様なセイバーの視線を無視し、二本目の缶ビールに口を付ける。……それ、一体何本飲む気なんだ、おまえ。

二人分の非難の視線を受け流し、アーチャーがビールを口に含む。だがその瞬間、不愉快そうに端麗な顔が歪んだ。

「しかし、ほとほと話にならぬ安酒よな。無聊の慰みに口にしたはいいが、嘆かわしいにも程がある味よ。怒りを通り越して哀れみを覚えるわ。」

身なりばかりか蔵にある酒までもが貧しいとは、底が知れるぞ雑種。我のマスターを名乗りたければ、早々に財を移し、蔵の中身を満たすがいい」

「アーチャー。他人の物を勝手に飲んでおいて、その言い草は何なのですか。せめて一言、家主に断りを入れるのが筋でしょう」

「たわけ。この我が自ら、雑種風情に力を貸してやろうと言うのだぞ？ この程度の安

酒、嬉々として差し出すが礼であろう」

アーチャーの常識外の発言に、眉を吊り上げて怒りを露にするセイバー。良いぞ、もつと怒ってやってくれ。

しかし、怒られている側のアーチャーに反省の色は見られない。それどころか、嫌悪を見せていたはずのその顔には、今や微笑すら浮かんでいる。

意図を明らかにせず、ただ微笑んでセイバーを眺める黄金の青年。一体何が楽しいのか、理解の出来ないその感覚には一種の気持ち悪さすら覚える。脇で見ている俺ですらそう感じるのだから、見られているセイバーの不快感は俺の比ではないだろう。

怒るのでもなく睨むのでもなく、柔らかさすら漂わせるその表情。だがそれとは裏腹に、紅い眼差しには形容出来ない感情が宿っている。どこか生理的な嫌悪感すら催す淫靡な瞳は、まるでセイバーの体を舐め回すように観察していた。

セイバーは怒りから、俺は不気味さから、そしてアーチャーは得体の知れない笑みを見せたまま、全員が口を閉ざして黙り込む。

——唐突に、響き渡る呼び鈴の音。

誰も予期していなかったその音は、無言に沈んだ居間には不釣り合いに明るく響いた。

「……………？ 凜でしようか、様子を見てきましょう」

アーチャーの視線から逃れるように、セイバーが足早に席を立つ。

その後ろ姿を、笑みを湛えて見つめるアーチャー。優しいとも形容できる微笑みだが、血の色に濡れた双眸には穏やかならぬ光が宿る。何の遠慮もなしにセイバーを眺め回すその姿が気に食わず、思わずその横顔を睨み付けてしまう。

「——アーチャー。アンタ、セイバーと話してる時は上機嫌だな」

「ほう。やはりそう見えるか、雑種」

さも満悦そうに、悠然と微笑む黄金の英霊。だがその笑みは、今し方セイバーに向けられていたものとは違う。

その歪んだ口元は、確かに笑みを象っているのだろう。しかし、それを笑いと称するには、アーチャーの雰囲気はあまりにも異質過ぎた。

「あの女、見た目も声も極上だが、何よりその在り方が興味深い。あのような宝に巡り合うとは、聖杯戦争という遊戯も捨てたものではないな。」

己の過ちに気付かず、更なる過ちを以て責を担おうと足掻くその道化ぶり——フフ、良いぞ。実に我好みだ」

そう呟くアーチャーの表情は、いつしか陶然としたものに変わっている。宝箱を開けた時のような、限りなく純真で、しかし果てしない欲望を宿した瞳。

アーチャーの言葉の意味は解らない。否、そもそも俺に伝えようとして話しているわ

けではないのだろう。だがそれでも、この男がセイバーという少女に並々ならぬ興味を向けているということは理解できた。

最優のサーヴァントであるという、セイバー。ランサーを圧倒し、あのバーサーカーとも互角に戦った彼女は、未だに素性も宝具も謎のまま。その実力も未知数な部分は多く、同盟関係にあると言っても、気になる部分は数多い。

それに、まだ出会ってたったの数日だが……セイバーは美人だし、とても魅力的な性格だと思う。凜とした声に、穏やかな物腰。確固とした価値観を持っているかと思えば、意外に感情的な部分もある。もし彼女が俺のサーヴァントだったとしたら、色々と大変そうではあるが、それを差し引いても良い関係を築けるかもしれないと思わせるほどに、俺はセイバーに気を許してしまっている。

……だが、この黄金のサーヴァント。未だ何一つとして事情の判らぬこの英霊は、それとはまた別の部分でセイバーを気に入っているようだ。他の何事にも興味を示さない冷然としたこの男が、セイバーにだけは関心を示している。その事実は意外でもあり、同時に妙な納得を抱かせるものでもあった。

と。そんなことを考えている間に、廊下を鳴らす足の音が聞こえてきた。

「ただいまー。寄り道しなかったでしょうね、士郎?」

「お邪魔します、先輩。今日は、珍しく早かったんですね」

開かれた扉。仲良く買い物袋をぶら下げて、遠坂と桜が入ってきた。二人の後から、セイバーが静かに続く。

ふと視線を戻すと、あれだけ歪な笑みを見せていたアーチャーは、また無表情に戻っている。セイバー以外には興味はない、とでも言わんばかりに傲然と腕を組んだまま。

しかし、数日もすればこの男の唯我独尊振りにも多少は慣れてくる。出迎えの言葉一つ発さないアーチャーを軽く無視して、遠坂が俺の横を通り過ぎる。

「……さて、と。材料は買ってきたし、久々に腕を振るうとしますか」

荷物を置くくなり、いきなり気合を入れ始めた遠坂。その横で、桜が苦笑を浮かべている。

「帰りが一緒だったんですけど、遠坂先輩、今日は私が当番だから立派な夕飯作るんだー！……つて張り切っちゃってて。」

あの……先輩、わたし、お夕飯の支度はどうしたらいいでしょうか？」

「ああ、桜にはいつも作ってもらってるからな。しばらくは俺と遠坂で夕飯作るから、たまにはゆっくり休んでくれ。」

……あ、でも、桜がどうしても作りたいっていうなら考えるぞ」

休んでくれ、と言った瞬間に残念そうになった後輩の表情に、慌ててそんな言葉を付け加える。

「えっと……じゃあ、わたしは遠坂先輩のお手伝いに回りますね」

そう言つて微笑むと、遠坂の後を追うように桜も台所へ消えていった。いつも穏やかな桜にしては珍しいが、ひよつとすると遠坂に台所を取られるとも思つたのかもしれない。

しばらくすると、台所の方で危なげなく包丁を振るう音が聞こえてきた。遠坂だけでなく桜も付いているし、あの分では心配することはないだろう。今夜は、どうやら俺の出る幕はなさそうだ。

——こうして、新たな一日が終わる。

危うい均衡の中で続く、偽りの平和。いつか終わりが来ると知っていながらも、俺は日常を演じ続ける。

聖杯戦争という狂気。サーヴァントという暴力。そんなものに取り巻かれている以上、いつまでもぬるま湯に浸かっていられるわけがない。

けれど、それでも。現実がいくら冷たくても、祈ることくらいはできるだろう。今はこの生活が、一刻も長く続くようにと——。

## 8. 闇の胎動

夜。

時刻は正に、草木も眠る丑三つ時。古来より、魔物が跳梁し、靈魂が跋扈すると忌避されてきた刻限である。深夜とも早朝とも取れぬこの時刻に、外を出歩く者は皆無に等しい。

否、今の冬木市に於いて、その数は文字通りの零。無防備に夜の街を出歩く者など、ただの一人として存在しない。

当然と言えば当然であり、異常と言えば異常でもあるその光景。片田舎であるならまだしも、冬木市は都会として認知されるに相応しい都市。常日頃ならば、この時間帯とある程度の人影はある。しかし、今は猫の影すら見当たらない。夜の街を埋め尽くすのは、ただ息の詰まるような静寂のみ。

それもそのはず。常人ならば、好き好んで死地に赴く動機などあるわけもない。何ら理屈を知らずとも、冬木市に住まう人間たちはその本能で危機を察していた。

急増するガス漏れ事故。

多発する失踪事件。

原因不明の器物破損。

夜の街を彷徨う不審者。

報じられる数々のニュース。それが一つ二つならば噂と笑い流せようが、三つ四つと重なるならば紛れもない異常。その不穏な気配は、街中から着実に活気を削いでいた。緩やかではあるが、この街は確実に滅びへの道を歩んでいる。

昼間ですら外出を避け始めた人々が、夜中に歩出す道理もない。故にこの時刻、冬木市という領域に在るモノは暗闇以外に存在しない。

——だというのに。

「——チ、こいつは酷えな。アレが何にせよ、ろくなモンじゃなさそうだ」  
人影など有り得ぬその都市に、飄々たる声が響き渡る。

夜の街。ただ黒のみが支配するその土地に、唯一聳える青き瘦身。

その身に纏うはルーンの守り。右手に握るは真紅の魔槍。彼こそは紛れもなく、ランサーと呼ばれるサーヴァント。ケルト神話の大英雄、クー・フリーンその人である。

「ふん。どう見ても誘つてやがるな、ありやあ。むぎむぎ罨に飛び込むのは趣味じゃねえんだが——」

男がぼやく。血色の槍を無造作に掌中で弄び、退屈げに瓦に背中を預ける。民家の屋



根に寝転ぶという無防備極まる姿でありながら、そこには微塵の隙もない。

「全員と戦え、だが殺すな、つてのがオーダーか。何とも面倒臭え縛りを掛けやがって。

だが……あの野郎が何を考えてるのかは知らねえが、仕事はこなすのがオレの矜持だ。しょうがねえ、一丁働いてきますかねえ——つと」

身を預けていた瓦屋根から、億劫そうに身を起こすランサー。相変わらず、その体軀からは気合が感じられない。手に持つ槍がなければ、何のために起きたのかと勘繰ってしまいそうな、倦怠感に溢れた姿。

だが、彼こそは太古の英雄。槍を掴み、戦い、勝つための存在であるサーヴァント。それが動いたならば、成すべきことはただ一つのみ。

僅かに一瞬で、ランサーの雰囲気切り替わる。神の血を引くその双眸は細められ、半身たる宝具を握る腕には微かに力が込められる。体軀が膨れ上がったと感じられるような闘気は、正しく英雄のそれに相応しい。

しかし、それではおかしい。彼自身が口にした通り、彼がマスターから下された指示は敵情視察のみ。敵と戦えと命じられてこそいるが、殺すなどとも言われている。故に、彼が無益な戦闘に及ぶ理由はない。敵の戦力を計るため、斥候としての役割を課せられたのがランサーなのだから。

ならば——この殺気。滾り溢れるほどの殺意の渦は、何故ランサーから迸っているの

か。

降り注ぐ月光。闇に覆われた街並みが、束の間の光を取り戻す。その刹那、槍兵の瞳は確かにそれを捉えた。

——黒と紫。闇と血を体現したかのような、漆黒の衣に身を包んだ女。流れる長髪は、妖しく夜の風にたなびく。どこまでも美しいその幻影は、同時にどこまでもおぞましい実像を結ぶ。あんな気配を放つモノが、無害である道理はない。

ランサーより、数百メートル程先の地点。小さなビルの屋上に佇むその影は、半神の英雄を以てして尚警戒するに値するモノだった。

「アレは蛇蝎の類か。どうにもキナ臭いと思っちゃいたが、こりゃいよいよおかしくなってきたな。」

それに——これは、腐った羽虫の臭いか。ハッ、薄汚えにも程がある」

独語するランサー。女との距離を慎重に測るその姿は、既に万夫不当の戦士のもの。

ランサーは、あの存在は己の敵であると確信している。サーヴァントである彼の敵とは、即ち同じサーヴァントでしか有り得ない。

しかし……サーヴァントであるより先に、彼はその名を知られた英雄だ。そして英雄の敵とは、神話伝承に語られし魑魅魍魎、神魔妖魅の類に他ならない。アレこそはその種のモノだと、ランサーは直感的に把握した。

——それは、有り得べからざる異常。聖杯戦争とは、英雄を召喚し競い合わせる大儀式。そこに英雄以外の不純物が介在するなど、この儀式を根底から覆す事態だ。

だが、ランサーにとってそんなことは関係ない。彼の望みはただ一つ、命を賭した殺し合い。それさえ果たされるのであれば、それ以外の瑣事など気にする価値もない。

故に、この男が思考するのはただ一点。あの敵が果たして何者であり、何を望んであの場に立っているのかという理由。

あのサーヴァントが現れてから、既に数分。ランサーを狙うのであれば攻撃を仕掛ければ良いものを、アレはただあの場に佇むだけ。

ランサーのように偵察の役目を命じられているならば、そもそもあのような目立つ場所に立つ必要はない。物陰から隠れ、様子を伺い見ればそれで済む。

大魔術の詠唱か、或いは宝具発動の準備かとも疑ったが、それにしても長すぎる。そもそも、そんな切り札を何の罫もなしに使う理由はない。

攻撃でもなく、斥候でもなく、準備でもない。となれば、残る可能性は絞られる。先ほどからランサーは、幾度か女への接近を試みている。しかしそのたびに、あの

サーヴァントは距離を取る。逃げるのかと思えば、一定の距離を保った後は動こうとしない。まるでランサーの動きを推し量るように、只管にその場に立ち尽くすだけ。

逆にランサーが距離を取れば、あの女はすかさず距離を詰める。無論、ランサーの敏

捷性を以てすれば他のサーヴァントを振り切ることなど容易いが、それでは何の意味もない。そもそも、クランの猛犬の異名を取るこの男に、逃げの選択肢など存在しない。

ならば、ランサーに残された道は一つだけ。明らかにこちらを誘うあのサーヴァントを追跡し、敵の罠に自ら挑むのみ。

確かに下策ではあるが、ランサー自身はそれが無謀だとは思わない。不利な戦闘など慣れているし、如何なる罠とて食い破つて見せるが英霊たる己の矜持。能力を制限されているとはいえ、生き残ることに特化したサーヴァントである彼ならば、どのような状況であれ生き抜けるだろう。

「ああやだやだ。オレは戦いに来たんであつて、妖怪退治をしに来たんじゃねえつづの——！」

悪態を残し、ランサーが跳躍する。サーヴァントの中に於いても優れた筋力に加え、際立ったその敏捷性は、僅か一跳びで敵サーヴァントとの距離を半分に縮めた。

……しかし、この距離。数百メートル余りという長さは、最速のサーヴァントを以てしても瞬時に詰められるものではない。

事実、槍兵が動いた直後。ビルの上に立っていた長身の影は、ランサーから逃れるように離れていく。ランサーがビルの屋上に着地した時には、謎の敵は電柱の頂点に移つ

ていた。

武器を取り出すことも、攻撃する素振りすら見せず、移動を繰り返すだけのサーヴァント。その面妖さに、ランサーが不快げに舌打ちする。

「ほう、なるほどな。怪物らしく、逃げ足は速いらしい。オレの足からどこまで逃げられるか、少しは楽しませて貰おうじゃねえか」

再びのランサーの跳躍。同時に女も跳躍し、再び双方の距離が開く。

追い縋るランサー。跳び離れる謎のサーヴァント。その単調な動きは、何時しか迫真の迫走劇へと切り替わっていく。

闇に沈んだ夜の街を、縦横無尽に駆け回る二体の人外。民家を跳び越え、公園を駆け抜け、街路を走り去る。サーヴァントの奇妙な鬼ごっこは、いつ終わるとも知れず続いていく。

——しかし。この世の全てに終わりがあるように、この遊戯もいつしか終幕に向かうとしていた。

理由は単純にして明白。追われる側より、追う側の脚力が勝っていただけの話。

ランサーのクラスのサーヴァントは、高い敏捷性が必須とされる。中でもこのクー・フリーンは、最高の槍の使い手の一人。信仰度による能力の低下、令呪による力の制限、加えてマスターの力量不足という三重苦にも関わらず、その敏捷性は最高クラス。並の

英靈に劣る道理はない。

そして追われる側のサーヴァントは、それほど速力を持たない。確かに並以上の速さではあるものの、大英雄の速度には一步劣る。故に、何らかの手段を用いない限り、ランサーから逃げ切ることなど叶わない。

縮まる距離。しかし、未だ必殺の距離には遠い。ならばどこまでも追い詰めるだけと、ランサーは更に加速する。

命令に背くことにはなるが、あのサーヴァントはこの場で仕留めるべきだと、彼の本能は警鐘を鳴らしている。戦士として生きてきた勘に従い、彼は今夜あの敵を討ち果たす心積もりだった。

そのランサーに反比例して、女の速力は落ちていく。魔力が切れたのか、或いは何らかの策か。どちらでも構わぬと、ランサーがその背中に狙いを定めて疾走する。

……やがて、謎のサーヴァントが足を止める。それを確認したランサーもまた、己の足にブレーキを掛けた。

「——ちっ。またシケた場所だな、此処は。恨み辛みの大合唱で、耳が痛いなんてモンじゃねえ」

周囲を見渡すランサー。だが、獲物を追い詰めたというのに、その顔にはありありと不快感が浮かんでいる。

それもそのはず。一般人ですら忌避するこの場所に、元来霊体である彼が何も感じぬ道理はない。

——市民会館跡地。

未だ消えぬ十年前の傷痕。あらゆる検証を経て尚原因不明とされる、冬木を襲った大火災。

犠牲者は数百人に及び、後遺症を残す者も数多い。焼け落ちた建物は無数、被害総額は災害のそれに匹敵する。否、事実それは災害そのものだったのだ。

その出火元とされる此処こそは、焼き殺された数百人の怨念が染み付いた呪いの地。穏やかな外界から隔離されたこの公園は、一種の固有結界めいた異界となっている。

そして。この場所こそは、十年前の聖杯戦争の決着の地でもある。それを知る者から見れば、またしてもこの場にサーヴァントが集うなど、運命の悪戯としか言いようがあるまい。

「嫌な場所に誘い込んでくれたもんだな、全く。何があったのか知らねえが、こちとら気分が悪くてしようがねえ。

——だが、貴様にとつては気分が良いんだろうよ。昔から、ヒトの妄念を食い漁るのが怪物の娯楽らしいからな」

嘲弄するように叩き付けられる、ランサーの冷たい言葉。だが、それを受けて尚黒衣

の女は動かない。

ランサーの感覚は、女が纏う血の臭いを鋭敏に嗅ぎ分けている。英雄ならば誰しもが持つ臭いではあるが、この女のそれはより一層陰惨だ。おそらくは、戦場ではない何処かで人を殺してきた女怪であろうと断言できる。

……しかし、ランサーの感覚が捉えたのはそれだけではない。血より尚臭うもう一つの気配を、彼は追走劇の前から察知していた。それを警戒するが故に、ランサーは攻撃態勢に移らない。

この距離は既に彼の間合い、あのサーヴァントを仕留めるには僅かに一足で事足りる。実力は未知数だが、女が動くよりも速くランサーは己の槍を振るう自信があった。必殺宝具たる血の魔槍、その射程内に足を踏み入れた時点で敵の敗北は確定している。その運命を塗り替えるには、死を捻じ曲げる程の幸運か、槍の呪詛を防ぎ切るほどの概念防具が必要だろう。

「虫の悪臭だけかと思つたが、どうももう何匹か隠れてやがるようだな。」

妖怪に羽虫、そしてこれは——ふん、砂漠の虫か？ どれだけ数がいるのかと思えば、虫けらと怪物しか出てきやがらねえとは、期待外れにも程がある」

そう言い捨てて、ランサーは微かに肩を竦めて見せた。その双眸には、あからさまな侮蔑の色が宿る。



謎のサーヴァントを一瞥した後、青い槍兵は真紅の槍を静かに構え——  
——その、一瞬。

「——ッ！」

闇に光る閃光。黒塗りのそれは、夜より尚暗い死を以て空を切り払った。

その数は三つ、その狙いも三つ。喉笛、心臓、臍臓。悉くが人体の急所を穿つべく放たれたそれは——

「——まあまあだ。だが、侮ったな砂虫。オレにそれは上手くねえ。命を狙う前に、相手をよく見る事だ」

事も無げに、槍の一閃によって打ち払われていた。

「わざわざ誘いに乗ってやったんだ、もう少し上出来な罠を期待してたんだが——この程度か。興醒めだ、戦士ですらない暗殺者が、二対一でオレに勝てるとも思ったか」

右手一本で、紅い魔槍を構えるランサー。粗野とも取れるその風貌には、明らかかな不快感が見て取れる。挨拶もなしに命を狙われて、自分の良い道理もない。

槍兵が打ち払ったのは、短剣の群れ。黒く加工され、並の刀剣とは形状の異なるその異形は、投擲短剣ダガーと呼ばれる殺人道具。闇夜に紛れ、人を殺すために暗殺者が用いる武器に違いない。

しかし、眼前に立つ女の異形は未だ動かず。徒手空拳のまま、ランサーの様子を伺う

ように僅かに腰を屈めたまま。ならば、その短剣の群れは、一体何処から飛来したのか。闇が揺れる。木々の間、確かに何かが立っている。いや、あれは木の頂点か。この公園を隈なく見渡せるであろう、その場所で。

——吉よくない月。黒焦げの空に、白い髑髏が笑っていた。

「は——ッ！」

戦いは、その瞬間に始まった。

白い髑髏は無言のまま、雨のように短剣短剣丸を放ち。黒衣の女もまた、虚空より鎖のような短剣を取り出した。

雨霰と降り注ぐ短剣の弾幕。公園に立ち並ぶ樹木に紛れ、二体の人外が風と奔る。上下左右と襲い来る幾条もの短剣に、縦横無尽に闇を薙ぐ異様な鎖剣。あらゆる方向から放たれるその攻撃は、見切ることすら至難の業。空間ごと蹂躪しようと迸る閃光は、その悉くが急所狙い。牽制などなく、ただ相手を殺す為に掃射される弾丸は、脅威と呼ぶのも烏滸がましい。

加えて此処は、月明かりさえ届かぬ闇の土地。黒く塗り潰された短剣は、例えセイバーのサーヴァントであっても対処し切れまい。

——だが。

「たわけ。こんな物がオレに効くか」

その条理を覆す者こそ、英雄の現身たるサーヴァント。英霊の歩んできた戦場は、こんな生易しいものではない。

繰り出される投剣を、不可解な軌道を描く鎖剣を、ランサーは弾き、防ぎ、切り、払う。余裕さえ見せつけるその姿は、闇に潜む影以上に異常だった。

敵対するサーヴァント。そのどちらか片方が相手なら、この結果も予測できる。幾条もの枷に縛られたとはいえ、クー・フリーンは高い技量と霊格を持つ大英雄。英霊と呼べるかどうかとも怪しいサーヴァントになど、後れを取るはずもない。

だが、今の状況は二対一。数で劣り、地の利を持たず、機先を制されたこの状況、二体ものサーヴァントを相手には持ち堪えるのが精一杯。罨に踏み込んだ時点で、敗北は最初から約束されているようなもの。後はただ、じわじわと鬨り殺されていくだけ。

……だというのに。

「そつちの砂虫は暗殺者<sup>アサシン</sup>、あつちの怪物は騎乗兵<sup>ライダー</sup>のサーヴァントか。なんともまあ、面倒臭え奴らが揃ったもんだ」

冷静に周囲を伺いながらも、次々と死の刃を叩き落とす青の槍兵。手首を軽く捻るだけで、剣の群れは魔槍によって弾かれていく。

——当たっていない。あれほどの短剣、あれほどの弾幕は、一発たりともランサーに

は当たっていない。

避けられたのでも、凌がれたのでもない。見切れぬはずの弾丸は、ランサーによつて全て無効化されている。

それは明らかかな異常。鎧や盾を持ち出すならまだしも、手持ちの武器、それも槍のみで弾丸を防ぎ切るなど尋常な技では有り得ない。そもそも、長柄の武器とは防御するための物ではない。リーチの長さという利点は、同時に手元の攻撃には対処できないという欠点も備えている。

ならば何故、視界の外から放たれる短剣を、軌道を変える鎖剣を、この男は悉く防ぎ切れるのか——？

「そして、どうもこれだけじゃなさそうだ。これ以上相手をするのも面倒だしな——そろそろ終いにするぜ」

舌打ちするランサー。彼の頭脳は、既に敵の正体を割り出していた。

この夜に至るまで、ランサーは四人のサーヴァントと戦い引き分けている。キャスター、バーサーカー、セイバー、アーチャー。自身を含めれば五人の英霊を、ランサーは既に確認している。

ならば残ったクラスは、ライダーとアサシンの二つだけ。過去にはイレギュラークラスが存在した場合もあるが、此度の聖杯戦争では基本となる七クラスのサーヴァントの

みが召喚されたランサーは主より聞いている。ならばこの二体こそが、そのサーヴァント達だろう。

人を殺す事に特化した髑髏の英霊は、アサシンのサーヴァント。

正体すらも判然とせぬ黒衣の女怪は、ライダーのサーヴァント。

同盟を組んでいる、或いは協力関係にあるサーヴァントが二組も存在した事実はランサーにとって予想外だが、そう驚くべきことでもない。自らより明らかに力量で劣るこの二体は、それぞれ単独で聖杯戦争を勝ち抜くことは困難だろう。協力関係になつたとしても不思議な点はない。

事実このまま戦い続けても、ランサーには負ける未来など見えない。単純な技量で相手を凌駕し、暗殺剣による罨も打破している以上、最後に誰が立っているかなど判り切っている。

技量や能力値以上に、この二体はランサーにとって相性が良い。その理由は、相手の攻撃手段にあった。

見たところ、アサシンとライダーは双方共に飛び道具を主体とするサーヴァントだ。アサシンは遠距離から短剣を撃ち、ライダーは中距離から鎖剣を操る。闇に紛れた多角攻撃を相手にしては、並のサーヴァントなら討ち取られていた可能性すらある。

だが、このランサーというサーヴァント。この男は、こと飛び道具を相手にしては無

類の相性の良さを誇る。

彼が持つ能力スキルの一つ、矢避けの加護。投擲武器であるならば、目に見える相手からの攻撃の悉くを無効化する、先天性の特殊能力。余程の宝具を用いぬ限り、ランサーに有視界距離からの投擲は通用しない。

「キ……い！」

奇声と共に、更なる投擲攻撃を仕掛けるアサシン。不気味な白面が、木々の間を駆け回る。

放たれた短剣は六。狙われたのは、眉間、両目、腹部、両足。針の穴をも通す精密さで、全くの同時に放たれた剣閃は、今までにない鋭さを持つ。全ての攻撃を同時に捌かねば、青い槍兵に未来はない。

一秒後に迫りくる死。避けることなど能わぬその刃を前にして……クランの猛犬は、闘気に溢れた笑みを浮かべた。

「ナ、ニ——!？」

驚愕する暗殺者。その正確無比な動きが、刹那の間宙に止まる。髑髏の内に隠れる瞳は、信じられぬ物を直視していた。

「そら、これで終わりじゃねえだろう——！」

回避も出来ぬ、防御も出来ぬ。そのはずの連撃、その為の投撃。だというのにこの英

靈は、あつさりとそれを凌駕して見せた。

その場で跳躍すると同時、大振りに槍を回転させ、全ての短剣を叩き落とす槍兵。闇に潜んでいるとはいえ、こちらに短剣を放ってくる以上、その位置は容易に予測できる。問題は、相手も常に動いているということ。

——ならば。相手が短剣を撃ち放った瞬間、そちらに同時に跳べば良い。

自由な動きなど望めぬはずの空中。自ら刃に突撃し、倍加して迫る死を薙ぎ払いながら。一瞬にして、ランサーは木々の中に飛び込んだ。一度でも判断を誤れば、即座に死を招くその選択。それに笑みを浮かべるこの英雄は、如何なる精神を持っているのか。

「——ッ!?!」

その豪胆さに対し、意表を突かれたアサシン。束の間の硬直は、この敵を前にしては度し難いまでの隙となる。

苦し紛れに放たれる投剣。至近距離より放たれるそれを、ランサーは右手の槍で打ち払い——

「ギ——ッ!」

空いた左手。それを握り締め、髑髏の白面を殴り飛ばした。

空中にて攻撃を放った直後の暗殺者に、それを避ける芸当など望めるべくもなく。強かに殴られたアサシンは、吹き飛び木へと叩き付けられた。

轟音を立て、弾け飛んだ暗殺者の直撃を受けた木が破砕される。大木が砕けるほどのその衝撃、それを間近で受けたアサシンは相当の傷を受けたに違いない。サーヴァントたる者、この程度の殴打で死ぬことはないが、頭蓋に殴打を受けては無傷とはいかない。「言つたろうが。オレに飛び道具は上手くねえと。」

——そして、こうも言つたはずだ」

着地するランサー。掠り傷すら負わずに暗殺者を退けた槍兵は、軽やかな身のこなしで地に足を付く。顔面を殴られたアサシンは、即座に起き上がってくることはあるまい。それ故のこの余裕は、強者の慢心とも言えるだろう。

だが、ランサーが対峙している敵は一人ではない。黒衣に身を包んだ女性、ライダーのサーヴァント。英霊ともあろう者が、そのような隙を見逃すはずもない。

ランサーが着地する一瞬。空中であれば体を動かせようとも、ヒトの形をしている以上は地に降りるその刹那に、微かに無防備な間が生じる。加えて、ランサーは背を振り返ることもない。ならばその背に剣を突き立てるべく、ライダーが走るのは当然であり

「命を狙う前に、相手をよく見とけてな……！」

——ランサーがそれを予想していたことも、また必然だった。

燃え上がる炎。



ランサーの背中を守るように、突如として地から噴き出した爆炎。昼かと錯覚させるほどの光熱に、ライダーの感覚器官が狂わされる。

ただの炎であるのなら、頓着する理由はない。霊体に対して、物理攻撃は意味を持たない。炎など、例えば核兵器の熱量であったとしてもサーヴァントの肌を焼くことは叶わない。

しかし。今燃え盛る炎は、現世の理を離れたモノ。魔術への抵抗力を持つライダーであつても、無視することはできぬ技。咄嗟に飛び退いたその判断は、果たして本能の為せる業か。

ライダーの後退から、僅かに一瞬。炎の壁を突き抜けて、一秒前まで女の首があつた空を紅い槍が薙ぎ払う。ライダーの首を刈り取るはずの一撃は、僅かに薄皮一枚を削ぐに留まつた。

「……チ。いい勘してやがるな」

立ち上る炎。揺らめく煙の向こうから、槍兵の声が低く響く。その敵の声に、ライダーは警戒心を露わにする。

——クー・フリーン。彼が得意とするのは、何も槍だけには留まらない。

伝承に於いて、彼は影の国で武芸を学び魔槍を授かった。その場所で、彼は数多の武術と共に魔術を学んだと言われている。

文字を刻む事で神秘を具現化させる、太古の御業。原初十八のルーン魔術を、ランサーは完全に極めている。その技量は現代の魔術師を遥かに凌駕し、キャスターのサーヴァントとしての適性をも持ち合わせるほど。

ライダーに判らぬよう、彼が刻んでいたのは発火のルーン。魔術への抵抗力を有するライダーをして警戒させる炎壁を、ランサーは一瞬にして作り上げたのだ。

アサシンに攻撃すると同時、敢えて見せた隙。

無防備な背中を守り、踏み入った敵を焼き尽くすための罠。

壁に足を阻まれた敵への、壁越しへの槍撃。

称賛すべきは、瞬時に三段構えの罠を考え出したランサーか、それを本能のみで躲ききったライダーか。

立ち消える炎の壁。燦る煙を踏み越えて、無傷のランサーが姿を現す。魔槍と鎖剣を向け合いながら、二人のサーヴァントは距離を置いて対峙する。魔槍と鎖剣を

警戒するライダー。未だ感情こそ見せないが、その美貌に浮かぶのは純粋な敵意。この敵は容易には倒せぬと、ライダーは確かに理解していた。

一方で。槍の穂先を揺らしながら、ランサーはライダーを観察する。無意識に武器の先端を揺らし、敵の視線を惑わせる高等戦術。それを無意識の内に繰り出す技量は、ランサーが如何に優れた戦士であるかを物語っている。

「残るはテメエ一人か。面倒なモンが出てくる前に、さっさとケリをつけるか——」  
疾駆するランサー。隼と見紛うその速さは、最速の英霊に相応しい。その余りの瞬発力に、ライダーの反応は僅かに遅れる。

辛うじて短剣を掲げるライダー。しかし、その対処はあまりに愚策。横薙ぎに振るわれた槍の一閃は、拙い防御ごとライダーの体を叩き付けた。

かは、と微かに漏れる声。苦悶の叫びを上げながら、ライダーは真横に弾かれる。致命傷こそ避けたものの、体重と遠心力の乗ったランサーの一撃は、ライダーの臓腑を激しく揺らした。

勢いを殺しきれずに、ライダーが地面を擦っていく。この、僅か一撃で勝敗は決した。吹き飛ばされたライダーに、ランサーの追撃を躲すことなど不可能。

だが、ランサーは動かない。敵を屠る絶好の機会であるにも関わらず、彼にはその権限はない。

彼に課せられた命令は、敵と戦え、しかし殺すなという不可解な物。それが道理に沿わぬ命令とはいえ、令呪を以て下された指示には従わねばならぬのがサーヴァント。故にランサーは、戦うことは自由にできるが、初見の相手のみ必殺の一撃は放てない。

いや、無理をすれば一撃程度は放てよう。相手が一人きりならば、それを以て決着とするのも悪くはない。しかし、令呪に逆らう代償として、ランサーの体軀に押し掛かる

重圧は増えていく。未だ戦線に戻れぬとはいえ、アサシンのサーヴァントをも相手取る以上、能力の低下は自らの死へと繋がる。故に、魔槍を放つべきタイミングは慎重に測らねばならない。

「二人掛かりだというのにこの様か。お前たちは、セイバーどころかあのアーチャーの足元にさえ及ばん」

冷たく吐き捨てられる侮蔑。尋常な果し合いを望むこの英霊にとつて、数に任せ闇に潜み、喉を掻き切らんと付け狙ってくる暗殺者は敵どころか障害でしかない。

血に塗れ、影に隠れる後ろ暗い在り方。己と一合すら打ち合えぬ、稚拙なまでの技量。加えて、数と畏に任せ誇りさえ感じられぬ戦い方。そのどれもが、クー・フリーンとは相容れない。

彼が今まで戦ってきたサーヴァントは、種別こそ違えど何れ劣らぬ強者だった。

存在そのものが災害に等しい、己と同じ半神の身たるバーサーカー。

神代の魔術を平然と使いこなし、大砲じみた大魔術を掃射するキャスター。

魔術で隠してこそいたものの、最上級の宝具と圧倒的な力量を誇るセイバー。

慧眼のみで自身に対抗し、魔槍すら防いで見せた底の知れぬアーチャー。

誰も彼もが、戦場を求めて現界したランサーにとつて競い合うに相応しいサーヴァント。令呪の縛りにより、初戦を全力で戦えなかったのは口惜しいが、二戦目となればそ

の呪縛も解けるだろう。いずれ己の真の力を以て彼らと対決する時を、ランサーは何より心待ちにしている。その期待は、まだ見ぬ二体のサーヴァントにも等しく向けられている。

——にも関わらず。アサシンとライダーは、その双方がランサーの期待外れだった。率直に言えば、ランサーは完全に失望していた。未だ宝具を見せぬ以上、警戒を解くことはできないが、このサーヴァントは二体とも、能力でも技量でもランサーには及ばない。拳句に姑息な戦術しか取れぬとあつては、落胆を通り越して怒りさえ覚える。「つまらん。オレとまともに戦いたければ、さっさと宝具でも出すんだな。」

——だがまあ、このまま戦うと言うのなら構わんぞ。お前がどう足掻こうが、次で終わりにするまでだ」

ランサーの目が細められる。その途端、空間そのものが軋みを上げた。

嘆息し、呆れさえ浮かべていた男の顔。今やそれは、敵を潰すための殺意へと塗り替えられている。

「く——っ！」

構えを取るライダー。しかし、彼女とて己の不利はとうに知悉している。

それでも、戦わねば自身が死ぬ。そうなつては、懐いた悲願が——主である少女を助けることが叶わない。それだけは到底、ライダーにとって許容できることではなかつ

た。

ならば、如何にしてアレに勝利するか。奇しくもランサーと同様に、枷を掛けられているライダーは十全の力を發揮できていない。それさえなければこうも圧倒されるなど有り得ぬはずだが、事実として彼女は窮地に立たされている。

単純な能力でも技量でも劣る以上、自身に残された手段は宝具の開帳のみ。だがそれを用いたとしても、この英霊には抗し得るかどうか。

「そら、受け止めねえと死ぬぞ——！」

ランサーにとつて、ライダーの思案など関係ない。次々と迸る閃光は、敵を屠らんと間断なく放たれる。

その速度は、アサシンの投擲より尚速く。セイバーに拮抗し、アーチャーを圧倒したランサーの槍捌きが、今宵再び顕現していた。

受けきれぬと判断し、回避に移るライダー。横に跳ねたその腕を、紅い軌跡が付け狙う。穂先が掠め、闇夜に朱い水滴が舞った。

掠り傷など気にもせず、紫の髪を翻して女は跳躍する。アサシンが夜を制す蜘蛛ならば、それはさながら蛇の如く。柔軟性と瞬発力を極限まで活かし、ライダーは死の未来を回避する。

冷たく正確に、それを追い詰めていくランサー。投剣による連射すら上回る弾幕を、

片腕のみで繰り出すその技量は正しく称賛に値する。

「く、う……っ——！」

苦痛に呻くライダー。一撃ごとに己を掠める槍撃を、彼女は必死に打ち払う。ジャラジャラと鳴る鎖剣は縦横無尽に猛り狂うが、それすらも大英雄の前には無意味。

フェイントを織り交ぜ、どんな角度から急所を狙おうとも、ライダーの攻撃は穂先を揺らされるだけで無効化される。逆にランサーの攻撃は、それがどれだけ無造作であれ、受けるだけでライダーの骨を軋ませる重みがあった。

これをライダーの力不足と誇るのは酷な話だろう。寧ろ、彼の大英雄を前にしてここまで持ち堪えられていることこそが評価すべき健闘だ。

元より、騎乗兵ライダーとは己の剣で戦う者ではない。神獣を、魔獣を、或いは戦車を、戦艦を乗り回し、その乗騎の力によって敵を葬るのがライダーの戦い方。

加えて、ライダーはランサーと相性が悪い。そもそも戦士ではないライダーは、正規の戦闘訓練など受けていない。己の性能のみで相手と戦う他に、ライダーは取るべき戦法を持たない。

対して、ランサーは影スカサハの女王の指南を受け、数多の武芸を身に着けた掛け値なしの英雄。単騎で軍勢を押し戻し、幾度となく怪魔を打ち倒してきたその技量は、本能だけで戦う敵とは比較にもならない。

性能差。技量の差。得物の差。相性の悪さ。

経験の違い。超えてきた死線。潜り抜けた戦場。咄嗟の判断力。

ありとあらゆる面に於いて、ライダーはランサーに劣っている——ならば、その結末は必然だ。

「あ、あ——ぐ……………つ」

悲鳴と共に、ライダーの体が地を滑る。大上段からの叩き付けは鎖剣を以てしても防ぎ切れず、長槍の殴打を受けた彼女は、無残にも肩を砕かれ地を這った。

受け身を取り、立ち上がろうとするライダーだったが、その動きは明らかに精彩を欠いている。眼帯に覆われた両の眼は、苦痛のみならず疲弊の色を宿していた。

「——フン。余分な縛りがあるのはお互い様、ってわけか。その様では、全力を出したくても出せまい。」

どんなマスターが付いているのか知らねえが、そいつは余程の阿呆だろうよ。お前の力、その程度のモンじゃないだろうに」

槍を片手で弄び、一步一步進むランサー。全くの自然体にも関わらず、その全身から発する闘気は些かも衰えを見せない。

起き上がろうと全身に力を含めるライダーだったが、悲しいかな、彼女の肩は砕け、魔力は端から足りていない。そんな有様で、ランサーの歩みを止められるはずもなく。



容易なまでに、必殺の間合いへと迫り着いたランサー。地に蹲るライダーを冷たく見下ろすと、何の躊躇もなくその首を刈り取らんと――

――その背中に。今度こそ、幾条もの短剣が降り注いだ。

「――なにッ!?!」

空を斬り裂く飛来音。それを察知できたのは、幸運値の低い彼にとつては存外の僥倖だった。

ライダーを屠らんと振り上げていた槍が、百八十度旋回。そのまま背後に振り返り、剛槍を突き出し短剣を払う。その判断は間違ひなく正解だったが、完全な不意を突かれた以上矢避けの加護は意味を為さない。心臓と首筋を狙った二本の投剣は防いだものの、もう二本は彼の左肩と右足を貫いた。

「チ――!」

困惑と共に、即座に治癒のルーンを刻むランサー。傷口が淡い光に包まれ、流れ出していた血が止まっていく。追い打ちとばかりに降り注ぐ更なる短剣は、大きく虚空に跳び上がり回避した。

華麗に着地した男は、解せぬと言いたげな目で闇の中を睨み据える。この短剣を放つた者は一人しか居るまいが、つい先程アサシンには強烈な打撃を見舞ったばかりだ。強力な回復手段を持っているのでなければ、衝撃と脳震盪で今しばらくは動けぬはずだが

ランサーの視線が向かう先は、木々の中。そこに佇むのは、紛れもなく笑みを宿した髑髏の面だった。

しかし、ランサーの拳を受けたその面には罅が入っている。よく見れば、その手先や足元も微かに揺らいている。それは確かに、ランサーの殴打を受けたという証左だ。

「ありやあ、薬でブツ飛んでやがるか。大麻<sup>ハッ</sup>とは、つくづく無粋な道具を使う奴だ」

回復したわけでもなく、防御したわけでもない。となれば、痛覚を無視して動いているという他考えられない。

ふと横に目をやれば、倒れ伏していたライダーもいつの間にか復帰している。覚束ない足取りと、力なく垂れ下がる左肩は、彼女が受けたダメージの甚大さを物語っているが、サーヴァントたる者、この程度で致命傷に至るなど有り得ない。

瀕死のサーヴァント二体に対して、ランサーは殆ど無傷。投剣の直撃こそ受けたが、ルーン魔術を修めた彼にとつては傷の治癒など朝飯前。致命傷ならまだしも、手や足の怪我ならば毒が混じっていようとも治療できる。ランサーに大きく傾いた天秤は、未だ振り戻る気配がなさそうだ。

「それでもオレに向かつて来ようという、その根性は買うけどな。もう少し、罨に嵌める相手を選んでおけ。」

——もつとも、次があればの話だがな」

轟、とランサーの槍に魔力が走る。それは確かに、宝具発動の予兆。

風さえ生む魔力の猛りに、アサシンとライダーが構えを取る。しかし、この魔槍の前ではそれは余りにも無意味。”刺し穿つ死棘の槍”が放たれる前に術者を倒さねば、この二人にそれを凌ぐ手段はない。

ランサーとて、主の命令に背くという無理をしている以上、今放てる宝具は一撃のみ。だがその一撃で、二人の内どちらかは殺せる。

命令違反の代償として今以上にステータスは落ちるだろうが、瀕死の相手に後れを取る理由はない。一撃で片方を屠り、残す片方も葬つて見せよう。今夜の戦いは期待外れだったが、それでも二体ものサーヴァントを駆逐出来たという戦果は大きい。

油断も隙もなく、己が半身たる紅槍に魔力を込めていくランサー。地に伏せるような構えは、突貫すると同時に槍を発動させるためのもの。この間合い、ランサーの瞬発力を以てすれば瞬きの間に詰められる。今更逃げようと足掻いても、アサシンとライダーは逃げることなど叶うまい。

”刺し穿つ——”

紡がれる真名。その脅威の前に、アサシンとライダーは短剣の掃射を以て抗わんとする。

だが遅い。彼らの刃が届くより先に、槍兵の宝具は彼らを駆逐する。対人宝具たるゲイ・ボルクは、その発動に要する時間も僅か一瞬で事足りる。

地より浮き上がるランサー。一足で最高速へと至る加速力を以て、彼は白い鬮體を穿たと狙う。

ランサーが狙うのはアサシン。ライダーとて得体が知れぬが、後々の面倒さを考えれば、暗殺者を先に倒すべきという判断故だった。

宝具解放まで、あと一節。ランサーを恐れたか、遁走しようと跳ぶアサシン、その心臓へと狙いを定め――

”――死棘ポルの――”ツ……!?”

地を走り、宝具を解放しようとした、その刹那。背筋に走った怖気に、ランサーは咄嗟に飛び退いていた。

「なんだ、コイツ――!?”

宙空に舞うランサー。その直下、一秒前まで彼が居た場所。

――そこに。その『影』は立っていた。

どこまでも黒い、悪夢の獣。

アサシンやライダーの、その暗さすら凌駕する闇の魔物。水母のような実体感のなきと相まって、それはどこか海に棲むモノを連想させる。

薄く、細く、長く、濃密な死の気配を撒き散らすその存在。影としか形容出来ぬ不可思議なソレは、何の前触れもなく、唐突にその場所に現れていた。

「———これ、は」

左手にあった、この広場で一番背の高い木。その頂点まで飛び退いたランサーは、得体の知れなさに戦慄していた。

眼下を見下ろす。一瞬間、槍を繰り出さんと構えを取ったその空間には、存在感のない、黒い触手のようなモノが蠢いている。

太古の昔、まだ神秘が溢れていた世界にて、影の国を旅し無数の妖魔を打ち倒してきたクー・フリーンですら、あんなモノは見たことがない。だが、初見でも理解できる。アレは間違いなく、バーサーカーをも上回る死の具現。

あのまま宝具を発動していれば、確実に自分は死んでいた。槍が迸るより先に、穿たれていたのは自らの心臓だろう。何せアレは、出現する瞬間まで存在すら悟らせなかったのだから。初めから隠れていたのだとすれば、その隠密性はアサシンの気配遮断をも上回る。

獲物を逃したと悟ったのか、不気味な触手はうねうねと靡く。周囲を探るように踊る

ソレらは——獲物を見つけたと言うように、一斉にランサーの方を向いて止まった。大樹の頂点にて、構えを取るランサー。如何なる手段でそれを察知しているのか、謎の影はするすると近寄ってくる。無数の手足だけのモノが、ヒタヒタと音を立てている。

空が凍る。地が震える。この公園そのものが、その存在に怯えている。

見たこともないナニカ。

形も定まらず、ふらふらと揺れ、しかし何より確かなモノ。

知性もなく、理性もなく、感情すらも有り得まい。そもそもアレは、生命という枠組みに留まらない。だがここに在る以上、ソレは確かに生きているのだろう。

——タリナイ

頭もなく、体もなく、感覚すらも存在しない。だというのにソレは、確かにランサーを捉えていた。

——タリナイ

届かない。あの影は実体を持たず、ただあそこに在るだけのモノ。数十メートルの高みに座すランサーを、捕えられるわけがない。

だというのに、この背筋に走る怖気。それは生前、幾度となく感じた死の恐怖。これ

は確か、魔女の罠に嵌められた時にこの身を襲った予感ではなかったか。

——タリナイ

ならば、答えは一つだけ。あの存在は、自分にとって『死』そのもの。いや、自分だけではない。およそサーヴァントとされるモノ、アレはその全ての天敵であると、ランサーはこの時確信した。

気付けば、先程まで地に立っていたアサシンとライダーの姿はない。あの怪物から逃れるべく、早々に退却したのだろう。

手負いのサーヴァントを逃したのは惜しいが、それも命あつての物種だ。他者の生死よりも、今はランサー自身の安全を確保するのが先決。

——タリナイ

アレの目的は何か。そんなことは明白だ。同じサーヴァントであるアサシンとライダー、その二体が同時に消え去った以上、考えられるのは一つだけ。あの影は恐らくは、サーヴァントそのものを狙うナニカだろう。

マスターでもサーヴァントでもないモノが、何の為にサーヴァントを狙うかなど、ランサーに知る由はない。ただアレに捕らわれれば吞まれると、それだけを直感する。

木の上に居るから安全？そんなわけはない。同じ空間に在るだけでこれ程空気を凍らせるモノが、生易しい敵である道理はない。今すぐに撤退せねば、明日の朝日は拝め

まい。

「——ち、何だあの化け物は。様子見も済んだ、そろそろ引き上げさせてもらおうか」  
 一歩ずつ、歩みを進める深海の獣。ランサーは逃げられない。この空間の何処へ降りても、次の瞬間には影に捕らわれる。そうなれば、待つてゐるのは死の運命のみ。

——だが、悔るな闇の影。この男こそは、生存に特化したサーヴァント。この程度が窮地と言うなら、英雄になどなれはしない——！

刻むべきは強化のルーン。魔槍を用い、瞬きの間に築き上げた神秘文字は、自身の力を強化するもの。単純な効果ではあるが、ランサーの腕前を以てすれば、短時間であるなら各種能力の向上さえ可能にする。

大樹まで辿り着いた影。何処までも伸びるのか、鎌首を擡げた蛇のように触手が走る。その希薄な存在感からは想像もつかぬ俊敏さで、妖魔はランサーを捕えようと——  
 「よっ——と」

——一瞬早く、ランサーが逃れる方が早かった。

棒高跳びの要領で、枝に刺した長槍を支えにし、一気に跳躍するランサー。追い縋る無数の影は、その残像を難ぐに留まった。

強化された筋力と速力は、僅かな間といえども狂えるヘラクレスにさえ匹敵しよう。この空間が死地だと言うのなら、空間そのものから逃れるまで。



影から逃れたランサーは、そののみならず、公園そのものを跳び越えて民家の屋根に着地した。獲物を逃がした魔の手先は、まだそこに敵が潜んでいるとも言うように、ランサーが立っていた枝を舐め回す。

それを冷めた目で見上げると。安全圏に逃れたランサーは、己が相棒たる槍を担ぎ、闇に沈む公園に踵を返す。

「じゃあな。何者なのかは知らんが、オマエの相手は御免蒙る」

そう言う。霊体化した槍兵は、跡形もなく姿を消した。

\*\*\*

「——逃したか。二体がかりでも及ばぬとは、儂の目も老いたものよ」

ランサーが去り、何時しか謎の影も失せ、傷ついた二騎のサーヴァントもどこかへ消えた場所。何より不吉なその跡地に、響く第三者の声があった。

すると、闇が凝固する。より合わされた影は、混ざり、固まり、ヒトの形へと変貌していく。その体躯が何で作られているにせよ、尋常なモノではありはすまい。塵か、泥か、それとも毒か。

——否。それは黒より尚昏い、虫の群れではなかつたか。

「しかし、アレを倒せなんだとは些か手痛いものよ。じき、白い器は開かれる。その前に、此方へ奪っておきたかったものだが——」

ふむ、と老人のカタチをしたモノは思案する。

今回の戦いが尋常ではないことを、老人は十年前から知っていた。故に彼は、今回の戦いは最初から見送るつもりで構えていた。

だが、数年前。僅かな、本当に些細な偶然が、老翁の目論見を変えてしまった。いや、それだけではない。幾つもの歯車が絡み合つて生まれた要因は、この聖杯戦争自体を変えてしまつている。一つでも状況が異なれば、ここまで歪むことはなかつただろう。

困つたことに、表層だけを見ればそこまでの異常はない。異常に巻き込まれている参加者も、未だ気付く気配は見せていない。恐らくは最後まで、ほとんどの者は気付かぬだろう。

そんな危うげな状況で、『門』を開けるはずもない。仮に開けたにせよ、その向こうにあるモノには手が届くかどうか。

「白い器に気付かれては危うい。その前に、全てを終わらせておかねばならぬかのう」

この狂つた天秤に気付いた者が、自分一人ならまだ問題はない。しかし最低一人以上は、この事態に気付く者が現れる。中でも、『器』であり聖杯との繋がりが深い彼女が、この異常を無視できる理由がない。

そうなつては遅い。アインツベルンに介入されては、老翁の計算が崩れる。弱り切つた今の力で、千年を超える一族に太刀打ちできるわけがない。

今回を見送れば、確実にアインツベルンの手が及ぶ。前々回の戦い以降、手段を選ばぬ彼の一族。正当に聖杯に干渉できる名目があるならば、嬉々として自らに利するよう動くだろう。そうなれば、衰えるばかりの自分に待つのは敗北という二文字のみ。

——故に、今回で片を付ける。第五次聖杯戦争に於いて、聖杯を手にするのはこの自分だ。

そのために、様々な布石を打った。誰も気づかぬ数年間、この老人は謀略に徹していたのだ。

老獪な翁が考えたのは、『器』の構築だ。

元々は実験のつもりで使い捨てる予定だったが、アレは老人の予想を遥かに超えて適合した。今となつては、万全と呼んでも良いほどに仕上がっている。

しかし、幾ら肉体が適合しようとも、アレの精神は存外に強靱だった。僅かな隙間さえ生まれればそれで良いにも関わらず、心が屈せぬ以上アレを動かすのは骨が折れる。事実当初の予定では、この段階まで到達するのはもつと後のはずだった。

十年間、聖杯の欠片に侵され抜いた実験台。聖杯の中身を埋め込まれたアレは、細胞の隅々まで変わり果てたものの、しかし器としてはまだ弱かった。

そこで、老人は切り札を切った。十年前より所持していた、もう一つの聖杯の欠片。組み込まれては廃人になるであろうその魔具を、躊躇いなく実験台に埋め込んだ。

その結果。翁の予想通り、アレは悪の芽に耐え抜き、同時に屈服した。未だに心は折れぬようだが、肉体の方は完全に染まった。幾ら精神が抵抗しようが、身体が勝手に動くのではどうしようもあるまい。出てきたモノを制御できぬのが難点と言えば難点だが、その程度は幾らでも対処できる。

「持ち駒は揃った。後は他の駒を揃えるだけなのだが——はて、どうしたものかのう」  
クツクツと笑う老人。その笑みは、まるで腐り落ちるような邪悪さ。

「数ばかりは揃えたが——如何せん、正面から戦うには手駒が弱い」

霊体化し、付近に待つはずの二体のサーヴァント。その無様さを、老人は嘲笑する。元より、自分の召喚したアサシンには期待していない。サーヴァントと戦わせるためではなく、マスターを殺すための存在がランサーに及ばぬのは当然だ。直接戦闘以外の面では実に有用なサーヴァントであるアサシンには、他に果たすべき役割がある。

だが、もう一体。アレの呼び出したライダーは、老人の期待に答えられるモノではなかった。

三騎士でなかったのは残念だが、それでも強壯な宝具を持つ英霊。全力を出せば、先のランサーにも劣らぬだろうに、ライダーの性質はアレの方に引き寄せられている。そ

もそも、妖魔としての側面を期待してただけに、ヒトとしての姿で現れたのが間違いと言えれば間違いだったか。

いずれにせよ、老翁にとってはライダーは期待できない。ならば最低でも、もう一つの駒は必要になる。ライダーより使いやすく、そして強力な手駒が。

「となればどれを奪うかだが、さて」

前回の戦い、そのほぼ全貌を知る老人。単純に戦力として見るならば、この男が望むのはアーチャーのサーヴァント以外に有り得ない。

監督役である神父のサーヴァントとして最大の脅威となったであろう彼が、未熟者のサーヴァントとなり全力を振るえぬという事実は降って湧いた幸運だ。なにせ、あれの力を以てすれば自分が集めた手駒など容易く蹴散らされよう。

いや、それだけではない。他の六騎全てのサーヴァントを以てしても、果たしてあの英霊に抗し得るかどうか。前回の戦いを知る老人は、黄金の騎士の正体を知っている。だがその力の底は、数百の年を生きたこの老人の眼であつても推し量れない。

あれを奪うのは余りにリスクが大きすぎる。おそらくは、御しきる前に此方の陣営は悉くが殲滅される。

「——っ」

か細い声。思索に耽る老人を現実に取り戻したのは、その弱々しい声だった。

「む？」

小首を傾げる老人。だが彼は、立ち所に滑るような笑みを浮かべた。

一体、いつからそこに立っていたのか。老人の影に隠れるように佇むそれは、弱々しい声で、「あの人を倒さなくてはいけないのか」と、馬鹿げた問いかけをした。

「」

当然だ。奪えぬのであれば、敵のサーヴァントもマスターもその全てを葬るまで。篡奪したモノは、今問いかけたその『器』に満ちていく。

それを正直に伝える意味はない。だが、問われたならば答えてやろうと思う程度には、この老人は寛大だ——もつとも、その答えが善意に溢れる物である道理はないが。

歪んだ喜悦を覆い隠して。妖怪は、物分かりの良い老人という仮面で表層を覆った。

「おまえがそう言うのは当然だがのう、これも可愛い孫を思つての事よ。爺としては、孫に敵討ちの一つもさせてやらねばな。」

——おまえの良く知る衛宮の子倅は、あれに命を狙われたのだぞ」

え、という小さな響き。

信じられぬ、と言わんばかりのその驚き。しかし、僅かな……敵意という名の変化が、この空間には現れていた。

それは、この存在の持つ唯一の罅。強固な扉を開けさせる、希望という名の魔法の鍵。

そして——その鍵が失われようとする時、人は何より恐怖を感じる。

恐怖の裏返しは、即ち敵意。穏やかで、脆く、だが何より頑丈であったソレの心に、ただの一言で憎悪という感情が入り込んだ。決して表に現れぬ、何より深く昏い魔の毒。

それを気付かぬのは本人だけ。微かに生まれた不協和音を、元凶たる老人は敏感に察知していた。

「——ク」

老人が嗤う。悪意に満ち、欲望に歪んだ妖怪は、蟲のように嗤っていた。

## 9. 雪の少女

——月の、綺麗な夜だった。

「……子供の頃。僕は、正義の味方に憧れてた」

唐突に。俺の養父は、御宮切嗣そんなことを語り出した。

今から、五年も前の話。俺を地獄から救ってくれた親父との、最後の会話がこれだった。

冬木市を襲った大火災。

数百人を焼き殺し、俺の家族も自宅も友人も、何もかもを葬り去った忌まわしい過去。当然のように、俺はそれに巻き込まれた。炎の中を彷徨い歩き、熱に体を焼かれ、煙に喉を壊され、俺はあそこで死ぬはずだった。

炎熱地獄からは逃れられても、もう自分はボロボロだった。火炎に焦がされた体は、死者に呪われた心は、とうに意味を為さず壊れてしまっていた。白く染まった空を見て、雨が降るのか、と微かに感じたことを覚えている。

——そして。そこで、俺は切嗣に助けられたのだ。

死に体だった俺を、どうやって助けたのか。どうして生き延びることができたのかは



分らないが、ふと気が付くと、俺は病院のベッドで横たわっていた。

ややしばらくして現れた、俺を助けてくれた男。照れくさそうに、自分は魔法使いだと語ったその人物に、俺は引き取られることになったのだ。

養父となった切嗣との生活は、とても楽しいものだった。普通の暮らしというものを忘れてしまった俺でも、あの時間は人並み以上に幸せだったと断言できる。

時々いなくなったかと思えば、戻ってくるなり旅の武勇伝を面白おかしく語ってくれる親父。

切嗣によく懐いて、いつしか俺の姉のように面倒を見てくれるようになった藤ねえ。

俺の境遇を知って、何かと親切にくれた近所の人たち。

そんな人たちに囲まれて、みんなと同じように、けれどちよつとだけ変わった生活を送る。そんな日が、いつまでも続くのだと思っていた。

「ヒーローは期間限定だね。大人になると、名乗るのが難しくなるんだ」

いつからか。少しずつ、僅かずつ、親父の具合は悪くなっていた。

病気ではない。怪我でもない。何ら原因が判らぬにも関わらず、衛宮切嗣という男は確実に死へと向かっていた。

寿命と呼ぶには余りに若すぎたが、そうとしか言いようがない。あの頃の親父からは、生气というものが失せてしまっていた。まるで、何かの悟りを開いてしまったよう

に。もう生きる目的がないとでも、そう言うかのように。

子供心にも、俺は親父の死期を悟っていたのだろう。この時の俺は、何を語るともなく親父と二人でいることが多くなっていた。

悲しくなかった、と言えば嘘になる。親を失った俺にとって、切嗣はただ一人の父親であり、そして格好良い正義の味方でもあった。

父親だったとはいえ、家事など全然出来なかったし、正直に言えば頼りなかった。けれどそれでも、親父は俺の憧れだった。世界中に誇れる、誰より立派な人だった。

「——そんな事、もっと早くに気付けばよかった」

嘆息して、力なく微笑む切嗣。それを見て、無性に腹が立ったのを覚えている。

切嗣は俺の英雄だった。死ぬはずだった子供の俺は、切嗣のおかげで助かった。俺が生きていたことを、我が事のように喜んでくれた人。父となったその人は、大きな手で傷だらけの俺を抱きかかえ、あの地獄から連れ出してくれたのだ。

その笑顔に、憧れた。

それが、あまりにも嬉しそうだったから。救われたのは自分ではなく、男の方ではないかと思つたほど。

——生きていてくれて、ありがとう。

——助けられて、よかった。

感謝するのは、俺の方のはずなのに。まるで俺に感謝するように、心底から嬉しそうに、切嗣は笑っていた。

俺だけが助かった。

誰も彼もが、焼き尽くされた焦土で。助からないはずの世界で、俺は一人だけ助けられたのだ。

救われたなら、救わなくちゃいけない。からっぽになった心が、そう考えるのは自然なことだ。

だから、そういう人間になろうと思った。彼のような正義の味方に、偉大な理想の英雄ヒーローに。それが、どんな絵空事だったとしても。子供の空想に過ぎなかったとしても。絶対になつてやると、そう誓ったのだ。

俺を助けてくれた親父は、『正義の味方にはなれなかった』と言っていた。それは、どこか空虚なモノで。だからこそ、俺は決心した。正義の味方になつて、誰かを助けられる人間になろうと。憧れたあの人の代わりに、尊い夢を叶えようと。

そう言い切る前に、切嗣は瞳を閉じていた。もう動くことのないその表情は、微かに笑みを浮かべていた。

——それが、衛宮士郎の始まりのカタチ。決意と憧れが生んだ、幼い少年の儂い理想ユメ。

\*\*\*

「懐かしい夢を見ていた。

あの頃の夢を見るのは何年ぶりだろう。ここしばらく、親父の夢を見ることなどなかったというのに。最後に見たのはいつなのか、記憶にないほど昔のことだった。

昨日の一件で、戦う覚悟が定まったせいか。衛宮士郎が戦う理由を、夢の中で思い出した。

——あの笑顔に憧れたから、そうなりたいと思った。

そう、この胸にあるのはただそれだけのこと。そのためならば、自分はどこまでも走っていい。

「……でもまずは、この聖杯戦争を終わらせないと」

正義の味方。

俺はそれを目指しているはずなのに。その定義が一体何を示しているのか、未だ以て俺は答えを得ていない。ふと頭を過るのは、弱きを助け強きを挫く、数多の人々の理想像。それも答えの一つには違いないが、けれども完全な答えではない。だが、これだけは言えるだろう。正義の味方は、困っている人を助ける者だと。

そして……今現在。今日この瞬間にも、理不尽に喘ぎ苦しんでいる人たちがいる。

それが日々の生活、日常の範疇で起こり得ることならまだいい。世界が不完全な物である以上、その日常の中で起こり得る苦悩なら、否定も拒絶もできはしない。それすら取り除いてしまえば、俺たちの暮らしには、いや、俺たちにとつての世界は何の意味も為さぬ背景に成り果てるだろう。

——だが。常識を離れ、世界の理に従わず、且つ抗いようもない不条理な力。それが、他ならぬ人の欲望によつて引き起こされるモノである以上、俺は断固として拒絶する。

五回目だという、今回の聖杯戦争。しかし、聖杯を求めて集った参加者は、他者の犠牲を厭わない。聖杯を手に入れるためならば、例え多くの者を巻き込んでも構わないと言う、身勝手に利己的な魔術師たち。

そんな奴らを野放しにしておいては、十年前の惨劇が繰り返される。それだけは、どうあつても許容出来ない。

故に、俺は戦う。他人を巻き込み、犠牲にしてまで聖杯を掴もうという『敵』は、俺自身の手で止めてみせる。例えそれが、相手を倒すことであろうとも。

「ヤって、起きるか」

布団から起き上がり、頬を叩いて気合を入れる。

今日も学校だが、昨日とは違って俺にはやる事がある。それも学校の結界を壊すとい

う、俺の手に余る大仕事だ。

壊すと言つても、結界本体を破壊できるわけじゃない。あの結界は、同等以上の概念でしか壊せない。それは即ち、魔法や宝具級の神秘を用いねばならないということだが、アーチャーもセイバーも、そんな宝具は使えない。

けれど、結界そのものではなく、その枝葉を壊すことはできる。具体的に言えば、それは結界を作り上げている基点だ。

家を建てる時には土台が必要なように、結界を作る時にもその基盤になるモノが必要となる。全体が出来上がってしまっている以上、今更末端の一つや二つを壊したところで影響は出ないが、それでも結界の発動を遅らせることはできる。少しでも時間を稼ぎたい俺たちには、藁にも縋るような手段ということだ。

遠坂曰く、俺はどうやら世界の異常に敏感な体質らしい。そこで、空いた時間に学校を散策し、できるだけ基点を見つけておいて欲しいと言われたのだ。

末端と言えど、常人には手の届かない神秘で括られた結界に、俺は取りうる手段を持たない。だが、その程度であれば遠坂は破壊できるという。俺が基点である呪刻を見つけ、遠坂が破壊するという役割分担は、こうして今日から実施されることになった。

しかし、この方法にも問題がないわけではない。結界の一部を破壊する以上、俺たちの行為は結界を構築した術者に確実に伝わる。自分を阻む者がいる、という事実を知れ

ば、相手が何らかの行動に及んでもおかしくはない。

こちらの狙いはそこにある。相手に露見するというデメリットを、隠れている相手も動かすというメリットとして逆に利用した形だ。敵が誰なのか判らないこの状況で、相手の方から動いてくれるというなら万々歳だ。付け込む隙は十分見出せるだろう。

「どんなヤツだか知らないけど、引つ張り出してやる——」

そして、利点はもう一つある。俺というマスターそのものが、情報戦では有効な武器になるのだ。

俺は魔術の基本もろくにできていない、半人前の魔術師だ。先祖代々伝わる魔術刻印や、大層な魔術回路も持たない俺は、魔力の生成すらも十分にできるとは言えない。

つまり、自分で賄う魔力にすら事欠く俺は、魔力をほとんど外部に発していないのだ。それは即ち、魔術師からすれば俺は一般人にしか見えないということ。事実、遠坂は俺のことをマスターどころか魔術師であるとすら気づいていなかった。……まあ、俺自身も遠坂に指摘されて初めて、自分が魔力を発していないと知ったのだが。

それはさておき。遠坂にすら見抜けなかったのだから、学校に潜むマスターは俺が聖杯戦争の関係者だとは思ってもよらないだろう。そいつは表に出てきた途端に、遠坂やセイバーだけでなく、俺とアーチャーの奇襲を受けることになる。

普通のマスターなら、敷設した結界が攻撃を受けたとしてもそのまま静観するだろ

う。呪刻の破壊は対処療法に過ぎず、結界という巨大な癌細胞を丸ごと消滅させるなどほぼ不可能。結界が完成してしまえば、莫大な魔力を集められ、一気に優位に立てるのだからわざわざ動く意味などない。

だが、公共の施設にあんな物を仕掛けた奴がまともであるわけがない。なら、そいつの行動に合理性を求めるのは無駄だろう。俺たちの作戦は、学校に潜むマスターがどう動くかにかかっているのだ。

校内を見回るルートを思い出しながら、自室を出る。藤ねえや桜が来る前に、遠坂たちと細かい打ち合わせをしなければならない。

\*\*\*

「——これで最後、と」

鮮やかな手並みで最後の呪刻を壊した遠坂が、背筋を伸ばして立ち上がる。

時間帯は、既に放課後。休み時間や昼休みを利用して、結界の基点——俺に言わせれば、空気が淀んでいる場所に目星を付けておいたため、一つあたりの呪刻を壊す時間は予想より短く済んだ。

だが、地味に数が多かったせいで、結果的にはそれなりの時間がかかってしまった。



今学校に残っている生徒は、おそらく俺と遠坂だけだろう。

「士郎、他に怪しい場所はなかったのよね？」

「ああ。俺が変に感じた場所はここで終わりだ」

ふーん、とそう言うのと、遠坂が何事かを考え込む。微かに傾げられたその首元から、ほんのりと甘い香りが漂ってきて不覚にも心臓が高鳴った。

そんな俺の様子に気付くこともなく。何か結論が出た様子で、遠坂はこちらに振り向いた。

「……士郎。わたし、ちよつと寄っていく所があるから、先に帰ってていいわよ」

「それって、遅くなるのか？」

「たぶんすぐ済むと思うんだけど……どうかしら。あんまり遅くはならないようにするけど、何なら先に夜ご飯食べちゃっていいわよ。」

あ、解つてると思うけど、余計な寄り道はしないこと」

そう言うのと、遠坂は俺に背を向けて、ずんずん歩いて行ってしまった。

気を付けろよ、と一声かけようとしたが、その時には既に遠坂の姿は廊下の角に消えている。あいつ、思い立ったらすぐに行動するタイプの人間らしい。

「……まあ、心配いらぬか。遠坂だし」

遠坂が去っていったのを確認してから、俺も足を動かす。遠坂とは反対方向へ廊下を



どうやら俺がいることには気付いていないらしく、こちらに向き直る気配はない。遠目に見える横顔は、どこことなく不機嫌そうだ。

「忘れ物でもしたのか、あいつ」

生徒は早めに帰宅するよう学校側から指示が出ているし、部活動も一時的に停止状態になっている今、慎二が戻ってきた理由はそれ位しかない。俺と違って、あいつは今でも弓道部に所属している。色々とよくない噂は聞くが、あいつはあいつなりに弓道を続けていたはずだ。

——だが、何故か気になる。何の変哲もない日常の風景に、どこか違和感を覚える。校庭に向かおうとした足の向きを変更。歩いて行った慎二の後を、物陰に隠れながら追っていく。

どうやら俺の予想通り、慎二の目的地は弓道場のようだ。何の迷いもなく進むその足取りは、明らかに何らかの目的を持ってこの場に来たことを示している。

そのまままっすぐ進むと、弓道場に消えていく慎二。流石に中まで付いて行つては尾行がバレるので、音を立てないよう入り口近くの茂みに隠れておく。

……が。不審な友人は、一分と経たないうちに入口まで戻ってきた。先程とは打って変わって、口元には楽しげな笑みすら浮かべている。

「……………」

忘れ物をしたにしては、あまりにも早すぎる。それに、入っていった時と同じく、慎二は手ぶらのままだった。

茂みの中に隠れる俺には気付かぬまま、慎二は校門へと歩いていく。目を凝らしてその様子を伺うが、特に変わった様子はない。もう誰もいないというのに、あいつは一体何のために弓道場まで来たのだろうか。

どうにも腑に落ちず、慎二がいなくなったのを確認してから、数日ぶりの弓道場へと入る。よく考えてみれば、いつもは鍵がかかっているはずなのに、開けっ放しになっている辺り不用心だ。

……と。そんなことを考えて弓道場に踏み入った、その瞬間。

「これ、は——!?!」

そこは、文字通りの異界だった。

奇妙なまでの息苦しき。

吐き気を催す濃密な空気。

嫌悪感を齎す淀んだ湿気。

そして……何よりも、匂いが違い過ぎる。この甘ったるい、滑るように纏わりつく臭気は、尋常なものでは有り得ない。こんな場所、ただ立っただけで気分が悪くなる。弓道場の柱。木張りのそこに描かれているそれを、見誤るわけがない。なにせ俺は、

つい三十分前までそれをこの目で見ていたのだから。

その奇怪な刻印こそは、日常を侵す非日常の証。学校の結界を構成する、呪刻の一つだった。

\*\*\*

夕暮れの街の中を、俯きながら歩いていく。

これから買い物に向かうのだという認識はあるが、周囲の様子を正しく認識できていない。俺の脳は、ただ一つの光景だけを考えていた。

「……………」

つい先程見た光景を、未だに信じることができない。聖杯戦争が、日常を壊すモノだと理解してはいたが……まさか、こんな身近な所にまで魔の手が及んでいるなんて、考えが甘かった。

——間桐慎二。

数少ない俺の友人であり、付き合いの長い人物。

成績は常に学年トップクラスで、運動能力も高い。弓道部では、副主将の座を務め上げるだけの腕前を持っている。

良家の息子らしく、金回りは良い。外見も良いため、女子からの人気も高い。

……が。客観的に見て、あまり性格の良い人物とは言い難い。悪い人物ではないのだが、他人を見下す癖があり、男子からの評判は悪い。

と言つても、折り合いさえつけてしまえば付き合いやすい奴なのだ。あいつとは中学の頃からの付き合いで、登山に行ったりゲームをしたりとしよつちゆう遊んでいた。今は少し疎遠な関係になってしまっているが、友人であることに変わりはない。

あいつは、普通の一般人だったはずだ。それが何故……あのタイミングで、異界となった弓道場に入入りしていたのか。

「何かの偶然、なのか……？」

声を出して呟くが、そんなわけがないと理解してしまっている自分がいる。

部活動に停止命令が出ている今、各部室はきちんと施錠される決まりになっている。鍵は顧問の教員か、或いはその部の部長・副部長が管理しているはずだ。あんな風に開けっ放しにしておく理由はないし、鍵を持つているはずの慎二が鍵を掛けていかなかった理由も解せない。几帳面なあいつに限って、不用心な真似に及ぶはずがないのだ。

それに、そもそもあんな時間に弓道場へ行つたこと自体がおかしい。忘れ物をしたにせよ、慎二が弓道場にいた時間はほんの数十秒。何かを持っている様子もなかったし、あれではただ、『何かを確認しに来た』ようにしか見えない。

そして……弓道場の柱に刻まれていた、結界の刻印。俺は校内は見て回ったが、あの場所の事は失念していた。この日に限って慎二が不審な行動を取り、その先にあったのは結界の基点。穿ち過ぎかとも思うが、偶然にしては出来過ぎている。

——が。慎二がああ結界に関係しているとすれば、全ての辻褄が合う。

今日、俺と遠坂は学校中の呪刻を壊して回った。壊す、と言うよりは一時的な妨害に過ぎないが、それでも結界の発動を遅らせることはできる。一つだけではなく軒並み呪刻に干渉したのだ、結界を仕掛けた者には確実に露呈しているだろう。

そして、まだ俺たちが見つけていない呪刻があったとすれば……結界の術者は、その無事を確認しに行くに違いない。

俄かには信じ難いが、そう考えれば筋は通るのだ。俺が感じた違和感も、これで殆ど説明ができる。感情的には納得できないが、理屈の上では特に矛盾している部分はない。

……だが、一つだけ腑に落ちない点がある。どうしてあんな場所に結界の基点を作ったのか、それがどうにも理解できない。

他の呪刻は、全てが人目につかない場所にあつた。階段の裏や、掃除用具入れの影や、使われていない空き教室。まあ、なるべく人の立ち寄らない場所に仕掛けるのは当然と言えば当然だ。

けれど、この場所は違う。俺のような半人前の魔術師でも、一目で判るような場所に呪刻は存在していた。他にも見つかりにくい場所があつたにも関わらず、何故あんな目立つ場所を選んだのか。その不可思議な不用心さは、まるで誰かに見つけることが目的とでも言うような――

そうやって、物思いに耽つていたのがまずかつた。

「あつ」

どん、と腰のあたりに衝撃。

慌てて顔を上げると、見慣れた商店街の景色が飛び込んできた。夕方ということもあつてか、立ち並ぶ店の数々は手提げ袋を持った買い物客で賑わっている。……つて、そうじゃない。

ぼーつとしていたせいで、誰かにぶつかつたのだろう。謝らなければならぬ、と周囲を見渡すも、俺の近くに人影は見当たらない。

「？」

くいくい、と裾を引つ張られる感触。はてな、と思つて視線を下に向ける。

すると、そこには。

「もう、気を付けなくちゃダメじゃない。レディにぶつかるなんて、すつごく失礼なんだから」



銀の髪を靡かせる、小さな少女が立っていた。

「な——!?!」

反射的に、後ろに飛び退き身構える。

この少女は……つい数日前、イリヤスフィールと名乗った魔術師。あのバーサーカーを従える、聖杯戦争のマスターに他ならない。何だってこんな商店街にいるのかは知らないが、真昼間から人前に姿を晒すなんて想定外にもほどがある。

人目を憚る気がないのであれば、次の瞬間にも俺は斬殺されているだろう。アーチャーを連れていない、登下校の隙を狙われるとは迂闊だった——!

「良かった。生きてたんだね、お兄ちゃん」

いつでも逃げ出せる態勢を取る俺をよそに、少女は明るく笑みを浮かべる。その表情は、セイバーを斬り伏せた残忍さからは想像も出来ない、年相応の幼いもので。それに怯える俺の方が、この空気の中では異端だった。

すぐに襲ってくるのかと思えば、目の前の少女からは敵意や殺意が感じられない。その矛盾に違和感を覚え、おそろおそろ口を開く。

「おまえ、確かイリヤスフィールって……」

「あ、覚えててくれたんだ!」

嬉しそうに、少女が顔を綻ばせる。どこまでも純真なその瞳に、力を入れていたこち

らは肩透かしを食らった形になる。

「長いからイリヤでいいよ！ それで、お兄ちゃんの名前は？」

「え、俺？ 俺は衛宮士郎だけど……覚えにくかったら士郎でいい」

目を輝かせて訊いてくる少女に、思わず普通に答えてしまう。いくらバーサーカーのマスターとはいえ、幼い女の子の質問を無視するわけにもいかない。

俺の名前を聞いて、んー、と可愛らしく口元に指を当てるイリヤスフィール。何事か呟いているようだが、そのさり気ない動作に鳥肌が立つ。

……あの夜。俺がバーサーカーに斬られたあの夜にも、この少女は同じ動きを見せていた。こうして何かを考える様子を見せた後、無邪気な自己紹介と共に、イリヤスフィールは俺たちを殺そうとバーサーカーを差し向けたのだ。

今すぐにも走り出そう、と腰を落とす俺。それを不思議そうに見つめる少女は、軽く首を傾げると再び口を開いた。

「そう身構えなくてもいいよ、シロウ。まだお日さまが出てるでしょ？ お日さまが出ているうちに戦っちゃダメなんだから」

「つ——戦う気はないのか？」

「ないよ？ 今日にはバーサーカーも連れてきてないし、シロウもサーヴァントを連れてないでしょ？ だから、おあいこ」

そう言う、上機嫌にこちらを見上げてくるイリヤスフィール。その挙措に、やはり戦意のようなものは感じられない。

「戦う気がないって言うなら……じゃあ、おまえは一体何しに来たんだ？」

「シロウとお話ししに来たんだよ？ わたし、シロウと話したいコトいっぱいあったんだから」

「お話しって、おまえ……本当に戦いに来たんじゃないのか」と。

そう口にした途端、少女の瞳が鋭く細められた。

「——ふうん。そんなにわたしと戦いたいんだ、お兄ちゃん」

ぞつとするような声音。その冷たさに、逆らえば命などないと理解する。

見た目こそ幼い少女だが、彼女はあのバーサーカー……ヘラクレスのマスターだ。今はサーヴァントを連れていないと言っているが、ちゃんとした魔術師ですらない俺には、その真偽は判別出来ない。セイバーを斬り伏せ、アーチャーの矢を無効化したあの怪物が今この場に現れれば、俺一人でどうこうできるはずがない。

周囲には何人もの一般人が歩いているが、この凍り付くような目をした魔術師が、そんな事で躊躇するとは思えない。殺すと決断したのなら、誰が何処で見ていようとこの少女は相手を屠るだろう。

アーチャーの冷酷さとはまた違った、マスターとしての冷酷さ。それを見せつけられた俺は、今確かに気圧されていた。

「……いや、俺も戦うつもりはない。話をすればいいんだろ？ 付き合ってやるから、それでいいか、イリヤ」

周囲の人を巻き込むわけにはいかない、と降参宣言をする俺。それを聞いた少女は、今見せた残酷さが嘘のように、花の咲くような笑顔を浮かべてみせた。

「うん、じゃあつちに行こー！ 早くしないと置いてっちゃうんだからー！」

その場でびよん、と飛び上がると。くるりと背を向けて、少女は一直線に駆け出した。嬉しそうなその後ろ姿は、聖杯戦争のマスターとは思えない。どう見ても、それは天真爛漫な少女のものだ。イリヤは純真に、俺の言葉を信じて走っていったのだろう。

少しずつ開いていく距離。けれど、イリヤは後ろを振り向く様子を見せない。俺が着いてきているものだ、迷いも無く信じ切っている。

アーチャーには、敵の誘いに乗るなど愚の骨頂、と嗤われるだろう。

遠坂には、寄り道するなって言ったでしょうが、と怒られるだろう。

セイバーには、何を考えているのですかシロウ、と叱られるだろう。

……でも、それでも。いくら相手が敵だったとしても、自分を信じてくれた少女を裏切るなんて、俺にできるはずがなかった。

\*\*\*

商店街の喧騒から離れ、誰も居ない小さな公園に着いた。乾燥したベンチに腰掛け、二人で並んでいる俺たちは、傍から見れば実に不思議な光景だろう。

兄妹だと言うには外見が違い過ぎるし、友人だと称するには年齢が離れすぎている。けれど、他に誰もいないのだから、説明が必要な理由もない。

……そして。人目を憚らなくても良いという事は。つまり、俺は今この瞬間に、バーサーカーに襲われるかもしれないという事でもある。

隣に座っているイリヤは上機嫌だが、この少女のことをほとんど知らない以上、いつ気分が変わるかなど判ったものではない。魔術師としての力を持たず、サーヴァントも連れていない俺は、どこからどう見ても隙だらけだ。

その自覚はあるが、かといって無暗に動くこともできない。イリヤが俺を信じたように、俺もこの少女を信じて、話をしてみるべきなのだろうか。

いつまでも黙っているわけにもいかず、自然さを装って口を開く。

「……なあ。話をするって言ったって、一体何を話せばいいんだ？俺、イリヤが喜びそうな話に心当たりはないんだが……」

「えー？ 面白いお話じゃないとつまんないよ」

ぷー、と膨れるイリヤ。その様子がリスのようで、思わず苦笑してしまふ。

「面白いって言ったってなあ……俺はイリヤのこと知らないから、何が面白いと思ってもらえるのか分からないぞ」

「そっかあ……じゃあ、今日は特別にわたしの方からお話するね！」

そう言うと、えへへと笑って、肩を寄せてくる雪の少女。本当に楽しそうな笑顔のまま、イリヤは話を始めた。

本名はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンだということ。

雪の降り頻る、冬の城で生まれ育ったこと。

母親譲りの髪が自慢で、父親にも褒めてもらったこと。

部屋の外には、あまり出たことがなかったということ。

冬木に居る間は、森の奥の洋館に住んでいること。

お城には口煩いメイドが居て、いつも注意されること。

次々と、まるで魔法のようにイリヤの口からは言葉が零れる。ただ相槌を打つただった俺も、いつしか警戒心を解き、微笑んで言葉を交わせるようになっていた。

無邪気に話すこの少女が、聖杯戦争のマスターだとは到底思えない。何も知らなければ、俺も可愛らしい少女としか思わないだろう。

……けれど。他でもないこの少女が、バーサーカーを喚け、セイバーを殺す命令を下したのだ。平和な会話に絆されて、その冷酷さを忘れるわけにはいかない。

だが、今のこの純粹さと、あの夜の残酷さの、一体どちらが本性なのか。イリヤスフィールの二面性を、俺は未だ理解できずにいる――。

「ねえねえ、シロウは何か楽しいお話ししないの?」

そんな事を考えていると。黙り込む俺を不審に思ったのか、イリヤが顔を上げてきた。

「んー、そうだな……」

思考を切り替え、むむ、と顎に手を当てる。

今までの会話で、イリヤは本当に何気ない話でも楽しんでくれるというのは判った。きつと、冬の城から出たことがなかったというイリヤには、他人の会話それ自体が楽しいのだろう。

何を話せば良いのかとも思うが、ひよつとすると、俺の平凡な日常でもイリヤにとっては奇想天外な物語になるかもしれない。過去の失敗談や学校での出来事を、幾つか脳裏に思い描く。

「じゃ、最近の俺の話しようか。面白そうなのを選んでみるけど、つまらなかつたらごめんな」

こくこく、と首を縦に振るイリヤ。期待の込められたその瞳に、自分の顔が綻ぶのを感じる。

「そうだな、面白かった話と言えば——」

一旦、話を始めてみれば。面白いように、次から次へと話題が飛び出した。

俺は親父に魔術を習ったけど、腕前はてんでダメなこと。

桜という後輩がいて、我が家の家事を手伝ってもらっていること。

仲の良い一成という友人がいて、遠坂と事あるごとにいがみ合っていること。

遠坂は学校では猫を被っていて、本性は全然違ったということ。

最近家に来たサーヴァントたちは、将棋にハマっているらしいということ。

始終楽しそうに話を聞いていたイリヤだったが、何が面白かったのか、遠坂の話題になると身を乗り出して聞き入っていた。特に、一成と遠坂の掛け合いや、遠坂が上級生をこつ酷く振った話は大受けで、我ながら話した甲斐があったというものだ。……遠坂本人の前では絶対に口に出せないが。

けれど、そんなイリヤは、俺がサーヴァントの話題を出した瞬間、急に表情を曇らせた。

セイバーとアーチャーが将棋をしていた件のあたりまではまだ良かった。しかし、話がアーチャー本人のことに及んだ途端……イリヤは、それまで浮かべていた笑顔が無表



情へと切り替えたのだ。

その豹変ぶりに、俺も口を閉ざしてしまう。なんでもない話をしていたと言うのに、サーヴァントの話を出したのはやはり間違いだっただろうか。

「……イリヤ？」

声を掛け、俯いてしまった少女の様子を伺う。険しい色を宿した紅い瞳は、何かを思案するようにここではないどこかを見つめていた。

静まり返る公園。僅かに響く二人の呼吸音だけが、生命の存在を感じさせる。

気付けば、既に日は落ちる間際。あと一時間もすれば、冬木市は夜の帳に包まれるだろう。早く家に帰らなければならぬ、とそんな考えが脳裏を過る。

夕暮れの中、ただ静かな時間が過ぎていく。その沈黙を打ち切ったのは、唐突に顔を上げたイリヤだった。

「——ホントは、つまらない話はしたくないんだけど。大事なコトだから、シロウにも言わなくちやいけなないよね」

「え——？」

その真剣な眼差しに、息を飲む。あの夜の残酷さとも、今までの無邪気さとも違う、年齢にそぐわぬ冷静な瞳。

吸い込まれるような紅い瞳から、目が離せない。今日の前にいるのは、本当は大人の

女性だとしても言うような、そんな妖艶ささえ感じさせる。

幼い少女とは思えぬ、迫力すら纏わせて。動けない俺を見つめたまま、イリヤは濡れた唇を開いた。

「シロウ。あのサーヴァントとの契約を切りなさい」

それが、余りにも予想外だったせいなのか。その言葉の意味を理解するまでに、数瞬間の時間を要した。

「な——イリヤ、それってどういう……」

「他のマスターは害虫だけど、シロウは特別。あのサーヴァントとの契約を切るなら、見逃してあげてもいいわ」

俺の言葉を遮るように、イリヤはとんでもない話を続ける。

それが、邪魔だからマスターを降りろと言うのではなく、心底から、俺の身を案じる瞳だったから。俺は口を開くことができず、押し黙る他はなかった。

そんな俺を眺めて、何を思ったのか。一度口を閉ざしたイリヤは、一瞬何かを考え込むと、再び俺の目をまっすぐ見つめてくる。

「シロウ。あのサーヴァントのこと、何か知ってる？」

そう真正面から問いかけられて。答えようとして、その時に初めて……俺は、自分の召喚したサーヴァントについて、何も知らないのだと気付いた。

真名も宝具も判らず、行動原理すらも判然としない、正体不明の異端の英霊。サーヴァントとして在るべき霊体ではなく、実体として召喚されたこと自体が、本来ならば有り得ぬ異常。

あの遠坂ですら、アーチャーについては一切の心当たりがないと言う。セイバーは何か知っている様子だったが、まだ俺は彼女にそのことを訊いていない。

マスターと共に戦ってくれるのがサーヴァントだと言うのに、自分のサーヴァントについて何一つ知らないというのは大問題だ。家に戻ったら、セイバーにアーチャーのことを訊いておかなければならない。そう結論付けると、俺は俺の知る限りの答えを言うことにした。

「——いや。あいつがアーチャーだってことしか、俺は知らない。」

召喚の手違いだか何だかで、あいつ、自分の記憶がないみたいでさ。あいつ自身にも、自分が何者なのか判らないらしい」

「……ふうん。わたしの知らないサーヴァントだもの、何か歪みが出てるとは思ったけど……そっか、記憶の読み込みに失敗してるのね。それで、霊格と強さにあんなに差があったんだ。」

でも、それはそれで良かったかな。こんなこと、わたしにだって想定外だし」

何事かに納得した様子で、理解できないことを呟きながら頷くイリヤ。

それに首を傾げていると、一通り考え事が終わったのか、少女は再び顔を上げた。俺が答えるたびに、真剣な表情で思案するその姿からは、イリヤが本当に重大な悩み事を抱えているのだと伺わせる。

「シロウは、魔術師だけど素人だって言ってたよね？」

「ああ。情けないけど、俺は魔術は正直に言って上手くない。できるのも、強化と投影くらいだ」

「ふうん？ また変わったのを使うんだね。そんな効率が悪いのしかできないって、ホントに素人なんだ。

……じゃあ、ひよっとして聖杯戦争のコトも知らなかったりする？」

「いや。聖杯のことも、サーヴァントやマスターのことも、一通りは知ってるぞ」

と言っても、その殆ど全てが遠坂や言峰からの受け売りなのだが。

「そっか、それは知ってるんだね。じゃあ、サーヴァントとマスターの関係も分かっているんだ？」

確かめるように、今俺が口にしたばかりのことを質問してくるイリヤ。意図が解せず  
に眉を顰めるも、ああ、と答えを返す。

マスターとサーヴァント。この関係は、二人で一組の特別なものだ。

指揮官であるマスターは、サーヴァントを現世に留め、彼らに魔力を供給する。

戦闘代行者であるサーヴァントは、人間よりも遥かに強力な存在だが、マスターなしでは現世に留まることができない。マスターから魔力の供給を受けることで初めて、サーヴァントはその真価を発揮できる。

マスターとサーヴァントにはそれぞれ聖杯を望むだけの理由があり、その利害の一致があるからこそ両者は共闘する。それが、この聖杯戦争に於ける魔術師と英霊の関係だった。

「サーヴァントは、マスターがいなきやこの世界に留まらない。この世界の住人じゃない英霊は、現代に続けるための依り代と魔力が必要なの。それを提供するの、マスターになった魔術師たち。

——まだ分からない？ 逆に言えば、依り代と魔力さえあれば、サーヴァントにとってマスターなんか必要ないって」

「な——」

イリヤの紡いだ言葉に、色を失う。執拗なまでにサーヴァントについて訊かれた理由も、その一言でようやく理解できた。

サーヴァントに命令を下すための令呪、というものがある。けれど、そんなものがな

くてもサーヴァントはマスターの意向に従わざるを得ない。マスターはサーヴァントがいなくても生きていくことができるが、サーヴァントはマスターがいなければ存在自体が許されないからだ。

だが、何かの間違いで……この世界に留まる為の依り代と、魔力。その双方を、サーヴァントが自分で賄えるようになってしまえばどうなるか。

話は簡単だ。そうなってしまうえば、サーヴァントにとつてマスターなど必要ない。実際に戦うのは英霊であるサーヴァント自身なのだから、令呪という要らぬ枷を持つマスターは、寧ろ邪魔になるだけだろう。マスターの存在意義は、この時点でほぼ喪失してしまっている。

そして……そんなイレギュラーを、俺は一人知っている。

俺が召喚したアーチャーは——あの黄金のサーヴァントは、いつでも俺を見捨てられるということではないのか。

あいつは霊体ではなく、現実の肉体を持っている。ならあいつは、既にこの世界の住人になっているということだ。

自分の肉体を持っているのなら、それはもうサーヴァントとは呼べない。依り代など必要ないし、魔力だって自分で生成することができる。令呪さえなければ、マスターに従う義務すらも存在しない。

握り締めた拳に、力が入る。この手に刻まれた、三画の令呪。俺とアーチャーの関係は……実の所、その薄く脆いカタチでしかなかったのだ。

自分に目的はないと、ただ愉しむだけに戦うと、そう笑っていたアーチャー。あの時に感じた、期待にそぐわなければ殺されると言う直感は、どうしようもなく正しいものだった。あいつは——あの英霊は、その気になれば躊躇いなく簡単に俺を殺せるのだ。

「これで分かったでしょ。シロウが、どれだけ危ない橋を渡ってるかってことが。」

そうじゃなくても、あのサーヴァントは何かおかしいわ。まだシロウがマスターを続ける気でも、あのサーヴァントとの契約だけはダメよ」

そう断言するイリヤ。反論しようとした言葉も、突き付けられた現実の前には力を失い消えていく。

もう何度目になるのかも分からないが……今までの認識は、甘すぎた。

あれ程遠坂が警戒し、セイバーが敵視していた理由。その本当の意味を、俺は今になって理解した。

マスターが必要ないサーヴァント。俺と言う存在を差し引いても、そのイレギュラーはそれだけで脅威なのだ。

通常、サーヴァントがどれだけ強力でも、その性能はマスターに依存する。マスターの力量が低ければサーヴァントの力を活かしきれないし、マスターが倒されてしまえば

サーヴァントは消えるしかない。

だけど、アーチャーは自分だけで好き勝手に戦える。マスターという弱点自体を、アーチャーは元から持たないのだ。それは即ち、真正面からアーチャーを打ち破る以外にはあの英霊を打倒する手段がないということ。

加えて、アーチャーは自前で魔力を調達できる。マスターに頼らざるを得ない他のサーヴァントと違って、自分で自由に戦えるアーチャーは、それだけで大きな戦略上の優位を持っている。これで記憶さえ十全なら、本当にとんでもないサーヴァントになっていただろう。

「でも、サーヴァントだって言うなら、どんなヤツでも令呪には逆らえないわ。一画くらいなら抵抗できる英霊もいるでしょうけど、二画・三画と重ねられた命令に逆らえるサーヴァントなんかいない。

シロウ。あのサーヴァントと契約を切りたくないなら、『死ね』って命じるだけで良いわ。それが嫌なら、どうでもいい命令に令呪を全部使っちゃいなさい。マスターじゃなくなったシロウは見逃してあげるし、残ったサーヴァントはわたしがバーサーカーで倒してあげる」

イリヤの誘い。その甘美な誘惑は、夜の教会で言峰が口にしたものと同じだった。

あの神父は言っていた。強力な魔術である令呪を、無駄に使い潰すなどもつてのほか



だと。しかしそれは、あくまで自分の命があつてこそそのもの。ただ持っているだけで、いつ殺されてもおかしくないような鬼札など、早々に捨ててしまいたい。

アーチャーの、あの人ならざる目を思い出す。正直、俺にはあいつが何を考えているのかすら分からない。必要以外には口を開かず、ただ全てを見下すように振舞うアーチャーは、今まで出会つてきた他のサーヴァントたちと比べても、明らかに何かが異質だった。

「どうするの、シロウ？」

真剣な表情のまま、俺を見上げてくるイリヤ。その瞳に映るのは、純粹に俺の身を案じる色だけだ。

きっと——この少女は、マスターとしての打算ではなく、足元すら覚束ないような俺を本当に心配してくれているのだろう。出会つて間もない少女にすら案じられるほどに、今の俺の状況は危ういのだ。

「……………俺は」

戦う覚悟は決めた。けどそれは、サーヴァントという脅威に対抗する、それと同位の存在がいたからだ。それが味方ですらなく、意思一つで俺を切り捨てるような悪鬼だったのなら……俺は、一体どうするべきなのか。

知っていた。アーチャーの冷酷な紅い瞳を、俺は確かに知っていた。

しかし、俺はどこかで油断していた。マスターなしではサーヴァントは生きられない以上、あの男は俺を本当に殺せるのだろうかという疑念があった。あいつが受肉しているという事実を深く考えもせず、一步間違えば奈落へ落ちる崖っ縁を、俺は呑気に彷徨っていたのだ。

正義の味方として戦う？ いや、それ以前の問題だ。何かをする前に殺されてしまったのでは、それには何の価値もない。それでは、十年前に俺が助けられた意味がない。

——どうする。

この少女の言うとおおり、アーチャーとの契約を切るか。

そうすれば少なくとも、俺は得体の知れない英霊から逃れることができる。確かにマスターやサーヴァントから狙われる可能性は残っているが、言峰教会に逃げ込むという選択肢もある。背中から刺されるよりは、その方が幾分かマシだろう。

聖杯戦争がいつまで続くのかは知らないが、そんなに長期間に及ぶものではないだろう。それさえ終わってしまえば、後はまたいつもの日常が戻って来る。マスターもサーヴァントも、戦いも殺し合いもない、貴重で得難い平穏が。

そもそも、俺は望んで戦っているわけではない。ここでサーヴァントと契約を切っても、元の形に戻るだけで、何一つ問題など——。

「……………俺は」

——違う。

思い出せ。十年前を思い出せ。

あの災禍、あの災厄。あれこそは、その平凡な生活を奪った地獄だ。その苦痛を齎す者こそサーヴァント。その天災を招く物こそ聖杯。

いつもの日常に戻れる？ 否。戦いから逃げたところで、災害からは逃れられない。人の力では、天災には勝ち目がない。

俺は、失ったのではなかったか。あの劫火の中で、全てを失い全てを捨てた。聖杯戦争になど何の関わりもなかったにも関わらず、ただそこに居合わせただけで何もかもを失くしてしまった。

大勢の人が焼け死んだ。大勢の人が悲しんだ。そんな理不尽に背を向けて、俺はこの先胸を張って生きていけるのか。

それに……先程見た光景。間桐慎二が、俺の友人が、聖杯戦争に関わっている。もしそれが本当なら……それに目を背けるわけにはいかない。

学校に通う人間、その全てを巻き込むという結果。アレを仕掛けたのは、他ならぬ慎二かもしれないのだ。もしアイツが間違った凶行に及ぼうとしているのなら、それを止めるのが友人の役目だろう。

そして、俺が戦いを放棄するということは、学校に仕掛けられた結界に目を瞑るとい

うことでもある。そうなっては、また大勢の人が死ぬ。既に一度、数多の人間を見殺しにしていると言うのに——一度ならず二度までも、俺は他人を見捨てる選択をするのか。

「——」  
空を見上げる。天の支配者は、いつの間にか太陽から月へと移り変わっていた。

平等に降り注ぐ月光を受け、一度だけ深呼吸する。夜の冷たい空気に、揺らいでいた心が凍っていく。

幾度となく出したはずの、結論。無知故に、感情だけで決めた教会の時とは違う。俺は今度こそ……自分に降り掛かる危険を知って、改めて。自らの進む道を、命を賭して駆ける道を、自分自身の手で選ぼうとしていた。

長い瞬きの後、目を開く。視界に映るのは、俺の答えを待つ少女の顔。それをまっすぐに見つめて、俺は。

「——戦う。俺はもう、十年前のような出来事を起こさせるわけにはいかない」

そう、あの夜と同じ答えを口にした。

「……どうして？ そんなに聖杯が欲しいの、シロウ？」

俺の答えを、或いは予測していたのだろうか。驚くこともなく、イリヤは静かに問いかけてくる。

「いいや。俺は聖杯なんかに興味はない。

——けど。この争いを放っておけば、多くの人が巻き込まれる。それを黙って見過ごすなんて、俺にはできない」

「でも、シロウのサーヴァントは、シロウを見捨てるかもしれないんだよ。……いいえ、見捨てるだけならまだいい。最悪、殺されてしまうかもしれない。

聖杯が欲しいわけでもないのに、他人のために戦うなんて、死ぬのが怖くないの？」  
死ぬのが怖くないのか、か。それは、他でもないアーチャー本人にも問われたことだ。ならば、その答えは決まっている。この答えを違えた時点で、衛宮士郎は衛宮士郎でなくなってしまうのだから。

「怖いさ。でも——自分のせいで、他人が死ぬ事の方がよっぽど怖い」

自分が傷つくのはまだいい。けど、他人が傷つくのは許せない。

正義の味方は、困っている人や、傷ついた人を助ける英雄ヒーローだから。だったら、こんな恐怖で立ち止まっちゃいられない。

「それにな。あいつ、そんなに悪いヤツじゃないと思う。記憶はないって言うし、偉そうだし、我儘放題だけどさ。理由もなく、俺を殺すようには思えなかった。

何となく、だけどさ——あいつ、ホントは凄いヤツじゃないかって、時々そう思うんだ」

傲岸不遜な、黄金のサーヴァント。

あの英雄は確かに、衛宮士郎を助けてくれた。何かしらの思惑があったにせよ、アーチャーは俺の意図せぬ召喚に応え、ランサーを撃退し、バーサーカーと戦ってくれたのだ。

……それに。見捨てると決めたのなら、あいつは初めから俺を助けてなんかいないだろう。もしそうなら、最初に力不足だと判った時点で、或いは、セイバーを助ける為にバーサーカーに突っ込むという選択をした時点で、あいつは俺を切り捨てていたはずなのだ。

なのに、あいつはそうしなかった。俺を試すように真意を聞き出し、呆れ、嘲りながらも、俺のサーヴァントとして戦うと、アーチャーはそう宣言した。

それだけではない。わかりにくいのが、アーチャーは時折俺に助言らしき言葉すらかけてくる。俺を見限っているなら、何故そんなことをしなければならぬのか。

アーチャーは、常に冷たい正論しか口にしない。それがどれだけ上から目線であれ、あいつの言葉はあいつなりに筋が通っている。あいつが俺を見捨てるときがあったとすれば、それは——俺がどうしようもなく、道を違えた時だろう。

俺の答えに、見開かれた少女の瞳。イリヤの紅い目は、愚かな決断をした俺を責め立てるようだ。

「凄いつて……あれはわたしのバーサーカーだけじゃなく、セイバーにだって敵わないようなサーヴァントなんだよ？ どうしてそんなヤツに肩入れするの、シロウ？」

イリヤの問いに、苦笑する。

確かに、俺の言っていることはおかしいのだろう。理屈の上では、アーチャーは危険なサーヴァントなのだ。

——だけど。

「やっぱり、あいつは俺が呼び出したサーヴァントだしさ。マスターの俺が信じてやらなかったら、他に誰が信じるって言うんだ？」

それに……裏切られるとか、見捨てられるとか言うけどさ。それって、何もサーヴァントに限った話じゃないだろ。例えば、俺は料理に包丁を使うけど、あれだつてちよつと間違えば手や足を切っちゃうかもしれない。

こんな言い方は嫌なだけだし……イリヤたちにとっては、サーヴァントは『武器』なんだろ？ だつたら、使い方を間違えたら、持ち主が傷つくのは当たり前じゃないか」

包丁に限らず、それは俺がやっていた弓道だつて同じだ。仲間や道具を信じていることができないヤツや、正しく接することができないヤツに、結果が付いてくるわけがない。

自分から歩み寄ることもせず「裏切られるかもしれない」と怯えるなんて、それこそお門違いな話だ。

理論だけで、理屈だけで突き詰めれば、そんなものに意味なんてないのだろう。けどこれは、物差しなんかで測れるものじゃない。

常に合理的な魔術師にとっては、俺の決断は理解できないだろう。でも、それでもいい。この道は俺が、衛宮士郎が選んだ道なのだから。誰に理解されなくとも……俺は、自分の選んだ道が間違つてないと信じている。

「記憶を失くしてるだけで、本当のあいつはとんでもない英霊かもしれないだろう？なら、そんな強い『武器』を手放すなんてことはできない。

情けないけど、俺は一人じゃ聖杯戦争なんかできっこない。だったら、自分のサーヴァントを信じなくちゃな。そもそも——あいつは『武器』なんかじゃなくて、聖杯戦争の『相棒』<sup>パートナー</sup>なんだからさ」

そう口にした途端。胸の中にあつたモヤモヤは、綺麗に消えてなくなつた。

イリヤの言葉で揺らいでいた決意が、自分の言葉で改めて固まる。ほう、と息を吐いて、令呪の宿る手を握り締める。

「——だからごめん、イリヤ。俺は、この戦いを降りる事はできない」

本心から、頭を下げる。



俺を心配してくれた少女を、俺は真つ向から裏切ることになったのだ。それは即ち、彼女の敵であるマスターであり続けると、そう宣言したのに等しい。

だから——怒り出すかと、そう思ったのに。

今にも泣き出しそうな笑顔で……イリヤは、優しい声を紡ぎ出した。

「——そう。シロウは、わたしの敵になるんだね」

そう言う。前触れもなく唐突に、イリヤがベンチから立ち上がる。明確な拒絶を示すその後ろ姿に、俺は何も言えず座り込んだまま。

「いいわ。今日はもう帰るけど、戦うって言うのなら、わたしが相手になってあげる。

だってわたしは——キリツグとシロウを殺すために、この街に来たんだから」

最後に、そんな事を言い残して。

味方として手を差し伸べてくれた少女は、敵として公園から立ち去った。

\*\*\*

「ク——はは、ふははははははは！　この我を『武器』と称するとは、礼儀を知らぬにもほどがある！」

人影の絶えた家。その中に、高らかに響く笑声があつた。

家の主は未だ帰らず、家に住む者も戻る気配を見せない。故に、此処に在るのは一人だけ。廊下に座り込み、ライダーズーツに身を包んだ、金髪の青年のみ。

一体何が可笑しいのか。腹を抱えて大笑するアーチャーは、何度も手を打ち鳴らす。笑みと言えは嘲笑しか見せぬこの青年が、かくも楽しげに笑うなど、見る者が見れば瞳目する光景だろう。

笑いを堪える様子すら見せず、アーチャーは声を響かせる。何の憚りも見せぬその様子は、心底からこの英霊が愉しんでいるのだと伺わせる。

「だが許そう。器の卑小さを弁えず、身の程を越えた願望を懐く者。それがどれ程愚かであれ、希少なモノには価値がある。」

何せ、我のマスター足る雑種だ。せめて、その程度の不遜さがなければな——！  
くつくつと笑うアーチャー。目の前には誰もおらず、闇に沈んだ庭には虫の姿すら見当たらない。この青年の興を惹くモノは、何一つとして存在しない。否——そもそもアーチャーは、目を開けてさえいない。

だと言うのに、何故この英霊は笑っているのか。他者が見れば不気味さすら感じるだろうその秘密は、マスターとサーヴァントの關係にあった。

彼の感覚器官に映し出されているのは、遠く離れた地の光景。住宅街の中に取り残された、寂れた公園。それはまぎれもなく、彼のマスターである衛宮士郎が今日にしてい

るもの。

——感覚共有。

魔術師マスターと使い魔サージェントの間に繋がれた、魔力の経路。それを通じて、一方の契約者と視覚や聴覚を共有する、魔術の中でも汎用性の高いもの。

しばしば魔術師は、己の使い魔を通じて遠方の光景を覗き見、或いは彼方の音を直に聞くことができる。その理由こそが、今アーチャーが行使している能力だ。

今のアーチャーは、魔術を使うことはできない。しかし、蛙や鳥なら兎も角として、知性を持つアーチャーには、魔力の経路を辿るなど造作もない。マスターの感覚を共有する程度、何の苦勞もなくこなしてみせよう。

この魔術は、双方の同意が得られなければ行使できないという欠点も持つ。だがその難点は、衛宮士郎とアーチャーの関係に限って意味を持たなかった。

衛宮士郎は、殆ど素人同然の魔術師だ。魔術に対する抵抗力は弱く、防御魔術すら持ち合わせていない。多少力のある魔術師ならば、容易く手玉に取れるだろう。

アーチャーが何ら問題なく感覚共有の能力を使えるのも、マスターの未熟さが原因だ。おそらくあの少年は、自らの感覚に干渉されているという自覚さえあるまい。

当然、アーチャーはそんな事実を伝えるつもりはない。また、マスターに自らの感覚を共有させるつもりもない。自分が他者の感覚を使うのは勝手だが、他者が自らの感覚

を使うなど断じて許さぬというのが、唯我独尊なこの英霊の矜持だった。

「この聖杯戦争とやら、下らぬ遊戯には違いないが——存外に、愉しめる喜劇に化けるやもしれぬな」

笑みを深める黄金のサーヴァント。彼が脳裏に描くのは、今まで出会った人間たち。この英霊が最も興味を向けているのはセイバーだが、その他の人物にも無関心というわけではない。

セイバーのマスターである凛という少女も中々に面白そうではあるし、この家に来る女たちも並大抵の人間ではない。少なくとも、この男がある程度の不敬を許しているという時点で、彼女らに対する関心の程が伺い知れよう。

そして、今この瞬間……マスターである、衛宮士郎に対する興味も湧いた。凡百の雑種なら早々に切り捨てる所存だったが、アレは並の人間ではない。いや、その能力こそ十人並みだが、根底にあるモノが違い過ぎる。一般人らしく表層を取り繕っているようだが、その程度の虚構、真紅の慧眼が見通せぬ道理がない。

呼び出されて早々に、記憶を思い出せぬという致命的な問題。通常のサーヴァントなら、いや、普通の人間ならば誰もが戸惑うその異常すら、この英霊にとっては瑣事の一言で片が付く。アーチャーにとっての問題は、自身の記憶ではなかった。

他のサーヴァントと違って、彼には目的意識が希薄だ。記憶を取り戻せるなら取り戻

したいとは思うが、聖杯戦争自体への興味はない。願いを叶えるというその評判すら、アーチャーは碌に信じていなかった。

だが、呼び出されてしまったからには仕方がない。自ら『座』に戻るほど酔狂ではない以上、現世での娯楽探索は彼にとって最優先される事項であり、楽しみを見出せぬことは最大の問題でもあった。

しかし、早々簡単に愉悅の種が見つかるはずもない。そこでアーチャーが目を付けたのは、彼を取り巻く人間たちだった。

「我を『武器』呼ばわりしただけでなく、あまつさえ『相棒』パートナーなどと抜かしたか。ハ、つくづく身の程を弁えぬ雑種よな」

中でも、意図せず彼の主となった衛宮士郎。自らを縛る鎖となる、マスターという存在自体がアーチャーにとっては許し難いもの。己を愉しませる価値を持たないのなら、何の躊躇いもなく斬り捨てるつもりだった。自身の肉体を持つ以上、アーチャーにはマスターなど寄生虫でしかないのだから。

せめてもの慈悲と、自分は味方ではないと忠告してやった。にも関わらず——衛宮士郎は、この英霊の想像を容易く越えてみせた。

何の能力も持たない分際で、戦うと決意したのもさることながら、敵を助ける為に自ら死地に飛び込む異常な在り方。

己が置かれた状況すらも解らぬ愚昧かと思えば、並の人間以上に確固たる信念を宿したその魂。

そして、その肉体に秘められた希少な物体。埋め込まれているソレは、この英霊をして瞠目させる程の価値のモノ。

加えて——今その口で紡いだ、アーチャーを信じるという理由。確かに青臭く、幼く、矛盾したものはあるが、だからこそ面白い。ここまで歪な存在は、世界広しといえそうはいまいと断言できる。

故に、アーチャーは興味を持った。鑑賞するだけだったはずの対象を、初めて己が眼で吟味した。

その結果——アーチャーは、衛宮士郎は自身の愉悅に成り得るといふ確信を懐いた。それは、果たしてどのような偶然か。

一つ歯車が違っていれば、この英霊は己がマスターに何の興味も湧かなかつたに違いない。路傍の石と同様に、気にする価値もないと捨て置いたことだろう。

或いは、立ち位置が異なっていれば。このサーヴァントは、容赦なくあの少年を倒しただろう。人としての歪さは、時として嫌悪感すら感じさせるものになるのだから。

それとも、そもそも出会うことすらなかつたかもしれない。如何な決意を固めようと、衛宮士郎は余りに未熟。幸運が味方せねば、この時点で斃されていても不思議では

ない。

有り得ぬはずの確率。起こり得ぬはずの奇跡。それを無自覚に引き当てた衛宮士郎は、間違いなく幸運な人間だろう。少なくとも、アーチャーはそうだと確信している。どんな要素が作用したにせよ、それを引き当てるのは運に恵まれた人間なのだから。

「フン——私の契約者足らんとするならば、我を存分に愉しませてみよ。それが貴様の務めだ、衛宮士郎」

上機嫌に笑みを浮かべる、黄金の英雄。その威圧感に耐えかねたように、空の隅に残っていた太陽が沈む。

後に残されたのは、月に照らされた青年だけ。微笑の余韻を残すその瞳は、どこまでも続く夜空を見上げていた。

## 10. 揺るがぬ理想

赤い夕暮れ。太陽の残滓が、微かに大地を照らし出していた。

どこからか聞こえてくるのは、車やバイクの排気音。仕事を終え、自宅に戻ろうという人が増える時間帯なのだろう。

「

そんな中。喧騒から取り残された公園で、一人佇む。

仄暗く陰り始めた空を見上げて、静かに息を吐く。雪のように白いそれを見て、先程去っていった少女のことが思い出された。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

バーサーカーの主だという、幼い少女。謎に満ちたマスターである彼女が最後に残した言葉、それがどうしても頭から離れない。

イリヤは、俺と切嗣を殺すためにこの街に来た、と口にした。あの感情の宿らぬ瞳や、冷たく凍えるような表情には、嘘があつたとは思えない。それが真実であると仮定して——何故彼女は、俺のみならず、切嗣を殺すと宣言したのか。

俺が知る限り、切嗣とイリヤの接点はない。しかし、俺が知る切嗣の姿はたった五年



間に限ったもの。それ以前の経歴は知らないし、俺と暮らすようになってから、切嗣は何度も旅に出ていた。もしかしたら、その間に何かがあったのかもしれない。

衛宮切嗣という人は、俺にとっては命を救ってくれた恩人であり、頼りない養父であり、憧れである正義の味方だ。いつも、女の子には優しくしろと言っていた親父は……年端も行かない少女に、殺意を向けられるような行為に及んでいたとも言うのか。

「……………くそっ」

苛立ち紛れに悪態を吐く。誰も居ない公園に、無意味な声为空しく響いた。

今の俺には、何もかもが分からないことだらけだ。切嗣のこと、アーチャーのこと、イリヤのこと。知らなければならぬはずのことばかりなのに、俺は余りにも無知だ。

けれど……そんな俺にも、一つだけ分かったことがある。

あのイリヤスフィールという少女は——きつと、話せば分かってくれる人間だ。

俺を倒すのが目的なら、この公園に着いた時点でバーサーカーを呼び出せば良かったのだ。いや、サーヴァントを呼ばずとも、あの狂戦士を従えられるほどの魔術師なら俺を倒すなど容易だろう。

しかし、イリヤはそうしなかった。話をすると、言った俺を信じてくれたばかりか、俺が知らないアーチャーの危険性を教え、聖杯戦争の舞台から降りるように手まで差し伸べてくれた。昨日今日会ったばかりの、しかも敵であるマスターの俺に。

「……………」

だが、イリヤ個人の人格や思惑は別として。彼女がバーサーカーのマスターであり、立ち塞がる大きな壁であるという事実には間違いはない。如何に彼女が善良であろうと、アーチャーやセイバー、それに遠坂は、躊躇せず彼女と戦うだろう。

では——俺に、それができるのか。

戦うと、決意した。聖杯戦争を勝ち抜くと、そう決めた。しかし、俺の動機は他のマスターたちとは違う。第三者を巻き込むような、手段を選ばない外道を止める。それが、衛宮士郎の戦う理由であり……そしてそれは、イリヤと戦う理由にはならない。

どうするべきかと、逡巡する。

イリヤとは戦えない。だが、あの夜のようにバーサーカーの猛威に襲われて、無抵抗でいるなど愚かしい。

ならば……イリヤではなく、あの巨人を倒すべきなのだろう。サーヴァントが存在しなければ、マスターはただの魔術師でしかないのだから。

それがどれほど困難で迂遠な道なのかなど判っている。セイバーとアーチャー、二人がかりでも傷付けることしかできないなかった不死身の英雄。あれを敵に回すぐらいなら、そのマスターを狙う方がよほど容易い。ギリシャ神話の大英雄に、正面から立ち向かって勝とうなど、それこそ神でもなければ不可能だ。

イリヤと戦いたくないのなら、アレを倒す他ない。結局は振り出しに戻ってしまったが、やはりそれしかないのだろうか――。

螺旋のように絡み合った思考を、頭を振って横に置く。いずれ出さねばならない結論だが、今はそれより優先しなければならぬことがある。

「帰るか」

最後に一度ため息を吐き、重い腰を上げる。こんな時間になつて以上、俺以外の皆は既に帰っているだろう。これ以上遅くなつて、心配をかけるわけにはいかない。

……と。その前に、商店街に寄つて夕食の材料を買つていかないと。

帰りが遅くなつた挙句、夕食もないと知れたら、確実に藤ねえの不興を蒙る。せめて夕食だけでも揃えておかなければ、虎の暴走は防げそうにない。

何故遅くなつたのか、とも聞かれるだろうが……イリヤのことは、今は誰にも話さないでおこう。敵のマスターと出会つたのだ、遠坂たちには話しておくのが筋だろうが、それでも話したくはない。

今日のイリヤは、俺の敵じゃなかった。彼女はマスターではあるが、あの時は確かに俺の味方になってくれていた。だからこそ……その事実を、俺以外の人間に公言してはいけないだろう。

\*\*\*

「ただいまー」

買い物袋を引つ提げ、明かりのついた我が家の玄関に入る。商店街を練り歩いているうちに、すっかり辺りは暗くなってしまっていた。

「おかえりなさい、シロウ。今日は遅かったのですね」

靴を脱いだあたりで、セイバーが姿を見せる。それに答えようとして……ふと、違和感に気付いた。家から、セイバー以外の気配が感じられないのだ。

耳を<sup>そばだ</sup>敬ててみるが、話し声すら聞こえない。足元を見下ろすと、そこにあるはずの靴の数が明らかに足りていなかった。首を傾げつつ、玄関まで歩いてきたセイバーに向き直る。

「ああ、ちよつと色々あつてね。ところで……遠坂は、まだ帰ってきてないのか？」

「はい。凜は、今日は遅くなると」

「そつか。藤ねえと桜も、まだ帰ってないのか？」

そう訊ねると、セイバーの秀麗な顔が微かに憂いを帯びた。その表情で、何かがあつたのだと直感する。

「いえ、先程戻ってきたのですが……学校で弓道部の生徒が倒れたとの電話があり、二人

とも病院の方へ。シロウには、今夜は戻れない旨を伝えてほしいと」  
「な——」

取り落としそうになった買い物袋を、寸での所で掴み取る。瞬時に思い浮かべるのは、学校を覆う血の結界。まさか、あれが何らかの動きを見せたのだろうか。

……いや。もしそうなら、セイバーがここに留まっているはずがないし、遠坂もアーチャーも動くだろう。だがこのタイミングで学校の生徒が倒れたのは、果たして偶然と言えるのか。一瞬の動揺を覆い隠して、セイバーにもう一度質問する。

「セイバー。その件について、二人は何か言つてなかつたか？」

「特には。二人とも急いでいましたし、その生徒の容体が気にかかるのですが……」  
「そうか……」

セイバーと会話をしながら、居間に入り買い物袋を置く。

……と。放置されている将棋盤を見て、もう一人のサーヴァントの不在を思い出した。今の話の衝撃で頭から吹き飛んでしまっていたが、遠坂たちだけでなく、アーチャーの姿も見当たらない。四人もの人間が一度にいなくなった居間は、予想以上に閑散としている。

また酒でも漁っているのか、と台所の方を見るが、やはりそちらにも人影はない。今ここにいるのは、俺とセイバーの二人だけだ。

「アーチャーでしたら、シロウたちの学校へ向かいました。結界の様子が気になると」  
俺の疑問を感じ取ったように、セイバーが先んじて答える。その言葉の内容は、やはり予想できたものだった。

ここ数日、街を巡回しているセイバーと違い、家の中で寝転んでいるばかりだったアーチャー。だが、彼とて聖杯に招かれたサーヴァントの一人。聖杯戦争に関係しているであろう事件が身近で起きていると聞いている、やはり気になるのだろう。

「このタイミングで結界を見にいった、つてことはやっぱり……」

「ええ。その事件にはあの結界か、或いはそれを仕掛けた者が関与している可能性が高い。シロウと凜は、今日結界の基点に干渉したと聞いています。学校に潜むマスターがその動きに気付いたのなら、何らかの反応を見せてもおかしくはないでしょう」

それでは……まさか。俺たちが結界に手を出したせいで、無関係の生徒が巻き込まれたとでも言うのか。

確かに俺たちは、結界を仕掛けた犯人が何らかの動きを見せることを期待していた。だがそれは、あくまで結界に手を出した俺たちを狙ったもの。間違っても、第三者が巻き込まれるような事態は視野に入れていなかった。

いくら一般人には察知できないといっても、結界が完成する前に、下手に校内で騒ぎなどを起こしてしまえば犯人側は動きにくくなる。だからこそ、犯人は裏で動くだろう

と予測を立てていたのだが……その日の内に、一般人を巻き込むような行為に及ぶとは完全に予想外だ。

この事件が結界に関連しているというのも、今はまだ仮説の段階でしかないが……もしそうだとすれば、この犯人は本当に何も考えていない。利害が釣り合わない不可解な動きは、感情で動いているとしか思えないのだ。

——どうする。

その倒れたという生徒、或いは結界の張られた学校。その双方を確認しにいききたいという衝動に駆られる。

だが、今の時点で闇雲に動き回っても意味のない事くらい、俺にだって分かっている。生徒の所には藤ねえと桜が、学校にはアーチャーが向かった。今の俺にできることは、ここで皆の帰りを待つことだけだ。

「――」

放課後、不審な行動を取っていた慎二を思い出す。

まだ決まったわけではないが、あいつはこの事件に関わっているのだろうか。俺の友人であつたはずのあいつが、聖杯戦争と何の関わりがあるのか。

いや、そんな疑問はどうでもいい。今受け止めるべきなのは……間桐慎二が、俺の敵として立ち塞がるかもしれないというその事実だけ。

共に遊んだ友人が、一般人を手に掛ける外道となって敵に回る。それに立ち向かう覚悟なくして、俺の理想など貫けるはずがない。正義の味方とは、大勢の人を救うモノなのだから。

「……シロウ。どうかしましたか？」

突つ立つたまま考えている俺を不審に思ったのか、セイバーが訊ねてくる。その声で、ふと我に返った。

「いや、何でもない。夕食を作るから、セイバーは待つててくれ」

こくり、と頷くセイバーに背を向け、足元の重い物袋を持ち上げると台所へ向かう。

最近、こうして考え込むことが多くなった。物事について思案するのは、決して悪いことではないはずなのだが、俺の場合は考えると言うよりは悩んでいるのだ。いつまでも同じことについて悩むのは、未熟だという証拠に他ならない。

もう言い訳のできる時期は過ぎ去った。聖杯戦争に正面から向き合う以上、戦うことに臆し、悩んだままではいられない。マスターが考えるべきは『どう戦うか』であり、『何故戦うか』ではないのだから。

\*\*\*



二人だけの夕食を終えた後は、洗い物の時間だ。

藤ねえと桜は帰ってこないとのことなので、四人分の夕食を作り終えたのはいいものの……遠坂とアーチャーがいつになっても戻ってこないの、先にセイバーと二人で夕食を食べてしまったのだ。

こんな時間まで戻ってこないのが心配ではあるが、遠坂に何かあればサーヴァントであるセイバーにも伝わるらしいし、アーチャーに至っては心配する必要があるかすら怪しい。開き直って、ここはおとなしく待っているべきだろう。

……と、そんなことを考えている間に洗い物も終了。二人分の食器しかないから、洗う時間も短くて済む。

六人もの人間が揃うようになると、洗い物の手間も半端ではないので、これは我が家も食洗機というものを導入する時期かと考えていたのだが、今夜のように全員が揃わないのではその必要もないかもしれない。

食器を水切り籠に置いて、居間へと向かう。きちんと正座しているセイバーの、反対側へと俺も座る。

「……………」

「……………」

気まずい。

金髪の美少女と二人きりで座っている。そう文字だけを並べてみれば、羨ましがられる状況なのかもしれないが……何を話すでもなく、ただ黙って向かい合っているというのも居心地が悪い。

藤ねえは一人でも騒ぐ人だし、桜も家に来るようになって長いから、もう家族のようなものだ。遠坂も、以前から面識がなかったわけではない。

だが、セイバーという少女と俺は、考えてみれば接点がない。セイバーは遠坂のサーヴァントであり、俺はアーチャーのマスターだ。一時的に同盟を組んでいるだけで、本当は敵同士であるはずの関係。その相手と話すことなんて――

――待った。

他ならぬセイバー本人に、俺は訊いておかなければならないことがあったはずだ。

幸いにも、今は俺とセイバー以外には誰もいない。聞かれたくない質問をするなら、今において他にはない。

そうと決まれば覚悟も固まるもの。机の傷を眺めていた顔を上げ、セイバーの瞳をまっすぐ見つめる。

「そういえば……セイバーに訊きたいことがあったんだ」

「私に、ですか？」

無表情のまま、小首を傾げるセイバー。それに頷いて返し、話を続ける。

「アーチャーについて、教えて欲しい」

「……」  
 そう訊ねた途端に、セイバーの表情が曇る。

思い悩むように伏せられた瞳と、固く結ばれた唇。それが苦悩の証だと見て取るのは、火を見るより明らかだった。

「……」  
 だけど、こればかりは知っておかなければならない。マスターとして、自分のサーヴァントのことを何一つ知らない以上……そして、そのサーヴァント本人さえ自分のことが判らない以上、あの黄金の男について知り得る手段は、過去にaiいつを見知った者に直接訊ねる以外はない。

セイバーは、あの夜初めて会った時からアーチャーについて知っているようだった。名乗つてすらいらないにも関わらず、この少女は黄金の男を弓兵だと断定したのだ。その後も続くアーチャーへの過度の警戒心といい、セイバーがアーチャーについて何らかの情報を持っていることは疑いようもない。

「……そうですね。シロウには、話しておくべきでした」  
 眉間を寄せて、深く悩んでから。何かを決断したように、セイバーが俺へと視線を向ける。

その真剣な面持ちに、思わず背筋を伸ばしてしまう。これから語られる内容は、一言

一句たりとも聞き逃してはいけなないと、そんな予感があった。

「以前にも話したと思いますが……私が聖杯戦争に参加したのは、これが初めてではありません。前回の戦いの折、私は衛宮切嗣のサーヴァントとして召喚されました」

「——え？　今、なんて………？」

ちよつと、待て。

どうしてセイバーの口から……切嗣オヤジの名前が出てくるんだ。

「私は切嗣のサーヴァントだった、と言ったのです。私は彼と共に聖杯戦争に挑み、最後まで勝ち残りました。」

——そして。私と同様に、最後まで勝ち残ったサーヴァント。前回の戦いに於ける最後の一日、私の前に立ち塞がったのがあの黄金の英霊でした」

セイバーの口から語られた真実に、体が強張る。

切嗣がマスターであり、聖杯戦争に参加していたという事実にも驚いたが……そもそも十年前の大火災は、聖杯戦争の影響で引き起こされたものだ。魔術師だった親父があの場に居合わせていた以上、聖杯戦争に関係があったとしても何の不思議もない。

それについては、後で改めてセイバーに訊こう。今俺が知るべきなのは、自らのサーヴァントについての情報だ。

アーチャー自身が予測していたように、セイバーは前回の聖杯戦争でアーチャーと面

識があつたのだ。過去に敵対関係だったのなら、セイバーがあれだけアーチャーを警戒していた理由も領ける。

「セイバー。じゃあ、アイツの正体も知ってるのか?」

「……いえ、それが分からないのです。前回の戦いで、私と切嗣は他の全てのサーヴァントの真名と能力を把握していました。ですが、あのアーチャーに関しては、最後まで正体が掴めなかった。

英霊であるなら、誰もが持つ象徴シンボルである宝具。それが、あの英雄には存在しなかった」「え? それはおかしいだろ。だって、アーチャーは——」

ランサーとの戦い。

その後のバーサーカーとの戦い。

どちらの戦いでも、アーチャーは武器を使っていた。双剣と大弓の形状を持つ、現代では有り得ない魔力に満ちた武器。そしてランサーの魔槍すら防ぎ切った、尋常ではない硬度を誇る黄金の鎧。あれが、宝具でなくて何なのだと言うのか。

「——少し長い話になりますが、私が経験した前回の戦い。そこで見たアーチャーの姿について、話しておいた方が良くもありません。そうすれば、シロウの疑問にも答えられる」

そう言う。訥々と、セイバーは彼女が知る第四次聖杯戦争について語り始めた。

「前回の戦いで、あの英霊はアーチャーのサーヴァントとして召喚されました。最初の戦闘から、彼は堂々と姿を現していた。

——ですが。そこで彼が用いた武器は、あまりにも異常だった。私が視認しただけでも、あのサーヴァントが用いた宝具は五十を超えます」

「えっ？　ちよつと待ってくれ、セイバー。宝具っていうのは、一人の英霊につき一つ、多くても三つ程度って話じゃないのか。それが五十以上って言うのは、幾らなんでも——」

「おかしい、と。私もそう思いますが、この目で見たのですから間違いはありません。

英霊の証である宝具を、あの男は湯水のように持っている。存在しないというよりは、どれが本当の宝具なのか分からない、というべきでしょうか。あまりにも数が多すぎるため、アーチャーの真名を見破ることは最後までできませんでした」

「それって……一個の剣が分裂したとか、同じ剣が沢山あったとか、そういう物じゃなかったのか？」

「いいえ。あの英霊が用いた宝具は、その全てが異なるものでした。無論、それらが偽物であるという可能性も考えましたが、そうだとするならあの魔力量には説明がつきませんし——第一、あれが偽物ならあの英霊を打倒できるはずがありません」

信じがたい、と言わんばかりの表情でそう呟くと、セイバーは前回召喚された他の

サーヴァントについて話し出した。

——征服王イスカダール。

アレキサンダー、アレクサンドロスとも呼ばれる大英雄。歴史の授業では誰もが習う、世界に名を刻んだマケドニアの王。

前回の聖杯戦争では、その本人がライダーのクラスとして召喚されたいらしい。その知名度に違わず、彼もまた強力なサーヴァントだったという。

ライダーが用いた宝具は、元々はゼウス神殿に安置されていた戦車。だがそれとは別に、途方もない宝具を彼は隠し持っていた。

本来は悪魔や精霊が操るとされる、世界の法則を局所的に書き換える異能。魔法に最も近い魔術と謳われる、『固有結界』リアリティ・マープル。イスカダール大王は、それを最強の切り札としていた。

その固有結界の能力は、イスカダール大王が生前指揮したマケドニア軍そのものの召喚。数万を超える英<sup>サーヴァント</sup>霊の軍勢を呼び出す、評価規格外の究極宝具。

聖杯戦争に呼び出されたサーヴァントは、伝説の英霊の現身だ。それがただ一人だったとしても、どれほどの力を持つかは俺が身を以て知っている。

それを、万単位で召喚する。それがどれ程常軌を逸した脅威なのか、最早推し量ることさえできない。そんな凄まじい宝具に対抗できる者など、存在するはずもない。

例え強力なサーヴァントであつたとしても、一人一人が自分に迫る力を持つ数万の軍勢には勝ち得る道理がない。

——だが、その英霊を相手にして。傷一つ負わずに勝利したサーヴァントが、あのアーチャーだつた。

「嘘だろ——」

セイバーの話聞き終えて。俺は、ただ絶句するばかりだつた。

数え切れぬほどの宝具。

規格外のサーヴァントを、消耗すらせずに打倒する異常性。

それは……そんなものは、有り得ない。伝説の征服王を、数万の英霊を相手にして、無傷で勝てる者がいるものか。あの真名すら判らぬ、記憶を持たないサーヴァントはそこまで凄まじい英霊だということか。

「なあ、セイバー。セイバーとアーチャーは、前回最後まで勝ち残つたんだろ。じゃあ、最後に勝つたのは——」

その続きを、問おうとして。歯噛みし、俯くセイバーの姿で答えが分かつてしまった。

「——」

勝てなかつた、のか。

あのバーサーカーには一歩劣るが、セイバーの力はランサーや今のアーチャーを遙か



に上回っている。そのセイバーを以てしても、過去のアーチャーには勝利できなかった。

つまり——図らずも、数時間前に俺がイリヤに話した内容は確信を突いていたわけだ。記憶を失っていないければ、あいつは本当に途轍もないサーヴァントだったのだ。

呆然とする俺と、悄然とするセイバー。誰もが口を噤んだ居間に、重い沈黙が降りる。カチカチと響く時計の音だけが、唯一の背景音楽となっていた。

「ただいまー」

玄関から聞こえた声に、思考が中断される。一拍置いて、無造作な足音が廊下を鳴らす。

顔を上げ、音の聞こえた方に目を向ける。程なくして、ツインテールを靡かせた少女と長身の青年が姿を現した。

「ごめん、遅くなっちゃった。今帰ったわよ」

「ふん。私の帰還に対し、出迎えの一つもせぬとはどういう見だ？ 雑種めが」

ごめんごめん、と全く誠意の感じられない謝罪を見せながら部屋の一角に座り込む遠坂と、憤然と王様発言を吐き捨てながら上座に陣取るアーチャー。一応この家主は俺なのだが、どうしてこう我が家の居候は偉そうなのか。少しは遠慮というものを見せてほしい。

俺のじとつとした目にもどこ吹く風と、二人は堂々と腰を下ろしている。ため息をつく俺をどう思ったのか、空気を切り替えるようにセイバーが口を開いた。

「凜。アーチャーと一緒だったのですか？」

「ええ、ついさつきばったり会ったの。どうせ帰る場所は同じなんだから、一緒に帰ってきたってワケ」

うーん、と疲れたように伸びる遠坂。それを無然とした目で眺めるアーチャーを見て、気になっていた件を質問することにした。

「そういうえば……結界の様子を見に行つたつて聞いてたんだけど、どうだったんだ？」

「ああ、あれか。結界自体に然したる変化はない。当初の見立て通り、あと数日もすれば発動しよう。」

が——異変が無かつたかと言え、そういう訳でもなさそう。微妙だが、あの学校にはサーヴァントの気配があつた」

「……アーチャー。そいつ、誰だか分かつたのか」

「いや。私の気配を感じ取つたのか、早々に消えたようだ。だが凡百のサーヴァントにしては、私の知覚領域から離脱するのが早すぎたな。」

あれは、初めから我が来るのを察知していたか……いや、遠隔視や魔術の類ならば我が気付かぬ道理がない。となるとあの速度の持ち主は、ランサーかそれに近い敏捷性を

持つサーヴァントであろうよ」

ランサーと聞いて、あの青い槍兵の姿を思い出す。

何の抵抗もなく俺の心臓を穿ち、アーチャーの鎧を貫いた、放てば必ず敵を屠る魔槍。あの恐るべき戦士が、また学校に現れていたというのか。

高度なルーン魔術の使い手であるという、クー・フリーン。高い敏捷性を持ったサーヴァントということは……やはりあの英霊が、学校に結界を仕掛けた犯人なのだろうか。

「じゃあ、やっぱりランサーが……」

「——いいえ。あれはランサーの仕業じゃないわ」

と。俺たちの会話を聞いていた遠坂が、唐突に口を挟んできた。

「ランサーの正体がクー・フリーンなら、彼が使う魔術はルーン魔術よね。でも、学校に張られた結界はルーン魔術によるものじゃないわ。」

わたしが知らない古いルーンかとも思って、色々調べてみたんだけど……今日学校の呪刻を見て回って確信したわ。あれは、ルーン魔術とは別の神秘で括られたものよ」

「別の神秘って……ルーン魔術じゃないなら、あの結界は何で張られてるって言うんだ？」

「それが分からないのよ。というか、知ってるヤツがいたら教えてほしいくらい。あの

レベルの結界になると、もう大魔術の域を超えてるし……ひよつとすると、ホントに何かの宝具かもしれないわ、アレ」

ぐぬぬ、と悔しげに唸る遠坂。結界についての心当たりがないという事実が、プライドの高い彼女にとってはお気に召さないようだ。

セイバーも、見た目に反して負けず嫌いな気質だし……このマスターとサーヴァントは、どうやら似た者同士らしい。

遠坂曰く、召喚されるサーヴァントはマスターの性質に似通った者が多いとの事。遠坂とセイバーは、その具体例と言えるだろう。

しかし……そうだとすれば、俺とアーチャーもどこか似ているという事になる。だが、あの傲岸不遜で偉そうな男と、ただの半人前魔術師に過ぎない俺の間に共通点があるとは思えない。

ちらり、と横目でアーチャーに視線を送ると……この黄金の青年の瞳は、またしてもセイバーへと向けられていた。その眼差しに気付いていないはずもないが、セイバーの方は無視を決め込んでいる。意味の分からない視線を気にするだけ、時間の無駄だと悟っているのだろう。

「凜。あの結界がランサーの手によるものではない、というのは確かですか」

「ええ、それは間違いないわ。それ以上は分からないつてのが情けない話だけどね」

「でしたら、結界を張ったサーヴァントが絞り込めます。今我々が把握しているサーヴァントは四人。ですが、私とアーチャーはあの結界に関与はしていない。

バーサーカーに結界が構築できるとは思えませんし、疑っていたランサーの仕業でもない。とすれば、残ったサーヴァントは——」

「キャスター、ライダー、アサシンの三人ね。」

一番怪しいのはキャスターだけど、わたしは違うと思う。街中でガス漏れ事件を引き起こして、人々から魔力を集めてるヤツがキャスターよ。それなら、あれだけ広範囲に亘って事件を引き起こしてるのも、周到に痕跡を隠してるのも納得できる。戦闘力で劣るキャスターは、他のサーヴァントの注意を引きたくないはずよ。

そしてアサシンは、暗殺者のサーヴァント。人殺しが専門のヤツに、あんな結界が張れるとは思えないわ。となると——」

「下手人はライダーか。ふん——それならば、あの逃げ足の速さにも得心がいく。自身力が力不足であれ、それを乗騎によって補うのが騎乗兵ライダーだからな」

俺を抜きにして、三人の間で会話が進んでいく。結局俺が一言も発さぬ間に、結界の犯人が特定されてしまった。

怪しいのはランサーだとばかり思っていたのだが……そうではないとするならば、確かに真犯人がライダーである可能性は高いだろう。

先程のセイバーの話で俺は、前回の聖杯戦争で召喚された征服王<sup>ライダー</sup>が、どれだけ規格外の英雄だったのかを聞いている。その能力に比べれば、あの驚くべき結界もまだ現実味がある。

ランサーが魔術に秀でていたように、まだ見ぬライダーもまた魔術の心得があるのかもしれないし、或いは宝具の力で結界を構築しているのかもしれない。ともあれ、詳細は未だ見えずとも、敵のクラスだけでも特定できたというのは情報不足だった俺たちにとって大きな吉報だ。

「ライダーっていうと、乗り物に乗って戦うのか？ セイバーの話だと、前回の戦いでは戦車に乗ったライダーがいたっていうけど……」

「そ。戦車に限らず、戦艦とか魔獣とか。ひよつとしたら、飛行機なんてのもあるかもしれないわね。とにかく、そんな乗り物を使って戦うのがライダーのサーヴァントよ」

「乗り物、か……」

む、と顎に手を当てる。相手がライダーであると仮定して、何かその正体に繋がるヒントがないかと考えてみるが……相手の姿も知らない現状では、これ以上の情報は得られないだろう。後は、実際に敵と対峙するのを待つだけだ。

「……手詰まりかしら。サーヴァントのクラスは特定できても、結局正体は分かってないし。マスターも出てこないんじゃないわ、手の打ちようがないわ。」

アーチャー、さつき学校に行つたつて言つてたけど、そのサーヴァント以外に何か怪しいヤツはいなかつた？」

遠坂の問いに、アーチャーが否と首を振る。が……その怪しいヤツというフレーズに、俺は一つ心当たりがあつた。

「なあ、遠坂。そういえば、学校でおまえと別れた後、妙なヤツを見たぞ」

そう口にした途端、全員の視線が俺に集中する。続きを促す三対の瞳に若干気圧されながらも、俺は放課後の出来事を語ることにした。

腑に落ちない行動を取つた慎二。

見落としていた、弓道場の呪刻。

この二つが無関係であるならそれで良い。しかし、今日あのタイミングで起こつた出来事が、聖杯戦争に何の関係もないと考えるのは虫が良すぎるだろう。

「——やつぱりそうか。まさかとは思つたけど、アイツ、マスターだったのね」

苦虫を噛み潰したような顔で、遠坂が唸る。その口ぶりは、既に慎二がマスターだと確信しているようだ。

しかし、慎二が黒だと断定するには、まだ証拠が不十分だと思う。まさか遠坂は、他に慎二が犯人だという根拠を持っているのだろうか。

「凜。何か、思い当たる節があるのですか？」

「ええ。ひよつとしたらと思つてね。今日、学校帰りに間桐の家に行つてみたの」

「……………え？ 遠坂、慎二がマスターだつて知つてたのか？」

遠坂の言葉に疑問を覚え、話を遮る。

俺の話が出るまでは、慎二についてのことは話題にも上らなかつたはずだ。だということに、これでは遠坂は初めから慎二を疑つてかかつていたようだ。そう考えるだけの理由を持つていたなら、何故俺に伝えてくれなかつたのだろう？

俺だけでなく、他の二人からも向けられる視線に、遠坂が頭の上に大きな疑問符を浮かべる。

「言つてなかつた？ 間桐の家は、元々はマキリと言つて、没落した魔術師の家系なの。

まあ、今じゃもう廃れちゃつて、今代の継承者は魔術回路も持つてないって話だけど」

「……………」。俺、聞いてないぞ」

「あれ、そうだつて。……………ごめん、忘れてたかも」

一言呟くと、明後日の方向を見て口元を抑える遠坂。まずかつたかも、というオーラが滲み出ている。

……………前から思つていたのだが、遠坂は完璧なようできてどこか抜けている部分がある。問題なのは、それがわりと致命的な事柄ばかりだということだ。結界についても、教えてくれたのは学校の中に入つてからだし。



「えつと……まあそんなわけで、慎二には魔術師としての適性がないの。だからわたしは、アイツは無関係だと考えてただけど、万が一があるかもと思って今日アイツの家を偵察してきたのよ」

「で、どうだったんだ？」

「大当たり。あの家の中に、間違いなくサーヴァントの気配があつたわ」

「な……!? そのように危険な場所に、どうして一人で行こうとしたのですか」

何故自分を連れて行かなかつたのか、と責めるセイバーの瞳。遠坂は鷹揚に手を振つて、大丈夫大丈夫、と軽く流す。

「使い魔を飛ばして、ちよつと偵察しただけだから危険はないわ。使い魔には気付かれてても、それを操つてる術者が誰かまでは向こうからは確認できないし。」

でも、あの家にサーヴァントが居るのは確実よ。どうやって慎二がマスターになったのかは知らないけど、ここまで状況証拠があれば、アイツが黒だつていうのはほぼ確実。

それにしても……使い魔越しでもサーヴァントの存在が分かるなんて、間桐の結界はお粗末よね。それとも、そんなに自信があるのかしら？」

呆れたように嘆息する遠坂。その姿は、確かに俺の目に映っている。しかし……俺は遠坂を通り越し、別な人物の姿を思い浮かべていた。

——桜。

覚悟はしていた。学校で慎二を見かけ、あの呪刻を見つけた時に、友人が敵になるかもしれないのだと心のどこかで思っていた。

それ自体も衝撃的だが、あいつが大勢の人々を巻き込もうとしているのなら止めなければならぬ。それが友人としての務めであり、正義の味方のなすべきことだ。

けれど、あいつには妹がいる。俺のよく知る彼女は……兄が何をしているのか、知っているのだろうか。

震える拳を握り締め、微かな恐怖を抑え込んで口を開く。

「——遠坂。慎二がマスターってことは……桜も、聖杯戦争に関係してるのか」

「その可能性は低いと思うわ。あの子からはマスターの気配がしないし、サーヴァントを従えてる様子もない。その点で言えば、慎二からもマスターの気配はないんだけど、あれは特例よ。多分、正規のマスターじゃないんでしょね。」

それに、あの子がマスターだったとしたら、毎日ここで顔を合わせてるのにわたしやセイバーが気付かないはずがないわ」

「そうか——それなら、良かった」

安心して、ほっと胸を撫で下ろす。

少なくとも——桜は、こんなふざけた争いには関係していなかったわけだ。あの子が、俺の後輩までもが、魔術師の戦争に巻き込まれているのだとすれば……俺は到底、

黙っていることなどできなかつた。

暗く、笑わない子だった桜は、最近はよく笑ってくれるようになった。楽しそうにしていることも多い彼女が、また以前のようになってしまうなんて許せない。あの子には、穏やかで何気ない日常こそが似合うのだから。

「――ク」

気のせいかな。俺が安堵した途端……アーチャーが、僅かに口元を吊り上げたように見えた。

咄嗟に目を向けるも、端正な容貌は無表情のまま。やはり見間違えかと、視線を遠坂の方に戻す。

「慎二がマスターだとすると、桜をこの家に来させるのもまずいかもしれないわね……まあ、それはおいおい考えるところとして。」

マスターが一人割れたからって、油断はできないわよ。わたしの知る限り、学校にはもう一人マスターが潜んでる。結界を張ったのが、そっちのマスターだつて可能性もないわけじゃないわ」

「ん？ 昨日学校で言つてたマスターって、慎二のことじゃないのか」

「違うわ。わたしも今日になるまで、アイツがマスターだつてことは知らなかつた。士郎と同じで慎二も魔力を発していないから、わたしも気付かなかつたのよ。」

でも……それとは別に、あの学校からはマスターの気配を感じるの。そっちの方も気を付けなくちゃいけないわ」

「つまり、学校には俺たち以外に二人もマスターがいるのか……厄介だな」

皆の情報を集めてみると、状況は当初の予想より混沌としていた。

俺たちは、学校にいるマスターは一人だけだと思っていた。なら、俺と遠坂が組んでいる以上、そいつを表に引きずり出すことができればこちらが優位に立てると考えていたのだ。

しかし、それとは別に慎二がマスターであることが発覚した。あいつがもう一人のマスターと関係があるのかは定かではないが、二人のマスターが潜んでいるという時点で俺たちの優位性は崩れ去る。こうなると、戦略を練り直さなければならぬ。

最優先しなければならぬのは、学校に仕掛けられた結界の解除だ。その為には、下手人のマスターかサーヴァントの撃破が必須となる。

結界を張ったサーヴァントは、ライダーである可能性が高い。だが、慎二がライダーのマスターなのか、或いはもう一人のマスターがライダーを従えているのか、それが特定出来ない以上おいそれと慎二に手出しはできない。

結局。相手が動くまで成す術がないという、最初の状態に戻ってきてしまった。

「

どうする。

今は疎遠になってしまっているが、慎二は俺の友達だ。あいつなら、話せば分かってくるのではないだろうか。

マスターであるとしても、あいつは悪いヤツじゃない。結界を張ったのが慎二だとしても、何の理由もなしに、あいつがそんな蛮行に及ぶとは思えない——。

「——士郎。まさかアンタ、慎二と話そうなんてバカなこと考えてるんじゃないでしょうね」

と。そんな思考が、遠坂の声で中断された。内心を見抜かれたことに、思わず背筋が強張る。

驚きを隠せない俺に、遠坂は冷たい瞳を向ける。いや、遠坂だけではない。アーチャーもセイバーも、愚かだと蔑むように感情の籠らぬ瞳で俺を見据えていた。

「あのね。私たちが特別なだけで、マスターっていうのはその時点で他のマスターの敵になるの。」

話をしようだなんて、ひよこひよこ行ってみなさい。向こうにとつちや、鴨が葱背負ってきたようなものじゃない。そんな甘い考えじゃ、ただ無駄死にするだけよ。

一般人なら戦いを嫌うのは良いことでしょうけど、アンタはもうマスターなの。戦う気がないのなら、生き残れないわよ」

「違う。俺は——」

諭すような遠坂の声。反射的に口を開くも……俺は、その先を続けられなかった。

一拍の間が開く。一度だけ息を吸って、考えを纏める。

時には、戦う選択も必要だ。だけど、それで誰かを傷付けたり、巻き込んだりするの  
は許せない。正義の味方は人を助ける者で、人を傷付ける者ではないのだから。

「戦いを避けてるわけじゃない。けど……それで誰かが傷つくのはイヤだ。相手がマス  
ターだとしても、話し合いの余地があるならそうした方がいいと思う」

「愚か者。自らの矛盾にも気付かぬか、雑種めが」

俺の言葉に対して、吐き捨てるような侮蔑。それが気に食わず、嘲るように俺を見下  
ろすアーチャーを真つ向から睨み付ける。

「どういう意味だ、アーチャー」

「なんだ？ 説明されねば分かんのか。貴様の信念や言動は、全てが欺瞞に満ちてい  
る。」

仮に、貴様の言う他者を傷付けぬやり方を良しとしよう。この場合、貴様がなすべき  
行為は他者に危害を加える脅威を阻止する事だ。現状では、あの薄汚い結界の破壊だろ  
うよ。その為には、術者を倒すのが手っ取り早い。

そして——シンジとか言ったか？ 貴様は、その雑種がマスターであると知ってい

る。ならば、そやつを有無を言わさず葬るべきだ。

そやつが下手人であれば良し。異なるにしても、敵が消える事に変わりはない。凡百の雑種どもに犠牲を出したくないのなら、どちらにせよマスターは始末せねばなるまい。そのシンジという雑種を屠るに、躊躇する理由などない。

だというのに、貴様は迷っている。これを矛盾と言わず何と言う」

「な——ッ」

弾丸のように、俺の心を削っていくアーチャーの言葉。それが事実であるからこそ、辛辣な言葉は衝撃となって降り注いだ。

マスターである慎二を倒せば、サーヴァントという脅威は消える。二分の一の確率で、学校に張られた結界もなくなる。人々を巻き込まないようにするためには、それが正しい道だろう。

けれど、慎二は俺の友人だ。あいつが犯人だと確定したならまだしも、その可能性も揺らいでいる。あいつを一方的に断罪し、攻撃し……あまつさえ、殺すことなどできるものか。

慎二という一を切り捨てて、大勢の人を救う。それを——友人を裏切った道を、俺は誰に誇れるというのか。

絶句する俺を、傲然と見下ろすアーチャー。二の句を告げぬ俺を詰るように、黄金の

サーヴァントは言葉を続ける。

「よもや貴様、全ての人間を救おうなどという、思い上がった戯言を抜かすのではあるまいな。」

たわけめ——何かを犠牲にせねば、何かを獲得する事は出来ん。何の代償も払わずに、全てを手に入れようという夢想は、その身を焼き滅ぼすだけだ」

現実を突き付けてくる、冷徹な紅い瞳。それに射竦められて……ふと、切嗣の言葉を思い出した。

千人を救うことはできない。ならば、百を見捨てて九百を生かそう。少数の犠牲で、多数を生かすことが、何より優れた手段なのだ——。

全てを救おうなど絵空事だと、俺にとつての正義の味方は断言した。そんなこと、俺だって知っている。誰も彼もを救うことなど、現実には叶わない。どんな奇跡があったとしても、それだけは起こり得ない。

だけど、それでも——その理想を追い続けて、皆を助けるのが正義の味方じゃないのか。もしそうなら、その在り方を曲げることなどできない。衛宮士郎は、その道を貫くと決めたのだから。

「シロウ。貴方は、誰も傷付けないために戦うと言うのですか」

俺とアーチャーのやり取りを黙って見つめていたセイバーが、静かに問いかけてく



る。迷う事なく、翡翠の瞳に肯定を返す。

それを、どう受け取ったのか。俺から視線を逸らさぬまま、二度瞬きをすると……金髪の少女は、感情を籠めた眼光を俺に向けてきた。

「貴方の信条は理解しました。ですが、その為に自分の命を投げ出すような行動を取られては困る。以前私にしたように、自分の安全を考えずに誰かを助けるような事は止めて欲しい。

単なる人助けならまだしも、サーヴァントの前に飛び出すなど自殺と同じです。サーヴァントの相手は、私やアーチャーに任せてください。サーヴァントは戦うための存在なのですから、私たちの傷を惜しむ必要はありません」

淡々とそう口にするセイバー。自分を戦うための者だと、そう言い切った冷たさに、かっとう頭に血が上った。

「つ……！ ふざけんな、女の子を傷付けさせるくらいなら、俺が自分で戦ってやる——！」

「な——!?!」

驚き、目を見開くセイバー。その姿と、あの夜の姿が重なった。

バーサーカーと戦ったあの夜、セイバーは巨人に斬り倒された。あの時の傷は、普通なら死んでいてもおかしくはない。それでもなお——苦痛に悶えながらも、セイバーは

戦いを続けようとした。血塗れになったその姿を見ていられなかったから、俺は反射的に飛び出したのだ。

俺が抱えたセイバーの体は、驚くほど軽くて。だからこそ、この騎士が一人の女の子なんだということを思い知らされた。

無力な俺を守るために戦って、そのせいで女の子が傷ついてしまうなんて許せない。そんなヤツを、正義の味方と呼べる理由がない。あの惨禍をもう一度繰り返させるくらいなら、自分が傷つく方が遥かにマシだ。

「——ほんつと、どうしようもないお人よしね。自己献身の精神も、ここまで行くと一種の異常よ。」

セイバー。士郎は本気で、貴女を傷付けさせるくらいなら自分が戦うって言うてるわ。どうしてか知らないけど、こいつの中では自分の命より他人の命の方が重い。それが、例えサーヴァントだったとしてもね。

一昨日もアーチャーが言ってたけど、士郎にお説教するだけ時間の無駄よ。もつと有益な話をした方がいいわ」

呆れ返った、とばかりに遠坂がため息を吐く。馬鹿につける薬はないのよね、というぼやきも一緒に聞こえてきた。

遠坂が口を閉じると、居間には静寂が訪れる。黙って状況を眺めているアーチャーと

遠坂を余所に、何事か思案していたセイバーは、やがて一度頷くと伏せていた顔を上げた。

「——分かりました。他人を助ける為なら、相手がサーヴァントであつても戦うと、シロウはそう言うのですね」

「ああ」

「どうしても考えを曲げないのなら、一つ条件があります。時間の許す限り、シロウには剣の鍛錬を受けてもらう。そうすれば、貴方が生き残れる確率も上がるでしょうし——それに、サーヴァントの力という現実をより深く知ってもらえるでしょう」

それは、つまり。

「セイバーが、俺を鍛えてくれるってことか？」

「はい。シロウには、鍛錬を通して戦いの現実を学んでもらう。そうすれば、貴方の考えも変わるでしょう」

剣の訓練、か……。

セイバーに鍛えてもらえるからといって、一日や二日で何かができるとは思えないが、戦いを知っておくことで、これから先サーヴァント戦に臨んだ時も少しはマシになれるだろう。

ランサーやバーサーカーに、何も出来ずにただ殺されるようでは、誰かを助けること

など叶うはずもない。だが、心構えや覚悟があるのとないのでは、結果もまた違ってくる。

サーヴァントに勝とう、などという思い上がりがあるわけではない。でも、少しでも剣を扱えるようになれば、俺にも生き残る可能性が見えてくるのではないだろうか。

「ふーん……じゃあ、わたしは士郎の魔術の訓練をするわね。強化もろくにできない、つていうのは問題だし」

いいコト思いついた、という笑顔を見せる遠坂。しかし、自信に溢れる遠坂を目の当たりにすると、何故か不安が拭えない。

そんな俺を置き去りにして、遠坂とセイバーは話を進めていく。いつの間にか、明日の朝から俺の鍛錬が始まる計画になっていた。

明日からどんな目に遭わされるのか、あまり考えたくもない。この展開を愉しむように、うつすらと笑みを浮かべたアーチャーは、マスターを助けてくれるような気は更々ないようだし。

「……………なんでさ」

はあ、と深いため息を吐く。俺のことについて喋っているはずなのに、何故本人は蚊帳の外にいるのか。

今夜得られた結論は、人間、時には諦めも肝心という真理だった――。

\*\*\*

「おい、言峰。ありやあ一体どういう事だ」

深夜。静謐さのみがあるべき空間に、似合わぬ粗野な声が響く。

丘の上。死者たちが眠る、墓地の側に聳える教会。闇と影に包まれた場所で、唯一の光源が此処だった。

仄暗い部屋の中、不機嫌さを漂わせて瘦身の男が立っている。その細められた瞳は、椅子に腰掛け背を見せる人影に向けられていた。

何かの作業に集中しているのか、人影は振り返らない。微かに聞こえるカリカリという音は、紙に文字を刻むペンの音。ややしばらくして、待ちかねた男が舌打ちすると、報告書を書いていた人影は今初めて気づいたとも言おうように腕の動きを止めた。

「ほう。一体何の事だ、ランサー」

「とぼけんな。テメエ、あの『影』について知ってやがるんだろうが」

槍兵の誰何。隠し立てなど許さぬというその氣迫を受けて、机に向かう神父はようやく後ろを振り返った。

「おまえが何を見たのかは知らぬが、私が与えられた任務は聖杯戦争の監督だ。それ

外の事件については管轄外だと言っておこう」

「ハッ、狸が。テメエが今書いてる報告書とやらも、大方アレについてのモンだろう。

どうにも気になったんでな、今日一日街を見回ってきたんだが……ここ最近の人攫い、あいつがその元凶じゃねえか。しかも、日に日に人数は増えていつてやがる。

分かってんのか言峰。このままじゃ、この街は無になる。そうなりや、聖杯戦争どころの話じゃねえだろ」

その眼光に殺気すら纏わせるランサーと、無表情のまま淀んだ目を向ける言峰神父。その組み合わせは、本来有り得ぬはずの異常だった。

本人が口にした通り、言峰綺礼の役職は第五次聖杯戦争の監督だ。魔術師たちの闘争が世間へ露呈するのを防止し、最低限の枠組みを設け、聖杯戦争という儀式を円滑に運営するのが務め。

であるならば、その監督役がサーヴァントと共に居る事自体がおかしい。中立であるべき監督役は、どの陣営にも与せず、あらゆるマスターとサーヴァントから距離を置くはずの存在。当然、この事態は偶然に生じたものではなく……言峰綺礼の思惑によって、意図的に引き起こされたものだった。

そもそもランサーは、歴とした魔術師に召喚されたサーヴァントである。彼女こそは、魔術協会の執行者にして、英霊に迫る戦闘能力を持つ規格外。そのマスターの名は、

バゼット・フラガ・マクレミッツという。

——ところが。ランサーが目を離れた隙に、惨劇は起こった。

彼のマスターにとって、旧知の仲だという教会の神父。その男に騙され、ランサーの主は令呪の刻まれた腕を斬り落とされた。

ランサーが気付いた時には、全てが手遅れ。自らのマスターを手にかけた男を、彼は令呪の力によって新たな主と仰がねばならぬ羽目に陥った。

以来、ランサーは言峰綺礼のサーヴァントとして使役されている。仮にも監督役を謳うこの男が、何を企んでいるのかは定かではないが、マスターを裏切った人間の望みなど聞きたいとも思わない。命令にこそ従えど、ランサーはこの神父に対して一片の忠誠心も持ち合わせてはいなかった。

「フ——腐つても英霊ということか。戦い以外には興味のない男と思っていたが、中々どうして気が回る」

座ったまま、皮肉げに自らのサーヴァントを見上げる神父。その揶揄に、ランサーの顔が不快感に染まる。

「韜晦すんのもその程度にしておけ。あれが巻き込むのは一般人だけだと思うか？ マスターもサーヴァントも、あれにとつちや関係はねえ。あのバケモン——事もあろうに、このオレを喰おうとしやがった」

昨晚、ランサーを襲った謎の影。

公園より撤退した後、あの影が只ならぬ存在であると判断したランサーは、根城である教会には戻らず街中を探索していた。

街を隈なく探せば、影の足跡は容易に見つかった。一度邂逅した以上、この男が敵の気配を見誤るはずもない。隠蔽する気さえ感じられぬ、無差別に残る影の残滓。その正体を知らぬ者からすれば魔力の痕跡としか感じられぬそれを、ランサーの嗅覚は鋭く嗅ぎ取っていた。

……そして。影が気配が残る全ての場所で、近頃話題の行方不明事件やガス漏れ事件が発生していたことも、少し調べればすぐにそれと判った。

「あれはな、街の人間から生命力を吸い上げている。つまり、あれは無差別に魔力を求めてやがるんだ。オレを狙ったのも、サーヴァントの持つ魔力が目的なんだろうよ。」

今はまだ大人しくしてるようだが、放っておけばすぐに被害は広まるぜ。あれが何者かは知らんが、魔術師もサーヴァントも、あれに襲われて無傷でいられるとは思えねえ」生きて帰れる気がしなかった——とまでは、ランサーは口にしなかった。

それを怯惰と誇られようとも構わない。本能的な『死』を感じさせるあの異形を前にして、生き残れる確証もなしに立ち向かう者の方が愚かだろう。

ランサーとて、相手が人型であれば如何様にも手段はある。彼の持つ魔槍は、心臓を



持つ全ての生命に対して絶対的な天敵。例え死徒であろうとも、その力の前には朽ち果てる。

魔獣、魔物の類だろうと、恐れる必要はない。ランサーは、数多の怪物を退治してのけた経験を持つ。蛇蠍魔蠍の類であろうとも、ランサーの敵には成り得ない。

しかし——そのランサーを以てしても、あれは規格外と呼ぶべき死神だった。

人ではなく、獣でもない。ランサーが知る如何なる魔性にも、あの影は該当しない。故にランサーは、あの影に対し打つ手を持たない。

何か一つの選択肢を誤れば、あの晩槍兵が生きて帰る事は叶わなかつただろう。あの影に捕らわれればどうなるかなど、想像すらしたくない。

「心配は無用だ、ランサー。その『影』とやらを使役しているのが何者であれ、よもや際限なしに人間を喰らうつもりはなからう。」

それに、この程度の被害ならば教会われわれだけでも問題なく処理出来る。前回のジル・ド・レエキヤスターに比べれば、まだこちらの方が与し易い」

——だというのに。落ち着き払うこの神父が、ランサーにはひどく癪に障った。

「言峰。まさか、あれを放っておけて言うんじゃねえだろうな」

「ふむ、分かっているなら話が早い。おまえは引き続き、他のサーヴァントを監視しておけ」

余計なことをするな、と言外に含ませた命令。抑えていた怒りを隠し切れず、ランサーが唇を噛む。

英雄である彼にとつては、一般人が巻き込まれているということ自体が不快に過ぎる。加えて、事態はそれだけに留まらない。

サーヴァントである彼を狙ったという以上、あの『影』が再びランサーの前に現れる可能性は高い。ランサーに限らず、あれが魔力を求めている以上は他のサーヴァントも標的となるだろう。そうなれば、彼の望みが叶わない。

元々クー・フリーンは、強者と戦う為に魔術師の召喚に応じた英霊だ。自身と敵手との戦いに、余計な茶々を入れられては興醒めというもの。更には、自身の戦いの舞台すらも覆そうという存在など、見過ごしておけるはずもない。

「貴様——」

「——ふふ、仲間割れかしら。マスターとサーヴァントの間柄でしょうに、随分と仲の悪いらつと」

神父へ向けて、齒軋りと共に踏み出したランサー。その瞬間、二人きりのはずの空間に第三者の声が響いた。

「——!?!」

瞬きの内に、言峰とランサーが動く。歴戦の代行者である神父と、伝説の英雄であるランサーは、不測の事態にも動じる事はない。

僧衣を翻した神父は、刀身のない剣を引き抜き、青い槍兵は、その手に魔槍を顕現させている。得体の知れぬ声の主を、敵と判じての動きだった。

「あらあら、そう警戒しないで欲しいわね。今日の私は、戦いに来たわけではないのだから」

どこからともなく響く、妖艶さに満ちた女の声。二人の戦士が警戒する中、それは徐々に姿を現した。

部屋の中央。その床より、ゆらりと湧き上がるように人影が立ち上る。霞みがかったようなその影は、やがて人の形へと外観を変えた。

紫紺のローブに身を包み、フードで顔を隠したその姿からは、細かな特徴は判らない。だがフードの下より微かに覗く口元は、フードの下に秘められた美貌の片鱗を窺わせるものだった。

女の手握られているのは、古めかしく豪華な錫杖。妖しく煌く輝きは、どこか邪なものを連想させる。

「貴様、キャスター……!」

劍呑さを宿した瞳で、ランサーが女を睨み付ける。その視線を受けて、魔女の整った唇が笑みを象った。

「貴方とは数日ぶりね、ランサー。でも残念、野卑な犬に用はなくてよ。

用があるのは——そう、その貴方。言峰綺礼、と言ったかしら？」

憤る槍兵を華麗に無視し、キャスターが言峰に向き直る。予想だにせぬ視線を受けた神父は、訝しがるように眉を擡めた。

サーヴァントが中立地帯とされるこの教会に姿を現したことも異常なら、ランサーではなく監督役である神父が目的というのも不可解だ。

ともあれ、戦意を見せない相手に此方から打って出るわけにもいかない。警戒を解かず、いつでも魔力を籠められるよう黒鍵を握り締めたまま、言峰は静かに口を開いた。

「ほう、私の客とは珍しい。普段なら、喜んで歓迎する所だが——生憎、この地はサーヴァントの手出しを許さぬ不可侵地帯と定められている。掟を破った者には、監督役としてペナルティを課さねばならないのだが」

「貴方が監督役ですって？ 笑わせないで頂戴、ランサーのマスター。貴方の信教の戒律には、『嘘を吐いてはならない』とあつたはずだけど？」

「博識だな、キャスター。我が主の教徒というわけでもなかるうに、十戒について知り及ぶとは大したものだ。

だが……残念ながら私の宗派では、その一文の前には『隣人に関して』という条件が付く。そして、この世の者ではないおまえたちが隣人の範疇に入るとは思えんがな」

「口の上手いこと。でも、その程度の詭弁で私を騙し通せるとでも思つて？」

棘どころか、毒に満ちた言葉を交わし合う言峰とキャスター。二人の口元には、歪んだ微笑が浮かんでいる。

論点のすり替えを多用した、無意味で空虚な口論。だがこの程度は前哨戦に過ぎぬのだと、双方とも理解している。キャスターの狙いはその先であり、言峰とてこの状況を打開するためのきっかけを望んでいる。それぞれの頭脳では、異なる謀略が展開されていた。

唯一ランサーだけが、この二人から離れた場所で佇んでいる。しかし彼とてサーヴァント、無策に立ち尽くしていたわけではない。目の前に立つキャスターに対し、即座に槍を振るえるよう慎重に間合いを計っていた。

「——さて、本題に入りましょうか」

ランサーの殺気に気付かぬはずもあるまいに、余裕綽々といった態度でキャスターが告げる。その雰囲気に応じるように、言峰は黒鍵を下ろしてみせた。

明言こそせずとも、それは会話に応じようという意思表示。それを見た魔女は、思惑通りと笑みを深める。残るランサーも、主の命が下らぬ以上は自ら動くつもりはなかつ

た。

聴衆の注目が、自らに集まったのを確信し。キャスターは、悠然と美しい唇を開いた。「単刀直入に言うわ——私と、手を組まないかしら？」

\*\*\*

——ここに、戦局は移り変わる。

七人の役者が揃った以上、演じられるのは喜劇か悲劇か。

常ならば、その帰趨は明白だ。舞台上に上った演者は、己が欲望の為に他の演者を蹴落とし滅ぼす。時には誰かと手を組み、時には誰かを裏切つて。最後の一人が残るまで、その狂宴は終わらない。

だが、此度の舞台は既に別物。限りなく本物に近いものの、そこに歪みが生じたならば、それは既に完全とは呼べぬ。元が完璧であればあるほど、僅かな罅は大きな傷へと広がっていく。広がり続けたその傷は、果たして何処へ向かうのか。

淀み蠢く数多の大望。集い揃った幾多の英霊。それらは何へ至るのか——今はまだ、誰も知らない。

## 11. 突き付けられる矛盾

「もう大変だったのよ、士郎……」

いつもの朝。食事の用意を終え、皆で食事を始めた頃、おっとり刀で駆けつけてきた藤ねえは開口一番にそう騒ぎ出した。

一体何が大変なのか、と訊こうとするも、来襲した虎は席に座るや否や猛烈な勢いでご飯を食べ出したので、しばらく待たされることになる。

皆がちらちらと視線を送る中、あつという間に茶碗一杯の米を平らげた藤ねえは、間髪入れずにお代わりを要求すると、ようやく次の言葉を口にした。

「昨日、弓道部の子が倒れたって話で、桜ちゃんとお見舞いに行つてたんだけどね。それがなんと、美綴さんだったのよ」

「あいつが……?」

美綴綾子。

弓道部の主将であり、竹を割ったような性格の美人だ。以前弓道部に属していた時の縁から、俺の友人となった人物でもある。様々な武道を嗜んでおり、およそ病気や事故とは縁のないヤツなのだ……あいつが倒れたというのは、尋常な話ではない。

「それで、大丈夫だったのか」

「んー……それがどうも、あんまり大丈夫じゃないみたい。お医者さんは、栄養失調か何かだろうって言うんだけど、美綴さんに限ってそんなことあるわけじゃないじゃない？」

異常はないって話なんだけど、美綴さんの意識は戻らないままだから、そのまま入院だって。昨日は一日付き添ってただけど、大丈夫だからって言われて追い出されちゃったのよ。美綴さんは心配だし、これから職員会議だし、忙しくて食事も喉を通らないわ！」

と言いつつ、二杯目のご飯もぺろりと完食する虎。ずずず、と味噌汁を飲み干すその姿の何処を見れば、そんな言葉が出てくるのだろうか。

……って、そうじゃない。美綴の容体について、もう少し情報を訊いておかないと。あいつの状態が心配なのは勿論だが、俺たちが結界に干渉した日に倒れたばかりか、異常はないのに意識不明という普通では考えにくい事態。これが、栄養失調などという言葉で片付けられるわけがない。

横目でちらりと遠坂の様子を伺う。案の定、こちらの話に聞き耳を立てているようで、箸の動きが止まっていた。

「なあ、藤ねえ。美綴が倒れたって言うてるけど、あいつ、学校で倒れてたのか？」

「えっと、帰り道の途中で倒れたみたい。道端に倒れてたのを通りかかった人を見つけ



てくれて、救急車を呼んでくれたんだって。誰かに襲われたのかと思っただけど、外傷はないみたいだから、ちよつとは安心したんだけどね。

士郎も気を付けなさいよ。ただでさえ士郎はバイトしてるんだから、いつの間にか疲れが溜まってバタリ、なんてことにならないようにね」

食事を終えたせいか、少し真面目な顔になると教育者らしいことを言う藤ねえ。内容が内容だけに茶化す気にもなれず、無言でそれに頷く。

「桜ちゃんも、遠坂さんも気を付けてね。最近うちの学校でも体調崩す子多いし、時期的にも風邪やインフルエンザが増えてくる頃だから」

真剣な表情のまま、藤ねえは横に並んだ二人にも声を掛ける。……今日の藤ねえはどうも真つ当な教師のように見えるのだが、何か悪い物でも食べたのだろうか？

はて、と首を傾げる俺を余所に、桜と遠坂は素直に返事をしている。藤ねえの前だからなのか、いつものように遠坂は猫被りモードだ。それに対して、桜の方は元気がない。弓道部を辞めた俺と違って、桜は現役のままだ。親しくしている主将が倒れたというのだから、優しい性格の桜が落ち込むのは当然だろう。

「……………」

心配になり、桜の方に目線を送る。美綴の事がショックだったのか、今日は口数も少なく、時折ぼーっとしていようだ。

学校の結界も確かめたいし、美綴の安否も気になるし、桜も心配だ。色々なことが一度に起こりすぎて、何を優先すればいいのか判断がつかない。

どうしたものか、とつい二人のサーヴァントに目を向けるが……既に食事を終え、何かを考え込んでいるアーチャーと、黙々と食事を続けるセイバーの姿が飛び込んでくるだけだ。あまり当てにはできないだろう。

……と、卵焼きを咀嚼しながら思索していると、朝食を食べ終えた藤ねえが唐突に立ち上がった。

「あ、もうこんな時間じゃない！ 士郎、わたし先に行くから、後の事はよろしくね」  
そう言うが早い、脱兎の如く居間から走り去っていく藤ねえ。

「おう、気を付けろよー」

後ろ姿に向けて声を掛けるも、次の瞬間には玄関の扉が閉まる音。動くを決めた藤ねえの動作が異常に素早いのはいつものことなので、肩を竦めて眼前の食事に向き直る。

手元を確認すると、茶碗にはまだ半分ほど白米が残っていた。しかし……物騒な話を聞いていたせい、先ほどまでであった食欲は綺麗に消えてしまっていた。

\*\*\*

「それじゃお先に失礼しますね、先輩」

藤ねえが去った後。特に弾む話もなく、俺たちは早々と朝食を終えてしまった。

洗い物に多少時間が掛かってしまったが、皿の量が多い分手伝つてくれる人手も多いので、予想していたほどの手間ではなかった。……約一名、ふんぞり返つていただけの金ぴかは除くが。

我が家の朝食は早いので、洗い物の時間を差し引いても登校時間にはまだ余裕がある。いつもならその間、俺は家の仕事やら何やらを片づけ、桜は朝練に出るため早々に学校へ向かうのだが――。

「あれ。部活は一時中止だつて聞いてたけど、朝練はあるのか？」

ぺこり、と玄関で頭を下げる桜を見て。その違和感に、微かに疑問を抱いた。

「はい。放課後の部活は禁止になっちゃいましたけど、朝練はまだ大丈夫みたいです。

昨日あんなことがあつたばかりですし、本当はお休みにした方がいいんですけど……他の部員の方たちにお伝えしなきゃいけないこともあるので、今日は頑張つてきますっ」

気合の入った表情で、ぐつと腕を握り締める桜。だが……それは誰が見ても、明らかに無理をしていると分かるほどに痛々しいものだった。

主将の美綴は入院中だが、他の部員たちはその事実を知らない。昨夜は藤ねえも桜

も、他の部員に連絡を入れる暇はなかったはずだし、電話口で一々状況を説明するわけにもいかない。なら、朝練のために集まったところで、直接説明するのが手っ取り早いだろう。

しかし……あの弓道場には、結界の基点がある。今すぐに発動するものではないが、あれはただ存在しているだけでも空気を悪くする。できれば桜を、あの場所に行かせたくはない。

それを言うなら、結界が張られている学校そのものに行かせたくはないのだが……流石に、そこまでするのは無理というものか。

けれど、何も知らない桜に魔術絡みの内容は話せないし、無理に引き留めることもできない。藤ねえが職員会議に顔を出している以上、事情を知らない弓道部員たちに説明をするのは桜の役目だからだ。

どうすれば桜を危険な目に遭わせなくて済むのかと、内心で煩悶する。桜には、何も知らないままで平穩無事に過ごして欲しいのだが――。

「……ああ。でも、今日は仕方ないにしても、明日からは朝練もほどほどにな。あの美綴も倒れたんだ、桜まで倒れられたら困る」

「――そうですね。具合の悪い人も多いみたいですし、しばらくはその方がいいかもしれません」

しょんぼり、と落ち込む桜。部活を日々の楽しみにしていただけに、それが削られるというのは嬉しい話ではないだろう。

「それじゃ改めて、お先に失礼しますね。先輩も、お体には気を付けてください」

どんな言葉を掛けるべきか、俺が決めあぐねている間に桜は再び頭を下げる。その動きはやはり鈍く、本調子からは程遠いのだと感じさせる。

励ますべき言葉を持ち合わせぬ俺に踵を返すと、後輩は静かに学校へと向かっていった。

「——ふうん。あの子も大変ね」

と。いつの間にやら、音もなく俺の後ろに立っていた遠坂が、閉ざされた扉に向けて一言呟いた。

「綾子は倒れたって言うし、慎二は役に立たないでしょうから、あの子の仕事も増えるわよ。ホント、あの子まで倒れなきゃいいんだけど……」

「……なあ、遠坂。美綴の件って、やっぱり結果に関係があると思うか？」

桜が心配なのか、学校の方角へと視線を向ける遠坂。その独白を遮って、気になつていた事を質問する。

俺たちが結界に干渉した日に倒れ、未だ意識の戻らぬという同級生。学校ではない場所であつたとは言うが、これが単なる偶然では有り得ないと本能が告げている。

加えて、美綴は弓道部の主将。そして弓道場には、俺たちが見落としていた呪刻が存在している。その影響であいつが倒れたというのなら、あいつほど体を鍛えていない他の連中までもが倒れることになりかねない。

そしてその中には、当然桜も含まれる。未発動の結果、それも末端に過ぎない呪刻がそこまで直接的な危険を及ぼすとは考えにくい……もしあれの影響が出ているのなら、今すぐにも桜を引き戻さなければ。

「いいえ。綾子の事件は、学校の結界とは別よ。直接見てないから断言はできないけど、藤村先生の話を聞き限りだと、多分魔力を狙ったサーヴァントに襲われたんだと思う。

外傷はないのに意識が戻らない、って言ってたでしょ。それ、生命力を奪われた人間特有の症状よ。時間をかければ快復するものだけど、自然にそうなることは有り得ないわ」

「それ、本当か？ なら桜は——」

「桜なら大丈夫よ。放課後ならまだしも、人の多い朝方ならサーヴァントも襲ってこないだろうし。弓道場の呪刻も、あれ単体だけじゃ大きな影響は出ないわ。

慎二が見にいってたっていうのが気になるけど、結界を張ったのがアイツなら、尚更身内を巻き込むような真似には出ないはず。だから、あの子のことは心配いらないわ」

「……そうか。少し安心した」

妙に力強く、まるで自らに言い聞かせるかのように断言する遠坂。やけに「心配いらない」と強調していた気がするが……多分、俺が桜を心配していることを先読みして気を配ってくれたのだろう。その気遣いに感謝しつつ、今聞いた情報を整理する。

まず、結界と美綴の事件は無関係だということ。美綴が倒れていたのは下校途中の道だという話から、これは予測の範囲内だ。

次に、美綴が倒れた原因はサーヴァントによるものということ。思い返せば、街で頻発しているガス漏れ事件は、人々から魔力を奪い取っている何者かが引き起こしているという話だ。サーヴァントが魔力を糧とする以上、その手段は別段不思議ではない。

だが、それにしておかしい。俺たちは、魔力を集めているサーヴァントはキャスターであるという予測を立てていた。それが今回は、夕方とはいえ白昼堂々と人間を襲うような真似に出ている。用意周到に犯行に及び、直接的な証拠を何一つ残していないそのやり口と今回の事件はあまりに違い過ぎる。

合わない符号。成り立たない方程式。美綴を襲ったサーヴァントというのは……一体何者だ？

「——遠坂。美綴はサーヴァントに襲われた、って言ったよな。そいつ、誰だか分かるか？」

「うーん……推論の段階だけど、消去法で行けばライダーかランサーじゃないかしら。」

他の連中は、わざわざ一般人を襲うメリットがないわ」

顔を顰める遠坂に、俺も同意する。

アーチャー、セイバーでは有り得ない。理性のないバーサーカーには不可能で、キャスターならもつと上手くやるだろう。隠密行動、暗殺を得意とするアサシンの仕業でもない。

となれば、残るのはライダーかランサーになるわけだが……あの青い槍兵が、そんな卑劣な真似に及ぶだろうか。あいつの人間性など知るはずもないが、それでもあの男からは、どこか気高さのようなものが感じられたのだが――。

「なんで、人目に付くようなことをしてかしたんだ……う？」

誰が実行犯にせよ、それがどうにも腑に落ちない。

魔力を奪われているという点ではキャスターの手法、今街を騒がせているガス漏れ事件に似通っているが、今度の一件は隠蔽する気配すらない。そもそも、夕方とはいえ白昼堂々一般人を襲うなど、デメリットがあまりに多すぎる。

合理性がないからこそ、逆に犯人の狙いが読めない。まさか何も考えずに動いているわけではないし、この杜撰さはまるで、犯行が露呈すること自体が目的とも言おうような……。

「――あ」



待て。俺は昨日、ここではない場所で、全く同じ考えを持たなかったか。

あれは、学校の弓道場。煌々と輝く呪刻を前にして、俺はこの結論に至ったはずだ。そしてその直前、あの場所に入入りしていたのは誰だったか……？

「……………まさか」

そうだ。そう考えれば筋が通る。

弓道部の部室にあった呪刻。弓道部の主将である美綴。同じく弓道部に所属し、不審な行動を見せた慎二。

共通する単語は、「弓道部」。認めたくはないが、慎二が犯人だとすれば状況証拠はそれなりに揃っている。

だが、目的は何だ。狙いは何だ。肝心のそれが、全く見えてこない。神秘が世間に露見するような行為の、どこにメリツトがあると言うのか。

皆には止められたが、やはり慎二に直接聞くしかないのだろうか。あいつが犯人なのか、そうではないのか、少なくともそれだけは確かめておきたい。友人を疑わなければならないというこの状況は、気分が良いものではない。

「土郎。何を考えてるのか想像は付くけど、あんまり深く考えすぎるんじゃないわよ」

ほん、と肩を叩かれる。床に注いでいた視線を上げると、険しい表情で俺を見つめる遠坂と目が合った。

距離の近さにドキリとして、思わず後ずさる。そんな俺を意に介さず、腰に手を当てると少女は整った唇を開いた。

「今わたしたちが集中しなくちやいけないのは、学校の結界のこと。なんでもかんでも首を突っ込んでたら、体が幾つあっても足りないわよ。」

気持ちは分かるけど、必要以上のことには手を出さないように。いいわね？」

それは。友人よりも目的を優先とする、魔術師としての冷たい声だった。

「……ああ。分かってる」

学校の結界と、美綴の事件の間に関連性はない。なら、これ以上その事件について悩むのは無駄だ。隠蔽がなされていないという点を除けば、一般人から魔力を奪うという行為に及んでいるサーヴァントは他にもいる。この一件だけをそこまで特別視する理由はない。それは知っている。理解している。

しかし、美綴は俺の友人だ。俺は友人が誰かに襲われて、それを見過ごしておけるほど冷淡な性格はしていない。

「」

遠坂から視線を逸らし、静かに拳を握りしめる。放つてはおけないが、今の俺にはどうすることもできない。俺が成すべきなのは——倒すべき『敵』と相対する、その覚悟を決めること。

「——そういえば。士郎、アンタセイバーに呼ばれてたんじやないの?」

「あ……やっべ、忘れてた。サンキュ、遠坂」

悩んでいたせいとか、その声を聞くまですっかり忘れていた。軽く遠坂に礼を述べて、靄のような迷いを振り払う。

昨日の夜、セイバーが俺を鍛えてくれるという話が出た。それで早速、登校までの短い時間だが、俺はセイバーと長らく使われていなかった道場で鍛錬を積む段取りになっていたのだ。

誰かに危害を加える奴を止める、関係のない人が巻き込まれてしまった時には、迷わず助ける。それが、俺が聖杯戦争に参加した理由だ。

だが、所詮俺はただの人間に過ぎない。何の力も持たない凡人が、英霊や魔術師に太刀打ちできるはずがない。けれど、それでも……英雄として歴史に名を刻んだセイバーの訓練を受ければ、未熟な俺でも、誰かを助けることができるかもしれないのだ。

そんな希望を抱きながら、廊下を抜け、ここ数年使っていない道場に向かう。掃除を欠かしたことはないが、実際にあそこを使ったのは大分昔の話だ。まだ切嗣が生きていた頃、俺はあそこで僅かながら格闘技を教えてもらっていた。あの時の経験や心構えは、今も俺の中に生きている。なら、これからのセイバーとの手合せも、きっと俺の糧になってくれるだろう——。

「悪いセイバー、遅くなった」

立て付けの悪い扉を開けつつ、中で待っているであろうセイバーに声を掛ける。直後——飛び込んできた光景に、俺は目を奪われた。

「  
」  
板張りの床。その隅に、美しい少女が座っていた。

清楚な白のブラウスに青のスカート。幻想のように整った美貌と閉ざされた瞳は夢げな印象を与えるが、凜とした雰囲気は少女の存在感を確固たるものにしていく。

日本の家屋には不釣り合いな、西洋人形めいた容姿でありながら、しかし何よりも周囲に調和している。それでいて埋没することのない美しさは、常人とは明らかに異なる風格を醸し出している。

そして——もう一人。金髪の美少女から数歩先、道場の反対側には聳える<sup>そび</sup>ように長身の青年が立っていた。

冬であるにも関わらず、薄手のシャツに迷彩柄……いや、蛇を模した柄のズボンという軽装。首回りに見えるネックレスや、腕輪を始めとするアクセサリーは、一見すれば軽薄な遊び人とも取れる。

だが——その気配。此処に在る存在全て、否、世界そのものすら畏怖させるのではないかという峻烈な威圧感が、男から軽薄な印象を拭い去っている。ただ立つだけで只者

ではないと確信させる、超然とした男だった。

一体何を見ているのか、こちらに背を向け腕を組む青年の表情は窺い知れない。しかしその後ろ姿には、容易に人を近づけさせぬ何かがあった。

寂れた道場に過ぎぬはずのこの空間。サーヴァントという稀人を宿したせいか、見慣れたはずのこの場所は、まるで名画のように触れがたい神聖さを持つ異界と化していた。

「……？ シロウ、桜はもう出かけたのですか？」

雰囲気に吞まれて、呆然と立ち尽くす。そんな俺を、翠の瞳が静かに見つめていた。

「ああ、今見送ってきたところ。待たせちゃったな、ごめん」

「いえ、お気になさらず。」

——では早速ですが、シロウの鍛錬を始めましょうか」

優雅な仕草で立ち上がるセイバー。その挙措に目を奪われながらも……俺は、アーチャーから注意を逸らすことができなかった。

朝食の後、どこへ行ったのかと思えば、まさかこんな場所に来ていたとは。いつもの気紛れかもしれないが、この読めない男がわざわざ俺の鍛錬に立ち会うとは、何か裏があるのではないかと勘繰ってしまう。

「……ん？ 何だ雑種」

俺の視線に気付いたのか、アーチャーがこちらに振り返る。どんな仕組みになっているのか、鎧を纏う時には天を衝くように逆立っている黄金の髪は、今は整った顔を彩るように下ろされていた。

「いや、何でアーチャーがここにいるのか、と思ってさ」

「ふん？ 何故も何もあるまい。貴様が剣を振るうと聞いたのでな、サーヴァントとしてマスターの腕の程を見てやろうと思っただよ。」

——なに、今のところ貴様らの邪魔をしようという訳ではない。我はただの観客だ、気にせず存分に汗を流すがいい」

そう、思いがけず殊勝な言葉を放つと、アーチャーは壁際へ移動して再び腕を組んだ。常の通り、傲岸不遜なその態度に変わりはないが、真紅の瞳は何の感情も映し出さずにただこちらを見つめている。どうやら、本当に観戦するだけのつもりらしい。

「シロウ、これを持ってください」

アーチャーと話し終えるのを見計らっていたのか、俺がセイバーへと向き直った途端に、ずいとは何かを差し出される。反射的にそれを掴むと、硬い感触が返ってきた。これは……藤ねえがたまに持ち出してくる竹刀だ。

「あれ、いきなり竹刀を使うのか？」

「ええ。シロウは体を鍛えているようですし、基礎から学ぶ必要はないでしょう。技術

を教えようにも、聖杯戦争で戦えるほどの技量が一朝一夕で身に付くはずがありませんし、そもそも私は人に物を教えるのは苦手です。

ですので——この鍛錬は、実戦形式で行います」

「実戦形式？」

「はい。シロウには、サーヴァントの戦いがどういったものなのか、身を以て学んでもらう。それが何に繋がるのかは、自ずと理解してもらえらるでしょう——少なくとも、無茶をしようという気は起こさなくなるはずですよ」

昨夜のことをまだ根に持っているのか、半眼で俺を見てくるセイバー。うん、彼女の言いたいことは分かった。

技術というものは、ちよつとやそつと齧った程度で身に付くものではない。才能や適性があったとしても、物を言うのは長年の努力と練習だ。弓道を嗜んでいた俺も、それは身に沁みて理解している。

故に、ここで学ぶのは技術ではない。俺が習得するべきなのは、剣で打ち合うという経験であり「戦う」という行為そのもの。つまりは、習うより慣れろということだ。

「先手は譲りましょう。寸止めはなし、互いに殺すつもりで打ち合いましょう」

竹刀を両手で構えるセイバー。その雰囲気は、抜身の剣のように鋭く細く尖っている。殺すつもりというその宣言通り、手を抜くつもりはないらしい。

……ああ、上等だ。女の子とはいえ、相手はサーヴァント。圧倒的に地力で勝る相手に、手加減なんてできるはずもない。

彼我の距離は僅かに数歩分。竹刀のリーチを用いて斬りかかるにしても、必ず一步は踏み込む必要がある。重要なのは最初の一手、大上段から打ちこんでやる——！

「は——ッ！」

\*\*\*

……結論から言うと。俺は手も足も出ず、セイバーの竹刀の嵐で一方的にポコポコにされた。

最初の打ち込みは上手く行ったと思った。だが、直前まで防御の姿勢すら見せなかったセイバーが、視界から消えた次の瞬間……痛烈な衝撃と共に、俺の視界は暗転していった。

後は、その繰り返し。俺がどんな方向から斬りかかってもセイバーには掠りもせず、俺はセイバーの攻撃を見切ることすらできずに喰らいまくる。何のまぐれか、最初の一撃くらいは防げることもあったが、二撃目までは受けきれない。つまりは、抵抗すらできなかつたのだ。



そんな調子で、三十分。荒い息をつく俺に対して、セイバーは汗一つ流していない。ここまで来ると、才能や力量を超越した格の違いすら感じられる。

「——はあ、はあ、あ——くそ、もう一回だセイバー……！」

「え……まだ続けるのですか、シロウ？　これから、学校へ行くのではないのですか」

「あ——そういえばそうだった」

どうやってセイバーに一太刀浴びせるか、それを考え込んでいたせいか今日は学校だということをしつかり失念していた。それほどまでに、セイバーとの手合わせには余裕がなかったのだ。

全身から力を抜き、ふう、と大きくため息を吐く。セイバーの打ち込みを受けた腕や腹がズキズキと痛むが、普段から体を鍛えていたおかげか、そこまで気にするようなものでもなさそうだ。

鍛錬には三十分程度しか時間を割いていないのも幸いした。もし何時間もこれ続けていたら、俺は打ち身や内出血だらけで動けなくなっていたことだろう。

「はあ……全然ダメだな、こりゃ。打たれっ放しってのは情けない」

「いいえ、そんな事はありません。シロウの打ち込みは力がありましたし、筋が通っていた。鍛錬を積めば、いい戦士になれるでしょう。」

サーヴァントである私に勝てないのは仕方ありません。寧ろ、私の剣を一撃でも防

「げたことを誇るべきです」

「む……」

そう穏やかな表情で言われてしまうと、こちらとしては何も言えない。

だが、サーヴァントと人間という違いを差し引いたとしても、何も出来ずに一方的にやられつ放しというのは格好がつかない。まぐれとはいえ、何度かはセイバーの一撃を防げていたのだ。なら、次は二撃目も防ぐのが目標だな。

欲を言えば、セイバーに一発くらいは攻撃を当てたいのだが、そんなものは夢のまた夢だ。せめて、一撃で倒されない程度には自分を鍛えなければいけない。

思い切り手加減をされて、しかも訓練用の竹刀を使われてこれなのだ。これが実戦であれば、即死することなど目に見えている。これでは誰かを助けるために、サーヴァントと戦うなど絵空事に過ぎない。

「……そつか。でもまあ、てんでダメなのは事実だし。悪いけど、また夜にでも稽古つけてもらっていいかな？」

「はい。シロウは熱心なのですね」

心なしか、微かに口元を綻ばせるセイバー。先程打ち合っていた時とは打って変わって和やかな雰囲気、心臓の鼓動が跳ね上がる。女の子に微笑まれるなんて、早々慣れるものじゃない。

雑念を振り払うように、壁際に竹刀を立て掛ける。そろそろ時間になるし、今朝の鍛錬はここまでだ。

「ありがとな、セイバー。じゃ、俺はそろそろ学校に——」

「——愚か者どもが」

底冷えするような声。落ち着いたはずの空間を引き裂いたそれは、鋭く俺たちを睨み据える黄金のサーヴァントから放たれたものだった。

紛れもない侮蔑を宿したその声に、セイバーの表情が変わる。不愉快なのは俺も同じで、気付けば水を差したアーチャーを睨み返していた。

一瞬にして緊張感に満ちる道場。二対の怒りの眼差しを受けながら、不機嫌そうに口元を歪めたアーチャーは、組んでいた腕を解くとこちらに一歩踏み出した。

「笑わせるな雑種ども。滑稽な笑劇フェアルスも、ここまで来れば醜悪だ。揃いも揃って、何を履き違えているか。傍観に徹するつもりであつたが、これでは見るに堪えぬわ」

「おまえ——」

何を意図しているのかは知らないが、そんな事を言われて楽しい気分ではいらぬはずもない。だが、怒鳴りつけてやろうと開いた口は、血の色を思わせる瞳の前には無力と

化した。

こちらを嘲笑っているのかと思えば、アーチャーは真剣な瞳で俺を睨んでいる。只事ではないと直感させる眼光は、俺を黙らせるに余りあるものだった。

「小僧。貴様は何の為にこの鍛錬とやらに参加している？」

「それは……」

当然、自分の未熟さを改めるためだ。

この聖杯戦争で誰かを救いたいと言っても、今の俺には不可能に近い。サーヴァントという異形の前には、俺は蟻も同然だ。セイバーに師事し、自分を鍛えることで、せめてサーヴァントと打ち合うぐらいはできるようになれば、それが人助けに繋がるかもしれない。

そう言うのと、表情を変えないアーチャーは、冷たく俺を見下ろしたままもう一度口を開いた。

「では訊こう。貴様にとって人間を助けるとするのは、『目的』か『手段』か、どちらだ？」

「は……？ そりゃあ当然、『目的』に決まってるだろ」

「そうか。ならば何故、貴様は己の手で人間どもを助ける事に固執する？」

「え——？」

二転三転するアーチャーの質問。いつも思うが、この男の矢継ぎ早の問いはついていくだけで精一杯だ。アーチャーの脳内では全てが繋がっているのだろうか、訊ねられたこちらとしては質問の意図を理解しきれず答えあぐねる羽目になる。

口を半開きにしながら呆然とする俺を、アーチャーは凍えるような瞳で射抜く。人間離れた紅の瞳は、俺自身にすら自覚のない何かを見通しているのだろうか。

「この聖杯戦争に於いて他人を助けたいと言うならば、貴様自身が出張る必要などない。貴様の力が及ばぬのならば、サーヴァントの力を借りればよい。足りないならば余所から借用するというのは、貴様ら魔術師の常道であろう。

だというのに、貴様は頑なに自らの力で雑種どもを救おうとしている。まるで、自分が人間を救わなければならないとでも言うようにな」

容赦のないアーチャーの断言。その厳しさに、俺は今度こそ答えることができずに絶句した。

俺は、正義の味方を目指したい。俺自身の中での定義もまだ曖昧だが、少なくとも俺にとつての正義の味方は、弱者を助けるべき存在だ。そうやって助けられた存在が俺だからこそ、今度は誰かを助けられるようになろうと思つた。

しかし、結果的に他人を助けられるのなら手段を問う必要はない。何の力もない俺自身動くより、サーヴァントであるアーチャーに頼んだ方が遥かに効率がいいだろう。

では——俺はどうして、自分の力で人を助けなければならないと思ったのか？

「……………ッ」

目の前が歪む。視界が薄れる。自分の原点に立ち返ろうと考え込み……一番最初に出てきたのは、あろうことか、あの十年前の地獄だった。

ぐらり、と体が傾く。俺を見かねたのか、アーチャーにセイバーが詰め寄る光景が視界の隅を過った。

「アーチャー、貴方は——」

「黙れ。愚鈍なのは貴様も同じだ、セイバー」

自分の頬を軽く叩き、揺らいだ体を振り戻す。顔を上げると、アーチャーとセイバーが火花を散らして睨み合っていた。

「サーヴァントとマスターの役割。剣の英霊ともあろう者が、それすら解さぬとは言えない」

「ええ、当然でしょう。サーヴァントは戦う者であり、マスターは指揮する者。ですが、シロウはどうしても自分で戦いたいと言う。私もシロウに無駄死にをされては困りませんが、彼が私の説得を聞くような人間ではないというのは十分分かりました。ですから、サーヴァントの戦いというものを指南しているのです」

「たわけ、それが履き違えているというのだ」

憤然と吐き捨てるアーチャー。そこには、常日頃の蛇を思わせる笑みは浮かんでいない。この黄金の英霊は、殺意の色すら滲ませて俺とセイバーを見下ろしていた。

「よいか。その小僧が生き残る術を教えたいと言うのなら、戦闘訓練を施すのではなく、サーヴァントとの戦い方を教えるのが筋であろう。指揮官マスターとしての兵士サーヴァントの運用方法、それを叩き込む事こそが常道だ。

凡百の雑種が英雄と戦う？——世迷言も大概にしておけ。セイバーよ、雑種の思いがつた鼻をへし折るのなら初手の一戦で十分だ。本気で此奴を鍛えようと考えていたのなら、些か失望を禁じ得ぬな」

そう嘲るように言うのと、アーチャーは俺に厳しい視線を送る。

「まだ解らぬか小僧、貴様ではどう足掻こうとサーヴァントには勝てぬ。このような戯れ事に意味などない。貴様の根底に何があるかは知らぬが、人間どもをサーヴァントから救いたいと言うのなら、手段に拘る事こそ何よりの愚挙。自分が何を為すべきなのか、何を考えるべきなのか、今一度己の裡に問うがいい」

怒りよりも先に、驚きが感情を支配する。アーチャーは、ただ気に食わぬと感情のままに怒気をぶつけているのではない。侮蔑するでもなく、嘲弄するでもなく、俺とセイバーの双方に助言を試みせるとは、ますますこの男が何を考えているのかが判らなくなる。

思えば、この英霊はいつもそうだ。全てを見下し、突き放しているようでありながら、正論を口にし、こちらの背中を乱暴に押し付けてくる。まだ数日しか経っていないが、この男が叩き付けてくる正論は、それが反論の仕様もなく正しいが故に始末に負えない。

何も言い返せずに黙り込む俺。その一方、公然と自身を侮辱されたセイバーは、アーチャーに対して剣のような眼差しを向けていた。

「……貴方の言いたい事は分かりました。ですが、マスターである士郎を守る役目はサーヴァントである貴方でしょう。自ら守るでもなく、教え導くでもなく、貴方は一体何が目的でこのような事をするのですか」

「言つたであろう、この聖杯戦争とやらは私の戦いではない。故に、そんな雑種に付き合つてやる義理などない。

だがこうも見応えのない醜態を晒されては、少しは老婆心も顔を出す。私の気紛れに感謝しておけ、セイバー」

そう一方的に言い放つと、これ以上話す事はないとばかりに、出口へ向けて歩き出したアーチャー。呆氣に取られて、その後ろ姿を立ち尽くしたまま見送る。

ただ観戦していたかと思えば、嵐のように被害を撒き散らすだけ撒き散らし、さつきといなくなつてしまったサーヴァント。その行為だけを見れば、ただの乱暴な男としか思えないが……あいつの言葉には、拒絶し切れない正しさがあつた。



——何故、貴様は己の手で人間どもを助ける事に固執する？

先程のアーチャーの問い。その質問に、俺は咄嗟に答えることができなかつた。

何故つて……そんなものは、今更問われるまでもない。衛宮士郎は、『正義の味方』になりたいのだ。誰かが傷ついているなら、それを助けるのが俺の役割であり、当然のことだと受け止めてきた。それはこれからもずっと、変わるはずのないただ一つの理想。

あの月夜の晩、俺は夢を引き継いだ。自分にとつては道標となるべき光であり、あの煉獄から救い出してくれた人。その憧れの英雄の最期を、今でも覚えている——衛宮切嗣は俺の答えに、安心したと笑つて逝つたのだ。

そう。それこそが、衛宮士郎の理想の始まり。炎の地獄で全てを失い、何も助けられなかつたからこそ、その美しい夢に憧れた。

——人間を助けるというのは、『目的』か『手段』か、どちらだ？

正義の味方。それは、人々を助けるための存在。できるだけ多くの命を助けるために、俺は今まで頑張つてきた。

……しかし、今。多数の命を助けたいのなら、手段を問うなという現実を突き付けられた。

前にも言われた。命を確実に救いたいのなら、少数の命を見捨てるべきだと。全ての人間を救おうなど、思い上がった戯言だと。

知っている。そんなことは理解している。けど、それでも——それでも俺は、多くの人を助けたい。現実には負けてしまったその時、この理想は崩れ去る。それだけは、絶対にあつてはならないことだ。

「シロウ、大丈夫ですか？」

セイバーに声を掛けられるまで。俺は、血の滲むほどに拳を握り締めていた——。

\*\*\*

「何を為すべきか、何を考えるべきか、か……」

改めて、アーチャーから言われた言葉を反芻する。あいつは、一体俺に何を伝えたかったのか。

人間はサーヴァントに勝てない。それは覆せない道理だ。蟻が象に踏まれるように、蛙が蛇に吞まれるように。そこには絶望的なまでの差が存在する。

聖杯戦争に巻き込まれた人を助けたいという願い。それを叶える為には、非道を行うマスターやサーヴァントを止める必要がある。あの英霊が言った通り、他の参加者を全て討ち果たしてしまえば俺の望みは叶う。だが……その道だけは選択できない。そうだったが最後、俺は他人を巻き込むマスター達と同列の存在になつてしまう。

「……………ふう」

昼休み。あの後味の悪い鍛錬の後、惰性で登校したはいいもの……俺は今一つ授業に集中出来ずに、ひたすらぼーっとしていた。

ふと気が付いてみれば、教室に残っている生徒の数も少なくなっている。大方、食事のために移動していったのだろう。そういえば、昼食を食べることも今の今まで忘れていた。

弁当は朝食のついでに作ってしまったので、他の生徒のように購買まで足を運ぶ必要はない。ただ、迂闊に教室で弁当を広げると、蜜に群がる虫のように男子生徒が近寄ってくるので、俺の取り分がなくなってしまうという問題が発生する。

仕方がないので、いつものように生徒会室に行こうと腰を上げる——と。その瞬間、こちらに向かつて歩いてくる友人と目が合った。

「どうした衛宮。おまえがため息とは珍しい」

くい、と眼鏡を動かし俺を見下ろしてくる男。彼こそ我らが生徒会長であり、俺の友人でもある柳洞一成だ。片腕を上げて、心配そうにこちらを見つめる目線に答える。

「ああ、最近ちよつと疲れ気味なんだ。修行不足つてやつかな」

「む、これはますます珍しい。……そうだ、生徒会室に来ないか衛宮。良い茶葉が手に入ったのでな、疲労回復には効くぞ」

「それじゃ、お言葉に甘えますか。久々にお茶も飲みたいしな」

どちらにせよ、生徒会室にはこれから行くつもりだった。よいしょ、と椅子から立ち上がって、鞆から弁当箱を回収しつつ先に歩き出した一成に着いていく。

生徒が歓談する中をすり抜け、廊下を進んでいく。その途中、見覚えのある場所を通りかかった。

——廊下の隅にこびり付いた、赤い痕。

それほど目立っていないし、ただのシミにしか見えないが、俺にははっきり分かる。ここは——俺がああ晩、一度死んだ場所だ。

あんな衝撃的な事件を、今まで失念していた自分に苦笑する。この数日で、俺を取り巻く環境は大きく変わってしまった。それこそ、見ず知らずの男に殺されかけたことが記憶に埋没する程に。

曲がりなりにも、こうして学生生活を続けているが……この学校も、今では魔窟へと変貌してしまっている。そんな中で気を抜いていた俺は、魔術師としては確かにへっばこなのだろう。警戒するべき対象である慎二が、今日も学校に姿を見せないというのも、緊張感を長続きさせなかつた原因の一つかもしれない。

張り巡らされた結界。姿を隠したマスター。一寸先は闇という状況の中、惰性で学校へと顔を出し、無防備なまま気を抜いている——なるほど。これは、危機感がないと遠

坂に叱られるわけだ。自分が殺された現場に来るまで、いかに危ない橋を渡っているかという自覚もなかったのだから。

「——よう」

ふん、と気合を入れ、先に進んでいた一成の後を追う。

確かに俺は半人前の魔術師だが、聖杯戦争の参加者になつてしまつた以上、死地で気を抜くことは許されない。未熟な意識のままに行動すれば……あの夜の血だまりが、もう一度生まれることになる。

あのサーヴァントも言つていた。何を為すべきか、何を考えるべきかを自分に問へ

と。  
遠坂と違つて、俺に優れた魔術の腕はない。アーチャーのような慧眼を持つているわけでも、セイバーのような剣技を身に付けているわけでもない。では俺には？ 俺には何がある？

遠坂は言つていた。衛宮士郎には魔力の痕跡がない——それ故に、他の者には魔術師であるとは見抜かれない。なら、俺が活かすべき点はそこだ。この隠密性を活かして、衛宮士郎は立ち回らなければならない。

アーチャーに叱咤された時、俺は何も言い返すことができなかつた。それは、衛宮士郎という人間の芯が、出会つて数日の他人にすら揺るがされる程度のものであつたから

に他ならない。

このままでは駄目だ。自分が本当は何がしたいのか、その為にはどうするべきなのか……それすら見定められない根無し草は、聖杯戦争という大波に押し流されるだけだ。

「まずは、情報を集めてみるか……」

そうと決まれば、まずは動く。元々、俺は頭がいい方じゃない。うじうじと悩んでい  
るより、やれることから始めた方がマシだろう。その過程で、何か見えてくるものもあ  
るかもしれない。

とはいえ、下手に動き回っては本末転倒だ。俺がこのこと学校へ姿を見せているの  
も、他のマスターに俺の正体を悟らせないため。聖杯戦争の最中、学校に結界が仕掛け  
られている時期に欠席する——ただそれだけでも、俺がマスターかもしれないという疑  
念を与えることに繋がる。そんなギリギリの綱渡りをしているのだ、目立つような真似  
はできない。

けど、そんな俺でも情報収集ぐらいはできるだろう。他人に疑問を抱かれない範囲  
で、という注釈がつくが……。

「……ん？ どうした衛宮。入らんのか？」

「あ、悪い悪い。それじゃ、お邪魔するよ」

背後からの俺の視線に気付いたのか、生徒会室の扉を開けた状態で一成が振り返る。

誤魔化すような笑みを浮かべ、一成の後に続いて生徒会室に入る。

都合の良いことに、生徒会室には他に誰も来ていない。これなら、俺と一成の話を他人に聞かれる心配もないだろう。出入り口から離れた机に持参した弁当を広げ、一成の他愛もない話に適当な相槌を打ちながら、それとなく一成の様子を伺う。

が、特に変わった様子は無い。まあ、変わった様子があつてもらつては困るのだが……これでは友人を疑っているようで、俺としてもあまり気分は良くない。しかし既に慎二という前例がある以上、例え友人であつても、聖杯戦争の関係者であるかどうかと疑わざるを得ない……。

可能性はほとんどないと思うが、仮に一成がマスターだった場合はボロを出す事など有り得ないだろうし、そうでなければこの時間は友人同士の世間話で終わってしまう。こちらから話題を切り出すべきか。

「なあ一成。最近、なんか変わったことはないか?」

「ん? 変わったことというと?」

「いや、最近物騒なニュースをよく聞くからさ。うちの近所でも夜中にヘンな音がしたとか、ヘンな連中が歩いてたとかいう噂があるし、一成の周りでも何か起こつてないか心配になつて」

……うん、まあ嘘は言っていない。

居候中の金ぴかサーヴァントやあかいあくまの影響か、この数日で相手の言葉や反応についていちいち考える癖がついてしまった。この言い訳も、予め用意しておいたものだ。あくまで自然な世間話の範囲のはず。

柳洞一成という人間は、この学校の生徒会長であるだけでなく、柳洞寺というお寺の息子でもある。そういった職業柄、噂や情報の類には聡いはずだ。

「ふむ……そうだな。幸い、俺の近辺で荒事が起きたという話は聞かん。変わったことと言えば、あの慎二が最近サボリ出したぐらいか」

「あー、それは俺も気になってた」

昨日、皆の情報を照合してマスターであると判断した慎二。どんなアクションを起こしてくるかと不安を抱えながら学校に来たのだが、いざ到着してみれば肝心の本人はサボリという始末。しかし、それこそが却って疑念を深める事にもなった。

慎二はあれでいて、規則を守ることに拘る。遅刻や早退など滅多にしないし、そうだとしめても病欠などの理由を学校側に連絡している。それがこのタイムミングで、連絡一切なしの完全なサボリ。これだけ状況証拠が揃っている上でこの行動、誰がどう見ても黒だろう。

一応、それとなく聞いてみるか。

「あいつ、風邪でも引いたのか？」



「さあ、俺の方では何も聞いておらん。慎二の妹の方も、心当たりはないと言うし……まあ慎二のことだ、そのうち連絡を寄越すだろう」

そう平然と言いながら、中断していた食事を再開する一成。慎二の話を振られても、全く動揺した素振りは見せなかった。……話題を変えてみるか。

「そうか。それじゃ、お寺の方も異常なしか？ 幽霊が出るとか」

「たわけ、うちの寺を勝手に幽霊屋敷にするな衛宮。」

……そういえば。幽霊ではないが、見慣れない女が最近一人増えたな」

「……女？」

「ああ、外国人の客人だな。まあ、変わったことと言えばそれぐらいだな。お山は平穩よ、善哉善哉」

そう言うと、ずずつとお茶を飲み干す一成。それに釣られて、俺も手元のお茶を口に含む。

外国人の女、か。

一昔前ならいざ知らず、現代の日本の都市では外国人を見かけることはそう珍しくはない。その例に漏れず、ここ冬木市でも外国人の姿はそこそこ見受けられる。が……この時期に、それもそう有名でもないお寺に外国人の女性が来るのだろうか？

それも、ただ寺を訪問しただけではない。『増えた』という表現は、まるでその人物が

寺に居座っているかのようだ。聖杯戦争と無関係、と片付けるには疑問が残る。

しかし……半分冗談のつもりで聞いた質問だったが、予想外の展開になってきた。もつとその話を聞きたいところのだが……これ以上質問を掘り下げては、不審に思われてしまう。とりあえずここは引き、新たな情報が舞い込んできた幸運に感謝しておこう。

「お、そろそろ時間か。教室に戻るぞ、衛宮」

立ち上がった一成の言葉に頷き、いつの間にか食べ終えていた弁当を片付ける。お茶がまだ残っているのが視界に入ったが、今はそれどころではなかった。

柳洞寺の女。考えすぎかもしれないが……この話、遠坂たちに伝えてみよう。

\*\*\*

「柳洞寺？」

夕方。美綴の件もあつてか、まだ明るいうちに藤ねえと桜は我が家から去り、居間にはいつものように俺と遠坂の二人が揃っていた。

それぞれの情報突き合わせている中、怪訝な顔で俺の言葉をオウム返ししてくる遠坂。ああ、とその声に頷く。

「一成が言うには、最近柳洞寺に外国人の女性が増えたんだってさ。これって、聖杯戦争と関係してると思うか？」

「んー……ただの偶然じゃないかしら、それ。マスターがあんな辺鄙な場所に陣取るメリットが思い浮かばないし……それにお寺に住んでる人たちにも見られてるんでしょ？ そいつがマスターなら、目立つような真似は尚更しないと思うわ」

考え込みながら、そう自分の意見を述べる遠坂。手持ち無沙汰なのか、くるくる、と右手で髪の毛を弄んでいる。

ちなみに、セイバーはまだ町内の見回り中。アーチャーは、どういう風の吹き回しなのか、また道場に足を運んでいるらしい。

「それじゃ、やつぱり俺の考えすぎか。……まあ、そりやそうか。そんなに簡単にマスターの手がかりが見つかるわけもないもんな」

「それよりも、今は慎二の方ね。あいつ、今日は学校を休んでるみたいだけど……何か企んでるのかしら？」

学校の結界。弓道場の呪刻。無断欠席した慎二。間桐家のサーヴァント。

ピースは全て揃った。間桐慎二は聖杯戦争のマスターであり、サーヴァントを従えている。結界の基点にわざわざ弓道場を選んでいることから、その犯人も慎二でないとは言い切れない。

美綴の件はただの偶然かもしれないが……それを差し引いても、慎二はあまりに怪しい点が多い。このまま見過ごしておくわけにはいかない。

「どうする？ こつちから動いてみるか？」

「むぎむぎ相手のホームグラウンドに突っ込む理由はないわね。それにあいつの性格なら、そろそろ痺れを切らして動き出す頃よ。

桜を通じて、わたしが衛宮邸（こ）に居候してるのはあいつも知ってるだろうし……どうせなら、あつちの方から仕掛けてくるのを待った方が都合がいいわ」

「……ん？ それ、どういうことだ？」

遠坂の言葉が今一つ理解出来ず、首を傾げる。話が飛躍し過ぎたと思ったのか、遠坂は一言謝ると説明を付け加えてきた。

「いくら慎二でも、桜から『衛宮くんの家に私が居候していて、怪しい外国人が二人いる』って話ぐらいいは聞いてるはずよ。私と士郎がサーヴァントと一緒に、協力関係を築いているっていうのは一発で分かる。あいつからしてみれば、ノーマークだった貴方がマスターだと分かっただけでも驚きでしょうね。

そして、あいつはまだ自分の正体が知られてないと思ってる。ここに通ってる桜に、わたしたちが何もしないのがその根拠。普通、敵マスターの身内を自分たちの拠点に出入りさせるなんて考えられないもの。その状況を逆手に取るわ」

そうか……桜がここに出入りしていることについて何も言わなかったのは、作戦のためか。どうせ遠坂のことだから、何か考えているんだろうとは思っていたが……。

ほう、と感心する俺を前にして、遠坂は秘蔵していた悪巧みの説明を始めた。

慎二としては、妹である桜が他のマスターの家にいる状況は、人質を取られているように気分が良くないはずだ。かといって、桜にこの家に入りしないう指しを出せば、俺たちは慎二の意図を勘繰る。言い訳は色々考えられるが、そこから慎二への疑惑が浮上してくる可能性もある。戦力で劣っている以上、自分だけが相手のマスターとサーヴァントを知っているはずだという情報面の優位が僅かでも崩れるような真似には及びたくないと思う。

桜を利用してこちらの情報を探る、という手については考えなくてもいいだろう。桜は後ろめたい隠し事のできる性格じゃないし、慎二としても、聖杯戦争に関わらせていない妹を今更巻き込むとは思にくい。

どうにかしたいのに、どうにもできない。プライドが高く、堪え性のない慎二のことだ、何らかの動きを見せてくるに違いない。

桜の安全を確保しながら、同時に慎二に圧力をかける。……流石は穂群原学園の才女、考えることが違う。

「うんうん、一発で伝わったみたいね。少しは考えるようになってきたじゃない、士郎」

「……おい。それ、今までは何も考えてないって言ってるようなもんじゃないか」  
「その通りだけど？」

悪びれもせず堂々とした遠坂の言葉に、ぐつと呻き声が漏れる。

確かに、考えなしにバーサーカーに突っ込んで死にかけたという前科がある以上、そう言われると反論できない。が、俺は俺なりに色々と考えているのだ。

アーチャーに何度も叱咤され、その度に現実を思い知らされてきたせいか、多少は俺も注意深くなっていた。まあ長い説明を一発で理解できたのは、遠坂の話が上手いからだろうが。

「まあ、真つ当なマスターならこつちのことは無視して、学校の結界に動きがあるまで待つでしょうね。結界を仕掛けたのが慎二なら、黙ってれば自分が有利になるんだし。そうでなかったとしても、結界が発動すればわたしたちは動かざるを得ないんだから、それまで待つのが得策よ。」

「……でもあいつの性格上、何もしないで様子見なんて有り得ないわ。学校に来なかったところを見ると、我慢できずに動き始めているみたいね」

俺たちは慎二が従えているサーヴァントが何者なのか分かっていない。いくら数ではこちらが上回っているとしても、相手の正体が判らなければ対策も立てられない。こちらから攻め込んだとしても、慎二のサーヴァントがマスター殺しに特化したアサシン

だったりしたら最悪だ。

しかし、自ら動き出した時点で、あいつは自分に有利な間桐邸で戦うという選択肢を捨てている。あいつがこれからどう動くかは未知数だが、何もせずに待つという最善の手段を選ばなかった以上、あまり賢い作戦を立てているとは思えない。俺たちを攻撃するにしても戦力で負け、罨を仕掛けるにも不意を突こうにも、慎二がマスターであるという事実を知っている以上はどちらも成り立たないのだ。

「今のところ、俺たちが有利ってことか」

そうぼそりと呟いて。いつの間にか、聖杯戦争のマスターという立ち位置を受け入れている自分に気が付いた。

慎二は友人だ。可能なら、戦いなどせず穏便に済ませたいと思う。しかし……聖杯戦争に参加しているということは、あいつも何か、譲れないものを持って戦う覚悟を決めているのだろう。

この数日、遠坂たちと過ごすうちに、俺は彼女たちの姿を嫌でも目にすることになった。記憶喪失のアーチャーはさておき、遠坂もセイバーも、聖杯戦争に対して明確な目的と覚悟を持っている。だから、彼女たちは強いのだ。目的のために、何かを犠牲にできる強さがある。

俺は戦いたくはない。しかし、遠坂やセイバーの姿勢を見た後では、彼女たちの覚悟

を否定することなどできない。それと同様に、慎二の持つているであろう覚悟や想いを否定することもできないのだ。簡単に、戦うなど言うのは傲慢だろう。

けれど……自分のために他の、関係のない人間を巻き込むような真似だけは、断じて認められない。それだけは、戦つても止めてみせる。無用な犠牲を出したくないために、俺はこの聖杯戦争という馬鹿げたゲームに挑むと決めたのだから。慎二が一連の事件の犯人だとすれば、俺が止めなきやならない。

「……ふうん。ようやく戦う覚悟を決めたみたいね」

と。意味ありげな微笑を浮かべて、遠坂が俺を見つめていた。

「ああ。戦いに抵抗がないわけじゃない。それに、慎二を倒すなんてことは考えられない。い。

けど……戦いが避けられないのなら、逃げ出すことだけはしない。あいつがふざけたことをしようとしてるなら、何とかして止める」

「及第点つてどこかしらね」

表情を苦笑へと変えた遠坂。呆れられているのかもしれないが、これが俺のギリギリの妥協点だ。

つまり、相手が一般人を巻き込む様な行為に及んでいるか、自衛のためにしか戦わない——それに、具体的な手段を提示したわけでもないのだから、他のマスターやサー



ヴァントを倒すことが前提の遠坂から見れば生温いのだろう。それでも及第点をくれたのは、遠坂なりの思いやりか。

「さてと、士郎もやる気になったようだし。折角だし、へっぽこ魔術師の指導でもしてあげましょうか」

よいしょ、と遠坂が座布団から立ち上がる。そういえば昨日、セイバーには剣術を、遠坂には魔術をそれぞれ鍛えてもらう約束をしていた。

切嗣から教わり、俺に可能な魔術はただ一つ、強化だけ。しかも、それすら満足に成功しないと来ている。いくら戦う覚悟を固めたところで、ろくに魔術も使えないようではマスターとして半人前以下だ。そんなわけで、少しでもこの状況を改善しなくてはならない。

居候させてもらっている借りを返す、と言って俺に魔術の指南をするべく昨日から何やら動いていた遠坂。自宅から何か運び込んだりしていたようだが、早速それを使うのだろうか。

「準備は済ませておいたから、わたしの部屋まで来て」

一方的に言い捨てると、遠坂は廊下の方にてくてくと歩いていつてしまった。そうすると、俺は彼女に着いていくしかないわけ。

どうにも嫌な予感がする。聖杯戦争なんてものに巻き込まれてしまったせいかな、俺の

前途は多難なようだ――。

## 12. 動き出す影

……また、夢を見ている。

夢だと分かったのは、この風景を見たことがないからだ。こんな大都市に俺は来た覚えがない。視界には時々ノイズが混じり、古いテレビ画面を見ているようだ。

そんな中、目の前にいる人影には見覚えがあった。逆立つ黄金の髪に、血の色の瞳。心なしか現実の姿よりやや若く見えるアーチャーは、悠々と街道を闊歩していた。

気温が高いのか、他に目に入る見慣れない格好の人々は皆薄着だ。それと同様にアーチャーも、下半身にのみ黄金の鎧を纏い、紅の稲妻のような紋様が刻まれた上半身を惜しげもなく晒して歩いていった。

現代であれば間違いなく職務質問されるであろうその恰好にも、この世界の人々は無頓着だ。……いや、そうではない。極力その姿を視界に入れぬよう、人々はアーチャーを避けている。彼らの表情には、等しく恐怖心と怯えが貼りついていった。災厄が来たとしても言うように、民衆は黄金の男へと道を譲る。大勢の人間がたった一人の男に怯える様は、ある意味滑稽でもあった。

そんな異常な光景を一顧だにすることなく、アーチャーは道を進んでいく。その表情

には何も浮かんでおらず、男が何を考えているのかは読み取れない。

「あれが、ギ————王だ」

恐怖と畏敬の念に満ちた民衆の声。一体何をすれば人々にこのような反応をされるのか、全く想像がつかない。

やがて大通りらしき街道を抜けると、大きな広場のような場所に出た。広場の反対側には巨大な建築物が聳え立っており、まるで神殿のようにも見える。

その建物を目にしたあたりで、アーチャーは一度足を止めた。男が軽く周囲を見渡すと、広場に屯していた人々が慌ててその視線から逃れるように離れていく。

「———か」

アーチャーが、小声で何かを呟いた。相変わらずノイズが混ざったような風景越しにしかその姿を捉えられないため、何を口にしたかまでは聞き取れない。だがその口調には、多分に嘲りが含まれていたように思えた。

再び歩き出すアーチャー。その視線は、神殿のような建築物へと向けられている。大きな広場を挟んで、そこまでの距離は随分離れているものの、それを気にする様子もなく男は進んでいく。

人々が波のように広場から去っていく中、独り悠然と歩みを進めるアーチャー。まるで、伝説のモーゼの奇跡を目にしているかのような異様さだった。

「……………」

と。王者の風格を纏わせていたアーチャーの歩みが、唐突に止まった。既に数えるほどしか人の残っておらぬ広場で……どこからともなく現れた人影が、アーチャーの進路を遮るように立ちちはだかったのだ。その光景の異常さに、広場に残っていた僅かな人々も慌てて立ち去っていく。

「——ほう」

誰も居なくなつた広大な場所。王と闖入者、二人だけになつたその空間で、アーチャーは笑みの形に口角を吊り上げて見せた。そこに宿るのは意外さへの興味か、それとも無礼者への怒りか。今この場では、少なくとも前者が勝つているように見えた。

「——?」

アーチャーが言葉を発する。またノイズに阻まれ、はつきりと聞くことは叶わなかつたが、恐らくは誰何の声を発したのだろう。その声に応じて、アーチャーに相対する人影が、徐に自らの風貌を隠すように纏つていた、布のようなものを脱ぎ捨てた。

布の下から現れたのは、端正な美貌。完成された中世的な顔立ちからは、ある種作り物めいた、人形のような印象が浮かぶ。その下に続く肢体は、簡素な衣服に包まれながらも野生の獣のようなしなやかさを感じさせ、生命力に満ち溢れている。一見して男か女かの区別がつかない、不思議な外見だった。

素顔を露にしたその人物は、若干の間観察するようにアーチャーの姿を眺めていた。一通り黄金の男の全身を見渡した辺りで、先刻のアーチャーの声に答えるようにその人物は口を開いた。

「……が、ギ……い？」

「——だ。よもや……な？」

アーチャーは微かに笑みを浮かべて、謎の人物は無表情に、お互いに言葉を交わしていく。だがその過程で、アーチャーの表情がコマ送りのように、笑みから怒りへと変化していくのが見て取れた。二人の会話は聞き取れなかったが、恐らくは黄金の男の逆鱗に触れるものだったのだろう。今や、無表情なままの謎の人物に対し、アーチャーは烈火の如き怒気を露にしていた。

我慢ならぬとも言うように、アーチャーが右足で地面を叩き付ける。大地が揺れたかのように錯覚——いや、実際に地面には亀裂が入り、それだけで男の規格外の力と憤怒を感じ取るには十分過ぎた。

「貴様が、我を諫めると？」

突然、声はつきり聞こえるようになった。既にアーチャーの怒りは殺意という域に昇華し、刺し貫くように眼前の無礼者を睨み据えていた。

「そうだ。僕の手で、君の慢心を正そう」

殺意の嵐に動じる事もなく、外見同様中世的な声で、人形めいた闖入者は頷く。その返答を聞くや否や、アーチャーの表情は嘲笑に変化し——そしてその瞬間に、戦いは始まった。

背後に手を伸ばしたかと思うと、アーチャーの手にはあの黄金の剣が握られていた。風よりも疾く、断罪の刃は謎の人物の首へと向かう。

「——、——！」

アーチャーが何かを口にする。その顔は余裕と侮蔑に満ち溢れ……一瞬後に、驚きと怒りに取って代わられた。

黄金の剣が振るわれた直後。布の下から現れた謎の人物の右手が泡立つように変化し——剣となつて、アーチャーの一撃を受け止めたのだ。

「は——！」

息もつかせず、アーチャーの攻撃を弾いた剣が振るわれる。防御に回るのは、今度はアーチャーの方だった。

見る見るうちに、戦いは激化していく。アーチャーは空間に浮かび上がる波紋のような物から、次々と武器を取り出して敵を攻撃する。もう一方の人物の方は、最初に見せたように手や足を剣や槍といった武器、或いは防具へと変化させ、アーチャーの攻撃を時には凌ぎ、また鋭い反撃を繰り出していく。どちらも人間では有り得ず、またその戦

い方も尋常ではなかった。

「おのれ——土塊風情が、我に並ぶか！」

アーチャーが槍を投擲すれば、もう一方は体を泥のように変化させ、包み込むように槍を絡め取る。また、謎の人物がその槍を投げ返せば、アーチャーは背後の空間から大盾を取り出して防いだ。

謎の人物が大槌へと変じた左手を殴り飛ばすように振るえば、アーチャーは間髪入れずに鎖鎌を振り回してその左手を切り落とす。切り離された左手は再び泥のような形状に変質し、主人の元へと戻っていく。その一瞬の隙を見逃さず、アーチャーの取り出した銃器が火を噴くと、今度は謎の人物の体が膜のように変化して弾丸を弾き返した。

片方が次々と超兵器を繰り出し、もう片方が次々と体を不可思議な形状に変異させていく。冗談のような双方の戦いに、広場の大地は捲れ上がり、空には巨大な火柱が幾本も立ち上った。

次第に、俺の見ている光景に混じるノイズが酷くなってきた。凄まじすぎる戦いの影響を受けたのか、ノイズだけでなく、段々と視界がぼやけていく。二人の戦いがどうなったのか、結局その先を見ることはできなかつた。

立ちはだかる者。突然の戦い。膨れ上がる憤怒と殺意。それらはまるで、俺と慎二の



行く末を示しているようだった。

\*\*\*

「あ、つ——ッ？」

目を開いた時、最初に感じたのは熱さだった。その違和感で、夢から覚めたのだと感じ取る。

昨日の遠坂の訓練のせいで、体中が熱を持っている。風邪やインフルエンザのような気怠さとは違うのだが、とにかく体中が本調子じゃない。昨日のアレが、結構体に響いているようだ。

昨晩は手始めに、遠坂の前で強化の魔術の実演をして見せたのだが……その成否は兎も角として、俺は事の最初から色々と間違えていたらしい。自分の体内で魔力を生成する時点で既におかしかったというのだから、遠坂が呆れる理由も納得だ。

普通の魔術師は、まず最初に魔術回路を作る。一度それが出来てしまえば、後はその回路を動かすだけでいい。遠坂は、スイッチを入れるようなものだと言っていた。

ところが俺は、毎回長い時間をかけて、それこそ命がけで魔術回路を一から作ろうとしていた。これは危険なばかりか、とんでもなく無駄な行為だそうなの。

そんなわけで、まずは魔術回路のスイッチを切り替えるための調整を受けたのだが、これがかかりきつい。それこそ何年分もの間違いをいきなり正そうとしたのだ、身体に負担がかかるのは当然だろうが……結局、昨日の魔術の訓練はそれだけで終わってしまった。

「変な夢は見るし……厄日だな」

この所、運に見放されている我が身が恨めしい。最近はやたら奇妙な夢も見られるようになったし、就寝中でも安心できないというのだろうか。

「くそ、今何時だ……？」

悪態をついて、部屋の隅にある時計に目を向ける。……時刻は七時十五分過ぎ。やばい、完全に寝過ぎした。

思考を切り替える。魔術の訓練よりも、今は優先すべきことがあるのだ。

「朝飯用意しないと……このままじゃ藤ねえが暴れ出す」

慌てて寝間着から着替えながら、この後待ち受けているであろう阿鼻叫喚の地獄を想像して嫌な気分になる。餌を貰えなかった猛獣がどうなるかなど、火を見るより明らかだ。

しかも、今うちに居るのは虎だけではない。寝坊して朝食が抜きになったなどと知られたら、遠坂やアーチャーに何を言われるか……手抜きになってしまうのは仕方ない、

一刻も早く朝食を用意するのが先決だ。

適当に着替えを済ませ、大急ぎで顔を洗い、そのまま台所目指してダツシュ。頭の中で冷蔵庫の中身と残り時間、そしてその条件下で可能な献立を計算しながら、居間に駆け込み——そのまま台所に突っ込む直前で、異変に気付いた。

「え、もう朝飯できてる？　なんでさ？」

居間に入った俺の目の前に広がっていたのは、テーブルにきちんと広げられた朝食だった。トーストに目玉焼き、レタスのサラダにソーセージ、おまけに牛乳までが用意されている。ちやうど、俺が残り時間で作ろうとしていたメニューそのものだ。何が何やら状況が処理できず、その場に立ち尽くしてしまう。

「おっそいわよー！　いつまで寝惚けてんの土郎ー！」

むしやむしや、とレタスを頬張っていた藤ねえが、右手でフォークを振り回して気炎をあげる。そこ、食器で遊ぶんじゃない。

「悪い、寝過ぎした。……これって、まさか藤ねえが料理するわけがないし、また桜が作ってくれたのか？」

「失礼ねー！　わたしだつてその気になれば朝ごはんぐらい作れるわよーっ！」

……あ、ちなみに今日は桜ちゃんはお休み。体調崩したつて、さつき連絡があつたの」  
桜が体調を崩した……？

桜への心配と同時に、聖杯戦争のことが頭を過る。まさか、慎二の指示でここへ来れなくなつたのか。美綴の件で心労も重なっているだろうし、本当に体調を崩している可能性も否定できないが……いや、それは後で改めて遠坂たちと相談すればいい。

今はまず、桜の無事を確かめないと。もし桜の身に何か起きたというなら、朝食どころの話ではない。

「それで、桜は大丈夫なのか？」

「うーん、最近色々あつたし、疲れが溜まつてたんじやないかしら。桜ちゃんが心配なのは分かるけど、そんなに深刻な顔することないわよ、士郎」

大丈夫大丈夫、と藤ねえが笑つて見せる。どうやら、顔にありありと感情が出ていたらしい。

とうるか冷静に考えてみれば、そこに座つて朝食を食べている遠坂とセイバーが落ちていている時点で、今すぐ騒ぐような状況でないのは明白だ。我ながら、急な話で冷静さを失つていたようだ。大きく息を吸つて、一旦落ち着こう。

……つてあれ。藤ねえと遠坂とセイバーの姿は見えるけど、最後の一人はどこに行つたんだ？

「——我よりも後まで寝ているのは、これで二度目だな雑種。まこと、呆れるほどの無礼さよ」

と。姿の見えなかつた最後の一人が、サラダの載つた皿を片手に、台所から姿を現した。

「……………え？」

意外さに固まる俺の横を通り過ぎ、皿をテーブルに置いたアーチャーが席に着く。その隣の席が空いていたので、自然と俺もそこに座ることになったのだが……。

「え、まさかアーチャーが朝食作つたのか？　というか料理できたのかあんだ？」

朝方見ていた夢よりも更に非現実的な光景に、思わずひそひそと小声で話しかけてしまふ。よりにもよつて、この我儘が服を着て歩いているような男が自分で手を動かすなど有り得ない。寧ろ、他人に命令して豪華な料理を持つて来させる姿の方が似合つている。確かに手のかからないレシピではあるが、それにしたつて藤ねえが作つたと言う方がまだ現実味があるだろう。

俺の疑いの眼差しを浴びたアーチャーは、不機嫌そうに鼻を鳴らしてそれに答えた。

「ふん、我にもそのつもりはなかつたのだがな。調理場には酒を取りに赴いたのだが、勝手に体が動いていた」

「それつて……ひよつとして、記憶が戻つてきてるんじゃないか？」

体が自然と動く。それは単なる条件反射であつたり、長年染み付いた習慣であつたりと様々な理由があるが、この場合前者は有り得ない。とすれば、アーチャーには料理の

習慣があつたということになるが……やはり腑に落ちない。アーチャー本人の人格と全く合致していないというのもそうだが、サーヴァントに料理ができるはずがないのだ。

この男がどんな英雄なのかは知らないが、時代錯誤なあの鎧や剣から見ると、どう考へても遙か昔の人物だ。当然ながら、昔の調理法と現代の調理法は天と地ほどに違ひし、いくら聖杯が凄くても朝食の作り方までサポートしているとは思えない。

アーチャーが常人離れた頭脳を持っているにしても、料理はチェスや将棋とは違ひう。俺は毎日料理をしているから分かるが、目玉焼き一つにしたって、素人とベテランでは明確な差異が出る。こればかりは、勘と経験が物を言う。ところが今俺の前にある目玉焼きは、半熟になるよう絶妙に調整されている。

古代の英雄が、習慣になるレベルで現代の調理法を身に着けている。この矛盾に、ひよつとすればアーチャーの正体の鍵が隠されているのではないかと思つたのだが――。

「――いや、何も思い当たらぬな。まあ些末事はどうでも良い。この我が手ずから料理を振舞つてやったのだ、身に余る大恩に感謝せよ雑種。本来ならば、感涙し平伏すが礼であろう」

……そしてこの態度である。この男が朝食を作るといふ異質さに違和感が拭えない

が、少なくとも俺様ぶりはご健在らしい。どうせならその性格も変わっていて欲しかったのだが。

「確かに驚きました。まさかアーチャーにこんな特技があつたとは……人間、一つくらいは取り得があるものなのですね」

俺たちの会話の内容を聞き取つたのか、アーチャーの王様発言に対してさらりと酷いことを口に出しているセイバー。いや、確かにセイバーの立場からすればアーチャーに対して好印象を持ちようがないだろうが、その隣に座っている遠坂までうんうんと頷いているのはいかなものか。

「うーん、でもなんか気になるのよね。この味、どつかで食べた事あるような……？」

和風の味つけが施されたレタスとキュウリのサラダを口にしながら、遠坂は微妙な表情を浮かべて首を傾げている。買い置きしていた市販のドレッシングではなく、わざわざ自分で調味料を作っているあたり確かに手が込んでいるが、遠坂は前にもこんなサラダを食べたことがあるのだろうか？どつちかといえればあいつは、豪快な中華料理が似合いそうなものだが。

「あ、忘れてた！ 今日職員会議があるんだつたわ」

そんな事を考えていると。俺とアーチャーのひそひそ話も気にせず、猛烈な勢いでトーストを食っていた藤ねえが、突然そんなことを言い出した。

「そういうのはもつと早く思い出すもんだぞ、藤ねえ。時間、ギリギリじゃないのか」

「いいよ。朝ごはんと会議だったら、朝ごはんのほうが大事だもん」

「それでも教師かよ……。いいから、会議に間に合うようにさっさと食べるよな。」

それはそうと、最近やけに職員会議多くないか？ 前は月イチぐらいでやってた気がするんだけど」

「そうなのよー。冬木は最近物騒になったし、一昨日の美綴さんの事件はあるし、生徒の無断欠席はあるして問題ばっかり。こんなに冬木が騒がしいのは十年ぶりぐらいかなあ」

十年。その言葉に、体がびくりと反応する。

聖杯戦争は、原則として秘匿されるべきものだ。しかし、仮にも戦争と名が付くような事態を引き起こしている以上、その影響がこの土地に現れないはずがない。今回だつて既に、原因不明のガス漏れ事件という形で巻き込まれる人々が出ているし、行方不明の人間が増えたという噂も聞く。学校でもこのように、職員会議を開いているようだし……。戦争の歪みは確実に、この街に、そして人々の暮らしに影響を及ぼしているのだ。その極め付けが、十年前の大火災だ。大迷惑どころの話ではない。そんなに殺し合いがしたいなら、どこかの山奥で勝手にやっついていればいい。

「さて、そんな訳で今日もわたしは先に行くわね。気を付けて学校に来るのよー」



そんな俺の心情を気にすることもなく元気に立ち上がった藤ねえは、去り際にソーセージを口に放り込みながら、だだだだつと玄関の方まで走っていく。普通、食事の直後にあれだけ動いては胃がおかしくなりそうなもののだが、虎に人間の常識は通用しないのだろう。

ガシャン、と玄関の扉が閉められると同時に、何やら怪しげな奇声と、遠ざかつていく足音が居間まで聞こえてきた。あれじゃ近所迷惑だろ……。

「……藤村先生って、いつもあんな感じなの？」

「あんな感じだ」

うむ、と重々しく頷いて見せると、はあ……と疲れたようにため息をつかれる。確かにあのテンションについていくのは大変だよな、うん。シリアスな話も、あの人にかかると長続きしないのだ。

俺も最近知ったのだが、遠坂は朝が極端に弱い。今日は俺が寝過ごしたためにまともな姿しか見えていないが、昨日の朝なんか酷かった。ゾンビのような顔つきと足取りでゆらゆらと近寄ってきたものだから、一瞬新手のサーヴァントかと身構えてしまった。

そんな訳だから、毎日付き合わされている俺はいいとして、朝に弱い遠坂は藤ねえに合わせていると疲れるだろう。尤も、それを表に出さないのが遠坂らしいところではあるが。

「まあいいわ。いつもの顔ぶれになったことだし、今後の相談でもしましょうか」

「賛成です。凜、桜の体調が悪いと大河が言っていましたか、どう思いますか」

早速話題を切り出すセイバー。意見を求められた遠坂は、右手を顎に当てると困ったような顔をして考え込んでいる。

桜の体調が本当に悪いのか、それとも慎二の指示によって来れない状況にあるのか……後者なら、慎二は何らかの意図を持っている事になる。

「そうね……あいつはわたしたちより先にこつちの内情を掴んでいたわけだから、桜をこつちに來させたくないなら、もつと前にできたはず。なのに、このタイミングで桜を休ませた。」

慎二のヤツ、昨日学校に來なかつたそうだし……本当に桜の体調が悪いんじゃないとしたら、今日あたり何か仕掛けてくるかもしれないわね」

仕掛けてくる。それは、すなわち――。

「他の雑種連中も、ようやく戦う氣になったか。我は謀略も好むが、やはり劇は佳境がなければ見応えを欠く。精々氣を引き締めておくがいい」

「言いようは氣に食わないけど、その通りね。」

……セイバー。今日は念のため、わたしたちの後から着いてきて、学校の傍の、どこか目立たない場所で待機しておいてもらえる？」

「承知しました。ですが、いざという時は令呪での召喚を。近くにサーヴァントがいれば感じ取れますが、宝具や令呪で他のサーヴァントが召喚された場合は別ですから」

数に限りはあるが、令呪を消費すればサーヴァントの空間跳躍という規格外の奇跡すら引き起こせる。セイバーの言う通り、俺もいざとなれば令呪の使用を視野に入れておいた方がいいかもしれない。

「アーチャー。アンタもセイバー——」

の近くに、と続けようとして。セイバーとアーチャーという組み合わせに、ふと思いついたものがあつて続く言葉を変えた。

「——いや。セイバーとは別の場所で、できれば学校の敷地が見渡せるような高い所に待機して貰えるか？」

「ほう？ 雑種なりに頭を使ったようだな——良いぞ、貴様の指示に従つてやろう」

俺の意図を正確に読み取つたのだろう、腕を組んだアーチャーは鷹揚に頷く。

いつもは学校の近くを巡回するようにしていたセイバーが、今日はすぐ傍で待機する。サーヴァントの気配は当然、慎二や他のマスターが連れているサーヴァントに察知されるだろうから、これは俺たちの護衛と同時に、何かを仕掛けて来ようとする敵への牽制にもなる。

そしてアーチャーの方には学校全体の見張り……即ち、不審な奴が出入りしていない

かどうかを、他マスターの索敵範囲外からチェックしてもらう。単純に学校に近いだけなら他のマスターにもバレてしまうだろうが、学校からそこそこ距離が離れていて、且つ敷地内の殆どを見下ろせるようなビルには幾つか心当たりがある。いざとなれば、その位置から敵を狙撃してもらえばいい。

サーヴァントの特性を活かした役割分担。少し前にアーチャーとセイバーから将棋のたとえ話を聞いていたおかげで、咄嗟に思いつくことができた。

「決まりね。わたしたちが囲みたいであり気分は良くないけど、喧嘩を売ってくるなら高く買い叩いてやるわ」

と宣言すると、自信満々に胸を逸らす遠坂。……こいつ、絶対いじめっ子タイプだ。

さて、と——。本当に戦いになるのかどうかは判らないが、少なくとも心構えだけはできた。後は気合を入れて、油断しないように今日一日を過ごすだけだ。

\*\*\*

放課後になるまで、結局今日は何も起こらなかった。

学校の結界も、昨日と変わらず気持ち悪いだけで異常は感じられず、サーヴァントの

気配もまったくない。間桐兄妹が欠席した以外は、ごくいつもと変わらない光景だった。

人目がある時間帯に戦いを仕掛けてくるような間抜けは流石にいないだろうが……それでも警戒しながら授業を受け、昼食を済ませ、それとなく周囲の様子を観察していた。当然ながら、授業の内容はほとんど頭に残っていない。

声を掛けてくるクラスメイトたちに別れを告げると、自分の机で寝るフリをして、人が少なくなるのを待つ。ついに部活完全禁止令が出された影響か、放課後になるとあつという間に学校からは人気がなくなる。お陰で、慣れない寝たフリを長時間続ける必要はなくなつたが、それでも念のためにしばらく机に伏せておく。

そうしていると、廊下の方からコツコツと足音が響いてきた。まさか……と思い、腕で頭部を隠しながら、警戒心を強めて廊下に目を向ける。しかし見慣れた赤い服に、すぐに警戒を解くことになつた。

「衛宮くん、大丈夫だったかしら？」

机に突つ伏して寝たふりをしたままの俺に、猫被りモードの遠坂が上品に話しかけてくる。相変わらず、本性を微塵も感じさせない言葉遣いだ。

「ああ。……それと、無理して猫を被らなくてもいいぞ。どうせ他には誰も居ないし」

「それじゃ、手はず通りに始めましょ。今のところマスターの気配は感じないけど、仕掛

けてくるならこれからよ」

俺の猫被り発言を華麗にスルーし、遠坂がくるりと振り返る。俺も立ち上がり、ロツカーから出しておいた金属の棒を手にとるとその後が続く。この棒は古くなつて壊れた筈の柄だと思うが、ないよりはマシだろう。

今朝の相談の後、学校に登校するまでの間に遠坂が追加の作戦を考え、それを昼休みのうちに打ち合わせて、放課後に早速実行することにしたのだ。セイバーには遠坂が念話を通じて連絡しておいたし、アーチャーの方には最初から俺たちが敷地内を出るまで待機していてくれと言い含めてあるから、特に心配はない。

まあ作戦とは言つても、大したことはない。日々強まりつつある結界を、もう一度呪刻を潰して妨害するだけだ。しかしこの行動自体が、敵マスターを引き付けるための計略なのだという。

前回俺たちが呪刻を潰したせいで、この結界を仕掛けた犯人は呪刻への監視を強めているだろう。となれば、再び俺たちが呪刻に干渉しようとした時、そいつが妨害に現れる可能性も十分ある。犯人が憤二か、それとも他のマスターなのかは分からないが、このこと現れた所をサーヴァント二人がかりで振り返りにしてやろうという作戦だ。

俺たちが今サーヴァントを連れていないことは、相手がサーヴァントを連れていけばすぐに分かる。もし敵マスターがそれを知れば、絶好の機会を逃そうとは思わないだろ

う。

「初撃は必ず防いで見せるわ。それさえ凌げば、後はセイバーが相手をしてくれる。そうなったら、後は校庭かどこかに引きずり出して、アーチャーの狙撃とセイバーの二人がかりで仕留めるだけよ」

そう豪語できるのは、遠坂自身が一流の魔術師だからなのだろう。俺はサーヴァントどころか魔術師に襲われても無事でいられる自信がないので、正直この件に関しては遠坂頼りだ。

「まずは屋上からかしら。ひよつとしたら呪刻が増えるかもしれないし、士郎の勘が頼りよ」

「ああ、わかってる」

今回の俺の役割は、前回同様に結界の基点となる呪刻の発見だ。とはいえ前回の探索以来、あの弓道場の呪刻以外に新たなポイントは発見できていない。他に俺の見つけない呪刻が、更に巧妙に隠されていたりすればお手上げだが……。

しかし俺の杞憂をよそに、呪刻壊しはスムーズにいった。寧ろ探索の手間がない分、前回よりもペースが早いかもしれない。襲ってくるかと警戒していた屋上でも邪魔は入らなかつたし、廊下の突き当たりのように逃げ道がないような場所でも、人の影がちらつくことさえなかつた。

「——これで大体終わり。後は士郎が前回見落としてたつていう、例の弓道場だけ？」

二階の空き教室の呪刻を壊したところで、遠坂がそう確認を取ってきた。ここまで来るにはやはり結構な時間がかかり、この巡回を始めた頃には明るかった空も、今は薄暗くなつてきている。

「そうだな、後はあそこだけだ。でもあの呪刻、どうも他の場所よりも一回り大きかったような気がするんだが……」

「もしかしたら、術者がそこを中心に結界を張つたのかもしれないわね。そうなると、ますます慎二が怪しくなつてくるわ」

確かに、状況証拠からして慎二が結界を張つた犯人である可能性は高い。あの日、呪刻が仕掛けられていた弓道場に自ら足を運んだ時点で、限りなくあいつは怪しいのだ。

けれど、あの友人がそんな馬鹿な真似をするはずがないという思いもある。確かにあいつは嫌味な態度を取ったり、妹に手を上げるような蛮行に及んだりもするが、それにしたつて今回のこれとはレベルが違う。それに俺の知る限り、慎二はもう少し思慮深い人間だつたはずだ。

黙り込む俺を余所に、遠坂は左手の魔術刻印を輝かせながら廊下に出る。

「どつちにしても、仕掛けてくるとすればその弓道場ね。行くわよ士郎、最後まで油断しな——」



「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あ!!!」

「な——?!」

校舎に轟く、絹を引き裂くような悲鳴。余りの意外さに、体全体が凍り付いた。

「悲鳴? どこから——」

「一階だ。先に行くぞ遠坂!」

鋭く周囲を見渡す遠坂を押し退け、廊下に飛び出るとそのまま駆け出す。まだ生徒が残っていたのにも驚きだが、今の悲鳴は尋常ではない。

「ちよ、ちよつと待ちなさい! 一人で先走るなんて何考えてるの!」

一瞬遅れて響く遠坂の怒声を尻目に、廊下を駆け抜けて階段へと突っ込む。直後に床を蹴る音が二倍になったところを見ると、遠坂も俺の後を追いかけてきているようだ。

踊り場をほとんど滑るようにターンし、残りの階段を無視して一階に飛び降りる。横に目線を走らせると、床に倒れ伏した生徒の姿が飛び込んできた。その姿が、つい数日前に殺されかけた自分の姿と重なる。

「くそつ……!」

非常口の近くに倒れているその女子生徒の傍に寄るが、幸いにも血が流れている様子はなかった。念のため屈み込んで確認するが、きちんと脈がある。

脈を診るついでに、意識を失って青ざめている顔を観察する。同学年では見覚えがないが、下級生だろうか？

「ちよつとどいて。全く、一人で動いたら危ないじゃないの！ この馬鹿！」

後から走ってきた遠坂が追いつく。選手交代し、女子生徒を遠坂に診せると、その表情がみるみる深刻さを増していった。

「まずい——！ 土郎、見張りお願い。このままじゃ、この子が死ぬかもしれない」

「え……？ この子、気絶してるだけじゃないのか!？」

「血がごっそり抜かれてるのよ。多分、生命力——つまり、魔力を狙ったんでしょうね。危なかったわ、このぐらいならわたしてもどうにか……」

そう言うと、遠坂はポケットから幾つかの宝石を取り出す。不幸中の幸いと言うべきか、遠坂はこの子の治療法を知っているようだ。俺なら、救急車を呼んでやることぐらいいしかできなかつただろう。

人間は、約二リットルの血液を失うと死に至るといふ。意識を失い、命の危険があるというこの子は、それに近い量の血液を奪われたのだろうか。

——待てよ。奪われた？ 一体誰に？

遠坂が切羽詰っているのが一目瞭然だからか、女子生徒の治療に奮戦する彼女とは対照的に、俺の頭の上っていた熱はどんどん冷めていく。代わって俺の背筋を襲ったのは、ぞつとするような違和感だった。

おかしい。これと酷似した状況を、俺はつい先日耳にしている。美綴綾子の昏睡事件。そうだ、あの時それを話していたのも遠坂だった。思い出せ、彼女は一体何と言っていた……？

『——魔力を狙ったサーヴァントに襲われたんだと思う。

外傷はないのに意識が戻らない、って言ってたでしょ。それ、生命力を奪われた人間特有の症状よ——』

サーヴァントに襲われた。

そうだ。この子を襲ったのは敵のサーヴァントに違いない。しかし俺たちが駆けつけるまでには、ここまで誰ともすれ違わなかった。窓や壁が破壊されている痕跡もないし、下手人が逃げたとしたらその非常口以外の経路は有り得ない。

いや、ちよつと待て。そのサーヴァントが、まだ逃げずに残っているとしたら——!?!  
「危ないー!」

その可能性に思い至った瞬間猛烈な悪寒が走り、倒れ込むように身を投げ出す。遠坂を巻き込んで床に倒れ伏した直後——俺の頭髮を削りながら、鋭利な何かが掠めていつ

た。

「きゃ——!？」

目を白黒させ、可愛らしい悲鳴を上げる遠坂を庇いながら、凶器が飛んできた非常口に目を向ける。半開きになった扉の向こうで、人影が走り去っていく気配がした。

舌打ちし、倒れ込んでいた遠坂を助け起こす。幸い、遠坂にも女子生徒にも傷一つ付いていない。

「大丈夫か、遠坂？」

「え、ええ……わたしは大丈夫。それより、今の——？」

「ああ。多分、敵のサーヴァントだ。もう逃げたみたいだけど」

「——いいえ。逃がさないわよ」

サーヴァント、という単語を聞いた瞬間。遠坂の目つきが、猛禽のそれに変貌した。

一瞬だけ見せた、か弱い女の子のような表情はとうに消えている。ここに居るのは聖杯戦争のマスター、魔術師遠坂凛に相違なかった。変わり身の早さに驚く俺を見ながら、魔女は嫣然と微笑む。

「さつき悲鳴が聞こえた時、ただ事じゃないと思つて念話でセイバーを呼んでおいたの。多分今頃——」

そう遠坂が口にするると同時。非常口の向こう、校庭の方で甲高い金属音が響いてく

る。二度、三度と響くそれは、この校舎内からでも感じ取れるほどの魔力を孕んでいた。逃げ出した敵のサーヴァントと、遠坂が待機させていたセイバー。鉢合わせの様な形で、二人の戦闘が始まったのだらう。だとすれば――。

「遠坂、この子任せていいか？」

「え……ちよつと、どういうつもり？」

「セイバーに加勢する。こんな真似しやがって、一撃くれてやらなきや気が済まない」

「は？　ちよ、貴方何考えて――!？」

遠坂の声に背を向け、床を蹴る。右手には、教室からずっと握りつ放しだった箒の柄。

「あのヤロウ……!」

悪態が漏れる。あのサーヴァントがやった事は、絶対に許せない。

あの瞬間、敵のサーヴァントが狙ったのは遠坂だった。あの凶器が抉っていった空間には、直前まで遠坂の顔があったのだ。

偶然じゃない。あの敵は狙い澄まして、絶好のタイミングでそれをやった。事実俺が気付かなければ、遠坂がどんな目に遭っていたかと思うと考えるだけで血管が沸騰しちゃうだ。

狙ってやったとすれば、最初から敵は俺たちを待ち伏せしていたのだらう。あの女子生徒は、俺たちを嵌める罠として体よく利用されたに違いない。

非常口の扉を蹴り開け、外に出る。夕日の残光に束の間目が眩み、思わず眼前に手を翳すと、狭まった視界に思わぬ光景が飛び込んできた。

「女——!?!」

紫と青。二つの色が、銃弾のように校庭を飛び回っていた。

青い色の正体は、魔力の鎧に身を包んだセイバー。不可視の剣を叩き付けるように振るい、絶大な魔力を迸らせながら、縦横無尽に飛び跳ねる紫の影を圧倒し追い散らしている。

そして、もう一方——セイバーに圧倒されているそいつもまた、サーヴァントに違いなかった。

腰どころか、足まで届くのではないかという紫の長髪。メリハリのあるすらりとした長身に、女神かと思紛う程美しく整った顔。しかし、異様に露出度の高い黒の衣装と、両目を覆う眼帯が、その雰囲気を妖艶なそれへと変えていた。

バーサーカーでもランサーでもない。あいつはアサシンかライダーか、それともキャスターか。

「はあ——っ!」

気迫と共に、セイバーが大上段から斬りかかる。謎のサーヴァントは、手にした釘のような武器でその一撃を受けたものの、その威力を殺しきれずにたたらを踏んだ。追撃

の薙ぎ払いを間一髪で凌ぎ、女は大きく距離を取る。

素人目にも判る戦力差。わずかに数合で、勝負は決していたと言っても良い。あのサーヴァントは、まるでセイバーの相手になっていない。あの勢いじや、俺の加勢なんか必要ないだろう。かえって邪魔になるだけだ。

魔力の量。動きの正確さ。力強さ。その全てで、黒衣の女はセイバーに劣っている。辛うじてリーチと瞬発力は上回っているようだが、如何に死角を突こうとも、セイバーの先読みと反応速度の前に全てが叩き潰されている。このまま行けば、一分と経たずしてセイバーの勝利は決まるだろう。しかし――。

「……………マスターはどこにいるんだ？」

きよろきよろ、と周囲を見渡すが、それらしい存在は視界に入っていない。すぐにも勝負を決める態勢が整っているにも関わらず、セイバーが決め技に移らないのもそれが原因だろう。あのサーヴァントとセイバーでは勝負にならないが、マスターが潜んでいるなら話は別だからだ。

セイバーと敵サーヴァントの戦いから目を離し、校庭を隈なく見渡す。日が落ち、暗くなりかけている校庭には猫一匹見当たらない。魔術か何かで姿を隠しているならセイバーが気付くだろうし、他に隠れていそうな場所と言えばあの雑木林ぐらいしか…………。

「——え？」

あれ。今、あそこで何か動いたような……？

「待て！」

箒の柄を引つ掴み、迷わず雑木林へ突っ走る。あそこに隠れているのがマスターなら、黒衣のサーヴァントに指示を出し、遠坂と俺を狙うよう仕向けた犯人はそいつだ。

「トレス同調、オン開始」

昨日遠坂に教わったように……魔力回路を作るのではなく、既に体にあるそれを動かし、箒に魔力を叩き込む。実戦で集中力が上がっているせい、いつもは失敗に終わっていたはずの強化魔術が、いとも簡単に発動できた。

そのまま速度を落とさず、雑木林の中に突貫する。奥の方に感じた気配を追い、行く手を阻む枝を叩き落としながら闇雲に進むと、開けた場所に出た。

「……………？」

歳月を経ているであろう樹木に囲まれた、自然が生み出した広場。夜の闇に吞まれ、既に暗くなりかけているここにある物体は、落ち葉の山だけだった。

けれど、気配を感じる。闇と草木に阻まれ、直接確認する事は出来ないが、どこから俺を見つめている視線が確かにある。姿を隠しても、その不自然な殺気だけは消せはしない。



セイバーとの訓練の時のように、箒を正眼に構え、神経を鋭く尖らせる。遠くでセイバーと敵サーヴァントとの交戦音が聞こえてくるが、今は無視だ。

——どこだ？

俺が今やってきた後方ではない。左か、中央か、右か。相手はそのどこかに潜んでいる。

集中しながら、ゆっくりと視線を動かす。ほんの僅かな動きでも、見過ごすことは死を意味する。ここに隠れている敵は、逃走ではなく迎撃を選んだに違いないのだから。そいつの方でも、俺の隙を伺っていることだろう。

冬だというのに首筋に流れる汗を努めて無視し、震える足に喝を入れながら前方を睥睨する。我慢比べなら負けるものか、と気合を入れて箒を握り直した、その瞬間。

——黒い刃のようなものが三本、一度に俺に向かってきた。

「な——!?!」

驚愕は一瞬。左、中央、右、三方向から交差するように迫る刃を避け、側転するように真横に転がり込む。ひらりと舞った靴紐が、避けきれなければどうなるのかを暗に示していた。

危なかった。もう少しあれのリーチが長かったなら、靴だけでなく、俺の脚そのものが切り落とされていただろう。

「くそ、ここそこ隠れてないで出てきやがれこの野郎……!」

悪態を吐いて立ち上がる。無意味だと知りながらも、威圧するように箒を構え直すと……正面の茂みの裏から、笑い声のようなものが響いてきた。

「ふ、はは、ははははははは——! 一人で突っ込んでくるなんて、本当に馬鹿なんだな。おまえ」

ゆらり、と人影が姿を現す。その見慣れた姿を前にして……束の間、頭が麻痺した。青みがかつた髪に彩られた、嘲るような笑み。自信を誇示するように、腰に当てられた左手。長年見続けて来たそれを、見間違えるはずもない。信じたくはないが、自分の中の冷静な部分が、これは現実なのだと思え入れてしまっている。

足がぐらつく。事実を認め、覚悟を決めた気になっても——そんなのはただの表層だけ。知っていたはずの事実を見せつけられただけで、俺は動揺を隠せなかった。

——間桐慎二。俺の目の前に立っているのは、友人だったはずの男だった。

\*\*\*

学園から数キロ程離れた、高層ビルの屋上。逆立つ髪を風に靡かせ、独り佇む影があった。

「——は、餌に釣られおったか」

面白くもなさそうに、アーチャーはそう独語する。日が暮れる中、遙か彼方の光景であつても、真紅の瞳にはセイバーと謎のサーヴァントの戦闘がはつきりと映し出されていた。

アーチャーの見るところ、相手のサーヴァントはライダーだ。アサシンならばそもそも気配を悟らせぬし、キャスターなら魔術と策を以て戦うだろう。

だが、クラスこそ即座に看破したものの、アーチャーはそれ以上そのサーヴァントに興味を持ってなかつた。この男が求めるものは享樂であり、戦いとすら呼べぬ一方的な展開になど、何ら面白味を感じられない。宝具や隠し玉があるのかもしれないが、あそこまで圧倒されていてはそれを使う間もないだろう。

どんな策を持つて現れたのかと、自身の愉悦の為に敢えて何もせず様子見に徹していたアーチャーだったが——あの程度の不意打ちで倒されるマスターなら自分が目をかけてやる価値もない——蓋を開けてみれば、完全に興醒めだった。

「しっまらぬ」

そう一言断じると、男はライダーへの視線を完全にセイバーへと転じた。元よりこの英霊の関心は、金髪の少女騎士に向けられている。ライダーが期待外れの弱兵とあれば、見向きもしないのは当然だった。

相手が強敵ならばこの位置からの掩護も考えてはいたが、あれでは弓兵の出る幕はない。むしろ、セイバーの足を引つ張るだけだろう。

そういえば先刻、愚かなマスターが敵マスターの方へと突っ込んでいくのが見えた。アーチャーの脳裏に、このままマスターの運と才覚に任せて放置する、という選択肢が浮かぶが、即座にそれを否定した。この男はそういったギャンブル性も嫌いではなかったが、あの少年を意味なく見捨てるほど価値を感じていないわけでもなかった。不意打ちを凌ぐのと、敵マスターに突っ込むのでは脅威の度合いが違う。

手間の掛かるマスターだ——と眩き、アーチャーは気だるげに踵を返す。ビルを降りるため、屋上の階段へと向かった矢先……ふと、その足取りが止まった。

「ごきげんよう、イレギュラーのサーヴァント。……いえ、アーチャーと呼んだ方がいいのかしら？」

空。日が沈み、夜の闇に埋もれつつあるその場所に、紫紺の布が浮いていた。

よく見ればそれは、ローブに身を包んだ人影。空中に浮かぶという異様な姿と、怪しげな錫杖とが相まって、魔術師然とした雰囲気醸成されていた。

しやらり、と鈴の付いた錫杖を鳴らし。異様な風体の女は、悠然とアーチャーを見下

ろし微笑んだ。

「魔術師か。隠れ潜むだけの鼠風情が、よくも姿を現せたものだ」

その視線を真正面から受けながら、予想外の事態にも関わらず、男は微塵も動揺を見せなかった。

アーチャーの表情を占めるのは、不快感。恐らくは空間転移か何かの手段であろうが、敵サーヴァントの出現など些末事に過ぎない。この気位の高い英霊にとっては、見下ろされることこそが何よりの屈辱。絶対零度の瞳は、次第に断罪の殺意を宿し始めている。

「随分なぐい挨拶だこと。正規のサーヴァントでもない貴方が、よく大きな口を叩けるわね」

キャスターの嘲弄混じりの言葉に、アーチャーの眉が僅かに吊り上がる。今の口ぶりは、まるでアーチャーというサーヴァントの異常を知悉しているようだったが……？

「——雑種。我に対する数々の非礼、よもやただで済むとは思うまいな」

だが。この黄金のサーヴァントにとつては、キャスターの言葉への興味よりも、自分を見下ろす無礼者への怒りの方が勝っていた。

それこそが、アーチャーがアーチャーたる所以。他の何者をも超越したプライドは、自身の異常性など意にも介さぬとばかりに、魔術師の英霊へ死刑を宣告していた。

アーチャーの全身が眩く煌き……一瞬の後、その肉体を包んでいたライダースーツは黄金の鎧へと変貌する。何らかの自己修復能力によつてか、ランサーによつて破損した痕など何処にも残されていない。

金属音を響かせ、アーチャーが黄金の双剣を構える。その鋭い刃先が狙うのは、フードの下に隠されたキヤスターの首。宙に浮いているとはいへ、サーヴァントの脚力を以てすれば、一足の下に斬り伏せることが可能だろう。

「残念ね。消えるのは貴方の方よ、アーチャー」

紅蓮の殺意に動じた様子も無く、キヤスターは舞うように右手を振る。直後、その姿を囲む形で、空中に巨大な光弾が現れた。

一つ一つが西瓜程もある魔力の塊は、およそ八つ。それらが衛星のように、キヤスターの周囲で回転し始める。如何にサーヴァントであれ、砲弾に匹敵する魔力球を受けでは無事では済まない。

双剣を握り、跳躍の姿勢を取るアーチャーと、空中で魔力球を弄ぶキヤスター。数秒の間、互いの様子を探るように視線が交差する——そして、先に動いたのはキヤスターだった。

「……………」

魔術の詠唱だろうか。一言何かが呟かれると同時に、矢継ぎ早に放たれる八つの光

弾。それを予測していたアーチャーは軽く左に跳ね、四つの弾丸をコンクリートの床に突っ込ませると、残りの四つを苦もなく双剣で切り払った。輝く魔力球はアーチャーの振るう双剣の神秘に掻き消され、まるで幻覚であつたかのように霧散する。

「ふん」

あつさりと攻撃を防ぎ切つたアーチャーは、詰まらなそうにローブの女を一瞥する。そこには敵意や殺意を通り越して、汚物でも見るような軽蔑が含まれていた。

「どうした。嗅ぎ回るしか能のない貴様が、態々正面から挑んできたのだ。策の十や二十は取り揃えていよう？」

——よもや、これが全力だとは言うまいな？　この程度の魔術では、我やセイバーはおろか、あの蛇女にすら太刀打ち出来ない」

「あら？　貴方程度なら手加減していても十分というだけよ。余計な労力を、前座に割きたくはないもの」

「——よく言つた。我に対し大言を口にした褒美だ、魔女狩りの流儀に則り、貴様は火刑に処すでしょう」

度重なる侮辱に、アーチャーの瞳が憤怒に染まる。三下のサーヴァントが思い上がるなど、それだけで万死に値する。多少の無礼なら笑つて見過ごすこともできようが、自身を侮り、挙句前座呼ばわりまでされたとあつては、自らの手で捻じ伏せ叩き潰して身

の程を思い知らせてやらねば気が済まなかった。

しかし。黄金の英霊が発する絶大な殺気を叩き付けられて尚、キャスターには余裕があった。常人ならばそれだけでショック死しかねない恐怖の敵意の中、魔術師の女は愉快地に笑ってみせる。

「万全の状態ならいざ知らず、今の貴方程度に何ができると言うの？」

それに、火あぶりにされるのは貴方の方——私を魔女と呼んだ者は、楽に死ぬると思わないことね」

刹那、女魔術師の瞳に殺意が宿った。それと連動し、大気中から膨大な魔力がキャスターの元へと集中していく。数秒でこれだけの魔力を結集させるその実力、並大抵の腕前ではなかった。

それを、炎の眼差しで睨み上げると。

「思い上がったな——雑種が！」

黄金のサーヴァントは、鎌となって飛び出した。

呼応するように、空中に浮かぶキャスターが錫杖を降る。その杖先が、アーチャーを指し示した後……キャスターを取り巻くように、膨大な数の魔法陣が現れた。

「……………!?!」

流石に驚いたのか、キャスター目掛けて跳躍しようとしたアーチャーが、動作を中止



して後ろに跳ぶ。その爪先を掠めるように、稲妻の槍がコンクリートを吹き飛ばした。即座に回避行動に移るアーチャーを狙って、追撃の魔力砲が雨霰と降り注ぐ。炎が、氷が、雷が、機関砲のように屋上一帯へと撒き散らされた。

広いとは言えない屋上を、縦横無尽に走り続けるアーチャー。あるものは双剣で弾き、あるものは鎧で防ぐものの、キャスターの爆撃はスコールのように絶え間なく繰り返されていく。

——その光景は、魔術を知る者にとっては余りに異様だった。

アーチャーを攻撃している魔術は、その全てが大魔術と言っても過言ではない。予備動作も、詠唱も、宝具の発動すらなしに、コンクリートを紙切れのように吹き飛ばしていくキャスターは、人間の技術など足元にも及ばぬ程卓越した魔術師だった。

加えて、それを可能にする魔力量。弾切れなど知らぬとばかりに放たれていく魔術の槍、一つ一つが並の魔術師の総力に匹敵するそれを、速射砲のように撃ち続ける魔力の貯蔵は、異常と呼んで尚余りある量。

回避しきれぬと判断し、双剣と鎧で攻撃を防ぎながら、冷静に状況を分析したアーチャーは忌々しげに舌打ちした。

——不利だ。

本来、弓兵のサーヴァントには高い対魔力性能スキルが与えられる。しかし、イレギュラー

な召喚のツケか、或いは受肉している影響か、このアーチャーの対魔力性能は極端に低い。

加えて、足場も最悪だった。空中を自在に飛び回り、上からこちらを狙うだけのキャスターに対し、アーチャーは屋上という狭い空間しか動けない。三次元空間を自由に動ける相手に対し、制空権を取られた上で二次元的な動きしかできないのではあまりにも条件が悪い。

更には言えば、攻撃の射程と範囲が違い過ぎる。剣を弓に換装する時間すらないアーチャーと、多種多様な魔術を遠距離から撃ってくるキャスターでは勝負にならない。

苛烈な砲撃で今にも崩れ落ちそうな屋上を一度見渡すと、アーチャーは撤退する方針を固めた。狡猾な魔術師への怒りで腸は煮えくり返っているが、黄金の英雄は、無謀な突撃をするような愚者とは程遠かった。

眼前に迫るレーザーのような魔術を双剣で弾くと、アーチャーは素早く轉身する。しかし、三步動いた所で……その足が、縫い付けられるように固まった。

「——むっ？」

その両足に力を籠めるも、ぴくりとも動かない。いや……足だけでなく、腰も、腕も、全身が凍結したように固まっていた。その彫像のような姿を、キャスターは勝ち誇ったような笑みを浮かべて見下ろす。

「ふふふ。首だけでも動かせるとは大したものね。空間そのものを縛られては、動けるはずもないのに」

勝利を確信し、哀れな獲物に視線を向けるキャスター。自らの策が完全に成功した以上、盤面が覆るはずもない。

矢袭のように襲い掛かった砲撃は、その実派手なだけの目晦まし。本来ならば数撃で倒壊しているであろう屋上が、未だ原型を留めているのがその証だった。一撃一撃が必殺級とはいえ、それさえキャスターには本気ではなかったのだ。

見た目が派手な攻撃に注意を向けさせながら、必殺の牙たる空間固定化の魔術を水面下で紡ぐ。指一本たりとも動かせないアーチャーは、今や人形も同然だった。

「貴方がどこの英雄だったかは知らないけど、次はもう少し足元に気を付けることね——  
—終わりよ」

冷たく眩くと、キャスターの錫杖がアーチャーに向けられる。その先に光るのは、先程までとは比較にならぬ魔力の塊。今度こそ、キャスターはアーチャーを消滅させる心積もりだった。

収束し、巨大な魔方陣を形成していく膨大な魔力。空間すら揺るがすその技を前にしたアーチャーは——にたりと、滴るような笑みを浮かべた。

不吉さを予感させる表情に、眉を顰めるキャスター。微かな苛立ちを滲ませ、魔力の

極光が空を薙ごうとした瞬間——

——黄金の鎧が、内側から弾け飛んだ。

「な——ッ!？」

驚きを目を見開くキャスター。数十ものパーツに分解された鎧が、鉄の弾丸となって彼女の全身を打ち据える。咄嗟に防御を固めたキャスターだったが、その衝撃までをも防ぎ切ることとはできなかつた。

「(バハハ)……?」

予想外の反撃による、一瞬の自失。時間にすれば三秒となかつただろうが、黄金のサーヴァントにとつてはそれだけで十分だつた。

見失つた敵の姿を捕捉しようと、首を振るキャスター。直後、視界に入ってきたアーチャーは……屋上の端で、黄金の大弓を構えていた。

「!!」

反射的に、直前に収束させていた魔力の塊を叩き付ける。苦し紛れではあつたが、それでも致死性のキャスターの魔術と、アーチャーの矢が放たれたのは同時だつた。

空間を貫いて放たれた矢と、光の渦として吐き出された魔力。前者はキャスターの防壁に阻まれ、軽傷を負わせるに留まり——そして後者は、屋上の一角ごとアーチャーがいた空間を消滅させていた。

その光景を確認し、安堵のため息を吐くキャスター。ギリギリだった……王手をかけるのは自分だと確信していたにも関わらず、それどころか、危うくこちらの首を飛ばされるどころだった。鎧による急襲で攻撃魔術を解いてしまったら、或いは、予め講じておいた防衛魔術の強度が足りなかったら……詰んでいたのは、魔術師の側だったかもしれない。

「危なかつたわね……」

誰にともなくそう言うと、キャスターは破壊され尽くした屋上に降りる。頑強なコンクリートが敷き詰められていたはずの床は、今にも崩落する寸前といった様子だが、このビルの上層部に人がいないのは最初から確認済みだ。不要な犠牲を出し、徒に敵を増やすことは好ましくないし、それ以前に神秘の秘匿は魔術師として絶対に遵守すべきものだった。

穴と亀裂だらけの屋上を滑るように歩きながら、完全に蒸発してしまっている一角を覗きこむ。破壊という段階を通り越したその場所に、アーチャーというサーヴァントが存在していた痕跡は残されてすらいなかった。

魔力で構成されているという特徴を活かし、分解した鎧を弾丸に見立て、魔力を推進力に四方に放つ奇策は想定外だったが、所詮はその場凌ぎの悪手に過ぎない。四方に散った鎧を魔力に戻し、再構成する過程には時間を要するだろうし、何の防御力もない

ライダースーツではキャスターの魔術を受けるなど不可能。最上級<sup>Ａ</sup>火力<sup>ラ</sup>に軽く届く一撃を喰らって、生きていられるわけがない。

ヒュン、と風を切る音がした。

「……………え？」

間抜けな声。それは胴体と切り離された、小さな首から飛び出したものだった。頭部を失った肉体は力を失い、勢いのまま空中に投げ出される。

——その上で。キャスターの首を刎ね飛ばした、黄金の剣が回っていた。

「たわけ。足元に注意を払うべきは貴様だ、雑種」

旋回しながら戻ってきた剣を掴みながら、ビルの中ほどにある窓の棧にぶら下がっていたアーチャーが吐き捨てる。戦いを始める前と同じく、黒のライダースーツを着込んだその姿は、傷一つなく健在だった。

それも当然。ここに至るまでの流れは、全てアーチャーの計画通りだったのだから。

キャスターの魔力砲が目晦ましであり、奥の手を隠し持っていることは最初から分かっていた。空間そのものを固めてくるとは流石に予想していなかったが、キャスターの戦術に備えて打てる策は講じてあった。撤退が不可能なら、別の対処法を即座に捻出す。類稀な頭脳を持つ、アーチャーならではの能力。

鎧を武器とする目潰しと連動した急襲。それを防がれた場合は、殺されたと見せかけ

ての奇襲。肉体を持つため、魔力を発さなければサーヴァントとしての気配を悟らせにくいという点を活かした戦法だった。

相手が戦い慣れた戦士であれば、寧ろ霊体ではなく生身の肉体を持つている方が感知されやすかつただろうが、相手が『魔術師』のサーヴァントだったことが幸運だった。

空中にロープを散らせ、消えていくキャスターの姿。それを確認すると、アーチャーは左手一本の力で反動を付けて飛び上がり、破壊された屋上に舞い戻った。

「――」

戦いに勝利したというのに、整った顔には何の感慨も浮かんでいない。やがて舌打ちすると、アーチャーは誰も居ない虚空を睨み付けた。

「この我に擬態など通用するか。出てこい下郎」

「――あら。本当に目敏いのね、貴方」

雲一つない夜空に、妖艶な声が響き渡る。それは紛れもなく、今殺されたはずのキャスターのものだった。

アーチャーの命令に従ったのか、中空に裂け目の様な穴が出現する。そこにはまるで嘘のように、無傷のキャスターの姿が存在していた。

「は。傀儡とは、つくづく保身に長けた雑種だ――が、それも道理か。時を稼ぐのがそもそもその貴様の狙いだらう」

「頭も回るようね。本当なら、ここで殺しておきたいところだけ……貴方の言う通り、私の目的は時間稼ぎ。目的は果たせたことだし、今回は退いてあげるわ」

「フーン——」

興を削がれた、とばかりに双剣を消失させるアーチャー。自身への度重なる挑発も、全ては時間稼ぎの計略と判明した以上、キャスターに付き合つてやる気は更々なかつた。

無礼者への殺意は寧ろ跳ね上がっているが、目の前の女を殺したところで、それが人形か幻影であるのは分かり切っている。本体はおそらく、どこか遠くで替えが利く身代わりを操っているのだろう。

聖杯戦争が続く以上、またキャスターと遭遇する機会はあるだろう。裁きを下すのはその時で十分と割り切り、アーチャーはキャスターに背を向けた。

問題は、キャスターが何のために時間稼ぎをしていたのかだ。その目的は未だ不鮮明だが、もしセイバーたちとの合流を防ぐ目的でキャスターが現れたのだとすれば、一刻も早く移動する必要があつた。

「また会いましょう、アーチャー。」

——次は、相応の客としてもてなしてあげるわ」

屋上を一顧だにせず去っていくアーチャーにそう告げると、キャスターは、闇に紛れ



るように消え去った。

## 13. 蠢動する牙

「なにぼーつと突つ立つてるのさ。戦いに来たんだろ、衛宮？」

知っていたはずなのに……この馬鹿げた光景に、頭が上手く回ってくれない。

彼こそが……間桐慎二こそがマスターだったという衝撃に、愕然として立ち尽くす。慎二がマスターだという推測は立てていても、そうであつて欲しくはないという一縷の希望もあつたのだ。それが打ち砕かれた今、脆弱な覚悟しか持たない俺は、大きく揺らいでしまっている。

震えが止まらず、手に握っていた箒の柄が落ちた。このままではまずいと、拳を強く握りしめ、混乱する自分を落ち着かせる。そして正面から慎二に向き直り、最終確認の声を掛けた。

「慎二。おまえ、本当にマスターなのか」

「は、今更何言っちゃつてんだよ。見て分かんないの？ 衛宮だつてマスターじゃないか」

呆れたように肩を竦め、手に持った魔道書のようなものを見せつけてくる慎二。それはまるで、玩具を自慢する子供のようで——同時に、ひどく歪なものを感じさせた。

それ以外、慎二に特段変わった様子は見られない。さも当たり前のように、笑みを浮かべたまま佇んでいる。つまり……間桐慎二は何の躊躇いもなく、同級生であつたはずの俺と遠坂の命を狙つたのだ。

「……なんで遠坂を狙つた？」

「はあ？ おまえ、本当に馬鹿なのか？ この聖杯戦争は殺し合いなんだぜ。なら、やることは一つしかないだろ」

心底小馬鹿にした表情で、慎二は俺の質問に答える。

人を殺すという禁忌をあつさり口にできる慎二は異常だが、魔術師という異世界に於いては異分子なのは俺の方だ。この聖杯戦争が魔術師のルールで成立している以上、その観点から見れば慎二の言うことは正しいのだろう。俺とは絶対に相容れないが、彼らに取つてはそれこそが普通なのだということぐらいは理解できている。

だが、百歩譲つて、聖杯戦争のマスターである俺と遠坂を狙つたのは理解できるようにしても——他の生徒まで傷付けるのは、許せない。

「なら、俺たちだけを狙えばいいだろう。なんであの女子生徒まで襲つた？」

「ああ、僕もできればあんなことはやりたくないんだけどさ。サーヴァントつていう連中は、維持するのにも結構手間がかかるわけよ。おまえと遠坂が引つかつたのはそのついでさ。

あいつらサーヴァントにとって、人間は絶好の餌なんだよ。おまえもサーヴァントを強くしたかったら、その辺の奴を捕まえてくるといいぜ」

一体何がおかしいのか。そんな狂ったことを口にしながら、慎二は愉快そうに笑う。  
人間は餌、だと？

そんな。そんな下らないことのために、こいつは無関係な人間を襲ったって言うのか……？

「——慎二。本気で言ってるのか」

「当たり前だろ。そういうルールなんだってば、これはさ。」

食物連鎖って言えばいいのかな？ 人間は豚や牛を食べる。サーヴァントは、その人間を餌にする。で、弱いサーヴァントは強いサーヴァントに倒されるってワケ」

だから、人間がサーヴァントに喰われるのは当然だと。肩を竦めて、慎二はそう言い切った。

ギリ、と歯を噛み締める。おかしい。目の前に立つこの友人は、根本的な何かが違うてしまっている。

先の子女生徒の一件と、慎二の言葉で確信が持てた。美綴を襲った昏睡事件の犯人は、慎二だ。いや、それだけではない。人を人とも思わぬそのやり口、この学校に結界を仕掛けたマスターも十中八九この男だろう。

止めなければならぬ。もう手遅れな所まで、間桐慎二は歪んでしまっている。まともな一般人ならば人を襲うなど考えもしないだろうし、真つ当な魔術師なら神秘の秘匿という原則に正面きつて喧嘩を売る行為には及ばない。

つまり。サーヴァントを従えるこの人間は、一般人でも魔術師でもない。倫理観というものを捨て去った、忌むべき犯罪者だ。

「そんなことは駄目だ、慎二。おまえ、自分が何をしたのか分かつてるのか。すぐ止めろ」

「止めろ？　おいおい、何言い出すんだよ衛宮。魔力がなければ、あいつらサーヴァントは満足に動かせえないんだぜ。そんな役立たずを連れ歩いてみる、あつという間に僕は他のサーヴァントの餌食さ。そんなこと、とても怖くてできないね」

「だとしても、関係のない人を襲うなんて絶対に駄目だ。やって良いことと悪いことの違いぐらい、おまえなら分かるだろ」

「——しつこいな。おまえ、僕に命令するなんて何様のつもり？」

機嫌よく笑っていた慎二の瞳に、剣呑な色が宿る。

「大体、ムカつくんだよね。そういう善人ぶってるトコがさ」

慎二が右手に握っていた本を開くと、ページから莫大な魔力が立ち上る。それは魔力を持たない人間には似つかわしくない、濃密な、悪意を孕んだモノだった。

遠坂曰く、慎二には魔術の適性がない。それ以前に、魔力回路が存在しない。恐らく慎二が手に持つあれは、そうした弱点を補うためのマジックアイテムなのだろう。

こちらに敵意を向けながら、慎二が空いた左手を指揮するように振るう。それに従うように、闇に染まった大地から影のようなナニカが湧き出した。影は直立し、刃のように収束する。先ほども目にしたあれは、さながら地を這うギロチンだ。

立ち上る黒い刃を従え、慎二の顔が獰猛なそれに変わる。俺を侮っているのか、見下すような目つきが正面から向けられた。

「痛い目に遭わないと、自分の立場ってものが分からないようだね」

揺らめく刃。触れた物を例外なく両断する凶器が、慎二の指示を待っている。何の躊躇いもなく殺意を向けてくる慎二を見て……俺はようやく、選択肢は残されていないと理解した。

駄目だ。間桐慎二は、話し合いを完全に放棄している。話が通じない相手は、壁と同じだ。こちらがいくら声を掛けようとも、空しく跳ね返るだけ。

平然と人を手に掛け、それを反省するつもりもなく、こちらの話に聞く耳も持たない。慎二を放っておいては、あの女子生徒のように被害を受ける人間が増える。どうにかして止めるしかない。

けど一つ、確かめておきたいことがある。以前から、慎二が関与しているのではない

かと疑っていたこと件。慎二が第三者を巻き込むことを本当に厭わないというのなら、これだけは聞いておかなければならない。

「……その前に、一つ聞かせてくれ。学校の結界と、行方不明事件。これをやったのはお前か？」

その問いが予想外だったのか。一瞬、慎二がきよとんとした表情を露にする。

慎二が魔術師として戦っていないのなら、魔術師の常識からは程遠い、この二件に関与している可能性は高い。まさか慎二がそこまでやるとは思いたくないが、どうしてもこの場で確かめておきたかった。

だが俺の質問をどう受け取ったのか、数秒ほど呆けていた慎二は突如ケタケタと笑い出した。

「なんだおまえ、まだ気付いてなかったのか！　そうそう、ここの結界は僕のサーヴァントの仕事さ。」

本当、サーヴァントって連中は化け物だよ。こんなものをあつさり作っちゃうんだからさ。生徒が十人いようが百人いようが、お構いなしなんだぜ、アレ」

笑つちやうよね、と同意を求めてくる慎二。影の刃を従えながら、何百人もの人間を巻き込む結界について、まるで冗談のように楽しむ異常さ。それを仕掛けたという事実以上に、その様子は不気味ささえ感じさせた。

口にする内容の恐ろしさと、あまりにかけ離れた慎二の態度に思わず怒りを忘れる。困惑を振り切るように、もう一つの質問を投げかける。

「そうか。じゃあ、行方不明の方もおまえがやったのか？」

「はあ？ おいおい、あんな間抜けと僕を一緒にしないでくれる？」

今度は一転、慎二の口元が不愉快そうに吊り上がる。その感情に呼応するように、召喚した影がゆらゆらと揺れた。

……おかしい。慎二は、これ程感情の起伏の大きい人間だっただろうか？

「誰がやったのか知らないけどさ、ニュースにまでなってるなんて、馬鹿な奴だよ。やるなら、もっとバレないようにすればいいのにさ。あれじゃ、サーヴァントがやってますって言いふらしてるようなものだよ」

俺の違和感を余所に、慎二は饒舌に話し続ける。だが聞き過ぎせない一節を耳にして、はてなと首を傾げる。

冷静さを失っている慎二の様子からして、嘘を吐いているとは考え難い。行方不明事件について知らないというのも、おそらく本当だろう。

しかし、今口にした言葉と、慎二が及んだであろう犯行には矛盾点がある。まだ発動していない結界については言い逃れができるだろうが、それを差し引いても行方不明事件の犯人を笑えるような立場ではないはずだ。



「なら、何で美綴を襲ったりした？ それこそ、バレないようにすればよかったんじゃないか」

「ふん。おまえたちがあんまりにも間抜けなもんだからさ。ヒントをあげたんだよ」

「……ヒント？」

「そうさ。衛宮も遠坂も、僕がマスターだつてことに全然気づいてなかっただろ。さすがに可哀想になつてね、あの煩い女に思い知らせてやるついでに、ちよつとサービステあげたのさ。」

まさか、それでもおまえ達が僕の所まで来ないつてのは驚いたよ。仕方がないから、もう少し分かりやすくしようとしたところに、偶然おまえ達が釣れたワケさ」

優越感に浸っているのか、ポロポロと情報を零していく慎二。言わなくても良いことを次々と自分から話していくその姿は、やはり普段の慎二とはかけ離れていた。ハイになつている、とでも言うべきだろうか。いや、それ以前に慎二の行動はおかし過ぎる。

まず慎二は、自分が不利な立場にあるという状況を無視している。慎二のサーヴァントが一人なのに対して、こちらにはセイバーとアーチャーの二人。しかもセイバーは、あのバーサーカーにすら拮抗して見せるサーヴァント。正面から戦つて勝てるはずがない。にも関わらず、慎二は身を隠すどころか、わざわざ自分から姿を晒すような真似

に及んでいる。

仮に慎二のサーヴァントが、あのバーサーカーに匹敵するような猛者ならその自信も納得できる。しかし、セイバーにただ圧倒されていたあのサーヴァントは、恐らく俺が見てきた英霊の中でも最弱。一对二どころか、一对一でさえ勝てないだろう。

下手を打った他のマスターを嘲りながら、衆目を集める愚行に走る。戦力差が明白な状況でありながら、自分を不利な立場に追い込む。矛盾に満ちた慎二の言動は、理解し難いものだった。少なくとも、戦略的に物事を考えているとは到底思えない。今俺と慎二が対峙しているこの状態ですら、謀略ではなく偶然の産物だと言うのだから。訝しがる俺の視線にも気付かず、慎二はにやにやと笑っている。

「いや、それにしてもラッキーだったよ。これで気付かないようなら、次は藤村あたりを襲おうかと考えてたところだった」

——は？

「……おい。藤ねえをどうするって言った？」

「あいつ、元々ウザかったしき。この際、美綴のついでにアイツも始末しようって思ってたんだよ。藤村がやられればいくらトロい衛宮でも気付いただろうし、一石二鳥ってとこかな。まあ、おまえが自分から来てくれたんだから、手間が省けたけどさ」

「——おまえ」

声が震える。慎二の思考を推し量るところではない。今の俺は、怒りを抑えるので必死だった。

こいつは大勢の人を巻き込むであろう結界を敷き、同級生の美綴を手に掛けたばかりか、藤ねえまで毒牙にかけようとしていた。それも、ただ不快だというだけで。

「あのさ、いい加減ムカつくんだけど。その態度。おまえ、そろそろ身の程つてものを弁えたら？」

慎二が何か言っている。だが今の俺にとつて、そんなものは雑音に過ぎない。

この男は越えてはならない一線を踏み越えた。その領域に踏み込んだ以上、間桐慎二はマスターですらなく、人の道を外れた外道だ。

——倒すしかない。

ガキン、と脳の回路が入れ替わる。衛宮士郎は、目の前の存在を明確に『敵』だと認識した。

「——身の程を弁えるのはおまえだ、慎二」

「ハッ、いちいちうるさいんだよおまえは……！」

慎二の怒声。それと共に、影の刃が地を縫って迫る。あれに斬られたが最後、俺の体は真つ二つになるだろう。

……しかし。そんなもの、今の俺には怖いときえ思えなかった。

脳裏に蘇るのは、俺を叩きのめしたセイバーの竹刀。反応するどころか、視認さえできない速度を前にしては、実戦なら軽く三桁は殺されていただろう。

そして、文字通り俺の体を斬り飛ばしたバーサーカーの大剣。岩より重く、風より速いあの剣は、ただ剣圧だけで鉄をも砕き、剣の英霊たるセイバーを圧倒した。

だが、目の前の刃には速度も力もない。ただ斬れるというだけの虚仮威しを恐れる理由など、微塵も見当たらなかった。

「ふっ——！」

二歩で躲し、そのまま慎二目掛けて突貫する。ギチ、と握り締めた拳が軋んだ。

「……………え？」

驚いたように固まる慎二。その、呆けた横顔を——

「いい加減にしろよ、おまえ——！」

容赦なく、全力で殴り飛ばした。

「ガ——!？」

唇を切ったのか、鮮血を迸らせながら吹き飛んでいく慎二。受け身すら取れず、後ろに聳そびえていた木に背中から叩き付けられると、そのまま無様に倒れ込んだ。

その場から起き上がろうとする慎二にゆっくりと近づき、真っ向から睨み付ける。

「ひ……………お、おまえ……………！」

怯えたように後ずさる慎二。唇から血を流し、恐怖を貼りつかせた表情には、一瞬前までの威勢など綺麗に吹き飛んでいた。

「最後だ。人を襲うような真似はやめろ、慎二」

「う、うるさい。ライダーが居ればおまえなんか……!」

そう睨み返してくる慎二。それを更に追い詰めようとしたところで……轟音と共に何か、木々をへし折りながら地面を転がって来た。

「な……っ!」

慎二の目が大きく見開かれる。俺たちから僅か数メートル横、慎二と同じように地面に伸びているそれは……先程までセイバーと剣を交えていたはずの、紫髪のサーヴァントだった。セイバーに敗れたのか、右手に握った釘剣は中途から折れ曲がり、左肩から胸にかけては、剣で斬られたと思われる深い傷が刻まれていた。

誰が見ても虫の息と分かるそのサーヴァントは、尚も起き上がろうとする素振りを見せる。だが傷が深すぎるのか、地面から立つことさえままならない。流れる血の量はそのまま、彼女が負ったダメージを表している。

「おい、嘘だろ……何やってんだよライダー!」

突然の罵声。目の前の光景が余程信じられないのか、慎二は俺の存在を忘れたように勢いよく立ち上がり、憎悪すら宿った目つきで、ライダーと呼んだサーヴァントを見下

ろした。

ライダー。そうか、あのサーヴァントは騎乗兵ライダーだったのか。

「誰がやられて来いなんて言ったんだ！ ふざけるんじゃない……なんであんなサーヴァントにやられるんだよ!? ええ!?」

癩癩を起こした子供のように、ライダーを罵倒する慎二。治療するでもなく、助け起こすでもなく、ただひたすらにサーヴァントを怒鳴り散らす。

その余りの狂乱ぶりに、怒りよりも先に呆れが込み上げた。この男は自分のサーヴァントが傷ついていても、労わるといふことをしないのか。敵ながら、ライダーに同情したくなるような、胸糞の悪くなる状況だった。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな!!! サーヴァント風情が、僕の言いつけを守れないって言うのか……!!!」

「——そこまでだ、ライダーのマスター。最早貴様に勝ち目はない」

慎二の醜態に嫌気が差したのか。不可視の剣を握ったセイバーが、背後の茂みから現れた。勝者の余裕さえ滲ませるその雄姿に、慎二の顔が恐怖に染まる。

「ひ——!?! お、おい、さっさと立てって言ってんだよライダー……!! 僕を守るのがおまえの仕事だろ！ 早くしろよ！」

「あ………ぐ、うっ——」

悲鳴めいた慎二の叫びに、ライダーが必死に体を起こそうとする。だが右手を大地に突き立てたところで力が抜け、再びどきりと崩れ落ちた。

無理だ。ライダーは戦うどころか、自分の体を支える力さえ残っていない。人間ならば即死している傷だ、サーヴァントであっても致命傷に近いだろう。今すぐ治療しなければ死ぬのは明白なのに、マスターの無茶な命令のせいで、ライダーはますます自分の命をすり減らしていく。それを理解していないのは、皮肉なことに、ライダーの主である慎二だけだった。

敵とはいえ、もう勝負はついている。見るに堪えかね、俺は慎二に向けて口を開いた。  
「慎二、いい加減に……」

「降伏しろ、ライダーのマスター。令呪を破棄し、敗北を認めるか——それとも、我が剣の錆になるか。選ぶがいい」

その辺にしておけ、と続けようとしたところで、いつの間に隣に来ていたのか、慎二に剣を突き付けたセイバーが、冷たく言葉を遮った。

見ることもできないが、首元に鋼の冷たさを感じたのだろう。ようやく自分の置かれていた状況を悟ったのか、慎二は顔を引き攣らせてガタガタと震え出した。

「は、は、敗北……？ ぼ、僕が負けるだって……？」

まだ握っていた本と、セイバーの剣の間を何度も視線が行き来する。だがどう見て

も、この状況で詰んでいるのは慎二だった。

頼りの綱のライダーは瀕死。あの黒い刃を出そうにも、セイバーに追い詰められている今、そんなことをすれば瞬きの間に首が飛ぶ。いくら慎二でも、この劣勢を認識できないはずがなかった。

やがて現実には押し潰されたように、力無く膝をつく慎二。そこにはもう、これ以上抗おうという意味は感じられなかった。愕然と、震えながら大地を睨むその姿は、打ちひしがれた敗者のもの。一組のサーヴァントとマスターは、実にあつけない終わりを迎え

「——そこまでだ、セイバー。悪いが、先にオレと遊んでもらおう」

瞬間、紅い稲妻が宙を穿った。

「危ない、シロウ——!」

それを槍と認識するより早く、セイバーが俺を抱えて横に跳ぶ。コンマ数秒の差で、真紅の魔槍が、抉るように大地に突き刺さった。

「なに……!!?」

その声は、誰が発したものだっただか。全員がこの突然の闖入者に、驚きの目を向けて



いた。

青い鎧に身を包んだ、飄々とした態度の男。その姿を見違えるはずもない。槍を引き抜き、敵意と共に俺たちを見やるその英霊は——あの夜俺を一度殺した、ランサーというサーヴァントだった。

予想外の要素に、頭が混乱する。どうしてランサーがここに現れたのか。そして何故……ライダーと慎二を庇うように、俺たちの前に立ち塞がっているのか。

呆然とする俺たちを一瞥すると。ランサーは、地面に膝をついたままの慎二を冷たく見下ろした。

「とつとつライダーを連れて失せろ、小僧」

氷と錯覚させるほど、温度の感じられない言葉。信じられないことに……あのサーヴァントは、敵マスターである慎二に『逃げろ』と口にしていた。

しかし、そこに込められた冷気を感じ取れなかったのか。状況を理解できずに固まっていた慎二は一転、繙るような笑みを浮かべてふらふらと立ち上がった。眼前に立つ男の敵意にも気付かぬまま、慎二は青いサーヴァントに近付いていく。

「は、ははは……！ やっぱり僕はラッキーじゃないか！ アンタ、僕たちを助けてくれるのか？ だったら、その衛宮とサーヴァントをさっさと倒——」

「——聞こえなかったか？」

ランサーの声が、唐突に静かになる。その違和感にやつと疑問を感じたのか、慎二の言葉が止まった。

「オレは失せろと言ったんだ」

「ひ、っ——!!!」

それだけ。殺意さえ潜ませた、その一言で十分だった。

竦み上がった慎二は、一步、二歩と後ろに離れ……三歩目を迎えたところで、脱兎の如く逃げ出した。それに伴って、血を流して倒れていたライダーの姿も消える。恐らく、霊体化して遁走したのだろう。

慎二とライダーが消えると、残されたのは俺たちとランサーだけ。油断なくランサーを睨み付けていたセイバーが、ここでようやく口火を切った。

「どういうつもりだ、ランサー」

何故ライダーに肩入れしたのか。怒りを宿して、セイバーがランサーに剣を向ける。

本来、あの場で慎二とライダーの命運は尽きていた。だがランサーの介入によって、あの二人は生き長らえる形になってしまった。

あの二人を逃がせば、また襲われる被害者が出てしまう。だからこそ、ここで確実に倒しておきたかったのだが……ランサーが間に居ては、下手な動きはできない。

セイバーも同様だ。ランサー一人か、或いは死にかけのライダー一人だけなら、セイ

バーは圧倒的に優位に立てる。しかし、一撃必殺の宝具を持ち、全くの無傷であるランサーと戦いながらライダーを倒すことは、如何にセイバーであろうと至難の業。一瞬でも隙を作ったが最後、『刺し穿つ死棘の槍』が飛んでくる。

発動したが最後、敗北が確定しているという脅威の宝具。バーサーカーのような蘇生能力を持たないセイバーにとって、あの槍の傷は致命傷になる。故にセイバーも、慎二とライダーを見逃すしかなかったのだ。

「あー、そう怒んなよ。オレだつて好きでやつてるワケじゃねえ。いけ好かねえが、マスターの方針つてヤツだ」

「マスターの方針だと?」

そのランサーの言葉に、聞き過ぎせないものを感じた。

ランサーがああ二人を助けたのは、マスターの命令によるもの。通常この聖杯戦争で、他の陣営を助ける理由など存在しない。それがあるとするなら……ランサーのマスターは、慎二と手を組んでいる? そうだとしても、腑に落ちない点は数多く残るのだが……。

「まあそういうことだ。あいつらを追いたきや、オレを倒してからにしろ」

今までの不本意そうな顔から一転、獰猛な笑みを浮かべたランサーが槍を構える。くるり、と手首で得物を一回転させた次の瞬間、雰囲気切り替わっていた。

言葉を拒絶するように、鋭く向けられた槍。その先端はセイバーを指し示し、今にも心臓を食い破りそうな殺意を纏わせている。

——本気だ。どういふつもりか知らないが、ランサーはあの二人を逃がしただけでなく、セイバーと戦うつもりでいる。

「シロウ、下がっててください。ランサーは私が」

言われるまま下がった俺に対し、セイバーが一步前に踏み出す。一瞬前までの困惑は、既にそこにはない。あるのはただ、ランサーに匹敵する戦意のみ。ライダーのことは割り切り、今は目の前の敵に集中すると決めたようだ。

この戦士は、ライダーとは比較にならない強さを持つ。意識を逸らせば、倒されてるのはセイバーの方だろう。ランサーとの対決が避けられず、アーチャーの姿が未だ見えない今、頼りになるのは彼女だけだ。

「——」

空気が軋む。英雄と呼ばれた者たちが向かい合うだけで、重圧に木々が震えていた。

既に日は落ち、視界は闇に染まっている。太陽に代わって光を齎すのは、星々ではなく輝く騎士。煌きを放つサーヴァントは、互いに互いの光を喰らおうと、それぞれの武器を掲げていた。

剣を握ったセイバー。槍を構えたランサー。二人はじりじりと距離を詰め、やがて円

を描くように動き出す。音すら逃げ出す程の緊張の中——動いたのは、同時だった。

「はあ——っ!」

「そらアアア——!」

地面が爆発した。

莫大な魔力の放出によつて、弾丸のように飛び出すセイバー。迎え撃つランサーは、槍を思い切り振りかぶると、間近に迫つた剣へと横薙ぎに叩き付けた。

剣の騎士は弾かれた勢いをそのまま、左足を軸に一回転し、槍兵の首を刈り取らんと蹴りを放つ。だがランサーもさるもの、巧みに体を捻つて死神の鎌から逃れると、左手一本で槍を繰り出して見せた。片手ですら魔槍の乱舞を披露するランサーに、セイバーの勢いが止まる。

それは、あの始まりの夜の焼き直しだった。

校庭で戦つていた時と同じく、セイバーとランサーは激しく打ち合う。だがあの夜とは違い、戦況は互角だった。

ライダーと一戦交えたとはいえ、それは戦闘と呼べるようなものではない。強者が弱者をただ一方的に狩り立てるそれは、蹂躪と呼ぶのが相応しいだろう。掠り傷すら負わず、一撃の下にライダーに致命傷を負わせたため、セイバーの消耗は限りなく零に近い。

そしてランサーの方もまた、万全の状態だ。二人の条件が互角なら、勝負の趨勢は見

えている。リーチの長い武器を持ちながら、あの夜あれだけ押されていたランサーは、セイバーに及ぶべくもない。

——だが。あの夜が嘘であったかのように、ランサーはセイバーと戦っていた。

「どうしたセイバー、動きが鈍ってるんじゃないやねえか？」

「くっ……！」

愉しげに笑みを浮かべながら、ランサーは矢継ぎ早に突きを繰り出す。一体どういう絡繰りなのか、その技のキレは、数日前のそれを確実に上回っていた。

一方のセイバーは、真剣な表情でランサーの槍先を凌いでいる。そこにはあの晩のように、爆発的にランサーを攻め立てた姿はなかった。劣勢には程遠いが、少なくとも優勢とは言えない。あの時セイバーを遠ざけるので精一杯だったはずのランサーは、守勢に回るどころか、嵐のような猛攻を仕掛けている。

……おかしい。セイバーの動きが悪いわけでも、手傷を負っているわけでもない。あの男が、前回の戦いより確実に強くなっているのだ。漫画ではあるまいし、いきなり強くなったなど俄かには信じ難い光景だが、これが現実であるのだから性質が悪い。

力強さ。スピード。冴え渡る槍使い。まさかとは思うが、あの夜見せた力ですらまだランサーの本気ではなかったと言うのだろうか？

「うおらあー！」

気合一閃。圧倒的な速度でセイバーを攻め立てたランサーが、全体重を乗せた槍を叩き付ける。たまらず防御するセイバーだったが、衝撃を受けきることができず、地面を削りながら後退した。重みのある一撃に、少女が苦しい声を出す。

稲妻のような速度に、破城槌めいた打撃力。強靱な肉体から振るわれる、神域の技量を備えた槍技は、現代兵器すら凌駕する破壊力を宿している。半神の英霊に相応しく、精緻さと大胆さを兼ね備えた槍の軌跡。この男が敵でなければ、俺は称賛を惜しまなかつただろう。

「流石は名高き光の御子ですね。まさかこれ程までの実力とは……」

セイバーの漏らした言葉に驚いたのか、お？ と目を見開くランサー。

「オレの真名まで見抜かれちゃったか。ま、大方そっちの坊主あたりから聞いたんだらうが……正解だぜセイバー。」

折角だ、お前の名も訊いておきたいとこだが——ようやく巡ってきた全力の戦いだ。無粋なことは言わねえ、そっちも全力で掛かってきな」

克蘭の猛犬。その名を持つサーヴァントは、再び真っ直ぐに槍を握り直した。にやりと笑ったその顔は、戦いの喜悦に上気している。

一方のセイバーは、何かを逡巡するように目線を逸らすと……再び、力強くランサーに向き直った。

「御身に名を明かせぬ非礼は詫びましょう。私の名乗りは、この剣にて代えさせて頂く」  
「は——いいねえ、そう来なくっちゃ話にならねえ！」

獣の如き俊敏さで、槍兵が大地を薙ぎ払う。風圧のみで枝葉を吹き飛ばしたその一閃を、高々と跳躍して避けたセイバーは、魔力放出によつて強引に空中で動き、男の背後を取ると斜めに斬撃を繰り出す。それを見もせず防ぐランサーは、まるで背に目が付いているようだった。

——待てよ。見えてる、だって……？

ランサーの動きに違和感を覚え、再び二人の戦いを観察する。

戦況は先と同じだ。ランサーの攻撃をセイバーが防ぎ、セイバーのカウンターをランサーが凌ぐ。どちらかといえば押しているのはランサーのようだが、パワーに於いてはセイバーに分があるため、中々決め手となる一撃を放てない。セイバーの方も、ランサーの胴体を直接狙おうとしているのだが、台風かと見紛う突きの嵐と速度の前に、距離を詰めることができないでいる。

ランサーの三連突きを躲ききつた瞬間、跳躍した勢いそのままセイバーの斬撃が降り注ぐ。後退したランサーにセイバーが追撃の切り上げを放つと、くるりと旋回した槍が、剣を受け流しつつセイバーの頭部を掠めていく。双方の攻撃で、色の違う二種の頭髮が宙に舞った。



攻め手と受け手が絶え間なく交代し、衝撃波と魔力の余波を受けた周囲の木々に次々と傷が増えていく。小さな木や枝葉などは、紙切れのように千切れ飛んだ。

「やあ——っ！」

痺れを切らしたのか、千日手となった打ち合いの中でセイバーが動く。

剣を振り回していた両手ではなく、両足から魔力を放出する。爆発的に吐き出された魔力は、大地に積み重なっていた枯れ葉の山を宙に舞わせた。地面その物すら吹き飛ばしたのではないかという爆撃の余波は、粉塵すら伴って周囲一帯を埋め尽くす。

「なに……!?!」

ほんの一瞬、ランサーの視界が遮られる。その刹那の隙を見逃さず、セイバーの体が沈んだ。ランサーの目には、まるでセイバーが消えたように映っているだろう。

大地を抉った爆発的な推進力は、両足の先からそれぞれ別方向に作用し、さながら超信地旋回の如く、セイバーの矮躯を回転させた。その凄まじい勢いを乗せ、猛烈な回転斬りを放つセイバー。死角を突いたその一撃は確かに、槍兵の体を両断する軌道を描いていた。

今のセイバーはランサーの間合い、その完全な内側に入っている。リーチの長い槍では、懐に飛び込まれると反応ができない。距離を取ろうにも、この至近距離では完全な手詰まり。防御も回避も不可能な、必殺必滅の一閃。

——だが。一秒後に迫る死を前にして、心底嬉しそうにランサーは笑った。

「甘んじ」

ランサーの左肘が垂直に振り下ろされる。同時に、地を踏みしめていた足がバネのように跳ね上がり、その動きに連動して槍の柄が動く。

「な——っ」

目を疑う。必殺の一撃、音速をも凌駕する勢いで振るわれた不可視の剣は……ランサーの肘と膝の間に挟まれ、右手の槍に阻まれて動きを止めていた。

息を飲むしかない。斬撃の勢いを殺しきれなかったのか、剣を押さえつける左肘と左膝の鎧は破壊され、血が滴り落ちている。だが、傷らしい傷といえればそれだけ。たったそれだけの犠牲で、ランサーはセイバーの剣を防ぎ切っていたのだ。

途方もない神業に驚愕しながら、セイバーが剣を引き抜こうと後ろに流れる。拘束するつもりはなかったのか、あっけなく剣を解放すると、ランサーは不敵に唇を吊り上げた。

見えている。

不可視であるはずのセイバーの剣。その長さ、幅、刃渡り。どういう仕掛けかは知らないが、あの男はそれを完璧に把握している。でなければ、あんな神業は不可能だ。

思い返せば、ランサーは一度セイバーと戦っている。その時は見えない武器という脅

威に押されていたが、英雄として聖杯戦争に招かれたほどの男。あの凄まじい攻防の中で、セイバーの剣の性能を分析していたのだろう。だから二度目の戦いでは、何の躊躇もなく槍を振るえるのだ。

何が原因なのかは知らないが、身体能力が上がっているランサー。加えて、剣の特異性が失われているとなれば、セイバーが苦戦するのも頷ける。同等の条件なら、射程が長い方が有利だからだ。

「綺麗過ぎるんだよ、お前の太刀筋は。だから肝心な時に読める」

と。距離を取ったセイバーに向け、さらりと恐ろしいことを口にするランサー。あいつ、本当に見えてやがるのか……!!

「……驚きました。貴方ほどの戦士と戦えることを、誇りに思います」

ランサーの実力を、素直に褒め称えるセイバー。前回の戦いですらあれほどの腕前を披露したというのに、今回はそれすら前座と言わんばかりの戦いぶり。最早芸術とも呼ぶべき槍の動きは、素人の俺からしても美しさを感じさせるものだった。あの晩アーチャーと矛を交えた時、彼が今の強さを発揮していたなら、あの黄金のサーヴァントは一晚のうちに倒されてしまっただろう。

……そういえば。アーチャーはランサーが、何らかの束縛を受けているという推測を口にしていた。なら今のランサーは、枷から解き放たれた状態だということか。

「そりゃあこっちの台詞だぜ。女だてらにその劍捌き、並の英霊とは格が違う。さぞや名のある英雄と見た。そんじよそこらの劍使いじゃ、俺の槍とは打ち合えねえ。

さてと……そろそろ決めようぜ。こいつを使わなきや、本気の戦いとは言えねえからな」

涼しげな表情を浮かべながら、挑発とも取れる言葉を向けるランサー。一瞬置いて、半身のみをセイバーに向ける奇妙な構えを取った。同時に、張り詰めたように緊迫していく空気。

魔槍が唸る。周囲の魔力を掻き集めるように奪っていくそれは、正しく宝具発動の予兆。ランサーの最終兵器たる『刺し穿つ死棘の槍』が、今宵再び放たれようとしていた。一度発動を見ているにも関わらず、暴力的な魔力の波濤に気持ちが悪くなる。後ろで見ているだけの俺ですらそうなのだから、セイバーが受ける重圧は比較にならないものだろう。槍だけでなく、風が、木々が、大地が、全てが殺意に満ち満ちているかのような錯覚。

暴力の中央にいるランサーは、闘志に溢れる笑み。極限の戦いを、命をチツプにしたギャンブルに身を委ねる愉悅を、心から味わっているかのような異質さだった。

「——ええ。御身なら、我が聖剣を振るう相手に相応しい」

その圧力を一身に受けて、セイバーが剣を握り直す。燦然と輝く甲冑は、闘気という

研磨を受けて尚一層光を増した。全てを威圧する殺意も、彼女には何の影響も与えていない。それを受けるばかりか、逆に圧倒しようという覇気こそが、セイバーの氣質を表していた。

見えない鞘を纏った剣が、自らの封印を解き放とうと叫ぶ。魔槍が竜巻の如き暴力なら、こちらは稲妻の如き鋭さだった。

轟、と風が流れる。幾重もの風を束ねて結界とした鞘が、剣の力に耐えかねて少しずつ解かれていく。それに伴って吹き荒れる風は、対峙するランサーの髪を逆立て、周囲の木々を軋ませた。立っていることができず、俺も暴風に煽られて膝をつく。

互いに宝具をぶつけ合う、その直前の緊張感。ランサーもセイバーも、共に相手を必殺圏内に捉えながら、己の宝具を叩き込む機を伺っている。極限の集中力と緊張感が生み出す空気は、時間さえ凍らせるほど。

その光景は正しく、あの始まりの夜に酷似していた。剣士と槍兵が激闘し、奥の手を披露するべく対峙する。

——ならば。

「——え——？」

「第三者の介入も、また必然だったのか。」

それは、唐突に現れた。

どくん、と心臓が鳴る。何か異様な重圧が、空間全体にかかっている。見ればセイバーとランサーも、互いに動きを止めていた。

世界が、闇に堕ちる。

宝具開帳の緊張感など生温い。正体すら判然としないというのに、齒の根が合わぬほどの恐怖が、俺の全身を襲っている。

理屈や感情ではない。本能が、今すぐ逃げろと言っている。ここに居れば死ぬと。間違ひなく殺されると。

なんだ。なんだこれは。こんなものは知らない。こんなものは有り得ない。こんなものは居てはならない。

「——おい。何の冗談だ、こりゃ」

ランサーが笑う。いや、笑おうとして失敗した。歴戦の戦士は、俺などよりも遥かに強く、迫りくる死の気配を感じていた。

「あれ、は——」

愕然とするセイバー。命を削る死闘の間ですら、決して見せなかつた表情が浮かんでいる。焦燥という名のそれは、現れた存在の脅威を明確に表していた。

全員の視線が、ただ一点に集中する。林の奥。夜の闇に包まれ、木々の他には何も存

在しないはずの場所。そこに――

――黒い『影』が立っていた。

闇という概念がカタチとなったような、異形の存在。恐怖そのものでも形容すべきそれは、何をするでもなく、ただゆらゆらと佇んでいた。

薄い布が、何十枚と集結したような外見。いや、触手と言った方がいいのだろうか。軽薄ささえ感じさせる見た目でありながら、その存在感は何より異様だった。

サーヴァントではない。そもそもあれは、生き物ですら有り得まい。これほどの恐怖、これだけの絶望感を与えるモノを、俺は未だかつて目にすることが無い。十年前の地獄が再び訪れたと、そう言われても信じるであろう妖魔。

生物で例えるなら、水母に近い。深く暗い海の中で、獲物を探す黒い影。囚われた者がどうなるかなど、語るまでもないだろう。

「……セイバー。それに、その坊主。悪いことは言わねえ、今すぐ逃げろ」

ランサーが、まるで似合わぬ真剣さで俺たちに言葉を発した。だがその視線と槍先は、寸分たりとも動かず異形の影を見つめている。青い戦士は、相対していたセイバーよりも尚、あの存在を警戒していた。

よく見れば、宝具解放の為に収束した魔力は槍先の一点に集中している。真紅の魔槍は、心臓を食い破るべき標的を、セイバーから謎の影へと変えていた。

「ランサー。あんた、あれの正体を知ってるのか」

「いや、知らねえ。だが、街で騒ぎになつて人攫いに行き倒れ。そいつを引き起こしてんのはあれだ」

「な——」

驚愕する。しかし、その言葉が真実なのは直感的に理解できた。あれはブラックホールと同じだ。近寄つた者は例外なく引き寄せられ、そしてこの世から消失する。

ふらふら、と風に靡く影。そこに宿る闇は、夜すら呑み込む黒さ。触手を彩るように走る赤のラインは、零れ落ちた鮮血を思わせる。

——と。何の前触れもなく、それはゆっくりと動き出した。

するする、するする。滑るように、影がこちらに向かつてくる。掲げられた無数の触手が、影の中で蠢いている。意志すら感じさせないそれは、何のために動いているのか。

「シロウ、撤退します。こちらへ」

この上ない真剣さで、セイバーが俺を引き寄せる。見ればランサーも、じりじりと後退を始めていた。

示し合わせたように、頷き合う二人の英霊。直前まで激戦を繰り広げた間柄であろうと、二人の考えは一致していた。いや、二人だけではなく、俺の考えも同じだ。あれが動き出した時、全員が同じ印象を受けたのだから。



——喰われる、と。

ランサーもセイバーも、共に宝具を構えている。しかし、例え双方が宝具を用いたとしても、あれに効くかどうかは判らない。

生物であるのならランサーの槍は確実に敵を仕留めるだろうし、まだ見ぬセイバーの宝具としてそれは同様だろう。だが、それはあくまで生物が相手の話だ。あの邪悪な怪物は、ただの生き物では有り得まい。

すると動くそれを見て舌打ちしたランサーが、槍を下げると跳躍の姿勢を取る。豪胆なこの男ですら、あの化け物と事を構えるつもりはないようだった。

「この続きは次の機会だ、セイバー。あれは洒落にならん」  
「分かりました、ここは私が引き受けます。」

——「武運を」

「すまねえ、いざれ借りは返すぜ」

戦いどころではないと、ランサーが凄まじい速度で走り去っていく。彼の気質から考えれば、自分が残ると言い出しそうなものだったが、あの影の前では議論している暇さえない。即座に言葉を聞き入れたランサーは、状況を正確に把握している。

そして。ランサーが離脱したのを悟ったのか、その影は一瞬動きを止めた。槍兵の後を追おうとするかのように、うねうねと触手が揺らめく。

……目も口も、鼻すらないというのに。如何なる手段によつてか、あの存在はランサーを完全に捕捉していた。が、止まっていたのはほんの数秒。恐怖の影はゆつくりと、再び俺たちの方に近付いてくる。

「シロウ、掴まってください」

動けずにいる俺の腕を、セイバーが抱えるように掴む。あの影が到達するより早くこの場から離脱するには、セイバーに頼るほかない。

結局最初から最後まで、俺はセイバーの足を引っ張っている。だが今は、後悔をしている時間などない。そんな余裕があるなら、一目散にあの影から逃げ出している。

俺を掴みながら、跳躍の姿勢を取るセイバー。だが、まさにその瞬間――

ギロリ、とそれが俺を見た。

「え……………」

あれに感覚器官など存在しない。しかし、今まさに、俺はそいつと目が合ったと確信した。

死ぬ。自分という存在は消滅する。動揺も恐怖も通り越し、ただそのこと実だけが脳裏を占める。隣のセイバーが地面を蹴ろうとするが、遅い。鈍重な動きを裏切る速度で、無数の影の手が一斉に伸び上がり――

「――な」

そして唐突に、消滅した。

見えなくなったのではない。まるで嘘だったかのように、森林一帯を覆い尽くした魔の影は、忽然と姿を消していた。

「……………」

現実を認識できず、その場から動けない俺。一方のセイバーは、まだあれがいるかもしれないと警戒したのか、油断なく周囲を睥睨している。

今のは……今のは確実に死んだと思った。あの影に喰われると、そう確信していた。恐怖の対象が過ぎ去ったことで、今更になつて感情を思い出したのか、全身が勝手に震え出す。しかし、風邪でも引いたかのような悪寒と対照的に、頭の中は奇妙に冷静だった。

あの影は何なのか。サーヴァントでもないのに、セイバーやランサーにさえ脅威と認識させる程の存在。実体さえ感じさせない虚ろなモノでありながら、バーサーカーすら凌駕する本能的な恐ろしさを持つ。強い弱い次元ではなく、根源的な何かが違っている。

「ちよつと、貴方たち大丈夫だった……!?!」

震えに耐えきれず、その場に座り込んでしまった瞬間、慌しく遠坂が駆けつけてきた。俺たちの様子が尋常ではないと一目で察したのか、身に纏う雰囲気は刃のように鋭くな

る。

「何があったの、衛宮くん」

遠坂の問いに答えようとしたが……あれは、一口で説明できるモノではない。何とか遠坂の視線を見返したが、恐怖の後に襲ってきた、吐き気のような気持ち悪さに視野が定まらない。

俺の様子を見て深刻に目を細めると、遠坂は未だ剣を構えたままのセイバーに向き直る。だが遠坂が何か言うより早く、警戒態勢を解かずにセイバーが口を開いた。

「凜、説明は後程。一度撤退した方が良いでしょう」

「……分かったわ」

セイバーの只ならぬ心配から異様さを把握したのか。遠坂はそれ以上セイバーに何か言うことはなく、屈み込むと腰を抜かしたままの俺の腕を取った。その光景が先程治療していた姿と重なり、襲われた女子生徒のことを思い出す。

「衛宮くん、立ててる?」

「あ、ああ……それより、あの子は大丈夫か?」

「え……? うん、応急手当はしたから、もう大丈夫よ。それよりも、自分の心配をしないでよ。血の気が引いてるわよ、衛宮くん」

怒ったように俺を見つめる遠坂。その瞳に含まれた真剣さから、よほど俺は酷い顔を

しているのだろうか、と感じ取る。

遠坂の手を借りて立ち上がると、大きく深呼吸をして自分を落ち着かせる。あの影が空間を染め上げたにも関わらず、林の空気は冷たいまま。いつもと変わらぬ清涼な風に、ようやく体の震えが落ち着いた。

女子生徒の治療は無事に済み、ライダーには深手を負わせ、ランサーと黒い影は立ち去った。とりあえず現状の危機は過ぎ去ってくれたようで、安心感からふつと気が抜けそうになる。

しかし、マスターとしての立場から考えると、現状はむしろ悪化している。倒せたはずのライダーは取り逃がし、ランサーには大した傷も負わせられず、加えてサーヴァントですらない謎の存在が出現。未だこの場に現れないアーチャーのこともある。厄介なことに、問題ばかりが積み重なっている。

「  
イレギュラーが続く聖杯戦争。立ちこめた暗雲は、一向に晴れる気配がなかった。」

\*\*\*

「あ——が、あ………っ」

学校から逃げ、冬木大橋が見える公園まで来たところ……ライダーは、限界を迎えて倒れ込んだ。

セイバーと戦い、惨敗した結果、ライダーは大きな傷を負った。即死しなかったのは、幸運の賜物に違いない。あと少しでも深く刃が届いていれば、ライダーは心臓を失い、聖杯戦争から敗退する羽目になっていた。純正の英霊、それも最上級の霊格を持つ剣の騎士と、英雄とも呼べぬ存在のライダーとでは勝負にすらなっていない。

生きるか死ぬかの瀬戸際を迎えているライダーの横では、同じように荒い息を吐いたライダーの主が、荒々しく近くに転がっていた缶を蹴飛ばした。

「くそ……くそつ、くそつ、くそつ、くそつ、くそつ、くそつ——！　なんでこうなるんだよ、ふざけるな……！」

彼女のマスターである少年は思い出したかのように怒鳴りちらす。死の恐怖から逃れた今、間桐慎二の心を支配しているのは理不尽な現状への怒りだった。

こうなる予定ではなかった。忌々しい遠坂凜と衛宮士郎を倒し、勝者として凱旋する。それこそが、選ばれた者である自分に与えられるべき正当な褒賞だ。

だということに、現実はどうだ。弱々しいサーヴァントはセイバーに一矢報いることすらできずに敗れ、自分は衛宮士郎に殴り倒された。拳句、あのランサーといういい好きかない男に見逃される形で、おめおめと逃げ出した。こんなことが許されていいはずがな

い。

「ふざけやがって……！ 全部お前のせいだ、このカスサーヴァントが！」

自身の言動を悔いるという選択肢は、この少年の中にはない。よって彼の怒りの矛先は自分自身では無く、霊体化してすら身動きのできぬまでに衰弱した、哀れなサーヴァントに向けられる。

ライダーとセイバーの戦力差は違い過ぎた。せめて宝具の一つでも使えれば逆転の目もあつたのだが、この仮初のマスターには魔力供給など望むべくもない。本来のマスターであれば存分に力を発揮することができただろうが、代理マスターという異例の契約を結んでいる現状では、元の主から供給される魔力は大幅に減じてしまっている。それを当の代理マスターが理解していないのだから、ライダーにとっては不運と言うしかなかった。

「……………」

ただ喚き散らすだけの己のマスター。その姿に失望を感じながら、ライダーは悔しさに唇を噛む。自分の本当のマスターは、戦いを望んでいない。本当の主従であつたのは短い間だったが、彼女が心優しい人間であることは承知しているし、あの少女が自身を召喚する為利用されただけだということも理解している。しかし、彼女の兄だということの少年では、英霊のマスターとしての格が今五つほど不足していた。

「ちくしょう……何てハズレを掴まされたんだ！ こんなことが認められるか、ええ!」  
力不足なのは仕方がない。自身が他のサーヴァントに劣っていることも認めよう。  
しかし、英雄が覇を競う聖杯戦争を、まるでゲームのように認識し、まともな戦略すら  
持ち合わせていない稚拙さは、如何に温厚なライダーとて腹に据えかねるものがあつ  
た。それでも尚ライダーが従っているのは、偏にあの少女のため。自分の代わりに兄に  
戦ってもらおうと悲しげに告げた、本当のマスターへの想いからだつた。

本来の性能を、自身の宝具を使うことができれば、他のサーヴァントに後れは取るこ  
とはない。相手がセイバーであれランサーであれ、互角以上に戦つて見せよう。だが、  
その状況を作ることができない。少女への想いから戦つているというのに、その少女の  
意思が彼女を縛る。矛盾を解決できないライダーは、ただ悄然と俯くしかなかつた。

……が、手を拱いてもいられない。そう思い直し、現状を少しでも打開するべく、ラ  
イダーは眦を決する。

「シンジ、戦略を変えるべきです。あのセイバーは強力だ、正面からでは太刀打ちできま  
せん」

「ああ!? なんだよおまえ、あんな女一人倒せないって言うのか!? この——」  
「——騒がしいこと。少しは静かにできないのかしら?」

霊体化を解き、傷だらけの姿で諫言するライダー。それに応じようとした怒声が、い



るはずのない第三者の声に掻き消される。流石に度肝を抜かれたのか、慎二の顔が硬直した。

「だ、誰だ……!?!」

誰何の声に答えるのは、しやらりという鈴の音。その響きに釣られ、慎二とライダーの視線が頭上に向かう。

「——ふふ」

夜。空に光る月を遮るように、その影はそこに浮かんでいた。星の輝きが乱舞する中、明るさを飲み込むかのように、紫紺のローブが広がっている。その手に握る錫杖は、どこかお伽噺の魔法使いを思わせる。超然たる気配を漂わせながら、平然と中空に浮かぶその姿は、キャスターのサーヴァントのものに相違なかった。

慎二たちは知るべくもないが、ランサー陣営、そして黄金のサーヴァントに続いて、この魔女が自ら他者の前に姿を晒したのは三度目。そのいずれもが、魔の思惑を秘めたもの。

呆然とする慎二に代わり、傷だらけのライダーが主を庇って前に立つ。この相手がキャスターであるのなら、その裏には謀略の糸が練られていると看破した故だった。

「あらあら、随分と無様な姿なこと。」

……いえ、無様なのは貴女ではなく、そちらの坊やの方かしらね」

名を名乗るでもなく、余裕すら感じさせる微笑を浮かべて、キャスターは静かにライダーを見下ろす。一方のライダーは、震える体を無理矢理気力で動かしているだけだった。

本来、高い対魔力性能スキルと機動性を併せ持つライダーは、キャスターに対して優位に立つ。しかし、ほとんど致命傷を受けている現状では、ライダーには防御するという選択肢すらありそうにない。それを理解しているからこそ、ライダーは歯噛みする。何というタイミングで現れてくれたのか、と。

だが同時に、不可解さもあつた。如何に傷つき弱っているとはいえ、サーヴァントである自身に気付かせもせず、頭に取れたのなら、その時点で攻撃すれば勝負は決していた。ライダーというサーヴァントは、今宵この場で消滅していただろう。しかし、敢えてその選択を放棄したのだとすれば、キャスターの狙いは戦闘ではない他の何かにある。

「おい、いきなり何なんだよおまえは！」

やはり現実を認識できていないのか。警戒するライダーの様子にまるで気付かず、慎二が声高に吼える。

……が。魔女の返答は、氷よりも尚冷たい侮蔑だった。

「キャンキャンと騒がしい犬だこと。弱い犬ほどよく吼える、とは言うけれど——目障

りね。黙っていなさい。」

「——あ？」

キャスターがそう告げた刹那。鋭い視線がローブの下から覗き、慎二の瞳を貫いた。一瞬驚愕の表情を浮かべる慎二だったが、数秒と経たずその瞳から光が消え、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。

それだけ。キャスターが放った一言だけで、間桐慎二は自らの意思を失い、ただの無害な物体と化した。

一睨みで、凡百の人間を支配下に置くその技量。如何に慎二が魔力を持たないとはいえ、サーヴァントと対峙していながら、片手間の内にマスターを捻じ伏せるその腕前は、魔術師のサーヴァントに相応しい卓越したものだった。瞬き間にマスターが無力化されたことを察し、ライダーの表情が険しくなる。

「これでやつと話ができそうね」

鎖剣を握り締めるライダーにも構わず、キャスターは平然とそう告げる。場の主導権を握るのはどちらなのかは、その差異だけで明白だった。折れた愛剣を構えつつ、ライダーが掠れた声を掛ける。

「……何が目的ですか、キャスター」

「力を貸してあげる、と言ったら貴女はどうするかしら？」

「——な」

美しい唇から齎された言葉に、ライダーの全身が硬直する。その様子を見下ろし、魔女はふ、と愉快げに笑みを零した。

「判らない？ 力を貸す代わりに、私と組みなさい、と言っているの。」

その傀儡は目障りなだけの役立たず。私なら、遙かに優れた環境を用意できる。無能な主に煩わされることもなく、思うままに力を振るえるわ」

それに、と続けて。キヤスターは、酷薄に唇を吊り上げた。

「今の貴女では、本当の主を守ることもできないのではないかしら？ 貴女にとっても、このまま消えるのは不本意なはず。悪い話ではないと思うのだけれど」

その一言に。呆然としていたライダーは一転して、殺意の宿った視線を眼帯越しに叩き付けた。

キヤスターの意図は分からない。死にかけのサーヴァントなど、倒してしまえば後腐れがない。しかし今の言葉は、ライダーからその疑問を剥奪するほど決定的なものだった。

倒れている間桐慎二は、ライダーの本当のマスターではない。真の主は今この場におらず、戦う意思さえ持ち合わせていない。しかし驚くべきは、傍目にはそれと分からぬはずの代理契約関係を見抜いてみせた、キヤスターの慧眼。魔女の言葉は、ライダーの

胸中さえ把握していると錯覚させるほどの、不可視の魔力を孕んでいた。

勧誘の裏に隠された意図は、ライダーの状況を知悉しているという圧力であると同時に、いつでも本当のマスターを手に掛けることができるという脅迫。その一方で、話に乗れば真の主を守るだけのバックアップを提供するという旨味も含まれている。

仮初の主への配慮と、召喚者たる少女への忠誠心。現在の自分の状況と、この場面をどう切り抜けるかという計算。魔女の不明瞭な目的と、自分の返答如何によるキャストアの動向。だが……何をどう考えても、ライダーに残された回答はただ一つだけだった。

結果。ライダーは、キャスターの問いに首肯し——聖杯戦争の勢力図は、ここに再び塗り替えられた。

## 14. 嵐の前の静けさ

あの黒い影が去った後。念のため様子を窺っていた俺たちだったが、予想に反して、その後は何も起こらなかった。

その後、安全を確認すると話もそこそこに学校から脱出し、セイバーの護衛の下、警戒しながら夜道を歩いてきた。幸いにも、他のサーヴァントやあの影が再び襲ってくることはなく、何とか安全に帰ってくる事ができたが……。

「……で、そろそろ説明してもらおうわよ。一体何があったの？」

開口一番。我が家に帰った直後、居間で腰を下ろすなり遠坂はそう切り出した。帰宅中も只ならぬ警戒心を見せた俺とセイバーに不吉なものを感じていたのか、その声は真剣そのもの。

道中で話せるような内容ではなかったし、俺自身も気持ち悪さを抑え込むので精一杯だったため、ここまですぐに会話もしないで来たが、家まで来れば流石に安心感を取り戻す。一度セイバーと視線を交差させると、俺は遠坂に今までのあらましを話して聞かせた。

慎二がマスターであり、学校の結界を仕掛けた犯人だったこと。

ライダーに深手を負わせたが、ランサーの妨害によって慎二共々取り逃がしてしまつたこと。

そして謎の影が現れ、それは街で頻発する事件に関係しているらしいこと。

話があゝの影のことに及ぶと、遠坂は整つた眉を顰めた。

「影？ サークヴァントじゃなかったの、そいつ」

「……いえ、私が今まで見たこともないモノです。人間にもサーヴァントにも、私が知るどのような幻想種にもあのような存在は該当しない。

ただ、私見ですが、アレは魔力を求めて動いているように見えました」

セイバーのその言葉で、はつとあの時の事を思い出した。

林での戦い。セイバーとランサーが共に宝具を発動しようとした瞬間、あの影は現れた。そしてアレが最初の標的にしていたのは、周囲の魔力を収束させていたランサー。

魔力を狙っているとすれば、ランサーが口にした人攫いや行き倒れの犯人、という台詞にも納得がいく。俺たちが予測していたキャスターのやり口では、行き倒れはまだしも、行方不明など起こるはずがないのだ。

だが、あの化け物にはサーヴァントのような知性があるとは思えない。意図的に魔力を求めているなら、人間を丸呑みしたとしても不思議はない。

……その場面を想像して、恐ろしさと共に、胸やけのような不快感が沸き起こつた。

アレが何者なのかは知らないが、そんなことを放つてはおけない。ただ人を喰らうような存在は、何としても排除しなければ。

「厄介なことになってきたわね。どこの魔術師だか知らないけど、ふざけた真似してくれるわ」

「ああ。あいつは俺たちの敵だ。あんなのに襲われたんじや、サーヴァントだって——」  
言葉が続けようとしたところで。ふと、今に至るまで姿を現さないアーチャーのことが頭を過つた。

学校での戦闘を、あのサーヴァントが気付いていないはずがない。だがアーチャーは、最初から最後まで結局姿を現さなかった。連絡を取ろうにも、俺はアーチャーへの連絡手段を持たない。遠坂とセイバーは相互に念話が出来るらしいが、俺はどうやらアーチャーに拒否されているらしく、辛うじて経路パスの繋がりを確認するのが精一杯だ。

令呪に異常はないし、まさかあの傲岸不遜な男が窮地に陥つているとも思えないのだが……。

「——ふん。しぶとく生き残っていたか、雑種ども」

と。心配していた矢先に、唐突に当の本人が襖を開けて入ってきた。

はつとして顔を上げるが、アーチャーにどこか変わった様子はない。いつものライダースーツ姿で、啞然とする俺たちの間をすり抜け、何食わぬ顔で空いていた上座に腰



を下ろす。

突然の乱入に驚いていた俺たちだったが、真つ先に我を取り戻した遠坂が、じとつとした目つきをアーチャーに向ける。不機嫌なオーラを隠そうともせず、遠坂はふん、と鼻を鳴らした。

「ちよつとあんた、今まで何やってたのよ」

「は、少しばかり魔女と戯れてやってた。此度のキャスターは、中々に小賢しい雌狐のようだな」

「キャスターと戦ったのですか!？」

アーチャーがさらりと言った一言に、セイバーが瞠目する。それは……道理で今まで戻ってこなかったわけだ。まさか、街中で仕掛けてくるサーヴァントがいるとは。

学校の敷地を監視できる場所にアーチャーを向かわせたのは、サーヴァントの奇襲も考慮に入れてのことだ。ビルの屋上なら他のサーヴァントが向かって来ればすぐに分かるし、騒ぎを起こせばすぐに周囲に知れ渡るため、仕掛ける方にもリスクが伴う。にも関わらず戦闘になったということは、相手が俺たちの予想を上回る存在だったに違いない。

全員の視線を一身に集めたアーチャーは、不愉快そうに腕を組んだ。その姿には傷一つ見当たらないが、仮にもサーヴァントと戦って、よく無事で帰ってきたと思う。

「正体までは分からぬが、小癩にも私の足止めを計りおった。

——で、貴様らはどうなのだ。私の許にあの雑種が現れたということは、貴様らの方でも何事かが起こったのだろう」

どうやら何かを察していた様子のアーチャーに、先程遠坂に説明した内容をもう一度繰り返す。話し終えると、流石に只事ではないと理解したのか、アーチャーが漂わせている余裕が微かに薄まった。

「——影だど？」

「ええ。アーチャー、アレの正体について心当たりはありませんか？」

セイバーの問いかけに、アーチャーは首を横に振る。やはりと言うべきか、この男にもあの異界の存在については分からないようだ。その様子に、遠坂が疲れたようにため息を吐く。

「処置なしか……ひとまず、その変なヤツについて考えるのは後にしましょう。確かに見過ごしてはおけないけど、情報がないんじゃないでしょうか。それより、今分かっていることからまとめましょう」

あのイレギュラーの影については、不明点が多すぎる。人を襲っているアレには早急に対処する必要があるが、下手に手を出せば火傷をするのは明白。サーヴァントでさえ脅威と認識しているモノに、考えなしに突っ込むのは無謀だろう。

俺たちが無視できないモノに遭遇したように、アーチャーの言葉にもまた聞き捨てならないものがあつた。片手を挙げ、気になつた部分を指摘する。

「アーチャー。アンタ、キャスターが足止めに來た、つて言つてたよな。つてことは……」

「ふん。我の方には魔女が、貴様らの方へは狗が現れた。結果、ライダーめはのうのうと逃げ果せた——手を組んでいるのは、どうやら我らだけではないらしい」

嘲笑混じりに呟くアーチャー。だがそこから導き出された予測に、全員表情が自然と険しくなつた。

セイバーを妨害したランサーと、アーチャーの前に立ち塞がつたキャスター。二者の動きは連動している。そして両者は、明らかにライダーを助けるために動いていた。

敵同士であるはずのサーヴァントが協力し、他のサーヴァントを助ける理由は言うまでもない。ランサー、キャスター、ライダーの三者は、恐らくは同盟関係にある。ランサーの強さが跳ね上がった謎も、キャスターのバックアップがあつたと考えれば不思議ではない。

「ますます面倒になつて來たわね……まさか、三組のサーヴァントが手を組んでるとは思わなかつたわ」

遠坂が、苦虫を纏めて百匹ほど噛み砕いたような表情になる。その心情は、俺も十分

理解できた。

俺たちと遠坂たちは例外的に手を組んでいるが、それは諸々の環境が上手く噛み合ったおかげで、一種の奇跡と言ってもいい。聖杯戦争の参加者は本来、互いに互いの命を狙う存在であり、不倶戴天の敵同士でしかない。それが三組も協力関係を築いているというのは、いくらなんでも異常だった。

が、一旦同盟が組み上がってしまおうと、厄介なことこの上ない。如何なサーヴァントであつても、同格の相手を同時に三人敵に回しては、勝ち目など無きに等しいだろう。こちらにもはセイバーとアーチャーという二人のサーヴァントがいるが、二対三ではやはり不利だ。

「多分、あつちが同盟を組んでるのも、バーサーカー戦を見据えての事でしょうね。敵の敵は味方、つてヤツよ」

そう分析する遠坂の向こうで、アーチャーが何やらごそごそと動いている。何をするのかと思つて注視していれば、部屋の隅に置いてあつた幾つかの将棋の駒を取り出し、机の上にそれを並べ始めた。

駒はそれぞれ、三つ、二つ、一つ、一つ。どうやらこれは、今の戦況を表しているらしい。

ランサー・ライダー・キャスターの同盟。セイバー・アーチャーの同盟。恐るべきバー

サーカー陣営。そして、未だ姿を見せぬアサシン。

力関係で言えば、謎に包まれたままのアサシンが圧倒的に不利だろうが、暗殺者の役割は元よりサーヴァント戦ではない。闇に潜んでマスター殺しを行うのが主戦術である以上、一度機会を掴めば一発逆転も可能。まだ公に姿を現さないのも、隙を伺っているか情報収集に専念しているのだろう。

「二対一で相手をするなら、キャスター陣営が最も与し易いのですが……」

「よりによって、一番楽に戦えそうところが、全部手を組んでるってわけね。変なのは出てくるし、ほんつと今回の聖杯戦争は滅茶苦茶ね」

揃って深刻な顔になるセイバー主従。その一方、黙り込んでいたアーチャーは、持ち出してきた将棋の駒を無造作に動かし始めた。乱雑に動くアーチャーの手によって、整然と並べられていた駒は、すぐにどれがどれだか分からなくなつた。その様子を眺める俺たち三人に、黄金の青年は酷薄な笑みを浮かべる。

「組織戦で不利ならば、混戦に持ち込めば勝ちの目も拾えよう。敵戦力の分断は戦術の基本、一匹ずつ潰していく他あるまい。

そうでなければ、他の雑種どもが潰し合うのを待つか。その場合、最初に狙われるのは我らであろうがな」

確かに……。俺たち以外の陣営が互いに戦ってくればそれが一番だが、集団戦の場

合、真つ先に狙われるのは最も弱い陣営と相場が決まっている。アサシンの所在が不明な以上、俺が他のマスターだったなら、迷わず俺たちを標的にする。セイバーは確かに強いサーヴァントだが、バーサーカーのように無敵めいた能力を持っているわけではない。まして、アーチャーに至っては言うまでもないだろう。

俺たちにとって大変不利な戦況。黙っていても、いずれ追い詰められるだけ。何か、ここから逆転の一步を導き出すためには――

「……ここちから攻めよう。ここちが不利だつて言うんなら、せめて先手ぐらいは取らないと」

と。俺の発言に、三人の表情が変化する。

遠坂は目を見開き、セイバーは微かに眉根を寄せて、それぞれに驚きの感情を表現する。その一方で、やはりアーチャーだけは、面白がるような薄い笑みを浮かべていた。

「珍しいわね。あんなに戦いは嫌だ、つて言ってたのに……どういう心変わりかしら、士郎?」

ややしばらくして、驚きから立ち直った遠坂が疑念も露にそう口にする。

……まあ、驚くのも無理はない。俺はこの聖杯戦争というゲームが大嫌いだし、積極的に戦うのは嫌だと常々皆に伝えてきた。好き好んで参加したのでもないし、何か叶えたい願いがあるわけでもない。そんな俺に、受け身の立場を脱しろという方が難しいだ

ろう。

——けれど。正義の味方を目指すなら、絶対に譲れない一線がある。

「ああ、戦うのは嫌いだ。けど、慎二のヤツは『人間は餌だ』って言い切った。あいつのせいで関係のない人が襲われて、ひよつとしたら死んでいたかもしれない。

もうこれ以上、犠牲者を増やしちやいけない。何の関係もない人たちを犠牲にするよ  
うな奴は——倒してでも、止める」

慎二が禁断の一線を踏み越えた瞬間に、俺の覚悟は決まっていた。あいつが同級生だろうと、長年の友人だろうと、そんな事は関係ない。これ以上人を巻き込む前に、何としても止めて見せる。衛宮士郎は、その為に聖杯戦争の参加者となったのだから。

「……ふうん。少しはマシな顔になったわね、士郎。

いいわ、手伝ってあげる。どっちにしろ、この街の管理者として、慎二の行動は見過ごせない。まずライダーから倒す、っていう方針には賛成するわ。後手に回るのは趣味じゃないしね」

「私も賛成です、凜。ライダーは魔力の供給が不十分なようでしたし、先程の一戦では、消滅していてもおかしくはない傷を負わせました。キャスターと手を組んでいるとしても、傷の完治には時間がかかるはず。本調子ではない内にライダーを排除できれば、キャスターとランサーの相手も楽になる」

凜とセイバーが、それぞれそう口にした。俺の考えが呆気なく受け入れられたことに、若干拍子抜けする。

だがよく考えてみれば、アーチャーが先程述べた通り、戦力を分断し、最弱の敵から攻撃するのは理に適っている。そしてアサシンが未だ現れない今、最弱のサーヴァントは間違いなくライダーだ。俺の個人的な心情が混じっているにしろ、この選択肢は間違っていないだろう。

敵は決まった。問題は、ランサーやキャスターと手を組んでいるであろうライダーを、どうやって対等な条件下に持ち込んで戦うかだが……。

「でも、ちよつと腑に落ちない所があるのよね」

と。俺が首を捻っていると、訝しむように遠坂がぼつりと漏らした。

「ライダーが初めから他のサーヴァントと協力関係にあったのなら、もつと早いタイミングで襲って来れたはず。それに、わざわざ倒される寸前になってからライダーを助ける、っていうのも変じゃない？」

言われてみれば……確かにその通りだ。他のサーヴァントを確実に倒したいなら、ライダー一人で動くよりも、ランサーやキャスターと連携した方が遥かに効率的だ。

けど、敵はそうしなかった。何らかの理由で同時行動ができなかったと仮定しても、慎二にもライダーにも、援軍を待つような素振りとは全くなかった。それどころか、セイ



バーに危うく倒されかかるところだったのだ。つまり彼らは、あの時ランサーが来ることを想定していなかった……？」

「——もしかすると、順番が違うのかもしれない」

「順番？」

「はい。ランサーたちとライダーは、当初無関係だった。ですが何らかの理由で、ランサーたちにはライダーを助ける必要があった。これなら、今回の行動には矛盾がない。

ですが、何故ライダーを助ける必要があったのか。それが分からないのが不気味ですが……次にライダーと戦う時にも、彼らの横槍が入る可能性は高いでしょう」

淡々とそう話すセイバー。その分析には舌を巻く他ない。

が、問題点が消えた訳ではない。これからどうにかしてライダーと戦うにしても、またランサーたちに邪魔されたのでは意味がない。せめて裏にある理由を汲み取るか、或いは完全にランサーたちの妨害を阻止出来るだけの環境があれば良いのだが……。

「——ほう、詭え向きに盤面が整っているではないか」

にや、と邪悪さと傲慢さが攪拌された笑みを浮かべて、アーチャーが突然そう嘯く。その血の色の瞳は、ここではなくどこか遠くを見つめていた。

「小僧。貴様は存外、運氣に恵まれているようだな」

「なんだよ、突然」

またわけのわからないことを言い出した男に、全員が胡乱げな目つきを向ける。そんな俺たちを鼻を鳴らして一瞥すると、アーチャーは先程机に並べた駒を手に取り、くるくると弄び始めた。

「ライダーめは、セイバーに深手を負わされたと言ったな。放っておけば確実に消える、という傷を。であれば、傷の治癒に専心するは当然。

が、彼奴には魔力が足りぬ。それ程の傷ならば、相当量の魔力がなくなれば回復できまい。キャスターに縋ったとて、そこまで面倒を見てやるほどあの女狐は親切ではなからう。

——さて、一つ質問だ。貴様らの学び舎には何があつた？」

「——あ」

その瞬間、遠坂の顔色が蒼白になるのが分かった。おそらく、それを見ている俺も同様だろう。

学校だ。あそこにはライダーが敷いた結果がそのまま残っている。あれを発動させれば、数百人に及ぶ生徒と教員の魔力が吸い上げられる。それだけの量の魔力があれば、いくらライダーが重傷を負っていたとしても、治療するのは容易いだろう——膨大な数の人々を、犠牲にして。

「明後日になると、もう週末だ……ってことは」

「ライダーが行動するなら明日しかないわね」

忌々しい、と言わんばかりに遠坂の整った顔が歪む。どこまでも他人を踏み台にする卑劣なやり口に、憤っているのは俺も同じだ。

俺たちに結界は解除できない。つまり、結界を解除するためにはライダーを倒さなければならぬ。しかしライダーは寸でのところで逃げ出し、今は姿を消している。明日までにライダーを見つけ出すことは、おそらく不可能だろう。

どうにかして、生徒たちを巻き込まない形に持って行かなければならない。結界の解除が不可能なら、逆に人間を結界に近付けないようにすることはできないだろうか？

「なあ、遠坂。人避けの魔術って、あの学校には掛けられないのか？」

「それも考えたんだけど、たぶんあの結界が邪魔になるわ。あそこはもう、それ自体が一つの括られた空間になってしまっている。空間そのものへ干渉するような魔術は、わたし程度じゃ上書きできないのよ」

「くそ……やっぱりどうにかしてライダーを倒すしかないってわけか。けど、どうやって探せば……」

「いえ、わたしたちが探す必要はないわ。あっちの方から出てきてくれるわよ」

と。そこだけは自信を持って、遠坂が断言した。

「あれだけの規模の結界になると、発動する時には術者本人が近くにいない必要があるはず。あの結界を発動させたかったら、ライダーは自分で学校に出てくるしかない。そし

て、あの結界自体も不完全なままだから、発動させたとしてもすぐに効果が発揮できるとは思えないわ」

「では、私たちは学校の付近で待ち伏せを。ライダーが現れたところを急襲します。

ライダーはほぼ戦力にならないでしょうし、ランサーとキヤスターが現れても、数の上では二対二。通常の魔術は私にはほぼ通用しませんから、こちら側が有利でしょう」

遠坂の言葉に続いて、セイバーが冷静に判断を下す。それを黙って見ていたアーチャーも、反対する様子はないようだ。

結界を発動させるための条件を逆手に取って、ライダーを倒す。おそらくそれが、俺たちが優位に立てる最後のタイミングだろう。この機会を逃せば、情勢は一気にこちら側に不利になる。

ライダーが戦力として復帰できる状態になれば、戦力比は三対二。いくらライダーが弱小サーヴァントとはいえ、真名も宝具も判明していない状態では手の内が見えない。無関係の生徒たちを守るという意味でも、戦略的なアドバンテージを確保するという意味でも、速攻を仕掛けるしか手は残されていない。

残された時間は、今夜一晩だけ。その間に、決戦に向けて備えなければ――。

\*\*\*

「ぐあつ……!?!」

手元から、竹刀が勢いよく吹き飛んでいく。まずい、と直感した刹那、俺の鼻先にはセイバーの剣先が突き付けられていた。

「——くそ、また駄目だったか」

「いえ、前回よりは格段に動きが良くなっています。実戦を経験したせいとか、シロウの動きには迷いが少なくなりました。

ですが、適切な対処が出来ているとは言いがたい。動くタイミングは良いのですが、避けるべきか防ぐべきか、その判断が難しいようですね」

気が抜け、どすりと尻餅をついた俺に、竹刀を下ろしたセイバーがそう助言を投げかける。荒い呼吸を繰り返しながら、俺は自分の無力さをまざまざと実感していた。

居間での作戦会議の直後。俺はセイバーに、もう一度稽古を付けてくれるよう頼み込んでいた。前回稽古を受けた時は、アーチャーの介入で嫌な空気のまま終わってしまったが、今日の戦いを通じて、自分がどうするべきなのかを少しは見つめ直す事が出来たのだ。

前回アーチャーは、サーヴァントと戦うための手段を欲する俺を厳しく叱咤した。人間はサーヴァントには勝てない、だから剣の訓練など無駄だと。あいつの言葉は冷酷な

現実であり、ただの魔術師もどきがサーヴァントと戦うのは間違いだ……そう、サーヴァントと戦うのは。

人間を殺したくないという感情から、俺は無意識のうちに選択肢を絞ってしまっていた。サーヴァントは人間ではない、だから戦える。無意識の内にそんな馬鹿げた理屈を掲げて、俺は間違った方向に進んでいた。味方のサーヴァントと、敵のマスターと、その両方を度外視して。

……けれど。あの林で慎二と相對して、俺は思い知った。サーヴァントだけではなく、そのマスターもまた、人間を手に掛ける敵となるのだと。サーヴァントと戦うのがサーヴァントの役割なら、マスターと戦うのは同じマスターであるこの俺だ。そして、人間と戦わなければならないのなら、剣の訓練は決して無駄にはならない。事実、セイバーの斬撃を何度も見ていたからこそ俺は慎二の甘い刃を躲せたのだから。

多分、アーチャーが俺に伝えたかったのはそういう事だったのだろう。そう考えれば、あの時一見無関係に思えた質問の意図も分かる。俺が気付けなかった数々の矛盾を、紅蓮の瞳は最初から見抜いていたのだ。自分が為すべきこと、考えるべきこと。考えれば考えるほど、あいつの謎に満ちた言葉は物事の核心を突いていた。

一般人を手に掛けるマスターと——慎二と、敵対する。サーヴァント打倒という一点に固執するのではなく、マスターとも戦う覚悟。それが固まったから、俺はセイバーに

謝罪と嘆願を行い——そしてセイバーも、快くそれに応じてくれた。

「これは防げるかな? ……つて思うんだけど、実際に動くといつの間にかやられてるんだよな。これつてやつぱり、見極めが甘いのかな?」

「そうですね。防御か回避か、それとも反撃か。どの選択肢を選ぶべきかは、よく相手の動きを観察した上で決めた方が良い。

しかし、シロウの腕前ではカウウンターは難しい。防ぎ方と避け方が上達するまでは、無暗に反撃しようという考えは捨てるべきです」

ふむふむ、とセイバーの言葉に頷く。確かに俺は、どうやって攻撃を凌ぎ切るかで精一杯になっていて、セイバー自身の動きに着目する余裕は無かった。しかし、攻撃に移るということは必ず予備動作があるわけだから、それを見分けることができれば自ずとどう対処するべきかも見えてくるだろう。

「……………」

ちらり、と時計に目を向ける。日付がもうすぐ変わろうとしているあたり、セイバーと打ち合っていた時間は相当長かったのだろう。ずっと集中していたせいかな、あつという間に時間が過ぎてしまった。

本来、夜は遠坂から魔術の指南を受けるはずだったのだが、明日はライダーや、場合によってはランサーやキャスターと事を構える可能性の高さを考えて、あいつは自分の

準備に専念している。ただ他マスターやサーヴァントと戦うだけならとくに準備は終わっているとのことだが、問題になるのはあの謎の影。全くのイレギュラーである怪物の対処も考えなくてはならないため、俺の方まで面倒を見ている余裕はなくなってしまうらしい。

時計に向かう俺の視線に気付いたのか、セイバーの顔がふっと綻ぶ。訓練に使った竹刀を道場の隅に片付けると、まるで疲れを感じさせない様子でこちらの方に向き直った。

「遅くなってしまいましたね。シロウも疲れているでしょうし、そろそろ終わりにしましょうか」

「そうだな、そうするか。」

「……ありがとな、セイバー。戦ってきた後だつてのに、わざわざ付き合わせちゃつて悪い」

「いえ、気にしないでください。人に教えるという経験も、楽しいものですから」

そう微笑むセイバー。しかしどこか、その視線は遥か遠くに向けられていた。その表情が気になって、思わず気になった質問をぶつけてみる。

「セイバーはさ。前にも、こうして剣を教えたことがあるのか？」

「ええ。数はそう多くありませんでしたが、そうした機会もありました」



こくり、と頷かれる。セイバーは、剣の英霊として召喚される程剣の扱いに熟達した人物だ。剣術を教えるにはぴったりの人材だし、彼女ならさぞ優秀な教師だっただろう。

だが。セイバーの表情は直前までとは打って変わり、どこか陰のあるものを宿していた。楽しい記憶を振り返るには、些か以上に不釣り合いな暗さ。

「……ですが。生徒を導けなかった私は、良い指導者ではなかったのでしょうね」

俺の顔を見上げ、しかし俺ではない何かを見つめて。セイバーは、ぽつりとそう呟いた。

「……そうかな。セイバーはいい先生だと思うけど」

「いいえ。良い教師とは、教え子と強い繋がりを築き、その力をより良い形で伸ばし導く者のこと。その点で言えば、タイガは大変立派な教師です。」

——ですが、私はそのどちらでもなかった。こうして剣技は教えられても、それ以上は荷が勝ち過ぎたのでしよう」

藤ねえが良い教師だと形容されたことに驚き、思わず目を見張る……が、よく考えてみれば確かにそうかもしれない。

抜けているようで肝心な所は押さえているし、あれで仕事はきちんとこなしている。生徒からの人気も高いし、親身になって相談に乗ってくれる。普段はダメ人間に見えて

も、何だかんだで藤ねえはしっかりと教師をやっているのだろう。

けど、セイバーが言いたいのはそういうことではない。彼女は、『良い指導者ではなかった』と口にした。それは、教師というニュアンスではなかったように思う。

サーヴァントとして召喚される過去の英雄。そして英雄とは、王や皇帝のように指導者的な立場にあつた人物も含まれる。多分セイバーは、生前の英雄としての自分を振り返っているのだろう。

しかし……セイバーが浮かべている表情は、英雄らしい自信や誇りとは対極に位置する。むしろそれは、後悔しているような、自分を責め立てているような重さに近い。

「セイバー」

だからなのか。無性に、彼女という人間が気になった。

英雄と呼ばれるに相応しい武勇。万能と謳われる聖杯を欲する心情。過去に背負つた重み。アーチャーやランサーのような、見るからに英雄然としたサーヴァントなら、その数々の理由も頷ける。だが、この少女が……それも俺よりも年下に見える女の子が、想像を絶する何かを背負っている事実は、やはりすんなりと受け入れられるものではない。そして、沈痛な面持ちで佇むセイバーを無視できるほど、俺は冷徹にはなれなかった。

昔、セイバーに何があつたのかは知らないけどさ。そこまで分かっているんだったら、セ

イバーはやつぱり良い先生だよ。

生徒を導けなかった、つて今セイバーは言ったけど、それはセイバーだけに責任があることじゃないだろ。生徒がみんな真面目なわけじゃないし、問題児だつて当然いる。こつちがいくら正しく教えようとしても、上手く行かないことだつてあるさ」

と言うと。驚いたように、セイバーが目を丸くした。

俺は藤ねえと付き合いが長いから、学校での愚痴を聞く機会も今まで何度もあった。その中には、いじめや不良生徒のような問題も含まれる。自分はちゃんと教えているつもりなのに、どうして問題が起きてしまうのだろう……と、藤ねえは真面目な顔で何度も悩んでいた。

だけど、生徒が問題を起こしたから指導していた教師にも必ず問題がある、という結論に繋がるのはおかしいと思う。教える人間にも教えられる人間にも完璧はない以上、エラーが起きないはずがない。絶対数から見れば、むしろ教わる側に問題があることの方が多いだろう。

セイバーの過去に何があつたのかは知らないし、軽々しく踏み入つていい領域ではない。しかし、生真面目な性格のセイバーは、きつと真摯に問題に取り組んだに違いない。その結果、後悔するような何かが起きてしまったとしても、それはセイバーだけが責任を感じなければならないものではない筈だ。

「あ、偉そうなこと言つてごめんな。気に障つたなら謝る」

「いえ、そんなことはありません。シロウが私を慮つてくれたのは承知しています」

静かにその口にするセイバー。その端麗な容貌に浮かんでいた驚きは、穏やかな微笑みに変わっていた。どうやら、俺の言葉は悪い方向には働かなかつたらしい。

しかし、やはりその瞳はどこか遠くを見つめたまま。彼女が考え事に耽つているの是一目瞭然だった。これ以上ここに居ても邪魔になるだけだと判断して、木張りの床から立ち上がる。

「……つと、また遅くなつちまうな。じゃあ、そろそろ戻るか」

「シロウは先に戻つていてください。私はこの竹刀を片づけてから戻りますので」

「そっか、わざわざ悪いなセイバー。今日は本当にありがとうな」

「ええ。お疲れさまでした、シロウ」

優雅に一礼するセイバーに背を向け、連日の運動で筋肉痛になりかけている足を動かして外へ向かう。外はとつくに真つ暗で、物音ひとつ聞こえない。深夜なのだから、考えてみれば当然だ。

明日は戦いになる。他の生徒を巻き込む前に、ライダーを倒しきらなければならぬ。そのマスターである慎二とも戦わなければならない以上、今日は意識を切り替えて早めに休んでおくべきだろう。戦いの趨勢は、明日の一戦で決まると言つても過言では

ないのだから。

「アーチャーのように。人を見抜く眼があれば、また別だったのでしょか」

立ち去る直前。背後から、そんな言葉が聞こえた気がした。

\*\*\*

同時刻、衛宮邸の一室。

「——これで良し、と。ふう、一晩でできるのはこんなところかしらね……」

ごそごそ、と床に配置された無数の器具の中から、目当ての宝石を取り上げる遠坂凜。代わって、今まで握っていた別の宝石が床に安置される。その隣に置かれているのは、細かく注釈の施された手書きの地図。翌日の戦闘に備えて、彼女もまた可能な限りの対策を講じていた。

次の戦いで敵を仕留めなければ、状況はますます不利になる。加えて、魔力を求める影というイレギュラー。それがキャスター陣営の手によって操られているなら、脅威への対策は必須。場合によっては、切り札を使う局面も予想される。戦争は事前の準備で

ほとんど勝敗が決まっているという条理を、聡明な彼女が理解していないはずはなかった。

「……………」

集中のし過ぎで疲れた目を擦り、一旦は取り上げた宝石を再び床に置く少女。もう少し作業を続けるかとも考えたが、備えは十分に講じてある。これ以上は疲労を重ねるだけだと判断し、床に散らばった器具を回収しようと腕を伸ばした——その時。

「ふん。忙しそうではないか、娘」

ガチャリと扉が開かれると同時に、予期せぬ来訪者が踏み込んできた。ぎよつとする凜を尻目に、闖入者は悠々と部屋を横切り、我が物顔で椅子を占拠する。そのままどつかと腰を下ろすと、アーチャーは愉快気に床に座り込む凜を見下ろした。

驚きから立ち直った凜の表情が、ややしばらくして不快感に染まる。マスターである彼女にとっては、この得体の知れぬサーヴァントの接近に気付かなかったという事実以上に、自らの手札である魔術を覗き見られる事が気に食わなかった。今の状態を見られても特に支障はないが、かといって気分が良くなるうはずもない。

「ちよつと、女の子の部屋に入る時はノックぐらいしなさいよね」

「ハ、笑わせるな。貴様は女の子などという柄ではあるまい。淑やかさが今三つほど足りん」

「……なんですつて?」

額に青筋を立て、鼻で笑うアーチャーに向き直る凜。しかし自分がからかわれているのだと気付くと、洗面を作つて真つ向からアーチャーを睨み付けた。

人をはからかうことを好む上、無駄に頭と口の回るこの男相手に舌戦を繰り広げるのは時間の無駄。それに普段気儘に動くアーチャーが態々自分の所まで出向いたのは、ただの気紛れではなく、何らかの用向きがあると見て然るべきだろう。そろそろ休息に移ろうかと思つていた矢先、降つて湧いた珍事は早々に片付けておきたかつた。

床から立ち上がり、壁近くに置かれたベッドの上にごさりと座り込む。椅子に凭れ掛かるアーチャーに負けじと腕を組み、今部屋の主は自分だという意味を滲ませつつ、凜は早速本題を切り出すことにした。

「で、何しに来たのよ。あんた」

「なに、大した要件ではない。思えば、貴様とは然程言葉を交わした覚えもなかつたのである。少しばかり、セイバーのマスターを見定める気になつたわけだ」

感謝するが良い、と嘯くアーチャーに、さしもの凜も鼻白んだ。つまるところこの英霊は、ただ自分と会話をしに来ただけ。だが凜を『セイバーのマスター』と表現しているからには、それに相応しい人間であるかどうかを確かめる、という意味合いも含まれているのだろう。

面白いじゃない、と笑みを浮かべる凜。全てを見抜く真紅の魔眼の前にも、臆した様子は見られない。そもそもこの油断ならぬ英霊の前で、遠坂凜ともあろう者が弱みを見せる気など更々なかつた。

「むっ。」

と。その様子を眺めていたアーチャーの視線が、床に置かれた紙に移される。その正体が学校付近の地図であることを見て取ると、機嫌の良さを表すように青年の口元が緩んだ。

「随分と用意周到ではないか、娘。だが確かに、他の雑種共を出し抜き聖杯を得るには、微塵の労力も欠かせまい。万能の願望器とやら、人間にとつては得難い魅力であろうよ」

「お生憎さまね。他はどうだか知らないけど、わたしは叶えたい願いなんてないの」  
「……ほうっ？」

予想外の返答に、アーチャーの瞳が僅かに見開かれる。この娘のサーヴァントであるセイバーには大きな願望があつたが、マスターの方に願望が見受けられないとは、人の欲望を愉しむアーチャーとしては些か拍子抜けだった。

「では、貴様は何を求めて戦う？ よもやあの小僧のように、人助けをしたいなどのたまうつもりではあるまい」



「冗談。わたしはあんなお人よしじゃないわ。

——ただ、そこに戦いがあるから戦うだけ。聖杯はおまけみたいなものよ」

召喚の夜、セイバーに答えたものと同じ言葉を返す凜。何度問われようとも、彼女の持つ答えは変わらない。人の欲望を成就させる聖杯も、彼女にとつては景品の便利グッズと同列のものでしかない。この闘争は自身に課せられた義務であり、避けては通れぬ障壁。故に踏破する——聖杯自体を求める他者とは、前提の時点で違っている。

その思いもかけぬ豪胆な言葉に、微かに驚いた様子を見せるアーチャー。凜の答えが琴線に触れたのか、一瞬品定めをするように目を細めた後、愉快でたまらぬというように笑い出した。

「ク——はは、はははははははは！ これはまた稀有な女よ、ここまで我を笑わせるとは！ セイバーといい貴様といい、存外に見所がある！」

呆氣に取られる凜にも構わず、笑い続ける黄金のサーヴァント。しかしひとしきり笑った後、アーチャーは唐突に真顔に戻ると、先刻とは打って変わった冷たい目で凜の瞳を貫いた。

「だが、それならばセイバーと貴様は相容れぬな。あの小娘は貴様と異なり、聖杯に託す悲願を持っている。聖杯を求めぬマスターと、聖杯を求めるサーヴァント。どこかで胸襟を開かねば、いずれ歪みが生じるだろうよ」

「……………」

アーチャーの指摘に、凜の表情が強張る。言われてみれば……セイバーの願望を、凜はまだ聞いていない。セイバーが善良な性質であることは疑いようもないが、その願いの質が凜と相容れるものとは限らない。

十年前の惨劇は、聖杯を手にした者によって引き起こされた。例えセイバーにそのつもりがなかったとしても、願いの副産物によって思わぬ事態が発生するかもしれない。アーチャーに指摘されるまで失念していたのは癪だが、セイバーが聖杯に懸ける願いは聞いておかなければ——と、凜は密かに決意した。

「そもそも——この聖杯戦争とやら、それ自体が胡散臭い。万能などと謳ってはいるが、眉唾物よ」

続けて、冷たい表情を崩さぬままそう言い放つアーチャー。流石に聞き過ごせず、凜は険しい顔で聞き返す。

「ちよつと。どういう意味かしら、それ」

「分からぬか？ 我には、何故貴様らが聖杯などというモノを信じているのか、その呆れた愚直さの方が余程理解に苦しむが……いや、雑種にとつて固定化された観念を変えろと言う方が無理な話か。」

仕方あるまい、ここは貴様らのレベルに合わせて話を進めてやるとしよう。感謝する

がいい」

尊大な態度のまま、どこから持ち出したのか、缶ビールの蓋を開けるアーチャー。その傍若無人ぶりに眉を顰める凜にも構わず、冷蔵庫から勝手に取ってきたであろう酒を一口飲むと、青年は再び足を組み直した。

「女。この聖杯戦争なる遊戯が、どのようなものであるかをもう一度語ってみるがいい」  
「は……?」 それ、アンタが召喚された日に一通り教えたはずよね?」

「我が知っているかどうかは問題ではない。貴様自身の口で語る事に意味がある、疾く話してみよ」

続け様にそう要求するアーチャーを前にして、凜の表情に困惑が浮かぶ。際立った聡明さを持つ凜であっても、この男が何を求めているのかは理解しがたかった。

これこそが、並外れた頭脳と観察眼を有するアーチャーの話術。一見無秩序に見える言葉の羅列と問いは、彼にしか見えない線で繋がっている。この英霊の放つ人ならざる威圧感と相まって、話の先が全く読めないが故に、アーチャーと対峙した人物は自在に絡まる言葉の鎖に翻弄されてしまう。それはこの男のマスターである衛宮士郎も、サーヴァントであるセイバーも、そして一流の魔術師である遠坂凜も同様だった。

万能と謳われる聖杯は、七人の魔術師を選定し、それぞれにサーヴァントと呼ばれる英霊を召喚し従わせる力を与える。

選ばれた魔術師はサーヴァントの主となり、自分以外のサーヴァント及びマスターとは敵対関係になる。

六人のサーヴァントが倒されるまで聖杯戦争は継続され、最後に残った一組の主従に、聖杯の所有権が与えられる。

読めぬ意図に惑わされながらも、アーチャーの要求通り、聖杯戦争の概要を語っていく凜。それは始まりの夜に、衛宮士郎とアーチャーの前で話した内容と何も変わらぬ。だが凜が話し終えると、青年は我が意を得たり、と言わんばかりの笑みを浮かべて頷いた。

「そら、事の始まりからおかしいではないか」

「おかしいものにも、事実を言っただけじゃない。一体何の不满があるって言うの？」  
「ふん——己に相応しい魔術師を聖杯が選ぶだと？　まずその時点で有り得ぬだろうよ。道具とは意思を持たぬ存在だ。意思に近いものがあつたとしても、そもそもは何者かによって作り出されたものに過ぎん。この時代で言えば、人工知能が良い例だ。」

聖杯とやらが自然発生した道理はあるまい。となれば、何者かがそれを作り上げたのだ。では何故、そのような馬鹿げた真似をする必要があつた？」

万能の願望器を作り出せるような者がいるなら、それは神にも等しい存在だ。そこまで至っているような存在には、願望器など必要ない。

だとすれば、上からではなく下から考えていくべきだろう。聖杯は最初から願望器であつたのではなく、何らかの手段によつて、最終的に願望器になるようなモノなのだ。「……ええ、アンタの言う通り。冬木の聖杯は、遠坂・マキリ・アインツベルンの三家によつて組み上げられたモノよ」

「は、それでは尚更不自然だ。ならば何故、魔術師の選定などという機能を付加した？ 合理性を重視する魔術師どもにしては、随分と無駄な機能よな」

魔術師たちが願望器を必要としているなら、そんな機能は要らない。選定も何も、自分たちが聖杯を使えばいいのだから。

聖杯の召喚には七人の魔術師が必要だという話もあつたが、その程度は御三家の人間だけを集めれば事足りる。わざわざ、外様の魔術師に干渉させる理由はないのだ。

いや——そもそも、ただの魔術儀式ならば聖杯戦争を起こす必要はない。単なる願望器の奪い合いなら、魔術師同士の内部抗争で済む。それが何故、英霊の現身を召喚し、戦い合わせるなどというルールに変わっている？ 聖杯の成り立ち、所有権の所在、どこにもサーヴァントという要素の必要性は感じられない。

願いが叶うという謳い文句の中に見え隠れする、不要な点、不審な線。聖杯戦争のルールをなぞつていくだけで、浮かび上がってくる複数の矛盾。深く考えれば理解出来るであろう事柄にも、ルールを盲目的に信じていた者と、端から懐疑的に見ていた者の

差が如実に表れていた。

「流石にここまで言えば気付くか。この下らぬ遊戯には、怪しい点が多すぎる。何の裏もないと信じてかかるのは、愚策以外の何物でもあるまい。

甘い言葉で人を惑わし、その裏で騙し利用するのは古来よりの人の性。万能の器という蜜の影には、如何なる棘が潜んでいるのだろうか?」

凍り付いた凜の表情を、上機嫌に眺める黄金の英霊。聖杯戦争の矛盾に気付いていながら、この男はそれすら娯楽の一環としか捉えていなかった。

「まだまだ青いな、小娘。この聖杯戦争には裏がある。命がけの賭博だ、上手く立ち回らねば破滅を招くぞ」

「……どうしてそんなことを教えてくれるのかしら?」

動揺を冷靜さという仮面で覆い隠し、アーチャーに問い返す凜。十年かけて臨んだ儀式を、今まで疑いもしなかったものを根底から揺さぶられたにも関わらず、淡々と事実を受け止めるその様は、正しく一流の魔術師に違いなかった。

一方、思いの他冷靜さを崩さない凜に、肩透かしを食らったように鼻を鳴らすアーチャー。会話の間も飲んでいた缶ビールを一気に空にすると、伸ばしていた足を最初のよう組み直した。

「なに、貴様とセイバーの間に軋轢が生じるのは望ましくないのだな。些末事でセイ

バーに退場されてもつまらぬ」

そう言ううとアーチャーは、空になった缶を弄びながら話は終わったとばかりに席を立つ。ベッドの上に座ったままの凜は、自然とその長身を見上げる形になった。

威圧的な真紅の瞳に見下ろされるも、なによ、とばかりに睨み返す凜。会話の主導権を握られようとも、負けてなるものかという強気な瞳は、この英霊が纏う覇気にも微塵も劣っていないかった。

「わたしが気付かなかった事を教えてくれた事には感謝するわ。でも、あの娘はわたしのサーヴァントなんだから、アンタにはあげないわよ？」

「その意気だ。セイバーともども、精々我を愉しませるがいい」

最後ににやりと口の端を吊り上げると、アーチャーはそのまま悠然と部屋を出て行った。

「……………はあ」

アーチャーの気配が去ったのを確認すると、少女の体から一気に力が抜ける。どきどき、とベッドに倒れ込むその様子からは、先程までの威勢はすっかり消し飛んでいた。

並の人間なら、あの男の正面に立つだけでも緊張する。何もかもを見透かしたような瞳と、重みのある言葉に相對するのは、年齢に似合わぬ豪胆さを持つ凜であっても気力を消費し尽すものだった。

加えて、アーチャーが指摘した矛盾の数々。言われてみれば……という内容ばかりで、何故今まで疑問を持たなかったのかとも思う。幼少期からそういうものであると教えられて育つと、疑うという選択肢がそもそもなくなるのだろうか……頭から信じ込むというのは、魔術という一分野の研究者としても問題だろう。その点は、素直に改めるべきだった。

「そういえばそうよね。どうして他の魔術師が聖杯戦争に加わられるようにしたのかしら……」

御三家が聖杯を作った、というところまでは良い。それぞれ数百年、アインツベルンに至っては千年を越す歴史を誇るが、それぞれの家に単体で聖杯を作り上げる力はない。異なる家門が協力し合う関係は、魔術の世界に於いても珍しくはないのだ。

が、そこに他の魔術師が絡むとなると話は別だ。魔術師は須く保守的なものであり、御三家が聖杯の所有権争いで分裂したのだとしても、他の魔術師を介入させるとは思えない。

では、魔術師が聖杯を奪い合った結果今日の聖杯戦争ができた、という前提がそもそも間違っていることになる。そうではなく、最初からこうなることを予測していた……つまり、他の魔術師を加えた上で、七人という数を揃える必要があった……？

おそらくは、そう考える方が自然だろう。魔術師は無駄な労力は割かない。これほど



大掛かりな魔術儀式であれば、尚更綿密な計算が行われたはずだ。となれば、サーヴァントの召喚、マスター同士の抗争というプロセスも、何らかの目的に繋がっている。

聞こえの良い言葉の裏に隠された、見えない聖杯戦争の目的。始まりの御三家は、何の為に戦争というルールを敷いたのか——それを知らないままに戦いを続けるのは、その御三家の一人である凜にとって、ひどく危険な選択に思えた。

「何のために、ねえ……」

魔術師の最終目的は、根源へ至る事。聖杯がサーヴァントの召喚という桁外れな現象を起こしているのは事実なのだから、それ以上の奇跡があったとしても不思議はない。御三家が聖杯を作り出した理由も、間違いなくそれだろう。

しかし、そう考えると『万能の願望器』という謳い文句さえ怪しく感じられてくる。七人という数を集める事が必要だったと仮定するなら、この謳い文句はこれ以上ない釣り餌になる。過去四度行われたという聖杯戦争、その全てで願いを叶えた者が確認されていないという事実も、それを踏まえれば納得できるものがあった。

人数という条件、サーヴァントという存在、根源へ至る術。謎を解くパーツは揃ったが、それぞれを結びつける決定的な情報が足りない。聖杯を作った家系であるにも関わらず不足する情報に、父が早逝してしまったことが返す返すも悔やまれた。

「まあ、分からないことをあれこれ考えても仕方ないわね。最終的に勝てばいいのよ、勝

てば」

そう結論付け、ぼふっと枕を叩いて気合を入れる凜。裏に何が隠れているにしろ、まずは勝たなければ話にならない。事実はどうであろうと、他のサーヴァントは打倒するべき敵なのだから。

聖杯戦争というファクターを差し引いたとしても、街に蔓延る不逞な魔術師は許しておけない。管理者として、責任を果たさなければならぬという思いもある。そして自分自身とセイバーの力があれば、彼女は全ての相手に勝利する自信があった。

「それにしても……アイツ、ホントどういうヤツなのかしらね」

ベッドの上に寝転びながら、アーチャーが去って行った戸口にちらりと目線を向ける凜。

気儘に動いたかと思うと、嵐のように状況を乱すだけ乱してまだ去っていく。それだけならまだ天災という事で納得もできようが、情報という恵みの雨も降らせていくあたり、一概に迷惑だとも言えない。

実際、セイバーと願望の話や、聖杯戦争に対する新たな見方は凜にとつてプラスになる情報だった。今まで深く考え込むことさえしなかったそれは、人より一段上の視点から物事を俯瞰しているアーチャーだからこそ気付けた事実だろう。

今回召喚されたサーヴァントの中で、異例中の異例と言えるイレギュラーな英霊。霊

体を召喚するという大前提を根底から覆しておきながら、自身の情報が欠落しているという不安定さ。だがセイバーによれば、あの英雄は最強の切り札ジョーカーになる可能性を秘めている。

前回の聖杯戦争時に無敵を誇り、無限の宝具を使いこなしたというアーチャー。万全には程遠い現在の姿であっても、あの観察眼と分析力は本物だ。味方になっている間は心強いが……騎士王をして勝てぬと言わしめたその力が、いつ敵に回らないとも限らない。いずれにせよ、あのサーヴァントから目を離すべきではないことだけは確かだった。

「その前に、まずは明日の戦いかしらね。勝つわよ、絶対」

ぐつ、と拳を握る凜。決戦までの時間は、既にそこまで迫っていた。

## 15. 決意の選択

早朝。鳥の囀りで目を覚ますと、体のあちこちに違和感があった。

「痛っ……くっつそ、筋肉痛か？」

昨夜セイバーに劍の稽古をつけてもらっていた影響か。腕や足腰に、痺れるような痛みがある。それだけではなく、よく見るとあちこちに痣や擦り傷の痕が残っていた。

普段は使わないような筋肉を動かした事による筋肉痛と、竹刀で叩かれた傷の二重奏。結構キツイが、まあ動けない程ではない。この程度で痛がっているのは、笑われてしまうだけだろう。

ふん、と気合いを入れて布団から出ると、大きく伸びをして深呼吸。冬の冷たい空気が肺に行き渡り、寝起きで冴えない頭を完全に覚醒させてくれた。頭を振って時計に視線を送ると、時間にはまだ余裕がある。この分なら、朝食を作ってもまだお釣りが来るだろう。

朝食の計算をしながら服を着替え、部屋から出て台所へ向かう。昨日はあの騒ぎのせいで残り物を食べる羽目になったから、朝食に回せそうなものは残らなかつた。簡単に一品か二品おかずを作って、後はふりかけと味噌汁で勘弁してもらおう。

「……………?」

カタン、という音。居間に入ろうとしたところで、台所の方から何か物音が聞こえた。珍しく、この時間帯に誰か起きているのだろうか？

「おはようございます、先輩」

「ああ。おはよう、桜」

襖を開けると、そこには見慣れた後輩の姿。エプロン姿でお玉を持っているところから見て、朝食を作ってくれている最中だったのだろう。

横に目線を映すと、コンロにかけられた鍋が見える。どうやら味噌汁を作り始めたばかりのようだから、これなら俺が手伝えることも——って、ちよつと待て。桜は確か、体を壊していたのではなかったか。

「さ、桜?! その……………具合は大丈夫なのか?」

「はい、ちよつと風邪気味だっただけなので、もう大丈夫です。心配をかけてしまつて、すみませんでした」

そう言つて一礼する桜。にこやかに微笑むその姿は、確かに元気そうに見える。

けど……………桜がここにいるのは、一体どういふことなのか。昨日、俺たちは慎二とライダーを倒しかけたばかり。そんな状況下で慎二が、自分の妹を敵マスターの家に送り出すような真似をするだろうか。

「桜。慎二のヤツ、何か言つてなかったか」

「え？ 兄さん……ですか？ えつと、兄さん、昨日から家に帰つてなくて……」  
「帰つてない？ あいつがが？」

それはおかしい。ライダーがあれだけの傷を負い、慎二自身にも戦う手立てがないのでは、あいつは自分の家に逃げ込む他なかつたはずだ。

だが、桜の表情に嘘を示す色はない。なら、本当にあいつは帰つていないのか……ひよつとすると、敢えて自宅を避け、キヤスターかランサーの拠点に匿われているのかもしれない。セイバーの追撃を考えていたのだとすれば、その可能性も十分あり得る。

「ええ。最近、兄さん帰つてこないことが多くて……それより、先輩たちにもご迷惑をおかけしてしまいましたし、今日は久しぶりにわたしが朝ご飯作っちゃいますね。先輩は、のんびり休んでいてください」

ぐつ、と握り拳を作つてそう言う桜。元氣も良いし、休んでいた原因にも特に慎二は絡んでいないようだから、これ以上問詰める必要もないだろう。

——こんな健気な後輩の兄に、おまえは何をしようとした？

自分の中で聞こえてきた声に、浮かべようとした笑顔が凍る。

慎二が何をしようとして、どういう立場になろうと、あいつが桜の兄貴だという事実に変わりはない。けれど、俺と慎二が敵対関係になつてしまつているのが現実であり

……それを知ったら、桜はどんなに悲しむことか。

覚悟を決めた、はずだった。慎二を止めなければならぬのは間違いない。けれど、それが……慎二の命を奪う結果に繋がってしまった時。俺は一体、どうやって桜と向き合えばいいのか。

「……そつか。それじゃ朝食は任せようかな。でも、まだ具合が悪いようだったらちゃんと言うんだぞ。風邪がぶり返すと困る」

硬直した思考の中。何とか、それだけを捻り出す。

「はい。任せてください、先輩」

上ずった俺の声に気付く様子もなく。最後に微笑むと、作りかけだった味噌汁の方に向き直って調理を再開する桜。上機嫌なのか、鼻歌まで口ずさんでいる。

普通料理をするといえば面倒くさがる人が多いのだろうが、我が家に限ってはその真逆で、料理はどちらかというと娯楽に近い。それで、よく調理場の取り合いが発生するのだ。最近には桜に朝食を作ってもらおう機会も減っていたし、ここは任せてもいいだろう。

……それに何より、これ以上桜と向き合っていると感情を隠せなくなりそうだった。

\*\*\*

「……なあ。なんかおかしくないか、これ」

俺の小声に対して、無言で漬物を咀嚼するアーチャー。言葉こそ発さないが、激しい不快感を抱いているのは、その殺気に近い雰囲気だけで察しがついた。

見れば遠坂もセイバーも、揃って苦々しげな表情を浮かべている。楽しい会話が飛び交うはずの食卓で、全員が同じように口を噤み、嫌悪感さえ漂わせているのは明らかに異常だった。

だが、一人だけ。

「先輩、このお浸しはどうですか？ 美味しいほうれん草があつたので、作ってみたんです」

「あ、ああ……ありがとう、桜」

にこにこ笑顔を浮かべ、朝食を勧めてくる後輩。この異様な空間で、桜だけがいつも通りだった……いや、そう言うのには語弊がある。この場にいる人間の中で、桜だけが異彩を放っていた。

彼女だけが、何も気づいていない。場の空気を読むのに長けた桜が、ここまで周りの雰囲気を感じできないなど、今日が初めてのことだった。



「……ねえ」

と。流石に見かねたのか、食器を置いた遠坂が、真剣な目つきで桜に問いかけた。

「貴女、ちよつと大丈夫？」

「えつと……何がですか？ 遠坂先輩」

「これよ。貴女、何とも思わないの？」

遠坂が指差すのは、たった今桜が俺に勧めたお浸し。憤懣やる方ないといった様子の遠坂に対して、桜は自分が何を指摘されているのか理解できていないようだ。その致命的なズレに気付いていないのは、桜本人しかない。

はてな、と首を傾げながら、お浸しを口に運んでみる桜。皆の視線を浴びながらほうれん草を咀嚼していた彼女だったが、不思議そうな表情を浮かべるばかりで、違和感に気付く様子はない。

「あの……普通のお浸しだと思えますけど。ひよつとして、お口に合いませんでしたか？」

だとしたらごめんさい、と悄然と俯くが……これはわざとやっているわけではない。冗談ではなく、桜は本当に何がおかしいのか分からないのだ。普段の彼女からは有り得ぬ異常さに、苛立ちよりも先に、得体の知れない不安を感じた。

「なあ桜。味見したんだよな、これ」

「ええ、いつも通りしたつもりですけど……」

「濃すぎるぞ、これ。どれだけ塩と醤油を使ったんだ？」

いや、お浸しだけじゃない。漬物も、味噌汁も、鮭の塩焼きも。どれもこれも、とてもなく味が濃い。

……なあ、桜。ひよつとして、具合でも悪いんじゃないのか？」

「え——」

さつ、と桜の顔から血の気が引く。俺たちの顔を順番に見回し、それからもう一度料理に目を向けると、蒼白な顔に怯えのようなものが貼りついた。

この家に来たばかりの頃は、確かにこういう失敗があった。だがここ最近、どれか一品ならまだしも、全ての料理で致命的な失敗をしたという記憶はない。そもそも失敗をしたとしても、普通は味見の時点で気付くはずなのだ。それすら分からないということは……桜の体調に、何か異変が起きているのではないか。

「サクラ。具合が悪いのでしたら、遠慮なくそう言ってください。すぐに——」

そう、セイバーが言いかけた途端。

「……………あ」

バタリ、と。糸が切れた人形のように、桜の体が横に倒れた。

「な——!？」

「桜!」

箸を放り投げ、慌てて駆け寄る。その額に触れると、驚くほどの熱さが伝わってきた。……冗談じゃない。こんなに熱があるのに、俺は今まで、後輩の状態にすら気付いてやれなかったのか。元気よく振舞っているように見えた桜は、無理にそう演じているだけだったのだ。

「ああもう、何やってんのよ……! 士郎、体温計とタオル持ってきてなさい! セイバーかアーチャー、どっちでもいいから桜を部屋まで運んで!」

数瞬遅れ、テーブルを回り込んできた遠坂が、硬直している俺から奪い取るように桜の体を抱き起こす。てきぱきと指示を出し始める遠坂を見て、俺は慌てて洗面所に走り込んだ。

大急ぎで洗面器に水を入れ、タオルを絞る。走って戻ると、丁度セイバーが桜を抱えて行くところだった。洗面器とタオルを抱えたまま、俺もその後に続く。

もつと早く気付くべきだった。昨日まで桜は、出歩けないほど具合が悪かったのだ。そんな病人が、一日で料理ができるまで快復するはずがない。冷静に考えれば分かることだった。

慎二の事が頭にあつたせいとか、そこまで気が回っていなかった。桜が休んでいたのは慎二の差し金によるものだと決めてかかっていたせいで、それが違つたと分かつた後さ

え、そちらにばかり意識が向いていた。桜への注意がおざなりになっていたのは、完全に俺が悪い。

……これでは、先輩失格だ。先のことばかり考えていて、目の前が何も見えていなかった。足元すら覚束ないまま、後輩を蔑ろにしたままで、どうやってこれから人を守っていけるというのか。

——そんな俺を。蛇のような瞳が、見ている気がした。

\*\*\*

「……三十八度五分。多分、風邪がぶり返したのね」

客間から出てきた遠坂が、ため息を吐きながら体温計をかざして見せた。重病では無く、ただの風邪で終わるならまだ良いのだが、ここまで熱が高いとひよつとするとインフルエンザか何かかもしれない。

「病院に連れて行きたいところだけど……正直、この子を今この家から出すのは得策じゃないわ」

「こんな時に限って藤ねえもいないしな。つくづく間が悪いというか……」  
姿を見せれないと思っていた藤ねえだったが、つい先ほど、桜の看病で立て込んでいる

間に電話を寄越してきた。昨晚美綴の意識が一度戻ったらしく、病院の方に朝イチで向かったせいでこちらには立ち寄りなかつたようだ。今日はそのまま病院に留まり、学校に顔を出すのはかなり遅くなるという。

これから学校で、もしかすれば他の生徒たちにも被害が及ぶような戦いが起きようとしている状況に、藤ねえが巻き込まれる可能性がほぼなくなつたというのは思わぬ僥倖だ。そうでなければ、どうにかして学校から藤ねえが離れるような方法を考えなければならなかつた。だがその反面、桜を藤ねえに任せるといふ選択肢が消えてしまった。

「……そうだ、藤ねえのこの家政婦さんをお願いするか。雷画爺さんに頼めば、多分一人ぐらいこつちに人を回してくれると思う」

「藤村先生の?」

「そうそう。桜と顔なじみの家政婦さんもいるし、あそこなら大丈夫だ」

「んー……そうね、この状況じゃどうこう言つてられないか。じゃあそつちは任せるわ、士郎。」

ところで、綾子の様子はどうかだつたの? 藤村先生、病院の方に行つたんでしよう?」

やはり気になつていたのか、遠坂はしきりに友人のことを聞きたがる。ぐい、と迫ってくる彼女に若干気圧されながら、俺は今分かつていることを話すしかなかつた。

「意識が戻つたらしい、つて事しか俺も聞いてないんだ。詳しい事は、藤ねえが戻つてき

てからになると思う」

「そう……まあ、快復してきたなら良かったわ。生命力を吸われただけなら、意識さえ戻れば体の方も自然と良くなるだろうし。後で、藤村先生に詳しく聞いてみましょう。」

それで桜のことなんだけど、わたしは今日の準備があるから……」

「なあ、遠坂」

話を続けようとした遠坂を遮る。ん？ と首を傾げている彼女は、いつもと変わらぬ自然体。

後輩である桜の心配と、慎二と戦うための準備。その二つを、何ら躊躇うことなく並行して行う彼女には、何も思うところがないのだろうか。慎二が桜の兄だということ、遠坂も知っているはずなのに。

煮え切らない。最後の一步を、踏み出せない。そんな俺と違って、どこまでも普段と変わらない遠坂。抑えていた疑問が、とうとう抑えきれなくなった。

「遠坂は、慎二と戦うことになっても良いのか？」

「今更何言ってるのよ。喧嘩を売ってきたのは向こうの方じゃない、精々高値で買ってやるわよ。」

……でも、それを今聞くことは。やっぱり、桜のことが気になる？」

内心を一瞬で見抜かれてしまった。動揺を隠せずにあらぬ方向に視線を逸らした俺

に、遠坂が深々とため息を吐く。

「士郎の言いたいことは分かる。わたしだって、あの娘を悲しませるような真似はしたくないわ。

でもね。仮に、慎二の身に何かがあつたとしても——それは、あいつ自身が選んだ結果。命の奪い合いに足を踏み入れ、戦うことを選んだのは慎二なのよ。それに、普通の人を巻き込むような手段を選んだ時点で、もうあいつは言い訳なんかできない。本当に、慎二が結界を使うつもりなら……管理者として、遠坂にはそれを止める義務があるわ」

だから、批難も罵声も、受け止める覚悟は出来ている——。口に出さずとも、遠坂の瞳には固い決意が宿っていた。

俺とは違う。とつくの昔に、遠坂凜という魔術師は、選ぶべき道を受け入れていた。桜を悲しませる結果に繋がるとしても、自分の責務を違えることはない。同年代の少女らしからぬ強さは、彼女がマスターたる所以か。

「それじゃ、わたしはそろそろ準備の方に取り掛かるわ。桜のことは任せたわよ、士郎」  
そう自分に言い聞かせるように頷くと、遠坂はくるりと踵を返した。言葉もなく、居間の方へ向かっていく彼女を見送った後で、閉ざされた客間の扉に目を向ける。

俺は……あそこまではつきりと、割り切ることができない。慎二は友人だし、桜は後

輩だ。単純に慎二が友人であるだけなら、ここまで迷うことはなかった。けれど……あいつと戦った結果は、それ以外の誰かにも波及する。人の存在は、他の繋がりがあつてこそ成り立つからだ。

桜だけじゃない。顔が広い慎二には、他の友人も知人も大勢いるだろう。突然慎二が彼らの前からいなくなり、そして何の説明も与えられないとしたら……その原因である俺は、聖杯戦争についてさえ話すことができないのだ。

「……でも、止めない」と

しかし、それは。慎二が巻き込もうとしている大勢の人々にも言えることだ。数百人にも及ぶ生徒の命の犠牲と、それが引き起こす悲劇。絶対に、それだけは防がなければ。ひよつとしたら、あいつが心変わりするかもしれない。もしかしたら、自分のやろうとしていることの重さを自覚するかもしれない——そんな希望は、持っているだけ無駄だろう。慎二の倫理観が完全に破綻していることは、昨日この目で確かめたはずだ。

「できるのか、俺に」

熱を出して倒れた桜。普段なら、こんなことがあれば学校を休んでも桜を病院に連れていくのだが……今日だけはそういうわけにはいかない。大勢の生徒を巻き込もうとする奴を、桜の兄貴を、この手で止めなくちゃいけないのだ。

桜の感情と、何百人もの生徒の命。分かっている。どちらも選ぶなんて、現実には不



可能だ。戦いで熱くなっていた昨日とは違う。冷静になった今、俺は感情ではなく、よく考えた上で結論を出さなければならぬ——。

「——ク、中々面白い事になつてゐるではないか、あの娘」

一体、いつからそこに立つてゐたのか。背後から響くアーチャーの声に、思わずびくつと反応してしまつた。

「驚かすなよな……というか、見てないで少しは手伝つてくれてもよかつただろ」

「ハッ、この我に雑種の面倒を見ろと？ 笑わせるな、あのような汚物を我に供すなど万死に値する大罪だ——が、あの小娘にはまだ見所がある。故に此度の無礼は不問としたが、下らん勘違いを起こすなよ。貴様ら雑種は我に傅き奉仕する存在、断じてその逆ではない」

ふん、ときも不愉快そうに吐き捨てるアーチャー。このとんでもない王様発言は一体どこから来るのか、アーチャーの唯我独尊ぶりには呆れを通り越して嘆息する。この男の正体は結局分かつていないが、記憶を失う前からこうだつたのであれば、生前こいつと付き合ひのあつた人間はさぞ苦労したに違いない。

「それで、小娘の容体はどうなのだ」

「え？ ああ、熱はちよつと高いけど、ただの風邪じゃないかつて。無理して料理なんかするから、治りかけだつたのが再発したんじゃないかな」

「フン、ただの風邪か。貴様らにはそう見えたか」

突然桜の心配をしたかと思えば、今度は得心がいったという様子で頷くアーチャー。相変わらず、このサーヴァントの考えは分からない。

「まあ良い。それより時間は良いのか、雑種。あまり些末事に拘っている余裕はあるまい」

「……そうだな、桜の看病をしてたから、随分時間が押してきてる。そろそろ行かないと」

今日の作戦は時間が鍵になる。敵側の陣地に踏み込む作戦で、しかもこちら側の数が足りてない以上、常に先手を取って主導権を握らなければ不利になるのは俺たちの方だ。

遠坂は昨夜のうちに使い魔を放って学校を監視していたらしいが、特に変わった様子はないらしい。まだ敵が動いていないということは……おそらく、生徒が集まりきった始業時刻後に姿を現すつもりなのだろう。生徒の数が多ければ多いほど、吸い上げられる魔力もまた増えるのだから。

俺たちは、奴らが姿を現した瞬間に叩かなければならない。速攻でライダーを倒さなければ、生徒たちに被害が及ぶ。だが、逆に言えば、ライダーさえ倒せば俺の懸念は全て払拭されるのだ。

「俺は下で遠坂と打ち合わせしてるから、アーチャーもすぐ来てくれよな。わかってると思うけど、もうあんまり時間がないんだ」

念を押す俺に対し、鷹揚に手を振るアーチャー。それを肯定の意と受け止め、踵を返すと居間の方へ向かう。作戦自体は昨夜のうちに遠坂が立てていたが、実戦に向けて最終確認をしておく必要がある。

ただ、何故か……アーチャーが客間に、意味ありげな視線を向けていたのが気になった。

\*\*\*

遠坂が立てた作戦は、単純明快なものだった。

ライダーが結界を発動する為には、学校へ姿を現す必要がある。しかし結界は未だ不完全な状態で、無理矢理発動させたとしても効力を発揮するまでには時間がかかる。その間、ライダーは人目に付く場所を避けなければならず——そして敷地内で人気のない場所といえば、裏手の雑木林が候補になる。

雑木林にあるのは、結界の基点。人知れず結界を発動させるためには、まさに絶好の場所だ。なら……そこに俺たちが待ち伏せし、罠を設置するのも必然と言える。

愚直にライダーが突っ込んでくるならよし、そのまま遠坂が仕掛けた罠とサーヴァント二人がかりで強襲するだけだ。キャスターやランサーが同時に現れたとしても、地の利があれば対処できる。アーチャーに奇襲をかけたような空間転移を使われても、出現位置がここなら飛んで火に入る夏の虫だ。

逆にライダーがここではない基点で結界を発動させようとするなら、場所は限られる。学校内に他のサーヴァントが踏み入った時点で、こちらはその存在を感知できる。それは向こうも同様だろうが、初めから俺たちが敷地内にいる以上、先手を打てるのはこちら側だ。ライダーがどの基点に到達するよりも早く、俺たちの方が攻撃できる。仮にライダーが基点を用いずに一瞬で結界を起動できたとしても、先手を打てるのは俺たちだ。

そもそもこの場に現れないか、或いは逃げ出すならそれでも構わない。十分な魔力を入手できないライダーは自然消滅する可能性すらあるし、魔力を溜めていると思われるキャスターに助力を乞うなら、あの陣営全体の総合力を削ることができる。もつとも、その場合は次の作戦を練らなければならないが。

つまりライダーがどの選択肢を選んでも、俺たちにとって不都合はないのだ。待ち伏せというただの一手で、相手の動きを大幅に封じて見せた遠坂の戦略眼は驚嘆に値する——アーチャーならまだしも、俺にはここまで深い考えは思いつかなかった。

「——士郎」

だが、戦いが始まるより前に、俺たちがここに隠れている事が露見するのは避けたい。待ち伏せとは、奇襲効果があつて初めて意味を持つからだ。

そのリスクを避けるため、遠坂は俺と自分に気配遮断の魔術をかけた上で、人目を避けて学校の裏手へ回り込んでから、授業が始まったのを見計らい弓道場まで移動していた。若干視界は悪いが、この近くからなら校庭全体を見渡せる上に、場所を選べば外部から姿は見えないし、生徒たちが来ることもほとんどない。身を隠しながら学校を監視するには、まさにうってつけの場所だ。

後は奴らが現れる、その予兆を見逃さなければ——

「——ちよつと、聞いてる？」

「……あ、悪い。ぼーつとしてた」

「しつかりしなさいよね。これから戦いになるつてのに、上の空じゃ話にならないわよ。休むなら、戦いが終わった後にしなさい」

半眼で俺を睨みながら、遠坂は買ってきたコーヒーを飲み干した。戦いが迫っているからか、その姿は傍目にも緊張感を孕んでいると分かる。彼女の視線の鋭さに、自然と俺の全身にも力が入った。

穏やかな天気、吹き抜ける風、時折聞こえる鳥の声。一瞬惑わされてしまいそうだが、

ここは既に平和の地とは程遠い。一秒後には血の結界に包まれるかもしれない、文字通りの戦地なのだ。

……けれど。この平穏な日常が壊されようとしているとは、やはり俄かには信じがたい。

「なあ、遠坂。ライダーたち、本当にここに来ると思うか？」

「来るわけ」

一秒の間もない、即答。

俺たちは弓道場の入り口にいるが、セイバーとアーチャーはそれぞれ見張りのために少し離れた場所にいる。何か異常があれば、彼らがすぐに飛んでくる。だが、その予兆すらないというのに、遠坂は一片の迷いもなく断言してみせた。

そんなことは分かっている。窮鼠猫を噛むとも言うし、追い詰められた者は何でもやるだろう。それこそ、学校の生徒を皆殺しにしても。

……しかし、それでも。旧友が凶行に及ぶと信じたくない思いは、やはり俺の中に残っている。現実を受け入れたくない一心で、俺は唇を噛みしめた。

「遠坂も言ってたけど、この結界は、学校の中の人間を無差別に溶かす物なんだろ。けど、それは神祕の漏洩を防ぐっていう魔術師の大前提に反するんじゃないか」

可能性を否定したい、屁理屈じみた俺の言葉。俺と違って現実をとづくに受け止めて

いる遠坂は、ただ肩を竦めてみせるだけだった。

「士郎。魔術師っていうのは、善人じゃないのよ。あなたのお父様がどうだったのかは知らないけど——確かに、神秘の秘匿は何よりも優先されるべきもの。それは士郎の言うとおりよ。でもね、それってつまり……神秘が秘匿されてさえいければいいってことなのよ」

「それ、は——」

「人間の一人や二人殺しても、結果的に秘密が守られていけばそれでいい。目撃者を消すことは、むしろ奨励されているのよ……わたしは、そんなことしたくないけれど。」

学校中の人間が殺されれば、それを隠蔽するのは難しいわ。でも、その理由付けさえできていれば——例えば、テロリストが毒ガスを撒いたとか、突然の地盤沈下で学校が倒壊したとか。そんな証拠をでっち上げることができれば、少なくとも魔術との関わりは誤魔化せる。魔術師の常識では、それさえできていれば問題はないわ」

冷静さを保ったまま、そう続ける遠坂。その冷たい瞳は、彼女が紛れもなく一流の魔術師であり……魔術師見習いに過ぎない衛宮士郎とは違う存在であると、そう印象付けるものだった。

学校一つを無くしても……その中の生徒数百人を犠牲にしても、魔術との関わりが外部に露見しなければそれで終わり。それを咎める者も、裁く者も存在しない。犠牲者を

知る者は、真実さえ、人災だと知らされることさえなく、ただありもしない災害か、実在もしないテロリストを憎む羽目になる。そんな無数の憎悪と悲しみを踏みにじり、本当の犯人はのうのと生き延びるのだ。

——それが。そんなことが、歴史上無数に繰り返されてきたというなら。聖杯戦争だけでなく、外道を働かす魔術師そのものが許されざる存在だと感じる。

「士郎が許せないという気持ちは分かるわ。でも、今わたしたちにできるのは、そんなふざけた真似をする連中を止めることよ」

俺が握り締めた拳に気が付いたのか。遠坂は、あくまで冷静にそう言い放つ。

……けれど。彼女の拳も、また微かに震えていることに気が付いて、仄暗い怒りの感情がずっと引いていくのを感じた。人の命を玩具同様に扱う奴らに、怒りを感じているのは遠坂も同じなのだ。魔術師としての覚悟はあっても、実際に非道な行為に及ぶかどうかは当人次第。そして俺の知る遠坂は、そんな悪行を容認できるような人物ではない。

怒りを抑え、冷静に現実に向かおうとしている遠坂と、ただ感情に任せようとしていた俺。何とも、自分がみつともなく感じた。

「ああ、そうだな。今は、この結界を止めないと」

「そういうこと。それが分かったなら、この話はここでおしまい。」



……それにしても、よくここに来る気になったわね、士郎。昨日の様子、正直普通じゃなかったわよ」

長い髪をかき上げながら、今度は微かに心配そうな視線をこちらに向ける遠坂。昨日の俺は、どうやらかなり取り乱していたらしい。

確かに、あの得体の知れない魔物に対する恐怖感はある。触れれば死ぬという直感  
は、まず間違っていないだろう。セイバーの睨んだとおりなら、この後戦いの場でアレ  
がまた現れないとも限らないのだ。またアレと遭遇して、生きて帰れる自信はない。

——けれど。

「そんなことより、この結界の方が大事だろ。これを放っておけば、何人犠牲が増えるか  
分からない」

「……………」

と。それを聞いた少女は、何故か表情を強張らせた。

ふわり、と屋上に風が通り抜ける。だが、僅かに乱れた黒髪を直そうともせず、遠坂  
は真剣な瞳で俺を見つめていた。

「士郎。貴方、自分が死ぬような目に遭ってまで、本気で人のために命を賭けられるの  
？」

「ああ。俺が迷ってる間に誰かが傷つくなら、命を賭けた方がいい。誰かを助けたいな

ら、手段に拘ろうなんて考えは甘いんだ」

「險の裏に移るのは、絢爛たる黄金の影。」

『人間どもをサーヴァントから救いたいと言うのなら、手段に拘る事こそ何よりの愚挙』  
 そうだ、あいつの言う通りだ。自分の力だろうとサーヴァントの助けだろうと、結局人を助けられなければ意味なんかない。俺がもつと早く気付いて、決断できていれば慎二を止められたかもしれないし、美綴や他の人を巻き込むこともなかった。こうして境界の前でギリギリの綱渡りをせずとも、多くの人を守ることができたはずだ。

しかし、現実はそのはならなかった。慎二を止めることはできず、美綴はあいつの毒牙にかかり、この学校の何百という生徒の命が危険に晒された。この埋め合わせは、きつと俺なんかの命を賭けただけでは足りないのだろう。

「……やっぱりおかしいわよ、貴方」

ぼつり、と遠坂が漏らす。その声には、冷たさと憐れみが等しく配分されていた。

「私はいいわ。この戦いに挑む準備を何年も前からしてきたし、その覚悟もある。あの慎二だって、聖杯戦争のことは知ってただろうし、戦うだけの理由もあるはずよ。」

——でも、貴方は違う。ほとんど素人と言つてもいいのに、突然戦いに巻き込まれて、それでいて何の躊躇いもなく命を賭けられる。それも自分のためじゃなく、関係のない他人のために」

「……いや。俺が戦うのは、他人のためじゃないさ」

そう。マスターたちが願いの為に聖杯を求めるなら、俺の願いは『人を助けたい』という思いそのもの。

あの炎の夜に、零れ落ちていった魂。小さな手で掬うには、あまりに多すぎた人の命。けれど、今なら。今の俺なら、あの時より大きな手がある。例え一人でも、この手で救える命があるのなら。この手が届くなら、俺は迷うことはない。

何故なら——

「俺はもう、理不尽な理由で誰かが死ぬ姿を見たくないだけなんだ」

命が失われる光景は、もう十分過ぎるほど見てきた。この聖杯の奪い合いで大勢の人が死んだ。これ以上、下らない争いで人が死ぬのは十分だ。ただそれだけの、極めて簡素な理由。

十年前の地獄では、何の罪もない人が亡くなった。けれどそんな惨状の中でも、俺は生き長らえた。助けてもらえた。だから、きつと——今度は、俺が衛宮切嗣<sup>正義の味方</sup>になる番だ。  
——それだけなのに、遠坂は。

「そのためなら、自分が死んでもいいって言うわけ？」

敵意すら宿った眼差しを、毅然と俺に向けていた。

「いや、それは違——」

「違わないわよ。士郎の言ってるのは、つまりそういうこと。

……そう、今のでようやく分かったわ。貴方はお人よしなんかじゃない。どんな善人だって、自分の命は勘定に入ってる。いえ、むしろ自分というものが根底にあるから、彼らは善人足り得るのよ。

けれど、士郎は違う。自分より他人が大事なんじゃない、そもそも自分が秤の上に乗っていないのよ。自分のことを何とも思っていないから、簡単に命を投げ出せる」

「——っ」

感情を押し殺した、低く平坦な声で話す遠坂。反射的に言い返そうとするが、その只ならぬ雰囲気呑まれ、ただ無意味に口を開く事しか出来なかった。

命を粗末にしているのか、と問われれば、断じて否と言いつける。

死ぬのが怖いか、と聞かれれば、そのとおりだと頷ける。

だが。自分と他人の命、どちらが重いか、と訊ねられた時。俺の中に、自分という選択肢は存在しなかった。遠坂がおかしい、と言っている意味は分かる。けれど衛宮士郎にとっては、それが常識であり日常なのだ。

——だが。それに何の疑問も抱かず、むしろ当然だと感じてしまっている自分自身に、俺は一番驚愕していた。

「……ねえ、士郎。それで救える人は、確かにいるのかもしれない。けれど度の過ぎた自

己犠牲は、自殺願望と同じよ。

貴方の命と引き換えに、命を助けられても、それで、助けられた側が素直に喜べると思おう？」

「……………」

想像する。

仮に、自分が誰かに助けてもらつたとする。その人のお陰で、自分は生き延びることができた。あの地獄のような日に、俺が切嗣に助けられたように。

しかし……自分の命の代償に、その誰かは死んでしまった。お礼を言おうにも、謝ろうにも、その対象はどこにもいない。残されたのは、助けられた自分だけ。

切嗣は、信じられないほどの早さで亡くなった。ひよつとしたら、その原因には俺が関わっているのかもしれない。それは前から薄々感じていたことでもあるし……申し訳ない気持ちがないかと言えば、嘘になる。

でも。例え自分の命と引き換えにしたとしても。切嗣には一片の後悔もなかったと、それだけは断言できる。俺を助けることができて良かったと、あの曇りのない笑顔があつたから——俺は、ここまで歩いてこれたのだ。

助けられた側に、やりきれない思いがあつたとしても。助かつた人の中には、必ず残るものがある。

——だから。

「それでも、助けられる命があるなら、俺は助けたい。この道は、間違っちゃいないって、信じてる」

「士郎、あなた——ッ」

俺に、遠坂が怒りの籠った視線を叩き付けてくる。一体何故ここまで彼女が憤っているのか……理由が掴めず、困惑する。頬を撫でる冷たい風は、まるで彼女の感情のよう  
で。

「下がって、凜、シロウ——！」

どん、と強く押される感覚。何が起きたのかも分からないまま、抵抗すらできずに尻餅をつく。

「な……!?!」

地面の感触が伝わるか伝わらないか、という刹那。状況を認識するより早く、赤い何かが目と鼻の先を掠めて行った。一瞬遅れて、木が砕けるような轟音が響き渡る。

わけも分からず横を見ると、同じように度肝を抜かれた表情で座り込む遠坂。そしてその向こう、弓道場の横にある大木にめり込んでいるのは、見覚えのある赤い剛槍。あ

れは、あの槍は紛れもなくランサーの――。

「ちつ、こういうのはオレの柄じゃねえって言うてんだが……あれを躲すか。しかしまあ、こう何度も奇襲を防がれるとは、流石に情けなくなってくる」

忌々しげに響く、その声。もう一度瞬きをすれば、そこには見覚えのある青い戦士が、槍を引き抜き佇んでいた。

……馬鹿な。今の今まで、そこには誰もいなかった。不意打ちなどというレベルではない。何の兆候もなく、ランサーは唐突に出現していたのだ。何の気配も感じさせず、最初から誰もそこにはいないかのよう。

「暗殺者アサシンの真似事か、狗。気配が感じられぬ……いや、これは魔術の類か。となれば、この場に潜むのは貴様一匹ではあるまい」

朗々と響く声。座り込んだまま上を見上げると、そこには黄金の鎧に身を包んだアーチャーが、屋根の上からこちらを見下ろしていた。その手に握られた黄金の剣を認識して、ようやく凍り付いていた頭が動き出す。

如何なる手段を以てしてか、完全に気配を消したランサーは、遠坂が敷設していた魔術の罠をすり抜けてきた。そして二人のサーヴァントに兆候すら感じさせず、俺たちを殺しにかかったのだ。セイバーが直前で飛んできてくれなければ、俺と遠坂は仲良くあの世に送られていただろう。まさに紙一重の差で俺たちは命拾いしたのだ。

「その洞察力には感心するわ、アーチャー。貴方を敵に回したのは惜しかったかもしれないわね」

「ハ。この我に気付かせぬ、という点では褒めてやる。だがそれまでだ。如何な手品とて、種が一つでは飽きも来ようよ」

「ふふ、貴方たちも手品を披露しようとしていたのではなくて？　でも残念。その前に種を見抜かれては、客の拍手は望めないわよ。」

——私とそこのお嬢さんとは、魔術師としての年季が違うわ」

一体どこを見ているのか。俺たちを睥睨していたアーチャーが、突如としてあらゆる方向に目を向けたかと思うと、どこからともなく女の声が聞こえ……そして一拍置いて、空に黒い染みのようなものが現れた。

初めは霧のようだったそれは、やがて固まり形を持ち始め、見る見るうちに人の姿を形成していった。紫紺のローブに、錫杖を捧げ持つ女。あれがアーチャーを襲ったという、キヤスターのサーヴァントに違いない。

頭上で睨み合うアーチャーとキヤスター。眼前で対峙するセイバーとランサー。都合四人のサーヴァントが、殺意の刃を向け合っていた。一人でも驚異的な破壊力を持つサーヴァントが、一度に四人。彼らが全力で戦えば、こんな林は瞬時に更地と化すだろう。



「嘘、これほど完全にサーヴァントの気配を消せるなんて——それに、わたしの魔術が全部破られてる」

跳ね起きると同時、我に返ったのか、キャスターの言葉に歯噛みする遠坂。その横顔には屈辱感さえ滲み出ている。

詳しくは教わっていないが、この弓道場の周囲には、遠坂の手によつてサーヴァントにすら効力を発揮するような罠が幾つも仕掛けられていた。それを、仕掛けた本人である遠坂や、同じサーヴァントであるアーチャーやセイバーにさえ気付かせずに、全てを破つてみせたその手腕。幾らサーヴァントとはいえ、驚嘆すべき魔術の技だった。

待てよ。サーヴァント、だと……? ?

「ちよつと待て、ライダーは何処に——! ?」

はつと気づき、勢いよく立ち上がった、その瞬間。

——世界が、血の色に染まった。

「これは、ライダーの結果……! ?」

いち早く反応したセイバーの瞳が、驚きに見開かれる。翠の瞳に映し出されるのは、一面の赤。

直前まで澄み渡っていた空は、今や見る影もない。色という色は消滅し、禍々しさすら感じさせる血腥い赤色に、全てが塗り替えられている。学校という空間そのものが、何かに上書きされたかのような異常さ。

これこそが、ライダーが敷設した結界。対象内の人間を悉く塵殺し、その命を魔力として吸い上げる殺戮宝具。全てを染め上げる血の要塞。ブラッドフロント

一旦発動してしまつた以上、これを止めるには発動者を倒すしかない。半人前とはいえ、魔術師である俺ですら気持ち悪さを感じているのだ。何の魔力も持たない生徒たちが耐え切れるはずがない。

不幸中の幸いか、この結界は不完全だ。発動と同時に生徒全員が即死する、という訳ではないだろう。それでも、これを放つておけばどの道結果は同じだ。防ぐ手立ては一つしかないというのに——ライダーの姿が、ここには見当たらない。

「ちつ、これもアンタの仕業ね、キャスター。ここまで気配を殺されると、ライダーの居場所が分からない……!」

遠坂が舌打ちと共にキャスターを睨め上げる。宙に浮くローブの下に覗くのは、冷酷な薄ら笑い。

「なるほど。ランサーとキャスターが私たちの足止めを。その間に、ライダーは結界で魔力を回復する。ライダーの回復まで凌げば、サーヴァント三体がかりで我々を圧倒で

きる。そういう魂胆ですか、キャスター」  
「つまりそういうことだ。」

……やれやれ。どうしてこう、気の乗らん戦ばかりになるかねえ」

セイバーの分析に答えるのは、不承不承といった風情のランサー。だがその口ぶりとは対極的に、槍を構えるその姿には、微塵の隙さえ感じられない。彼の意思がどうあるうと、極限まで死闘に順応した肉体は、敵を殺すための牙を研いでいた。

……まずい流れになった。罾を張り巡らせ、完全に先手を取ったつもりでいたが、その実こちらの手の内は完全に読まれていたのだ。三人のサーヴァントは、たった一晩で完璧な連携と共に俺たちを打倒しに来た。今や機先を制され、窮地に立たされているのは俺たちの方だった。

俺たちはライダーが結界を動かすより早く、力押し of 速攻でライダーを打倒する予定だった。魔力の供給源がなければ、じり貧になるのは向こうの方だからだ。

しかし、一旦結界が発動されてしまうと状況は逆転する。時間が経てば経つほど、結界から供給される魔力は増加していく。生徒に犠牲を出さないために、俺たちは無理矢理にでも攻めるしかないが、ライダー側はただ耐えていればそれでいい。勝利条件の難易度が、あまりにも違い過ぎる。

「くそ、どうすりゃいいんだ……！」

相手の所在を感知できることが前提の作戦は、キャスターの隠蔽魔術によつて既に破綻している。ライダーがこの敷地内にいるのは確かだろうが、どこにいるかまでは分からないし……第一、キャスターとランサーが見逃す理由がない。

ギチ、と握り締めた拳が嫌な音を立てる。まただ。ライダーを倒さなければ、人がまた死ぬというのに……いくら考えても、いくら動いても、人を殺す魔の手は止められない。これでは、何の為の正義の味方なのか。すぐそこに止めるための手段があるというのに、手が届かないなんて。

「ライダーは限界まで弱つてた。なら、これ以上の消耗を抑える為に、基点の近くで結界を発動させたかったはず……」

焦りを抑えたのか、冷静さを取り戻した遠坂が考え込む。このまま睨み合っていて、刻一刻と俺たちが不利になるだけ。キャスターとランサーは、ただ時間が稼げれば戦わなくても良いのだ。つまり俺たちが動かなければどうにもならないが、作戦がなければ動きようもない。

基点。文字通り、結界の基となる場所。この敷地内に記された血の呪刻。構成の要であるその場所は、結界を発動するには最適だろう。

だが、最有力視されていたこの場所にライダーはいない。幾らキャスターの魔術が優れていようと、結界の発動そのものの隠蔽はできまい。となれば、ライダーはどこか別

の場所、他の呪刻がある地点で結界を発動させたのだ。しかし結界は不完全で、魔力を取り込むまでには時間がかかる。効率よく魔力を回復させる為には、呪刻の近くに居る方が都合が良い。

残された呪刻。その中で、ライダーにとって最も都合の良い場所。他の人間には見つからず、かつ監視に向いた場所。そこはすなわち、

「屋上——！」

俺が気付くと同時、遠坂も同じ結論に至ったのか。視線が合うと、こちらに向け頷いて見せる。ライダーがいるとすれば、そこしかない。

だが、易々とこの場から抜け出せるはずもない。キャスターの素顔はローブに包まれて見え、一方のランサーは仏頂面のまま、所在なさ気に槍を弄んでいる。しかし俺たちが動けば、容赦なく襲い掛かってくるであろうことは間違いない。

セイバーは不可視の剣を構え、敵サーヴァントたちの一挙手一投足に注意を払っている。引き絞られた弓を思わせるその背中、僅かでも敵が動きを見せた刹那に矢となつて飛んでいくだろう。二度に亘って自身と拮抗して見せたランサーと、得体の知れぬキャスター相手に、彼女が油断するわけがない。

そして、黄金の弓兵は。

「——で、どうするのだ雑種。放っておけば衆愚どもが死ぬぞ」

いつものように。劣勢など知らぬというように、傲然と屋根の上で立っていた。

一度戦っている相手。それも片方は、アーチャーの技量を遙かに凌駕するランサーだ。だというのにこのサーヴァントの威圧感、欠片も損なわれる事がない。セイバーが張り詰めた弓ならば、アーチャーは毀れを知らぬ輝煌の剣。弓兵と剣士が逆の印象を与えるのも、何とも奇妙な話だった。

自然体のまま、紅蓮の瞳で俺を見下ろすアーチャー。血の結界より尚赤い瞳に見つめられて、自分のすべきことを考える。

「どうする、ってそれは……」

「士郎。ここはわたしとセイバーで引き受けるから、あなたはアーチャーと一緒にライダーを倒して」

口を開こうとした俺を遮り、遠坂が低い声でそう告げる。その言葉に含まれる意味の無謀さに、一瞬脳が理解を拒絶した。

「な——セイバーと遠坂だけで、サーヴァント二人を相手にするってのか!？」

「無茶でも何でも、そうするしかないのよ。ライダーを倒すためには、最低一人のサーヴァントがこいつらを止める必要がある。そして、それができるのはわたしのセイバーだけよ」

淡々とそう続ける遠坂。反論しようにも、言い返す言葉がない。それが最も正しい選

択肢なのは、俺自身が理解している。

キャスター一人なら、或いはアーチャーでもどうにかなるかもしれない。だが、アーチャーにランサーは止められない。必滅の槍を防ぎ切ったとはいえ、あれは一度きりの奇跡。加えて、単純な技量でランサーはアーチャーの上に行く。キャスターと二人がかりとなつては、まず確実に敗北する。宝具さえ使えれば、と思うが、ないものねだりはできない。

しかし、これがセイバーなら話は別だ。圧倒的な対魔力性能スキルによつて、ほぼ全ての魔術を無効化するセイバーは、キャスターに対して圧倒的な優位に立つ。ランサーに対しては互角かもしれないが、今回はマスターである遠坂もいる。いざとなれば令呪もあるし、足止め程度なら十分可能だろう。

遠坂とセイバーを、危険な目に遭わせることになる。だが……時間も選択肢も、今の俺には残されていなかった。

「……わかった。ここは任せていいか、遠坂」

「ええ。こいつらはきつちり止めてみせる。その代わり、さつさとライダーを倒してきてよね。

……もう、あまり時間はないわよ」

「ああ」

幾つかの宝石を取り出すと、一步踏み出しサーヴァントたちに向き合う遠坂。俺に背を向け、セイバーに並ぶその姿に迷いはなく——故にそれは、嫌でも俺の役割を認識させた。

ライダーを、倒す。生徒に犠牲者が出る前に、遠坂とセイバーが傷つく前に。一刻も早く、ライダーのサーヴァントを打倒する。

それができなければ……待っているのは、あの夜の光景。炎に体を焼かれ、悶え苦しみ、人の形すら留めず死んでいった大勢の人たち。もう顔すら思い出せない犠牲者の中に、見知った顔が加わる。世話になった先生に、仲良くしていた級友。それだけは、断じて許せない。

正義の味方。みんなのヒーロー。そんな絵空事が必要とされているのは——今、この瞬間。守るべき人々も、倒すべき悪も明白。こんなことさえできずに、何が正義の味方か。

「——行くぞ、アーチャー。ライダーを倒して、この結界を止める」

「ほう。サーヴァントすらも殺さぬ、とでもほざくかと思えば……その程度の覚悟は固まったか。この期に及んで戯言を抜かす気なら、我手ずから貴様の首を刎ねていた所だ。

だが良いのか雑種。ライダーのマスターは、貴様の友人であろう。この道を進めば——



—貴様は、自らの友を手にかける事になるぞ」

「それ、は——」

淡々と、まるで今日の天気を語るかのような口調で、容赦なく叩き付けられる現実。気に食わなければ俺を殺すと言ったその言葉よりも……俺が選ばうとしている選択肢の重さが、氷山のように冷たく押し掛かった。

人ならざる魔性の瞳が、刃の鋭さで俺を貫く。その冷酷さが、他の何より明白に告げていた。この道を選べば——おまえはもう、後戻りできないと。

偶々、聖杯戦争に巻き込まれた。死にたくないから、サーヴァントと戦った。そういう言い訳は、ここから先は通用しない。どんな大義名分があっても、どういう状況だったとしても。俺がやろうとしていることは、人を殺す可能性を秘めていて……決して、許される行為ではない。

だけど。

「関係ない。もし、慎二が大勢の人を手にかけるようって言うなら……」

ぐつ、と拳を握る。選ぶべき道は、とうの昔に決まっていた。人を助けるのが、俺という人間の在り方。そして慎二とライダーを見逃せば……助けられるはずの命が、何百と失われる。

引き戻そうとした言葉は空虚に響き。友人を止めようとした俺の意思は、殺意の刃で

報われた。その瞬間に、俺とあいつの関係は、決定的に壊れてしまったのだ。間桐慎二は、人を殺す外道となり——そして衛宮士郎は、それを倒す魔術師になった。

昨日の戦い。あの一戦で、慎二を止めることはできなかった。止めさせたいという決意はあったが、友人の命を奪うという選択に、俺は最後の最後まで躊躇していた。けれど、既に逡巡する余裕などないのだ。

結果は発動されてしまった。それはすなわち、あいつが最後の戦いを踏み越えたという事。大勢の命をエゴのために踏み潰し、利用する。もう後戻りができないのは、俺だけではない。

これ以上立ち塞がるなら、容赦は出来ない。例え誰に何と思われようとも、俺は俺の意思で、人を傷つける敵を。

「俺の手で、倒す」

「——よく言った。無様で、未熟で、歪ささえ感じるが……それでも貴様は、自ら業を背負い、道を選ぶ決断をした。ならば、我もサーヴァントとして応えてやらねばなるまいよ」

そう嘯くと皮肉げな笑みを浮かべ、黄金の弓兵が軽やかに着地する。

まただ。この英雄はいつも、目を背けたくなるような事実を突き付け、迷う俺を詰り、叱咤し……一見突き放しているように見えても、一步先で待っている。

気の向くまま動き、他人に耳を貸さず、自分一人で完結しているようでありながら……いつも遙かな先を見据え、迷いなく道を指し示す。それは魔術師に従うサーヴァントというよりも、人間を導く王のような――。

「……それで？ 私たちが見逃すとも思っているのかしら？」

一方。直前までアーチャーと睨み合っていたにも関わらず、まるで路傍の石のように無視されたキャスターからは怒気の渦が立ち上った。

ローブの下から、禍々しい魔力を宿した手が覗く。可視化される程の光を集めたそれは、紛れもなく魔術の前兆。結界に囚われ風の止んだ空間に、魔力の大嵐が吹き荒れようとしていた。

「ほう、魔女さんはご機嫌斜めか。ま、こんだけ舐めた口叩かれりや、誰だつて怒るわな。オレもあまり気は乗らないが――今回ばかりはキャスターに同感だ。逃げられるとも思ってたのか、てめえ」

「無駄口が過ぎるわよ、ランサー。今回は見逃してあげますけど……次に私を魔女と呼んだら、相応の罰を与えます」

「おー、怖い怖い。んじゃ、とつととおっぱじめるか」

緊迫した空気の中、軽口を叩くランサー。キャスターの怒りを平然と受け流す態度は、死線に臨む戦士らしからぬ軽薄な姿。だがその口調とは裏腹に、ランサーはゆつく

りと槍の穂先をこちらに向けていた。

間に立つ、セイバー主従のことなど関係ない。あの男の狙いは、始めから俺とアーチャーだ。『刺し穿つ死棘の槍』が放たれば、その時点で奴らの勝利が決まってしまう。

「たわけめ。舐めているのは貴様らだ、雑種ども」

「ああ？」

だというのに。そんな些末事など知らぬというように、アーチャーは侮蔑の表情を向ける。怪訝な顔をするランサーを、怒りを堪えるキャスターを——この男は、完全に見下していた。恐らくは、脅威だとすら感じてしまい。

その底無しの自信は、天に聳える王者のもの。この場を逃げ出そうとしている現状とは、あまりにかけ離れた余裕だった。

「雑種がいくら群れようが、所詮は有象無象の塵に過ぎん。貴様らごときが、その女を破れるものか。」

——そうであろう、セイバー。お前ほどの英霊が、雑種風情に遅れを取る道理はない。何ならその雑種二匹、屠ってしまっても構わんぞ」

と。傲岸に放たれたその言葉に、誰よりもセイバー自身が驚いていた。

アーチャーを仰ぎ見た瞳は、驚愕に大きく見開かれている。敵から視線を逸らすとは

彼女らしからぬ迂闊さだが、それだけアーチャーの言葉が予想外だったのだろう。見れば横に並ぶ遠坂も、愕然とした表情を浮かべていた。

この男が、セイバーを気に入っているのは知っていた。だがそれでも、セイバーに冷たい言葉を叩き付けこそすれ、面と向かつて彼女を評価する言葉を向けるのは、これが初めての事だった。紅の瞳には、誇張や虚言を口にして色はどこにもなく——ただ純粹に、この男はセイバーを信じきっている。

直接相対したキヤスターの力。必殺の宝具を有するランサー。それらを鑑みた上で尚アーチャーは、セイバーが負けるはずがないと断じていた。

「フ……勿論だ、アーチャー。何人たりとも、私の後ろを通しはしない」

「言ってくれるじゃない、アーチャー。いいわ、わたしのセイバーの力、お望み通りはつきり見せてやるんだから。あいつらをやつつける前に、とつと戻つてきなさいよね」

風を斬り、剣を正眼に構え直したセイバー。左手に魔術回路を浮かび上げさせ、詠唱の準備をする遠坂。二人の少女が、揃つて自信に溢れた笑みを見せる。今までアーチャーと反目していた二人が……初めて、この英霊に見せる表情だった。

対するサーヴァントたちは、無言。収束させた魔力が、微かに震える槍が、ここからは言葉ではなく刃を以て語れと宣言していた。

「行くわよセイバー。F*ix*i*e*r*u*n*g*, E*il*e*S*a*l*v*e*——！」

「ええ。信頼に応えましょう、マスター。決着をつけるぞ、ランサー——！」

突貫する遠坂とセイバー。その結末を見届けることなく、彼女たちに背中を任せ……

俺は、ライダーのいる屋上へと走り出した。

## 16. 混迷の戦場

疾走する。

魔力を以て脚力を強化し、背後より響く轟音を無視して校庭を駆け抜ける。後方では遠坂たちが戦端を開いているのだろうが、それを気にしている余裕はない。

天地の区別なく赤く塗り潰された空間は、ここが学び舎であるという印象を完全に払っている。校舎まで辿り着いた時には、見ずとも感じ取れる程に死の臭いが漂っていた。

その悪臭に……玄関に走り込もうとして、直前で足が竦んだ。もしかしたら、既にこの中には死体の山が築かれているのではないか——そんな益体も無い恐怖が、じわりと胸を侵食する。

あの日の夜、劫火に焼き尽くされた何百もの人々。

ガス漏れ事故に見せかけられ、訳も解らず意識を失った大勢の人々。

つい先日、サーヴァントに襲われた女子生徒。

それらの列に、見知った知人たちが加わりかけている。生きながらにして生命力を、

魔力を搾取されようとしているのだ。クラスメイトたちの安否を確認したいという衝動に駆られるが……それでは何の解決にもならない。彼らがまだ無事だと、死んでいないと信じて動かなければ、この妄想が現実になってしまう。

悪夢の残滓を振り払い、校舎の中へと走り込む。結界の基点に近付いたせいか、粘りつくような邪悪な空気は益々強くなっていく。

左右には目もくれず、アーチャーが続くのを足音だけで確認すると、階段を二段飛ばして駆け上がる。一階から四階、その先の屋上の入り口までは遠くない。全力で走れば、三分とかからないだろう。

だが、踊り場を殆ど左手一本で飛び越えるように回り、階段を飛び越え、馴染み深い廊下に踏み入った瞬間——見えた。見えてしまった。

「——な」

時間帯のせいで、開け放たれていたのか。大きく開かれた教室の扉は、嘗ては活気に溢れていたであろう教室の姿をまざまざと見せつけてきた。

これ程までに赤い光景を、俺は見た事が無い。空間そのものを塗り替えた結界の赤さだけではない……この濁りきった風景は、何度も見慣れた血液の赤。失われていく命の色だ。

倒れ伏す生徒たち。微かに聞こえる呻き声。床に転がる無数の人影には、どれも外傷



は見当たらない。濃密な赤色に侵されているにも関わらず、彼らは切り傷一つも負っていない。にも関わらず……血を吸い上げられたかのような、生氣のない青ざめた皮膚は他の何より異様だった。

全てが血の色に染まっているのに、誰も血の一滴も流していない。いや、これは血を流した訳では無い。物理的ではない手段で、無理矢理奪われているのだ。つまりこの教室を彩る色は、吸い上げられ、気化し充溢した生徒たちの血液だ。

「あの、野郎……！」

それは、何に対しての怒りか。何に憤っているのかも解らないまま、俺は骨の軋む程拳を握りしめていた。

さつき浮かんだイメージは、悪夢ではなく予見だった。惨劇は、とうに始まっていた。今はまだみんな生きているようだが……こんな地獄に囚われたままでは、本当に死んでしまう。

これを作り上げたのは、間桐慎二でありライダー。魔術とは無関係である筈の、同級生さえ平然と命を奪う。そんな手段を是とする連中に、俺は今まで何と甘かった事か。

現状を招いた原因の一因は、間違いなく俺にある。俺が早く奴らを倒していれば、こんな事は起こらなかった。衛宮士郎の迷いが、人の命を奪いかけている——ふざけている。こんな事態を引き起こしておいて、何が正義の味方か。苦しんでいる人を助ける

事すら満足にできないなら、俺は今まで何のために生きてきたのだ。

「憤るのは後にしておけ、小僧」

「……ああ、わかつてる」

背後からかけられた、いつも通りの冷たい声に、上つていた血がすつと引いていく。そうだ、怒るのは後でも出来る。俺が今やるべき事は他にある。今はただ、一刻も早く慎二とライダーを打倒するのみ。こんな時ばかりは、アーチャーの冷徹さがありがたい。

苦痛の声に背を向け、残る階段を走破する。一息に階段を上りきり、閉ざされている扉を蹴破るようにして開け放つと、外だというのにドロリとした薄気味の悪い空気が肌を撫でた。

そして、開いた扉の先。屋上の端、結界の基点が刻まれたそこには。

「ライダー……!」

聳え立つ長身。露出の多い、鎧ですらない薄い黒衣。そして、右手に握られた鎖付きの短剣。一度見ただけだが、昨日の今日で忘れる筈もない。この結界を貼った張本人にして、間桐慎二のサーヴァント——ライダー。その姿を目にした途端、抑えていた怒りが鎌首を擡げた。

俺の真横に立つアーチャーとの距離は、僅かに十数メートル。詰めようと思えば一息

で詰められる距離であろうに、飛び込んできた俺たちに動じるでもなく、ただ眼帯に覆われた瞳をこちらに向けてくるライダー。見た所、セイバーに負わされた傷は消えているが……それは外面だけだろう。ライダーからは、サーヴァント特有の威圧感が薄れている。結界を発動したとはいえ、このサーヴァントが纏うオーラは明らかに希薄だった。

数瞬の間。どう出るべきか考えあぐねていると、こちらを観察していたライダーがぼつりと口を開いた。

「驚きました。まさかここまで来られるとは……キャスターとランサーだけで、十分足止め出来ると思ったのですが」

「ふん。卦体な眼帯に違わず、見える物も見えぬらしいな。虫が何匹集ろうが、象の歩みを阻めるものか。」

——虫と言えば、些か煩い小蠅が見えぬな。マスターはどうした、女」

その言葉で、はつと気づく。今この場に立っているのは、俺を除けばアーチャーとライダーだけ……姿を隠す場の無い屋上に、特徴的な青い髪は見当たらない。となれば、どこか別の場所に隠れているのか。マスターさえ倒せばライダーも消え、この結界は消える筈だが、そう簡単にはいかないらしい。

あいつの性格からして、そう遠くに離れているとは考えにくい。ライダーと離れたらば

かりに俺に倒されかけたばかりだし、目の届く場所でこちらを観察している事はまず間違いないだろう。

ライダーの表情から何か読み取れないかと思うが、あのサーヴァントは完全な無表情を貫いている。まるで口を利く気が無いというその態度に、アーチャーの瞳が槍のように鋭さを増した。

「答えられぬか——まあ良い。どちらにせよ、貴様を潰せば済む事だ」

そう呟くと、無造作に組んでいた腕を解くアーチャー。その動作に連動して、黄金の粉塵を纏わせながら煌く双剣が現れる。その刃に映る魔力、その柄に宿る神秘は、ライダーが握る釘剣とは余りに格が違い過ぎた。あれに比べれば、ライダーの武器など棒切れにも等しいだろう。

両腕を横に広げると、ぐるりと剣を一回転させる弓兵。威圧にも見えるが、それは余裕の表れか。セイバーやランサーには及ばずとも、アーチャーの力量ならば、弱りきったライダーなど歯牙にもかけずに屠れるだろう。それはライダーとて熟知している筈——しかし黒衣の美女は釘剣を提げたまま、未だ動く素振りを見せない。満足に動くだけの力も残っていないのか……それとも、何らかの策を隠し持っているのか。

「あの蛇は引き受けよう。後は下がっている、マスター」

一見して隙の大きいような構えのまま、こちらを振り向きもせずそう告げるサーヴァ

ント。英霊同士の戦いで、魔術も碌に使えぬマスターの出る幕はない。

それに、アーチャーは漸く……それがただの気紛れだったとしても、俺の事をマスターと呼んだ。なら俺も、マスターとしてサーヴァントの力を信じるべきだろう。ライダーに対する怒りはあるが、いくら弱体化しようが相手はサーヴァント。俺が突っ込んでいったところで、返り討ちに遭うだけだ。

「……ああ。ライダーを倒してくれ、アーチャー」

俺の声に、男は何と答えたのか。それを聞き届けるより先に、地を砕く音が空間を蹂躪した。

コンクリートの床を割る程の強烈な踏み込み。ライダーが釘剣を振るうより早く、二本の黄金が左右より迫った。間違ひなくライダーを両断していたであろう一撃は、後ろへ一回転する事で回避される。追撃の切り上げ、刺突、振り下ろしは釘剣によつて受け流される——ライダーの傷がどうあれ、少なくとも彼女の機動性は健在なままだ。

ぐん、と刈り取るように放たれる回し蹴りは跳躍で回避。だが回つた勢いのまま振るわれた横薙ぎの一撃は、剣を以てしても防御しきれず、大きく後方へと弾き飛ばされた。牽制のつもりで放つたのか、飛ばされながらも投げた剣は、防御すらせぬアーチャーの鎧に跳ね返される。如何に機動性で勝るとはいえ、攻撃力も防御力も、アーチャーとラ

ライダーでは比べ物にならない。攻撃が受けきれないと悟り、回避に専念するライダーは、瞬きの間に屋上の片隅にまで追い詰められていく。自在に動き回れる空間が無いこの場所では、速度を活かしきれないのだ。

剣の双方を攻撃のみに注力し、流れるように斬撃を振るっていくアーチャー。その剣捌きは、必死に防御する騎兵を遥かに圧倒していた。

「くっ……！」

「つまらぬ。満足に足掻きたければ、宝具の一つでも出して見せるがいい。それすら出来ぬと言うならば、貴様は此処で朽ちて行け」

アーチャーの宣告に、美貌を顰めるライダー。その肩は大きく上下しており、ただアーチャーの攻撃を凌ぐだけでも疲弊している様子が見て取れた。正面から戦って、生き延びられる確率は無に等しい。それは何よりもライダー自身が理解している筈だが、今更逃げ出そうにも、アーチャーには遠距離攻撃の手段がある。背を向けた瞬間、矢で射抜かれるに違いない。

魔力吸収の結果を展開したとはいえ、俺と遠坂の度重なる妨害や、日数の不足からそれも不十分。そもそも魔力が足りていれば、ここまで圧倒される事もないだろう。

つまり。どう足掻こうとも、ライダーは既に詰んでいる。十分な魔力を吸い上げる時間など無い。次の一手で、アーチャーの剣がその体を両断する。

「——死ぬ」

振り上げられる双剣。釘剣を掲げるライダーだが、その動きは緩慢にして稚拙。瀑布のような一撃は、釘剣ごとその主を叩き斬ろうと——

「……………え？」

俺が動けたのは、本能的な反射によるものか。戦いの決着を見るより先に、瘡のような寒気を感じて、咄嗟にその場に屈みこんだ。

瞬間、髪を削っていく灰色の一閃。屈まなければ間違はなく俺の頭を叩き割っていたそれは、骨のような刃を持っていた。

「なに——？！」

驚きの声は、もう一つ。背後を見るより先に飛び込んできたのは、何者かに斬撃を防がれたアーチャー。ライダーを叩き斬る直前、骨のような何かが、盾となって割り込んでいたのだ。

跳ねるように立ち上がり、状況を確認する。一体どこから現れたのか……誰もいなかった筈の屋上に、骨で編まれた人形が、大挙して湧き出していた。まさにその瞬間まで気配を感じさせぬ奇襲は、先程のランサーと同じ。という事は、この人形たちは。

「キャスターの使い魔……?!」

「だろうな。つくづく小細工の多い女狐よ」

舌打ちするアーチャー。鋭い前蹴りで骨人形を吹き飛ばし、再びライダーに向け剣を振るうも、骨の犠牲で僅かな時間を稼いだ女怪は大きく跳躍し、アーチャーを跳び越え安全地帯へと逃げ延びた。着地したライダーを守るように、その周囲に骨人形が集結していく——いや、骨人形が集まっているのはそこだけではない。雲霞のように湧き出る大群は、アーチャーを、俺を、屋上そのものを取り巻き埋め尽くすかのように次々と増え続けている。ぎしぎしと轟く怪物に囲まれ、恐怖を感じるより先に、邪魔者に阻まれる苛立ちが募った。

この骨人形たち、おそらく一体一体は雑魚だ。武器さえあれば、俺でも簡単に倒せるだろう。だが、兎に角数が多い。こいつらに手間取った分だけ、貴重な時間が増えて行き……それだけ、生徒たちの命が失われる可能性も高まる。今は一刻でも早くライダーを倒さなければならぬというのに——！

「こいつら……！」

邪魔だ。

武器も持たない今の俺では、骨人形一体ですら脅威となる。けれど、そんな事は問題では無い。今はただ、ライダーを守るこいつらが鬱陶しい。

為すべき事はただ一つ。人形どもを蹴散らし、ライダーを打倒するのみ。が、その為の武器が無い。化け物に取り囲まれた状態で、どうやって武器を手に入れればいい？



骨人形から武器を奪う——却下。如何に鈍いとはいえ、骨人形は数が多い。一体と戦っている最中に背中を斬られれば終わりだ。

何かの道具を強化する——却下。今の俺は徒手空拳だ。そもそも強化する材料が無い。無い物を作り出す事など……待てよ。

無から有を作り出す、その術を俺は持つている。切嗣に「効率が悪いからやめておけ」と言われ、それ以降鍛える事さえしなくなったモノ。理念を以て幻想を練り上げ、贗作を生み出す俺の魔術。

グラデーション・エア  
—— 投影魔術

俺の記憶にある限り、これで武器を作った事はない。それ以前に、碌に取り組んだ事さえない魔術。成功するかさえ怪しいが……これなら、武器を生み出す事が出来るかも知れない。だが、一体何を作ればいいのか。

金属バットか。ナイフか。銃器か。いや、そのどれでもない。リーチがあり、打ち負けぬ硬さがあり、且つ容易にイメージできるもの——剣だ。

集中する。骨人形が迫ってくる中、自身の内面に埋没する。想起するのは、アーチャーが携える二本の剣。

傷一つなく、一見して儀礼用と見紛うような輝きを放つ黄金の剣。俺の知らない手段によって鍛え上げられたそれは、両刃の剣に、そして弓矢にすら変形して見せた。異な

る幾つもの機構を持ち合わせながら、ただ一つの目的——即ち、戦闘にのみ主眼を置いて作られた剣。あれならば、例え数百の怪物に襲われたとて負けはしまい。あの剣があれば、未熟な俺でも戦える。

準備は出来た。覚悟は決めた。後は唱えるべき呪文を通じ、想像を具現化するのみ

……！

「トレス  
投影——」

「——そこを動くな、雑種」

魔力回路を起動しようとした、まさにその瞬間。傲岸な声と共に、数十本もの光の束が降り注いだ。

反応の隙さえ与えない。散弾銃かと思ふ程の魔力の矢は、俺を取り巻いていた化物共に雨霰と襲い掛かる。空中から一息で放たれた矢の群れは、蠢く骨の軍団を瞬時に塵へと変貌させた。

骨人形の破片が転がる中、弓状に形を変えた双剣を握ったアーチャーが俺の横へと着地する。どうやら空中に跳び上がり、そこから骨人形を狙撃してくれたようだ。何十という敵を同時に撃ち抜いて見せるとは、流星は弓兵と言うべきか。

正直、アーチャーの掩護が無ければまずかった。殆ど使った事もないような魔術を使うなど、正直言って賭けでしかない。魔術の失敗はそのまま身の破滅へと直結するのだ

から。

「助かった。ありがとう、アーチャー」

「たわけ。私のマスター足らんとするならば、自分の身程度自分で守ってみせよ」

俺の感謝に鼻を鳴らして答えると、アーチャーはライダーの方へと視線を送る。この男からすれば、俺の事などついでに助けてやった程度の認識に過ぎないのだろう。アーチャーの狙いは、本命であるライダーまでの壁の排除だ。

豪雨めいた範囲攻撃は、俺の周囲だけでなく、ライダーの頭上にも均等に降り注いだ。骨の壁に守られ、ライダー本人への直撃こそしなかったが……俺たちとライダーの間に立ち塞がる骨人形は、目に見えて減っている。新たに骨が湧き出す前に、ここは一気に押し切るべきだろう。

「アーチャー、こっちはこっちで何とかする。今の内にライダーを……」

足元に転がっていた骨の刃を持ち上げ、佇むライダーを顎で示す。武器も手に入っていない、数を減らした使い魔相手ならこれで暫くは戦える。

一方、壁となっていた雑兵を打ち崩され、後退する素振りを見せるライダー。だがアーチャーの鋭い視線に射竦められ、一步退いたところでその動きが止まった。骨人形が出てきた瞬間に逃げておけばよかったものを、こうなってしまうは逃げる事すら出来ないだろう。骨の増援があればこちらを倒せると踏んだのかもしれないが、それは致命

的な誤りだった。

「……………」

「小細工は終わりか？ 貴様といいキャスターといい、芸の無い女共よ。男を楽しませる事すら出来ぬ女なぞ話にならぬ」

たじろぐライダーに対し、アーチャーが一步前へ出る。骨人形は未だに何体も残っているが、アーチャーに一掃された穴はそう簡単には塞がらない。

……だが。使い魔による不意打ちも失敗し、勝敗がほぼ確定した今。ここまで追い詰められて尚、慎二が出てこないのが、疑問と言えば疑問だった。まさかただ隠れていれば、やり過ぎせるとでも思っているのか。そんな甘えは許さない。何としてでも見つけ出し、ライダー共々報いを受けさせてやる！

「アーチャー…！」

「フン……三流はどこまで行っても三流か。そろそろ引導を渡してやろう」

言うが早い、目にも留まらぬ速度で構えられた大弓から、魔力の矢が放たれる。銃の早撃ちの如き旋風を、驚異的な反応速度で躲したライダーだったが、アーチャーの連撃は二撃、三撃と続いていく。音すら置き去りにする矢を避けるのは難しいと気付いたのか、二撃目を辛うじて凌いだライダーは釘剣による迎撃に切り替えたが、間断なく放たれ続ける矢の群の前に徐々に後退を始めた。

ライダーは悪手を打った——屋上の隅まで退いた時点で、彼女の運命は決定する。初撃を避けた後、そのまま被弾覚悟で回避行動に移れば持ち前の機動性を発揮出来たものを、一度防御に回ってしまったが為にそれ以外の動きを取れなくなっているのだ。牽制目的の最初の数発と違い、既に今放たれている矢は紛れもなく必殺の威力を持つ。剣から弓への変化に対応できず、牽制と本命を見分けられなかったライダーは、選択肢を間違えた。今から逃げようにも、別の動きに移るにはどうしてもワンアクションを挟む必要がある。そして、アーチャーがその隙を逃す筈が無い。

ここまでのライダーの立ち回りを見る限り、あのサーヴァントが戦略や戦術を以て戦っているとは思えない。二手先、三手先を考えていけば、こうも簡単に、アーチャーの術中に幾度も陥る事など有り得ないのだ。

この結界を使ったやり口といい、おそらくライダーは真つ当な英霊ではないのだろう。戦闘訓練を受けず、戦略・戦術を学んでいないが故に、単純な力押しで戦うしかない……地力で上回るセイバーや、常に先の先を読むアーチャーにはこうして手玉に取られるのだ。

次々と速度を増すアーチャーの矢を受けきれなくなったライダーが、ついに隅まで追い詰められる。が、流石はサーヴァント。矢を捌き切れずに釘剣を弾かれ、一瞬隙を晒したものの、弾かれた勢いを逆手に取ると鎖を鞭のようにしならせて叩き付けてきた。

咄嗟に動いた籠手がそれを防ぐも、反撃によつて次の狙いが外れ、アーチャーの矢はあらぬ上空へと消えて行つてしまう。

「……………」

僅かな一瞬。開いた活路を見逃す事無く、身を翻すライダー。実力で弓兵へ遠く及ばず、骨人形という手札すら失つた現状では、速やかな撤退こそが最適解であり——だからこそ、それは致命的な隙となつた。

「——莫迦めが」

屋上より跳躍しようと身を屈めた刹那、ライダーの体が驚きに強張る。視界に映る、彼女が脱しようとしたその先にある領域。その全てに、拡散した矢が降り注ぐようとしていた。この屋上から至れる範囲では、何処へどう逃げようとも、無数の矢が体を刺し貫く。敵の反撃すら利用……いや、予想して、アーチャーは上空へ放つた矢を、ライダーの逃走を封じる柵として用いたのだ。

逃げられぬと悟り、慌ててアーチャーへと向き直るライダー。だが、遅い。今までとは段違いの魔力を籠めた矢が、既にその眉間へと照準を合わせている。これこそは、あの怪物めいた耐久力を誇る狂戦士バーサーカーにすら手傷を負わせた一撃。これを喰らつて、弱りきつたライダーが生き延びられる道理はない。

終幕の矢が放たれる。衝撃波すら伴つて空間を抉り抜く矢は、砲弾となつて射線上に

ある全ての存在を破壊する。それはサーヴァントであるライダーとて例外では無い。呆然と立ち尽くすライダーに、必滅の刃が炸裂しようとする寸前。

——ばさり、と。その顔から、眼帯が剥がれ落ちた。

\*\*\*

一方。ライダーがアーチャーの術中に陥っていたその頃、残されたサーヴァントたちもまた、互いの命を削り合うべく死闘を繰り広げていた。

単なる余波で木々を薙ぎ払い、大地を爆裂させる赤の閃光。天を裂き、空を砕くのではないかと錯覚させる魔術の轟雷。ただの一撃ですら甚大な破壊力を持つそれらは、最早個人の域を超え、戦術兵器に匹敵しよう。だが、無尽蔵に降り注ぐ暴虐の嵐を前にして尚、敢然と立ち向かう騎士の姿があった。

ランサーの槍撃。キャスターの魔術。共に超一流の術者が振るうそれを、防ぎ切る事数十回。それだけの攻撃を受けて尚、誇り高き剣士の姿には傷一つ無い。二倍の敵を前にしても微塵も揺るがぬその偉容は、さながら移動要塞とでも言うべきか。

「どうした。攻めが甘いぞ、ランサーー！」

ランサーの突きを難なくいなすと、稲妻めいた踏み込みで槍兵の首を刎ねるべく剣を

振りかぶるセイバー。骨も砕けよとばかりの剛剣に、受けに回った紅の魔槍が大きく弾かれ、衝撃に大きくよろめくランサー。しかしそのタイミングで到来した砲撃によって、セイバーは追撃を断念せざるを得なかった。

仕切り直しのつもりか、ランサーは詰めていた距離を僅かに開ける。また、ランサーの窮地を救ったキャスターも、機を伺うように慎重に高度を上昇させた。

先刻から、セイバーとキャスター・ランサーの対決は膠着状態のまま推移している。いかにセイバーには凜の支援があるとはいえ、戦力比は実質一対二。相手が弱兵ならまだしも、キャスターもランサーも、聖杯の招きに応じたサーヴァントであり歴戦の英雄。数の差という決定的な要素があつて尚、拮抗した状況が保たれている原因は、数で勝るキャスター陣営にあつた。

ほぼ魔法の域と呼んでも過言では無い空間転移を操り、一時的とはいえアサシンのそれに匹敵する気配遮断を施せる程の、卓越した力量を誇るキャスター。二度に亘つて能力値で優るセイバーと渡り合い、一度はライダーやアサシンを同時に相手取った戦いを制したランサー。それぞれが、サーヴァントという超人たちの中にあつてすら、紛れもなく強者に位置づけられる豪傑。しかしこの戦場に於いて、彼らが全力を出し切れているとは言い難い。

協力関係を築いているとはいえ、それは双方の意に沿わぬもの。キャスターは手駒の



不足故仕方なく、ランサーは主の指示故嫌々ながら手を組んでいるのが現状。互いへの信義も信頼も無く、利害関係すら希薄。ともすれば背中を刺されかねないとの疑心から、共通の敵を前にしてさえ、彼らは互いを警戒し合っていた。常に味方の監視に注力せねばならぬ以上、連携など望むべくもなく、それ以前にそれぞれが自分の力を発揮出来ない。

一方、セイバーにはそのような縛りは無い。元々単純な能力値でキャスター・ランサーを圧倒している上、マスターとの信頼関係も強固。常に的確な指示と掩護というバックアップを受けているセイバーは、思うままにその力を揮える。直接彼女と打ち合うランサーは持ち前のルーン魔術を以て能力値を向上させているが、その差を埋めるには至らない。否、ランサー単独であれば、前回のよう互角に戦う事も出来ただろうが、ここに来て油断ならぬキャスターの存在が足を引っ張る形となった。

加えて、セイバーとキャスターの相性もある。並外れた対魔力を備えるセイバーは、事実上ほぼ全ての魔術を無効化する。如何にキャスターが優れた魔術師といえど、その防御力を超えて手傷を負わせるのは難しい。ここがキャスターの陣地ならばその手段もあつただろうが、今の彼女に地の利は無い。有効打となる大火力の魔術を放とうにも、今度はランサーが邪魔になる。セイバーと比して数段劣る魔術耐性しか持たないランサーは、キャスターの攻撃魔術を防ぎ切れない。必要とあれば背中から槍兵を撃つ事

も視野に入れているとはいえ、今ここで味方を撃つのは最悪の選択肢でしかない。

ならばとマスターを狙い撃とうにも、そのタイミングを見計らったかのように、セイバーの剣先がキャスターを牽制する。時折思い出したかのように飛来する凜の魔術攻撃も、その機を失わせるには十分なものだった。

こうした条件が重なった結果、戦況は互角……いや、僅かながらセイバー側が優位に立っている。互いにまだ傷は負っていないが、激しい戦闘の余波はそこかしこに及んでいた。生い茂る草や木は根こそぎ破砕され、林は今や更地と成り果てている。つい数分前まで偉容を誇っていた弓道場は半壊し、崩れ落ちた屋根には斬撃痕が刻まれ、壁は魔術砲撃で粉々に砕け散っていた。最早生徒たちの鍛錬の場となっていた痕跡は無く、空爆でも受けたのかと見紛う程の破壊の爪痕が淡々と残されている。自然も人工物も等しく薙ぎ払われ崩壊していくその様は、個人の戦いと言うよりは自然災害の猛威を思わせた。

「……………」

無言で剣を構え、敵対する両者を牽制するセイバー。これが二度目の聖杯戦争となる彼女にとって、この構図は奇しくも前回のそれと酷似したものだだった。

十年前に於いて、前哨戦となった最初の戦い。衝撃と破壊を撒き散らし、人工物を倒壊させながら、複数のサーヴァントと対峙するのはあの時と同じ。付け加えれば、対す

るサーヴァントがランサーであるという点も共通している。最初に立ち塞がるサーヴァントがランサーだった事といい、あの黄金の英霊が再び召喚された事といい、味方に“衛宮”と言う名の人間が存在する事といい……セイバーにとつて今回の聖杯戦争は、あまりにも過去を想起させる事柄が多すぎた。

だが。だからこそ、前回のような結果は繰り返せない。敵が以前に劣らぬ豪傑揃いといえど、彼女の剣捌きが鈍る理由にはしらない。聖杯を掴む為ならば、何としてでも敵を打倒し灰燼に帰す決意。それは、一対二の状況であろうと変わりはない。アーチャーからキャスターの擬態魔術の事を聞き及んでいなければ、躊躇なく宝具を以て焼き払った事だろう。

『セイバー。このまま時間は稼げそう?』

『ええ。この二人は強敵ですが、守勢に徹する分には問題ないでしょう』

睨み合いの最中、念話で意思疎通を図る凛とセイバー。敵前とはいえ、彼女たちにはそれだけの余裕がある。当初の敵の目的とは裏腹に、今や足止めを担うのはセイバー側、それを突破する必要があるのはキャスター側となっている。易々とアーチャーの離脱を許したのと、セイバーの守りを突破出来ない現実が立場を逆転させた。想定を凌駕するセイバーの強さに、キャスターが目論見を崩された形だった。

ライダーが結界を完全発動させ、十分な魔力を手に入ればキャスター側は圧倒的な

優位に立つ。しかしその前にアーチャーにライダーが倒されれば、一転して不利になるのはキャスター側だ。今更キャスターかランサーが離脱しようにも、剣の騎士はそれを鋭く牽制する。黄金の英霊が見せた信頼を裏切るような真似を、騎士の誇りが許す筈が無かった。

『ですが、マスターの姿が見当たらない。それが些か気がかりです』

しかし、セイバー側にも懸念事項がある。キャスターとランサーのマスターは、いずれも姿を見せていないのだ。

今の拮抗状態を作り上げているのは、セイバーの純粹な力量のみならず、凜との完璧な連携が保たれているという点が大きい。強力な魔術師が現れば、凜はそちらに対応せざるを得なくなり、セイバーは単独でサーヴァント二体を相手取らねばならなくなる。サーヴァントのみならず、マスターまで倍の数が出ては、如何にセイバーたちが優れていようと苦戦は必至だった。

簡単に宝具を使う訳にいかないのもそれが原因だ。セイバーにはサーヴァント複数体を相手にしても十分勝機を掴めるだけの宝具があるが、それには「溜め」が必要だ。どこかに潜む敵マスターが危険と判断し令呪を使えば、むざむざ真名と宝具を曝け出すのみの結果に終わってしまう。令呪による戦局の逆転は、常に警戒する必要がある。敵マスターが姿を見せないのは、利点でもあったが不確定要素でもあった。

『今回は、あいつらを倒す事が目的じゃないわ。下手にこつちの手札を見せるのも嫌だし、出てこないっていうならこのまま戦いを続けるだけよ』

『私としても、その方が助かります。……キャスターのサーヴァントからは、何か得体の知れない物を感じる。下手に突出すれば、返り討ちに遭うかもしれませぬ』

『えっ……それって、ランサーよりも強いって事?』

『いえ。彼女は強力な魔術師ですが、私の守りを貫くのは難しい。こと直接戦闘に限って、私が負ける事はないでしょう。ですが、あのサーヴァントにはそれ以上の何かがある』

最高ランクを誇るセイバーの直感。それは最早勘の領域を超え、殆ど未来予知に等しい。幾度となくその身を救ってきた直感が警鐘を鳴らす以上、迂闊に飛び込むという選択は既にない。

今の状況と似通った、十年前の戦い。ランサーのサーヴァントと激戦を繰り広げたセイバーは、敵の計略に囚われ、宝具を使えなくなるといふ致命的な足枷を嵌められた。こと人知を超越した存在であるサーヴァントは、どんな埒外な秘術を隠しているか判つたものではない。召喚宝具、飛行宝具、固有結界と条理に囚われぬ数々の宝具を目にし、此度の聖杯戦争に於いても既に因果逆転、自動蘇生という超常の奇跡を目の当たりにした以上、相手の手札も知れぬ内に突貫するのは無謀どころか自殺行為。

セイバー自身に余裕が無い状態であれば話は別だろうが、今のセイバーは正常な判断力を持ち合わせている。拮抗状態を維持するのは最適解であると、理性・直感の双方が彼女にそう告げていた。

「ちっ、罅が明かねえな……おいキャスター、得意の罅は品切れか？」

「ふん。貴方こそ、槍捌きが鈍っているのではなくて？それとも、相手が女では不満だったかしら」

「抜かせ。これだけの剣使いとあつちや、男も女も関係ねえ。それと三度もやり合つてんだ、こんなに愉しい事があるかよ。

……だがまあ、毎度のように邪魔が入るのは腹が立つ。オレがやりてえのは全力の、サシの戦いだ。水を差されちや困るんだよ」

お前は引つ込んでいろと、皮肉げに口角を吊り上げるランサー。そのあからさまな侮辱に、流石のキャスターも気色ばんだ。

「これだから戦士ぶる男つて……!」

と。憤りにキャスターが腕を振り上げた刹那。ズシン、と、大地が鳴動した。

地震かと思紛うその振動に、全員が慄然と周囲を見渡す。結界に覆われ、完全な異界と化したこの領域。このタイミングで響く轟音が、自然発生のそれである道理はない。

「なんだ……? キャスター、お前何かしやがったか？」



能力を持ち、半ば反則的とも言える防御力と蘇生能力を併せ持つ怪物。この英霊の介入は、彼女にとつて完全な予想外だった。

……いや、この事態を予想していなかったのは凜だけではない。敵対するキャスターやランサーですら、驚きにその身を強張らせていた。キャスターに至つては、ローブの下から半ば畏怖めいた表情さえ覗かせている。

この場に集まっているサーヴァントだけでも四人。別の場所で戦つていると思われるアーチャーとライダーを加えれば、六人。アサシンを除く全てのサーヴァントが、学校の敷地という狭い範囲に集結している。これ程の英霊が一ヶ所に集う事自体が異例であり、一度戦端が開かれれば、如何に広大な敷地といえども、不毛の地へと変り果てるのは想像に難くない。パーサーカーの参戦は、秩序を以て戦つていた英雄たちの戦場を、混迷の渦へと変貌させた。

「あら。久しぶりね、リン。貴女と会うのは、もうちよつと後になると思つていたのだけど」

聳える狂戦士の肩に乗る、小さな雪の少女。その姿を認めた凜とセイバーの表情が、共に険しいものになる。どちらにとつてもこの少女は、見知らぬ存在では無かった。

「イリヤスフィール、アンタ、なんでここに……」

「本当は遊びに來ただけだったんだけど……レディをパーティに招かないなんて、無礼



だと思わない？それに、サーヴァントが一杯いるなら都合もいいし。

——目障りな蠅は、潰しておかなくちや」

そう、混じり気のない純粹さで告げると。少女に従うバーサーカーの殺気が、目に見えて膨れ上がった。見ずとも判る脅威に、その場の全員の表情が硬さを増す。

外界と断絶した結界を力任せに通り返ってきた、その桁違いの力もさることながら、この主従はセイバーやキャスターらの事情など全く考慮していない。異なる勢力が争う激戦で、その双方を同時に相手にしようなど、まずまともな思考の持ち主なら考えもしない。だが性質の悪い事に、隔絶した力量を誇るバーサーカーには、誇張でも何でもなく、この場に集う英霊全てを相手取れるだけの実力があつた。

イリヤスフィールは、どちらの陣営に肩入れする気も無い。それどころか、全てのサーヴァントを駆逐する為にこの場に現れたと豪語する有り様だ。ここからは、二つでは無く三つの勢力が互いを狙い合う大乱戦となる。

「これは——」

自軍の窮地を、目敏く感じ取つたのはキャスターだった。

アーチャーがライダーを倒す前に救援に向かわねば不利だというのに、立ちはだから壁が二倍に増えた。更に、セイバーとバーサーカーはその特性上、キャスターでは有効な打撃を与えられない。電撃戦による突破が唯一の勝機であつたにも関わらず、それす



揺るがない。

縦横無尽に振るわれる大剣は、掘削機の如く、大地を掘り返し木々を蹴散らし大気を震撼させる。細い槍しか持たぬランサーは容易く跳ね飛ばされ、臂力と長剣を併せ持つセイバーすら受けるだけで精一杯。キャスターの魔術砲撃は、神の加護呪いによつて空しく光を散らすだけ。

互角どころか、圧巻。元来彼が持つ神域にすら至る戦闘能力と、狂化による能力値の底上げは、それぞれが強力な英霊たる三者を前にして尚、絶大な優位性を発揮していた。「ちいつ、こいつは流石にキツイ——！」

クランの猛犬たるランサーすら、余りの猛攻に苦鳴を漏らす。ルーン魔術によつて、一時的にセイバーに迫る身体能力を得たとはいえ、地力があまりに違い過ぎる。ランサーとて半神の英霊、万全ならば彼の大英雄にも劣らぬという気概はあるが、知名度やマスターの差は如何ともし難い。

いや。彼やセイバーが全力で戦えば、バーサーカーを殺害する事自体は不可能では無い。しかし、それを補つて余りある十二ゴッドハンドの試練という規格外を破る事が出来ないのだ。バーサーカーを殺せる程の一撃を放てば、その瞬間はどうしても隙が出来る。格上の相手に勝ちを拾おうとすれば、相打ち覚悟にならざるを得ない。だが、それだけの覚悟を負つてバーサーカーに致命傷を与えたとしても、相手は勝手に蘇生してカウンターを打

ち込んでくるのだ。

セイバーは実戦を通して、ランサーはキャスターの知識からそれを学んでいる。白兵戦闘を得意とする彼らにとって、この大英雄ほど相性の悪い敵は存在しなかった。

「くっ……い！」

幾度目かの斬撃。雪崩に等しい一撃を薙ぎ払いで弾き返し、返す刃でバーサーカーの胸板を切りつけるセイバー。通常ならそれだけで勝負が決まりそうな攻撃だったが、不可視の剣は甲高い音と共に弾かれるだけ。概念による守りを前にしては、攻撃の強度は意味を為さない。バーサーカーの肉体には、傷一つすらつけられないのだ。

一方、バーサーカーが振り回す岩剣は、ただの風圧ですら殺傷力を持つ。未だ一度たりとも直撃を許していないにも関わらず、セイバーとランサーの鎧には、既に無数の細かい傷が刻まれていた。

「A e p o ……」

セイバーとランサーが離れ、狂戦士が独りになった隙を見計らい、キャスターが即座に魔術を放つ。高速神言により練り上げられたそれは、宝具にすら匹敵しよう。通常ならば瞬間契約を要する大魔術を瞬きの間に構築する彼女の力量は、現代の魔術師など足元にも及ばない。地形を変える程の火力を、キャスターは湯水のように叩き付ける。

……しかし。バーサーカーの肉体は、その砲撃すら弾き返す。戦場が自らの拠点なら

ば、このヘラクレスの襲来とて凌ぎ切る自信があったキヤスターだったが、今の状況は分が悪すぎた。三騎がかりの攻撃すら受け付けぬ怪物を前にして、ローブの下に苦々しげな表情が浮かぶ。

四人のサーヴァントが入り乱れる大激戦の中。二人のマスターは、別々の場所で戦況を見守っていた。

片や凜は、予想だにしない展開に齒噛みして。片やイリヤスフィールは、己が従僕の雄姿を満足げに。丁度中間点で激戦が繰り広げられている故、ただサーヴァントの戦いを見ているしかない彼女たちだったが、間に戦場が広がっていないのならば魔術師同士の戦いが始まっていた事だろう。超一流の魔術師たる五大元素使いと、アインツベルンが誇る最高傑作のホムンクルス。どちらが勝とうとも、無傷で済むはずがない。戦いを避けられたのは、果たして幸運だったのか。

「——え？」

「あれって——」

故に。戦場を俯瞰していた彼女たちだけが、その異変に気付く事が出来た。

学校全体を覆い囲んでいた死の結界。それが唐突に、何の前触れもなく掻き消えたのだ。それと同時に、空を彩る血色に代わって、今度は眩い光が全てを染め上げる。

凜の後方、イリヤスフィールの前方に立ち並ぶ校舎。生えていた林と建物が悉く打ち

壊され、今や校舎とこの場所の間に阻む物はない。屋上に煌く白光は、この場からでも容易に観測出来た。

太陽が二つ出来たのかと錯覚する程の極光。目を晦ませる絶大な輝きに阻まれ、その正体は判然としないが……屋上より弾丸のように飛び出した発行体は、宙を一回りしたかと思うと、隕石のように戦場へと突っ込んできた。

「セイバー!」

「バーサーカー!」

迫りくるそれを危険と即断し、二人の少女がそれぞれのサーヴァントに警鐘を鳴らす。超能力めいた第六感と、獣の如き本能を持つ両者は、直前まで鏖競り合っていたにも関わらず、即座に己が主の元へと飛び退いた。

……だが。眼前の戦場に気を取られていたキャスターとランサーは、それに気付くのが一瞬遅れた。

「——ッ!」

はつとして宙を見上げる二人だったが、遅い。迫り来る極光は、逃げ遅れた彼らを巻き込んで空間を貫き——

「な……!」

——そしてそのまま、空の彼方へと消え去っていった。

後には、何も残らない。まるでそれが夢幻であったの如く、直前までその場にいた二人のサーヴァントは、その痕跡すら残さず消え去っていた。彼らが生きているのか、消滅したのか、それさえ判然としない。

今の光が現実の物だと思わせる証拠は、粉々に砕け散った木々と建物の残り滓だけ。残された二組の主従は、消えて行く光を呆然と見送る他なかった。

\*\*\*

全てが、石になった。

ライダーの顔の上半分を覆う、眼帯。それが取り払われた途端……万象一切が、悉く物言わぬ石と化した。

彼女を貫く筈の矢は瓦礫細工と化し、物理法則を無視して地に堕ちて行く。コンクリートの床に落下した矢はパリンと砕け、元の魔力へと霧散して消えた。

「なんだ、あれ——」

魔眼。

本来、外界からの情報を取得する為の器官である眼球を、逆に外界へと働きかける器官へと作り変えた物。入出力を逆転させる、魔術師の中でも一流の術者しか持ち得ない

力。

だが、目の前で広がるこの光景は、魔術のそれとは格が違う。魔力の矢を一瞬で凝固させ、物理法則の一切を無視して見せた超常の干渉能力は、魔術と言うより超能力に近いだろう。

あの灰色の魔眼は、果たして眼球と呼べるかどうか。宝石や水晶だと言われた方が、まだ現実味がある。瞳孔は四角く、虹彩は固まり、人の持つそれとはあまりにかけ離れすぎている。ならばあれは人ではなく、神に連なる瞳そのもの。

石化<sup>キユベレイ</sup>の魔眼。

それが、ライダーのサーヴァント……いや、英霊メドゥーサの持つ宝具だった。

「フン。雑種にしては過ぎたモノを持つている」

そう嘯くアーチャー。しかしその体勢は、矢を撃ち放った状態のまま固まっている。ただ見るだけで万物を石に代える魔眼は、矢や居並ぶ骨人形のみならず、サーヴァントもマスターも、一切の区別なく等しく射抜く。それがどれ程桁外れの神秘なのか。半人前の魔術師である俺にさえ、その異質さは理解出来た。

「しまった……！」

目を閉じようとするが、遅すぎる。辛うじて口が動かせる程度で、気付けば俺の全身は、余す場所なく凍り付いていた。



骨を握りしめた手は、そのまま開けなくなっている。血液はドロドロと固まり始め、感覚すら薄れて行く。このまま心臓か脳まで固まってしまえば一巻の終わりだ。足はまだ辛うじて動くが、今更どこへ逃げようというのか。あつちは対象を視界に収めるだけで、問答無用で石化させるのだ。狭い屋上が仇となり、身を隠す物さえ見当たらない。「残念ながら。今の貴方たちでは、私を倒せない」

硬直した俺たちを、人ならざる魔眼で睥睨しながら。ライダーはそう機械的な声で告げた。

その言葉に嘘はない。ライダーを圧倒していたアーチャーは、地に足を縫われたように動きを止め……マスターである俺もまた、体の殆どが石化し身動きが取れなくなつた。

メドゥーサ。

ギリシャ神話に於いて、英雄ペルセウスに倒されたと伝わる怪物だ。本来は女神だったとも言われるが、別の女神の嫉妬によつて、石化の瞳を持つ化け物へと姿を変えられてしまったという。確かに有名ではあるが、英雄では無いメドゥーサが何故聖杯戦争に招かれたのか——腑には落ちないが、それを思い悩むより先にこの石化をどうにかしないと、考えるだけの猶予すら与えられないだろう。

「ハ——蛇蠍魔蠍であろうとは思つたが、よもや真正の蛇女であつたか。魔物風情が

英霊に並ぼうとは、度し難いにも程がある」

「虚勢もそれまでです、アーチャー。貴方たちはここで終わる。せめて苦しまないように、一息で首を刎ねてあげましょう」

釘剣を握り締め、アーチャーを睨み据えたまま、大きく跳躍するライダー。動けぬアーチャーに、その攻撃を避ける手段はない。俺が声を上げる間もなく、騎兵の釘剣がその喉元を引き裂こうと――

「痴れ者が」

「グ――!?!」

ぐん、と跳ね上がる右足。稲妻を思わせる鋭さで放たれたそれは、油断しきっていたライダーの横腹に突き刺さった。蛙が潰れたような声を出し、ライダーは地面をバウンドして転がっていく。内臓を傷つけたのか、がは、とその口から真紅の血液が飛び散った。

地に伏せ咳込むライダーを冷たく見下ろし、アーチャーは何でも無いかのように弓状の双剣を右手で回す。ライダーによる石化が解けたのかとも思ったが、俺の方は未だに動けない。となれば、あれは石化を解いたのではなく――そもそも、効いてさえないなかったのだ。

だが。マスターに与えられる透視能力……遠坂から教わった、サーヴァントを従える

者の特権を以て見ても、アーチャーはそのような特殊能力を持っていない。本人にそんな能力が無いとすると、武器か防具のどちらか……おそらくはあの鎧に、石化を防ぐ為の機構が備わっていたのだろう。極めて限定的な能力だが、このタイミングでそれが発動したのは幸運としか言い様が無い。

ライダーの切り札であろう宝具を、一方的に無効化出来る。それがどれ程の効力を持つかは、表情を歪ませるライダーの顔を見れば容易に想像がついた。

逆転に次ぐ逆転。次々と移り変わる戦局だったが、アーチャーの優位は最終的に揺らがなかった。最終手段である宝具すら無効化され、真名も露見したライダーに対して、アーチャーは依然として隙を見せない。傲然と立つアーチャーと地に伏すライダーを見れば、勝敗は明らかだろう。

「脆いなー」

弓状のままの双剣を、両刃の剣として叩き付けるアーチャー。ライダーは間一髪転がって躲したが、再び放たれたアーチャーの蹴りが、軽々とその体を吹き飛ばした。

「が、あ……っつ」

屋上の扉に叩き付けられたライダーは、そのままずると崩れ落ちる。その右手には未だ釘剣が握られているが、既にアーチャーの攻撃を凌ぐだけの力は残されていない。止めを刺すべく引き絞られる弓に対し、緩慢に伸ばされた右手は。

「な——」

あろうことか。釘剣はライダー自身の首を、深々と切り裂いた。

自傷、などというレベルではない。ともすれば首が落ちかねない程の、何の躊躇もない一撃。幾らサーヴアントとはいえ、あれは致命傷だ。その意図を判じかね、矢を放とうとしたアーチャーの動きが止まる。

しかし。血飛沫を上げながら、ライダーが笑みを浮かべるのを見て。あれは自殺などでは無く、何らかの計略なのだと悟った。瞬き程の間に、飛び散った血液は生き物のように集結し、空中に何らかの紋様を作り上げていく。……あれは。あれは何か、よくないモノだ。

「アーチャー!」

「ちっ、ここは退くぞ雑種……!」

舌打ちし、アーチャーが身を翻す。石化し身動きの取れない俺を左手で抱え上げると、もう片方の手に双剣を携えたまま、何の躊躇いもなく屋上から飛び降りる。

——その直後。何か流星のようなものが、絶大な光量を撒き散らして空へと駆け上がって行った。

「女怪め。この期に及んでまだ隠し玉を残していたか」

俺を地面に置くと、アーチャーが苦々しげに空に舞う光を見上げる。絶大な魔力を纏

うその光は、空を一度回ったかと思うと、凄まじい速度でどこかへ消えて行った。あれは俺たちを仕留める為ではなく、ただこの場から逃走するためのものだったらしい。

あの光は……血の結界、石化の魔眼に続く、ライダーの三つ目の宝具だろう。恐らくは、今までの二つとは違う、騎兵たる彼女が跨るための乗物。その正体までは判らなかつたが、何か強大な魔力と速力を持つている事だけは、遠目にも理解出来た。

宝具が単一とは限らないとはいえ、何れ劣らぬ強力な宝具を、あのサーヴァントは三つも揃えているのだ。ライダーの不調と、アーチャーとの相性のどちらかが欠けては、遁走する羽目になっていたのはこちらだったかもしれない。

「だが喜べ小僧。この地に敷かれた結界は消え去った。ライダーめ、アレと結界の両立は手に余ったと見える」

「つて事は……？」

「うむ。あの雑種は魔力を吸い損ねた。僅かばかりに吸い上げた魔力も、今のアレで使い切った事だろう。この学び舎にいる雑種どもは、命拾いしたと言う事だな」

その一言に、全身から力が抜ける。石化していなければ、地面に膝をついていたに違いない。

……良かった。ライダーは倒せなかつたが、結界は除去できたし、生徒たちには犠牲者を出さずに済んだ。結果だけを見れば上々と言えるだろう。

「っ——」

「むっ？」

気が抜けたせいかな。段々と、目の前のサーヴァントの姿が見えなくなってきた。

魔眼の主はもういない。石化も、このままなら自然と回復するだろう。しかし、全身を固められ、血流や内臓の動きすら鈍化させられた反動が、今一気に襲い掛かって来た。……まずい。このままだと、倒れる。

こちらを振り返るアーチャーの横顔を最後に。俺の意識は、真っ暗な闇に落ちた。

## 17. 相對する二人

……遠い日の、夢。

いや、これは夢ではなく記憶なのか。何度も見てきたこの光景は、誰かの記憶なのだろう。余りに鮮明で、現実感に溢れたこれは、曖昧な夢などでは説明が出来ない。例をあげるなら、映画に近いか。誰かが撮った古いフィルムを、途切れ途切れに見せられる。だが珍しく、今回のこれは、前回から然して時を経ていないものだ。と直感で把握できた。……」

虚ろな空。霞む夕日が、砕けた大地を飾っていた。

嘗ては整地されていたであろう広場は、流星群が激突したかのように、幾重もの巨大なクレーターに変貌している。想像を絶する規模の破壊は、広大な面積を誇る広場のみならず、その周辺に聳えていた建物群までもを瓦礫の山へと変えていた。

だが。天災に等しい大惨劇だというのに、何故か犠牲者の姿は見当たらない。土塊と化した建物の姿とは対照的に、元から誰もいなかったかのように、人の姿は消えている。焦げ付き、穿たれ、想像を絶する高熱によるものか、一部はガラス化している大地。人すらおらぬそこには無数の、墓標のようなものが立ち並んでいる。いや……よく見れば

それは、剣であり、斧であり、槌であり、矛であり……その他数え切れぬ程の、無限とも思える武器の数々だった。

何もかもが消えさった死の土地。罅割れた広場の中心。ただ壊れた武器が残るだけの爆心地とも呼べるそこに、二つの影が立っていた。

「……………」

影の片方は、黄金の王。廃墟の中に在りながら、その姿は何よりも力強い。

煌々と輝いていた鎧に、一片の瑕疵さえなかった肉体。完璧という表現以外が見当たらなかったその偉容には、数え切れぬほどの血と傷が刻まれ、下肢を護っていた鎧は最早その役目を果たしていなかった。天を貫くが如く逆立っていた髪は、彼の憔悴振りを表すかのように千々に乱れている。その手に握られた二本の剣も、片方は中途から折れ曲がり、もう片方には大きな亀裂が走る悲惨な姿。肉体も武器も、共にあと一撃に耐えるか否かという、正しく絶体絶命の窮地だった。

しかし、その瞳。底知れぬ炎を宿し、万象一切を射竦める紅玉。肉体は傷つき、武器が砕けようと尚折れぬ気概を纏う紅蓮は、何者にも屈さぬ絶大な自我を感じさせる。

「……………」

そして、もう一方。王と対位置に立つ影もまた、全身を血に染めていた。

男とも女とも取れ、且つそのどちらとも思えないある種非人間的な美貌。どこか作り



物めいたその存在は、まるで壊れかけた玩具のように、全身が罅割れ崩れていた。その身を染める血は、本人の物なのか、それとも返り血なのか、それすら判然としない。ポロポロと末端から零れ落ちて行くそれは、血か肉か、それとも肉体に塗れた泥か。しかし、今にも崩壊する寸前といった風体でありながら、剣へと変貌した右手はどこまでも鋭く。最後の武器を手にした影は、奇しくも王と同様、あと一度動けるかどうかという死の瀬戸際にあつた。

燃え盛る焔の瞳と対照的に、その瞳は何よりも冷たい。まるで何かを見定めるかのような冷静さは、敵のそれというよりは、観察者の視線を思わせる。

「ク……ククク。フフ、ハハハ、ハハハハハハハハ!!!」

互いに満身創痍、辛うじて立っているだけという状況。既に欠片ほどの余裕も残っていないにも関わらず……何故か黄金の王は、独り楽しげに笑っていた。

全身を紅に染めながら、仁王立ちで哄笑する様は凄絶という言葉が相応しい。何がそこまで愉快だったのか、ひとしきり笑い尽くしたところで、王は地面に寝転がった。恐らくは最後の力を使い切り、立っている事すら出来なくなつたのだろう。

「互いに残るは一手のみ。守りも無いのであれば、愚かな死体が二つ並ぶだけだろうよ」  
敵に腹を見せるという無防備な姿を見せながら、笑みを浮かべたまま黄金の王はそう呟く。その笑みは、勝利を掴めなかつた自らへの嘲笑か、それとも自らと互角に戦い抜

いた敵への敬意か。

王が口を閉じた途端、対峙していた人影もまた、糸の切れた人形のように倒れ込む。気力も既に尽きたのか、劍へと姿を変えていた腕は人のそれへと戻り、こちらもまた動けるだけの力は残っていないのだと示している。端麗な容貌という以外、似ても似つかぬ両者だったが、全ての力を使い果たし大地に倒れ伏すその姿は、双方共に一致していた。

「——は、……………？」

臉にかかった緑の髪をかき分けながら、影が何かを王に問う。何を口にしたかまでは聞き取れなかったが、そこには敵意は無く、ただ純粹な疑問だけがあったように見えた。

「なに。——……………も悪くはない」

黒に染まっていく空を見上げながら、上機嫌な顔で王は答える。今し方まで敵と戦いを繰り返していたとは思えぬほど、その表情は晴れ晴れとしていた。

——まるで。何か大切な宝物を見つけた時のように。

\*\*\*

「……………あ。気が付いた？」

耳触りの良い声に、微睡みの中から引き戻される。

ここは……今まで見ていた、あの煤けた場所ではない。いつもと同じ日差しに、何度も見てきた天井の染み。ここは、間違いなく俺の部屋だ。

時間帯は早朝だろう。寝ぼけてよく回らない頭でも、相当長く眠っていた事は判る。だけど、俺は昨夜、どうやって部屋まで辿り着いたのか——？

そう疑問に思いながら体を起こしかけたところで、俺の顔を覗き込んでいる遠坂と、ぱっちり目が合った。

「なっ——遠坂!?! おまえ、なんでここに……」

「随分なぐい挨拶ね。ま、その勢いなら大丈夫でしょうけど……どう? 体の方。どこか痛い所はない?」

慌てる俺を余所に、冷静にそう訊いてくる遠坂。いつもと変わらないその姿勢に、徐々に俺の混乱も収まってきた。

「いや。別に何とも無いけど……それより、あの後何がどうなったんだ?」

最後に覚えている光景は、アーチャーと共にライダーの宝具から逃げ切ったところだ。その後学校の境界がどうなったのか、生徒たちの様子はどうなのか、ライダーがどこへ行ったのか、遠坂とセイバーは無事だったのか……俺は何も把握出来ずに、魔眼の影響で気を失って倒れたのだ。

「学校の方は、とりあえず大丈夫。弓道場は消し飛んじやったし、屋上もかなりボロボロだけど、建物が壊れただけで犠牲者は出てないわ。暫く入院する子も出るだろうけど、みんな無事。だから、安心していいわ」

「……そっか。みんな、助かったのか」

誰一人、死んでいない。全員が生きている。そんな当たり前の事が、ここまで重いとは思わなかった。

結界が発動した瞬間。そして、あの死体と見紛う程に力なく倒れた同級生たちを目撃した刹那。遅かったのか、また助けられなかったのかと思ってしまったが……そうではなかった。今回は、十年前とは違う。無傷とまでは行かなかったが、皆を救う事が出来た。俺たちは間に合ったのだ。

「後の事は綺礼がやってくれてる。これだけの騒ぎになった以上、全部隠すのは難しいでしょうけど……サーヴァント絡みの処理はあいつの仕事だし、どうにか上手く誤魔化すでしょ」

「サーヴァント……そういうえば、遠坂たちは大丈夫だったのか？ ランサーとキャスターは……」

そう訊ねると、遠坂は困ったように眉を曇らせた。こうしてここにいるという事は、遠坂もセイバーも無事だったのだろうか……この様子からすると、何かあったのだろう

か。

「ランサーたちと戦ってる間はまだよかつたんだけど……」

俺とアーチャーが、ライダーとの戦いに向かった後。二対一にも関わらず、ランサーとキャスター相手に互角に戦っていた遠坂とセイバーだったが、その途中でイリヤスフィールとバーサーカーが介入。三つ巴の乱闘に発展しかけたところでライダーの宝具が襲来し、そのままランサーとキャスターと一緒に消えてしまったのだという。

イリヤスフィールとバーサーカーは無傷で残ったため、そのまま戦闘が続けば危険だったが……何故か彼女たちはその場から立ち去ったため、遠坂とセイバーは俺を抱えたアーチャーと合流し、言峰に連絡を取った後でこの家まで撤退して来たらしい。

「そうか。ライダーは屋上からそっちに行ったのか」

「そ。アーチャーから逃げるついでに、ランサーとキャスターを回収していったんでしようね。そのせいで、サーヴァントは誰一人倒せずじまい。結局振り出しに戻ってきちゃったわね」

そう肩を竦める遠坂。確かに、戦力比こそ変わっていないが……それでも俺たちは、ライダーたちの戦力を大きく削ぐ事に成功した筈だ。

学校を覆っていた結果は無くならず、誰一人犠牲者を出さずに済んだ。ライダーは魔力の回収に失敗しただけではなく、自らの真名や宝具も全て露呈し、かつ残った魔力の殆

どを使い切った。キャスターが溜め込んでいる魔力を使えば回復は出来るだろうが、あの陣営の力は大きく落ち込むだろう。その一方で、俺たちは傷らしい傷も負っていないのだ。ことライダーに対しては、絶大なアドバンテージを得たと言ってもいい。

「じゃ、アーチャーもセイバーも、みんな無事なんだな?」

「ええ、ピンピンしてるわよあの金ぴか。放っておくとすぐまたセイバーと喧嘩始めるんだから、まったく……土郎。体が大丈夫なら、しっかりとあいつの事見張っておきなさいよね」

軽いため息を残すと、よいしょ、という掛け声と共に立ち上がり、そのまま出ていこうとする遠坂。

「わたしはわたしでやる事もあるし、部屋にいるから用事があったら声をかけて頂戴。昨日は忙しかったし、しばらくは休んだ方がいいわ」

「ああ、わかった。色々ありがとな、遠坂」

俺の手に手を振って返すと、遠坂はそのまま部屋を出て行った。

……さて。目が覚めた以上、いつまでもここで寝ているわけにはいかない。俺を運んでくれたアーチャーや、あの時背中を守ってくれたセイバーに、きちんと礼を言わなければいけないし。これからどう動くべきなのか、その相談もしなければならぬ。やる事は山ほどあるのだ。

起き上がって手早く着替えを済ませ、顔を洗って居間へ顔を出す。中へ入ると、座って茶を片手に蜜柑を摘んでいたアーチャーとセイバーが、揃ってこちらに顔を向けた。俺の姿を認めたセイバーが、翠の瞳を微かに細める。

「シロウ。体の様子は——」

「この通り大丈夫。昨日はありがとうな、セイバー。心配かけて悪かった」

「そうですか……それは良かった。シロウが無事で、何よりです」

ほっとしたように笑顔を見せるセイバー。心底から俺の無事を喜んでいると判るその柔和な微笑みに、自然と俺も笑みが漏れた。空いている席に座りながら、セイバーに声をかける。

「バーサーカーと戦ったって聞いてたけど、そっちも大丈夫だったみたいだな。安心した」

「ええ。私の方は、小競り合いに終始していましたから。ライダーの宝具と対決したシロウたちほどの危険はありませんでした」

「って事は、もうライダーの話は……」

「はい。アーチャーから聞いています」

ライダーのサーヴァント。その正体はギリシャ神話に名を残す怪物であり、ゴルゴン三姉妹の一人、メドゥーサだった。

本来ならば英霊ではなく、英雄に倒される側の怪物である筈の彼女。何故サーヴァントとして現界しているのかは不明だが、伝承に違わず宝石のような目を持ち、視認した物を問答無用で石化させるといふ恐るべき宝具を持つていた。宝具を解放していたのが短時間だったから気を失う程度で済んだが、あの魔眼を長時間受けていたら、俺は今頃物言わぬ石ころに成り果てていただろう。

そして、血の結界と石化の魔眼という二つの宝具の他に、最後に繰り出してきたあの宝具。最後の最後まで出さなかったところを見ると、あれこそがライダーの本当の切り札だったのだろう。直ぐにその場から退いたのと、凄まじい光を放っていたせいで、その正体は何だったのかは結局判らずじまいだったのだが――。

「……そうだ。礼を言うのを忘れてた、アーチャー。ありがとな、助けてくれて」  
そう言う。黙って俺たちを眺めていたアーチャーが、ぴくりと眉を動かした。

キャスターの使い魔による奇襲。そして、ライダーの最終宝具。どちらも俺が一人だったら確実に命を落としていた。アーチャーが助けてくれたおかげで、俺は今こうして生きていられる。どこまでも自分勝手に傲慢なサーヴァントだと思っていたが……少しはマシな関係になれたのだろうか。

「フン、我とてサーヴァントだからな。マスターの危機には、それなりに手を貸してやるさ。余興といえど、退屈な終わりは見るに値せぬからな」



と思いきや。感情の宿らぬ声で言い捨てるアーチャーの態度は、いつもと何も変わらぬ。やはりこの男にとつては自身の愉しみが最優先、マスターの生死などは二の次三の次という事か。単に今死なれては面白くないという理由があつたから、俺を助けたに過ぎないのだろう。

ここ最近、変な夢……恐らくはアーチャーの過去の一部を見ているのだが、その中でもこの男はこんな感じだった。平然と人を従え、命令する姿が誰より似合う絶対王者。例え死の淵に瀕してでも、この英雄が自分を曲げる姿など想像できない。

だが、一つ疑問が残る。この男の持つ強大な自我は、生まれつきのものなのかもしれないが……夢の中で、アーチャーが自分の娯楽に執着するような姿を見た時はあつただろうか。単に数える程しか夢を見ていないというのものもあるだろうが、その中でアーチャーは常に孤高の王だった。ただ君臨するのみで、傳く臣下すら眼中に無かつた姿と、俺やセイバーの姿を眺めて娯楽と嘯く今の姿では、若干異なっているように見える。

唯一、今朝見た夢。緑の髪を持つ人物と戦つた後のアーチャーは、それまでの峻厳な態度が嘘のように楽しげに笑っていたが……もしかすると。あれが切欠で、アーチャーは少し変わったのかも知れない。誰にも興味を示さなかつた王が、自分に逆らう者に初めて見せた関心。記憶を失つた今でも、その時の事は微かに覚えているのか。

「……あれ」

そうして物思いに耽っていると、ふと違和感に気付いた。遠坂にはもう会ったし、アーチャーとセイバーの姿は見えるが……この家にはもう何人か、住民が居なかつたらうか。

「そういえば、藤ねえと桜はどうしたんだ？」

「タイガでしたら、学校の件で当分顔を出せないという連絡がありました。シロウに、よろしく伝えてほしいと。」

サクラは、熱は若干下がりましたが……まだ本調子では無いようで、今も眠つています」

打てば響くように、澱みなくセイバーがそう答えてくれる。アーチャーは答えようともせずふんぞり返つたままだし、これでは誰が誰のサーヴァントかわからないが……いや、それはさておき。

もしやと思つたが、やはり藤ねえはここに来ていなかつた。いくら無事だつたといっても、藤ねえは正規の教職員。学校であれだけの騒ぎがあれば、調査やら事後処理やら生徒の世話やらで、油を売っている暇はないだろう。何も悪くない藤ねえに余計な負担をかけるのは心苦しいが……原因を作つたのは慎二とライダーだとはいえ、俺がもつと早く決断できていたら、こんな惨事を引き起こさずに済んだのだ。責任の一端は俺にあるとも言えるし、後で何らかの形で藤ねえに詫びを入れるしかない。

あと少し。何かがちよつと違つていれば死者が出ていたという事を考えると、自分の行動の危うさに戦慄する。聖杯戦争とは——命の奪い合いとは、一步でもずれれば無関係な他人にさえ火の粉が飛ぶ狂つた儀式なのだ。せめて、藤ねえや桜だけでも直接巻き込まれずに済んで良かったと思う。

「桜はまだ寝てるのか……具合が酷くなつたりはしてないんだよね？」

「ええ。凜の見立てでは、明日には動けるようになるだろうと。大事に至らなくて、何よりです」

「そうか、良くなつてるなら安心した。本当なら先輩の俺がついてなきやいけないんだけど、昨日は寝ちまつてたからな……セイバーたちには、迷惑ばかりかけてるな。すまない」

昨日ライダーたちとの決戦に向かつた俺たちは、桜の側にいてやる事が出来なかつた。それで日中、俺たちが戻つて来るまでは顔見知りの家政婦さんに桜の面倒を見てもらつていたのだが……俺は途中で倒れてしまったので、後の事は遠坂やセイバーが何とかしてくれたのだろう。

桜の容体が快方に向かつているのは不幸中の幸いだ。何か酷い病気でも患つていれば、病院に連れて行かなければならないところだった。慎二の所在は不明のままだし、もし入院という事にでもなれば、桜に付き添う事の出来る人間がいなくなる。

桜の側にはついていてやりたい。だけど、人間を養分としか思っておらず、何百という一般人を手にかけるような連中を放っておくわけには行かない。慎二やライダーのような奴らを止める為に、俺は聖杯戦争に参加すると決めたのだから。せめてふざけた真似をするサーヴァントだけでも倒せれば、その心配も無くなるのだが……。

「宝具の影響を受けたのですから、寧ろあの程度で良かったと思うべきでしょう。シロウが責任を感じる必要はありません」

「そう言つて貰えると助かる。……宝具といえば、ライダーが最後に出してきた、なんか光ってるアレ。アレの正体って、結局何だか判つたのか？」

「いえ、突然の事でしたので、私も姿形までは……。ですが、ライダーの正体がメドウスなら、あの宝具は——」

「——彼奴の子である、二匹の魔獣。その内のどちらかであろうよ」

考え込む素振りを見せたセイバーに続くように。ここまで黙っていたアーチャーが、迷いなくそう断言した。

「ライダーは、アレを出す寸前に自らの首を切り裂いた。奴自身の血から、アレは生まれ落ちたのだ。メドウス首と血から生まれ落ちた怪物といえは——」

「——ペガサスと、クリューサーオール。飛行能力と白い光、それに知名度の事を考えれば、恐らくは前者でしょう。」

私が見たのは一瞬でしたが、並の魔獣とは格が違う。守りに関しては私以上、もしかすると竜種に匹敵するかもしれません。あれを相手にするのなら、相応の備えが必要です」

首を切りつけて召喚するという特異な手法と、断片的に見えた幾つかの特徴。ライダーの真名が既に知れていた事も相まって、二人のサーヴァントはあつという間に宝具の正体を解き明かしてしまった。聖杯戦争では情報の秘匿が何より重要だというが、今の光景を見ていれば領ける。サーヴァントの真名が割れれば、その手の内までもが詳らかになってしまうのだから。

「ペガサスって……羽の生えた、空を飛ぶ馬の事か？　なんか、あんまり強そうな感じがしないんだが……」

「通常の天馬なら、確かにそうでしょう。ですがライダーの召喚した天馬は、この時代まで残る天馬の伝承の原典。並大抵の敵ではありません」

「——少なくとも、今の我では勝てぬな」

まるで今日の天気を語るように、あつさりとした口調でそう言い放つアーチャー。余りの危機感の無さに、言葉の深刻さに気付くのが一瞬遅れたが……その意味を咀嚼した時、流石に啞然となった。

「勝てないって……アーチャー、あれだけライダーを圧倒してたじゃないか」

「だが仕留め損ねた。彼奴らが一度退いた以上、痛手を覚悟でキャスターの魔力を使う事だろうよ。弱ったままならば良いが、回復したライダーを倒すのは難しきろう。

加えて、彼奴の宝具が問題だ。石化は我には効かぬが、天馬の方はどうにもならぬ。あれに抗し得る宝具を、今の我は持ち合わせておらぬからな」

冷静にそう分析していくアーチャー。傲岸不遜な性格から言って、自分が負ける筈が無いとも言えるのかと思つたが、黄金の英霊の戦略眼は予想以上に的確だった。

最強の幻想種である、竜種にすら匹敵する防御力を持つ天馬<sup>ベガサス</sup>。自在に空を駆ける能力に、あれだけの加速能力を持っているのだ。今回は初めからライダーが逃げるつもりだったから良かったものの、あれ程のスピードを出されては逃げる事すら難しい。サーヴァント達は瞬間的になら音をも超える速度を出せるが、平均速度ではあの天馬には勝てないだろう。

あれに勝つには、召喚される前にライダーを仕留める事の出来る奇襲能力か、それとも天馬以上のスピードか火力か防御力を持った何かが必要となる。だがアーチャーはアサシンではないし、今使える武器と言ったら双剣と鎧だけ。確かに素のライダーとは戦えても、天馬に対する勝ち目はありそうにない。

「それじゃどうしようもないな……セイバーの方は、何かいい手だてはないのか？」

「……無い事はありません。私の宝具ならば、例え天馬であろうとも問題なく勝利出来

るでしょう」

劍の英靈<sup>セイバ</sup>。彼女の正体が何者なのかはまだ判らないが、その力量はバーサーカー以外のあらゆるサーヴァントを上回っている。強力な宝具を誇るライダーにすら勝てる。断言出来るのだから、彼女の宝具もまた絶大な力を持つのだろう。劍の英雄と言うだけあって、やはりあの視えない劍が宝具になるのだろうか。

「ですが、私の宝具は少々扱いが難しい。範囲も広く、発動の際には真名を唱える必要がありませんので、好機を捉えなければ簡単には使えないでしょう」

「真名……？」

そういえば。ランサーはあの槍を使う時、わざわざ槍の名前を叫んでいた。宝具を使うには、そういった規約が存在するのだろうか。

「ええ。私たちの宝具は、その真名を唱える事によって力を発揮します。中にはライダーの魔眼のように、それ自体が宝具としての力を帯びている常時発動型のものもありますが、基本的には真名解放が必要だと思って頂いて良いでしょう」

なるほど……宝具が気軽に使えないのは、そういう理由もあるのか。確かに武器の名前を口にしてしまえば、そこから持ち主の名前も割れてしまう。それで相手を仕留められればいいが、もし防がれたり逃げられたりしてしまった場合、こちらの情報だけが奪われる最悪の結果になりかねない。

それに、名前を口にするのは時間が必要だ。言葉を発する為に必要な時間は高々数秒ほどだろうが、秒間に数百回単位で打ち合いを重ねるサーヴァント同士の戦いでは、一秒ですら長すぎる。隙を突かなければ使えないというのも、恐らくそういう理由があるのだろう。

「そうか……じゃあ、何とかして隙を作れば、セイバーはライダーを倒せるんだな？」  
「恐らくは、ライダー一人なら確実に。状況次第では、キャスターやランサーも諸共に倒せるかもしれません。」

昨日の学校のような戦場ですと、被害が大きすぎる為使うのは難しいでしょうが……  
人気のない、森や山のような場所でしたら問題なく」

「他の人を巻き込まないような場所か……」

うちの学校の敷地は、自慢ではないがかなり広い。あそこすらセイバーの宝具が使いにくいのか……冬木市はそれなりに発展した都市だし、あそこより広くて且つ人がいないような場所となると、未遠川か郊外の森ぐらいしか思いつかない。

「人気のない場所……ライダーたちがそういうところを拠点にしてるなら、こつちから押しかけるっていう手もあるけど。あいつらの居場所って、さっぱり判らないしな……」

「——待て。この街の地図を持ってこい、雑種」

俺の呟きに。考え込んでいたセイバーでは無く、何故かアーチャーが反応した。



何か思いついたのかもしれないと思い、慌てて戸棚に置いてあった冬木市全体の地図を持つてくる。ついでに、ペン立てからボールペンも引き抜いてきた。

アーチャーが食べ終えた蜜柑の皮を片づけ、テーブルに地図を広げる。そこそこ古いものだが、国土地理院が発行している地図だ。地形が変わる程の出来事も無かった筈だし、大きく変わっている部分はないだろう。強いて挙げるなら、何年か前にそこその大きさの地震があつたぐらいだが、特にどこかが変わったというニュースは聞かなかった。

「雑種。貴様の学び舎はどこにある？」

「あ、ああ……この辺りだけど」

ボールペンのキャップを取って、学校の辺りを黒の線で囲む。アーチャーが何をしようとしているのかは判然としないが、セイバーはアーチャーの意図を掴んだようではつとした表情を浮かべて地図を覗き込んだ。

「シロウ、その筆を貸してください」

真剣な瞳に吞まれ、反射的にキャップを取ったままのボールペンを渡してしまう。それを受け取ったセイバーは、俺の下手くそな円の横に、何やら直線を引き始めた。

「昨日、ライダーが逃走した方角はこちらです。私たちの目を欺く欺瞞行動という線もあります。ライダーの消耗具合を考えれば、最短の時間で拠点へ戻る道筋を選んだ可

「性能が高い」

「然り。あの天馬は、彼奴にとっても最後の手段だった。この方角の何処かに、ライダーどもの根城があるのは間違いなからうよ。」

「……だが、この線を辿ると山に着く。山中に籠られるのは些か面倒だが——雑種。この山には何がある？」

「言われるがままに、セイバーが引いた線を辿っていく。そして、学校と山とを結ぶ線の途中には——。」

「——柳洞寺。多分、ライダーが拠点にしてるのはここだ」

「何度か足を運んだ、馴染み深いお寺の場所が記されていた。」

「柳洞寺には修行中の僧が数多く暮らしており、檀家との交流も盛んなお寺だ。そんな人目に付くような場所をアジトにしているのは驚きだが、あの一味にはキャスターのサーヴァントがいる。魔術に特化した英霊の力を以てすれば、数十人程度の意識を操作するなど容易い事だろう。辺鄙な山の中という条件も、一見すれば不便そうに思えるが、空間転移さえ可能にするキャスターにとっては立地条件は関係ない。」

「なるほど。この寺院でしたら、サーヴァントが立て籠もついても不思議はない。ここはライダーの拠点というよりは、キャスターの拠点なのでしょう」

「そういえば、ここに住んでる一成が、最近怪しい外国人の女が増えたとか言ってたよう

な……やつぱり、あれはサーヴァントの事だったのか。

それにしても、セイバー。なんで柳洞寺の事知ってるんだ？」

「シロウ、私が参加した聖杯戦争は今回だけではありません。ですので、この街の主要な場所は熟知しています。十年の間に変わった部分も、凜の案内で把握済みです。

この寺院は、冬木の街でも指折りの霊地。魔術師にとつては絶好の場所と言っても良いでしょう。キャスターが町中の人々から魔力を集めるのには、まさにうつつけです」

今まで掴めなかった、ライダーたちの拠点。各人の持つ情報を突き合わせた結果だが、ここに敵サーヴァントたちが潜んでいるのは最早疑いようがない。

拠点が判れば、後は攻め込むだけ。敵の、それも魔術師のサーヴァントが居る場所が罠だらけでない筈がないが……今のライダーたちは、昨日の戦いで消耗している。だがこのまま放っておけば、街から幾らでも魔力を集められるサーヴァントたちはそう時を待たずして回復し、今度こそ俺たちが窮地に立たされる。ここは巧遅より拙速を重んじるべきだろう。

後で遠坂も呼んで、本格的に作戦を練る必要がある。相手は昨日、俺たちの手の内を易々と看破して見せた狡猾なサーヴァント。こちらの出方を予想していない筈が無い。

どうしようか、と口を開こうとした時。呑気にお茶を飲んでいたアーチャーが、突然

不機嫌そうな顔になった。

「雑種、私の茶が尽きた。早々に注ぎ足してくるが良い」

「……アンタ、そんなぐらいい自分でやったらどうなんだ」

「たわけ、給仕など衆愚どもの役目であろう。この我をそこらの雑種と等しく見做すなぞ無礼千万」

「……………」

この金ぴか男にはまともな理屈が通じそうにないので、渋々ながらお湯を汲むために台所に向かう。途中、何気なく気付いて冷蔵庫を開くと、中身が殆ど空になった棚が目に入った。

そういえば……ここ数日、食べる人数は増えた割に、買い物にいく頻度が減っていた。食料は多めにストックしてあったつもりだが、人数が増えすぎて遂に在庫が尽きてしまったようだ。最後の手段であるカップラーメンはまだ残っていたと思うが……ここは諦めて、食材を買って来るしかない。いくら何でも、葱と卵と牛乳だけで昼食を用意するのは無理があるし……ついでに言うと、今アーチャーたちが飲んでいるお茶の葉も尽きていた。

「悪い。茶葉も冷蔵庫もすつからかんだから、俺ちよつと買い出しに行ってくる。昼飯はちよつと遅くなるけど、勘弁してくれ」

「な……シロウ、一人で出歩くつもりですか？」

「大丈夫だつて。今日は休日だから人も多いし、今は昼間だろ？ それに昨日あれだけ派手にやらかしたんだ、ライダーたちは引つ込んでると思うし……他のサーヴァントだつて、真昼間に街中で仕掛けてきたりはしないだろ」

「それはそうかもしれないが、万一のことがあります。外出するなら私かアーチャーを——」

「そつちの方が目立つてしょうがないだろ。商店街までは人通りも多いし、ちよつと買い物に行つてくるだけだから、そんなに心配する事ないつて」

「尚も食いが下がるセイバーを、まあまあと宥める。アーチャーの方は最初から我関せずと、また新たな蜜柑を食べているし、これでは本当に誰が誰のサーヴァントなのか。」

確かに一人で出歩くのは危険かもしれないが、安全だという根拠はそれなりにある。それに、ただでさえ目立つ外見のサーヴァントたちを連れて行つたら、余計な騒ぎが起きかねない。下手をすれば他のサーヴァントや魔術師を刺激して、藪蛇をつつく事にもなりかねないし。

何とか心配するセイバーを言いくるめたところで、部屋から防寒具一式を取つてくると、買い物袋と財布を掴んで玄関に向かう。早くしないと昼になってしまうし、商店街が混み合う前に必要な物を買つておかないと。

\*\*\*

外に出る。冬の寒さは今日も変わらず、冷たいというよりは痛みを感じる。吐く息は白く、太陽はぼんやりと霞んでいる。いつ雪が降り出してもおかしくない程、世界は白く染まっていた。

「……寒っ」

それなりに温かい恰好をしてきたつもりだが、予想以上の寒さにぶるつと震える。カイロを取りに戻ろうかとも考えたが……わざわざ戻る程のものでもないだろう。とつとと買い出しを済ませて戻ってくればいいだけの話だ。

マフラーをきつく巻きつけると、いつもの道を通って商店街へ向かう。すれ違う人の数が普段より目に見えて減っているのは、気候のせいもあるだろうが……それよりも、昨日の学校での騒ぎの方が大きいだろう。

いくら言峰が火消しを凶つたとしても、あれだけの騒動が噂にならない筈が無い。学校で何か大変な事件が起こつたという事ぐらい、みんなとつくに知っているだろう。ただでさえ最近はガス漏れや行方不明……聖杯戦争の影に隠れた事件が多発しているのだから、皆が外出を避けるのは自然な流れだ。

普段の三割減といった混み具合の商店街に着くと、顔馴染みの店を巡って買い物を済ませて行く。親切な店主やおばさま方に、『最近は何騒だから気を付けるように』と声をかけられたが、曖昧に笑って誤魔化しておいた。まさか、自分がその騒ぎの関係者だと言える筈もない。

気分の悪さと一抹の罪悪感を覚えながら、食材の入ったビニール袋を手には八百屋を出る。そのまま家に帰ろうと思つたが……ふと気分を変えて、違う道を通る事にした。

昼時だというのに人の増えない商店街を抜け、同じく人通りの絶えた住宅街の間を通っていく。普段なら子供たちが気ままに遊んでいる路地裏も、今は数匹の野良猫が屯しているだけ。あるべき場所にあるべきものが無い異常さは、疑問以上に得体の知れぬ不気味さが湧き起こる。どこか薄ら寒いものを感じながら、猫たちの横を通り過ぎて行く。

「こつちにも、誰もいないな……」

路地を抜けて行くと、小さな公園に辿り着いた。団地の中にあるため、子供向けに様々な遊具が並んでいるが……案の定、ここにも人の姿はない。錆びかけたブランコだけが、キイキイと悲しげに揺れている。

つい先日俺はここで、あの少女……イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと話をした。バーサーカーのマスターであり、敵対する魔術師である少女。彼女の善意の申

し出を拒絶してしまつたせいで、あの時は喧嘩別れのような形になつてしまつたが……俺は彼女と、もう一度話をしたいと思つてゐる。イリヤが悪人であるとはどうにも思へなかつたし——最後に彼女が呟いた、切嗣と俺を殺しに来たという言葉がどうしても気にかかる。

俺よりも遙かに幼い少女と、五年前に亡くなつた切嗣。一見して関わりの無いように見える両者に、一体何があつたのか。マスターである俺だけならまだしも、何故切嗣までもが敵意を向けられているのか。十年前、切嗣のサーヴァントだつたセイバーに訊けば答えが判るのかもしれないが、俺はやはり本人の口からその理由を聞きたかつた。

今日この公園に寄つたのは、ひよつとしたらイリヤがいるかもしれないという根拠のない期待があつたからだ。けれど、そんな思惑が上手くいく筈もなく。俺の寄り道は、結局空振りに終わったようだ。

「しょうがない。帰るか」

買い物袋をぶら下げたまま、無人の公園に踵を返す。そのまま、帰り道へ踏み出そうとしたところで——

「——え？」

驚いたように。こちらを見つめる、白い少女と目が合った。外套に身を包んだ彼女は、お化けにでも出会つたような顔で俺の事を見上げている。二度目の出会いは偶然



だったのか、それとも必然だったのか。

「こんなところで何してるの、シロウ……？」

「それはこっちの台詞だ。何でこんなところにいるんだ、イリヤ」

危ないじゃないか……と続けようとしたところで、彼女にとつて身の危険など有り得ないという事実にはたと気が付いた。あろうことか、最強を誇るサーヴァントであるバーサーカーのマスターに対して、『危ないから出歩くな』とは愚かしいにも程がある。

一方。ぼったり俺と出会ったイリヤは、明らかに驚いた顔をしていた。目をぱちぱちと瞬かせ、口をぽかんと開けているその様子は、見た目同様子供らしく、何となく微笑ましい気分させる。その表情を見ると、マスターとして警戒するのが少し馬鹿らしくなった。彼女が聖杯戦争の参加者としてここに来ていたのなら、今頃俺はとつくに倒されていた筈なのだから。

「……ま、何でもいいか。折角だし、少し話でもしていかないか」

「え——？」 でもわたし、シロウを殺すって言ったんだよ？ それなのに、なんで……」  
俺の誘いに、困ったように目を動かすイリヤ。そこには純粹な驚きと、困惑と……そして僅かながら、恐れのような感情が宿っていた。

それが、拒絶される事への恐怖に見えて。彼女への警戒心が、完全に払拭された。マスターだろうが魔術師だろうが、今のイリヤは年相応の少女だ。悪い答えが来はしない

かと相手の返事に怯える姿の、どこに危険があると言うのか。

屈みこみ、数歩先に居るイリヤと視線を合わせる。彼女を怯えさせないように、努めて優しい声を出す。

「俺はイリヤと話したかったんだけど……イリヤは、俺と話すのは嫌か？」

「ううん、そんな事無い！けど、わたし……」

「んじや決まりだ。美味しい物を買って来たんだけど、俺一人じゃ食べきれないからな。折角だから、話すついでに食べるの手伝ってくれ」

ほい、と買物袋の中から、爪楊枝の刺さったたこ焼きを差し出す。躊躇いがちに目を丸くしながら受け取るイリヤが、小動物のように見えて思わず笑みが漏れた。

「出来立てで熱いから、火傷しないようにな。それじゃ、こつちで座って食べよう」

「あ、うん……」

そうして公園に逆戻りすると、たこ焼きを持ったままのイリヤがとことこ着いてきた。彼女と一緒に、公園の隅のベンチに座る。

たこ焼きが入ったパッケージもベンチに並べる。最初は恐る恐るといった様子でたこ焼きに齧りついたイリヤだったが、すぐに気に入ったのか、目を輝かせると次々とたこ焼きを頬張り始めた。この勢いだと、一人で完食してしまいそうだが……元々イリヤがいたらあげるつもりだったものだし、喜んでくれるに越したことはない。家で待つ皆

へのお土産は、今回は我慢してもらおう事にしよう。

「たこ焼き、美味しいだろ？」

「うん！ ニホンには美味しい物が沢山あるのね。お城の料理も美味しいけど、こういうのは食べた事が無かったから、ちよつと新鮮かも」

「そつか。イリヤ、普段はお城にいるつて言つてたもんな。普段はどんな物を食べてるんだ？」

「えつとね——」

たこ焼きが気に入つて貰えたのか、戸惑つていたイリヤの表情が、段々と笑顔に変わつていく。一度気持ち切り替わつてしまえば後は早いもので、途端に明るくなつたイリヤは、次々と楽しげに自分の生活を話し出した。

そこからは、前回とあまり変わりは無い。以前に話した内容も、そうでない内容も、イリヤは上機嫌で話し続けて行く。前回感じた通り、彼女にとつてはやはり他人との会話という行為そのものが希少であり、娯楽と成り得るものなのだろう。その通常有り得ない、異常な環境が気にかかる。いくら魔術師とはいえ、殆ど拠点から外に出ず、他人との交流すらほぼ無いというのはおかしいのではないだろうか。

「なあ、イリヤ」

「どうしたの、シロウ？」

もぐもぐとたこ焼きを咀嚼しながら、俺を見上げてくるイリヤ。純真な赤い瞳を真っ直ぐ見ながら、慎重に言葉を選ぶ。

「イリヤはこつちには、メイドさんを連れてきてるって行つてたよな。普段そのメイドさん以外に、話す人はいないのか？」

「んー、セラとリーゼリットの他には誰もいないかな。バーサーカーは喋れないし、他には誰もいないし。」

……昔ね。十年くらい前は、一緒にクルミ探しをして遊んでくれる人もいたんだけど」

そうぼそりと呟くと。こちらを見ていたイリヤは視線を逸らし、雲に覆われた空に目を向けた。

今にも雪が降りそうな空は、どこまでも厚い雲に覆われている。日の光は白いベールに遮られ、僅かにしか届かない。どんよりとした冬空の向こうに、彼女は何を見ているのだろうか。

口を嚙み、何かに思いを馳せているイリヤ。彼女を邪魔する訳にも行かず、俺も自然と口を閉じ、イリヤの視線の先を追う。

小さな公園の隅っこで。風の吹き抜ける音だけが届く、静かな時間が過ぎて行く。そのまま十分以上は黙っていただろうか。冬風に耳が痛くなってきたところで、イリヤが

静かに口を開いた。

「……シロウ。キリツグは、今どうしているの」

遠い目で空を見上げながら、今にも消え入りそうな声で、イリヤはそう訊ねてきた。その肩が僅かに震えているのは、寒さだけが原因ではないだろう。

少しだけ聞かせてくれた、イリヤの両親の話。

十年前、イリヤと一緒にクルミ探しをして遊んでくれたという人物。

同じく十年前。イリヤと同じように、聖杯戦争のマスターとしてどこかからやって来た衛宮切嗣。

イリヤが向ける、どこか複雑に捻じ曲がった切嗣への敵意。

これだけ断片が揃っていれば、イリヤと切嗣の関係も薄々想像がつく。彼女が、切嗣と俺を殺すと宣言した理由も。

前にイリヤと会った時、俺は彼女に切嗣の話をしたが……助けられ、魔術を教わったという事以外は口にしていなかった。けれど、この様子だと……イリヤも薄々は、その答えを感じているのだろう。

あの綺麗な月夜を思い出す。俺の言葉聞いて、安心したと笑って逝った切嗣。小さな女の子を一人残し、終ぞ逢う事すら叶わなかった親父は、最期に何を想っていたのだろうか。

「死んだよ。五年前に」

「……そう。死んじゃったんだ、キリツグ」

嘔み締めるように、上を向いたままそう呟くイリヤ。殺意へ昇華するほどの感情を向けていた相手は、既にこの世には残っていない。存在しない人間への感情は、一体どこに向ければいいのか。感情をぶつけるべき相手を失った彼女が浮かべている表情は、敵が消えた喜びではなく、どこか空虚さの宿る悲しみだった。

「やっぱり、わたしのコト忘れちゃってたのかな」

「——いや。それは、違う」

「……ええ？」

驚いたように、びっくりとこちらを向くイリヤ。その瞳には、信じられないという色がありありと浮かんでいた。

イリヤスフィールという少女は、傍目からはどう見ても、小さな子供にしか見えない幼い容姿をしている。けれども彼女は、前回の聖杯戦争以前……少なくとも十年前には物心がついており、切嗣と面識があつた筈だ。そうでなければ、彼女の話と俺が知るそれ以降の切嗣の話が繋がらない。イリヤの幼い姿と経過している年月は矛盾しているが、彼女は歴とした魔術師。見た目が多少常人と異なるうともおかしくはない。

切嗣は一度もイリヤスフィールという知人がいるとは話さなかったし、俺も全く知ら

なかった。けれどそれは、話さなかったと言うよりは……話せなかったのではないだろうか。

急激に体が衰えるまで、切嗣はしょっちゅう外国へ旅行に出かけていた。その度に切嗣は面白い話をしてくれたし、土産品も色々買ってきてくれたものだが——今にして思えば。それは、北国に偏つてはいなかっただろうか。イリヤが居たという寒い雪の国と、切嗣が旅行先としていた国。この二つは一致する。

きっと切嗣は、何度もイリヤに会おうとしていたに違いない。あの優しかった親父が女の子を一人残していくとは考えられないし、切嗣が旅に出た回数はどう考えても多すぎる。けれど、どんなに親父が会おうとしたとしても。何らかの理由があつて、イリヤと再会する事は一度たりとも叶わなかったのだ。——最後の最後まで。切嗣は、イリヤの事を口にしなかったのだから。

そう言う。イリヤは、静かに悲しそうな微笑みを浮かべた。

「……そっか。会おうとしても会えなかったなら、仕方ないよね」

俺の言葉は、彼女の心を少しでも軽く出来たのか。ここにはいない切嗣に向けたその言葉からは、先程までの敵意が少し薄らいだように聞こえた。

イリヤが切嗣へ向けていた激しい感情。それは、十年間自分と会わなかった切嗣への、愛情の裏返しではなかったか。何故なら、イリヤは切嗣の——

「聖杯戦争まで十年も待ったのに。フクシユウの相手は、もういないのね。わたし、何のためにここに来たのかな」

「……………」

その重い独白に。俺は、かける言葉を持たなかった。

十年という月日は、決して短いものではない。それだけの年月、イリヤは切嗣を恨み続けていたのだ。

しかし、いざ冬木市に訪れてみれば。衛宮切嗣はどうにこの世を去っており……そして彼女が切嗣を恨む理由も、その一部は無くなるうとしている。感情を向けるべき相手が死んでしまった時の空しさ——それを十年前に知った俺は、彼女の気持ちに微妙に理解出来た。解ってしまったからこそ、迂闊に話しかける事が出来ない。

俯くイリヤと、口を開けない俺。肌を突き刺すような公園の空気は、より一層冷え切っていく。雪はまだ降り出していないというのに、極寒の吹雪の中にいるような冷たさだった。吐息だけが、白く宙に溶けて行く。

「——それでも。キリツグが居なくても、わたしのやる事は変わらない。わたしはアインツベルンの魔術師で、聖杯の成就是一族の悲願だもの」

やがて。何かを振り切るように、振り払うように。決意の籠った瞳で、イリヤはそう言い切った。



アインツベルン。遠坂からは、聖杯戦争の始まりに関わる一族とだけ聞いています。およそ千年以上に亘り、聖杯の完成を追い求める魔術師の家系。その執念は、最早人が推し量れる領域を超越しているに違いない。

魔術師どころか、世間一般で言うまともな家族構成すら知らない俺にとつて、一族を背負う重みというものは理解しがたい。しかしこの少女は、たつた一人でそれを背負っているのだ。負ければ命を失うという、聖杯戦争の中に飛び込んで。

——なら俺も。彼女がこのまま戦い続けると言うなら、聖杯戦争のマスターとして、イリヤに話しておくべき事がある。

「イリヤ。今冬木に、サーヴァントを狙ってる化け物がいる事、知ってるか」

「……なに、それ」

突然の言葉に意表を突かれたのか、イリヤの顔が強張る。その反応から見て、やはり彼女もあれの存在は知らなかったらしい。

マスターでもサーヴァントでもない異形の怪物。もしかしたらイリヤは知っているかもしれないと思つたのだが、どうもそうではなかったようだ。

眉を顰めるイリヤに、あの化け物の特徴を伝えて行く。黒い薄っぺらな外見に、無数の触手。サーヴァントにすら死の危険を感じさせる異常性。街の人間を無差別に襲い、事件を引き起こしている現状。セイバーとランサーの戦いに介入して来た時の、あの異

様さ。

セイバーやアーチャー、ランサーとは関わりが無い。ライダーは、あの怪物を使役できるなら結界など貼る理由が無い。計画性を持って魔力を集めるキャスターも同じだ。理性を持たぬバーサーカーでも、隠密行動に特化したアサシンでもない。サーヴァントに匹敵する脅威を並の魔術師が使役出来るとは思えないし……唯一その可能性があったイリヤでさえあれに心当たりがないなら、聖杯戦争の中にあつてさえあれは異物だ。「知らない。何よそいつ……わたし、そんな事聞いてない」

一通り話し終えたところで、イリヤが拒絶するように首を振る。

イリヤも把握していなかったのなら、今話したのは正解だった。あの化け物は、兎に角底が知れない。いくらバーサーカーが桁外れのサーヴァントであれ、あの水母もどきと対決して無事で済むとは思えない。何も知らないままあれと遭遇していたら、イリヤでも危険だっただろう。

俺はあの時、喰われると思った。セイバー程の直感も、アーチャー程の鑑識眼も、遠坂程の魔術の知識も持たない俺ですら本能的にそう感じたのだ。あれを放っておけば間違いないく——十年前の再来が起こる。

「シロウのアーチャーもそうだし……今度の聖杯戦争、わたしの知らないところで何かが起こってる。わたしが上手くあつちの様子を感知出来ないのも、それが原因かな」

小聲でぼそぼそと、何かを考え込みながら呟くイリヤ。年相応の無邪気さはすつかり鳴りを潜め、今の彼女は思索に耽る魔術師の顔となっていた。

「……なんだか解らないけど、とりあえずイリヤはあれとは無関係だつて事でいいのかな」

「うん。その話、知ったのは今が初めて。マスターでもサーヴァントでもないヤツが聖杯戦争に介入して来るなんて、今まで聞いたことが無かったもの。

教えてくれてありがとう、シロウ。わたしの方でも、その変なヤツについて調べてみる」

「ああ、よろしく頼む。あんなのが居たんじゃ、このまま聖杯戦争を続けるのだから無理が出て来るだろ」

そう、大真面目に言ったつもりだったのだが。おかしなものを見たという風に、イリヤは俺に苦笑いを向けてきた。

「シロウって本当に変わってるのね。わたしはそんなヤツの事知らなかったんだから、黙っていればよかったのに。もしそんなのにわたしのバーサーカーがやられちゃったら、シロウにとってはオカイドクじゃない？」

微妙に間違った日本語だが、言いたい事は解る。敵マスターに善意で情報を教えるなんて、アーチャーあたりには馬鹿の極みだと一蹴されそうだ。

しかし、善意を受けたのは俺の方が先だ。それこそ放っておけばよかつたものを、わざわざアーチャーの危険性を教えてくれたのはイリヤの方なのだ。だから、これでおあいこだろう。魔術師風に言えば、等価交換という事だ。遠坂じゃないが、借りっぱなしっていうのは良くないと思うし、それに――

「バーサーカーが倒されたら、その時はイリヤも危ないじゃないか。女の子を危険な目に遭わせるなんて、そんなのは駄目だ」

「っ……！」

俺がそう言い切った瞬間、ぶいっとそっぽを向かれてしまう。気のせいか、頬が赤くなっているが……俺はそんなに、怒らせるような事を言つただろうか。

命の奪い合いである聖杯戦争に加わっている時点で、危険がどのとういのは馬鹿げているかもしれないが、それでも俺はイリヤが危ない目に遭うのは嫌だ。彼女が俺に敵意を持っていたとしても、そんな事は関係なく……単純に、女の子に傷ついてほしくないのだ。

「昨日は出てこなかつたけど……今日だつて、夜になればまたあの化け物が出てくるかもしれない。イリヤ一人じゃ危ないし、早く家に――」

待てよ。冬木に居る間、館に居るとは言っていたが、イリヤは普段どこに住んでいるのだろうか。

疑問を持った俺が口ごもると、その間顔を背けていたイリヤは漸く機嫌を戻してくれたようで、こちらに向き直ると何故か得心がいったというように頷いて見せた。

「そういえば、シロウには教えてなかったっけ。じゃ、わたしだけシロウの家を知ってるのは不公平かな」

「え、俺イリヤに家の場所なんか教えたっけ？　なんで知ってるんだ？」

「それはナイショ。シロウの事なら、何でもお見通しなんだから」

えへんと得意げに胸を張る小さなレディ。その子供らしい振舞いに、自然と顔が綻ぶ。いつの間に俺の家を知られていたのかには疑問が残るが、イリヤは魔術師。使い魔を飛ばすなり何なり、調べる方法はいくらでもあったのだろう。

「それじゃ、特別にわたしのお城を教えてあげる。その変な奴の事が判ったら、わたしのお城を知ってもらった方が何かと便利でしょ？　それじゃ、ちよつと目を閉じててね」

「お、おう……？」

おいでおいで、と手招きされ、何が何だか解らないまま目を閉じて頭を下げる。すると、額に何かひんやりしたものが触れる感覚があった。ひよつとして、これはイリヤの――？

混乱して目を開けそうになると、めっ、という声と共にぐつと押さえつけられる。一

体イリヤは何を始めようとしているのか。

「じつとして。変に動く集中出来ないし、余計なところに飛ばしちゃうかも。

——準備はいい、シロウ？ ちよつと揺れるから、気を付けてね」

その言葉を最後に。一瞬で、俺の視界が暗転した。

どこかに転移したのか……いや、そうではない。空間転移は魔法の奇跡に等しい。おそらくこれは魔術によって、俺の感覚器官だけがどこか別の場所に繋がれているのだろう。

それだけは辛うじて理解出来たが、ぐんぐんとどこかに引つ張られていく感覚は紛れもない現実の物で。遊園地のアトラクションのような揺れは、唐突に視界が戻ってきた事で、やつと収まってくれた。

……が。再び目にした景色は、先程までいた公園では無い。俺の目の前には何百という木々が立ち並び、地には朽ちかけた枯葉だけが残っている。太陽の光は枝葉に遮られ、地表には僅かしか届かない。見渡す限り自然しかない、どこか知らない森だった。

「……………」

声を出そうとしたが、動けない。今の俺は人間ではなく、この森の一部に連なっている。声帯の無い自然に、声を出す事など出来る筈もない。意識はあるのに体の感覚が無く、ただ視覚情報だけが入って来るというのは、どうにも気持ちが悪い。

仕方がないのでそのまま森を眺めていると、三十秒ほど経ったところで再び視点が動き出した。鬱蒼と茂る木々の中を透過するように移動し、小道のようなものを辿り、壊れた建物の横を通り過ぎ、奥へ奥へと進んでいく。やがて殆ど光が当たらないような森の深部まで行き着くと、突然巨大な建造物が飛び込んできた。これは……城、なのだろうか。

” どう、シロウ？ ここがわたしの住んでいるお城なんだけど”

頭の中に、そう声が響いてくるが……何というか。絵本からそのまま出てきたようにという表現がびつたりな、日本には似つかわしくない西洋の城が、目の前に堂々と聳えている。これが同じ日本の風景であるとは、俄かには信じがたい。いくら魔術師が現実離れた存在だといっても、これは度が過ぎているのではないか。

見た所、この建物は一年や二年とところか、建築から数百年経ったと言われても違和感のない程古びている。こんなものを何時の間に、誰にも知られぬ内に、どうやって冬木市に作り上げたのか……その手法は想像もつかないが、多大な労力を要したであろう事は想像に難くない。アインツベルン家の、空恐ろしいほどの執念と財力的一端が垣間見える。

俺が呆気にとられている間も視界は勝手に動き、巨大な城の周囲を巡ると、正面玄関を通って内部へと進んでいく。玄関ホール、廊下、あちらこちらの部屋と、目に映る場

所は次々と変わっていくが、どの映像からも豪華な調度品やゴミ一つ無く掃除された床が映り込んでいた。本当に、ここは大富豪の豪邸そのものなのだろう。

「こんなところかな。今ので、大体の場所は見れたと思うんだけど」

「……………あれ？」

ふと気が付くと。瞳に映る光景は、またあの小さな公園へと変わっていた。

変わったというよりは、戻ったのか。視覚に連動して、聴覚や触覚や、その他の途絶えていた全ての感覚が一斉に戻ってきた。押し寄せる情報の奔流に、脳が不快感を訴えてくる。慣れない乗り物にのった時のような、吐き気を伴う気持ち悪さ。

「ちよつと、これはキツいな……………」

「ごめんね。でも、これが一番早いかなと思って。わたしの城までの行き方も、何となくは解ったでしょ？」

「まあ、何とか……………」

これだけ強烈な体験をすれば、嫌でもその光景は印象に残る。今の森は、たぶん郊外にあるあそこだろう。どこかの私有地になっているため誰も近付かないという噂だったが、アインツベルンが土地の所有者だったのなら不思議はない。

と。気分を落ち着けながら道を思い出していたところで、公園の時計が目に入った。短針は十一の場所を通り過ぎたばかりか、正午にさしかかっており——まずい。この



ままだと、昼食の時間を過ぎてしまう。

「もう昼か。まずいな、そろそろ帰らないと」

「あ……」

空になつていたたこ焼きのパッケージを持つて立ち上がる。すると、俺と同じように時計を目にしたイリヤが、どこか困つたような表情を浮かべて、俺の顔と時計とを交互に見比べた。心なしか、イリヤの纏う雰囲気が少し暗くなっている。ひよつとして、たこ焼きの数が足りなかつたのだろうか……でも今回はこれしか買ってきてないし、そこは勘弁してもらおう他ない。

「……そうだね。そろそろ、わたしも帰らなきゃ」

「暗くならない内に帰らないと危ないからな、帰り道も気を付けるんだぞ。それじゃまたな、イリヤ」

「えっ?」

別れの言葉と共に、立ち去ろうとしたのだが。意外な言葉を聞いたと言うように、イリヤの顔が驚きに染まる。赤い瞳の少女は、目をぱちぱちとしばたたかせながら、ぼんやりと俺を見つめていた。

「シロウ、またわたしと会つてくれるの?」

それはまるで、親に拒絶されるのを恐れる子供のようで。

……不安げな表情の少女に。俺がどう答えるかなど、端から解りきつていてというのに。

「そんなの当たり前じゃないか。何なら、指切りでもするか？」

「うん、するする！」

ぱあつと明るくなつたイリヤ。意外にも彼女は指切りの意味を知っていたようで、ぴよんと跳ねるようにベンチから立ち上がると、喜色満面といった面持ちでこちらに駆け寄つてきた。差し出された小さな指に、腰を屈めて小指を絡ませる。

「ゆーびきーりげーんまん、うーそつーいたらはーりせんぼんのーますー！」

元氣よく、歌うように唱えるイリヤ。絡ませた小指を離すと、にこにここと微笑む彼女は、約束を確認するように何度も指を振つて見せた。

指切り拳万、嘔吐いたら針千本飲ます。意味を考えると恐ろしいが、それだけその契約を遵守しなければならぬという重みが含まれている。元々は、昔の遊女が客への愛情に対する誓いとして、本当に指を切り落としていた事が由来らしいが……そこまで過激ではなくとも、その儀式の本質だけはこの現代にも脈々と受け継がれている。

「約束だよ、シロウ！」

「ああ、約束だ」

「うんうん！ それじゃ、また会おうね！ 次会う時まで、他のサーヴァントなんかにはや

られちゃダメなんだから！」

最後に、大きく手を振ると。雪の妖精は、踊るように走り去っていった。

それにしても……他のサーヴァントにやられるな、か。それは単純に俺の身を心配してくれていたのか、それとも俺への敵意を拭い切れず、自分が止めを刺すという意味だったのか——いや。彼女のあの笑みに不純なものは無かった。聖杯戦争とは関係なく、イリヤもまた、俺と会う気になってくれたのだろう。

切嗣だけではなく、俺へも向けられていた敵意。それは大切な人が自分を置き去りにし、代わりに見ず知らずの子供を引き取っていた事への怒りだったのか。当初は間違はなくそうだったのだろうが、俺と話をするうちに、その感情は徐々に薄れて行ったようだった。

二度話してみても解ったが、イリヤは良い子だ。それこそ、聖杯戦争などという血腥い儀式が似合わぬ程に。けれど、彼女はアインツベルンという一族の悲願を背負っており……他人を巻き込まないと言うのであれば、そしてそれをイリヤ自身が望んでいるなら、彼女の願いを否定する事自体は俺には出来ない。傷ついてほしくないのに戦うなどは言えないのは、もどかしい限りだ。

「聖杯戦争なんて……そんなものが起こらなければよかつたんだ」

腹立ち紛れに、転がっていた石を蹴り飛ばす。もやもやした感情を抱えながら、俺は

足早に公園を立ち去った。

## 18. 虚飾と真実と

「今夜柳洞寺に攻め込むだつて？ 本気か？」

「ええ、本気よ。チャンスは今夜しかないわ」

午後二時。俺が公園から戻った後、少し遅い昼食を終えたあたりで、遠坂はそうとんでもない事を言い出した。

嗚然とする俺を余所に、平然と腕を組む遠坂と、この展開を予見していたのか然したる動揺も見せず座ったままのサーヴァントたち。この様子からすると、俺が買い出しに行っている間に三人で話をしていたのだろうか……それにしても、まさか今夜とは。

「やけに驚いてるわね……そんなに予想外だったの？」

「いや、そういうわけじゃない。でも、あそこはキャスターの拠点、つまり魔術師の工房って事だろ？ そこに突っ込むっていうのは……」

工房。魔術師、つまり魔術という一ジャンルの研究者にとつての研究所と言い換えても良いだろう。

魔術師の資料や研究成果が蓄積されたそこが、無防備である筈がない。世間一般の研究所が警備員や電子ロック、監視カメラといったセキュリティシステムを備えているの

と同様、魔術師の工房には魔術的な防御手段が備わっている。

工房の危険度は、精々侵入しても逮捕される程度で済む研究所とは比べ物にならない。捕縛するどころか抹殺する、生きては帰さぬという敵意の塊だ。死に直結するトランプが無数に張り巡らされているのは当たり前、相手がキャスターのサーヴァントならその工房は軍事要塞にも等しいだろう。そこにこのこと足を運ぶのは、鴨が葱を背負って行くようなものではないのか。

「あつちも予測してらるだろうし、わたしも気は乗らないんだけどね。このままキャスターを放っておくと、こつちが不利になる一方なのよ。

ライダーの結界は無くなつたけど、キャスターはこの町から幾らでも魔力を集められる。ライダー共々、すぐに復活して来るわ」

そうなれば一巻の終わり、と遠坂が目で伝えてくる。

昨日の戦いで、ライダーが強力な宝具を持つている事は確認出来た。同じく強力な宝具を持つランサーと、魔力を蓄えたキャスター。万全の状態となつた三騎のサーヴァントが襲い掛かってきたら、勝てる見込みはまず無いだろう。

脅威の度合いで言えばバーサーカーも変わらないが、一騎と三騎では戦術の幅がまったく違う。セイバーの宝具であればバーサーカーを打倒しうる可能性が高いという上、今優先するべきはキャスターたち三騎だ。

それに、キャスターは町中で頻発するガス漏れ事件の犯人だ。これ以上町の人に被害を出さないためにも、また事件を起こして魔力を集め出す前に止める必要がある。

……嫌な事だが。危険を冒してでも敵陣に飛び込む以外、俺たちに選択肢はありそうになかった。

「幸い、私は殆どの魔術を無効化出来ますし、キャスターの工房自体を破壊する手段も持っています。今の段階ならライダーも回復しきっていないでしょうし、極度に不利な戦いにはならないでしょう」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。工房をぶつ壊すって……」

さらりと言つてのけたセイバーに絶句する。いや、確かに敵が要塞に籠っているなら、要塞ごと壊してしまえばいいというのは解るのだが……キャスターの工房というのは、つまり柳洞寺そのもので。

「そんな事したら、お寺に住んでる人はどうなるんだよ？」

「人の心配はしなくていいわよ、士郎。今あのお寺にいるのは、サーヴァントかマスターだけだから」

「え……？ どういうことだ、遠坂」

「使い魔を飛ばして、さつきちよつと調べてみたんだけどね。柳洞寺で改修工事をやるって事になって、あそこに住んでる人たちはここ何日かでみんな山を下りてるの

よ。多分キャスターが暗示を使っただけでしょうね。

あつちも柳洞寺での戦いを視野に入れてるんでしようけど、こつちとしても好都合だわ。これで誰かを巻き込む心配はないもの」

碧の瞳が、好戦的な色を宿して細められる。冬木市の管理者だという遠坂は、自分の土地で好き勝手に一般人に被害を出すキャスターたちが余程腹に据えかねているのだろう。

いや、それにしても建物ごと壊すというのはどうなのか。魔術師同士、サーヴァント同士で戦うだけならまだしも、利用者の多い寺を吹っ飛ばすというのは大問題になる。というか、紛れもなく犯罪だ。

「柳洞寺自体をどうこうするのは最後の手段。でも、場合によってはそれも考えなくちゃいけないのよ。今はまだある程度魔術師としてのルールを守ってるようだけど、一般人から魔力を吸い取ったり、あんな結界を貼るライダーと組むような奴が、追い詰められたら何をするかわからない。被害者や犠牲者を増やさないためには、やれるだけの事をやるべきよ。」

……あ、ちなみに、聖杯戦争で壊れた建物の修理費用なんかはアインツベルンが出す事になってるから、それは心配しなくていいわ」

そうでなければお寺ごと吹っ飛ばすなんて絶対しないわよ、と言う遠坂。おまえ、そ



れは自分が払わなくていいなら、建物を壊してもいいと言っているのと同じなのは。

いや、それは兎も角。確かに遠坂の言う通り、俺たちには贅沢を言っていられるような余裕はない。キヤスターを倒して、これ以上被害を拡大させないようにするのが最優先事項なのだから。気は進まないが……人の命と建物一棟では、どちらがより重要なかは問われるまでもない。

「わかった。でも、真正面から乗り込むっていうのはやつぱり危険じゃないのか？ 柳洞寺は山の中にあるし、裏手に回るとかで不意を突いた方がいいと思うんだけど」

「それが、そももいかないのです」

そう言うと、難しい表情を浮かべるセイバー。

「この寺院には、自然霊以外を排除する結界が張られています。サーヴァントである私たちが入ろうとすれば、能力にかなりの制限を受ける。唯一正面の参道にだけは結界が張られていないので、あの寺院に踏み入ろうとすれば、私たちはその道を使うしかありません」

「一旦中に引き籠つちやえば、あとは正面を見張っているだけでいいんだから、キヤスターにとつてはまさに打って付けね。癩だけど、どうしてもこつちが不利になる」

正面から攻めようとするれば、手薬煉を引いて待ち構えている三騎のサーヴァントと、キヤスターの罍の洗礼を受ける。

別の道から攻めようとすれば、結界でセイバーとアーチャーの能力が制限される。ただでさえ数で劣っているのに、能力まで下げられては勝ち目などある筈がない。

キャスター側にとっては、別にどちらの選択肢を取られても構わないという訳だ。こうなつては、キャスターが立て籠もる柳洞寺ごと吹き飛ばしてしまえという乱暴な戦術が多分に現実味を帯びてくる。

「そう悲観する事もあるまい。彼奴らが地の利と数で優位に立つと言うのなら、貴様らは貴様らの長所を活かすが良い」

俺たち三人がどうしたものかと考えを巡らし始めたところで、それまで黙ってお茶を飲んでいたアーチャーが、湯飲みを置いてそう口を挟んできた。

この数日で、アーチャーがこうして口を開くのは、何か違った視点から助言をしようとしている時なのだという事が臆げに理解出来てきた。アーチャーの鋭い洞察力、観察力からの言葉に驚かされたのは一度や二度ではない。見ている世界が違うのではないかという程、黄金の英霊は高みから遠くを見据えている。

他の皆に議論をさせ、意見が出尽くした所で、一段上の視点から指摘や助言を行う。そうした役が自然と出来ているアーチャーは、生前はやはり人の上に立つ人物だったのだろう。

「長所つて……セイバーには魔術が効かないって事か？」

「この聖杯戦争に於いて、魔術に対する抵抗力は決定打にはならぬ。宝具を持ち出されるか、端からマスターを狙われてはサーヴァントが魔術に強かろうと大した助けにはなるまい。

そうではない。魔術という先入観を捨てて考えてみよ。集団戦闘で優劣を決定づける要素が他にあらう」

キャスターたちにはなく、俺たちにはある長所……一体何だろうか。

数では元からこちらが負けている。個々の能力ではセイバーがおそらく一番だろうが、万全の状態のライダーを知らない以上断言は出来ない。

補給面では、魔力のストックを幾らでも増やせるキャスターが圧倒的。情報面では、ランサーとライダーの真名・宝具を把握し、且つアーチャーとセイバーの手の内を明かしていないこちらが有利だろうが、キャスターについては殆ど情報が無い。キャスターの拠点に攻め込む必要があるのに、この点は大きな不安要素だ。

どの面を見ても、こちらが不利か、精々が互角というところだろう。俺たちだけが持っている長所、というのが今一つ思い浮かばない。

「連携ですね。先の戦いで、ランサーとキャスターは十分な連携を取れていなかった。彼らが十分な連携を取っていたら、昨日の戦局は変わっていたかもしれません」

「五十点だ。着眼点は良いが、視野が狭い」

熟考の末に結論を出したセイバーに、アーチャーが辛辣な評価を下す。むっとした表情を浮かべる彼女を面白そうに眺めていたアーチャーだったが、頭を捻っている俺と遠坂に目を向けると、呆れたように溜息を吐いた。

「何故貴様らはサーヴァントではなくマスターに目を向けぬ？ 兵士がサーヴァントなら、指揮官はマスターだ。重要視するべきは寧ろそちらであろう」

「でも、キャスターとランサーのマスターは結局出てこなかったっていうし、そつちは何も判らないままじゃないか」

「ふん、そこで思考を止めるから視野が狭いと言うのだ」

俺が抗議すると、何故解らぬのだ、とでも言いたげな紅い視線が飛んできた。そう責められても、アーチャーの視点に合わせろというのが無理がある。アーチャーの中では全てが繋がっているのだろうが、俺たちにとつてアーチャーの言葉は異次元のそれに等しい。俺たちがキャスターより優れている点と、未だ姿さえ見せない敵マスターとの間に一体何の関わりがあるというのか。

「姿を見せぬから判らぬ？ 逆だ。出てこないからこそ立てられる推測もある。彼奴らが手を組んでいるのは事実であろうが、おそらく対等な関係ではあるまい。サーヴァント同士のみならず、サーヴァントとマスターの関係もな」

「……………頼む、アーチャー。人間の言葉で話してくれ」

降参だ、という意味を込めて両手を上げる。そこまで出来が良くない俺の頭では、アーチャーが何を言っているのを理解するのが困難を極めた。

同意者を求めて遠坂とセイバーの方を見ると、彼女たちも疑問の表情を黄金の英霊へと向けていた。通訳が必要なのは俺だけではなかったようで、少し安心する。

不愉快そうに目を細めるアーチャーだったが、この場には彼と同じ視野を持つ人間は存在しない。それを把握したのか、はたまた諦めたのか、ぐるりと全員を一瞥すると、アーチャーは再び講義を続けた。

「ではまず、昨日の戦いを振り返ってみよ。何故ライダーは、魔力も無く弱った状態で現れた？ 潤沢な魔力を持つキヤスターと手を組んでいるにも関わらず」

「それって、キヤスターが自分の魔力を使いたくなかったからじゃないの？ いくら魔力を溜めこんでいたとしても、あそこまで弱ったライダーを回復させるにはかなりの魔力を使わなくちゃいけないし、時間もかかるわ。やり口を見る限り、キヤスターは慎重派のようだし、自分を弱らせる選択肢は嫌だったのかも」

遠坂の分析に俺も頷く。柳洞寺という優れた拠点、町中から魔力を収集出来る補給手段、更にランサーという同盟者と、キヤスターは確実に自分の手札を増やす戦略を選んでいる。ライダーという手札が増える事よりも、今の自分の持ち札を減らす事を嫌がったのではないだろうか。結果論とはいえ、キヤスターは自分の魔力を維持しつつライ

ダーと手を組むことが出来ているし。

だがアーチャーは、それは違うというように首を振った。強ち間違いではない、と前置きしつつ、再び口を開く。

「今少し視野を広げてみよ。キャスターが何故その行動を取ったのか——そもそも何故彼奴が他のサーヴァントと手を組もうと考えたのか、その理由に着目するのだ。此度の聖杯戦争を真つ当に勝ち抜こうとするならば、誰でも目に留まる障壁があるう」

「——バーサーカー」

セイバーの眩きに、然り、とアーチャーが頷く。

「此度召喚された英霊で、あれに単独で勝ち得る者は存在しまい。貴様らがそうであるように、他の者もまた手を組む事を考えるのは当然だ。が、バーサーカーを倒した後の事を考えれば、手を組む相手はなるべく御しやすい方が良い———そうであろう、娘」  
にやり、と嘲るように遠坂を見やるアーチャー。腕を組む赤い魔術師は、渋面ですれに答えた。

アーチャーの言いたい事が解った。他の全てのサーヴァントを倒す事が聖杯戦争の目的である以上、手を組んでいる相手も将来的には倒す必要がある。だとするとその相手は、例え先に裏切られても勝利出来るような、脅威の少ないサーヴァントが相応しい。強すぎず、且つ自分よりも弱いサーヴァント———記憶を失い宝具を使えないアー

チャーは、確かに格好の対象だ。

「ランサーは知らぬが、その点で言えばライダーは十分に条件を満たす。他の誰とも組んでおらず、マスターは素人だ。適度な戦力で、しかも操りやすい。」

一昨日の戦いも、恐らくはキャスターの手の内だ。傷つき、生存も危ぶまれるライダーと、判断力を失ったマスター——その状況を作り出せれば、ライダー側には選択肢はない。生き延びたければ、差し出された蜘蛛の糸を掴む他ないのだからな」

アーチャーの言葉に、思わずはつとする。

一昨日の雑木林での戦いで、ランサーはセイバーを、キャスターはアーチャーをそれぞれ妨害した。それは手を組む必要があったライダーを助けるためだと思っていたのだが……そうではなかった。キャスター側としては、ライダーに適度に傷つき、しかし生きていて欲しかったのだ。ライダーが俺と遠坂を狙った後は、これ幸いと状況を利用されたのだろう。ライダーは、最初からキャスターに監視されていたのだ。

知らなかったから仕方がないし、あの状況ではあれが最善の行動だったと思うのだが……ライダーと戦ったセイバーは、敵の掌の上で踊っていたことになる。俺と同様の結論を出したのか、セイバーの顔が怒りに歪んだ。

「故に、キャスターとライダーの関係は対等ではない。いわばライダーは、キャスターの慈悲で死んでおらぬようなもの。反抗の意思はあろうが、当座はキャスターに縋る他な

い。

一方のキャスターも、ライダーが操りやすいのは好ましいが、かと言って死なれる訳にはいかぬ。彼奴とランサーだけでバースーカーを突破出来ぬからな。ライダーは回復させず、しかし結界の発動には手を貸すという行動もその矛盾の顕れであろう。自らの戦力を温存して裏切られた時のリスクを低め、且つライダーを十全の状態にしたかったのだろうよ」

だからバースーカーが現れた時に焦ったのだ、と笑うアーチャー。昨日の話は遠坂とセイバーから聞いていたのだろうが、それにしてもここまでの思考の明晰さを見せつけられると驚きしか出てこない。僅かな情報からでも、この英霊はあつという間に真実を繋ぎ合わせてしまう。

まさかあの大乱戦にバースーカーが介入してくるとは、キャスターでも予想外だったのだろう。あれが想定内の出来事なら、最初からライダーの回復にリソースを割いていたはずだ。

「真つ当な同盟を結んでいたなら、魔力を消費してでもライダーを回復させるべきだった。あの場でライダーが倒されれば、そもそも手を組んだ意味がないのだから。その上で結界を使い、三騎で以て我とセイバーを打倒した後にはバースーカーを倒せば良い。それが出来なかったのは、歪な形で手を組んでいるからだ。」



常に裏切り裏切られる事を想定し、一時的にでも自らの優位性を潰さぬよう立ち回る——あの雌狐、余程他人を信じておらぬと見える。最終的な自分の損益よりも、目先の裏切りの方が怖いのだろうよ」

空恐ろしい程の冷静な分析で、アーチャーはそう断定した。たった一度しか直接顔を合わせていないというのに、相手の為人すら見抜いてしまうその眼力。情報の破片を結び付け、意味のある形へと編纂するその頭脳。身体能力で劣っていても、宝具を使えなかったとしても、この強みは揺るがない。有益な情報は、他の何物にも勝る武器となるのだから。

つくづく、何故自分がこの青年のような英霊を召喚出来てしまったのかと疑問に思う。このサーヴァントと、マスターである自分とに、何の共通項があるのか……ちよつと待て、マスター？

「……待って。そこまで他人を警戒する魔術師なら、マスターを放っておく訳がない……！」

俺が顔を上げた瞬間、遠坂がそう愕然とした表情を浮かべる。結論に辿り着くのは、彼女の方が一瞬早かった。

そうか……アーチャーがマスターがどうこうと言っていたのは、ここに繋がっていたのだ。キャスターがそこまで極度に他人を信用せず、裏切りを警戒しているなら、令呪

を持ち、自分に命令を下せるマスターを快く思う筈がないのだ。そしてマスターの方でも、そんなサーヴァントを信用するとは思えない。双方の間に亀裂が生じるのは当然と言える。

しかし現実には、キャスターは好き勝手に行動している。ランサーやライダーとは違って、他の意思が介在しているとは思えない程に。という事は、キャスターのマスターは――。

「漸く気付いたか。キャスターのマスターはとうの昔に骨抜きにされていようよ。令呪を使い切らせたか、自由意思を奪ったか、殺して何か代わりの依り代を見つけたか……いずれにせよ、今のキャスターを縛る枷は感じられぬ」

主殺しを示唆するアーチャーに、セイバーの顔が蒼白になる。清廉な騎士である彼女にとつては、反逆や裏切りは到底考えられない選択だつたのだろう。

「この時点で敵の頭数は一つ消える。自分を縛る鎖から逃れたいのなら、令呪を無駄に使わせるのが確実に手早い選択だ。よもやサーヴァントが自由意思で令呪を行使出来る訳でもあるまい、切り札となる令呪も使えぬと見て良いだろう。この時点で、魔術師一人分と令呪三つ分の差が生じる」

アーチャーが言及していた長所というのがそれか。サーヴァントの空間転移さえ可能にする令呪、それをキャスターは丸々使えず、逆にこちらは使う事が出来る。おいそ

れと使えるものではないが、切り札の有無はそれだけで大きな差を生む。こちらには真つ当な魔術師は遠坂しかいないのだから、魔術師の数が一人減るというのも大きい。慎二は魔術を使えないから、実質警戒しなければならぬ魔術師はランサーのマスターだけになる。

キャスターとライダーの関係は悪く、おまけにキャスターのマスターは現状存在しないと言つていい。セイバーの話によれば、ランサーとキャスターの間の連携も取れていなかったそうだから、あちらが数の差を有効に使えるかどうかは疑問が残る。セイバーとアーチャーの関係は良好ではないかもしれないが、少なくとも険悪ではない。これは大きな違いだろう。

「やるわね、アンタ……」

目を丸くした遠坂が、呆然とそう呟く。アーチャーの精緻な推測は、目から鱗が落ちるようだった。

不利な立場に追い込まれたと思つていたのに、実際はそうではなかった。連携の無さ、令呪の有無、魔術師の数という要素は、どれも無視できない重みを持つ。それに気づかされただけでも、今後の戦いは随分と違ったものになってくるだろう。

アーチャーは今、キャスターの立場になつて思考や行動原理をトレースし、それに判っている情報を結び付ける事で結論を導き出した。その着眼点と思考速度が尋常で

はないだけで、俺たちにも同じ事は不可能ではないだろう。しかし、それを実際に行えるかどうかと言われれば難しい。どうすれば、この青年のような洞察力が得られるのだろうか。それがあれば、俺も正義の味方に近付けるのでは——。

「視野を高く、広く持つ事だ。一つの向きに拘るな、雑種。下ばかりでは地面しか、後ばかりでは過去しか見えぬ」

宙を彷徨う俺の瞳を、紅蓮の矢が射抜いてきた。その言葉の重みに、思わず背筋が強張る。

いつもどこか余裕を漂わせ、超然とした態度を崩さないアーチャー。ともすれば軽薄であると錯覚させかねない青年から、今の一瞬だけ、その雰囲気喪失していた。

アーチャーの言葉は抽象的で、何が言いたいのかが今一つ掴めない。しかしこの英霊が本気で、何か真剣な意図を籠めて今の言葉を発したことは疑いようもない。アーチャーは一体、俺に何を伝えようとしていたのか。

「さて、ここまでは過去の道程だ。次は未来を読むとするか」

考え込む俺を余所に、アーチャーが話を続ける。一旦思索を続けるのは止め、サーヴァントの言葉に耳を傾ける事にした。

「キャスターの行動原理、そして昨日の戦いの趨勢から、彼奴がどう動くかはある程度予測出来よう。——ふん、貴様らに有利な要素がもう一つか二つは出てくるぞ」

そこから先は自分で考えろ、とでも言いたいのか、アーチャーは湯飲みに入った茶を口にすると、そのまま黙り込んでしまった。

本来聖杯を望まず、マスターさえ必要としないサーヴァントであるアーチャーは、本人が言う通り半ば道楽で聖杯戦争に付き合っているに過ぎない。何から何までアーチャーの頭脳に頼っているのは俺たちの立つ瀬がないだろう。

アーチャーが分析したキャスターの情報、そして昨日の戦い。考える為の材料は揃っている。自分がキャスターだとしたら、これからどう動くだろうか。アーチャーの思考法を真似てみよう。

「キャスターが最も危険視しているのはバーサーカーです。ですが、バーサーカーと戦う前に私たちと戦う事になるのは目に見えている……」

思考を整理する為か、セイバーがそう小さく呟く。

昨日の学校での戦いでライダーを倒しきれなかった以上、俺たちがキャスター陣営相手に勝機を掴むには速攻を仕掛ける他なくなつた。キャスター側もそれは理解しているだろうから、それ相応の対策を打ち出してくるのは間違いない。

俺がキャスターだとするなら……自軍の戦力は絶対に温存しておきたい。セイバーとアーチャーを倒したとしても、そこで一人でもサーヴァントが欠けてしまったら、その後バーサーカーを倒せずに負けが決まる。本当なら真つ先にバーサーカーと戦って

倒しておきたいが、ライダーが消耗している為その選択肢は選べない。ライダーが回復する前に俺たちと戦わなければならないのは、キヤスターにとっても頭が痛いに違いない。

おそらくキヤスターは、昨日の戦いでセイバーとアーチャー、最低でもどちらか片方を倒しておきたかったのだろう。実際、結界が完成してライダーが完全な状態になっていれば、窮地に立たされていたのはこちらだった。キヤスターの目論見通りに行つていれば、俺たちはサーヴァントを失つて不利な立場に追い込まれ、一方のキヤスターはバーサーカー打倒へ向けてゆつくりと態勢を整える事が出来た筈だ。

自軍のサーヴァントに一人の犠牲も出さない。その上でセイバーとアーチャーを撃破、もしくは撃退する。これがキヤスターの勝利条件になる。

「本当は昨日俺たちを倒しておきたかったんだ……でも、セイバーに勝てなかったし、バーサーカーが乱入してきたから出来なかった……」

普通ならあの状況で飛び込んでこようとは思わない。しかしバーサーカー……そして、そのマスターであるイリヤが普通では無かった事で、バーサーカー陣営は一気に不確定要素になった。慎重に計画を練るキヤスターは、また同じ事をされて場を滅茶苦茶にされてはたまらないと思うだろう。

どうにかしてバーサーカーの動きを制限し、不確定要素を排除した上で、セイバー・

アーチャーと対決する。戦場が自らの庭である以上、余計な闖入者が混じらなければ、幾らでも有利な環境を用意する事が出来る。

同じく不確定要素として、俺たちを襲いに現れた謎の影の存在があるが……あれに關しては一切の情報が無い。ひよつとしたらキャスターが何らかの対策を講じているかもしれないが、情報が無さ過ぎてそこまでは流石に予想がつかない。その件については置いておくしかないだろう。

「俺がキャスターなら……ライダーかランサーをバーサーカーの足止めに戻す。その間に、もう一人のサーヴァントと自分で、アーチャーたちと戦う。倒せなくても、追い返して時間さえ稼げばいいんだから、三人のサーヴァントで迎え撃つ必要はないんだ」  
ゆつくりと、おかしな部分が無いか検討しながら、自分の考えを口にする。

キャスターが欲しいのは時間だ。ライダーを回復させ、自分の魔力を十分に集める為の時間。時間が稼げれば俺たちに対してはかなりの優位に立てるし、バーサーカーにも勝ち目が出てくる。一気に魔力を補填する結果が失われた今、キャスターが選べる道はそれしかない。幾ら町の人から魔力を吸い上げられると言っても、神秘の秘匿が足枷となる為、その数や速度には限界がある筈だ。

「ランサーもライダーも、足が速いわ。バーサーカーを足止めして逃げるだけならどうとでもなるし……一人のサーヴァントが居なくても、自分の陣地で戦うなら、同数で不

利になるって事はない。うん、わたしがキヤスターでもそうするかも」

「ライダーは回復し切れていない筈なので、恐らくはランサーがその任に就くかと。彼は非正規戦の名医です。あのバーサーカーが相手でも、足止め程度であれば何の問題もないでしょう」

遠坂とセイバーが、補足するようにそう続ける。アーチャーの言う通り……集めた情報とこれまでの経験をも、自分がキヤスターの立場ならどうすれば有利になるかという視点で纏めると、その行動がある程度予測出来てしまった。

行動が予測出来れば、対策も立てられる。今まではキヤスターに利用され、動きを読まれていたが、今度は俺たちがそうする番だ。無関係な人間を利用し、危害を加え、あまつさえ大量殺戮にまで手を貸そうとしたキヤスターは、ここで倒しておくべき敵なのだから。

「つまり、今夜柳洞寺にはキヤスターの他にサーヴァントが一人しかいない可能性が高い。それも、傷の癒えていないライダーが。」

地の利はあちらにあります。こちらにも令呪と私の宝具がある。サーヴァントとマスターの数が同じなら、戦況は互角と言つていいでしょう」

「分が悪いと思つてたけど、これなら勝ち目があるわね。誰でもいいから、一人でもサーヴァントを倒せればこつちの勝ち。今度こそ勝つわよ」



勝機を見出した事で気合が入ったのか、遠坂の目が闘志の炎を纏い出した。

今の話は推測に過ぎないが、可能性としては十分にあり得る話だろう。それに、仮に三人のサーヴァントが待ち構えていたとしても、俺たちは戦いを挑むしかない。俺たちが黙っている間に、キャスターたちがバーサーカーと衝突して弱つてくれると願うのは虫が良すぎる話なのだから。

やおら張り切り切りだした遠坂と、キャスターへの憤怒に燃えるセイバー。不利な状況だと思ひ込んでいたせいで落ち込み激んでいた空気が、情報の分析と視点の変更という換気によって一気に澄み渡った。人間、希望が見えればやる気が出るものなのだ。

「――ふ」

一方。二人に火をつけ、場の流れを変えたアーチャーはと言えば、口角を上げて俺をじつと見つめていた。あの様子だと、どうやら及第点ぐらいは貰えたらしい。

本当に、つくづく場を支配する事に長けた男だと思う。僅かな片鱗から人や事象の本質を把握し、理解してしまう。ただそれだけなら頭の良さで説明がつくだろうが、この英霊は兎に角見ている光景が広すぎるのだ。

この男が生前、どこかの王か指導者であったのは間違いないだろう。人の上に立つための要素が、これでもかという程揃っている。記憶が戻らぬ手前、正体は未だ不明だが――ヘラクレス、メドゥーサといった名立たる豪傑たちと比しても劣らぬ存在感。さ

ぞ名のある英雄だったに違いない。

「じゃ、あつちの出方が判ったところで作戦を立てましょうか。ライダーの手札は割れてるんだから、こつちにも打てる手があるわ」

二度は負けぬと意気込んだ遠坂が、どこからか地図を持ち出してくる。一度落ち込んでも、必ずやり返してやろうと跳ね上がる力を持つのが彼女の強さだ。セイバーの清廉な戦士としての強さとも、アーチャーの他を超越した自我故の強さとも違うそれが、少しだけ眩しい。

「わたしたちを散々コケにした事、後悔させてやるんだから！」

自らの他に、二人のサーヴァントと手を組んだキャスター。キャスターには数で劣るが、それでも二人のサーヴァントを擁する俺たち。知恵と策略によって、二つの陣営同士の前哨戦が始まろうとしていた。

\*\*\*

夕方。数時間にも及んだ作戦会議を終え、俺は一人土蔵へと来ていた。

食事の時間まではまだ余裕があり、今夜の対キャスター戦については語りつくした。この微妙に空いた時間を活かして、サボりがちになっていた魔術の鍛錬をしておこうと

思ったのだ。

切嗣が亡くなって以降、毎晩絶えず続けてきた鍛錬。しかし聖杯戦争が始まってからは、やむを得ないとはいえ、鍛錬のための時間が取れない事が多かった。毎日の習慣になつていた事を突然やらなくなるとするのは、それだけでどうにも落ち着かない。

遠坂のお陰で、俺が今までやっていた間違つた方法……魔術回路を一から作るという命を賭けた鍛錬を続ける必要はなくなつた。だが、それはそもそもその目的の入り口に過ぎない。俺が習熟しなければならぬのは、強化の魔術だ。緊張感と集中力が高まつていたからか、実戦ではすんなり成功したが、あれはまぐれだったのかどうかを試す必要がある。

本当なら魔術の指南を請け負つてくれた遠坂に見てもらうのが一番なのだろうが、彼女は差し迫つた柳洞寺の戦いに向けて準備をしている。魔術を教わる機会を逃しながらのは残念だが、戦いの準備の時間をわざわざ割いてもらう訳にもいかない。俺は俺で、出来る事をやるしかないのだ。

「……にしても。変わらないよな、(トーン)」

慣れ親しんだ床に座り込んで、周囲を見上げる。聖杯戦争に巻き込まれ、俺の生活は激変してしまつたが、この土蔵だけはいつもと変わらない。

藤ねえが持つてくる謎めいた品々。修理や分解途中の機械類。強化魔術に失敗した

結果、壊れてしまった部品たち。そして、不完全な投影魔術で生まれた空つぼのガラクタ。

一見すればゴミの山にしか見えないが、それでもこの場所には思い入れがある。何年も入り浸り、時には泊まり込む事もあるこの土蔵は、俺の私室と言つてもいい。他の場所とは違って、ゆっくり落ち着ける気がする。

「でも、聖杯戦争が始まったのもここからなんだよな……」

あの晩。ほんの一週間やそこらしか経つていないというのに、あまりに濃密な時間を過ごしたせいか、遙かな昔のようにも感じる。

ランサーに追い詰められ、後は殺されるばかりだった俺。生き延びられるはずがないと思いつながら、一縷の希望を抱いて土蔵に飛び込み——そして、アーチャーと出会ったのだ。

自信に満ち溢れ、絶大な存在感を放つ黄金の英霊。意図せずして召喚されてしまった、記憶を失つたサーヴァント。偶然巻き込まれた俺と同じく、聖杯戦争に於いてイレギュラーな存在である英雄だが……なんだかんだで、ここまでは上手くやって来たのではないかと思う。

意に沿わぬ事をすれば、殺されるに違いないという確信。しかし、道を違えない限り、あの英霊は決して俺を見放さないだろうという奇妙な信頼感もある。

人を続べ、導く事に長けた英雄。彼の記憶が戻った時、俺たちの関係はどうなつてしまふのか。それが気にならないと言えば嘘になるが……不確定な未来より先に、差し迫つた戦いで生き残らなければ。

「ふう……」

深く息を吐き、集中する。集中を怠れば、待っているのは魔術の失敗。その衝撃はそのまま、術者へと跳ね返る。魔術は常に死と隣り合わせなのだ。

呼吸を整え、深く自己の内面に埋もれていく。段々と頭が冴え渡つていき……それに つれて、脳裏にぼやけた映像が浮かんできた。

——真紅の剣。

最近、こうして魔術の鍛錬をしようとする度に、この剣がぼんやりと浮かび上がってくる。こんな変な剣は、テレビの世界ですら見た事が無いのだが……一度や二度では無く、何度も出てくるという事は、何か意味のあるイメージなのだろうか。

以前まではこの剣ではなく、もつと別の……煌く黄金の剣が見えていたのだが。いつたい何時から、この紅の剣に変わってしまったのか。

黄金の剣が、技巧を尽くされた芸術品としての美しさを持っていたのなら。この紅の剣は、あらゆるモノを支配する王者としての風格を宿していた。——まるで、あの黄

金のサーヴァントのように。

「……いや、集中しないと」

雑念を払う。今自分がやるべき事は、それではない。

イメージするのは剣ではなく撃鉄。これが落ちると同時、衛宮士郎は魔術を成す装置となる――。

「――トレース同調、オン開始」

前までは一時間以上をかけて生成した魔術回路を、一瞬で起動する。元からあったものを毎回作り直していたのだから、今までのやり方はまさしく無駄だったと言う他ない。それを改めるだけで、魔術行使の間は劇的に改善された。

回路の問題が解決されたなら、次は肝心の強化魔術だ。対象の構造を把握し、魔力を通す事でその能力を補強する。今日の前にある木材の硬度が上がれば、強化成功という事になる。

「――構造物質、解明」

どこで拾ってきたのかも判らない木材。恐らくは、工事現場かどこかに落ちていたのだろう。細く長いその構造を把握し、魔力を通すための隙間を探す。精確に魔力を通さなくては、異物を押し込まれた木材は、硬度を増すどころか壊れてしまう。

「――構造材質、補強」

見つけた隙間の中に、慎重に自分の魔力を流していく。多すぎず、少なすぎず。適度な量を適度な場所に。

基本とされる強化は、魔術の中では初歩に位置づけられるという。しかし、今の俺にはそれすら難しい。実戦では何故か成功していたが……魔力を流し終えたというのに、手応えがない。

「っ……!?!」

おかしい、と瞑っていた目を見開いた瞬間、破砕音。見れば、金属バット並の強度になっっている筈だった木材は、無残にも中途から折れ曲がってしまった。

どこかしらで流す魔力の調節量を間違えたか、違う場所に流し込んでしまっていたのか。いずれにしても、望む結果が得られなかった事には変わらない。下手をすれば自分の身体にダメージを負う羽目になっていたのだから、それよりはマシと考えるべきか。

溜息を吐いて、壊れてしまった木材をじっと見つめる。すると、木材を照らす陽光が何かに遮られ、影が落ちてしまった。

「——なんだ。どこに消えたのかと思えば、鍛錬とはな。殊勝な心掛けではないか、雑種」

顔を上げると、土蔵の入り口にはアーチャーの姿。夕日の光を受け、容姿を一層輝かせたサーヴァントは、腕を組んでこちらを見下ろしていた。

視線の先にあるのは、今しがた強化の失敗で折れた木材。並外れた鑑識眼を持つ英霊は、俺が何をしていったのかを一発で看破したらしい。失敗の現場を見られるのは、少し気まずいものがある。

「戦いに行く前に試してみようと思っただけど、上手くいかなかったんだ。実戦だよやけに成功するんだけど……」

「ふむ。貴様は碌に魔術を使えぬ魔術師と聞いたが、修行半ばの身か。出来ぬ者に出来ぬ事をやれと言う程我は酔狂ではないが——敵は貴様の事情なぞ斟酌せぬ。自分の身を護る術程度は身につけておくが良い」

失敗を詰られるのかと思っただが、予想外の言葉に少し驚く。この男なら、この程度の事は出来て当然、出来ないなら切り捨てるとも言いそうなものだったが……考えてみれば、確かに出来ない者にやってみろと言ったところでどうしようもない。やる気が無いならまだしも、実力が伴っていない事柄を無理にやらせようとするのは愚かだろう。

今の俺の実力では、成功する方が珍しい。失敗は寧ろ当然の帰結なのだと、そこまで見抜かれていたのだろうか。いや、単に俺が強化魔術もまともに出来ないレベルだと最初から諦められていただけかもしれないが……。

「アーチャー。それって、心配してくれてるのか？」

「たわけ。仮にもマスターともあろう者がこの様では、サーヴァントたる私の沽券に関



わろう」

ふん、と尖った目線で一蹴される。まあ、端から他人の心配をする筈はないと判っていたが、富士山よりもプライドが高いアーチャーらしい発言だ。俺が魔術師として未熟なのはどうでもいいが、自分のマスターが自分の身も守れない程弱いのは困るという事なのだろう。

こちらを見下ろしていたアーチャーの瞳が、興味を失ったのか土蔵の中へと向けられる。俺が座り込んだまま見上げていると、アーチャーはそのままずかずかと土蔵の中に踏み込んで来た。

「で、この蔵が貴様の工房か。みすぼらしいにも程がある、宝の一つでも収めてやらねば蔵が泣こ——」

と。周囲を見渡していたアーチャーが、突然一点で動きを止めた。何を見つけたのか、一瞬前まで嘲笑が浮かんでいた顔にはこの上ない真剣さが宿っている。触れれば切り刻まれそうな張り詰めた空気に、自然と俺も息を飲んでしまう。

何事かと問い詰める事も出来ない、尋常では無い雰囲気。動く事すら出来ぬままに固まっていると、目を細めたアーチャーが、一点を凝視したまま口を開いた。

「——雑種。なんだ、あれは」

「あれって……」

アーチャーの視線を追う。その先に転がっていたのは、中身の無い古いストープ。

「ああ、あれか。前に投影の練習をした時に失敗したヤツでさ……外見だけは上手く作れるんだけど、中は空洞なんだ。機能も全然ないし、ただのガラクタだよ」

「投影魔術の失敗作だと？」

説明を聞いたアーチャーは、一体何が気に食わなかったのか、眉根を寄せると顎に手を当てて何事かを考え始めた。

俺の魔術のレベルが予想以上に低すぎたせいで、機嫌を損ねたのだろうか。強化の魔術も成功率は低いけど、投影魔術の方もお世辞にも上手く行くとはいえない。外側だけ、見た目だけならそつくりに見えるのだが、中身が伴っていないのだ。

確か前に一度、ハサミか何かを投影した時はそれなりに上手く行った気がするのだが、あれはただの偶然だろう。まともな物が全然作れず、ガラクタしか生まれないのだから、強化よりも更に使い道が無い。

「……雑種よ。貴様、自分が何をやっているか理解しているのか？」

暫く考え込んだ後、こちらを向き直るとアーチャーが低い声でそう訊ねてきた。質問の意味が解らず、困惑する。

「何って……ここでやっているのは強化と投影の練習だけど、おかしな所でもあったのか？ そりゃあ、確かに失敗しかしてないけど……」

「———そうか。何も知らぬのだな、貴様は」

納得が行ったのか、そう低く呟くアーチャー。一体何が気にかかったのか、アーチャーはストーブの他にも転がっている幾つかのガラクタに目を向けると、変わらず難しい表情を浮かべている。怒るでもなく、喜ぶでもなく、ただ考え込んでいるアーチャーの姿は、俺が知る限り初めてだった。

ここまでの反応は、単に俺の魔術がお粗末だという域を超えている。一体アーチャーが何を見出したのかは判らないが、このサーヴァントは俺の投影品に並々ならぬ関心を寄せている。それも、どちらかといえば負に近い感情を懷いて。

「投影魔術の件はあの娘に話したか？———いや、それならばこの無知は有り得ぬ。小僧、今宵の戦の後にでも、その失敗作の話をあの娘にしておけ」

「あ、ああ」

あの娘、というのは遠坂だろう。俺に魔術を指導してくれる彼女に伝えろというのは……それも、戦いの後にしろという事は、余程の時間が必要と判断されたに違いない。アーチャーは一体、俺の失敗作がどうしたというのだろうか。

状況が理解出来ずにいる俺を一瞥し、来た時と同じように堂々と土蔵を出て行こうとするアーチャー。呼び止める事も出来ずにその後ろ姿を追っていると、土蔵を出る直前ではたとその動きが止まった。こちらを顧みる事無く、声だけが流れてくる。

「一つ言っておこう、衛宮士郎——貴様の本領は強化ではない。投影だ」  
 それだけを言い残すと。沈みゆく夕日と同時に、アーチャーは土蔵を去って行った。

「——フエイカー  
 贋作者」

\*\*\*

日が沈み、既に数刻。深く暗い森は、底知れぬ闇に沈んでいる。獣の姿さえ見当たらぬ其処には、ただ静かさだけがある。無数の木々しか見当たらないというのに、何とも言えぬ不自然さを感じさせる、奇妙で静かな森だった。

冬木市郊外、アインツベルンの森。遡る事二百年、第一次聖杯戦争が開かれた折、アインツベルン家の所有地と化した広大な森である。

森全体には境界が敷かれており、それは実質的にこの森がアインツベルン家によって管理され続けている事を示している。彼らの妄執が染みついたこの地に、踏み入る者など皆無。この場に現れる者があるとすれば、それは。

「わたしの森に勝手に踏み入るなんて、無礼な鼠よね。ここが誰の森なのか、しっかり教えてあげなくちや」

この森の支配者である、アインツベルンの少女に相違なかった。

闊歩する少女には、闇に対する恐れはない。それもその筈、自らの庭に恐怖心など懐く道理はないのだから。あるのはただ、庭を踏み荒らす害虫に対する嫌悪感のみ。

無論、ただ迷い込んだだけの者に対して少女がここまでの敵意を示す筈はない。今宵森の結界を潜り抜けた者は、明確な意思を持つ敵対者。透視魔術越しに映った敵の正体は、紛れもなくランサーのサーヴァントだった。

サーヴァントが侵攻して来たとなれば、迎え撃つ他に選択肢はない。単独では勝てぬと判りきっている槍兵が、この期に及んで何故単身での突撃を選んだのかは知る由もないが、挑んできたとあれば叩き潰すのが、バーサーカーのマスターたるイリヤスフィールの採るべき道だった。

昨日の戦いは、ライダーの宝具によって三人のサーヴァントが逃げ果せた事で、有耶無耶の内に終結した。再度戦うため、キャスターの本拠地を強襲する算段を立てていたイリヤだったが、向こうから来たとなれば手間が省けたというもの。それも単騎で挑んできたのだから、飛んで火にいる夏の虫と言う他はなかった。

「……………」

続く従者は無言。狂化により理性を奪われた彼には、元より口を開く機能は無い。しかし、理性を失って尚残る知性の欠片と本能が、周囲を鋭く睥睨していた。

ランサーのサーヴァント、クー・フリーンは弱敵ではない。しかし、知名度補正とマスターの力不足によって本来の実力を発揮出来ぬ彼では、バーサーカーには及ぶべくもない。彼とて半神の大英雄、全力を揮える状態ならばこのヘラクレスとも渡り合えただろうが、幾重もの足枷がそれを困難にしていた。

だが。力を削ぎ落とされようとも、彼の宝具は未だ健在。刺し穿つ死棘の槍の真髄は、対象への絶対命中能力にある。神の加護を身に纏うバーサーカーなら兎も角、マスターであるイリヤスフィールを狙われればひとまりもない。それを本能以理解しているからこそ、大英雄は並々ならぬ警戒を周囲に向けていた。

伝承に於いて、狂ったヘラクレスは我が子を炎に投げ込み殺したと謳われる。例え再び狂気に侵されようとも、その罪と記憶は彼の魂に焼き付いている。その彼が再び庇護の対象である幼子を殺されるなど、誇り高き英雄であり、父でもあった彼が受容できる筈も無かった。

「……あれ。バーサーカー、どうしたの?」

暗夜の森を進む最中、唐突に狂戦士が少女を制した。戸惑う主を庇うように前へ進み出たバーサーカーは、ゆっくりと斧剣を持ち上げる。

——ここにいます。

姿こそ見えずとも、研ぎ澄まされた狂戦士の本能は敵の気配を察知していた。ことア

サシンのサーヴァントでも無い限り、バーサーカーの感覚を潜り抜ける事は叶わない。しかし、気配こそ確認したものの、敵対者がどこに潜んでいるのかは判らない。気配遮断のスキルを有さずに、この距離でヘラクレレスに位置を感じかせぬなど、相当な戦巧者で無ければ有り得ない。生前幾度となく非正規戦闘に明け暮れた、クー・フリーンならではの技だった。

「――」  
斧剣を構え、周囲を見渡すバーサーカー。彼が独りならば、頑強さに任せて周りの地形ごと吹き飛ばすような戦術も採れたが、後ろにいる雪の少女の存在がそれを許さない。バーサーカーが自ら動いては、彼女の身を危機に晒す事になる。

故に、待つ。相手の出方を待ち、マスターである少女を護りつつ敵を撃ち滅ぼす。

主の指示が無く、理性を喪失しているにも関わらず、尚戦術的判断を下せるだけの知性が残るのは、彼がそれだけ高潔な武人である事の証左。ギリシャ最強の英雄に相応しく、狂戦士と化してもその誇りは微塵も失われていない。

山脈の如き威圧感を放つバーサーカーと、木々の中に潜むランサー。互いに動かず、相手の出方を探り合う両者。耳が痛くなるほどの緊張感に満ちた時間は――風を切る音と共に、突如として引き裂かれた。

「せや――ッ！」





持ち前の敏捷性により、寸前で斧剣を回避したランサー。しかし衝撃まで殺しきる事は出来なかつたのか、躲し切つたにも関わらず、槍兵の顔には苦悶が浮かぶ。単なる余波でこの重み、まともに受けければ肉片さえも残るまい。

単なる振り下ろしが、宝具の一撃にすら匹敵する規格外。一手で地形を変える程の暴力を撒き散らすバーサーカーは、存在自体が災害に等しい。腕力のみで山脈を砕いたという伝説、その一端が今宵此処に具現していた。

「このオッサンの相手はちつとキツ過ぎるぜ……」

「あら。わざわざ死にに来るなんて、一体どういうつもりかしら？」

距離を取り、冷や汗を拭うランサー。その彼に、いつそ残酷な程の無邪気な声が向けられる。

たつた一撃で死を覚悟した槍兵に対し、イリヤスフィールはあくまで余裕。それはそのまま、両者の力関係を示していた。

己が従者が負ける筈はないと信じきる少女。それは油断でも慢心でも無く、ただ純然たる事実。最強の英霊の一人に数えられるヘラクレスに、並の英霊が抗し得る術など無い。それを誰よりも知っているからこそイリヤスフィールに怯えは無く、一方のランサーは内心で苦虫を百匹ほど噛み潰していた。

「ぬかせ、こっちゃんにも事情があんだよ。子供は寝る時間だ、すつこんでな」

しっしつ、とぞんざいに手を振るランサー。イリヤスフィールは敵ではあるが、今宵彼女を殺せという命令は下されていけない。ランサー本人も好き好んで女子供を手を掛ける性格ではなく、必要性が無い以上は端から相手にするつもりもなかった。

「レディに対して随分な暴言ね。——バーサーカー。そいつ、潰しちやつていいわよ」そんな内心を知る筈も無く。己への侮辱と受け取り、目を細めた雪の少女は、忠実な従者へと殺戮命令を下す。一撃を放った後、主の声を待ち続けていた戦士は、狂気に染まった眼をゆつくりとランサーへ向けた。

ゆらり、と大英雄が動く。一步踏み出しただけだというのに、大陸が鳴動しているかのような錯覚。歴戦の英雄であるクランの猛犬をして、畏怖すら懐かせる程の圧力。紅槍を構え直すランサーだったが、因果逆転の力を持つ魔槍といえど、あの巨軀を前にしては木の枝ほどにしか見えなかった。

「バーサーカーを相手に時間稼ぎをしろなあ？——あのクソつたれ野郎が」

無理難題を下した己の主に対し、ランサーは小声で悪態を吐く。令呪の縛りさえ無ければ百回は槍を叩き込んでいる程、彼は今の主を嫌悪していた。

強者と武を競い合う為に召喚に応じた以上、他の英霊と争うのは望むところだ。しかし、それが叶わぬ内に無駄死にするのだけは断じて認められない。バーサーカーと戦うのは望みの内だが、ただ時間稼ぎをして来いというだけの命令は彼にとって屈辱の極み

だった。

キャスターと同盟を結んでいる今、ランサーも自分に課せられた役割は理解している。キャスターにとっては時間が何より必要であり、それが足りなければバーサーカーに蹂躪されるだけだという事も。聖杯そのものに執着を持たないランサーとしては、気に食わぬキャスターがどうなるかと知った事ではないのだが、マスターの命令とあれば拒否する事も出来ない。

結果。嫌々ながらも、彼は命令を果たしにこの森へとやって来ていた。ギリシヤ最強の英雄を相手に、一定時間を稼ぎ、生きて逃げ延びる。それもまた戦いの術を競い合うのには違いないと、ランサーは無理矢理自身を納得させていた。狩人として、獵師としても達人であるヘラクレス。それから逃げ切らなければならぬとすれば、確かに死力を尽くした戦いは実現されるのだから。

——それが真つ当な一騎打ちでないのは、大いに不満が残ったが。

すつ、と何の前触れもなく、槍を構えたランサーが闇に消える。特殊な歩法を用いた、足運びすら悟らせぬ一瞬の後退。武術を知らぬイリヤスフィールの目には、ランサーが突如として消失したように見えただろう。

正面からの殴り合いで勝てる見込みはない。宝具を用いた即死攻撃も、十二の試練の  
ゴッド・ハンド  
前には無力。時間を稼ぐのが目的なら、正面攻撃は有り得ない。



## 19. 約束された勝利の剣

煌々と、夜空に月が輝いている。

よく晴れ渡った夜。雲は少なく、冬の空気は澄んでいる。月だけが大地を照らし上げる様は、どこか物悲しくもあり、そしてこれから始まる激戦を彩るように美しくもあつた。

ズシリ、と握った竹刀の重みを確かめる。使い慣れた道具とはいえ、アーチャーやセイバーの武器ほどの力強さはない。しかしこれが、俺の持てる唯一にして最大の武器だった。

後ろの家には、桜が一人で眠っている。熱が下がったとはいえ、彼女を一人にしておくのは心苦しいが、他に選択肢はない。最悪の場合に備えて、明日の朝までに俺たちが帰らなかつた場合は、また藤ねえのところの家政婦さんが来てくれる手筈になっている。最悪の事態など、考えたくもないのだが。

ここを踏み出したら、後は戦場に向かうのみ。柳洞寺に潜むキャスターと、手を組んだサーヴァントたち。彼らの非道を止めるため、俺はサーヴァントという武力を以て彼らという存在を駆逐する。

——正義の味方が救えるのは、味方をした人間だけ。

同じ夜。月明かりの下で、そんな言葉を聞いた気がする。

俺は、サーヴァントの暴力に巻き込まれた人たちの側に立ち、彼らを守るために戦おうとしている。だがそれは、逆の立場……即ち、手を下した側の人間。キャスターやライダーや、彼らのマスターである人物たちを否定することと同義。俺という人間が”救う”対象に、彼らは入っていない。俺が”救う”人間たちのために、彼らは排除されなければならぬ。

関係のない人間のために、関係のない人間と戦う。ある人間を助けるために、他の人間を切り捨てる。正義の味方とはそういうモノなのだ、その言葉に反発して走ってきたはずなのに——俺のしていることは、救うべき人間とそうでない人間を分別する、途方もない傲慢ではないのか。

一般人から魔力を奪い取るキャスター。学校中の人間を塵殺しようとしたライダー。彼らは魔術師のルールに反し、一般人を傷つけた。その行為は弾劾され、裁かれなければならない。結論はとつくの昔に出ているというのに、俺の心の片隅には、どこか落着かない部分があった。

「——さて。覚悟はいいか、雑種」

少し先。門扉の外で待っていたアーチャーが、冷たく声をかけてくる。

月光を跳ね返す金髪に、たじろぐほどの美貌は常と変わらず。ライダースーツ姿の英霊は、戦いに赴くとは思えぬほどの気楽さで壁に寄りかかっていた。

その向こうには、同じように待つ遠坂主従。セイバーは既に甲冑で武装し、不可視の剣を右手に握っている。着く前から戦いは始まっていると言いたいのか、アーチャーとは対照的に、その姿は緊張感に包まれている。

セイバーの気迫に気圧されながらも、悠然と腕を組む黄金へ向き直る。緋色の瞳に宿るのは、微かな愉悅の影と……そして、何かを推し測るような、見定めるような冷たい光。普段のアーチャーとは同じようでどこか違う視線に疑問を感じながらも、自分の意思を口にする。

「ああ。今夜、キャスターとの片を付ける。厳しい戦いになると思うけど、作戦通り頼む、アーチャー」

「フン、ならば良い。我は貴様のサーヴァントとして、戦いに付き合うのみ。道を定め、歩み、山を登るも谷に落ちるも全ては貴様の決断次第だ。それを努々忘れるな」

そう言うのと、壁から身を起こし、アーチャーは俺に背を向けた。道を決めたなら押し通るのみと、その後姿が語っている。

俺の一瞬の逡巡も、この英霊の慧眼の前ではお見通しだったのか。覚悟の程を問うことで、アーチャーは俺の迷いを強引に打ち消した。

そうだ。迷っている暇などない。一度決めた以上、戦場に迷いを持ち込めば死という現実に打ちのめされるだけ。大火災のような惨事を止めるため、それに巻き込まれる人を守るために、聖杯戦争で戦うと決めた。その時に、惨事を引き起こす側のことは切り捨てたはずなのだ。

一般人を犠牲にするような奴に、肩入れするなど有り得ない。かといって、彼ら加害者と巻き込まれた被害者、双方を助ける道などない。ならば、選ぶべき道はただ一つ。理不尽を幾ら嘆いたところで現実は変わらないのだから。……それが、どれだけ気に食わなかったとしても。

「準備は終わったわね。行くわよ、士郎」

門を出ると、遠坂が一言そう告げて、そのまま道を歩き出した。無言のセイバーに続き、俺も夜の道へと踏み出していく。最後尾に、自然体のままのアーチャーが続く形となった。

準備は整った。覚悟は固まった。交わす言葉などなく、後は敵陣へ侵攻するのみ。生き残るのは俺たちか敵か、戦いの趨勢を見守るのは宙に聳える白い月。静かな空を見上げながら、夜の街を歩いて行く。

そうして、柳洞寺までの道を移動する。

遠坂の認識阻害の魔術のせいか、はたまた深夜という時間帯のせいか、猫一匹とすら



すれ違わない。まるで町の住人が皆死に絶えてしまったかのような、そんな恐ろしささえ感じさせるほどの静けさ。

一列になつて、誰もが無々と歩き続ける。道を折れ、田畑を通り過ぎ、山への距離が詰まつても、誰一人として口を開かない。何人が生きて戻れるか判らぬというのに、それは覚悟かそれとも自信か。各々が思惑を抱えたままに、奇妙な一行の進軍は続く。

そのまま、どれほど歩いただろうか。気付けば俺たちは、終着駅へと辿り着いていた。「——思った通り。罨だらけよ、この石段。わたしたちが来ることを見込んで、嫌がらせする気満々つて感じ。

つてことは、本当にサーヴァントがいないのかも。三人いるんだつたら、境内に誘い込んで数で押し切る方が効率的なもの」

何度も上り慣れた、一見して何の変哲もない石段。柳洞寺へと続くその道に、魔女の気配を感じ取ったのか、遠坂は憤然とそう吐き捨てた。

魔術師の英霊ならば、昨日やって見せたように、気配さえ感じさせぬ罨の敷設などお手の物だろう。それを敢えて、遠坂に見抜ける形で敷いてあるということは、キャスターには罨を見せようという意思がある。罨の存在を主張することによつて、此方の侵攻を阻害しようというのだろうか。

「やっぱり罨があるのか……それつて、やっぱりヤバイヤツか？」

「とびつきり。一つ二つじゃないわね、これ。下手に踏み込んだら、異界に吹っ飛ばされるわよ」

「異界って……それじゃどうする？ 大人しく帰るか？」

「冗談。全部ぶっ壊していくわよ」

ふん、と腕まくりをする遠坂。その瞳には、並々ならぬ決意の色。昨日自らの魔術を全て破られたことで憤っているのか、今日の遠坂はいつも以上に気合が入っていた。

懐から取り出されたのは、燦然と輝く蒼の宝石。下手をすれば家さえも買えそうな宝石群を、遠坂はこの一戦に投じようとしていた。

彼女に呼応するように、セイバーが前に出る。あと一歩で石段に接するところろで、不可視の剣を掲げた彼女は、跳躍の態勢となつて待つ。眼前には死地が待つというのに、戦士たる彼女の貌には怯えの色などない。翠の瞳は、ただ己が勝利のみを見据えている。

「アーチャー。アンタも頼むわよ」

「ふん。我もキャスターには借りがあつた、ここで一つ返しておくとするか」

ライダースーツの外に金粉が散つたかと思うと、光と共にアーチャーの体を甲冑が覆う。同じく黄金の揺らぎと共に、両手に握られる双剣。どこまでも華美でありながら、同時に特級の武具としての側面を兼ね備えた戦装束は、主の性質とよく調和している。

夜の闇を四散させるのではないかという煌きは、敵地を前にしても微塵も衰えない。

真紅の瞳が見上げるのは、山門。常の寺とは異なり、月明かりの下でも澱んだ空気を撒き散らすそこが、既に魔女の根城となっているのは明白。ここからでも膨大な魔力が感じ取れるほど、その雰囲気は異様だった。

霊脈から吸い上げ、町の人から奪い取った莫大な魔力の貯蔵。セイバーには最上級の対魔力が備わっているが、それすら打ち破れるのではと思わせるほどのエネルギー。あれだけあれば、ライダーの傷など容易く癒せるに違いない——そんな懸念さえ浮かんでくる。

だが。物量と地形という、二つの壁を目にしたアーチャーには笑み。双剣は既に連結され、大弓へと変貌している。未だ敵の影は見えぬというのに、弓兵は既に狙いを定めていた。引き絞られた弦が、キリキリと音を鳴らす。

「封神の槍とは行かぬが——我の弓も中々だぞ」

ぼそりとそう嘯くと。一拍置いて、解き放たれた矢が夜の空を穿った。

輝く魔力の矢は、夜に眩い軌跡を残す。空を駆け上がり、しかし天には届かず落ち行く黄金は、その途上で自らを幾重にも分裂させた。一本の矢は無限の剣となって、遍く石段へと降り注ぐ。此処に弓兵の一撃が、魔女の罠へと牙を剥く——！

——閃光。

しかし。地を砕くほどの死の雨は、石段に接する直前で、何かに阻まれるようにその動きを止めた。

ある矢は触手のような何かに阻まれ、宙へと縫い付けられている。またある矢は全身に圧力を受けたのか、不自然な方向に捻じ曲がった。矢の群れは、発火し、弾かれ、へし折られ、何処かへと消え去るものすらある。おそらくは遠坂の見抜いた通り、異界へ転送されたのだろう。

ありとあらゆる手段で以て、侵略者たる矢の群れを迎撃する自動術式。俺たちを撃滅するはずだった魔術の罫は、アーチャーの無差別な攻撃によって、強制的に励起させられていた。矢を防ぎ切るための僅かな時間、全ての罫は月光の下に晒される。当然、その隙が見逃される筈はなく――

「セイバー、お願い!」

躊躇無く、手にした宝石を投げつける遠坂。その対象は罫ではなく、眼前に佇む剣士。蒼玉が炸裂した刹那、傍目にも分かるほど程の魔力がセイバーの甲冑を包み込んだ。

「はあ——っ!」

裂帛の気合。深く大地に沈んだ少女が、砲弾と見紛う速度で射出された。矢と罫が闘ぎ合う中、影さえ霞む速さで、剣士が石段を踏破する。

絶大なスピードと、撒き散らされる余剰魔力が、矢も罫も石段さえも打ち砕いて荒れ

狂う。何十という罨の軍勢は、一つたりとも力を揮うことなく、セイバーの突貫の前に消え去った。

アーチャーの矢による罨の起動。遠坂の宝石による魔力のブースト。そして、バックアップを受けたセイバーの、魔力放出能力と対魔力を活かした強行突破。罨を回避するでもなく、一つ一つ解除するでもなく、見えたところで一気呵成に破壊するという力任せの荒業。その効力は一目瞭然だった。

キャスターの罨の発動条件が、人やサーヴァントの判定ではなく、物理的な接触感知であったことが幸いした。正体さえ分からぬ黒い影や、使い魔の潜行という要素さえ排除したいのなら、無条件で何かが接触するだけで発動するに違いないという、遠坂の睨んだ通りだった。

「ぐずぐずしてないで行くわよ、士郎！」

「ああ、分かっている！」

道を切り開いたセイバーが、山門の手前で俺たちに振り向く。安全が確保されたのを見て、遠坂が躊躇なく石段を駆け登った。竹刀を握り、俺もその後へと続く。殿には、大弓を構えたままのアーチャー。

無数の罨に遮られ、遙か彼方に感じられた山門。全ての罨が破壊された今、ここはただの通り慣れた道に過ぎない。数十秒と経たず、俺たちは山門へと辿り着いた。

山門を潜ると、無音。警戒された不意打ちもなく、境内はただ静かな闇に包まれていた。

空は晴れ、雲はほとんど出ていない。天空に座す月光は、変わらず大地を染め上げる。人工の灯火がないとはいえ、広大な空間を照らすには月明かりのみで十分なはず。にも関わらず——この境内は、昏い影に沈んでいる。世界から切り取られたように、この空間からは明るさという要素が消えている。

事実、此処は世界から隔絶された異界なのだろう。膨大な魔力を蓄えた魔女の工房は、蝮局とくろを巻く竜の巢に等しい。この場の全てはキャスターの支配下であり、彼女の号令如何で万象一切が敵となる。ドロドロと漂う魔力は、ただそれだけで気分を悪くする。

奥に控えるのは、柳洞寺の本堂。数十人の僧が集まるはずのそこにも、人の気配はない。あるのはただ、恐ろしいほどの静けさと……人ならざる、魔術師のサーヴァントだけだった。

幽鬼のように佇むキャスターは、闇を従え艶然と微笑む。邪悪な魔法使いという表現が相応しい、寓話に語られる神代の住人。いや、遙か昔に魔術師として生きた英霊ならば、本物の魔法使いに匹敵する実力を持っていても不思議はない。

「いらつしやい。歓迎するわ——と、言いたい所だけど。生憎、貴方たちは招かれざる客。こういう時、この国ではお茶漬けを勧めるのだったかしら？」

「無駄に博識ね、キャスター。でも、招かれざる客なのはアンタの方。わたしの土地で、上納金も納めずに好き勝手されたらたまつたもんじやないのよ。」

アンタにはお茶漬けどころか、海苔一枚ももつたいないわ。とつとと出ていきなさい」

屋根の上に浮かび、威圧するように錫杖を向けるキャスター。だが、その絶大な魔力にも動じることなく、遠坂は正面から啖呵を切ってみせた。余りに堂々とした振舞いに、先に口を開いたキャスターの方が鼻白む。

が。この場では自分が優勢だという自信からか、気圧されたキャスターは、すぐに嘲笑らしきものを浮かべてみせた。威圧するように、その周囲に魔法陣が形作られていく。

「貴女の土地ですって？ 若いのに、土地の管理を任されるとは大したものね。セイバーを呼び出したのも頷けるわ。」

でも、それはそちらのルール。大人しく私が従う理由はなくなつてよ。……まあ、聖杯を譲ると言うのなら考えてあげないこともないけど」

「そう。なら力づくで叩き出すだけよ」

紫電を散らし、睨み合う二人の魔女。キャスターの殺意に応じてか、絶大な魔力が悪意の刃を纏って収束していく。緊張感に包まれた境内は、今やいつ暴発してもおかしくはなかった。

遠坂を庇うように、前に出たセイバーが不可視の剣を敵へと向ける。キャスターがどのような魔術を用いようと、セイバーはその悉くを無効化する。騎士の存在故にキャスターは先手を切ることができず、またセイバーも守るべき主が控える故に迂闊に飛び出すことができない。互いの隙を狙い合う両者だったが——この場を集ったサーヴァントは、この二人だけではない。

黄金の英霊が、大弓の照準をキャスターへと向ける。それと同時に、霊体化して潜んでいたのか、湧くように現れた黒衣の女性。石畳に降り立ったライダーは、鎖の付いた短剣を握り締める。魔眼は眼帯に覆われているが、その奥に潜む敵意までもを隠し切れてはいなかった。

セイバー。キャスター。アーチャー。ライダー。都合四体のサーヴァントが、二手に分かれて対峙していた。彼らが放つ威圧感と、集められた魔力量は、それだけで身震いするような恐怖を覚える。……が、死地に於いて立ち竦むなど愚の骨頂。震えを飲み込み、敵である二人の英霊を睨みつける。

そうだ。彼女たちを屠るため、俺はマスターとしてここまで来たのだ。襲われた女子



生徒を、倒れ伏したクラスメイトたちの姿を、彼らを見て懐いた怒りを思い出せ。敵がどれほど強大であろうと、それが外道を為す限り——衛宮士郎は、正義の味方として戦わなければならない。

影が降る。宙に聳える月が、死闘の予感に姿を隠す。それが合図となったかのように——四者が動き出したのは、全くの同時だった。

\*\*\*

右に跳ぶのは、アーチャーとキャスター。左に跳ぶのは、セイバーとライダー。それ  
に続き、俺と遠坂も二手に分かれる。まるで示し合わせたかの如く、左右に分かれた  
サーヴァントたちだが、その組み合わせは必然だった。

対石化能力を持つ鎧を有し、ライダーの魔眼を無効化できるアーチャー。しかし、ラ  
イダーの最終宝具である天馬ベガサスに対して対抗手段を持たないため、初手で天馬を召喚され  
てしまうと勝つことがほぼ不可能になる。

一方、セイバーはキャスターへの相性が良い。高い機動性と対魔力を有するセイバー  
に対して、キャスターが有効打を与えることは難しい。しかし、彼女をキャスターにぶ  
つけた場合、ライダーの天馬を止められる者がいないのだ。よって、それに対抗できる

だけの宝具を持つセイバーがライダーと相對することになる。

故に、この戦いは単純。セイバーがライダーを捻じ伏せ二対一の状況を作るのが早い  
か、キャスターがアーチャーを打倒し二人がかりでセイバーに挑むのが早い。時間こ  
そが戦闘の趨勢を決定づける要素となる――。

「――A ε ρ ο――！」

一言。ただそう告げるだけで、稲妻めいた光が大地を薙ぎ払う。

ただの一撃に、並の魔術師の全魔力をも軽く凌駕する魔力量が籠められている。あの  
バーサーカーの守りさえ乗り越えるのではないかと思わせる砲撃は、石畳を蒸発させ、  
次々と地面に傷跡を刻んでいく。恐るべきことに、宝具にすら届く砲撃一つ一つが、  
キャスターにとっては通常攻撃に過ぎない。剣士が剣を振るうのと同じ感覚で、あの魔  
女はあれだけの神秘を引き起こしているのだ。

桁外れの大魔術を、際限なく繰り出していくキャスター。同じ魔術師の目から見ても  
理解の外にあるソレは、悪夢の域すら超えている。これ程の莫大な魔力を集める為に、  
一体どれほどの命が吸い上げられたのか。想像するだにおぞましい力を、魔女はまるで  
指揮者のように手を振って行使していく。

キャスターの猛火を掻い潜り、地を疾走するアーチャー。キャスターの攻撃はあくま  
で点と線に過ぎず、面制圧能力を持たないため、宙に浮けぬ弓兵であつても辛うじて対

抗できている。類稀なる慧眼を持つ英霊は、魔術発動の予兆を読み取ることによつて、一撃一撃を回避していく。避けきれぬ攻撃は、手にした双剣で以て強引に弾き切つた。

魔術への抵抗力を持たないアーチャーは、セイバーと異なり、魔術砲撃を受けきることができない。発動前に回避するか、本体への直撃を防ぐ以外に方策がないのだ。

しかし、この光景は些か異常と言える。直撃でないとはいえ、宝具にすら届く砲火群を、アーチャーの武具は物ともしていない。あれは、魔術師の奇跡を上回るほどの神秘を含有しているのだ。

あの始まりの晩。ランサーの魔槍にも、アーチャーの武具は対抗できていた。天地ほども離れた力の差を、補いきる武具の性能。彼我の戦力を見極め、的確に手札を運用する能力。それこそが、あの英霊の本質なのだろうか。

神秘とは、積み重ねた歴史に比例する。槍の英霊、クー・フリーンが生きた時代は今から二千年ほど前、西暦が始まる前後と言われている。その彼の槍を容易く上回る神秘を持つという事は、アーチャーは二千年より尚古い時代を生きた英雄に違いない。また、アーチャーの武具を突破できぬキャスターは、それよりも新しい時代の英霊なのだろう。

「ふっ——！」

魔術攻撃の間隔、僅かな隙を縫つてアーチャーの矢が放たれる。攻撃の間隔を見切

り、双剣を大弓に変化させる時間を作り上げ、反撃の糸さえ紡ぎ上げる凄まじさ。アーチャーの戦略が並外れているならば、透明な盾を以てその奇襲を防ぐキャスターもまた並ではなかった。

間断無く地を焼く砲火と、光の尾を曳いて天を穿つ矢の群れ。火力は段違いとはいへ、反撃があるが故に、キャスターは後ろに控える俺を狙うことができない。僅かでも意識を裂けば、その瞬間に弓兵が首を獲りに来る。こと時間稼ぎに限れば、アーチャーの戦い方は間違いなく効果的だ。

地形、魔力量、火力、攻撃範囲の全てで劣っているながら、相手の動きを完全に見通し、武器と戦略を活かした防戦で互角にまで持ち込む力量は息を飲む他ない。キャスターの攻撃は、一撃を受ければ半身を持つていかれる。一撃、ただ一撃をまともに中てるだけで戦闘は終わるというのに、アーチャーはそれを許さない。ローブの下から覗くキャスターの苛立ちが、弓兵の絶技を物語っていた。

防戦に徹し、牽制以上の攻撃を行わず、砲撃の隙間を舞うように抜けるアーチャー。それでも、時間さえかければ物量でキャスターが押し切るだろうが、それは魔女にとつては負けを意味する。ライダーがセイバーに膝を屈した場合、その時点で勝敗は決するのだ。ライダーが如何に強力な宝具を誇ろうと、基本性能の差は覆せず——そしてセイバーは、ライダーの最終宝具すら打ち破る切り札を持つているのだから。

故にキャスターは、焦りさえ滲ませて苛烈な砲撃を行い、アーチャーは嘲笑を浮かべてその全てを捌き切る。一手誤れば塵と化すというのに、アーチャーには些かの迷いもない。この黄金の騎士は、自身の判断と、必ず騎兵を打倒するであろう剣の英霊を信じきっているのだ。

攻める魔術師と、守る弓兵。覆せぬほど開いた差が、一撃で決するはずの戦闘が、しかし結果に結びつかない。この状況が崩れぬ限り、膠着状態は維持される。それは一方のみを利する展開であり——残るもう一方が、望まぬ流れを良しとするわけが無かつた。

「……………？」

突如として、キャスターの砲火が止む。同時に、何か小さな粉のような物がばら撒かれ、一瞬の間を置いて黒い霧のような魔力が周囲一帯を覆い尽くした。

霧のように漂う魔力はやがて凝固し、人の形を作り上げていく。見る見るうちに地を埋めていくそれらは、昨日屋上に現れた、骨の軍勢と全く同じだった。何十という骨人形は、カラカラと緩慢な動きで骨の剣を構えて動く。

アーチャーを取り囲むように現れたキャスターの兵士たち。観戦気分とは行かず、その膨大な数に慌てて竹刀を正眼に構える。強化を済ませた武器があれば、雑兵程度となら戦える。

しかし、マスターには効果があつても、サーヴァントにとって骨の兵など足止めさえならない。それは当のキャスターとて理解してしよう。それでもなお兵团を展開したのなら、裏には必ず思惑がある。

「フフ——上手く逃げ回つたようだけど、貴方はここでお終ひよ。潔く消えなさいな」  
立ち尽くすアーチャーを見下ろし、微笑む魔女が再び無数の魔法陣を浮かべる。その一つ一つが戦車砲にも等しい砲台は、全てがアーチャーへと照準を向けていた。

……まずい。確かに骨の兵ではサーヴァントには及ばない。しかし兵士を排除する為には、どうしても一手を必要とする。キャスターの砲火を紙一重で見切り続けたアーチャーにとつては、例え一手であろうと余計な手間は死に繋がる。加えて、骨人形は物理的な障壁となり、アーチャーの動きを阻害するのだ。羽をもがれた鳥は、大地に墜ちるほか道はない。

——だが。

「ほう……竜の歯を用いた使い魔か。それはコルキスの王の魔術であつたな。だが、貴様は王ではない。

他者を裏切り、同時に他者の裏切りを恐れる。魔術を修めた王の娘、裏切りに囚われた王女の名は——確か、メディアといったか」

ギリ、と齒軋りの音が響いた。

宙に舞うキャスターの顔から、微笑が消えている。氷点下すら生温い、絶対零度に等しい殺意は、重圧となってアーチャーへと叩き付けられていた。

アーチャーの戦況分析。卓越した鑑識眼と頭脳は、僅かな情報の積み重ねからキャスターの正体を見破ってみせた。それが正鵠を射ているのは、キャスターの余裕のなさからも明らかだろう。

「——それで？ 私の正体を見抜いたところで、貴方には何ができるのかしら、アーチャー」

じりじりと、竜牙兵が距離を詰めていく。撃鉄を起こされた魔方陣は、死の砲火を放つべく主の合図を待っている。確かに、この期に及んでキャスターの情報が割れようと、アーチャーには手の打ちようがない。この盤面は、既に詰めにチエツク入っている。

……いや、違う。骨の兵士はアーチャーの動きを妨げるだろうが、それは決定的な要素にはならない。場の全てを利用し、相手の動きを読み切るアーチャーならば、竜牙兵という要素すら利用してキャスターの攻撃を避け続けるだろう。多少有利な要素を増やしたところで、セイバーが此方へ向かってくる前に、アーチャーを仕留めきれるとは思えない。

だから、もう一手。権謀術数に富む魔女ならば、必ず隠されたもう一手を用意している。新たな魔術攻撃か、地形を利用した罫か、何らかの召喚か。それを読んでいるから

こそ、アーチャーは魔女の一挙手一投足から目を離さず——そしてそれに思い至ったからこそ、俺はその”影”を認識できた。

「アーチャーッ！」

走る影。気配さえ感じさせず、弓兵に肉薄する影を、唯一人渦中の外にいた俺だけが見逃さなかつた。

「——ぬ？」

俺の警告に反応したのか、アーチャーの体が横に流れた。視認するより先に、左に倒れ込むようにして位置をずらす。そのコンマ一秒後——直前まで弓兵の首があつた場所を、視えない何か貫いた。

体を逸らしたアーチャーは、左足を軸にそのまま回転し、逆手に握つた剣を背後の敵へと突き出す。だがそれは一瞬遅く、黄金の剣は宙を薙ぐに留まつた。背後から急襲した刺客はアーチャーの逆撃を回避し、数歩下がって距離を取る。

「貴様——」

不意打ちを避け、振り向いたアーチャーの顔には戸惑い。恐らくは、俺も同じ顔をしているに違いない。何故なら……アーチャーを襲つた影は、魔術でも英霊でも使い魔もなく、ただの人間だつただけだから。

「アンタ、何でここに……？」



闇の中。骨の兵団の中、静かに立つ瘦躯の男。たった今アーチャーを奇襲したばかりだというのに、汗一つ、息一つすら乱さぬ立ち姿。感情も、存在感すら希薄な佇まいは、どこか氷の如き冷たさを宿している。

その男——穂群原学園の教師、葛木宗一郎は、教壇に立つ時と全く変わらぬ姿で、わずかに俺へと視線を向けた。

「衛宮か。ふむ……遠坂といい、生徒の中にこうもマスターが潜んでいたとはな」

冷たい口調。人形には決して宿らぬ眼光が、彼自身の意思を示している。確固とした自意識があり、マスターの存在を知り、戦場へ姿を現した——驚くべき事実だが、それはつまり。

「葛木、アンタもマスターだったのか？ 一体どうして……」

「答えてやりたいところだが、生憎時間がない。質問なら後にしろ、衛宮」

まるで死地に立つとは思えぬ口調で、葛木が俺の声を遮る。授業で質問された時と同じように、あの男の姿は余りにも平然としていた。

……おかしい。マスターだというのは、葛木からは魔術師らしい気配が全く感じられない。学校で見る時と同じ、社会科学と倫理を受け持つ教員に過ぎないはずなのに——殺し合いの場に、驚くほど馴染んでいる。いや、馴染みすぎている。

それだけで理解する。あれはこちら側の存在だ。聖杯戦争や魔術という条件を抜き

にしても、死を受け入れ、同時に死を振り撒くことも厭わない人間。なぜ魔術師でもない葛木がマスターとなつてゐるのかは分からないが、彼が日の当たる道を歩む人間でないことだけは認めざるを得なかつた。

キャスターの転移魔術によつてか、突如として現れた葛木。恐らくは一撃でアーチャーを仕留めるつもりだつたのだろうが、策略を仕損じたキャスターは、様子見のつもりか次の手を打つ素振りを見せない。後背に浮くキャスターが動かぬと断じてか、万象を見抜く紅玉が新手の敵を冷たく見据えた。

「キャスターの傀儡、ではないな。が、貴様からは何も感じられぬ。敵意、憎悪、恐怖、憤怒——人間に有るべき感情モトメが、貴様には欠けている」

数秒。僅かに葛木を観察した後、アーチャーはそう断言した。黄金の慧眼は、俺には見えぬ何かを葛木から見て取つたのか。

「生きながらにして死んでゐるな、雑種。ハ、貴様の如き屍が我に及ぼうなど、思い上がったか——！」

疾風。

前触れすら感じさせず、黄金が唐突に霞む。それが疾走だと気付く前には、アーチャーは葛木との距離を半分まで詰めていた。

「……………ッ!? 宗一郎様——！」

キャスターが焦る。アーチャーが接敵するまで、まだ一秒。魔術師の英霊にとって、呪文を唱えるには十分過ぎる猶予。常ならば、無防備な弓兵の背は、二度は光に貫かれていた。

だが、今は位置取りがまずすぎた。キャスターの位置からあの大火力の魔術を放てば、間違いなく葛木を巻き込む。その逡巡はキャスターにとって命取りであり……この状況を見抜いていたからこそ、アーチャーは躊躇なくマスターの首を獲りに行った。

サーヴァントの身体能力は、人間の数十倍を超える。特別な歩法や魔術を用いずとも、距離など一瞬で縮められる。死の一秒が過ぎた後、反応の暇すら与えずアーチャーの双剣が左右から迫る。

「む……!?!」

見切れるはずもない、人の速度を遥かに凌駕した斬撃。セイバーほどの技量はなくとも、人一人を斬り伏せるには十分すぎる双剣。ただ振るうだけで葛木の首を刈り取る刃は、左の一撃が直前で止まり、次いで右の一撃が胸への刺突へと変わっていた。何かを勘繰ったのか、アーチャーは二重のフェイントを掛けたのだ。

だが、驚くべきはそこではない。反応を許さぬ速度の、幻惑さえ交えた刺突。その必殺の一撃が——人の拳に、弾かれていた。

「——慢心したな、アーチャー」

左手を払ったままで、葛木がそう低く告げる。

魔術により強化されているのか、剣をともに弾いたにも関わらず、葛木の拳には傷一つない。それはまだいい。だが、魔術師ですらないただの人間が、何故サーヴァントの攻撃に反応できたのか……？

「雑種風情が……！」

驚愕を浮かべたアーチャーの顔が、一瞬にして憤怒に染まる。

激昂した英雄は、次なる一撃を双剣で振るう。左右からの挟み込み、逃げ場を失くすような斬撃。キャスターの支援は未だ間に合わず、一撃を入れればマスターは倒せる。その判断は間違いではなかったが……直前に見せた防御が、偶然ではなかったとするならば、それは。

ガン、と。

金属板を叩き付けたような、鈍い衝撃音が響き渡った。

滑るような体捌き。余りにも自然に、沈み込んだ男に双剣が避けられる。次の瞬間、剣の内側に飛び込んだ葛木は——あろうことか、強烈な直突きを繰り出して見せたのだ。

まともに受ければ、肋骨どころか心臓までもを破裂させたであろう一撃。アーチャーに炸裂した拳は、黄金の鎧を打ち据え、その内側にまで確実に衝撃を与えていた。

「チ——」

不利を悟ったアーチャーは、素早く距離を取る。

ランサーの槍ですら破れなかつた鎧は、葛木の拳では碎けない。しかし、傷は与えられずとも衝撃は内部に浸透する。相手が拳法使いならば、受け続けるのは悪手だと悟つたが故の撤退。教師に過ぎぬはずの葛木は、何処で学んだものなのか、明らかに達人の動きを見せていた。

しかし、アーチャーは下がりがきれない。葛木との距離を離しすぎれば、今度はキャスタアの砲火に狙われる。退けば魔術が、攻めれば拳打が降り注ぐという、予想だにせぬ最悪の事態。おまけに、竜牙兵がアーチャーと葛木を取り囲むように展開し、逃避を許さぬ構えだった。

「貴様——ッ！」

態勢を立て直したアーチャーが、膨大な殺意を叩き付ける。が、攻守は既に逆転している。防御の姿勢を取つた時には、既に”蛇”が喰らい付いていた。

打撃、打撃、打撃、打撃、打撃。

鞭のように円を描く左手が、雨霰と鎧を打ち付ける。稲妻の如き鋭さを誇るとはいえ、ただの拳であるはずのそれが、サーヴァントに次々と直撃する異様。その不可思議な現象の理由は、異常に過ぎる腕の動きにあった。

外から内、回り込むように動く左手。その軌道までは良い。問題は、肘から先の不規則な変動だ。

アーチャーがいかに剣で防ごうと、まるで絡みつくようにすり抜ける拳は、いとも容易く先の鎧を殴りつける。サーヴァントの反応速度すら超える連撃は、最早神業というほかない。ただの人間であるはずの葛木は、何の武器も用いず、その絶技のみで以てアーチャーを圧倒していた。

——馬鹿げている。

人間がサーヴァントに挑む。それがどれほど愚かなことなのか、俺は身を以て学んでいる。技量や武装以前に、基礎的な身体能力が違い過ぎるのだ。サーヴァントと戦えるのは、同じサーヴァント以外には有り得ない。

では、目の前の光景は何なのか。サーヴァントが後ろに控え、マスターが前衛に立ち……その上生身の人間が、格闘のみでサーヴァントを圧倒するなど、悪夢としか思えない……！

「ぐ……………」

呻き声。が、致命傷ではない。黄金の鎧は、葛木の魔拳を防御し切っている。しかし一撃ごとに響く衝撃、それも悉く急所を狙った攻撃は、着実にアーチャーにダメージを与えていく。あの慧眼を以てしても、守り以外の選択肢が取れぬ絶望。

反撃する余裕さえなく、剥き出しの頭部を辛うじて守り続けるアーチャー。ガンガンと鳴る金属音は、途切れなく続いていく。このままでは押し切られるに違いないというのは、傍目にも見て取れた。

……どうする。

今俺が飛び込んで、できることなどない。アーチャーを警戒しているだけで、キャスターも俺の存在は認識している。動きを見せた瞬間、魔術砲撃が降り注ぐだろう。

だが、俺の手には三つの令呪がある。これを使えば、状況を打開することも叶うだろうが……中途半端に、切り札を切ってしまったていいものか。それ以前に、絶対命令権、即ちサーヴェントへの命令である令呪を使われて、あのアーチャーが黙っているかという懸念もある。あの英霊はおそらく、自分の命が失われることよりも、他人に命令されることの方を嫌うはずだ。かといって、このまま放っておくなど……。

と。迷っていた矢先、アーチャーが唐突に動いた。

防戦一方、ただ拳打を受けるがままだったアーチャー。しかし、この短期間であの奇特極まる軌道を読み切ったのか、胸部狙いの一撃を寸前で躲して見せたのだ。無秩序な拳法さえ見切る離れ業、どれ程の頭脳と眼力が成し遂げているのか。

「ふ——！」

隙が出来た葛木。ここに来て、改めて攻守が逆転する。完全に読み切らぬ限り、人間

の反応速度はサーヴァントに及ばない。がら空きになった頭部に、今度こそ直上からギロチンの刃が振り下ろされる。

——だが、その瞬間。外れたはずの左手が、悪辣に揺らめいた。

円を描いていた軌道。それが唐突に、直線へと切り替わった。空を薙ぐはずの腕が振り戻され、再び黄金の胸部に炸裂する。魔拳は最初から決まっていたかのように吸い込まれ、痛烈な直撃を受けた弓兵は顔を顰めて後ずさった。間髪入れず、再び攻勢となった葛木が距離を詰める。

「おのれ、調子に——」

煌く魔拳。闇の中、魔人が再び黄金を圧倒する。雲に敗れ、姿を晦ました月はまるで弓兵の劣勢を物語っているようで。……しかし。この気位の高い英霊が、月と同じ末路を辿る道理がなかった。

「乗るなと言うのだ、下郎——！」

激昂するアーチャー。神すら射殺するのではないかという殺気が、空間そのものを埋め尽くす。ここがキャスターの陣地であることさえ失念させる、何もかもを威圧する殺意。サーヴァントであるキャスターや、感情の宿らぬ竜牙兵さえ、その圧力に怯えたかのように見えた。

だがその激発さえ、魔人と化した葛木には無意味。冷徹な殺戮者は、何ら反応を見せ



ることなくアーチャーを打ち据えようと腕を振る。今までと同様、アーチャーを攻め立て、守りを崩し、頭へ喰らい付かんとする蛇。幾重にも軌道を変え、読まれぬ一撃が放たれた刹那。

バアン、と。何の前兆もなく、アーチャーの鎧が弾け飛んだ。

「ガ——ッ?!?!」

苦鳴。それは打たれたアーチャーではなく、拳を繰り出した葛木から放たれたものだった。

いったい如何なる仕組みによつてか、弓兵が纏う黄金の鎧が、内側から散弾銃のように飛び散つたのだ。砲弾そのものと化した金属片は、葛木の全身を直撃する。魔術で強化されているとはいえ、人間に過ぎない葛木にとつて、その反撃は余りに重い。攻撃を放つため、至近距離まで接近していたのが仇となった。

自身が放つたものを凌駕する衝撃に、葛木の身体が数メートルも吹き飛ばされる。周囲を取り巻いていた竜牙兵を薙ぎ倒しながら、俺の眼前まで滑ってきた葛木は、辛うじて倒れずに踏み止まった。……が。その体は、控えめに見ても死に体だった。

鎧にほぼ密接していた左腕はあらぬ方向に折れ曲がり、内臓を傷つけたのか、口からは鮮血が流れていく。骨の露出した左足からも大量の血が流れ落ち、擦り切れた服の合間からは青黒く変色した皮膚が見て取れた。全身に鋼鉄を叩き付けられて、生きている

ことこそが一種の奇跡。即死ではなかったようだが、限りなく致命傷に近いだろう。

「消えるがいい、雑種！」

「な、宗一郎様——!!!」

鎧を弾け散らす奇襲によって、ライダーズ姿に戻り、完全な無防備となったアーチャー。しかし握られた双剣はそのまま、踏み込みざまに葛木の首を狙っている。傷ついた葛木では躲し切れず、キャスターの魔術は届かない。肉弾戦の心得がないと思われるキャスターでは、この高速戦闘に対応し切れなかったのだ。

防御も回避も不可能、掩護も間に合わない。逆転に次ぐ逆転劇の後、アーチャーが紡いだ勝利の糸。完全に決まった、と息を飲んだその時——葛木の動きに、全身が怖気立った。

「貴様、まだ——ぐッ!?!」

重い打撃音。響く苦鳴は、今度はアーチャーの口から漏れていた。

完全なカウンター。左手を犠牲にし、右手を温存していた葛木は、ここに来て砲弾めいた一撃を放ったのだ。最初の直突き以降、ほとんど動きを見せなかった右手。おそらくは、アーチャーの守りを破った後の決め手として残しておいたそれを、葛木は躊躇なく反撃として射出した。

破城槌の如き魔拳は、骨を砕き肚を破る破壊力を持つ。鎧を失ったアーチャーには、

それを防ぐ術がない。まともに拳を浴びたなら、一撃の下に沈められる。

……しかし。全身に及ぶ重傷のせいかな、その必殺は全力には遠く。鳩尾に入った一撃も、アーチャーを落とし切るには至らない。が、反撃を予想できなかったアーチャーは、無防備な隙を晒している。もう一撃、次の一撃こそは凌ぎ切れぬ状況——そして葛木は、既に次弾を装填していた。全身の傷を省みぬ、溜めに溜めた渾身の構え。

駄目だ。

あれは防げない。防げたとしても、アーチャーは吹き飛ばされ……葛木との距離が開いた瞬間、キャスターの魔術に呑み込まれる。この一手を防ぎ切らねば、ここで終わってしまう。それはつまり、つまり——。

『——問おう。不遜にも、貴様が我の光輝に縋らんとする魔術師か』<sup>マスター</sup>

あの晩。そうして、英雄<sup>ヒーロー</sup>のように現れたアーチャーが。

『貴様は自分の進むべき道を見定めたのであろう。ならば、それ以外の道など考えるに能わぬ』

迷っていた時、いつも道を示し、力強く背を押してくれた青年が。

『——よく言った。無様で、未熟で、歪ささえ感じるが……それでも貴様は、自ら業を背負い、道を選ぶ決断をした。ならば、我もサーヴァントとして応えてやらねばなるまい』<sup>よ</sup>

どうするか決めた時、俺を見捨てず、戦ってくれたサーヴァントが。

——死ぬ。

ふざけるな。そんなことは、そんな話は認められない。

聖杯を要らないと言いながらも、戦いに付き合おうと宣言したアーチャー。彼はあくまで衛宮士郎という人間を観賞する事が目的であり、聖杯戦争でどう動くかはマスターである俺に任せていた。勝利も敗北も、全ては俺の物だと。

では、この光景は何だ。キャスターと戦うと決めたのは俺だ。あれは倒すべき存在だ。でも、実際に戦っているのはアーチャーであり……何もできず、何もしなかった俺のせいで、あいつが死んでしまうとしたら、それは。

——炎の夜、皆を見捨てた自分と同じではないのか。

違う。

あの時の俺とは違う。この五年間、俺は何のために魔術を続けてきたのだ。何のために、正義の味方になると誓ったのだ。今ここで、ただ見ているだけの自分など——そんなものは、俺自身が許せない……！

考えろ。令呪は間に合わない。今その兆候を見せれば、途端にキャスターに串刺しにされる。が、あいつは俺を視界に入れていない。故に一瞬、音さえ立てねば僅かに一瞬だけは動ける。その一手で、俺は何ができる。

アーチャーと葛木は既に目の前。距離は一問。ならば間に合う。口を開くより早く、竹刀を構え、葛木目掛けて突貫する……！

「いの……！」

動きに反応したキャスターが、即座に魔術を紡ぐ。先ほどとは違い、キャスターの射線はちょうど俺だけを捉えている。が、不意を突いたせい、その光は明らかに弱い。無論直撃すれば消し炭だろうが、この魔術、この光さえ凌げば葛木まで辿り着ける――

！  
「せやあああああつ!!!」

握る竹刀。強化したそれで、魔力弾を叩き伏せる。

だが、無力。半人前の強化では、こんな事さえ荷が重い。魔女の指先の前に、竹刀は僅か一撃でへし折れ……その代償に、辛うじて魔力弾を防ぎ切っていた。

次弾を放とうとするキャスターだが、遅い。既に葛木までの距離はゼロ。アーチャーとの間に入り、発射された右の魔拳を、折れた竹刀で凌ぎ切る……！

「つ、葛木い――！」

着弾。残った半分の竹刀が、粉微塵に吹き飛んだ。

万全ならば俺が入るより先に煌いたはずの拳は、傷のせいで僅かに遅く。そのコンマ一秒以下の遅れに、何とか竹刀が間に合った。

だが。半身が砕け、血に染まって尚、鉄に等しい竹刀を打ち砕く破壊力。人一人を殺傷するには、それでも過剰すぎる。それに対抗できる武器は、ただの一撃で塵と化した。

「ぐ——」

引かれる右手。次の魔拳を防ぐ手立ては既がない。傷など何ら躊躇せず、悪鬼は拳を放つだろう。だが、その徹甲弾を防がねば——衛宮士郎は、ここで死ぬ。

竹刀は既に失われた。アーチャーは俺の後背、甲冑を失い態勢を立て直せぬ今は動けない。葛木に対抗できるのは、俺しかない。

躲せないなら、防ぐしかない。魔人を食い止められねば、飛び出した意味がない。ここで俺が死ねば、アーチャーも、遠坂も、セイバーも、みんな、みんな——

——殺されてしまう。

受ければ死ぬ。腕などでは、鉄の槌は防げない。庇った腕ごと、あの魔拳は微塵に砕く。心臓が吹き飛ぶ幻視さえ、拳から感じ取れる。

足りない。魔物に相対するのに、素手では不足だ。武器が要る。そうだ、人と怪物の差を埋めるだけの強い武器。サーヴァントすら圧倒するあの拳を受けきり、魔物を斬り伏せられるだけの特級の武器が……!!!

「——<sup>トレイス</sup>投影」

ない。武器は手にない。なら作れ。ないなら作れ。衛宮士郎の本領は投影。空っぽ

でも何でも、防げるだけの武器を。

ではどれだ。どの武器が良い。赤い神劍、金の宝劍、駄目だ、それは無理だ。もつと簡素で、戦うために作られた劍を、そうだ、アーチャーの劍を投影しろ——!!!

「開始——！」

——キーン、と。金属音が響いた。

「なに——」

それは、誰の声か。

「我の劍を、投影しただと……!?!」

アーチャーの驚愕。だが、誰よりも驚いているのは、他ならぬ俺自身だった。

感覚がおかしい。間違いなく“それ”を握っている筈なのに、触覚が余りに虚ろ。見ている風景さえ、ノイズ混じりに明滅する。身の程を超えた魔術の代償か、感覚器官が狂っている。それでも俺の手には、見紛う事なく、アーチャーの双劍が握られており——それは完全に、放たれた拳を防ぎ切っていた。

黄金の劍。無銘の劍。古い魔物を屠るべく、遙か昔に作られた劍。絶大な神秘を纏うはずのそれは、しかしどこか歪んでおり、不快な音を発している。

投影はできた。だが、不完全な複製では、本物には届かない。たった一撃を受けただけで、黄金の双剣は軋んでいる。もう二撃も受ければ、この剣は敢え無く四散するだろう。

十分。あと二撃耐えれば十分だ。自分の意思でキャスターに与した男は、既に倒すベき敵である。俺が耐える間に、アーチャーは態勢を立て直し、傷ついた葛木を打ち倒す。その刹那の時間さえ稼げば、目的は達成される……！

「その人は、やらせないわ……！」

主の窮地に、キャスターが動く。攻性魔術を使えない以上、身を挺して庇おうというのか、宙を滑るように魔女が迫る。防御魔術か空間転移か、いずれにしても一手遅い。後ろに立つアーチャーは、既に大弓を構え終えている。この距離ならば、動けぬ葛木は俺越しに狙い撃たれよう。

だが、矢が迸るより早く。柳洞寺の反対側、セイバーとライダーが戦っているであろうその場所から……突如として、キャスターの貯蔵さえ霞むほどの莫大な魔力が沸き起こり——次いで、眩い彗星が空を貫いた。

「え——!?!」

時間が止まる。その異常に、全員の視線が釘付けになる。宙を舞うキャスターさえ、縫われたように凍り付く。全ての動きが止まり、無音と化した次の瞬間。



——眩い黄金の光が、キャスターごと空を断ち割った。

\*\*\*

二度目の戦い。一昨日に続いて、セイバーとライダーは互いを捻じ伏せるべく死闘を繰り広げていた。

双方の戦力差は歴然。基本性能、武器の性能、戦闘経験、ありとあらゆる部分でライダーはセイバーに及ばない。事実、校庭での戦いでは数分と経たずライダーは破れ、セイバーを消耗させることさえ叶わなかった。

ならば、何度戦おうとも結果は同じ。運でも偶然でもなく、地力が離れ過ぎている。そもそも、本質的には英霊では無く魔物に近いライダーは、純正の英霊、それも最強の騎士たるセイバーには届かない。だというのに——この晩、傾いたはずの天秤は確かに平衡を保っていた。

「シッ——！」

ライダーの特攻。二日前、一刀の下に斬り捨てられた疾駆。しかし、以前とは段違いの速力と魔力を持ち合わせたそれは、この騎士王をして守りに回らざるを得ない威力を誇っていた。

必死に受けるセイバーは、短剣の投擲を弾き、鎖を跳び越え、蹴りを剣で防御する。今までの騎兵が風と言うなら、これは嵐のそれに等しい。縦横無尽に境内を跳ねるライダーは、留まることの知らぬ猛攻を続けていく。鎖と剣は、台風の如き頻度でセイバーに降り注ぐ。

「何よあれ、完全に別人じゃない……!」

後方。柳洞寺の隅にて、己が従者を見守る凜はそう小さく悪態を吐いた。

無傷のライダーの戦闘能力は、セイバーを通じて聞いている。仮に宝具を使われたとしても、セイバーの優位性は揺るがない。キャスターの支援があらうと、戦闘は短時間で終結する……はずだったのだが。

驚くべきは、ライダーの潜在能力か、はたまたキャスターのバックアップか。絶大な魔力を纏うライダーは、その基礎能力さえも向上させている。凌駕はできずとも、セイバーと互角に持ち込むほどの力は、最早侮れぬ強敵と化していた。

「はあ——ッ!」

振るわれる剣。釘剣を弾き返し、そのままライダーごと薙ぎ払おうと剛剣が迫る。が、羽のような軽さで宙返りした騎兵に、剣が届くには一步遅く。次の瞬間には、再び釘剣が降り注ぐ。その圧倒的な速度、飛燕と見紛う身のこなしは、あのランサーにすら届いていよう。

攻撃力と防御力において勝るセイバー。しかし、常に先手を取られ続け、速度で負ける彼女は有効打を見出せない。このままでも負けは有り得ぬだろうが、勝ちにはほど遠い。この戦いには絶対勝利が求められる以上、それでは足りぬ。ここで時間をかければかけるほど、キャスターと戦っている二人が不利になるのだから。

「ふ……」

だが、重い。不規則に揺らめく剣の投擲と、合間に放たれる肉弾攻撃。魔術なら無効化できようが、直接攻撃はどうしても躲すか防ぐ必要がある。以前とは段違いのライダーの一撃は、生半可には受けきれない。短剣、殴打、突進、蹴撃と、息もつかせぬ連撃は、それこそ湯水のように繰り返されて行く。これ程の猛攻、いずれは何処かで破綻すると見たセイバーだったが、騎兵を支える魔力は底が知れぬ。此処に至ってセイバーは、この攻撃は終ぞ止まらぬと割り切った。

マスターの支援は望めない。サーヴァントですら捉えきれぬライダーの速度は、人間の目では到底追い切れない。並外れた直感を持つセイバーを以てしても、対応するのが精一杯。それに攻撃を中てるなど、まだ針の穴を射抜く方が容易かろう。

——ならば。

ごう、と風が鳴る。自然の風でもなく、ライダーの疾走でもないそれは、セイバーの剣を中心に発生していた。

「っ……!?!」

その異常に、ライダーの猛攻が止まる。いや、止まらざるを得なかった。ライダーの速度が嵐ならば、吹き荒れる暴風は竜巻にも届こう。魔力を孕んだ風の群れは、戦闘範囲全てを取り囲み、ライダーの足を削ぐ壁となっていた。

失策を悟ったライダーには、苦渋の色。一旦足を止めてしまえば、最高速度まではわずかに時間を要する。魔力の加護の下、トップスピードで走り続ける事でセイバーを押していたライダーだったが、足を奪われればその脅威は半減する。

風の結界を抜けるには、最低でも二手。それだけあれば、セイバーはライダーを斬り倒そう。まともな斬り合いでは、ライダーに勝ち目など存在しない。かといって、暴風の中を突き進めば、元の速度は望めない。最高速度へ至るより先に、セイバーに先手を奪われる。

——英霊アルトリアの宝具が一、インビジブル・エア風王結界。

剣を覆い隠すための風の鞘が、ここに壁となつて顕現する。機動性が失われた今、ライダーはセイバーに届かない。平衡状態の天秤は再び傾き、セイバーは今度こそ騎兵を斬り伏せようと走る。そしてライダーに、その一撃を受け切るだけの技量はなかった。

しかし。失われたモノは、取り戻せる。宝具を以て奪われた優位を、同じ宝具で奪い返せぬ道理が無い。自らの秘奥を以てすれば、セイバーの足を奪い、再び優位を取り戻

せる。即決したライダーは、一瞬にして眼帯を外し、その内に潜む石化<sup>キュベレイ</sup>の魔眼を閃かせた。神話の再現、凍れる水晶の瞳が、気高き騎士に牙を剥く――！

「凍りなさい、セイバー……！」

「残念、そいつは対策済みよ！ 令呪を以て命じるわ――魔眼を無視しなさい、セイバー！」

はっ、と気付いた時には遅い。消えゆく令呪を代償に、石化の魔眼を正面から睨みながら、何ら変わらぬ速度でセイバーが突貫する。風の後押しを受けたその速度は、先刻までのライダーに及ぼう。

石化<sup>キュベレイ</sup>の魔眼。厳密には宝具ではなく、彼女の持つ技能に位置付けられる脅威の魔眼。魔力の低い者は問答無用で石化、高い魔力を誇る者にも強烈な重圧を与えるそれは、神祕の度合いで言えば並の宝具を上回る。元々白兵戦能力の低い彼女にとって、相対的に自身の能力を引き上げる魔眼は正に切り札。アーチャーのような対抗宝具を持たぬ限り、その脅威からは逃れられない。

しかし。他と隔絶した魔力量に加え、キャスターの魔術すら跳ね除ける対魔力を持つセイバーには、元から魔眼が効きにくい。さらに、事前に魔眼の正体が知られており、ダメ押し<sup>の</sup>令呪の加護さえ加わっている。これだけ揃えば、例え神域の魔眼とて完全に無効化出来よう。

「雌雄を決するぞ、ライダー！」

「くっ……！」

間に合わない。止まるはずの騎士は歩みを止めず、今更躡すには一步遅い。魔眼を無効化されたライダーにとつて、一瞬の驚愕こそが足枷となる。風に阻まれる今、彼女の足では逃げ切れない。……そう、ライダーの足では。

煌く釘剣。その切っ先は、迫るセイバーではなく己が首に向けられる。迷いなく動いた剣は、主の喉元を深々と切り裂き——溢れた血潮は、中空に紋様を描き出す。急停止し、警戒するセイバーの眼前で、一瞬の内に魔法陣が完成された。

「っ、宝具か——！」

悪寒。警鐘を鳴らす直感に従い、セイバーが横に跳ぶ。一拍置いて、何か嘶きのような音と共に、圧倒的な光が大地を焼き払う。地を焦がし、熱量を撒き散らすそれは、天を翔ける流星となつて雲の上へと舞い上がる。

光そのものかと見紛うほどの神々しさ。月よりも尚白く輝き、天を統べる有翼馬。神話にしか語られぬはずのそれは、星の光輝すらも霞ませる、伝説の獣だった。

「天馬……！」  
ベガサス

戦慄と共に、その正体を口にするセイバー。予め知っていたとはいえ、知識のそれと、いざ現物を見た時の衝撃は格段に違っていた。

神代に生きた幻想種。どれ程の年月を重ねたのか、こと護りに限れば最強と謳われる竜種にすら届いていよう。あれほどの域に達した幻獣は、セイバーをしても生半な敵ではない。

焼け爛れた大地に、僅かに視線を送る剣士。あの天馬は、ただ駆け抜けただけで空間を蹂躪する。神域の加護に膨大な魔力、加えて流星の如き速力は、立ちはだかる物全てを粉碎する超兵器だ。単なる余波でこの威力、最高の対魔力を誇るセイバーですら凌げまい。

防御は不可能。では回避か？ ……否、天馬の速度は尋常ではない。瞬間的にはセイバーもそれ以上の速度を出せようが、あれはただ動くだけで破壊を撒き散らす。完全な回避など望めず、例え躲したとしても着実にセイバーは傷ついていく。やがて避けきれなくなった時、今度こそ終幕の一撃が降り注ごう。

「なるほど。それが貴様の切り札か、ライダー」

セイバーが低く呟く。神代の敵を前にして尚、碧の瞳は揺るがぬ勝利を見据えている。

邂逅は二度。二度見れば、敵の戦力は把握できる。ライダー本人の力量、そして切り札たる天馬の戦闘能力。それが如何な脅威であれ、セイバーには捻じ伏せるだけの気概がある。

剣士の決意を嘲笑うかのように、自在に空を奔る馬。ただの生き物であるはずのそれは、並外れた堅牢さと相まって、城塞の如き威圧感を撃ち放つ。あれが突き進む光景は、城そのものが墜ちる悪夢。しかし驚くべきことに……あれほどの脅威ですら、ライダーにとってはただの前座でしかないのだ。

未だ、宝具の真名を口にせぬライダー。空へ、空へと高く登り詰める天馬は、際限なく天を翔け上がっていく。恐らくは、あれが頂点に達した時にこそ、その真名が紐解かれるのだろう。その後引き起こされる奇跡は、並大抵の物では有り得まい。

だが。

「是非もない。貴様が城を以て立ち塞がると言うのなら」

ごう、と風が吹く。

ごうごうと、風が流れていく。

剣を覆い、周囲にまで張り巡らされた風の結界。セイバーの剣の封印が、嵐となって紐解かれていく。

「我が聖剣は、その守りごと両断しよう……!!!」

軋むような音。それは剣が鳴る音か、それとも世界が怯える音か。何重という風を撒き散らし、徐々に徐々に、その姿が現れていく。

騎士の王。十二の会戦を戦い抜き、世界に名を轟かせた英雄。吹き荒ぶ風さえ従え



て、アーサー王の代名詞たる、聖なる剣が姿を現す……！

「あれが、セイバーの宝具……！」

息を飲む凜。極限を競う英霊の死闘に於いては、魔術師である彼女さえ部外者。英雄たちの戦いに、人間では付いてこれない。

しかし、彼女こそはセイバーの主。己が従者の死闘を、彼女だけは見届ける義務がある。例え直接加われずとも、いや、直接加われぬからこそ、彼女はその雄姿の全てを己が脳裏に焼き付ける。

だが、この光。いと尊き輝きは、例え忘れようとしても忘れられまい。ここが戦場であることさえ忘我して、凜はその光に見入っていた。

「あれは、まさか………っ！」

天馬に跨る騎兵。空高く舞う彼女にさえ、その光は届いている。

遍く騎士たちの羨望の剣。人の願いを、星の力を秘めた聖剣。その美しく尊い黄金を、英霊であるならば見間違えるはずもない。ここに来て初めて、ライダーは敵の正体を思い知っていた。

ラストファンタズム  
最強の幻想。

およそあらゆる剣の中で、頂点に位置する星の聖剣。その担い手たる英雄は、ただ一人しか存在しない。ライダーが神話を引き起こすならば、セイバーは伝説を織り成そう。思い知れ神話の住人よ、此処に在るのは名高き騎士王である……！

「——っ」  
しかし、ライダーは退けない。敵がいかに強大であろうが、彼女として退けぬ理由がある。

争いを望まぬ、優しい主。戦いが長引くほど、宝具を使えば使うほど、彼女の身は傷ついていく。彼女を守ると、助けると誓った自分は、こんな所では負けられない。今ここで自分が敗れば、一体誰があの愛しい少女を救ってやれるというのか……!?

故に、負けられない。敗北は一度で十分。己が契約と引き換えに、得られたのはキャスターの助力。立ち足る敵を倒し、魔女すら使つて主を救う。その為なら、心優しい天馬でさえも殺戮兵器として利用しよう。今この敵を倒さねば、あの少女は救えないのだから——!

「……ごめんなさい。すぐに終わらせます」

戦いを望まぬ少女と、戦いを好まぬ天馬。その双方に謝罪を告げ、彼女は意識を切り替える。

取り出されたのは、黄金の縄。魔眼でも天馬でもなく、この小さな縄こそがメドゥーサの最終宝具。あらゆる乗騎の力を引き出し、その猛威を最大限に押し上げる手綱。それに御された天馬の瞳は、ただ戦意にのみ満ち溢れていく。凄まじいまでの魔力が、最早比肩しうる物のない域まで膨れ上がる。

遠く、遠く、遙か天頂まで至つて遂に——ライダーの宝具、その真名が解き放たれた。

”ベルレフオーン 騎英の手綱”——!!!

光が流れる。

光が墜ちる。

一直線に、隕石となつた騎兵が走る。宵闇の空を単騎で染め上げ、古の幻獣が天より迫る。城が降るが如き恐怖は、幻視ではなく全くの事実。天馬が纏う重厚な護りは、そのまま古代の城塞にさえ及ぼう。他と隔絶した硬さに、超高度からの加速が加われれば、それは想像を絶する大破壊を齎す。絶大な魔力は、その余波だけで全てを薙ぎ払おう。

あれは既に人を相手取る域にはなく、軍すら滅ぼす対軍宝具。それほどの脅威、それほどの威力が炸裂すれば、この柳洞寺なぞ更地と化して余りある。如何なサーヴァントとて、あれを受けては消滅するが道理。

——だが悔るな、天馬の主よ。今宵在りしは最強の護り手。偉大なる騎士王が、空さえ討とうと立ち塞がる……!

光が渦巻く。

光が吠える。

天を仰ぎ、聖剣を構えた剣士が動く。燦然たる黄金の光は、地にあつて尚星にも届く純度を誇る。否、事実それは、星の光を集めた至高の宝具。触れる物全てを両断し、城

さえ呑み込むその光は、空想の身でありながら最強に至る。

伝説は此処に。あらゆる騎士たちの誉れ、戦場に散った全ての者たちの誇りの結晶。眩い幻想は、見る者の心すら奪い、何より尊い光を成す。刮目せよ、騎士王の聖剣が今宵蘇る――！

「――」 約束された勝利の剣――！！！！

\*\*\*

その、全てを呑み込む光の中で。

「――」 妄想心音――

昏い影。染まらぬ闇が、動いていた。

## 20. 失くしたもの

——彗星が舞う。

瞬きの間に天空へと駆け上がり、そして落ちていく白銀の光。月すら霞むほどに輝くあれは、ライダーが従える天馬に違いない。本堂を挟んだ反対側にいるため、ライダーと対峙しているセイバーの姿は見えないが、あの騎兵は戦いに終止符を打つべく宝具を持ち出したのだろう。それはすなわち、未だセイバーが無事だという証左。

天より落ちる落雷の如く、垂直に大地へと疾走する天馬。次の刹那には、敵のみならずこの寺すらも吹き飛ばしたであろう流星は——炸裂する直前、黄金の光によつて呑み込まれた。

「え——!?!」

宙に浮くキャスターが、驚きに硬直する。いや、固まっているのは彼女だけではない。拳を撃ち放った葛木も、それを防いだ俺も、弓を構えたアーチャーも、全員が魅入られたように光の激突を見上げていた。

永遠にも感じられた時間は、その実一秒にすら満たなかったのだろう。眩い黄金の刃

は、天を裂く彗星を一刀の下に消滅させ、遙か彼方の雲さえ断ち割り、そしてそのまま、宙を舞うキヤスターへと振り下ろされた。

「っ……?!?!」

葛木を救おうと慌てていたのか、先ほどまでより数段高い位置を浮いていたキヤスター。本堂より更に上に浮遊するサーヴァントの姿は、反対側にいるセイバーたちからも丸見えだったに違いない。それまで絶妙に位置を調整し、寺や林を遮蔽物としてセイバーたちから姿が見えないようにしていたキヤスターだったが、一瞬の狼狽が、宝具の射線上に身を晒すという失態に繋がった。剣の英霊が、それを見逃すはずがない。

だがまだ間に合う。光刃が直撃する寸前、キヤスターが何かを口走る。恐らくは空間転移の呪文だったのだろう、魔女の背後にある空間が大きく裂け――

「……」  
ザバーニィヤ  
 妄想心音 ——

その瞬間。有り得ぬはずの何か、キヤスターの心臓を抉り出した。

「(バ)……………っ、え、な、……………」

苦鳴と困惑。胸から鮮血を飛び散らせながら、キヤスターの動きが停止する。生命活動そのものを破壊する一撃は、呪文を唱え終える猶予すら与えず、魔女の心臓を砕け散

らせた。この予想外の奇襲は、アーチャーのものでなくセイバーのもでもない。あたかもそこにいるのが自然であるかのように、影の奥で、髑髏の面が嗤っていた。

一体いつからそこにいたのか。林の中、闇と同化したその存在。今この瞬間まで、誰にも気取られずに姿を隠し続けていたサーヴァント。全身を黒衣に包んだ異体に、不気味に浮かぶ白面。死神を思わせるその姿、あれこそは最後のサーヴァント、アサシンとして呼ばれた英霊に違いない。

闇から伸ばされたのは、血のように赤い右腕。人ではありえぬ長さを有するそれは、さながら悪魔の呪いなのか。腕の先、握り締められた拳からは、砕かれた心臓の破片が覗いていた。

「——あ」

胸に穴の開いたキヤスターがよろめく。転移魔術は失敗し、纏っていた浮遊魔術すら解けたのか、ゆつくりと魔女が倒れていく。だが、重力に引かれるより先に、その体を黄金の刃が切り裂いた。

霊核の宿る心臓を壊された上に、セイバーの宝具の直撃。如何なる英霊とて、これを受けて耐え切れる道理がない。俺たちを苦しめた魔術師キヤスターのサーヴァントは——今宵、消滅を余儀なくされた。

「ふん、此処に来て暗殺者か——！」

アーチャーが動く。弓の狙いはアサシンへ。遂に限界を迎えたのか、膝を付いた葛木を無視し、真紅の慧眼が暗殺者を見据える。

キャスターを暗殺せしめたサーヴァント。その脅威を払わんと、黄金の矢が空を奔る。が、一瞬にして姿を消したアサシンには届かず、魔力の矢は虚しく木の枝を穿つに留まった。消えた暗殺者に、弓兵が舌打ちする。

「気配遮断か。死にたくなければ動くなよ、雑種」

大弓を構えたまま、そう低く呟くアーチャー。次々と変化する局面に戸惑う俺は、それに頷くのが精一杯だった。

今の今まで姿を隠し続けていた最後のサーヴァント、アサシン。自らの気配を完全に消す、気配遮断の能力を持つサーヴァントは、その力を最大限に活かし、絶好のタイミングでキャスターを殺害した。

常ならば、結界と罠に覆われたキャスターの陣地にアサシンが踏み入るなど不可能。しかし、正門の罠はことごとくセイバーが破壊した。壁が取り払われたなら、暗殺者にとっては忍び込むことなど造作もない。こうなることを事前に想定しておくべきだった。

間近で見たアサシンの宝具、妄想心音ザバーニヤ。あれは呪いの塊だ。あの右手は物理的に心臓を抉り出すのではなく、仮初の心臓を作り出し、それを握り潰すことで対象の本物の心



臓を共鳴させ、破壊する。要するに、悪質な藁人形のようなものだろう。そうでなければ、キャスターの胸から飛び出した心臓と右手で握り潰された心臓、二つが存在した事が説明できない。

つまり、あれに近付かれれば、触れられれば即死。呪いによる攻撃は、物理障壁では防げない。あれはランサーの槍と同じく、発動させてはいけないモノだ。

「ぐ——キャス、ター」

膝を付いた葛木が低く呻く。死に体にも関わらず、無理に打撃を繰り出し続けたせいか、傍目に見ても葛木の肉体は限界を超えていた。戦う余力どころか、明日の朝日を拝む力さえ既に残ってはいまい。

アーチャーの奇策を受けてなお葛木が動き続けられたのは、キャスターの魔術のおかげだろう。だがそれもキャスターの死と共に消え、結果として葛木は完全に無力化された。これならば、もう倒す必要は——

「ち、避ける雑種……!」

ぐん、と乱暴に引き寄せられる。それがアーチャーによるものだど気付くより先、鼻先を何か鋭利な物が掠めていった。弾丸じみたそれは、直前まで俺の頭があつた場所を通り過ぎる。直線ではなく弧を描くようにして飛来した凶器は、そのまま下に流れていき、

「——ぐ」

寸分違わず。葛木の胸を貫いていた。

ごぶ、と幽鬼の口から血が零れる。闇色の短剣ダガーは、葛木の心臓を正確に射抜き、背中まで貫通していた。あれではもう、どうあつても助からない。キヤスターのマスターは、己が従者と同じく此処に倒れた。それに憤る余裕さえなく、次の短剣が襲い来る。

先ほどのセイバーと同じだ。直線状に複数の標的を捉えることで、アサシンは一石二鳥を狙ったのだ。あの速度ならば、俺の頭を貫いてもなお葛木を殺すには事足りただろう。呆気なく命が失われていく光景は、悪い夢でも見ているかのようだ。

だが、これは夢などでは断じてなく、今日の前にある現実。二人目の標的を殺害し、なおアサシンの手は止まらない。何処から放たれているのかすら分からないが、風を切りながら次弾が飛んでくる。

「小癩な——！」

煌く黄金に、金属音。新たに飛来した短剣を、大弓を振り回したアーチャーが迎撃したのだ。そのまま矢を撃ち放ったアーチャーだが、またもアサシンは闇の中へと溶けて行く。キヤスターに支配されていた空間は、今やアサシンの狩場と化していた。

「くそっ……」

悪態が漏れる。両手に握る投影武器が、棒切れほどの役にも立たない。いかに優れた

武器を持っていても、使い手にそれだけの技量がなければ何の意味もない。ポロポロになった肉体では、飛来する短剣に対して、予測も回避も迎撃さえも困難だ。加えて、アサシンは攻撃するその瞬間まで自らの気配を覆い隠している。アーチャーの驚異的な先読みが無ければ、とうに討ち取られていただろう。

目が霞む。気合いだけで持ちこたえているが、感覚器官は既に限界だ。構えた双剣の感触も虚ろ。身を酷使して投影した剣は、原典オリジナルの半分にも届いていない。未熟な衛宮士郎では、武器を完全に投影し切れず、十全にそれを振るうことさえ叶わない――。

「……………あ」

そう思った途端。泡沫のように、黄金の双剣は溶けて消えた。術者が想像イメージを維持できなかった投影品は、その綻びに耐え切れなかったのだ。それに伴って、痛みさえ臙げになつた足がぐらりと揺れる。

「軟弱者が！ 膝に力を入れろ、倒れるのは早いぞー！」

そのまま倒れそうになる直前、アーチャーの叱咤が耳を駆け抜けた。頭を振り、飛び始めた意識を無理矢理覚醒させる。……そうだ。アーチャーが戦っているというのに、マスターである俺が倒れるわけにはいかない。アサシンとの決着は、まだ付いていないのだから。

手を緩めず、執拗なまでに短剣を放ち続けるアサシン。暗殺者は気付かれずに対象を

暗殺するのが正道だろうが、存在を察知されているにも関わらず場の支配権を握り続けるとは、流石はサーヴアントと言うべきか。徹底してマスターである俺を狙い続けることで、アサシンはアーチャーの行動を縛っている。

無論アーチャーも何度も矢を撃ち返してはいるのだが、視えぬ対象を捉え、狙いを定め、矢を放つという手順を踏まなければいけないアーチャーに対して、アサシンはただ短剣を投げるだけでいい。その二手の差で、アサシンは易々と姿を晦ましてしまう。倒せもしないが倒されもしない、完全な膠着状態。

……が。ここにはまだ、もう一人サーヴアントが残っている。

「土郎、大丈夫!？」

遠坂の声。セイバーを従え、赤いコートが風に靡く。ライダーを倒したことで自由に動けるようになり、こちらの掩護に駆けつけてくれたのだろう。だが、今迂闊に走るのは危険すぎる……!

「気を付けろ、アサシンがいる!」

「な——」

瞬間。好機と見たのか、暗剣が闇を薙ぐ。しかし、一直線に遠坂を狙った凶器は、猛進したセイバーによって一刀の下に叩き落とされた。誇り高き剣士の護りは、短剣如きでは破れない。

「ぬ——」

アサシンが止まる。暗殺者は時間をかけ過ぎたのだ。セイバーが来た時点で、アサシンの優位は潰えている。二人のサーヴァントを相手取りながらマスターを狙うのは不可能に近い。

そして、どうするべきかというその迷いこそが命取り。既にセイバーは、アサシンの首を刈り取るべく全速で疾走していた。

逃げようと言うのか、白面がすつと下がっていく。が、セイバーの位置は目と鼻の先。これほど距離を詰めていれば、気配遮断など意味を為さない。牽制に短剣を放つアサシンだったが、セイバーはそれを物ともせず猛追していく。一瞬にして、二騎のサーヴァントは林の奥へと消えていった。

「アサシン……!?! 士郎、アンタは無事なの?」

「ちよつと無茶したけど、アーチャーのおかげで何とか大丈夫だ。それより、セイバーに伝えてくれ。あのアサシン、近付くとまづい宝具を持つてる」

視界が半分ぐらついているが、それを気力で捻じ伏せる。まだ、まだ倒れるわけにはいかない。

セイバーとアサシン、直接の戦闘能力では勝負にもならないだろうが、アサシンにはキャスターをも屠つてみせた必殺の宝具がある。その存在を知らないセイバーにとつ

て、あれは危険すぎる。

手短に『妄想心音』<sup>ザバーニヤ</sup>の存在を伝えると、遠坂の表情が深刻さを増した。近付くと無条件で相手を呪殺する宝具など、厄介にも程がある。ランサーの『刺し穿つ死棘の槍』<sup>イボク</sup>と同じで、単純な防御能力では防ぎ切れないのだ。

「分かったわ。セイバー、聞こえる？ ……セイバー？ おかしいわね。セイバーとのパスが乱れてる……ひよつとすると、キャスターが何か仕掛けてたのかも」

俺にも状況を把握できるようにするためか、口に出しながら念話を繋ごうとする遠坂。が、普段は問題なく伝わるはずのそれが、今に限って上手くいかない。

セイバーに倒されたとはいえ、ここはキャスターの陣地。仕掛けの一つや二つはあってもおかしくない。倒されてもなお俺たちを妨げる魔女の手に、遠坂が焦りと怒りを同時に見せる。

「仕方ない……わたしがセイバーの後を追うわ。士郎はここでアーチャーと待機してて」

「でも気を付けろよ、遠坂。あのアサシン、しつこくマスターを狙ってくる。下手をする  
と、セイバーの——」

「——足手まといになる？ ふん、そんなヘマはやらないわよ。それより、わたしがここに  
戻るまで士郎は動かないこと。いいわね？」

有無を言わず詰め寄る遠坂に押され、たじろぎながら頷く。俺が動ける状態でないというのは、遠坂にはお見通しだったようだ。

石畳を蹴り、寶石を握り締めた遠坂が林の奥へと消える。その姿を見送ると同時、限界を迎えた体が、遂に力を失って地面に崩れ落ちた。

半人前に過ぎない魔術師の俺が、英霊の武器を投影する。自分の領分を超え、無茶をしでかした結果がこれだ。格上の神秘に挑もうとした代償は、ハンマーのように俺の全身を打ち据えていた。

「——身の程知らずめが」

俺を見下ろしているのか、アーチャーの声が上から降り注ぐ。氷のような冷たさには、等分に不快感と怒りが混じっていた。

「貴様の如き雑種が、私の剣を真似ようだと？ ——無礼者。薄汚い贗作などが真作に届くものか」

倒れ込んでいる今、アーチャーの表情を窺い知ることはできない。しかし、その不機嫌さだけは、声を聞かずとも十分に理解できた。

自らが愛用する剣を、目の前で魔術師見習いに模倣されたのだ。傲慢さの塊とも言えるこの男にとって、そんな侮辱が見過ごせるはずもない。ともすれば首を刎ねられるのではないかと思うほど、アーチャーは怒気を漲らせていた。

「——だが」

ざり、と石を踏む音。向きを変えたのか、アーチャーの声が遠ざかる。それと同時に、何の気紛れか、男が放つ怒りの気配が鎮まっていた。

「僭越も甚だしいが、貴様は確かに我の命を救った。その功に免じ、此度の不敬は不問とする」

次はないぞ、と言外に滲ませつつ、アーチャーは尊大にそう言い切った。この英霊らしからぬ寛容さに、驚きの感情が生まれる。愛剣の複製という無礼はアーチャーにとつて憤怒の対象だが、結果的に助けられたという事実がその怒りを上回ったらしい。

……だが。白状すれば、次同じことをしてまだ生きていられる自信はない。今度こそアーチャーの逆鱗に触れるだろうという懸念もあるが、それ以上に、投影魔術は俺の身には過ぎたモノだ。ただ一度、本物の半分にも届かない性能を再現した<sup>スベツク</sup>だけで、体が悲鳴を上げている。何度も同じことを繰り返せば、確実に俺は廃人となるだろう。

衛宮士郎の本質は、投影。それが本当だというのなら、真に迫る偽物を生み出すことができるだろうに——。

「生きているならば立て、雑種。幕切れにはまだ早かろう」

飛びそうだった意識を、黄金の声が引き戻す。ああ、確かに。まだセイバーたちは戦っている。こんなところで寝ているわけにはいかない。



痛みを無視し、腕で上体を起こすと、ふらつきながらもそのまま立ち上がる。アーチャーは既に興味を失ったのか、立ち上がった俺には目をくれることもなく、セイバーたちが消えて行つた林の奥を見つめていた。

「しかし、腑に落ちぬな。あの暗殺者<sup>アサシン</sup>、何故退かなかつた——？」

大弓を携えたまま、アーチャーが低く呟く。確かにそれは、疑問と言えば疑問だつた。アサシンの役割は暗殺。サーヴァントやマスターと正面切つて戦うクラスではない。闇に潜み、裏をかき、隙を突いて対象を暗殺せしめるのが本来の役目。その点で言えば、先ほどキャスターを仕留めたアサシンは、まさにその名に相応しい動きぶりだつた。

だが、その後はどうか。既に居場所を露見したというのに、それでも執拗に攻撃を仕掛けてくる不可解さ。あれほどの腕前なら、アーチャーには勝てないことも、時間が経てばセイバーが駆けつけることもとうに知っていたはず。にも関わらず、セイバーが間に迫る瞬間まで、アサシンはこの場に留まり続けた。本来の役割からしてみれば、それは明らかな下策。

英霊となつたほどの暗殺者が、意味のない愚行に及ぶはずがない。だとすれば、一見して理解できぬその行動さえも、アサシンにとつては計略の内。偶然ではなく、この状況を作り出すことこそが、そもそもの狙いだとすれば——？

「——ふん、そうか。端からそういう筋書きか。そうでなければ釣り合いが取れん。偶

然と捉えるには、この展開は都合が良すぎる」

そう言うのと、黄金の英霊が忌々しげに舌打ちする。今の口ぶりからするに、この男は俺が気付いた事実だけではなく、何か深いものに思い当たったようだが……。

「とはいえ、所詮は遊戯。盤上の動きなど私の知ったことではないが——虫如きに踊らされるのは腹立たしい」

アサシンが消えた林の奥。セイバーと遠坂が後を追い、今は誰もおらぬその方向へと、真紅の瞳が向けられる。不快感も露に、誰も居ないはずの空間を、アーチャーが冷たく睨み据えていた。まるでその先に潜む何か、気に食わぬとでも言うように。

遠く、刃がぶつかると金属音が聞こえる。それは未だ、セイバーとアサシンが健在である証。今はまだ良い。しかし、アサシンがどのような手を使うか判らぬ以上、次の瞬間もセイバーが無事であるとは限らない。暗殺者が誘う罠は、如何なる敵であれ屠り去る必殺の牙に相違ないのだから。

「追うぞ雑種。セイバーは今ここで失うには惜しい女だ」

背を向けたまま、アーチャーが一言そう告げる。返す言葉などなく、俺の結論は既に決まっていた。

\*\*\*

暗剣が奔る。

人中、咽喉、水月。牽制などなく、悉くが急所狙いの短剣。闇に紛れた投擲、それも影すら見えぬ黒塗りとあつては、知覚さえも出来るかどうか。狙われた者は、無残に屍を晒すが結末。

「チ——」

しかし、死の遣いを放った髑髏は舌打ち。同時に放った剣は三条。針の穴を射抜くほどの精度で放たれたそれは、アサシンの名に相応しくどれもが必殺足りえる鋭さを誇っていたが……この相手には、石礫ほどの効果もなかった。

「ハ——」

縦に一閃。セイバーが剣を振るうだけで、短剣はあらゆる方向に弾かれる。剣士の持つ驚異的な直感は、見えぬはずの攻撃さえも容易く防ぎ切っていた。

アサシンが投げ、セイバーが防ぐ。既に四度繰り返された攻撃は、一度たりともセイバーには直撃せず、アサシンの手札を意味なく浪費するだけに終わっていた。それに意味があつたとすれば、アサシンの余命を幾許か延ばしたという点のみ。近付かれては、暗殺者には勝ち目などないのだから。

魔力を噴射し、木々を薙ぎ倒して走るセイバー。アサシンとの距離は縮まったが、し

かし必殺の間合いにまでは至らない。人体の構造上、後退りながら疾走するという行ためは不可能であるはずなのに、それを易々と成し遂げるアサシンの奇怪さ故だった。

元より、アサシンとは正面戦闘を得意とするクラスではない。知名度で劣り、能力で劣り、英霊としての格でも劣る彼らは、あらゆる策を練り、闇に紛れて”暗殺”に及ぶ他戦いようがない。アサシンが、サーヴァント中最優と謳われるセイバーと一騎打ちをするなぞ、下策中の下策。今の展開は、アサシンにとつては不利と言うほかない。

だが。それを理解していながら、セイバーに油断はない。確かに能力では圧倒しているようが、それが勝利に繋がるとは限らない。彼女が戦場の王者ならば、アサシンこそは人殺しの英雄。前回の聖杯戦争にて、数十にも及ぶ分身を生み出したアサシンを覚えていた彼女は、非正規戦闘における暗殺者の強さを十分に理解していた。もしも以前のマスター、衛宮切嗣がアサシンを使役していたならば、聖杯戦争は数日と経たずして決着を見ただろう。

——故に、ここで倒す。

ぎり、と握り締めた剣に力が籠る。間合いは遠く、アサシンを斬り伏せるには今数歩分の距離が足らぬ。それを承知しているが故に、アサシンは必死でセイバーから遠ざかり——そしてそれは、セイバーの望むところでもあった。

約束された勝利の剣。ライダーを乗騎ごと葬り去った一刀は、数ある聖剣の中でも頂

点に位置し、攻性宝具としては破格の性能を誇る。威力、射程、範囲のいずれも絶大なそれは、軍勢を相手取る域にすら留まらず、要塞攻略戦さえも可能とする対城宝具に分類される。その一撃を以てすれば、アサシン風情では逃げることもさえない。

しかし、圧倒的な性能を誇る反面、セイバーの宝具は燃費が悪い。莫大な魔力消費を伴う宝具を、既にライダーへと使用している以上、無暗と乱用すれば現界にまで支障を来そう。アサシンはそう判断しており、客観的に見てもそれは正しい考察だったが……この場に至っては、それは致命的な誤りだった。確かに、マスターが並の魔術師であれば、対城宝具の真名解放など一晩に一度できれば上々と言えただろう。

だが……アサシンにとって不幸なことに、此度のセイバーのマスター、遠坂凜という魔術師は、並という域を遥かに上回っていた。彼女のバックアップがある限り、セイバーは切り札である約束された勝利の剣を連射することさえ可能だ。聖杯の補助がなくともサーヴァントを現界せしめることが可能なほどに、凜の魔力保有量は並外れている。

「――」

宝具を解放すれば勝てる。セイバーの戦術的思考は、そう結論を出していたが……一方で、彼女の鋭い直感は、それは悪手であると警鐘を鳴らしていた。

アサシンの能力は把握した。宝具こそ未だ不明だが、この距離なら発動する隙すら与

えまい。この場に陣取っていたライダーとキャスターは、共に消滅を確認した。恐れるものと言え、まだ見ぬアサシンのマスターのみ。……けれど、違う。それ以外に、まだ何かある。あのアサシンは、何か奥の手を持っている——。

「ぬ——」

唐突に、セイバーの視界が開ける。林を走り抜けたのか、今彼女がいる場所は、柳洞寺の裏手に広がる池だった。その畔に立つ髑髏の面を認め、セイバーもまた足を止める。

「どうしたアサシン。手品の種はそれで終わりか」

油断なく剣を構え、そう訊ねるセイバー。常の彼女ならば、挑発など用いずとも、一刀の下に追い詰めた敵を斬り捨てただろう。だが今は、理性と直感、その双方がこの現状には裏があると告げていた。

アサシンの背後には池。それなりの深さがあるそこは、霊体化をせぬ限りは渡れまい。だが今霊体に移ろうとすれば、立ちどころに討ち取られる。セイバーに攻撃が利かず、逃げ場もなく、気配遮断さえ通用せぬ距離とあっては、アサシンに勝ち目はない。暗殺者の命は風前の灯であるはずなのに——それでもセイバーは、踏み込むことができなかった。

「……………」

対するアサシンは、無言。一拍の間を置き、射出の瞬間さえ見えぬ投剣が、返礼として放たれた。

「悪足掻きを……！」

火花が散る。聖剣の一薙ぎが、短剣を防ぐどころか碎け散らす。いかに見えぬ投擲といえど、開けた空間ならば脅威にもならない。アーサー王に、そのような小細工は通じない。

これと同種の攻撃を、セイバーは既に経験している。前回の聖杯戦争に於いて、黄金のアーチャーが見せた投擲攻撃。一つ一つが宝具に匹敵する神秘……否、宝具そのものである武具を、次々に射出するその異様。目にも留まらぬ速度で、概念を孕んだ弾丸を機関銃の如く撒き散らす脅威に比べれば、アサシンの投剣など万分の一以下の効力であろう。

幾度繰り返そうと、アサシンの攻撃は無意味。それは当の本人も理解していたのか、僅かに稼いだ一瞬の間で、アサシンは撤退行動に移った。背面に目が付いているかのような動きで、池の上を滑っていく暗殺者。如何様にして水上を馳せるのかは不明だが、確かにそれは道理に適った動きだった。勝てぬ相手ならば、撤退するのが戦術の基本。

——もつとも。セイバーに、遠距離攻撃の手段がなければだが。

ごう、と聖剣に魔力が注がれる。遮る物のない水上の敵など、この剣の前では的にし

かならない。神造宝具の威光を以てすれば、池ごと蒸発させて余りある。アサシンが池を渡りきり、山中へ逃げ果せたとしても、対城宝具ならば山ごと切り裂くことすら可能だ。宝具で対抗しようにも、暗殺者風情の神秘では聖剣には抗えない。

それでも、アサシンは侮れぬ。確実にここで打倒しきるためには、もう数歩踏み込まねばなるまい。池の中に入ることになるが、数多の精霊の加護を受けたセイバーならば、アサシンと同様水の上を滑るなど自在。故に、セイバーは池の上に踏み入り――

「――フ。一手誤ったな、セイバー」

そこが蜘蛛の巣と気付いた時には、何もかもが遅かった。

「――あ」

一体、何時から変わっていたのか。池を埋め尽くすのは水ではなく、海より尚深い影”だった。

泥のように。毒のように。水のように。闇の化身とも言うべき魔性が、セイバーの身体を蝕んでいく。ソレに自ら飛び込んだ時点で、彼女はもう囚われていたのだ。

「警戒するべきだったのは私ではなく、この池の方だったのだ。……惜しいな。端から宝具を使っていたら、こうはならなかったものを」

意識が薄れる。池の向こう、髑髏の面を見せて笑う敵。無防備なアサシンに対して、セイバーは何もできない。自らを侵そうとする影に抵抗するため、彼女は全ての力を振



り絞っていた。

英雄としての強さ。英霊としての神秘。そんなものと関係なく、この影はサーヴァントを侵食する。否、サーヴァントだけではない。この影は欲望のままに、あらゆるモノを求め、屠り、喰らう悪夢。一度出会った時点で、セイバーは気付くべきだったのだ——こんなモノが在る時点で、聖杯戦争は破綻していたのだと。

一瞬ごとに、セイバーの存在感が薄れていく。数多の英霊たちの中でも最上級、世界に名だたる騎士王が、抵抗すらできずに吞まれていく。一流の魔術師の下、生前に近い力を得たセイバーが、貯蔵魔力の総てを注ぎ込んでなお数十秒さえ耐えられない。この敵は、明らかに異常過ぎた。

苦しみ悶えるセイバー。この瞬間、戦局は完全に逆転していた。遥か対岸にて、アサシンが面を鳴らして薄く笑う。ここに来て暗殺者は、初めて人間らしい感情を露にしていた。

「暗殺者とは、元より戦う者ではない。闇に潜み、闇に誘い、闇へと敵を惹きこむ者。故に私は、おまえと戦うのではなく、ただここへ導けば良かった。この真夜に踏み込んだ時点で、おまえの敗北は決まっていたのだ。」

——さらばだ、セイバー。悪魔に吞まれて果てるがいい」

アサシンの姿が掻き消える。霊体化したのだろうが、今はそちらに構っている余裕は

ない。このままでは消える。その前に、この両足を斬り落としてでも、今すぐ脱出しな  
ければ――!

「セイバー、大丈夫!？」

……が。この時ばかりは、天運が彼女に味方しなかった。

林から現れたのは、セイバーの主たる遠坂凜。一目で場の異常を悟り、従者の窮地ま  
でもを把握したのは、彼女が持つ聡明なる頭脳故だろう。思考は一秒、刹那の間に下さ  
れた判断に従い、凜は躊躇わず切り札を切った。

「――令呪を以て命じるわ。セイバー、今すぐその場を………ッ!？」

右手を掲げ、二度目の令呪を使おうとした凜。だがその瞬間、己が悪手に気付いた彼  
女は、血相を変えて硬直した。

眼前に広がる影の特性。魔力を狙うというその性質を、凜は他ならぬセイバーから聞  
いていたはずではなかったか。セイバーの窮地に気を取られ、僅かに鈍った判断力。凜  
が失態に気付く、そのコマ数秒の間で、知性を持たぬ影たちは、おぞましく動き出  
ていた。

池の中から、泥の触手が瞬時に伸びる。サーヴァントすら捕える異形の蔓、人が触れ  
ればその途端に正気を失おう。それ自体が大魔術であり、膨大な魔力を秘めた令呪の発  
動は、この状況では致命的な誤りだった。

「——」  
時間が凍る。

飛び退こうとする凜。だがそれよりも、明らかに影の方が速い。毒沼に囚われ、薄れていく意識の中で、セイバーは主が呑み込まれる未来を確かに見ていた。

——許せない。

この身は何のために召喚に応じたのか。勝利を齎すどころか、主の身さえ満足に守れないのか。そんな愚行を、この身は何度繰り返すつもりか。

ブリテンでは、民も友も臣下も失い、己が子さえもをこの手に掛けて。十年前は、仮とはいえ主であったアイリスフィールを守れず、かつての臣下であったランスロットの命を奪い。その果てに、真の主である衛宮切嗣には、最後の最後で裏切られた。

何一つ結果を出せなかった。自らの過ちで、裏切り、裏切られ、残った物は涙だけ。異なる時代、異なる世界に召喚されても、辿る末路は同じなのか。その結末を変えるべく、自分は聖杯を求めたのではないか。

「……………ぐ」

彼女を捕えた影が蠢く。昏い沼へ誘おうとするそれは、死者の怨念にも似ている。かつて自分が切り捨てたモノ、それが形となったのか。ならば、この身が逃げ出せぬのも道理だろう。時間を超え、空間を渡っても、罪という呪いは消えないのだから。

だが、だからこそ許せない。そんな結末は認めない。業を担うべきは自分一人。あの可憐な主を、この影に吞ませるわけにはいかない——！

「は——あ、あああああああ——っ！」

残余魔力を顧みず、全身から魔力を放出する。無駄な抵抗であろうとも、一秒、ほんの一秒稼げればそれで良い。

ぶちぶちと、足から聞こえる嫌な音。既に染まりきったのか、感触さえ虚ろな足が、身体から千切れていく。構わない、そんなものはどうでも良い。剣を握る腕さえ残るのならば、この足などくれてやろう。

残された、全ての魔力を宝具に込める。輝ける刀身が見え隠れするが、風の結界が解ける暇さえ遅すぎる。轟と唸る風は、さながら竜の咆哮の如く。ならばその一閃は、怒れる竜の息吹そのもの。

「——」約束エされたク」

振り上げられる聖剣。侵食されたその身は、既に視界さえ危うく、動くことすらままならない。されどもその翠の瞳は——己がためすべき道を、毅然と見据えていた。

「勝利カの剣リ——!!!」

騎士王の振るう最強の聖剣。その真名解放の前に、影如きではどうして抗えようか。本来の威力からはほど遠くとも、込められた魔力が足りずとも、それでも黄金は色褪せ

ない。放たれた光刃は、凜へと襲い掛かる無数の影、その悉くを消滅させた。

「——あ」

しかし、奇跡には代償が伴うもの。この場で凜を救う奇跡を引き起こすためには——自らの身を、影へと差し出すほかなかった。

力なく落ちた右手から、黄金の聖剣が零れ落ちる。ぼこりと音を立てたそれは、光の残滓を纏わせながら、影の中へと沈んで行つた。消えた愛剣を見て、己が末路を悟つた剣士は、残された力で僅かに唇を噛む。

今のが、最後の力だった。影に囚われたといえど、圧倒的な魔力量を誇るセイバーならば、それでも離脱できただろう。だがそのための魔力は、たつた今使い果たしてしまつた。ライダーとの戦闘、影に奪われた魔力、二度に亘る神造宝具の真名解放。如何に騎士王であろうとも、既に限界を超えていた。

ずぶり、と体が埋もれていく。足ばかりか、既に胸までを覆い尽くした黒い影。不吉な気配は、彼女の身体ばかりか、その内面までもを汚染し始めている。

……ならばもう。力の残らぬ剣の騎士に、逃れる術などありはしなかった。

「——申し訳ありません、凜」

そう静かに言い残すと。最後に、何か叫んでいる凜の姿を一目見て……セイバーの意識は、そこで途絶えた。

\*\*\*

そこに辿り着いた時。一目見て、もう終わってしまったのだと理解した。

「……………っ」

境内の裏手に広がる池。その畔で、こちらに背を向けている遠坂。この場にいる人影は彼女一人で……アサシンも、そしてセイバーの姿も、影も形も見当たらなかった。

気味が悪くなるような静けさ。濃密で甘く、例えようもなく不快な臭い。そして、生物無生物を問わず、周囲の全てから奪い去られた魔力。まるで、土地そのものが死に絶えてしまったかのように、何一つ動く物はない。

この異常さ。本能的な恐怖を感じさせるそれを、この空間に現れていたであろう死神を、俺は確かに知っている。そして、あれに捕らわれた者がどうなるのかも。

「……遠坂。セイバーは」

と。恐ろしい想像を拭おうと、遠坂に話しかけようとしたところで……気付いた。気付いてしまった。

握り締められ、細かく震えるその右手。マスターである証、サーヴァントとの契約そのものを示す令呪。遠坂の右手に輝いていたはずのそれが、死んだように薄れている。

あれだけ存在感を放っていた令呪が、今や見る影もなく、その力を失っていた。

令呪が失われる条件は限られている。三画全ての令呪を使い切るか、他人へ譲渡、或いは剥奪されるか、令呪を宿したマスターが死亡するか。それとも……契約を交わした対象である、サーヴァントが失われたか。

「――」

答えは、一つしかない。剣士のサーヴァント。小柄な少女でありながら、並みいる英雄たちに一歩も劣らなかつた英霊。誰よりも誇り高かつた彼女は――ここで、あの影に敗れたのだ。

「……………ふざけんじゃないわよ」

軋むような音。背を震わせ、齒を噛み締めながら、遠坂が怒りを露にする。

それはセイバーを救えなかつた自分自身への怒りか。セイバーを打倒した、未知なる敵への憤りか。それとも、理不尽な現状への悔しさか。烈火の如く燃え盛る怒気は、今までに見た事もないほど激しいものだった。

ぼたり、と僅かに水の音。見れば、砕けるのではないかというほど握られた遠坂の拳から、赤い液体が滴っていた。余りに力を込めすぎて、爪が皮膚を食い破っているのだろう。

「戦いの結果ならいい。ちゃんとした敵と戦って、全力で向き合って、その結果負けたの

なら、まだしようがないって言える。諦めもつく」

でもね、と続ける遠坂。その、今にも壊れそうな細かい声だけで……彼女が今どんな顔をしているのか、ありありと分かってしまった。

「おい、遠坂」

「あんなヤツに……サーヴアントでもない、あんなふざけたヤツにセイバーがやられるなんて、そんな話があつていいわけないでしょう!？」

あの子、最後に何て言つたと思う? 『申し訳ありません』つて……わたしのせいで捕まつたのに、わたしが謝らなきゃいけないのに、セイバーは……!」

俺の言葉を遮り、絞り出すように遠坂が言葉を漏らす。支離滅裂で、途切れ途切れの内容ではあつたが……それでも、おおよその状況は分かつてしまった。

アサシンと戦っていたセイバー。いくらアサシンが強力な宝具を持つているとはいえ、あのバーサーカーとさえ真つ向からやり合えるセイバーが、早々後れを取るはずがない。

あの黒い影も同じだ。魔術師でもサーヴアントでもない、全く未知の脅威だが、セイバーは一度あの怪物と相対している。一度見た敵に、こんなに短い時間で倒されるとは考えにくい。

であれば、結論は一つ。アサシンと黒い影は、最初から連携していたのだ。キャス



ターを倒し、派手に動いてからセイバーを誘い込み、あの影に飲み込ませる。サーヴァントさえ飲み込むような怪物を、アサシンが、或いはそのマスターがどうやって使役しているのかは分からないが……アサシンを追った時点で、俺たちは敵の術中に陥っていたのだ。

「くそっ……」

堪えきれない感情に、近くにあった木を殴りつける。先ほどまでの、今にも倒れそうな気持ち悪さなど、この現実の前には吹き飛んでしまっていた。

こんなに……こんなにもあっさりと、一人の少女がいなくなってしまう。セイバーは確かにサーヴァントだった……それ以上に、この数日間を一緒に過ごした、大切な仲間でもあったのだ。これが命の奪い合いだということも、こんな結末がありえるということも、最初から分かっていたはずなのに——この現状に、どうしようもなく吐き気がした。

ライダーを倒した。キャスターも倒した。キャスターのマスターだった、葛木宗一郎も死んだ。だが、その勝利の代償に……俺たちは、取り戻せない物を失くしたのだ。

俺の頼みで、剣技を教えてくれたセイバー。

アーチャーといがみ合いながら、将棋を指していたセイバー。

嬉しそうに、次々と料理を口にしていたセイバー。

彼女の垣間見せた感情が、次々と頭を過つていく。けれど、それがどんなにかけがえないものだったとしても。あの美しい少女は……もういないのだ。

「……アーチャー」

そこで。微かに響く足音に、横に立つ黄金の青年を仰ぎ見る。この男は、セイバーをやけに気に入っていた。いくら傲岸不遜な男でも、この現状に一言ぐらいはあつて然るべきだろう。

だが。

「――」

無表情。冷笑。或いは怒り。

常に一歩引いた態度で、どこか見下ろすような、観察者としての立場を崩さずにいたこのサーヴァントが……そのどれでもなく、今までに初めて見せる感情を浮かべて立ち尽くしていた。

あの始まるの夜に、教会で見せた顔にも似通っているが、違う。疑問、困惑、そして戸惑い。既視感デジャヴのように――今日の前の光景に見覚えがあるが、それをどこで見たのか思い出せない。そういう、どこか腑に落ちぬという感情が浮かんでいた。

王者の風格を常に崩さないアーチャー。いつも漂わせている、周囲を支配するほどの威圧感が、今この時だけ僅かに揺らいでいる。ただ死の空間が広がるこの場所に、アー

チャーは一体何を感じたのか。

「アーチャー？」

「……ん？　なんだ。我に用か雑種」

もう一度声を掛けると、そこで初めて俺に気付いたようにアーチャーが反応した。いや、事実、今の今まで俺はこの男の視界には入っていないなかつたのだろう。

常に万象を俯瞰しているような男が、声をかけられるまで気付かない。それだけのことに過ぎないが、それだけの事だからこそ、逆に気になる。他の人間ならともかく、この英雄が放心するなど、俄かには考えにくい事態だ。

「ぼーっとしてたけど、何かあったのか？　アンタらしくもない」

「なに、少しばかり違和感がな。この澱んだ空気、邪念に塗れた残り香には覚えがあるが……それが何であるのかは思い出せぬ。恐らくは、失われた記憶のどこぞに混じつていたのだろうよ」

珍しく、歯切れの悪い口調でそう話すアーチャー。だが、その言葉には聞き流せない内容があつた。

アーチャーは、今まで直接あの影と相對したことはない。にも関わらず、影の爪痕を見ただけで、アーチャーは覚えがあると云っている。あんな異形の存在が、この世に二つとあるとは思えないし……アーチャーは生前、あの影と関わりがあつたのだろうか。

だとすれば、あの影はイレギュラーではなく、アーチャーがかつて生きていた時代にも現れていたことになる。使役された怪物の話は枚挙に暇がないし、あの黒い影も同様に、何者かに召喚され、操られた存在なのだろうか。せめてアーチャーの記憶が戻れば、その正体に迫ることもできるだろうに――。

「所詮は些末事だ。気にするほどのことでもあるまい」

自分の記憶に繋がることだというのに、まるで気にした風もなく、アーチャーは周囲を一瞥した。一通り辺りに視線を投げかけたところで、特に警戒すべき物はないと断じたのか、アーチャーが装備していた双剣が、霞のように消え去っていく。

「ふん……この有り様では、セイバーは消えたのだろうか？ ならばもう用はない。戻るぞ雑種」

興味を惹くものは、もう何一つないと言うように。心底つまらなそうに、冷たくそう吐き捨てると、アーチャーはくるりと踵を返した。未知の敵への恐怖も、仲間を失ったという悲哀も、その相貌には欠片も浮かんでいない。

……否。事実、この男は何の痛痒も感じていないのだろう。アーチャーは本気で、この戦闘の結末に関心を持ってはいなかった。冷酷だとか非情だとか、そういう次元の話ではない。どこか人間ではないかのような、恐ろしくなるほどの無感情さだった。

「…………ちよつと待ちなさい、よ」

が。去ろうとしたその背中を、呼び止める声がある。

ようやく池に背を向け、こちらを振り向いた遠坂。涙の痕もそのままに、射抜くような激情が、視線と共に叩き付けられる。それに気付いたのか、アーチャーは動き出した足を止めた。

面倒だとしても言いたげに、アーチャーがゆっくりと向き直る。冷たい紅蓮の双眸と、怒りを宿した碧玉が、火花を散らして衝突した。

感情を抑えようと、遠坂は大きく肩で息をする。その気持ちは俺にだって分かる。肩を並べて戦った仲間の死に対し、この男はどうでもいいという態度を取ったのだ。到底考えられない異質さに気圧されていなければ、先に口を開いていたのは俺の方だっただろう。

「用はないって、どういうこと？ あんなわけのわかんないヤツに、セイバーはやられたのよ!」 アンタ、それがどうでもいいってどういうの!」

「当然であろう。斯様な小事、一々気にしていられるものか」

何を言っているのだ？ とばかりに、アーチャーが首を傾げる。その反応に、憤るより先に背筋が凍った。

——この英霊の見ているモノは、俺<sup>ニンゲン</sup>たちとは違う。

今までも、アーチャーの視野の広さ、観察眼の鋭さには何度か驚かされてきた。人よ

り一段高い、王としての視点を持つているからこそ、この男はあれだけの情報を見て取ることができなのだ。だが、その感覚は正解ではなかったのだ。

それが無関係な他人であろうと、同じ釜の飯を食った仲間であろうと、人の死という重大な出来事が、アーチャーにとつては毛ほどの価値さえ持っていない。いや、そもそも、仲間という概念すらこの男の裡には存在しない。持っている価値観が、根底から違い過ぎる。

死者への郷愁も、弔意すらも持たない。哀悼という考えさえないに違いない。その対象が死んでしまった時点で、それが如何に気に入っていた者だったとしても、この男の興味はなくなる。遥かな高みから、等しく総てを見下ろす視点など、最早人の領域の物ではない。どちらかといえば、それは神に近いモノだ。

「アンタ……それ、本気で言ってるワケ？ 確かに、サーヴァントは敵同士かもしれないけど……それでも、セイバーは仲間だったのよ？ アンタ、あの子のこと気に入ってたじゃない！」

「ああ、確かにセイバーは得難い宝であった。その価値は、他ならぬ我が認めてやろう。この星を巡ったところで、あれほどの女はそうはおるまい。

が……いかに価値ある宝であれ、壊れてしまえばそれまでのこと。失った物は戻らぬし、死んだ者は蘇らぬ。変わらぬ過去に思い煩うなど、これ以上の無益さはあるまい」

「——つ」

その言葉に。遠坂だけでなく、俺までもが言葉を失った。

確かに……確かに、アーチャーの言うことはある意味では正しい。時間は不可逆であり、どうあつても取り戻せないものは、確かに存在するのだ。

十年前の、五百余名のように。

五年前の、衛宮切嗣のように。

五分前の、セイバーのように。

だけど、それが。その死が、死者への想いが無意味だとするのなら。切嗣が死ぬ間際、正義の味方になると誓った俺は、一体何だったのだろうか。ここまで走り続けた道そのものが、無価値だったとしても言うのだろうか。

……それは、違うだろう。失くしたものが、そこで終わってしまったとしても。その後続くものに、意味がないなんてことはない。失くしたもののへの想いがあるからこそ、俺はここまでやって来れたのだ。アーチャーの言葉を全て認めてしまつては、俺が正しいと信じて歩いてきた道が、嘘だということになつてしまふ。

「アーチャー。アンタの言ってる事は、確かに正しいのかもしれない。けど、亡くなった人を悼むことまでが、無益だとは思えない」

「たわけ」

だが。超然たる傲慢さで、アーチャーは俺の言葉を一蹴した。

理解の及ばぬ子供を見るような、そんな見下した目線を、アーチャーは俺と遠坂に交互に向ける。真紅の瞳には、やはり何の感情も浮かんではいなかった。

「真に人の死に報いようと思うならば、過去ではなく未来に目を向けよ。いくら惜しんだところで過去は変わらぬ。ならば、変えられるものこそを見るがいい」

変えられる、もの……。

確かに、過去は変えられない。けれど、俺たちが動けば、未来は変わる可能性がある。……ここどうじうじうして留まっているよりも、前に進めと、アーチャーはそう発破をかけたかったのだろうか。

俺が歩いてきた道は、どうなのだろう。確かに始まりは、取り返せない過去からだつた。全てを失った大災害、有り得ないはずの生存者——その俺を救ってくれた、切嗣が本当に嬉しそうだったから。だから、その笑顔に憧れた。

あの大災害のような悲劇はもう繰り返したくないと、確かにそういう思いもあった。だけど、思い返せば俺は、ずっと過去を振り返っていたままで……これからの未来について、目を向けていたと言えるだろうか。正義の味方という目標すら、未だあやふやなままだというのに。過去ではなく未来をこそ、考えるべきではなかったろうか。

アーチャーの言葉は鋭く、激怒していた遠坂さえ、黙らせるほどの重みがあった。俺



と同様、暫く考え込んでいた遠坂だったが……やがて結論が出たのか、再び静かに口を開いた。

「……そうね。ムカつくけど、アンタの言う事にも一理あるわ、アーチャー。ここで悲しんでたつて、セイバーは戻つてこないもの。」

なら——わたしは、あの影を倒す方法を考える。わたしの大事なサーヴァントを奪つたヤツには、一発くれてやらなきや気が済まないわよ」

「それで良い。ここで立ち止まつているならば、所詮はそれだけの器に過ぎん。小娘、貴様にはそれなりに見るべき点があるようだな」

だが、と続けるアーチャー。

「貴様は既にマスターではない。サーヴァントを持たぬ、ただの魔術師に過ぎん。願望器に託す願いもなかるう。——それでも、貴様は戦うと言うのか？」

「当然よ。わたしは最初から、勝つために戦つてるんだから。セイバーがいなくなつても、やることは変わらないわ」

いずれは敵対するかもしれないサーヴァントの前で、傲然と宣言する遠坂。一瞬前までの曇りは、綺麗に取り払われていた。

……ああ、間違いない。遠坂凜は、全ての敵を打ち倒すだろう。そう思わせるほどの自信が、今の彼女には宿っている。

いや、そうではない。元々あったものが、戻ってきただけのことだ。自分が憧れた少女は、最初からこういう人間だった。この輝きがあるからこそ、彼女は遠坂凜たりえるのだろう。マスターでなくなったとしても、彼女が進む道には微塵の迷いもない。

「だそうだ。それで良いか、小僧？」

「ああ。これからも遠坂と一緒に戦ってくれるのなら、心強い」

遠坂と視線を合わせ、頷き合う。あの影を許せないという一点で、遠坂と俺は同じだった。

冷静さを取り戻した俺たち二人を、アーチャーは変わらず冷ややかな瞳で見つめている。今は訊かれたから答えを返しただけで、やはりこの男は、観察者としての立場を崩すことはないのだろう。

「さて——夜明けも近い。戻るぞ、雑種ども。盤面が大きく動いた以上、他の有象無象も動き出す頃合いだ」

この一晩で、聖杯戦争の勢力図は大きく塗り替えられた。

三騎のサーヴァントが集い、町中から魔力を吸い上げ、目下最大戦力であったキャスター陣営は、ランサーを残して壊滅。

そして、セイバーとアーチャーという二騎のサーヴァントを擁していた俺たちも、戦力の要であったセイバーを失った。

バーサーカーの消息は不明だが、最後のサーヴァント、アサシンの姿は確認できた。しかし、この陣営は、あの謎の影と明らかな協力関係にある。アサシン自体は弱いサーヴァントだが、あの影の存在がある以上決して油断は出来ない。

セイバー、キャスター、ライダーが倒れ、残るサーヴァントは四人。

過去の聖杯戦争に於いて最強を誇ったが、記憶と宝具を失くしたアーチャー。

必中必殺という凄まじい効力を持つ宝具に加え、多彩な能力を持つランサー。

他と隔絶した絶大な力を持ち、間違いなく最強の英霊と言えるバーサーカー。

黒い影と協力関係にあり、気配遮断と即死宝具を併せ持つ恐るべきアサシン。

残されたサーヴァントは、いずれ劣らぬ英霊揃いだ。最終的に誰が勝ち残るかなど、

想像さえできない。

しかし、今は聖杯戦争の帰着よりも優先するべきものがある。——アサシンと共にある、あの黒い影。町中の人間を襲い、サーヴァントすら屠った怪物。あれだけは、何としても排除しなければならぬ。人を見境なく襲う影は、異論の余地なく倒されるべき”悪”だ。

歩き出したアーチャーの後を遠坂と追いながら、心に誓う。正義の味方として、あの影の存在を許すわけにはいかない——。

## 21. 混沌の予兆

行きと同様、帰り道も、とても静かだった。

夜明けまでもう何時間もないというのに、相変わらず動物の姿さえ見つからない。せめて、車の一台でも走っていれば違ったのだろうが……町が静かすぎるからこそ、その重い沈黙は、否が応でも失くしたものについて考える機会になった。

——サーヴァント、セイバー。

遠坂がぼつぼつと話してくれたのだが……セイバーの真名は、アルトリア・ペンドラゴン。男性名にすれば、アルトリウス。つまりセイバーの正体は……かの有名な、アーサー王その人だったのだ。

アーサー王といえば、イギリスの伝説的な大英雄だ。日本においても、その知名度はあのヘラクレスにさえ匹敵しよう。今から千五百年ほど前に活躍した人物で、選定の剣を引き抜いたことから王になり、十二の会戦を勝ち抜き、サクソン人の侵攻を防ぎ切ったと言われている。その愛剣であるエクスカリバーは、恐らくは世界一有名な聖剣だろう。

まさかアーサー王が女の子だったとは思わなかったが、それならばあの強さにも頷け

る。ライダーとキャスターを一撃で消滅させたあの光こそ、エクスカリバーだったに違いない。

——では。そのアーサー王さえ下した黒い影は、いったい何だったのだろうか。

あれは、人間でもサーヴァントでもない。だが、神獣や幻獣の類かと言われると違う。俺もそんなに詳しいわけではないが、吸血種のような怪物とも違うだろう。そもそも、比較的有名な類の化け物なら、あれと直接相對したセイバーやランサーがその正体について知っていたはずだ。

唯一、アーチャーだけがあれについての知識を持つていたようだが、記憶が戻るまでは結局分からずじまいだ。もしアーチャーの真名が判明すれば、その神話や伝説から、あの怪物の正体が判明するかもしれないのだが……。

「……………」

アーチャー。弓兵のクラスで召喚された、イレギュラーなサーヴァント。

霊体では無く生身の肉体を持ち、召喚時の不手際のせいも、自らの記憶を失っている。これまで一週間以上この英霊と過ごし、幾度となく戦う姿を見てきたが、結局その真名に繋がる手がかりは何一つ掴めていない。

彼が纏う黄金の鎧。確かインド神話あたりに、黄金の鎧を持った英雄がいたような気がするが……昔のことなので、俺の記憶も定かではないし、その人物は“英雄”では

あっても”王”ではなかったように思う。このサーヴァントは、間違いなく人の上に立つ統治者だ。

では、黄金の双剣はどうか。スペインの叙事詩に、双剣を使う英雄がいると聞いたことがある。だが、弓に変化する双剣など見たことがない。それに、その叙こと詩は十世紀よりも後にできたもの。たかが十世紀ほど度の神秘が、あのランサーの槍に太刀打ちできるだろうか。

更に言うなら、キャスターの正体は魔女メデアだった。ギリシャ神話に登場する彼女は、悲運に翻弄された王女としても有名だ。伝説によれば、彼女は並外れた魔術の腕を誇っていたという。その伝説が本物であったことは、俺自身の目でしかと見た。だが、アーチャーの武具は、そのメデアの魔術さえ跳ね除けるほどの神秘を有していたのだ。

考えれば考えるほど、アーチャーの正体分からない。セイバーの話によれば、前回の聖杯戦争では、アーチャーは無数の宝具を湯水のように使っていたという。ギリシャ神話の人物さえ凌駕する神秘に、アーサー王やイスカンダル大王すら一蹴する規格外の強さ。その通常考えられない特異性に、この黄金の青年の正体を掴む鍵があると思うのだが――。

「……つと、もうすぐ朝か。空が明るくなってきた」

怪物の正体もアーチャーの真名も分からないまま、考え込んでいるうちに、時間の方は進んでしまっていたらしい。真つ暗だったはずの空が、朧げに赤みを帯びはじめた。

夜明けの空を見上げていると、ふつと意識が飛びそうになり、慌てて頭を振って正気を取り戻す。夜を徹しての戦いに、投影魔術という無茶に、セイバーの敗北。精神的にも肉体的にも、さすがに疲れ切っていた。

意識を覚醒させると、先行するアーチャーと遠坂の後を小走りに追う。この角を曲がれば、すぐに我が家が見えてくる。休むのは、家に着いてからにしよう。

「ただいまー」

鍵を開けて、数時間ぶりの我が家に入る。いつもの癖で声をかけたが、桜はまだ寝ているはずだ。当然、返ことが戻ってくることもない。

……というか、そろそろいい加減に俺も寝たい。そこそこ体は鍛えている方だし、一晩ぐらいの徹夜なら大した問題にはならないが、戦いのせいで体が休息を欲している。まずは部屋に戻って、仮眠を取ろう。

「……………むっ。」

と。靴を脱いで廊下上がったところで、アーチャーが怪訝な表情を浮かべた。その理由に思い当たり、俺もはてなと首を傾げる。

体調を崩したままだし、まだ桜は起きていないと思つたのだが、調理場から料理の匂いが微かに漂ってくるのだ。確かに遠坂はそろそろ快復する頃だと言つていた気がするが、それにしても、いきなり朝食が作れるほど体調が戻つたとは――。

「まさか、あの子――！」

顔色を変えた遠坂と一瞬だけ見つめ合い、アーチャーを置き去りに、同時に廊下を抜けて台所へと走つていく。この間のように、また無理をしているようなら今度こそ叱りつけなければならぬ。

障子を乱暴に開け、台所に飛び込むと、そこには。

「っ……………」

短い悲鳴。遠坂の口から漏れたそれは――床に倒れ伏す、桜の姿を見てのものだった。

「桜?！」

度肝を抜かれ、慌てて倒れた桜の体を抱き起こす。意識を失っているのか、名前を呼んでも何の反応も返つてこない。加えて、体の熱さと息遣いの荒さが、どれだけ容体が悪いのかを感じさせた。額には、熱と汗のせいで髪が貼りついている。こんな状態で、まともに動けるはずがないのだ。

味噌汁を作り、次のおかずを作ろうとしたところで倒れてしまったようだが、よほど



無理をしていたに違いない。倒れた時に怪我をしていないのは、不幸中の幸いだった。

「くそつ、また酷くなってるじゃないか！ 遠坂——」

「ええ、これはもう病院に行かせた方がいいわ。もう何時間かすれば病院も開くでしょうから、それまで休ませましょう。」

まったく、あれほど無理はするなって言ったのにこの子は……！

遠坂と二人で、台所から居間へと桜を移動させる。……本当なら俺一人でも桜を運べるぐらいの力はあるはずなのだが、疲労のせいで、遠坂に手伝って貰わなければ桜の体を持ち上げられなかったのだ。

ここまで容体が悪化しているなら、すぐ病院へ連れていかなければならないため、部屋ではなく玄関に出やすい居間で桜を休ませる。まだ体温は計っていないが、この感じだと三十九度近くにはなっているだろう。こんな状態で朝食を作ろうなんて、無茶としか言いようがない。

「何事だ、騒々しい」

慌ただしく体温計やら座布団やらを準備していると、平然とした様子のアーチャーが、今更になって障子から顔を覗かせた。空気が読めないのか無視しているのか、周囲を顧みないその態度に苛立ちを覚えながらもそれに答える。

「桜が倒れてたんだ。熱が酷くて、病気かもしれないから、これから病院に連れて行く。」

アーチャーも見えてないで手伝つてくれ」

「——病だど？ その娘がか？」

何故か。溜息を吐くか、一笑に付すかと思われた黄金のサーヴアントは、俺の話を聞き、横たわる桜をやけに真剣な瞳で観察し始めた。アーチャーが豹変する意味が分からず、体温計を持ったまま困惑する。

桜は俺にとって、家族の一員も同然だ。しかし、アーチャーにとってはそうではない。マスターでも魔術師でもない桜の存在は、サーヴアントとして召喚されたアーチャーにとっては何の関係もないはずなのだ。だと言うのに、前回倒れた時といい、この男はやけに桜を気にかけている節がある。一体、桜の何処にこの青年の関心を惹くものがあったのだろうか。

三十秒ほど、そうして眺めていただろうか。何らかの結論が出たのか、一度頷くと、アーチャーは腕を組んであらぬ中空へと目を向けた。何か考え込んでいるのか、落日の瞳はすつと細められている。恐らくは誰に向けた言葉でもないのだろう、ぼそりとした呟きが俺まで聞こえてきた。

「違うな。その娘、魔力を内から食い漁られているぞ」

「……ちよつと。それどういふことかしら、アーチャー」

このタイミングで水汲みから戻った遠坂が血相を変え、聞き捨てならぬとアーチャー

を睨み据える。さすがにそれは無視できなかつたのか、青年は腕を組んだまま遠坂に向き直った。

「聞いたままの意味だ。この娘の体内には何かがある。こやつのは異常は病ではなく、その何かに魔力——即ち、生命力を食い漁られているが故のものだ。

これは、そこらの医者では手に負えまい。診せるなら魔道の心得がある雑種にせよ。この娘と同じ、魔術師にな」

「は!? アーチャー、それって……」

ちよつと待て。この男は、最後に何と言った。魔術師? 桜が魔術師だって?

現状を理解できず、困惑混じりに遠坂の方を振り返る。だが、彼女の顔に浮かんでいたのは驚きではなく……『言つて欲しくないことを言われた』と、そう示すかのような不快感だった。

「遠坂。桜が魔術師って、どういふことだ」

「……………」

問い詰める俺の目線に耐えきれなかつたのか、遠坂が目を逸らして唇を噛む。その反応で、アーチャーが言っていることは真実なのだと、そして遠坂はそれを最初から知っていたのだと……そう、分かつてしまった。

どうなっている。結局最後の戦いでは姿を見せなかつたとはいえ、確かに慎二はライ

ダーのマスターだったが、その妹である桜は、聖杯戦争とは無関係だったはずだ。そうでなければ、今までの慎二や桜の行動には矛盾が生じる。

だが。聖杯戦争に関わることで、魔術師であることとは別問題だ。俺は全く知らなかったが、桜はこれまでずっと自らが魔術師であることを隠し続けており、遠坂やアーチャーはその事実を知らずながら黙っていた——それが、事の真相なのだろう。しかし、桜が魔術師だとして、どうしてこんな事態になつていいのか。

「——だが、それにしても妙だ。内に潜むモノが寄生木ヤドリギならば、ここまで宿主を痛めつけるはずがない。外の手が加わつたにしても、目的が掴めぬ。

つまりこの娘、それ以外にも何かがあるな。今の状態も、恐らくはそれが関与しているのだろうが……ち、そこまでは読み解けぬか。前提となる記憶か知識があれば、話は違つたやもしれぬが」

「……アーチャー。つまり、どういうことなんだよ」

何ことか、ぼそぼそと独り言を呟くアーチャーに詰め寄る。遠坂の方は、俯いて難しい顔をしたまま動く気配がない。状況を打開するための鍵は、この黄金の英霊しか持ち得なかった。

「ふん。まだ解らぬか、小僧。放っておけば、その娘は死ぬということだ」

「な——」

絶句する。

桜が魔術師だという事実だけでも驚きなのに、放っておけば死ぬ、だって……？ そんな、そんなふざけた話があつてたまるか。

アーチャーは言った。桜は、何者かに魔力を奪われているのだと。人間から魔力を奪う存在——サーヴァントがいるならば、その話にも納得がいく。しかし、他人から魔力を集めようとしていたライダーとキャスターは、今し方倒されたばかり。セイバーを倒した黒い影も、今はその片鱗さえ見当たらない。ならば今、何故桜がこんな状態に陥っている……？

わからない。原因も解決法も、半人前の俺では想像さえできない。俺にできることと言えば、たった一つ。打開策を知っている人間を問い詰めることだけだ——！

「どうすればいいんだ、遠坂？ おまえなら、どうすればいいか知ってるだろ！」

俯いたままの遠坂の肩を掴み、間近で問いかける。桜が魔術師だと知っていた遠坂ならば、この事態を解決する術も知っているはずだ。

俺に詰め寄られながらも、何か考え込んでいた様子の遠坂だったが……やがて結論が出たのか、若干の迷いを孕んだ瞳で、俺のことを静かに見上げてきた。

「……桜を、教会に連れて行くわ。綺礼なら、この子のことも何とかしてくれるかもしれない……あいつ、治癒魔術は得意中の得意なもの。」

アーチャー。悪いけど、桜を運ぶのに手を貸して。わたしと士郎だけじゃ、この子を教会まで連れて行くのは無理だから」

\*\*\*

教会に着いた時には、すっかり太陽は昇りきっていた。

遠坂が敷いた認識障害の魔術のお陰で、気を失った少女とそれを抱えた金髪の青年、という異様な組み合わせは、誰にも見咎められずにすんだ。何の妨害を受けることもなく、俺たちは教会まで辿り着くことができた。

桜を抱えて教会の中に入り——アーチャーは何故か教会の外で待つと主張した——、言峰に事情を説明すると、余裕を漂わせていた神父の顔は見る見るうちに真剣なものへと変貌した。治療を施すと一言告げただけで、言峰は桜を抱えるにあつという間に奥の部屋へ消えて行つた。桜の状態は、本当に一刻を争うものだったらしい。

……そうして、言峰が桜を治療する間、俺たちは礼拝堂で待たされることになった。以前来た時と同じく、神聖さを感じさせながらも、どこか仄暗い何かを孕んだ場所。そんな部屋で、俺と遠坂は、二人して長椅子に背中を預け、ただ黙って言峰のことを待つていた。

そのまま、どれほど経つたのだろう。十分しか経っていないのか、それとも一時間は待つたのだろうか。疲れ切つた俺は、半ば眠つたような状態で座つていたため、時間の感覚が消え失せていた。ここに椅子が無ければ、床に横臥していたことだろう。

寝たり起きたりを繰り返しながら、ただひたすらに時間が過ぎるのを待つ。そのうち、沈黙に耐えきれなくなつたのか。隣に座る遠坂が、唐突にこちらに声をかけてきた。

「……士郎。何か、わたしに訊きたいことがあるんじゃない？」

「ああ。——桜のこと。遠坂、おまえ、初めから全部知つてたのか」

と問うと、どこか心苦しそうな表情で、遠坂は重々しく頷いた。桜について話してくれるよう促すと、最早隠しきれないと諦めたのか、彼女は淡々と真相について語り出した。

——事の発端は、十一年前に遡る。

聖杯戦争は、始まりの御三家と呼ばれる一族たちによつて執り行われる儀式だといふ。御三家とは、アインツベルン、マキリ、遠坂の三家を示す。

マキリはやがて、その拠点を聖杯戦争が行われる日本へと移した。名前をマキリから間桐<sup>マトウ</sup>へと変え、冬木市に根を下ろす一家となつたのだ。

……だが、それがマキリの衰退の始まりだった。冬木の地と相性が悪かつたのか、間桐の血に宿る力は、時代を経るごとに急激に失われていった。如何なる方策を講じよう

とも意味はなく、最後の最後、今代の後継者となるはずだった間桐慎二に至っては、魔術回路そのものが消え失せてしまった。

しかし、それでもマキリは諦めなかった。自分の手で足りないのならば、他の物の力を使う。魔術師のセオリー通り、マキリは解決策を内部ではなく外部に求めた。余所から力のある養子を得ることで、自分たちの延命を図ろうとしたのだ。そこで白羽の矢が立ったのが——同じく聖杯を作り出した一家、遠坂家だった。

「なんだって?! それじゃあ、まさか……」

「察しがいいわね。……わたしね、一つ下の妹がいたの。でも、魔術師の家系は一子相伝でしょ? 姉のわたしを後継者にするなら、妹の方は普通に育てるか、他の家に養子に出すしかない。遠坂家にとっても、マキリの申し出は都合がよかったのよ」

つまり。間桐桜という少女は——元々は、遠坂桜という名前であり。目の前に立つ遠坂凛の、実の妹だったのだ。

……そう言われてみれば、腑に落ちる節もあった。ただの後輩でしかないはずなのに、あれだけ桜に目を掛けていたわけ。桜が倒れた時に、あれほど取り乱していた理由。遠坂が桜の姉だというのなら、今までの言動はむしろ当たり前のことだった。

「そういうわけで、桜は間桐の後継者として養子に出されたのよ。それ以来、あの子とはまともに会えてなかったけど」



「そうだったのか……」

何ということだろう。桜とあれだけ長い時間接していたにも関わらず……俺は大事な後輩のことを、その実何も理解していなかったのだ。おそらく桜の方でも、こんな形で自分の事情が暴露されるとは思わなかったに違いない。こんなことが起きなければ、俺と桜は、ただの先輩と後輩の関係でいられたはずなのだから。

真相を知ってしまった以上、桜本人に黙っているわけにもいかない。桜が言わなかったということは、彼女はおそらく、自分が魔術師だという事実を知られたくはなかったのだろう。いや、そもそも、俺が魔術師の端くれだということさえ知らなかった可能性もある。いずれにせよ、今後桜にどうやって接するべきか、一度考える必要があるかもしれない。

「——ふむ。存外大人しく待つていたようだな、おまえたち。まだ取り乱しているかと思つたが、杞憂だったようだ」

と。桜のことを考えていると、奥の部屋から、長身の神父が姿を現した。鋼のような冷徹さは先刻と変わらないが、桜への治療の影響か、その額には僅かに汗が滲んでいた。「言峰。桜の容体はどうなんだ」

「間桐桜への治療は、まだ終わつたわけではない。今は応急処置を施したに過ぎん。事態は少々複雑だ。おまえたちへの説明も長くなる、座つて話を聞けがいい」

疲れを微塵も感じさせぬ口調で、言峰は淡々とそう告げる。だが、その口ぶりには何やら只ならぬものがあり、俺は遠坂と共に、まずは言峰の話聞くことにした。

——曰く。間桐桜の体内には、寄生虫が棲んでいる。

その正体は、刻印虫と呼ばれる虫だ。通常は宿主から魔力を食らい、ただ宿主の存命を発信するだけで、魔術師が用いる使い魔としては最低級のもの。そのままならば、何の害も及ぼさない存在だ。

しかし、桜の中に棲みついた虫は少々事情が異なっている。刻印虫はただの寄生虫ではなく、魔術回路と酷似した、一種の神経めいた状態へと変質し、彼女の全身を隈なく覆い尽くしていた。桜が倒れたのは、何らかの要因によって、この刻印虫たちが暴走した結果なのだという。

刻印虫は暴走することで、桜の体中から魔力を……生命力を奪っていった。生命力が奪われれば、ライダーに襲われた女子生徒のように、意識を失うのは当たり前だ。加えてこの刻印虫は、餌となる魔力がなくなれば、今度は肉体を食い漁っていく。ここに運び込んでいなければ、アーチャーの見立て通り、桜は本当に死んでいたかもしれないのだ。

「——おい」

沸騰しそうな怒りを堪えて、言峰を正面から睨み据える。冷静に言葉を紡ぐこの神父

には、何の咎もない。にも拘らず、今の俺は、激昂のあまり視界がぐらぐらと揺らいでいた。

「その刻印虫つてヤツが、自然発生するわけがない。それが寄生虫だつていうなら、寄生させたヤツがいるはずだ。……そいつは誰だ」

「……あのクソ爺」

ぎり、と真横で歯を軋ませる音が響く。俺の問いに答えたのは言峰ではなく、激情を湛えた遠坂だった。

「間桐臓硯。間桐家の当主、何百年も生きてるつていう怪物よ。桜に何かできるとしたら、そいつ以外には有り得ないわ」

間桐臓硯。そいつか。そいつが、桜をこんな目に遭わせたのか。

怒りで拳が砕けそうだが、まだ疑問は残る。刻印虫は、そのままでは無害な存在だ。アーチャーの言葉も、言峰の説明を聞いた今なら分かる。桜の『内に潜むモノが寄生木ならば、ここまで宿主を痛めつけるはずがない』のだ。宿主を殺してしまつては、寄生虫としては本末転倒。ならば、桜でも刻印虫でもない第三の要因が、必ずそこに絡んでいる。

再び顔を上げ、言峰と相對する。瘦身の神父は、遠坂の言葉に頷くと、俺に感情の宿らぬ瞳を向けた。

「その通りだ。間桐慎二では刻印虫は扱えん。間桐桜に異物<sup>むし</sup>を仕込んだのは、間違いないく間桐臓硯だ。——刻印虫を暴走させたのも、あの妖怪の差し金だろう」

身体と一体化した刻印虫の暴走。それは即ち、身体中の神経を焼き尽くされることに等しい。魔術回路を一から組み直していた時の俺でさえ、毎回激しい痛みを感じていたのだ。ただ一本神経を使うだけでそれなのに、全身の神経が異物に蝕まれる。その苦痛がどれほどのものなのか、俺如きには想像さえも許されまい。

「でも、おかしいわね。桜に刻印虫を仕込んだのは、何年も前の話でしょう。……あの子、髪も瞳も、とつくに遠坂の色<sup>もの</sup>じゃなくなってるもの。何で今更になって、虫を暴走させるような真似をしたのかしら」

「その理由については、おまえたちの方が詳しくしろ。——此度の聖杯戦争、間桐に属するサーヴァントがあつたはずだが」

ライダーのサーヴァント。そのマスターは、魔術の素養を持たぬはずの間桐慎二だった。

考えてみれば、それがそもそもおかしかった。魔術師でないのなら、マスターになることも、サーヴァントと契約することも不可能だ。にも関わらず、間桐慎二はライダーを使役していた。……もつと他に、マスターに適した人材が居るというのに。

間桐桜という魔術師。間桐慎二というマスター。間桐臓硯という黒幕。聖杯戦争を

始めた家系であるマキリ。ライダーのサーヴァント。個々の点が線となり、次々と繋がっていく。パチリ、パチリと、パズルのピースが嵌っていくような感覚。

「つい先刻、教会の霊基盤で、ライダーの消滅を確認した。そしてライダーの消滅に前後して、間桐桜はこの状態に陥った——両者の間に関連があるのは確実だ」

そうだ。俺とアーチャーが特別なだけで、サーヴァントの使役にはマスターの魔力供給が欠かせない。そして間桐慎二は、それだけの能力を持たなかった。ならば、その代わりを担う存在が居たとしても不思議はない。

「そもそもマキリは、サーヴァントとの契約の証——令呪そのものを考案した家系だ。契約の分散など、彼らにとっては容易いこと。実際、過去の聖杯戦争では、サーヴァントとマスターを繋ぐラインを分割した者も存在した。

つまり。指揮者としてのマスターは間桐慎二だったが、実質的に魔力供給を担っていたマスターは、間桐桜だったのだろう。

消滅したということは、戦いの末に敗れたということだ。戦闘を行うライダーへ魔力供給を続けた結果、彼女からは魔力が奪われ——餌のなくなった刻印虫は、こうして暴れ出したに違いない。もつとも、原因はそれだけではないようだが」

「桜が、マスターだって……？」

それでは。聖杯戦争と関係ないといった慎二の言葉は、最初から嘘だったのか。あい

つは平気な顔で、自分の妹から魔力を奪い取って苦しめ、その挙句、ライダーを使って人殺しをしようとしたのか。

かつての友人への怒りで、拳が勝手に震え出す。ライダーが消滅しても、ついぞ姿を現さなかった慎二。……次に再会した時、果たして俺は、あいつを生かしておいたままでいられるのか。少なくとも、今この場にヤツがいたならば、俺は確実に慎二の首を斬り落としていただろう。

「迂闊……！　桜に令呪がないから、関係ないとはばかり思い込んでたわ。臍硯がどんな手を使って慎二をマスターに仕立て上げたのか疑問だったけど、そういう裏があったわけね」

俺と同様、意表を突かれた様子の遠坂が舌打ちする。魔術師として一流の遠坂でさえ、桜がマスターである事実には今まで気付いていなかったのだ。

……だが、ここでふつと黄金のサーヴァントの横顔が過る。思えば最初から、あいつは桜のことを何処か注視している節があった。もしかしたら、アーチャーは最初から、桜の正体に気付いていたのかもしれない。俺たちに問われなかったから、答えを口にしなかっただけで。

臍硯や慎二のみならず、アーチャーへの怒りも湧いてくるが、気合でそれを押さえつける。あの英霊は、そもそもそういう存在だ。気紛れで助言を与えることはあっても、

積極的に関与することはなく、上から全てを見下ろしている。元々アーチャーはそういう立場を取っていたし、桜とライダーの繋がりに気付かなかつた俺たちの落ち度でもあるのだから、あいつを責めるのはお門違いだ。

「納得がいったか。ならば話を続けよう。」

刻印虫が暴走した原因は他にもある。この虫は、ある条件を満たした時に限り、暴走するように仕組まれている。状況から鑑みるに、その条件とは——おそらく、『聖杯戦争の継続』だろう。サーヴァントであつたライダーを失い、マスターとしての役割を遂行できなくなったことで、この虫は活動を開始したのだ」

——吐き気がする。言峰の言葉を聞いているだけで、どうしようもない不快感が身を震わす。

桜は、誰よりも争い事を嫌う性格だ。彼女に虫を寄生させているというだけでもおぞましいのに、よりもよつて、間桐臓硯という怪物は、彼女が一番嫌う行為を強要しているのだ。魔術師の最も醜い側面を、俺は今まきに見せつけられていた。

自らは手を汚さず、しかし裏で糸を操っている黒幕。マスターとサーヴァントを擁するからには、その狙いは聖杯という奇蹟に相違ない。ライダーが倒された以上、その目論見は潰えたと思いたいが、ここまで用意周到な魔術師が、手を拱くとは思えない。いずれ何らかの形で関与してくるのは、火を見るより明らかだ。

「……待つて。マスターじゃなくなつたから活動を始めた、つて言つたわよね。それじゃあ、このままだと桜は——」

「今のままではそう保つまい。新たにサーヴァントと契約を結ぶのでもない限り、刻印虫の侵食は進んでいく。結論から言つてしまえば、このままでは間桐桜は助からん」

なんだそれは。そんな馬鹿な話があつてたまるか。

桜が死ぬ？ つい数日前まで元気に食事を作つてくれた後輩が、聖杯戦争とは関係ないはずだつた彼女が、どうしてそんな目に遭わなくちゃいけない——！

「……ふざけるな。何で今更になつて、桜がこんなことになつてるんだ」

「私が見た所、間桐桜は戦闘用の調整を施されていない。もともと臓硯は、此度の戦いで彼女を利用する気はなかつたのだろう。」

それが何らかの理由で、突如彼女を使う必要に迫られた。それが何かは知らんが——  
間桐桜をこのように扱つたのは、何らかの狙いがあると見て然るべきだろう」

間桐臓硯の目的。そんなものはどうでもいい。今重要なのは……このままでは、桜が助からないということ。どうにかして、彼女が助かる方法を見つけなければ。

「そうだ。寄生虫が巢食つてるっていうなら、駆除はできないのか？」

「……それは難しいな。既に刻印虫は間桐桜と同化し、彼女の一部分となつている。これを取り除くということは、身体中の神経を引き抜くことと同義だ。」



だが、私もみすみすあの老人の思い通りにさせるのは腹立たしい。絶望的ではあるが、これから刻印虫の摘出に取り掛かろう」

「えっ……!?!」

遠坂の驚愕。その驚きも当然だろう。この、およそ人情味を感じさせない神父は——この瞬間、本気で『間桐桜を助ける』と宣言していたのだ。

冗談かとも思ったが、言峰の瞳は真剣だ。これまでの、どこか得体の知れない嫌悪感を考慮に入れたとしても、今の言峰綺礼は信じるに値する人間だった。

「これからの手術は、濁流で木々を薙ぎ払うようなものだ。魔力による力づくで、間桐桜に巢食った刻印虫を押し流す。——なに、私の魔術刻印は消費型でな。大半を使い尽くすことになるだろうが、この場合は都合がいい」

その言葉で、遠坂が再び愕然とした。恐らく今の俺も、遠坂と同じ顔をしているのだろう。先祖代々伝わってきた魔術刻印を——この男は、たった一人のために使い潰すと言ったのだ。それが魔術師にとってどれほど重い決断なのかは、正当な魔術刻印を受け継がなかった俺には想像もつかない。魔術刻印とは、魔術師にとっては命よりも重いモノなのだ。

「ちよ——アンタ、それ本気で言ってるわけ?!」

「無論だ。これでもこの身は神父でな、救いを求める命があるというならば、見捨てるわ

けにもいかん。この身を賭して、間桐桜の命を救ってみせよう。

——だが、私が見つ魔術刻印だけでは、彼女を救うには一手足りん。何しろ、十一年にも及ぶ汚泥を汲み出すのだ。この身一つの魔力では限りがある。

凜。おまえは確か、魔力を込めた宝石を持っていたな。間桐桜を救いたいのなら、それを私に渡せ。宝石を魔力タンクとして用いる術は、時臣師から教わっている」

「つ……！ 今持つてるのはこれだけよ。これで足りる、綺礼？」

一瞬躊躇つたものの、言峰の言葉に応じ、懐から赤いペンダントのようなものを取り出す遠坂。その瞬間、強烈な既視感に襲われた。俺は以前、あの宝石を、どこかで見たことがあるような——？

ほんの僅かな間、覚えても居ない何かを思い出そうと、俺の思考が途切れる。その間に、宝石は遠坂から言峰に投げ渡されていた。危なげなく宝石を掴みとった言峰は、ふむ、と感心したように呟く。

「これは——百年物の宝石と見たが、大半の魔力が失われているな。何に使ったのかは知らぬが、随分と大盤振る舞いをしたものだな、凜」

「今はアンタの批評を聞いている場合じゃないのよ。それで桜を救うのには十分かって訊いてるの」

「無論だ。我が主の御名において誓おう。——私は全身全霊を以て、間桐桜の命を救つ

てみせると」

いけ好かない、どこか陰のある嫌味な神父。それが、言峰綺礼という男の印象だった。だがしかし、今この瞬間——この男は、他の何よりも敬虔な神父へと変身していた。

いや——変わったのではなく、元々あるべき立ち位置に戻ったのか。いずれにしても、桜を救うと誓った神父は、まぎれもなく本気だった。絶望的だと口にしつつも、それでもやり遂げてしまおうという確信さえ持てるほど、言峰の全身には気迫が満ちていた。

「これより手術を執り行う。居座られては施術の邪魔だ。おまえたちは、どこぞで時間を潰してくるがいい」

疾く立ち去れ、と手を振る言峰。そんな神父を一瞥すると、遠坂は。

「そう。じゃ、悪いけど、後は任せるわ。——手術が成功したとしても、それが無駄になる可能性は高いでしょうけどね」

「ちよつと待て。無駄になるって、どういう意味だ、遠坂」

立ち去ろうとした遠坂の肩を掴んで止める。今の言葉は、流星に聞き過ごせなかった。

桜の体には、刻印虫が棲み付いている。それを駆除すれば、問題は解決する。その為の手段は困難だが、遠坂と言峰の協力で、漸く実現可能なところまで漕ぎ着けた。なら

ば後は、手術の成功を祈るばかりだというのに——彼女は何故、そんなことを口にしたのか。

「……刻印虫は桜の神経と一体化してる、って言ったわよね。多分それ、あの子の内臓——心臓まで侵食してるわ。いくら綺礼でも、心臓を引き抜くような真似は無理よ。どうしても、その部分の虫は取り除けない。せいぜい、今までの状態を維持するのが限界でしょうね。」

これがどういう意味か分かる、土郎？ 桜の心臓に蟲がいる限り、間桐臓硯はあの子を自由に操れる。桜を解放したいのなら、臓硯を倒すしかないでしょうけど……わたしたちが臓硯を倒そうとしても、臓硯は必ず桜を盾に使う。臓硯を倒したいのなら、桜を先に倒すしかない。

それを差し引いても、今の桜は危険だわ。魔力を奪われているだけならまだいいけど、最悪、このままだと足りない魔力を求めて暴走する可能性もある。自分を制御できなくなった魔術師なんて、導火線に火が付いた爆弾と同じよ」

それは、つまり。どうあっても、間桐桜は助からないということではないのか。

虫を放置すれば、桜の体は刻印虫に蝕まれていく。虫の暴走を止めるため、新たなサーヴァントを宛がえば、桜は新たなマスターとして俺たちに敵対する。どの道を選ぼうと、桜が臓硯の操り人形であることに変わりはない。例え言峰の手術が成功しても、

今日死ぬか、明日死ぬかという違いしかないのだ。

見たこともない、間桐臓硯という老怪。何処かで糸を引いていてであろう魔術師の悪辣さに、心底から吐き気がした。俺たちが桜を手に掛けるという選択肢を選べないことまで見透かしてこのような手段を採ったのだとすれば、そんな邪悪は生かしておいて良い道理がない。

「桜のことを思うなら、ここで楽にしてあげるのが一番よ。」

これが桜だけの問題ならまだ話は違っていたんでしようけどね。あの子が臓硯の手駒だつていうなら、どう転んでもあの子は救われない。綺礼の手術だつて、一時凌ぎの手段に過ぎないわ。ちよつと臓硯がその気になれば、桜はまた今の状態に逆戻りよ。結局、あの子は苦しみ続けることになる。

覚悟を決めなさい、衛宮くん。貴セイギノミカタ方が救えるのは——」

——貴セイギノミカタ方が選んだ人間だけなんだつてことを。

そんな、いつか聞いたような台詞を最後に残すと。遠坂凜は、教会から立ち去つた。

\*\*\*

「——なんだ。随分と不景気な顔をしているな、雑種」

ふらつくように、教会の外に出て行くと。頭上から、傲岸な声が降り注いだ。

半ば反射的に、声が聞こえた後方を仰ぎ見る。すると、教会の屋根の上に、まるでそこが玉座であるかの如く、足を組んで座り込んだアーチャーの姿があった。

俺を見下ろす紅い双眸には、こちらの懊悩を楽しむかのような色が見えた。他人の不幸を嗤うかのようなその視線に、むっとした怒りを覚える。

「そういうアンタは機嫌が良さそうだな、アーチャー」

「なに、貴様らが慌てふためく様は些か以上に滑稽だな。道化の芸も、ここまでいけば一つの極みよ」

余りの暴言に、開いた口が塞がらない。途方もない暴君ぶりに怒りさえも湧かず、呆然とアーチャーを見上げていると、俺を睥睨していたサーヴァントが、唐突にこちらに飛び降りてきた。建物数階分の高さから着地したというのに、平然としたままのアーチャーを見ていると、改めてサーヴァントという存在の規格外ぶりを感ずる。

教会の入り口から数歩手前、俺の正面に降り立った黄金のサーヴァント。偉そうに腕を組んだアーチャーは、再びその人ならざる瞳を俺に向けてきた。

「で、あの娘は結局どうなったのだ」

「……アーチャー。アンタ、桜のこと心配してくれてたのか」

「たわけ」

この男にしては珍しい、他者を気に掛けるという行為に驚くと、アーチャーは退屈そうに鼻で笑ってそう言い捨てた。一瞬でも、この英霊に人並みの情を期待した俺が馬鹿だったらしい。黄金のサーヴァントは、およそ人情というものを解さない悪鬼に等しいのだ。

「あの娘は珍しいモノであつたからな。些かばかり興味が湧いたに過ぎん。——それで、どうだ。我の見立てでは、あと二日も保たぬといったところだが。何か策は見つかったか」

「ああ。この教会の神父が、桜を助けてくれるらしい。……でも」

ギリ、と無力さに歯を噛み締める。そこから先は、半ば勝手に口を動かしていた。

桜の体に、刻印虫が巣食っていること。その刻印虫が、彼女の体を蝕んでいること。言峰の手術は、一時凌ぎにしかならないこと。そして、桜の命は臓硯に握られており——このままではどうあつても、桜は助からないということ。

一通り話し終えたことで、改めて自分の無力さを思い知らされた。言峰は、桜を救うのに全力を尽くしてくれる。遠坂は、桜を苦しませないよう覚悟を固めている。それに對して、俺のこの様は何なのか。力も覚悟も持たない俺は、ただの半端者ではないのか。「ふん、やはりこうなつたか。あの娘、早めに死んでおけば楽であつたらうに」

どこか遠くを見つめ、ぼそりと低く呟くアーチャー。何と言つたかまでは聞き取れな

かったが、その横顔には、不快な感情が混じっているように思えた。

「それでどうする、雑種。このままあの娘を殺すか」

「ツ……！ そんなこと、できるわけないだろう！」

冷酷なアーチャーの言葉に、反射的にそう反発してしまう。昨日まで元気だった後輩が、あんなに苦しんで死にかけていて、しかもそこから逃れる術がないという。そんなふざけた話を突然持ち込まれて、はいそうですかと頷けるわけがない。

……だが、今の俺が感情に突き動かされているだけだということも、心の隅では理解できていた。現実はどこまでも冷たい。桜は、間桐臓硯という怪物の操り人形だ。加えて彼女のサーヴァントだった、ライダーがやってみせたように、桜は魔力を求めて他者を襲うような可能性さえ持っているのだ。否、彼女が望まずとも、臓硯がそのように命令を下すかもしれない。無関係な他の人間にまで被害を出す——正義の味方として。それだけは、断じてあつてはならないことだ。

遠坂も言っていた。切嗣も言っていた。正義の味方が救えるのは、正義の味方が選んだ人間だけなのだ。犠牲を最小限に抑えようとするならば、俺は桜を——

「——殺すしか、ないのか。他の人を巻き込まないためには、それしか……」

「たわけ。それは自ずから導き出した答えではなく、他者の借り物だ。我が聞きたいのはそのような妄言ではない。正論などどうでも良い。我は、貴様がどうしたいかを訊い



ているのだ」

と。悠然とした態度を崩さぬまま、黄金のサーヴァントは、俺の言葉をそう一蹴した。その言葉の意味するところが分からず、目を白黒させる。

動転する俺をどう思ったのか、アーチャーの瞳孔がすつと細まる。その奥には、この英霊が常に漂わす愉悅の色だけでなく、どこか賢者を思わせるような深遠さが宿されていた。

「他者の知恵を借りるのは構わぬ。だが、それを盲信はするな。最終的な結論を出すのは、他ならぬお前自身なのだ。

——ふむ。雑種どもが言う通り、確かにその女は助からぬのかもしれない。しかし、為すべきこととやりたいことは全くの別物だ。改めて問うぞ、衛宮士郎。お前は、あの娘をどうしたいのだ」

「俺は——」

その言葉に、凍りつく。俺が何をすべきなのか。何をやりたいのか。そんなこと、とうの昔に分かつていた。

俺は、余分な犠牲を出さないため。戦いを止めるために、聖杯戦争に参戦した。他人に被害を及ぼすモノと戦う——それならば。間桐桜という魔術師は、排除されなければならぬ存在だ。慎二を生かしておいたがために、学校がどんな惨状になったか忘れた

のか。

けど、違う。それは為さねばならないことではあつても、俺がやりたいことでは断じてない。それが不可能なことだと分かり切つていたとしても、俺は――

「――桜を、助けたい。だけど、余計な犠牲は出したくない。欲張りだつて言われるかもしれないけど、俺には、どっちも見捨てられない」

それが、ただの我儘だと分かつていても。両方を選ぶことなど、できないと知つていても。どちらか片方を切り捨てることなど、俺にはできやしない。

間桐桜を見捨てれば、俺は俺でいらなくなる。その道を選べば、正義の味方という名の機械に成り果てる。本当はそれが正しいのかもしれないが……俺は今まで、”正義の味方”という言葉に囚われ過ぎてはいなかっただろうか。アーチャーが指摘した通り、その答えの源流にあるモノは、衛宮切嗣が遺していった言葉――即ち、他者の借り物だ。それにきちんと向き合わず、ただ額面通りに受け入れるだけでは、切嗣への誓いを果たしたことはないのではないだろうか。俺は俺自身の中でさえ、”正義の味方”というモノを定義できていないのだから。

かと言つて、他の大勢の人間を見捨てることなどできるはずもない。根底にあるモノが切嗣への誓いだったとしても、この想いは本物だ。魔術師同士の聖杯戦争で、無関係な他人に犠牲が出るなど、絶対にあつてはならないことだ。それを放置した結果が、十

年前の大災害であり、その被災者である俺なのだから。こんな人間を、これ以上生み出すわけにはいかない。

「——なんだ。心得ているではないか、雑種。欲などいくらでも張れば良い。お前は、お前が思うままの道を進めば良いのだ」

だが。俺を嘲笑するかと思われたアーチャーは、何処か満足そうな笑みを浮かべて見せた。そこには俺を見下す色はなく、ただ謎の上機嫌さだけが残る。俺の言葉の何が興に乗ったのか、血色の瞳は、妖しげな輝きを放って俺を見下ろしていた。

「……だけど、それは無理なんだ。どうやっても、桜は助からない。桜を助けようとするば、他の人が犠牲になる」

「それは早計だな、雑種。貴様は思い切りは良いが、視野が狭すぎる。今少し眼を見開いてみよ。貴様の言う二つの条件——女を救い、同時に雑種どもの命も救う。それは果たして、本当に不可能なのか？」

「——なんだって？」

思わぬアーチャーの言葉に、半ば怒鳴るようにしてそう訊き返す。人ならざる慧眼を持つこの英霊は、この事態に際しても、取るべき道が見えているというのだろうか。

驚く俺を余所に、アーチャーは平然としたままだ。俺も遠坂も、言峰さえもが打つ手を持たなかったというのに、このサーヴァントだけは違う何かを見据えている。その恐

ろしいほどの視野の広さが、今ばかりは頼もしかった。

「やはり思い至らなんだか。道があることにすら気付いていないというのなら、選択肢程度は示してやろう。」

聖杯戦争を始めた家系は三つあると言ったな、雑種。マキリはあの娘を傀儡として用い、遠坂の娘は打つ手がない。——では、残りの一つはどうだ」

「——あ」

アインツベルン。

遠坂からの受け売りになるが、聖杯戦争を始めるにあたり、三家の中でも中心となった特別な一家。莫大な財力と、千年を超える並外れた歴史を誇る彼らは、魔術の中でも錬金術に特化した家系だという。彼らの手にかかれば、人間以上の性能を誇るホームクルスさえもを生み出すことが可能らしい。

確かに……確かにそうだ。それだけの歴史と技術を持つ家ならば、この事態に対して、何か打開策を持ち合わせているかもしれない。桜の異常は、魔術によつて引き起こされたもの。同じ魔術であれば、それに抗し得る手段がないとは言いつてもいい切れない。

「……でも、イリヤが協力してくれるかどうか。俺には、差し出せるものなんかはない」

問題はそこだ。魔術の規則は等価交換。何かを欲するのなら、それに等しい何かを捧げなければならない。通常の魔術師同士でさえそうだというのに、相手は聖杯戦争の

マスターだ。イリヤスフィールにとっては、俺も桜も、敵のマスターの一人でしかない。そんな俺たちを、どうして助ける理由があるだろうか。

「ふん。財ならば、貴様は既に持っていよう」

「財だつて？ ……うちに金なんかなくて、アーチャー。それに、アインツベルンは大富豪だ。金なんかで動くわけがない」

「たわけ。だから視野が狭いというのだ、貴様は。財とは、貨幣のみを示すモノではない。貴様ら人間にとって、何らかの利益を齎すモノを財というのだ。」

よく考えるがいい、雑種。アインツベルンとやらは、聖杯を求めているのだろうか？

ならば話が早い。此度の聖杯戦争で何が起きているか——貴様は昨晚、その眼で見ただかりではないか」

「——セイバー」

そうだ。今回の聖杯戦争では、明らかな異常が起こっている。最優のサーヴァントを飲み込むほどの力を持った、謎の黒い影。以前会った時、イリヤはその存在についてまったく知らないと言っていた。ならばこの情報——あの影とアサシンは連携しており、昨晚セイバーが倒されたという事実は、イリヤにとって利益になるのではないか。聖杯を求めるのであれば、あの存在は明らかなイレギュラーなのだから。

アーチャーの言葉で、立ち込めていた暗雲が、俄かに晴れたような気がした。まだ解

決したと決まったわけではないが、誰一人犠牲を出さずに済む可能性が見えてきたことで、絶望の中に一筋の光明が差しこんだのだ。この規格外のサーヴァントは、いつも思いがけない道を示してくれる。こと助言者という立場に限っては、アーチャーという男は、どこまでも頼りになる人物だった。

「サンキュ、アーチャー。後で遠坂にも話してみるよ。イリヤの居場所ならもう知ってるから——明日、アインツベルンの森に行く」

\*\*\*

石造りの広い部屋。その中央にある台の上で、女が寝かされていた。

横たわる女の上には、一切れの布がかけられている。あるものは、ただそれだけ。女は、一糸纏わぬ裸身だった。眠っているのか、布に包まれた胸部は規則正しく隆起を繰り返している。

女の側には、黒い僧衣服カソックに身を包んだ男の姿。一見すれば、男が女を襲おうとしているような情景だったが、神父の纏う雰囲気カソックが、そのような想像を抱かせる余地を与えない。長身の神父は、どこまでも真剣な瞳で、眠る少女を——間桐桜という名の魔術師を、

静かに見下ろしていた。

峻厳たる面持ちとは裏腹に、その額には大粒の汗が流れ落ちる。それもそのはず、彼はたつた今、全身全霊を賭した大手術を成し遂げたばかり。十一年もの間、間桐桜という少女を犯し抜いてきた刻印虫。彼女とほぼ一体化したそれを、言峰は見事に排除してみせたのだ。彼の成果は、それ自体が一つの奇蹟でもあった。

一步、二歩、と後ろに下がると、壁に体を預ける言峰。歴戦の代行者であり、治癒魔術に長けた彼をしても、精神力を限界まで燃やし尽くす大手術。いや、尽きたのは精神力だけではない。彼が持つ魔術刻印——正確には、監督役に預けられる、使われなかつた令呪の数々。彼はこの手術のために、一つ一つが大魔術に等しいそれらの、大半を使ひ潰すこととなつた。

通常の魔術師ならば、まず考えられないような暴挙である。しかし、言峰綺礼という男にとっては、そんなものはただの些事に過ぎなかつた。

「——ふん。ここまで力を注いだのだ、おまえには生きていてもらわねば困る。」

間桐桜という人間が生き残れば、苦悩する者が増えるだろう。衛宮士郎も遠坂凜も、おまえの処遇にはさぞや頭を抱えようからな。私にとつては、その方が好ましい」

そうぼそりと呟いたところで、言峰は一人の青年を思い出した。

——英雄王ギルガメッシュ。

第四次聖杯戦争の勝者であり、無限の財を持ち、半ば不老不死となった半神半人の大英霊。何の偶然か、今は言峰綺礼ではなく、衛宮士郎のサーヴァントとなつてゐる彼の英雄。彼の財宝を以てすれば、このような事態など一瞬にして打開してのけるのだろうか……。

「……だが、奴らは英雄王ではなく教会を頼つた。あの男の気分が乗らなかつたという線も強いが……事によれば。あの男にも、何らかのイレギュラーが起きているのかもしれぬな」

監督役である言峰の目からしても、今回の聖杯戦争は余りに異常だつた。

前回の聖杯戦争でも、イレギュラーな事態はあつた。聖杯に興味を持たぬキャスター主従と、彼らが引き起こした惨劇の数々。加えて、最後に起きたのは日本全土でも稀に見る大災害。だがそれらは、あくまでも聖杯戦争の枠組みの中で起こつた出来事だ。

今回は違う。手始めに、言峰と契約していたギルガメッシュが、突如契約相手を変えたことからしておかしかつた。今となつては、サーヴァントでもマスターでもない存在が出没し、町の人間から魔力を奪い取る有り様だ。世間では行方不明と報じられているが、犠牲者も少なくはない。寧ろ、日に日にその数を増やしつゝある。これは明らかに、聖杯戦争の域を超えた異常である。

「——しかし、おおよその絡繰りは読めた。此度の聖杯戦争は、間桐桜が鍵だつたか。中



身を見てようやく分かったが、アレは間桐桜の影だ。この娘は、小聖杯として機能し始めている」

それは、何の偶然か。

聖杯戦争とは、サーヴァントを呼び出す「大聖杯」と、敗北した彼らの魂を留め置く「小聖杯」によって成り立つ儀式だ。六騎のサーヴァントが敗北し、彼らの魂という膨大な魔力が「小聖杯」に注がれることで、「小聖杯」は願望器としての役割を持つようになる。その器は、代々アイアンツベルンが鑄造することとなっていた。

だが、今回の聖杯戦争は違う。どこで何が狂ったのか、「小聖杯」としての役割は間桐桜が担う結果になっている。それだけでなく、「小聖杯」となった桜を通して、聖杯の中に潜むモノが現れる気配さえ感じ取れた。今回の聖杯戦争を狂わせている、謎の黒い影——その原因は、眠っているこの少女にこそあったのだ。

「そうだろう、間桐臓硯。このような事態を招いたのは、貴様が裏で手を引いたが故だ」壁に肩を預けたまま、言峰がそう冷たく告げる。神父と少女の他には、誰もいないはずの部屋。にも関わらず、そこに見えぬ第三者がいるかのように、言峰はある方向を睨み据えていた。

懐に手を伸ばす言峰。彼の手に握られるのは、黒鍵と呼ばれる投擲武装。霊体に対して圧倒的な干渉力を誇るそれは、サーヴァントにさえ通用する。三挺の黒鍵を油断なく

引き抜きながら、言峰は一点に視線を注ぐ。すると、驚くべきことになり、まるで闇が実体となったかのように、部屋に現れる姿があった。

「——何々。流石は教会の狗よ、こうして気付かれるのはこれで二度目よな」

部屋の片隅。ただ電灯の影だけがあったはずのそこから、突如として影が盛り上がり、痩せ細った小さな老人の姿へと変貌した。黒影を手にした言峰は、老人を威圧的に睨み据える。何故ならば、この老魔術師こそは間桐家の真の主。数百年にも亘つて延命を繰り返し、既に人の身から逸脱した、それ自体が一種の死徒じみた存在である。十年前に一度、直接相対して以降、言峰はこの老人を危険な魔人であると認定していた。

「それで用件はなんだ、間桐臓硯。アサシンのマスターであるお前がこの教会に訪れるとは、只事ではあるまい」

「ホホ、そこまで見抜いておったか。ランサーを篡奪した腕前は伊達ではないのう、代行者」

唖れた声で、人ならざる笑みを漏らす臓硯。英雄王とは違った意味で、人のものではないその表情に、言峰の雰囲気は鋭いものになる。手術の後の疲労など、既に言峰の意識にはない。彼はこの人外を敵と断じ、戦闘態勢に移行していた。握り締めた三挺の黒鍵は、コンマ一秒で投擲できる位置にある。

だが、敵意を叩き付けられながらも、臓硯の顔に怯えはない。にたり、と再度滴るよ

うな笑みを零すと、老怪は代行者を制するように両手を上げた。

「待て待て。儂はお主と戦いに来たわけではない。可愛い孫を救ってくれたお主に、少しばかり礼をしようと思つての」

「何を白々しい。お前と愚論を交わす気はない」

ギリリ、と示威するように黒鍵の刃が光る。十年前の邂逅で、言峰はこの老人を、いずれ滅ぼさねばならぬ存在だと確信していた。数百年を生きる大魔術師となれば、どのような術を用いてくるか分かつたものではない。いかに言峰が歴戦の代行者とはいえ、油断のできる相手ではなかつた。

加えて、今の間桐臓硯は、アサシンのサーヴアントのマスターでもある。ランサーを伝つて手に入れた情報と、教会の情報網とを加味した結果、言峰はその結論を既に導いていた。となれば、一対一で相對するのは愚行に他ならない。

アサシンの奇襲にも対応できるよう、ランサーを召喚するための令呪にも気を配る。大半を使い潰したとはいえ、言峰の腕には未だ使われていない令呪が数個残る。臓硯が戦を仕掛けてくる心積もりなら、言峰は即座に応戦するだけの用意があつた。未だランサーを呼び出していないのは、臓硯の目的が不明瞭であるからに過ぎない。

「愚論か。果たして儂の言葉を聞いた後でも、お主にはそう言い切れるかな？」

好々爺めいた、しかし違和感の拭えぬ笑みを浮かべたままの臓硯に対し、言峰は無言。

威圧するように掲げられた黒鍵にも臆せず、老魔術師は言葉を続ける。

「十年前にも儂は言うたはずよ。聖杯戦争のシステムは、何かが狂いだしておると。此度の五度目は、その中でも極めつけよ。十年で戦端が開かれただけでなく——七騎揃わぬうちに既に戦が始まっておる。此度ばかりは、儂も手を拱くわけにはいかなんだ」

「なに……？」

臓硯の言い放った内容が咀嚼できず、眉根を顰める言峰。聖杯戦争が正しい在り方から外れていることは、とうに知悉していることだが……七騎のサーヴァントなど、とつとつに召喚が終わっているではないか。三騎のサーヴァントが倒れた今、戦いは中盤から終盤へと移行しつつある。だということにこの老人は、一体何を言い出すのか。

言峰の反応は予想の範疇だったのか、笑みを一層深める臓硯。思いがけない言葉によつて、この場の主導権は、完全に彼へと移っていた。

「聖杯戦争は、七騎のサーヴァントが召喚されることで始まる。マスターなど、そもそもはサーヴァントのおまけに過ぎん。だというのに此度は、マスターは兎も角、サーヴァントの方は未だ六騎しか揃っておらぬではないか」

「何を言う。セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バースーパー。七騎全てが召喚済みであることは、教会でも確認している」

「いやいや。お主とて、何かがおかしいと気付いておろう。衛宮の小倅のサーヴァント

——あのアーチャーは、前回呼び出された英霊よ。今回の聖杯戦争におけるアーチャーではない。謂わば、イレギュラーの八騎目よ。アレのマスターだったお主なら、分かっているかと思つたのだがのう」

言峰の思考が凍る。老人の言葉には、確かに思い当たる節があつたからだ。

五度目となる聖杯戦争。七騎のサーヴァントのうち、アーチャーと呼ばれる彼だけが、正しく召喚された英霊ではない。臓硯の言が正しいとすれば、現在のアーチャーの状態は、再召喚ではなく、単なる契約対象の変更。前回の戦いにおいて、言峰綺礼が、本来のアーチャーのマスターだった遠坂時臣に対して行つた行為と相違ない。

「これでは、始まる物も始められん。器を満たすには、七騎の英霊が正しく呼び出され、その魂が注がなければならないかのう。——どうじゃ。監督役のお主に、見過ごしておける事態ではあるまい？」

いやはや、このような事態は真つ先に監督役に伝えねばならぬことであつたが、此度は何分狂いが大きすぎてな。儂とて、全容を掴むまでには時間がかかつたのよ」

臓硯が言葉が続けているが、既に言峰の意識はそちらにはなかつた。彼は高速で、予想だにしなかつた真実について思考を巡らせていた。

今回の聖杯戦争では、サーヴァントが六騎しか召喚されていない。黄金のアーチャー

は、あくまで前回のサーヴァントに過ぎず、今回の正式な参加者ではない。では、今回の聖杯には、もう一騎サーヴァントを喚ぶ力が残っている——？

「というわけだな。間桐家の当主として、僕はお主に、休戦協定を申し込みに来たのじゃ。此度の異常は度を超えておる。僕はこの異常について、もう少々調べねばならん。

なに、そう難しい話ではない。お主はただ、僕の行動に目を瞑つてもらえば良い。その約定を違えぬ限り、僕は最後までお主には手を出さぬし——お主はお主で、その間は好きに動くが良い。僕の情報を生かすも殺すも、全てはお主次第よ」

「……………」

沈黙し、構えていた黒鍵をゆつくりと下ろす言峰。少なくとも臓硯の言葉は、言峰に交戦を断念させるだけの重みを持っていた。

異常を調べる、というのは方便に違いない。そのほど度は言峰にも読めている。おそらくこの老人は、聖杯戦争に何らかのアクションを起こすつもりであり……そこには監督役として、そしてランサーのマスターとして、言峰綺礼に介入されるとまずい事情があるのだろう。

だが、老人の情報は確かに有用だった。七騎目のサーヴァントが召喚されておらず、その席が未だ空白であるという事実は、今の時点ではこの老魔術師と言峰以外の誰にも

知られてしまい。だとするならば——この戦争における言峰の立ち位置は、俄かに変わって来る。おそらくはそれすらも見越して、間桐臓硯はこの情報を渡してきたのだろう。

「クク、此度はこれで退いておくとしよう。ではな、綺礼よ。いずれまた見えようぞ——」

そう言い残すと、現れた時とは逆に、臓硯の姿は闇に溶けるように消えていった。それをまるで蟲の群れのように錯覚し、言峰は目を瞬かせる。

しかし、それも一瞬のこと。臓硯の気配は瞬きの間に消失し、後にはだらりと黒鍵を提げた言峰と、未だ眠りつづけたままの桜だけが残された。黒鍵を僧衣の内に仕舞い込み、言峰は静かに思索に耽る。

今回の聖杯戦争。当初言峰は、前回の聖杯戦争と同様、序盤は斥候役となるサーヴァントを放ち、最後に最強の英雄王ギルガメッシュを動かすことで、己が望みを果たす目算だった。だが、英雄王が謎の契約変更を遂げたことで、その目論見は儚く潰えた。言峰は隙を伺いつつ、捨て駒のつもりだったランサーを上手く使う必要に迫られた。キャスターと同盟を結んだのも、言峰にとつては聖杯戦争を勝ち抜く戦略の一環だった。

ところが。英雄王の代わりとなる、もう一騎のサーヴァントを召喚できるとなれば、状況は一変する。言峰綺礼は見習い程度とはいえ魔術師であり、令呪も有しているの

だ。——聖杯戦争のマスターとしては、十分以上に資格がある。

「——フ。ハハハ、ハハハハハハ！ そうか！ これもまた、主のお導きと言うことか！」

こうして。混乱を極める第五次聖杯戦争は、再び大きく動き出すことになる。嵐の中心にある言峰の顔は、かつてないほどの笑みを湛えていた——。



## 22. 最後の主従

「——なんだ、言峰。話つてのは。こんな所に呼び出して、お前らしくもねえ」

時刻は夜明け前。教会の外にある広場の中で、二つの影が佇んでいた。

一人目の影は、言峰綺礼。この教会の主であり、聖杯戦争の監督役。そしてもう一人の影は、青い装束と赤い槍を手にした戦士。他ならぬ、ランサーのサーヴァントだった。「なに。おまえには、これまで随分と働いてもらった。この辺りで礼を言っておいても、罰は当たらんのではないかと思つてな」

「ハッ、そりやどうも。オレはただ、マスターの命令オーダーに従つたまでだ」

ザ、と砂利を踏む音が響く。背で手を組んだ言峰は、ランサーを一瞥すると、ゆつくりと広場を歩き出した。その動きには、昨日行つた大手術の疲労など、欠片も残されていない。既に肉体年齢は全盛期を過ぎているにも関わらず、未だ鍛え上げられたままの肉体は、それだけでこの男が歴戦の強者なのだと言語っている。

対するランサーは、皮肉を込めて一言呟いた後は、所在なさ気に槍をくるくると弄んでいる。彼がマスターに向ける目は、黎明の気温を遥かに下回る温度まで冷え切つていた。

それもそのはず。言峰綺礼は、ランサーの正当なマスターではない。本来のマスターから令呪を篡奪し、半ば強制的にランサーを使役しているだけの異端者である。誇り高き赤枝の騎士が、そんな男に忠誠心など抱く道理もない。

『おまえは全員と戦え。だが倒すな。一度目の相手からは必ず生還しろ』

令呪によつて課せられた命令。命の奪い合いである聖杯戦争に於いて、相手を倒すなという指示はまったくもつて理解できない。令呪の縛りがなければ、ランサーとしてそのような馬鹿げた命令には従わぬ。手加減という文字はランサーの辞書にはない。もしこの命令がなかったならば、アーチャー・アサシン・ライダーの三騎は、初戦で確実に討ち取れていた。セイバーに後れを取ることもなかっただろう。

——つくづく気に食わねえ野郎だ。

槍を回しながら、内心でそう悪態を吐くランサー。多かれ少なかれ、他のサーヴァントとマスターが相互に信頼関係を築いている中で、この主従だけは唯一の例外だった。

ランサーには、言峰の意向が理解できない。心の読めないマスターが、わざわざこんな場所に自分を呼び出したのは、如何なる心算があつてのことか。またろくでもない命令を下す気なのか、とランサーの気分が悪くなるのも無理のないことだろう。

加えて言えば、ランサーは一昨日、彼の大英雄——ヘラクレスと二度目の戦いを演じて来ている。森林地帯でのゲリラ戦はクー・フリーンが生前得意とした戦術であるが、

ヘラクレスといえば狩人としても名高い英雄だ。ヘラクレスの足止めという無茶な命令を果たした代償に、ランサーはそれ相応の消耗を強いられた。未だ疲労の抜けぬ中、ふざけた指示ばかりを下す、いけ好かないマスターに呼び出される。こうした事情が積み重なり、ランサーの機嫌は、急速に負の方向へと傾いていた。

——さらに。

「おい、言峰。お前、気付いてねえのか」

「む?」

俄かに真剣味を増したランサーの声に、歩いていた言峰の動きが止まる。何ことかと振り返る言峰に、槍兵は直接ではなく念話で語りかけた。

『サーヴァントだ。どいつかは知らねえが、この近くに潜んでやがる』

『——ほう』

そう。マスターに呼び出されただけだというのに、ランサーが槍を手にする理由。それこそが、ランサーが先ほどから感じ取っていた、サーヴァント特有の“気配”だった。一見隙だらけのように見えて、クー・フリーンは、一瞬で戦闘に移行できるよう微妙に姿勢を整えている。

ランサーには、高い索敵能力は備わっていない。その彼に感知されるということは、相手はアサシンではない。言峰の話によれば、セイバー、キャスター、ライダーの三騎

は、一昨日の戦いで敗北している。となれば、残るはアーチャーかバーサーカーなのだが……。

『どうにも妙だ。アーチャーもバーサーカーも、こここそするような柄じゃねえ。——言峰。その三騎、本当に死んだんだろうな』

『そのはずだ。ライダーはセイバーに、キャスターとセイバーはアサシンに、それぞれ敗北したと聞いている』

『チ——となると、アサシンが誘つてゐるって線もあるか。どうする、言峰。引きずり出さうと思えばできないことはねえが』

罠に誘われているとなれば、飛び込んで罠ごと食い破るのがランサーのやり方である。事実、アサシンとライダーが張った罠を、ランサーは正面から堂々と突破してみせた実績がある。にも拘らず、彼が飛び出していかない理由は、一応はマスターの趣向を尊重しているが故だった。

敵の種別と、予想される罠を思考する。普段なら、些事を一々省みぬランサーではあったが、性懲りもなく、またアサシンが誘いを掛けている可能性もある。アサシンと連携していた、あの”影”を相手取るのは、戦巧者のランサーをしても難しい。あれと戦わねばならぬ事態だけは、どうしても避ける必要があった。

しかし、向こうから来るといふのなら話は別だ。売られた喧嘩を買わぬほど、ラン

サーは温厚な性格をしていない。敵サーヴァントを炙り出すべく、探索の呪刻ベルカナルーインが描かれようとしていく。

……が。ランサーの雰囲気は鋭くなつていくのとは裏腹に、言峰はあくまで自然体だ。敵サーヴァントが近くにいるというのに、その表情には余裕さえ伺える。疑問を抱いたランサーが、今度は直接詰問しようとした時、言峰は静かに口を開いた。

「ランサー。おまえの働きぶりには目を見張るものがあつた。彼の大英雄ヘラクレスと二度も戦い、二度とも生還するなど、並の英霊では到底為し得まい。

——認めよう。おまえは確かに、生き残ることにかけては一流の英雄だ。生半な方法では、おまえを倒すなど不可能だろう」

「なんだ、急に改まつて。今更おだてたつて何も出ねえぞ」

思いがけない殊勝な言葉に、ランサーは気味が悪いと顔を顰める。無茶な命令を出すことこそあれ、この男がランサーを認めるような発言をするなど、未だかつてないことだった。

らしくないことを言つたと自分でも分かっているのか、苦笑を漏らす言峰。一拍置く  
と、何のつもりなのか、その右腕が高く掲げられ——

「故に、令呪を以て命じよう。——自害しろ、ランサー」

「な——ッ!？」

驚愕する槍兵。令呪の発動。サーヴァントとして招かれた身である以上、その絶対強権には、どうあつても逆らえない。極端に高い“狂化”状態か、最高位の対魔力を有していない限り、令呪の命令はサーヴァントにとつて絶対だ。——例えそれが、自害しろという、理不尽極まりないものだったとしても。

マスターの令呪は問題なく発動した。英霊すら拘束する絶大な魔力が迸り、赤い閃光を放った令呪が消え失せる。青い槍兵は、此処に己が心臓を槍で貫こうと——

「——だろうな。いずれこんなことになるだろうとは思つてたぜ」

直前。槍の穂先は、何者を貫くこともなく、その方向を変えていた。真紅の魔槍は、”マスター”から”裏切り者”へと変わった神父を睨み据える。

如何なる事態にも動じない余裕を漂わせていた言峰は、ここに来て初めて、その表情に驚愕の色を纏わせた。令呪は確実に発動した。ならばランサーは、自らの心臓をその魔槍で貫かれていなければならない。だというのに何故、この男は傷一つなく悠然としていられるのか……？

「ランサー……質問は一つだ。なぜ私の令呪がおまえには届かない？」

「なに、キャスターの奴がちよいと面白い宝具を持つていたんでな。奴と同盟を組んだ

時に、ひとつ頼み込んで、テメエとの契約をチャラにしてもらったってわけさ」

\*\*\*

時間は、少し遡る。キャスターの拠点となっていた柳洞寺。その境内で、二つの人影が相対していた。

一方は、この場所の主であるキャスターのサーヴァント。そしてもう一方は、青い鎧に身を包んだ、ランサーのサーヴァントだった。

サーヴァントとサーヴァントは、互いを殺し合う宿命にある。これほどまでの至近距離ならば、瞬きの間にどちらかの命は失われよう。にも関わらず、未だ戦端が開かれていない理由は、両者の結んだ奇妙な同盟——バーサーカーを倒すまでの、条件付きの契約にあった。

「——マスターとの契約を断ってほしい、ですって?」

ローブに身を包んだキャスター。ギリシヤ神話において、悪名高い魔女として語られるメディアは、冷酷な評判とは裏腹に、啞然とした様子でその言葉を口にしていた。

対する槍兵は、平静さを崩さない。思わぬ頼みによってキャスターを驚かせたランサーは、どこか品定めをするような視線で魔女を射抜いている。ああ、と肯定の意を口

にすると、ランサーは淡々と己が心情を語り出した。

「あの野郎……言峰はどうにも信用ならねえ。前々から疑っちゃいたが、今回のようやくはつきりした。

——まるまる一晩、バーサーカーの足止めをしろだと？ バカを言え。まともなマスターなら、そんな命令は寄越さねえ。あいつは完全に、オレを捨て駒と見てやがる」

この晩、槍兵は一つの命令を下されていた。

キャスターとライダー、セイバーとアーチャー、異なる二つの陣営の交戦。そこに要らぬ邪魔が入らぬよう、バーサーカーのサーヴァントを足止めする。キャスターの支援という意味では、確かにそれは理に適ったものかもしれない。

しかし、此度のバーサーカーは規格外だ。知名度、功績、英霊としての格。ヘラクレスは、その全てで最高位と言える。何せ、死後には神に列せられたほどの英雄だ。生半な英霊では、まともに戦う事さえ不可能と言える。その足止めなどという暴挙は、天災を相手取るにも等しかろう。

クー・フリーンは、そのヘラクレスと真つ向から戦う事が可能な、数少ない大英雄の一人である。しかし、知名度の補正、マスターの力量などを鑑みれば、ランサーが圧倒的に不利になる。宝具である『刺し穿つ死棘の槍』さえ通用しないとあつては、勝ちの目は皆無に等しい。



状況を十分に理解していながら、無謀な命令を下す言峰綺礼。それは彼が余程の愚鈍であるか——それとも、ランサーを使ってこれ以上まともに戦う気がないか。少なくともランサーは、彼の意図が後者にあると判断していた。

「オレも魔術の腕には覚えがあるが……今回のオレは魔術師キャスターじゃねえ。マスターがまともじゃなからうが、従うしかないわけだ。

だが、お前は違う。お前の今のマスター——葛木とか言ったか？ あいつに魔術の素養はねえ。ということは、今のマスターとお前を召喚したマスターは別だ。つまりお前は、鞍替えの手段を持っている」

「……驚いたわ。ええ、その通り。確かに私は、マスターとの契約を破棄する手段を持っている。まさか、それを貴方に見抜かれるとは思ってもみませんでしたけど」

葛木、という言葉が出た途端、キャスターの雰囲気は剣呑なものになる。しかし、そこから続けられた分析は、謀略に長けたキャスターをして唸らせるほど、正確無比なものだった。

ランサーの言葉は正鵠を射ていた。奇しくもランサーと同様、キャスターもまた、今のマスターと本来の召喚主が異なっている。本来の召喚主は、それなりの魔術師ではあったのだが……同じ魔術師であるが故に、より優れた魔術の腕を持つキャスターとは折り合いが悪く、彼女は早々に己がマスターに見切りを付けていた。

主を見限ったメデイアは、数々の裏切りの逸話に相応しく、とある手段によってサーヴァント契約を破棄し、自らの召喚主を殺害した。だが運悪く、契約を破棄した直後にランサーと交戦する羽目になり……紆余曲折を経て、半ば拾われるような形で、今のマスターと再契約を結んでいた。

「貴方とマスターとの繋がりを断つことはできるわ。より優れたマスターが欲しいのなら、私がマスターになってあげましょう。」

——でも、ランサー。貴方も魔術師というなら、等価交換の法則は知っているわね。見返りに、貴方は何をしてくれるというの？」

メデイアは、魔術師としては現代の魔法使いさえ凌駕するほどの腕を誇っている。魔術師としての力量と備蓄した膨大な魔力によって、サーヴァントがサーヴァントを従えるという聖杯戦争のルールを覆す行為さえ、彼女は容易く成し遂げる自信があった。

だが、できるということと、それを実際に行うことは違う。ランサーの頼みに応じるのは簡単だが、それ相応の対価を払ってもらおう——同じ魔術師として、キャスターはランサーにそう告げている。

「二つは、オレの首だ。オレはこれから、お前の軍門に下ってやる。オレは元々聖杯なんぞに興味はねえ。最後になったら、潔く退場してやるよ。」

そしてもう一つは——お前のマスターの命だ。見た所、お前はあの葛木つて男に大層

ご執心だ。赤枝の騎士の名において、この先お前と敵対する事になったとしても、あの男だけは見逃してやる。

どうだ、キャスター。お前にとつても、悪い話じゃねえだろう」

「……………」

自分がマスターに向ける感情が見抜かれていた。その事実には、ローブの下でキャスターは渋面を作る。

元々、彼女が聖杯に託す願いは、ただ故郷に帰りたいというだけの純真なものだった。しかし、新たなマスターとの出会いを経て、彼女の願いは少しずつ変化していった。……率直に言えば。キャスターは、今のマスターである葛木宗一郎に、恋愛感情を持っていたのだ。

主を裏切り、行き倒れていたキャスターと、元暗殺者という経歴を持つ空虚な男。その出会いは、一つの奇跡と言っても良かっただろう。今となっては、彼と過ごす日常こそが、彼女が懐きただ一つの願いだった。……その願いを叶えるためには。ランサーの申し出は、確かに有用である。

クー・フリーンは強力なサーヴァントだ。バーサーカーやセイバーには一歩劣るにしても、その能力は信頼できる。加えて、聖杯に託す願いを持たぬという彼は、契約対象としては正に適任だ。マスターとなった自分のバックアップがあれば、ヘラクレスの足

止めという難業さえ成し遂げることだろう。いや、セイバー陣営の撃退というキャスターの目論見を果たすためには、どうあつても彼にはバーサーカーを食いとめて貰う必要がある。その点においても、今契約を変更するというのは妙手だった。

そして、彼が申し出た二つ目の条件。キャスターにとっては、そちらの方がより重要だった。如何に自分が魔術師として優れていようと、白兵戦能力では、クー・フリーンには及ぶべくもない。更に、彼の宝具は必中必殺。神の権能にも近いその力を揮われれば、キャスターでは主を守りきれぬだろう。そのリスクを予め消せるのであれば……確かに、キャスターにとってはこの上ない利益となる。

「……いいわ。その申し出、受けましょう、ランサー。これより汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に——」

再契約の呪文を紡ぎながら、キャスターはローブの下から一振りの短刀を取り出す。武器として見るには、余りに歪な形状をしたそれは、英霊メディアが有する宝具。”裏切りの魔女”の異名を取る彼女の宝具とはすなわち——ありとあらゆる魔術を破り、魔力による契約すらも無に帰す。”裏切り”の具現に他ならない。

キャスターの行為をどこ吹く風と、自然体で佇むランサー。その無防備な胸に、裏切りの宝具が振り下ろされる。短刀とランサーが触れ合う刹那、キャスターのローブの内側、静かに真名が紡がれた。

「――」  
 「破戒すべき全ての符」  
 「――」

\*\*\*

「――つまり。テメエはもう、マスターでもなんでもねえんだよ」

空気が凍る。空間そのものを怯えさせるほどの殺気が、言峰綺礼に叩き付けられる。

キャスターが残した魔力は、未だランサーの性能を十二分に発揮できる程度の貯蔵がある。彼女は、契約対象の変更と同時に、経路の分割をも行つて見せたのだ。ライダーと同様、マスター権はキャスターにあつたが、ランサーへの魔力供給源は、柳洞寺に貯められた膨大な備蓄だった。経路分割の影響で、マスターとなつたキャスターが消えた今であっても、貯蔵庫との繋がりは生きている。それほどまでの反則を行つておきながら、マスターであつた言峰に気付かれず契約変更を行い、且つ念話の経路は残すという周到さ。メディアはまさしく、神代の魔術師に相応しい卓越した力量の持ち主だった。

とはいえ、サーヴァントの維持には、魔力だけではなく、この世に留まるための依り代が必要となる。いかに膨大な魔力があれど、依り代を持たぬランサーは、このままでは一日と保たずに消えるが運命。……だが。それだけあれば、彼の目的を果たすには十分だった。

言峰綺礼が、このまま自分をサーヴァントとして戦うならそれで良い。気には食わぬが、むざむざ消えるよりは、もう一度言峰と契約を結び直した方がマシである。

——だがもし。言峰が、自分を本当に切り捨てるつもりだったのなら、その時は。

「バゼットの仇を討たせてもらおう。覚悟はいいか、言峰綺礼」

轟、と魔力が収束していく。あらゆる敵の心臓を貫く魔槍。その穂先は、真っ直ぐに怨敵の心臓に向けられた。

この男が何を狙ったのかは知らぬ。しかし、自分に自害を命じた以上、言峰綺礼は既に敵だ。そもそもこの男は、正当なマスターから権限を奪い取った篡奪者に過ぎない。そのマスター権すら失われた今、ランサーにとつて、言峰はここで倒すべき仇だった。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。此度の聖杯戦争において、クー・フリーンを召喚した、正当なるマスター。聖杯戦争に最後まで勝ち残るといふ、彼女への義理が果たせなくなるのは惜しいが——だからこそ、彼女のサーヴァントとして、その仇を討つ程度はしなければなるまい。

「……ほう。聖杯を手に入れる気は、とうにないというわけか。すでに死んだ女に、そこまで肩入れするとはな」

「ハッ。願望器に託す願いなんざ、ハナから持ち合わせちゃいねえんだよ。オレはな、ただ戦うために召喚に応じたんだ。今のオレに望みがあるとすれば——それは、バゼット

の信頼を裏切った、テメエの首を獲ることだけだ。

さあ、赤枝の騎士を舐めてかかったツケ——揃って返してもらおうか！」

響くランサーの怒声。姿勢は低く、一足で敵の心臓を射抜ける位置へ。最速の英霊、その神技を以てすれば、人間風情には抗うことさえ叶うまい。サーヴァントと敵対する、その致命的なまでの現実に対峙していながら。

「——ク」

笑っていた。先程までの狼狽は何処へ消えたのか。絶対の窮地にあるにも関わらず、言峰綺礼はくつくつと笑っていた。

己の令呪は効かなかった。ランサーは既に敵となった。如何に歴戦の代行者であるうが、サーヴァントを前にしては、象の前の蟻も同然。だというのに何故、この男はこれ程の余裕を漂わせているのか。

もしや、己の死期を察するに及び、とうとう気でも触れたのか。だが、言峰の内心がどうであれ、ランサーの採るべき道は決まっていた。コマ送りのように、槍兵の姿が掻き消える。

「あばよ。その心臓、貰い受ける——！」

絶対の死刑宣告。過たず心臓を穿つ魔槍は、一瞬にして言峰の眼前へと迫り——

「フルンデイング  
赤原獵犬」

——その寸前。何処かより飛来した魔弾に、必滅の一撃を逸らされていた。

「……なに!？」

ランサーの動きが止まる。螺旋に刃が巻き付いたような、異形の外観を持つ魔剣。滾り溢れるその魔力を、見間違うはずもない。これは紛れもなく、英霊の用いる最終兵器。物質化した奇跡——すなわち、宝具そのものだった。

ゲイ・ボルクに着弾した魔剣は、その穂先を逸らすだけでなく、槍の持ち主へも牙を剥こうとしていた。一度直撃した後、奇妙にその軌道を変化させ、ランサーへと向かう謎の宝具。不意を打たれながらも、槍兵は大きく後退し、その剣先から辛くも逃れた。

……だが。一度逃れたにも関わらず、剣の動きは止まらない。遙か彼方へ消えるかと思われた魔剣は、再度その軌道を変え、舞い戻る様にランサーへと直進する。その埒外の脅威に、男の顔が驚愕に染まる。

「馬鹿な、この宝具は——!？」

知らない。その事実には、ランサーは驚きを隠し切れなかった。

あらゆるサーヴァントと交戦したランサー。彼の知る限り、このような宝具を用いる英霊は存在しない。唯一例外があるとすればアーチャーだったが、彼の用いた武器と比



較して、この宝具は明らかに、含有する神秘も、武器としての質でも劣っていた。

激突する剣を防御しながら、ランサーは急速に頭を動かす。こんな事態は、ランサーの想定に入っていない。今まで遭遇したどの敵とも異なる宝具——その存在は、ありえないはずの新たなサーヴァントの存在を示唆していた。

「しやらくせえー！」

何度目かの剣との交錯の後、遂にランサーの槍が飛来する剣を破砕する。元より神秘の格が異なるモノ同士が全力でぶつかり合えば、より劣るモノの方が壊れるのは自明の理である。執拗に自らを狙い続けた剣を破壊せしめたランサーは、態勢を立て直すと同時、言峰綺礼の側に佇む新たな影の存在を認めた。

「デメエは……!?!」

いつの間にか。言峰を庇うような位置に立っていたのは、長身の男だった。

背丈や体格などは、ランサーとそう違いはない。だが、青い戦装束に身を包むランサーとは対照的に、その男は特徴的な赤い外套を身に纏っていた。その内には鍛え上げられた筋肉が見受けられ、この男もまた幾度となく死線を潜り抜けた猛者なのだと感じさせる。

髪の色は白く、肌は浅黒い。これだけでは、その男が何者なのかは特定できないが——ただ一つ。彼から感じられる、人ならざる独特の気配は、ランサーにとってはある種

馴染み深いものだった。それもそのはず。その気配は、ランサー自身も……いや、サーヴァントであるなら、誰もが持っている物に違いないのだから。

「正気か、八人目のサーヴァントだと——!?!」

信じがたい、と目を見開くランサー。聖杯戦争において、呼ばれる英霊は七騎のはず。その全てを、ランサーは自身の目で確認している。だというのに、眼前の光景は、彼の認識を根底から覆して余りある異常さだった。

「貴様——どういふことだ、言峰!」

視線だけで射殺しかねぬ気迫を以て、槍兵は神父を睨み据える。だが、激昂する彼とは対照的に、言峰は笑みさえ浮かべていた。その得体の知れなさが、ランサーをいよいよ苛立たせる。

「紹介しよう。彼は私の新しいサーヴァント、アーチャーだ」

「アーチャーだと?! 馬鹿な、二人目のアーチャーなど……」

絶句するランサー。彼の知り及ぶアーチャーと、眼前に立ちはだかるサーヴァントは、特徴があまりにも違い過ぎた。

変身能力を持つ英霊がないわけではない。しかし、この英霊は、彼が遭遇した黄金の弓兵とは違うと断言できた。あちらのアーチャーが纏っていた特殊な空気、神の血を引く者特有の気配が、このサーヴァントからは感じられない。半神の身であるクー・

フリーンだからこそ、自身と同種の存在には敏感だった。

新たなアーチャーは、大きな洋弓を携えたまま、ランサーをじつと観察している。おそらくは、先程放たれた宝具は、あの弓から射られたものなのだろう。ランサーに破壊されたとはいえ、あのサーヴァントがまだ次の手を隠していないと言い切れない。謎の英霊を前にして、ランサーは迂闊な動きが取れなくなった。

唯一、アーチャーの背後にいる言峰だけが、状況を楽しむように愉悅の色を貼りつけている。大仰な素振り手で手を広げると、言峰は元サーヴァントに朗々と異常の説明を始めた。

「ああ、おまえが言っているのはあのアーチャーのことか。アレは前回の聖杯戦争で召喚された英霊だ。此度の戦の正式な参加者ではない」

「なに……!?!」

前回の聖杯戦争。その言葉に、ランサーが思わず反応する。

サーヴァントとは、聖杯戦争が起こる度に、英霊の座にある”本体”から複製され直す存在だ。聖杯の力で現界しているサーヴァントは、聖杯戦争が終わると同時に消滅する運命にある。

だが言峰は、黄金のアーチャーは前回召喚された英霊だと口にした。本来消えていなければならぬはずの存在が、なおも現界を続けているその矛盾。その不条理を成立さ

せた原因は、ただ一つしか考えられない。つまり、あのアーチャーは……前回の聖杯戦争で勝者となり、聖杯を手にして受肉した英霊なのだ。

そう考えれば、納得がいく部分もあった。いずれ劣らぬ英雄が集う聖杯戦争で勝ち抜いた豪傑ともあれば、並の英霊では有り得まい。それほどの存在ならば、最初の剣を交えた時、自身の『刺し穿つ死棘の槍』を防がれたことにも不思議はなかった。

「つまり。此度の聖杯戦争は、今までは始まってさえいなかったということだ。……だが、最後のサーヴァントであるアーチャーが召喚された今、聖杯戦争は正式に開幕を告げた。

これまでに三騎の英霊が、器に捧げられている。ランサー。おまえには、四騎目の脱落者になってもらおう」

「……………」

そう言峰が告げると。赤い弓兵が、僅かに半身を動かした。握られていた洋弓は掻き消え、その代わりに、どこから持ち出したのか、白と黒の二振りの短剣が現れていた。

「ハッ。最近の弓兵は、どいつもこいつも双剣使いと来てやがる——舐められたもんだな、おい」

ランサーの全身から、苛烈なまでの怒気が迸る。言峰が発した言葉は、彼にとつて不可解な部分が多かった。しかしそれでも、この八騎目の英霊が敵であることだけは、十

分過ぎる程に理解できる。あのサーヴァントのマスターが言峰だというのなら、あれを打倒しなければ神父の首は討ち取れまい。

ならば、事は単純だ。全力を以て、あの正体の知れぬ弓兵を撃破し、しかる後に言峰を抹殺する。そう結論付けると、ランサーは紅の魔槍を、謎のサーヴァントへとまつづくに向けた。

「どここの英霊かは知らんが……ここで消える。オレの前に立つた不運を呪うんだな」

今のランサーには、令呪の縛りはない。キャスターが残した魔力量は、ランサーが全力戦闘を行ったとしても耐え得るだけの余裕がある。数々の横槍によって、今の今まで全力での戦いが望めなかったクー・フリーンだが、ここに来てようやく、何の枷もない戦いが可能となった。

傍から判るほどの膨大な魔力を纏わせ、槍兵の体が微かに沈む。弓兵との間合いは三間。サーヴァントにとっては、瞬時に詰めることが可能な間合い。

ランサーの態勢に対し、アーチャーは双剣を交差するように構える。彼が弓兵のクラスだとするならば、その得物は弓でなければおかしい。だが、如何なる思惑があつてか、アーチャーは弓を用いた遠距離戦闘ではなく、双剣による白兵戦闘を行おうとしていた。その分を弁えぬ不遜に、ランサーの殺気が強まっていく。

「ふむ。おまえの生き汚さは美德ではあつたが、今となつては邪魔でしかない。既にお

まえの役目は終わっている。

——故に、令呪を以て命じよう。アーチャー。今この場で、全力を以てランサーを打倒せよ」

「了解した。その命令に応えよう、マスター」

主の命令に応じるように、アーチャーが初めて言葉を発した。同時に、言峰の腕から莫大な魔力が迸り、アーチャーの全身を覆い包むような形で展開される。新たに消費された令呪に、ランサーは内心で悪態を吐いた。

令呪というものは、下す命令が単純であればあるほど効力を増す。今言峰が下した命令ならば、ランサーと戦う時に限り、アーチャーは本来以上の能力を発揮できるだろう。この英霊の正体は知らぬが、令呪の後押しを受けたとあつては、最早微塵たりとも油断する訳にはいかなかった。

「そういうわけだ。君にはここで消えてもらおう、クー・フリーン」

ランサーには知る由もないが。この英霊は昨晚、言峰綺礼によって召喚されたサーヴァントである。

さらにその前、一世一代の大手術を行い、その疲労から未だ完全に回復していなかった言峰だが、元々サーヴァントの召喚にそう大それた用意は必要ない。前回の聖杯戦争で、アサシンを召喚した経験のある言峰にとっては、召喚の下準備は手慣れたものだった。

た。

それでも、十全な魔力が望めない状態では、サーヴァントの召喚には問題が生じる。それを補ったのが、凜が言峰に預けた家宝のペンダントだった。赤い宝石は、その魔力の大半を消費し尽されていたが、それでも言峰の補助を行える程度の残量は残されていた。

そして、最後の問題——サーヴァントを召喚するために必要な、マスターとしての資格。令呪についても、天が言峰に味方した。本来ならば、予備令呪の残りを転用する事で強引にマスター権を得ようと目論んでいた言峰だったが、いざサーヴァントを召喚するという段階で、彼には新たな令呪が齎された。前回の聖杯戦争と同様、令呪の再配分という形で、大聖杯は言峰綺礼をマスターとして選出したのだ。ここに全ての用意が整い……言峰綺礼は、アーチャーのクラスに据えられた、最後のサーヴァントを召喚することとなった。

今回の聖杯戦争が狂いだしている影響なのか、この英霊は、自身の記憶が曖昧なのだという。加えてこのサーヴァントは、ステータスの低さが際立っていた。

しかし、サーヴァントに足りない部分は、マスターが補えばそれで良い。言峰の腕には、未だ幾画もの予備令呪が残されている。今この場でして見せたように、令呪を積極的に用いることで、言峰はサーヴァントの能力を補強する腹だった。

「抜かせ。消えるのは貴様の方だ、アーチャー。」

オマエには恨みはねえがな。オマエのマスターとは、少しばかり因縁がある。それを邪魔立てするつもりなら——決死の覚悟を抱いて来い」

槍を構えたランサーの姿が、一瞬にして掻き消える。最速の英霊は、その名に違わず、音さえ置き去りにしてアーチャーに突貫した。

交錯は一瞬。甲高い音を立て、アーチャーの右手から短剣が吹き飛ばされる。神速の刺突は、その衝撃だけで、アーチャーの守りを食い破つてみせたのだ。

「——間抜け」

二撃目。双剣使いは、手数が多いというその特性上、守りに回れば巖の如き堅牢さを誇る。だが、それは二刀が揃つてこそその話。片方の剣が失われた今、アーチャーにランサーの槍を防ぐ術はなく——

「トレース、開始オン」

——だからこそ。それを防いでみせた、有り得ないはずの双剣に、ランサーの表情が驚きに歪んだ。

今度は吹き飛ばされることもなく、双剣はランサーの刺突を凌ぎ切る。しかし、今見た現象の不可解さに、ランサーは追撃を放つことなく、槍を戻すと大きく後ろに飛び退った。



……ありえない。黄金のアーチャーも、確かに同じことをして見せた。だがあれは、初めから一振りの剣を隠し持っていただけの話。吹き飛ばされた双剣が、再度現れたわけではない。

剣が戻つて来たのとは違う。まるで新たに生み出したかのように、あの剣はそこに現れてみせたのだ。如何様な手品を用いているのかは知らないが、存外の手応えに、ランサーの顔が驚きから喜びへと切り替わっていく。彼にとっては予定外のことだったが、強敵との全力の競い合いという願いが、今この場で叶えられようとしていた。

「行くぜ、アーチャー。剣を執るだけはある、腕に自信があると見た。そら、オレの槍にどこまで喰らい付けるか試してみろ——！」

ランサーの姿が再び霞む。必殺の意志を以て放たれる槍は、弓兵の双剣に再び激突する。首を狙った一撃、足払いの一閃、腹部を狙った打突、腕に迫る薙ぎ払い。神域に達した槍の動きは、さながら一つの演舞のよう。美しささえ感じさせる流麗さで、槍兵は間断なく槍を繰り出す。

……本来、この戦闘は戦いと呼べるものではないはずだった。遠距離攻撃を主体とするアーチャーは、槍の間合いに踏み込んだ時点で、自ら敗北を示すのと同義である。ならばランサーの槍は、とうの昔にアーチャーを貫いていたはずだが——どういふわけか、彼が繰り出す槍は、その悉くを凌ぎ切られる。その理由は、令呪の力のみならず、

アーチャーが見せる巧みな戦術にあった。

幾度となくランサーの槍が迸り、アーチャーの双剣を叩き落とすのだが、決まってその直後には、新たな双剣が現れている。無限に現れる双剣の壁と、巧妙に槍先を逸らす技の冴えが、間一髪でアーチャーの首を繋いでいる。それは黄金の英霊のような天性の眼力ではなく、血の滲む努力によって培われた、勘と経験によるものだった。

自分と戦えている。その事実が、ランサーに更なる喜悦を齎す。単なる邪魔者でしかないはずの敵は、守勢に徹しているとはいえ、自分の槍と競えるほどの実力者だった。無類の戦好きであるランサーにとって、これ以上の喜びはない。言峰を倒すための前哨戦ではあるが、ランサーの思考回路は、怨敵の存在を蚊帳の外に置いていた。

「面白え。これだけ弾いてまだあるとはな」

二十七本。それだけの双剣を弾き飛ばしたところで、ランサーが再び距離を取る。一方のアーチャーはと言えば、変わらず双剣を構えたまま。武器が湧き出るように現れるその異様さ、いずれは種も尽きると見て攻勢を掛けていたランサーだったが、此処に至っては、その総量は底無しと断ずる他なかった。

だが、槍を交わす内に分かったこともある。得体の知れぬこの英霊は、能力面ではそう優れていない。剣の技量も一流ではあり、あの黄金のアーチャーを遥かに上回ってはいたが、それでもセイバーほどには至らない。驚嘆すべきは、能力と技量の圧倒的な差

を埋める、緻密なまでの戦術眼だった。

心眼。修行・鍛錬において養われた、戦闘を有利に進めるための洞察力。天賦の才能ではなく、努力さえすれば誰もが手に届く、凡人が持ち得る数少ない技能。それを確かに、このサーヴァントは有していた。己の才の無さを、極限まで鍛え抜いた底力によって、この弓兵は補っているのだ。

「いいぜ、訊いてやらあ。テメエ、どこの英霊だ。双剣使いの弓兵なんぞ、聞いたこともねえ」

「フ——私がそれに答えるとも思つかね、ランサー。疑問があるのなら、その槍で存分に確かめるといい」

「抜かしたな」

アーチャーの挑発に、ランサーの瞳孔がすつと細まる。それに呼応して、槍が中空に文字を描いていく。

刻まれた呪刻ルーンは火炎アンサズ。戦闘に際し、魔術の使用を好まぬランサーだったが、この弓兵は自身の全力を揮うに値する。ならば、持ち得る手札を使わないというのは、好敵手への無礼であった。

「テメエを倒してから、その首に訊いてやるよ——！」

閃光と化したランサーの一撃。劫火を纏った剛槍は、絶大な熱量を伴って空間ごと周

困を焼き尽くした。

「ぬ——！」

その踏み込みに、アーチャーがたまらず後退する。ただでさえ、ランサーの槍捌きは神域に至る。鷹の目と戦術眼を以て、辛うじてその動きに追従していたアーチャーだったが、あくまで剣の腕は、凡人が極めた一流に過ぎない。神代の魔術を纏った槍撃なので、受けきれぬ道理がなかった。

退くアーチャーと、その領域を侵食するランサー。火炎を放つ魔槍は、寧猛なまでの勢いを以て弓兵に迫る。これほどまでの攻撃、令呪の支えがあつたとしても、まともに受ければ腕ごと砕けよう。そうと悟つたアーチャーは、双剣で槍の穂先を流すことで、必死に致命傷を回避しようと試みた。

「そらあ——ッ！」

大上段からの渾身の一撃。炎を撒き散らしながら振りかざされた一閃は、アーチャーの決死の防御によって辛うじて防がれた。しかし、アーチャーの双剣とランサーの槍では、内に秘める神秘が違い過ぎる。結果、アーチャーの剣は僅か一撃で粉碎され、防ぎ切れなかつた火炎が彼の肌を焼いた。

「——いつで終いだ！」

ぐるり、と回された剛槍が、今度は横薙ぎの軌道を取る。アーチャーが再びあの双剣

を持ち出したとしても、ルーン魔術の上乗せを受けた攻撃には耐えられないことは立証された。ならば、この一撃は防げない。自らが砕ける未来を幻視し、アーチャーは戦慄する。

そうと悟るや否や、即座に自己の裡に埋没するアーチャー。彼が持つ手札は、無限に湧き出る双剣だけではない。この状況、この盤面に適した武器を、彼は最速で検索する。コンマ一秒でも対処が遅ければ、この身は灰燼と帰するだろう……！

「<sup>トリス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始——」

ガキ、と空気が凍り付く音。

それは比喩でも何でもなく……アーチャーが新たに取り出した剣が、空間そのものを凍結させた音だった。炎と真つ向から反発する、氷という概念が、軋みを上げて魔槍に喰らい付く。互いの領域を奪い合おうと、異なる凶器が鎬を削っていた。

——誰が知ろうか。この剣の銘こそはアルマス。かつてシャルルマーニュ大帝に仕えた騎士が持つ、氷の刃と呼ばれる名剣であると。

だが、剣の銘がアルマスであるのなら、その持ち主は、フランス王であったシャルルマーニュ麾下の武將、チュルパンという大司教に他ならない。しかし、アーチャーの外見は、明らかに西洋の人物とは異なっている。ありえないの現象が、またもこの場に顕現していた。

その事実を知らぬランサーではあったが、アーチャーが自身の一撃を防ぐ剣を取り出したことを見て取ると、力任せに槍を振り抜いた。アーチャーはそれに逆らわず、ランサーの力を流すような形で、自身を致命の一撃から守りきる。またも必殺の槍が凌がれた事に、ランサーの表情には苦々しさが浮かんだ。

最初に射出した魔剣。無限に現れた双剣。今構えている氷の剣。これらの状況から鑑みるに——この男は、宝具の数と種類を頼りとする英霊だ。だが、それ故に、ランサーはこの英霊の素性が分からない。仮に高名な英霊であるならば、複数の宝具を持つ理由にも納得が行く。しかし、この英霊の格は、大英雄のそれとは程遠い。では一体、この敵は何者だというのか——？

「——ハッ。言峰のサーヴァントにしちゃ、えらく面白いヤツだな、おい。こいつは手加減抜きで行くぜ」

槍だけでなく、今度はランサーの全身を、隈なくルーンが覆っていく。原初十八のルーンを修めたランサーは、魔術師としても一流である。全てのルーンを身体強化に回した今、ランサーの能力値は一段階上にあると言ってもいい。難敵であるセイバーとバーサーカーのみに披露した、戦闘に特化した全力開放形態。今のランサーは、あの騎士王に迫るほどの力を有している。

侮っていたわけでもない。手を抜いていたわけでもない。にも関わらず、ここまで自

分に喰らい付いてくるのなら——ランサーは、自身の全てをこの一戦に注ぎ込むと決めた。

今度はアーチャーの剣ではなく、ランサーの槍から、空気を凍てつかせるほどの魔力が放たれる。因果逆転の魔槍は、その存在だけで世界を畏怖させるのか。彼が発する膨大な殺気は、それ自体が一つの凶器でもあった。

——疾風。

魔術の加護を受けた槍兵の体は、実に音の数倍という速度で、アーチャーまでの距離を詰めた。咄嗟に長剣を振り下ろしたアーチャーだったが、驚異的な速度の乗ったランサーの一撃は、その剣を弾き飛ばして宙に舞わせた。丁度二人の中間点で、剣が地に落ちるより早く——

「——」刺し穿つ——

紡がれる真名。解放する宝具は、因果を狂わす呪詛を持つ。それが放たれたが最後、敵の心臓は必ず穿たれる。ランサーは遂に、詰めに移ろうとしていた。

アーチャーの表情が強張る。今から放たれる一撃は、生半なものでは防げまい。新たな得物を取り出す時間はない。無限に引き延ばされた一瞬の中で、アーチャーは静かに目を瞑り——

「死棘の——」

「ブローケン・ファンタズム壊れた幻想」——

宝具発動の、その直前。両者の中間にあつた氷の刃が、手榴弾のように爆ぜ割れた。「なにつ……!?!」

それは、吹き飛ばされたランサーの言葉。あの英霊は、こともあろうに、宙に浮いていた自分の宝具を自爆させたのだ。爆風は両者を吹き飛ばし、弾け飛んだ剣の破片が、ランサーの全身に細かい傷を作っていく。

吹き飛ばされ、大地を転がるランサー。彼がようやく受け身を取り、立ち上がったのは、この広場の入り口に当たる場所。実に百メートル余りの距離を、ランサーは爆風で飛ばされたことになる。彼が掠り傷程度で済んでいるのは、解放寸前だった宝具が纏う、膨大な魔力故だった。可視化出来る程の魔力は、ルーンに加護もあり、爆裂の威力を減衰する事に成功していたのだ。

一方のアーチャーには、そのような護りはない。ランサーの宝具は、発動直前で防いだものの、その代償に爆裂を受けたアーチャーは、全身の裂傷から血を垂れ流していた。ダメージの度合いで言えば、ランサーを遥かに上回ろう。しかしこの時、ランサーの脳裏に浮かんだのは、ぞつとするような悪寒だった。

——まずい。

この距離。百メートル以上の距離は、ランサーを以てしても一足には詰められぬ。こ



の位置は、槍兵の間合いではない。ここは——アーチャー弓兵の距離だ。

不利と断じたランサーが、距離を詰めようと飛燕となつて疾駆する。しかしその時には、アーチャーの手には剣ではなく弓が握られており、その照準は、ランサーの眉間に合わせられていた。間に合わせぬ、とランサーの直感が警告する。

「I am the bone of my sword。」

アーチャーの声<sup>我</sup>が空気を震わす。悪手と悟つたランサーは、距離を詰めるのではなく、今度は回避しよう<sup>骨</sup>と後ろに跳ねる。ここまで弓兵を圧倒していたランサーだったが、両者の距離が離れたこと<sup>子</sup>で、攻守は此処に入れ替わつた。

回避すら不可能だと判断したのか、身体強化に回していたルーンを、今度は防護障壁として展開するランサー。その焦燥を、はつきり見据えた上で。

「——カラドドボルグIIII 偽・螺旋剣」

アーチャーは、その一撃を撃ち放つた。

弓兵の渾身の一撃は、さながら竜巻の如く、空間そのものを捻じ曲げ切り裂いて貫いていく。その威力は、先刻の魔弾を優に凌駕する。この一撃ならば、かの大英雄ヘラクレスの護りさえ乗り越えよう。

それほどまでの攻撃、直撃すればひとたまりもなく霧散するが定め。迫る矢の一撃を、ランサーは全力を以て迎撃する——！

「おおおおおおお——ッ!!!!」

上級宝具すら凌ぐ原初のルーンと、アーチャーが放った必殺の一撃が激突する。互いに互いを喰らい合う極限の激闘は、光と風を巻き添えにして、悲鳴のような音を響かせていく。

だが、どこまでも続くかと思われた盾と矛の競い合いは、辛うじて矛の方に軍配が上がった。守りを食い破ったアーチャーの矢は、その威力の過半を減衰されつつも、反射的に回避したランサーの半身を掠め、振じ切るような傷を負わせていた。血煙が舞い、ランサーの戦装束を赤く染めていく。負傷の度合いは、これで五分に逆戻りとなった。

しかし、ランサーの顔に浮かぶのは、傷を負ったことによる苦悶では無く、信じられないものを見たという驚愕。一瞬後には、驚きは怒りに取って代わられ、凄まじいまでの殺気がランサーの全身から放たれた。怒りのあまり、構えを取る足に力が入り過ぎ、足元の石畳に亀裂が走る。

「馬鹿な、カラドボルグだと……!? 貴様、いったい何者だ!」

螺旋虹霓剣カ  
ラ  
ド  
ボ  
ル  
グ。それはケルト神話に登場する英雄、フェルグス・マック・ロイが用いたとされる魔剣である。そしてフェルグスは、クー・フーリンの師匠にして盟友であった人物だ。

だが、このアーチャーはフェルグスではない。加えて言うならば、彼が用いた今の宝

具は、クー・フリーンが生前目にしたカラドボルグとは明らかに異なっていた。ありえないはずの人物が、ありえないはずの宝具を用いる異常。それも、使われた宝具が自身の盟友のものであれば、ランサーは黙っていることはできなかった。

恐ろしいほどの怒気を轟かす槍兵に対し、アーチャーは何ら感情らしきものを見せない。唯一、僅かに響められた眉だけが、自らの必殺の一手を凌がれたことへの当惑を露にしていた。アーチャーにとって今の一撃は、本来なら決め手となるはずの技だったのだ。

「なに、そう大した者ではない。しがないただの弓兵だよ」

「抜かせ。フェルグス<sup>叔父貴</sup>以外の者が、その宝具を使えるものか」

友人の剣を用いられた怒りと、得体の知れぬ相手に対する警戒心。感情に支配されかけたランサーだったが、彼の中の冷静な部分が戦況を分析することで、辛うじてその体を地面に縫い止めていた。

一つ、理解できたことがある。今アーチャーが用いたカラドボルグは“偽物”だ。本物のカラドボルグは、三つの丘の頂を一振りで斬り落とす魔剣である。矢として放つような逸話など存在しない。しかし、偽物と断じるには、あの宝具は余りにも力を持ち過ぎていた。ヘラクレスの十二<sup>ゴッド・ハンド</sup>の試練とまではいかぬにしろ、生半な宝具では、クー・フリーンの護りは貫けない。

そしてもう一つ。この英霊は、アルスター伝説に縁のある存在ではない。もしこのサーヴァントがアルスター縁の者であれば、ランサーにはそれと分かっただろうし、仮にそうであったとすればランサーは今ここに立っていない。アルスターに縁深い者がカラドボルグを使ったならば、クー・フリーンはそれに一度敗北しなければならぬという制約<sup>ゲッシュ</sup>を背負っているからだ。

あの能力値の低さや、用いた武具の神秘の低さから察するに、あの英霊はそう深い歴史を持つ者ではない。おそらくは近現代に名を残した英雄であろう。しかし、浅い歴史しか持たぬ英霊が、あれだけの宝具を持ち、クー・フリーンに食い下がるものだろうか……？

「——いや、違うな。テメエの武器は“持つてる”モノじゃねえ。どういう手品か知らねえが、テメエは武器を“創り出して”やがる」

名の知れぬ英霊が用いた手品の種。俄かには信じがたいが、カラドボルグという名の武器を、アルスターと無縁の者が用いる以上は、そう判断せざるを得なかった。武器を創り出す異能こそが、この英雄が頼みとする秘儀に違いあるまい。

「……大したものだ。僅か一戦でここまで見抜かれるとはな。さすがはクランの猛犬と云ったところか」

「このオレにその宝具<sup>カラドボルグ</sup>を使ったのはまずかつたな、アーチャー。フェルグスの剣<sup>叔父貴</sup>を勝手

に使われ、拳句に負けたとなれば、あの人に合わせる顔がねえ。

——オレの槍の能力は聞いているな、アーチャー。ふざけたモノを見せてくれた礼だ。この一撃、手向けとして受け取るがいい。」

未だ、百メートル以上離れた彼我の距離。アーチャーの射程であるはずのこの位置で……ランサーは、地に伏せるような構えを取った。同時に、彼が携える真紅の魔槍が、莫大と呼ぶのも馬鹿馬鹿しいほどの魔力を収束させていく。キャスターが残した予備魔力にはまだ余裕があるが——今その全てを消費し尽くすつもりで、ランサーは決着をつけようとしていた。

呼吸さえ困難な程に凍りついた空気の中、槍が静かに唸りを上げる。早く心臓を奪らせると、そう言わんばかりの魔槍の猛り。その脅威を見て取ったアーチャーは、これだけ間合いが離れているというのに、背筋が凍るのを隠し切れなかった。

——伝説に曰く。その槍は、放てば無数の鏃となつて敵軍を一掃したという。

歴史に刻まれた、或いは伝説を築いた数多幾多の名槍宝槍。その中でもこの槍は、殊に格別の逸品だ。海獣の骨より創られ、影の国の女王より引き継ぎし魔槍。その真骨頂は刺突ではなく——遠距離よりの投撃にある。此処にランサーは、己が宝具を全力で揮おうとしていた。

地を踏みしめた足は、石畳を割り、尚も深く沈んでいく。上半身は極限まで撓められ、

逆手に握られた槍がギリギリと軋みを上げる。戦場を支配するその威容は、紛れも無く世に名を轟かす大英雄のもの。紅の魔槍は解放の時を待ち望み、大気から際限なく魔力を吸い上げていく。

「——行くぞ」

青い颯風が空を翔ける。槍兵は突撃ではなく、踏み込みからの跳躍を選択した。神の血を引く紅の目は、赤い弓兵を睨み据え。手にした魔槍は、弓の弦のように引き絞られている。

空が震える。因果を捻じ曲げる魔槍に、世界そのものが怯えているのか。凍てついた時間の中、その槍だけがどこまでも赤く輝いている。それと対峙する弓兵は、伝説の具現を思い知ることになるだろう。

「——」<sup>ゲ</sup>突<sup>イ</sup>き穿<sup>ツ</sup>つ」

紡がれる真名。己が魔槍を、限界まで振りかぶったランサーは。

”<sup>ホ</sup>死<sup>ル</sup>翔<sup>ク</sup>の槍<sup>ク</sup>——!!」

己の全魔力を籠めて、その魔弾を撃ち放った——!

「……………!!」

<sup>ゲ</sup>イ・ボルク。因果を狂わせ、あらゆる敵を刺し貫く呪いの槍。その攻撃は、躲すことさえ望めない。一度放たれた槍は、相手がどこまで逃げようと、決して対象を逃がさ

ない。その威力は人を相手取る領域を超え、軍勢をも薙ぎ払う対軍宝具に相当する。

加えてこの一撃は、大英雄クー・フリーンの全力である。彼こそは、その槍で自身を貫かれるまで、一度たりとも敗北しなかつた赤枝の騎士。因果逆転の呪詛に加えて、ルーン魔術の上乗せを以て放たれた槍を、一体誰が防ぎ得ようか。この一撃は防ぐことも、避けることも許されぬ破滅の槍なのだ。

音を遙か飛び越す速度で、放たれた魔槍が弓兵に迫る。それに抗う無意味さを悟ったのか、此処に弓兵はその瞳を閉じ――

「I am the bone of my sword」

叩き付けられた一撃が、己を貫くその寸前。

「熾天覆う七つの円環」――!!」

己の裡より、最硬の盾を顕現させた。

――激震。

狙った相手を必ず貫く死棘の槍。本来ならば、防御さえ許されぬはずのそれは……アーチャーの盾に阻まれ、その役割を途上で放棄していた。

アイアスの盾。この宝具こそは、ギリシャ神話に登場する英雄・大アイアスが所持した、七枚の皮で敷き詰められたと言われる盾である。その防御力は数ある防御宝具の中でも群を抜き、大英雄ヘクトールとの戦いでは、彼の投石、槍撃、投槍を悉く防ぎ切つ

たと伝えられる。

その伝承故に、この宝具は投擲宝具に対しては無敵を誇る。他人が持つ宝具を、まるで己の物かのように次々と取り出すアーチャーは異様に過ぎるが、それもこの光景の前では些末なこと。無敵の盾は、最強の槍と真つ向から張り合い、空間そのものを揺るがしていく。アーチャーが持ち出した盾の前に、一旦は完全に停止したかのように思われた剛槍だったが……。

パリン、と硝子が砕けるような音が響く。それは盾を構成する七枚の花弁が、次々と貫かれていく音だった。かつて担い手が死に際し、流した血から花が咲いたという伝説を持つ宝具。まるでその逸話を再現するかのように、無敵を誇るはずの盾は、儂く花のように散っていく。

僅かな間だけ動きを止めたゲイ・ボルクは、猛烈な勢いで六枚の盾を打ち砕いた。一枚一枚が、城壁にすら匹敵する頑強な護り。並の飛び道具では、一枚目を破ることすら能わぬというのに——あろうことか、ランサーの槍は、一瞬にして六枚の盾を破砕し、苦もなく最後の一枚に到達してみせたのだ。大英雄ヘクトールの投槍すら防ぎ切った七枚目の盾が、途方もない衝撃に悲鳴を上げる。

このままでは突破される。決して貫かれぬはずの盾は、魔槍の前に頭を垂れようとしている。そうと悟ったアーチャーは、己の右手に左手を添え、



「ぬ、おおおおおお——ッ!!!」

全力を以て、護りを食い破ろうとする一撃に抵抗する——!

「——ッ」

——大気が爆ぜた。

ランサー渾身の一撃を、全魔力を結集させて凌がんとしたアーチャーだったが……『突<sup>グ</sup>き穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ル</sup>翔<sup>ル</sup>の槍』の一撃は、無敵の盾による弓兵の護りを、遂に打ち破ったのだ。

アーチャーの顔が歪む。それは己の敗北を悟っただけではなく、盾に莫大な魔力を注ぎ込んだ、その反動による激痛を堪えてのものだった。盾を支えていた右腕は裂傷に塗れ、胴から辛うじて繋がっているという程度。槍に貫かれるまでもなく、彼の体は既に限界に近づいていた。

最強の槍と無敵の盾は、何れ劣らぬ性能を持つ。故に、勝敗を分けたのは武具の性能では無く——それを支えた使い手の技、ランサーが用いたルーン魔術によるものだった。

ルーン魔術の後押しがあつたランサーと、そのような技術を持たなかつたアーチャー。だが、如何な言い訳を述べたところで結果は変わらない。アーチャーの盾を破壊し尽くした槍は、尚もその勢いを落とさず、一直線に猛進し——

「——な、に」

アーチャーではなく。その背後に控えていた、言峰綺礼に激突した。

威力はほとんど減衰していたとはいえ、そもそもは軍勢に対して用いる宝具。瞬時に腕を振りかざし、防御の体勢を取った言峰は見事だったが、深紅の魔槍はその守りを打ち砕き、神父の肩に食いつくと、彼を遥か後方まで吹き飛ばした。

教会の壁に叩き付けられ、衝撃のあまり受け身すら取れずに地面に崩れ落ちる言峰。その槍の持ち主は、彼以外の誰もが予想だにできなかった結果に、ニヤリと口の端を歪めて笑っていた。

「最初に言つたらう、オレの狙いはオマエだと。サーヴァントを盾にした程度で、オレの槍から逃げられるとでも思つてたのか？ 結局事の始まりから、テメエはオレの仇敵だったんだぜ」

倒した仇敵を冷笑するランサー。彼に悟られぬ間に新たなサーヴァントを召喚した言峰、そして彼の槍と拮抗して見せた正体不明の英霊。この二人は確かに優れた戦術眼を持つてはいたが、此度に限ってはクー・フーリンに致命的な後れを取ることになった。ランサーはこのアーチャーが戦上手であり、容易には倒せぬと見て取ると、必中必殺という槍の特性を活かし、その標的を密かに変更していたのだ。

しかし。怨敵を倒したというのに、ランサーはその場から動かない。マスターは倒れたものの、眼前のサーヴァントは未だ健在。彼の性格を鑑みれば、もう一悶着程度は起

こつても良さそうなものだったが……。

「……チツ、この身体ももう限界か。まあいい、オレの目的は済んだ。仕留め損ねたのは惜しいが、お前の分の借りは返したぜ、バゼット」

槍兵の体。青い甲冑が、まるで幻像のように揺らいでいる。ランサーはアーチャーの盾を貫く為、あの一撃にキャスターの残した予備魔力、その全てを叩き込んだのだ。

その結果がこれだ。元よりサーヴァントとは幽世の住人。依り代を失い、単独行動のようなスキルを持たず、残した魔力さえ使い切ったサーヴァントは、この世から消え去るより他に道はない。

「どうだ。お前の喚んだサーヴァントは、最後まで負けなかった。オレを選んだお前は、間違っちゃいなかったぜ」

クー・フリーン。クランの猛犬の異名を取る英霊は、正しく大英雄と呼ぶに相応しかった。

知名度の恩恵もなく、宗旨替えを強要された上、戦いの半ばまでは令呪に縛られ、全力を揮うことさえままならなかった。にも関わらず、彼は全てのサーヴァントと交戦し、あらゆる戦いで終ぞ負ける事はなかった。生前と同じように、最後の最後まで、彼は不敗の英雄だったのだ。

半分消えかけた体で、遠い空を見上げるランサー。その赤い瞳は、道半ばにして倒れ

た、本当のマスターの姿を見つめているのか。陽炎のように霞み始めた顔で、彼は苦笑いを浮かべて見せる。

「あいつに聖杯を届けてやれたら、言うことはなかったんだが……ここらが潮時か。気に食わねえこともあったが、存分に戦場を駆けられた。

ま、元々二度目の生つてのが夢みたいな話なんだ。夢にしちやあ、それなりに悪くなかったぜ」

そう満足げに笑みを残すと。ランサーのサーヴァントは、光の粒子となつて、大気の中に消えていった。

\*\*\*

「……マスター……」

ランサーの消滅を確認した後。傷ついた体を半ば引きずるようにして、アーチャーは神父の下へと駆け寄った。

召喚されて数刻と経っていない以上、信頼関係を築くまでには至っておらず、アーチャーは神父について詳しくは知らぬが、それでもこの男はマスターである。彼に今死なれたのでは、如何に単独行動のスキルを持つアーチャーといえど現界には支障を来

す。それでは、アーチャーがこの戦いに参戦した目的が果たせなくなってしまう。

しかし、ランサーの槍はこと生物に対しては絶大な威力を誇る。あの槍は対象への絶対命中能力だけではなく、回復阻害の呪いも宿しているのだ。例え致命傷を避けられようとも、呪いからは逃げられない。

地面に倒れ伏し、槍が貫通した肩だけでなく、内臓を傷つけたのか口からも血を流す言峰。これは危うい、と汗を流すアーチャーだったが。

「——問題ない。こればかりは、天運が私に味方したか。やはり、主は私を見放さなかつたらしい」

直後、眼前に広がる光景に、自らの目を疑う事になった。

何の冗談か。死んでいてもおかしくないほどの傷を受けた男が立ち上がり、何でもなにかのように、平然と言葉を発して見せたのだ。到底信じられぬ光景に、アーチャーの瞳が大きく見開かれる。

「な、に……？　無事なのか、マスター!？」

ありえない。神父は確かに『突き穿つ死翔の槍』の一撃を受けた。あれほどの速度で壁に叩き付けられれば、全身の骨が砕けているはず。

アーチャーの驚愕と困惑。その視線を受けた言峰は、感情の宿らぬ瞳で僧衣を捲りあげた。筋肉に覆われた腕が顔を出し、監督役としての特権で得た、無数の令呪が姿を見

せるが——残り少なかった刻印の数は、更に姿をすり減らし、既に数えるほどとなっていた。

「フ……よもやこのような奇芸を、二度も使うことになるとはな」

どうも令呪を使ったようだが、アーチャーには追加の命令は加わっていない。理解できぬ、と首を捻るサーヴァントに対し、言峰は歴史の皮肉に唇を歪ませていた。

盾の展開、及び破られた後の槍の回避で精一杯だったアーチャーは、言峰の動きにまでは気付けなかったが……彼が用いたのは、身に積んだ功夫。即ち、凄まじいまでの技量に達した八極拳だった。

『纏』の化勁。格闘戦に於いて、相手の拳を巻き取って流す技の一つである。言峰は、二画分の令呪による魔力を叩き込む事で防御力と速度を跳ねあげ、飛来する槍を絡め取って軌道を逸らしたのだ。この超常的な防御手段は、十年前——彼の大敵であった衛宮切嗣に対して用いられたものだった。

加齢により、当時より身体能力は落ちていますが、技量の方は年月を経て更に冴えを伸ばしている。当時この技を使用した際は、反動で右腕が破壊されたものだったが、二度目ということもあってか今回はそれほどまでのダメージはない。しかし、槍が突き刺さった肩の筋肉は断裂し、魔力を注ぎ込まれた血管は破裂している。治癒魔術の達人である言峰をしても、しばらくは動けぬ傷だった。

「今のは、さすがに死を覚悟したのだがな。——以前にも言われたことだが。聖杯というものは、私に余程の期待を寄せているらしい」

そう苦笑する言峰。いくら彼が達人の域に立つ拳法家でも、ランサーの一撃を受けては生きていられる道理がない。言峰が今立っていられるのは、先ほど彼が口にした通り、天の加護が働いたと言う他ない幸運によるものだった。

まず第一に、ランサーの宝具の威力のほとんどが、熾天覆う七つの円環によって減衰されていたこと。本来の威力の『突き穿つ死翔の槍』ならば、人間一人の体など粉微塵に打ち砕いていた。

第二には、令呪の残存数。もし令呪が一画しか残っていないければ、彼が槍を逸らすことは敵わなかった。ただでさえ十年前の戦闘で消耗しているというのに、ランサーやアーチャーに行使した分もある。今回の聖杯戦争で脱落したマスターの数、彼らが遺した令呪の数が少しでもずれていれば、言峰に予備令呪は残されていなかった。

そして第三に、言峰が飛び道具に対する切り札を持っていたこと。とはいえ、本来ならこのような防御手段は有り得ないし、言峰とて用いない。咄嗟に受け技の応用を思いついたのは、彼が十年前、この技によつて命を救われていたからだ。皮肉にも、衛宮切嗣が今の言峰を助けたとさえ言えるだろう。

「まさか私の仇敵が、私を生き長らえさせる結果になるとはな。克蘭の猛犬は、つくづ

く運に見放されていると見える。

……だが、それも無意味ではなかった。即死は免れたが、これは深手だ。しばらくは私もここから動けまい」

ランサーの執念の結果か。ゲイ・ボルクの一撃は、致命傷こそ与え損ねたものの、言峰の肉体を傷つけていた。呪詛の混じった槍の傷は、治癒魔術に対して耐性を持つ。アーチャーと共に以後の聖杯戦争に加わる方針を立てていた言峰だったが、これでは予定を大幅に変更せざるを得ない。呪詛の大本である槍が消えている以上、傷が治癒するまで、数日とはかかるまいが……。

「ふむ——数日もあれば十分だ。それだけあれば、聖杯戦争の幕引きには間に合おう。案ずることはない、アーチャー。此度の儀は、我らの手によつて幕を引く事となる。

そうだな。手始めに君には……アインツベルンの森に向かつてもらおう。人使いが荒くてすまないが、あそこは今、少々面白いことになっているようだから」

通常の聖杯戦争ではありえない、八人目のサーヴァントとそのマスター。数多の宝具を用いる謎多き英霊と、人とは異なる理で動く教会の代行者。この異色の主従は、聖杯戦争を終局へ導くべく、遂に動き出すとしていた。



## 23. 誘いの森

——黄金の夢を見る。

いつか見た大きな城。玉座に座っている人物は、あの黄金の王——アーチャーだった。以前の戦いから月日が経過したのか、傷を負っていた形跡など欠片も無く、砕け割れていた黄金の鎧も綺麗に修復されている。ただ在るだけで世界を軋ませる圧倒的な覇気、この世の全てを射抜くかのような紅の瞳。命を燃やす激戦などまるで無かったかのように、男の姿は何一つ変わっていない。

……いや。正確には、彼では無く、周囲の光景の方が変わっていた。男に恐怖し、畏怖し、傳っていた何人もの臣下たち。王の絶対的な王氣オーラに支配され、後ろに控えていた彼らの姿が見当たらない。代わって彼の横に佇むのは、質素な衣装を纏った人物だった。

その人物こそは、この世界でただ一人、王に真つ向から刃向かった戦士。天地を揺るがす程の激闘を繰り広げ、比肩し得る者のない力を持つ王と、遂には引き分けに持ち込んで見せた男——いや、男なのかどうかは定かでは無い。更に言うならば、人間なのか否かすら判然としない。端麗な美貌と、どこか作りものめいた雰囲気は、精巧な人形

のようにも感じられる。

「——。今日は……………に……………か？」

王の遠方ではなく、後方でもなく、『隣』。彼と対等であると示すかのように、真横に並んだ人物——「彼」とも「彼女」とも「人間」ともとれぬ人物故、以後は「人形」と呼称する——は、まるで友人に接するような気楽さで、王に何かを問いかけた。

王である自分に逆らった大逆者。それも、自らに匹敵する力を持つ敵がこのような振舞いをするなど、今までのアーチャーなら激昂しても不思議はなかつたのだが……驚くべきことに、彼が見せた表情は苦笑。そればかりか、呆れたように肩を竦め、人形に對して自然体のまま答えを返す。何らかの冗談を口にしたのか、今度は人形の方がくすくすと笑みを零した。

信じがたいことに……そこにあつたのは、敵同士でも、王と臣下でもなく、対等な友人同士の姿だつた。恐らくはあの激戦を通して、二人の間には何らかの絆が結ばれたのだろう。今までは、笑みといえは嘲笑や哄笑しか見せなかつたアーチャーは、心から楽しそうに笑っている。やがて一しきり笑い終えると、アーチャーは玉座から徐に立ち上がった。どこかに出かけようというのか、玉座の間から出て行く彼の後を、軽やかな足取りで友が追いかけて行く。

——そこからの光景は、流れるように過ぎて行つた。

たった数日に過ぎなかったのか、それとも何年にも亘っていたのか。一瞬だったような気もすれば、永遠だったような感覚もある。王と人形という二人の超越者は、そのどれを取っても伝説を築けるような、数々の冒険に飛び込んで行つた。彼らの旅路が余りにも鮮烈で、躍動感に溢れていたから、見ている側はいつの間にか時間の感覚を喪失していた程。

絶対王者として君臨しながら、どこか退屈さのようなものを纏わせていたアーチャーは、友と共に歩む間はその呪縛から解き放たれていたようだった。未知なる愉悅の前では、飽きなど来よう筈も無い。

魔獣が跋扈する秘境を踏破したことがあった。熱風の荒野で、死の淵を彷徨つたことがあった。

洞窟の奥で、財宝を手に入れたことがあった。未知の呪いを受け、窮地に陥つたことがあった。

怪物と戦い、死闘の末勝利したことがあった。神の試練の前に、敗北を覚悟したことがあった。

迷宮と化した塔を完全制覇したことがあった。異界に踏み込み、背筋を凍らせたことがあった。

勝利と敗北。栄光と名声。成功と挫折。歓喜と苦痛。彼ら二人の冒険は、人間離れし

た偉業ではあったが、同時に誰よりも人間らしい彩りに満ち満ちていた。その輝きは、地上どころか天界の果てにまで届き、民衆の噂によれば、偉大なる神々ですら彼らから目を逸らすことが出来ぬ程だった。

「貴様が来てからというもの、我の蔵には落ち着きが無い。財宝を投げ撃つなぞ、頭の悪い癖をつけさせてくれたな」

幾多の苦難を踏み越え、数多の難敵と戦う中で、アーチャーはいつしか戦い方を変えるようになっていた。一本の剣を手にとって戦うのではなく、どこか異なる空間から、幾本もの武器を雨露と射出する。無茶苦茶な戦い方だが、無数の剣の軍勢を王者として率いるその姿は、どこか彼らしいと納得出来るものでもあった。彼が弓兵である所以は、友となった人形との戦いで身に着けたものと思われる、その特異な戦闘方法によるものなのだろう。

コレクター気質があるのか、財宝の蒐集に拘る彼は、次々と蔵に宝を収めていく。そしてその財は、次なる宝を手にする為の戦いで使われる。こうして、彼の宝物庫に蓄蔵される財宝は、加速度的に数を増していった。探検に夢中になり過ぎて臣下の女性に苦言を呈されたり、冒険からの帰還を祝う宴の席でうっかり宝物を落としてしまったりと、財宝に関するエピソードには事欠かないほどだった。

……しかし、彼が冒険や宝探しにだけ現を抜かしていたかといえ、決してそんなこ

とは無かった。友の存在故か、苛烈なまでの冷酷さや残忍さは多少なりを潜めたものの、彼は変わらざ王として君臨し、城下町である都市国家を発展させ、強固な防壁を作り上げるなど、治世面でもその慧眼が曇りなきことを示した。

冒険者として数え切れぬ程の伝説を築いた英雄にして、為政者として計り知れぬ程の功績を残した王。他の如何なる英雄ですら一步譲らざるを得ぬカリスマを備えた彼は、”全ての英雄たちの王”と言えるだろう。事実、いつしか人間たちは、彼のことを『英雄王』と呼ぶようになっていた。

王と人形が倒した敵の中でも、一際強大な存在が居た。森の神であり、恐怖の具現と謳われる怪物。目には石化の力があり、吼えれば洪水を引き起こし、口からは劫火を撒き散らす巨大な魔物。それを倒すと決めたアーチャーは、友と二人でこの難敵と戦い、遂にその首級を挙げることに成功した。止めを刺したのは、何時の間にか修復していたのか、友との戦いで破損した筈の黄金の剣だった。

自然の番人という役割を担っていた怪物が倒されたことで、王は彼が守っていた貴重な材木を手に入れることが出来た。しかし、人形は勝利したというのに、どこか釈然としない顔をしていた。友である王に、人形は静かに告げた。あの敵と自分は、友だったことがあったのだと。

「どうして君は、——を倒すと決めたんかい？ 神々はこんなことを命じなかった。

彼を倒して得た材木は、——の発展には役立つかもしれない。けれど、君が——の民の為に戦っていたとは思えない」

「いや、——を守る為だが？ 地上の全悪を倒しておかねば、民どもが飢え死のう」

その答えに、人形は疑問の表情で首を傾げた。その疑問は、傍から見ても把握出来るものだった。アーチャーは賢君であるのかもしれないが、その在り方は明らかに暴君だ。彼が敷く圧政は、結果的に正の方向に作用するのかもしれないが、民たちにとつては苦痛すら感じられるものだ。人間たちの上に君臨しながら、人間への思いやりなど欠片も持たないこの男が、今更民の心配をするなど、一体どういう風の吹き回しなのか。問いを発したのが友だったからなのか。不躰な内容に怒ることもなく、アーチャーは静かに上を見上げた。その先には、どこまでも続く青空が広がっている。しかし、彼の眼差しはその遙か彼方……空を超え、星を超え、更にその先にある、遠い何処かに向けられていた。

「不思議ではないだろう。我は人間の守護者として生まれたものだからな。この星の文明みらいを築くのが、王の役目だ」

人ならざる紅の慧眼は、距離だけでなく、時間さえ隔てた遙かな先を見通しているのか。その瞳には、一切の濁りが無い。人間の守護者という言葉と、民衆を搾取する暴君という在り方は正反対であるというのに、アーチャーの中では、その二つは矛盾しない

ものとして両立していた。

「守護にも種類があるろう。守ることだけが守護では無い。時には北風も必要だろうよ」

その一言で、人形がはつとした表情を浮かべた。整った容貌に映るのは、何かに気付いた、何かを掴んだという衝撃。この瞬間、友の本質を完全に理解したとでも言うように——数秒の空白の後、その顔は、晴れやかな表情に彩られた。

「そうか。つまり君は——」

口にした言葉の後半は、ノイズが混じって聞き取ることが出来なかった。しかし、アーチャーの耳には届いていたのだろう。彼はその言葉を聞き届けると、満足げに笑みを浮かべて見せた。今までに見たこともないような、爽やかな喜びを宿した笑み。それは英雄としてでも、王としてでもなく、一人の人間として、一個人としての理解者が現れたことへの、どこかこそばゆいものを含んだ感情の表れだった。

\*\*\*

「……ん。もう朝か」

ふと気が付くと。目の前に広がっていた筈の青空は消えてなくなり、代わりに見慣れた天井が視界を埋め尽くしていた。視線をずらせば、今度は布団と床が目映る。それ

で漸く、ここが自室であることを把握出来た。

まるで何年も経った後のような気がするが、実際には一晩眠っていただけだった。時間の感覚を狂わせた原因は、莫大な情報が濃縮された夢。聖杯戦争が始まってから、何度も見ているこの光景の正体は――

「アーチャーの記憶だ」

疑う余地はない。本人は記憶を失っているというが、それは箱の蓋が開かなくなったようなものであり、中身が消えてしまった訳ではないのだろう。その中身の一部が、サーヴァントとマスターの間に繋がる経路を通じて、アーチャーの過去を夢という形で映し出したに違いない。

この夢からアーチャーの正体が判るかと思つたが……時折映像にノイズが混じる上に、耳にする会話も、肝心の人名や地名に限って聞き取れない。これでは特定のしようがない。

内容を振り返るにしても、余りの情報量に混乱して来る。繰り広げた冒険や乗り越えた試練、手に入れた財宝の数が多すぎるのだ。そのどこか一つを取ってみれば、思い当たる逸話を持つ英霊が居ない訳ではないが、これら全てに該当する人物など聞いたことが無い。

……いや、待てよ。俺が「知らない」のではなく、「知られていない」という可能性も



考えられる。アーチャーがかなり古い時代の英霊だということは既に判っている。だとするならば、忘れられたり失われたりして、現代まで情報が伝わっていないとしても不思議はない。ギリシャ神話やケルト神話よりも更に古い、記録に欠落があるような時代の英雄……。

「もうちよつとで判りそうなんだけどなあ……」

アーチャーの正体が判れば、記憶を取り戻したり、宝具を使えるようにする切欠に繋がるかもしれない。前回の聖杯戦争で無敵を誇ったというあのサーヴァントが、本来の力を発揮出来れば、これほど心強いことは無いのだが。

まあ、判らないものはしょうがない。今はそれより、皆が起きてくる前に朝食を作つて、今日の計画を話し合わなくちゃいけない。

教会で桜の治療が済んだ後、俺は遠坂に、アインツベルンなら何か有効な手段を持っているかもしれないという考えを話した。バーサーカーを擁する陣営に頼ることに難色を示した遠坂だったが、意外にも言峰が賛意を表したことで風向きが変わった。しかし、キャスター戦の疲労が抜けていなかったこともあり、まずは家に戻つて一晩休息を取ることにしたのだ。疲弊した状態で、他のサーヴァントやあの影に襲われたら元も子もない。

未だ意識の戻らぬ桜は、「教会に置いていても出来ることは無い」と言峰に言われたこ

ともあつて、遠坂が暗示で捕まえたタクシーでここまで運び、今は客間で寝かせている。危篤状態からは脱したものの、言峰の治療はその場凌ぎに過ぎない。桜を助ける為に、アインツベルンの城に急がなくては……。

「……つて、あれ？」

と。布団から起き上がり、部屋から出ようとした瞬間。突然左足がもつれ、元いた布団へと倒れ込んでしまった。

寝起きで呆けていたのかと、気を取り直してもう一度立ち上がるも、やはり左足に……というか、左半身に違和感がある。いくら力を籠めようとしても、感覚が虚ろで、上手く動かすことが出来ないのだ。自分の体だというのに、まるで血が通っていないような気がしてしまう。

原因はおそらく、キャスター陣営との戦いでしかした無茶だ。少し時間は空いたが、今になって反動が出てきたのだろう。魔術の知識が薄い俺でも、英霊の武器を模倣するというのは只ことではないと理解出来る。半身が麻痺した程度なのは、むしろ幸運だ。

「まあ、動くといえれば動くし……遠坂に相談してみるか」

右足に重心を寄せる形で何とか立ち上がり、今度は倒れずに廊下に出る。ところどころでふら付きながらも、居間まで移動すると……珍しいことに、遠坂が既に座布団に

座っていた。その反対側で、アーチャーがいつもの無表情でお茶を飲んでいる。

「今日は早起きなんだな、遠坂」

そう声を掛けると。怪訝そうに、遠坂が半眼でこちらを見上げてきた。

「逆。士郎が遅いのよ。いつもは早起きつて聞いてただけど……やつぱり、昨日までの疲れが出てる？」

慌てて、時計に目を向ける。短針は八に差し掛かったところで……確かにいつもより、大分起床時間が遅れている。自分が寝坊したことよりも、時間の感覚が麻痺していて、それに気付かなかったことが驚きだった。

固まる俺を不審に思ったのか、アーチャーが湯飲みを置くと紅蓮の瞳を向けてきた。細められた双眸が俺の全身を射抜き、鋭く観察してくる。重心のずれに気が付いたのか、左手と左足に視線が注がれる。僅か数秒で俺を観察し終えると、アーチャーはふむ、と頷いて見せた。

「——本調子でないというのは真のようだな、雑種。その様子では、体の半分は感覚があるまい」

「えっ……? 感覚が無いって……ちよつと士郎、アンタ大丈夫なの!？」

目を見開く遠坂に、大丈夫だと腕を振つてみせるが……上手く行かずに、手ばかりか足がよろめいてしまう。倒れそうになるのを何とか凌いで座り込むと、心配そうな表情

を浮かべる遠坂と目が合った。黙っている訳にも行かず、現状を説明する。

「なんか、自分の体だつて実感が無いんだ。動くには動くんだけど、痺れてるっていうか……多分キャスターたちと戦った時に、アーチャーの剣を投影したせいだと思う」

「……は？」

遠坂の表情が凍る。異界の言語を聞かされたかのように、ぽかんとした、意味を理解出来ないといった顔。

数秒の自失の後、今度は怒りと困惑が入り混じつたような、理解出来ないというよりは理解したくないという表情を浮かべてぎろりと俺を睨んでくる遠坂。百面相を見ているのは中々面白いのだが、口に出すと確実に酷い目に遭うので黙っておく。

「ちよつと訳が分からないから、順番に訊いていくわね。まず、投影ってどういうこと？ 衛宮くん、使えるのは強化だけって言ってなかったかしら？」

……あ、これは怒ってる。すごく怒ってる。呼び方が『士郎』じゃなくなってるあたりが本気だ。慌てて、弁明の為の言葉を探す。

「投影はてんで使い物にならないから、強化しか使えないっていうのは嘘じゃないぞ。キャスター……というか葛木と戦った時もぶつつけ本番で、何で成功出来たのかわからないし。」

何かを投影しようとしても、俺は外側しか似せられないんだ。土蔵にも失敗作がいつ

ばい転がつてるから、見てもらえると解ると思うけど」

「……………衛宮くん。その失敗作っていうのは、いつ作ったもの？」

「……最近では作ってないから、多分一番新しいのでも何年前になるかな……って、どうしたんだ遠坂。物凄いや顔になってるぞ、おまえ」

怒りという段階を通り越して殺意さえ向け始めた遠坂に恐怖を感じ、座ったまま後退する。一体何が彼女の逆鱗に触れたのかは判らないが、このままでは冗談抜きで宝石を叩き付けられる。

呪詛が宿っているのかという視線を暫く叩き付けてきた後で、遠坂が大きく深呼吸する。あまりの剣幕に口すら利けずに様子を伺っていると、時計の長針が二周したところで、やつと遠坂が口を開いた。

「…………あのね、衛宮くん。あなた、自分の言ってることの意味解ってる？ 投影したものが今も残ってるですって？ 冗談じゃないわ。それが本当なら——話した相手が私以外の魔術師なら、ホルマリン漬けにされてるわよ」

そんな理科の実験みたいな…………という考えが一瞬脳裏を過つたが、遠坂の恐ろしい程真剣な瞳が、その言葉が冗談などでは無いことを雄弁に語っていた。

——遠坂曰く。投影魔術で創ったモノが、残り続けることは有り得ない。

そもそも投影とは、偽物を創り出す魔術である。本来存在しない筈のモノが在るとい

う矛盾を、世界は許さない。故に投影品は世界からの強い修正を受け、長時間姿を保つことは出来ない。あくまでごく短時間の間に、代用品を創り出す魔術なのだ。

しかし。俺が投影した作品は、自然消滅したことが無い。俺がイメージを維持できなくなった時か、自ら消そうと思った時か、物理的に壊れた時か……少なくとも、それ以外の要因で勝手に消えたという記憶はない。今までは他に比較対象もいなかったから、何も異常を感じていなかったが……遠坂が話してくれた投影魔術の基礎知識と、俺が行使している投影魔術の間には明らかな乖離がある。

では——俺が使っている魔術は、一体何なのか？

「そう。やつと何がおかしいのか気付いたようね……永続する投影魔術なんか、原理上有り得ない。しかもあなた、アーチャーの剣を投影したって言ってなかった？

何から何までデタラメよ。英霊の武器なんて、超級の神秘の塊じゃない。そんなのを再現するなんて出来る訳がないし、出来たとしてもとんでもない代償を払うことになる。なのに、あなたは体がちよつと麻痺したぐらいでピンピンしてる。魔術協会に知られたら、下手をすれば封印指定ものよ」

いや、確かに無茶をしたとは思ったが……俺は、そんなに異常なことをしていたのか。キャスター戦の直前、アーチャーが俺の投影品を見て考え込んでいた意味と、遠坂に相談しろと言った言葉の真意が、今になって理解出来た。

「今まで他の魔術師に知られなかったのは幸運だわ……。それにしても、息子に何も教えないなんて……。衛宮くんのお父様、一体何を考えてたのかしら。まともじゃないわよ」

「ちよつと待て、遠坂。親父は、投影魔術はやめておけつて言つてくれたぞ？ 確かに、魔術については気乗りしなかったみたいだけど……。それでも、色んなことを教えてくれたんだ。変わつてたのは認めるけど、俺はともかく、親父のことは悪く言わないでほしい」

「……ごめんなさい。少し言い過ぎたわ」

「気まずそうな顔で遠坂が謝つて来る。口が滑つたと言わんばかりに、僅かに顔を逸らして来るが……。遠坂がここまで言うとは、俺は余程おかしいのだろう。我ながら、自分で自分が怖くなつてきた。」

何の意図もなかったのに、サーヴァントを召喚してしまった事実。体を両断される程の傷を負つても、死なずに再生する回復力。通常考えられない、理を覆す投影魔術。どれもこれも、何一つ自分では原因が掴めないのだ。自分の知らないところで自分が変質していくようで、思わずぶるりと身震いする。

「ふん。その口ぶりでは……。貴様の異常には、父親とやらが絡んでいるようだな。魔術ではなく、より根本的な部分にだ」

ここで。それまで黙って俺たちを觀察していたアーチャーが、静かにそう呟いた。何やら意味ありげな物言い……それも、切嗣を引き合いに出されたとあつては無視することも出来ず、アーチャーの顔を睨みつける。

だが、その紅い瞳と目が合った途端、吐き出そうとした文句が霧消した。怒りでも嘲りでもなく、こちらの内面を見定めようとするかのような無感情な眼差し。言峰神父と対峙した時にも、自分が解体され分析されているような感覚があつたが、アーチャーの視線はまた質が違っている。何か理解の及ばぬ、高次の存在に見下ろされているような威圧感。

「——衛宮士郎、貴様は空虚な人間だ。後天的に失われたのであろうが、貴様には他の雑種どもにあるモノが欠けている。内から湧き出る夢、野望、熱意、欲求——そうさな、端的に言えば『やりたいこと』が存在しておらぬ。貴様の行動には、何ら愉悅の光が感じられぬからな」

「え？ いや、そんなことはないぞ。俺にだって、目指しているものぐらい——」  
「それは『やりたいこと』ではない。『やらなければならぬこと』だ。少なくとも、貴様にとってはない」

会話を遮る男の断言。反論しようとするが、夢で見た武器投射のように、アーチャーは俺の本質を貫く言葉を止めない。



「それが何であれ、人が自ずから目指す物事を達成した時には、正の感情が伴うものだ。伴わぬならば、それは外から強制された行為、単なる義務に過ぎん。

人を救いたいと言ったな、小僧。だが貴様は、いくら雑種どもの命を救ったところで己の快樂には繋がらん。それを心底『嬉しい』『楽しい』と実感したことはない筈だ。違うか？」

「……………」

「違わない。俺は正義の味方にならなくちゃいけない。だけど……そこに喜びなど、感じたことはあつただろうか。楽しさなど、感じてしまつていいのだろうか。

俺は十年前のあの日、一人だけ生き残つた。生き残つてしまった。そんな俺を救つてくれたのが、この上なく嬉しそうな表情をした切嗣で……その笑顔が、俺の心に残つたから。だから俺は、切嗣の夢を継ごうと決めたんだ。

強制された義務なんかじゃない。これは、俺が自分で選んだことだ。だというのにアーチャーは、何故それは違うと言うのか。

「喜びも楽しみも感じず、愉悦の何たるかも弁えず、課された義務のみを果たさんと己を磨り潰す——つまらん。修行僧でさえ今少し面白みがあるう。仮にも我のマスターを名乗るならば、それ相応の見所を用意しておけ」

「面白みって……」

人を指して面白くないとは、こいつは他人を何だと思っているんだ。前々から思っていたが、傍若無人なこの男、正体はどこかの暴君に違いない。

しかし……アーチャーは結局、何を言いたかったのだろうか。以前にも俺は、アーチャーから歪さを指摘されている。だが奇妙なことに、この男は俺が目指す方向そのものは否定しないのだ。

今言われたことを解釈してみると、どうもこの英霊は、俺が楽しんでいないことが気に喰わないらしい。どうしてそんなことに執着するのか、全く意味が解らないのだが……この英霊の言葉は妙に重く、聞き流すことは出来ない。何か俺にとって、重要な意味が隠されているような気もするのだが……。

「衛宮くん。あなたが『人助けをしよう』と思った理由って、なに？」

そこで。言いたいことは言ったとばかりにお茶を飲みだしたアーチャーに代わって、遠坂がこちらに訊ねてきた。弓兵の言葉の意味が咀嚼出来たのか、碧の瞳には何かに気付いたような悟りの色と、形容できない複雑な感情が浮かんでいる。

俺が人を助けたいと思う理由。その原点を紐解くとなると……どうしても、十年前のことに触れる必要がある。そこそが、衛宮士郎の始まりだからだ。

アーチャーの話聞いて、ちょうどそのことを考えていたところだ。記憶を遡って、一番最初の炎の地獄まで辿り着くと。前置きしてから、話したことのない自分の過去に

ついて、ゆつくりと語ることにする。

「あまり面白い話じゃないと思うんだけど、それでもいいなら」

十年前、冬木を襲った大火災……第四次聖杯戦争の余波に巻き込まれ、そこで何もかもを失い、それ以前の記憶は殆ど残ってさえいないこと。

誰も助けられず、無数の死体と、死体になりかけた人間たちの中で一人だけ生き残つて。それでももう終わりだと思つた時に、親父に助けられて。その時の切嗣の表情を見て、助けられるというのは尊い奇跡なんだと心に残つたこと。

自分だけが救われたのに、他の誰も救えなかつたから。だからこれからは、その分の償いをしなければならぬと思つたこと。

切嗣の最期に、正義の味方になりたかつたという夢と後悔を聞いて。親父に救われた時に、人を助けるということがどれだけ尊いかを知っていたから。だからその願いを、俺が代わりに叶えようと決意して……そして今まで、人を助けようと動いてきたこと。

「——なに、それ」

話し終えると。遠坂が、激情がごちや混ぜになつた表情を浮かべていた。怒りと、悲しみと、やるせなさ……光の当たつた宝石のように、瞳に宿る感情が次々と移り変わっていく。

「歪んでると思つてたけど、こんなに酷いなんて……。前にも言つたかもしれないけ

どね。士郎の中では、自分の命より他人の命の方が重いよ。どうしてそうなってしまったのか、不思議だったんだけど——今、やっとわかったわ。

あなた、歪みを通り越して……もう、壊れちゃってる。なんで、なんでそんなに——  
—ッ—

遠坂は、今にも泣きそうな瞳だった。無表情のアーチャーとは対照的に、握り締めた拳はふるふると震えている。

俺の事情は、遠坂には関係のない話のはずだ。マスターとしても、魔術師としても、遠坂が俺の過去に執着する理由はない。だというのに……何故彼女は、これほど真剣な眼差しで俺を案じてくれているのか。

激情を鎮めるように、遠坂は大きく深呼吸する。重々しく息を吐いたところで、幾分か冷静さを取り戻したのか、再び強い眼光がこちらに向けられた。

「身を挺して他人を助ける、っていう話は珍しくもないわ。そういう職業だつてたくさんある。でもそれは仕事であつて、報酬があるから成立していることよ。

でも、士郎の場合はそうじゃない。自分の命を投げ出して、見返りもなしにどうでもいい他人を助ける。あなたは、それを贖罪だと思つているのかもしれないけど……そもそも、士郎に罪なんてないじゃない。生き残つたのが罪？ 誰も助けられなかったのは悪いこと？

——それは違うわ。アンタは偶々生き残っただけ。他人を助ける責任も、抱え込む義務もないわ。そんなに自分を責めて、自分を殺していたら——アーチャーの言う通り。喜びも楽しみも、生まれるはずがないわ」

「……それは」

「違うって言える？」

否定しようとした俺を、鋭い言葉が遮る。反応を先読みされ、俺が絶句する様子を見て、遠坂は何故か悲痛な表情を浮かべた。

「言えるはずがないわ。だって士郎は、一度だって——心から笑ったことがないもの。そんなの、生きづらいだけでしよう。これ以上ないってくらい酷い目に遭ったんだから、後は幸せにならなくちゃ嘘じゃない……っ！」

——幸せ。そんなもの、考えたこともない。そんなことを考える機能は、とうの昔に欠落していた。

そんな余分を考える時間があるなら、どうやって他人を助けるかを。自分のことを考える余裕があるなら、どうしたら他人を救えるかを。それだけを考えて、今までずっと走り続けてきた。

何かがおかしいと、自分でも理解していた。お前は変だと、面と向かって言われたこともある。一体何が違っているのか、心の隅でずっと疑問に感じていたそれが……遠坂

の言葉で、臃げにわかつてきた。……けれど。

「遠坂の言うことは間違つてない。だけど俺は、これ以外に何も知らないんだ。

でも、それでいい。俺が間違えているとしても、誰かを助けたいっていう願いが、間違っているとは思えない」

「土郎、アンタ——」

「——つくづく察しの悪い雑種よな、貴様は」

俺たちのやり取りを眺めていたアーチャーが、見かねた様子で再び口を挟んできた。本当なら黙っているつもりだったのか、俺と遠坂の視線が向かうと忌々しげに目を細めたアーチャーだったが、頭を振ると、言い出したものは仕方がないともいうのか、億劫そうに続きを語りだした。

「誰も貴様の目的は揶揄しておらん。貴様の問題はそこではなく、動機と実現手段にある。雑種、おまえはそれらを混同しているようだが、この三者は区別するべきものだ。

動機については——いや、これは我が口を出すことではない。現代には、この手の類の専門家がいたはずだ。その導き手は我ではなく、小娘の方が適任であろう。

故に、我が語る口を持つのは実現手段についてのみだ」

面倒くさそうな態度を取りながらも、饒舌にそう語るアーチャー。この男は意図的に干渉を控えているのか、黙って物事を眺めていることが多いが、一度語り始めると意外

に詳らかに説明してくれる節がある。視点が違い過ぎる上にやたら難解で、肝心な部分は飛ばしたり話さなかつたりするから、結局こちらとしてはよくわからないままのことが大半なのだが。

「貴様は自分の手で直接命を救うことに拘る。自らが救わねばならぬ、そうでなければ自分が人を助けたことにはならぬというその頑なな思い込みが矛盾の根本よ。

刃物を使って人を殺めれば、その責は使われた刃物に帰結するか？——人を救うも同じこと。使われたものが他の人間だろうと道具だろうとサーヴァントだろうと、貴様が他人を助けたという結果は同じだ」

その言葉で、愕然とした。

以前、同じことを言われた。結果を出したいのなら、手段に拘るのは愚かだと。その時の俺は、思考が停止した状態だった。どうして自分の手で人を助けることに執着するのか、それすら自分ではわからずに、ただその考えに固執していた。

けれど、遠坂との会話で気付かされた。これは俺の贖罪行為だ。他人の為と言いながら、視野を広げもせず自分の為に間違った手段を選んでいるのなら——それは、自己満足に過ぎない。

目的を達成するために、自分以外の何かを用いるという選択肢が、俺の中からは欠如していた。追い詰められた時に他人を頼ることはあったが……そうでもない限り、俺は

その道を選ぼうとしていなかった。

「貴様たち人間は脆弱だ。権能を持つ神でもあるまいに、一個体で為し得ることなど高が知れている。故に貴様らは徒党を組み、道具を駆使することで成果を生み出してきた。他の人間や道具を用いた方が、遙かに効率が良いからな。」

小僧、おまえが改めるべきはそこからだ。我というサーヴアント器を使うのならば、まずはマスター手である貴様が使い方を覚えるべきだ。素手で壁を砕こうなど、阿呆のやることよ。今少し見識を広めれば、愉悅を学ぶ余裕も出来よう」

……アーチャーの言うことは、正しい。

道具を使ったとしても、途中で他人の力を借りたとしても、俺が自分で誰かを助けたという結果は変わらない。より多くの人を救いたい、俺の手で人を助けたい——この二つを矛盾なく両立させる道はあったのだ。

顔に冷水をかけられて、意識が覚醒したような思いだった。意識してそう考えていたわけではないが、自分自身だけで人を助けなければという思い込みは、確かに俺の根底にあった。アーチャーに他者を頼らない矛盾を指摘された時に、素直に認めることが出来なかつたのはそれが事実だったからだ。しかし今、改めて説明されたことで、少し視点を変えるだけで物事は全く違う姿を見せるのだとようやく腑に落ちるものがあった。

「——だが。如何な手段を用いるにしろ、目的をよく吟味してからにすることだ。」



先人を模倣すること、賢者に学ぶことは悪ではない。しかし、目的も動機も手段も、悉くが贗作というのは見苦しい。そのようなもの、真作の価値を貶める汚物に過ぎん。

何にせよ、自らだけが持ち得る芯を宿さぬモノには価値などない。この意味が最後まで理解出来ぬのなら、その時が我と貴様との契約の切れ目となろう。——覚えておくのだな、雑種」

言葉の途中で、俺を射抜いた双眸。向けられた強烈な殺気に、呼吸をすることすら忘れた。

緊張の余りに瞳孔が開く。断頭台の刃が、首筋に当てられているような緊張感。間違はなく……この英霊は今、衛宮士郎という人間を生かすか殺すか秤にかけていた。今までに何度もあつた、俺の存在そのものを裁定するような気配。

アーチャーの言葉は、これまでにないほど重かつた。これは警告だ。衛宮切嗣という他人の理想を追い、英霊という他人の武器を模倣する、継ぎ接ぎだらけの俺に対しての。悪鬼に等しい殺気と、賢者の如く深い忠告に、心身双方が威圧されて背中がじつとりと汗ばむ。

俺だけが持つもの。特異な投影魔術のこと、ではない。この男はもつと深いもの、衛宮士郎という人間の骨子そのものは何かと問うている。俺に道を示した上で、その道を選んだ理由を、道の先にあるはずの目的を考えろと……借り物ではない、本物の何かを

見つけろと。

あの大火災の時に、衛宮士郎は一度死んだ。俺を構成していたであろう要素は、その瞬間に消えたのだ。残った空虚な穴には、余所の模倣品と借り物で詰められた。いくら俺だけの芯を宿せと言われても、無いものはどうしようもないはずなのに——何故俺の心は、”ある”と告げているのか。俺自身にすら、そんなものは思い当たらないというのに。

「……些か喋り過ぎたな。貴様はどうもあの女に似ている。我ではなく、セイバーが貴様のサーヴァントである方が似合いだったろうよ」

と。アーチャーが視線を逸らしたことで、凄まじいまでの重圧はようやく霧散した。ほっと息を吐いて、そこで初めて、全身の筋肉が固まっていたことに気付く。

サーヴァントとしての立場からマスターの方針に意見するなら、二言三言で済んだだろう。この男が珍しくも仔細に亘って助言をしてくれた理由は、俺ではなく、今はいないセイバーにあったらしい。

何故かアーチャーが気に入っていたサーヴァント。名高き騎士の王……アーサー王だった彼女は、一体何を思ってたのだろうか。俺とセイバーの間にどのような共通項があったのかは定かではないが、アーチャーがこう言うということは、何かしら通じる部分があったのだろう。彼女と妙にウマがあったのは、そんな事情があったから

なのか。

「……そう。なんか放つとけないと思つたのは、アンタがあの子に似てたからなのね」  
弓兵の言葉に頷く遠坂は、何か感じるものがあつたらしく、落ち着いた表情を取り戻していたが……その瞳には、重い色が宿っていた。——まるで。ここにはいない、誰かの辿つた足跡を惜しむように。

「——さて、頃合いか。回らぬ頭も少しはマシになつただろう」

しんみりした空気が流れたところで、お茶を飲み干してついでに蜜柑まで食べ終えていたアーチャーが、おもむろにそう立ち上がった。

時計に目を向ければ、正午まで三時間を切つていた。日が昇りきらないうちに森の中へ行くのは危険だということで、急ぎとはいえ元々このぐらゐの時間までは待機している予定だったが、そろそろアインツベルンの領地へ向かう刻限だ。

桜を助ける為に、イリヤの力を借りる……誰かを救う為に人を頼る、その結果自分が誰かを助けることになるという、アーチャーが今まさに語つてくれた展開。あの英霊は、これも見越していたのかもしれない。自分では桜を助けてやれないという無力感に苛まれていた昨日と、何かに縋つてでも自分が桜を助けるのだと考えを改めた今では、心境が全く違つてくる。

「そうね。そろそろ出発しようかしら。士郎がイリヤスフィールと接触してたつていう

のはもういいとして……アンタの情報とわたしの調査結果があれば、数時間もかからな  
いはずよ」

ぎろりと、途中で睨まれる。アインツベルンの森へ向かうにあたり、イリヤの本拠地  
について隠しているわけにもいかず、彼女と会ったことを話した結果散々叱られたの  
だ。それはまあ当然なので、俺が何か言い返すことは出来ないのだが。

ともあれ、俺たちはこれからその城を目指さなければならぬ。魔術師の棲家とあれ  
ば要塞化されているだろうし、それに加えてイリヤにはヘラクレスという最強の戦力が  
いる。あの大英雄と戦えるサーヴァントだったセイバーがいない今、俺たちがそこに踏  
み込むリスクは限りなく増大していた。

「……………」

特に気負う気配もなく、いつものライダースーツ姿で——他にもどこからか服を手  
に入れてはいるのだが、この男は何故かこのタイプの服を好んで着ている——佇む  
アーチャー。噂に聞く第四次聖杯戦争の時のような、夢の中で見た古代の時のような、  
彼本来の力が揮えるのなら絶大な戦力と成りうるのだが。

ないものねだりしても仕方がない。こうなつては、後はイリヤスフィールとの交渉  
が上手く行くことを願うのみだった。

「行くわよ、士郎。わたしたちが生きて帰れるかどうか、桜を助けられるかどうかは、ア

ンタにかかつてるんだからね」

\*\*\*

——その異変に気付いたのは、イリヤスフィールだった。

アインツベルンの森は彼女の領地。魔術師の工房となれば、外敵に対して考え得る限りの防備が成されている。十年前の聖杯戦争で、敵サーヴァントに強行突破された経験から、ただでさえ堅牢だった護りは偏執的なまでに強化されていた。何か森に異常があれば、その結果はたちどころにイリヤスフィールの知るところとなる。

今回彼女が感知したのは、結界を踏み越えてきた侵入者の存在だった。時折迷い込んでくる一般人がいらないわけではないが、この時期に複数の反応があるとなれば確実に聖杯戦争絡みの相手である。二日前にランサーと交戦して以降は城に籠っていたイリヤスフィールだったが、こうも度々土足で踏み込んでくる無礼者が多いとあつては、不機嫌さを隠し切ることとは出来なかった。

「ランサーの次は誰かしら。キャスター、ライダー、セイバーは消えたみたいだし……まあ、誰が来ようと同じなんだけど」

彼女が従えるのは、最強の一角たるヘラクレス。例え聖杯戦争に異常が起きていよう

と、この英霊に抗える者は存在しない。サーヴァントへの自信と信頼を胸に、侍従たちに戦闘区域からの退去命令を出すと、イリヤスフィールはバーサーカーが眠る部屋へと足を運んだ。

特別に鑄造された個体であるイリヤスフィールは、マスターとしては通常の魔術師など及びもつかぬ域にある。その彼女を以てしても、ただでさえ現界の維持に莫大な魔力を消費するヘラクレスを、バーサーカーとして運用するのは無理があつた。魔力供給用にホームクルスを鑄造する、大気に満ちるマナを物質化して保存する、と幾つかの案はあつたが、自身の能力に誇りを持つイリヤスフィールはそれらを拒否。単体でヘラクレスを維持することを決めていた。

とはいえ、常時バーサーカーを稼働させ続けるのは難しい。解決策として、非戦闘時は彼を城の一角で休眠状態にし、魔力の消耗を抑えることにしたのだが――

「――バーサーカー?」

イリヤスフィールが部屋に辿り着いた時。彼が既に起きていたことに、彼女は驚きを隠せなかつた。

理性を奪われた英霊であるバーサーカーは、主の命令に逆らうことはない。いや、仮に理性があつたとしても、誇り高いヘラクレスがマスターを無視することなど考えにくかつた。だといふのに、眠れと命令したはずのサーヴァントは、既に意識を覚醒させ

……それどころか、準戦闘状態に入っていた。

主が近付いたことで、彼女を認識して小さく唸るバーサーカー。しかし、狂化して尚熟練の戦士の鋭さを失わない瞳は、彼女ではなく、城の壁の更に向こう——外から襲来する“なにか”を、最大の警戒心を持って睨み据えていた。

「……………」

ヘラクレスは、世に名高い無数の英雄豪傑の中でも、最上位と言つて過言ではない英霊だ。彼に比肩し得る者など、各神話体系でも頂点に位置する英霊か、或いはその上の神霊以外には有り得ない。少なくとも今回現界しているサーヴァントの中で、彼を一対一で打倒し得る者は、現時点では存在しないはずだ。

その彼が、未だ敵の姿は遠いにも関わらず主に背いて警戒態勢を取っている。尋常ではないと、只ならぬものを感じたイリヤスフィールは、森に展開している感知魔術の一つを起動させると、視覚を直結させて侵入してきた敵の姿を確認しようと試みた。

少女の視界が暗転し、一拍置いて城ではなく森の中へと切り替わる。何度か視点を更し、侵入してきた人影を捕捉したイリヤスフィールだったが……その異様さに、思わず眉を顰めた。

「……………なに、これ」

確認出来た影は二つ。

一つは、無数の黒い点が集合したような異形。よく拡大してみれば、それは何千という蟲たちの群れであることが見て取れる。おぞましく蟲が這い回る姿は、吐き気を催すようなものではあるが、イリヤスフィールはこの手の魔術を駆使する人物に心当たりがあった。虫使いといえば、まずマキリの家に連なる者と見て間違いはあるまい。

不可解なのは、もう一つの影だった。魔力反応から見て、サーヴァントであるはずなのだが、何か靄のようなものに覆われていて姿が確認出来ない。認識阻害の能力を持つ英霊かとも勘ぐったが、それにしても風体が異常に過ぎる。ヒトガタの上から、コールタールで出来た布を被せたような外見。

アインツベルンの目とて節穴ではない。マキリの陣営にアサシンのサーヴァントが属していることはとうに掴んでいた。しかし、あの存在がアサシンであるとは到底思えない。そもそも暗殺者のクラスに該当するサーヴァントであれば、こうして存在を視認することなど不可能な筈だ。

何かイレギュラーが起きている。ここまでの異常を従えらるゝとなれば、あの蟲の群れはおそらく間桐臓硯——マキリ・ゾオルケン本人であろう。陽の下に姿を晒せぬ彼が、かくも堂々と現れたならば、必殺の策を持ち合わせていることなど火を見るより明らかだった。

「敵よ、バーサーカー。迎え撃ちなさい」



背筋に冷たいものが走る。それを意図的に無視し、彼女は従者に号令を下した。客観的な戦闘能力を見ても、主観的な信頼でも、このサーヴァントは最強だ。彼の存在がある限り、如何な手を尽くしたとしてもマキリの謀略など粉微塵に粉碎出来よう。

同時に、城の警戒レベルを最大まで引き上げる。各種の迎撃魔術、防衛魔術は、ある程度であればサーヴァントにさえ効果を発揮する。十年前には、衛宮切嗣によって近代兵器によるトラップが仕掛けられていた城だが、何重にも重ね掛けされた魔術の護りは、決してそれらに劣るものではない。

最強のサーヴァントと、無敵の護り。これだけあれば何の心配もないと自分に言い聞かせ、バーサーカーに出陣の命を下したイリヤスフィールだったが……不可解なことに、大英雄はその場から動かない。

「バーサーカー？ どうしたの？」

不審に思ったイリヤスフィールが問いかける。一度ならず、二度までもの命令無視。これ以上は罰が必要だと、痲癩を起こしそうになった彼女だったが……狂戦士の表情を見て、続く言葉を失った。

理性を奪われ、思考能力を失い、言語能力さえ持たないバーサーカー。その彼が苦悩するような色を浮かべるなど、想定にないことだった。狂化によって染まっただけで、僅かに残る知性の片鱗が、彼に辛うじてごく単純な判断の余地を残させていた。――

即ち、逃げるか戦うか。

「……………」

僅かな逡巡の後、狂戦士は決断した。——勝てない。自分では、あの“なにか”に勝つことは能わぬ。

理性を持たぬ彼には、敵の戦力を測ることなど出来ぬし、何故その選択肢を選んだのかを説明することも出来ない。しかし、凄まじい程の試練を潜り抜けてきたヘラクレスが有する戦場の勘は、並のものでは有り得ない。直感に従った彼は、小さな主の体を傷つけぬように肩に乗せると、そのまま部屋から走り出した。

「えっ……………ちよつと！ 戻りなさい、バーサーカー！ そつちは……………」

敵を迎え撃つ為の正門ではなく、逃亡する為の裏門へと向けて一目散に駆け出したバーサーカー。彼の肩に乗りながら、慌てて静止の声をかけるイリヤスフィールだったが……………言葉にならぬバーサーカーの声に、続く言葉を飲み込んだ。言語にはならずとも、彼は確かに——”逃げる”と、そう口にしたのだ。

その瞬間。城の防御魔術と接続していた彼女に、電流が流れるような鋭い痛みが走った。遠見の魔術で確認した時は、まだ遠くにいた筈なのに……………城の防壁を、“なにか”が這い上がってくる。

駆け登って来るのでも、打ち砕くでもない。じわじわと、毒のように広がってくる



敵の存在を認識し、サーヴァントが急停止する。圧倒的な殺意を振りまき、ヘラクレスが斧剣を掲げてみせると——木陰の闇がもぞもぞと蠢き、枯れ枝を寄り合わせたように痩せ細った老人が、邪悪な笑みを浮かべて現れた。

「呵々——尻尾を巻いて逃げ出すか。その判断は間違っておらぬが……少しばかり、頭が足りなかつたようじゃのう」

「……マトウゾウケン」

何故この老人が先回りをしているのか。感知魔術と遠見の魔術は確かに——と少女が記憶を辿つたところで、老人が口にした言葉の意味に気付く。

間桐臓硯は、数百年の妄執が積み重なつた存在。アインツベルンの執念は千年を超えて、それは家全体でのこと。個人レベルに於いて、潜り抜けた経験、積み重ねた年月は到底臓硯に届くものではない。遠隔式の魔術を誤魔化し、イリヤスフィールの動きを読むことなど、この老人にとっては造作もない。……しかし。

「ルールを破つてまで、マスターになりたかつたの。間桐に属するサーヴァント——ライダーは消えたと聞いたわ。なのに、貴方は別のサーヴァントを従えている。

けれど、残念ね。ライダーが生きていたとしても、私のバーサーカーには敵わない。そのアサシンだけで勝てると思つているなら、貴方はとうとう脳まで腐り果てたみたいね」

音もなく老人の傍らに控える白面。姿を見せた暗殺者のサーヴァントは、しかし動きを見せずにいた。……いや。動くことなど出来ぬ、と言った方が正しいか。人を殺すことにかけては超一流の手練れであるアサシンだったが、人を超越したモノ相手では分が悪い。殊に相手が最強の一角とあつては、殺す以前に戦うことさえ不可能に近い。あの怪物を相手取るなど自分には……いや、他のどのハサン・サッバーハでも無謀なこと。アレを殺そうというなら、それこそ伝説の初代でもなければ――。

アサシンが凍えるほどの、絶望的なまでの戦力差。それを理解出来ぬはずもあるまいに、臓硯は嘲るように口元を歪ませる。それは何も知らぬ少女への、哀れみすら宿った笑みだった。

「そうか。その口ぶりではおぬし……倒れたサーヴァントの魂を取り込んでおらぬな？」

「――っ」

色を失う雪の少女に、老人がニタリと笑みを深める。彼の言葉は、この狂った聖杯戦争の異常を鋭く突くものだった。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは、聖杯の器――「小聖杯」として作られた少女である。母胎から出産されるといふ過程を経てはいるが、多種多様な呪的処理と、特殊な訓練・魔術的措置を施された彼女は、人間よりもホムンクルスに近い。

彼女の役割は聖杯戦争に於いて最強のマスターであることと同時に、小聖杯として脱落したサーヴァントたちの魂を留めておくこと。そして、その膨大な魔力を集めて機能する願望器として、更には最大の目的である「門」を開き、維持することである。

しかし今回、脱落したサーヴァントは既に三騎——彼女は与り知らぬことだが、ラッサーを含めれば四騎——存在する。だということに、小聖杯として正常に機能しているはずのイリヤスフィールの許には、一つたりとも魂が確認出来ていなかった。

では——死した英霊たちの魂は、一体どこへ行ったのか。

「ク、やはりそうであつたか。これは重畳。これで我が悲願が成就する目算が立つたわ！　まさか一騎たりともこちらに届いておらぬとは、儂の予想を超えておる。

だが、何事にも保険は付き物でな。真の小聖杯たるおぬしを抑えておけば、こちらの小聖杯を使いやすい。万一こちらが使えずとも、その時はおぬしと挿げ替えれば済むことよ。

故に——アインツベルンの聖杯は、今ここで貰い受けよう」

動けぬアサシンを余所に、どす黒い殺気が迸る。数百年の澱みは、生きる者全てを侵食するかの如く。だが老人が鬼気を宿したことで、イリヤスフィールは却って冷静さを取り戻した。

「そう。貴方の野望なんか知らないけど、敵との力の差も理解出来ないなんて——老

碌したのね、ゾウケン」

「いやいや。如何に儂とて、アサシンのみでその英霊に勝てるとは思つておらぬ。……言つたであろう。何事にも保険は付き物、と」

悪意の笑みが深まる。その途端、バーサーカーが絶叫し——アサシンが佇む眼前ではなく。後ろに向かつて、斧剣を叩き付けた。

激しい金属音。振り向きざまとはいえ、大地を抉り返すほどの一撃は、しかし同等の脅力によつて凌がれた。岩塊の如き剣を防いだモノを視認し、イリヤスフィールの目が驚きに見開かれる。

黒く変色し、暗い魔力を纏つて変質していても、彼女がそれを見間違えることはない。アインツベルンには、かつて召喚したサーヴァントの記録が存在していたし……何より。他ならぬイリヤスフィール自身が、十年前にその目で見ていたものなのだから。

「——あなた」

数ある聖剣の中でも究極の一。星に鍛えられた、人の願いをカタチにした幻想。その担い手たる英霊は、ただ一人しか存在しない。

即ち、誉れも高き騎士の王。此度の聖杯戦争に於いて、剣の英霊として召喚されたサーヴァント。しかし、既に彼女は敗退し、消滅の憂き目に遭つていたはず——そこでまで考えたイリヤスフィールは、剣を握る人物の姿に、またも驚愕を禁じ得なかった。

「本当に……セイバー?」

黒い甲冑。黒い剣。目を覆う黒い眼帯。生気を感じさせぬ白い肌。桁外れな程の絶大な魔力。そして、殺意と絶望が滲み出るような鬼気。彼女の知るものとは余りにも違う……それでいて、紛れもなく本人だと断言できる容姿。変わり果てた騎士王の姿に、イリヤスフィールはしばし思考を停止させた。

その間にも、二騎のサーヴァントは動いている。背後からの一撃を防がれたセイバーは、その場から大きく後退。一方のバーサーカーも、本能で明らかな異様さを感じ取ったのか、追撃することなく斧剣を構えて様子を伺っていた。騎士王の足元に、得体の知れぬ黒く淀んだ泥のような物質が広がっているとすれば、迂闊に近付くのは悪手に他ならない。

「……そう。どんな手を使ったのか知らないけど、セイバーを奪うだけじゃなく、汚染して使役しているのね。ルールを破るところか、矜持さえ忘れてしまったの、ゾウケン」  
「力、これは異な事を。規則を侵したと言うのなら、三度目の折におぬしらがしでかした愚行こそ禁忌であろう。此度の……いや、前回からの戦の歪みは、元を辿ればそれに帰結する。儂は単に、おぬしらの所業に便乗させてもらったに過ぎん」

そう語る魔人は、傍のアサシンに目配せすると一歩退いた。代わって、短刀を構えた髑髏の面が前出る。



二対一。単純な性能値ではヘラクレスに近いセイバーと、マスター殺しに特化しているアサシン。主を守りながら戦わねばならぬバーサーカーにとつては、至難を極める状況ではあつたが——彼こそは、十二の試練を潜り抜けた大英雄。この程度で後れを取るなど考えられぬことであり、それは彼の肩に乗る主が誰よりもよく理解していた。

彼らが真に警戒しているのは、セイバーでもアサシンでも、臆視でさえもない。セイバーの足元からじわじわと広がり、森を侵略していく汚泥。どのサーヴァントでもなく、その泥こそが、ヘラクレスをして即時の退却を決断させた脅威だつた。

アレに触れれば終わる。飲み込まれるか、騎士王のように見る影もなく汚染される。自らに迫る窮地ではなく、バーサーカーが己が従者ではなくなる可能性に、イリヤスフィールは恐怖すら抱いていた。

「さて、話はこれまでじゃ。儂の望み——不老不死の器のため、おぬしには贅となつてもらおう……！」

魔術師の殺意。呼応するように、髑髏の面と黒い剣士が前進する。雪の少女は己が魔術を練り始め、唸る狂戦士は敵を破砕するべく前へと進む。

——だが、この場に集う者たちは、誰も気づいていなかった。鷹の目で彼らを見つめる、赤い外套の英霊がいたことを。

## 24. ヘラの栄光

タクシーを降りると、鬱蒼と茂った森が見えてきた。木々が数限りなく立ち並ぶ光景は、自然の勇壮さというよりは、どこか不気味さと物寂しきを感じさせる。葉に遮られ、陽の光があまり差し込まないことに加えて、鳥の囀りすら聞こえないほどの奇妙な静けさは、生物の存在を拒絶しているようでさえある。

今いる道から外れれば、ここから先はアインツベルンの領地。どのような罾や攻性魔術が敷かれているかわかったものではない。軍事要塞に正面から踏み入るのは無謀に等しいが――。

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ、士郎。わたしたちは、戦いに来たわけじゃないんだから」

あつけらかんと、そう言い放つてのける遠坂女史。確かにそのとおりではあるのだが、魔術師の領地という、四方八方から銃口を向けられるような場所に赴くのだから、どうにも心穏やかではられない。

平然と森の中に入っていく彼女に続き、俺もおそろおそろの一步を踏み出すと……ピリ、と少し痺れるような感覚。事前に遠坂に言い含められていたが、これはアインツベ

ルンが敷設した感知結界だろう。俺たちが来訪したことは、これでイリヤにも知れたはずだ。

「まあ、士郎はバーサーカーに一度殺されかけてるし、無理もないか」  
イリヤと会ったらどう話そうかと考えていたのだが、その言葉で一気に気が重くなつた。

漆黒の巨人——大英雄ヘラクレス。他と隔絶したパワーとスピードに、極めつけの蘇生能力。あれはもう英霊というより天災だろう。何をどうやったら勝てるのか、全く想像がつかない。

今の時点でこれなのに、ギリシャ神話を紐解けば、ヘラクレスの業績に関するエピソードには事欠かない。それらに由来する宝具をあと幾つ持っているかと考えるだけで憂鬱になりそうだ。

あれにまともに対抗できるサーヴァントであり、不可解な防御力にも通用する宝具だという約束された勝利の剣を有していたセイバーは、今はいない。記憶が戻らず、本来の性能を発揮できないアーチャーでは、あの大英雄には遠く及ばない。

万一イリヤが敵意を向けてくれば、俺たちに抗する術はない。あの少女に限って、そんなことはしないと信じているが……。

「それにしても士郎。あの時、よく死なずに済んだわね」

風で落ちてきた木の葉を払いのけながら、遠坂が不思議そうな顔をする。色々なことがありすぎて、すっかり棚上げ状態になっていたが、確かにそれは気になる点だ。

俺は半人前の魔術師で、高度な治癒魔術なんかには全く心得がない。だというのに、俺はバーサーカーに体をほとんど真つ二つにされた時、何故か勝手に再生したというのだ。いつから俺はヒトデの親類になったのか。

「私ね、最初はサーヴァントの方に再生能力があつて、それが何らかの拍子で士郎まで流れてきたんじゃないかと思つたの。セイバーはそういう能力を持つてたし、バーサーカーなんかは特に顕著でしょ?」

「でも、アーチャーにはそんな能力はないぞ」

「そうなのよね。記憶がないから発動していかない、っていう可能性もあるけど、それだと術者の意思が必要つてことじゃない? でも、士郎は勝手に生き返つてる。どうも引つかかるのよね……聖杯戦争絡みが原因だとは思うんだけど、アーチャーとは別のところに原因があるのかも」

真ん中から真つ二つにしたら二人が増えるのかしら、などと恐ろしいことを言い始める遠坂。それじゃヒトデどころかプラナリアだ。さすがに自分が生物実験に使われる光景は想像したくない。

不気味な未来予想図を振り払い、話題に出たアーチャーの方に目を向ける。気に入つ

ているのか、外に出る時によく着る黒地のライダースーツ姿のアーチャーは、森の悪路を気にした様子もなく闊歩している。陽も差さない暗い森林だというのに、存在そのものが煌めいているような英霊が歩いていると、まるでそこが王族の往く公道であるかのような錯覚を抱く。木々の方が避けて、この英雄に道を作っているような……。何度見ても、とんでもない威圧感の男だ。

「なんだ、雑種。自らの異変の責を、よもや我に問おうとは言うまいな？」

「いや、そこまでは言わないけど……俺の回復力がおかしくなったのは、聖杯戦争が始まってからだし。ひよっとしたら、アーチャーは何か知らないかと思って」

知らん、とあしらわれると思ったのだが、アーチャーは予想外にも面白がるような表情を見せた。観察者の紅い瞳が、俺の体をじっと検分していく。

レントゲンで体の中身を映しているような、或いは俺という人体の解剖図を詳らかにしているような、そんな奇妙な感覚。足が自然と止まり、数歩先を歩いていた遠坂も何事かとこちらに振り返る。

観察自体は三十秒ほどで済んだようだ。ふむ、と頷いたサーヴァントは、腕を組むと俺の瞳を見つめてきた。データの採取というよりは、こちらの意思や記憶を確認するような眼差しだ。

「雑種。貴様、体の中に何を仕込んでいる？」

「……は？」

「物理的——いや、今まで気づかぬとすれば魔術によるものか。貴様自身に心当たりはないようだが、貴様の肉体には後天的に何か仕込まれている。なんだ、知らなかったのか」

いや、知らなかったのかって……なんだそりや。俺の体に何が入ってるって？

そんなヘンテコなものがくっついてるのなら、それこそ健康診断や病院の検査の時に気付いたはずだ。だが、魔術による仕込みとなると話は変わってくる。記憶を遡ってみるが、当然ながら俺自身にそんな人体改造めいたことをした記憶はない。

となると第三者だ。魔術に心当たりのある人間となると切嗣が出てくるが、親父にどうこうされた思い出はない。そもそも親父は、俺を魔術から遠ざけたがっていた節がある。本当は魔術について教えたくもなかったようだし、わざわざ妙な仕込みをする理由がない。それ以外の可能性は……まさかとは思うが、キャスターや他のマスターに何かされたのでは……!?

「アーチャー……アンタ、それ最初から知ってたの？」

遠坂の問いに首肯する青年。こちらが承知していると早合点していたのか、訊かれなかつたから答えなかつただけなのか、それとも意図的に黙っていたのか……。いずれにしても、そういう情報はもつと早く教えて欲しかった。

他のマスターやサーヴァントに何かされたのではないかと思ひ至り、青くなつて遠坂の方に助けを求めるが、彼女は音がするような勢いで俺から距離を取る。この場で自爆するのではないかという疑念の籠つた目線を向けられるが、否定しようにも、俺も俺自身が信用できなくなつてきた。

だが、アーチャーが今まで口にしなかつたということは、少なくとも害のあるものではない気がする。 magari なりにもサーヴァントであるこの男が、そこまで重篤な情報を秘匿しているとは思えない。事実ヤツの顔を見れば、警戒する遠坂に胡乱げな目線を向けている。

「案ずるな雑種ども。我にもさすがに正体までは掴めぬが、それがこやつに仕込まれたのは昨日今日のことではあるまい。おそらくは、何年も前のことだろうよ。あまりに溶け込み過ぎていては故、我ですら初見では見落としたようなモノだからな」

その言葉で、俺と遠坂が顔を見合わせる。何年も前となると、今回の聖杯戦争には関係がなさそうだが……。

困り果てた俺たちを余所に、アーチャーが再び観察者の瞳になる。この男の分析能力、判断能力は桁が外れており、こういつた時には大層頼りになる。仕込まれたという本人でさえ未知のことで、一流の魔術師である遠坂ですら全く気付かなかつたものなのだから、今はアーチャーの頭脳と能力だけが謎を解く鍵になる。

改めて思うが、このサーヴァントは頭脳労働を得意としている。前線で戦う姿も似合っていないというわけではないのだが、本来は後方で指揮を執っている方が似合うような気がするのだ。この男は魔術を使えないと言うが、案外、アーチャーではなくキャスターとしても違和感がなかったかもしれない。

「小僧に悪影響を及ぼすものではないな。細分化されていて読み取りにくいのが、この時代のモノではないな……もつと古い時代のモノだ。何らかの加護を与えているようだが、ともすればそれが貴様の回復能力に繋がっているのやもしれん。

単なる魔術道具にしては度が過ぎているな。事によると、何らかの宝具という線もあるか。悪しき呪物ではないようだが、ここまでの品となれば貴様も何らかの影響を受けていよう」

「宝具!？」

話が予想外の方向に飛んできた。自分の腕をおそろおそろ眺めるが……体の中に宝具が入っているなど信じられない。しかも、何年も前から……？

宝具とは物質化した奇跡であり、そこに転がっているようなものではない。聖杯戦争でサーヴァントを見てみると忘れてしまいうるようになるが、魔術師といえど普通は一生に一度見られるかどうかという超級の逸品なのだ。現存しているものは数少なく、魔術の世界に於いても秘中の秘であったり、中には国宝指定されて国家によって庇護されて



いるものまであるという。まあ、これは遠坂の受け売りなのだが。

とすれば、考えられる要因は一つ。宝具が大盤振る舞いされるような魔術儀式は、聖杯戦争を除いて他にない。それも何年も前のものとなると——あの大災害を引き起こした、第四次聖杯戦争。被災するだけでなく、魔術的にも俺はそこで何らかの関わりを持つていたのだろうか。

あの頃の記憶はあやふやで、ほとんど残っていないと言つてもいい。切嗣に助け出された直後は、さすがにもう少しいろいろ覚えていた気もするのだが、十年も経つとほぼ忘れてしまう。思い出したくても思い出すことが出来ないが、そこに原因があるとなると無性に気になってくる。

「そういえば士郎って、魔術特性も極端に変わつてるのよね……消えない投影魔術なんて聞いたこともないし。ひよつとすると、その宝具が原因なのかも」

「宝具か……そいつの正体が割れば、何かに使えるかな」

そう言う。遠坂が、おかしなものを見る目で俺を睨んできた。俺は何か変なことを言っただろうか。

「アンタつてつくづく……なんて言うか、魔術師らしくないわよね。宝具よ、宝具！ それも体の中に入ってるなんて信じられないわよ。他の魔術師が聞いたら羨ましさで暴れるかもしれないわね……魔術的にどんな価値があるのか、アンタ知つてて言つてるの

? ちよつとは研究してみようと思わないわけ?」

「いや、それも大事かもしれないけど、今は聖杯戦争だろ。その宝具のおかげで俺に治癒能力が備わってるなら、他の人も助けられるかもしれないし、そうでなくても何かの役に立つかもしれないだろ」

研究対象としての興味が無いわけではないし、人並みの好奇心だつて持っているつもりだが、今はそちらの方が重要だ。バーサーカーに真つ二つにされた、ほぼ即死と言つてもいい傷からも再生できたのなら、他の人に応用できればひよつとすると助かる命があるかもしれない。

が、遠坂の気には召さなかつたようで、天を仰ぐとぶつぶつと何かを呟き始めた。「他のヤツに聞かれたら即ホルマリン漬けよ……」とか、「わたしが一から心構えをしつけ直さないダメか……」とか、「一段落したら覚悟しておきなさいよ」とか、何やら不穏な言葉が漏れ聞こえてきて背筋が冷たくなる。

とにかく、俺の体にあるらしいモノについては一度精査してみる必要があるのは間違いない。幸い、俺の数少ない特技の一つに物質の解析があるし、体に溶け込んでいるという宝具の形だけでもどうにか具体化出来れば見えてくるものもあるだろう。今日の一件が片付いたら、早めに調べてみなければ。

——そんなやり取りをしながら、森の奥へと踏み入っていく。

この段になると、先導するのはイリヤから道筋を聞いていた俺の役割だ。しかし、魔術で流し込まれた映像では一瞬でも、実際の道のりは果てしない。あの時見た記憶も、いざ現地に立ってみると臃げな部分が多く、曖昧なポイントでは遠坂の魔術探査やアーチャーの洞察力で正解と思われるルートを見つけ出す。

そうして二時間。どうにかこうにか、見覚えのある地形を選びつつ、もう少しで城が見えるというところまでやってきた。あと三十分も歩けば、目的地に到着すると思うのだが……。

「——む」

何もない場所だというのに、突然アーチャーの足が止まる。疲れを感じ始めてきた俺たちと違って、サーヴァントに疲労感はない。この英霊が立ち止まったのは別の理由からだ。

秀麗な容貌に浮かぶのは、警戒。俺たちには判らぬ何かを察知しているのか、それまで無造作だった足運びが変わる。自然と俺と遠坂も警戒態勢に入り、一体何かと息を殺して視覚と聴覚に神経を集中させると——

——ド、という地響き。

よく注意していなければ聞こえないが、確かに聞こえた。地震かとも思うが、違う。もう一度……今度ももっと近くだ。更に一度、もう一度と、次第に音が大きくなって

きている。爆発音……いや、打撃音か。何か物凄い力で地面を殴りつけているような……。

「ふん——この野卑な音はバーサーカーか。彼奴め、既にどこぞの雑種と戦端を開いていると見える」

アーチャーの独白に、遠坂の顔が険しくなる。バーサーカーが交戦状態ということ、俺たちは一歩出遅れた。

残っているサーヴァントは四体。ここにいるアーチャーを除けば、バーサーカーと戦っているサーヴァントは二体に絞られる。ランサーかアサシン、或いはその両方だ。

この二体については、背後に潜んでいるであろうマスターの情報、或いはその両方などない。しかし、聖杯戦争に参加している以上、他のサーヴァントやマスターを攻撃するのは自然な流れ。まさかこのタイミングでバーサーカーと戦っているとは、話し合いに来た俺としては嬉しくないのだが……。

「……音が妙だな。バーサーカーめ、一人と戦っているのではないらしい。」

どうする、雑種ども。今ならば連中に気取られてはいまい、退く手もあるぞ」

弓兵が消極的とも取れる提案をするが、撤退は理に適っている。敵が一体だというのなら、バーサーカーに加勢して恩を売る手もあるだろうだが、複数体となると話が変わってくる。

ランサーとアサシンの二体だけならまだ良い。問題は、あの得体の知れない影がいた場合だ。遠坂は幾つか策を用意したと言っていたが、セイバーすら倒したあの影の正体も知れぬうちに事を構えるのは賢明とは言えない。

しかし、今回はイリヤに話をしに来たのだ。おめおめと逃げ去るわけにはいかないし——何より、あの影はバーサーカーを以てしても敵しいだろう。サーヴァントとしての強弱とは関係なく、あの化け物は違う理で動いている予感がする。となると、イリヤの命が危ない。

それは見過ごせない。桜の助けになるかもしれない魔術師と、味方として見ればこれ以上ないほど頼もしい大英雄を失うのは戦略的に悪手だろうし……それ以上に。あの雪の少女を見捨てることなんて、俺には絶対にできない。

「……行こう。俺たちは、そのために来たんだからな」

「そうね。ここで逃げ帰っても、桜の寿命が縮むだけ。それに、万一イリヤスフィールとバーサーカーが倒されでもしたら洒落にならないわ。」

アーチャー、弓使いにこう言うのも悪いけど、前衛頼める？ わたしが掩護するから」俺たちが同じ結論を出す、アーチャーは鷹揚に頷いた。この英霊は選択肢を提示するが、基本的には俺たちがどの道を選ぼうとも構わないというスタンスだ。気付いていない道を示してくれたり、意図的に他の道のことを口にして本来進もうとしていた道

の後押しに繋がれたり、そういう点では得難い助言者だろう。……途方もなく傲慢な性格のせいで、イマイチ真意に気付きにくいのが大きな難点だが。

ともあれ、どうするかは決まった。ライダースーツの上に黄金の鱗粉が煌めいたかと思ふと、アーチャーがいつもの鎧と双剣を装備する。予定にない事態である以上、出たところ勝負になってしまうが、イリヤとバーサーカーを手助けするという目標は変わらない。

黄金の英霊を先頭に、道なき道を駆けていく。俺たちに速度を合わせてくれるアーチャーが、双剣で木や草を跳ね飛ばしてくれるおかげで、後続の俺たちは随分進みやすい。あれよあれよと言う間に震源地に近付き、開けた空間が見えてきたと思つた途端……アーチャーが急に立ち止まり、俺たちを手で制した。

もう音の発生源はすぐそこだ。爆音、唸り声、剣戟が耳朶を強く叩いてくる。が、まずは状況を確認しないと動くこともできない。大きな木の後ろに隠れたアーチャーの横、茂みの合間から木々のない広場を覗いてみると――

「嘘」

隣の遠坂が絶句する。俺も、自分の目がおかしくなったのかと疑うところだった。おかしい。あつてはならない。おまえは、そこにいるはずがない存在だ。

――広場で戦う存在は、三体。

一体は斧剣を振り回すバーサーカー。背後にはマスターであるイリヤスフィールがいるが、戦闘に参加する様子はない。何かに怯えた様子で、荒れ狂う従者を見守っている。

一体は絶え間なく短剣を投げ続けるアサシン。そこから距離を置いたところに、どこかで見覚えのある老人がいる。杖を突いて佇むその姿は一見非力に見えるが……直感する。アレこそが、間桐臓硯だ。あの存在から漂う腐臭は尋常ではない。

そして、もう一体。そのサーヴァントは、残っているはずのランサーではない。見たことのないヤツだ。そのはずだ。なのに、なのに。

「なんでセイバーがここにいるのよっ……いー」

遠坂の苦鳴が、現実を叩き付ける。もう否定は出来ない。あれは……あの少女は、つい数日前まで、俺たちの仲間だったはずのサーヴァントだ。

眩い金髪はくすんでいても。

仮面で容貌を隠していても。

鎧が漆黒に染まっただけでも。

黒ずんだ泥を纏っただけでも。

聖剣が悪に変質していても。

それでも、分かってしまう。ああも変わり果てていても——あのサーヴァントは、セ





にするあの英雄は凄まじい。今のセイバーすら、バーサーカーにマスターを守らなければならぬという縛りと、アサシンの掩護がなければ勝ち得まい。

——だが。

「……!?」

斧剣を叩き付けてセイバーを数歩後退させたバーサーカーが、突然横に跳躍する。するとその直後、つい今までヤツが立っていた平地が、黒い沼のようなものに変貌した。よく見ればその沼は、徐々にこの空間を侵食している。それは見紛えるはずもない、あの黒い影の一部だった。

あれに囚われた瞬間終わる。そう本能で察知しているのか、バーサーカーは沼に近付かない。アサシンもまた同様だったが、どういうわけなのかセイバーだけはその汚泥の中でも平然としている。回避のために態勢を崩したバーサーカーの懐に入った剣士は、不完全な状態で放たれた斧剣を弾き飛ばすと、黒い聖剣を一閃させた。

バーサーカーの首が飛ぶ。即死の一撃に膝を突き、そのまま倒れ伏すかと思われた大英雄は——十二の試練ゴッドハンドという名の宝具で蘇生し、首が再生しきらぬまま剛腕で正拳突きを打ち放った。剣で防御したセイバーだが、さすがに衝撃は殺し切れずに大きく跳ね飛ばされる。その隙に再生し、大剣を握るヘラクレスの威容は殺される前と全く変わらぬが、命のストックは確実に一度減らされた。

「だめだよバーサーカー、戻って！ そのままだと……！」

イリヤが悲鳴じみた声を上げる。おそらく今の攻防は、何度か繰り返されているのだろう。

いかにヘラクレスが桁外れのサーヴァントといえど、この戦況は余りに不利だった。力では自分に匹敵するセイバーと戦いながら、マスター殺しに特化したアサシンに手出しをさせぬよう立ち回り、捕まれば即死という黒い影から逃げ回る。三対一の状況に加えて、礫に遮蔽物もない地形で主を守らなければならぬという枷、更に一秒ごとに減っていく足場。刻一刻と、天秤はセイバーたちの方に傾いていく。

「バーサーカーはこのままじゃ持たない。何とかしないと——！」

「けど、あつちはサーヴァント二体に化け物が一匹。おまけに臓硯までいるわ。わたしたち三人が飛び出していったとしても、分が悪すぎる」

確かに遠坂の言う通りだが……このまま放置していて、バーサーカーが倒されてしまつては、もう戦うどころの話ではなくなる。数百年を生きる魔術師という間桐臓硯に、騎士王と暗殺者、おまけに得体の知れない黒い影。俺たちだけでは、逆立ちしたつて勝てるわけがない。

どうする、どうする。セイバーのことも気になるが後回しだ。イリヤとバーサーカーを助けなければ、俺たちは完全に詰む。かといって無謀に飛び出せば死体が増えるだ

け。冷静になれ。

アーチャーが指していた、将棋の盤面を思い出す。大事なものは駒ではなく、操作するプレイヤーの視点だ。この場合の勝利条件は……相手の駒を倒すことではない。味方を助けることだ。自爆覚悟で無理に駒を取りに行くのではなく、最低限こちらの駒を奪われないように立ち回ればいい。となると、俺たちに採れる戦法は――

「土郎。あの黒い影と臓硯は、少しならわたしがなんとかできると思う」

俺が結論を出そうとするのと同時、遠坂が懐から宝石を準備しながら囁く。彼女もこの状況をどう打開するか、考えていたのだろう。

少しでいい。サーヴァントではないイレギュラーたちを足止めできれば、残るのはセイバーとアサシン。そして、サーヴァントにはサーヴァントをぶつければ……！

「アーチャー。アサシンの相手を頼めるか？」

そう訊ねると、無言で大弓を構えるアーチャー。しかし、数度狙いをつけようとしたところで、不愉快そうに首を横に振った。

「狙撃は難しいな。あの汚泥が周囲の魔力を乱している影響で、彼奴らには私の存在は気取られておらぬが、その反面狙い撃つにはあの泥が邪魔だ。私の矢は魔力故、近付けばアレに喰われる。となれば直接斬り捨てる他あるまい」

話している間にも、バーサーカーが剣で胸を貫かれて致命傷を負う。即座に回復し、

斧剣を地面に叩き付けて土塊を四方に跳ね飛ばすバーサーカーだが、もう命のストックは幾つ残っているのか判らない。イリヤの悲痛な表情からすれば、あまり余裕はないはずだ。時間は残されていないが、良いタイミングを待たなければ。

「わかった。遠坂は臙硯と影の足止め、アーチャーはアサシンと戦ってくれ。その際に、俺はイリヤを助けてくる。問題はその後だけ……」

「逃げ道か。ヘラクレスがいれば問題あるまい。高々四人程度、アレなら苦もなく運べよう。……狂犬ごときに乗るのは癪だが、背に腹は代えられん」

さすがと言うか、アーチャーの中ではもう撤退までの戦略が練られていたようだ。バーサーカーに頼るといのがプライドに障るのか、目は不機嫌そうに細められているが、アーチャーの速度はサーヴアントの中では並程度で、俊敏なアサシンやロケット噴射のように飛んでくるセイバーには対抗できない。パワーだけでなくスピードも桁外れのバーサーカーが、この中では一番足が速いのだ。

とにかく、結論は出た。アーチャーは大弓の形状を双刃の剣に変え、遠坂は幾つかの宝石を取り出して呪文を唱える。俺もアーチャーの双剣の設計図を思い描き、すぐに投影できるように準備する。張り詰めるような緊張感の中、一秒が一時間のように過ぎていく。

手がじつとりと汗ばむ。バーサーカーが強引に守りを打ち崩され、またセイバーに致

命傷を負わされた。このままではいけないと、焦りばかりが募るが、この作戦はタイムングが肝心。まだか、まだかと逸る気持ちのまま、じつと隙を見計らい——ついに、その瞬間がやってきた。

「今だッ！」

閃光のようにアーチャーが飛び出す。アサシンは完全に後ろを向いていて、こちらに気付くのが遅れた。髑髏の面の上からでも判る驚愕を纏わせ、振り向いたアサシンが迎撃しようとするが。

「地を這う虫ケラ風情が、我の道を阻む事を誰が許した——！」

一刀。

伸ばされた魔腕を、黄金の刃が斬り飛ばす。ぐるん、と双刃を回転させたアーチャーは、その勢いのままアサシンの胸板を斬り裂き、強烈な回転蹴りを喰らわせた。

吹き飛んだアサシンが、血を撒き散らしながら大木に激突する。致命傷かどうかまでは判らないが、あれは深手だ。正面きつての戦闘、それも不意を突いた奇襲とあつては、性能で大きく劣るアサシンに勝ち目はなかったのだ。

一瞬にして、サーヴァントが一体脱落する。後方で悠然と構えていた臓硯は、突然の事態に驚いた気配を見せるが、俺たちは一人ではない。その老体には既に宝石が投げつけられていた。

「喰全らいいなさい!  
 St全il, sc投iest, B敵esch影ien一sen片Er一sc座ieもS残unさgず——!」  
 Neun, Acht, Sieben

爆炎が上がる。何か蟲のようなものを放った臓硯だったが、遠坂の魔術は地盤ごと吹き飛ばすのではないかという火力で、矮小な障害も老魔術師もまとめて焼き尽くした。秘蔵の宝石を使ったのか、あれではサーヴァントにさえ通用しよう。

遠坂が放った宝石は一つだけではない。同時に他に二つの宝石が戦場に放たれ、黒い影に呑みこまれると思つた瞬間手榴弾のように炸裂した。爆裂は地面も汚泥もまとめて四散させ、俺とイリヤの間を覆っていた障害物を一掃する。道が開いたのを確認するや否や、俺は全力で空間を駆け抜け、呆然とした表情のイリヤを抱え上げた。

「え——シロウ、なんで……?」

「また会おうって、公園で約束しただろ? 積もる話は後だ、一旦逃げるぞイリヤ!」  
 一気に捲し立てると、返事を待たずに背後を振り返る。

臓硯はまだ炎の中で、アサシンは復帰する気配を見せない。黒い沼はその面積を半減させ、遠坂が安全地帯を通つてこちらに走ってくる。ここに来て、異変を悟つた剣士がバーサーカーから飛び退くが、その背後からはアーチャーの狙い澄ました一撃が——

「——ッ!」

回避行動。掃射された三本の矢を、サーヴァントが紙一重で躲す。驚愕の声は誰のも

のか、今の矢はアーチャーが放ったものではなく……アーチャーに向かつて放たれたものだった。

瞬時に対応したアーチャーは、矢が飛んできた方角に向かつてレーザービームめいた一撃を放つ。しかし、さすがの弓兵をしても反射だけの攻撃では敵を捉えられず、再び飛来した群れを大弓で打ち払って凌ぐ羽目になる。

……おかしい。今の矢は、どう考えてもサーヴァント級の攻撃だ。しかし、今残っているサーヴァント——いや、今回召喚された全てのサーヴァントの中で、アーチャー以外にあのような攻撃手段を取る英霊は存在しない。今弓兵を攻撃しているのは、誰だ……!?

「衛宮くん、ぼーっとしてないで隠れる!」

思考を巡らせている間に、走ってきた遠坂が近くの木陰に俺とイリヤを引きずり込んだ。混戦状況の戦場を確認すると、ますます状況がわからないという顔のイリヤに鋭い顔になって向き直る。

「イリヤスファイル。細かい話は後にして、今はとりあえず休戦。いいわね?」

「……う、うん」

混乱していたが、それでも頷くイリヤ。やつと状況が掴めてきたのか、驚きの感情よりも理性の占める割合が大きくなってきたその表情は、明るさと暗さが半々の割合だ。

絶望的な窮地に手を差し伸べられたのは嬉しいが、完全に状況が好転したわけではないと悟っているのだろう。

臓硯は未だ炎の中だが、数百年も生きる魔術師があれで死んだとは思えない。そのサーヴァントと思われるアサシンはもう戻ってこれないだろうが、黒い影は遠坂の爆撃も一時凌ぎにしかならなかったようで、着々とまた汚染範囲を広げていた。バーサーカーとセイバーは正面から強烈な剣戟を交えているが、不利な状況から膠着状態に移っただけ。そしてアーチャーは、謎の長距離狙撃を辛うじて防いでいるが、到底バーサーカーの掩護に回れるような状況ではない。いつまでも凌げる攻撃でもないだろう。

つまり、時間が経てば経つほど俺たちは不利になる。遠坂と目を見合わせると、互いの認識が同じであることを確信する。

「とりあえずここから逃げるわよ。イリヤスフィール、バーサーカーを呼び戻せる？ 余計な邪魔が入ったけど、みんなで合流すればチャンスはある。今アーチャーを狙ってるヤツとセイバーは、仲間ってわけじゃないみたいだし」

この混戦状態で、それは数少ない吉報だった。もしセイバーと謎の存在が共闘していたら、連携を取れないアーチャーとバーサーカーでは確実に負ける。しかし、アーチャーに矢を撃ち放っている見えない敵は、時折バーサーカーたちにまで攻撃しているのだ。セイバーは狙撃を明らかに警戒しており、お陰でバーサーカーに集中しきること



が出来ずにいる。

黒い影とセイバーと謎の敵。連携していれば三対二で圧倒されただろうが、今はそれぞれが個の力でしかない。ならば、有利とは言わずとも対抗することは可能だろう。

「大丈夫だけど……タイミングを掴まないとダメ。今のバーサーカーを制御しきるのは、私でも難しいから」

「それでいいわ。合図をしたら私が宝石で掩護するから、その隙にバーサーカーを呼び戻して。後はみんなを抱えてもらって、そのままここから——」

——悪寒。

強烈な寒気に、全員がそちらを振り向く。絶望の源は、剣士が握る聖剣から。下段からの一撃でバーサーカーの体勢を崩すと、セイバーは大きく後ろに退き——黒い長剣に、莫大な魔力を叩き込んだのだ。

怖気なのか、それとも何かが反応したのか、アレを見た瞬間から体の奥に熱を感じる。あれこそが、約束された勝利の剣。ライダーを宝具ごと斬り裂き、そのままキャスターをも沈めた対城宝具。本来大軍勢や城塞を殲滅するような超宝具が放たれれば、周囲一帯が灰燼と化すだろう。俺たちなどひとまりもない。

しかし、俺を惹き付けたのはその性能ではなく、もつと根底にあるものだった。あの剣以上の火力を持つ宝具はあるだろうし、より外観が美しい剣、より精緻な技術で作

上げられた武器もあろう。だがあれは、そういうモノとは次元が違うのだ。人の純真な想いの結晶、希望を練って編まれた宝剣——俺の夢に出てきた、世界そのものさえ捻じ伏せるような、絶対の理を体現した紅い剣とは対極に位置する一振り。俺は東の間、その尊さに見惚れていた。

「人形の小娘ッ！」

アーチャーの叱咤が、俺を現実に戻す。アイツの声は俺や遠坂ではなく、隣にいるイリヤに対して向けられていた。発動寸前の聖剣を前にして、さすがのアーチャーからも余裕が消え失せ、飛来する矢を捻じ伏せながら鬼気迫る表情になる。

「——ヘラクレスの理性を取り戻せ！」

その言葉に、イリヤが理解不能といった顔をする。だが、もう詮議している時間は無い。本能で窮地を察したのか、バーサーカーがセイバーに凄まじい猛攻をかけているが、聖剣に籠められた魔力は一秒ごとに増大している。狂戦士の攻撃は時間稼ぎにしかならず、数十秒と経たずに真名が解放されることだろう。

アーチャーの意図は読み取れない。そもそも、バーサーカーとして召喚された英霊に理性を戻すことなど可能なのか。ヘラクレスと性能で真つ向勝負できるセイバーに、狂化の恩恵を捨てて戦うことは出来るのか——瞬間的に幾つもの疑問が湧き立つが、答えに至るまでの時間が足りない。

だが、このままでは死ぬ。他にもう手立てはない。迷いを振り払ったイリヤから膨大な魔力が湧きあがり、小さな体躯に赤い刺青のような令呪が浮かび上がる。全身に施されたそれは、俺たちの持つものとは余りに違っていたが、それがバーサーカーを制御する令呪であることは本能的に察知出来た。

「バーサーカー……！」

主の悲痛な叫び。咆哮を上げたヘラクレスは、イリヤの声に呼応するようにフルスイングで斧剣を叩き付け、剣士の小柄な体を彼方へと弾き飛ばした。痛烈な一撃に、二人の距離は大きく開くが——遠距離宝具を持つセイバーに対して、それは致命的な過ちとなる。

黒い聖剣が唸る。臨界まで魔力を叩き込まれた宝具は、極光を伴って振り下ろされる。バーサーカーが突貫姿勢を取るが、彼が駆け出すよりも、セイバーが剣を振り下ろす方が早い。

「——」  
エクスカリバー……  
 「約束された」

初めて聞く少女の声。以前の清廉さはどこに消えたのか、絶望が形となったような低音。死神の鎌に等しいその言葉は、真名解放の合図。一秒にも満たないであろう刹那の時間が引き延ばされ、死期が眼前であることを静かに知覚する。

ここまで絶望的なものを見せられれば、パニック状態に陥ることすらない。遠坂は悔

しさからか唇を噛み、アーチャーは何か怒声を放っている。俺は冷静に死を受け止め、バーサーカーは自滅覚悟で特攻しようとする。押し寄せようとする黒い暴力に、誰もが圧倒される中、イリヤスフィールの懇願が響く。

「令呪を以て命じるわ——狂える鎖を解き放って、私を守って！」

途端。複数の令呪を使ったのか、怖気がするほどの莫大な魔力が迸る。瞬間、赤く染まっていたヘラクレスの双眸に異なる光が宿るが……。

”勝利の剣”——！

無情にも剣が振るわれる。魔力量の違いか、ライダーを倒した時すら上回るほどの絶大な光量が放たれた。美しさと気高さに満ちた黄金の光輝がそのまま反転したような、暴力と絶望の象徴。尾を曳く黒い光は、回避や防御など粉微塵にして立ちはだかるものを蒸発させるだろう。

アーチャーの弓や遠坂の宝石など比べ物にならない。その津波の如き一閃から、身を盾にして主を守ろうというのか、バーサーカーが前に出る。光が到来する瞬間、その腕には何か握られており——

「——」  
”ナインライブズ  
射殺す百頭”  
「——」

九つの矢が、地を裂くように放たれた。九頭の竜の如き光の奔流は、絡まり合つて聖劍の暴虐と激突する。かつて猛獣ヒュドラを仕留めたという究極の一撃、大英雄の象徴たる最強の弓矢は、対城宝具とさえ互角の鬨ぎ合いを見せていた。

光と影、極大のエネルギーが鏖競り合う。ギ、と空間が軋むような音を立て、激突点の付近にあるものは、木も土も黒い影もまとめて蒸発した。一進一退の攻防を続ける宝具同士だったが、正面切つての力比べに耐えられなくなつたのか、岩が抉れるような擦過音と共にそれぞれあらゆる方向へと弾け飛んだ。聖劍の一閃は斜め四十五度に逸らされて森を焼き払い、空を穿つように駆け登つていった光の竜は雲を微塵に吹き飛ばす。両者とも相手を仕留めきれぬまま、クレーターのように変貌した大地を挟んで相対する。

衝撃が霞めたのか、セイバーの顔を覆い隠していたバイザーが壊れ、翠ではなく歪んだ黄金に染まった瞳が露になる。到底信じられない、という驚愕に満ちた眼差しは、自らの一撃に拮抗して見せた狂戦士に向けられていた。

——それは、有り得ぬはずの奇跡だった。

聖杯戦争のシステムについて詳しくはない、俺でさえ分かる。今起きたことは、通常到底起こりえないものだ。英霊を召喚しやすいようにクラスという枠に当てはめられたものがサーヴァント。狂戦士として呼び出された英雄から狂気を取り払うとは、クラスと

いう概念をひっくり返すような横紙破りだ。俺が聖杯戦争を運営する側なら、そんなルール違反はそもそもできないようにしているだろう。

しかし、今見たところ、イリヤに施された令呪は俺たちのものとは規格が違う。聖杯戦争という仕組みを作り上げた、いわばシステム側の立場であるアインツベルンなら、令呪やイリヤの体に特殊な能力を付与していたとしてもおかしくはない。加えて、ヘラクレスが理性を奪われていて尚、行動のところどころに知性の残滓が伺えるほどの桁外れの英雄だったこともプラスに作用したのだろう。

「我はゼウスの仔にして神の栄光——ヘラクレス。いざお相手願おうぞ、騎士王よ」

場の全員の驚愕を受け止め、堂々とそう宣言する大英雄。荒れ狂っていた眼光、狂犬のごとき気配は消え失せ、代わってその声からは深い知性と経験が伺えた。暴力の体現者だったバーサーカーとは対極の、高潔ささえ感じさせる。それでいて、巖の如き威圧感揺るがぬどころか、尚一層凄みを増していた。

「驚いた……まさか、貴公の理性を取り戻すとは。だが——その程度で、私の剣捌きは鈍らんで」

ここに来て。俺たちの誰をも眼中に入れていなかったセイバーが、ようやく会話を始めた。人格が変貌したのか、それとも記憶が消えてしまったのかと思ったが、どうやら後者ではないらしい。どうして彼女が敵対しているのかは分からないが、再び剣士が聖

劍を構える。敵がどう変わろうと、目的は変わらないというように。

セイバーが聖杯戦争に参加したサーヴァントである以上、背景に何があるうとも、バーサーカーと戦うのはおかしいことではない。殺気を纏わせるセイバーと向かい合うヘラクレスは……ちらり、とこちらを振り向いた。

彼が見ているのは、マスターであるイリヤ。その瞳には、我が子を見守るような温かな光が宿っていた。しばらく彼女と見つめ合った後で、ヘラクレスの眼差しがこちらにも向けられる。イリヤを守ってくれて感謝すると……言葉にせずとも伝わる大英雄の感謝の念は、思わずこちらが襟を正さねばならないと思うほどだった。命を奪い合ったこともある相手、それも格下の存在に敬意を払うとは、この英霊は高潔な武人なのだとその挙措だけで理解できる。

そして最後に、大英雄はアーチャーを見つめた。理性を取り戻したヘラクレスに伍する、ともすれば上回っているであろう存在感を放つ英霊に、武人は僅かに笑みらしきものを零した。

「イリヤを頼んだぞ……黄金の王よ」

「業腹だが、貴様ほどの男の命を賭した嘆願となれば聞き届けぬわけにもいくまい、大英雄。ふん——今の貴様であれば、我が裁定する価値があるやもしれん」

「貴公と力を競うのは吝かではないが、今は騎士王という先客が控えている。それに、今

の貴公は万全ではない。それでは私と戦うには不足だろう」

さすがというべきか、ヘラクレスはアーチャーが力を使えないことを一目で見抜いた。暗に、まともな状態になってから出直せという言葉に忌々しげな表情になる弓兵だったが、事実なだけに肩を竦めてみせる他はない。これ以上の会話に意味はないと思つて打ち切つたのかもしれないが、アーチャーが誰かにやり込められる場面など初めて見た。

「さて——待たせたな、セイバー。名高き騎士王と剣技を競えるとは、これに優る喜びはない」

大弓は自在に出現させられるのか、握つていたそれを消すと今度は元々持っていた岩塊の如き大剣を構えるヘラクレス。見る見るうちに膨れ上がる闘気に、この距離でもセイバーの全身に緊張が走るのが見て取れる。

バーサーカー狂戦士でなくなったヘラクレスは、今は如何なるクラスに属しているのか。弓矢を使ったあたり、アーチャーなのかもしれないが、ひよつとすれば何のクラスでもないのかもしれない。想定されていない掟破りを行った分、彼とて万全な状態ではないだろう。

狂化によつて極端に跳ねあげられていたステータスは、元に戻るどころか、おそらくそれ以下まで落ちている。彼が纏つていた、神気とも言うべき固有の気配もほとんど薄



れているため、恐るべき防御と再生能力を付与していた十二の試練も残りのストックごとと消えているに違いない。今のセイバー相手に、能力面では明らかに劣っていた。

しかし……ヘラクレスはそもそも、武芸百般で名を馳せた偉大な戦士である。他の宝具は判らないが、約束された勝利の剣にすら食らいついた弓矢もある。新たに備わったこの二つは決して失ったものに劣る能力ではなく、事実セイバーが向ける敵意は先ほどまでとは段違いに跳ね上がっていた。

「……行け」

ここは引き受ける、という大英雄の言葉。当初の予定とは異なるが、セイバーの相手をヘラクレスに引き受けてもらえるなら、こちらは安全地帯に撤退できる。あの黒い影と間桐臓硯が不確定要素だが、この英霊ならば早々後れは取るまい。時間稼ぎには何の労苦もないはずだ。後は程ほどのところで撤退するなり、令呪で呼び戻すなりすれば良い。

謎の狙撃手もヘラクレスの変化を警戒したのか、先ほどまで雨霰と射かけられていた矢の次射が来ない。逆撃をかけるにはさすがに手が足りないし、ここは退くのが最善手だった。

「バーサーカー」

既に狂化は解かれているが、イリヤにとってはあくまで彼はバーサーカーなのだから

う。大きな背中を、震える瞳で見上げる彼女は。

「……勝つてね」

祈るように、小さく呟いた。

\*\*\*

アーチャーに守られながら、イリヤスフィールと二人の魔術師が撤退して行ったのを見届けると……ヘラクレスは、凄絶な笑みを伴って黒の剣士に斬りかかった。

速力は明らかに落ちているはずなのに、その踏み込みは稲妻の如く。下からの切り上げで、辛うじて先手を凌いだセイバーだったが、その脅威に肌が粟立つのを抑えられなかった。

——強い。

身体能力が落ちているはずなのに斬り込みの速度は寧ろ上回っている。これは、能力を技量で補っていることを意味する。極東の武術には、俗に縮地と称される間合いの詰め方があるが、ヘラクレスが今用いたのはそれに近いものだろう。返す刀で流れを変えつつもりが、あまりの速度にタイミングを見誤ったセイバーは、防戦一方に追い込まれた。

セイバーは熟練の、そして際立った能力と技量を有する英雄だ。彼女ほどの力量になると、剣を交えれば相手の能力がある程度理解できる。名高き大英雄と剣戟を交えるうちに、彼女は一つの結論に至らざるを得なかった。

——この戦士は、自分より格上だ。

英霊としての格で劣っているわけではない。純粹に武術の技量において、ヘラクレスの方が上に行く。これは騎士王が弱いのではなく、大英雄があまりに強すぎるのだ。彼女のみならず、全英霊中を見渡したところでこの男に比肩する技量を持つ者など片手の指ほどもいるまい。むしろ対等に戦えていることが、セイバーの優秀さを物語っている。

円卓の騎士たちを思い出すセイバー。彼らの中にも、剣技で王を上回る者はいた。最強と謳われた湖の騎士など、その典型例だろう。しかし、今相對しているヘラクレスは、ともすればその上を行きかねない。同じ土俵で戦えば負けると悟った彼女は、莫大な魔力放出に物を言わせ、力任せに大英雄を打ち払った。

並び立つ者のないヘラクレスの膂力は、伝承によれば山脈を築き、天空を支えるほどだったという。しかし、サーヴァントとして召喚され、諸々の条件によって能力の落ちている彼は、絶大な魔力供給量を誇るセイバーに力負けするレベルになっていた。

「ふむ……この力、尋常ではないな。貴公の主はただの魔術師ではあるまい。察するに、

聖杯そのものと繋がっているな」

黄金の英霊のような、神業めいた眼力ではない。生前の十二の難行で培われた経験、英雄としての武の技術、剣を交えた時の相手の動き——そういった諸々の要素から、彼は早々に結論に至った。アーチャーの鑑識眼が王としてのそれなら、ヘラクレスのそれは積み重ねられた戦士としての力量によるものだろう。

黙して語らず、膂力差を活かした暴力的な剣技に切り替えて大英雄と戦うセイバーだったが、その沈黙が回答を雄弁に語っていた。今の彼女は、正しくサーヴァントと言えぬ体ではない。

柳洞寺において、彼女は黒い影に呑みこまれた。しかし、他の英霊たちと違って、彼女は致命傷を負っておらず霊格も無傷のまま。結果、分解されて吸収されるはずだった彼女は汚染物質を逆に取り込むような形で、確たる肉体を持って現世に帰還したのだ。それは奇しくも、第四次聖杯戦争で彼女の仇敵だった黄金の英雄王と同じ道筋だったが……その時とは、あまりに状況が異なっている。

「フ——ッ！」

「甘い……！」

大上段に剣を叩き付けるセイバー。超人的な見切りで一撃を躲すヘラクレスだったが、剣士の隙に切り込むことは出来ない。彼女の凄まじすぎる一撃が、固い地面を砕い

て岩塊を周囲に飛び散らせたからだ。バーサーカー時のお株を奪われたような攻撃に、たまらず彼は距離を取る。追撃するセイバーだったが、そのくすんだ瞳には強い執念のようなものが宿っていた。

現世に戻ってこれたのは、彼女の強靱な意思だけではない。セイバーを飲み込んだ黒い泥の主が、手駒が欲しいと望んだためでもある。聖杯戦争の大本である大聖杯と直結しているマスター——正確には、マスターを操っている者——は、遠坂凜のマスター契約を強引に篡奪する形で、セイバーを隷属させたのだ。

今のセイバーは、受肉こそしているが、アーチャーとは異なりマスターによる強い影響を受けている。加えて、彼女では聖杯が含有する悪性に耐え切れず、汚染されたせいで人格や在り方は全て真逆の方向に捻じ曲げられてしまった。十年前、かの弓兵はその絶対汚染領域を平然と跳ね除けたのだが、あんな真似が出来る英霊……いや人類は、その歴史の原初から終焉に至るまで、あの英雄王ただ一人であろう。

しかし、性質が汚染されていても、セイバーの力量は変わらない。むしろ、その脅威の度合いは数段跳ね上がっていた。半霊体であった時は不十分だった竜の心臓という魔力炉心は全力稼働しており、身体能力は桁違い。悪に転向したことで発生した凶暴性を抑えるため、一部の能力や敏捷性は犠牲になっているが、増大した攻撃力や防御力はそれを補って余りある。更には、彼女自身が生み出す膨大な魔力だけでなく、直結した

大聖杯による後方支援。今のセイバーは、対城宝具である聖剣を何度も連射することさえ可能だ。

「——」エクスカリバー！モルガン「約束された勝利の剣」……！」

二射目。制御された一閃ではなく、無秩序な暴力で薙ぎ払うような一撃は、光の剣というより闇の竜だ。大地そのものを呑み込んで迫る暴虐の波に、しかしヘラクレスは臆さない。

握っていた斧剣を躊躇なく投げ捨て、新たな武装を顕現させる。その剛腕に握られたのは大弓。バーサーカーのクラスから解放された彼は、どのクラスともつかぬ不安定な状態ではあったが、数ある武具の中でも代名詞たるこの武器だけは備わっていた。彼にとって最も相性が良い、アーチャークラスに引き寄せられているのかもしれない。

巨軀である彼の身の丈ほどもある大弓を引き絞るヘラクレス。師であるケイローンより学んだ弓術が、彼の剛力と偉業と相まって、一つの宝具を形作る。神獣すら絶殺するほどの、英霊ヘラクレスの武芸の体现。其は即ち——

「射殺す百頭」——！」

爆裂。解放された宝具、同時に撃たれた九連射は、一本一本が竜種もかくやという絶大な魔力を孕んでいる。聖剣の一撃に正面から激突した九条の矢は、光の奔流を喰らい、同時に喰われていく。星が造り上げた究極の宝具の一つを相殺してみせるヘラクレ

スの奥義は、強いなどという表現では生温い力を有していたが——光群が対消滅のように互いを打ち消し合つて無に帰す姿に、彼は己の不利を悟つた。

——このままでは負ける。

聖剣と弓矢はほぼ互角、武器の性能差でヘラクレスの方がやや劣るかもしれないが、それも埋め合わせが利く範疇だ。問題は武器や個人の性能ではなく、彼らを支えるバックアップにある。

ヘラクレスのマスターは、アインツベルンが特別に鑄造したイリヤスフィールである。多大な魔力を消費する大英雄の全力戦闘も、一会戦分程度であれば問題なく支え得るであろう。

しかし、セイバーの背後にいる存在は桁が違う。聖杯そのものの支援を受けた彼女は、個人レベルの魔術師などとは比較にならない魔力を常に、ほぼ限りなく供給されている。宝具の撃ち合いを全力で続けければ、確実にヘラクレスの息が続かない。となれば、戦術を変える必要がある。

対城宝具が相殺されたと見るや、魔力放出を活かして全力で突貫してきたセイバー。流麗な体捌きでその力をいなし、腕を掴むと背負い投げのように大地に叩き付けるヘラクレスだが、繰り出された蹴撃に胸板を叩かれ、トドメの一撃を刺すことに失敗する。無理な体勢で放つた蹴りにも関わらず、剣士の力は、大英雄の巨軀を弾き飛ばすほど。

衝撃に逆らわず、距離を取るヘラクレス。騎士王が再度、聖剣の真名解放をしようとするが……それより早く、大弓から矢が放たれた。一手遅れたセイバーが、攻撃を断念して回避行動に移るも、放たれたのはあのレーザームいた九連射ではなかった。

「これは……かつてヘラクレスに倒されたという、西の戦神の使ステュムパリデスの鳥——！」

上空から分裂して襲ってくる矢群は、黄金の弓兵も用いた攻撃だが、ヘラクレスのそれは桁が違う。数十本に分裂した矢は、その一つ一つが猛禽類に姿を変え、全身を青銅で覆った怪鳥となって押し寄せてくる。

ヘラクレスの難行の一つに数えられる、怪鳥討伐。ヒュドラの毒矢で射落とし、あるいは一羽ずつ剛腕で絞殺したと謳われる恐るべき怪物を、サーヴァントとなった彼は宝具として使役していた。本来はライダークラスで用いられる宝具なのかもしれないが、彼のクラスがアーチャーに寄っているが不確定なこと、この宝具が弓矢から放たれるものであることが発動を可能にしている。

舌打ちしたセイバーは、中途半端に魔力を籠めていた聖剣を、解放するのではなく質量を伴った斬撃として使用した。魔力の刃に斬り裂かれていく怪鳥たちだが、生き残った一部が猛烈な勢いで騎士王の全身を啄もうとする。それらを叩き落とし、弾き飛ばし、鎧と魔力で凌ぐセイバーは、傷こそ負わなかったものの確かに隙を晒していて。

「受けよ——！」



気付いた時には、ヘラクレスの斧剣が迫っていた。鋭い直感で気付いた剣士が、反射的に武器を振り上げて一撃を防ぐが……今までは無理な体勢からでも膂力差で打ち返していたそれが、何故か今度は押し切られる。狂化していた時のような不可解な筋力値の増加に、危機感を抱いたセイバーは両足から魔力を放出させ、体勢を立て直すと同時に回転して蹴りを叩き込んだのだが。

「……硬い!?!」

弾き飛ばせるはずの一撃は、しかし手応えが薄い。全力の蹴りを、僅かに体が揺れた程度で受けきったヘラクレスは、ダメージを受けた様子もなく斧剣を振りかざし、セイバーはそのまま体を半回転させて魔力放出で軌道进行操作することで、紙一重でその攻撃を避けきった。

回避行動に連動した反撃。怪鳥を薙ぎ払った魔力の斬撃が下から放たれる。これにはヘラクレスも後退して距離を取り、その時間でセイバーは彼の体に帯のようなものが巻かれていることに気が付いた。

——ゴッドス・オブ・ウォー 宝具『戦神の軍帯』。

使用者の神性、及び筋力・耐久・敏捷・魔力をそれぞれ向上させる軍神の宝具は、かつて彼が十二の試練を乗り越える過程で、ヒツポリユテというアマゾネスの女王から篡奪した逸品である。これによって、ヘラクレスは減衰した身体能力をある程度補っている。

た。本来なら、補うどころか狂化していた時に匹敵する能力値まで向上させられるのだが、神秘が薄い現代という制約と、魔力消費量が多すぎることが足枷となっている。

ヘラクレスはその功績と知名度に相応しく、多種多様な武器や能力を持ち合わせており、それらはサーヴァントとして召喚された状況に応じて宝具『十二の栄光』キングス・オーダーとして顕現することがある。今披露したものはその一端だが、現在のヘラクレスに行使できるのはこの二つが限界だった。弓兵アーチャーのクラスに寄っていること、現在正規のサーヴァントとは呼べない状況であること、そしてルール破りをした反動が、他の十個以上の宝具や『十二の試練』ゴッド・ハンドを使用不能にしている。

……だが。

「今の私にはこれで十分だ」

大剣と聖剣が、今度は互角の力でぶつかり合う。軍帯の加護があっても、膂力ではセイバーに劣るヘラクレスだが、岩塊の質量と体格差、そして技量によってその穴を埋めていた。

豪放にして精確な剣撃を繰り出すヘラクレスと、暴力的なまでの魔力量に任せて力押しを図るセイバー。後者のそれは、奇しくもかつてその手にかけた円卓の騎士、子でもあるモードレッド卿の戦い方に相違していた。純粋な技術では及ばぬ以上、彼女がそのスタイルを採るのは必然だったのだが。

総合点で見れば、全くの五分。魔力の斬撃や怪鳥の猛襲を交え、戦い続ける両者は千日手の状況に陥っていたが、敗北の流れを感じ取っていたのはヘラクレスだった。バツクアツプの差も大きかったが……宝具の応酬の余波で散逸していたはずの黒い影が、じわじわとその汚染範囲を増やしつつあるのだ。戦闘能力が互角である以上、片側に増援が加われば、拮抗した天秤は徐々に傾いていく。

「はあ——ッ！」

セイバーの突きが顔を掠めた時、ヘラクレスは決断した。この敵は短期決戦で仕留める。剣技を、武芸を競い合えないのは口惜しいが、今は主であるあの幼子の安否が気にかかる。自分の採りうる選択肢を、地形を、敵の動きを考慮し、瞬時に戦術を練り上げる。数秒の内に結論が導かれ、後は好機を伺うのみ。

その判断は、セイバーも同様だった。彼女が命じられているのは、聖杯の器の奪取。今この場でイリヤスフィールを見逃せば、元マスターたちは必ず対策を立ててくる。殊にあの黄金の弓兵は厄介であり、もし記憶が戻ったとすればこのヘラクレスさえ上回る難敵となる。今すぐに敵を打ち倒して、追いつかなければならない。

一際長い鏑迫り合いの後、二者が同時に距離を取る。騎士王は両手で聖剣を構え、大英雄の手には再びの大弓。最大宝具の激突が、三度行われようとして。

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣」

!!!

「射殺す百頭」<sup>ナインライブズ</sup>——

同時に放たれた光の渦は、またしても互いを削り合うが、その違和感に気付いたのはセイバーだった。手応えが、あまりにもなさ過ぎる。

九頭の竜は、一瞬ごとにその頭数をすり減らし、身を代償にして聖剣のエネルギーを削っていくが、その速度が今までは違う。ほぼ同速度で消えていったはずの互いの魔力は、此度はセイバーの一撃に軍配が上がった。もしや魔力切れで十分な火力を出せなかつたのかと思うが、直感がそれは否だと警鐘を鳴らす。

暴虐の闇が竜たちを呑み込み、そのままの勢いで大地を焼き払う。威力が減衰したとはいえ、本来城塞攻略に用いられるほどの宝具は、遙か森の遠くまで木々と大地を一瞬にして溶鉱炉に変え、余波で火炎地獄を作り出した。これでは如何な生命体も生き延びられまいが——ぞつとするような悪寒に、反射的にセイバーが剣を翳すと。

「ふん——！」

上空から、降下と同時に重い斬撃が振り下ろされた。体重だけでなく重力も加わったその一撃を、直感の読みもあつて防御し切ったセイバーだったが、さすがにこれには力負けし、大きく態勢を崩す。その隙を見逃さず、大英雄は凄まじい速度で肉薄する。

——今の宝具は、布石だった。

宝具同士の正面対決に持ち込むと見せかけ、それを煙幕代わりにする。今の弓矢は、

意図的に威力を落としたものだった。それ故、放った直後の硬直時間が短く、光の激突に紛れて動くことが出来た。回避しきれなかった余波によって、皮膚のあちこちが焼け爛れ融解しているが、軍帯の加護と戦闘続行の技能が彼を後押しする。

火力勝負で決着をつけるつもりだったのだろう、反動を度外視してまで宝具に魔力を叩き込んだセイバーは、骨や神経系に加わった負荷から回復し切っていない。それでも強引に魔力を流し、下段から反撃を繰り出そうとしていた騎士王だったが——それに先んじて、ヘラクレスが終幕の斬撃を繰り出した。

「——」<sup>ナインライブズ</sup>射殺す百頭」

光の束を放つ遠距離攻撃と同様の真名。故に、セイバーが束の間戸惑ったのも無理はないだろう。弓矢ではなく斧剣で、この間合いで使う宝具……？

困惑は即座に驚愕に変わる。ヘラクレスが放ったのは、矢の九連射ではなく……ほとんど同時に繰り出される、剣による九連撃だった。脳天、眼球、首筋、心臓、肺腑、肝臓、上腕、腰椎、太腿——悉く人体の急所を狙った必殺の一撃が、九重になって迫りくる。反射的に聖剣を振り上げながら、頭部と内臓を守ろうとしたセイバーだったが、彼女は死神が首元まで迫るのを感じていた。

ヘラクレスの宝具、『射殺す百頭』<sup>ナインライブズ</sup>。それは弓矢の名称ではなく、彼が極めた一つの武芸そのものを示す。凄まじい速度で放たれた複数の攻撃を一つに重ねることを本質と

し、状況に応じてカタチを変えざる奥義。弓ならば弓、剣ならば剣、果ては槍や盾に至るまで、およそあらゆる武器において彼はこの技術を使うことが出来る。武器そのものではなく、戦闘技能が宝具となった例外。卓越した戦技を誇るヘラクレスだけが身に着けた、最強の戦術である。

「が、あ——ッ」

近接戦、対人戦に於ける究極の絶技。それをまともに叩き込まれたセイバーは、鋼鉄が碎ける音と共に血を撒き散らして跳ね飛ばされていった。一つでも必殺足り得る斬撃が、九つ。霊核の宿る頭部と心臓を守り抜いた騎士王はさすがだったが、鎧もろとも四肢は完全に碎け、肋骨や一部の臓器も損傷している。即死していけないのが不思議なほどの、到底戦えるはずがない深手だった。

今のセイバーなら、ナイフを持っただけの子供であつても殺せるだろう。しかし——斬撃を放った状態のまま、大英雄はその場から動かない。回避不能と悟ったセイバーが自滅覚悟で放った一撃が、その胸板を深々と斬り裂いていたのだ。無料で命をくれてやるわけにはいかない、然るべき代償を払えと言わんばかりの一閃に、好敵手への敬意を籠めた笑みを漏らすヘラクレスだが、ダメージと出血量に耐えられずに膝をつきかけてしまう。騎士王の刃は、心臓の寸前まで届いていたのだ。

両者共に、致命傷の半歩手前の状態。それでも、持ち前の頑健さの分だけヘラクレス

が有利だった。まだ動ける彼は、得難い難敵と戦えたことに感謝の念を抱きつつ、介錯の剣を振り下ろそうとするが――

「ぬ」

動けない。気付けば、彼の両足には黒い鎖のようなものが絡みついていた。見渡せば、足元はおぞましきすら漂う黒い沼。一体いつからそこにいたのか――十メートルほど先。今まで姿を見せなかった、影の本体らしきもの。水風船に触手が生えた、軟体動物めいた異形が、ヒタヒタと唾うように揺らめいていた。

「おのれ、小癩な……！」

誇りある戦いに水を差す奸物の奇襲に、ヘラクレスが初めて憤怒の表情を見せる。奇襲や不意打ちは考えられる事態ではあったし、他の魔術師やサーヴァント……結局手出しをしてこなかったが、謎の狙撃手の介入も彼は十分考慮していた。隙を突かれたといえどそれまでではあるが、人間でも英霊でもない、意思があるのかさえ判然としない妖魔に取り込まれるのだけは誇り高い彼には許容できなかった。

不可能と思われた十二の試練を潜り抜け、神の座に列せられた彼が、この程度の怪物に屈するわけにはいかない。かつて倒した、ネメアの獅子やヒュドラといった数々の獣に比すればなんということはない――！

「ぬう――おおおおおおおおおおッッッ！」

裂帛の気合い。半ば自らの脚を引きちぎりながら、ヘラクレスが泥の沼から抜け出そうとする。じわじわと足の感覚がなくなり、何かに汚染されているのが分かるが、ならば足ごと置いていくまで。霊体のこの身であれば、いずれ再生も可能だろう。

並の英霊であれば、囚われただけで死が確定する悪性の泥。だというのに、ヘラクレスは抗ってみせる。汚染など知ったことではない。英雄としての能力、武人としての誇りが、汚染速度を凌駕して彼を窮地から救い上げ――

「――”ザバーニヤ妄想心音”――」

激痛。気が遠くなるほどの痛みの中、横を振り向いたヘラクレスは、髑髏の面が揺れているのを目撃した。この期に及んでようやく復帰したらしいアサシンは、彼と同様、胴体を大きく斬り裂かれていた。喘鳴を漏らしながらも、半ば千切れかけた魔腕はヘラクレスの胸の前まで伸ばされ、そこには砕けた偽の心臓が見えている。呪詛宝具の一種であると、彼の知性は判断した。

しかし、壊れかけた肉体を薬物で誤魔化しながらの不完全な宝具解放。更には、『ゴッデス・オブ・ウァー戦神の軍帯』でただでさえ高い能力が軒並み強化されているヘラクレスには通用せず、呪いの共鳴は彼の心臓を破るに至らない。しかし、セイバーの斬撃によって傷つい



ている大英雄にはまともに衝撃が通り——この場においては、それだけで十分だった。膝をついたヘラクレス。その誇り高い巨軀を、黒い泥が覆い尽くしていく。アサシンの一撃は、脱出しかけていた彼の目算を挫き、汚染物質へと叩き伏せたのだ。激昂と苦痛を露にしたヘラクレスは、あつという間に底なし沼に沈んでいき……狂戦士として召喚された英霊の、それが最期の姿となった。

「……一矢報いたか。王に敗れた失点は取り戻せたな」

荒い息を吐くアサシン。ヘラクレスという最大最強の英雄の一人を打ち果たしたはいいが、アーチャーにまともに斬り裂かれた体は既にボロボロだった。今転がっているセイバーや、消えたバーサーカーよりは多少マシというだけで、彼もまた致命傷の一手前の状態。麻薬で痛覚を誤魔化してはいるが、もう宝具など撃てる状態ではない。これ以上戦うためには、早急な治療が必要だった。

しかし途方もない敵だったと、アサシンは敬意すら籠めて大英雄の残滓に目を向ける。『十二の試練』という蘇生宝具を失い、能力を大幅に下げ、他の宝具にも制限が課せられた状態だというのに——ほとんど自らの技量のみで、あの英霊は騎士王と渡り合っている、判定勝ちに持ち込んだのだ。自分の不意打ちと、黒い影という反則技がなければ、ヘラクレスは敵を打倒したばかりかそのまま帰還してしまっただろう。つくづく英雄とは恐ろしいものだと思感する。

絶大な戦闘能力を誇るヘラクレスに、このアサシン……呪腕のハサンではまともな戦いを演じられなかった。あれと勝負ができるとすれば、全ての山の翁ハサン・サツバーハの中でも、伝説とされる初代以外には有り得まい。

「いや……初代様ならアレより先に、不甲斐ないこの首を落とすに来るか」

暗殺教団の頭領であるハサン・サツバーハ。彼らは、今も生きてるとされる初代の山の翁によって、首を断たれることで最期を迎えたという共通項を持つ。呪腕のハサンも例外ではなく、人生の最期にその姿を目撃し、同時に首を刎ねられた記憶を思い出すとなんとも形容しがたい感情に包まれる。

どこからか鳴り響いていた晩鐘の音は、英霊となった今でも耳に残っているのだ。いかにかのヘラクレスが相手だったとはいえ、斯様な醜態を晒したとあってはもう一度首を断たれかねない。なんとか汚名を雪いだアサシンは、少なからず安堵を覚えていた。

「呵——呆けている暇はないぞ、アサシンよ」

「魔術師殿」

そこに、焼き尽くされたはずの間桐臓硯が、湧き出るように現れた。遠坂凜の秘蔵の一撃を受けたというのに、まるで傷を受けた様子はない。

それもそのはずであり、臓硯は人間ではなく蟲の集合体へと変じている。今この場にいる臓硯を如何に殺そうと、別の場所にいる予備の虫がまた体を再構築するのみ。純正

の戦闘能力を大幅に削いだ代わりに、この魔術師は際立った生存能力を備えていた。「ここで器を奪っておかねば、対策を取られかねん。儂の計画に感づくやもしれぬしな。念には念を入れるのが儂の手よ——アサシン、お主は早々にあの小僧どもを仕留め、器を持ち帰ってくるがよい」

お前は人間の魔術師程度にも手こずるのかと、そう言外に滲ませた臓硯の命令。ポロポロの半死人に随分と無茶を言うとは思うが、幾度か醜態を晒している以上、アサシンに口答えする考えはない。誇りなどという概念からは遠く離れた身だが、暗殺者としての名に懸けてその程度はこなしてみせよう。

だが、それはあくまで人間が相手の場合。あちらにはまだアーチャーが残っているし、戦闘に介入して来た謎の存在もある。これではさすがに難しいと言うアサシンだったが、臓硯は問題ではないと言いたげに杖を振ってみせた。

「ああ——先刻のアレはアーチャーよ。少なくとも、儂らの敵にはならん。今頃、あやつは衛宮の小卒のサーヴァントと戦っているだろうて」

二人目のアーチャー……？ それはアサシンにとつて初耳だった。言峰綺礼に臓硯が悪巧みを吹き込んだ時、彼はその場にいなかったのだ。そして臓硯は、必要があるまでサーヴァントに真実を伝える必要を感じていなかった。魔術師である臓硯にとつては、アサシンはあくまで有用な駒に過ぎない。用心深い彼は、なるべく外に不要な情報

を渡さないよう心掛けている。

聖杯戦争の規則を覆すような存在には驚いたハサンだったが、それならば今見た理性を戻したバーサーカーなどという存在も同列だ。とうに正しい在り方から離れている今回の聖杯戦争においてはそういうこともあるのだろうと、生前暗殺者としての稼業に伴って権謀術数の世界に触れてきた彼は、ひとまずは納得することにした。そのイレギュラーが黄金の英霊を食い止めてくれているのであれば、残っているのは未熟な魔術師が三人。宝具を使えず、半ば死に体であろうとも、仕留めるには十分だろう。

「セイバーの復帰までは今しばらく時を要しよう。——行け、アサシンよ。これ以上儼に無様を見せるでない」

臓硯の叱咤に小さく頷いたアサシンは、霊体化するとその場を去った。敵魔術師を追って森を疾駆する従者を見送り、臓硯は戦場跡に目を向ける。

「まったく、随分と手こずらせたものじゃ」

自然豊かだった森は、もはや原型を留めていなかった。地面には隕石が衝突したかと思えるようなクレーターが穿たれ、木や草の残滓さえ残っていない。数十メートル離れたところからはまた森が復活しているが、騎士王と大英雄が撃ち放った大火力宝具が幾本もの道を作り、その途上は溶鉱炉と化すか炎上している。ミサイルの雨でも降り注いだような滅茶苦茶な大地に残っている生命体は、臓硯を除けば倒れた騎士王と、まだ

うぞうぞと蠢く黒い影しかない。

セイバーには高い再生能力が備わっており、本体だけでなく聖杯による魔力供給もあるが、あそこまで傷を負わされては完全回復まで数時間——下手をすれば一日以上は要しよう。マスターの汚染度が深まっていけば再生能力を高められただろうが、今の時点ではこれが限界だった。

その間、臓硯は武力による攻撃を控えざるを得ない。黒い影の方は、ある特殊な魔術と、媒介となる身内の魔術師を用いることである程度制御しているが、それとて完全ではないし、細かく指示を出せるものでもないからだ。

だが、多少番狂わせがあつたとはいえ、事態は概ね彼の思う通りに進んでいる。聖杯の器はまだ手に入らないが、そちらはそもそも保険としての目的なのだ。難敵であつたヘラクレスを打倒するという大きな壁は既に乗り越えた。町中に張り巡らせた蟲の情報網によれば、ランサーは既に倒されており、残っている敵サーヴァントはアーチャーが二体だけ。言峰の配下である一体は少なくとも敵ではなく、最終的には交渉でも解決できる問題だろう。つまり、残された壁は——黄金の弓兵と、三人の未熟な魔術師。それさえ倒せば、老人の悲願は叶う。

「呵々々々々——此度の聖杯は儂が手に入れる。肉が腐れ落ちる苦しみから、儂は解き放たれるのじゃ……！」

真なる不老不死——数百年の時を生きた老魔術師の、唯一の願望がそれだ。蟲によって体を構成し、桁外れの寿命と生存能力を手に入れた臓硯だったが、それとて完全ではない。定期的に新しい遺伝情報、即ち生贄となる人間を取り込まねば体を維持できず、魂が腐り溶けていく苦痛からは逃れられない。そもそも何のために不死を目指したのか、そんなことも忘れ、老人はひたすらその妄執を胸に這いずっていく。

焼き尽くされた森に、蟲の哄笑が響き渡る。戦局はいよいよ、最終局面に遷移しようとしていた——。

## 25. 死の逃避行

森を駆ける。

剣戟の音は遙か後方。ヘラクレスとセイバーの激戦の音は、次第に小さくなつていく。後ろ髪を引かれる思いだが、今は一刻も早くこの場から離脱するのが先だった。

殿を務めてくれた大英雄は、強い。『十二の試練』<sup>ゴッド・ハンド</sup>という反則的な能力を失つたとしても、あれはギリシヤ最大最強の英雄だ。並大抵の敵など歯牙にもかけまい。

しかし……今ヘラクレスと戦っているサーヴァントは、並という領域を遙かに上回っている。不可解なほど強化されたセイバー——彼女がなぜ生きていて、臓硯の軍門に下っているのかは知る由もないが、あれだけ頼りになつた少女が敵に回るとなると、厄介という話では済まなくなる。どうしてあんなつてしまったのか、誇りある清廉な姿はどこに消えて失せたのか、気になることは山ほどあるが、そんなものは全て後回しだ。

セイバーの足止めはできても、この森には敵が多すぎる。アサシンが死んでくれたと考えるのは都合が良すぎるだろうし、ヤツのマスターと思われる間桐臓硯もそれは同じだろう。加えて得体の知れぬ黒い影に、新たに現れた謎の狙撃手。一旦脱出し、状況を整理して対策を立てなければ、俺たちの運命はここで終わる。桜を助けることだつてで

きなくなる。

「走れ、雑種ども！ 怠惰を貪る暇はないぞ！」

先頭を走るアーチャーは、俺たちにペースを合わせてくれているのか、そう叱咤の声をかける。俺と遠坂はなんとか追走しているが……一人だけ、徐々にペースが落ち始めていた。

「は、は、あつ……む、無理……そんなに、走れない……つー！」

苦悶の表情を浮かべるイリヤ。慌てて彼女の速度に同調するが、それではアーチャーたちには到底追いつけない。敵が追走してきたら、逃れることも叶わなくなる。

イリヤの実年齢はわからないが、少なくとも見た目は十代前半の少女でしかない。体が出来上がっている俺や遠坂、サーヴァントであるアーチャーとは体力も身体能力も違い過ぎる。魔術で補おうにも、この分ではイリヤは身体強化魔術の心得がないようだ。

「ダメ……ここでバーサーカーを待つてから、みんなは先に行つて！」

「バカ言うんじゃないわよ。アンタをほったらかしにしていつたら、何をしにきたのかわからないじゃない。それこそ、バーサーカーに私たちが殺されるわ！」

「でも、このままだと……！」

口論するイリヤと遠坂。イリヤを抱えて走ることも考えたが、それでは今度は俺の体力も続かない。遠坂とて同様だろうし、どうすれば——と思った刹那、先頭を走つてい



たアーチャーが、いきなり戻ってきた。

「ええい、世話の焼ける人形よ……!」

あ、と声を出す暇もなく。イリヤの小柄な体は、アーチャーの腕に抱えられていた。舌打ちし、心底忌々しそうな顔になった青年だが、落ちないように両手でイリヤを抱え上げると、先程までと変わらない速度で疾走し始める。そりや、サーヴァントなら何の負担にもならないだろうが、こいつはこんな真似をする男だったか……?」

首を傾げている間にも、アーチャーは走り続ける。岩や木々が乱立する地形で、両手が塞がっているというのに、微塵も苦にした様子はない。さすがと言うべきなのだろうが、その姿はあまりに似合わず、困惑したイリヤが秀麗な容貌を見上げる。

「アーチャー……?」　　「なんで、わたしのことなんか」

「思い上がるな。貴様のごとき小娘なぞ知ったことではないわ」

底冷えするような低音。アーチャーは本気で、イリヤのことを重視していない。おそらくだが、あの英霊とイリヤが二人きりなら、あいつは確実にイリヤを見捨てていくだろう。

自分勝手というのとは少し違う。短い付き合いだが、ヤツの考えは少しだけ分かる。あの男は、自分の力で道を切り拓けない者には興味がないのだ。弱者を積極的に迫害するわけではないが、救済の手を差し伸べることもしない。放任主義というか、自分が積

極的に介入することを避け、あくまで当事者の自助努力を重んじているような節がある。

俺たちに対してだって、情報を示したり、ヒントをくれたりすることはあるが、せいぜいがその程度。サーヴァントとして戦ってはくれるが、それだって積極的なわけではない。時々手は貸してやるが、自分には頼るな、できることは自分たちでやれというスタンスだ。単に面倒臭がりというわけではなく、何か強い考えの下にそういう立場を貫いている。

おそらくだがこの男が本気を出して物事に関与してくれるのは、人間の力ではもうどうにもならないような理不尽な状況、あらゆる手立てを講じ尽くしてなお八方塞という絶望的な場面——それも小規模なものではなく、国家や惑星、人類規模レベルの危機のような。そこまでのスケールと条件が揃って初めて、やっと全力になるような気がする。そういうヤツが、何故イリヤを……？

「フン。ヘラクレレスほどの男が、命と引き換えに貴様の助命を嘆願したのだ。聞き届けてやらぬわけにもいくまい。あれは貴様に、それほどまでの価値を見出していたということだ。努<sup>ゆめ</sup>その意思を損なうな、小娘」

驚くべきことに。何者をも見下した態度のこの男は、あの大英雄には高い評価を下しているようだった。逆に言えば、一つの神話体系の中で最大最強と謳われるほどになっ

てようやく、アーチャーにとつては名を呼ぶに値する存在になるのだろう。ここまで天井知らずの傲慢さだと、いつそ清々しい。

しかし、大英雄の頼みはついにこのサーヴァントを動かした。アーチャーを信頼して主を任せた彼は、独り命を賭して戦っている。あの偉大な戦士は、イリヤスフィールを託す代償に、俺たちを逃がすための殿となつて命を擲つたのだ。あの英霊に価値を見出したアーチャーは、その輝きに泥を塗る真似はするまい。それだけの背景がある以上、どれだけ不本意であろうとも、アーチャーはイリヤを守るだろう。

とにかく、イリヤをアーチャーに任せられるなら心強い。あとは走つて森の外まで逃げ切れれば……。

「ッ……い！」

背筋に冷たいものが走る。聖杯戦争が始まつてから、幾度となく感じたもの。これは殺気だ。どの敵かは分からないが、何者かが俺を狙っている。

そう思った時には遅かった。キラ、と視界の隅で何かが光つた刹那。猛烈な速度で、俺の頭蓋めがけて何かが迫り――

「チィ――！」

金属音。ボックスステップしたアーチャーが、イリヤを抱えたまま、手甲で凶器を弾いたのだ。礼を言う暇もなく、アーチャーはイリヤを左手一本で抱え、右手に黄金の剣を

召喚する。

今の武器は矢だった。ということは、攻撃してきたヤツは得体の知れぬ謎の狙撃手だ。ランサーでもアサシンでもない、しかし確実にサーヴァント級の武具を用いる敵。聖杯戦争に関わりがある存在のうち、消去法で行けば、まだ姿を現していないのはランサーのマスターということになるが……それは違うと、俺の直感が告げていた。

敵が襲ってくるからといって、足を止めるわけにはいかない。走り続ける俺たちだが、狙撃は二射目、三射目と繰り返される。その度にアーチャーが、超人的な先読みで武器を叩き落とすのだが、どうしてもその分速度は遅くなる。もしかすると、この敵はそれが狙いなのかもしれない。

飛んでくるのは矢だけではない。投擲しているのか、それとも矢の代わりに弓に番えているのか、合間に不規則に剣が交じっている。白黒二振りの短剣が、弧を描くようにしてアーチャーに迫り来るが、黄金のサーヴァントは事もなげに軌道を読むと一閃して武器を打ち払った。中華に縁があると思われるその双剣が、妙に焼き付いて目に残る。

「――埒が明かんな」

十射目を切り払ったところで、不愉快そうにアーチャーが吐き捨てる。それと同時に疾走していた足が止まった。連動して、自然と俺たちも停止する。

ひよい、と無造作にイリヤの体が投げ渡された。大慌てで受け止め、なんとか彼女が

地面に叩き付けられることは防いだが、今のは乱暴すぎる。イリヤと二人揃って、抗議の声をあげようとするが——黄金の背中では、聞く耳を持たぬと告げている。

自由になった左手にも、アーチャーは輝ける剣を出現させていた。双剣をだらりと下げ、男が睨んでいるのは森の奥。すると、見通せぬ闇の中から、同じように敵兵がこちらを観察している気配があつた。

「我ではなく、あくまでマスターをつけ狙うか。雑種の分際で、随分と思ひ上がったものだ」

アーチャーの頬には笑み。だがそれは、快ゆえのものではない。刃向かう敵に誅罰を下す、王者としての殺意の顕れだった。膨れ上がるような殺気が、隠れた敵へと叩き付けられる。

その威圧に、イリヤが声にならない声を漏らした。遠坂も頬には汗が伝い、俺も背筋に冷たいものが走る。黄金の英霊の放つ怒気は、それほどまでに凄まじいものだった。気の弱い者など、これを見ただけでも正気を失おう。

今の言葉の通り、狙撃手は俺だけを執拗に狙い続けていた。アーチャーのマスターが、俺だと知っているのだろうか。確かにマスター狙いは聖杯戦争の常套戦術ではあるが、この英霊にはそれが気に入らなかつたらしい。おまえなど眼中にないと言わんばかりに無視され、俺を殺せば話が済むと思つているように弓兵を軽視した敵の行為が、

アーチャーの勘気に触れたのだろう。

「楽に勝つため、確実に勝利を得るためには、確かにそれも正しかろう。我とて状況によつては、戯れに同じ事をするやもしれん。

しかし、それは我だから許されること。凡夫雑種の分際でこの我を軽んじようとは、度し難いにも程がある。薄汚い鼠風情に許されることではないわ!」

無茶苦茶な理屈である。だが、当の本人はすっかりやる気のようにだ。

確かに、ここであの敵を食い止める者がいないと、俺たちはいずれ臓硯や黒い影に追いつかれることになるだろう。アーチャーにヤツを任せるのは、理に適つてはいるのだが……ヘラクレレスに指摘されたとおり、今のアーチャーは万全の状態ではない。あの敵がサーヴァントで——それも、セイバーやバーサーカー級の英霊だった場合。アーチャーでは、おそらく対抗しきれない……!」

「あの無礼者は我が引き受けよう。貴様らは先に行くがいい」

「だけどアーチャー、アンタは……」

「たわけ。未熟者が我の身を案じるなど、五千年は早い。泣き言を聞いている暇はない、その人形を連れて疾く失せよ」

有無を言わさぬアーチャーの言葉。だが——と言葉を続けようとしたところで、強烈な寒気に、体中に鳥肌が立った。

殺気……違う。これは恐怖だ。それも、殺されるなどという生易しいものではない。敵に貪り食われるという、遺伝子に刻まれた黎明の恐怖。目には見えず、声も聞こえずとも……森の奥に、確かにその気配を感じた。

——あの『影』だ。

あれだけのおぞましさを漂わせながら、異様に実体感のなかつた存在。恐怖を撒き散らしているのに、奇妙にあやふやで感知するのが難しい。この世とあの世の狭間にいるような、そんな得体の知れぬ怪物が、今確かに声をあげた。ぞつとするようなブレッツシャーを、遙か遠くから感じる。

黒い影に何の変化が起きたのかは分からない。しかし、アレが動き始めたこと……そして、俺たちを狙っていることだけは頭を使わずとも理解できる。このままでは追いつかれ、確実に喰われる。もう一刻の猶予だつてない、止まればアレがやって来てしまう……！

「つ——！アーチャー、頼んだぞ！」

弓兵は無言。こうなつては、あいつに敵を任せるしかない。役目を引き継ぐように、イリヤの体を抱え上げ、迷いを振り切つて走り出した遠坂に続く。全力のスピードは出せないが、この際文句は言っていられない。

そうして地を駆け出した直後、背後で甲高い金属音が響く。続く交戦音は、次第に小

さくなつていき……二人のサーヴァントを残したまま、俺たちは無音の森を走り抜ける。影に喰われるか森から抜け出すか、時間が全ての鍵になる——。

\*\*\*

「——さっし」

マスターたちが駆け去つた後。黄金の弓兵は、木々の奥に潜む敵に大弓を向けた。同  
時、向こうからも照準を向けられているという確信がある。

敵の性能は未知数。地形は、森林だけあつて遮蔽物が多く、攻めるには不向きだが守  
るには向いている。持久戦、遅滞戦術であれば、セイバーのような広範囲殲滅宝具を有  
していない限り今のアーチャーでも十分に戦えよう。しかし、今は時間に余裕がなかつ  
た。

死神が鎌首をもたげた気配を、この英霊も感じていた。黒い影はまだ遠いが、いずれ  
ここまでやつて来よう。正体までは知れぬが、あれはサーヴァントを優先的に狙う。

アーチャーの速力は、サーヴァントの中では並程度とはいえ、人間が出し得るそれを  
凌駕する。よほどの距離まで近づかれぬ限り、気配を晒し始めた影からは如何様にも逃  
げられるが、それとて悠長に構えている暇はない。今相対している敵も同じ考えなのだ



ろう、動きを見せたのか、木々が揺れる音が響き——  
「どこへ行く」

その途端、放たれた矢に行く手を阻まれた。事もあろうに、この敵はアーチャーを無視して魔術師たちを追おうとしていた。それを先読みしていた弓兵は、天然の遮蔽物越しに逃走ルートを狙撃することで動きを縫い止めたのだ。

木々の間を縫った一撃は、精緻なコントロールによるものだ。このサーヴァントは際立った弓の名手というわけではない。だが、その才能と経験の不足分を、この英霊は常人離れした頭脳と眼力によつて補っている。それとて本職の弓使いに比べれば数段以上劣るだろうが、この場においてはそれで十分だった。

「我の前から去る事を誰が許した？」

今の一撃は回避しようだが、容易には逃れられぬと分かつたのだろう。アーチャーに向けてられる敵意が膨れ上がる。それ以上の殺意を以て敵意に応じながら、青年は頭脳を動かし続けていた。

敵の攻撃手段は弓矢。旧時代の武器であるはずのそれは、サーヴァントの全力によつて放たれば戦車主砲に匹敵する破壊力を叩き出す。それを見れば、アーチャークラス  
のサーヴァントという可能性は大きいが、断定はできない。仮にそうであった場合、八  
騎目のサーヴァントという異常が発生していることになるが、今原因を探っても事態の

解決には成り得ない。

一方、こちらの攻撃手段は双剣と大弓のみ。極めて優れた武器ではあるが、アーチャーは自身がヘラクレスのような武人ではないと判断している。この武装のみで敵を打倒できると思うのは考えが甘すぎる。なにせ、こちらは切り札となる宝具を使えないのだから。

木々の合間に潜む射手を見据えながら、あらゆる情報を収集する。現在使える手札、地形データ、黒い影の進行速度、戦闘可能時間、敵の思考や能力、採るべき戦術——経過した時間は、十秒となかっただろう。先に動いたのは敵の方だった。

膨大な魔力が湧き起こる。人間の魔術師では到底不可能なその量に、やはりサーヴァントかと確信するアーチャー。直後、数十メートル先から、血を追う魔物が放たれた。

「——」  
フルンデイング  
「赤原獵犬」

超音速で飛来する一撃は、サーヴァントの視力を以てしても捉え難い。しかし、タイミングと射線を類稀なる頭脳で瞬時に割り出したアーチャーは、大弓から魔力の矢を撃ち出し、凶器に真正面からぶつけることで相殺を狙った。

激突音が響き、赤い剣があらぬ方向に弾かれ飛ぶ。森の奥へ消えていくかと思われた刹那、剣は不自然な軌道を描いて回転し、再びアーチャーへと向かい始めた。それはかの青い槍兵を驚愕させた一撃であり、さすがのアーチャーも眉を顰める。

「追尾宝具か」

だが、アーチャーは冷静に矢の軌道を読むと、それが自身の心臓を標的としていることを察知。機を読み、衝撃波を纏って剣の矢が着弾する瞬間、双剣を両側から挟み切るようにして叩き付けた。強烈な圧力を受けた剣は圧潰し、粉微塵に砕け散る。宝具の真名を耳にした瞬間から、彼はその武器の能力を数パターン予測していたのだ。

次いで、迎撃する隙を突くように背後から迫る風切音。振り下ろされる剣に対し、追撃まで予測していたアーチャーは、振り向きもせず持ち主に後ろ蹴りを叩き込んで怯ませると、もう片方の足を軸に回転してそのまま斬撃を放つ。双剣は同じく双剣によって防がれ、弓兵はこの時初めて敵対者の容姿を視認した。

——その男は、赤い外套を纏っていた。

騎士系のサーヴァントにはよくある重厚な鎧とは違い、物理攻撃の防御を主目的としているのではない服装。アーチャーの見立てでは、それは礼装として加工された何らかの聖骸布だ。

男の背は高め。肌は浅黒く、頭髮は白い。一見中東系の人種にも見えるが、顔立ちはアジア系に近い。これだけでは個人を特定するのは不可能だと、アーチャーはコンマ一秒以下で分析を終えた。

鏢競り合っていた双剣同士は、今度は敵の蹴りによって引き離される。鎧越しに蹴撃

を受けたアーチャーは、ダメージこそ皆無だったものの、衝撃に逆らわず一旦距離を置いた。

「——痴れ者が。逃げ隠れ、背を狙わねば戦うことすらできんか。まこと、三下らしい姑息な手よな」

「生憎、英雄の誇りとやらと私は無縁でね。隙があるなら、その慢心を遠慮なく突かせてもらう。誇りで敵は倒せんだろう?」

謎の戦士のその返しに、血色の瞳がすつと細まる。今の台詞は、何かアーチャーに怒りを抱かせたようだった。一段低い凍えるような声で、いつそ穏やかなまでに弓兵は口を開く。

「たわけめ——誇りを捨てた者に先はない。目先の敵は討てようとも、未来が続かぬ。誇りなき者には何も生み出せず、後には何も続かず、やがては捨てた誇りに牙を剥かれて朽ちていく。」

それすら分からぬとは、手段のために目的を見失った余程の愚者か——あるいは、端から己が生命を打ち棄てた阿呆よ」

アーチャーの言葉に反応はない。内心、何か思うところはあったのかもしれないが、赤いサーヴァントは双剣を交差するように構えることで答えとした。その様を観察し、対照的に双剣を体の外側に向ける構えを取りながら、アーチャーは眼前の敵の性能を図

る。

『フルンデイング』。それは、北欧神話に名高い英雄ベオウルフが有する宝具である。血に由来する伝説を持つ、知名度の高い魔剣だ。となると、この男の真名はベオウルフということになるのだが、それにしても異常過ぎる。

この敵はヨーロッパ系の人種の特徴に合致しないが、それは些細な問題だ。神話や伝説は、後世に創作されたものや脚色されたものがほとんどであり、登場人物の性別や人種、容姿や年齢が実態とはかけ離れていることなど珍しくもないからだ。そうではなく、用いた宝具——フルンデイングの方に問題がある。その魔剣を、矢として放つ逸話など存在しないからだ。

そういう使い方もあったかもしれないと仮定してみても、今この英霊が持っている剣はフルンデイングではなく、中華圏に縁のある双剣だ。そも、貴重な宝具をあのようにな手でも使い潰すなど戦略的に見て悪手であるし、ああも簡単に破壊されたことも腑に落ちない。中東系の肌の色、アジア系の顔立ちと双剣、北欧神話の宝具……容姿からも戦法からも、個人特定に迫るのは難しい。

「シ——ッ！」

斬りかかってくる双剣を、同じく双剣で迎撃する。アーチャーの剣の方がリーチが長い、赤い戦士の剣は幅が広く防御に秀でている。結果、攻勢に出るアーチャーと守勢

に回りつつカウンターを繰り返す敵という構図に推移することになった。

一進一退の攻防。が、火花を散らして切り結ぶうち、黄金の弓兵はこの男に対して分が悪いことを認識せざるを得なかった。剣の技量において、アーチャーではこの敵に明確に劣る。アーサー王やヘラクレスのようにずば抜けた才覚を有するわけではないが、弛まぬ努力と経験によって培われた剣技は堅実で無駄がない。

かといって弓の撃ち合いに持ち込もうにも、このサーヴァントはそもそも弓を使つて攻撃してきたのだ。そちらについては天賦の才を持つていると、アーチャーは狙撃を防いでいた時に分析していた。この敵がアーチャークラスなのか、それともセイバークラスなのかは判然としないが、遠近双方でアーチャーを上回る腕前を持つている。

更に言うなら、戦い方の相性も良くない。頭脳と眼力による驚異的な先読みを活かして技量不足を補っているアーチャーだが、この男はそれに近い戦い方をするのだ。技量を持つものではなく、戦闘の流れ全体を俯瞰し、予測し、一手一手を詰将棋のように進めていく。戦術が近く技量が上回るなら、どちらが優勢かなど語るに及ばない。

「小癩な……！」

勢いの甘い一撃。防げると判断したアーチャーは、敢えて前に出て鎧で強引に剣を弾くと、反動の隙を見逃さず、片方の剣を力任せに叩き折った。武装が片方だけになり、退く敵に容赦なく踏み込んで追撃を繰り返す。

アーチャーが優っているのは、武器の質と身体能力。武器に宿る神秘は敵兵のそれとは比較にならず、頑強な鎧は剣撃を受けても傷一つ負わない。基礎的な性能も、アーチャーの方がおおよそ上だ。

このアドバンテージに加え——不思議なことに、何故かこの足場の悪い地形だと戦いやすい。まるで森林地帯での戦闘経験が多いように、思考中心で戦うアーチャーらしくもなく、反射的に体が動くのだ。そのため普段よりも対応速度が上がっており、格上の敵に対しても適切な防御と反撃が間に合っている。アーチャーが未だ敗北していない、最も大きな理由はそれだった。

それに対して赤い戦士の方は、何らかの縛りがあるのかそれとも完全な状態ではないのか、僅かながら立ち回り方が鈍い。そのため、武器さえ壊せば力押しで解決すると判断したのだが……砕けたはずの剣が再び現れる異様に、弓兵はさすがに瞠目した。

「——贗作者か！」

横薙ぎの一閃を防ぎながら、アーチャーが敵の能力を看破した。他でもない、己がマスターと同系統の魔術が、このサーヴァントの手の種だ。

『フルンデイング』も、中華の双剣も、投影魔術で作り出した贗作だ。故にアーチャーの武器には質で劣る反面、破損しようといくらでも代替できる。伝説の具現とも言うべき宝具を粗製濫造するその戦法に、弓兵は強い嫌悪感を抱く。

「さすがだな。見抜かれたとあつては隠しておく必要もないが——そろそろ、君の方も手札を見せたらどうだね」

その皮肉げな挑発が、アーチャーに疑問を生んだ。今現在のアーチャーは、持ち得る武器を全て使っているというのに……その口ぶりは、まるで本来の彼のことを知悉しているようであつたからだ。

一方、疑問を感じているのは対峙する戦士——赤いアーチャーも同じだつた。彼は些か特殊な事情で、この黄金の青年を僅かながらに知っている。確かこの英霊は、湯水のように宝具群を掃射する凄まじい攻撃手段が持ち味だ。剣と弓を使い分け、徹底して自らが武器を振るう戦闘に拘るなど、どうにも違和感が強すぎる。本来の戦い方をされれば、今の自分では対処し切ることが困難なため、都合が良いと言えば良いのだが……：そちらに移られてはまずい。

警戒して様子見の攻撃を続けていたが、この敵は確実に仕留めておくべきだと判断。マスターからの命令は『敵情視察、及び間桐陣営の消極的な支援』だつたが、それに反しているわけではない。即座に投影可能な宝具を検索し、戦術を構築する。こと手札の多さにおいて、現在の黄金のアーチャーでは、赤い弓兵には遠く及ばない。

「——投影、開始」

今までとは一転、強引に双剣を叩きつけ、勢いそのまま黄金のアーチャーを弾き飛ばす。



無理矢理な一撃の負荷に耐えかね、干将・莫耶は砕け散ってしまいが、今の攻撃は次への布石。後退した鎧姿の上空に、八本の剣が突如として出現する。

八方を等間隔で覆う剣の群れ。どちらに逃げてもいずれかの直撃コースは避けられず、かといって留まれば全弾をまともに浴びる。宝具とも呼べない低級の剣ではあるが、それとて脅威には違いない。

「ぬ……！」

目を見開く黄金の騎士。降り注ぐ剣群を回避しようとするが、三本は避けきれず鎧に衝突して歪な金属音を響かせる。堅牢な防具は剣を弾き返すが、衝撃までは防げずにアーチャーは大きく体勢を崩す。そこに、三手目の攻撃が繰り出される。

「I am the bone of my sword」

行動を誘導し、隙を生み出し、稼いだ僅かな時間を以て宝具を創り出し、その効果を次の一手とする。多種多様な投影武器を用いた、流れるような連続攻撃。一つ一つは小さくとも、重なれば大きな力となる。

一方の黄金のアーチャーは、自分が着々と詰みに近付いている危機を感じていた。相手の狙いは分かる、動きも視える、どう対処すれば良いかも導出できる。しかし、そのための手駒、切れるカードがあまりにも少ない。一点特化の能力を持たぬ代わりに敵が持つ、引き出しの多さという長所は、一揃いの武器しか持たず真名解放すらできない今

のアーチャーに対して完全な優位性を持っている。

倒れかけた青年が急制動し、双剣を地面に突き刺して運動エネルギーを殺す。しかし、体勢を引き起こすより、赤い弓兵が宝具を使う方が早い。避けきれぬ黄金の騎士に、同じく黄金色の刀身を持つ剣が叩き付けられ――

「クローケア・モリス 黄の死」

衝撃。大地から抜いた双剣を交差させ、無防備な頭部を辛うじて守るアーチャー。その手甲に、黄金の剣が炸裂した。大上段から振り下ろされた一撃は重く、鎧越しに伝わる衝撃に弓兵の腕が痺れる。

しかし、驚くべきはまだ早かった。攻撃を受けたと感じた瞬間、ありえぬはずの速度で剣が引き戻され、今度は胸部に叩き付けられたのだ。ガ、と息を吐くアーチャーの、次は腰部に。更に脚部、その次は再び胸部。ほとんど同時と言ってもいい、サーヴァントが振るうにしても物理的に困難な速度の連撃が五度に亘って続き、衝撃を逃がすことさえできなかつた黄金の青年は弾き飛ばされて地面を転がった。鎧が防いだとはいえ浸透するダメージはあり、額から一筋血が流れる。

『ナインライフズ 射殺す百頭』やキシユア、ゼルレツチ多重次元屈折現象とは違い、技術による神業や魔法の域に達した同時攻撃ではない。これは宝具による能力――かの古代ローマ皇帝、ガイウス・ユリウス・カエサルが有していたという剣。「来た、見た、勝った」という名言を体現したような、神

速での超連続攻撃を可能とする真名解放によって、赤い弓兵は瞬間的に五度の斬撃を放ったのだ。

「おのれ、贋作風情が——！」

激昂する黄金のアーチャーだが、手足の痺れと脳震盪によって咄嗟には立ち上がれない。彼とてサーヴァント、この程度のダメージでは致命傷から程遠く、また数秒あればダメージからも復帰できようが、その僅かな時間で敵は詰め<sup>チェック</sup>に入っていた。ここまでの連撃は、全てこの一瞬の為の布石。

青年が纏う鎧は、物理的に異常過ぎる硬度を持つ。一定以上の神秘を含有していなければ無効化する、一定のダメージを削減する、など防御宝具には数多の種類と効用があるが、アーチャーの鎧は単純な物理防御力が桁違いだ。模造品で性能が低下しているとはいえ、<sup>Cランク</sup>中性能の宝具が直撃したというのに、まるで堪えた様子がない。おそらくあれは、最高の切れ味を誇る聖剣にすら耐えきろう。

とはいえ、物には限度がある。物理的な衝撃であれを破るのは不可能ではないが、並大抵の宝具では通じるまい。また、今の赤い弓兵は、ランサー戦の甚大なダメージが尾を引いており、切り札は使えず強力な宝具の投影にも制限がある。一部のステータスも低下している以上、相手を殺傷するには策に策を重ねた一瞬に限られた力を注ぎ込む必要があり——今が、まさにその時だった。

「トレース、完了」

起き上がろうとする弓兵に、窮地を悟った焦りが走る。敵が所有している剣の脅威を一瞬にして理解したのだ。

「賈作者が投影した宝具は、竜殺しの大英雄ジークフリートが有していたという黄昏の魔剣。精度が落ちた偽物とはいえ、最強の幻想種である魔竜を滅ぼしたほどの一振りである。並の剣では有り得ず、黄金の鎧を砕くに足る力を有しているのは間違いない。」

今のアーチャーにとって最も致命的な弱点は、宝具を使えないことだった。相手の切り札に対して合わせられるカウンター、抑止力となるカードが存在しない。だが、手を拱いては確実に負ける。

「――」

実のところ、アーチャーは聖杯戦争に於ける勝敗自体にはさほど拘りはない。契約者である衛宮士郎の道程を愉しむ――それがこのサーヴァントの目的であり、自分が勝とうが負けようが、その結果はマスターに帰結すると考えている以上結局は他人事である。野次は飛ばすし、気が向けば助言もするし、劇があまりにつまらない方向に傾くなら手出し程度はするが、それとて本気ではないのだ。

だが、いかに第三者のつもりでいようと許容できぬものはある。下らない三文劇とは

いえ、誇りすら持たぬ偽者に敗れるなど、それはこの男のプライドが許さない。何としても、不敬に対する罰を与える必要があった。

狙うべきは宝具解放の一瞬。鎧を分解・四散させ、目晦ましと壁にすると同時、宝具の効力が発揮される寸前で速攻をかける。博打に近く、相討ちの可能性が高い策など下策と呼んで差し支えないが、道を開くにはそれしかない。

緊張が走る。真エーテルの光熱が黄金の弓兵を焼き尽くすが早いのか、その前に起死回生の奇策が炸裂するか――

”幻想大剣・天魔……”

魔剣を振り上げた赤い弓兵、鎧に魔力を籠める黄金の弓兵。しかし――背筋に走った冷たさに、二人は同時に動きを止めると、怖気の源泉に目を向ける。

――森の奥に、魔の影が立っていた。

不格好にゆらゆらと揺れ、黒に赤い縁取りが入ったような幾本もの触手。深海生物めいた異形、サーヴァントを食い殺す異界の怪物は、どこか女じみた妖艶さを纏わせている。

早すぎる、と二人は同時に胸中で呟いた。彼らの目測では、この影が到達するまでもう数分は要するはずだった。当初の計算を狂わせるような何か、魔物の中で発生したのだろう。

現実にもう到着してしまっている以上、原因を予測したところで意味は薄い。そんなことを考えている間に、思考すべき頭脳を貪られていよう。こうなつては戦闘どころではなく、即時脱出しなければ諸共に喰われると、二人の弓兵の考えは一致した。

「チ——運の良い男だ。命拾いをしたな」

「決めたぞ贖作者——貴様はこの我が手ずから殺す」

絶対零度の殺意を向け合うサーヴァントたち。だがそれは一秒のことで、赤い弓兵は魔剣を下ろして黒い影を睨み、黄金の弓兵は伏せた状態での跳躍姿勢から、反動をつけて体を起こす。

今の戦闘は、黄金のアーチャーの判定負けだろう。あのまま贖作者が宝具を解放していれば、おそらく六割以上の確率で彼は敗北していた。良くても単独勝利ではなく、相討ちの可能性の方が高かったろう。気位の高い青年は、本気で追い詰められたことに激しい怒りを感じてはいたが、黒い影に飲まれるという屈辱よりは現状の方がまだマシである。いずれ借りは返すと脳裏に刻み込み、黒い影が迫る寸前、逆方向へと全力疾走してその魔手から逃れていく。

一方の赤い弓兵も、迷わず逃走という選択肢を選んだ。彼は間桐陣営に対し、消極的な協力を命じられているが、肝心の向こうがどう捉えているのかは知らぬし、そもそもこの怪物は精密に操れているわけでもないだろう。自分だけが都合よく狙われないと

いう考えは甘すぎるし、修羅場を潜り抜けてきた本能は、自分もアレにとつてはターゲツトに過ぎないと告げていた。

アレは英霊のみならず人を喰らう怪物であり、いずれは滅ぼさねばならない。事によると、聖杯戦争よりそちらの優先度が高い。しかし、自らがこの魔術儀式で狙う目的と化け物の脅威を天秤にかけた末、赤いアーチャーは今はまだその時ではないと判断した。どう出るにせよ、その前に一度はマスターに報告する義務がある。結論を出した彼もまた、霊体化して異なる方向へと脱出を始め、後にはサーヴァントを取り逃がした魔物だけがふよふよと不機嫌そうに揺れていた。

\*\*\*

心臓が早鐘を打っている。アドレナリンは全力供給、トップギアでエンジン全開。体の各所が悲鳴を上げ始めているが、ここで足を留めては、声を出すことさえ出来なくなってしまう。

どれだけ走ったのか、剣戟の音はもう聞こえない。令呪に変化はないから、アーチャーは無事なのだろうが、それでもやはり不安は残る。しかし、今はそれ以上に、背後から忍び寄って来るおぞましい気配への恐怖が大きい。

敵はまだ遠くにいるはずだ。俺たちが走り始めてもう何十分も経つ。だというのに、何故背中にかかるプレッシャーが消えないのか——!

「はあ、はあ、っ……イリヤ、出口はまだ先なのか?」

「うん、まだかなり先だと思う……シロウ、わたしを抱えてちや追いつかれちゃうから、置いていっても……」

「馬鹿言うんじゃない。イリヤは絶対に助ける。何があつてもだ」

イリヤの体を抱え直し、きつぱりとそう言い切る。正義の味方にそれ以外の選択肢はないし、ここでイリヤを失う羽目になれば、俺は絶対に自分を許せない。彼女を見捨てて俺が生きのびて、それで一体何の意味があるというのか。

大英雄ヘラクレスは、俺たちを信頼してイリヤを任せてくれた。アーチャーは、そのために敵を食い止めてくれていた。彼らへの裏切りを働くことはできないし……イリヤは、桜を助けてくれるかもしれないキーパーソンだ。俺の信念、個人的な心情、サーヴァントたちへの義理、実利、あらゆる観点が答えを指し示している。なんとしても、このままイリヤを守って逃げ延びてやる。

「っ……! 士郎、後ろ!」

何かを言おうとしたのか、先行していた遠坂が振り返る。だがその瞬間、翠の双眸は驚愕に見開かれ、放たれる言葉は警告へと変わった。速度を落とさぬまま、背後に顔を



向けるとそこには。

「アサシン……！」

疾走する白い仮面。髑髏の面が、木々の奥から猛追してきていた。

暗殺者のサーヴァントは、アーチャーの傷を治療していないのか、傍目に見てもボロボロだ。サーヴァント特有の威圧感や存在感は大幅に薄れており、人間離れした右手に至っては辛うじて胴体についているという有り様。だがそんな状態でも脚力が落ちた様子はなく、凄まじい速度でこちらに迫っている。このままでは、あと十数秒で追いつかれよう。

ヘラクレスはセイバーを、アーチャーは謎の敵を足止めしている。今アサシンに対抗できる戦力はない。どうする、令呪でどちらかを呼び戻すか……？

「シロウ……！」

泣きそうな声。アサシンを警戒しながら、視線だけでイリヤを見ると、震える瞳が見上げてきた。

「バーサーカーが……！」

そこから先は声にならなかつた。だが、口に出さずとも理解してしまう。あの誇り高い大英雄は、敗北を喫したのだ。

あれほどの英霊が、単純にセイバーに負けたとは考えにくいし、戦場の近くに倒れて

いたアサシンが何の妨害も受けずに目の前まで来ていることもおかしい。狂化している時でさえ、ヘラクレスはセイバーと戦いながらアサシンを牽制することに成功していたのだから。

ということとは、あの大英雄を倒したのは黒い影だ。あれに飲み込まれたサーヴァントがどうなるのかは分からないが、おそらく今の今まで、ヘラクレスは抗い続けていたのだらう。アサシンが戦場から抜け出せたのは、ヘラクレスが倒れた後だろうから、あの偉大な武人は暗殺者がここに到着するまでずっと、影の呪いに抵抗していたことになる。それほど頑強さを誇るサーヴァントに対する驚嘆と同時に、かの大英雄でも影には勝てないのかという絶望が過る。

ヘラクレスはもういない。アーチャーは、召喚するには距離が近すぎる。あいつを呼んでも謎の敵がすぐに追いつき、状況は変わらず令呪だけが減るだらう。

——つまり。アサシンのサーヴァントとは、俺たちだけで戦うしかない。

「――トレス投影、オス開始」

反転。イリヤを抱えながら、迫る敵と対峙する。アサシンの左手には短剣、回避は不可能と判断。

暗殺者が投擲の姿勢に移るのが、コマ送りのように見える。極限の緊張と集中によって引き伸ばされた時間で魔術回路を叩き起こす。あの投剣を防げるものを生み出さな

ければ、二秒後には串刺しだ。

サーヴァントの攻撃は、生半な武器では防げまい。反動は怖いが、アーチャーの剣を投影する。もう四の五の言っついていられない、死の一撃が眼前まで迫っている……！

「憑依経験、共感終了——！」

黄金の剣が手の中に現れるのと、短剣が飛来するのはほぼ同時だった。外見だけではなく、アーチャーの戦闘経験まで模倣した剣は、半ば自動的に動いて短剣を叩き落とす。イリヤを抱えた無理な姿勢で、投影の反動に頭痛を感じてもいるが、それでも致命の一撃は避けられた。

防御されたことに驚いたのか、黒衣が真横に跳ねる。木々の中に隠れ、姿が見えなくなるが、向けられている殺気はそのまま。すぐに手を考えねば、第二射が飛んで来よう。

「士郎……！」

数歩先を行っていた遠坂が戻ってくる。そちらにちらりと目を向けた瞬間、意識の間隙を縫うようにして短剣が飛んできたが——此度の一撃は、白銀の猛鳥によつて弾かれた。

何処から現れたのか、宙を舞う鋼の鳥は俺たちの周囲を警戒するように飛んでいる。明らかに人工物で構成されたそれは、俺の投影でも遠坂の魔術でもない。視線を下に向けると、決然とした表情のイリヤの髪が白く輝いていた。

「天使の詩<sup>エルゲンリート</sup>——アインツベルンの魔術師を甘く見ないで欲しいわ、サーヴァント」

地面に下ろすように促すイリヤの顔は、怯えていた少女のものでも、ヘラクレスのマスターのものでもない。俺よりも年下のはずなのに、その威圧感や歴戦の魔術師のそれに等しい。バースーカーが倒された事で意識が切り替わったのか、それとも追い詰められて自棄になったのか……前者である方が喜ばしいが、イリヤが戦う気になつてくれたなら助かる。俺と遠坂の二人だけでは、イリヤを守るどころか、自分の命を守りきることさえ難しい。

少女の髪が輝いたかと思うと、そこに魔法陣が浮かび、一瞬の後には空を駆ける鳥が二体が増す。ただの使い魔にしては尋常ではない魔力に、遠坂が驚きを露にする。

「これ、自立型の魔術砲台……!? アンタ、こんなの隠し持ってたの？ 魔力の自己生成機能まで……こんなの、ミニ魔術師みたいなものじゃない！」

「見ただけでそこまで分かるなんて、さすがリンね。わたしはアインツベルンのマスターなんだから、このぐらいいはできて当たり前だよ」

そう言っている間にもう一度短剣が飛来するが、片方の鳥が羽ばたいたかと思うと射線上に身を晒し、暗器を弾き飛ばしてしまう。次いでもう一羽が、短剣が投げられた方向に向かって魔力の光弾のようなものを乱射し始めた。

敵の姿が見えないせいで、そこかしこに乱れ撃ちしているだけだが、牽制程度には

なったようだ。三射目を最後に短剣は飛んでこなくなったが、この程度で敵が諦めるはずがない。二羽の使い魔に護られるようにして、俺たちは自然と背中合わせに円陣を組むような形になった。

「バーサーカーは倒されて、アーチャーは頼れない……サーヴァント相手にわたしたちだけで戦うしかないなんて、無茶もいいところね」

そう吐き捨てた遠坂が、イリヤに使い魔の性能を確認する。アサシンの攻撃を弾き、散発的にビームめいた射撃をしている二羽だが、サーヴァントに通用するほどの性能は持ち合わせていないようだ。アサシンの短剣は神秘の度合いが低く単発だったために弾けたが、それとて何度も受けきれるものではないし、アサシンが本気になってくれば防ぎ切れまい。そして光弾の方も、人間ならば致命傷になるが、サーヴァント相手では直撃しても火傷がいいところだ。あれは牽制か、特攻兵器としてしか使えない。

遠坂の方は、サーヴァント相手にも通用する魔術の備えがある。先ほど黒い影と臓硯を蹴散らした、秘蔵の宝石魔術だ。しかし弾数に限りがあり、ただの投擲では俊敏なアサシンには通用しまい。

そして俺と言えば、そもそもお話にならない。確かに投影魔術で武器を創ることはできる。アーチャーの剣なら、アサシンには確実に通用する。しかし、遠坂とほぼ条件は変わらないのだ。いかに強い武器を用意しようと、当たらなければ意味はない。創る

たびに反動が来て、最悪自滅の可能性すらある分、戦力として数えられるかどうかすら怪しい。

一人一人なら話にもならないが、三人がかりならどうか抵抗らしきものはできるだろう。幸いにしてアサシンは酷く弱体化しているし、宝具が使えるかどうかも怪しい。持久戦、遅滞戦術であれば何とかかなるかもしれないが――。

「……………ツ―」

まただ。森の奥にざわつく不穏な気配。これはさつきよりも近い。黒い影が、着実に侵攻している証拠だ。

気配さえ感じられなかったはずのあの影が、この短時間で急激に存在感を増している。ヘラクレスを飲み込んだことで、力が上がっているのか。アレの存在が多少感知できるようになったのは幸運だが、あまり歓迎できる事態にはなっていない。

このまま足止めを受け続ければ、俺たちは影に追いつかれて食い殺されるだろう。守りに徹することはできない。つまり俺たちは、敵に劣る戦力で、速攻で勝負をつけるしかないのだ。

どうする。アーチャーを令呪で呼び戻すか？　だが、それは一か八かの賭けだ。先ほどは奇襲だったから一瞬でアサシンを無力化できたが、今は違う。不意を突かない限り、いくら弱体化したアサシンといえど多少は持ち堪えるだろうし、アーチャーが戦つ

ている相手がサーヴアントなら、ここまですぐに到達するだろう。アサシンだけでなく狙撃能力を持つ敵までここに加われば、アーチャーを戦力に加味したとしてもなお今より状況は悪くなる。

「そ………！ Fixierung, EileSalve——！」

遠坂が指から魔力の黒弾——フィンの一撃とも呼ばれるガンドを乱射し、四射目の投剣に対応する。二つ同時に放たれた暗器は、一本はイリヤの使い魔、もう一本は遠坂の弾幕によつて防がれたが……この投擲は殺すためのものではない。戦力を図るためのものだ。こちらの性能を見極めたら、アサシンはすぐに決め手の攻撃を仕掛けて来よう。今だつてギリギリの状態なのだ、あちらが本気になればすぐに守りは食い破られる。

——やられる前に、倒すしかない。

「遠坂、イリヤ。作戦を立てよう。ここでアサシンを倒すぞ」

「倒すつて……アンタ、相手はサーヴアントよ。アーチャーもいないのに、本気で言うてるの？」

「本気も何も、そうするしかないだろ。もう他に手はないつて、遠坂だつてわかつてるはずだ」

令呪を消耗し、アーチャーを呼び戻して一瞬でアサシンを倒すことに賭けるか、俺た

ちだけでアサシンを倒し切つて逃走を続けるか。アーチャーを呼び戻した後で、続けざまに令呪でアサシン打倒を命じる手もあるが、その選択は一步間違えば令呪が無駄に消えるだけの大打撃。それは遠坂も理解しているのか、苦虫を噛み潰したような顔になりながらも頷いた。切り替えの早い彼女は、即座に宝石を取り出して下準備を始める。

「イリヤも、それでいいな？」

「うん。あいつ——私のバーサーカーを殺したヤツだもん」

一瞬、泣きそうな表情になるイリヤ。崩れ落ちそうになるが、歯を食いしばつて踏み止まる。イリヤにとってバーサーカーは、ただのサーヴァントであるという以上に大きい存在だったのだらう。悲しみの感情を凌駕する憤りで、彼女は戦おうとしていた。

ヘラクレスに手を下したのが、アサシンなのかどうかは分からない。しかし、敵に与しているという時点でイリヤにとっては同じなのだ。使い魔を操り、光弾を所狭しと敷き詰めるようにして乱射する彼女に合わせて遠坂も弾幕を張り、二人がかりで作戦会議をするだけの時間を稼いでくれる。

銃撃音に阻まれながらも、話し合いは一分で纏まった。遠坂が思い描いていた作戦に俺の考えを統合し、イリヤが持てる魔術知識と使い魔の性能を元に若干の修正を加える。賭けの要素は強いし、そもそもサーヴァントに人間だけで対抗するのが自殺行為に等しいが——生きのびるにはもうそれしかない。賽は投げられたのだ。



「シッ……！」

アサシンの側でも、勝負を決めに来たのだろう。今までとは段違いの鋭さの投剣が三本同時に繰り出され、自動防御機構が備わっている銀の魔鳥が反応して防ぎにかかる。だが、ついに限界を超えた一羽が片翼をもがれて吹き飛んでしまう。

ダメージのフィードバックが起きたのか、イリヤが苦鳴を上げて蹲る。残る鳥は一羽、俺たちを守る壁が薄くなつたと見るやアサシンが矢継ぎ早に弾丸の速度で凶器を投げてきた。

何かが動いた、と思った時にはもう短剣が眼前まで迫っている。扇状に広がり、俺たち三人の急所をそれぞれ狙う死の刃。コンマ一秒以下で設計図を読み込み、防げるだけの武器を投影する……！

「<sup>トリス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始——！」

悠長に構えている暇はない。設計図通りにながむしやらに剣を具現化させる。基本骨子の解明、構造物質の補強、戦闘経験の模倣。その過程を全て吹き飛ばし、呼び出したのは巨大な岩塊。ヘラクレスが用いた斧剣が降るようにして大地に突き刺さり、その厚みを以て三振りの刃を悉く弾き飛ばす……！

「——ッ」

頭痛。無理矢理な投影の反動が、視界を紅く染めていく。それだけ頭を酷使したとい

うのに、バーサーカーの剣は見てくれだけのハリボテで、急造したせいか本来の体積の半分程度しかない。それでも防御には成功したが、僅か一手で限界に近い俺と違い、アサシンはもう次の手に移っている。

俺が投擲を防いだと見るや否や、暗殺者は次の標的を宙を舞う鳥に切り替えた。秒速一キロを超える弾丸が使い魔の首を吹き飛ばし、俺たちを守る壁は皆無になってしまふ。壁となつていた斧剣も、その不完全さ故にあつという間に形を保てなくなり――遮る物がなくなつた途端、アサシンがこちらに突つ込んでくる！

「このつ……い！ 舐めんじやないわよ、Zu schien, Dooner, Brennen Sie Feinde——！」

次の投影魔術を行使するより早く、遠坂が反応する。投げつけられた寶石が光と共に炸裂し、四方に強烈な雷撃を迸らせた。先ほど見せた炎の魔術とはまったく別系統のそれは、しかし大地ごと影を吹き飛ばした威力と何ら遜色ない。これこそが遠坂凜の持つ魔術属性、五大元素使いの真骨頂だ。

地、水、火、風、空の五大元素と、虚、無の架空元素。どのような特性の魔術と相性が良いかを示す七つの属性のうち、通常の魔術師が持つものは一つ、多くても二つ程度だという。しかし遠坂は、五大元素の属性全てを兼ね備えた超一級の魔術師なのだ。火に属する炎の魔術も、風に属する雷の魔術も、彼女は極めて高いレベルで行使すること

ができる。秒速三十万キロの稲妻の蛇が、黒衣の白面を焼き尽くさんと空を奔るが――

「――フ」

冷笑。何の用途なのか、柄が長くなっている刀を大地に突き刺したアサシンは、即興の避雷針で雷撃の大半を捻じ曲げた。如何にサーヴァントとはいえ、光速の攻撃を見てから反応できるはずがない。あいつは、遠坂の攻撃を読んでいやがったのだ。

それでも遠坂の放った雷は自然現象のそれではない。魔術によつて指向性を持たせられた電流は、一部がアサシンの体に直撃コースを取るが、暗殺者は黒衣を掲げるようにして稲妻を防ぐ。帯電装備なのかそれとも何らかの加護があるのか、対魔力に関する能力を持たないはずの暗殺者は遠坂の攻撃を凌ぎ切ってしまうが――魔術を防がれた魔女の顔には、笑みが浮かんでいた。

何故ならば、大分手順は狂ってしまったが、これこそが本来の策。背後でイリヤが魔術を放つ準備をしていることに、暗殺者は遅まきながら気が付いた。新たに生成したのかそれとも復活させたのか、二羽の魔鳥がイリヤの肩に止まっている。主の号令一下、あの鳥はサーヴァントへと突貫することだろう。

とはいえ、それまでには二秒の間がある。その時間があれば、アサシンの脚力を以てすれば攻撃範囲から逃れるなど容易い。電撃を捌ききったヤツは、一度退こうという動

きを見せるが——遠坂が、それを許す道理がない。彼女の手からはもう既に、次の一撃が放たれている。

「Ein <sup>風</sup>starker <sup>よ</sup>wind, Ein <sup>成</sup>neue <sup>の</sup>Gesetz——!

森が揺れる。寶石が煌めき、魔術を以て現世の法則を塗り替える。引き起こされた現象は『暴風』。真空刃さえ伴うのではないかという空気の渦は、威力については大型台風 of それすら凌駕しよう。ごく狭い範囲に限定して吹き荒れているというのに、離れている俺ですら余波で体が飛んでいきそうだ。

これはただの風ではなく、魔術によつて操作され、敵を拘束するという概念を付与されている。高度な魔力への抵抗か、或いは純粹に膨大な魔力で対抗できれば話は別だが、アサシンはそのどちらも持ち合わせていない。秘蔵の宝石を惜しみなく投入し、ただ相手を縛ることにのみ特化した一撃は、瞬間的にであればサーヴァントにも通用する。

これこそが、アサシン討滅のための狙い。遠坂の最大火力であればサーヴァントを倒し得るが、命中させる術がない。どうにかして敵を拘束することが作戦の鍵であり、出が早い宝石魔術は短時間のごり押しに有用だ。他者の手を借りるまでもなく、彼女はアサシンの独力で追い詰めた。上から下へ、破城鎚のように叩き付けられる一撃は、サーヴァントの体を地面に縫い止め——

「白面の下で、何かが眩かれる。その途端、魔力を伴って殺到する旋風の渦が——アサシンの体を避けていく！」

「な——!?!」

絶句する遠坂。効いていない。何の因果によつてか、アサシンを縛るはずの一撃は霧消した。拘束されるはずだったサーヴァントは、悠々と地面に足をつき……そして遠坂が晒した隙は、ヤツにとってはあまりに大きすぎた。

短剣が切れたのか、投擲ではなく直接遠坂に突っ込んでいくアサシン。瞬時に剣を投影し、射線上に割り込もうとするが、完全に出遅れた。間に合わない……! !

「いの………ッ!?!」

魔術師が後ろに跳ぼうとするより早く、アサシンの拳が炸裂した。腹に突き刺さった一撃で、遠坂の体が軽々と吹き飛び、地面を擦って転がっていく。サーヴァントの身体能力であれば、徒手空拳でもただ一打で人など殺せる。

ぞつとするような恐怖。大地に叩き付けられた遠坂は、うつ伏せのまま動かない。あんな打撃を受けては、トラックに激突されたのと変わらない。如何に遠坂が優れた魔術師といえど、あれではもしかして……。まさか、そんなはずは……! !

最悪の予想に震撼すると同時——怯えの感情が反転し、激烈な怒りに変貌した。こい

つ、よくも遠坂を——!

「てめえ——!」

——殺す。

アサシンとの距離は五メートル。遠坂をぶん殴ったヤツはまだ攻撃後の硬直が解けていない。本来一秒にも満たぬはずのその隙が、やけにゆっくりに映る。

加速する世界。疾走すると同時、俺の気配を察したアサシンが振り返る。距離は残り半分、このままではサーヴァントが回避行動に移る方が早い。いや、そもそも俺は何をしようとしている。無手のままでは、遠坂を倒した敵には歯が立たない。

検索する。ヤツを殺せる武器。サーヴァントを倒し切るだけの剣——そんなものは決まっている。黒衣の胴体に深々と刻まれた傷。一撃でアサシンを退けた、黄金のサーヴァントの武具以外には有り得ない。

飛びかかりながらの高速投影。剣の形と戦闘経験を同時並行で読み込み、直撃に間に合わせる無謀な投影は、なぜか一縷の綻びもなく成功した。黄金の双剣が、左右から交差するような軌跡を描き——

「愚かな」

当然のように、左手一本で弾かれた。サーヴァントが有する凄まじい臂力に、投影宝具は一撃で罅割れ、俺は剣ごと木の葉のように宙を舞った。頭が攪拌される感覚が数秒

続いた後、全身が何かに激突し、ガ、と肺から空気が根こそぎ吐き出される。揺れる視界の中、大樹に叩き付けられたのだと辛うじて理解した。

投影はほぼ完全だった。タイミングも完璧だった。弓兵の経験も模倣できていた。ただ——致命的に、それを活かすだけの身体能力が欠けていた。敵を殺せるだけの武器を作り出したとしても、衛宮士郎の能力では、英霊にとつては何ら脅威に成り得ない

……!

「——さて、運がなかったな魔術師よ。暴風<sup>ジン</sup>避けの呪いは、私が知る唯一の魔術だ。我ら山の翁は砂漠を歩む者、それを忘れたのが汝の不覚よ」

イリヤが放った魔鳥を、まだ隠し持っていたのか、取り出した短刀で斬って捨てるアサシン。独語しているのかと思えば、ヤツが言葉を向けているのは地面に転がった遠坂に対してだった。微かにその体が動き、呻き声が聞こえたことで、彼女の命が無事だと分かって少し安心する。

だが、そんなものは風前の灯だ。使い魔を全て落とされたイリヤは無防備で、遠坂は瀕死の状態。俺は幸い、骨は折れていないようだが、全身を叩き付けられた衝撃と投影の反動で体が動かない。右手はほぼ使えず、重傷を負ったサーヴァント相手に三人がかりで挑んだというのに、その結果がこれだ。人間と英霊では、立っている土俵そのものが違い過ぎる。

……ならば、対抗できるだけの存在を召喚するしかない。手の令呪に視線が落ちる。この段に至っては、どれだけ分が悪かろうと、アーチャーを呼び出して一か八かの博打に出る以外の選択肢がないが——令呪を使おうとした瞬間、ぞつとするような殺気を感じた。

「それを使うより、私がおまえを屠る方が早い。

——機を逸したな。私と見えた初手でアーチャーを呼んでいれば、勝ちの目もあつただろう」

抜け目のない暗殺者は気付いていた。アサシンの牽制で、俺の体が凍りつく。

令呪を使うには、僅かとはいえ時間を要する。その隙をサーヴァントが見逃すはずがない。アサシンが俺に短刀を投げつける速度の方が優に上回る。この局面は、もう完全に詰んでいた。

アサシンの視線が逸らされ、青くなつて立ち尽くすイリヤへと向けられる。敵から逃れようと、イリヤは後退するような動きを見せたが、足がもつれたのかその場に尻餅をついてしまった。怯えた顔のイリヤに影が差し、黒衣の暗殺者がもう目の前まで——

「——やめ、ろ」

声を絞り出すすが、そんなものに何の意味がある。二秒後には、アサシンはイリヤの心臓を刈り取っているだろう。



思考を高速回転させる。まだだ。まだ俺にはできないことがあるはずだ。俺はまだ生きています。なら、手の打ちようはある。令呪が使えなくてもいい。衛宮士郎が使える武器を探せ、作り出せ、それだけが俺に許された唯一の魔術。

凡百の武器ではサーヴァントには届かない。アーチャーの剣はダメだ、俺にそれを使いこなす技量はない。直接剣を振るつたところで、凡人の手が隼に届くものか。届くとすれば、それは——飛び道具だ。

銃か。いや、単なる銃火器では英霊には通じない。神秘を含有するものでなければ中には効かない。それこそ、英霊の宝具でもなければ有効打とはならない。

ランサーが使う槍——駄目だ。俺ではアレを使えない。投げたところで能力を引き出すには足りず、アサシンには当たるまい。

バーサーカーの斧——駄目だ。俺ではあの重量を振り回せない。防具の代わりにするならまだしも、武器になどできるものか。

セイバーが持つ剣——駄目だ。アレは人の手に依らざる宝具だ。作り出せたとしても、俺では運用するだけの魔力を持ってない。

なら何だ。何が通用する？ 俺に作り出せ、この距離からでも届き、かつ一撃でアサシンを倒せるだけの武器はどれだ——？

「シロウ！」

その時、イリヤが叫んだ。はっとそちらに目を向ければ、アサシンが彼女を手の中に捉える寸前、その両足に銀色の鎖のようなものが絡みついていた。

足だけではない。動きが止まった体にもどこからか縛鎖が巻き付き、全身を強固に締め上げる。短刀を放ち、イリヤを仕留めようとしたアサシンだったが、左手をあらぬ方向に鎖で引き寄せられ、凶器は見当違いの場所に飛んでいった。

鎖の発生源は、地に転がっていた何体もの使い魔。倒されたと見せかけ、イリヤはただ奥の手を残していたのだ。鳥を構成する金属が姿を変え、アサシンを完全に縛り上げようとするが——イリヤの額には、ここからでも分かるほどの汗が浮いていた。サーヴァントの隙を突いて拘束するなど、相当な無茶をしているのだろう。しかし、それほどの全力を注いでもヤツを留めておけるのはあと七秒が限度。この隙に令呪を……と身を起こしたところで、イリヤの赤い瞳と視線が合った。

——シロウならできる。

「……………」

回路を切り替える。令呪ではなく、起動させた魔術回路へ魔力を叩き込む。頭痛も体の不具合も全て忘れる。ギアはいきなりトップ、アクセル全開、タコメーターは振り回された。

ここでアーチャーを召喚しても、おそらく一手遅い。その間にイリヤは殺されてしま

う。そうさせないためには、今すぐ俺がアサシンを倒すしかない。イリヤは俺を、お兄ちゃんと呼んでくれた。兄貴なら、妹を守らなきゃいけないだろう……！

想像する。回想する。手はある。ヤツを倒せる武器はある。

黄金の宝物庫と、その中に突き刺さっていた紅の神剣。あれならば、アサシンがたとえ百人いようととも歯牙にもかけまい。だが、あれは人には過ぎたモノだ。投影するところか、イメージを解析することさえ不可能。そもそもあれは人などという矮小な単位に用いる剣ではないだろう。神霊か、いや、それすら含めた世界そのものに対して用いる宝具だ。

違う。それではない。もっと前の記憶を思い出せ。それより前に夢に出てきたのは——輝ける黄金の剣。セイバーの聖剣に似ているが、少し違う。だがあの美しく尊い剣であれば、暗殺者の魔の手を打ち払えよう。

「——トレリス投影、オンス開始」

残り五秒。現物を見たこともなく、無から有を創造する想像という難行。だが、その程度がなんだ。イメージを具現化することが投影魔術だというのなら、そのぐらいはできて当然だろう。

創造理念を鑑定、成功。基本骨子を想定、成功。構成物質を複製、成功。制作技術を模倣、成功。成長経験に共感、失敗。蓄積年月の再現、部分成功。

伝説が紐解かれる。右手の中に、黄金の粒子が形を成し、幻想の剣が実体となって握られる……！

「投影、完了——！」  
トレース オフ

今なら分かる。この剣の本来の使い手はセイバーのサーヴァント——騎士王だ。どういう理由で俺がこの剣のイメージを持てたのかは不明だが、俺と彼女の間繋がりがない以上、彼女が有する経験までは読み込めなかった。投影の技量がより上になればその限りではなかったろうが、今の俺にはこれが限度だ。

使い手の技量を模倣できない以上、頼りになるのは剣本体が持つ記憶だけ。だが今はそれだけで十分すぎる。

跳ね起きる。体は軽く、剣を持つ手は燃えるように熱い。一級品の宝具を投影したせいで、感覚器官が狂っているのか。だが今は何でもいい、後でどうなろうとアサシンを倒すのが先だ。

「柘榴と散れ——！」

残り三秒。アサシンの左手はもう自由になっている。だが、迫る俺を脅威と判断したのか、サーヴァントの視線はイリヤではなくこちらに向けられる。どこから取り出したのか、手首の動きだけで射出された短剣が頭蓋を割ろうと迫るが、半ば自動的に動いた剣が武器を叩き切った。この程度の攻撃は、半端な経験憑依でも凌ぎ切れる。

踏み込む脚は疾風の如く。短剣の連打を悉く叩き伏せると、アサシンの気配が明らかに変わった。たかが人間が、自分の脅威になると思い直したのか、ヤツは俺を獲物ではなく敵だと認識した。瞬間、囚われていた右手が鋼の拘束を振り払い、半ば千切れかけた状態だというのに、無理矢理にこちらに伸ばされる。

——届く。あれなら届く。俺がヤツを斬り伏せるより早く、魔腕がこの心臓を抉り出す。

本来使えるはずがない状態での宝具行使は、自滅を前提とした特攻だ。まず間違いない右手は千切れ、傷と魔力消費に耐え切れなくなつたアサシンは消滅する。そんな悪あがきの一手にやられるわけにはいかない。イリヤが向けてくれた信頼を、裏切つてたまるものか——！

「苦悶を零せ、”妄想”——」

殺気が強まる。必殺の宝具が放たれるその寸前に、剣を振り下ろす！

「勝利すべき黄金の剣——！」

残り一秒。俺が放つた一閃が、魔腕を完全に叩き斬り、黄金の光がアサシンの体を飲み込んでいく。人ならざる腕は、断末魔の叫びのように地面を転がっていき——閃光に飲み込まれた暗殺者の英霊は、霊基の欠片も残さず消滅した。

「——ぐ」

膝をつく。別人のように動いていた体は、ようやく元の痛みを思い出したのか。体の各所が上げる苦鳴を聞きながら、俺はどこか虚ろな意識で消えゆく剣を眺めていた。

この宝具は、王を選定する失われた剣。かつてアーサー王が引き抜いたとされる剣は、本来俺に使いこなせるものではない。真名解放など、俺ごときに十全にできるはずがないし、そもそもそれだけの魔力を俺は持たない。この剣が膨大な魔力を蓄蔵していたから、今の一撃は剣本体の性能を使い潰すものだったから、辛うじて真似事ができただけだ。本来の威力を引き出せていたのなら、『約束された勝利の剣』と同様、アサシンの体だけではなく森まで焼き払っていたことだろう。

「……セイバー」

その名前は重い。かつて俺たちと共に戦い、俺たちの命を幾度も救ってくれた騎士。そして今は敵となり、俺たちと対立するサーヴァント。今の勝利は、アーチャーがアサシンに深手を負わせ、遠坂とイリヤの攻撃で隙を作り、俺が投影を行い——その果てに、彼女の剣で掴んだものだ。今の俺はセイバーのお陰で窮地を救われたようなもので、あの気高く清廉だった騎士が今でも隣に佇んでいるような錯覚に、複雑な感傷を抱いてしまう。

セイバーが遠坂ではなく、臓硯に使役されている理由。ありえないはずの新たなサーヴァント。急激に脅威度を上げた黒い影。その背後に潜む間桐臓硯。まだ敵も謎も、数

多く残されている。勝利の余韻に浸る暇はない。今は一刻も早くここから立ち去らなければならぬが……度を超えた魔術の代償か。激しい頭痛と倦怠感、それに全力疾走をした後のような酸素不足で、俺の意識は消える寸前だった。

ふと薄暗さに気付けば、日はもう落ちる手前。半時間と経たず、この森は夜の闇に包まれる。アサシンを倒したとはいえ、セイバーはまだ健在だろうし、何よりあの影は俺たちを追いかけてきているはずだ。遠坂の容体も危ないし、早くここから――。

――闇に潜むは我らが得手。生かしては帰さぬ――

ぞくりと、背筋が凍った。座り込んだまま、長いようで一瞬だった戦闘に呆けていたイリヤの顔にも緊張と警戒が走る。今のは幻聴ではない。消滅したアサシンの声が、確かに聞こえたのだ。

生きているはずがない。体が両断され、蒸発していく瞬間を俺は確認した。転移も偽装も不可能だし、蘇生宝具というわけでもないだろう。ではどこから声が――待て。あそこに転がっている腕。心臓を破壊する魔腕は、何故消滅していない。

人の体長より遙かに長い腕。ぞ、とそれが蠢いた。可視化できるほどの濃密で、邪悪な魔力が腕を黒く覆っていく。黒い靄のような魔力に包まれたかと思うと、人ならざる

腕は、何か別の形に徐々に変わり始めた。黒板を爪で裂くような不快な音と、空間が捻じ曲がるような振動が脳を激しく揺らす。……これは、何かよくないモノだ。何かとんでもない置き土産が、カタチを持つとうとしている……！

「シロウ、あれ……もしかして、精霊の腕……!?」

イリヤの驚愕。示された正体に、俺も戦慄を隠せなかった。

精霊種とは星の防衛機構の一つであり、抑止力とも言われる概念の一部とされる。自然霊であり、中にはより格上の神霊が堕ちて成ったモノもいるという。当然ながら、魔道の世界においてもそう簡単に遭遇できるものではないのだが……あれは英霊と同じで、人間よりも階梯が上の概念だ。

精霊の種類には多々あるらしいが、どう見てもあれは友好的な存在ではない。おそらくアサシンは、何らかの術でアレを抑え込み、宝具として使役していたのだろう。術者の死と同時に、束縛から解放された魔物は、独立して受肉しようとしている。本来ならアサシンに連動して消滅しているはずだが、死に際に何か仕込んだに違いない。その執念、死すら躊躇わずに敵を屠ろうという暗殺者としての矜持は見方によつては尊いものかもしれないが、今の俺たちにとっては脅威としか形容しようがない。

「く、そ……」

視界がちらつく。あれを倒すなら形が定まっていけない今だが、武器を投影するだけの



力はもう残っていない。アサシンを倒した時点で、俺はもう限界を超えてしまった。遠坂もイリヤも、状態は俺と同じだ。

こんな有り様で、サーヴァントのような敵をもう一体相手にするなど悪夢に等しい。だが、あれが完全にカタチを持つ前に倒さないと、とんでもないことになる予感がある。独力ではダメだ、意識を失う前に令呪でアーチャーを呼び寄せるしか……。

「——ふん。生き汚いな、アサシン」

この世ならぬモノの苦鳴。固まり、異形の魔神になろうとしていた魔力の靄を、黄金の双刃が十字に斬り裂いた。受肉し切ったならまだしも、不定型で揺らぐ身では桁外れの神秘に抗し得る道理がなく、悪性精霊は空に溶けるように消えていった。代わって、圧倒的な黄金の威容が大地を踏みしめる。

アサシンの残滓に引導を渡したのは、絶大な存在感を示す黄金のサーヴァント——アーチャーだった。令呪を使うまでもなく、間に合ってくれたことに深い安堵の息が零れる。誰よりも恐ろしい男であつても、こんな絶望的な状況下では、これ以上ない程頼もしい救いだった。

敵と交戦してダメージを受けたのか、黄金の鎧はどこどころが汚れ、アーチャー自

身の髪も乱れて額からは血が流れている。それでも、世界を支配するような王気は健在で。倒れた俺たちを一瞥すると、ふん、と小さく鼻息を鳴らした。

「人の身で英霊を打倒したか。その活躍は褒めてやるが——面を上げろ、雑種ども。死にたくなければ今は走れ。泥で薄汚れて果てるなぞ、そのような終わりを我は認めん」  
空を仰ぐ。太陽は半ば沈みかけているのか、夜の闇はつい数分前までより確実に深まっていった。それは、この領域が冥界へと移り変わり、あの黒い影に浸食されていることを暗示するかのよう。太陽すら落ちた世界では、影に捕まったが最後、もう日の下に  
戻ることは叶うまい。

だが、俺たちはまだ飲まれていない。失ったもの、負った傷は大きい、得られたものもある。死神の手から辛くも逃げ延び、俺たちは死の森から逃げるように立ち去った。

## 26. 影の器

——また、夢を見ている。

もう何度目になるだろうか。これはアーチャーの記憶なのだろうか、今までとは比較にならないほど、見ている風景に交じるノイズが酷い。まるで砂嵐か竜巻の中にいるように、灰色と茶色の塵と煙が視界の大半を埋め尽くしている。

記憶が欠損しているのかと思ったが……違う。これは霊的なものが原因ではない。あまりにスケールが大きすぎて理解するまで時間がかかったが、実際に、俺の見える風景ではとんでもない規模の天変地異が起こっていたのだ。

「なんだ、あれは……！ 兵を集める、緊急時の対応は訓練通り——」  
「——様のお怒りだ、これでは我々は……」

軍人の怒鳴り声、民衆の悲鳴、通路を走っていく人々の足音、巻き込まれた物が壊れる音。ここは今までの夢でも出てきた街だろう。異常現象を目の当たりにした住人たちは、眼前に迫る命の危機に右往左往していた。

だが。街がパニック状態に陥る中でも、揺るがないものがある。一際高い建物の中で、巨木の如き存在感と共に、混乱を睥睨する黄金の影があった。

玉座から続くテラス。町全体だけでなく、高くそびえる城壁の外までをも見渡せるその場所で、アーチャーは腕を組んで立っている。彼の視点に近付いたことで、ようやく混沌の全容を把握することができた。

「ふん——駄女神め。事もあろうに、天の牝牛グガラシナを持ち出したか。甘やかされた女は、これだから始末に終えん」

砂嵐か竜巻だと思つた巨大なそれは……信じがたい事に、一つの生き物だった。

全長は下手をすれば何キロという単位だろう。今見ている場所からはまだ遠く離れている筈だが、あまりに巨大すぎて距離感が失われる。雷雲の間から角や蹄らしきものも見えるが、それも当然のように規格外の大きさ。分厚い雲越しに炯々と輝く眼光は悪鬼どころか邪神のそれだ。

途方途轍もなく巨大な怪物が、竜巻と台風を纏つて大地を闊歩して来る。あんなものが到来すれば、城壁に守られたこの街とて、文明の片鱗すら残さず塵に帰ろう。俺は今まで何騎ものサーヴァントを見てきたが、アレはもう存在の階梯が違う。人間など、あれに比べれば芥子粒のようなものだろう。

……だというのに。

「驚いたね。神々でさえ、アレを御することは出来なかつたのに。あの神獣は、力だけなら神々と比べてさえ群を抜いている。どうやって躡けたのかな？」

「ハッ。痲癩持ち同士、大方気が合うのだろうよ」

明日の天気でも語るかのように、淡々と言葉を交わす王と人形。人知を超越した魔物が迫っているにも関わらず、二人の冷静さは揺るがない。

数え切れぬ程の冒険を繰り広げ、幾多数多の難敵と戦ってきた英雄たち。夢を通じてしか彼らの足跡を追えてはいない俺だが、地響きと共に破壊を撒き散らす暴虐の化身は、間違いなく最上級の難敵だと断言できる。

「もしかすると、■■■■以上かもしれないね。今回は神々の加護もない。この街の人間たちも戦力にはならないだろう。正真正銘、僕と君だけで、アレと戦うことになるけど——それでもいいのかい？」

「■■■■を守る為だ、是非もあるまい。駄女神や狂牛ごときに、我が庭を荒らす許しを与えた覚えはないからな。」

神どもの加護なぞ、王たる我には不要だ。そもそも——我とお前が組んで、出来なかつた事などあるか？」

王の表情が纏うのは、絶大な自信と信頼を滲ませた不敵な笑み。歩くだけで大地を蹂躪する災厄が相手だろうと、この男は一片の不安も抱いてはいない。獣であろうと神であろうと、彼が下す裁断には狂いはないのだろう。

まだ遠くにいるはずなのに、神獣が歩むごとに、街に小さな地震が起こる。怪物が通

り越した川は蒸発し、近寄るだけで大地は捲れ上がり、天は雲に覆われて雷と風を撒き散らす。だが、背筋の凍る風景を目の当たりにした人形は、王と同質の愉しげな笑みを浮かべてみせる。横に並んだ二人は、同時に一步を踏み出した。

「行くぞ、■■■■。馬鹿者どもに、灸を据えてやる時だ。宝物庫を完成させる前に、我が財の使い心地を奴ら相手に検分するでしょう」

「そうだね、■■■。僕も遠慮なく行くとするよ——僕の性能と君の財宝、どちらが有効か久々に競い合ってみるかい？」

涼やかな挑発に、王の笑みに獰猛さが宿る。それは不敬者への怒りではなく、友との競争に対する、童心のような高揚感の具現だった。絶望的な危機すらも、この男たちは楽しんでゐる。

王の無言の肯定を見て取った人形は、とん、と軽く大地から跳ねると——音すら置き去りにする速度で、怪獣に向けて疾走した。ほぼ瞬時に視界の端まで消えるヒトガタの単に、石造りの建物が悲鳴を上げる。もし人が残されていれば、ソニックブームで吹き飛ばされていたことだろう。例外であるのは、この黄金の王ぐらいか。

肩を竦めて友を見送ったアーチャーだが、彼とて後れを取るつもりは毛頭ないのだろう。仰々しく手を上げ、パチンと指を鳴らすと……空間に波紋のようなものが沸き立ち、彼が立つテラスからまるで生え出るようにして、黄金の巨大な物体が姿を現した。



効力を有した凶器群は最早脅威と形容できる領域さえ超えていた。

天を翔る王に対し、地を馳せるヒトガタの兵器はすつと腕を横に薙いだ。途端、彼が踏みしめる果てしない大地が、自らの形を忘失したかのように液化化した。泥のように変質した大地は、やがてそれ自体が一つの生き物であるように無数の触手を生やし始める。それが更に剣や槍、斧や弓といった形状に変質し、それぞれが異なる属性を纏い……遂には王と鏡合わせのように、無数の武器が立ち並んだ。王が人の叡智たる無限の宝具を召喚するなら、人形は星の一部を無尽の武器に作り替えたのだ。

天空と大地を埋め尽くす、数えるのも馬鹿らしいほどの宝具群。世界そのものを怯えさせる、激甚災害の集合体。僅かな睨み合いの後、神獣の絶叫を皮切りに宝具が放たれ——神話の激突に、星が啼いた。

\*\*\*

「——それで。一体アレは何なのかしら」

一晩明けて。俺たちは、衛宮邸の居間に集まっていた。

口火を切ったのは遠坂。彼女の視線は、昨日命からがら連れ帰ってきた雪の少女……イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに向けられていた。



奇跡的な連携でアサシンを倒し、死地と化した森から脱出した後、俺たちはボロボロの体を引きずってなんとかこの家まで戻ってこることに成功した。途中で遠坂がタクシーを捕まえていなければ、おそらく行き倒れるか通報されるかしていたことだろう。タクシーが通りがかった幸運と、暗示で運転手の不都合な記憶を消去できる遠坂には感謝するしかない。

辛うじて帰宅したは良いが、俺たちの状態はひどいものだった。遠坂は肋骨が折れて一部の臓器から出血していたし、俺もよく調べてみれば腕と背中のお骨にヒビが入っていた。即入院ものの状態だった俺たちが今平然としていられるのは、イリヤの治療技術がずば抜けていたおかげだろう。本人は『これは魔術じゃなくて、ちよつとしたズル』と口にしてはいたが、何にせよ俺たちが助かったことに変わりはない。

傷は治療してもらったといえ、俺と遠坂はボロボロ。イリヤも心身の消耗が激しく、アーチャーすらも謎のサーヴァントとの交戦で大分手傷を負ったようで、詳しい話は一晩休んでからということになった。そういうわけで朝になると同時、こうして会議を開くこととなったのだが。

「ゾウケンが使っていた、あの『影』のことでしよう。前にシロウと会った時に、話には聞いていたけれど……直に見て、やっと正体が分かったわ。アレはね——たぶんわたしと同じモノ」

「は……？　イリヤと同じだった？　あの化け物が？」

突拍子がなさ過ぎる発言に、目が点になる。黙って茶を飲んでいるアーチャーはさておき、遠坂も怪訝な表情を浮かべているが……イリヤは明らかな確信を持って、その言葉の口にしていった。遠坂家とアインツベルン家は、共に聖杯戦争の基礎を作り上げた家系だというのが、システムそのものを編み上げたという後者はやはり持ちうる情報も違うのだろうか。

「シロウはともかく……どうしてリンまでそんな顔をしているの？　トオサカの家なら、今ので解ると思っただけぞ」

「……父さんは、前の聖杯戦争の時に死んじゃってね。生憎、いろいろ伝わってない部分も多いのよ」

言うべきかどうか逡巡していた遠坂だったが、遂には苦々しげにそう認めた。敵であるならまだしも、現状ではイリヤに弱みとなる情報を見せてもマイナスにはならないと判断したのだろう。それにしても……俺の実際の両親だけでなく、遠坂の親まで十年前に亡くなっていたのか。聖杯戦争は、いったいどれだけの人間の命を奪ってきたのだろう。

「そう。それじゃ、最初から説明しなくちゃダメか……」

シロウ。聖杯戦争って、何のために行われているものかしら」

教師役に落ち着いたイリヤが、突然俺に話を振ってくる。不意を突かれて驚いたが……質問の内容はそう突拍子のないものでもない。その答えも、ある程度想像はついている。

最初の夜にははぐらかされたが、共同戦線を張るうち、遠坂からはいくつかの情報も教えてもらった。聖杯とは自然発生したのではなく、三つの魔術師の家系が共同で作りに上げたもの。となれば、聖杯戦争も同じだろう。手を組むこと自体は珍しくもないとはいえ、秘密主義の強い魔術師がこれほどのレベルで惜しみなく資本や技術を提供し合う理由などただ一つしか思いつかない。全ての魔術師の目標であり、僅か数名しか達成者がいないとされる原初の一への到達——即ち。

「根源だろ。聖杯戦争が魔術師が仕掛けたものだっていうなら、最終的な目的はそこしかない」

「正解。それじゃ、次の問題ね。根源へは、どうやって到達すればいいのかしら」  
どうやって、って……それが判れば苦労はしない。数千年の時をかけて、おそらく何十万という数の魔術師が挑戦して、未だ成功例が片手の指で数えられるほどだという最終目標。どういう経緯でそこに繋がるのか、魔術師もどきである俺にはさっぱり見当がつかないが、今の流れからすれば聖杯戦争もそのための実験かなにかの……。

……実験？ いや、それにしてもイリヤの口ぶりがおかしい。あの落ち着き払った様

子は、どう見ても正解を知っているとしか思えない。聖杯戦争の話から繋がるということは……まさか、これは研究や実験といったアプローチではなく、根源に到達する手段そのもの——!?

「……ちよつと待つて。まさか、サーヴァントってというのは——」

愕然とする遠坂。一歩先に答えに至った様子 of 彼女に対し、イリヤは小さく頷いてみせた。

「そういうこと。じゃあ、必要なのはマスターじゃなくて……」

「サーヴァントの方。その様子だと、本当に知らなかったみたいだけど……薄々気づいてはいたのかしら」

「抑止の輪……サーヴァントは元々英霊の座から呼んだものだし……英霊の座はあっち側にあるから……そっか、そういう……!」

何やら二人してわけのわからないことを言い始めた。何かに気づいた遠坂は、猛烈な勢いで思考を整理しているようだが、俺の方はなにがなんだかさっぱりだ。アーチャーは話を聞いているのかいないのか、茶を飲んでるばかりでアテになりそうにないし、諦めて二人に説明を求めるしかなさそうだ……。

「あの、お取り込み中のとこ悪いんだけど、俺にも解るように説明してもらえないかな?」

おずおずと右手を挙げて要求すると、遠坂が『なんでわかんないのよアンタ』とでも言いたげな目で俺を睨んできた。いや、今の単語の応酬で理解できる方がおかしいと思うんだが、天才たちと同じ基準を求めないで欲しい。

「そういえばこいつ、へっぽこ魔術師だったっけ……英霊の成り立ちとか、そのあたりから説明しなきゃダメか。そのくせ投影魔術はインチキみたいなレベルだし」

「ふーん……。シロウ、投影ぐらいいしか使えないって言ってたけど、昨日使ってたのは本当に……。あ、話がそれちゃった。そっちは後回し。それじゃ、シロウにも解るように、順番に話しましょうか」

肩を竦めたイリヤが、茶の間の隅に置いてあったチラシとペンを持ってきた。机に広げられたチラシの裏に、何か川のようなものと聖杯らしき絵が描かれる。

説明の準備をしているイリヤの姿は中々堂に入っていて、外観にそぐわぬ貫禄が窺える。こと魔術や聖杯において、俺など足下にも及ばない知識を有しているのだから当然と言えば当然だが……。イリヤスフィール先生の講義に、生徒である俺は自然と居住まいを正した。

「ホントはこんなこと、喋っちゃいけないんだけど……。今はそういう状況じゃないみたいだし、特別。

冬木の聖杯はどういうものなのかって、シロウはどれくらい知ってるの？」

「……正直、遠坂と言峰に聞いたことぐらいしか知らない。聖杯は御三家が作ったとか、サーヴァントを召喚したりマスターを選んだりするとか、マスターが最後の一人にならないと真の姿を現さないとか何とか」

「うん、どれも正解といえれば正解ね。薄々シロウも気づいてると思うけど、この聖杯戦争にはいろいろ裏があつて……聖杯つて、そもそも一つじゃないの」

「——は？」

いきなりとんでもない爆弾をぶち込まれて、間抜けな声が出てしまった。混乱する俺の理解を助けるためか、イリヤは言葉だけではなく紙とペンを使って聖杯戦争の仕組みを図示してくれた。

——曰く。冬木には、二つの聖杯が存在する。

一つ目が、大聖杯と呼ばれる存在。これこそが聖杯戦争の運営母体のようなもので、約六十年をかけて地脈から魔力を蓄え、冬木市を聖杯戦争を執り行うために適した霊地に調整する。機が熟した際には、マスターに相応しいとされる人物を選抜する権限を持ち、サーヴァントの召喚及び現界維持、現代に即した知識のインストールなど各種のサポートを行う。……どれを取ってみても、俺の理解が及ぶとは思えない途方途轍もない機能で、これを作り出したのはとんでもない天才なんだろうとぼんやりと感じられるぐらいだ。

そして、「大」聖杯とつくからには、対となる「小」聖杯も存在する。俗に聖杯と呼ばれるのはこちらの方で、聖杯戦争の過程を通じて完成に近づき、六騎のサーヴァントが倒されることで願望機としての機能を有するようになるのだという。

「それで、その『聖杯の器』……わかりやすいから、小聖杯でいいか。小聖杯っていうのがわたしなの」

「……はっ。」

なんだかさつきからこれしか口にしていない気がするが……イリヤの言っていることは、悉く俺の理解を超えている。話を聞く限り、聖杯というのは「モノ」だ。それがイリヤだとはいったいどういう……？

「わたしは衛宮切嗣と、お母様——アイリスフィール・フォン・アインツベルンの間に産まれた娘。でも、わたしは人間じゃなくて、『小聖杯』として機能するよう産まれる前から調整されているの。」

過去の聖杯戦争で、アインツベルンは一度も勝てなかった。小聖杯が壊されて、儀式そのものが失敗してしまったこともある。そこで、アインツベルンは考えたの。聖杯そのものに、自分を守る機能を持たせればいいって——

ぞつとした。

魔術師は、根源に辿り着くためならなんでもやる。その事実を、俺はこの聖杯戦争で

散々見てきたはずだった。しかし、非人道的というのを通り越して、アインツベルンの思考は異常だった。それでは連中は、小聖杯とやらに防衛機能を施すただけに、人間を後付けしたってのか——!?

イリヤが切嗣の娘ではないかというの、俺もなんとなくわかっていた。それにしては年齢と外見が一致していないから、確証が得られなかったのだが……おそらくそれは、小聖杯として改造された副作用だろう。アインツベルンの異常さに背筋が凍ると同時、怒りの感情が湧いてくる。

「それで作られたのがわたし。最後に必要な小聖杯を最初から持つていて、バーサーカーを使いこなせるだけの性能を持つ、人間でもホムンクルスでもないマスター。ここまで有利な条件を揃えれば、聖杯戦争で負けはない……はずだったんだけど」

「あの影に全部ぶち壊されたっていうわけね」

遠坂の合いの手に、肩を竦めてみせるイリヤ。確かに、ルールを根底からひっくり返す影の存在がなければ、アインツベルンの戦略は実を結んだことだろう。

俺でも知っているような大英雄のアーサー王……その彼女ですら勝てないと言われた、神話の超戦士。真つ当に聖杯戦争が進んでいけば、ヘラクレスが負けることなどほぼあり得まい。

「んん……?」でも、あの影がいくら強いって……イリヤと同じ存在っていう



のはどういうことだ？」

「うん。そつちも順番に説明するから、ちよつと待つててね。」

さつき、わたしが『小聖杯』だつていう話は聞いたよね。小聖杯にはいくつか機能があるんだけど、そのうちの 하나가、脱落したサーヴァントの回収。英霊たちの魂を集めて、大聖杯への孔を開く——つまり。聖杯戦争におけるサーヴァントっていうのは、大聖杯を動かすための燃料なの」

とんでもない内容に、開いた口が塞がらない。英霊たちは聖杯に託す願いがあるからこそ召喚に応じるというのに、彼らは単なる燃料に過ぎないだつて——？

「脱落したサーヴァントは、世界の外側にある『英霊の座』へ戻ろうとする。その時にできる通り道を固定するのが大聖杯の役割。そして、世界の外側は根源に通じる——聖杯戦争は、そこへ至るための魔術儀式。」

願いを叶えるっていうのは、あくまでも副産物。サーヴァントの魂がこれだけ集まれば、その魔力でできないことなんてほとんどないもの」

普段の無邪気さはどこへ行つたのか。淡々と語るイリヤの姿は、紛れもなくアインツベルンの魔術師のもので、まるで他の誰かが乗り移っているかのようにも見える。その冷厳な雰囲気気圧されてしまい、話の意味を咀嚼するのに時間がかかる。

とどのつまり。これは願いを叶えるという謳い文句を釣り餌に、サーヴァントを召喚

し、魔術師を集め、大勢の犠牲を重ねて——その果てにただ一人だけが根源への可能性を得る、途方もなく大それた詐欺なのだ。裏側を知っている者からすれば、何も知らずに戦っている参加者は、さぞ滑稽に見えたことだろう。

「——フン。願望機など所詮は絵空事、大方そんなものであらうと思つてはいたが……此度の宴、つくづく下らぬ茶番であつたか」

あまりの衝撃でうっかり失念していたが、裏事情を聞いて一番怒り狂いそうなヤツは、意外なことに平然としていた。事もあらうに燃料扱いをされて、この気位の高い英霊の勘気に触れないはずがないと思つたのだが。

「驚いた。怒らないんだな、アンタ」

「綺麗な薔薇には棘がある、というのはこの国の格言であらう。大凡の絡繰りは読めていた、聖杯などという謳い文句に釣られる者は余程の愚者か善人だらうよ。

しかし——不愉快であるのには違いない。もし仮に貴様が、全て承知の上で我を呼び、面従腹背を由としていたのであれば——その愚行のツケを、身を以て知らしめてやったところだ。敵が後ろに迫つていようが、守つてやる気にはなるまいよ」

知らぬが仏、というヤツだな——と。そう嘯く弓兵の目が少しも笑つていないことに気づき、背筋に冷たいものが走つた。

さすがに、今の今まで裏事情を知らなかつた人間をどうしようと思つてはいない

ようだが……そうでなければ、俺の首が繋がっていることなどあり得なかった。この男の冷酷さは、もう十二分に知っている。

「だが、着眼点は悪くない。私は根源なぞに興味はないが——よくぞここまでの仕組みを敷いたものよ。これを練り上げた者は、希に見る才の持ち主であろうな」

「……。アンタでも人を褒めることがあるのね」

「たわけ。褒めるべきは褒め、罰すべきは罰す。裁定が均衡を欠くのであらば世が乱れよう」

相変わらず偉そうだが、よく聞くと真つ当なことを言っている。何を言おうとした遠坂だったが、俺と同じことを思ったのか、それもそうねと一言言うだけに留めた。

「話を戻すけど……。そういうわけで、小聖杯であるわたしには、サーヴァントたちの魂を回収する機能がある。それなのに、今回の聖杯戦争でわたしが回収できたのは、昨日のアサシン一体だけ。残りは全部、あの影に持っていかれたわ」

「じゃああの影も、小聖杯とかってやつなのか……？」

「器そのものじゃなくて、端末か何かだとは思っただけど……根っこは同じ。信じられないけど、ゾウケンが連れていたのを見たでしょう？　聖杯の鑄造はアインツベルンの

専門だから、マキリが真似できるはずなのに……」

昨日見た感じだと、あの影は人もサーヴァントも見境なく襲うわ。回収対象を選ぶ機

能が壊れてる……ううん、汚染されてるのね。とにかく、もう真つ当なモノじゃなくなってる」

「——であろうな。アレは人の世に害なす悪性だ。兵器としてならともかく、道具としては下の下と言えよう。」

アレを相手取るのは中々に手間だぞ。そも、あれが聖杯に連なる存在というなら、それに喚ばれたサーヴァントでは相手になるまい」

アーチャーの言葉で、遠坂の顔から血の気が引く。俺もその意味を理解して、じつとりと嫌な汗が腋を濡らし始めた。

つまり、こういうことか。間桐臓硯は、聖杯戦争に必要な小聖杯を握っている。しかもそいつは街の人間を見境なく襲っていて、サーヴァントを以て対抗しようにも、そもそもサーヴァントが聖杯によって召喚・維持されている存在である以上は勝ち目がない——こんなもの、飛車角落ちどころかももう王手までかけられている状態だ。

「ふん。更に言うなら、貴様らもあのセイバーを見たであろう。アレはサーヴァントを呑み込むだけではない——小聖杯とやら、出来損ないの器にしては力がありすぎる。」

汚染と言ったな、小娘。我の見立てでは、あの影は聖杯の本体から流れたものだ。違うか」

その問いかけに、黙って頷いたイリヤ。俺はそろそろついていけなくなってきたのだ

が、青くなっていた遠坂はそうではないらしい。ただでさえ顔色が悪かったところが、もはや白くなつてしまつてゐる。

「ちよつと待つて……あれが本体の力つてことは、もう何もかもメチャクチャじゃない！ それじゃあ、大聖杯つていうのは……ううん。この聖杯戦争はとづくに——」

「然り。事の始めから、柱の根元が腐つていたのだからよ」

不愉快そうなアーチャーと、蒼白になつた遠坂と、何故か疲れたような顔をするイリヤ。三者の間ではどうやら共通認識ができたらしいが……すぐに解らないからといって、全部遠坂に頼るのも良くない。今の会話を、自分なりに噛み砕いてみよう。

臓硯が従えていた謎の影——小聖杯。アインツベルンが用意したものと違ふ賈作である以上、その機能はどうしても劣化する。だといふのには本家を差し置いて脱落サーヴァントの魂を回収するどころか、セイバーやバーサーカーを打倒し、前者に至つてはどうやったのか再度サーヴァントとして使役している。

そんなことが可能なら、本家のアインツベルンが最初からやつてゐるだろう。といふことは、それは小聖杯自体の能力ではない。大聖杯の方に備わつてゐる機能なり能力なりを悪用してゐると考へるのが筋だが、アーチャーが口にしたとおりに、背筋が凍るほどの悪性を感じるのをおかしい。これほどの魔術儀式を作り上げた魔術師たちが、そんな不確定な危険要素を残しておくだろうか。

となると、可能性は一つだ。聖杯戦争の根幹を成す大聖杯は、重大な欠陥なり不具合なりを抱えていて——臓硯が作った偽物の小聖杯は、その歪みを悪用している……？

「それって、もう聖杯戦争どころの話じゃないだろ……！」

「マキリが余計なことをしなければ、こんなことにはならなかったんだけど……そうね。ここまで話したんだし、あなたたちには聞く権利がある。」

今から、少し長い話をします。アインツベルンが呼び出した、あるサーヴァント——悪であれと願われた、一人の英霊のお話」

謳うような声音で、遠くを仰ぎ見ながら……どこか老成した雰囲気纏ったイリヤは、朗々とある話を始めた。

——その英霊の名は、この世全ての悪という。

ゾロアスター教において、善なる神と戦い続けると記される悪の権化。あらゆる邪悪を司るとして畏れられ、崇められるその存在は、紛うことなき神霊だ。

アインツベルン、マキリ、遠坂の敷いた聖杯戦争の仕組みは、あくまでも英霊を招聘するもの。存在の尺度スケールが違う神霊を召喚するような設計はなされていない。しかし、二度の聖杯戦争が有耶無耶のままに終わり、百年以上の時間を無為にしたアインツベルンは焦っていた。

そして彼らは、確実に聖杯を得るための力を求め、この世全ての悪の召喚に挑み……

ルールを違反したツケか、現れたサーヴァントは神霊からは程遠い、何の力も持たない存在だった。

ただ「この世全ての悪であつて欲しい」と願われ、小さな村で生贄とされただけの一般人。そんなものが聖杯戦争で勝ち抜けるはずもなく、復讐者アヴェンジャーのクラスで召喚されたサーヴァントは当然のように敗北した。

「でもね、そのサーヴァントは特別だった。人々の願いだけで生み出された英霊は、願いそのものと言つてもいい。そして、聖杯とは願いを叶えるもの」

アインツベルンが犯したルール違反に、そのサーヴァントが持ち合わせた特異性。そこに聖杯が有する願望機としての機能が合わさり……幾つもの偶然の結果、聖杯戦争の成否を待たずして、聖杯はその願いを叶えた。即ち——この世全ての悪アヴェンジャーであれという願いを。

「なによそれ。ちよつと見ただけで、あの影はとんでもなくやばいやつだつていうのはわかつた。あれがこの世全ての悪アヴェンジャーですつて……!? あんなのが本体に入つてる聖杯なんて、真つ当に動くわけないでしょう!」

「願望機としての機能なら、リンの言うとおり。でも、わたしたちが想定していた、聖杯の正しい使い方——門を開く上では、それは関係ないとアインツベルンは判断したの。必要なのは、聖杯の機能と力だけだから」

「……ああそう。自分たちは関係ないから知ったこつちやないっていうワケね。馬鹿にされたもんだわ」

につこりと、いつそ見惚れてしまいそうなほど綺麗に微笑んだ遠坂だったが——背筋に鳥肌が立った。どう見ても遠坂は、最大級に怒り狂っていた。

当たり前の話だ。勝手にルールを破り、このとんでもない惨状の原因を作り出した挙句、自分たちの目的には関係ないからと悪びれもせず黙っていたのだ。これで怒らない人間がいるわけがない。

あの影に感じたおぞましいほどの悪性は、聖杯に取り込まれたこの世<sup>アンリ・マユ</sup>全ての悪<sup>ユ</sup>だったのだ。間桐臓硯がどうやってそんなものを使役しているのかは分からないが、もし奴が勝ち残り、汚染された聖杯を使おうとすれば、何が起きるかわかったものではない。その端末に過ぎない影だけですら、既に多くの人命を奪っているというのに。

「イリヤスフィール。アインツベルンがしかしてくれただけのことのツケは、きっちり利子をつけて返してもらおう。首を洗って待ってなさい。」

でも今は、あんたたちの責任を追求してる場合じゃない。もうこれは聖杯戦争の枠を超えてる——遠坂の当主として、アインツベルンに聖杯戦争の停戦及び共同調査を要求します。士郎もそれでいいわよね？」

怒り狂っているようで、遠坂は冷静だった。あの影の根本は判明したが、いるはずの



ない八騎目のサーヴァントにアーチャーの記憶が戻らぬ理由、臓硯の目的や手段など、おかしなことがあまりに多すぎる。手を拱けばどれだけの被害が出るかさえ想像がつかない以上、遠坂の提案を拒否する理由などない。

イリヤも、遠坂がそう言い出すことを予想していたのだろう。既にアインツベルンが目的を果たせる可能性はなく、彼女に残された選択肢は多くない。幼い外見には似つかわしくない、魔術師としての重々しきで、イリヤはゆつくりと頷いた。

「アインツベルンとして、トオサカの申し出を受諾します。……と言つてもバーサーカーはやられちゃったし、リンだつてセイバーを取られちゃつてるでしょ？ マキリは好き放題やつてるし、どうしたらいいかな」

「それが頭の痛いところなのよねえ。今の私たちに打てる手つて、もうかなり限られてくる。七騎のうち、セイバーはあっち側だし……バーサーカー、キヤスター、ライダー、アサシンはもう倒れてる。残つてるのはランサーと、最後に出てきたよくわからないヤツ。最後の方はあっち側っぽい動きをしてたし、協力を仰げるとすればランサーだけ……その前にアーチャーが倒されたら、完全に詰みよ」

よく考えてみれば、聖杯戦争に謎の八騎目が存在する時点で、そもそもルールが狂っていた。だが、聖杯そのものに異常があるならば納得できなくはない。

俺たちを襲つてきた以上、謎のサーヴァントが友好的とは考えづらい。あれもまた間

桐臓硯に与する存在だったなら、状況は最悪だ。さらに言えば、あちらは影という反則技を使ってくる。ここまで絶望的な状況で勝ち筋があるとすれば、それは前回の聖杯戦争で最強を誇ったという、このアーチャーの宝具だけなのだが――。

「それにしても、イリヤスフィール。アンタ、よくアーチャーがいるのにあんな話する気になつたわね……。要するにサーヴアントって、騙されて召喚されてるワケでしょう？

そんなの、普通は怒り狂うわよ」

「――ほう」

ぞつとするような鬼気が、静かに放たれた。

部屋の一角に座るアーチャーは、別段荒れている様子はない。いつもの余裕たつぷりな表情で、むしろ口元などは愉快そうに釣り上がっているが――その紅蓮の瞳だけは、恐ろしい冷たさを宿していて。人のものとは思えぬ双眸が、イリヤの小さな体を睨め据える。

「我は何も知らぬ者に責を問うほど愚かではない。故に小僧とその娘、貴様ら二人を罰そうとは思わぬ。

だが――貴様は別だ、人形の小娘。ヘラクレスの嘆願に免じ、一度は貴様の命を拾い上げてやったが……。我を謀りこの世に呼びつけた大罪、我を聖杯ごときの供物にせんと企んだ不敬。何を以て償わんとする？」

アーチャーを召喚したのは俺のはずだが……いや、システムに騙されて召喚されたというのであれば、それを組んだ側に責任があるというの間違いない。その挙句に燃料扱いされて狙われていたとあれば、プライドが天より高いこの男が素直に見過ごすはずもなかった。

無礼を働いた者、逆らった者、裁くべきと断じた者——それがどれほど気に入った相手であれ、この英霊は必ず殺す。それがアーチャーの本質だ。

絶対者の向ける殺意に、イリヤが怯えたように立ち上がり、何歩か後ろに退く。酷薄な瞳でそれを見据えるアーチャーは、ますますその殺気を強め——ダメだ、止めないとこのままイリヤが……!」

「……わ、わたしを殺しても、状況は変わらないもの」

が。俺の焦りをよそに、辛うじて踏み止まったイリヤは、きつと眦を上げてアーチャーを睨み付けた。

黄金の殺気をまともに直視し、少女としての怯えを顕にしたイリヤ。しかし、彼女はやはり俺などとはレベルの違う魔術師なのだろう。恐怖の色を残しつつも、確信を孕んで放たれた言葉に、アーチャーが無言で続きを促す。

「あなたはもう、サーヴァントとして召喚されてしまっている。聖杯戦争の裏事情を知っていても、サーヴァントである以上、負ければ魂を回収される——それが嫌なら、

戦って勝ち残るしかないもの。ほら、結局のところ、何をするかは同じでしょう？

それに今回の聖杯戦争は、マキリのせいであちやくちやになつて。あのセイバーみたいに、あつちの器に回収されたらどうなるかわからない。そしてこの状況で、聖杯に一番詳しいのはわたし。バーサーカーもいなくなっちゃつたし、再契約できるようなサーヴァントも残っていない今、わたしを殺してもあなたにはメリットがないわ」

確かにその通りだ。聖杯戦争の裏側を知つた今ならわかるが、このシステムは使役される者にとっては極めて不利にできている。令呪というシステム、魔力というエネルギー源、マスターという要石——生殺与奪権を三重に握られることで、召喚された英霊は魔術師に縛られる。一旦召喚されてしまった以上、後で何を知ろうが、サーヴァントの選択肢はほとんど限られるのだ。

だが、このプライドの高い英霊が、他者からの押しつけに唯々諾々と従うだろうか。黙って聞いているアーチャーだが、その瞳の色は既に絶対零度に近い。空間ごと押し潰すような殺気に、イリヤの顔色が青を通り越して白くなるが——それでも、小さな魔術師はこれ以上後に退かず。そればかりか、そのか細い指を、ぴつとアーチャーに突きつけた。

「あなたに殺されてなんかやらない。わたしが死んじやつたら、バーサーカーのカタキが討てないもの。」

バーサーカーを奪っていったやつを、わたしは許さない。絶対絶対、やつつけてやるんだから——！」

——それは、悲壮なまでの叫びだった。

少女の体から出たとは思えない、血の滲むような気迫に、アーチャーではなく横から見ている俺の方が驚いてしまう。大声を出しすぎたのか、肩で息をするイリヤだが、もうその瞳に怯えはない。黄金の英霊とは似て非なる、赤い眼差しに宿っているのは、明確な怒りと決意だった。

遠坂が、セイバーと気の置けない仲だったように。俺がこの傲岸な男を、なんだかんだで大した英霊なのだと思いついて始めているように——イリヤもまた、バーサーカーとの間に絆を結んでいたのだろうか。

『イリヤを頼んだぞ』

あの男の言葉を思い出す。勇名に偽りないあの高潔な武人も、ただマスターだからという理由以上のものがあって、死地に赴いてくれたに違いない。

「——フ」

当然と言うべきか。イリヤの怒声を正面から受けても、この青年には微塵も響いていない。だが、彼女の言葉に何か思うところがあつたのか、アーチャーは楽しげに口の端を上げていた。

「その意気や良し。利害のみを語るのであればそれこそ木偶人形と変わらぬ、この場で手ずから誅していたところだ。」

——小娘。貴様の論には、実行戦力が欠けている。復讐も戦争も、力なくしては意味をなさぬ。そのために我を使おうという魂胆、もはや呆れるほどの愚かしさだが——貴様はヘラクレスに報いんとした。それは人形ではなく人間の決断だ。斯様な愚かしさは我の好むところよ。

よかろう。その気炎に免じて、首は落とさずにおいてやろう。精々励むがいい、小娘」薄く笑ったアーチャーが、獰猛な殺意を引込める。この男と綱渡りのような会話をするのは、聞いているだけでも寿命が縮まる——イリヤが氣にくわれない言葉を口にすれば、こいつは間違いなく剣を抜いていた。

そうなればイリヤを守るために、俺は令呪を行使しなければならなかっただろう。どうやら遠坂も同じようなことを考えていたようで、胸元まで掲げられた拳——おそらく宝石が握られている——を静かに膝まで戻していた。

「……そろそろ、わたしも質問してもいいかな。シロウたちは、どうしてわたしを助けてくれたの？」

さすがに肝が冷えたのか、弓兵の殺気から解放されたイリヤは顔に疲れを浮かべていた。お茶を飲んで呼吸を整えながら、やっと本題が提示される——昨日のとんでもない

激戦とそのダメージ。それに、情報の整理が最優先という戦略面の判断がなければ、昨晚のうちに話しておくべき内容だ。

「昨日もちらつと話したけど、この家にはもう一人マスターがいるんだ。桜っていう女の子なんだけど、それが——」

バタン、と廊下で何かが倒れる音。

一番音に近かった遠坂が、すわ何事かと障子を開ける。木張りの廊下には、紫がかつた髪を乱した女性が倒れていて——それは誰であろう、今まさに俺が話そうとしていた桜その人で。

「桜!? 寝てなさいって言ったのになんで……っ! ごめんイリヤスフィール、話は後! 士郎、運ぶの手伝って!」

慌てて立ち上がり、倒れた桜に駆け寄って抱き起こす。高熱のせいか、べつとりとした汗で髪が貼り付き、顔色は真っ赤……朝方にスポーツドリンクとおかゆを持っていった時はもう少し元気そうだったのだが、無理をして起き上がったのだろう。原因が魔術絡みでさえなければ、迷わず救急車を呼んでいる状態だ。

「くそっ、また症状が悪化してるのか? このままだとほんとにまずい……とりあえず、客間で横にさせて——」

「——ふうん。こんな近くにいたのね、マキリの器」

唐突に、よくわからないことを口にするイリヤ。俺と遠坂が右往左往する中で、その声は不思議とよく響いた。

呆気にとられる俺たちを余所に、近づいてきたイリヤが桜を見下ろす。初対面のはずなのに、まるで怨敵を目にしたかのような酷薄さは、背筋が凍るような冷気を纏っていた。

「わたしを助けてくれた理由がわかったわ。この子がその原因——そうでしょう、シロウ？」

「あ、ああ。この子は間桐桜。前に公園で話したの、覚えてるよな？ 実はライダーのマスターだったみたいで……あーその、なんて言うか……」

「いいわ、見て大体わかったもの。——リン、あなたはこの子のこと、気づいてなかったの？」

タオルを持ってきた遠坂が、突然話を振られて困惑する。どういうわけか、ただ近くで見ただけで、イリヤは何かに思い当たったようだが……。

「気づいてなかったって……桜がマスターだったってこと？ それなら、臓硯の仕込みだと思っただけど、この子『偽臣の書』で兄貴にマスター権を委譲してたのよ。

そういうえば、慎二のやつすつかり見なくなっただわね。ライダーはキャスターと組んでみたいだし、魔術で大人しくさせられたのかしら」



「そのシンジっていうのは知らないけど、わたしが言ってるのはそんなことじゃないわ。リン、あなたなら気づいていてもおかしくないはずだけど、うっかり見落としでもしたのかしら。」

魂を集める黒い杯、門へ通じる魔の器——マキリが作った聖杯は、マトウサクラそのものよ」

「なんですって——」

絶句する。あまりの衝撃からか、口元を押さえた遠坂の顔から血の気が引いていく。その青ざめ方は、アーチャーに睨まれた先のイリヤにも匹敵しよう。そして俺もまた、ハンマーでぶん殴られたようなシヨックで頭が揺れていた。

桜が魔術師だという話は、驚いたがまだ理解できた。マスターだったという話も、家のことを考えれば納得はできる。だが、彼女が小聖杯なんてものにされているなど、到底看過できる内容ではなかった。

アインツベルンは錬金術の大家であり、中でもホムンクルスの鑄造に長けているという。その彼らの技術を以てすら、小聖杯であるイリヤを作り上げるには、胎児の頃からの調整と、おそらくは成長しないという副作用を容受する必要があったのだ。

専門家ですらないマキリが、後天的に作り上げた偽物の小聖杯——それが何のリスクも副作用もないなど、素人ですら信じまい。桜のこの異常な体調不良について、診察し

た言峰は体内にいる虫だけが原因ではないと仄めかしていたが、その意味がようやく分かった。むしろ桜がこうして生きていることが、ある種の奇跡と言つてもいいだろう。

「紛い物なのに、まだ人の形を保てるなんて、正直驚きね。よほど才能があるのか、我慢強いのか……いえ、その両方かしら」

「それじゃあ、この子の体調がおかしいのつて——」

「キヤスター、ライダー、バーサーカー……もう一騎はランサーかな。それだけの英霊の魂を集めて、人間としての機能が無事なわけがない。わたしだって、それ以上収めれば容量を超えるわ」

遠坂とイリヤが何かを言い合っている。だが、音の羅列を脳が意味あるものとして解釈できない。抱き上げた桜の熱さと、苦しそうに浅い呼吸を繰り返す姿が、俺の思考を凍えさせていく。

こんなのはおかしい、と怒り狂う自分。どうすれば良いんだ、と道を探す自分。頭の中かぐちやぐちやになって、冷たいものが広がっていく。混乱と恐怖と絶望がない交ぜになって、考えを纏めることができない。なんで、なんでこんなことを——。

「——せん、ばい？」

小さく、今にも消えてしまいそうな声。はつとして視線を落とすと、少し意識が戻ったのか、不安げに揺れる瞳と目が合った。

「心配かけてしまつて、ごめんなさい。でも、大丈夫ですから——」

いつものように、そうして笑おうとしてみせる桜。その力のない微笑みを見て、冷え切つていた心が、反転したように熱を帯びた。こんな状態にされて、大丈夫なわけあるもんか……！

「桜を部屋まで連れていく。話は後で聞かせてくれ」

遠坂とイリヤ。そして静観しているアーチャーに言い放ち、桜の体を抱え上げる。少し時間を置かないと、混乱した頭の中身を整理できそうにない。

「あ、ちよつと待つて士郎！ タオルと飲み物、今持つていくから！」

慌てた遠坂の声に、どう答えたのかは覚えていない。桜をベッドへ運びながら、俺は折れそうなほど歯を食いしばつていた——。

\*\*\*

「よし、こんなもんか。何か足りないものとかあつたら、遠慮しないで言つてくれ」

「……はい。ありがとうございます、先輩」

桜をベッドに寝かせて、飲み物や冷却シートを手の届く範囲に設置したところで、やつと一息吐けるようになった。スポーツドリンクを飲ませたのが良かったのか、桜も

会話を交わせるぐらいには容態が安定したようで、少し安心だ。

とはいえ、根本的な解決には何一つ繋がっていない。気を遣ったのか、遠坂はイリヤと少し話し合うと言つて居間に引つ込んでしまったが、あの様子からすると望み薄だろう。イリヤのおかげで、桜の不調の原因究明はできたが、事態の打開策に結びつくまでにはいかなかったのが口惜しい。刻印虫の影響どころか、肉体そのものを小聖杯に加工されている弊害など、どうやって解決すれば良いのか――。

「……先輩？」

「あ、ああ、ごめん。ちよつとぼーつとしてた。具合悪いつてのに、俺がいたままじゃまずいよな。今出ていくから」

「いえー！ その……もうちよつとだけ、ここにいてもらえませんか？」

椅子から立ち上がろうとしたところで、思いがけずそんなことを言われてしまった。布団を顔まで引つ張り上げて、目だけをこちらに向ける桜は心なしか恥ずかしそうだ。

俺はかなり頑丈な方だが、それでも今まで病氣になつたことが皆無というわけではない。具合が悪い時に一人だと心細くなる気持ちはよくわかる。

「そつか。それじゃ、俺は座つてるから。眠くなつたら、そのまま寝ちゃつていいぞ」「ありがとうございます」

浮かしかけた腰を戻すと、桜がほつと安心した顔になる。こういう様子を見ると、少

し風邪を引いた程度にしか感じられないが……今この瞬間も、桜は想像を絶する苦痛を堪えているのだろうか。この後輩が、もつてあと数日の命などとは信じられないし、信じたくもない。

桜本人は、現状をどの程度把握しているのだろう。魔術師、それも聖杯戦争の御三家に属する者であるなら、俺や遠坂がマスターであり、アーチャーやセイバーがサーヴァントであることも分かっていたに違いない。にも関わらず、桜本人は聖杯戦争に挑むどころか、姿を見せない兄の慎二と連携を取っていた様子もない。俺たちに害を与えようという意志が、彼女にはまったくくないのだ。

当たり前と言えば当たり前の話だ。桜がそんな子でないことぐらい、とつくに分かっている。しかし冷静に考えてみると、御三家の魔術師であり、ライダーのマスターであり、聖杯の器でもある桜——そんな聖杯戦争のキーパーソンが、今ここにいる意味が分からない。アサシンに黒い影、更にはセイバーまで従えて暗躍する間桐臓硯が、桜のことを敵地に放っておくものだろうか。そして当の桜本人は、何を思っているのだろうか。

「桜も、魔術師だったんだってな」

悩んだ末そう口にすると、桜の肩が怯えたように震えた。

「あ、いや、別にそれが悪いとかいうわけじゃないぞ？ 魔術師なのはお互い様だし、

言ってなかったのは俺だって同じだからさ」

「えつと……怒って、ないんですか……?」

「なんでき。だって桜は、別に悪いことしたわけじゃないだろう?」

「でも、私……先輩が魔術師だってこと、前から知ってたのに黙ってて……。それにライダーだって、先輩たちのことを……」

体調に引きずられて気持ちまで後ろ向きになっているのか、暗い顔になって目を逸らす桜。聖杯戦争が始まって以降、桜とはゆっくり話す機会が持てず、彼女がマスターだと気づいた時にはもう体調不良で話せるような状態ではなかった。その間、桜はずっとこうして気に病んでいたのだろうか。もしそうだとするなら、何も気づけなかった俺は先輩失格だ。

「前からっていうと、ひよつとして土蔵の訓練でも見られてたか……? まあそれにしたって、別に言わなきゃいけないっていうルールなんかはない。

ライダーとは確かに戦ったけど、あれは慎二の命令だろ? どっちにしたって、桜が気に病むことじゃないさ」

「違うんです!」

突然口調を荒げた桜に、度肝を抜かれてしまう。体調のせいで感情的になっているのか、それとも聖杯戦争という異常な状況下だからなのか、桜は今まで見たことがないほ

ど強く感情を露にしていた。眦に涙を浮かべ、長い髪を乱した彼女に、二の句が告げずに気圧される。

「私……私、先輩の訓練が危ないってこと、知ってたのに……自分勝手な理由で、言わなかったんです！ 言ってしまったら、もうここにはいられないかもしれないかもいって……！  
ライダーだつて……お爺様から聞きました。学校のみんなを、たくさん傷つけたんですよね……？ ライダーがあんなことをしたのは私のためなんです！ 私を助けようとして、あんなことを……私が、やめてつて言わなかったから……！ 私、もつと話を聞いていたら……っ」

どれほど鬱屈した感情を抱え込んでいたのか。堰を切ったように溢れ出す感情の吐露は、ほとんど悲鳴じみていた。激情とも呼ぶべき奔流を前にして、俺は椅子に縛り付けられたように動けなくなる——桜の後悔は、それほどまでに衝撃的だった。

俺が行っていた魔術の鍛錬……魔力回路の形成は、無意味なばかりでなく甚だ危険であると遠坂が呆れていた。それに以前から気づいていたというなら、桜はどれほど忸怩たる思いでいたのか。一般論として、下手に口出しをして相手に自分が魔術師だと露見した場合、平穩無事に済むとは考えにくい。例え先輩後輩の関係でも、いや、そういう関係だからこそ言い出せないのは当然だろう。

そして、ライダーの行動にも得心がいった。戦略的には完全な悪手である、一般人へ

の無差別攻撃を狙った理由。慎二は慎二で別の思惑を口にしていたが、桜の言葉を信じるならば、ライダーは桜に負担をかけまいとしていたに違いない。『他者封印・鮮血神殿』ブラッドフォート・アンドロメダを使い、エネルギー源である魔力を他者から奪えば、本来のマスターである桜の負担は軽くなる。手段こそ許されざるものとはいえ、英霊メドゥーサは存外優しい性格だったのかもしれない。今となつては、最早実情を聞くことも叶わないが。

サーヴァントは、マスターに近い性格の人物が召喚されることもあると聞く。ああ、そうか——それで、やつと気がついた。

「桜は優しいから……戦いたくなんかなかったんだよな」

紫水晶の瞳が見開かれる。どうして分かったんですか、とその目は語っているが、あまりにも当然の事実だったから、逆に気づくのが遅くなつたぐらいだ。

俺に魔術の話を言い出さなかったのも、ライダーのマスター権を慎二に譲っていたのも、聖杯戦争が始まってから話す機会が減つたように感じていたのも、体がこんなになつてまで誰にも事情を打ち明けなかったのも……争いや戦いを嫌つたからだと思えば筋が通る。俺が桜のことを知るようになったのは、この一年半ほどのことではないが、彼女の優しい気質はわかつている。聖杯戦争に関わりたくなどなかったろうし、それが普通なのだ。俺だって、好き好んでこんなものに参加しているわけではないのだか



ら。

「それでいいんだ。同じことを何度も言うようだけど、桜は何も悪くなんかない。怖いのも、戦いが嫌いなのも、それは普通のことなんだから。魔術だの聖杯戦争だの、そんなのはやりたいやつだけでやってればいいんだ」

「つ……でも、私、普通の子なんかじゃないんです！ もう知ってますよね。体は虫にめちゃくちゃにされて、綺麗などこなんかどこにも……今だって、何か悪いものが中にいて、いつ抑えられなくなるかわからないんです。だから、私……！」

桜が悲痛に叫んだ刹那、つけっぱなしにしておいた電灯が、突然光を失った。

それだけじゃない。夜まではまだ時間があるはずなのに、いつの間にか部屋が真っ暗になっている。ぞくり、と全身に震えが走り、椅子から立ち上がって後ろに下がると。

「……ほら、見てください。私、優しくなんかないですよ」

ベッドから上体を起こした桜。闇に濡れた世界の中で、そこだけが切り取られたように明るく映る。……いや、闇の中心こそが彼女だったのか。

自嘲的に嗤う桜の姿が、ノイズが混ざったようにブレる。見知った後輩の姿が、水母めいた黒い影に被る。それは幾度も戦場に現れた、あの全てを飲み込む異界の猛威で。

「私、とつくにおかしくなっちゃってます。先輩も、姉さんも、このままだとみんなを傷つけちゃう……すつごく悪い子なんです。」

だからもう……私に構うのはやめて、逃げてください。先輩、また怪我しちゃう……っ」

いて欲しい、と言ったそばから逃げてくれと。支離滅裂ながらも、事態を悪化させたくないと必死に訴えてくる桜。彼女自身にもどうしたらいいのかわからなくなるほど、いつぱいいつぱいの状態なのだろう。あの影が、ここで抑えられなくなってしまうたら——おそらく、死ぬより悲惨な目に遭うだろう。

あらゆる邪悪の具現、この世<sup>アリ</sup>全ての悪<sup>ユ</sup>。イリヤの話を聞いてから、薄々はわかっていった。聖杯の中に潜むモノが外に出てくるためには、同じ聖杯を使って干渉するしかない。桜は小聖杯であると同時に、全悪の媒体のようなものにされている。それが断片的に現れたのが、あの影に違いない。

いつの間にか、べつとりと汗をかいていた。目と鼻の先に、死より深い闇が見える。大切な後輩が、よくわからない化け物と重なる。本能的な恐怖で、その場から逃げようとして——。

「——っ」

そこで。苦しさと笑みが混ざった顔の、壊れかけた桜に気がついた。

「……ばか。そんなに辛そうにしてるのに、ほっとけるわけあるか！」

後ろに下げかけた足を、逆方向に捻じ曲げる。ここで俺が退いてしまったら——それ

こそ、桜は助からなくなる。

前に踏み出す。死への恐怖など知らない。あんな影に飲み込まれるより、桜がいなくなつてしまうことの方がよっぽど怖い。

ほんの数歩の距離しかないはずなのに、同じ部屋の中にいるはずなのに、桜への距離は遠かつた。一歩進むたびに、今まで桜と過ごした思い出が蘇る。こんな瀬戸際になるまで、俺は彼女を失うことの本当の意味を理解していなかったのか。

俺が腕を折つた時に、家事の手伝いをすると言つて引かなかつたこと。

俺や藤ねえの説得にも頑として応じず、根負けして受け入れたこと。

最初は、料理も掃除も洗濯もてんでダメで、一から教えていったこと。

腕が治つてからもうちに來てくれて、一緒にいる時間が増えていったこと。

学園に入つてから、美綴の強引な勧誘で弓道部に入部させられていたこと。

けれど、なんだかんだで楽しそうに、よく笑うようになっていったこと。

それはまるで、しんしんと降り積もる雪のような記憶。気づけば、桜がいるのが当たり前だつた。けれどそれは、とても貴重なものだったんだ。きつと俺は、自分でも気づかないうちに、桜にたくさん助けられてきた。

だから退かない。誰が何と言おうと、何が敵だろうと、俺は桜を助けてみせる——！

「あ——せん、ばい……？」

手を握る。闇に沈んでしまわないように、桜の手をしつかりと掴む。その瞬間、はつと我に返ったように目を見開いた桜が。

「ダメです、先輩……！ 悪いのは私なんですから、もういいんです！ 我慢できなくなる前に、一人でちゃんと——っ」

部屋中を覆い尽くしていた闇が、少しずつ薄れていく。それは浄化というよりかは、桜が無理矢理に抑え込んだ結果だろう。どれほどの意志力があれば、これだけ悪意に満ちた存在に抵抗できるのか。

だが、それは一時凌ぎに過ぎない。俺は桜を責める意図なんか最初からないのに、どうしてこんなになるまで我慢して、独りで……そう疑問を抱いたところで、アーチャーの言葉を思い出す。

この聖杯戦争中に、散々言われたことだ。よく考えろ、先を読め、俯瞰して見ろ——桜は一体、何を考えているのか。この経験がなければ、俺はただシヨックを受けっぱなしなだけで、恐怖で動けもしなかっただろう。

俺は悪くないと論しているのに、桜は自分に非があると痛切に叫んでいる。それはまるで、罰せられたがっているようだ。自分が罰を受けるということは、つまり自分に非があるのだから、苦しいのも嫌われるのも仕方がないという諦め。

刻印虫を仕込まれていたことや、本家のアインツベルンでさえ多大なリスクを伴う聖

杯の器への改造が行われていたことから、桜が間桐家でまともな扱いを受けて育ってきたとは考えにくい。思い返せば、この家に来たばかりの桜は暗くて笑わない子だった。養子という扱いを鑑みれば、尚更逃げ道はなかっただろう……そういう環境下に置かれると、自己防衛本能の一種として、責任を自己に転嫁する諦めの心理が働くのだと虐待を取り扱う特集で聞いたことがある。

「俺は馬鹿だ。何が正義の味方だ……無駄な知識を持つてたくせに、こんな身近な女の子一人の状態にだって気づかなかったのか」

小声で自嘲する。そうでもしなければ、今すぐ柱にこの役立たずな頭を叩き付けてしまふところだった。そんな真似をすれば桜が怖がるだけだと、辛うじて心を引き締めろ。今はそんなことより大事なことがある。

もういいと、自分は放っておくと、悲痛に訴え続ける桜。俺に呼びかけるその瞬間だけ、桜の瞳には切実なまでの色が宿っていて。いったい彼女は、本当は何を望んでいるのか――。

「そんなの、一つしかないだろ……!」

何故も何もあるか。こんな酷い目に遭って、聖杯戦争なんてものに関わらされて、明日をも知れぬ体になってしまつて。思い出せ、十年前のあの日――街が焼き尽くされたあの日、同じように絶望と死に直面していたみんなは、なんと言っていた。きっと桜は、

そんなことさえ言えなくなってしまうほど、ずっと苦しみに耐えてきたんだ。

「——今まで助けられなくてごめん、桜」

謝って許されることではないが、それでも頭を下げる。え、と戸惑うような桜の声が聞こえたが、重ねるように言葉を続ける。

「気持ちがかかるなんて、口が裂けても言えない。許してもらおうなんて思っていない。遅すぎるって、怒った方がいい。

今更になって虫のいいこと言い出すなんて、先輩失格だろうけどさ。それでも——俺は、桜を放っておけない。苦しんでる後輩がいたら、助けたいんだ」

「つ——そんな、いまさら……つ！ さつき、あのイリヤさんって人から聞きましたよね。私、聖杯なんてものにされて……もう、長くないんですよ？ いまさら、間に合わない。助かるわけなんて——」

「——俺さ。召喚した……っていうか、召喚しちゃったサーヴァントがあのアーチーヤーなんだけど。あいつを見てて、一つすごいと思ったことがあるんだ」

怒りと諦めと絶望と、そして微かな希望。それらが入り交じって、痛々しさすら滲むような表情になった桜だが、突然違う話を始めた俺を見て毒気を抜かれたように固まった。何を言いつ出すのかという視線を浴びながら、考えを纏めて言葉に代えていく。

「あいつ、あんなに偉そうにしてるけど……実は記憶がなくて、宝具だつて使えないん

だ。今まであいつと何回も戦ってきたけど、相手のサーヴァントはみんな記憶も宝具も持ってるわけだから、もう無理だっと思ってたこともある。

——でもあいつ、見えてるものが違うんだ。どんなにピンチだと思っても、もう道はないと思っても、絶対に新しい選択肢を見つけてくる。それで俺に、よく見て考えろって言ってくるんだ。とんでもないやつだよな。……あ、本人には内緒だぞ？」

黄金のサーヴァントの冷酷さ、酷薄さは、俺が受け入れられるものではない。それが効率のいい手段であると、必要なことであると断じれば、あの男は容赦なく人間を切り捨てる。もしあいつが他の誰かのサーヴァントで、俺と戦うことになっていたら、決してわかり合えることはなかっただろう。

だが、あいつのマスターは俺だ。敵と味方では見るものも変わってくる。それに、敵だからといって全てを否定することも、味方だからといって全てを許容する必要もない。確かにあの男とは相容れない部分がある——しかし見習うべきところも、すごいと思つた姿も、俺は今まで幾つも見つけてきているのだ。白状すれば、尊敬してしまっている部分さえある。

「だから俺も、間に合わないとか、もう手段がないなんて諦めない。聖杯の本体をぶつ壊すとか、臓硯をぶつ飛ばすとか、上手く聖杯を使うとか、本当の器だっというイリヤに助けてもらうとか……もしかしたらアーチャーの本当の宝具の中に何か使えるものが

あるかもしれない。とにかく、俺は桜を諦めるのは嫌なんだ。俺は諦めが悪いの、桜だつてよく知ってるだろう？」

そう訊ねると。それまで、ぽかんと口を開けて聞き入っていた桜が、ぱちぱちと目を瞬かせた。何かを思い出すかのように、どこか遠くに視線を向ける彼女につられたのか、どうしてか唐突に昔の記憶が蘇る。

あれは中学の頃だつただろうか、それとも学園に入ってからだつたろうか。授業か何かだつたような気がするが、走り高跳びで、ハードルを越えることができなかつたのだ。それがどうしてか納得いかず、日が暮れるまで、俺はずっとハードルに挑み続けた。最終的に、あれは越えられたのか越えられなかつたのか……まああの時からずっと、俺の根っこは変わっていなかったらしい。

「俺はいつも世話になりっぱなしだつたから、そろそろ世話を焼いたって罰は当たらないだろ？ 先輩が後輩を助けるのは当たり前だし……まあ、そういうわけで。桜が嫌だつて言つたつて、俺は助けるからな」

「そうでしたね。先輩は、そういう人でした」

思いつくままに喋つただけだが、そのどれかが桜の琴線に触れたのか。くすりと笑みを零してくれた様子に、少しだけ安心する。

「兄さんが、前に言つてました。『衛宮と我慢比べはしたくないな』って」



「……そうか。あいつ、そんなことを」

学校裏での戦いを最後に、行方の知れない慎二。サーヴァントであるライダーは撃破したが、その舞台になった柳洞寺であいつは姿を現さなかった。あいつの性格からして、キャスターの言いなりになるとは思えないから、遠坂の見立て通り魔術で黙らされたのだろうか。最悪殺されている可能性もあるが……。

「勝手なことばかり言っただつて……慎二も引つ張つてこないとな。妹をほつといて何やつてるんだつて、見つけたら叱りつけてやらないと」

冗談めかして明るく言うと、桜が少し困ったように微笑む。それは怯えでも苦しきでもなく、無茶を言う先輩に呆れるいつもの後輩のもので。ああ、桜はこうして穏やかな顔をしている方がいいと、改めて実感する。

たとえばどんな過去を背負つていようと、桜は大切な後輩だ。聖杯戦争なんてものに巻き込まれて、やりたくもない戦いを強いられて、自責の念と苦痛に押し潰されて……そんなのは、絶対に間違っている。彼女がまた笑つて過ごせるように——正義の味方が戦う理由は、それだけで十分だろう。

「じゃ、俺はそろそろ行くよ。桜はゆっくり休んでくれ。いろいろ話して、疲れちゃつただろ」

このあたりが潮時だと、腰を上げて扉へ向かう。思ったより長い時間話し込んでいた

せい、少し体が硬くなっていた。

遠坂やイリヤは、なにかいい案を思いついてくれただろうか。彼女たちと話して、どうしたら桜を助けられるか、道筋を固めなければ——そう考えを巡らせながら、扉に手をかけると。

「先輩。もし、このままどうしようもなくなつて……私が、もつと悪い子になつてしまつたら——私を、殺ころしてくれませんか？」

その静かな問いに、足が止まる。叱なつてくれ、と言つたのか。殺ころしてくれ、と言つたのか。あるいは、その両方だつたのか……どちらにしてもその言葉は、俺の胸を抉るものだった。

苦しいんじゃないのか。助けて欲しいんじゃないのか。十年前の災禍に巻き込まれた人の声が蘇る——確かにあの時、苦しみの余り殺ころしてくれと叫んでいた人がいた。だけど彼らだつて、本当は助かりたかつたはずだ。俺だつて、最後にはもうそういう感情さえ消えかけていたけれど……切嗣が助けてくれたから、こうして命を繋ぐことができたのだ。

桜も、自分から手を伸ばせないほどの状態なのか。だつたら、たとえ振り払われることになつたつて、こつちから手を伸ばしてやらないと——あの日、切嗣が俺に差し伸べてくれたように。

「——ばか。そういう時はな、桜。『助けて』って言うんだぞ」

## 27. 正義の在処

——教会。

それは、キリスト教における信者の団体を示す語である。転じてそれは、彼らが祈りを捧げる宗教施設としての意味合いを持つようになり、単に教会といえれば後者を連想する者がほとんどだろう。

古来より神道、仏教といった宗教を信仰してきた日本にキリスト教の洗礼が訪れたのは、戦国時代の最中。以来、弾圧や排除の歴史に見舞われながらも五百年、彼らは一定の勢力を保ち続けてきた。現代では神社や寺社ほどではないにしろ、各自治体の一つくらはいは教会が存在している。

ここ冬木市でも、郊外の丘の上に教会が設けられている。広大な敷地を持つここには、平素は礼拝を目的とする信者や冠婚葬祭に関わる市民がぼつぼつと訪れていたものだが、聖杯戦争の影響による異常事件の多発を警戒してか、虫の飛ぶ音すら聞こえぬ静寂が広がっている。

唯一礼拝堂に佇んでいるのは、僧衣姿の長身の男。聖杯戦争の運営に携わる監督役でありながら、自らがマスターとして介入するという反則に手を染めた神父——言峰綺礼

は、感情の見えぬ瞳で神の子の像を見上げていた。

「――戻ったぞ、マスター」

悪徳の棲家と化した教会に、霞が湧き出るように現れた男が一人。霊体化を解いた弓兵のサーヴァントは、僅かに疲れを滲ませた顔で、得体の知れぬマスターに声をかけた。

ランサーとの戦闘後、郊外にあるアインツベルンの森へ向かったアーチャー。前回召喚された弓兵だというサーヴァントと戦い、これを圧倒した彼だったが、問題はその後にあった。人も英霊も何もかもを喰らう怪物――間桐臓硯の手によって解き放たれた、制御さえ望めぬ物の怪は、事もあろうにこのアーチャーを付け狙ったのだ。

同じ場にいた黄金の弓兵を狙わなかった理由は定かではない。単なる不運か気紛れかは判らぬが、アーチャーは血相を変えて森から遁走する他なかった。逃げ切りこそしたものの、化け物に追われ続けるという状況は、如何に英霊であるとはいえ気疲れを覚えざるを得ない。

「ふむ。苦勞、アーチャー。それで、首尾はどうかね」

「どうもこうもない。一体全体、今回の聖杯戦争はどうなっている？」

報告を求める言峰に対し、アーチャーは質問で返した。通常、聖杯戦争に召喚されるサーヴァントは、その基礎知識について聖杯からの加護――有り体に言ってしまうばい

ンストールを受ける。しかし、その知識から見ても、彼だけが独自に持つ別系統の知識から見ても、この戦争は完全に狂っていた。

「バーサーカーとアサシンは、おそらく消滅した。残ったのはセイバーと、あの前回のアーチャーという男だが……それはまだいい。あの黒い影、アレは一体どこから来た？」

「ほう。正体ではなく来歴を問うとは、君はアレに心当たりがあるのかね？」

「さてね。あれが捨て置いて良い類の、無害な小動物でないことだけは保証できる」

礼拝用の椅子に腰掛けると、そうはぐらかしてみせたアーチャーだったが、彼はこの主に早くも不信感を抱き始めていた。

サーヴァントは七騎しか召喚されぬはずなのに、此度の聖杯戦争には既に八騎の英霊が参加している。うち一騎は今回召喚されたものではないようだが、それを差し引いても異常な有様である。正規のサーヴァントが揃う前——つまり、このアーチャーが召喚される前の時点ではほぼ半数のサーヴァントが消滅しているというのも驚嘆すべき異様さだ。

それらの異常さを是正し、場合によっては聖杯戦争の中断、各陣営への掣肘を行うのが監督役の役割である。だということに、あるうことかこの神父は、その責務を果たすどころか自らがマスターとして介入し始めている。

挙句、自分が最初に戦ったあの槍兵は、この男が他者のマスター権を篡奪して使役したサーヴァントだというではないか。自分に英霊としての矜持や誇りがあるとは到底言えないが、それにしても、サーヴァントとして召喚されてまで汚れ仕事の「後始末」を命じられるのは愉快的気分ではなかった。

「アレは魔術師に制御できる手合いではない。放っておけば、聖杯戦争などという枠組みを超えて際限なく人を喰らう怪物だ。

だというのに、君はアレを使おうという愚か者に肩入れしろと命じる。どういう考えなのか、少しぐらい話してくれてもいいのではないかね」

「ふむ——」

皮肉を含ませたサーヴァントの問いに、後ろで手を組んだ言峰は暫し考え込んだ。

必要があつたとはいえ、聖杯戦争のルールに真つ向から喧嘩を売るような指示の数々は、確かに反発を招いて然るべきである。このまま不和の種を撒き続けるのは、誰がどう見ても悪手だ。マスターとサーヴァント間の信頼関係が消滅すればどうなるか——それは彼自身が第四次聖杯戦争で目の当たりにし、また利用してきた光景でもあつた。

彼の最終目標について今明かすわけにはいかない。それに手を貸そうというのはあの英雄王ぐらいなもので、下手に表に出せば最悪サーヴァントの反逆を招く。

かといって、予備令呪の残存数も心許ない現状では、強硬手段に出る選択肢もない。適度に情報を開示し、自分の命令に従う程度の信頼関係は築いておく必要がある——。「確かに、何も知らせぬまま、一方的に命令を続けるというのは悪しき振る舞いだった。不快感を覚えたというのであれば謝罪しよう」

「なに、マスターにも考えがあつてのことだろう。私はあくまでもサーヴァント、指示には従うさ。

もつとも、その考えが見えなければ、こちらとしても打つ手が限られてくるわけだが」

「真つ当な意見だな。では、胸襟を開いて話すでしょう——と、その前に一つ確認しておくべきことがあつた。

サーヴァント・アーチャー。君はこの聖杯戦争に於いて、聖杯に託す願いはないと口にしていたが……それは、本当かね？」

何気ない口調だが、その質問には嘘を許さぬ重みが混じつていた。聖職者としての重厚な声音と、代行者としての鋭い瞳が、歴戦の戦士であるアーチャーをして僅かに姿勢を正させる。

「その通りだ。私の願いは、聖杯に託すようなものではない。私が召喚された理由はある——が、それがマスターの目的を阻害するものでないことだけは保証しよう」

赤い弓兵の言葉に嘘はなかった。ある人物の目的を見定め、抹殺する——それこそ



が、彼が聖杯の招きに応じた理由。その対象が他のマスターである以上、魔術師同士の殺し合いを本質とする聖杯戦争に於いては何ら問題とされるものではない。言峰神父同様、彼もまた自分の胸中をさらけ出したわけではないが、これは最低限伝えておかねばならない要項である。

「そうか……君の言葉を信じよう。しかし、これから君に話すことは些か以上に重大だ。故に、一つ保険をかけさせてもらおう。

令呪を以て命じる——『サーヴァント契約の破棄並びにそれに準ずる行為を禁ずる』  
「なに——!?!」

発動された令呪は、赤い燐光を放って消え失せ、サーヴァントの霊体に抗い得ぬ束縛を加えた。特級の霊格や対抗宝具でも持たぬ限り、単純な命令に限っては絶対権限として作用するそれは、正しく弓兵を縛る鎖となった。

馬鹿な、と眼を見張るアーチャー。言峰が行使した令呪の内容は、あまりにも愚かしい。ありとあらゆる命令に従えなどという無茶な要求ならまだしも、これはひたすらに無意味なのだ。わざわざ契約を破棄しようなど、マスターの存在がなくては現界を保てぬサーヴァントが、そんな愚行に及ぶ理由がない——。

「これから私の言葉を聞けば、この令呪を使わざるを得なかった理由にも理解が及ぼう。なにせ——冬木の聖杯は、正しく『願いを叶える』という機能をとうに失っているの

だから」

「なんだと——」

今度こそアーチャーは驚愕した。この戦況の異常さや、彼にごく僅かに残る記憶から見るに、確かに聖杯については疑いの目を向けていい有様だが……それにしても、願いを叶えるという謳い文句すら偽りなのであれば、聖杯に託す願いを持つサーヴァントは激昂してしよう。なるほど、これは先の令呪を切らねばならない理由も理解できる。

「……この始まりは二つ前——第三次の聖杯戦争に遡る。アインツベルンが召喚したサーヴァント、あれがそもそもの始まりだった」

当時、既に二度の聖杯戦争を無益に費やしたアインツベルンは焦りを抱えていた。

来たるべき三度目に於いては、何としても門への道を開かねばならぬ——その妄執の果てにアインツベルンは一部のルールを破り、殺戮に特化した英霊……ゾロアスター教にてあらゆる悪性を司ると謳われる神霊『この世全ての悪』の召喚を試みた。

しかし、それは冬木の聖杯の限度を超えた存在。実際に召喚されたのは、ただこの世全ての悪であれと願われただけの、元はどこぞの農民に過ぎぬ何の力も持たぬ弱小の英霊だった。最強の存在を召喚しようとしてとんだハズレ籤を掴む羽目になったアインツベルンは、一瞬にして敗北し、その愚行のツケを払うこととなった。

……が、そこからが問題だった。このアンリ・マユには確たる伝説も功績も存在せず、

英霊とすらも言えるか怪しい、「悪であれ」という願いの具現化のようなモノ。それが聖杯に取り込まれてしまった折、願望機としての機能が作動し、聖杯はアンリ・マユの「悪性」で汚染されてしまったのだ。

「異常が明らかになつたのは四度目の折だ。私はその時、監督役ではなく正規のマスターとして参加していた。そして、最後の最後になつて——聖杯の汚染を目の当たりにした」

本来ならばその時点で、聖杯戦争そのものが見直されてもおかしくはなかつた。真つ当な良識を備えた人間であれば、奇しくも遠坂凛が唱えたように、即座の中止と調査を行うだろうが——魔術師という生き物は、良識という言葉から最も遠いところにいた。

マキリとアインツベルンは、そのような些事など見向きもしていない。どちらも、聖杯に至ることさえできるなら後など知つたことではなく、アインツベルンに至つては遠い本国に引きこもっているが故、事の重大性に気づいていたかさえ怪しい。

最後の御三家である遠坂時臣は、真相を知れば良識的な対応を取つたであろうが、彼は答えに至る前に落命するという悲劇に見舞われた。

監督役を派遣している聖堂教会は——その言峰が意図的に事実を歪めた報告をしたという裏があるが——基本的に不干渉。

そして魔術協会は、第四次聖杯戦争に巻き込まれた航空自衛隊のF-15Jやパイロットの損失隠蔽という凄まじい労力を強いられたことに物申しはしたものの、アインツベルンの膨大な資産がその埋め合わせをし、最終的に神秘の秘匿が守られたことでそれ以上介入の手を伸ばすことはなかった。

そうした積み重ねの果てに、僅か十年で第五次聖杯戦争が開かれることになったわけだが……言峰は、それらの事実のうち、都合のよい部分だけを抜粋して語っていた。

「——かくして、汚染された聖杯は捨て置かれ、此度の第五次が開かれた。しかし上の決定がどうあれ、監督役として、そのような危険性を持つ聖杯を世に放つわけにはいかん。故に、私はこの戦争に介入することを決意した。

君に始末を押し付けることになったランサー、彼はもともと魔術協会から派遣されたマスターのサーヴァントでね。マスターとは知己であった故、この状況を糺すことに理解が得られると思ったのだが……やはり、魔術師というものは民衆の被害など眼中にならないらしい。交渉は決裂し、最終的に隙を突いた私がランサーを使役するに至ったわけだ。

だが残念なことに、クランの猛犬は非協力的だな。終盤に至って私に令呪が齎され、話のわかるサーヴァントが召喚に応じてくれたことは、主の采配に感謝せねばなるまい」

「……なるほど。確かに、納得のいく話ではある」

朗々とカバーストーリーを語る言峰には、一切後ろめたい色がない。悪辣なのは、彼が語る内容は九割がたが嘘のない事実だということだ。唯一自分の動機だけを偽っているが、それは余人に囿り知れるところではない。

アーチャーとて、神父の話を全て鵜呑みにするわけではなかったが、確かに筋は通っている。汚染された聖杯召喚の影響なのか定かではないが、臃げになってしまっている記憶と照合しても大筋で矛盾点はなさそうだ。しかし――。

「だが、それならば何故あのマキリという魔術師を支援する？ あの尋常ではない妖物、あれの悪性は聖杯に連なるものだろう。どんな手品か知らないが、それを利用している者と――」

「そう。まさにそこが問題なのだ。アーチャー、君は『敵の敵は味方』という諺に聞き覚えはあるだろうな」

「あんなものと手を組んでまで、優先して戦わねばならぬ相手がいると？」

然り、と頷く言峰。相手のペースに乗せられていることはわかっているが、圧倒的に情報が不足している以上、今のアーチャーは聞き手に回るほかはない。続きを促すと、神父は光が差し込むステンドグラスの方に目を向け、再び唇を開いた。

「時に――君は、前回のアーチャーを間近で見たようだな。君の目には、あの英霊はどう

映る？」

これは、二重の意味で容易に答えられぬ質問であった。

赤い弓兵は、ある特殊な事情により、あの黄金の英霊を知っている。記憶の損耗や混濁のせい、その全てを思い出すことは叶わないが……とにかく油断ならぬ相手であり、尋常ならざる武具を用いる破格の英雄であることだけは確信できた。しかし、それを口にするということは、自身の正体に触れるということでもあり——今その手札を切るべきではないと、彼の直感判断した。

そしてもう一つの理由は、その記憶と現実との差である。はつきり言ってしまう、アーチャーが直に戦った感覚からすれば、あの男はそう脅威となる存在ではない。単に剣を交えて戦うだけであれば、ほとんどの確率で勝利を得られよう。しかしそれは、薄れた記憶の中にあるあの英霊の強大さからはまるでかけ離れているのだ。

数秒の思考の末……結局青年は、当たり障りのない答えを口にする他なかった。

「そうだな……今の時点では、そこまで恐れるべき戦闘能力ではない。私なら問題なく勝てるだろう。だが——どうも、あれはまだ奥の手を持っているように感じられる」「ほう？　なるほど、やはり何かしら問題が起きていたか——」

……ああ、今のは独り言だ。実はあの男は、第四次における私のサーヴァントでな。

その真名をギルガメッシュという」

その言葉が出た途端、アーチャーの記憶が僅かに繋がった。彼の魂の底で、その強大さがどこかに焼き付いていたのだろう。

古代ウルクに君臨した、人類最古の英雄王。それほど破格の存在とあれば、前回の聖杯戦争から生き残っているという理由にも納得がいく。古さと力がほぼ等しい魔術世界において、物語となつた最古の英雄とは、即ち最強の英霊と言い換えることが可能だからだ。実際はそう単純ではないのだろうが、どうあれ尋常でないサーヴァントであることに疑いの余地はない。

「彼と私は手を結んでいたはずなのだが、この第五次に先立って、あの男は急遽鞍替えを試みた。どのような目的かは知らんが、マスターを変えて聖杯戦争に加わつた以上、彼は私の言葉などに耳を貸すまい。あれはそういう性質の英霊だ。」

ギルガメッシュを倒さぬ限り、聖杯に届く手立てはない。どうも不具合が生じているようだが、本来の力ならば、あれは一騎や二騎のサーヴァントなど歯牙にもかけまい」

「それで、他の魔術師と手を組むことにしたわけか」

「ふむ——マキリの老翁は、自分の目的さえ果たせばいいという御仁だ。その後であれば、条件次第ではあるが聖杯の調査や、ことによれば解体という手にも頷いてくれよう。」

問題は、その目的が果たされる際に聖杯がどう動くかということ。君はそこで発生する問題への切り札でもある——先の令呪はその意味でも保険だ。マキリは令呪を作り上げた家系、サーヴァント契約に介入されるといふ事態も考えられるからな」

「……………」

自分の目的は、あくまでも汚染された聖杯の調査及び被害抑止——そう語る言峰の話は、聞いただけならば納得できるものだ。神職のすべてが善良でないことぐらいアーチャーは知っているが、聖職者や監督役としての矜持から見た上でも、彼の話に矛盾はない。

よく注意して神父の様子を観察していた弓兵だったが、そこには嘘を吐く人間特有の焦りや汗などが微塵も見受けられなかった——単に事実を隠しているだけなのだから当然ではあるが、ここは言峰綺礼が持つ情報量や演技力の差が、アーチャーの観察眼を上回ったというべきだろう。

——だが、一点。

ただ一点、言峰が言及しなかったことがある。

聖杯戦争の被害を防ぎたいと口にしながら、おそらくはその何らかの機能を悪用していると思われる、間桐臓硯が使役した謎の怪物。あれの存在と被害について、この男は結局ぼかしたままだ。副次的な被害として許容しているのか、それとも他に理由がある



のか——その疑念は、アーチャーの思考の片隅にずっと漂っていたこの神父への名状しがたい不信感と重なり、僅かな警戒心を抱かせた。

このマスターが、本当に聖杯戦争の被害を抑えたいと考えているのであれば、それはアーチャーが自身に課した役割と一致する。アーチャーには彼自身の目的があるが、事態が看過できぬものになった場合は、役割の方を優先させると決意している。

彼の話が真実であれば、どちらを選ぶにせよこのままサーヴァントを務めることが最適だが……言峰が赤い弓兵に保険をかけたのと同様、青年もまた彼の話を聞く裏で、一つ保険を備えておくことにした——。

「——しかし、間桐臓硯は油断できる相手ではない。虫にいつ寝首をかかれるかという不安もある。ここはもう一つばかり、保険をかけておきたいところだ。

アーチャー。そのために、君はまず——」

\*\*\*

「随分と思い詰めた顔をしているな、雑種」

縁側で独り夜空を見上げていると、もう聞き慣れた傲慢な声が背中から投げかけられた。なんとなく、こいつが来るんじゃないかとは思っていたが。

「後ろからだつてのに、よく顔が見えるな」

「たわけ、背を見ればあたりはつく。目に見えるものでしか物事を解せぬのであれば、盲人の方がマシだろうよ」

そのとんでもない分析能力をナチュラルに他人に求めないで欲しいのだが、言い返す余力のない今は肩を竦めるに留めておく。遠坂とイリヤが暴いた現実は、そんな余裕など消えてしまうほどに残酷だった。

——黒い影の正体は、間桐桜だった。

間桐臓硯が使役していた、あの魔物。セイバーを倒し、おそらくはバーサーカーさえ滅ぼした、多発する行方不明事件の犯人であろう異形の存在。聖杯戦争のシステムを狂わせたそれは、大聖杯の中に潜む『この世全ての悪』だった。

といつても、高度な魔術によって構成された聖杯には何重ものフェイルセーフが存在する。そのため悪の権化は、深い繋がりを持つ聖杯の器——桜を通じて現実には干渉し始めた。この裏技によって器が持つサーヴァントの回収機能や桜の魔術特性などが組み合わさり、あのような黒い影として顕現しているのだという。臓硯がどんな手でそれを利用しているのかは分からないが、およそ生半なものではないだろう。

桜自身の意志ではなく、ただ端末として利用されている……つまり彼女は被害者なのだ、そこから生み出された影は既に幾人もの人間を死に追いやっている。そしてこの

暴虐は、サーヴァントの魂が桜に集まり、彼女の魂や人格が押し潰されるほど加速していく。むしろ桜が必死に抵抗しているから、未だこの程度で済んでいると言つてもいい。

聖杯の中に潜むモノに乗っ取られるのか、汚染されるのか、同化するのか——いずれにせよ、このまま手を拱いていけば破滅的な未来が待っているのは確実だ。無差別に人を襲う怪物など、捨て置いていい道理がない。となれば——。

「——あの娘を殺してしまえば早からう。端末が消えれば、アヴェンジャー復讐者は表に出る力を失う。後は聖杯を直すなり壊すなり、どうとでもやりようはあるだろうよ。

ただ見過ごせば、あの娘は死ぬこともできなくなる。殺してやるのも慈悲というものだ」

「ッ……!」

今日の天気を語るのと同じ口調で、桜を殺せと宣うアーチャー。その言葉に激昂しかけたところで……それが現実的な手段の一つであることを、どうしても否定できなかった。

「わかつてる。わかつてるけど、それは……」

承服できない。これ以上の犠牲を防ぐために、罪もない後輩を犠牲にする……その矛盾を是とするには、桜はあまりにも近すぎる存在だった。桜を助けたいと願ったはずな

のに、何故俺はすぐにこんな選択肢を突きつけられているのか。

慎二の時とは違う。あいつは自分のために、なんの関係もない学校の人たちを塵殺しようとした。犯人に明確な悪意があり、犠牲が出るのが確実なのであれば、元凶を排除することは現実的な選択肢だ。

だけど桜は、誰かを傷つけることを望んだわけじゃない。虐待を受けて、心も体も蝕まれて、それでも誰かを思いやれる優しい子だ。被害者であり続けた彼女が、「迷惑だから」と殺される……それは、決して許してはならないことのはずだ。

予感がある——害になる可能性があるからと、被害者である少数を殺す。その道を進んだ時、衛宮士郎はもう二度と後戻りすることはできないだろう。

「雑種。貴様の望みはなんだ？」

ふと。アーチャーがそうやって、唐突に話題を変えてきた。もういい加減慣れてしまったが、その意図を読むには至らず、困惑のまま背後に目を向ける。

「あの桜という娘を救うことか？ この街の雑種どもを救うことか？ 悪漢を滅ぼすことか？ 聖杯を砕くことか？ それとも——何もかもを守りたいという、救いがたい戯れ言か？」

正義の味方などという愚論も然り、貴様には己が目指すべき道が見えておらぬ。それだから惑うのだ、おまえは」

廊下の柱に背を預け、滔々と語る青年。晴れた夜空を見上げるアーチャーの目には、道筋が見えているのだろうか。

正義の味方。俺はずっと、そうあるべき、そうなるべきだと考えていた。だけどこの聖杯戦争で向かい続けてきた現実、理想からあまりにかけ離れていた。

——罪のない犠牲者を出さないために、桜という被害者を殺すことが正義なのか。

——桜という被害者を守るために、罪のない犠牲者たちを生むことが正義なのか。

『ヒーローは期間限定でね。大人になると、名乗るのが難しくなるんだ。——そんな事もっと早くに気付けばよかった』

切嗣が口にした言葉の意味。俺にとっての英雄が見せた、挫折と諦め。切嗣もまた、この矛盾に苦しんだのだろうか。

今更ながら、セイバーにもっと詳しく親父のことを聞いておくんだつたと後悔する。十年前、聖杯戦争に挑んだ切嗣は、どんな思いで戦っていたのだろうか。その理想を継ぐと誓ったはずなのに、俺はただ迷うばかりで。そんな情けない自分に、無性に腹が立つ。『……アーチャー。アンタには、その『道』ってというのが見えているのか?』

「ふむ? 言ったであろう。我は貴様の思想、価値観に毛ほどの興味も無い。単に、貴様という人間を観賞する——そうだな、それが今のところ私の道と言えるだろうよ」

「俺なんか見て、アンタは面白いのか?」

「まあ、赤点はつけずにおいてやろう。飽きていれば、貴様などとうに切り捨てている。

この下らぬ茶番劇も幕引きは近い——此処に至つてまだ命があるとは驚きだが、生き汚さが貴様の取り柄というわけか。喜べ小僧、おまえの足掻きは存外愉しめたぞ」

本人を前にして、臆面もなく生き様を愉しむと言ひ放つとんでもないサーヴァント。にやりと邪悪に笑うこの男に、さすがの俺も不快感を覚える。どれだけの人間が悩もうが死のうが苦しもうが、この男にとつては楽しみ種のしかないのだろう。よくもまあ、そこまで率直に愉悅を求められるものだ——。

「——故に。貴様も愉しむがいい、衛宮士郎」

嫌味を言つてやろうとしたところで。予想だにしない話の振りに、俺は今度こそ絶句した。楽しむ？ 桜や、街の人たちの命がかかったこの状況で、こいつは何を言っているんだ……？

「ふざけるな、アーチャー。今がどういう状況か分かつてるだろう？ 楽しむなんて、できぬわけがない」

「そう決めつけるのは尚早だぞ、雑種。人の魂とは、すべからく悦を求めるもの。楽しみ、喜び、幸せ——人間とはつまるところ、悦を目的とする生命に他ならぬ」

何を考えているのかさっぱり分からないが、アーチャーの今の言葉には確かに頷けるところがある。手近なところでは、ゲームであつたりスポーツであつたり。勉強が好き

で研究家になったとか、模型作りが好きでプロのモデラーになったとか、そういう事例も同じだろう。

だが、俺自身には今ひとつピンとこない。楽しもうとか喜ぼうとか——何も感じないわけではないが、深く考えようとする、十年前の灼熱の夜を思い出すのだ。あの晩に、そういう感情も焼き尽くされてしまったのか。それともあそこで見捨ててしまった人々の、怨念が焼き付いているのか……。

「ふむ。解せぬ、という顔をしているな。では言い方を変えよう。」

悦を求めるということは、即ち苦を逃れることに等しい。苦しみ、痛み、悲しみ——許せぬもの、認められぬものとも言えるか。悦と苦は表裏一体、悦が見えぬことがある。うと苦を解せぬ道理はない。苦こそが悦を開く鍵となる場合もあり、あるいは苦こそを悦とする者もおろう。

さて、思い出せ雑種。おまえは、いったい何が許せぬのだ？」

少し、話が見えてきた。アーチャーの言う悦が理解できないから迷っているというのであれば、逆説的に悦を見つけることさえできれば道が見えてくるということか。そして悦と苦はコインの裏表であり、裏側からアプローチする手立てもあると。

この僅か二週間やその間の期間で、俺は許せないものを山ほど目にしてきた。学校の人間を虐殺しようとした間桐慎二、町中の命を吸い上げたキャスター、サーヴァントも

人間も見境なく襲う黒い影、桜を利用して裏でほくそ笑んでいる間桐臓硯——いや、許せないのはそいつらじゃない。もっと深いところにあるものだ。

「自らの命を省みずに他者の命を救おうだと？ 救世主とやらでもなく、見返りや快樂を求めているわけでもない。ここまで鑑賞してきたが、貴様の源泉はその真逆——何かを許せぬところにある。

今こそ、苦の源流に向き合うがいい。それが見えれば、自ずと悦の在処も、至るべき道も見えてこよう」

これまでずっと悩んで、迷ってきた。どうすればいいのか、何が正しいのか。アーチャーや遠坂に解決策を提示してもらったり、自分で気づきを得たりして、ここまではどうにか進んでこれた。けれどそれは目先の選択肢を示されただけで、根本的な解決策にはなっていないかったのだ。

最終的な道が見えないから迷う。道を見いだすためには、自分の原点に向き合う必要がある……なるほど。確かに、アーチャーの言葉には重みがある。果たして、衛宮士郎という人間は何が許せなかったのか。

目を瞑ると浮かんでくるのは——やはり、十年前の炎の夜。ただひたすらに、熱くて、痛くて。その感情さえも、徐々に分からなくなっていく。空には怨嗟と、憎悪を煮詰めたような真つ黒な孔が浮かんでいて。この苦しみが、俺は許せなかったのか？



「——違う」

そんなものじゃない。俺が許せなかったのは、自分の苦しみなんかじゃない。

大勢の人が、死んでいった。炎に焼かれ、煙に吞まれ、苦しみ抜いて死んでいった。ただそこにいたというだけで、聖杯戦争のことなんか何も知らないのに、罪のない人々が魔術師たちの欲望の犠牲になった。

戦後の日本で、火事が原因で五百人を超える犠牲者が発生するなどという事例は他に類を見ない。生き残りこそすれど、後遺症が残った者や親族を失った者、焼失による経済的な要因で苦しんだ者まで含めれば、おそらくは万に届く被害者が出たことだろう。どうして彼らが苦しまなければならなかったのか？ 一体、何が悪かったというのか？ 「俺が許せないのは——」

犠牲者には何の咎もない。罰を受けるべきは、間桐臓硯のような魔術師——邪道に堕ちた強大な「悪」。奴らが作り出すその犠牲、強者が弱者を蹂躪するという行為そのものが、俺が看過できない「苦の源流」だ。

自分が傷つくのは良い。でも、他人が傷つくのは嫌だ。恐怖に屈して、我が身惜しさに人々を見捨てる……その結末は、炎の夜の再現だ。そんなことを繰り返すなど、到底許されるものではない。

魔道の暴虐によって血を流す、力を持たない人々。彼らを守ることに、犠牲を生じさせ

ぬこと。そして、その理不尽な原因を排除することが、アーチャーの言う「苦」に向き合う道であり……ひいては、正義の味方と言えるのではないか。

『喜べ少年——君の願いはようやく叶う』

あの神父の笑みが、やっと理解できた。何も知らない人々を守ることは、魔の手を伸ばす悪を滅ぼすことと表裏一体。ただの学生、ただの魔術使いに過ぎなかつた俺が、聖杯戦争というフィールドに乗ることで、そのコインを掴むに至る……なるほど、正義の味方になりたいという願いは確かに叶えられた。

誰を守ればいいのか？

何を討てばいいのか？

どうすればいいのか？

どこを目指すべきか？

それは、あの始まりの夜からずっと続いてきた問いだった。大勢の人を助ける正義の味方になりたいと言いながら、俺は霧の中に残り残されたままだった。霧を晴らす方法はきつと簡単なことで——そして、選んでしまえば取り返しのつかない道で。俺は今、そのうちの一つを選択した。

「求めるところを為すがいい。それこそが娯楽の本道であり、愉悦へ繋がる糸となる。そしてその愉悦こそが、貴様にとっての幸福正義の在処を指し示す——故に雑種、貴様はま

ず『喜び』を知るべきだ。それこそが始まりの道となるう」

人同士の殺し合いなら、警察や法律が対応する。

大同士の戦争でさえ、条約や国連が存在する。

しかし——魔術師同士の争いは、それに巻き込まれた人たちは、一体誰がどうするの  
だろう。桜のことを今まで、誰が助けてくれたというのだろうか？

自分が魔術の贄となったことすら、知らずに傷つき、あるいは死んでいった人たち。  
その数は、前回の聖杯戦争だけでも数百人……国や時代を広げれば、どれほどおぞまし  
い人数に上るかわかったものではない。

俺が守るべきものはそれだ。俺が討つべきものは、国にも法にも裁かれぬ、理不尽を  
強いる魔術師だ。この聖杯戦争が、大勢の人間を殺し続ける原因なのであれば——そんな  
ものは、木っ端微塵に吹き飛ばしてやる。私怨だと、独善だと詰られようとも、その  
果てにみんなが笑っていられる世界が待っているなら……俺は、それに『喜び』を抱く  
ことができるだろうか？

「——決めたよ、アーチャー。愉悦つてやつはまだわからないけど、俺が許せないもの  
と、俺がやりたいことは見つけた」

「ほう——」

超然と構えていたアーチャーの雰囲気が変わる。振り仰げば、どこか遠くの星を見て

いた青年は、緋色の瞳で俺を見下ろしていた。そこに宿る伶俐な気配は、この男が幾度となく見せてきたもの——黄金の英霊は、衛宮士郎という人間の解を裁定しようとしていた。

「十年前から、ずっと考えてた。俺は何をするべきなのか。どうしたら正義の味方になれるのか。根っこにあったのは、たぶんすごく単純なことで……結局俺は、あの夜を繰り返したくないだけなんだ。

関係のない、何も知らない人たちを傷つけて……自分のためだけに利用して殺すような魔術師。それを当たり前にしてしまっている、聖杯戦争みたいな狂ったシステム。俺が一番許せないのは、俺が戦わなくちゃいけないのは、たぶんそいつらだ。

俺が守りたいのは、桜か、街の人かという二択じゃない。桜も、街の人も……あんな奴らの犠牲になる人を、できる限り助きたい」

「良いのか、雑種。それを決める前に、よく考えたほうがいい。

道は一つではない。この世の全てを救おうと足掻く道も、ただ一人だけを守り通す道も、はたまた少数の弱者を救うために強者と戦う道も——それがどれほど愚かしいものであれ、貴様には選択の自由がある」

この男らしからぬ真摯な忠告に、怪訝な目を向けてしまう。先程まで人を煽るようなことを言っておきながら、今度は何を言い出すのか。

そんな疑念が顔に出ていたのだろう。鼻を鳴らしたアーチャーは、腕を組むと傲岸に俺を見下ろしてきた。

「これでも貴様はマスターだからな。サーヴァントとして、忠告ぐらいはくれてやるさ。——後戻りはできんぞ、雑種。この戦も既に大詰め、あの小娘の猶予は幾許もない。悠長な手段を選ぶ暇はなく、貴様が手を下さねばならぬ局面も訪れよう。」

一度手を汚せば、つまらぬ罪罰で悩み惑うのが人というもの。その苦しみを良しとするだけの決意が、貴様の大義には宿っているか？」

義理立てからとはいえ、この自己本位な男がここまで訊ねてくるとは。それほどまでに重い選択が、ずっしり背にのしかかる。

この世の全てを救おうと足掻く道——そんなことは不可能だと、頭ではわかっている。それでも俺は、がむしやらにその道を目指していたのだろう……この聖杯戦争を経験しなければ、きつとそうしていた。なぜなら俺は、人を救えない自分も許せなかったからだ。

何を救うべきか、何を倒すべきかも定まらず、闇雲に戦い続けて。こうして今命があることがある種の奇跡であり、俺が今日まで死んでいた可能性は極めて高かった。幸運の積み重ねの果てに生き残ることができたとしても、きつと無事では済まなかっただろうし、その先も暗雲が立ち込めていたに違いない。ただ目に映った悲劇を無くそうと戦

い、どこかの内乱に飛び込んで散るような未来ですら否定できない。

けれどこの二週間ほどの激闘は、影響を受けるには十分すぎた。俺は幾度となく、この男に叱咤された——道は残されていると、おまえがやりたいことは何なのだと、より先を見据えろと。

高く、遠くから俯瞰する、その考え方が。

たとえ誰が相手だろうと、己を貫き通す矜持が。

どれほど絶望的だろうと、未来を手繰り寄せる瞳が。

俺には、暗闇を照らす黄金のように——眩<sup>まほゆ</sup>く、眩<sup>まぶ</sup>しく映ったのだ。

「戦うと決めた。——この道が、間違つてないって信じてる」

「——そうか」

それは、ある種の羨望だったのかもしれない。衛宮切嗣への憧憬と、同質のものであつたのかもしれない。

——夢を見た。

遠い昔に、戦い抜いた英雄を見た。

人を続べ、人を超えたその男は、暴君と畏れられながらも人を守った。

大森林を支配する古き神であれ、天地を砕く災害の化身であれ、その英霊は決して屈しなかつた。友と肩を並べて、彼はあらゆる試練を乗り越えたのだ。

それを思い出して、ようやく理解した。理不尽を跳ね除ける姿に、やっと真実が見えた。自分が許せないものが、本当は何だったのか……それは、あの始まりの夜起きたことと、理不尽に何もできなかった自分自身で。

在り方は最初から変わらなかった。道だけが見えていなかった。結局のところ——衛宮士郎は、正義の味方になったのだ。

「では、如何にして戦う？ 貴様が挑むのは、魔道という世界そのもの。凡百の雑種に過ぎぬ貴様ごときが、どのようにして魔術師と戦い、どのようにして人間どもを守るといふのだ？」

淡々と続けられた問いに、肩透かしを食らった気分になる。てつきり、いつものように鼻で笑われるのかと思っただからだ。その程度には、この男の言葉を借りれば「身の程を弁えない」ことを口にして自覚はある。なにせ俺は、一般人を巻き込む邪悪な魔術師や魔術的なシステム、その一切と戦うと言い放ったのだ。

だが、アーチャーは笑わなかった。無理だとも、諦めろとも言わなかった。こちらを見下しきつた、自分は世界で一番偉いとも言おうような態度だが、その言葉は実現性と覚悟を図る知性に満ちたもので。まったく、つくづくこの男ほど王様という役職が似合うヤツはいないだろう。

「ああ、わかってる。今の俺一人じゃ、たぶん無理だ。ろくに魔術も使えない俺じゃ、魔

術師一人だつて勝つてつこない。サーヴァントみたいなヤツが出てきたら、すぐにお陀仏だろう。

だけど、アーチャー。どんな状況でも道はあるつて、上から見ろつて教えてくれたのはアンタだ。だから俺は……道を作るところから始めることにした。

一人じゃ勝てないなら、仲間頼る。今勝てないなら、時期を待つ。物が必要なら、それを持つてくる。それでも、全部叶えるなんてことはできないだろうけど——道もわからないまま一人で突つ込むより、よつほど勝率は上がるだろ？

だからまずは……遠坂も、イリヤも、アーチャーも。みんなの力を借りることになるけど、桜と街の人、両方を助ける道を探す」

そうだ。どちらかしか救えないなんて決めつけるのは尚早だ。このサーヴァントに、そう何度叱られたことか。大体、そうなると決まつてもいないうちからどちらかを切り捨てようなんて、そんなのは正義の味方じゃないだろう。

それでもいつか、どちらかを選ばざるを得ない場面が来るかもしれない。だけど、それは今じゃない。そんな事態を招かないためのやり方は、皮肉なことに、この英霊が教えてくれた。

一人じゃ何もできない。けれど、信頼できる仲間がいるなら、活用できる道具があるなら、選択肢は何倍にも増えていく。孤高を貫くこの男だつて、親友と一緒に戦つてい



た。魔の手を跳ね除けるといふ困難に挑むのなら、まずそこから始めるべきだったのだ。

「それだけか。貴様の言う信念とやらは、如何にして貫くというのだ？」

「総当たりだ。もう一回遠坂たちに掛け合つて、片っ端から思いつく手段を潰していく。

あとは並行して、他のサーヴァントの対策かな。時間が勝負になる——イリヤは、ラ  
ンサーはもう倒されてるつて言つてた。なら残つてるサーヴァントは、セイバーとよく  
わからない一騎だ。

よく分からない方は森で俺たちを攻撃してきたけど、どうもそれにしても手緩かつた  
……まるで、他に何か目的があつて、俺たちのことはついでだったみたいだ。もしかし  
たら、そいつの目的次第では手を結べるかも。そうなれば、セイバーと聖杯を速攻で——  
」

「たわけ。我は目先の話を聞いているのではない」

どう動くべきか、どんな選択肢が残つているか、必死に検討している矢先にアー  
チャーがびしやりと遮つてきた。呆れを隠そうともせず、人ならざる眼差しがこちらを  
睥睨する。

「盤面は貴様らに不利だ。現状の我という戦力では、黒幕どもには分が悪かろう。

しかし——いみじくも貴様が申したように、道は未だ定まつておらぬ。事によれば、

貴様が生き残る道もあるやもしれぬ。そうなれば、この聖杯戦争<sup>三文劇</sup>は単なる序章に過ぎ  
 ん。

魔道と戦うと抜かしたな、小僧。当世には千年の長きに亘り魔術を練り上げる者もい  
 るという。貴様ら只人にとって、それは神にも等しかろう。よもや貴様は、神に挑むと  
 いうのか？」

あの炎の夜。冬の街では、何百人もの人が死んだ。

防火設備だつてあつたろうし、消防車だつて出動したはずだ。だけど、そんな現代技  
 術を嘲笑うかのように、あの炎は一瞬にして何もかもを焼き払った。

人の手が届かぬ恐ろしい猛威は、確かに神話に於いて神罰と呼ばれたそれだろう。あ  
 れが聖杯によって引き起こされたのなら、それは即ち魔術で招かれたものと同義。あれ  
 に等しい事象を引き起こせる魔術師だつて、きつといるに違いない。

——だけど。

「神様だろうが王様だろうが、どんな力を持つてようが、人を好き勝手に殺していいはず  
 がないだろう。どんな人間だつて、そんなヤツに理不尽に殺されていい理由なんかな  
 い。神様なんかに従つて、自分で決められるはずだった人生をめちやくちやにされてい  
 いわけがないんだ。

勝てないから、強いからつて諦めて……そんなんじや、あの夜と変わらない。それで

人が死ぬなんて、俺は絶対に許せない」

そんな理由で諦めてしまったら。亡くなった人たちの無念は、残された人たちの苦しみは、どこに行つてしまふのだろう。

無くさせやしない。無意味になんてさせない。その結果、たとえこの命が燃えてしまつても——あの夜燃え尽きなかつた理由は、きつとそこにあるはずなのだ。

「ク—— はは、ふははははははは……！ 正気か貴様？ 名誉でも利益でもなく、信仰でも復讐でもなく——ただ我を貫くためだけに、神に仇なすと謳うか！ なるほど、貴様にとっての敵とは、端から己自身というわけか——！」

何がツボに入つたのか、アーチャーが肩を揺らして笑い出す。人が真剣な話をしている時に笑い出す、まったく空気を読めないやつだが……口調とは裏腹に、その笑いは嘲笑ではなく、何か心底面白い言葉を聞いたという上機嫌なものだった。

記憶こそ失おうとも、この男はかつて神々やその眷属と戦つていた。もしかすると、その失われた記憶や本質に、俺が口にした言葉とどこか通じるものがあつたのだろうか。

ひとしきりそうして高笑いをしたところで、息が切れてきたのか、アーチャーはようやく静かになった。唇をつり上げながら、男が再びこちらに目を向けてくる。

「だがよい。賢しいだけの雑種などそこらに掃いて捨てるほどにいる。凡俗な賢しさと

希有な愚かさでは、まだ愚かしい方が見所があるというもの。この期に及んで、賢しらに人助けなどという偽善を掲げるなら、貴様に最早見るべき点などなかった。

正義の味方？ 誰も彼もを救いたいだと？ ハッ——そうして借り物の鍍金メッキを掲げるから、足下さえおぼつかぬのだ。夢ならば、そうして己が欲で語るがいい。偽物が作り上げる贋作など塵にも劣るわ。

よいか。その根にある感情、貴様が抱いた怒りこそが、貴様自身の『本物』だ。努々それを忘れるな——喜べ雑種。貴様は今、愉悦の階に手をかけたのだ」

そう言う。黄金の青年は、そこでようやく笑いを収め——。

「——せいぜい足掻けよ、衛宮士郎。貴様のその在り方が、何かの運命を変えるかもしれない。

我からの忠告はそれだけだ。最期まで、己の愚かさを貫くがいい」

どこか蛇めいた、笑みの残滓を残しながら。アーチャーの放った言葉には、一縷の残忍さが宿っていた。

幾度目かの、自分の首がかかった問答をしていたのだと遅まきながら気づき、その危うさに身体が強張る。息をするような自然さで、このサーヴァントは俺のことを切り捨てようとしていた。

アーチャーは、俺の煩悶や顛末を愉しむと言っていた。マスターも聖杯も必要としな

いこの英霊が俺に手を貸すのは、ただ己が娯楽のためだと。

俺が今までのように迷いを抱えたままただ戦うのではなく、自分の目的について一つの答えを得た時点で、この男の娯楽の質は切り替わる。それが気に食わないものであった場合、アーチャーはこれ以上俺に付き合う必要など感じなかつただろう。最悪の場合、この場で殺されていたかもしれない。

おそらくアーチャーと出会わなければ、俺は違う選択肢を辿っていた。きっと欲望も感情も封じて、アーチャーの言う借り物の幻想を追い続け——人の欲を是とするこの男と、決定的な訣別を経ていたに違いない。

しかし、俺はその道を選ばなかつた。俺が見出した答えの、おそらくは無謀さが気に入ったから、この男はサーヴァントであり続けてくれる。

なら——口にした誓いを裏切らないために、戦わないと。桜もこの街も、みんな救ってみせるために。

「——黙って聞いてれば、とんでもないことを言い出すわね、士郎」

と。今日二度目となる、背にかけられた声に目を向けると。そこにはやや疲れを滲ませた様子の遠坂が、呆れた顔で首を振っていた。

「なんだ。いたのか、遠坂」

「なんだとはご挨拶ね。そこの金ピカの声がこつちまで聞こえたわよ。今度は何を言い

出すのかと思えば……アンタ、魔術世界に戦争吹っかける気？ 人を助けたいからって、どうしたらそういう考えに行き着くわけ？」

「別に、誰彼構わず喧嘩を売ろうっていうんじゃないぞ？ でも、この聖杯戦争みたいなものを引き起こしてるヤツが他にもいるっていうなら、そんなのはほっとけないだろ」

「……あつきれた。アンタ本気？ 魔術師なんてのはね、多かれ少なかれ、誰だって人でなしなの。言っちゃえば、バレなければ何をしようがお咎めなしなのよ。聖杯戦争クラスの被害は滅多なことじゃありえないけど、一般人に被害や犠牲を与えてるケースはそこかしこにあるでしょうね。その全部と戦おうなんて、正気じゃない。

結論から言えば、あなたのやろうとしていることは自殺と同じよ。士郎がへっぽこ魔術師じゃなくて、仮にサーヴァントクラスの力を持つてたとしてもそれは変わらないわ」

頭が痛い、とでも言いたそうな顔で指を突きつけてくる遠坂だが、さすがに俺でもその程度はわかってる。今のまま独りで、後先考えず魑魅魍魎に突っ込もうなんて、それはもう狂氣的な自爆だろう。

「だろうな。それは俺だつてわかつてる。だから、何も今のままどうしようなんては思っていない。

悪いんだけどさ、遠坂。魔術を教えてくださいっていう約束、いろいろあつて有耶無耶になつたままだろ？ あれつて、この戦いが終わった後でも有効になつたりしないか？

もちろん、その分の対価は払う」

「——な」

衛宮士郎には、何もかもが欠けている。

才能もなければ知識もなく、技術もなければ伝手もない。この聖杯戦争を終わらせ、次の聖杯戦争を引き起こさないようにするためには、何がどれだけあろうと足りないだろう。だから、こうして一つ一つ拾い集めて、力に変えていく他はない。

「……あつたまきた。魔術さえ覚えればいいっていう問題じゃないでしょう!? そんな考えのまま出ていったらとんでもないことになるわ——！」

いいわよ。そんな甘い考えが出てこないように、魔術師がどういうものかってコトをみっちり仕込んであげる！ 後でたつぷり取り立ててやるんだから、覚悟しておきなさい——！」

「フン、と息も荒く遠坂がそっぽを向く。まっとうな魔術師であれば、こんなことを言い出すヤツの頼みを聞くどころか、邪魔になる可能性を考えて消してしまつた方がいいと判断するだろうに……それを差し引いても、聖杯戦争が終われば俺に手を貸す理由なんてないはずなのに、結局了承してくれた。」

遠坂は俺の方向性を無茶だと言つたが、一般人を犠牲にするような魔術師やシステムを許せないという、その思想は否定しなかつた。なんだかんだと言いながら、遠坂はそ

ういうやり口を倦厭している。本当に、この同級生はいいやつだと思う。

「まったく……生身でサーヴァントに突っ込むわ、わけのわからない投影はするわ、聖杯戦争の後も戦うなんて言い出すわ、もう目を離すとほんつとめちやくちやなことするわね。こんなのほつといたら目も当てられないつてば……」

つてああもう、そんな先のことより、まずは今の話！ そんな心の贅肉は生き残つてから考えること。いい？」

正論である。アーチャーの話につられて、つい先走つてしまつたが——目下の問題を乗り越えなければ、そもそも心配する未来さえ存在しなくなつてしまう。

「桜のことだけど、イリヤスフィールと何かいい方法はないか相談してみたわ。時間稼ぎにしかないけど……桜が持っているサーヴァントの魂を、正規の聖杯であるイリヤスフィールに移せるかもしれない。一部だけでも移送できれば、桜の負担はかなり減るはずよ」

「本当か？ でも、イリヤがよく頷いてくれたな。そんなことしたら、桜は良くてもイリヤの方が——」

「まあ、あの子にもプライドがあるみたい。今のままだと、桜が偽の聖杯として完成して、アインツベルンはサーヴァントも聖杯も何もかもマキリに奪われたことになる。助けられた恩もあるし、臓硯に一泡吹かせられるならつて、手を貸してくれるそうよ。」



今早速手を打ってもらってるけど……これは対処療法。イリヤスフィールの見立てだと、崩壊する体を一日か二日引き延ばすのが限度。それまでに聖杯そのものをどうにかできないなら——残念だけど、桜を犠牲にするしかなくなるわ」

あと二日——いや、万全を期すならたった一日。一日だけでも道を切り開いてくれた二人には本当に頭が上がらないが、たったそれだけの間に、全ての決着を付ける必要がある。

桜の問題が大聖杯に帰結しているであろうことはようやく掴んだが、そもそもこのような原因を作ったのは間桐臓硯だ。それが聖杯の闇について知り得ない道理がない。どこかにあるという大聖杯本体を狙おうにも、あの老怪は必ず罫を張っているはずだ。

つまり、桜を助けるためには、どうあつても間桐臓硯——そして、それに操られるセイバーとの対決は避け得ない。

最悪、それにあの影の化け物が加わる可能性もある。あれが桜と深い関わりにあることは明白だが、桜がいる場所や意志とはまるで無関係にあの怪物は現れていた。どのようにして操られ、どのような基準で出現するのか、臓硯の手の内にはまるで想像がつかない。

「正直、バーサーカーが昨日倒されたのは痛いわ。セイバーと戦えるサーヴァントなんて、バーサーカーの他にはいなかった。アーチャーは、記憶が戻らない以上アテに出来

ないでしょう？

つまり——わたしたちだけでは、臓硯には勝てない。バーサーカーがどれだけセイバーに傷を負わせてたとしても、倒せなかったのなら今夜中には復活してくるでしょうね。この状況をどうにかできるとすれば——」

「昨日の、あのよくわからないサーヴァントか。アーチャー、そいつ、いったいどんなヤツだったんだ」

少し離れ、壁に背を預けていたアーチャーに情報提供を求める。この男は、相手のサーヴァントと直接交戦していたはずだ。桜の問題が大きすぎてすっかり後回しになつてしまつていたが、もっと早くに聞いておかなければならないことだった。

その滑稽さを見下すように、青年が嘲笑を浮かべる。それでも答えない理由はなかつたのだろう、俺の方を見て口を開いた矢先……その視線が、すつと細められた。俺ではなく、その後ろ。家の敷地の遙か外、住宅街の向こうを見つめていて——。

「——それならば、直接語らせるのが早かろう」

ばつ、と遠坂と俺が瞬時に身構える。アーチャーの視線の先、この衛宮邸から二百メートルは離れた地点。小さなビルの頂点に、そいつは立っていた。

月明かりにたなびく、赤い外套。鋭い鷹の目が、これほどの距離を置いても尚、鋭くこちらを睥睨している。

携えられた洋弓に矢は番えられていないが、そんなものは安堵する理由にならない。俺を真つ直ぐに見据えるその瞳が、紛れもない敵意を宿しているからだ。

——いつでもオマエを狙い撃てるぞ、と。

「あれが八騎目のサーヴァント……あいつもアーチャーか？」

顔立ちはアジア系のようだが、肌の色は褐色。白い髪に赤い外套……これだけの情報では、どんな英霊なのかさっぱりわからない。だが不思議と、あの謎のサーヴァントには、今までに感じたことのない何か——容易に言い表せない嫌悪感のようなものを覚えてしまう。

まさか向こうの方から仕掛けてくるとは思わなかったが、このパターンは最悪だ。あそこから長距離狙撃されればその時点で圧倒的な不利——しかし、謎の男が仕掛けてくる様子はない。こんな市街地にサーヴァントの武器を撃ち込めば周囲がどうなるか、その程度の良識は持っているのだろうか。

「ふん。小生意気にも、我らを誘っているようだな。

——さて、どうする小僧。このまま穴蔵に籠もっていれば、燻り出されるのがオチだろうよ」

「やるしかないか……あいつは俺たちがどうにかする。遠坂、桜とイリヤを頼む」

最悪の可能性として、あのサーヴァントのマスターが間桐臓硯と手を組んでいた場合

……セイバーと同時に襲いかかられたら、もう完全に詰みだ。どうやったって勝ちようがない。

だが、もしそうだとしたら、アインツベルンの森での戦いは些か手ぬるかっただけではない。完全に連携を取られていたら、今ここに俺たちは生きていないだろう。

現時点で同盟を結ばれていたらもうどうしようもないが、それなら二者の勢力は別だと割り切って行動するしかない。最終的に戦うにしろ交渉するにしろ、あのサーヴァントの誘いに乗る必要がある。

「嫌なタイミングで仕掛けてきたわね……わかったわ。こっちのことは任せておいて。もし二人が戻ってきた時にわたしたちがいなかったら、わたしの家で合流しましょう。」

……無事で帰ってきなさいよ、士郎」

「ああ。ありがとな、遠坂」

あのサーヴァントとマスターが別行動を取っていた場合、最悪俺とアーチャーが離れた際に、この家が急襲される危険性もある。遠坂が示唆したのはそのパターンのことだろう。

いったいどこから家の情報が漏れたのか、間桐臓硯なら当然知っていて然るべきだろうが——いや、最悪の可能性は割り切る。先手でこの盤面に持ち込まれてしまった以

上、とにかくあのサーヴァントを抑えなければ、次の手の打ちようがない。市街地ということに胡座をかいて、この家に居座り続けたのが失敗だったのかもしれないが、もう今更言ってもどうしようもないことだ。

行くしかない。鬼が出るか蛇が出るか、八騎目の英霊の誘いに乗ってやる……！

## 28. 宿命の鎖

——疾走する。

家から飛び出した矢先、謎の英霊はひらりと離れた家の屋根に飛び移った。道路を走って近づけば、男はすぐさままた別の家の屋根へと跳躍する。サーヴァントとしてのスピードを発揮するのではなく、俺でも追いつける程度の距離と速度を維持しているあたり、あの弓兵はあからさまにこちらを誘導している。

「やっぱり誘われてるよな、これ」

今更ながら、拠点を知られていたこと、先手を取られることがどれほど戦略的にまづかったか。相手の何らかの目的——おそらく罠への誘引だろうが、それが見え見えであつても俺たちは動くしかなかった。神秘の秘匿という大原則を無視して遠距離狙撃を繰り返されれば、サーヴァントであるアーチャーはともかく、他のみんなが無事では済まなかつた。

夜の街を、外国人にしか見えぬサーヴァントと駆けていく。警察どころか一般人に見つかっただけでも騒ぎになりそうな有様だが、聖杯戦争絡みの不審な事件が激増しているせいか、深夜帯に出歩く人は誰一人存在しない。そのおかげで、俺たちは追いかけて

ここに専念できたわけだが——。

「雑種。この方角に行くとは何がある？」

商店街の近くを抜けたあたりで、アーチャーが出し抜けに聞いてきた。軽やかに屋根やビルを飛び越えていく赤外套のサーヴァントは、脇目もふらずにある方向へ向けて一直線に進んでいくようで、何処かの目的地があるのは明白だ。

家に攻撃を仕掛けず、奇襲という選択肢を捨てたことから、あの英霊ないしそのマスターは一般人への被害を慮る程度の良識はあるのだろう。となれば、よもやそのあたりの住宅街や商店街を戦場には選ぶまい。もうすぐ冬木大橋で、この分だと新都に入るが、開発の進んだ土地が多いあちらでサーヴァントが戦えるような場所となると。

「——冬木中央公園。俺ならそこで戦う」

「公園か。ならば余分な雑種にかかずらう懸念もあるまい。罨を仕込むには些か不適だが、戦場としては正統派よ。」

なるほど、それが真であれば、あのサーヴァントめは闇討ちを好まぬ性質か……さもなくば、その地を選ぶ特段の理由があるかだ」

そう独りごちるアーチャーは、この情報だけで相手のサーヴァントに対する分析を始めているようだ。一度戦っていることもあり、この英霊の目からは何か見えてくるものもあるのだろう。

翻って俺は、一を聞いて十を知る賢人とは程遠いが……今の言葉を聞いて、ふと違和感のようなものを覚えた。なるほど、冬木中央公園はあの大火災の跡地であることもあって確かに人気が少ない。しかし、単純に一般人がいない場所というだけなら、わざわざ新都まで行く必要がない。それこそ休校になっている穂群原学園や柳洞寺、なんなら海岸という手だってある。どうしてあのサーヴァントは、冬木中央公園を選んだのか——？

疑問が拭えぬままに橋を超え、通りを抜けると、予想したとおり公園に辿り着いてしまう。生物避けの魔術でも使われているのか、動物の声すら聞こえぬ奇妙な静寂の中……だだっ広い芝生の中央で、そいつは待ち構えていた。

「——」  
十メートルほどの距離をおいて、アーチャーも立ち止まる。ライダースーツ姿ではなく、公園に入った瞬間から、アーチャーは黄金の鎧を展開していた。当然のように罨を警戒しているのだろうが、不思議なことに、事ここに至るまで他のサーヴァントの襲撃や魔術攻撃が一切ない。何かあれば最悪令呪で対応する他ないと思っただけに、これは拍子抜けだ。

しかし、動きがないのは俺にとって僥倖でもあった。魔術で強化していたとはいえ、この距離のランニングは少々休憩を挟まないと厳しいものがあるため、呼吸を整えるこ



とに専念できる。無論その間も、周囲に目を光らせてはいるのだが、闇に落ちた風景が映るばかりでおかしな点は見当たらない。敵のマスターがいるとしても、姿を隠す場所があまりないここではなく、もつと他所に身を潜めているのか……？

「——さて。この我を呼びつけておきながら黙りとは、一体どういう見だ？ 不敬にも程があるう、雑種」

俺のやや前に位置するアーチャーが、不快げにそう吐き捨てる。呼びつけられたというわけではないだろうが、確かにこの男にとつて機嫌がよくなるような状況からは程遠い。

向かい合う謎のサーヴァントは、あの洋弓をどこに消したのか、徒手で立っているまま。すぐに弓を引く気はないのか、どうもこちらを観察しているようで、お返しとばかりに俺もヤツの様子を伺う。

浅黒い肌、赤い外套。髪は真っ白で、背は俺よりも幾許か高い。一見して中東の英霊のようにも見えるが、やはり顔立ちはアジア系、それも日本人めいている。

他の要素として、敵に回ったセイバーやバーサーカーと相對した時に感じた絶望的なほどの暴力性。あるいは、アーチャーが時折見せるような、魂が凍えるほどの威圧感……そういったものは、この英霊からは感じられない。相對評価にはなるが、今まで戦ってきたサーヴァントの中で、こいつはそう強力そうには見えない。

にも関わらず俺が感じているのは——不快感。まるで説明がつかない、感覚的なものだが、どうしてか俺はあのサーヴァントが好きになれそうになかった。きつとあちらもそうに違いないと、何故だか確信できる。

「サーヴァントに用はないのだがね。用があるのは、そちらのマスターの方だ」

ここに来てようやく口を開いた男は、そう言うのと俺の方に鋭い視線を送ってきた。まさかこちらが槍玉に上がるとは思わず、一瞬間拔けな声を漏らしてしまう。

「は？　俺にとって……そうかよ、最初からマスター狙いつてわけか。その方が効率がいいからな」

「残念だが間違いだ。私は、おまえという個人に用がある」

今度こそ、俺は困惑を隠せなかった。会ったこともないサーヴァントが、俺に個人的な用だって……？　てつきり罠に誘い込む気だとばかり思っていただけに、ますますわけがわからなくなる。さしものアーチャーも意図が読めないようで、普段なら自分を無視して頭越しに俺に話しかけたことに怒っていきそうなものだが、今は黙って相手の出方を伺っている。

混乱するこちらをよそに、白髪の男はただ俺をじつと見ている。何かが焼け落ちたような灰色の瞳は、しかし何かまだ燃える感情を残しながら、殺気にも近い真剣さを宿している。何度見直しても、俺はこんなヤツと会ったことはないし、マスターとして以外

の用というものが何なのか皆目見当がつかない。

「——衛宮士郎。おまえはまだ、間違つた理想を追いかけているのか」

——故に。その言葉で、心臓が口から飛び出るかと思うほど驚愕した。

「な、に……?!」

「この時代からは、十年ほど前だったか。おまえはこの地で、地獄を見たはずだ。燃え盛る大地、天に浮かぶ黒い孔——そして生きたまま焼き殺された、何百という人間の哀れな骸を」

何を、何を言っている……?」

体が揺れる。視線が震える。荒くなる呼吸の中、必死で頭を回転させる。

俺の名前を知っていることは不思議じゃない。家まで突き止めていたぐらいだ、知らないはずがない。十年前の火災に巻き込まれたことも、当時の新聞や役所の書類を漁れば、知りうる手段はあるだろう。

そこまではいい。だが何故、こいつは俺の理想を知っていて——あまつさえ、直に見てきたかのように、あの夜のことを語るのだ……?」

「魔術的な盗聴か……? 違う、それなら遠坂が気づかないわけ……」

「——その果てに、おまえはあの男に救われた。その時見たものに、おまえは憧れを抱いたはずだ」

呼吸が荒くなるのを通り越して、止まりかける。それは、余人が知りうるはずのないことだった。

そうだ。俺を助けることができ嬉しいと、生きていてくれてありがとう——あの嬉しそうな顔が、からっぽになった心に刻まれて。だから俺は、衛宮切嗣という人に憧れた。

だけど何故、この男は確信を以て、その光景を言い当てられるのだ……？ 魔術かなにかで俺の記憶を読み取ったとしても、この短時間でピンポイントにその部分だけを選べるはずがない。それに、ただ読み取った光景を口にするにしては、男の口調はあまりにも感情が宿りすぎている。一体、このサーヴァントは——？

「おまえ、いったい何者だ」

「ふん——察しの悪い男だ。だからおまえは、あてもない理想を追いかけて死ぬことになる」

と、あからさまに嘲笑してみせる赤い外套の英霊。何が言いたいのかさっぱりわからないが、その馬鹿にしたような仕草にカチンと来た。どこの誰が、なんの情報を得て喋っているのか知らないが、一体何が言いたいのか。

睨みつけてやるが、距離が開いていても身長差があるので、どうしても見下されている感が拭えない。知った風な口を利く得体の知れない輩に対して、困惑よりも怒りの感

情が大きくなっていく。こっちの質問にも答えろと怒りのままに口を開きかけたところで——刃物のような殺気に気圧され、男の瞳に射竦められてしまう。

あのサーヴァントは、これ以上ないほど真剣だった。何かを見定めるように、誰でもない俺の中の何かを、あの男は推し量っている。今にも矢が放たれそうな緊張感の中、男は俺を射抜くように——。

「答えろ、衛宮士郎。おまえはまだ、自らを犠牲に他者を救う——正義の味方という幻想を追っているのか」

「——」  
「いっそ静かなほどの口調で、最後の問いを口にした。」

この男が何者かは知らない。明らかにヤツは俺を知っている様子だが、俺はあんな怪しい男は知らない。しかし、その問いに対してだけは、知らないなどということは許されない。

——正義の味方。

誰かを助けるための存在という概念。どうすればそうなれるのか、一体何が正義の味方なのか、俺は確たる形を持ってずにいた。この聖杯戦争が始まってから、幾度となくその在り方を問われてきた。

黄金のサーヴァントは、それを愚かだと嘲り笑った。しかしあいつは、理想そのもの

ではなく実現手段が問題なのだと言にした。どうしてそれを目指したいのか、どうやってそれを成し遂げるのか、本当は何がしたいのか考えろと。その末に俺はようやく、一つの形らしいものに辿り着いた。

今なら分かる。あんな惨禍を招くと知っていたら、衛宮切嗣はきつとマスターとして戦わなかった。最後の夜、切嗣は正義の味方を諦めたと言ったが、それはつまり、ある時点までは諦めていなかったということでもある。きつとそれは、第四次聖杯戦争で——あの炎の夜が、切嗣の何かを焼き尽くしてしまったのだろう。

それでも、その笑顔に憧れた。切嗣の目指していたものは、きつと間違いなんかじゃなかった。だから俺は——何の関わりもない一般人を巻き込み、俺や切嗣の大切なものを奪った、聖杯戦争のようなシステムを壊す。そんなやり口を是とする、一部の魔術師を止める。それこそが俺が選び、切嗣から引き継いだ、正義の味方としての道なのだ。

——だったら、答えは一つしかない。

「ああ。俺は、正義の味方を張り通す」

「——そうか」

その瞬間、漂っていた空気の質が変わる。俺の答えが、何か決定的な断絶を生み出してしまったのだと、直感的に理解する。

敵サーヴァントの表情には何も浮かんでいない。あいつが何を不得何を失ったのか、

今の問いの意味は果たして何だったのか、結局それはわからないままで。

ただ、燃え滓のような眼差しには、静かな怒りと諦めと……そして、ほんの僅かに安心したようで、侮蔑とも取れる何かが浮かんでいた。

男が微かに動く。何も持っていないはずだった両手には、いつの間にか白黒二振りの短剣が握られていた。陽剣・干将と陰剣・莫耶、互いに引き合う夫婦剣——見たことなどないはずなのに、何故だか一瞬で、その情報が解析できる。

弓兵だと思えば、剣士だったのか。二振りの剣が、交差するような形で水平に構えられる。最早瞳にさえ感情は乗らず、男は俺を排除すべき存在だと断じていた。

膨らんでいく敵意と殺意に、負けてなるものかと歯を食いしばり、こちらもアーチャーの双剣を投影しようと準備する。ヤツの正体も、サーヴァントだということも関係ない。ただあいつにだけは、負けてはならないという確信がある。

「ならば、その空想を終わらせる。今ここで、理想に溺れて死に果てろ」  
「——戯言はそこまでにしておけ、下郎。まったく、面白みの欠片もない。」

何を言うかと見ていれば、英霊になってまで出てくるのがつまらぬ泣き言とはな。所詮、偽物は偽物だったというワケだ」

俺もあいつも、お互いしか見ていなかった。その視線を遮るように、黄金のサーヴァントが立ちはだかる。

様子がおかしいと見てか、ここまで傍観を決めていたアーチャーだったが、今までのやり取りの何かが癪に障ったのか。あからさまに見下した雰囲気叩き付けながら、男を挑発するように双つの剣が掲げられる。あのサーヴァントが持つ武器とは形も格も異なるが、妖魔を滅ぼすという設計思想は同じ剣は、討ち果たすべき相手はお前であると謳うように黄金の燐光を纏っていた。

「己の欲すら見失った贗作者風情が、私の頭越しに決を下そうなどあまりに度し難い。この雑種は、まがりなりにも私のマスターだ。貴様にくれてやるものは何一つないぞ」「そうか。なら順番が変わるだけだ。小僧より先に、その傲慢を砕くでしょう——！」

——疾駆。

地に沈んだと思つた刹那、赤い砲弾が放たれる。邪魔者を屠らんと、闇を切り裂いて振るわれた剣は、しかし黄金の前に阻まれた。

二対の剣同士が、ギリギリと軋みを上げて鏖競り合う。左右から挟み込むように襲いかかってきた凶器を、剣を交差させて受け止めたアーチャーは、獰猛に笑っていた。

力任せに夫婦剣が弾かれ、一步踏み込んだアーチャーが、勢いのままに縦斬りを見舞う。陽剣が受け止め、火花が散るが、畳み掛けるような黄金の連撃。二撃、三撃と繰り出される嵐に、格で劣る武器が悲鳴を上げ、四撃目の刺突で白剣が砕ける——！

「脆いな——！」



左下方からの斬り上げ。守りの半分を失った男に、容易に食い込むと思われたそれは——砕けたのが嘘だったかのように、再び揃った二振りの刃にあえなく道を阻まれた。

「——なんだ、あれ」

おかしい。

仮にも英霊が振るう武具が、あれほど簡単に碎けるのもおかしければ、次の瞬間には復活しているのも異常だった。アーチャーの鎧のような自動修復能力かとも疑ったが、それでは説明がつかない。何より異常なのは——この腑に落ちない光景を、どこか当然だと受け止めている自分自身だった。

煌星のように輝く黄金が、矢継ぎ早に振るわれる。見たところあのサーヴァントには、他の英霊ほど優れた身体能力はない。単純な力も速度も、セイバーはおろかこのアーチャーにすら及ばない。故に弓兵は、身体能力による力押しを狙っているのだろうが——攻めきれない。

鬼気迫る表情で、赤い英霊は陰陽剣を無尽に振るう。アーチャーが繰り出す猛攻は、その尽くが防がれる。どれだけ双剣を砕こうが、瞬きの後には次の壁が待っている。

いつしか攻勢と守勢は入れ替わり、無限の防御を崩せず踏鞴を踏むアーチャーに対し、敵サーヴァントが猛攻を加え始めた。

「ちい——！」

舌打ちをする弓兵が、たちまちのうちに防戦一方にある。武具の質でも、身体能力でも上回るはずなのに、黄金の嵐が赤い波に飲まれようとしている。その理由は、双方の技量差にあつた。

俺は剣技などに明るくない。それでも明確に分かつてしまうほど、アーチャーの剣術は相手方に劣っている。セイバーほど洗練された輝きは感じられないが、泥臭ささえ伺えるような堅実な剣の運び方は、おそらくは修練の果てに得たものなのだろう。的確で隙のない戦い方は、弓兵に付け入る余地を与えない。

翻つてアーチャーの戦術は、圧倒的な頭脳と鑑識眼を活かした先読みだ。しかし両者の戦い方は根本の部分が真逆でありながら、計算の過程が似通っている。戦術が似通うのであれば、アーチャーでは極限まで体に叩き込まれた戦闘技術を凌駕できない。黄金のサーヴァントは何十、何百という策を高速で演算しているのだろうか、単純な速度とはまた別の領域で敵のほうが迅い<sup>はや</sup>。なまじ天性の才能に依っていない分、この相手はラッサーより尚一層相性が悪かつた。

「せー——！」

ついに白黒の剣戟が、攻防に風穴をぶち開ける。氣勢のままに叩きつけられた一撃は、アーチャーの鎧を強かに打ち据え、その体を一步後退させた。

踏鞴を踏んだアーチャーだが、即座に対応。踏み込んできた敵を迎え撃たんと、刈り

取るような斬撃を放ち——地に墜ちるのではないかというほど姿勢を落とした男は、間一髪で断頭の刃を回避。白髪の欠片が舞う中、攻撃を放った直後のアーチャーに、サマーソルトキックを叩き込む——！

「ぬ、貴様……！」

胸元に叩き込まれた蹴りで、アーチャーの体勢は完全に崩れた。ここまでの連撃は、全て決め技に繋ぐまでの布石だったのか。攻撃の反動で宙に浮いた敵兵は、曲芸じみた軽やかさで回転したかと思うと、いつの間にか持ち替えていた洋弓を構え——。

「……まずこ」

コマ送りのように、映像が切り取られる。あの男が次に何をするのか、一秒後の未来が見て取れる。

ヤツの本領は剣士ではない。弓兵だ。体制を崩され、双剣を構え直せぬアーチャーは、絶大な隙を晒している。あの位置から放たれる矢は、過たずその頭を射抜くだろう。あの恐ろしくも強大なサーヴァントが、こんなにもあつさりど、得体の知れないヤツに殺されてしまう。こんなふざけた現実が許されて良いのか。こんな理不尽を起こしたくないと、俺は誓ったんじゃないのか。

ほんの一瞬。コマ一秒にも満たぬ間だけ、ヤツの瞳が俺を見た。それは俺の愚かさを、理想を現実にできぬ弱さを嘲っているようであり——それだけは許せぬと、意

識が切り替わる。

「――トレース 投影、開始オン」

弾倉を銃把に叩き込み、遊底を引くイメージ。銃弾はただ一発、複雑なものではなくていい。

衛宮士郎ではサーヴァントを倒せない。そんなことは百も承知だ。俺がするべきことはただ一手、あの一撃を防ぐこと。あれより強い武器でなくていい。ただ同じものであればいい……！

創造理念、製作技術、憑依経験、蓄積年月、そんなものは不要だ。ただ基本となる骨子を想定し、構成された材質を複製する――！

「終わりだ……！――」

引き絞られる弦。間に合わない。俺の手が届くより先に、あいつの矢が放たれる。どちらにせよ、俺が生み出すものではあいつを止められない。

狙うべきは射手ではない、矢の方だ。放たれる一撃を相殺し、捻じ曲げる。それがどれほど異常な難度か――だが不思議なことに、外れる気はまったくしない。ヤツが撃つ矢の軌道は、まるで自分が放ったものかのようになり、射られる前から見えている。

「トレース 投影、完了オフ――！――」

放たれる一矢。それより僅かに遅いタイミングで、まったく同じ一撃を撃ち放つ――

!

「ツ——!? なんだと……っ」

驚愕は誰のものだったか。半ば機械的に放たれた一撃は、ヤツの矢筈を打ち砕き、夜の闇へと叩き伏せる！

「ハ、余計なことを」

決定的な一撃を凌がれた男は、明らかに動揺していた。その思考の間隙を、アーチャーが見逃すはずがない。男が二の矢を構えるより早く、体勢を立て直したアーチャーは、意趣返しとばかりに剣を連結させ魔力の矢を撃ち放つ。

耐えかねて距離を取る敵サーヴァントを、どこか冷めた目で見送りながら、俺は自分が肩で息をしていたことに気がついた。宝具でもなんでもない、ただの弓矢を投影しただけだが——撃つ前から中てる確信があったとはいえ、移動中の矢を迎撃するのは極限の集中力を要したのだ。

アーチャーなら、体勢さえ崩れていなければ同じことができたろうし、それは他のサーヴァントたちと同様だろう。彼らが息をするように繰り返し出すほんの些細な一手さえ、俺は全精力を傾けてようやく手が届くかどうか。そんなこと、最初からわかっていたはずなのに——どうしてか、あの男にだけは譲れないと思ってしまう。蠟燭が消えた後のような、煙めいた灰の瞳に、屈するなど魂が叫んでいる。

「消え失せよ——！」

闇を引き裂く光が、間断なく赤い男に降り注ぐ。レーザーめいた魔力の塊は、敵兵が放つ矢ほどの精確性はないが、威力では優に勝っている。武器の神秘が生み出す通常火力において、アーチャーはあの男に優越していた。

弓を構えて応酬するには時が足りない。いつか弓兵がキャスターに対して見せたように、双剣を以て光を切り払うサーヴァントだったが、数度防いだところで剣の耐久値が限度を超えてしまう。即座に次の陰陽剣を取り出して防ぐが、これを繰り返せば膠着状態に陥るのは見えていた。

故に、男は手段を切り替えた。四度目に作り出した双剣を投げつけ、光の矢を撃墜したかと思うと、何もない宙空に手を伸ばし——。

「I am the bone of my sword」

その詠唱が、ひどく耳に残った。

魔力の粒子が形となって、一つの剣を形作る。それはセイバーのように武器を実体化させたのとも、アーチャーのようになどどこから取り出すような抜き方でもない。まるでゼロから武器を作り上げたような、それこそ自分が先程したことと同じような——。

俺が思考を巡らせるより先に、男の手に武器が出現する。十字架を象つたような柄に、細身の長剣。所有者の魔力が尽きようとも決して切れ味の落ちぬ輝煌の剣——

『不毀の極聖』。その宝具が持つ性能は、陰陽の夫婦剣を凌駕している。

「せやあ——！」

旋舞。アーチャーの矢が、男を撃たんと迸ったが……絶世の名剣は、容易く光を切り裂いた。その軌跡は、決して届かぬ流星の如く。

剣を振るつた勢いのまま、赤い残像が地を駆ける。バーサーカーにすら傷を負わせる一撃は事も無げに打ち払われ、断頭の鎌に等しい聖剣が、袈裟に弓兵を割かんと唸る。

敵は眼前、既に弓矢の間合いではない。弓から双刃へと姿を変えた黄金が、斜めの斬撃を縦に防御。肘打ちからのカウンターを大上段に翳された長剣が弾き、衝撃のままに回転した両者が、今度は下段で鏑迫り合う。線の動きの重ね合いだった双剣の応酬とは異なり、双刃の剣と長剣の剣戟は、円を描くような軌跡に終始していた。

柄を軸に、アーチャーが双刃をぐるりと捻る。幻惑するように、手首の動きで幾度か回転した聖剣がぶつかり、金属音が響いたかと思えば蹴りが鎧に炸裂する。一見して互角の戦い、双刃による攻撃力と鎧の防御力でアーチャーが有利なように思えるが、先ほどとは異なる戦闘スタイルながらも冴え渡る男の剣技が、徐々に天秤を揺るがし始めている。

「——おかしこ」

縦横無尽に振るわれる聖剣。『不毀の極聖』を振るうということは、ヤツは英雄ローラ

ンでなければならぬ。しかしそれは欧州の伝承、あの男はどう見ても人種が異なる。騎士王のように、伝承と実際の姿が異なるとすれば、今度は先程まで振るっていた双剣と矛盾する。干将・莫耶は古代中国に伝わる宝具のはずだからだ。

持ち得ぬはずの宝具を、まるでたつた今生み出したかのように、無から取り出し操る英霊。その異様さに——たつた一つだけ、心当たりがある。自分の持ち物ではない武具を創造する……否、模倣する魔術。つい今しがた、俺はそれを使つたはずではなかつたか。

遠坂は言っていた。通常の投影魔術は、そのような用途では使えない。英霊の宝具を再現し、あまつさえ消えずに残り続けるなど、それは既存の投影魔術と呼べるものではないと。あのアーチャーですら、俺の投影を見て驚きを露わにしていた。神秘の住人から見て、それほどまでに異常な技術の使い手が、果たして何人もいるのだろうか……？

「偽物風情が小癩な——！」

「ちい、存外にしぶとい——！」

剣のぶつけ合いの果てに、アーチャーが柄でヤツの顎を強かに打ち、同時に男の前蹴りが弓兵の鎧を弾き飛ばした。ゼロ距離で激しく剣を交えていた二人が、再び間合いを離し——唐突に、それまで双刃と打ち合っていた聖剣が、アーチャー目掛けて投擲された。



何の躊躇もなく投げつけられた剣は、当然のように斬り伏せられる。その衝撃で限界を超えたのか、決して鋭さを失わぬはずの剣はついに砕け、幻のように消えてしまう。あつさりと宝具を使い捨てた男は、アーチャーが迎撃に出た一瞬の間に、次なる武具を召喚——否、投影していた。

「——罅が開かん。貴様に構っている暇はない、決めさせてもらおう……！」

現れたのは、男の手の中ではない。宙に浮かんでいるのは、宝具とも呼べぬただの剣たち。都合六本の刃が、大砲のように次々と撃ち出されるが……。

「ハッ、馬鹿の一つ覚えが——」

アーチャーが選んだのは、即座の突貫。ランサーの槍ですら貫けなかった鎧が、どうして三流の武具に敗れようか。生半な宝具では、あの堅牢さを突破するに能わぬ。アーチャーの鎧に着弾する剣群は、傷をつけることさえ叶わず弾かれ、衝撃で僅かにその踏み込みを遅らせるに過ぎなかった。

剣を放ったサーヴァントも、過たず突き進んだ弓兵も、その程度はとうに弁えていよう。この一撃はただの前菜、本命への時間稼ぎに過ぎない。次の一手へ繋げるため、敵は更なる布石を打つ。鎧を恃みに突き進むアーチャーに、男は敢えて自ら踏み出し——

「——<sup>トリス</sup>投影、<sup>オフ</sup>完了」

その馴染み深い眩きに、頭にノイズが走る。あり得ぬはずの詠唱をしてのけた赤外套の手に握られていたのは、剣ではなく槍。ランサーの魔槍とは異なる、白地に黄金の裝飾が施されたそれは、馬上にて振るうべき武器だが……この一瞬、それは確かに黄金の斬撃を凌いでいた。

あれは白兵戦闘で打ち合うものではなく、乗騎からの一撃離脱に用いるもの。この局面には不適切な用途の武器だが、あの英霊が無策である筈がない。質で言えば先の聖剣どころか干将・莫耶にも劣るそれは、アーチャーの剣を三度は受けきれまいが——右手一本で馬上槍ランスを跳ね上げ、黄金を弾いた敵兵は、稲妻に等しい迅さで槍を戻すと下段からの突きを放つ。

それでも、本職の槍兵には遠く及ばぬ一撃はアーチャーには届かない。男が槍を引き戻したのと同じタイミングで双剣を構え直していたアーチャーは、剣を交差させることで、余裕を以て受け止めてしまう。

「ふん、今度は狗の真似事か。飼いだらしい多芸ぶりだが、牙を届かせる程度の能すら持たぬのか？」

「お褒めに与り恐縮だ。それが私の持ち味でね——牙を届けてほしいのならば、もう一つ、その身で御覧じろ……！」

突き出した槍に、あろうことか膝蹴りが叩き込まれた。あまりにも無茶なゴリ押し

は、双剣の守りを僅かながらに崩し、アーチャーの鎧を微かに掠める。代償に、嫌な音を奏でた槍に亀裂が入るが、黄金の鎧は小揺るぎさえしていない。

その瞬間、解析が追いついた。いけない、あの槍は触れてはならない類のモノだ……！

「ぬ、よもやこの槍——！」

俺とほぼ同時、その鑑識眼で気がついたのか。地を蹴ったアーチャーが、後方に飛んで離れようとする。だが僅かに遅く、攻撃を届かせた敵の唇が吊り上がり——。

「——」  
トラップ・オブ・アルガリア  
 「触れれば転倒——！」

がくん、と。

誰でも一度ぐらい、ふざけて友達と転ばせあったことがあるだろう。そんな冗談めいた光景のように、何の脈絡もなしに、アーチャーの膝が崩れ落ちる。傷を負ったのではなく、強制的に転ばされた——否、『転倒』という事象を押し付けられたのだ。

あの槍はイタリアあたりの伝承を元とした宝具だ。武器としての質は低く、殺傷能力も高くない。事実投影によって劣化したそれは、今の一撃を繰り出しただけで木っ端微塵に砕け散ってしまった。しかし……それに触れた弓兵は、致命的な隙を晒していた。

槍が砕かれた敵は無手だが、寸毫の後に次の剣が現れよう。膝を付いたアーチャーでは、次の攻撃に間に合わない——。

「ッ……我を跪かせようとは——！」

激昂したアーチャーが、右手を地に叩きつける。サーヴァントの有する埒外の膂力が、反動で鎧ごと弓兵の体を宙に舞わせ、反転して着地を試みる。しかし、それは隙を一秒先に後伸ばしするだけの行為。着地した刹那、どうしようもない無防備な時間が生まれてしまう。

当然のように、敵はその絶望的な間隙に向け手を伸ばし、俺はヤツの動向を見逃すまいと目を見開く。令呪を使うか、投影魔術で妨害するか——！

「I am the bone of my sword。」

刀剣か、それとも弓矢か。加速された時間の中、空中に煌く粒子が集まり——その形状があまりに予想外だったから、反応するのが一手遅れた。

「——天の鎖よ——！」

——それは、一体如何なる宝具か。

男の手の内ではなく、何も無い空中から現れた鎖は、全方向からアーチャーを取り囲むように巻き付いた。

腕に、足に、胴体に鎖が絡みつき、それぞれがまた別方向に伸び続け、弓兵の動きが

完全に縫われる。木々に、電柱に、街灯に巻き付いた鎖は、幾重にも重なってアーチャーの動きを封じこめた。

ギシギシと軋む鎖は、鎧の上からサーヴァントの体を引きちぎろうとしているが、その堅牢さを突破するには至らない。しかし黄金の弓兵は、もはや指一つ動かせる状況にはなかった。

「貴、様——よもやこの我を……!」

「なに、鎖で敵を縛る弓兵もいるというだけのことだ。これに懲りたら、その慢心を控えることだな」

視線だけで射殺せそうなほど、絶大な殺意を叩きつけるアーチャー。全身を縛る鎖は、空間ごと束縛するような頑丈さでその動作を戒めんとしているが、黄金の威圧はそればかりかこの公園そのものを消し飛ばすのではないかという凄まじさだった。膝を付かされ、斬首を待つ罪人の如き姿勢で縛られたことは、プライドの高いあの男には許せぬ屈辱に違いない。

——これは、王手だった。

剣ならば、同じ武器を投影できた。弓ならば、その軌道を妨害できた。しかし鎖では手の打ちようがない。一本二本を弾いたところで、あの長さで本数の前には焼け石に水だ。

ほぼ無傷ながら、アーチャーは動けない。敵が剣を構えれば、もはや抵抗の余地は残されていなかったが——そこで気づく。アーチャーの殺意を飄々と受け流した男だが、ヤツの額にはびっしりと脂汗が浮かび、肩で息を吐く姿は小刻みに震えていた。

あの鎖を見て理解する。あれはヤツの奥の手だ。神さえ縛る至上の鎖は、刀剣武器を扱うヤツの専門外であるどころか、人の手が及ぶモノですらない。性能を意図的に削ぎ落とし、リソースの大半を注ぎ込み、自滅一步手前の綱渡りをし——そうまでして辛うじて、型落ち品の投影に成功させたのだ。もしあの鎖が本来の性能通りであれば、アーチャーは動けぬどころか、体を振じ切られていただろう。

それほど秘奥をぶつけた反動で、あの男はほとんど限界だ。もはや剣の一本でさえ投影が叶うかどうか。それならば、剣なり槍なりを用意した方が遥かに容易かったろうに、ヤツは何故……？

「——これで邪魔は入らん。正義を為すと思えば、この場で叩き潰す」  
修羅のような執念が、立ち尽くす俺に向けられる。その瞳が、俺の疑問への答えだった。

他の宝具であれば、アーチャーに傷を負わせる、あるいは倒すことは可能だった。そうでなくても、持久戦に持ち込むだけで、底知れぬ技量と手数を持つこの男はおそらくアーチャーに勝利できた。だがこの男は、時間的制約か何らかの事情か、その選択肢を

選べなかった。

……故に、封印というただ一手に全てを注ぎ込んだ。ただ邪魔さえされなければ、ヤツはそれでよかつたのだ。

サーヴァントの撃破さえ二の次にするほどの、俺への執着——何かに突き動かされているかのような異様さは、見ているだけで怖気が走る。今まで見たこともない男にこれほどの敵意を向けられる理由が——

——待て。今まで、だと……？

時系列。その言葉を思い浮かべた瞬間、パズルのピースが乱舞する。

余人が知り得るはずのない、俺の過去と目的。使い手が存在し得ないはずの、異常極まる投影魔術。サーヴァントとは、時間軸を超越した英霊の座から喚ばれる存在。

情報が混ざり、絡まり、ぞつとするような仮説へ辿り着こうとした時——

「シッ——！」

煌く白刃。限界を超えて、この瞬間のために用意された最後の投影剣が、月光に濡れて襲い来る。ただ愕然と見ていた自分が、どれほど愚かしい隙を晒していたか、風を切る音で初めて気がついた。

寸刻の後、この首はヤツに落とされる。迂闊さのツケは、己の命で払う羽目になる。

赤い外套の死神は、あの夜の炎を纏っているようで——もう二度と、十年前と同じ結末

に至るものか……！

流れる思考を百分割。徒手空拳の俺では、あの一撃を防げない。腕で防げば腕ごと斬られ、さりとて逃げれば背を断たれよう。防御も回避も不可能ならば、あの斬撃を撃ち落とすしかない。

答えは手中に。アーチャーが縛られる直前、その準備は済ませていた。決定的な攻撃に同じものをぶつけ、相殺して窮地を脱する鬼札。即ち、ヤツと同じ投影魔術——！

「……なに?！」

耳を打つ金属音。闇を貫く悲鳴を奏で、陽剣・干将が阻まれる。原理は単純、如何なる妖魅を断ち切る剣であれ、己自身を斬ることは能うまい……！

「オレの剣を真似たか。だが——」

ヤツが何かを喋っている。だが、言葉が耳に入らない。聴覚という機能が、焼き鏝を当てられたような頭痛に奪われる。

死の一撃は防いだ。不出来な投影品は、剣を弾いただけでヒビが入りかけているが、断頭台の十三階段から辛うじて逃げ延びた。断頭の刃は、この体に届いていない。だが

——体は、剣で出来ている。

冷たい金属の代わりに。耐え難いほど熱い痛みが、頭の中に入ってきた。



視界にノイズが走る。古いテレビをつけた時のような、耳に響く雑音が流れる。ここではないどこか、ここではないなにかの情報か、魂を侵食する。

痛い。熱い。暗い。苦しい。得体の知れぬ炎の流れに、衛宮士郎という人格が飲み込まれようとしている……。

「あ——ぐ、つ……………」

ちらつく視界。その中で、ヤツが剣を振り上げたの見える。不格好に剣を合わせて受けるが、そんなもの、ただの盾にだつてなりはしない。一撃で砕かれ、続く一刀が脳天を叩き割ろうと迫る。

半ば反射でヤツの剣の構造を読み取り、設計図を作成、即時の投影。あんなにも不安定だったはずの投影魔術は、いとも容易く成功し、干将・莫耶があまりに手に馴染むことに違和感さえ抱く。

もう一撃も防ぐ。ボロボロの相手とはいえ、サーヴァントの身体能力は俺など足元にさえ及ばないだろうに、どうしてか刃の軌道に防御が追いつく。ヤツの剣技を、剣の方向が知っているのか。

だが、凄いところで武器の精度が違う。俺が作り上げた投影品など、ヤツのそれと比すれば三流もいいところだ。横薙ぎの一撃で双剣が諸共砕け、臂力と衝撃だけで、体が後ろに吹っ飛んでいく——。

「無駄な足掻きを。貴様の投影では、オレに及ぶ道理がない。その程度の精度で、オレについて来られるものか——！」

地面を転がる。服が破れ、手や足が擦り切れて血を流す。だがそんなものより、割れそうな頭の痛さでどうにかなりそうだった。

毛細血管が破れたのか、視神経に異常が出たのか、赤くちらつく視界。その中で、ヤツが飛びかかってくるのが見えて、なんとか体を引き起こす。ヤツが近づいてくるたびに、頭痛が激しくなっていく。

——血潮は鉄で、心は硝子。

見たことのない、まだ知りうるはずのない光景が、頭の中に流れてくる。走馬灯のような映像は、誰かの記憶の断片だった。

「が、っ——あ」

ただ、誰かを救いたかった。誰かが助かれれば、それでいいと思っていた。

心に決めた誓いがあった。目指すと決めた理想があった。だからその男は、前を向いて走り続けた。そのためならどうなるかと、何を失おうと構わなかった。

その道程は、平坦な草原から険しい山になり、やがて屍が転がる道になり、血で染められた河になった。気がつけば、周囲にあるのは死と破壊だけ。それでも誰かが助かるのならと、男は地獄を進み続けた。

——幾たびの戦場を越えて不敗。

そうしているうちに、救えた命はあつた。彼に感謝を抱く人もいた。

それでも、だからこそ彼は止まらない。愚直なまでに、機械的に、あらゆる命を救い続ける。

けれどいつしか、その手は血で染まるようになった。洗い流しても、拭き取っても、その赤さは濃くなるばかり。誰かを救うためには、誰かを殺すしかないのだと、男はようやく気がついたが——道を戻るにはあまりにも、重ねた犠牲が多すぎた。

——ただの一度も敗走はなく、

初めのうちは、彼を慕う仲間もいた。しかし、機械と変わらぬ在り方は、その感情を親愛から畏怖へと塗り替えていく。いつの間にか彼を取り巻くのは、便利に使えると学んだ人間たちの、三日月のような笑みだった。

それでも、問題ないと割り切った。救える命があるのなら、いくら裏切られても構わなかった。……そうしていくうちに、選べる道は、どんどん狭くなっていった。

「ッ——!?!」

左右から迫る一閃。首を狩る軌道に、即座に剣を合わせて凌ぐ。反射的に投影していた陰陽剣は、先程よりマシな質だったのか、辛うじて碎けずにヤツの攻撃を防ぎきった。今宵初めて目にしたのはずの、干将・莫耶。あまりに不出来で、真作には遠く及ばぬ贋

作が……どうしてか、生み出すことに体に定着していく。かつて、名工干将とその妻莫耶が作り上げた二刀一对の名剣。その知識が、勝手に頭に浮かんでくる。

疑問は後に回す。真つ当な力勝負ではサーヴァントに敵わない。剣を弾いた勢いのまま、バックステップで距離を取り——視界を侵す光景に、嘔吐しそうになる。これはなんだ。俺は一体、何を見せられているんだ……？

「なんとという不甲斐なさだ。そんな有様で、よく正義を為すなどと言えたものだ——！」  
刺突三閃。円の攻撃から線の攻撃へ。心臓と肺腑を穿つ連撃を、下から叩き上げて耐え凌ぐ。

状況は限りなく詰んでいる。衛宮士郎では、サーヴァントに勝つどころか、逃げることもさえ敵わない。アーチャーは封じられ、増援は望めず、令呪を使う暇すらない。一秒後の死を二秒後に引き伸ばすため、身をすり減らして動いているだけ。

だというのに。その足掻きさえ嘲笑うように、血の記憶が魂を侵食する。幻覚でも妄想でもない、鮮明すぎる冷酷さに、頭を殺されていく。

——ただの一度も理解されない。

戦い続けた男は、ある時壁にぶつかつた。一人では絶対に救えないと、理解してしまふほど大勢の命。彼らが死を迎えようとした瞬間、正義の味方を目指した男は、ある一つの決断をした。

『契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を、ここに貰い受けたい』

そうして、男は奇跡を手に入れた。人類の集合無意識、世界というシステムから得た力。失われるはずの数多の命は、確かに救われたのだ。——その代償が、どれほど取り返しのつかぬものかを知らぬまま。

まだ足りない、それでも男は戦った。魂をすり減らす孤独な死闘の果て、彼はついに英雄と呼ばれるまでの存在になった。彼が成し遂げた功績は、常人からすればほとんど不可能に近い領域だった。

そのような存在は、最早人から外れている。人は彼を英雄と称賛しながらも、次第にその在り方に恐怖し、やがては憎悪するようになっていった。人を外れたモノに降り掛かった報いは、社会からの排斥だった。

——彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。

破綻から崩壊までは一瞬だった。争いに関わりすぎた彼は、ある戦争の主犯だと罪を押し付けられた。責任を被せてきたのは彼が救い、助けてきたはずの人物。

ふと辺りを見渡した。周囲を囲んでいるのは、見覚えのある大勢の顔。彼に命を救われ、感謝の言葉を述べたはずの人間たち。しかし、助けてくれた彼を助けようという人間は、誰一人そこにはいなかった。独りで走り続けた彼のことを、どんな組織も団体も守ろうとはしなかった。そればかりか、誰もが彼の死を望んでいた。……それは、おぞ

ましいまでの人の醜さ、唾棄すべき裏切りの具現だった。

そうして、彼は殺された。英雄だったはずの彼は、謂れなき戦犯とされた。それでも自分が死ぬことで救われる命があるならと、彼は脳が活動を止めるその瞬間まで、誰一人恨みはしなかった。

死を迎えた後でも、その男に安らぎはなかった。生前手にした奇跡の代償は、死後すら奪われること。霊長の抑止力として、人の認識の外側から、人間の滅びを阻止し続ける——はじめ、彼は喜んだ。これでもっと大勢の人たちを助けることができる。

——故に、その生涯に意味はなく。

『最初から、感謝をして欲しかったわけじゃない。英雄などと持て囃される気もなかった。ただ、誰もが幸福だという結果が欲しかった』

……子供を殺した。彼女の抱える爆弾が、ある国の要人を殺傷し、大戦争の引き金となる可能性があったからだ。

……老人を殺した。彼が引き起こす些細な事故が、大陸全てを巻き込む大災害へと連鎖するところだったからだ。

男を殺した。女を殺した。無垢な者を殺した。犯罪者を殺した。

殺した。殺した。殺した。殺した。殺して、殺して、殺して、殺して、殺し、殺し、殺し、殺し、殺、殺、殺、殺、殺——。

『これが守護者だと？ 霊長の世に害を与えるであろう人々を、善悪の区別なく処理する殺戮者——』

それは、確かに人助けをする役割だった。人類の滅びを回避するために、要因となる存在を、加害者も被害者も諸共に殺し尽くす——ただの一人も救わず塵殺することで、人類全体の滅亡を避ける。それだけが、彼に与えられた仕事だった。

……つまり。彼が直接助けられる命など一つもない。あらゆる残酷な手段を行使し、ただひたすらに目の前の人間を殺し続ける、奪うことしかできぬ殺戮機械。人類の掃除屋こそが、守護者という役の正体だった。

『オレは、オレが救いたかったものをこそ、この手で——』

拒絶することなど許されない。手にした奇跡の代償は、永劫の奴隷となること。時間も場所も関係なく、老いも若きも満遍なく、善も悪も殺し続ける世界の下僕。

殺して殺して、殺し続けた末に——ある瞬間、気がついた。今していることは、生前と何も変わらないのだと。大勢を殺すために少数を殺す、助けたいと言いながらその手を血で汚す。何もかもを救いたいという、理想の果てがそれだった。

誰かの泣いている顔を、誰かが苦しんでいる姿を、ただ見たくなかつただけなのに。その男は、惨劇と地獄しか見ることができなくなつて。人間にも世界にも、最後には抱いた理想にさえ裏切られた。

そうして、男は絶望した。かつて輝いていた信念も誓いも、血と肉の底に埋もれた。皮肉なことに、何もかも失つて尚、身につけた人殺しの術は衰えず、ただただ命を奪い続けて。故に――

――その体は、きつと剣で出来ていた。

「その反吐が出そうな顔――なるほど、見たのか。その結末を」

燃え盛る炎。空を廻る歯車に、一面に広がる荒野。生命の息吹など一欠片もなく、あ  
るのはただ、無限ともいえる刀剣のみ。大地に突き刺さる剣たちは、この国の国民でも  
あり、無数の墓標でもあった。

剣だけが立ち並ぶ丘で、その男は佇んでいた。髪はその色を変え、肌はその色を変え、  
服はその血に染まり、最早かつての面影など微塵もない。かつて理想に燃えていた瞳さ  
え、灰色に燃え尽きていて。

――その英霊おとこの名を、衛宮士郎といった。

「が、は――あ、っ――あ」

息が止まる。

膝が震える。



脳を引つ掻き回されたような、おぞましいほどの激痛で、口は血の味でいっぱいだった。

なんだこれは。

なんだこれは。

なんだこれは。

なんだこれは。

こんなものが、衛宮士郎が辿り着いた末路だと……正義の味方だというのか……？

「おまえが掲げる、人を救いたいなどという戯言。自分を犠牲にしても、誰かを助けたかっただろ？」

——そんなもの。他人の夢に憧れただけの、独り善がりの偽善でしかないものに

——！

朦朧とした意識。ヤツの振り上げた双剣に、同じように双剣を合わせる。

しかし、剣の強度は既に綻びていた。幻想を維持できなくなった贗作は形を失い、敢えなく剣は砕かれる。それはまるで、俺の行く末を暗示しているようで。

「ガ——」

吹き飛ばされ、叩きつけられる。遊具に激突したのだと気づいたのは、地面に崩れ落ちてからだった。

どこかを切ったのか、それとも折れたのか。子供が遊ぶはずの真新しいジャングルジムは、赤い血でしとどに濡れていた。その光景さえもが、衛宮士郎の末路を嘲笑っているかのとき皮肉さ。

だけど、そんなものはどうでもよかった。肉体の傷なんかより——数時間前まで想像さえしていなかった現実に、心が折れそうになる。

ありえないと、こんなものは幻覚なのだと、いくら頭で否定しようとしても……魂の方か、これは事実なのだと、そう認めてしまっていた。

「——そうだ。下らぬ理想に囚われ続け、その意味さえ知らずに終わった愚か者。何を救うべきかも定まらず、ただ殺し続けた殺人者。

それこそが、オレの正体——英雄などというものに成り下がった、エミヤシロウという偽物だ」

男が見下ろす。未来からの刺客が、エミヤシロウ自分自身を殺したがる理由。ヤツの目にあるのは、後悔と絶望だけだった。

「幾らかは、救えた命もあっただろう。そのためだけに、おまえが掲げた空虚な妄想はどれだけの人間を殺してきた？

我欲で殺すでもない。仕事で奪うのでもない。正義という名の独善で、殺し続ける壊れた機械——そんなモノに存在している価値などない。おまえは、この世にあつては

ならない存在だ」

ぴしりと、何かが壊れる音がした。

自分自身による、存在理由の否定。悪質なSF映画のような、未来の自分による殺害宣言。その背後にあるものを直に見せられた……いや、追体験させられた後では、納得してしまう。ヤツが俺を殺したがるのは当然だと。

だというのに、何故——この体は立ち上がっているのか？

「——ふん、まだ諦めぬか。敵わぬというのにただ動く、その救いがたいまでの愚かさ。それこそが、そもそもの過ちだ。そのあてもない強迫観念には、一片の価値もありはしない。

聞かぬがな、衛宮士郎。おまえは、そうまでして正義の味方になりたいのか」

その問いに。痛みで真っ赤になっていた頭が、真っ白に塗り替わった。

地獄を見た。

地獄を見た。

地獄を見た。

——いざれ迎る、地獄を見た。

「笑わせる。それはおまえではなく、衛宮切嗣が目指したモノだ。おまえはただ、ヤツの理想に憧れて——その残滓を、わけもわからず追い求めただけに過ぎん。

見ろ、その結末がこのオレだ！ 絵に描いた夢など、現実に掴み取れる道理がない。行く道さえ判らずに走り続けられ、最後は必ず破綻する。

——おまえの理想は、最初から間違いだつたのだ」

劍の丘。遠い未来で、裏切りの刃に貫かれた英雄は、血塗れの貌でそう嗤つた。

おまえはこうなりたいのかと、未来の自分が問うてくる。血と鉄の匂いが、鼻から脳に教え込む。ありもしないものを現実にしようとすれば、その代償がこれなのだ。人助けという題目を掲げて、人殺しに成り果てるのだと。

……怖い。

心の底から、そう思った。これから自分がその道を歩むかも知れないと思うと、足が竦みそうになる。

けれど。これを嫌だと言ったら、取り返しのつかない何かが……自分が重ねてきた何かが、どうしようもなく壊れる確信があつた。

そんな感情は最初から問題じゃない。あの夜、俺は切嗣の夢を継ぐと決めた。なりたいかどうかじゃない、ならなくちやいけないんだ——そう答えようとしたその刹那、あの高慢な声が、ふと聞こえたような気がした。

『——たわけ。だから視野が狭いというのだ、貴様は』

はつとする。手に浮かぶ令呪が、鈍く光つたように錯覚した。

これしか道はない、こうすることしかできない、何も先が見えない——そんな時。あの男は傲慢に、そう何度も口にした。一つのやり方に拘るな、視線を狭くして思い込むなど、乱暴ながらも叱咤した。そうして何度も、俺は新たな選択肢を見つけてこれた。『誰も貴様の目的は揶揄しておらん。貴様の問題はそこではなく、動機と実現手段にある』

正義の味方など馬鹿馬鹿しいと、人間の醜さを覆い隠すための言い訳だと、そんな在り方は歪んでいると、あいつもそう嘲った。だけど、あいつは——人を助けたいというその想いだけは、決して笑わなかった。

『夢ならば、そうして己が欲で語るがいい』

その動機は借り物だと、何の価値もないのだと、擦り切れた守護者じふんは言い捨てた。

黄金の英霊は、鍍金メッキを使うなど言い放った。おまえ自身が本当に許せぬ動機もはなんだったのだと。

きっかけは、確かに偽物だったのかもしれない。俺を助けてくれた、切嗣の笑顔が綺麗だったから。何もなかった自分にとっては、あの在り方が憧れで。空っぽな心に焼き付いたから、ただそうなるうとした。

——だけど。本当に、何もなかったのだろうか？

もうほとんど忘れてしまったけれど。あの大火災の後、俺がまともに日常生活を送れ

るようになるまでは、相当な期間を要したらしい。

かつて住んでいた家を訪れ、死んでしまった両親の影を求めた。何もいない空間に話しかけ、いもしない人物を作り出し、家族ごつこのような真似をしていた。

死体の記憶を思い出しては嘔吐し、焼き尽くされた空を思い返しては卒倒し、今できえ、夜毎にあの炎に苛まれる。この苦しみは、借り物でもなんでもない、俺自身が持つ感情だ。

けれど、それですら救われた方なのだ。たくさんの人たちが、その苦しみの果てに死んでいった。助けることもできず、ただ消えていつてしまった人たちを見て、俺は二度とこんな光景を繰り返したくないと、強く思い続けてきた。

「  
」  
だから、正義衛宮切嗣の味方に憧れた。だから、聖杯戦争に参加した。だから、俺は戦うと決めた。

最初は借り物の理想だった。けれど、その根底にあった感情は、誰でもない俺自身のものなのだ。

贖罪であり、憧憬でもあるのかもしれないけれど、あんな惨劇を繰り返させたくないという願いは本物だ。あいつの言う、愉悦というやつはよくわからないけれど——この苦しみは、許せないという怒りは、自分のものだったと思いつ出した。

「……間違い、なんかじゃない……!」

ふらつく視界。手足は鉛のように重く、全身は傷だらけ。頭は割れそうに痛み、内臓すらも悲鳴を上げる。

それでも、体は動いている。あんなやつに屈するなど、この体は訴えている。敵の姿さえ見えていれば、まだ俺は戦える。戦力差など、勝てるかどうかなど知ったことではない。

投影準備。干将・莫耶を創造しようと試み——中断する。違う。この武器はヤツの愛剣だ。それがどれだけこの体に馴染むとしても……俺は、その道を選ばない。

「間違っていたのは、理想じゃない……!」

その男は、最期まで独りだった。だから最後には、何もかもに押し潰された。

黄金の王は、確かに孤高だった。けれどそんな男でさえ、親友と共に戦った。

その男は、道も見えずに突き進んだ。そして何が正しかったのか、最後にはわからなくなつた。

黄金の王は、遠い星を見据えていた。だからそいつは、どんな窮地でも自分が正しいと貫けた。

その男が全て悪かつたわけではない。

黄金の王が正しかったわけでもない。

けれど、困難な道を歩もうとするならば。その男のやり方は、きつとどこかで間違つたのだ——。

「——トレリス、オン投影、開始」

男が息を飲む。俺が投影するのは、ヤツが握る陰陽剣ではない。

記憶を失くして、それでもあのサーヴァントが使い続けた、煌く黄金の双剣。干将・莫耶と比して精度は荒く、贗作である以上、性能では及ぶべくもない。だがそれでも、俺が選んだ武器はこれだった。

柄を握る。断片的に、担い手の記憶が流れてくる。そこはどことも知れぬ、広大な森の中。途方も無い威圧を放つ古の神を相手取ったアーチャーは——驚くべきことに、恐怖の感情を抱いていた。どんな逆境だろうと鼻で笑つてみせる、傲慢の化身のような男がだ。

アーチャー一人なら、きつとその戦いには勝てなかった。しかし、彼には友がいた。二人で力を合わせれば、できることは指数関数的に広がっていく。そんな簡単なことに、どうして気づかなかつたのか。

『——貴様らは徒党を組み、道具を駆使することで成果を生み出してきた。他の人間や道具を用いた方が、遥かに効率が良いからな。小僧、おまえが改めるべきはそこからだ』

「おおおおお——っ！」



初めて、自分から飛び込んでいく。舌打ちしたヤツに一手先んじ、黄金の剣を叩きつける……！

「勝てぬと知つてその愚かしき、最早見るに堪えん——！」

受けに回つた男が、下方からの切り返して薙ぎにかかる。まともに防御などすれば腕が砕けると、押し流そうと試みるが、それだけで体が持つていかれた。

剣を合わせることにさえ叶わない。一手切り結ぶだけで、六十キログラム近くあるこの体は、紙のように吹き飛んでいく。だが、今はそれでいい。

擦過傷は完全に無視し、全身の痛みを捻じ伏せる。転がる勢いのまま立ち上がり、双剣を連結させ、突っ込んでくるヤツに照準を合わせる……！

「チ——」

男が回避。弓の一撃を受ければ、ヤツの双剣は砕け散る。アーチャーの拘束に全てを注ぎ込んだヤツは、あれが砕ければもはや次の剣は生み出せまい。

別の軌道から瞬時にして接近され、繰り出される刺突。俺では到底凌げぬ一閃は、剣自体が持つ記憶によつて防がれた。自分の力で勝てないのなら、他の何かを頼ればいい。

「おまえは、やり方を間違えたんだ——！」

刃の一方を地面に突き立て、それを支えにもう一方の刃でヤツの膂力を受け流す。一

歩も退かぬと睨みつければ、ヤツは更なる憤怒を以て干将で斬りかかる。

「ならば、貴様のやり方が正しいとでも言うつもりか？ あのような男をサーヴァントにしておきながら、それが矛盾だと何故気づかぬ！」

「てめえに、何がわかるっていうんだ……！」

斬り上げる。再び分離した黄金の剣で、男の宝具を軋ませる。互いの投影武具が、悲鳴を上げる音。

二度目の斬撃。追えぬ速度であれば、ヤツ自身の軌跡を読む。よく見ると、よく観ると、俺は何度も言われ続けてきた。ヤツが俺自身であり、この剣にアーチャーの記憶が宿るのなら、動きを捉えられぬ道理がない……！

「アレは己のためならば、今の世など容易に焼き尽くす英霊だ。マスターであるおまえとて、気が変われば殺すだろう。そんな男が聖杯を掴めばどうなるか、そのような想像力さえ持ち合わせんか。」

あのような男と契約を結んだばかりか、自分の行動が何を招くか想像すらもできない愚かしさ。そんなことさえ弁えぬから、貴様は正義などという戯言を抜かすのだ——  
！

一刀を捌く。ヤツが限界まで消耗しているせい、流れ込んだ記憶によつて俺の投影精度が上がっているせい、傾ききつたはずの天秤はこの時僅かに拮抗していた。

アーチャーが危険な男なんてことは、最初から判っていた。確かにあの男なら、気まぐれに人間を肅清するなど言い出しかねない。事実俺だって、何度も殺されると感じたのだ。

ちらりと、鎖に囚われたサーヴァントを見る。抵抗できる余地さえないのか、こちらの戦いに興味がないのか、あいつが動く気配はない。何も言わないうちから動くことがあったかと思えば、こつちが必死になっている時に言葉一つさえ向けてこない。情を解さない冷酷無慈悲さがあの英霊の本質だ。

……だけ。

「——ああ、そうだ。あいつはそういうやつだよ。こんな奴と契約なんかしてられるかって、そう思ったことだってあった」

十字の斬撃。双剣を交差させ、守りを食い破らんとする攻撃に耐える。返す刀で牙を剥き、胸板を貫く一撃を凌がれ、至近距離で睨み合う。

「けど、あいつには何度も助けられた。あいつがいなかったら、俺はとつくに死んでたんだ」

助けられたのは俺だけじゃない。

桜がまだ手遅れになっていないのも、イリヤを救出できたのも、学校みんなを結界から助けられたのも、どれも俺独りではなし得なかったことだ。アーチャーの助言と力

があつたから、俺は選択肢を間違えずに済んだのだ。

「それだけじゃない。おまえの言う通り、俺はわかつてなかつたさ。何を助ければ良いのか、何が正義の味方かなんて」

防ぐ。凌ぐ。弾く。

絶え間のない猛攻を、一撃ごとに悲鳴を上げる体で、決して通さぬと拒否し続ける。ヤツから流れる戦闘技術と、アーチャーの膨大な戦闘経験が、次の手を俺に知らせてくれる。

攻勢に出る余裕はない。身体能力で、俺は到底サーヴァントに届かない。ほんの僅かでも隙を見せれば、この身はヤツに斬り捨てられる。

だけど、それでも屈しない。この想いと、あの黄金の男のことは、絶対に否定などさせない……！

「でも、あいつのおかげで気がついた。十年前のあの夜を、絶対に繰り返させない——この怒りが、苦しみが、俺の中にある『本物』だった！

切嗣だつて、きつと同じ気持ちだった。だから俺は、聖杯戦争を引き起こすような魔術師りふしんと戦う、『正義の味方』になるって決めたんだ……！」

裂帛の一閃。叩き込んだ一撃は容易く防がれ、ヤツの体は小揺るぎもしない。だがここに来て初めて、ヤツは明確に、攻めではなく守りのために後ろに下がった。

踏み込んだ追撃の刃は、挟み込む陰陽剣に挟り取られ、ついに限界を超えて砕け散った。脳はもう沸騰寸前だが、即座に再投影し、更に斬りつけるとヤツの舌打ち。

体はとつくに壊れていて、血液だつて足りていない。魔力とて、何度も投影できるほどの余力はない。あと数分さえ保たず、俺の体は崩れ落ちるだろう。

……しかし、ヤツはもうあと一度だつて投影する余力がない。あの鎖に全てを注ぎ込んだが故、もうこの男に後はない。マスターとてこの場にはいないことが明白である以上、悲鳴を上げる干将・莫耶を砕かれれば、男はもう引き下がる他はない。

俺が付け込めるとすれば、そのただ一点のみ。途方もなく遠い終着点を、死という崖を飛び越え、がむしやらに目指し続ける。ヤツの記憶も、アーチャーの武器も、何もかも使つて必ず辿り着く——！

「魔術師と戦う？ たわけ、魔術師ですらない貴様ごときにながでできる！ 結局貴様は、魔術師殺し衛宮切嗣の影を追うだけの偽物だ！

それは即ち、魔術以外の手にかかる人間をふるい落とすということ。正義などと不可能な理想を掲げ、結局は切り捨てることしかできない。これを偽善と言わず何という！

振りかざされる黒剣。確実に首を刎ねる一撃を、逆手に持ち替えた剣で受ける。無茶な防御に、右手の筋肉が断裂した音がする。

痛みのあまり、ガ、と口から無様に悲鳴が漏れる。  
もう諦めてしまえと、心のどこかで弱音が溢れる。

——その悉くを、ただ意志だけで捻じ伏せる。

『自らが救わねばならぬ、そうでなければ自分が人を助けたことにはならぬというその頑なな思い込みが矛盾の根本よ』

何もかもを救いたい、そう思っていた。誰も彼もが幸せな世界がいいと、お伽話を追いつけていた。

それは不可能なことなのだろう。だけど、限りなく近づけることはできる。自分だけで何もかもを救おうとするのではなく、他の誰かの手を頼れば、その分だけ道は広がってくる。

生活に困った時は、役所が助けてくれる。

泥棒に遭った時は、警察が相談に乗ってくれる。

災害が起こった時は、自衛隊が駆けつけてくれる。

戦争に巻き込まれた時でさえ、国連というシステムがある。

俺ではない誰かが、誰かを救うことのできる仕組みがある。それは、俺が誰かを見捨てていい理由にはならないが、是が非でも俺自身がやらなければならぬことではない。

ならば——衛宮士郎だけができることは、一体何なのだろうか？

桜の悲痛な叫びを思い出す。何も悪いことをしていないのに、桜は想像もできないほどの苦痛を味わわされた。守ってくれる誰かも、助けてくれる制度も存在しない、永久の暗闇の中でずっと。

桜だけじゃない。前回の聖杯戦争では五百人、今回も既に数十人。あらゆる国で、あらゆる時代で、魔術という暴力が人を傷つけてきたに違いない。これほどまでの理不尽、裁かれることさえもない罪過を、どうして俺が見過ごせようか——！

「ふるい落とすわけじゃない。手の届く限り、俺はみんなを助けたい。でもこれは聖杯戦争に何もかも奪われた、俺だけができることだ！

助からなかったみんなの思いを無意味にしないために、俺がやらなくちゃいけないこと——いや。俺が本当にやりたいことなんだ！」

確かに俺は、魔術師未満の凡人だ。俺なんか立ち上がったところで、何ができるといえるだろう。

だけど、どんな状況でも道はあると、アーチャーは教えてくれた。どんなに無力で絶望的な状態でも、かつては戦っていた相手だとしても、協力してくれる仲間はいるので、遠坂やイリヤが教えてくれた。

独りじゃない。聖杯戦争のような暴虐で傷つけられた人は、そんな身勝手さを許せな

いという人は、魔術師にだってきつといる。

——だから、戦う。

この想いを嘘にしないために。

誓いを貫き通すために。

英霊エミヤが歩んだ結末とは、違う道を作るために——

「俺はおまえのようにはならない。それでも俺は、正義エミヤシロウの味方を張り続ける——！」

一閃。唐竹割りの一撃で、ついにヤツの黒剣がひび割れる。ヤツの諦観を、俺の理想で砕くために、ひたすらに剣を振るい続ける……！

「つ——!? そこまでだ、消えろ——！」

白剣が、闇ごと引き裂くかのような疾さで迫る。二刀を攻撃に回した今、その斬撃は防げない。あの刃はこの腕を叩き落とし、そのままにこの頭蓋を砕くだろう。

剣だけでは足りない。ならば、もう一つアーチャーの手を借りる……！

「トレス投影、開始——！」

呼び起こすのはあいつの纏う黄金の鎧、その手甲。左手部分のみを創造し、あのサーヴァントの戦闘経験、戦術予測に至るまでを投影する。

脳裏に映る光景。緑の髪の人形が、剣を携えて斬りかかる。その一撃を弾いたように、ヤツが振り下ろす干将の刀身を、横から殴りつけて軌道を逸らす。その打撃で、無



理に投影した手甲は碎けてしまったが、ヤツの剣もまた大きな亀裂が入る。

不思議と笑いそうになる。半人前の俺が、中途半端に投影しただけでもこの防御力。アーチャーの在り方を体現するように、あいつの持つ武器はどこまでも強い。なら、そんな強力な武器を、手放すなんてできるものか。

「そのためには、あいつと契約なんて切れない。あいつが悪さをしようっていうなら、マスターである俺が止める。それぐらいできなくちゃ、正義の味方なんかになれっこない……！」

友達ではないかもしれない。共犯者にはなれない。あいつは俺のことを、なんとも思っていないのかもしれない。味方よりも、敵になる可能性のほうが遥かに高かっただろう。

それでも。こんな未熟なマスターでも、アーチャーは俺に付き合ってくれた。だったら——

「俺にはあいつが必要だ。俺のサーヴァントはあいつだけだ！ おまえなんかには、どうこう言われる筋合いはない——！」

渾身の突き。右手は折れかけ、おそらくはこれが最後の一撃になる。肺か喉がいかれたのか、血を吐きながらも、心臓目掛けて剣を放つ——！

「——ッ」

——バキン、と金属が碎ける音。

万物を貫く勢いの一撃は、男に容易く防がれ——同時に、その白い刀身を木っ端微塵に打ち碎いた。

防がれた反動で、俺の手からは投影した剣が飛んでいく。右半身がから空きになった俺を見て、致命的な隙だと目を細める男だったが、俺が諦めていないことに気づくとはつとして吹き飛んだ剣の軌跡を追う。

激しく回転する双剣が向かう先にいるのは、誰であろう鎖に縛られたアーチャー。その右手を戒める縛鎖に、黄金の刃が突き刺さらんとする。

そう、最初からこれが狙いだった。俺だけではサーヴァントに勝てない。なら、絶対にアーチャーの力が必要だ。ヤツに気づかれず、意図を気づかせずに誘導し、あの鎖を破壊して……己がサーヴァントを助け出すのが目的だった。

敵しか見えていなかった男と、どうやってこの一瞬を実現するかを考えていた俺の差だ。ヤツの剣を砕ききる前に限界を迎えた場合、こちらはどうかやっても詰んでしまう。今の猛攻は、最初から二つの目的があったのだ。俺が意図した通り、弾かれた勢いのままに投擲した剣は、音を立てて鎖に激突し——

「なっ……………」

——碎けなかった。

砕けたのは、投影した劍の方。まともに直撃を受けた鎖は大きく揺れ、幾重もの亀裂が入った。しかし、全てを断ち切るその手前で、鎖の硬度に黄金の劍が屈したのだ。

右手だけでも自由になれば、アーチャーにはきつと打つ手があった。だけどあと一歩というところで、俺の決意は男の執念の前に敗北したのか。黄金のサーヴァントは解放されず、バランスを崩した俺の体は、滑稽に尻餅をついてしまう。

そんな俺の無様さを。灰色の瞳の騎士が、冷ややかに見下ろしていた。

「そんな——届かなかった、のか」

「それがおまえの限界だ、衛宮士郎。」

オレはおまえの理想の極地。未熟な貴様では、英雄オレに届くはずもない。いや——そもそも、貴様の間違えた願いなど、この世の誰にも届きはしない。

——さらばだ。理想を抱いて溺死しろ」

左手の劍だけでは、渾身の振り下ろしを防げない。こんな姿勢では、どうやっても回避できない。いくら精神が折れておらずとも、直感も読み込んだ技術も知識も、全てが手遅れだと示していた。

届かなかった。愚かさの代償だともいうように、俺めがけて黒劍が振り下ろされ——

「——いや。確かに、我オレに届オレいていたぞ」

飛来する一矢。黄金の軌跡は、俺の頭蓋を割らんとする干将を直撃し、紙を裂くように打ち砕いた。

啞然として、流れていったそれを追う。地面に突き刺さったその武器は、俺が投影していた贗作ではない、真正銘のアーチャーの剣だった。

俺とヤツが同時に、鎖に縛られた男を見る。しかし黄金のサーヴァントは、未だ戒めから抜け出せぬままだった。両手も両足も動かせぬはずなのに、どうやって剣を投擲したのかと、不可解さに頭が混乱する。

「貴様、どうやって——ッ——！」

誰何しようとし、言葉を失う男。何を見たのか、愕然とした様子を見せるその男に遅れる形で、俺も異様に気がついた。

アーチャーの全身を、指一つ動かす隙間さえないほど縛り上げていた鎖。神すらも抜け出せぬであろうその戒めが、あろうことか、独りでに解けていく。それが鎖を操っていた男の意志ではないことは、火を見るより明らかだった。

剣戟を交わすのも忘れ、有りえぬ事態に動けぬ俺たちをよそに、ついにアーチャーが自由になる。神を縛るといふ幻想の鎖は、その現実には堪えられなかったのか、霞のよう

に消えていった。

「——まったく。我が友ながら融通の利かぬ奴だ。贗作とはいえ我の剣で斬られるまで、偽の主に忠を尽くそうとはな」

こきこきと、体の調子を確かめるように首を回すアーチャー。彼が見ているのは、俺でもヤツでもなく、自ら解けていった鎖だった。

「自分が誰かをようやく思い出したと見える。ふん——あの一撃で、我が貴様を思い出し、貴様もまた我に気づくとはな。

まったく……神どもの采配かは知らぬが、贗作が真実を喚ぶとはつくづく度し難い話よ。斯様な奇縁もまた、我が王たる証と謳うべきか」

どうしてか愉快げに、その鎖——いや、ここにはいない誰かに語りかけるアーチャー。一体何を見たのかと疑問を抱いた刹那、サーヴァントがこちらに向き直る。

黄金の威容は、些かたりとも傷ついていない。傲岸不遜な、天上天下に覇を示すかの如き存在感は普段どおりの姿。

しかし——アーチャーが纏うその気配、そこから感じる見えざる力は、今までとは比較にならぬほど凄まじい領域だった。敵に回ったセイバーも、あの圧倒的なバーサーカーでさえも、今のアーチャーには届くまい。見ているだけでも、圧力で腰が引けそうになる。

今やこの場を支配しているのは、あの黄金のサーヴァントだった——否、この場どころか、世界を支配して尚余りあると言われたとて疑いない威圧感。

人智の及ばぬ赤い瞳が、酷薄に敵サーヴァントを見下ろす。それだけで膝を折りそうな凄絶な殺気に、男が一步退いたのを感じた。

「だが、所詮は偽物が生み出した贗作に過ぎん。

贗作者<sup>フェイカー</sup>風情が、王を縛らんと謀<sup>たばか</sup>ったばかりか、我が友の姿を象るその大罪——最早死すら生温い！」

パチン、と黄金の騎士が指を鳴らす。その瞬間、弓兵の背後に、水のような波紋が浮かんだ。空中に沸き立つ黄金の門からは、刃の穂先が現れていく。

二つ、四つ、八つ、十六——煌く刃は、さながら輝く星のごとく。極限まで磨き上げられ、殺意に燃える無数の武器は、主の号令一下放たれることを心待ちにしているのか。あの一つつが紛れもない宝具であり、どれほど途轍もない力を秘めているのかは想像の埒外だ。

かつて剣の騎士が口にしていた言葉を思い出す。前回の聖杯戦争の折、黄金のサーヴァントは無限の宝具を縦横無尽に操ったと。あの騎士王ですら恐れを抱いた光景が、十年の時を経て今再び現れていた。

「裁定の時だ——頭を垂れよ、不敬！」

劍が舞う。撃ち放たれた砲弾は、たった一撃でさえ容易に地形を変えるだろう。戦車砲どころか、誘導弾ミサイルに比肩する火力は、見るだけで死を確信させた。

狙われた男は、ランサーすら目を剥くのではないかという速度で瞬時に遁走する。その姿を追い、宝具群が次々と地に炸裂し、土煙と衝撃波で俺まで転がされてしまう。公園の大地は、今や爆撃を受けたも同様の有様となった。

サーヴァントとしての脚力を全力で發揮し、即座に数十メートルほど離れた敵だったが、さすがに全弾の回避は不可能だったのか。右手と左足は半ばへし折れ、腹部の大穴からは血が流れているが、その程度で済んでいるのがむしろ僥倖と言えるだろう。直撃を受けていたならば、肉片一つも残るまい。

一転して、優勢な側が切り替わる。男は既に死に体、初弾でこの有様なら次弾を躲しきれるはずがない。外套を血で汚しながら、男は自嘲するようにニヒルな笑みを見せた。

「ここで力が戻るとは、先に仕留めるべきだったか……不覚を取ったな。」

しかし何故、君はその男に力を貸す？ その小僧は、君の眼鏡に叶う存在ではあるまい。むしろ、真つ先に斬り捨てるものだと思っていたが？」

「ハ——言われるまでもない。まったく、このような雑種が我を喚よぼうなど救いがたい愚かしさよ。」

謳う理想が借り物なら、掲げる刃は贋作ときた。何もかもが偽物など、それは価値ある真作への冒瀆だ。そのような雑種ゴキミは見るに能わぬ」

アーチャーが鼻で笑う。……カチンと来た。人の苦勞も知らないで、好き放題言いやがって……！

「——だが」

黄金の具足が、擦れて音を立てる。悠々と歩んできたサーヴァントは、俺から二歩分ほどのところで、おもむろにその足を止めた。

その刹那、まるで天が慮ったように雲が割れた。降り注ぐ月光が、男の姿を讃えるかのごとく、その立ち姿を燦然と輝かせる。

——それは。あの始まりの夜の、再現だった。

月光を背にした姿は、黄金。

太陽さえ恥じ入るような輝きを放つ、黄金色の髪。

どこまでも深い真紅の瞳は、何もかもを見透かすかのようで。

金色の甲冑で武装した男は、酷薄な笑みを浮かべて俺を見下ろしていた。

「此奴は、不遜にも我の光輝に縋らんとする魔術師マジカだ。我に命を張る無礼者バカを、これ以上野放しにしておけるものか」

あの夜と同じように、黄金の英雄は赤い瞳で俺を射抜く。しかしあの時とは違い、弓



兵の声に宿るのは冷酷さだけではない。愉快な口ぶりは、この男の機嫌がすこぶる良  
いことを物語っている。

「人として生まれ落ちながら、その領分を超えた願いを持ち、己が欲のために憚りなく我  
を求め、真作への道を登らんとする。その稀有な愚かしさを、恥知らずな欲望を良しと  
するのが我の愉しみだ。これほど浅ましい人間を、我が救わずして誰が救う！」

そう言い切ると、アーチャーはあのサーヴァントに向き直る。黄金の波紋が幾重にも  
空に浮かび、宝物の軍勢がその刃を覗かせる。その位置はまるで、俺をあの男から守つ  
ているようでもあった。

……聞き間違いかと疑ったが。いつものように、馬鹿にするような口ぶりではあつた  
が。この男は、俺のことを肯定すると言ったのか——？

「立つがいい、衛宮士郎。我のマスターを名乗るのであれば、みすばらしい姿を晒すのも  
大概にせよ」

呆れて口を開けていると、アーチャーが見下したように嘲笑う。しかし、あいつが俺  
を呼ぶニュアンスは、普段のそれとは違っていた。このサーヴァントが名前を呼ぶなん  
て、ただでさえ、よほどでなければありえないのに——。

その衝撃で、体が勝手に立ち直った。右手はおそらく折れていて、肋骨にも罅が入つ  
ている。手足も胴体も傷だらけで、どこを痛めたのかわからないが、口の中は逆流した

血で気持ち悪い。頭痛はまるで収まらず、体の全てが今すぐ休めと必死に訴え続けている。

だけど、魂は燃えていた。今は立ち上がる時だと、そう熱く叫んでいた。自分でも信じられないが——俺はこの男に、こんなにも気を許してしまっていたらしい。マスターだと正面から認められて、こうも発破をかけられただけで、痛みが飛んでしまいうぐらいには——！

「それでいい。貴様の我欲に免じ、この戦のみ、我が宝物を使うことを許す。この英雄王の真の力、思うままに使うがいい！」

「アーチャー、アンタ——」

アーチャー

「弓兵？ ふん——凡百の英霊どもと一緒くたにするな。この我に役割クラスなどない。

我は絶対にして始まりの王。英雄の中の英雄王——ギルガメツシュ。故に、貴様もそう呼ぶがよい」

そう傲岸に告げると。黄金のサーヴァント——ギルガメツシュは、いつもの皮肉げな笑みを浮かべてみせた。

## 29. 英雄王

「我<sup>オレ</sup>は絶対にして始まりの王。英雄の中の英雄王——ギルガメツシュ。故に、貴様もそう呼ぶがよい」

ギルガメツシュ。

それは確か、人類史上最も古い伝説——『ギルガメシュ叙事詩』を起源とする英雄の名だ。

バビロニアに君臨した、半神半人の魔人。あらゆる財宝を集め、数々の神獣と戦い、文明のルーツの一つにも数えられる都市国家を繁栄させた古代の王。

果ては、無二の親友を失ったことを契機に、不老不死の秘密までもを求めるようになったというが——。

「記憶が、戻ったのか——」

愕然とする俺に、口角を吊り上げて答えるアーチャー——ギルガメツシュ。

天地に我在りと知らしめる、堂々たる佇まいは今までと何ら変わっていない。しかし、そこに宿る力の違いは、素人目に見ても歴然だった。感じられる威圧感の程は、さながら大山の質量か深海の重圧か。

セイバーやイリヤがあれほど警戒していたのも頷ける。空間そのものを従えるように揺らぎ出る黄金の波紋、あれから覗く刃はただ一つであつても死の運命を確定させる。それが数十も並ぶとあれば、脅威を通り越して絶望しかあり得まい。

「ふん——この身は本来忘却の出来ぬ体だが、よもや不出来な再召喚のツケがこう巡つてくるとはな。

まあよい。無の境地から始めるといふのも、存外新鮮な体験であつた。これはこれで愉しめたが——」

紅蓮の瞳が、殺意を湛えて細められる。その鋭さが射抜くのは、半ば死に体となつた赤い弓兵。

「穢らわしい偽物めが——せめて散り様を以て我を愉ませよ、雑種」  
聖劍、宝槍、大槌、巨斧——数々の宝具が、時空を超えて顕現する。

後ろから見ている俺ですら、身の毛がよだつような恐るべき力の具現。そんなものの照準を向けられては、生きた心地など到底するまい。

守護者となつた英霊の顔には焦燥が浮かぶ。魔力を失い、傷を負い、対抗する武器を生み出す余力さえない。絶体絶命を通り越して、死刑執行を待つ罪人の境地だろう。

現れた無数の凶器はそれぞれ形が違い、一つとして同じ物などない。一人の英霊につき宝具は一つ、多くても数個——その法則をまるで無視するかのよう、黄金の騎士が





巨人の絶叫。理性が消し飛んでいようと、怪物の本能は、この場で最も脅威となる者を感じたのか。ヤツがこちらに狙いを定めたのが、はつきりと感じられた。

敵サーヴァントを消滅寸前まで追い込んだ矢先に、最悪のタイミングだ。敗残兵などに拘っている場合ではないと、舌打ちしたアーチャーが目標を切り替える。その時にはもう、怪物が全力で走り出し――。

「――痴れ者が」

次の瞬間。

剣が、槍が、槌が、斧が――赤い弓兵を刺し貫くはずだった無数の武具が、赤黒い巨軀に殺到した。

ただ敵を掃討するだけの獣に、その脅威を避ける術などない。いや、そもそもそれだけの知性さえ残っていたかどうか。無慈悲な鋼は、一片の容赦すら宿さず、狂戦士の肉体を蹂躪する。

剣が腕を斬り、槍が足を縫い、槌が頭を割り、斧が腹を裂き、矢が目を抜き、鉾が首を刎ね、刀が背を断つ。数十もの刃の嵐は、人の数倍の巨影を余すところなく斬殺し、かつての大英雄はもはや奇怪な前衛芸術としか取れぬ肉塊となつて沈黙した。

生存の余地など存在しない、過剰なまでの暴力。しかし……パーサーカーを尻目に、本来その運命を辿るはずだったサーヴァントは、とうにこの場を離脱していた。

「ち、逃したか。運の良い……いや、元よりそういう筋書きか。とすれば、あの影めが毎度都合よく現れるのにも得心がいく——ふん、私の目も衰えたものよ」

いったい何に気づいたのか。狂戦士を粉砕したことなど視野にさえ入れていないのか、またそろよく分からないことを言い始めたアーチャーは、独り納得したように頷いている。

見ていた俺とはいえば、ただただ唾然とする他なかつた。明らかに異常な状態にあつたとはいえ、あのセイバーすら一蹴し、キャスターたちに至つては三騎がかりで挑まねば勝負にさえならないと考えたヘラクレスを——この英霊は、虫を潰すかのようになぞらへた。異常と呼ぶことさえ憚られる、途方もない戦闘能力。

これが、アーチャーの本来の力なのか。戦慄に唾を飲み込みながら、粉微塵になつたバーサーカーを見て——そこで、有り得ぬ光景に再び目を見開く。

「な……い……アーチャー、あいつ……！」

解体されたはずの狂戦士。しかし死亡したにも関わらず、消滅する様子が見られない。そればかりか、砕けた肉片がひとりでに集まる、吐き気を催すような異様さが広がっていた。

「蘇生能力……?!? あの宝具は、狂化が解けた時になくつたはずじゃ——」

「ふん、あの影めに汚染されているようだ。あれこそは聖杯そのもの、一旦は狂化の枠



組みから外れたヘラクレスを、再びパーサーカーのクラスにねじ込んだのだろうか。

十二の試練の貯蔵は、魔力を注ぎ込んで蘇らせたのだろう——それほどまでに靈基を弄ばれて、無事で済む道理はない。

その果てがあの姿だ。同じ半神ともあろうものが、醜い姿になったものよ……あれでは最早英霊とは呼べまい」

ホラー映画のような光景に焦る様子もなく、腕組みして淡々と解説してみせるアーチャー。

どれだけ肝が座っているのか知らないが、こちらは生きた心地がしない。途方もない怪物が、現在進行系で死から蘇り、狂気の唸りを上げているのだ——自分の数倍はある化け物相手に平然としていられる人間がいたら、正気を疑う。

数十秒もしないうちに、巨人が姿を取り戻す。あれほど巨大に見えた斧剣ですら、今のパーサーカーの体軀からはナイフ程度にしかな感じられない。正気など欠片も見えない、視力さえ宿しているのか怪しい瞳が、不気味に赤く輝いた。

「まずい、アーチャー……！」

「たわけ。此度の弓兵はあの贗作者よ。」

——なに、そう焦るな。リハビリにはちょうど良い肩慣らしだ」

一度は殺したとはいえ、あと最大で十一回倒さなければ消滅しないというヘラクレ

ス。

かつての姿でさえ恐ろしかったのに、今の狂戦士はどう見ても脅威度が跳ね上がっている。寒気がするような死の気配に、全身に鳥肌が立ち、本能はもう今すぐ逃げろという大合唱。

この聖杯戦争で、それなりに修羅場を潜ってきたはずの——今し方、未来の英霊などという存在に殺されかかった俺でさえ、あれはもう別格だと感じてしまっている。だといふのにアーチャーは、身動き一つしていない。

その決して揺らがぬ存在感に、恐慌に駆られかけた精神が落ち着きを取り戻してくる。どれほどの窮地だろうと、どれほどの絶望だろうと——この男は決して屈しないと、自ら道を切り開くのだと、俺は知っていたはずではなかったか。

浮き足立った腰に力を入れ、震えていた足で大地を踏みしめ、一度大きく息を吸う。負けるものかと拳を握り、信頼を込めてアーチャーを見つめると、黄金の英霊は愉快そうに唇を吊り上げてみせた。

「墮ちた半神といえど、大英雄が相手とあらば不足はあるまい。王の財宝、その一端を見せてやろう」

パチン。

それが、指を鳴らした音だと気づいた時には——再生を果たした狂戦士に、無数の宝



武を誇った技量さえなく、ただの石塊ごときで、伝説の具現を防げる道理がない。

最初の十数発を弾いたバーサーカーだったが、遂に一発が胸板に着弾。それを皮切りに、次々と宝具が防御を貫き、五秒とせぬうちに剣山のような有様となって沈黙した。狂牛は距離を詰めることさえ叶わず、逆に衝撃で数十メートルも吹き飛ばされている。

——これが、ギルガメッシュ。

人類史に名を残す、最古の伝承の主人公。

単なる物語であれば、より古いものは存在するというが、人間が英雄となった伝説としてはこれが世界最古の文学だ。中世のアーサー王伝説、二千年前のケルト神話、三千年前のギリシャ神話——それらより遥かに古い、五千年以上前の話。

一説によれば、ギルガメッシュ叙事詩に描かれたテーマは後世の物語に影響を及ぼしたという。逆に言えば、後の時代の物語の原典ということであり——そうだとすれば、後世の伝説を内包していてもおかしくはない。今飛び交っている宝具は、まさにその証明だ。

あらゆる伝説の原型を有し、あらゆる英霊の頂点に立つ絶対王者——人類最古の英雄王。それが、俺が契約したサーヴァントの正体だった。

「どうした大英雄。貴様の力はその程度か！」

炎上し、感電し、水没し、凍結し、風化する。

浄化され、呪殺され、毒殺され、溶解され、粉碎される。

英雄たちの宝具は、単に鋭い刃というだけではない。『攻撃』という概念が具現化した  
 武器たちは、その一つ一つに異なる効果や属性が宿っている。十二の試練とて、それを  
 超える数十種類、何百倍という死を押し付けられては到底及びはすまい。

——既に五つ。

それだけの命を落としておきながら、バーサーカーは愚直に前進する。

容赦のない掃射の前では、こちらに迫ることさえ叶うまい。このままではたちまちの  
 うちに、残りの生命も使い切ろう。

知性の欠片もない猪突ぶりに、ギルガメッシュが鼻白む。既に勝敗は決したかと、俺  
 も気を抜きかけた矢先——唐突に、狂戦士が咆哮した。

「■■■■■■■■■■——！」  
 消えた。

そう錯覚したのは、途方もない速度でバーサーカーが横に動いたからだだった。今まで  
 の猛進とはまるで違う、巨体からは信じられぬほどの俊敏さで、四足獣の姿勢となった  
 怪物が疾走する。

突然の変化に、射出中だった魔剣が軌道を変えきれずに空振りする。その隙を見逃さ

ず、狂戦士は埒外の速度で肉薄し――

「――温ぬるい」

地から天を射抜くように現れた、無数の槍たちに串刺しにされた。

足から頭までを貫かれ、ゆらりと岩の体が倒れていく。ギルガメッシュの宝具は、背後から飛んでいくだけではなかったのか。空中に揺蕩う黄金の砲門は、上方から、左右から、側面から、後方から、あらゆる方向から巨人を撃ち抜こうと牙を剥いていた。

「獣とはいえ、その程度の学習能力は持ち合わせていたか。」

――下手に動くなよ、雑種。死に急ぎたいというなら別だがな――

立ち所に死から蘇り、宝具を振り払って飛び退る狂戦士。再び獣の姿勢となったバーサーカーは、何を考えたかギルガメッシュを中心に円を描くような軌道で走り始めた。

圧倒的な面制圧能力と射撃性能で巨人を寄せ付けない弓兵だが、アレに近づかれてはひとたまりもない。今のヘラクレスとは、騎士王でさえ打ち合えるかどうか。

これは最早、人間がどうにかできるような領域ではない。既に英霊同士の決闘ではなく、怪物退治のそれに等しい戦いとなっている。

不用意に動けば殴殺されるのが明白である以上、俺はおとなしくアーチャーの背後に控えておくしかない。後はただ、己がサーヴァントを信じるだけだ。

――疾走。

ただ突き進むだけだった今までとは異なり、バーサーカーはまるで様子を伺うように、百メートルほどの距離をおいてぐるぐると周囲を回り続ける。

何故か手出しをして来ぬ異様さに、ギルガメツシュが射撃の手を止める。狂える巨人はここに来て突然、俺たちではなく何か別のものに意識を向けているようだった。見えているのかも判らぬ目をしきりに動かし、低い唸り声を響かせるサーヴァントは。

「——あいつ、イリヤを探してるのか」

それに気づいて、息を呑んだ。

知性も理性も奪われ、この世全ての悪に汚染され、大英雄としての肉体も魂も変わり果ててしまっているのに——ああなつてまで、誇り高き英霊は仕えた少女を探しているのだ。

醜い怪物と成り果てても。目も耳も、正気さえ狂ってしまったとしても。それでもあの男は、大切なものを守り続けている。黄金の英霊が容易に打倒できぬと判つたから、敵を倒すのではなく、少女を保護しようとしているのか。

その姿に、胸を打たれてしまう。あんな偉大な人物は、二人といたに違いない——その畏敬の念と同時。あんな高潔な武人を、あそこまで貶める悪意に、途轍もないほどの怒りが湧いた。

「ギルガメツシュ」

「ぶん——聖杯の泥を以てしても、ヤツの誇りとやらは染めきれなかったと見える。大英雄を名乗るだけはある信念よ。

せめてもの慈悲だ。奴隷と化したその末路、我が手ずから幕を引いてやろう」

俺が気づいたようなことを、この男が把握できぬはずがない。不愉快そうに鼻を鳴らしたギルガメツシユは、再び指を鳴らし——主を探す狂戦士に、幾重もの宝剣が降り注いだ。

「■■■■■■■■■■——!?!」

獸そのものの反応速度で、音速を超える弾丸に対応する巨人だったが——遅い。ほんの僅かでも意識を外していた事自体が、このサーヴァントの前では致命的な愚かさ。

大剣が数本の宝具を弾き飛ばすが、そこまで。ただでさえ巨大化して被弾面積の大きくなった肉体は、殺到する死の刃を躲し切れず、瞬く間に粉碎された。

——これで七つ。

だが、ヘラクレスの有する宝具が消滅を阻む。肉片と化した体は瞬く間に修復され、空間ごと叩き割る勢いで振るわれる斧剣が、残りの掃射を防ぎきった。

半分以上の命を使い切った狂戦士は、優先順位を切り替えたのか、低い唸り声を上げて黄金の騎士を睨み据える。魔弾の射手を前にしては、少女を探すことなど到底能わぬ……どうあつてもこの障害を倒さねばならぬと、本能で理解したのだろう。



理性も知性も何もかも失った今の巨人にとって、守るべき少女以外は全てが排除するべき敵。狂える英雄は、七度もその命を奪われていながら、なお八度目の試練に挑みかかる。

しかし。幾度突き進もうと、魔弾の雨は突破できない。なまじ体が大きくなったことで、自分から宝具の的を増やしているような有様のせいだ。黒い巨体は、またも体を穿たれようとした矢先——地面を叩きつけ、大量の土砂を捲り上げた！

「な——に？」

本能なのか、知性の欠片が残っていたのか。岩盤ごと掘り返すのではないかという一撃はアーチャーの虚を突き、即席の煙幕となつて巨人を覆い隠してしまう。そればかりか、下手をしなくてもトン単位の土砂が、宝具を阻む即席の壁となる。

あれほどの巨体が、物理的に見えなくなった。舌打ちしたギルガメッシュは、奇襲を警戒してか、前方に集中させていた砲門を全周囲に再展開し——

「——上だつ！」

後ろにいた俺だから、一瞬先に気がついた。狂戦士は正面から突き進むのではなく、跳躍して上から迫っていたのだ！

「まず——」

い、と続けようとした刹那。ギルガメッシュの手に、武器が握られていることに気が

ついた。

手にしたそれは大弓。しかし、黄金の双剣を連結させた、あの見慣れた弓ではない。握の部分に、捻じれた刃のような——和弓というより、アーチェリーで用いる安定化装置スタビライザーに近いか。そんな異物が備わった、身の丈ほどもある奇妙な武器。

だが、そこに宿る神秘は尋常なものではなかった。並の人間など触れただけで焼き尽くされそうなほどの神威を、英雄王は軽々と従える。隕石のごとく来襲する狂戦士に、青い炎を纏った弦が絞られ——

「——墜ちよ」

獄炎の一撃が、倒さかしまの彗星となつて空を駆けた。

榴弾砲、否、弾道弾Bもかくやという神罰の矢は、触れただけで巨人の体を焼き尽くした。防御など端から無意味、あれほどの一矢を以てすれば、この世に撃ち落とせぬものなどあるまい。

天を貫く炎の矢は、尾を引いて遥か彼方へ消えていく。成層圏まで届くのではという爆炎は、瞬時にバーサーカーを炭化させただけでなく、この公園中を焼き尽くし……つて、まずい！

「お、おいアーチャー!!? このままじゃ大火事になるぞ!」

意図的に調整したのか、俺とギルガメッシュを中心とした半径数メートルには被害は

及んでいない。しかし炎の弓の余波は、大面積の公園を一面の火の海に変え、さながら十年前の再来のような地獄を作り出していた。

あつという間に体感温度が上がり、月明かりが煙に閉ざされていく。サーヴァントにとつては平気だろうが、このまま放つておけば周辺に燃え移る——いや、それ以前に警察や消防が殺到してしまう！

「些事に一々騒ぐでない。この一円には、元より雑種避けの魔術が敷かれている。どれほど燃えようが、魔術を知らぬ雑種どもでは異常を察知することすら叶うまい」

残心のまま、平然とそう嘯く放火魔のサーヴァント。

人避けの魔術……この空間全体にやや違和感を感じていたことから、もしかしたらと思つてはいたが、やはり貼られていたのか。ギルガメッシュの見立てからすれば、それもかなり強力なもの。人間を近づけないだけでなく、この中で起きた異常に対する認識阻害まで含まれているのか。

だとすれば、これだけ派手に炎上しようと、今のうちは騒ぎが起きる心配も誰かを巻き込む杞憂もない。後のことを考えると心苦しいが、遠坂が言うには、補償費用はインツベルンが出すというから——待てよ。

「——ちよつと待て。そんな魔術を使ったやつは……」

「ふん。大方、どこぞで高みの見物を決めているのだらうよ。」

小癩な蛆虫風情が、王の威容を覗き見ようなど不敬にも程がある。いかに我とて、虫の居所も悪くなるというもの。あの狂牛めを焼き払うついでに、蟲どもも一掃してくれたわ」

赤い弓兵には、ここまでの魔術を使う技量はない。ヤツの実力については、先の一戦である程度見えている。

だとすれば、これを貼つたのはヤツのマスターかそれに近い魔術師。今この場にいらないということは、サーヴァントに戦闘を任せて、遠くから状況を見ていたのだろう。蟲使いとなれば、十中八九それは間桐臓硯に相違ない。

今になって、先ほどアーチャーが発した言葉の意味が分かった。あの弓兵を倒し得る絶好の機会で、影の中から唐突に現れたバーサーカー。あれは偶然の産物などではなく、この場を監視していた魔術師が機を見て送り込んだものだ。

もしかすると、今までもそうだったのか。最初にあの影が現れたのは、セイバーとランサーの雌雄がまさに決しようとしていた瞬間。そこで勝負が有耶無耶になったセイバーは、最終的にあの影に飲み込まれ、敵に使役されている——間桐臓硯という老怪の手は、どこまで深く伸びているのか。

ならば、あの男のマスターもまた臓硯だというのか……？ それにしては何かがおかしい。アサシン、セイバー、バーサーカー……いくら臓硯が御三家の魔術師といえ、そ

ここにあの弓兵まで使役するなど、あまりに条理を外れている。アインツベルンの森で、あのサーヴァントは明らかに別の立場から動いていたし、やはり裏にはまだ見ぬ黒幕が――。

「どうした？ 笑つてもよいのだぞ、雑種」

「……………はい？」

思考を巡らせていると、黄金の英霊が意味の分からないことを言い出した。いや、こいつが理解不能なことを言うのはいつものことだが、この状況のどこに笑える要素があったのか。

「虫の居所、だ！ 蟲とかけたAUOジョークがなぜ分からぬ、たわけめ！ 貴様、それでも私のマスターか！」

「……………」

ごめんなさい。この空気ですんなことを言い出せる神経がわかりません。

記憶が戻ったことで上機嫌になっているのかも疑ったが、そもそもこの男はしよつちゆうう空気を読まない発言をして場をぶち壊し、遠坂やセイバーの響聲を買っていたので今更感もある。

いやそんな戯言はどうでもいい。冗談では済まない、早急に解決しなければならぬ問題が、まだ炎の海に潜んでいる。

「——」。神の弓といえど、神の試練を乗り越えた男は殺しきれぬか。二つ削るのが限度とは、つくづく硬い肉達磨よ」

響く唸り声。

原子一つに至るまで焼灼されながらも、刻まれた蘇生魔術は大英雄の死を許さない。十の命を奪われながら、なお立ち上がる狂戦士は、地獄の中で黄金の霸王を睨み据えていた。

——『アグニ・カレンディイヴァ炎神の咆哮』。

ギルガメツシュが用いた弓は、生半なものではない。

解析を終えた今なら分かる。あれは炎の神が有し、インド神話の大英雄に授けたときとさえ能わぬ一挺。その原典たる原初宝具は、ヘラクレスの巨体を微塵に破砕した。

しかし、今この公園を埋め尽くしている炎は、あの肉体に届いている気配はない。もしやあの英霊は、一度受けた攻撃に対する耐性を有するのだろうか。怒声を上げる狂戦士は、炎の海を猛進し、無作為に軌道を変えながら迫ってくる……！

「では、そろそろ引導を渡してやろう。これ以上暑苦しくなつては面倒だ」

号令一下、無数の矢が放たれる。

灼熱など物ともしない宝具群が、大英雄の巨体に殺到する。だが、尋常ならざる速力



という意を持つ神話の盾は、太陽や神にさえ立ちほだかるという逸話通り、炎の岩を苦もなく弾き飛ばした。

バーサーカーは、走り回るついでに投擲を繰り返しているのか、地盤を吹き飛ばした岩や元は電柱であったと思われるものが次から次に飛んでくる。盾の宝具はその尽くを容易く防ぎ、本家の面目躍如とばかりに迸る刀剣宝具が余波を消し飛ばして狂戦士を襲撃するが、その命を削り切るには至らない。

予期せぬ膠着状態に、ギルガメツシユの瞳が鋭く細まる。掲げられたままの腕が僅かに動いたのは、更に宝具の投射数を増やそうかと逡巡したのか。英雄王が有する宝具はそれこそ底なし、その気になれば数千を超える数さえ掃射できようが……黄金の波紋から現れたのはただ一つ、シンブルな形状の大槍だった。

「燃える大地が仇となったか。ならば、場を海に変えるところしよう」

穂に紫の線が刻まれた笹穂槍。柄の部分に巻き付いた紋様は、どこかあのランサーが用いた魔槍に酷似している。

それもそのはず、あの槍はケルト神話に縁を持つ宝具。邪悪な妖精へ堕ちた神霊を討ち果たしたとされる、伝説の業物に違いあるまい。

クー・フリーンの後輩筋に当たる、アイルランドの大英雄——フィン・マックールが有する宝具、『無敗の紫鞍草』。これがその原典なのだ、持ち得ないはずの知識だとい



うのに、解析した槍が教えてくれる。いや、もしかするとこれは、所有者である英雄王の知識なのか。

この空間に現れるや否や、自動攻撃機能を有する槍は、独りでに動いて炎の岩を叩き落としている。それに加えて、先ほどまで狂戦士が吼えるたびに感じていた恐怖……それさえもが軽減されているのが分かる。あの宝具は、精神干渉を防ぐ効能を有しているのだろう。

「ひれ伏すがいい、不敬！」

長柄を掴み取ったギルガメッシュが、無造作に大槍を振るう。

須臾の後、どこからともなく膨大な水が呼び出され——何メートルという大津波となつて、炎も大地も諸共に押し流していく！

「■■■■■■■■■■……!?!」

巨人の体躯すら容易に飲み込む、天災に等しい大波。陸に現れた大海嘯に、獣ごときがどうして逃れられようか。指向性を持つて放たれた水流は、神気ともいべき独特の気配を宿し、波濤となつて公園中を覆い尽くしていく。

埒外の俊敏さで鉄砲水から逃れようとしたバーサーカーだったが、水流の攻撃範囲は俺たちを除くこの公園全ての大地。軍勢さえ薙ぎ払う災害は、炎を飲み込み地を泥濘に変え、狂戦士を溺れるように倒れ込ませた。

泳ぎ方さえ亡失したのか、その体勢の崩れは致命的だ。手首の返しで振るわれた二度目の大槍は、次いで超高压の水流を呼び出し、ウォーターカッターのような切れ味で容易く大英雄を両断した。戦神スアザの一撃は、ヘラクレスの護りなど歯牙にもかけていない。

「これで十一。いよいよ後がなくなつたな、ヘラクレス！」

上半身と下半身が泣き別れとなつた狂える戦士に、英雄王が哄笑する。既に次の宝具群が、海に倒れたままの敵を囲むように展開され、バーサーカーは蘇生すると同時に最後の命を失うことだろう。

されど、他に術のない巨人は立ち上がる。当然のように、無数の剣が降り注ぐが——十一の死を経て学んだのか、それとも蠟燭の最後の輝きか。幾つかの宝具が突き刺さるも、致命傷となる尽くを弾き返した巨影は、大上段から大海に一閃。莫大な量の水が、煙幕となつて展開される……！

「二度も同じ手を——」

海を叩き割つた一撃は、そのまま凄まじい衝撃波となつてギルガメッシュに迫るが、鼻で笑つた男は三度槍の水流を放つて相殺する。同時、空間を埋め尽くすほどの黄金の波紋から、同数の宝具が放たれるが——滝の紗幕が払われた時。刃に貫かれているべき狂戦士が、忽然と姿を消していた。

あのような巨軀を見失うはずがない。どこに逃れたかと視線を彷徨わせるが……数

秒と経たぬうち、地響きを伴って大地が揺れ出した。

「地震……？　違う、まさか——！」

はっと気づき、ギルガメッシュに目を向ける。その瞬間、濡れた大地を突き破り、黒い弾丸が放たれた——！

「下郎——！」

信じられない。

理性も知性も奪われて、尚も残る直感が道を切り開いたのか。バーサーカーが大海原に叩き込んだ一斬は、煙幕としての宝具掃射の妨害、ギルガメッシュへの牽制攻撃のみならず……その下の大地さえ掘り返し、地中に深い穴を空けていたのだ。

重機が束になろうと叶わない、超常の膂力が成し遂げたのか。狂戦士はそのまま大地を掘り進み、何らかの力によって守られた、唯一水の届かぬ聖域——つまり、俺とギルガメッシュを中心とした半径数メートルまで地中伝いに侵攻してきたに違いない。

このあたりは、元は市民会館の跡地だという。少し掘り返せば、当時の土台が残っているはず。防水性を持つコンクリートであれば水など容易に弾ききり、その硬さ故、泥濘と化した地表より遙かに砕きやすかったことだろう。

ヤツが空けた大穴は瞬時に水で塞がるため、煙幕による瞬間的な目眩かもしれませんがあれば十分。経路を見抜くのが遅れた俺たちは、かけていたはずの王手を突き返されている……





「思い知ったか。これが真作の重みというものだ、先の贗作とは質が違う。

——しかし、リハビリと思つて些か遊びすぎたか。よもや肝を冷やされるとはな……さすがはヘラクレス。腐つても大英雄ということか」

ギチギチと、空間が軋む音が響く。天の鎖の拘束力と、束縛に抗う巨人の怪力が拮抗しているのか。

空中に捕らえられた狂戦士は、さながら磔刑を課された罪人のようだった。断頭の刃が落ちるまで、逃げ出すことなど叶うまい。

もつとも、並の剣ではその肉体は断ち切れないが——ここに立つのは、全ての伝説を束ねる最古の王。巨人を貫く刃など、那由多の如く保有している。抵抗さえ叶わぬ狂戦士の命は、既に風前の灯であり。

「さらばだ、ヘラクレス。我に挑むのなら、万全の備えで来るがいい」

——そうして、英雄王は終わりを告げた。

不死を殺す鎌、ハルベ魔性を穿つ刃、ブラフマリストラ怪魔を討つ剣、干将防護を貫く槍。

それに留まらず、英雄を暗殺した逸話を持つ短剣、男を呪い殺すとされる魔道具、魔術の守りを奪い取る呪具——極めつけは、ヘラクレスの直接の死因となつた英雄殺しの毒。

バーサーカーの特性、弱点に効力を持つありとあらゆる宝具が、過剰なまでの暴力を

その肉体に叩きつける。たとえ十二ゴッド・ハンドの試練が全て残っていようと、そんなものは全くの無意味。誇り高き英霊の成れの果ては、ここにその役目を終えた。

「——」  
これこそが、英雄王。

リハビリと口にしていたとおり、最後の一撃以外は手を抜いていたのか。無差別に放たれる何十という宝具は、その一挺でさえ壊滅的な破壊力だというのに——この英霊にとつて、そんなものは兎戯にも過ぎない。

この男は、ありとあらゆる時代・国家・民族、古今東西全ての神話・伝承・物語の宝具……無限に等しい攻撃手段を持っている。今バーサーカーに繰り出したように、どのような状況であれ、どのような盤面であれ、この男は対応できてしまう。

いかなる相手であれ対抗でき、あらゆる敵対者の弱点を突くことができる英霊。ヘラクレスがどれだけ破格の英雄であれ、英雄である以上、この男にはどう足掻いても勝ち目がない——故に、英雄王。世に数多の王はあれど、あらゆる英雄たちの王の名を冠するのは、この男を置いて他にはあるまい。

確信する——俺と契約したこのサーヴァントは、全英霊中最強だ。

「——悪夢から覚めたか、大英雄」

誇るでもなく、笑うでもなく。

いつそ静かなまでの雰囲気、鎖に縛られ、全身が串刺しとなった狂戦士を見上げるギルガメッシュ。

宝具の効果の一つなのか、それとも命を使い切り、サーヴァントとしての枷から離れたからか。禍々しく歪んでいたバーサーカーの体躯が、元あるそれへと戻っていく。体の末端部から、粒子となって消えかけているが——それよりも早く、狂気の靄が晴れていく。

「……………これ、は……………そうか。私は、囚われていたのだな……………」

消滅の寸前で、理性の光を取り戻したヘラクレス。狂化している時の記憶が残っていたのか、状況から察したのか。自身を見るサーヴァントに気づいた大英雄は、ふつと苦笑のようなものを浮かべた。

「感謝する、英雄王。つまらぬ手間をかけさせたな」

「ふん——まったくだ。戦うだけの狂牛が相手など、面白みの欠片もない。そんなものは、あの天の牝牛グガラナナで飽いている。

我を愉しませようというなら、姿を変えてくるのだな。知性のない獣では話にならぬ」

そうして短く会話するうちにも、バーサーカーの体は薄れていく。既に半分以上が消えかかりながらも、ヘラクレスは辛うじて首から上を動かし、何かを探すように視線を



彷徨わせた。

「あの子は……我が主は、どうなっている……?」

「イリヤなら、俺の家で保護してる。今は遠坂が……いや、仲間がついててくれるから大丈夫だ」

「そう、か……」

このような有様になってもなお、イリヤの身を案じ続けるヘラクレス。黙っていられずに口を挟むと、心優しき巨人は初めて俺の方を向いた。

深い知性を伺わせる瞳に浮かんでいるのは、安堵感。本来は敵対するマスターである俺の言葉を、この英霊は信用しきっている。神話に語られる英雄の眼差しは、どこまでも真摯で重かった。

「礼を言う、少年。私が言えた立場ではないが、どうか——」

——あの子を守ってやってほしい。

それだけを、最後に言い残して。偉大なる英雄は、霞のように消えていった。

「……………」

ヘラクレスが消滅するのと同時、突き刺さっていた宝具や縛り付けていた鎖も、黄金の粒子となって見えなくなる。おそらくは、ギルガメッシュが回収したのだろう。

ここに恐るべき、そして尊敬すべき男がいたのだという痕跡は、焦土と化した泥の大

地しか残されていない。元より稀人である英霊は、血の一滴さえ残さずに現世から立ち消えてしまう。だが、それでも——大英雄から託されたものは、確かにこの胸に残っていた。

誓いの代わりに、敬意を込めて頭を下げる。あれほどボロボロになってまで、幾度殺されようと、ただ一人の少女を守るために戦い抜いた英雄。それはまさしく、正義の味方というべき在り方だった。

「——さて。我はあの人形めなぞどうでも良いが……ヘラクレスの頼みを聞き届けようというなら、急いだ方が良いぞ」

赤い弓兵と、ヘラクレスとの二連戦。短期間で激闘を繰り返したにも関わらず、ギルガメツシユは何ら消耗した様子を見せない。サーヴァントのタフさ加減に改めて驚かされ……その言葉に宿る不穏さに、眉根に皺が寄る。

「どういう意味だ？ まさか、イリヤが——」

「あの贗作者<sup>フエイカー</sup>めは、事が済んだと口にしていた。ともすれば、手遅れになっているやもしれぬな——敵戦力の分散は戦術の初歩であろう？」

愕然とする。

考えてみれば、最初からおかしかった。敵のアーチャーは、明らかに俺たちをここに誘導していたし、事実公園には結界が張られていた。それが、単に戦いやすい場所を作

るためだけであるはずがない。

他に選択肢がなかったとはいえ、俺とギルガメツシユは釣り出されたのだ。こんなに遠くまで誘い出される時点で、違和感は抱いていた。家を出る直前に、遠坂は備えをするようなことを言っていたが——あの男が間桐臓硯と協力関係にあることはもはや明らかだ。そして向こうには奪われたセイバーがいる以上、魔術師では束になつても勝ち目がない……！

「まずい！　でも、ここから走っていったんじゃ時間が……！」

「慌てるな、たわけめ。焦りに囚われては見えるものも見えなくなる。」

屋敷には敵の手勢が迫っているだろうが、あの女たちの命に別状はあるまい。聖杯の器を壊してしまえば、この儀式は成り立たぬからな。利用価値がある間は生かしておくだろうさ」

青くなつた俺を制し、落ち着いたままのアーチャーが淡々と言葉を続ける。その泰然とした様子に、パニック状態だった思考も少し冷えてきた。

相手は聖杯戦争のマスターだ。臓硯、もしくははその協力者だというなら、聖杯の器に関する知識は当然あるはず。万一イリヤと桜に手が伸びていたとしても、拿捕がよいところで殺してしまうことはありえない。しかし、うちには遠坂も——。

「その点で言えば、敵からすれば遠坂の娘を殺しておいた方が面倒がなからうが——小

僧。あの娘が、そうそう死ぬような雑種だと思うか？」

「……思わない。遠坂は、最後には必ず勝つタイプだ。相手が臆砵だろうとセイバーだろうと、殺されてやるようなヤツじゃない」

「そういうことだ。とはいえ、ここでまんじりとしている訳にもいくまい」

唇を吊り上げたアーチャーが、パチンと指を鳴らす。何が出てくるのかと身構えるが、黄金の波紋から零れ落ちたのは力の具現たる宝具ではなく、むしろ神秘とは対局に位置するものだった。

——シユーティングスターXL2003 1200Cカスタムモデル。

バイク雑誌で見たことがある。『流星』の名を持つ、超有名自動二輪企業の限定モデルだ。

1200CCを超える排気量に、メッキで覆われた各種の専用パーツ。大容量の燃料タンクと相まって、クイックでスポーティな動きを長時間に亘って続けることが可能だと言われている。

そして、素人とはいえ、機械いじりをよくやる俺が見た限り……これはメーカーがカスタムした仕様に、更に独自のチューンナップを施している。確かこれは、二十数台しか生産されていない超限定仕様で——本体価格だけでも、数百万は下らないマシンのはず。そんな、クラスの男子が将来乗りたいと騒いでいた超高級バイクが、なんでこんな

ところから出てくるのか……？

「……まさか、これも宝具だって言うんじゃないだろうな」

「たわけ。我が蔵には、移動宝具など掃いて捨てるほどに溢れているが——これは我が現世で見繕い、手を加えた逸品よ」

ますます混乱してくる。え、この時代で買ったって……いったいいつの話だ？ 俺に召喚されてからは、そんな素振りなど欠片も——。

「話は後だ。転移宝具では厄介な事態を招きかねん、屋敷に戻るならこれが手早かろう。特に許す、疾く後ろに乗るがいい」

頭の上に特大の疑問符を浮かべていると、ギルガメッシュは手慣れた様子でバイクに跨り、キーを回すとエンジンを始動させていた。明るくなりかけてきた空に、ぶおん、と唸るようなエンジン音が響く。

いつの間にか鎧を収納していたようで、普段着にしているライダースーツは、ようやくその本来の目的を果たそうとしていた。訊ねたいことが山ほど出てきてしまったが、今は一刻が惜しい。アーチャーに促されるまま、おそろおそろ後部座席に腰掛ける——ノーヘルということに気づいたが、もう四の五の言つてはいられない。

「これに乗るのも久方ぶりよな——では行くぞ。振り落とされるなよ、雑種！」

アクセルを吹かした瞬間、闇を裂くようにバイクが咆哮する。夜明けの太陽を背にし

ながら、俺たちは皆の救出に走り出した。

\*\*\*

——時間は、少し遡る。

「切り札の宝石は残り半分……アゾット剣の準備もよし。できればうちから予備の礼装も取ってきたかったけど、そんな余裕はない、か」

謎のサーヴァントを追い、走り去っていった衛宮士郎とアーチャー。残された遠坂凜は、今後の事態に備えて数々の装備の点検を行っていた。

既に彼女はマスターではない。舞台を追いやられた魔術師は、聖堂教会に保護を求めるか、あるいは拠点なり市外なりに撤退するのが筋である。

だが、それほど諦めが良いのであれば、端から聖杯戦争などに参加してはいない。姑息極まる外法で己がサーヴァントたる騎士王を奪われ、実の妹は聖杯の器として陵辱され、あまつさえ遠坂家が追い求めた聖杯はとうに狂っているときた。マスターとしても、姉としても、遠坂の魔術師としても、ここまで虚仮にされておめおめと引き下がる道理がない。

聖杯などもはや不要。セイバーを失い、尚も演者としてしがみつ়く理由はただ一つ――

—遠坂凜の誇りが、そのような敗北を許容できないからだ。

『だが、それならばセイバーと貴様は相容れぬな。あの小娘は貴様と異なり、聖杯に託す悲願を持っている。聖杯を求めぬマスターと、聖杯を求めるサーヴァント。どこかで胸襟を開かねば、いずれ歪みが生じるだろうよ』

ふと、黄金の弓兵の言葉を思い出す。

騎士王は、聖杯を勝ち取るための願いを持つて召喚に応じたという。あのアーチャーはそれを見抜いたのか訊いたのか、どうにも知悉しているような口ぶりであったが……凜はついで、その望みを確かめることが叶わなかった。

そんなことさえ見落としていたから、おめおめと彼女を奪われることになったのか——そんな、微かな後悔が胸に刺さる。

思えば、いつでもそうだった。なんでもできると、それが当然なのだと思いながら、肝心なことには手が届かない。父を失い、妹を汚され、衛宮士郎を殺されかけ、今度は自分のサーヴァント。いつだって、気づいた時にはとつくに手遅れになっていた。

「……上等。これ以上、奪われてたまるもんですか」

ぐ、と拳を握り込む。

今回は違う。絶望的に不利な状況だが、まだ全てが失われたわけではない。

残る敵を打ち倒せば、汚染された聖杯の状況も分かる。イリヤスフィールの助力があ

れば、桜の状況を改善する方策も見つかるだろう。

それに、間桐臓硯に使役されているセイバー……自由があるのかは定かではないが、彼女に自意識があることは、あの森の戦いで判明している。となれば、騎士王にはその状況を是とするだけのものがあるはずだ。結局聞き損ねていた、彼女が抱く本当の願い——それが、ああなつてまで戦い続ける理由なのだろうか。

刻限に余裕はない。イリヤスフィールが対処療法を試みているとはいえ、桜が聖杯の悪意に汚染されきつてしまえば崩壊が始まる。『この世<sup>アン</sup>全ての悪<sup>リ</sup>』<sup>マ</sup>がどんな惨事を引き起こすか、はたまた臓硯の悪意が成就するか……どう転ぼうと、ろくなことにならないのだけは確かだった。

おそらくはあと一日。全ての決着はそこで成るだろう。取り零したものを取り返し、何もかもに片を付ける。そのために凜は、十年間蓄え続けてきた全てのリソースを注ぎ込む気でいた。

——ピンポーン。

「つ……!?!」

場違いに響いた電子音に、凜が鋭く反応する。すわ敵襲かと宝石を握り込み……一拍置いて、それが来客を知らせるチャイムだと思い至り、ほっと肩の力を抜いて——

「——ちよつと待った。今何時だと思ってるのよ」



朝というにはまだ早すぎる。新聞配達物のバイトですらまだ外を歩いてはいない時間だし、そうだとすればチャイムなど鳴らすまい。

警戒心を跳ね上げながら、玄関の方に向かっていく。すると途中で、怪訝そうな顔をしたイリヤスフィールが顔を出した。

「リン、さっきの音はなに？」

「誰だか知らないけど、お客さんが来てるみたいね。イリヤスフィール、桜の様子はどうか？」

「えっ？ えっと、応急処置は終わったかな。わたしの方にサーヴァントの魂を一つ移したから、これで一日くらいは保つと思うけど……」

「ありがとう。それじゃ、念のために戦う準備をしておいて。玄関には私が出るけど、万が一の時は手伝ってもらうことになるかもしれない」

目を白黒させている少女にそう告げ、手の内に宝石を携えた凜が通り過ぎる。

まだ桜にかかりきりのようなら、最悪彼女独りでどうか対処する必要があるが、一段落ついているなら戦闘なり逃走なりの支援が期待できる。サーヴァントも家の主もないこの状況で訪れた来客を、凜は高確率で敵対勢力であると見なし、既に対処すべく思考を巡らせていた。

一方のイリヤスフィールも、状況が飲み込めたのか、真剣に頷くと扉の内側に顔を

引つ込める。玄関の内側には、インテリアに偽装した彼女の使い魔が配備されており、そこから伝わる情報によって援護する腹を固めたのだ。

「つたく、こんな時間にわざわざチャイム鳴らすなんて、律儀なんだか嫌がらせなんだか……」

愚痴を零しながら、それでも警戒は緩めず、靴を履いて戸口に近寄る凜。少し隙間を開けて外の様子を伺うと、門の外には確かに人の影がある。

サーヴァントの気配はないが、ちょうど門の影になる位置に立っているせいで来客の素性が分からない。何らかの事情で訪ねてきた近所の人であればいいがと希望的観測を抱きながら、先制攻撃を警戒しつつ近づいていくと……。

「こんな時間に申し訳ない。私は——む？ なぜおまえが出てくるのだ、凜」

「それはこっちのセリフよ。なんだってあんたがこんなとこに出てくるのよ、綺礼」

門の外に佇んでいたのは、僧衣服に身を包んだ長身の人物。胸元に十字架を下げた、独特な存在感を放つその男は、聖杯戦争の監督役にして遠坂凜の後見人——言峰綺礼に相違なかった。

「監督役である私が、ここまで来る理由など一つしかあるまい。この家の住人は、電話に出る気がなかったようだからな」

「電話……？ そんなの、来た覚えはないけど」

言峰の意図が読めず、怪訝な顔をする凜。その様子を見た神父の目が鋭く細まる。

「なに? ということは、もしや——凜。衛宮士郎は、ここにはいないのだな?」

問いというより、それは断定だった。

このタイミングで、監督役からの電話が届かない。機械には明るくない凜だが、物理的手段によつても魔術的手段によつても、通信妨害は戦術の常だという覚えはある。つい先ほど謎のサーヴァントが現れたことといい、この家は既に攻撃対象とされている。

言峰が急遽足を運んだのは、そうまでして聖杯戦争の参加者に伝達せねばならない事項があったからに違いあるまい。士郎の存在を改めて確認するということは、それ以外に考えられない。今回の聖杯戦争がどれほど異常な背景の上に成り立っているか、その一端をイリヤスフィールから聞き及んだ今となつては、監督役が慌て出すことも納得がいく。遅まきながら、言峰も何かに勘付いたのか——聖堂教会の伝手があれば、自分たちの知らぬ情報を得ていても不思議はない。

そう判断した凜は、気は進まぬものの、この異常極まる事態に兄弟子の手を借りる選択を考慮しだした。魔術協会と聖堂教会の政治的関係もあり、自分たちの側から助力を乞うことはできないが、相手側がこうして慌て始めたなら付け入る隙もある。監督役が訪れているなら、まだ見ぬ敵も、この家に妨害以上の攻撃を仕掛けることを躊躇するだろう。

「……ええ。今頃は、他のサーヴァントと戦つてるでしょうね」

遠坂凜が有する情報を鑑みれば、彼女の思考は間違つてはいない。しかし——戦場では情報の欠落など当たり前であり、不足した情報から導かれる判断がしばしば致命的な事態を招くのだという実戦経験が、年若い魔術師には足りていなかった。

「やはりか。事は一刻を争う、この門を早く開け。これ以上、ここで詮議している余裕はない。」

監督役がマスターに肩入れするなどあつてはならぬ事だが……おまえたちも既に知つているだろう。此度の歪んだ聖杯は、看過できる状態ではない。

衛宮がいないのであれば、御三家のおまえでも構わん。早急に、話し合いの場を持ちたいのだが」

言峰に領き、門を解錠する凜。見えぬ敵を警戒しているのか、周囲の様子を伺うと、開かれた門から踏み入ろうとした神父だったが……足が敷居を踏み越える刹那、思い出したように直前で止まる。

「もう一つ確認だ。間桐桜とイリヤスフィールは健在かね？」

「なんとかね。二人とも、今は奥で休んでもらつて——」

神父に背を向け、先導して玄関に向かつていた凜にぞくりと鳥肌が立つ。桜のことはわかる。だが何故、この男がイリヤスフィールのことを知つている……？

疑問を感じた凜が、向き直ろうとした矢先だった。カランコロン、と鳴子のような音が響く。それは確か、悪意を持った人間に対する、この屋敷が有する結界で――。

「シツ――！」

迅雷のような冲捶。絶技の域に達した闊歩を以て繰り出される一閃は、咄嗟に飛び退った少女の胸元に突き刺さり、その体軀を遙か先まで吹き飛ばした。

反射的な防御で軌道がそれ、玄関ではなく中庭へと、何度も地をバウンドしながら転がっていく凜。コンクリートさえ容易に砕く破城槌の一撃なぞ、人が受ければ五臓六腑を砕かれよう。

不意打ちで必殺の一撃を叩き込んだ言峰は、地に伏せる妹弟子に向け悠然と歩く。あれを受けて息があるとは思えぬが、念を入れるに越したことはない――そうして近づいた刹那、神父の背を急襲する影があった。

「む――？」

即座に放った裏拳が、その影に炸裂する。しかしその瞬間、影が姿を変えたかと思うと、言峰の拳を絡め取って縛り上げる。それが銀で構成された鳥であり、幾重にも分裂した鋼の糸に変じたのだと気づいた時には、神父の拳は庭の太木に括り付けられてい

た。

この攻撃は初見のものではない。十年前の戦いで、言峰綺礼はこれと同じものを味わっている。貴金属の形質操作は、アインツベルンの誇る錬金術の秘奥。かつてこれを披露したのは、第四次聖杯戦争における聖杯の器——アイリスフィール・フォン・アインツベルンであり、それに連なる人物となればただ一人しか存在しまい。

「——おまえが、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンか」

「無礼な男ね。レディに名前を尋ねる前に、自分から名乗るぐらいしたらどうなのかしら」

縁側に現れていた少女の姿を認め、言峰は唇の端を釣り上げる。直接会うのは初めてだが、アインツベルンのホムンクルスの特徴を色濃く宿す相手を見間違えるはずがない。目的が向こうの方から出向いてくれたのだから、手間が省けたというものだ。

しかし、十年前の個体よりは幾分か手応えがある——内心で独り呟く言峰は、縛られた両手に凄まじい力を籠めていた。かつて敵対したマスターである衛宮切嗣と邂逅する機会を阻み、彼の同盟者として相對したアイリスフィールはこの脅力に抗うだけで一杯だった。眼前の少女は何ら堪えた様子がない。

「おまえに礼儀を尽くす義理などない。まったく——十年前といい、アインツベルンの人形はどうも私の癪に障る」

「お母様を知ってるの……?」

言葉を聞き逃さなかったイリヤスフィールが、思わず瞠目する。

彼女の母親——アイリスフィールは、十年前の聖杯戦争で命を落としたと聞く。母親によく懐いていた彼女は、知己であることを示唆する神父の台詞を捨て置くことができなかった。

「——ほう」

一方、その誰何で言峰も察した。てつきりこの娘は、アインツベルンが新たに铸造したホームンクルスだと思つたが……今の発言からするに、どうもそうではないらしい。

母親がかつて敵対したあの女ということとは、父親も想像がつく。よもやかつての怨敵、衛宮切嗣に娘がいようとは——思わぬ僥倖に、言峰の表情が愉悦に歪む。此度の聖杯の器はこの娘とは、つくづく因果なものだ。

己が目的のため、有無を言わさず拉致するつもりであつたが、話が少々変わってきた。さてどうするかと言峰が考えていると、その視界の片隅で、命を失つたはずの凜の体がゆらりと起き上がった。

「まだ息があつたか。やはり時臣師のようにはいかぬな——出来の良い弟子を持って、私は嬉しい限りだ」

「げほっ、っ、う——」

咳き込みながら起き上がった凜が、射抜くような鋭さで裏切り者を睨み据える。念の為に仕込んでおいた布石が、彼女の命脈を保っていたのだ。

門に出る際、彼女が最も警戒していたのは敵魔術師の奇襲だった。殊に、五百年を生きる間桐臓硯が現れた場合など、どんな手を使ってくるか分かったものではない。どのような一撃であれ凌げるよう、彼女は躊躇なく切り札の宝石で防御障壁を築いており、それが驚異的な打撃をほとんど防ぎきっていた。

しかし、言峰綺礼が積み上げた套路はその守りを僅かに超えていた。結果、凜は重要臓器は守り抜いたものの、衝撃を殺しきれずに吹き飛ばされて数秒ほど気を失っていたのだ。

「綺、礼……！ アンタ、一体なんのつもり？ 父さんのようにって、どういう意味かしら」

意識を鮮明にするためか、頭を左右に振ると、忍ばせていた短剣と宝石を構える少女。既にこの男が味方ではないのは明白だ。かといって、監督役が武力を振るうその意味を詳らかにせぬ内に戦端を開くのは悪手である。言峰の口を、どうにか割らせる必要があった。

「なに。時臣師の際は、今ので片が付いていたのでな。親子揃って、私がマスターであることには思いも至らなかつたようだが、おまえの方が幾分か周到なようだ」



「な——」

あまりにも淡々と告げられたものだから、凜の理解が一瞬遅れてしまう。

監督役であるこの男がマスター……消去法で行けば、先ほど現れた謎のサーヴァントの主が言峰綺礼ということになる。それはまだいい。驚愕すべき真相だが、まだ理解はできる。

だが、前半の言葉は見過ごせない。自分の父は、聖杯戦争で命を落としたという。その仔細は、ついで今まで知り得ることができなかったが……まさか正々堂々とした戦いではなく、この男の卑劣な裏切りで——！

「綺礼いいいい——!!!」

激発した凜が、縛られた言峰に宝石を叩きつける。その動きを見切っていた神父は、滴るような笑みを浮かべていた。

十年の時を経たとはいえ、一度受けた攻撃を二度甘受する代行者ではない。覚えがある魔術だと判断した瞬間、言峰は手の中に柄だけの剣を忍び込ませていたのだ。

黒鍵という名の礼装に魔力が走り、腕を戒める糸を刃が断ち切る。魔力で構成された刀身は、単純な物理攻撃力こそ低いものの霊体干涉に特化しているが故、仮初の命が変異した金属を容易に破砕した。

その勢いのまま、十字架めいた剣を振り下ろす言峰。凜が放った宝石は、風のご概念を

宿した幾つもの真空刃となって押し寄せたが、男はその軌道を刃で逸らす形で防ぎきつてしまう。

「……………ん？」

脇腹に走る鈍い痛み。何事かと視線を落とすと、左の腹が浅く切り裂かれ、そこから血が滴り落ちていた。全て防いだと思っていた言峰だったが、どうやら一手弾き損ねていたらしい。

ケブラー繊維に特殊な加工を施した防弾・防刃装衣は、現代戦で幅広く用いられる9x19mmパラベラム弾や軍用ナイフを防ぎ切る性能を持つ。しかし凜の魔術は、その防御能力を容易く凌駕していた。

「なるほど——些かばかり、私も腕が鈍ったと見える。良い鏑落としとさせてもらおうか」

苦笑した言峰が、得意とする治癒魔術を発動。元より軽傷だった脇腹は、あつという間に治療されてしまった。

「つ、う……………！ よく分からないけど、こいつ、敵つてこといいんだよね」

破壊された使い魔の反動を受けたのか、表情を歪めたイリヤスフィールが、それでも言峰に敵意を叩きつける。彼女の横には、既に二体目の白銀の鳥が待機状態で羽ばたいている。

必殺の宝石を防ぎ切られた凜は、やや冷静さを取り戻しながら、次の宝石を左手に番えて頷く。両者と言峰は、ちょうどそれぞれが三角形の頂点に位置するような形で対峙していた。

「——まったく、因果なものだ。私が殺めた者の娘たちが、揃って立ち塞がるとはな。計画に乱れは付き物だが、このような形になるとは私も予想できなかった。聖杯の器さえ手に入れば、後の用などなかったのだが」

電話や話し合いなど、元より凜を油断させるための虚言である。言峰がここに現れた理由は、己がサーヴァントが英雄王を誘引している隙に、一挙に聖杯の器を掠め取るためだった。

大聖杯が眠る円蔵山には、手を組んだ間桐臓硯が策を敷いている。後はイリヤスフィールと間桐桜を抑えれば、門を開くための準備が整う。言峰と臓硯の目的は、そこまでは一致していた。

電撃戦で目標を奪取し、後は円蔵山でギルガメッシュを迎え撃つだけにするつもりだったが……初手で凜を仕留めきれなかったせいで、少しばかり言峰にとっては面倒な展開になった。だがこの二人の境遇を考えれば、その負担など帳消しにして余りある喜びが得られよう。

「娘たち——!? 待って。まさかあなた、お母様を……!」

「十年前、アイリスフィールという女がいた。まったく不愉快な女だったが——あの首を捻り折った時は、少しばかり溜飲が下がったものだ」

悲鳴めいた息を漏らし、イリヤスフィールが口元を覆う。あまりのシヨックに、見開かれた赤い瞳には大粒の涙が浮かび——その様子を眺める言峰は、毒蛇を思わせる歪んだ笑みを浮かべている。幼い少女の悲哀は、彼に十年越しの甘美な愉悅をもたらしていた。

衛宮切嗣の肩を持ち、最期まであの男を信じ続けた愚かな人形。あれの存在は実に不快であり、言峰の遠い記憶を呼び覚ます汚泥にも等しかったが、この悲哀を目にするための前座だったとすれば帳尻は十分に合う。その首をへし折れば果たして母親と同じ顔をするのか、是非とも確かめてみたいところだ——それは実に、至福のひとつときとなり得るだろう。

無言で嘲笑う言峰。堪えきれずに涙を零しながら、少女から放たれるものとは思えぬ殺意が悪魔に叩きつけられる。白銀の使い魔は猛禽の形となり、母の仇を討つべく今にも飛びかかろうとする寸前。

「許さない……！ お母様の敵、ここで殺してやるわ——！」

「——同感。この裏切り者のクソ神父、楽に死ねると思わないことね！」

雪の少女に劣らぬ敵意を、闘志に変えた凜が宣言する。いや、なまじ長年に亘り兄弟

子として関わりがあつた分、彼女の激怒はより深いものだ。

その手に握られた短剣——柄に寶石の埋め込まれたアゾット剣を目にした言峰は、その絵面の滑稽さに、もはや堪えきれぬとばかりに大声で笑い始めた。

よもやこのタイミングで、十年前に仕込んだ布石が一挙に実を結ぼうとは、神ならぬ身には想像もつかなかつた。この場で秘蔵のワインを味わえないのだけは残念だったが、十年間煮込んだ愉悅の芳醇さは、長年寝かせた美酒に等しい。

「ク——はは、ふはははは……！　知らぬということは幸せなものだな！　凜よ、よもやその剣で私と戦うつもりかね？」

「当然。この剣は、弟子が卒業する時に師匠から渡されるものでしよう。アンタの腐れきつた人生、今日この世から卒業させてやるわ」

「くく……！　同じ道を歩もうとは、やはりおまえは私の妹弟子のようだ。後見人としても兄弟子としても、おまえがこうも健やかに育つとは実に喜ばしい。時師もさぞお喜びになることだろう」

「同じ道——？」

凜然とした凜が、握りしめた短剣に目を落とす。思い返せばこの剣は、遠坂の家督を継いだ折に、言峰から祝いの品として渡されたものだった。言峰はこれを、魔術の師であつた凜の父、遠坂時臣から譲り受けたものだと言つていた。

言峰綺礼は凜の後見人にして兄弟子であると同時に、格闘技術などにおける師でもある。この剣で師に挑むことが同じというのは、まさか——。

「いやなに——その剣は、おまえの父の血を吸つたものだというだけの話だ。かつて私が師の心臓を貫いた刃で、此度はおまえが私を狙う……クク、これほど愉快的展開もあるまい」

その瞬間、遠坂凜が見せた表情は、言峰の心を昂らせる彩りに満ちていた。

自らが信じていた、大切にしてきたものに裏切られた時の絶望——その感情が抜け落ちていく刹那の移り変わりを見ただけで、言峰はかつてアゾット剣を凜に託す選択に思い至つた自分に喝采を贈りたい心地だった。今この瞬間に飲める酒があつたならば、それはまさしく至上の甘露に等しかっただろう。

人の喜びこそが苦痛であり、他者の不幸こそが娯楽となる……そのような性質に生まれついてしまった破綻者にとつて、眼前の少女たちが見せる苦痛ほど、喜びをもたらしてくれるものはない。あの英雄王がここにいたならば、十年前のように愉悦の味を分かち合うことができただろうが、彼がいないからこそ自分はこの絶望という蜜を味わえる——運命という名の神はつくづく計算高いと、言峰の笑みは深まるばかり。

「これでもおまえの兄弟子だ。その剣にどれだけ魔力が籠められているかは見れば分かる。この数年、さぞや大切に魔力を注ぎ込んできたのだな——父の血に濡れた刃は、お

まえによく馴染んだことだろう」

十年前の記憶が蘇る。第四次聖杯戦争に於いて、言峰綺礼と遠坂時臣は手を結んでいった。

斥候役となるアサシンを召喚した綺礼と、最強の英霊であるアーチャーを召喚した時臣。綺礼とアサシン百貌のハサンから得た情報を元に、時臣とアーチャーギルガメッシュが力を奮い聖杯戦争を勝ち抜くという関係は、中盤まではそれなりに上手く運んでいた。これは、綺礼に聖杯を求めるときの願望が見当たらず、ただ聖堂教会に属する己の職務——聖杯を手にしたとしても教会に影響が出ない人物を勝ち上がらせるために助力するという、その責任に忠実だったからこそ成り立っていた関係だ。

しかしながら、英雄王ギルガメッシュという男の存在が運命を変えた。奇しくもこの第五次聖杯戦争に於いて、衛宮士郎を導いたのと同様、彼は言峰綺礼に着目し、その根底に隠されていたものを引きずり出したのだ。紆余曲折の末、遠坂時臣の弟子と彼のサーヴァントは、主を差し置いて手を組むという展開に至る。

そんなこととは露知らず、聖杯戦争の終盤、時臣は自分が死した後を託せる人物として綺礼と顔を合わせていた。彼に遺言状を預け、遠坂家での見習い終了の証としてアゾット剣を手渡した時臣は、後顧の憂いなく次の戦いへと挑み——その直前、綺礼に背後から刺し殺されるという顛末を迎えた。

『見よ、この間抜けた死に顔を。最後まで己の愚劣さに気付かなんだという面だ』  
『すぐそこに霊体化したサーヴァントを侍らせていたのだ。油断したのも無理はあるま  
い』

最期の最期まで、言峰綺礼という人間を理解できなかった男。生粋の破綻者である彼の本性を見抜けというのが土台困難な話だったが、裏切りの主従はこうして一人の魔術師の死に様を哄笑した。

あの時、命を落とすまさにその瞬間の時臣の顔を見て抱いた喜びも得難いものであったが——あれがまさか、こうして極大の愉悦として芽吹くことになろうとは。真つ黒な嘲笑を浮かべて、神父が歓迎するように手を開く。

「時臣師の最期の顔を、おまえにも見せてやりたかった。よもや弟子に刃を向けられるなど、到底現実を信じられぬという、実に見応えのある死に顔だったぞ」

「綺礼イイイイイイイ——」

父を奪われた少女が爆発し、母を殺された少女が激昂する。その激情を祝福すべく、言峰綺礼は高々と黒鍵を掲げた。



## 30. 悪意

黎明の街を走り抜けるバイクは、法定速度を遙かに逸脱していた。

まだ辛うじて朝というより夜の領域だから他の車は少ないが、通勤時間帯とかち合う羽目になっていたら間違いなく通報されていただろう。巡回のパトカーとすれ違う気配がなかったのは、紛れもなく幸運の賜物だ。

改造された大出力エンジンとギルガメッシュの操縦テクニクの組み合わせは、家までの距離をいとも簡単に縮めていく。一分一秒が惜しい今、このバイクに乗る以外の選択肢はなかったが……乗り始めて数分もする頃には、俺は後悔し始めていた。

「痛、っ……っ……」

後部座席に備え付けられた固定用のバーを握り込むたびに、体中に痛みが走る。

アドレナリンでぶっ飛んでたせいかわれていたが、俺の体はあのアーチャーとの激闘でポロポロだった。脂汗が滲むほどの脇腹の痛さは、肋骨か何か折れているのだろうか、バーを握るのは左手一本。右手の方はほとんど折れかけの有様だ。

打ち身、擦り傷、出血箇所、細かな骨のヒビまで入れればどれほど怪我をしているのかわかったものではない。無理な投影を連発した魔術回路は、痛みを通り越して凍える

ような不気味な悪寒を伝えてくる。バイクにしがみつくだけで重労働、本当なら俺を運ぶべき乗り物は救急車に違いない。

……それでも。

「みんな、無事でいてくれ……!」

俺はまだ生きているからいい。そんなことより問題なのは、現在進行系で窮地に陥っているであろう三人だ。

桜は動ける状態ではないが、遠坂とイリヤは俺なんか足元にも及ばない強力な魔術師だ。二人揃えば、並の敵には引けを取るまいが——この状況を作り上げた相手は、聖杯戦争の最終盤まで生き抜いてきたヤツだ。侮れるはずがない。

臓硯か、それとも他にマスターがいるのかは分からないが、俺の家にあのアーチャーを送り込んできたヤツは間違いない。こちらの陣容を知っている。わざわざギルガメツシユと、ついでに俺を誘い出したのは、残りの人員だけなら確実に制圧できるという確証があつてのことだろう。

家にあの男が現れた時点で、俺たちの選択肢は制限されていた。町中だから、境界があるから、サーヴァントがいるから、慣れ親しんだ家だから——いくらでも言い訳は立つが、俺たちが家を拠点にし続けたのは戦略上誤りだったのかもしれない。今更言つても詮無いことだが、ただ皆の無事を祈ることしかできないのがもどかしい。

「見えてきたか。気を緩めるなよ、雑種」

しがみつくのに必死で景色を見る余裕などない俺に、ギルガメッシュが言い放つ。五秒後にはバイクが減速を始め、急制動して路肩に停車したが、その衝撃だけでも危うくバイクから転がり落ちそうになってしまった。

悲鳴を上げる体をなんとか宥めすかし、老人のような遅さでゆつくりと座席を降りる。余力を振り絞って顔を上げると、三步先で黄金の青年が腕を組んでおり……その視線の先には、門が開けっ放しになっている我が家が見える。

「下手人はとうに去っているようだが——やはり襲われていたか。血の臭いが鼻につくわ」

「ッ……い！」

どこにそんな力が残っていたのか。言葉の意味を理解した瞬間、考えるより先に体が走り出していた。

敷居を飛び越えると、門とは象徴的に閉められたままの玄関が目に入る。家に押し入ったのだとすれば、何故こちらは開け放たれていないのか……？

玄関ではなく周囲に目を向ける。するとすぐ左手に、昨日までは何の変哲もなかった細い木がへし折れているのを発見。何かがぶつかっていったような痕跡に、警戒しつつ進んでいくと——。

「これは……」

南側の庭。セイバーがかつて使っていた部屋に面した空間が、滅茶苦茶な有様になっていた。

未舗装とはいえ、整っていたはずの地面には大穴が空いている。聳そびえていた木々は見る影もなくへし折れ、倒れ込んだ何本かが屋根を直撃して瓦を破壊していた。家の方も、ガラスから木張りの床から尽くが吹き飛ばされ、言葉を失ってしまうほどの凄惨な様相。

愕然として破壊の跡を見渡していると、違和感。家の壁際、隅の方に転がっているのは、赤い服を着た人影のようで——っ!?

「遠坂——!」

「——たわけ。無闇に先走るな、雑種」

色を失って走り寄ろうとした瞬間、首根っこを強い力で掴まれた。逆方向に引つ張られたせいで瞬間的に首が絞まり、ぐえ、と苦鳴が零れてしまう。

「お、まえ、何を……」

左手で俺を捕まえたギルガメッシュは、抗議の声に耳も貸さず、指揮者のように右手を振るう。途端、空間に浮かぶ黄金の波紋から、鈍色の短剣が放たれ——

——バチンッ!

「見え透いた罠だ。死体や怪我人を餌に、食いついた者を屠るやり口よ。

魔術師というより、狙撃手の手口だが——フン、いつぞやの意趣返しのももりか。半端な魔術の腕といい、これを敷いたのはあやつだろな」

地面に魔法陣が浮かび上がったかと思うと、稲妻のようなものが吹き出し、短剣を直撃して軌道を斜め四十五度に弾いてしまった。

俺があのまま突っ込んでいたら、よくて気絶、運が悪ければ感電死していただろう。地雷のような魔術の罠は、ぞつとするほど悪辣だった。

ギルガメツシユはまた思わせぶりに何かを言っているが、今のは助かった。一歩間違えれば死んでいた事実には、血が上っていた頭にもさすがに冷静さが戻ってくる。

「助かった、アーチャー。……まだ他にも罠が残ってたりするか?」

「……いや、今ので終いのようだ。この術は単なる嫌がらせよ、二つ三つと重ねる意味もあるまい」

庭中を睥睨するギルガメツシユが、問題ないと鷹揚に手を振る。それを見て取ると、今度こそ俺は倒れ伏す人影の許に走り出した。

「無事か、遠坂?!」

ほんの数メートル。たったそれだけの距離を走る間に、胸の悪寒が増大していく。もうここまで来ればわかる。建物や地面が焦げた中に交じる、頭が痛くなるほどの血

の臭い。その中央にいるのは、壁に背を預けるようにして倒れ込む少女だ。

服の赤は血の紅で上書きされ、漆喰の壁はペンキでもぶち撒けたように朱色に染まっている。まだ乾いていないところからして、この惨状が引き起こされてからは、ほんの半時間と経っていない。

「っ——」

そんな、どうでもいい周囲の情報ばかりが入ってくる。

僅か数時間前まで、元気に会話していた遠坂凜という少女。彼女がいったいどんな状態なのか——もう手の届くところにあるのに、それを確かめるのが、どんなことより怖かった。

素人にだって分かる。どこかを切ったなどという生易しい話ではなく、この血溜まりの量は命に関わる。少女の体は自ら流した血液でしどに濡れ、どこが傷ついているのかさえ分からない。

生きているのか。傷つくところなんて想像さえできなかつた魔術師は、まだ息があるのか。今すぐそれを確かめるべきだというのに、恐怖と絶望が、喉元まで出かかつてきた刹那。

「……よかつた……。あんたは、無事だったのね……。士郎……」

今にも消えてしまいそうなほど、か細い声で。苦しげに目を開けた遠坂が、薄っすら

と笑みを浮かべていた。

「遠坂……！ 生きてた、よかった……！ 待つてる、今救急車を——」

「……ストップ。わたしのことは、いいから……。桜と、イリヤが……」

息をすることさえ苦しいのだろう。一言一言絞り出すようにして、遠坂が言葉を連ねる。唇から一筋血が垂れていく様に、俺の血の気が引いていくが——命を零れ落とそうとしながらも、遠坂は俺に何かを伝えようとしていた。必死の訴えを聞き逃してはならないと、懸命に耳をそばだてる。

「……ごめん。しくじった……わたし、二人のこと、守れなくて……！ あいつに、連れてかれて……」

「あいつ……？ 誰だ、これをやったのは臓硯か？」

「否。貴様を打ち倒したのは——言峰綺礼。そうであろう、遠坂の娘」

いつの間にか横にいたギルガメッシュが、突然口を挟んでくる。あまりにも突拍子のない発言に、混乱して間拔けな声を出してしまうが——それを聞いた遠坂は、こくん、と確かに頷いた。二人の顔は、間違いなく俺の知らない何かを確信している。

馬鹿な……この局面で何故、監督役の神父の名が出てくるのか。確かに胡散臭い、信用ならないと思っていたヤツではあるが、あの男は多大な労力を割いてまで桜を助けてくれた。責務に忠実でなければ、そんなことをする理由がない。

監督役とは、中立の立場で聖杯戦争を運営する役割のはずだ。それが参加者を攻撃するなど、言語道断にも程がある。第一、そんなことをすれば魔術協会も聖堂教会も、それ以前に他のマスターが黙ってはいない——待てよ。

「言峰……まさかあいつが、最後のマスターだったのか!？」

もう、首を動かすことさえ億劫なのか。先ほどよりも弱々しく、遠坂が微かに首肯する。苦しい呼吸は、ほとんど喘鳴になっていた。

言峰綺礼……あの男は遠坂の後見人であり、兄弟子であつたとも聞いている。その上、公平中立であるはずの監督役——そんな人間が、よりにもよって裏ではマスターとして参加していたのだ。遠坂にとつては、不意打ちだったに違いない。

この破壊痕から見ても、遠坂もイリヤも激しく戦つたのだろう。ヤツのサーヴァントは、俺たちと矛を交えていたわけだから……あの男は単体で、一流の魔術師を二人相手取つて圧倒するだけの戦闘能力を持つているのか。最悪な事態が、ますますどん底に向かつていく。

「気を、付けなさいよ……あいつ、臓硯と組んでる。士郎じゃ、あいつらには——」

「ごぼ、と血を吐く遠坂。どれほど内臓を傷つけたのか、その顔色は青を通り越して蒼白だった。

「わかつた。もういいから、少し休んでくれ。今救急車を呼んでやるから。そうしたら



——二人を助けて、言峰も臍もぶちのめしてくる」

「つ——止めても、無駄、か。そうね、あんたは最初から、そういう人間だった……無理だつて分かつてても、認められないものがあると、向かっていけちゃうやつ……。あの放課後から、何も変わってないんだから……」

後半の言葉は、ほとんど聞き取れなかった。もう遠坂は、口を利けるような状態ではないのだ。

これ以上は限界だった。玄関の近くにある電話機は、きつと無事なままだろう。今すぐに救急通報をしようと、踵を返して走ろうとした矢先——死に体とは思えぬ力で、遠坂が俺の腕をぐつと掴む。

「いい、士郎。あんたが戦う気なのは分かっている。だけど——戦うからには、絶対に勝ちなさいよ。一度決めたことを押し通せなかつたら、地獄まで追つかけてつてやるんだから」

そう告げる遠坂の瞳は、尋常ならざる気迫を宿していた。言峰に裏切られ、敗北を喫し、二人を攫われたことがどれだけ悔しいのか、目を見るだけで伝わってくる。

きつと本当なら、今すぐにだつて言峰を追いかけたいに違いない。それが叶わないから……遠坂は、俺に託したのだ。俺ならそれをやり遂げると、いや、やり遂げなければ許さないと、燃えるような眼差しが命じている。

「——わかった。大丈夫だ、遠坂。俺が、おまえの分まで借りを返してやる」  
決意を籠めて、強く頷く。答えなんて、考えるまでもないことだった。

それを見た遠坂は、睨み据えるようだった表情をふつと緩めると……掴んでいた手を離し、そのまま瞳を閉じて俯いた。意識を保っていることすら、今のが限界だったのだろう。

まだ息はある。だが、もう一刻だつて放つておける猶予はない。今すぐに救急車を呼ばなければと、電話機目掛けて走り出すが——二歩踏み出したところで、がくん、と体が沈んだ。

「な、に……?」

——電池の切れたロボットのよう、地面にばたんと倒れ込む。何かに躓いたわけでもないのに、どうして——その疑問の答えは、数秒ほど遅れて襲ってきた、全身を蝕む痛みだった。

「ッ——が、っ……!?!」

右腕の罅。左手小指の骨折。肋骨二本の骨折。脇腹に走る裂傷。右太ももの刃傷。打ち身、擦り傷、細かな骨の罅、出血箇所に至っては数え切れず、魔術回路は焼け焦げかけている。

今まで動いていたのが奇跡に思えるような、ボロボロの状態だった。赤いアーチャー

にあれほど黽られ続けた後、無理を押し、バイクに搭乗し、痛みなど忘れてここまで走ってきたが……火事場の馬鹿力は、遂にここに来て尽きてしまったのか。

くそつ、せめてあと二分、通報を終えるまで保ちさえすればいいのに、なんでここで動けなくなるんだこのポンコツ……！ ふざけるな、俺が起き上がらないと遠坂が——

「——やれやれ。まこと、世話の焼ける雑種よな」

呆れたような溜息が、頭上を通り過ぎていく。なんとか顔を上げると、そこには肩を竦める金髪の青年の姿があった。

「至らぬ契約者をもり立てるのも仕事のうちか。我が財の使用許可を与えた手前もある——特に許す。ありがたく拝領せよ、雑種」

ひよい、と。黄金の波紋から、無造作に何かが投げ渡される。頭にぶつかる軌道のそれを、比較的無事な左手でなんとかキャッチすると……ちようど手のひらに収まるぐらいの、透明な液体の入った瓶があった。

やたら装飾の施された小瓶は、それだけでも美術館に陳列されていそうな高貴さを放っている。とんでもなく値の張る代物なのだろうが、それよりもこの中の液体は……？

「治癒の霊薬だ。外傷であれば、大凡のものは立ち所に癒えよう。

見たところ、貴様の傷はまだ浅い。三割も飲めば十分だ。残りはあの娘にでもくれてやるがよからう」

その解説を聞いた瞬間、俺は這うようにして向きを変え、遠坂のところへ戻りだした。飲んだだけで外傷が癒える薬など、現代医学では及びもつかぬ領域だろう。治癒魔術でさえ、簡単に再現できるものとは思えない。ギルガメッシュが持っているのは、宝具だけではなかったのか——礼を言いたいのには山々だが、今はそれより遠坂だ。

ひゅー、ひゅー、と息を繰り返す遠坂の唇に、なんとか封を空けた小瓶を押し当て、中身を少しずつ流し込んでいく。地面に溜まった血溜まりを見て、全部飲ませたほうがいいのではないかと一瞬思うが……英雄王が見立てを誤ることはない。俺に三割、遠坂に七割という割当は、意味のあるものなのだろう。

目分量だが、だいたい七割ほどの中身を飲ませたところで、一旦瓶を水平に戻す。効いてくれという願いを籠めて、力なく垂れ下がった手を握りしめていると……あれほど苦しげだった呼吸が、少しずつ穏やかなものになり始めた。見れば、真つ白だった顔色も、徐々に赤みが戻り始めている。

「つ……い、すごい、ほんとに効いてるのか……！」

「たわけ。私の財に贖作などない。傷を癒やすという伝承が、いったい幾つあると思っ  
ている？ 一晩もすれば、減らず口を叩ける体に戻っていよう」

「遠坂は助かるんだな？　ありがとう、ギルガメッシュ……！」

「ふん——大いに我を崇め、感謝しひれ伏すがいい。我が財を下賜してやるなど、滅多なことではないからな。」

——当然、対価は払ってもらうが」

にやり、と露悪的に笑う黄金の王。

致命傷すら治癒するような、特級の霊薬の対価……以前に見た、米国で手術を受けたら数千万円の請求を受けたというニュースが脳裏を過る。英雄王の薬に医療保険など適用されまい、いったいどんな無茶振りを要求されるのか——浮かべた笑みが、瞬時に凍りつくのを感じる。

「そう固まるな、我は貴様に不可能なものは求めん。そも、人を見極め裁定するのが私の責務でもあるからな。」

まあ話は後だ。折角くれてやったのだ、疾く薬を飲むがいい。貴様の傷が癒え次第——  
——聖杯戦争の幕引きに向かうぞ」

\*\*\*

驚いた。

傲岸不遜、唯我独尊を地で行く男が他人の怪我に配慮を示したのもさることながら、傍観者というスタンスをここまで貫いてきたのに、自分から聖杯戦争に片を付けようと言いだしたのも意外だった。

問いたいことは山ほどある。けれど、それより優先しなければならぬのは遠坂の容態だ。冬の空に野晒しにしておくなど論外であり、ギルガメッシュの薬を飲んで回復した俺は、どうにか動けるようになるかと無事な部屋まで遠坂を運び込んだ。

いったいどういう効能なのか、口を開くのがやつとだった体は十分もすれば立ち上がりれるようになり、一時間もすればスムーズに動けるぐらいには復活していた。軽い打ち身や擦り傷はもう消えており、折れていた骨さえ痛みが和らいで元に戻りかけている。酷使しすぎた魔術回路すらも回復してきていて、この分では夜には完全な健康体に戻っているだろう。神代の霊薬は、恐ろしいほどの効き目だった。

しかし、比較的すぐ動けるようになった俺と違って、遠坂が目を覚ます気配はない。医学なんてこれっぽっちも分からない俺から見ても、遠坂は明らかに複数の臓器を損傷していた。ギルガメッシュによると、彼女の持つ魔術刻印が瀬戸際で辛うじて命を繋いでいたらしい。それほどの重症でさえ、一日休めば大方は回復するといふのだから恐れ入る……遠坂が助かってくれて本当に良かった。俺はこの聖杯戦争の始めから、ずっとあのサーヴァントに借りを作りっぱなしだ。

「こんなもんでいいか……。緊急事態だったけど、起きたら怒られそうだよな」

血まみれの服を着替えさせ、なるべく肌を見ないようにして血を拭き取ってやるという思わぬ超高難易度の試練。どうにかこうにか潜り抜け、こんこんと眠る遠坂をベッドに寝かせたところで、やっと一息つくことができた。

夜を徹しての激闘に、二転三転する戦局。ずつしりと、肩に重い疲労がのしかかっているのを感じる。本音を言えば、このまま一眠りしたいところだったが——その前に、積もる話をしなければならぬ男がいる。

どの道、決戦は夜になる。聖杯戦争の道理から言っても、敵の状況から見ても、ギルガメッシュの見立てでも、即座に挑みかかるのは悪手でしかない。敵に襲われる前に書いたのか、イリヤが残してくれたメモ書きによると、桜は『この世全ての悪』をあと一日は確実に抑え込めるといふ。

敵から見ても、むぎむぎ聖杯の器を壊すのは愚行中の愚行であり、来ると分かっている俺たちを始末すれば聖杯戦争に決着がつくのだから選択肢は一つしかない。ならば、夜までの時間を最大限有効に活用して、勝利の確率を上げておくべきだろう。

「なんだ。随分と手間取ったではないか、雑種」

「……あんたが手伝ってくれたらもう少し楽だったんだけどな、ギルガメッシュ」

「ハッ。我が霊薬をくれてやった時点で、貴様らには過ぎた恩寵よ。雑事は貴様ら俗人

が担うもの、王たる我を顎で使おうなど兆年早いわ」

遠坂の部屋から居間に戻ると。勝手に持ち出したペットボトルのお茶を飲みながら、呑気にテレビを見ているサーヴァントがいた。記憶が戻る前と一ミリたりとも変わっていない偉そうな態度は、呆れるべきなのか苦笑いするべきなのか。

半分ほど減っているお茶を見て、そういえば昨夜以降まったく飲み食いをしていなかったことに気づく。普段なら何か軽く作るのだが、さすがに今は疲労感が強く、文明の利器である冷凍食品に頼ることに決定。

幸い、派手に壊されていたのは南側の庭周囲だけで、電気や水道といったインフラは無傷だったようだ。あれだけ壊せば近所の人気がつきそうなものだが、あの公園のように認識阻害の結界でも貼られていたのか——首を傾げつつもお湯を沸かし、食品をレンジで温めていく。

「よし、これで全部終わりか……今日は冷凍のものだけど許してくれ。ギルガメッシュ、あんたも食うだろ？」

「昼餉か？ 安物というのが気に障るが、まあよい。献上を許す」

なんだかんだで腹が減っていたのか、勝手にみかんを食っていたギルガメッシュの前に、チンしたばかりのお好み焼きの袋一式を置いてやる。

その直後、何気なく隣の席に目を向けて……ふと、居間が空虚なほど寂しいことに気



がついた。結構な人数が入っても余裕のある広さなのに、つい数日前まであんなに人がいたのに……今ここにいるのは、俺とギルガメツシユの二人だけになってしまった。

遠坂は、傷を癒やすために眠っている。

セイバーは、臓硯の手先に成り果てた。

桜とイリヤは、言峰に拉致されたまま。

藤ねえは、来る余裕さえないのでろう。

最後に残ったのは俺たちだけ。この先の、おそらくは最後の戦いは、俺とギルガメツシユの二人だけで挑まなければならない。

夢で見た英雄王と朋友の冒険とは違う。彼らは時に窮地に陥り、辛酸を舐めることがあれど、最後には勝利と栄光を掴んできた。だが、今は配役が違う。黄金の王に比肩し、神をも恐れぬ力を持った人形はここにはおらず、いるのはただの魔術師見習いだけ。それでいて、敵は途方もなく強大なのだ。

あの森で見たセイバーの戦闘能力は常軌を逸していた。あの籬の外れたヘラクレスさえ、彼女の聖剣は圧倒しただろう。加えて、赤い弓兵……未来の衛宮士郎だという英霊も容易い敵ではない。公園での戦いぶりを見て理解したが、あの男はギルガメツシユに対して相性が良い。

難敵であるサーヴァントが二体。更に、底の知れぬ間桐臓硯と、遠坂とイリヤさえ圧

倒した言峰綺礼もいる。極めつけは、セイバーもバーサーカーもその尽くを飲み干した黒い影——桜を利用して顕現しているというおぞましい怪物。笑えてしまうほどの、絶望的な陣営の差である。

ギルガメツシユは最強最古の英霊だ。その事実には疑いはない。しかし、その力を以てさえこの盤面は覆せるのか——肝心の本人はどう思っているのだろうかと目を向けた瞬間、俺はその奇妙さを見逃さなかつた。この男の記憶が戻って以降、もしかしたらと疑つてはいたのだが……今のほんの僅かな点から、全体の線が繋がってくる。この事態の打開に繋がることだ、まずこれを確かめなければ話にならない。

「——ギルガメツシユ。あんた、今回召喚されたサーヴァントじゃないんだろ？」  
何の前置きもない、唐突な質問。

この家に来て以降食べたことのないはずの冷凍お好み焼きを、前々から知っていたかのような自然さで、封を切り順番に調味料をかけていたサーヴァントは——確信を以て言い放つた俺の問いに、愉快げに唇を吊り上げてみせた。

「ほう。ヒントは随分与えてやったつもりだが、ようやく答えにたどり着いたと見える」  
「……おかしいとは思ってたんだ。遠坂もイリヤも、召喚されたサーヴァントが最初から受肉しているような機能は、聖杯には存在しないって言ってた。なのにあんたは現実の肉体を持って現れている。」

他のことだつてそうだ。あんたが朝飯を作ってくれたことがあったけど、あれは初心者が作った出来具合じゃない。テレビの操作とか、細かいところはいろいろあるけど……あのバイクだつてそうだし、今だつてそうだ。なんで五千年も前の人間が、冷凍のお好み焼きの作り方なんて知ってるんだ？」

これが決定打だった。単に温めればいいピラフ系統とは違い、お好み焼きやたこ焼きは少々手間がかかる。添付品のソースやマヨネーズ、青のりや鰹節は解凍方法やかける順番がメーカーごとに実は違っていたりする。もちろんパッケージに調理方法は書いてあるのだが、この男は見ることもさえせずに躊躇なく正しい順番で薬味をかけていく。いかにギルガメツシユがキレ者だろうと、そんなもの、サーヴァントが知っているはずがないのだ。

そう訊ねると。この男にしては珍しく、ほんの僅かだけ、きよとんとした表情が浮かんだ。

「ク——ふははは、よもや決め手になったのがこれとはな！ 我ともあろう者が、その解は想定外であつたぞ。なるほど、貴様は調理人の端くれか、存外に目敏いではないか」俺の答えに意表を突かれたのか。今封を切っていた青のりを一瞥すると、ギルガメツシユが肩を揺らして笑い出す。何かがツボに入ったのか、バンバンとテーブルを叩きながら爆笑しているのだが、そのたびに青のりと鰹節が飛び散るので正直やめてほしい。

ひととおり笑い終えると、ぐいとお茶を飲み干して、こちらに視線を向ける英雄王。愉しそうな笑みは口元に浮かんだままだが……その上機嫌さの内訳は、少し前のそれは明確に異なっていた。

「いかにも。我は貴様と契約したサーヴァントであると同時に、此度喚び出された英霊ではない。この身は今より十年前——第四次聖杯戦争に於いて召喚された、アーチャーのサーヴァントよ」

「やつぱりそうか……そうだよな。でなきや、どれだけ聖杯がおかしくなつてるとしても、二人目のアーチャーなんか出てくるわけがない」

「然り。フフン、今の我は機嫌が良い。我を興じさせた解への褒美だ、問いがあるのであれば答えてやるぞ」

笑みの残滓を纏わせながら、出来上がったお好み焼きをつつくギルガメッシュ。何の気なしに語っているようで、その双眸はじつと俺のことを観察している。俺がどういう意図でその質問をしたのか、何を考えて次の言葉を口にしようとしているのか——最初から見抜かれているのか、それとも分析しているのか。いずれにしてもこの男は、俺の動き方を愉しむというスタンスは変えないようだ。

「それじゃあ……まずは、最初z.e.r.からだ。十年前、一体何があったのか。その話を聞かせてほしい」

「ほう。現状の解ではなく過去に目を向けるか。意図を語り聞かせてみよう」

「言峰は、前の聖杯戦争のマスターだつて言つてた。臓硯だつて、何百年も生きてるんだろ？ 前回と無関係なわけがない。」

あんたはもちろん、セイバーだつて前回の聖杯戦争の参加者だ。それにあのアーチャーだつて、元はといえ俺……つまり、第四次聖杯戦争の関係者。

イリヤは、『この世<sup>アンリマユ</sup>全ての悪』が召喚されたのは第三次の時だつて話してた。なら、そいつの影響が出てくるのは第四次以降のはず。そして前回の最後には大災害が起きて、今回の第五次聖杯戦争は何から何までめちゃくちゃだ。

——ここまで揃つてるんだ、偶然なんかあるもんか。言峰と臓硯が何を企んでるのかも、今回の聖杯戦争だけがなんでおかしくなったのかも、元を辿れば十年前に行き着く。違うか？」

指折り数えて、おかしな点を挙げていく。一つ二つなら偶然だろうが、三つ四つとなれば必然。五つを超えらとなれば、それはもう確定に近いと見ていいだろう。

現状では敵の戦力も目的も、ほとんど何も分かっていない。聖杯戦争に於いて情報や戦略がどれだけ重要なかは、文字通り身に沁みて理解している。こんな状態で戦いに挑むなど、博打を通り越して自殺だろう。

暗闇だらけの現在を紐解く鍵は、十年前の過去にあるに違いない。そしてその鍵を

持っているのは、第四次聖杯戦争の生き証人である、アーチャーのサーヴァント以外にはありえない。

「——なるほど。少しは視野を広げる事を覚えたと見える」

にやり、とアーチャーが笑う。その表情は、俺の推測が正解だと雄弁に物語っていた。「よかろう、暇潰しにはちょうど良い。四度目の下らぬ茶番、王自らが語り聞かせてやろう。ありがたく拝聴せよ、雑種。

——我を喚び出したのは、遠坂時臣という男だ」

「遠坂？ それって、もしかして……」

「然り。あの娘どもの父親よ。娘は見所があつたが、父親の方はまったくもって面白味のない輩であつた」

十年前に行われ、冬木市を火の海に変えた第四次聖杯戦争。その当事者の語り口に、俺は解凍したばかりの昼食を食べるのも忘れて聞き入ってしまった。

剣士のサーヴァントは、言わずと知れた騎士王、アルトリア・ペンドラゴン。

槍兵のサーヴァントは、クー・フリーンの後輩筋にあたるケルト神話の英霊、輝く貌のデイルムツド・オデイナ。

騎兵のサーヴァントは、アレキサンダー大王の名でも知られる、征服王イスカンダル。

魔術師のサーヴァントは、『青髭』の童話とされる堕ちた英雄、元帥ジル・ド・

レエ。

暗殺者のサーヴァントは、中東における暗殺教団の頭目の一人、百貌のハサン・サツバーハ。

狂戦士のサーヴァントは、アーサー王伝説において最優の騎士と謳われた、湖の騎士ランスロット。

——そして弓兵のサーヴァントとして召喚されたのが、人類史上最古にして最強の英霊、英雄王ギルガメッシュ。

幾人か俺の知らない人物も混じっているが、聞き覚えのある名前だけでも、今回の第五次聖杯戦争に劣らない錚々たる面々だ。これらの英霊と、それを従える魔術師たちの戦いは、緒戦から混迷を極めたらしい。

王の宴、というよくわからない単語が混じったが、アーチャーを含めた三騎の英霊が集う場に押し寄せたアサシンをライダーが一蹴。目を置かず、何をトチ狂ったのか民間人の無差別大量虐殺に及ぼうとしたキャスターをセイバーが撃破。続いてランサーもセイバーが打ち倒した。

キャスターとランサーについては、倒されたのはサーヴァントだけではない。それだけのマスターも、ほぼ時を同じくして殺されていた。それを為した魔術師が——。

「——衛宮切嗣。貴様の養父は、裏の世界では名の知れた傭兵であった。言峰は、随分と

あの男に執着していたものよ」

淡々と語るギルガメツシユの口から出てくるのは、冷酷に冷徹に、銃火を以て敵対者を殺戮する『メイガス・マスター魔術師殺し』の姿。

溫和でどこか頼りなかった、俺の知る切嗣からはまったく想像がつかないが……実際に切嗣のサーヴァントだったセイバーも、やや言葉を濁してはいたが、今のアーチャーに近い印象を語っていた。この二人が揃って同じことを言うのだから、親父が手練れの暗殺者だったという信じがたい過去は、やはり事実なのだろう。

「ランサーのマスターは優れた魔術師という話だったが、衛宮切嗣は中々に悪辣な手を使って協力者ともども惨殺したようだ。ただ勝利という解のみを追い求め、あらゆる手管を用いる——かつてのセイバーのマスターは、よほど願望機に執着する理由があったと見える」

『——僕は子供の頃、正義の味方に憧れてた』

敵対する魔術師をビルごと爆砕する。

公衆の面前で、狙撃銃でマスターの頭を吹き飛ばす。

人質を用いて敵マスターを脅迫し、その間隙につけこんで協力者に射殺させる。

サーヴァントの口から語られる切嗣の振る舞いは、テロリストにも近い残忍さと、何をしても勝ち抜くという執念を感じさせる。しかし、最期に遠くの星を見上げていた切



嗣は、そんな凄惨さを微塵も感じさせない、まるで抜け殻のような姿だった。

だからきつと、何かがあつたのだ。正義の味方という憧れからは程遠い有様になってまで、聖杯に何かを願おうとしていた切嗣を、どうしようもなく壊してしまうほどの何か——。

「その男は、万能の願望機に縋らねば到底叶わぬ悲願——個人の在り方ではなく、世界そのものに希う大望を持っていたのだらうよ。」

だが、人の世を変革させるほどの原動力など、人間の悪意をにおいて他にない。故に、その手段は自滅となる。最後の最後に、衛宮切嗣はそれに気づいたのであらう——なにせあの男は、求めていた聖杯を自らのサーヴァントに碎かせたのだから」

英雄王の嘲笑は、果たして誰に向けられたものなのか。紅蓮の深い双眸は、特定の個人というより、より広い範囲の人への怒りを滲ませているような——。

ともあれ。悪意でしか世界が変わらない、というギルガメッシュの言葉には領けない部分がある。だがそれと同じくらい、領けてしまうだけの根拠を歴史が示している。近現代だけでも、ナチスドイツのホロコースト、共産主義国家の大粛清、米国を激震させた航空機テロ——人間の悪意によって引き起こされた社会変動は枚挙に暇がない。

この聖杯戦争は、最悪の場合その極めつけになる。なにせ、とうの聖杯が人類の悪性そのものに変じているのだ。セイバーは、切嗣が何を以て聖杯を壊したのかを知らない

と言ったが……今の俺のように、聖杯戦争のどこかで真相に気づいてしまったのかもしれない。何人も人間を殺し尽くして手に入れようとした願望機が、悪意によって染められている——聖杯に託す願いが大きければ大きいほど、その裏切りは深い絶望を招いたはずだ。俺の知る切嗣と、十年前の当事者たちが語る魔術師殺しの違いの理由は、きつとそこにあるのだろう。

一人の人間をそこまで変えてしまうほどの絶望——それをもたらしした聖杯で、間桐臓硯は、言峰綺礼は、何をしてくかそうとしているのか。俺の疑問をよそに、ギルガメッシュは話を続けていく。

「この世はつくづく皮肉に満ちているな。願望機によって願いを碎かれる者がいれば、願望機によって願いを見出す者もいる——衛宮切嗣という人間は、どこまでも言峰とは相容れぬ性質だったようだ」

「……随分あの神父のことを知ってるんだな。協力関係だったってのは聞いたけど、アンのタのマスターは遠坂のお父さんだったんだろう?」

そう口にして、ふと違和感を覚える。遠坂の父は、第四次聖杯戦争の時に亡くなったと聞いた。しかしここまで聞いた話では、彼と協力関係を結んでいた言峰は真つ先にサーヴァントを失い、一方の遠坂時臣はギルガメッシュ——それも記憶と力を失っていた状態ではなく、万全の状態の英雄王を従えて中盤戦まで生き残っている。言峰が死亡

して遠坂の父が生きているなら順当な結果だが、現状はその逆だ。

……待てよ。逆なのは結果だけじゃない。もしかすると、マスター同士の関係がそもそも——。

「思い当たったようだな。然り、我を召喚したのは時臣であつた——が、我のマスターを務めるには時臣めはあまりに凡俗過ぎた。

言峰は存外面白い男でな、ヤツが時臣に牙を剥いた折に、契約を変えてやったのさ。ま、多少は我が仕向けたきらいもあるが」

とんでもない真実だつた。

あの腐れ神父は、師事していた遠坂の父を裏切つて殺したばかりか、その事実を隠匿して平然と今まで遠坂の保護者面をしていたのだ。どれだけ面の皮が厚く、性根が腐つているのかまるで想像ができない。

だが、その叛逆を良しとするこの男は何を考えているのか。そもそも、その裏切りを仕向けたつて、こいつはやはり平然とマスターを見捨てるヤツなのか——。

「おいおい、勘違いをするな。時臣はつまらん男ではあつたが、我とてマスターへの義理立てぐらひは果たすさ。ヤツが我に見せた忠義が、真であつたのならな」

「どういう意味だ……？　遠坂の父さんが、先に裏切つたつていうのか」

「裏切りとは、同じ道を志しながらも背中を討つことを言う。端から道が違ふのであれ

ば、何処かで衝突するのは必然だ。

あやつは王である我に供物として魔力を捧げ、我は臣下である時臣に力を貸す——我の認識はそうであったが、時臣めはサーヴァントとして我を見ていた。魔術師どもがサーヴァントをどのような目的で呼び出すか、貴様はあの人形から聞いたばかりであろう」

サーヴァントは、聖杯を動かすための燃料に過ぎない。

その事実を隠匿するためか、万能の願望機という側面を喧伝しているが、聖杯の主たる目的は根源への到達。遠坂凜はその事実を知らなかったようだが、その父である遠坂時臣がそれを知らないはずはない。

面従腹背とはまさにこのことか。どこかのタイミングでギルガメッシュは聖杯戦争の裏事情に気づき、自らを使い潰そうとしたマスターを見限ったのだろう。

「……………」

この事実を遠坂が聞いたらどう思うか。

アーチャーは遠坂時臣のサーヴァントでありながら、彼に刃を向けた言峰綺礼を見逃し、あまつさえ鞍替えをしてのけた。これは裏切り行為に等しいし、遠坂凜にとってこの男は父の仇に与した敵に近い。

しかし、アーチャーを最初から裏切る——いや、そもそも聖杯を動かす燃料として最

後には使い捨てる算段を立てていた遠坂時臣は、英雄王にとつては逆臣だ。殺られる前に殺るといふ理屈は理解できるし、自ら手を下さなかつただけでもこの男の冷酷さからすれば驚きだ。

誰の立場から見ると、この話は善悪が変わってくる。この世に絶対的な正義などないのだと、胃が重くなるような真実。『正義』を信じた男がどのような末路を辿つたか知ってしまった今となつては、軽々に一方に肩入れすることはできそうにない。

「時臣めが見せた唯一の見所よな。奴が我に見せた忠義に偽りはなかつたが、それはサーヴァントとしての我に向けたものではなかつた。存外に優れた腹芸よ、我としたことがしてやられたわ」

サーヴァントは、一種の英霊のコピーという話を思い出す。当のアーチャー自身が、現代の概念でいえばある種クローンにも近いと語っていた。

遠坂の父は、英雄王ギルガメッシュという人物を確かに王と仰いでいたのだろう。しかし、サーヴァントであるアーチャーは、敬意を向ける相手であつても切り捨てることに躊躇はなかつた。ある意味、しつぺ返しを受けた形とも言えるが……。

「あれ？ 遠坂の父さんと協力してたつてことは、言峰は聖杯戦争の裏側も知つてたはずだよな。だつたらマスターを言峰に変えたところで、最後には令呪で退場させられて、聖杯の燃料にされるだけなんじゃないのか」

「たわけ。凡百の英霊どもならまだしも、この我を令呪ぶごときで縛れるものか。

まあそれはよい。綺礼めには、元々聖杯を使おうという意志はなかった。奴が時臣に刃を向けたのは——いや、それは我が語るべきものではない。どの道、貴様と言峰は相容れぬ関係だ。あとは奴の口から聞くがよい」

聖杯を使おうという意志がない……？ だから言峰は、師事していた遠坂の父に力を貸し、自分のサーヴァントであつたアサシンを特攻させるといふ命令にも諾々と従つたのか。自分が聖杯を手に入れることではなく、遠坂時臣を掩護することが目的だつたら。

それが、どこかで覆つた。アーチャーの口ぶりでは、言峰の目的は根源への到達ではない。そうであるならアーチャーも含めた七騎全てのサーヴァントを燃料として焚べる必要があると聞いているし、遠坂時臣と条件が変わらないのならこの男も手を貸してほしい。

願望機に託す悲願……あの神父は、それを持っているというのか。だが、聖杯は汚染されていて十全な機能を発揮しないはず——俺の疑問をよそに、ギルガメッシュは話を続けていく。

「ここからの展開は早かつた。我は征服王の挑戦を退け、その間に騎士王は狂犬めを打倒した。最後に残つたのは、我とセイバー。そして、言峰と貴様の養父だつたわけだが

「ふん、と忌々しそうに鼻を鳴らすアーチャー。いよいよ前回の聖杯戦争の最終盤が覚えてきたが、何か不愉快な記憶でもあったのだろうか。」

「ここに至るまで、我と衛宮切嗣との接点はなかった。だが、最後に言峰を討ち果たしたヤツは、事もあるうに王たる私の婚儀を邪魔立てしおつたのだ」

「……………はい？」

まるで理解不能な単語が聞こえた。今つて確か、聖杯戦争の最終決戦の話をしているんじゃないかったか。

「悪い。婚儀つて何の話だ？ 誰と誰が？ なんで？」

「我とセイバーに決まっておるだろう。アレの在り方は、前回の聖杯戦争を通して見定めた。あの夢くも眩しい輝きを愛でてやれるのは、天上天下に我ただ一人——故に、我のものとする。そこに何の不思議がある？」

頭を抱える。当たり前のように語っているギルガメッシュだが、その中身は不思議しかない……………価値観があまりにも違いすぎる。

この男は常人の理解を超えた英霊だと思っていたが、もうこれはそんなレベルの話ではない。自分の感性を一ミリも疑っていないところがどうしようもないし、天才とナンブ力は紙一重というのはこのことか。

見なくてもだいたい想像できる。パワハラとかセクハラとかいう表現が生温いようなやり方で、この男はセイバーに迫つたのだろう。敵対する相手がいきなり求婚してくるとか頭がおかしいとしか思えないし、前回の記憶を持つセイバーがアーチャーを見た時に激しく敵意を向け、警戒を解かなかつた理由が今ようやく分かつた。

「あの雑種めは、令呪によつてセイバーに聖杯の器の破壊を命じた。おかげでその真下にいた我は、その中身を浴びる羽目になつたのだ」

「聖杯の中身つて……『この世全ての悪』つてヤツか？ そんなの浴びたら——」  
「呑まれる、か？ ——下らぬ。呪詛ごときで我を染めようなど片腹痛いわ。」

愚かにも我を取り込もうと試み、王の威光に恐れをなした聖杯は、我を外界へと弾き出したのだ。霊体のサーヴァントではなく、生身の肉を持つ存在としてな。我が受肉しているのはそういうカラクリだ」

先ほどとはまた違つた形で、途方も無い発言が飛び出してきた。

悪意と呪詛の塊と化した聖杯が、どれほど驚異的な存在なのかは身を以て知つていゝる。その端末である黒い影に取り込まれたセイバーやバーサーカーは、名のある大英雄だというのに元の姿からは考えられないほど変わり果ててしまった。

『この世全ての悪』ですら恐怖し、取り込むことも汚染することさえも叶わぬ存在とは一体何者か。英雄王とはどれだけ埒外な英霊なのか、唾然とする他はない。



「……それでも変だな。アンタが霊体じゃない理由は分かったけど、それならどうして俺に喚び出されたんだ？ サーヴァントのシステム上、二人目のギルガメッシュが召喚されるならまだ分かるけど、現世に残りっぱなしだったアンタが飛んでくるのはおかしな話じゃないか」

そこがずっと引つかかっていた。

英霊の座から聖杯の力で喚び出されたモノがサーヴァントだ。ということとはつまり、マスターがサーヴァントを召喚する際は、毎回英霊の座へアクセスしていることになる。その原理上、現世に留まっているサーヴァントが出てくることなどありえないはずだ。アクセスする先が、根っこから違ってしまっている。

そう指摘すると、ギルガメッシュの眉根に皺が寄った。この規格外の頭脳をしても憶測を導くのが限度なのか、アーチャーはやや歯切れの悪い口調で言葉を続ける。

「……おそらくだが、聖杯の召喚機能には狂いが生じている。貴様は本来、別のサーヴァントを召喚するはずだった。しかし、それは既に召喚済だったか、何らかの事情で叶わなかった。

その場合、本来であれば他の英霊が喚び出される。ところが聖杯は、通常の手順で英霊の座を参照するのではなく、現世に残留したままのサーヴァントを発見し、これを宛てがおうと考えたのだ。

受肉したとはいえ、我と聖杯の間には繋がりがある。問題はなからうと捨て置いていたものだが、その隙を突かれたと見える。気づいた時には、あの黒い穴がこの体を飲み込んでおつたわ」

『この世全ての悪』の影響で、聖杯がおかしくなっているというのは散々出た話だ。基本機能にバグのようなものが発生していたとしても、そこに何ら不思議はない。

「聖杯に一度回収された我だが、王を呼びつけようなぞ不敬にも程がある。誅伐代わりに内側から吹き飛ばしてくれようと抗ったが、その前に貴様の元へ放り出されてな。この身は本来忘却のできぬ体だが、記憶が飛んでいたのはその時の影響であろうよ。

喜べよ雑種。凡百の英霊であれば、回収された時点でアレに溶かされるか染められていた。記憶を持つ本来の我であれば、貴様など初手で切り捨てておつたかもしれない。ここに至つた展開はまさに驚天動地、万に一つの幸運よ——運を使い果たしたな、雑種」

ふはは、と笑うギルガメッシュ。俺はといえば、乾いた笑いを浮かべるしかない。今まで散々危ない橋を渡つてきた自覚はあるが、よりによって一番最初に渡つた橋が、最大級の危険性を秘めていたのだ。

聖杯の悪性さえ物ともしない英雄王を、かつ記憶を持たないニュートラルな状態で召喚できたから、俺はあの夜を生きて切り抜けられたのだ。そもそも召喚などできなかつたかもしれないし、出てきたサーヴァントに殺されていた可能性もある。そんな運の

いい自覚はなかったが、この男の言うとおり、一生分の幸運をそこに注ぎ込んでしまったのかもしれない。

なんともいえない気持ちになるが、結果的にこうして命を繋いでいるのだから、感謝するべきなのだろう。謎も解けたことだしこれでいいのだと自分を納得させ、次の疑問点へ移る。

「とりあえず、アンタがとんでもない英雄だつていうのは分かった。でも、元のマスターの方はどうなつたんだ？　そもそも、さつき言峰は切嗣に倒されたつて言つてなかつたか？」

「ああ、ヤツとの契約なら聖杯に呼びつけられた時に消えている。故に、ヤツが今何をしているのかは私の知るところではない。

言峰のことだ、今も謀略に精を出しているのだろうか……十年前の戦いの後、我が見つけた時は散々な有様でな。心臓を撃たれて瓦礫の底に埋まつておつた。掘り出してやるのは手間であつたぞ」

「心臓を……？　なら、なんで今もあいつは生きてるんだ？　さつきみたいな薬で、アンタが助けてやつたのか？」

「いや。我が蘇生させるでもなく、奴は勝手に蘇つた——いや、生きているというのは語弊があるな。言峰は十年前から死んでいる。

アレが今も動いているのは、聖杯の恩寵によるものだ。当時繋がっていた我との経路を通じて、我が浴びた聖杯の中身と直接繋がったのだろうよ」

……それが、十年前の聖杯戦争の結末だった。

衛宮切嗣は聖杯を破壊し、セイバーはその影響で消滅。言峰綺礼は半死人となり、アーチャーは稀人から現世の存在となった。

強いて言えば、サーヴァントとマスターが揃って生き延びた言峰とアーチャー組が勝者と言えるかもしれないが、聖杯を手に入れることができたわけではない。こうして、第四次聖杯戦争は勝者のないまま終結——待てよ。

「ちよつと待て。あの大火災は、どうして起きたんだ」

「ああ、アレは聖杯の中身が零れ落ちたものだ。聖杯が『門』を開くモノであることは知っていよう？ 五騎のサーヴァントが脱落した時点で、聖杯の機能は起動し始めた。た。

セイバーが器を壊した影響で中断させられたようだが、『門』から中身の一部は漏れ、それが街を焼き払った。しかし——あの程度の呪いで五百も死に絶えるなど、今の人間は弱すぎるな」

平然と嘯くギルガメッシュ。しかし、聞かされた俺は平然となどしていられない。

ほんの余波、一部が溢れただけであの有様。完全に儀式が成立していたら、冬木市が

消えるどころの話じゃない。日本全体が、最悪の場合は世界中が滅んでいたかもしれない。世界大戦どころか、一夜にして世界が終わってしまう。

切嗣が聖杯を破壊する決断を下したのは正解だ。聖杯の中に何が潜んでいるかを知り、それでも聖杯を使おうとする人間など正気ではない。こんな大量破壊兵器、とつとと始末してしまうに限る。

「なんてことだ……。臓硯も言峰も、それを知ってるくせに聖杯を使おうとしているのか」

「さて……今にして思えば、言峰は聖杯を使っていたのやもしれぬ。ヤツは前回の最後、聖杯に最も近づいた男だった。あの時点で、聖杯は願いの先約程度なら受け付けるのではないかと読んでいたが……その一部があの大火だったのかもしれない」

言峰の願いの結果が、あの大火災——。憶測に過ぎないが、恐ろしいことに、もしそうだとするならば筋が通ってしまう。

聖杯は悪意によって汚染され、歪んだ形でしか願いを叶えないモノと成り果てた。そんなもの、普通の人間にとつては呪いの壺と変わらない。しかし、聖杯に託す願いが、悪意を元にしたものであるならどうか。大量破壊兵器としての用途であれば、こんなに恐ろしいものはない。この世全てを呪い尽くす悪性呪詛など、核兵器さえ比較にならないほどの脅威だ。

言峰は、十年前にその威力を知っていた。にも関わらず、あの男は聖杯を求めている。街を焼いた大殺戮こそヤツが望んでいたもので、その悪意の具現化を、今度こそ完全な形で目論んでいるとすれば——そんな存在は、捨て置いていいはずがない。

理不尽な力による大量虐殺。それを為そうとする者は、衛宮士郎にとつて断じて許せない『敵』だ。切嗣がヤツの仇敵だったというのも当然の話だ……俺の知る切嗣であっても、十年前聖杯を求めた『正義の味方』であつても、言峰綺礼という男は必ず退けなければならぬ敵だっただろう。

「言峰の狙いは分かった。けど、臓硯はどうなんだ。あいつらに従つてるセイバーは……」

「フン。魔術師どもの目的は最初から一つだ。我は臓硯とやらを知らぬが、聖杯を作り上げた往時の志を捨てずにいるのであれば、奴らの狙いは根源への到達——即ち、世界の外側だ。少なくとも、時臣はそれを目論んでいた。

外側に出してしまえば、内側が呪いの海と成り果てようが知ったことではあるまい。何を犠牲にしても根源とやらを目指すのが、魔術師どもの習性だ」

「……そうか。そりゃ分かりやすい。内側を壊すことが目的の言峰と、外側に出ることが目的の臓硯。こいつらが手を組んだ理由は、利害の一致か」

二人がどこから手を結んでいたのかは知らない。だが、聖杯戦争の仕組みを敷いた御

三家と、それを監督する神父が手を結んでいたなど趣味の悪い出来レースだ。これが表沙汰になれば、魔術協会も聖堂教会も黙ってはいまい。

連中が公然と動き出したのは、最終目的である聖杯の起動に王手がかかったからか。最後のサーヴァントであるギルガメッシュユサエ倒せば奴らの障害はなくなり、その果てにどのような惨事が待っているかなど想像さえできない——もしかすると、俺たちの双肩に世界の行く末がかかっているのか。あまりに途方も無い話に、まったく実感が湧いてこない。

しかし、令呪の縛りがあるとはいえ、あの誇り高く正義感の強かったセイバーがそのような悪漢に手を貸すことを良しとするだろうか。あるいはその矜持さえ、『この世全ての悪』に汚染されてしまったのか——。

「セイバーが何を考えているのかは知らぬ。新たな主に忠を尽くすことを選んだのか、聖杯に毒され戦うだけのモノと成り果てたのか——それとも、聖杯への執着を未だ捨てきれぬのか。」

どの道、今の騎士王は貴様の敵だ。慈悲など不要、倒さねば命を落とすのは貴様だけではないぞ」

その言葉が、俺の思考に冷水となって降り掛かった。

アーチャーの言うとおり、セイバーを退けなければ言峰や臓硯には届かない。汚染さ

れた聖杯がどのように使われ、どのような惨禍を撒き散らすか予想さえできない以上、かつての仲間を慮っている余裕はない。どれだけ楽観視しても、連中が最終的に聖杯を使用した場合、その余波が前回の最後に起きた大火災を下回るなどありえないだろう。

「——さて、このあたりでよからう。結論から言えば、此度の戦は十年前……いや、それ以前からの歪みの集大成というわけだ。十年しか間が開いておらぬのは、前回の終盤でほとんど儀式が成功しかけていたからだろうな。」

戦うべき敵を理解したか、小僧。であれば、戦備を整えておくがいい。古来より戦の正着とは、始まる前に見えているものだ」

喋りながら器用に食事を済ませていたギルガメッシュが、淡々とそう締めくくる。

敵の狙いは分かった。十年前、何が起こっていたのかも知った。どれほど難易度が高かろうと、今俺が進むべき道は一つだけ。第四次聖杯戦争の裏側に、俺の決断を変える要素はなかった。

変わったのは、悪意を持った敵と聖杯を、なんとしても撃破しなければならないという決意の強さ。決戦までの時間は残り半日、それまでに戦略を練っておかなければ――



\*\*\*

「そういえば、なんで料理なんかできたんだ？ アンタ、料理人に作って持って来させる側の人間だろ？」

「……………貴様もあのマーボーとやらを食ってみるがいい。言峰のあれで原典より落ちるといふのだから恐れ入る。あんなものを食らうぐらいであれば、王自ら調理する方がマシだ」

\*\*\*

「——これはこれは。随分と手酷くやられたものだな、アーチャー」

深山町の外れにある山寺、柳洞寺。

懇意にしている檀家も多く、寺自体の関係者もかなりの人数に登る由緒正しい寺社であるが——古来より優れた霊地であるこの場所の地下に、巨大な洞穴が広がっている事実を知る者はほとんどいない。

それを知る数少ない人物が、聖杯戦争の監督役を務める言峰綺礼である。この、知る人ぞ知る秘境で羽を休めていた神父は、暗がりから現れた己がサーヴァントの姿を認め

ると、無感情に唇を吊り上げてみせた。

「……さすがは音に聞こえた英雄王だ。この首が繋がっているだけ、僥倖と言えるだろうな」

主に飄々と答えるのは、激闘から今しがた帰還した赤い弓兵。しかしながら、満身創痍の身とあつては、声に覇気が宿るはずもなかった。

右手と左足は骨折。腹部には深い刃傷が残り、全身に走る裂傷は数知れず。魔力の消耗は、現界に影響が出る一歩手前の状況。ボロボロというしかない、傷だらけの姿である。

アーチャーが投影できる宝具の中には、治癒能力を發揮するものも存在する。しかしそれを使用したところで、セイバーのように高度な自己再生能力を持たない弓兵は、完全回復まで時間を要する状態だ。

マスターに返事をする、アーチャーは彼が腰掛ける平坦な岩から視線を外し、そのずつと奥——洞穴の最奥に位置する、巨大な構造体を注視する。それが巨大な魔法陣から赤い光を放っているおかげで、仄暗くはあるものの、この空間はそれなりの視界を確保できている。この尋常ならざるオブジェクトの正体こそが、聖杯戦争を司る、超抜級の魔術炉心。即ち、大聖杯と呼ばれるモノだった。

「それで、そちらの首尾はどうかね。私が戦っている間、『聖杯の器』とやらを確保して

いたのだろうか？」

「ふむ——少々手こずらされたが、君がギルガメツシユを誘い出してくれたおかげで上手く事が運んだ。正規も予備も、双方が私たちの手中にある」

陽動作戦は成功だと語る言峰に、当事者でありながら無表情を貫くアーチャー。実のところ、彼はこの後何を目的として聖杯戦争を戦えばいいのか、少々決めあぐねていた。

彼が目的としていた、過去の自分との対峙。未熟な半端者が相手だったにも関わらず、先の戦いはアーチャー自身が敗北を悟っていた。英雄王という力呼び込む一手を繋ぎきった衛宮士郎は、戦略に於いてアーチャーを凌駕した。物理的に彼を打ち倒そうと、戦上手を自認する弓兵にとっては本来の領分で遅れを取ったことになる。

そればかりか、あの男は全てを救おうという道を選んだアーチャーにはならないと言いつつた。今の自分に繋がる存在を自分自身の手で始末することがアーチャーの目的だったというのに、あの衛宮士郎は違う道を歩き始めている。これを喜ぶべきか悲しむべきか、アーチャーには判断がつかなかったが、これ以上あの自分と戦うことに意味はないという確信はあった。

では本来の領分に戻り、マスターに忠を尽くすかというところ、これもまた肯んじかねるところがある。生前幾度となく裏切りを受けたアーチャーは、きな臭い雰囲気鼻が利く。その彼の嗅覚が、どうも好ましくないものを感じ取っているのだ。

だいたい、言峰が手を組んでいるという間桐臓硯なる人物を自分は詳しく知らぬし、彼が使役しているというあの『影』は何なのか。先だつての戦場で突如現れたバーサーカーにしろ、尋常な様相ではあり得なかつた。いかにあの英雄王が脅威であるとはいへ、彼らが用いようとしている手段は、おそらくはダーティと呼ぶことさえ憚られる。今は情報が足りないが、場合によつては『守護者』の端くれとして、このマスターたちを相手に戦う展開さえアーチャーは選択肢に入れていた。

「せつかくだ。確保してきた『聖杯の器』、君も一目見たいとは思わないかね」

唐突に、思いついたように言峰がそんな提案をしてくる。虚を突かれたアーチャーはしばし黙るが、肩を竦めてそれに答える。

「噂の願望機というものか。生憎だが、私は聖杯に託す願いとやらを持たない身だ」

「そうかね。暇潰しぐらいにはなりそうなモノだが——どの道、決戦は夜になる。それまで、穴藏でただ身を潜めているのも息が詰まるだろう」

現時点では何の効果も発揮しないという聖杯の器。アーチャーとしては、その出処が衛宮邸というのが気にかかるものの、中身についてはさしたる興味がなかつた。だがマスターの言うとおり、ただ傷を癒やすために夜まで控えているというのも芸がない。

「ふむ……では、万能の釜というものを拜ませてもらおうとしようか。マスター、君が持っているのかね？」

「いや、アレは少々嵩張るのでね。物はあちらに転がしてある、好きに見てくるといい。退屈はしないだろう」

言峰が顎でしゃくつてみせた方向には、ちょうど長方形の台座になっているような岩がある。角度と光陰の関係上ここからは見えないが、その上に噂の願望機とやらが鎮座しているのだろうか。

英霊とはいえ、話題に上がれば気になつてくるのが人情というもの。折れたままの足で動くのは億劫なため、霊体化してそちらの方に向かうアーチャーだったが、その後ろで薄っすらと笑っている言峰に気づくことはなかった。

言峰からすれば、これはささやかなサプライズのつもりだった。器といえば、普通は無機物を思い浮かべる。よもやそれがあんなモノとは、想像ができる方がおかしい。予想外の展開を目の当たりにしたサーヴァントを見て、反応を愉しもうという心積もりだったが……些細な邪心がこの英霊との間にどのような化学反応を引き起こすか、アーチャーのパーソナリティを知らぬ言峰には、さすがに想像できる範囲を超えていた。

「どれ、聖杯の器とやらを……な、に——!?!」

如何なる効能なのか、大聖杯のものとはまた異なる魔法陣が敷かれた台座。その上で実体化したアーチャーだったが、眼下にあるものを見て、束の間思考が真っ白になった。そこにあったのは、器物などではなかった。台座に横たわり、意識を失っているのは

二人の少女——イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと、間桐桜。その双方に生前見覚えがあることに気づいたアーチャーは、雷に打たれたように硬直してしまつていた。

「ただの『物』では破損する。故に、アインツベルンは器そのものに人格を持たせたというわけだ。所詮は使い捨てだというのに贅沢なことだ。

もう一方は、間桐が作り上げた器だな。機能としては当然正規品の方が上だが、此度の戦で主となつているのは間桐の器の方らしい」

絶句するアーチャーの反応がないことを訝しんだ言峰が、遠くからそう声をかけてくる。愕然としている弓兵は、その言葉の意味を理解するまで、暫しの時を必要とした。

彼には聖杯から与えられた知識と、生前の僅かな断片を覗いて、聖杯戦争にまつわる知識はない。しかし、生前魔術師だった彼は、魔道に関する一定程度の知識を持つ。英霊の魂を集めて行われるという大儀式、その受け皿となる器が生体というのは、どう考えても消耗品だ。つまり、聖杯戦争が終結を迎える時、この少女たちの生命はない。

魔術とは元より命を対価とするもの。その程度の前提は、アーチャーとて理解している。だが、今日の前に横たわっている二人は、摩耗しきつた記憶の中でもまだ残っているくらい、彼にとっては特別な存在だった。

姉を名乗る、雪のような少女。

家族も同然の存在だった後輩。

その二人が、聖杯の器であり、犠牲を前提とした存在——。事実を咀嚼できないアーチャーが固まっていると、紫がかつた髪を持つ少女が、ぴくり、と身動きする。

「っ、あ——せん、ぱい？」

今度こそ、男の顔が蒼白になった。

幽霊を見たような顔で、一步後ろに下がるアーチャー。ぼうっとした様子の少女は、光のない瞳を足音に向けるが、その焦点は合っていないかった。意識が朦朧としているのか、あるいは目が見えていない状態なのだろう。

「ごめんなさい——わたし、よく分からないんですけど……怖い人に、捕まってしまつて……」

「ッ……オレ、は……」

違う、と口にしようとする。自分は君が知っている衛宮士郎ではない別人だ。ただのサーヴァントで、君を拉致した人間に与する、悪党に過ぎないのだと——。

「でも、助けに来てくれたんですね。先輩は、すごいな……。いつも迷惑ばかりかけてしまつて、ごめんなさい」

続く言葉が、アーチャーの口を封じた。明らかに、この少女は目が見えていない。そればかりか、熱に浮かされたような様子で途切れ途切れに言葉を発する様子は、尋常で

はなく体調に問題があることを物語っている。意識とて、きちんと保てているかどうか怪しい。

にも関わらず、妄想でも幻覚でもなく、間桐桜という少女は今ここに立っている人間が衛宮士郎だと確信していた。なまじ視界が定まっていなから、本能的に本質を見抜いてしまったのか。

「すみません。なんだか、目がよく見えなくて……ここがどこなのかも、正直分かっていないんです。今の私が、どんな状態なのかも……。」

もし私が、どうしようもなくなってしまうていたら、いつそのこと……って、こう言ううとまた怒られちゃいますよね。こんな時どうすればいいのか、教えてもらったばかりなのに……。」

力なく微笑む少女の姿に、摩耗したはずの記憶が蘇る。生前、この少女とはどのような出会いをし、どのような別れ方をしたのか、もうアーチャーが思い出すことは叶わない。

ただ、それでも。あの土蔵で、困ったように自分のことを起こしてくれて。朝に夜にと、競い合うように料理を作って。何気ない話で笑いあった、あの夢くも尊い時間だけは……。

「——先輩。私のこと、助けてくれますか？」



その問いかけに。男の中で、ガキン、と撃鉄が起こされた。

「——わかった。待つてろ、桜。すぐに終わらせて、助けてやるから」

『衛宮士郎』の言葉に、安心したように微笑む桜。それで限界だったのか、再び少女は意識を失い——無意識の内に膝を落としていたアーチャーは、ゆらり、と幽鬼のように立ち上がる。

無言のまま、その両手に双剣が現れる。何をすべきかを完全に見失っていた彼を、かつての後輩の頼みがあるべき場所へと引き戻した。守護者としてでもサーヴァントとしてでもなく、衛宮士郎である彼に伸ばされた、救いを求める手。どれだけ摩耗しよう、と、どれだけ絶望しようと、それでも遠い日の記憶を捨てられない彼に、後輩を助けない選択肢などありはしなかった。

桜もイリヤスフィールも、言峰綺礼と得体の知れぬ間桐臓硯は諸共に聖杯戦争の供物とする心算だ。彼らは既に敵、となれば先手を打って駆逐する他ない。裏切り者と謗られようが、人類への脅威である黒い影を利用し、明らかな外法で英霊の尊厳を踏み躪り、あまつさえこの少女たちを犠牲にしようとする奴隷に手を貸す理由は残されていない。

こちらに興味を失ったのか、言峰綺礼は明後日の方向を向いている。サーヴァントの身体能力を以てすれば、一撃の奇襲でケリをつけるなど造作もない。如何に相手が歴戦の代行者であれ、戦闘兵器たるサーヴァントと比較すれば、生物としての限界が存在す

る。

懸念事項としては、『サーヴァント契約の破棄に類する行為の禁止』という令呪の縛りが痛い。これがなければ、アーチャーは魔術契約を破棄する宝具を用い、一度場を退いて状況を整える選択肢を生み出せた。それが叶わぬ以上、速攻の不意打ちで決着をつけるしかなくなってくる。それとて令呪の禁則事項の範囲内ではあるが、抽象的な文言のせいか、主への攻撃にかかる抵抗は無視できる範囲だ。追加令呪を使われる前に首を断てば問題は無い。

片腕が折れている状況では、弓を用いた狙撃は不可能。だが、剣さえあれば十分。無事な片足で踏み込み、音速を超えた速度で突貫すれば、何が起きたかを把握されるより先に事は済む——

「——何々々々々。これ、綺礼よ。飼いだの躰がなつておらぬではないか」

鎌となつてアーチャーが飛び出した、まさにその瞬間。真つ黒な影が、彼の体を覆い尽くした。

驚愕する弓兵が気づいた時には、彼の体はその過半が悪性の底なし沼に沈んでいる最中。前兆すら感じさせない急襲は、最初からこの空間全体に影が潜んでいた結果だと、

遅まきながら真相に気づく。

辛うじて自由の効く首を動かせば、いつの間にか洞穴に現れていたのは、背の曲がったひ弱そうな老人。邪悪な腐臭を漂わせるあの翁こそが間桐臓硯であり、この場にいなという前提そのものが間違이었다のだと、アーチャーは致命的な錯誤に齒噛みする。

「く、そ——悪い、桜……」

ずぶずぶと、弓兵の姿が沈んでいく。最後に小さく謝罪の言葉を残したアーチャーは、幾多の英霊を呑み干した黒い影に吸い込まれ、ついに見えなくなってしまう。それは人理の守護者の幕切れとしては、あまりにも呆気ないものだった。

ゆらゆらと洞穴を彷徨う、英霊を飲み込む恐るべき怪魔。それが勇気を振り絞り、助けを求めた桜を通じて顕現したものだというのは、皮肉にも程がある展開だろう。

「……よもや、この局面でアーチャーが裏切るとは。これはさすがに、私の予測を外れていた」

ただ座して事態の推移を見守っていた言峰は、ここに来てようやく口を開く。淡々とした口調だが、彼は内心、この反逆を心底不思議に思っていた。これまでの経緯を振り返つても、自分とアーチャーは、そう悪くはない主従関係を築いていたはずだが……。

首を捻る神父だが、彼の知識から正解が導き出せないのは当然だった。まさかあの英

霊が衛宮士郎の成れの果てであり、間桐桜とイリヤスフィールの双方を知人としていたことなど、予測できる方がどうかしている。その二人を犠牲にするという示唆が、助けを求めた後輩が——ひいては、その決断を促すに至った自分自身の声こそが反逆を決断する契機となったことなど、それこそ神でもなければ知り得ぬ話だった。

「なに、農からすればお主とアーチャーが手を組んでいる方が腑に落ちぬ。腐れた悪党のお主と違って、アレは善なる側の英霊だ。何が呼び水となったかは知らぬが、いずれこうなるのは自明だったの」

「なるほど。同類にされるのは不名誉だが、私の何かは彼とは相容れなかったか。理解に苦しむが、実際に牙を向けられた以上は事実を受け入れるしかなからうな。

……だが、ここに来てアーチャーの脱落は痛い。ギルガメツシュを相手に、セイバー一騎では荷が勝ちすぎるだろう」

サーヴァントに裏切られたばかりだというのに、言峰の冷静さは崩れない。驚きはあったが、ギルガメツシュに対して用いる武力という以外に、彼がアーチャーに求める役割は残っていないかった。

残る意義が薄いのであれば、拘泥する理由もない。元よりサーヴァントを駒として割り切っている言峰は、もう済んだことだと早々に意識を切り替え、次の手を模索する段階に移行している。裏切ったという事実はただの事実に過ぎず、その動機を深く掘り下

げるだけの意義を、言峰は有してはいなかったのだ。

「アーチャーは既に影の中よ。やや時を要するが、マスターを桜に替え、セイバーと同様に用いればよい。戦端が開くまでに間に合うかは五分というところじゃが、今宵の内には間に合おう」

臓硯の言葉を聞いて、言峰の脳裏に幾つかのプランが描かれていく。当初予定していた、前衛のセイバーと後衛のアーチャーという布陣、切り札の黒い影の三段構えでギルガメッシュを制するという戦略は裏切りによって崩壊した。弓兵を黒い影に取り込んだ現状、セイバーと同じように汚染した上で令呪を行使し、再使役するという臓硯の案は理に適ってはいるが……ギルガメッシュの襲来までに間に合わないのであれば、結局最初のプランは使えない。

「しかし、相手はあのギルガメッシュだ。戦力を逐次投入しては、各個撃破の憂き目に合う。セイバーとアーチャー、双方が敗れば……」

「ほれ、それこそ好都合であろう。英雄王がどう動くか、賭けの要素は残っておるが——その時には、七騎全ての魂が焚べられておるではないか」

滴るような笑みを浮かべる臓硯。彼の指摘に、言峰は意表を突かれる思いだった。

今回の聖杯戦争を儀式として成就させるためには、ギルガメッシュの撃破は必須事項ではないのだ。七騎のサーヴァントという頭数さえ揃っていれば、聖杯を動かすには事

足りる。

実を言えば、このまま影に取り込んだアーチャーを吸収・分解し、残るセイバーを自害させれば、英雄王という存在を蚊帳の外に置いたまま儀式は完成してしまう。ところが、セイバーは最初に取り込んだサーヴァントであるせいも、汚染に成功し指示を聞いてこそいるものの、令呪の命令系統を構築することには失敗しているのだ。令呪なしに自害など命じようものなら、聖杯を求めていた彼女は即座に叛逆してくるだろう。

故に、彼らの目的のために最も手っ取り早い手段は使えない。次善の策はギルガメッシュを撃破し、残るセイバーかアーチャーの最低一人の魂を用いること。セイバーはともかくアーチャーに関しては、黒い影によって幾人かサーヴァントを吸収したノウハウがあるため、令呪による命令系統を再構築し——それによって自害を命じることも可能だ。

つまり。ギルガメッシュを撃破すれば、その時点でセイバーとアーチャーの二騎がどうであろうとこちらの勝利。撃破することが叶わずとも、セイバーとアーチャーの双方が脱落すれば聖杯は動き出す。無論、英雄王の侵攻速度が常軌を逸して速く、聖杯が起動するまでのタイムラグを突かれ何もかも吹き飛ばされる懸念はあるが——サーヴァント戦で勝とうが負けようが、おおよそどのルートにおいても、言峰と臓硯の戦略目標は達成される目論見だった。

「アーチャーの調整が間に合えば、二騎でもつて英雄王を迎え撃てば良い。間に合わぬのであれば、セイバーと英雄王を潰し合わせ、後からアーチャーをぶつければ良い。彼の王が全てを打ち倒したとしても、なに、その時には時間切れよ——どの道、我らの勝利は決まっておる」

呵々、と悪意の宿る哄笑が響く。五百年を生きた老翁は、己が野望が成就する未来を確信し、ただひたすらに嗤っていた。

——何のために聖杯を求めたのか、その理由を忘れたまま。

## 31. 遺産の価値

——そうして、最後の夢を見る。

雨が降っていた。

荒れ果てた、草木の生えぬ石塊の大地。その物寂しい場所で、男が膝を突いている。

よく注視せねばそれと分からなかつただろう。黄金の髪に鍛え上げられた肉体、下半身を覆う黄金の鎧——その特徴は確かに古代都市の頂点に座す王のもの。しかし、彼が常に纏う超然たる王気……他を押し頭を垂れさせる、人も神も世界すらも尽く凌駕する王者の覇気は、ほんの僅かにさえ伺い知ることができなかつた。

常に傲然と立っていた王は、力なく大地に座り込み、その両腕に何かを抱えている。見る影もなくやせ衰えたそれが、王と覇を競つた緑の髪の人形であると、俄にわかには信じがたい。自由奔放に地を馳せていた人形は、深刻な病にでも罹患したように、生氣の感じられぬ姿だつた。

熱にでも浮かかされているのか、虚ろな瞳からはまるで力が感じられない。それでもその眼差しは、彼を見下ろす王に向けられていて——雨ではない透明な液体が、その頬に一滴ほろりと溢れ落ちた。



「悲しむ必要はありません。僕は兵器だ。君にとって数ある財宝の一つにすぎない。この先、僕を上回る宝はいくらでも現れる。」

だから——君が頬を濡らすほどの理由も価値も、僕にはとうにないのです」

黄金の王の顔は見えない。しかし、痛切なまでに震える肩を見れば、人形の言葉を聞かずとも彼の表情を知ることができた。

傲慢で余裕綽々で、笑うか怒るかという感情しか見せなかつた絶対王者。それが深い哀切に包まれ、絶望に膝を屈しているなど、誰が想像できたろうか。

おそらくは人形にとつても、王の姿は胸に刺さるものがあつたのだろう。喉から絞り出すような声で、自分のためにそのような顔を見せる必要はないと訴える緑髪の人形だったが、王は激しく頭を振って否定する。

「価値はある。唯一の価値はあるのだ。」

我はここに宣言する。この世において、我の友はただひとり。ならばこそ——その価値は未来永劫、変わりはしない」

あらゆる財宝を手中に収め、あらゆる存在の頂点に立つ孤高の王。その彼が、どの財宝とも比にならぬ『友』のことを明言する——その重みがどれほどのものか、目を見開いた人形が雄弁に物語っていた。

瞬間、人形に浮かんだ表情は、幾つもの感情が入り乱れたものだった。喜び、高揚、驚

き、苦しみ、悲しみ……。そうして最後に残ったものは、やるせない慟哭。何よりも友誼に厚く、何よりも朋友を想うからこそ、深すぎる悔恨だった。

「この僕の亡き後に、誰が君を理解するのだ？ 誰が君と共に歩むのだ？」

朋友よ……これより始まる君の孤独を偲べば、僕は泣かすにはいられない……」

今や泣いているのは、王ではなく人形の方。最初は剣を交え、その後は歩みを共にし、苦楽を分かち合った二人の絆は余人には計り知れない。間近に迫った死期よりも、絆を結んだ友に孤独という鎖をかけてしまうことをこそ、人形は嘆いているようだった。

それが、最後の力だったのか。人形の手がふらりと垂れ下がり、瞳から光が消えていく。その最期に漏れた懺悔の声を、果たして慟哭する王は聞き届けていただろうか。

「——ああ。なんて、罪深い」

僕は君に、消えない瑕をつけてしまったんだね——。

……そうして、エルキドウという名の英雄は息を引き取った。後に残されたのは、かつての輝きが嘘のような、崩れ果てた石塊だけだった。

土より作られた兵器は土へ返り、残されたのはただ独り。掌に残る友の残滓を握りしめ、長い、とても長い間……王はその場に座り込んでいた。滂沱と流れる雨が肩を打つのも、轟雷が近くに落ちるのも構わず、薄暗い空の下、男はただ何かを噛みしめるように独りその場に留まり続けた。

やがて雨が小降りになった時、男はようやく立ち上がる。乱れた髪の毛のせいで、彼の目は伺えない。だが、頬を流れる雨ではない雫と、固く結ばれた口元……そして、天を見上げるその姿は、何某かの決意を伺わせた。

——それからの道筋は、王が今までに築き上げた冒険譚の数々と比して尚、苦難に満ちたものだった。

統治者として君臨していた街に戻ると、最低限の引き継ぎ処理だけを済ませた彼は、側近の女性が止めるのも聞かず独りで荒野に踏み出した。まるで、何かを振り払おうとしているかのように。

共に笑い合い、どのような窮地でも支え合い、競い合って切り抜けてきた相棒はもういない。襲い来るあらゆる困難を、彼は独りで切り払っていった。そこにかつての愉しみはなく、王の表情に余裕はない。焦燥に突き動かされるようにして、男は人知を超えた魔境を歩き続けていく。

野盜崩れから魔獣の群れまで、数多の敵が立ちはだかった。極寒の大地から獄炎の火山まで、幾多の環境が彼を阻んだ。……その尽くを、余裕も愉しみもないまま、彼は斬り伏せていった。

彼を突き動かしているのは、信じがたいことに、死に対する恐怖だった。最強の神獣でさえ討滅し、贅と財を貪り尽くした絶対の王だというのに——彼に比肩する力を持つ

た親友は、死という呪いの前に敗れ去った。そんな友を助けることさえ、男にはできなかった。同じ立場になった時、自分も為す術なく死に膝を屈するのか？ 森羅万象を裁定する王が、死に際しては無力だというのか？ そのような末路は認められぬという怒りと恐れが、彼の歩みを止めさせない。

この世のどこかにあるという、不老不死の秘密。霞のような伝説を求めて、男は何年も荒野を彷徨った。そうしてある時、ついに耳にする……ある賢者が、不死に至る秘宝を持つていると。

更に幾年もの冒険の末、何度となく死の危険に直面しながらも、遂に男は伝説の賢者と邂逅した。陸を渡り海を超えた秘境——この世ならざる冥界で賢者と語った彼は、とうとう永遠の命に繋がる霊草を手に入れた。遠い遠い道のりの果て、男は掴んだ勝利に酔う——これでようやく、友すら敗れた死という難敵を上回ったのだと。

かつて君臨した都市へ、凱歌と共に戻ろうとする男だったが、道中ふと自分の姿に気づく。常人では一度だろうと耐えられぬ苦難を数限りなく切り抜け、一つでさえ伝説になる冒険を数え切れぬほど繰り返した彼の姿は、王であるとは誰も信じぬであろうほど荒んだ状態だった。これはいかんと、彼は泉で身を清めることにする。

積もり積もった汚れと疲れを清水で洗い流す彼は、友を喪つて以降一度も浮かべることがなかった笑みを浮かべていた。恐ろしいほどの執念を以て、ついに死を乗り越える

術を手にした英雄。神も呪いも恐るるに足らずと、彼は溢れんばかりの悦びに打ち震えていた。

そうして身を清めたところで、笑いながら荷を置いた木陰に戻る男。しかし、荷を検めた途端、その表情が凍りつく。筆舌に尽くしがたいほどの日々を越えて手に入れた、勝利の証である不老不死の靈草——ほんの一時目を離れた隙に、地上のどの財より貴重なそれが。こともあろうに、そこらの蛇に貪り食われてしまっていたのだ。

「——ク」

数瞬、色を失っていた男。ややしばらくして我に返った時、彼を襲ったのは絶望でも激怒でもなく——途方もない笑いの衝動だった。

「フ——ク、ふははは、ふははははは、は——っはっはっはっは!!!」

それは、何に対する笑いだったのか。苦笑でも嘲笑でも哄笑<sup>!!!</sup>でもなく、その全てでもあるような高らかな笑い。何十年と追い求めた秘宝が一瞬で零れ落ちるといふ末路に、この男は何を見出したのか——紅蓮の瞳は絶望どころか、新たなる希望を浮かべて遙かな空を見上げていた。

友を喪つて以来、何十年にも亘つて男に積み重なっていた、死という滅びへの恐れや焦り。不滅へ至る術が消え失せたというのに、男からはこの時負の感情が完全に払拭されていった。輝ける英雄王が、再び地上に君臨した瞬間だった。

ひとしきり高笑いをすると、王はその身一つのまま、颯爽と街へと戻っていく。彼の冒険は終わり、手に入れたはずの宝は失われた。しかし——彼自身の手には確かに、得られたものがあつたのだ。

そうして、男の旅路は終わる。彼が冥界を旅する間にすっかり荒廃していた城塞都市を再興し、伝説の宝物庫を完成させ、王は長い眠りにつく。その偉業を称えた民衆は、一つの物語を書き記した。

それこそが——一人の英雄の、世界最古の英雄譚。旧き叙事詩に描かれた、ギルガメッシュという男の歩みだった。

\*\*\*

——遠い夢を、見ていたようだ。

目が覚めると、横になっていた居間に夕日の欠片が入り込んでいた。万一に備えて部屋ではなく、すぐに動ける居間で仮眠を取っていたのだが、ぐっすり眠れたということ。は悪い出来事は起こらなかったのだろう。

起き上がったて伸びをすると、思いのほか体が軽いことに驚く。この聖杯戦争が始まって以降、度重なる激戦や傷のせい、体に残り続けていた疲労感や倦怠感……そういつ

たものが綺麗さっぱり消え去り、気分まで不思議と清々しい。神代の霊葉は、途方も無い効き目だった。

念のため各部位のチェックを兼ねて軽くストレッチをしてみるのが、打ち身も切り傷も骨折も、どこもかしこも完全に治っている。そればかりか、この数年感じたことがないほど体のキレがいい。これならば、万全の状態で最後の戦いに臨めそうだ。

「……雑種よ、何をしている？ 我の知らぬ異教の呪いましなか？」

そうして体をほぐしていると、どこからともなくギルガメッシュが現れた。ちようど屈伸をしている最中だったせいか、怪訝な目を向けられてしまう。

「ただのストレッチだよ。薬のおかげで体は治ったみたいだけど、一応傷が残ってないか確かめなきゃいけないからな。」

そういうあんたは何やってたんだ？ 俺が休んでる間、ヒマだっただろ」

「それでもない。散策がてら、少しばかり街を偵察してきてやったところだ。およそサーヴァントの気配が見当たらぬあたり、我の読み通り、敵はどこぞの拠点に潜んでいるらしい」

何気なく口にするアーチャーだったが、その言葉の意味するところに、顔からさつと血の気が引く。この男が街に出ていたということは、つまりその間、この家は寝ている俺と遠坂しかいない無防備な状態だったってことか——？

青ざめた俺に、ふんと鼻を鳴らすギルガメツシユ。見てみる、と首の動きで示してくるサーヴァントに疑問を覚えつつ、台所の窓から外を覗いてみると……そこに、ふよふよと小型のUFOのような円盤が浮かんでいた。え、一体なんだこれ。

「自動防衛用具だ。オートディフェンサー我が不在の折、敵の奇襲を甘受したとなれば、力を貸すと口にした私の沽券に関わる。ありがたく思うがいい」

よく見れば、宙を漂う謎のUFOは、バチバチと小さな紫電を放っていた。敵対者や攻撃に対して、あの雷で迎撃を行うのだろうか。家主の知らない間に、この家は要塞化されてしまったらしい。

この男のことだし、自分がいない間は貴様たちでどうにかしろとでも言い出すものだと思っていたが、先の霊薬といいこの宝具といい、どうにも大判振る舞いしてくれているように感じる。この英霊に限って単なる善意であるとは考えられないし、いったいどういいう魂胆なのだろうか。

「そんな宝具まで持つてるのか……なんにせよ、助かった。寝てる間に襲われたらひとままりもなかったからな。

それで、サーヴァントが街にいないって本当か？」

「アサシンは既に消え、セイバーとアーチャーに気配遮断の技能はない。我の目と偵察宝具を潜り抜けて街に潜むことなど能わぬ。となれば、何処かに籠っているのだろうか



——敵の目的を考えれば、ねぐら 罠を絞り込むこともできよう」

あとは自分で考えろ、とばかりに顎をしゃくつてみせるギルガメツシユ。やつと寝起きから通常運転に移り始めた脳みそを動かし、状況を整理していくことにする。

俺の目的は、桜とイリヤを取り戻し、この腐った聖杯戦争を破壊すること。一方臙碇と言峰は、聖杯戦争の完遂を目論んでいる。

遠坂やイリヤから聞いた話によると、聖杯戦争は単純に全てのサーヴァントを打倒するだけでは成立しない。最終段階においては、然るべき霊地で聖杯の器を用いる必要がある。前回の聖杯戦争では、あの公園が霊地として選ばれたらしい。

となると、敵はその場所を押さえておかなければ勝利条件を満たせない。是が非でも俺は二人を取り戻しに行くとか分かっていながら、先に霊地を押さえた上で待ち構えておくのが常道。冬木の霊地とやらが一体どこにあるのか、へっばこ魔術師の俺にはさっぱり分からないが、ある程度の見込みはつく。

霊地というのは、大地に流れる霊脈の位置関係などが理由で魔力が溜まりやすい土地のことだ。何らかの魔術的儀式を行うなら、このアドバンテージを活かさない理由がない。つまり、この地に住まう魔術師の住居は間違いなく霊地と言えるだろう。

その中でも、街にいないという条件から遠坂邸と間桐邸は除外。市民公園も違う。となると残る場所は、郊外のアインツベルン城かもしくは——キャスター 魔術師が拠点としていた柳

洞寺。このうち、敵の迎撃に適している場所は。

「——柳洞寺。言峰たちがいるのは、そこじゃないのか?」

「ほう。貴様も頭が回るようになってきたではないか」

この男が人を褒めるとは珍しい……いや、褒めているかという微妙な言い回しだ。それはさておき、ギルガメッシュが否定しないということは、俺の推測も捨てたものではなかったようだ。

「この国の神社仏閣というのは、おおよそそのような地に建立されるものだが……あの寺は中でも指折りの霊地よ。なにせあの寺の下には、大聖杯そのものが埋まっている」

「柳洞寺にか!?! いや、でも、一成からそんな話は聞いたことも……」

この聖杯戦争の根幹を成す大聖杯。英霊の魂を集める聖杯の器、小聖杯と称されるものと違って、何百年と稼働するそちらは純粋なハードウェアのはずだ。どこに置かれていたという話は聞いたことがなかったが、魔術的なシステムである以上は、最高の霊地に設置するのは理に適っている。

しかし、柳洞寺は数十人からの僧職関係者が詰める大きな寺だ。葬祭や参拝のために一般人も数多く訪れるし、そんな場所にどうやって大聖杯などという嵩張りそうなものを隠しておけるのか。

「我も実際に足を運んだわけではないが、あの寺の地下には洞穴があるらしい。衆目に

晒されぬよう隠蔽された上で、その中に大聖杯は安置されている。

人の目につかぬ隠れ場所、霊地という地理的条件——この儀式の終幕を飾るに、これほど適した場所もあるまい」

地下の洞穴？ 柳洞寺には一成がいる関係でちよこちよこ足を運んでいたが、そんなものは見た記憶がない。

ということは、逆に信憑性が出てくる。その洞窟にはアーチャーの言う通り、一般人や俺のような木っ端魔術師では気づくことさえできないような高度な隠蔽が施されているのだろう。今にして思えば、キャスターが柳洞寺を拠点にしていたのは、魔術師に利する霊地であると同時にこうした背景まで掴んでいたからなのかもしれない。

「キャスターが陣を敷いていた場所だ。本格的な工房を築くには至るまいが、魔術師どももそれなりの守りは固めていよう。

さて、じき夜になる。戦端が開かれるまでは近い。雑種よ、門を崩すに至る槌は持っているか？」

「……心当たりがないわけじゃない」

破城槌の代わりになるもの、敵陣に攻め込むための武器。俺が使えるようなものといえ、中途半端な投影魔術ぐらいだが、以前にセイバーから聞いた話と、仮眠を取る前にギルガメッシュから聞いた話。それらを踏まえると、浮かび上がってくるものがある。

親父——衛宮切嗣は、手練れの暗殺者だった。それも、魔術師を現代の軍用兵器で殺傷するという、魔術世界から見れば異端にも程があるやり口を用いる『魔術師殺し』メイガス・マードラー。

諸々の時期から逆算すると、切嗣は第四次聖杯戦争の最中にはこの家を手に入れていたはず。そして俺を大火災から救い出し、養子として引き取るまではそう期間は開いていない。つまり……第四次聖杯戦争の際、切嗣が用いていた武器。この家のどこかに、それが眠っている可能性がある。

もちろん、俺の知らない間に処分されているかもしれないが……どうにもだらしなかつた親父の性格から考えると、分の悪い賭けではないはずだ。ただ、掃除や手入れでこの家のほとんどを見て回っている俺に、そんな怪しいものを見かけた覚えがまるでないという問題が残る。

「現世の銃火器か。言峰は多少の知識を持っているようだが、臓硯とやらは五百年を生きる妖虫。まず現代戦の知識を持つてはいまい。素人の貴様に多くは求めぬが、意表を突く一手にはなるやもしれん」

俺の話聞いて、ふむ、と顎に手を当てるギルガメッシュ。

警察や自衛隊ではあるまいし、俺は銃の訓練なんか受けていない。切嗣の武器があつたところで、ないよりはマシというぐらいだろう。

それでも、今は一手でも多くの切り札が必要だ。圧倒的な戦力を揃え、万全の布陣で

待ち構え、桜とイリヤという人質まで握っている敵勢力。あらゆる手立てを考え尽くしていかないかと、勝機は見いだせない。

「こつちの手札は多いに越したことはないからな。あんたの宝具に頼りつばなしつても格好がつかないし、そこを崩されると昨日の戦いみたいになっちゃう」

「ふん？ 殊勝な心がけではないか、小僧。我的手を煩わせぬよう、精々励め。」

しかし、肝心の現物が無いのでは話にならぬな。この家に住まう貴様が知らぬと言う以上、我が探し出せる道理もなからうが——」

「だよなあ……」

絵に描いた餅か、とため息を吐くと、どこからか冷たい風が吹き込んできた。南西側が派手に壊されているせいか、そこから冬の風が侵入してきたのだろう。

壊れた理由を藤ねえにどう言い訳するか、業者に修理を頼もうにもどう予算を捻出するか、改めて考えるとひどく頭が痛くなってくるが………待てよ。

「……修理？」

ふと何かが引っかかる。

俺がまだ小さかった頃、切嗣が生きていた頃に一度業者を呼んで工事を行ったことがあるはずだ。土蔵が老朽化しているから、その補修工事をするとかなんとか。

工事前の機械が音を立てて動くのが楽しかった俺は、ちよろちよろと現場にくつつい

て回っていた。それは確か、切嗣が業者と一緒に土蔵に入っていて暇だったからで……今にして思えば、作業の途中でそんなに立ち会う必要はあっただろうか。あの時既に、切嗣はかなり体調を崩していたはずだ。

俺は工事の専門家ではないから、ひよつとしたら家主が付きつきりで立ち会う必要のある何かがあったのかもしれない。だが、仮にそうではないとすれば？ 魔術的な暗示なり賄賂なりで、工事のついでに何かを隠させていたのだとすれば……？

「ちよつと土蔵を見てくる。もしかしたら、もしかするかもしれない」

「なんだ、宝探しでも始める気になったか？ 享樂がてら、付き合つてやろうではないか」

思いの外前向きなギルガメッシュ。少し驚いたが……夢で見た記憶の中で、この英雄は冒険を繰り広げた末に様々な宝を手に入れていた。根本的に、そういう宝探しが好きな性質なのかもしれない。

なんにせよ、尋常ならざる眼を持つ英雄王がセコンドになってくれるなら心強い。防寒着を纏い、ダメ元で土蔵に向かってみることにする。

……といつても、土蔵は藤ねえが持ち込んだ謎のグッズやら、投影魔術に失敗したハリボテやら、そこらじゅうよくわからないガラクタだらけだ。毎日のように入り浸っていた俺でも、正直何がどこに転がっているか分かったものじゃない。記憶を遡る限りで

は、銃火器のような危険物はさすがになかったはずだが、これを探すのは骨が折れそう  
だ。

「まったく、何度見ても貧しい蔵よ。ガラクタと贋作ばかりではないか」

土蔵に入るや否や、つまらなそうな嘆息が聞こえてくる。蔵自体は年季が入っている  
というのに、中身については言い返しようがないのが悲しい限りだ。

後ろで突つ立っているサーヴァントは手伝ってくれる気配がないので、積み上がった  
あれやこれやを崩していく作業に取り掛かる。壊れたストープ、画面の割れたテレビ、  
藤ねえがどこからか持ってきた怪しい人形……これ、一度まとめて廃品回収業者にでも  
頼んだほうがいいんじゃないか。

「親父の武器なんか、ほんとにこんなところにあるのか……う？」

脚が二本しかない椅子やらハンガーの束やらを引っ張り出していると、自分の仮説が  
疑わしくなってきた。このガラクタの中で武器になりそうなものなど、せいぜい鉄パイ  
プがいいところだろう。年末にここも大掃除しておけば、もう少しはマシなものが見つ  
かったかもしれないが……。

と、溜息を吐きながら物を整理していた時だった。

「む、下がれ雑種」

「へ……？」

突然の警告に、並べていた古タイヤから視線を上げる。すると正面から、不安定になつていた戸棚が倒れてくるのが見えて――。

「うおっ!？」

間一髪。後ろに飛び退いた瞬間、倒れた戸棚が古タイヤに激突し、どしーんと派手な音を立てた。ガラスがなかったから破片が四散する心配はないが、それでも肝を冷やした。

危なかつた……聖杯戦争の決戦が控えているというのに、ガラクタ漁りをしていたら怪我をしましたなど、冗談にもならない。冷や汗を拭いつつ、戸棚をずるずると引きずって安全な場所に移動させる。

いよいよもつて大掃除めいてきたが、この一大オブジェクトを除けたことで少しは終わりが見えたかもしれない。戸棚の後ろにあるのは壁だけで、後は散らかつた小物をまとめれば大方の物品はチェック完了。残念なことに、やはり武器や役に立ちそうなものは見つからなさそうだ。

「結局、ただの整頓で時間を無駄にしただけか……」

「――いや。そうとは限らんぞ」

後ろで欠伸をしていたギルガメッシュが、戸棚の裏から現れた空間を示してみせる。その視線を追ってみるも、ただの壁しか見当たらないが……？



「壁ではない、床だ。あの一帯だけ色が新しいではないか。そこだけ一度掘り返しでもしたかのような」

ちようど戸棚が乗っていたあたりの部分。サーヴァントの言うとおり、よく見ると確かにそこだけ色がやや白い。他の部分とは違う塗料で、正方形に染められている。

以前業者が入っていた時の工事は、確か壁の補強が目的だったはずだ。にも関わらず、色の違うエリアは壁からやや離れた部分にある。ガラクタと棚の下敷きになつていませいで今の今まで気づかなかつたが、こうして見ると明らかと違和感を覚える。

切嗣の遺産が眠っているかも、というのは我ながら投機的な思いつきだったが、ここに来てそれが現実味を帯び始めてきた。単に工事の際に必要なあつて手を加えただけ、というオチの可能性も高いだろうが、何かあるのではないかと勘が囁いている。後で補修材を買ってくればいいし、とりあえず掘り返してみようか。

「確か、ツルハシがこのへんに落ちてたよな」

ガラクタだらけの我が屋の土蔵だが、探すと大体の工具が落ちているというのが良いところだ。さっそく発掘したツルハシを拾い上げ、色の違う床に叩きつける！

——バキィッ！

「なんだ？ 思つたより柔らかい……」

金属が床を抉つた刹那、手応えとともに、あつさり大きなヒビが入つてしまう。コン

クリートにしてはやけに柔らかいし、ぶつけた際の反動も少ない。

首を傾げつつも、餅つきのようなスイングでツルハシを振るい、次々に亀裂を広げていく。重労働を予想していたが、思ったより床が柔らかいせいで、あつという間に色の違う一帯はボロボロになってしまった。砕けた床の破片を押し退けると、中から現れたのは――。

「……嘘だろ」

傍目にも頑丈そうな茶色のスーツケースに、よく楽器が入っているような横に長いケース。まさか本当にこんなものが埋まっていたとは、さすがに啞然としてしまう。この宝探しを思いつかなかつたら、おそらくこのケースは永遠に見つからないままだったろう。

ずっしりと重いそれを、埋まっていた地下から引き上げるのはそれだけでかなりの汗をかいた。背後から感じる面白げな目線に晒されながら、ゆっくりと留め金を外していくと。

「こいつは――」

今度こそ、俺は言葉を失った。

ケースの中に入っていたのは――この国では明らかに法律違反の、黒光りする金属の数々。映画の中だけしか見たことがない無数のそれは……紛れもなく、銃と呼ばれるモノ

だった。

俺だって一応男子なわけで、かつこいい銃に憧れた時代はあるし、慎二と一緒にシューティングゲームに興じていたこともある。クラスにはミリオタの同級生だっているし、そういう映画や雑誌を見たことだつてある。しかし、いざ本物を目にしてしまうと、ただただ圧倒されるだけだ。

それぞれに時代や誇り、信念や美しさを感じられた、歴史ある宝具たち。武器というカテゴリーにおいて同じはずだが、それらとこの銃器はまるで異なっている。神秘の体が宝具であるなら、この銃たちは人殺しという一点に特化した技術の究極だ。

狙撃銃——ワルサーWA2000。

突撃銃——ステアーAUG。

短機関銃——キヤリコM950。

自動拳銃——グロック17。

破片手榴弾——M67。

この他名称のわからない銃や弾丸、軍用ナイフ、対人地雷<sup>M18クレイモア</sup>、軍用爆薬<sup>C</sup>、予備弾倉、防弾チョッキ……個人で戦争でも起こせるのではないかという量の武器弾薬に、驚愕を通り越して恐ろしさを感じてしまう。切嗣が暗殺者だったという過去は、もはや疑いようもない。

「ハッ——これはまた随分と豪勢な宝を掘り当てたな、雑種。侘しい蔵にも、一つぐらいは見どころがあつたというワケだ」

横からひよいと覗き込んだギルガメッシュが、そう愉快そうに言い放つ。半ば愕然として武器を眺めていた俺だったが、第三者の声が聞こえたことで、ようやく眼前の現実を意識が追いついてきた。

「本当にこんなのが見つかるなんて……。でも俺、今更だけど銃なんか使ったことないぞ……？」

「たわけ。使ったことのない贗作を生み出す貴様が何を言う」

俺のぼやきに返ってきたのは嘲笑だった。言われてみれば、まあ確かにそのとおりである。

アーチャーの双剣も、あの男の干将・莫耶も、当然ながら俺は過去に一度だつて使ったことはなかった。にも関わらず俺が武器を使えたのは、長年使われた宝具に宿る、担い手の技術や経験ごと投影していたからだ。

刀剣宝具とは違い、構造要素が複雑すぎる銃火器の投影はできない。しかし、構造そのものの情報を読み取ること、宿る想念を投影することであれば——あるいは、手が届くのではないか。

ケースの中から短機関銃キャリコを引き出すと、ちょうど大きなペットボトルぐらいの重量が

ずしんと馴染む。かつてこれを手にした切嗣は、どのような想いで戦っていたのか、思いを馳せつつ――。

「同調、開始」

魔術回路を起動する。普段であれば、基本骨子や構成材質を解明していくのが解析の手順だが――ここに、実戦で散々使った投影魔術のプロセスを加える。

切嗣には、何もかもを読み取れるのは無駄な才能だと呆れられたが、今はそれが必要だ。武器の構造を読み取るだけでなく、そこに宿る担い手の経験を解析。黄金の双剣を投影した際に、ギルガメッシュの記憶ごと再現した感触の応用だ。

今まで何度もやってきたことを、ただ組み合わせるだけ。担い手の記憶ごと武器を投影可能というなら、そもそもその記憶を解析できていなければおかしい。たとえ銃を投影することが能わずとも、情報に焦点を当てる程度、できない道理がない……！

「全工程、完了！」

手応えと同時に、銃把横のレバーを操作し、銃身上部にある円筒状の弾倉ヘリカルマガジンを着脱。ケースの中にある予備弾倉を掴み、即座に弾倉交換しつつ、照門と照星を重ね合わせて狙いを定める。

……なるほど。切嗣はこうやって、この銃を使っていたのだろう。本人には遠く及ばないだろうが、その経験を模倣することには成功――こんなわけのわからない形をした

銃、経験を読み取れていなければ初見でスムーズなリロードなどできるはずがない。最低限、これなら使うことぐらいはできそうだ。

同じように自動拳銃も手に取り、手首の動きだけで弾倉の着脱、リロードを実施。問題は、ここで試し撃ちをするわけにもいかないため、反動や威力がよくわからないことだが……元々、不意をつけなければいぐらいに思っていた武器だ。実際に使えそうだというだけでも、特大の収穫に違いない。

「……………ん？ なにか落ちたようだぞ」

警察の押収現場よろしく、取り出した銃器を並べていると、背後からそう告げる声が。ギルガメツシユが指差す先に顔を上げると、武器ケースから白い紙状のものがこぼれ落ちたところだった。これはもしや、手紙だろうか？

防腐処理でも施されていたのか、まるで古びた様子もなく綺麗なままの手紙。封の横には、「士郎へ」と書かれていて……もしかして、これは切嗣の字か。

『士郎へ。』

この手紙を読んでいる頃には、僕はもうこの世にいないだろう。そして、君がこの手紙を読んでいるということは、とうとうこれが必要になる時が来たんだろう。

きっと君は、たくさんの武器を見て驚いていると思う。君に話したことはなかったが、僕は昔、傭兵のような仕事をやっていた。これは、その時に僕が使っていた武器だ。

もし君が必要ないというなら、これは処分してしまつても構わない。処分方法は別の紙に書いておいたし、そうでなければまた埋めてしまつても構わない。

だけど。もし君が力を求めていて、そのために武器が必要だというなら。その時は、これを使うといい。君には、間違つたことのために力を用いない分別があるはずだ。

ただ、一つだけ約束してほしい。君には僕のように、あてのない理想のために戦場を彷徨つて欲しくはない。この力を使うのは、大切な誰かを守るためであつて欲しい。武器を取る覚悟があるならば、それだけは決して忘れないでくれ。

この手紙が、君に読まれる日が来ないことを祈つて。

——衛宮切嗣』

手紙の後ろには何枚か別紙がついており、武器の処分方法や使い方が手書きで記されていた。それが紛れもなく親父の直筆であることに、どうにも感傷的な気分になつてしまふ。

切嗣は、どんな想いでこの武器を手にしたのだろう。何を思つて暗殺者という道を選び、何を願つて聖杯戦争に挑んだのだろう。

正義の味方に憧れていたと口にした切嗣。しかし、親父は正義からは程遠い、血塗られた魔術師殺しの道を歩んだ。そうして第四次聖杯戦争で、決定的な何かを失い……娘であろうイリヤとの再会も叶わないまま、命を落としてしまった。

一つだけ、分かることがある。切嗣は、きつと本当は……それでも、正義の味方になりたかったのだ。他の何を措いてでも、人を助けたかったから……けれど切嗣は、その道を歩む過程で多くのものを喪つてきた。切嗣が自身の家族の話を何も語らなかつたことがその証左で、この手紙からも後悔が読み取れる。最後にはきつと、抱いた夢さえ見えなくなつたに違いない。

だから。

「——わかつた。約束するよ、切嗣」

大切な誰かを守るため——俺が目指す正義の味方は、きつとその先にある。それが分からなかつたから、エミヤシロウという英霊は何もかもに裏切られたのだろう。

桜とイリヤを取り戻し、遠坂の敵を討つために、この銃を取る。彼女たちのような、魔術による理不尽な犠牲者を産まないために、魔術師という敵と戦う。かつての惨劇を繰り返さないために、いつもの日常を守るために、この力を振るう。

『魔術師殺し』。俺が向かおうとしているものは、奇しくもかつての切嗣に近い在り方だ。けれど、その本質はおそらく違う。俺は切嗣の夢を引き継ぎながら、これ以上何も失わないため、失わせないため——理不尽な悲劇が許せないから、戦うのだ。

「これ、借りてくぞ」

服の上に防弾チョッキを纏い、ベルトとホルスターを装着。銃の記憶に導かれるま



ま、各所に設けられたハードポイントやホルスターに銃と予備弾倉をはめ込んでいく。銃に染み付くほどに記憶が残っているということは、切嗣はきつとこの動作を血が滲むほど繰り返し返したのだろう。

狙撃に関する専門知識を持たない俺では、狙撃銃は使えない。そこそこ鍛えているとはいえ、軍事訓練を積んだわけではない俺は突撃銃を制御できない。だから、こいつらは置いていく。持っていくのは俺でも使えそうな武器と——切嗣の書き置きに記されていた、とある「切り札」。

各種の武器を全身に装備し、最後に俺の身長からはやや丈の長いコートを纏うと、格好だけは兵士らしいものができあがった。さすがに重いので、一部の弾倉や投影で代用できる刀剣類は置いていくが、それでも数キロの重量が体に加わっている。切嗣から受け継いだ重み、果たして今の俺にどれだけ使えるか。

「爺さんの夢は、俺が——」

最後に手にしたのは、やけに銃身の長い、見慣れない形の一挺。「競技者<sup>コンテンダー</sup>」という名の拳銃は、不思議と手に馴染む形をしていた——。

\*\*\*

陽は山に沈み、最後の夜がやってくる。

切嗣の遺した装備一式を居間に運び込んで確認や点検を済ませ、ありあわせのもので夕食を作っていると、あつという間に時間が過ぎていく。気づけば時刻は午後九時を回り、深夜帯に差し掛かり始めていた。

ギルガメッシュの偵察のおかげで、街中にサーヴァントの姿がないことは判明している。決戦の舞台は柳洞寺と見たが、ここがから空きだったとすれば、俺たちが大聖杯そのものを破壊してゲームセットになってしまう以上他の場所は考えられない。

柳洞寺に侵攻するのは真夜中。街から離れた山中とはいえ、人目につくりスクは可能な限り避けたい。かといって、これ以上引き伸ばすと桜の安全が保証できないから、ここがギリギリのラインだ。

何度も遊びに行き、一度はキャスターたちと戦った場所だ。道順も地形も頭に入っている。霊薬のおかげで魔力も体調も万全、投影宝具以外の武器も手に入れた。準備は全て整い、後は機を待っただけなのだが——この一戦に桜やイリヤの命、事によってはもっと大きな範囲の人命がかかってくると考えると、緊張が拭えない。

「肩に力が入りすぎているぞ、雑種。そう気負わずとも、楽に構えておくがいい」

俺の様子とは正反対に、ギルガメッシュは呑気にくつろぎながらみかんを剥いている。こっちは正直夕飯の味も怪しいところがあつたのに、一体どう肝の太さをして

いるのだろうか。

「楽につて……そんなことできるもんか。『この世<sup>アン・リ・マ</sup>全ての悪』を倒せなかつたら、どれだけの人が犠牲になるか」

「なに、逆に考えてみよ。ここで膝を屈すれば、貴様を責める者なぞ誰もいなくなる。失敗したとして誰に後ろ指を指されることもない、気楽な戦であろうよ」

あまりの言葉に、開いた口が固まった。

人類全てを呪い殺すという特大の呪詛、『この世<sup>アン・リ・マ</sup>全ての悪』。それが聖杯から解き放たれた場合、最悪日本どころか世界そのものを巻き込む大惨事になる。そりゃあ、人間全てが死んでしまえば文句を言う人だっていなくなるだろうが、それが気楽つて……何をどうしたら、ここまで堂々と構えていられるのか。

「……なあ、一つ聞いていいか。ギルガメツシュ、あんたはいつたい何のために戦うんだ」

「うん？ 何を妙なことを。言ったであらう、我は貴様の苦楽に付き合ひ、その顛末を愉しむのみ。我にとつてはこれも娯楽の一つ、愉悅を味わう糧に過ぎん」

「それは聞いたよ。そうじゃなくて……俺が聞きたいのは、ギルガメツシュという英霊にとつて、『人間』とは何なんだろうってことだ。

人間を愉しみだつて言いながら、あんたは人類が滅ぶかもしれないっていうのに大し

て気にしてないみたいだし、俺に付き合うっていつても、俺なんかそんなに面白い奴だとは思えない。

あんたと一緒に戦うのは、これが最後になるかもしれない。その前に——マスターとして、サーヴァントの戦う理由ぐらいは知っておきたいんだ」

そうだ。これが、ずっと引つかかっていた。

最初に召喚された時から一貫して、ギルガメッシュは衛宮士郎という人間を鑑賞して愉しむと言っていた。俺のサーヴァントとして力を貸すのはそのため、勝利も敗北も俺に帰着するものであり、自分にとつては他人事なのだ。

人間観察が趣味、というのはまあ理解できなくもない。そういう人の中にはいるだろう。しかし、人間全てが死に絶えてしまえば観察も何もない。趣味のために戦うというのであれば、この局面に至っても泰然と構えていられるのがどうにも腑に落ちない。

夢の中で、俺は英雄王の歩んだ歴史を見てきた。ほんのさわりだけだが、授業でギルガメッシュ叙事詩に触れたこともある。にも関わらず、このギルガメッシュという男の根本には何があるのか、どうしても理解が及ばない。

伝説ではギルガメッシュ王は、あれほど追い求めた不老不死の薬を手に入れることが叶わなかったという。それが真実であることは、俺も本人の記憶で確かめた。だというのにこの英霊は、それに執着することもなく、ただ人間を観察して愉しめればよいと嘯き、

かと思えばその楽しみが失われることにさえ拘泥する様子がない。

同じように何かを求めた果てに、抜け殻のようになってしまった切嗣とはあまりに違  
いすぎる。この男の精神性が桁外れだからと言ってしまうえば、それだけかもしれないが  
。

「貴様の様子から見るに——なるほど。サーヴァントとの経路越<sup>パス</sup>しに、私の記憶でも垣  
間見たか。

まったく、王の歩みを覗き見るなど本来であれば斬首に値する不敬だぞ。貴様が望ん  
だのではなく、我から流れたものであることを鑑み、ひとまずは不問とするが……まあ  
よい。

雑種よ。貴様は、何を見てきたのだ？ またぞろ下らぬ疑念でも持つているようだが」

「何って……まあ、いろいろ。宝探しをしたり、森の化け物と戦ったり、でかい牛と戦つ  
たり……不老不死の薬を求めて旅をしたり。そんな感じの、あんたが出てくる夢だ」

古代ウルクに君臨した王、ギルガメッシュ。

人の王と女神から生まれた英雄は、友と出会い、数々の冒険を繰り広げ、数多の財宝  
を手に入れた。しかし、友の死を契機に死の恐怖へ取り憑かれ、旅の果てに不老不死の  
薬を手に入れるものの、結局それも失ってしまう。

プロフィールだけを見るのであれば、聖杯戦争に参加した理由は、友との再会や不老不死への執着ではないかと思うだろう。ところが、蓋を開けてみればご覧の有様だ。いったいこの英霊の『軸』がどこにあるのか、未だに俺は理解できずにいる。

中でも、一番気になること。人間を愉しむと言いつつ人の滅びに無頓着な現状と重なる、夢で見た最も不思議な光景は。

「失った不死の薬を、惜しいとは思わなかったのか？」

みかんを飲み込んだギルガメッシュが、そのまま固まった。

眉根を寄せているが、不機嫌になったというわけではない。どうも予想外のことを聞かれたとでも言うような、少し面食らったような顔つきだ。

ややしばらくして、深い溜息を吐く英雄王。その瞳は俺ではないどこか遠くに向けられ、なにか懐かしいものを見たように微かな笑みを浮かべている。

「——かつて、似たような問いを口にした馬鹿者がいたな」

この男にしては珍しい、静かな声音。誰のことを言っているのか想像がつくと、否が応でもその最期を思い出し、軽々しい言葉を口にできなくなってしまう。

「偶然の一致だが、あの時返した言葉は真理を突いていたということか。ならば同じ言葉紡ぐとしよう——使うべき相手であれば、くれてやるのも悪くはない。

結果論にはなるが、蛇めに霊薬をくれてやったことで、我の精神は成熟を迎えた。

忌々しいが、それこそが私の成長に必要なものなのだろうよ」

「……ワケわかんないぞ。あんた、目の前で財宝を搔つ攫われたらめちやくちや怒るタイプじゃないのか」

「ふむ。ま、その通りではあるが……あの時の心境は、我ながら不思議であつた。余人に察せよ、と言つたところで容易には行くまい。

思えば、当世で我自身の話をしたというのは記憶にない。喜べ雑種、本邦初となる栄誉を与えてやろう」

何やらうむうむと頷くと、勝手に語り出した英雄王。何を言っているのかわからず混乱しているうちに、続きが始まってしまったので、おとなしく座つて拝聴することにする。

——ギルガメッシュという人物は、始まりからして特別な存在だつた。

人と神のハーフ、というのは神話上珍しくはない。今度の聖杯戦争だと、クー・フーリンやヘラクレスもその例だ。彼らとギルガメッシュが決定的に異なるのは、この古代王はある目的のために作られたという点だ。

今より遡ること約五千年。西暦が始まるより遙か昔の時代には、今では考えられないような神秘が溢れていた。自然現象に人格が宿つた古代の神々——システム機械が神となつたものなど、他の神話体系では違つたパターンもあるらしいが、メソポタミアの神々はそ

れには該当しない——は人々に崇められ、権能と呼ばれる力を振るっていた。

しかし、人の数が増えるにつれて、神々の権勢には陰りが見えてきた。欲望を際限なく溢れさせ、文明を築き、世界を作り変えていく数の暴力に対し、個々が強力とはいえず少数に過ぎぬ神々では世界に対する影響力が劣っていたのだ。

このままでは、人間に神が駆逐される時代がやってくる。それを恐れた神々は、人間の側に属しつつも神の立場に立つ存在を求めた。人間の行く先を神々に都合よく誘導しようとして作り出された一種の神造英霊、天が打った楔とも呼ぶべき存在が——。

「つまり、この我というわけだ。まったく、実に下らぬ話よな——この身は生まれる前から、神々の代弁者になるよう設計されていたのさ」

そう口の端を釣り上げるギルガメッシュ。叙事詩には語られぬ裏事情、傍若無人を体現したような男にはあまりに似つかわしくない話に、驚きを隠せない。

だが、これほどプライドが高い男が、唯々諾々と創造主の意向に従うだろうか。俺は僅か二週間あまりしかこのサーヴァントのことを知らないが、到底素直に従ったとは思えない。

「幼少期の我は、それなりに神どもの意向に従っていた。人を守り神を敬う善なる王——だが、私の人生は我のものだ。古びた神どもに従う理由などない。我は奴らの意図を跳ね除け、自らの王道を見定めた。



始めから王として君臨した我は、人間の姿を見続けてきた。欲望のまま、新たなモノを次々に生み出し続ける生命種……そこには呆れるようなゴミもあつたが、同時に得難い宝もあつた。無作為に、野放図に溢れていく発明の数々。なればこそ、それを裁定する存在が必要だ。

人であつては、外側から俯瞰することができん。神であつては、真に発明を理解することが能わぬ。人と神、その双方の視点を持つ絶対の裁定者——その仕事は、我にこそ相応しい」

そうしてギルガメツシュは、人という種が生み出す宝、国という概念が作り出す可能性、それらを片端から蒐集した。

このあたりは、夢で見たとおりだった。エルキドウという無二の友を得た王は、無数の冒険を繰り返して、その過程で幾度となく強敵と戦つた。森の神フツツや天の牡牛グガランナという怪物さえ打ち倒した功績は、紛れもない英雄のそれだ。

しかし、その背景にあつたのは、名誉欲でも金銭欲でもない。人も神も超越した、人間そのものを見定める裁定者にして罰の化身。ギルガメツシュが財宝を蒐集し、難敵と戦い、民衆を守り、国家を繁栄させたのは、偏にそう貫くと決めた在り方故だった。それこそが、英雄王の王道なのだ。

ギルガメツシュが、いつも一歩引いたところから状況を俯瞰し、時折俺たちにヒント

を示していた理由もそれだろう。記憶が失われていても、この男の本質はまったく変わっていないかつたということか。

「目算の狂った神どもは大いに慌てた。我を諫めるなどと抜かし、『天の鎖』エルキドゥなどというモノを送り込んで来たが、それも纏めて反旗を翻したわけだからな。

……だが、愚かな神どもにも、さすがに二度目は保険をかける程度の能があった。奴らの呪いで、我が友の命は土に還った。それを目の当たりにした我は、その時初めて死というものに恐怖を抱いた。

まったく、神どもを笑えぬな。奴らが延命措置として我を生み出したのと同様、我は自らの滅びを恐れて不老不死を求め始めたのだ。これほど馬鹿馬鹿しい話はあるまい」  
 荒野を彷徨い、何年という月日の果てに冥界に辿り着いた彼は、遂に不老不死へと手をかける。しかしその帰り道、ようやく掴んだ不死の秘宝は、ふと目を話した隙に蛇に食べられてしまった。

分らないのはそこからだ。夢の中の英雄王は散々笑い倒した後で、蛇を追うでもなくもう一度秘宝を取りに行くでもなく、そのまま街へと戻っていつてしまったのだ。それも、やけに晴れ晴れとした顔で。

長い努力と執念の果てに目指したものが、消え去り裏切られる時の感情——それは二十年も生きていない俺には、想像すらできないものだ。だが、その立場にあったものが

どうなってしまうかは知っている。他ならぬ未来の自分を、聖杯を求めた後の切嗣を、俺は目にしてきているのだから。

ギルガメッシュは、何故そうならなかったのか。もしかしたらそこに、俺が<sup>エミヤ</sup>あいつとは違う道を歩むための、道標になる何かがあるのではないか——。

「若い貴様には理解が及ばぬだろうが、苦難の果てに至高の財を手にした瞬間——その達成感に勝る美酒はそうない。中でも、あの時は別格だった。

長い努力が報われ、困難を乗り越え、遂に我は不死に手を届かせた。これで友の雪辱を晴らせる、神の呪いなど恐るるに足らずと、我はこの上ない喜びに浸っていた。極上の酒を味わった瞬間、悪の難敵を討ち果たした瞬間、秘めた宝を手に入れた瞬間——それまでに感じたどの感情も、あの時の陶酔には及ぶまい。我は生まれて初めて感激し、歓喜し、勝利という美酒に酔いしれていたのだ」

ほんの少しだが、俺にもその時の心境は分かる。

数学で悩み続けた難問の答えが出た時とか、ゲームで苦戦の末にボスを倒しレアアイテムを手に入れた時とか。努力と困難の果てに報酬を手にした時の達成感というものは、確かに得難い。それが人生をかけて追い求めたものだとするれば、その時の喜びはどれほどのものになるだろう。

「今にして思えば、これもおかしな話よ。我はそれまで、あらゆる贅を貪っておきなが

ら、心の底から悦んだのはこれが初めてだったのだからな。

だが、あの時はそんなことなどどうでもよかった。これほどの悦びを永遠に味わい続けられるのだと思うと、天にも昇る心地だった——だというのに戻ってみれば、肝心の靈草は蛇に食われて消えていたのだからな！ いやまったく、これほど笑える才ちはあるまい。自らの愚かしさがこれほど笑えるとは、私は思ってもみなかったわ」

ふはは、と肩を揺らして思い出し笑いをする英雄王。何故そこで笑えるのか、これまでの話は理解が及んだというのに、ここが聞いていてちつとも分からない……。

「これほどの悦びも達成感も、刹那の時に消えゆくもの。最終的に、我が手にするものは『無』だけ——それこそが私の仕事に対する報酬なのだ、この時我は理解したのだ。

これこそが人の世というものの味。不滅の英雄？ 不死の王者？ ハッ、そんなものになったところで、この味を感じることもできぬ。そして、この味が分からぬのであれば人の世の裁定など夢のまた夢。

私の目は遙かな未来を見通す。そして、我が築いた伝説はこの時代にもあるとおり、後世に残り続ける。先が見え、後に残るものがあるのであれば、死を恐れる理由など存在しない。何十年という時を彷徨ったが、答えは始めから我自身が持っていたのだ。

そもそも、死から逃れようなどという後ろ向きな考えが懦弱であった。死など何度でも乗り越え、いくらでも蘇れば良い。ヒトが遙かな先に辿り着き、裁定に値する時が来

るまでな」

そう、か——。

分かった。どうしてギルガメッシュがそれほど面白がったのか、やつとそれが腑に落ちた。

英雄王は、ただ宝を失っただけではない。喪失によつて、失ったものよりなお価値のある財を見出した。そしてそれは、どこか遠くにある樂園ではなく、すぐ目の前に転がっていたものなのだ。

切嗣やあいつ<sup>エミヤ</sup>はきつと、それに気づくことができなかつた。あるいは、気づいた時には遅すぎた。だから喪失は喪失でしかなく、それは彼らの末路に致命的な影を落とすことになつた。

都合のいい理想も、恣にできる果実も、所詮はお伽噺に過ぎない。地道に築き上げてきたもの、最初から自分が持っていたものこそが答えになる。学園の授業では確か、ギルガメッシュ叙事詩には寓話としての色合いも強いと聞いた覚えがあるが——その意味合いを、今ようやく理解できた。

ある意味では、俺は彼と同じだったのだ。俺は不老不死の代わりに、正義の味方という幻想を追い求めていた。しかし、何もかもを救おうという暴挙の果ては、何もかもに裏切られるという結末にしかならなかつたことを俺は知っている。

どうして正義の味方を目指したかったのか——その原点を掘り下げていった時、俺は自分が最も許せないことが、魔術という理不尽による犠牲であることに気づいた。それと戦うためには多くの人の助けが要することも、多くの人を頼ればいいことも。そして、助けてくれる、助けられる大切な人々がすぐ近くにいたことも。自分の内側に、自分の周りに、すぐそこに答えはあったのだ。

確かに失ったものは多かったかもしれない。けれど、その代わりに得たものだってある。自分自身の在り方と向き合うことを心がけ、それでいて一点に拘らない視野……英雄王が教えてくれたものを忘れなければ、きつと俺はこの先も戦っていけるだろう。

「そして我はウルクに帰還し、城塞都市と宝物庫を完成させ、人としてこの世を去った。……ま、ウルクに戻ると領民どもが去っていた故再興に苦労したり、こつそりもう一度冥界に向いて霊草を回収したりと、細かなネタはあるがな」

いなくなつてたんだ……。まあ、王様が何十年も玉座投げ出してたらそりやみんな他の国に移つてるだろうな……。

つてかそんな有様なのに、結局不老不死の霊草もう一回取りに行つてきたのか。柄にもなくちよつと尊敬の目で見たりしていたのに、オチがあるのがなんというか。

「さて、問いに対する答えはこんなところだ。この問いの代償といくれてやった霊薬といい、我への負債は大きいぞ、雑種」

にやり、と邪悪に笑う英雄王。どんな借金を取り立てられるのか、考えるだにぞつとするが……いやちよつと待て。二つ目の質問には答えてもらったが、一つ目の質問にはまだ答えが返ってきていない。

「ええい、どうせ借金払わなくちやいけないなら、とことんまで答えろつてんだ……！」

人間の世界を裁定するつて、あんたそう言ったよな。でも、『この世全ての悪』が外に出してしまえば、何もかも吹っ飛ぶかもしれない。そうなつたら裁くも何もないだろうに、なんでそんなに余裕なんだ？」

「ふん。人理を焼かんとする魔獣、星の外より来たる捕食者——そのような奴儕であれば、我が本気を出すこともあるかもしれん。」

だが、聖杯は貴様たち人間が作り上げた欲望の化身。自らの業によつて滅びるのであれば、それもまた一つの末路。我はその愚かさを裁定するのみよ」

自業自得の結果滅びるのであれば、手を差し伸べる理由などない——英雄王は、そう淡々と言い切つた。

この英霊は、一人の人間、一人の英雄として戦う他のサーヴァントたちとはあまりに違う。人類そのものを外側から俯瞰し、裁定する絶対者。

どのような道を選び、どのような結末に至るかを選ぶのはあくまで人間。時折口を挟んだり、手を貸すことぐらひはあるかもしれないが、ギルガメツシュは自分を人の営み

の外側に位置づけている。この男が人間に対してどのような立場を取るのか、それは俺がどんな扱いを受けていたかを思い返せば分かりやすい話だった。

「じゃあなんで、あんたは俺に手を貸してくれるんだ？ 人の自滅を放っておくっていうなら、あんたが手を貸す理由はない。サーヴァントとして令呪の縛りはあるかもしれないけど、あんたぐらいの英霊で、しかも受肉してるんならどうとでもできるだろう？」

「たわけ。何度も同じことを言わせるな、愚か者。これは私の仕事ではない。我は人類に肩入れするのではなく、いわば娯楽として貴様という個人に力を貸してやっているのだ。

正直なところ、貴様は所詮期待外れ。暇潰し程度にしかなるまいと見込んでいたのだが——」

フ、と目を細めたギルガメッシュがこちらを見る。いつものダメ出しが来るのかと思えば、サーヴァントの瞳には、何やら面白がるような色が浮かんでいた。

「掲げる理想が偽物なら、使う武器は贗作。動機も感情も全てが偽物、人間にさえなれぬ人形もどき。マスターとしての義理立てがなければ、貴様など切り捨てていただろうよ。

だが、愚かさも極まれば一廉の輝きを持つ。貴様は戦の中で成長し、己の在り方を見据え、借り物ではない自らの欲を見出した。自分自身の道を歩み出し、未来の自分にさ



え打ち克ち、あまつさえ王たる私の窮地を救つてのけた。

贖作が真作へと化ける——こればかりは、この私も予想できなかった。喜べ、衛宮士郎。おまえは私の予想を覆し、我が財を使うに能う価値を見せたのだ」

怒るでも笑うでもなく、語り聞かせるようにして言葉を紡ぐ英雄王。それだけに、この男が真剣なのだと伝わってくる。

人類最古の伝説が、どれほど偉大なのか。人の世の外側から見定めるといふ王道が、どれほど孤高なのか。その一端を知ってしまった今、当の本人に自分の価値を肯定される——これまでに感じたことのない熱で、体に炎めいた力が宿る。

悪夢の夜、大勢の人を焼き殺した忌むべき炎。あの煉獄とも、怨嗟の重みとも違うもの……英雄王の裁定という熱が、重圧が、心地よさすら伴つて魂を震わせる。ああまったく、俺はとんでもないサーヴァントのマスターになつてしまったらしい……!!

「武器が贖作というのは気に食わんがな。宝具とは、伝説に至つた重みが宿るもの。その力だけを真似ようなぞ、それは英霊どもへの侮辱であり、源流である我への冒瀆だ。

故に——贖作を振るうのであれば覚悟せよ。英霊の宝具を用いておきながら何の結果も出せぬのであれば、そのような愚昧には存在する価値などない」

あらゆる財を収めた王の言葉は重い。本物の宝を愛するから、その価値を認めるからこそ、ギルガメッシュは贖作を毛嫌いするのだ。その怒りは正しいものだど、彼の王道

を知ったからこそ頷けてしまう。

だけど、未熟な俺では先人たちの力を借りるしかない。英霊たちの宝具、切嗣の遺した武器……これらに頼らなければ、俺なんかの力はどこにも届かないだろう。

英雄たちの武器を使うのであれば、それ相応の結果を見せよ——それは、この男なりの発破か。借り物の力に頼るのなら、せめて信念と功績ぐらゐは固めなければ話にならない。そして、それが実現できないと思う者に対して、英雄王はこのような言葉を口にするまい。

「よいか。我が貴様に求めるもの、我へ支払うべき負債はただ一つだ。

この聖杯戦争に幕を引き、今の世に戦いを挑み、無様に足掻く姿を以て見事我を愉しませよ——おまえにそれができるか、衛宮士郎」

——それは。これまでの中で、もつとも重く、深い問いかけだった。

あらゆる英霊の頂点に立ち、人類全てを裁定する原初の王。その規格外が存在が、半人前の魔術師見習いに、やってみせろと言っている。

聖杯戦争を勝ち抜くことなど、あくまでも過程の一つ。その先へ進み、無法を働く魔術師たちが是とされる世界と戦えと、ギルガメッシュは命じて……いや、期待しているのだ。

この男は衛宮士郎という人間の『先』を、行く末を心待ちにしている。だからこそ、目

の前の聖杯戦争に本腰を入れる気になったのだ。その期待がいったい、どれほどの重みを持つことか。

手が震える。意図せずして、召喚してしまったサーヴァント。傲岸不遜で、傍若無人で、迷惑に感じたことも契約を後悔したこともあった。いつ殺されるかと、正直ひやひやしていた。

だけど、今は違う。俺はこの男に、幾度となく助けられた。英雄王とはどんな存在なのか、孤高な王道がどれほど気高いのかを知ってしまった。白状すれば、俺はこの英雄を尊敬してしまっているところがある。

相容れない部分はある。それはどうかと思うところもある。けれど、それら全部をひっくるめて、今なら言える。この衛宮士郎にとってのサーヴァントは、ギルガメツシユただ一人だ。

そんな男の寄せる期待に、偉大な王の問いに、俺は果たして応えられるのか――？

「――ああ。やってみせるよ、ギルガメツシユ」

拳を握り、正面から赤い瞳を見つめる。俺が衛宮士郎である以上、答えなんか始めから決まっていた。

できるかできないかじゃない。やるか、やらないか。それがどれだけ困難な道だろうと、諦めることだけはしないのだと、俺は最初から誓っていたはずだ。

だからこれは、答えではなく一つの確認。王の期待が向けられようと、失敗すれば多くの命が失われる重みがあるうと、やるべきことは変わらない。揺れていた感情が、浮足立っていた心が、炉で鍛えた刀のように鋭い決意となる。

「ならばよし。その言葉、ゆめゆめ努々忘れるなよ。

ふむ——ちようど頃合いも良い。この下らぬ茶番を終わらせに向かうぞ、雑種。敵を乗り越え、女どもを救い出し、呪われた聖杯を砕いてやるがいい」

パチン、と英雄王の指が鳴る。それと同時に、中庭になにか大きいものが現れる気配がした。

一体何を持ち出したのかと、慌てて居間から出てみれば……そこにあつたのは、庭をまるまる埋め尽くすような、黄金の船体と翠玉の翼。和風の屋敷にはあまりに似つかわしくないゴージャスな威容に、あんぐりと口を開けてしまう。

夢の中で見た覚えがある、思考に等しい速度を有する空飛ぶ船だ。確かギルガメツシユは、これを使って天の牡牛グガランナとの戦いに臨んでいたような……？

「黄金帆船ヴィアマーナ。我が財の一つ、この時代でいえば戦闘機になるか。

特に許す。雑種よ、呆けていないで乗り込むがいい。王とは天に座す者であると、不埒者どもに一つ教授してやろうではないか」

横に立つギルガメツシユは、いつの間にか黄金の鎧を纏っていた。

夜の闇を切り裂くような、鮮烈な存在感。豪華な帆船よりもなお煌めく超常の英霊が、天地に我ありと歩き出す。

圧倒的なカリスマに世界が怯えたのか、一筋の風が吹く。人類最古の英雄王は、星の恐れを一顧だにせず玉座に腰掛けると、王氣オーラを纏った笑みを浮かべてみせた。

「行くぞマスター。これより挑むは最後の砦、世界の行く末を賭けた決戦————聖杯戦争の終幕だ！」

## 3.2. 輝いていたもの

黄金の船が、翠の翼で空を切り裂いていく。

眼下に見えるのは冬木市の夜景。真夜中だからか、ビルや民家の明かりは消えているが、それでも街灯や信号の光が街の形を照らし出している。

上に目を向ければ、今度は星々が冷たく煌めいている。遙か上空にいるせいか、星との距離は普段より近く、雲や街明かりに阻害されない素の輝きがはつきりと伺えた。空から見る夜の世界は、どこを見ても美しい。

「なんだ。『黄金帆船』<sup>グイマーナ</sup>が随分と気に入ったようではないか、雑種」

初めての景色に見とれていると、後ろから呆れたような声が響く。振り返ればそこには、黄金の玉座で苦笑する英雄王の姿があった。

「そりゃあ、まあ……俺、飛行機とかに乗ったことないからさ。こういうのって、テレビでしか見たことなかったんだ」

「決戦を前に観光気分とは、随分と肝が据わった雑種よな。まあよい、気張るばかりでは余裕もなくなるというもの。我のマスターを名乗るのであれば、愉悦の味も少しは覚えしておくがいい」

そう言うと、ギルガメツシュが鷹揚に手を振った。途端、それに応えるようにぐん、と船の高度が一段上がる。

英雄王の有する宝具の一つ、黄金帆船<sup>グイマリーナ</sup>。インド神話に縁を持つという輝く舟には、飛行機のような機器類は備わっていない。所有者である英雄王の思考、あるいは命令を読み取ること、それと同じ速度で空中を飛び回っているのだ。

物理法則に囚われないという能力も有しているようで、これだけの高度を飛んでいるというのに、俺は気圧の変化も風圧も感じずただ腰掛けることができている。更にはステルス機能も展開しており、これだけ豪華に輝いているというのに、魔力を持たない一般人は知覚することができないらしい。聞けばギルガメツシュは、十年前この空中戦艦<sup>フェイスJ</sup>でサーヴァントが操る戦闘機と争ったのだとか。

「さて、寺はあそこか。見たところ、備わっているのは天然の結界のみ……キャスターが敷いた術は消えたが、魔術師どもが罫を張る隙もなかったとみえる」

陸路では一時間かかる場所でも、空を飛ばせば何分とかわからない。ギルガメツシュの目は、既に目的地を捉えて観察に入っているようだ。

俺の目からは、遠いし暗いしで今ひとつわからない。キャスターが何か工作でもしていたのか、柳洞寺は今改装工事中という扱いになっているようで、住んでいた寺の関係者は別の場所に移っている。立入禁止の看板が立っているため、参拝客が訪れることも

なく、夜は文字通り真つ暗闇に……あれ。今、何か光ったような。

「地下に潜んでいるのか、ならば——いや待て。伏せていろ、小僧！」

ギルガメツシュが鋭い警鐘を飛ばし、ヴィマーナが急激に加速する。角度が変わって振り落とされないように、慌てて突っ伏した刹那——ごおん、と凄まじい圧力が通り過ぎていった。

なんだ、今の……!? 埒外のスピードで回避した船だったが、かなりの距離があつたはずなのに、肌がちりつくような危険を感じた。見間違いでなければ、今のはどす黒い魔力の塊のようで。

「騎士王め、小癩な手を打つではないか。王の座す舟を地に這わせようとは度し難い」

「セイバー……!?! まさか今の、『約束された勝利の剣』か」

「剣圧を飛ばしてきているだけだ。あの聖剣の真価には程遠いが……受ければそれなりの火傷はするか！」

再び船体が急加速し、ジグザグに複雑な軌跡を描く。その合間を射抜くように、再び黒い一閃が飛来し、空気が切り裂かれる音が響いてきた。

床に伏せながらも注視していたおかげで、今度は観測することができた。柳洞寺のあたりで何かが光ったかと思うと、次の瞬間にはビームのように魔力の塊が放たれてきたのだ。これが聖剣の一撃だとすれば、セイバーは遙か上空にあるヴィマーナを弓兵のよ



うに狙撃しているのか——。

旋回するヴィマーナに、更なる光閃の一撃。回避行動のため、船は通常の飛行機では到底叶わないであろう無茶苦茶な軌道を描き、なんとか黒い脅威から離れる。物理法則の干渉を防ぐ機能がなければ、俺はとつくに振り落とされていただろう。

さつきよりも余裕がない……わずか二度の斬撃で、恐るべき狙撃手は早くも慣れてきているのか。思わずギルガメツシユの様子を伺うと、黄金の青年は何ら臆した様子もなく、獰猛な笑みを浮かべていた。

「小賢しい——弓兵は我の領分よ。撃ち合いでこの我に勝とうなど笑わせるわ、セイバー！」

パチン、と指が鳴る。途端、ヴィマーナの船体をぐるりと取り囲むように六つの門が出現した。

輝舟とはまた異なる黄金から垣間見えるのは、一つ一つが膨大な魔力を秘めた原初宝具。セイバーが放った攻撃に倍する刀剣が、瞬きの間に斉射される。流星のように降り注ぐ六連撃は、さながら宝具による空対地ミサイル<sup>A</sup>か。

超音速で飛翔した弾丸は、黒光が放たれた基点を直撃し、大地を抉り抜いて微塵に吹き飛ばす。余波で生えていた木が吹き飛ぶ光景が、臃げながら確認できた。

一発でも地形を変えるミサイルが、優に六発。通常の戦争であれば、過剰攻撃にも程

があるであろう火力の一極集中であったが、しかし――。

「これで倒せるなら苦勞はしてないか……!」

土煙の間から、漆黒の砲弾が迫りくる。油断していなかった英雄王は、難なく船体を急旋回させて躲したが……その頭を押さええるように、間髪入れずに二撃目が放たれた!

ぶつかると悟り、顔から血の気が引いていく。投影宝具を合わせようにも、このスピードだと追いつかない――!

「猪口才な……」

英雄王が何か呟いたかと思うと、閃光の斜線上を遮るような形で黄金の盾が現れた。天を塞ぐ防御宝具は、船体を直撃するかと思われた猛威を正面から弾き返し、ヴィマーナは無傷な姿を保ったまま悠々と飛行を続ける。

次いで三の矢、四の矢が飛来するが、空中戦艦の機動力と繰り出される盾の宝具がその尽くを凌ぎ切る。返礼代わりに再び宝具が放たれ、セイバーがいるであろう地帯を爆撃するが、恐るべき斬撃は止まることがない。

そのまま幾度かミサイルと対空砲火の応酬が続くが、おそらくは双方無傷のまま。一見膠着状態のようだが、一度に一発しか光弾を放てないセイバーと違い、ギルガメツシユの攻防宝具は展開数に際限がない。それを考えれば英雄王の方が有利だろうが……相手もまた、宝具の真名解放という切り札を秘めたまま。魔力を籠めた剣圧を飛ば

す、いわば通常攻撃でこの火力なら、全力の宝具解放はどれほどの脅威になるか。「チ、小煩い羽虫めが……!」

突如、ヴィマーナが急すぎる角度で高度を上げる。光弾の回避とはまったく違うパターン機の機動に、何が起きたのかと首だけ出して下の様子を覗き見ると……街から、無数の靄のようなものが沸き立っていた。

暗くてよくわからないが、冬木市のそこかしこから、数え切れないほどの黒い点が空に上ってくる。同時に聞こえてくるのは、ブンブンという耳障りな羽音。まさかこれは、全部虫なのか……!?

十中八九、間桐臓硯の差し金だろう。一匹一匹は小さな虫が何十何百と集まって群体となり、その群体がまた幾つも地上から飛翔してくる。魔術師の使い魔とあらばただの虫ではあり得まい、セイバーの対空砲火だけでも手を焼いているのに面倒なことになった——!

「あんなのに集られたらたまったもんじゃないぞ……」

蝗害、という単語がある。

日本では見られない現象だが、アフリカや東南アジアなどではたまに発生する、バツタの大量発生という災害。なぜ虫の異常繁殖が災害とまで呼ばれるかというところの群れが通り過ぎた後は、あらゆる草木が食い尽くされ、時には生物さえ被害を受ける

からだ。現れたが最後、航空機の飛行さえ叶わなくなるのだというニュースを見たことがある。

通常では考えられないほどの高速で迫る虫は、まさしくそれを思わせた。あれに群がられたが最後、俺はあつという間に骨だけになってしまっただろう。

そうしているうちにも、また空間を薙ぐ黒い光が。単純なスピードであれば、虫ごときがヴィマーナに追いつける道理はないが、回避や防御のための動きを強要されるせいであつという間に距離が近づいてくる――。

「まずいぞ、アーチャー!」

「たわけ、見えているわ。」

やれやれ――空中戦を楽しむつもりだったが、あのような汚物に横入りされては興も削がれるというもの。一息に焼き払ってくれる!」

上へ上へと高度を取っていたヴィマーナが反転、数え切れないほどの虫の群れに突貫していく。同時に黄金の砲門が展開、刀剣宝具が釣瓶撃ちに放たれ、黒刃の発射地点を絶え間なく蹂躞!

「セイバーの相手は後回しよ。まずは前座からだ」

射出、射出、射出、射出――。

音を超えて放たれる弾丸は、一発一発が超級の火力。息もつかせぬほどの宝具をセイ

バーめがけて連射し続け、対空砲火を牽制すると、ギルガメッシュはまた別に砲門を開いた。

虫との相対距離は縮まり続け、不気味に光る赤い目が何千と輝いているのが見える。会敵までは十数秒とないだろうが、英雄王の不敵な笑みは、羽虫ごときは何ら脅威にならぬと物語る。

小さな虫の群れに対し、刀剣を放ったところで効果はほとんどあるまい。俺などより遙かに頭の回るサーヴァントがその事実を見落とす道理はなく、黄金の門から現れたのは刀剣でも防盾でもない——怖気がするほど魔力の感じられる、何本もの魔杖だった。

——閃光。

杖の先にそれぞれ、キャスターを思わせる魔法陣が描かれたかと思うと、膨大なエネルギーが迸った。爆炎、吹雪、暴風、豪雷——それこそ魔術師のお株が奪われるような神代の大魔術が、空間ごと羽虫を薙ぎ払っていく！

それでも分散し、生き残った虫たちが船に集ろうとしてくるが……今度は先程より一回り小さい杖たちが召喚され、機銃掃射のような勢いで小魔術を連射して片端から塵に変えていく。宝物庫から呼び出されたものに加え、ヴィマーナ本体にも砲門が現出し、バルカン砲のそれに等しい魔力砲弾が十重二十重に張り巡らされた。

その防空網さえ潜り抜ける個体も絶え間なく現れるが、それは船体の目と鼻の先まで

近づけたかと思うと、ある地点で壁にぶつかつたかのように歪んで蒸発する。またある個体は炎上し、ある個体は引き裂かれ、ある個体は潰され——おそらくこの船には何十という防御宝具、防御魔術が展開されているに違いない。

「このまま突き進むぞ。振り落とされるなよ、雑種！」

ぐん、と船体が急加速。雲霞の如き無限の群れを、防御力と対空砲に任せて強行突破。その時にはもう柳洞寺までの距離は半分を切っていた。

虫たちを迎撃する間にも、セイバーを牽制するための宝具は次から次に放たれていたが、にも関わらずまたしても黒い刃が正面から迫りくる。もはやこの距離では回避など望めず、ギルガメツシュが即時展開した盾と船の守りが正面から防御するもの——焦げ臭い匂いと共に、盾が斜めに吹き飛んでしまった。

回収用の宝具でも使っているのか、あらゆる方向に飛んでいった盾はすぐに黄金の門に収納されるが、ちらりと見えた防具の表面は黒く焦げてしまっていた。今のは防げたからまだいいが、ただの剣圧でなんという火力か！

「……雑種よ、貴様に一つ露払いを命じる」

後ろからしつこく迫ってくる虫の群れを迎撃し、同時にセイバーへの宝具射出数を増やして斬撃を封じながら、ヴィマーナは目的地の上空まで迫り着いていた。

爆撃に次ぐ爆撃で敷地はめちやくちやになっているが、その中で立つサーヴァントの

姿がぼんやりと見える。降り注ぐ宝具の弾丸を叩き落とし、弾き、回避していくその動きは、見間違えるはずもないセイバーのものだ。

臓硯の使い魔であろう虫は、その大半が殲滅された。後はセイバーと、どこに隠れているのか分からない敵のアーチャーを打倒するのみだが……露払いとは、いったいなんのことか。

「寺の裏手を見よ。あの池のあたりだ」

ぐりん、と派手に宙返りしながら、柳洞寺の上空を旋回。何故これで地面に投げ出されないのか不思議に思いつつ、促された池の方を見ると……そこに、黒い人形の何が蠢いていた。

虫とは違う。どこか式神めいた形をしたそれは、うようよと不気味に動いている。姿形はやや異なっているが、その恐ろしさを感じる雰囲気は、幾度か遭遇したあの黒い影に酷似しているようで。

「あいつら……一体何だ？ サーヴァントも食うとかいうあの影に似てる気がするけど」

「あれはいわば、聖杯の使い魔よ。見たところ、あの娘の性質を受け継いでいるな……虚数属性に吸収能力、おまけに聖杯の呪詛まで併せ持つか」

会話している間にも、黒い光が大気ごと俺たちを断たんと迸る。急旋回、ランダム機

動で回避しつつ猛爆撃を行う空中戦艦だったが、距離が縮まったせいで避けきるまでの余裕が遂になくなってきた。

「上を取り、空を抑え、手数・火力・防御のいずれも優位にある。セイバーのみならこのまま勝てるだろう。」

だが、あの影は面倒だ。闇雲に宝具、魔術を擲つただけでは吸収されかねん。本腰を入れれば幾らでも手はあるが、雑にあしらうには相性が悪い——自動人形の類も、あれに触れられれば終わりだ」

聖杯の『影』は、その成り立ちから魔力を吸収する性質を持つ。そればかりか、サーヴァントを汚染し、取り込むという反則的な能力さえ有しているのだ。まっとうなサーヴァントでは到底対抗できず、あれに飲まれればどうなるかは眼下のセイバーが物語っている。ギルガメッシュが彼女と戦うのなら、あの怪物たちを通すわけにはいかない——ヘラクレスでさえ、セイバーと影との連携攻撃には防戦一方だったのだから。

宝具を撃つても魔術を叩き込んでも吸収され、近づかれればアウト。まったくとんでもない反則ぶりだが……池の周りをうろついているのは、あの『影』本体ではない。ここから見ているだけでも、あれよりは格段に脅威度が落ちていることがわかる。

敵の正体は割れ、能力は知れ、相性の良い武器もある。何も俺たちは、影を相手取ることを諦めていたわけではない。あれが聖杯に由来するものだとは判明してから、通用す



るであろう対策を練った。今の俺でも、あの使い魔連中ぐらいなら相手にできるはずだ。

「わかった。あいつらは俺が引き受ける。セイバーは任せたぞ、ギルガメツシュ」  
「ハツ、誰に物を言っている」

自信満々の嘲笑が、こんな時は頼もしい。

黒い刃を回避しがてら、ヴィマーナが急降下して池に近づく。二発目の閃光を盾が防ぎ、ほんの数秒船が止まった刹那、俺は大地へと降り立った。

振り向けば、飛行戦艦は猛スピードで空を駆けていき、途中でひらりとギルガメツシュが飛び降りていくのが見えた。宣言通り、セイバーと戦ってくれるのだろうか……かつての仲間と矛を交えることへ嫌悪感はあるが、事此処に至っては仕方がない。

主を降ろしたヴィマーナの方が、こちらには自動操縦システムが搭載されているらしい。『ゲート・オブ・パピロ王の財宝』からの宝具掃射はなくなったが、空中を自在に飛び回る輝舟は、自前の砲塔と防御宝具を駆使して虫の残党と空中戦を始めた。

「——ヤッ」

セイバーに対してはギルガメツシュ。

あの虫の群れは黄金帆船ヴィマーナが駆逐し、同時にまだ姿の見えない敵のアーチャーへの備えも兼ねる。

俺の近くでぐるぐると空中を飛び回る円盤たちは、ギルガメッシュが付けてくれた防  
御宝具。臓硯と言峰の攻撃はこれが防いでくれるし、連中に対しては専用の弾丸もあ  
る。

後はこの、影の使い魔たちを相手取るだけ。不気味な響きを上げるこいつらが何故こ  
こに現れたのかは分からないが、友好的な存在でないのは確実。戦いに水を差される前  
に、ここでまとめて斬り伏せる——！

「<sup>トレス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始——」

\*\*\*

柳洞寺境内。

猛爆撃の中でも奇跡的に無傷だった山門の内側は、廃村のような有様と成り果ててい  
た。ほんの数十分前までは歴史ある寺社がそびえていたはずのそこは、度重なる聖剣と  
宝具の暴虐を受け、元が何であつたか想像もできないような状況だ。この只中に生命体  
がいたとして、無事でいることなどあり得まい。

にも関わらず。残骸に囲まれて、君臨する者がいる。地上の喧騒など知らぬという、  
月明かりに照らされた金髪が眩い。その、瓦礫の玉座の上——

——無傷の騎士が、傲然と剣を構えていた。

全身を覆う甲冑は漆黒に染まり、聖杯の侵食の影響か、赤い紋様が走っている。各所の防具は厚みを増し、鋭角になった形状は恐るべき攻撃性を表しているよう。

翠水晶を思わせた瞳は昏い黄金に淀み、地上に輝いた星の聖剣は、もはや見る影もない。かつての清廉な剣士は変わり果て——しかしその威圧感は、以前の何倍にも増している。

「ほう——」

がしやり、と鳴る金属音。規則正しく繰り返されるそれは、具足が石段を踏みしめる音だった。

悠然と、山門から現れる黄金の王。不用意に境内に降下したのでは、着地際をセイバーに狩られるだけ。そう悟った弓兵は彼女を牽制している隙に、境内ではなく石段の中ほどへと飛び降り、そのまま歩いて上ってきたのだろう。

その姿を認めた刹那、剣士から迸る膨大な殺気——あと一步でも進めば、瞬きの内に斬り捨てる。その無言の決意を感じ取ったのか、彼女が動くか動かないかという微妙な境界線上で、青年は足を止めた。

「あれを受けながら無傷か。相変わらず大層な剣捌きだが、そうでなくては面白くない。滑稽な三文劇とはいえ、盛り上がりや欠く終幕など見るに堪えぬからな。」

さて——此度は貴様がそちら側か。十年前とは配役が逆だな、セイバー」  
 「……!?!」

黄金の英霊が零した言葉に、剣士の眉がぴくりと動いた。

ほんの僅かだが、セイバーが示したのは明らかな動揺。それを見逃さなかったギルガメッシュは、ふん、と鼻を鳴らして嗤う。

「配役が変わろうと、聖杯を求める執念は同じか。そのような姿に成り果ててまで、願望機に縋ろうとはな——汚染されようと悲願を捨てぬその気概、我が見込んだだけはあ  
 る」

「その口ぶり、あの宝具——もしや記憶が戻ったのか、アーチャー」

聖剣を握るセイバーの手に、明らかな力が籠もる。絨毯爆撃の如き宝具掃射、宙空を自在に馳せる黄金帆船<sup>グイマーナ</sup>——そのいずれも、彼女は第四次聖杯戦争の折に目にしたことがあった。此度は使えなかったはずのそれらを自在に振るう姿を目にすれば、絡繰りに思  
 い当たるのは自明の理。

見る見るうちに、騎士の殺気が強まっていく。十年前、セイバーが唯一勝機を見いだせなかった英霊。それが十全の力を持って現れたとなれば、油断などできるはずがなかった。

「然り。まったく、聖杯めに遅れを取ったおかげで、随分と手間取ったわ——十年も待た

された宴だというのに、招かれてみればこの始末とはな。ま、これはこれで楽しめたが」  
「十年……？ それはおかしい。サーヴァントは召喚される度に記憶を調整されるはず。以前の記憶を持ち得るはずが——まさか」

そう。新たに召喚されたサーヴァントであれば、以前の聖杯戦争の記憶を持つことなどありえない……そう、新たに召喚されたサーヴァントであれば。

僅かな言葉と、以前より抱いていた違和感。そこから真実に辿り着いたセイバーの瞳が、大きく開かれる。一方の青年は、その動揺を愉しむように笑みを深めるばかり。

「ようやく気づいたか。我は前回から消えずに、この世に留まったサーヴァントだ。これはおまえの功績だぞ、セイバー？」

十年前、おまえは衛宮切嗣の令呪によって、現れた聖杯を破壊した。その下にいた我は、聖杯の中身を浴びる羽目になったのだ。我が生身の肉を持つ理由は、つまり今のおまえと同じよ」

息を呑む音。

悪性に汚染されて以後、白みを増していたセイバーの顔色が、青白いとまで言えるほど色を失う。弓兵が口に行っているのは、正気を疑わざるを得ない内容だった。

聖杯の中身を知った今だから分かる。世界を呪うほどの極大の呪詛を受けて、無事で済むはずがない。他ならぬ彼女自身が、自分が変質してしまったことを自覚している。

魂の奥底から溢れ出る破壊衝動と、呪詛に汚染された霊基は、かつての自分がどのような価値基準で動いていたかを思い出すことさえ危ぶまれる有様だ。

だが、この英雄は十年前から今に至るまで、まるで変わった様子がない。平然と嘯くその姿はあまりにも落ち着いていて、それ故にセイバーの背筋を凍えさせる。

「馬鹿な——あの呪いを浴びたのですか、貴方は。なら、正気を保てるはずが——」

「——ほう。そう思うか、騎士王」

ざわり、と風が吹いた。

あるいはそれは、世界が怯えた余波だったのか。青年が目を細めた瞬間、想像を絶するほどの威圧感が、空間そのものを塗り替えた。

音がするほどに柄を握りしめていた自分を、セイバーは遅れて自覚する。眼前の英霊から立ち上る王氣オーラ……かつてブリテンを蹂躪した卑王暴竜ヴォーテイカーンすら、この男の前にはひれ伏そう。

「たわけめ——貴様と一緒にしてくれるなよセイバー。」

この世全ての悪？ 人類全てを殺し尽くす呪いだど？ 笑わせるな。この我を染めたくば、その三倍は持つてこい！

たかが世界の一つや二つ、背負えずして何が英雄か。元よりこの惑星ほしは、余す所なく私の庭だ。この世の全てを、とうの昔に背負っている」

「——な」

今度こそ、セイバーは絶句した。

大陸を持ち上げる、海水を全て飲み干す——この英霊が口に行っているのは、そういう類の内容だ。荒唐無稽にも程がある。

いかな英霊であろうと、あの呪詛は片鱗に触れただけでも影響が出る。<sup>ァンリマユ</sup>この世全ての悪とは人を呪うもの、英霊とて元が人間である以上はその対象から逃れ得ない。にも関わらず、この男は汚染されぬばかりか呪いを弾き返し、あまつさえそれが当然のように宣うのだ。

「アーチャー、貴方は一体何者だ。あの呪いを受けて自我を保てる英霊など、存在するはずがない——」

十年前から、そして聖杯によって変異して以後も頭の片隅にあつた疑問を、遂に剣士は口にした。

最初に顔を合わせた時から、この男は常軌を逸していた。あれほどの数の宝具を所有している時点で異常極まりないが——いや、それだけならば宝具の性質として納得もできよう。しかし、今の話は飲み込める範囲を超えている。なにせあの泥を受けて、自分でさえも変わってしまったのだから。

半神の大英雄たるヘラクレスとて、呪いには抗いきれなかった。それを受けて平然と

しているというのは、もはや人間ではありえず、それこそ神にでも連なる者でなければ  
 。

「——いや。まさか、貴方は……」

ふと、直感に触れたものがある。凶暴性を抑え、平然と振る舞うため、彼女の直感は  
 低下しているが……それでも、一つ引つかかってしまえば連鎖的に閃くものがあつた。

聖杯戦争のシステム上、神霊を召喚することは不可能だ。しかし、ヘラクレスやクー・  
 フーリンのような半神、あるいはメドゥーサのようなかつて神であつた者であれば召喚  
 されている実績がある。そして、セイバーの知りうる英霊の中に、たった一人だけ、人  
 よりも神に近い男が存在した。

尋常ならざる王気。理解を超えた価値観。自在に振るわれる無限の宝具——いや、宝  
 具の原典。かつて神の時代に終止符を打つたその英霊であれば、古代ペルシャの悪神と  
 されるこの世全ての悪すら物ともすまい。古代ウルクに君臨し、文明の原初を築き上  
 げ、無数の財を収めたという魔人の名は——。

「ギルガメツシュ——人類最古の英雄王」

戦慄と共に眩かれる真名。それを聞き届けた黄金の王は、いつそ優しげとも取れる笑  
 みを浮かべた。

「——いかにも。ようやく思い至つたか、騎士王よ」



「つ——！」

上段の構え。対峙する敵の脅威度を跳ね上げたセイバーは、初手から火力を集中する姿勢に切り替えた。生前から今に至るまで剣を交えたどのような相手も比較にならぬほど、このサーヴァントは規格外だと判明したが故だった。

十年前の戦いで、征服王イスカンダルを以てしても傷一つつけられなかった破格のサーヴァント。全英霊中、最も古い伝説を持つ存在ともあれば、その結果も納得だった。ギルガメツシユが見せた数々の宝具。真名が知れば、その正体にも自ずと合点がい。それは即ちあらゆる宝具の原典であり、想像を絶する数の攻撃手段を持ち合わせているのに等しい。ならば何かをされる前に、圧倒的な火力で粉碎する——その鮮烈な戦意に、対する英雄王は目を細める。

「ふん。我の名を知った上でなお抗うか。その意気は買うが——どうだセイバー？ 我が軍門に降るのなら、願望機の一つや二つ、くれてやって構わんが」

「——戯れ言を。貴様はここで斃れる、英雄王」

「やれやれ……我を倒せば聖杯が手に入り、望みが叶うと本気で思っているのか。

あのように歪み果てたものが、願望機足り得る確証もなかりうに。過去のやり直しとやらに拘りおって……おめでたい女よな」

一閃。

黒の魔剣が、大地を叩き割った。一瞬前までギルガメツシュが立っていた場所は、石でも直撃したかのように、蜘蛛の巣状にひび割れる。セイバーの一撃は、あのバーサーカーさえ上回る埒外の威力を有していた。

その一撃を見切つてか、攻撃が炸裂する寸前、大きく後方に飛び退いていた黄金の青年。その口元が嘲笑の形に歪み——途中で止まる。

秀麗な頬に入るのは、一筋の線。そこから僅かに、紅い雫が滴り落ちている。回避のタイミングは完璧だったが、騎士王の斬撃はただの余波だけで彼にダメージを与えていたのだ。己の予測を上回る一撃をどう思ったか、紅蓮の瞳に凍えるような光が宿る。

「なるほど。痛い目に遭わねば、自分の立場を解せぬと見える——よかろう。挑んでくるがいい、セイバー。その執念に免じ、我の財を見せてやろう」

——そうして。英雄王は、死闘の始まりを告げた。

「やあ——っ！」

大地が爆発する。

受肉したことによる絶大な魔力生成量、そして聖杯から与えられる無尽蔵のバックアップは、セイバーの持つ魔力放出能力<sup>スキル</sup>を極限まで強化していた。ただの踏み込みでさえ、地面が氷のように割れていく。

そのスピード、そのパワー、共に数日前とは比べ物にならない。ヘラクレスとアイン

ツベルンの森で戦った時は、マスター側の不具合のせい、回復能力をはじめ彼女の能力には制限がかかっていた。その枷が取り払われた今、騎士王の力は伝説に等しい。最優を超え、最強の名を恣にするサーヴァントが、この夜に顕現していた。

「フーン——」

ギルガメッシュは、どこからともなく黄金の剣を持ち出したが……二刀を重ね合わせた防御ごと、セイバーの斬撃は弾き飛ばす。打ち合うことさえ叶わず、甲冑を含めて百キロ近いであろう体が吹き飛び、大地を削つて態勢を立て直す頃には次の斬撃が目前に。

このまま斬り伏せる——聖剣を振るおうとした刹那、セイバーに走る稲妻めいた直感。後方に飛び退いたその瞬間、直前まで踏みしめていた大地から、幾本もの槍が飛び出していた。

警戒して距離を取る、と見せかけ、ランダム機動で突貫。進路を塞ぐように剣や槍が地面から飛び出す、宝具が召喚される速度よりも、彼女が突き進む速度が早い。三度距離を詰めたセイバーは、下から跳ね上げるような斬撃を放ち、対するギルガメッシュは黒い刀身の長剣でそれに応えた。

「つ……!? これは、復讐の呪詛を孕んだ魔剣か——」

セイバーの脅力を以てすれば、剣ごと砕け散らしたであろう一撃。ところが剣がかち

合った瞬間、放った衝撃がそのまま戻ってくるような感触があった。物理攻撃に対し、呪詛を絡めて反射してくる宝具——打ち合いは悪手だと剣士が飛び退いた直後、男の手には異なる武器が握られていた。

鋼色の刀身が赤く輝いた刹那、轟、と火炎が迸る。触れるもの全てを焼き払う紅蓮の奔流は、右から左に空間を蹂躪し、散らばる瓦礫を灼熱地獄に飲み込んだ。

炎の魔剣による、ナパーム弾めいた一撃。魔力放出による跳躍で辛うじて避けきったセイバーだったが、熱波が過ぎ去った時には、英雄王が次の刀を引き抜いている。到底届くはずのない間合いから、刺突が打ち放たれ——その直後、大地を削る白い光！

「ぐ、あ——っ!？」

聖剣で防御した瞬間、セイバーの全身に衝撃が走る。防ぎきったはずなのに、強かに体を貫くダメージは、彼女の思考に空白を生じさせた。

視界がちらつき、体中を痺れさせる一撃は、刀から繰り出された雷撃によるもの。光速の攻撃を直感のみで防いだ騎士王だったが、電流は柄から手に伝わり、その余波で彼女を感電させていたのだ。

耐久力に欠けるサーヴァントなら、これだけで動けなくなっていただろう。しかし、圧倒的な防御力と回復能力を持つセイバーは、ほんの一瞬で回復する。電撃の残滓を打ち払い、剣を正眼に構え直すセイバーだが——男の背後に見える光景に、目を疑った。

「——っ」

劍がある。槍がある。鉾がある。槌がある。

黄金の“門”から覗くのは、どれ一つを取っても恐ろしいほどの魔力に満ちた宝具の数々。十や二十どころか、優に数十を超える武具たちが宙に浮き、射出態勢を整えていた。

古今東西、人類史の随所で名を馳せた伝説の具現。十年前の戦いでこの光景を目にしているはずのセイバーだが、それでも肌が粟立つのは抑えられない。一つ一つが英霊の全力に相当する宝具が、無数無限に振るわれる——これを悪夢と言わずしてなんと言うのか。並の英霊が束になってかかったところで、この男には一矢報いることすら叶うまい。

「どうしたセイバー。聖杯が欲しいのだろうか？ 見事我を打ち倒し、願望機とやらに手をかけるがいい」

無数の武具を従え、傲然と腕を組むギルガメッシュ。それは油断——いや、慢心の表れか。

一騎当千の英霊を前にしてこの余裕、正気とは思えぬ振る舞いだ。しかし、通常のサーヴァントと英雄王の間に広がる差は、圧倒的という表現さえ超えて絶望的。それこそ神霊級の存在でなければ、戦いを演じることができまい。

あらゆる英雄たちの王の名を戴く英霊は、アーサー王ほどのサーヴァントをしても届かぬ高みにある。十年前のセイバーは、ただその暴力に蹂躪されるばかりだった。聖剣の一斬を以てさえ、喉元に手が届いたかは怪しかっただろう。

——では、今の騎士王はどうか。

「——」  
「ゲート・オブ・パレロン 王の財宝」

パチン、と指が鳴る。

それが号令だったのか、空間に展開された宝具たちが、弾丸となって放たれた。一撃一撃が途方も無い威力を有し、未知の能力を秘める必殺の鎌——この英霊が弓兵たる所以がここにある。

殺到する魔弾の群れ。避けられぬ死の使い魔は、降り注ぐ星屑を思わせる。万象を蹂躪する嚆矢を前にした剣士は、その口元を微かに上げて。

「侮ったな、アーチャー。私を止めなければ——」

神速の踏み込み。

襲い来る剣の雨に、騎士王は自ら距離を詰めた。ぶん、と聖剣が横薙ぎに振られ——

「——この三倍は持つて来い！」

気合一閃、その尽くを薙ぎ払う……！

直撃の軌道を描いていた第一陣の八挺は、その剣圧だけであらぬ方向に吹き飛ばされ

ていった。続く第二陣に、間髪入れずに立ち向かうセイバー。

初手の長剣を防ぎ、二手目の短槍を躲し、三手目の大斧を叩き、左より迫る円刃から逃れ、上から降る大槌を弾き、受け、避け、走り、飛び、進む——！

「は、ア——っ！」  
当たらない。

ギルガメッシュが撃ち放つ宝具群は、同時に数十を超える。だというのにセイバーは、その全てを事も無げに打ち払い、弾き返し、斬り伏せる。無尽蔵の魔力供給による際限のない魔力放出は、それだけでも破壊的なエネルギーとなり、低級の宝具などは余波だけで飛ばされていく有様だ。

それはさながら、機銃掃射の中に突き進む主力戦車<sup>M</sup><sub>B</sub><sup>T</sup>めいていた。人間相手であれば、確かに銃弾<sup>宝具</sup>は脅威であろう。しかしながら、重装甲と大火力を併せ持つ戦車に対して、それが如何程の効果を持つのか——！

「吼えるではないかセイバー。ならば、三倍の数をくれてやろう——！」  
追尾効果のある魔剣を斬り伏せたセイバーが、はっとして正面を見つめる。ギルガメッシュが展開する宝具、その数が目に見えて増えていく！

正面だけではない。上方、左右、後方、足元に至るまで、全周囲に黄金の“門”が開き、そこから刃の切っ先が現れ始めていた。三倍どころの話ではない、数百を超えよう

かという宝具の網——！

これは物理的に回避できない。いかに英霊とて人体の軀からは逃れ得ぬ以上、同時に防御可能な範囲は決まっている。どこかで限界が来ると即断したセイバーは、ならばその全てを薙ぎ払おうと、滾り溢れる魔力を己が愛剣に注ぎ込んだ。

——ごおん、と音が鳴る。

莫大な魔力で起動した聖剣は、刀身が倍以上に膨れ上がったように見えた。埒外の魔力量を叩き込まれたからか、余剰魔力が黒い呪いのように刃に纏わりついている。

直後、全方位から殺到する宝具。しかし、可視化できるほどの魔力量はそれ自体が一種の防御壁となり、空間自体に渦を起こしている。中低位の宝具はそれだけで軌道を変えられ、妨害を物ともせず進む上位宝具は、臨界直前の聖剣が弾き飛ばす。

対するギルガメッシュは、その手に黄金の剣を握っていた。簡素な拵えではあるが、セイバーはその形状に既視感を覚える。悠長に思い出すだけの余裕はなく、神秘を宿した武器が直撃する前に、大上段に振り上げられる聖剣——！

”エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣”——！

地を灼く黒竜の咆哮。

黒に染まった星の聖剣は、取り巻く宝具を千々に蹴散らし、莫大なエネルギーを大地に叩きつけた。



際限のない魔力を収束させた、闇の光による究極の一撃。その破滅的な火力は数ある宝具の中でも最上位に位置し、対人火器どころか戦略兵器に匹敵する。本来このような間合いで使うものではなく、数キロの距離を経てもなお要塞を消滅させるほどの斬撃が、一個人を相手に振るわれる。

それに臆することなく、同じタイミングで剣を振るう英雄王。途端、絶大な魔力が刀身に集中し、黄金の光となって解き放たれた。まるで鏡合わせのように、全てを焼き尽くす光同士が、真正面から鏖戦り合う――！

「チィ……チィ……」

拮抗。

しかし、甚大なエネルギーの真つ向勝負は、徐々にセイバーへと軍配が上がり始めた。黄金の光は黒の闇にじりじりと押され、舌打ちしたギルガメッシュが空間から盾を追加召喚。剣を斜めに振るうことで聖剣の攻撃を相殺するのではなく捻じ曲げ、殺しきれぬ余波は防御宝具を前面に立てて防ぎ切る。

時間にすれば、ほんの数秒ほどの攻防だっただろう。光が消えていくと、両者とも無傷の姿が現れるが、その周囲は地形が変貌していた。熱エネルギーに蒸発させられた瓦礫は燻り、何百という宝具が突き刺さって捲れ上がった地盤は天変地異の後を思わせる。

「……まったく、底なしの魔力よな。選定の剣の原典を以てしても、相殺すら叶わんとは——なに？」

熱エネルギーを放った反動か、白煙を上げる原罪を握ったままのギルガメツシュが驚愕する。それも当然、セイバーは既に、二射目の態勢に入っていたのだから——！

「——約束された」

これほどまでの破壊力の行使には、絶大な魔力が要求される。本来サーヴァントとして召喚されるセイバーは、消耗を度外視すれば聖剣の連続発動も不可能ではないが、ここまで雑に取れる選択肢ではない。

受肉したことで発動可能となった、莫大な魔力を生成する竜の炉心。そして、聖杯と直結したマスターから送られる無限に等しい魔力量。その二つが合わさった今だからこそ、セイバーにとって聖剣発動による消耗は無視できる程度に抑えられている。それこそ、際限のない連射が可能となるほどに……！

「おのれ——！」

恐るべき分析能力で、即座に背景を読み取ったのだろう。セイバーが聖剣を振り下ろすより早く、ギルガメツシュの号令が先んじた。

無理に真名を解放することが能わぬ、絶妙な配置の宝具投射に、断念した剣士は即座に回避行動。跳躍した彼女を追うように、幾本もの剣が大地に突き刺さっていく。

刀劍宝具の連射に次ぐ連射は、息をつくほどの暇さえない。数秒あれば放てるエクスカリバーだったのが、鋭さを増した宝具投射は一発一発が狙撃の精度だ。防御力を頼みに一秒以上棒立ちになるのは、あまりに分が悪い賭けだろう。

「これは手を抜いて戦える部類ではなかったか。聖杯という宝を求め、息吹を以て世界を焼く——なるほど、赤き竜と謳われただけはある」

唐突に、無数の武具がかき消えた。

飛び回りながら劍群を迎撃し、攻撃の手を組み立てようとしていたセイバーは、たたらを踏んで急停止。次はどんな宝具を繰り出してくるのかと、劍を中段に構えながらギルガメッシュを睥睨する。

ここまでの攻防は互角——いや、セイバーが若干押している。このまま推移すれば、いずれセイバーが力任せに押し切る形で決着がつくだろうが、聡明な英雄王がそれを把握しておらぬはずがない。

再び指が鳴らされる。男の背後に黄金の“門”が開き、無数の刃が覗くまでは今までの焼き直しだったが……そこから感じ取れた脅威に、騎士王の体が硬直した。

破滅の黎明。

幻想大剣・天魔失墜。

力屠る祝福の劍。

あめのはばきりのつるぎ  
天羽々斬劍。

竜を殺す宝具、女を殺す宝具、王を殺す宝具、悪を殺す宝具、宝具、宝具、宝具——。英霊アルトリアという存在が持つあらゆる特性、属性に対して効力を持つ武器たちが、何十、何百という暴威となって現れる。ただの一つを取っても、容易く流せるものなどありはしない。あのうち一つが突き刺さっただけで、セイバーの霊基は深い傷を負うことだろう。

ある程度予想はしていたが、英雄王の真価とはこれほどかと、セイバーは内心戦慄を覚えていた。宝具の数だけを見ても、尋常ならざる戦闘能力を誇るギルガメッシュだが……この英霊の真骨頂は、その対応能力にある。相手の弱点となる武器が必ず、それも山のように出てくるのだからたまったものではない。

「前座は終わりだ。我も、少々本腰を入れるとしよう。」

音に聞こえた聖剣を見せてくれた札に、我が財の力をとくと味わうがいい……！  
フルバースト  
一斉射撃。

数え切れぬほどの天敵に対し、直感が選んだのは前進。『ゲイト・オラ・パピロン王の財宝』の有効範囲は広い上、弓兵である相手に距離を取るのは自殺行為でしかない。元よりセイバーの真骨頂は白兵戦闘、距離を詰めて魔力と身体能力で押し切るのが最適解と判断。

矢のように突き進むセイバーを縫い止めようと、全方向から砲火が降り注ぐが、彼女

は聖劍を振り回して強引に道を切り開く。この特効宝具たちは一撃でも受けられぬと、長期戦を考えぬ極限の集中力を見せていた矢先……英雄王の方から迫ってきたことに、劍士の瞳が驚きに見開く。

男が握るのは漆黒の魔劍。その刀身を見た瞬間、セイバーの直感が最大の警鐘を鳴らし、下段から斬撃を防御する……！

「そら、受けてみよセイバー！」

「これ、は……！」

アロンダイト  
無毀なる湖光。

もしくはその類似品、あるいは源流のどこかにあたる宝具か。かつての<sup>湖</sup>臣<sup>士</sup>の劍によく似た武器は、セイバーを僅かに動揺させた。十年前の戦の終盤、彼女はこの劍を振るう<sup>ランス</sup>サー<sup>ロット</sup>カーに追い詰められ——その末に、友であった彼を斬り捨てたのだ。

心情的な痛みだけではない。竜退治の逸話を持つアロンダイトは、竜の因子を持つアルトリアにとって天敵の一つ。後の逸話が反映されたのか、それともこの原典宝具が元から効力を持つていたのかは定かではないが、これで負った傷はそれに数倍するダメージを及ぼすと彼女の直感が告げていた。

「私に劍で挑もうとは、片腹痛い！」

だが。いくら特効宝具を使おうとも、ここは劍士の距離。莫大な魔力で臂力をブース

トさせ、一気呵成に蹴散らそうとするセイバーだったが……魔剣を弾くことにこそ成功したものの、手応えがおかしい。

二人の間には、身体能力の面で数段差がある。華奢な少女であるアルトリアは、当然体格面でギルガメッシュに及び得るはずがないが、絶大な魔力と魔力放出能力スキルはこの関係を容易く逆転させる。一番最初の一撃で、ギルガメッシュが吹き飛んでいったのがその証拠だ。

この切り上げもそうならなくてはおかしかった。不審に思った騎士王が、男の全身に視線を走らせ——その体に、魔力の燐光が宿っていることに気づく。アロンダイトの効力かそれとも他の宝具のバックアップによってか、自身の身体能力ステータスを強化している……？

「余所見とは余裕だな、セイバー！ 慢心は真の王者にのみ許された特権と知れ！」  
「戯れ言を……この程度で私と打ち合おうとは、驕ったなアーチャー！」

再び振り下ろされる魔剣を中段で防御し、ギルガメッシュと至近距離から睨み合うセイバー。

身体能力ステータスをどれだけ強化しようが、英雄王に剣の騎士とやり合えるだけの技量はない。彼の本質は無数の宝具を従える戦略家であり指揮官、武技を磨き上げる類の戦士ではないからだ。

ところが、ここでその恐るべき戦略眼が光る。セイバーが男の体勢を崩し、あるいは決め手に訴えようとした瞬間、ちやうど彼女にとつて致命的になる位置に各種の道具が配置されているのだ。距離を取れば先程のように道具が殺到し、剣技で押し切ろうとすれば巧妙に刃が舞う——鏢競り合うしかない現状こそが彼の術中なのだと、騎士王はようやく気がついた。

「十年前よりは齒ごたえがある。その妄執、余さず我にぶつけるがいい！」

哄笑する英雄王が、力任せに長剣を振り切る。受け流し、返す刀で胴体を抉り抜こうとした矢先、セイバーに走る死の予感。

右に体を捻ると、ギルガメッシュ自身にさえぶつかるとはならないかという超至近距離から、黄色い槍が抜けていった。かつて見た、英霊デイルムツド・オディナが振るう必滅の黄薔薇に酷似したそれは、直撃を許せば回復不能の手傷を負わされただろう。

魔力放出で体勢を立て直した時には、英雄王が手にした十字槍人間無碍が突き出されている。横薙ぎに聖剣を振るって弾くが、これも直撃は看過できぬと直感が叫んでいた。桁違いの魔力によつて防御力を底上げしているセイバーだが、あの槍はおそらくその防御を無効化する力を秘めている。

英霊アルトリアという存在に特効を持つ道具、彼女の防御力を無視する道具——秒間ごと、一手ごとに切り替わる脅威は、その全てが異なる能力を有しており、それぞれ違つ

た対処を求められる。相手のペースに飲み込まれれば、無限の手札に対応できなくなる  
と判断し、セイバーは自ら相手の懐に飛び込んだ。

「そら、上手く読まねばたちまち死ぬぞ！ 貴様の悲願とはそんなものか、セイバー！」  
「黙れ、英雄王。貴様の吠え声は耳に障る……！」

燦然と輝く王剣。

叛逆の騎士モードレッド卿がアーサー王の武器庫から強奪し、彼の王の直接の死因と  
なった白銀の剣。おそらくは、その原典宝具がこれだろう。

至近距離で切り結びながら、いやに見覚えのある剣と、ここでそれを持ち出してきた  
英雄王に嫌悪感を募らせるセイバー。だが、この宝具は間違いなく彼女にとつて相性最  
悪の部類。ギルガメツシユの宝物庫は、いったいどれほど多様な武器を収めているのか  
。

「耳に障る？ 言葉は正しく使うものぞ、騎士王。おまえは耳が痛いのだろうか？」  
「なにを……ッ！」

剣の柄から左手を離し、そのまま裏拳で『燦然と輝く王剣』の刀身を殴りつける。そ  
の剣の使い手、血縁上の子供であるモードレッド卿のような戦い方は彼女の流儀ではな  
かったが、怒りに任せた一撃は、ギルガメツシユを数歩後退させた。

この隙に切り込みたいところだったが、全方向から向けられる宝具の照準が、不用意



な突撃を許さない。ギルガメッシュも強烈な打撃を受けたことで危うく剣を取り落しかけ、体勢を立て直すまでの間、奇妙な膠着状態が発生する。

貴重な時間を活かし、どう踏み込むか、どのように自分のペースに持ち込むかを考えるセイバー。そんな彼女に、黄金の王は——剣ではなく、言葉でもって畳み掛けた。

「なあ、セイバー。おまえも理解しているのだろう？ 我を倒し、聖杯を手にしたところで、あの願望機は呪われている。おまえの悲願が正しく叶えられるとは限らぬ」

「……………」

「だというのに、何故聖杯に拘る？ 見たところ、貴様に令呪の縛りは無い。新しい主への忠義立てでないのなら、貴様が剣を抜く理由はそれだけだろう。これだけ剣を交えれば我でなくとも読めるわ」

言葉での挑発や、弓兵の間合いを捨てての白兵戦闘に応じたのは、それを見極めるためだったのか。

淡々と語るギルガメッシュに、セイバーの殺気は強まる一方。だが、黒化してなお残る王としての矜持が、問いに力で応えることを是としなかった。数秒の沈黙の末、セイバーは言葉を返すことを決断する。

「知れたことを。十年前の記憶があるのなら覚えているだろう、アーチャー。」

私の国は、私の過ち故に滅びた。民草や臣下の忠義に応えることもできず、国を割つ

て滅ぼした私には、王である資格などなかったのだ。ならばこそ——より王に相応しい者を、選び直す。

かつての征服王、そして英雄王。自分の我欲を追い求める貴方たちには理解できない。だがこれが、かつて王であった者の責任だ」

征服王イスカンドルは、彼女を哀れんだ。そんなものは王ではないと、王とは清濁を併せ人を魅せるものだ、臣下を従える彼は豪語した。

英雄王ギルガメッシュは、十年前彼女を嘲り笑った。此度は一度理解を示したものの、それは彼女を信じた民衆への裏切りだと突き放した。

騎士王アルトリアは、そんな彼らと相容れない。人々の幸福を、祖国の救済を希う彼女は、彼らとは視線が違うのだ。それこそが彼女の王道であり、そのために彼女は聖杯を——。

「——この愚か者めが」

哀れみでも、嘲りでも、怒りでさえもない。セイバーの言葉を聞いたギルガメッシュが見せたのは、呆れたような溜息だった。

「過去のやり直しが王の責任だと？ つまりあれか、セイバー。雑種どもの忠義とやらに応え、国を滅ぼさず繁栄させる」完璧な結末とやらを求めているのか、貴様は。そのために”完璧”な王を選び直すか？

我は言つたはずだぞ、騎士王。それはおまえを王として信じた者どもへの裏切りであるとな」

「その信に応えられぬことこそが裏切りだろう、英雄王。私の過ちによって、彼らは要らぬ苦しみを味わうことになった。彼らに報いるのであれば、その過ちを正さなくてはならない。

数多の悲劇を消し去る、そのために過去を変える。誰も悲しまなくていい世界を、人々が笑い合える時代を。僅かでも可能性があるのなら、そのために私は、聖杯を勝ち取らなければならないのだ」

それが、アルトリアという英霊の唯一の悲願。

滅びという結果は間違っている。結果がおかしいということは、すなわち過程に問題がある。その端緒こそが、自分が王として立ったこと——始まりからして間違えていたのだと、セイバーは絶望と確信を抱いている。

その過ちを是正する。いや、しなくてはならない。そうでなくては、この愚かな王を信じた民たちに、自分が斬り捨てたかつての臣下に、申し訳が立たないではないか。

「かつての私は弱く、甘かった。強さを超えた強さ、徹底した統治、自由なき自由……その果てに、結果として民の安寧は守られる。

暴君と謗られようと、私はそうするべきだった。たとえば、どのような手段を用いたと

してもな」

この世<sup>ア</sup>全<sup>ン</sup>ての悪<sup>リ</sup>。呪いに囚われたことで、根底にある目的は同じでも、彼女の価値基準は大きく変容していた。

聖杯は汚染され、願望機としての機能が十全に果たせるかも怪しい兵器もどきと化している。今のマスターは非力な少女だが、その実態は邪悪な老人の傀儡であり、意識を奪われセイバーに魔力を供給するためだけに利用されている状態。かつての騎士王であれば、こんな状況を是とすることはなかった。

使えるのであれば、どんなものでも利用する。聖杯が動くか怪しい？ 使ってみて動かぬのであれば、次を待たばいいだけのこと。可能性があるのであれば、手段に拘るなどという無駄は捨てるべきだ。徹底した冷徹さ、力による目的遂行こそが、今のセイバーの根幹だった。

「——そうか。雑念に堕ちたか、セイバー」

変わり果てた剣士の答えに。英雄王は、氷点下にまで冷え込んだ瞳を向けた。彼らしくない、いつそ静かなまでの声音が、その失望の程を物語る。

「かつてのおまえは美しかったが、今の貴様は見るに堪えん。届かぬ理想<sup>ほ</sup>を追い求め、身を越えた悲願<sup>ゆめ</sup>に苦しみ、なお矜持を捨てぬ生き様——その儚くも眩しい魂こそが、我が愛でるに相応しい宝だった。だというのに、愚かさに目を曇らせた挙げ句、理想を捨て

去るとはな！」

よりよい結果を求めることと、結果のためならば何をしてもいいというのは全くの別問題だ。

ある意味、今のセイバーは現実的になったのだろう。選定のやり直しという目的のために、優しさや正義というものを切り捨て、いかなる暴虐であろうと是認する——だがそれは、かつて彼女が嫌厭した暴君の在り方ではないか。言い分こそ身勝手ではあるが、正当と言えなくもない憤りを見せるギルガメッシュに、セイバーもまた凍てついた視線で応える。

「好き勝手に抜かすな、金色。誰が貴様に愛でてくれなどと頼んだ。

我欲で民を蹂躪し、自ら国を滅ぼした男に何がわかる。その妄言ごと、我が劍の錆になるがいい」

「ほざくではないか。薄汚れた貴様になど用はない、冥府の闇に叩き込んでくれるのが慈悲というものだが——その前に、ある小僧の話をしてやろう」

突然の話題の転換に、訝しげな表情を浮かべるセイバー。それが何の関係があるのだと不快感を強める彼女だったが、口を挟む機会を逸し、気づけば男の話に耳を傾けてしまふ。

「その小僧はな、まったくもって見るべき点がなかった。

我欲がない。野望がない。幸福を知らず、愉悅を解せず、快樂さえも望まない。口を開けば、出てくるのは『他人を助けたい』などという世迷言。ヒトが求めるモノの尽くを顧みず、他者を救うことだけを追い求める——そら、どこかで聞いた話だとは思わんか」

衛宮士郎のことだと、セイバーは確信した。

あの少年は、この社会の基準から見ても、彼女の生きた時代から見ても何かが致命的におかしかった。自分のサーヴァントですらないセイバーを庇うために、バーサーカーの刃に割り込むなど、まともな神経では土台不可能だ。同じサーヴァントだったとしても正気の行いではない。

彼の異常さに、セイバー自身思うところはあった。ただただ他人の幸せと救済だけを追い求め、自己がすり減るのも厭わず戦う姿——かつての自分は、もしかするとあのように見えていたのかもしれない。サー・ケイが苦言を呈し、サー・トリスタンが去っていった理由が、ほんの少し見えた気がする。

「知っているかセイバー？ 四度目の戦いの最後、どういうカラクリかは知らぬが、聖杯の中身が街へ零れ落ちた。呪いは街を飲み込み、およそ五百の人間が焼き尽くされたという。

ヤツはその生き残りだ。故にヤツは——生き残ってしまった贖罪として、自分が救え

なかつた人間を救わねばならぬと思つているのさ」

「な——ッ」

セイバーと衛宮士郎は同盟者であり、聖杯に取り込まれる前は彼の家に厄介になつていた。

言葉を交わした機会は一度や二度ではない。彼の過去や内情について、断片的とはいえ聞き及んでいたセイバーだったが……その真実は、彼女の想像を超えていた。

「……待て、ギルガメッシュ。十年前ということは、シロウはほんの子供だつたはず。その彼が、どうして責任を感じなければならぬのですか」

「珍しく意見が合つたな、セイバー。然り、ヤツが負うべき罪過などない。十年前の小僧は、間が悪く巻き込まれただけだろうよ。

だが、当人はそうは思わなかつた。事もあろうに、ヤツは贖罪の手段として、他人の理想に縋つたのさ。正義の味方という愚かな妄想にな」

その言葉で、ある人物を思い出した。

かつてのマスターである衛宮切嗣。彼が見せた怒りは、嘆きは、紛れもなく一度は正義の味方を追い求めた男のものだつた。衛宮士郎は、彼が諦めた理想を追い求めているというのだろうか？

「正義の味方？ 誰も傷つかない世界だと？ おかしなことを。誰も傷つかず幸福を保

てる世界はない。人間が人間である以上、この世の根幹は変わらぬ。それを厭うのであれば、それこそ世界そのものを変える必要があるだろうよ。

ありもしない罪を抱え、他人の願望に縋り、贋作の刃を振るい、この世にないモノを求める——何から何まで、薄汚い偽物だ。ただの一つも本物などない。実におぞましい雑種だとは思わんか、セイバー」

「……………」

嘲るギルガメッシュに、セイバーは同調できなかつた。

衛宮士郎の過去と、彼の歪んだ在り方。男の言う通り、確かに士郎は間違えているのかもしれない。しかし、どうしてもその姿に親近感を覚えてしまう。

火災で人命が失われたことに責任を感じる士郎。戦乱で王国が滅びたことに責任を感じるセイバー。

正義の味方という理想を追い求める士郎。理想の王たらんと日々を駆け抜けたセイバー。

身が斬られようと抉られようと、他人の救済を求める士郎。呪詛で霊基が染められようと、故国救済に聖杯を求めるセイバー。

彼の姿と自分の姿が随所で重なる。もしかしたら自分は、本来衛宮士郎のサーヴァントになるべきだったのかもしれない。



だとするのなら——彼が目指すべきものは自分と同じだ。聖杯を手に入れ、全てを失った過去を変える——そうでなければ、彼は救われない。そうしなければ、彼が行き着くのは自分と同じカムラン血塗れの地獄の丘になってしまう。過去という世界そのものを変える奇跡が、士郎には必要だ。

「我はなセイバー、おまえを高く買っていた。おまえの理想は自ずから抱いたものであり、それ故におまえの在り方は輝かしかった。

翻つて、小僧はどうだ？ まったく度し難い有様ではないか。マスターとしての義理立てがなければ、早々に見切りをつけていたぞ。我の庇護を賜るべきは、それに相応しき宝だけだからな」

男はそう吐き捨てたが、ふとセイバーに疑問が過る。散々な言いようだが、ならば何故、この青年はここに立っているのか。

サーヴァントの優れた視力は、ギルガメッシュが操る空中戦艦にマスターが同乗していたことも、彼がマスターの守りを重視してあれだけの防御宝具を展開していたことも見抜いていた。セイバーが全力で聖剣を叩き込んだところで、黄金の英霊は衛宮士郎を守り抜いたに違いない。

それほど悪し様に罵るのであれば、これだけ肩入れしているのはおかしいし、そもそもこの英霊がサーヴァントとして付き合う理由もない。困惑を深めるセイバーに、ギル

ガメツシユは肩を竦めてみせた。

「だが、番狂わせとは起こるものよ。あの小僧は私の見込みを覆した。不死鳥が灰から生まれるように、偽物ゴモノから本物が生まれたのだ。

ヤツはな、最初から聖杯なぞ求めてはおらん。ヤツは過去の軛から逃れ、自分の力の限界を悟り、なおその手で世界と戦う心算を決めた。ありもしない幻想ではなく、ありうるかもしれない未来に向けてな」

今度こそ、アルトリアには理解できなかった。

この英雄王が、満足げにマスターへの評を一転させたことも驚きなら——衛宮士郎の選択が、彼女にとっては想像の埒外だったのだ。

何故、士郎は聖杯を求めない？ 何故、士郎は同じ道を選ばない？ 何故、士郎はこの男の評価を勝ち取った？

ギルガメツシユの言葉は抽象的で、彼のマスターが具体的にどのような変化を遂げたのか、何を目指すことに決めたのかは分からない。だが、それでも……自分と重なっていたはずの道、一つしかないはずの道に、士郎が新たな選択肢を見出したことは疑いようもない。その背景を、それを認めた英雄王の思考を、セイバーは初めて知りたいと思つた。

「私の目も、少々曇っていたらしい。見るに堪えぬとヤツを見切っていれば、化けた姿を

愉しむこともできなかつた。いかに我とて万に一つ程度は見誤りもするということだな。

故に、喜ベセイバー。一度光を忘れた程度で、我は貴様を切り捨てはせん。かつての貴様は、この英雄王が認める輝きを宿していた——再び火が灯る確率で言えば、小僧などより遙かに高かろうよ」

「どういう意味だ、アーチャー。私を倒す気はないとでも言いたげだが、悔っているのか」

「それは貴様の選択次第だ、騎士王。

——知りたいのであろう？ 衛宮士郎の選んだ道を。我が何故それを良しとしたかを」

ギルガメッシュの言葉は、甘美な毒のようでもあった。

口にしたつもりも、態度に出したつもりもない内心を言い当てられ、セイバーの目が微かに泳ぐ——それが何より雄弁に、答えを語ってしまったている。英雄王の言葉は、どのような宝具よりも浸透性の高い猛毒として、彼女の思考を蝕んでいた。

おまえは間違っていると正面から否定され、その一方で、自分に近い境遇の少年が選んだ道を肯定する。真つ向から切つて捨てることも、自分が正しいと言い切ることもできず、耳を傾けてしまった時点でこの場の主導権は英雄王に移っていた。それはある

いは、名だたる英雄たちに否定され続けてきた彼女の、なら答えを示してみろという反発心でもあったのか。

「ならば挑んでくるがいい、セイバー。おまえの全てを、万象の王たる我に見せてみよう。道というのはな、元より全力で戦わねば拓けぬものだ。自らの道押し通すにしろ、他の道を探し求めるにしろ、ここからは剣で以て語るがいい」

パチン、と指が鳴る。王の背後に輝くのは、いずれ劣らぬ無双の軍勢。

それを見てセイバーも、再度聖剣を構え直した。元よりこの英霊は自分の敵。武で以て挑まねば、いかなる結論も見出だせまい——男の口を割らせたいのなら、聖杯を手にするのなら、どの道ギルガメッシュを倒す他はない。

「——承知した。ならば我が剣に斃れようと異存はないな、英雄王——」

君臨する無限の剣と、蹂躪する無双の剣。二人の王者が、十年という時を経て再びぶつかり合った。

### 33. 王道、激突

——地が割れる。

激突する黄金と漆黒。二騎のサーヴァントが剣を交える度、衝撃波で大地は砕け、空には悲鳴のような轟音が響く。

絶え間なく繰り出される宝具の弾丸と、その尽くを打ち落とす究極の聖剣。既に廃墟同然となっていた柳洞寺は、戦端が開かれて一分と経たないうちに災害の直撃を受けたような有様となった。

超級の英霊が振るう武力は、一般常識で測れる領域を超越している。一撃一撃が地形を変える神秘の応酬に、どうして家屋が耐えられようか。

”約束された勝利の剣”——！

ぐおん、と唸る漆黒の剣。

槍の雨が降り注ぐ間隙を突き、収束された膨大な魔力は、光の奔流となつて空を叩き割った。埒外の熱量を受けた宝具群は吹き飛ばされるか損壊し、振るわれた黒の刃が黄金の英霊を穿たんと迫る。

対するギルガメッシュは、黄昏の魔剣を横薙ぎに振るう。柄に埋め込まれた青い宝玉

から神代の魔力が噴出し、真エーテルの供給を受けた刀身が半円状にエネルギーを放つ。漆黒と黄昏は数秒ほどせめぎ合ったものの、聖剣の火力はサーヴァントの基準においてさえ常軌を逸していた。瞬く間に、黒い暴力が全てを飲み込んでいく。

「ちい、イシユタルめの痲癩のような熱量よ……!」

舌打ちした英雄王が、握った魔剣を正眼に構える。刀身が光り輝いたかと思うと、更にもう一度剣気が放たれ、エクスカリバーの一撃を力づくで押し留めた。同時、黄金の門から無数の剣が現れ、聖剣の主であるセイバーめがけて殺到する。

しかし剣の英霊は、宝具が直撃する寸前、真名開放の一閃を終えてその場から跳躍した。右手一本で振り回される聖剣が、迫りくる宝具の全てを叩き落としていく。

着地際を刈るべく地面から飛び出してきた槍を蹴り飛ばし、左方から飛来する矢を躲し、上方から落ちてきた長剣の柄を掴むと、後ろから射出された三本の宝具に投げつけてあらぬ方向にまとめて飛ばす。敵の宝具を利用して身を守るやり方は力任せで、湖の騎士ほどの精巧さではないが、部下にできたことができぬのでは王の名が廃ろう。

絶え間なく全方位から降り注ぐ宝具を、残像が見えるほどの剣捌きで防ぎきつていくセイバー。竜殺しや王殺し、女殺しや悪属性に対する特効、いずれもが弱点となりうる厳選された武器の直撃は、一つたりとも許すわけにはいかなかった。

——不利だ。

秒間二桁を超える射撃を防ぎながら、セイバーはそう判断せざるを得ない。サーヴァントとしての基礎性能は、攻防共に圧倒的にセイバーが勝る。最強の聖剣はエクスカリバー連射が可能で、神霊級の魔術行使に等しい火力はほぼ全てのサーヴァントを圧倒できるだろう。

ギルガメッシュに対しては既に二度の真名開放を行使し、火力で優位に立っている。しかしながら、その度に聖剣や魔剣と、防御宝具や補助宝具などの合せ技で相殺されているのが実情だった。二撃以上を叩き込もうにも、多重多角の全周囲砲撃オールレンジを受けては、一撃放てるだけでも奇跡の領域だ。

そして間断なく射出され続ける特効宝具たちは、彼女がサーヴァントとしていかに優れていようと、一撃でも貰えばどれだけの深手になるかわかったものではない。既に相当数を損壊させているはずだが、湯水のように降り注ぐ宝具に限りがあるとは到底思えなかった。彼女が弾いた宝具はどこかへ消えていくが、おそらくは英雄王の宝物庫へと回収されている。

宝具を回収する宝具があるなら、損壊した宝具を修復する宝具もあると見て然るべきだろう。いくら壊したところでキリがないと見たセイバーは、弾切れを待つという選択肢を早々に断念した。

「どうしたセイバー。力で以て故国を救うのだろうか？ この程度の障害、早々に打ち

払ってみせよ」

この程度とは簡単に言ってくれぬ——。

哄笑するギルガメッシュに、セイバーは内心で歯噛みする。あの男に油断があったならば、聖剣の火力はとうに黄金の鎧を両断していたことだろう。今の自身の性能なら、あのバーサーカーさえ正面から圧倒できるという確信がある。

だが、今の英雄王には慢心はあつても付け入る隙がない。口では笑いながら、人ならざる紅の瞳は冷たくセイバーを見据えている。放たれ続ける宝具は、その一射一射が弓の騎士もかくやという精緻さであり、十年前のような乱雑さとは脅威度が違う。

膠着状態を保っているのは、ほとんど未来予知に近い直感のおかげ。しかし、セイバーの窮地を幾度となく救ってくれた能力は、英雄王にはまだ手札があると警鐘を鳴らす。盤上の遊戯とはいえ、将棋で彼と戦った際、その演算能力はセイバーの直感を凌駕していた。実戦では伍するというのは、甘すぎる見込みだろう。

ならば、どのようにしてその手札を切り崩すか。

「——驕るなよ、金色」

遠距離戦は弓兵の領分。セイバーの聖剣は圧倒的な瞬間火力を誇るが、相手にも同等の宝具がある。通常火力や対応能力においては比べ物にもならず、撃ち合いでは早晩、飽和攻撃による物量差で詰め切られるだろう。活路を見出すには、リスクを取つてでも



先のように近接戦闘を挑むしかない。

直撃コースを辿る宝具、その数三十三。

進路を阻む宝具、その数二十八。

規格外の直感と膨大な戦闘経験が、降り注ぐ砲火の脅威度判定を瞬時に済ませる。戦術を切り替えたセイバーは、溢れる魔力を両足から解き放ち、ジェット噴射めいた軌道で黄金の王に突貫した。

飛来する宝具の中から、致命的と断じたもののみを切り払い、残りは鎧による防御力で力任せに押し切る。それでも数本の刃が肌を傷つけ、苦痛で体が震えるが、即死でないのなら問題は無い。痛みを冷徹な判断で捻じ伏せた時には、怨敵は既に目の前だ。

「倒れる……！」

袈裟懸けに振り下ろす一閃。少女の細腕から繰り出される剣撃は、空間を歪めるほどの魔力を纏っていた。

待機させていた長剣を振り上げ、防御するギルガメツシュだったが、暴竜の豪腕は見る見るうちに彼を圧倒する。片手で剣を振るう少女騎士に、両手で剣を握る男性が力負けするという、異常極まる光景。

「ぬう——」

セイバーの凄まじい膂力に抗しきれず、ギルガメツシュの剣が自身の鎧まで押し込ま

れ、金属音の悲鳴を奏でる。いかに際立つた物理防御力を誇る鎧とはいえ、このままでは両断されると判断したのか、さすがに笑みの消えた英雄王は至近距離から刀剣宝具を撃ち放った。

殺到する宝具群——しかし、刹那のうちに後退したセイバーは、その尽くを叩き落とす。あと一歩で勝てるという誘惑に僅かでも駆られていれば、彼女の体は串刺しだっただろう。

直前までの力押しとは裏腹な、迅速な判断と精緻な剣技。暴力的な戦法も精密なコントロールも、相反するようであれど根は同じで、セイバーは状況に応じて最も適した戦術を使い分けているに過ぎない。呪詛に汚染されていても、なお衰えぬ直感に技量。騎士王の名を関する英霊は尋常な存在ではなかった。

「見事な剣捌きよな。この期に及んでも、おまえの剣は鈍っておらぬ」

セイバーが退いたことで生まれた、五メートルほどの距離。その先に立つギルガメツシユは、感心したように頷いた。

どれほど肝が据わっているのか、寸前まで命の危機に瀕していたというのに、英雄王は未だ余裕の態度を崩さない。台詞こそ称賛するようであるが、嘲弄とも取れるような声の色に、セイバーの瞳が険しくなる。

「かつての貴様は、民どもを守るために剣を鍛えたのだろう。我は剣士ではないがな、そ

の程度の目は持つている。

——それが今や、民どもを殺すために剣を振るうとはな。つまらん喜劇もあつたものだ」

「……なに？」

セイバーの表情が歪む。揶揄するギルガメッシュの台詞の意味が、彼女には理解できなかつた。

価値基準、行動原理が変容しただけで、セイバーの目的は最初から一貫している。彼女は国と民のために心身を捧げた英霊であり、騎士王が振るう刃に私欲はない。行動の結果として無辜の犠牲が生じることは皆無ではなかつたが、殺戮そのものを目的として力を行使したことは一度たりとも存在しない。

「なんだ、気づいていなかったのか？ まったく、つくづく滑稽な道化よ」

訝しげなセイバーを嘲笑するギルガメッシュ。剣を放り捨てた彼は、見ろとも言うように、空いた手で寺の残骸裏を示してみせた。

「言つたであろう？ あの願望機は呪いに満たされていると。その意味を貴様は理解していない。いや——それとも、理解を拒んでいるのか」

辛うじて聞こえてくる戦闘音。それが何によつて奏でられているのか、セイバーは当然承知している。

聖杯を汚染した呪詛の一部が、ある種の使い魔のような形で具現化したのが、裏手の池で暴れている影たちだ。あれだけでもサーヴァントを飲み込む脅威だが、本体からすればほんの末端に過ぎない。聖杯の内側には、文字通り人類全てを殺し尽くして余りある呪いが内包されている。

しかし、今のセイバーにとってそんなことは大した問題ではない。

「戯言を。汚染されていようと、聖杯は機能している。私や貴様が召喚され、こうして聖杯戦争が行われていることがその証拠だ。願望機として動くのであれば、中に何が入っている」と問題にはならない」

「それは希望的観測というのだ、セイバー。楽観という毒に身を委ねた末路がどうなるか、貴様自身が身を以て味わっただろうに」

こうすればよりよい国になるはず、こうすればわかってもらえるはず——かつての自分に、そういった願望がなかったとは言い切れない。その果てに待っていたものは、国を二つに割った内乱だった。

痛いところを突かれたセイバーが沈黙する。対するギルガメッシュは、腕を組んで瓦礫の向こうに目を向けた。

「呪いというのは、呪う相手がいて初めて存在意義を持つ。聖杯の中に留まっている限り、『この世全ての悪』とやらはカタチもなく何者も殺せぬただの汚れに過ぎん。

あのような影が現れたのは、ヤツがこの世に生まれたがっているからだ。人を呪えという願いを実現するためにな。

だが、聖杯とはあくまで他者の願いを叶えるもの。ヤツ自身が能動的に動くことは叶わぬ。あの影とて、所詮は器の使い魔に影響を及ぼしているだけのもの。『この世全ての悪』が主体となつているわけではない。

——そろそろ分かるだろう、セイバー。ヤツが存在意義を果たすためには、どうすればいいのかがな」

聞きたくない、と少女のどこかが悲鳴を上げる。言わせてはならない、と騎士の直感が訴える。力で口を封じようと、セイバーは半ば衝動的に突貫したが、無数の宝具に足を阻まれてしまう。

機関銃の制圧射撃に等しいそれは、頭を押さえるという戦術目的に忠実だった。槍剣が大地を叩き割る音、聖剣が宝具を打ち砕く音が、たちまちのうちに池の戦闘音をかき消していく。

セイバーにとって屈辱的なことに、宝具を繰り出し続けるギルガメッシュは彼女のこのを見てすらいない。この短時間で性能や動きを分析し終えたのか、降り注ぐ砲火は厭らしい精密さでセイバーの行動を縛っている。しかし当の本人は、聖杯の影が暴れる方を見つめながら嘯くのみ。これだけ轟音が響いているにも関わらず、不思議と響くその

声は、セイバーの神経をいっそう逆撫でした。

「そう。聖杯に願われた他者の欲に、自らの欲を上乗せしてしまえばよい。

世界一の金持ちになりたい？ —— 全ての人間を滅ぼせば、世界一の財貨を得られよう。

人類に平和をもたらしたい？ —— 全ての人間を滅ぼせば、争いなど二度と起こるまい。

聖杯を手にした者の願いは叶えられ、『この世<sup>アンリ</sup>全ての悪』の存在意義もまた果たされる。最近の当世では、なんと言ったか……そう、Win—Winの関係とでもいうヤツか」

「……黙れ」

「さて。既に滅びた故国の救済、だったか？ 我が聖杯ならば、そうさな——今の世界を滅ぼし、かつて生きていたモノを集めて当時の国を再現しようか。

終わることなく日々を繰り返す死者の国民、この星にただ一つとなつた死の国家。喜ベセイバー、貴様の故国は救われ、未来永劫何者にも侵されることはない。なにせ、敵も味方も全て死に絶えているのだからな！

こうして、貴様の悲願は無事果たされるというわけだ。よかつたではないか、騎士王？」

「ツ、黙れ下郎——」  
エクスカリバー・モルガン  
 約束された勝利の剣!

幾つかの宝具が突き刺さるのも構わず、灼熱の息吹が地を薙ぐ。わかりきったような薄笑いを浮かべるギルガメッシュが、もはやセイバーには我慢ならなかった。

山ごと吹き飛ばして余りある膨大なエネルギー投射に、余裕たつぷりに構えていた英雄王は盾の宝具を即時召喚。だが、戦略級対城宝具は生易しい防御で凌げるものではなく、四枚展開された防盾は僅かに光を押し留めただけですぐに断ち割られてしまう。後先考えずに魔力を叩き込んだためか、その一撃は明らかに威力が増していた。

ギルガメッシュの眼差しが鋭くなり、近場に浮遊していた白い剣が引き抜かれる。あわや黒光に飲み込まれるという直前で、『燦然と輝く王剣』から膨大な魔力が溢れ出し、所有者の王気を叩きつけるが如き一閃が聖剣の脅威に抗った。

盾で威力を削っていたからか、さすがに相殺に成功し、黒い光が儚く消えていく——  
 刹那、その残滓を吹き散らし、突っ込んでくる騎士の姿!

「なに?」

「塵となれ、英雄王!」

宝具に貫かれながらも、セイバーは突撃を止めない。真に致命傷となるモノ以外はどうなるかと構わぬと、自身の回復性能に任せた半分捨て身の攻撃。

肩に刺さった槍からは冷気が骨を凍らせ、膝を裂いた斧からは毒が肉を腐らせ、腹を

難いだ剣からは熱が血を焼くのを感じる。それらの激痛を知ったことではないと無視し、超速再生能力で強引に傷を塞ぐ判断は、ギルガメツシュの先見を上回っていた。

「ほう——」

一本では防ぎきれぬと判断したのか、セイバーの斬撃が降り注ぐ寸前、左手で『無毀なる湖光』が引き抜かれる。重ねられた双剣に黒い聖剣が激突し、押し込まれたギルガメツシュがたたたらを踏んだ。

「さすがは雑種どもを救おうと謳いながら、殺戮を求める女の剣だ。重みが違う」  
「貴様の戯言は、確証のない推測に過ぎん。愚論の代償に、今ここで沈め——！」

鏢競り合うエクスカリバーに魔力が叩き込まれ、防ぐギルガメツシュが耐えられなくなっていく。セイバーにとって相性最悪の原初宝具を二本同時に振るい、体格で上回り、『無毀なる湖光』による身体能力強化まで受けているにも関わらず、両者にはそれだけの性能差がある。こと白兵戦において、今のセイバーは最強だ。

至近距離から宝具を撃ち放って距離を置こうにも、一度受けた攻撃を甘受する騎士王ではない。巧妙な位置取りと体捌きで射線を通さず、圧倒的に優る膂力を以て宝具の相性をねじ伏せる。その桁違いの剛力に、ギルガメツシュの体が衝撃で傾いた。

——取った！

その僅かなブレを見逃さず、黒の聖剣が閃く。芸術的なまでの剣技によつて、鏢競り



合っていたギルガメッシュの宝具が、二刀共に手から弾き飛ばされた。

完璧に決まった一撃だった。もはやセイバーを阻むものはなく、返す刀でその首を――

「っ……!?!」

無防備な首を断ち切ろうとした刹那、何かに右足を引かれ、セイバーが前のめりに転びかけた。踏み込みのために全体重を右足にかけた、まさにその一瞬を狙いました奇襲。

一点に集中した重心を崩されては、どれだけの身体能力を持つとうと、人体の構造上耐えようがない。驚愕するセイバーは、網のようなもので右足が絡め取られていることに気づいたが、魔力放出で体勢を立て直そうとした時には一秒遅く。

「――視野狭窄も極まったな」

剣を握っていた右手首が掴まれたかと思うと、セイバーの視界が反転していた。直後、背中を襲う強烈な衝撃!

強靱な鎧を纏つていようと、純粋な衝撃は内側まで通る。呼吸ができなくなり、苦鳴を零したセイバーは、それでも最大級の警告を鳴らす直感に従い身を捻った。ちらつく視界に黒い影が落ちたかと思えば、耳の側で爆音と衝撃が響き、その余波でセイバーの体が吹き飛ばされていく。

不十分な視界と僅かな空気の振動、そして命綱の直感を頼りに、これだけは離すまいと握りしめていた聖剣を振るって身を守る。空中で飛来する宝具群を凌ぎきり、なんとか両足で着地する頃にはダメージは回復していたが、セイバーの顔には理解不能なものを見た混乱があった。

「まったく、馬鹿の一つ覚えよ。近づきさえすれば我を倒せるとでも思ったか、たわけ」地面を砕いていた右足を引き戻し、腕を組んだ偉そうなポーズに戻るギルガメッシュ。堂々たる佇まいの英雄王とは対象的に、いったい自分の身に何が起きたのかを整理したセイバーは、肌が粟立つのを抑えられなかった。

最初から、全てが彼の思惑通りだったのだ。

僥倖の拘引網——セイバーは預かり知らぬことだが、イタリアの伝承において、凶悪

な巨人カリゴランテが人間を捕らえて貪り食うために用いた網である。人間どころか巨人や神すら捕縛するという宝具の拘束能力は折り紙付きだ。

しかし、今のセイバーの身体能力は桁が外れており、拘束宝具を力づくで打ち破りかねない。故にギルガメッシュは、文字通り絡め手としてその宝具を用いたのだ。

あの網は、セイバーが通るルートに予め罠として敷かれていた。ギルガメッシュは彼女の力に押されて後退したように見せかけ、罠の場所に移動。先程からの交戦で、セイバーは白兵戦によるごり押しならば英雄王を圧倒できるという確信を得ていたが……

それさえも、誘導された考えにすぎない。そもそも、彼の王が同じ手で何度も窮地に立たされるといふことからして異様だったのだ。

まんまと罠に嵌まり、よろめいたセイバーを地面に叩きつけたのは柔道でいうところの投げ技。その後の踏みつけ、それを避けられた際の宝具投射と、ギルガメツシュの罠は五段構えにも及んでいる。その尽くを首の皮一枚で凌ぎきれたことは、ほとんど幸運の産物だ。

「——見えている世界が違う」

慄然とする騎士王。ギルガメツシュが全英霊の頂点と謳われる所以の一端を、彼女は垣間見ていた。

彼より優れた戦士は大勢いる。驚異的な戦闘能力も、各神話体系の頂点に近い英霊であれば比肩する者はいらるだろう。政治家として、あるいは戦略家として、彼に近い頭脳を持つ者もいるだろう。ではなぜ、殊更に英雄王を恐れなければならないのか？

その答えは、彼の持つ総合能力にある。すべてを見た人<sup>シヤ・ナクバ・イルム</sup>とまで記された視野の広さ——そして、その眼が映し出した道を具現化するあらゆる手段<sup>宝具</sup>。

以前セイバーはサーヴァントを将棋の駒に例えたことがあったが、ギルガメツシュはゲーム盤そのものをコントロールしているのだ。力が強かろうが、頭が回ろうが、立っている次元が違うのだから勝ちうる道理がない。

「ふん。目に映るものは変わらぬ。貴様が盲目なだけだ、セイバー」

しかし。畏怖の目を向けられたギルガメッシュは、呆れ果てたように首を振った。

「おまえは戦う理由、求める願いの本質を見失っている。己の足元さえ見えておらぬ者が、どうやって先を読むというのだ」

「私が、願いを見失っている……？ それこそ世迷い言だ。私の悲願は最初から変わっていない」

「いいや。そうであつたならば、貴様は未だ星の輝きを放つていたことだろう。理想が妄執へ堕ちたからこそ、おまえは無様な姿に成り果てているのだ」

「私を侮辱するか、英雄王。統治するべき国を捨て置き、不死を求めて放蕩に明け暮れた貴様に、私の願いの何が分かる」

叙事詩に曰く。死の呪いによって親友を喪つたギルガメッシュは、不死の秘宝を求めて幾年も荒野を彷徨つたという。その間、統治者が不在だった国がどうなっていたかなど、想像に難くない。

最後まで国家を延命しようと足掻き続け、今も戦うセイバーにとつては、その無責任さが腹立たしい。そんな男に説教される謂れはない、と殺気を叩きつけるセイバーに、ギルガメッシュは苦笑を浮かべてみせた。

「まったく耳が痛い、神官めシドゥリの説教を思い出すわ。不死の探索の後、我がウルクに戻つた

折に、残っていたものは怒れるあやつと廢墟だけであつた。あそこから立て直すには苦  
勞したもののよ。

だがな、セイバー。おまえは、かつての我と同じ愚かさを繰り返している自覚はある  
のか？」

予想外の返しに、セイバーは言葉に窮してしまふ。プライドが天より高い男が過ちを  
認めたのが驚きなら、自分が彼と同じことをしているというのは意味不明だつた。

「我が過去を語るなど、それ自体がありえぬ事だというのに、よもや一夜のうちに二度と  
はな。玉音を賜らんとするなら、死に等しい代償を払うのが道理だが——それは後払い  
で良しとしよう。

いかにも。貴様の言う通り、我は死から逃れる術を求め、玉座を放り捨てて彷徨い歩  
いた男に他ならぬ。さて——かつての我と今の貴様、どこに違いがある？」

「ふざけたことを。国に身命を捧げた私が、私利私欲に溺れた貴様と同じとでも言うの  
か」

「同じだとも。己の欲に取り憑かれた貴様は、自らの王道を見失つた。王道のために手  
段を求めたはずが、手段と目的が入れ替わり、何のためにそれを志したのかすら忘れた  
愚か者よ。

アーサー王よ。貴様は、何を以て選定の劍を手にしたのだ」

——それを手にする前に、きちんと考えたほうがいい。それを手にしたが最後、君は人間ではなくなるよ。

かつての記憶が蘇る。

選定の剣に手をかけた時、いたずら好きの魔術師は、そんなことを言っていた。それに対し、果たして自分は何と答えたのだったか。いや、そもそも自分は、どうして剣を抜こうとしていたのか——。

「セイバー。我と貴様はある意味では真逆だが、ある意味では似通った在り方をしている。我も貴様も、王としてはじめから『設計』された存在だ。

我は生まれながらの王だった。我は遠くを見通す目を持ち、多くのものを眺めてきた。賢者の閃きも、愚者の醜態も、尊ぶべき発明も、唾棄すべき汚物も、何もかもを目にしてきた。神どもは、人と神とを繋ぎ止める楔になればと我に命じたが——我は自ら、己が王道を見定めた。

無造作に、無作為に増え続ける人間の創造物。それらを蒐集し、裁定し、価値を定める超越者——人でもなく神でもない、絶対なる存在にしか叶わぬ役割こそが、私の仕事だと結論づけたのだ。古びた神どもは、その仕事の邪魔でしかない」

ギルガメッシュが神々と戦った理由。ただ不愉快な仇敵に過ぎなかった彼が、毅然と語る己が王道。その瞳の気高さに、セイバーは口を挟めなかった。

自分と彼は違う。しかし、同じ部分はある。ギルガメツシュが神に抗ったように、セイバーは敵と戦った。彼女にとって、ブリテン島の魔物や侵略者たちは、平和という理想を阻む障害だったのだ。彼女と同じように、目的のため戦い続けたギルガメツシュは――。

「しかしある時、我は最大の脅威に襲われた。『死』に打ち勝たねば、人の行く末を見届けることなどできぬと気がついたのだ。

そこから先は、おまえも知るとおりだ。我は死を打破する手段を求め、何年も彷徨い歩いた。そして、不死の霊草をこの手に収め――失つて、ようやく目が覚めたのだ。そんなものを使つては、我の仕事は果たせなくなる。そんな手段は、我の王道には不要であるとな」

臆氣にだが、彼の言いたいことが見えてきた。この男は、かつての自分にとっての『不死』が、今のセイバーにとつての『聖杯』だと示唆しているのだ。

それは分かったが、背景がまるで見えてこない。そもそもギルガメツシュは、どうして不死を手放したのか。自分が故国救済のために聖杯を求めているように、人類の歴史を見届けるというのなら、不死の霊草は彼にとって必要不可欠だったではないか。その結論のどこに過ちがあつたのか、その過ちが今のセイバーにどう繋がるのか、結論を見いだせない彼女は内心で困惑を深めていた。

「——今にして思えば、そんなものはとうに気づいて然るべきだったのだ。だが、恐れが眼を曇らせ、単なる手段であったものが妄執へと変わった。

笑える話だ。我は愚かさにおいても、貴様らの遙か先を行っていたというわけだ。たかがそんなことのために、荒野を何年も彷徨い歩いたのだぞ？ 答えなど、最初から目の前にあったというのにな。それに気づいていれば、己の誤りなど明白であったわ」

困り顔のセイバーとは対象的に、ギルガメッシュは肩を揺らして笑う。

目的を果たすための答えは、最初から目の前にあると彼は口にした。では——セイバーの目的は、アルトリアという少女が抱いた理想は、いったい何から始まったのだろうか？

「——私は」

カムランの丘。

自分の臣下や領民たちの軀が、数限りなく並ぶ死の戦場。目に焼き付いているのは、その夕暮れの光景だった。

惨劇と絶叫、最後には不気味なまでの静寂しか残らない、地上に溢れ出した地獄。たとえばどのような手段を使おうと、あのような惨禍を否定する。恐怖と流血を招いた自分のような愚者ではなく、より優れた王を選び直し、嘆きに満ちた結末を変える。それだけ、今のセイバーに残された願い。



死という結末に怯え、その恐怖を覆そうとしたギルガメツシュと自分が重なる。彼は不死の靈草を求め、自分は万能の願望機を求めた。かつての彼は終わりに怯え、今の自分は終わりに取り憑かれている。始まりの理想がどこにあったのか、セイバーは未だ思いついていない――。

「我はな、セイバー。当世で多くのものを見てきた」

押し黙る彼女に、ギルガメツシュは静かな口調で語りかける。人ならざる紅の瞳は、セイバーに向けられているようで、どこか遠くの光景を思い浮かべているようでもあった。

彼の『誤り』を質そうとしたセイバーだが、機先を制されては言葉を放さない。認められないが、この男のカリスマはずば抜けている――セイバーの心を揺さぶり、最も彼女が知りたいところに意識を向けたところで、彼は思わせぶりに話を転換してくるのだ。主導権を握られている、場を支配されていると理解していても、こうなつては聞き手に回らざるを得ない。

「この十年、我は惰眠を貪っていただけではない。我の治世より五千年、雑種どもの世界は広くなり、この星の大半を覆い尽くした。どのような変化を迎えたか、検分するの王の努めであろう？」

今の時代は、数日もあれば星の裏側に手が届く。北欧から南米まで、主な場所は見て

回ったさ」

魔術や神秘が支配していた時代とはまるで異なる現代社会。聖杯から付与される基礎知識のみならず、自分自身の目でも、セイバーはその真髄を目の当たりにしている。

十年前の聖杯戦争においては、アインツベルンの領地から日本までを飛行機で移動し、オートバイを駆使して冬木市を駆け回った。見たこともない機械の数々、世界中をリアルタイムで繋ぐインターネットという文化——それは超常の神秘を見慣れた彼女をしても、幾度となく驚きに瞠目したものだだった。

しかし、それらの驚きは本当の意味でセイバーの心には響かない。彼女に見えているものは、あの血に濡れた終わりの風景だけ。ギルガメッシュが親友の死に囚われ続けたように、彼女は今も、過去の罪に苛まされている。

「貴様の母国、英国イギリスにも足を運んだぞ」

びくん、とセイバーの肩が震える。

自分の治世から、何世紀も経たこの時代。現代のイギリスは名だたる大国の一つに数えられるという情報を、彼女はとうに知っていた。

だが、それはあくまで僅かな知識としてでしかない。セイバーはそれ以上の情報を持たない——いや、持とうとしなかった。

聖杯戦争の渦中とはいえ、四六時中剣を振るっているわけではない。大概の事柄は即

日調べがつく現代において、調べ物をしようと思えばいくらでも調べる時間はあつた。そうしなかつたのは、関心がなかつたからでも、余裕がなかつたからでもない。セイバーは、現実を知るのが怖かつたのだ。

臣下や民の信用を失い、国を二分をする内乱を引き起こし、国土を荒廃させ、数え切れない死体の山を作り上げた愚かな王……それが、アルトリアの自己評価だ。王として下した決断に後悔はないが、その行き着く先があつた惨状であるのなら、自分はどうしようもなく間違えていたに違いない。見る影もなくなつた王国がその後どうなり、自分はどんな王として誇られているのか、今の彼女にそれを掘り下げる勇氣はなかつた。

「食文化はひどいものだが、面白いものもあつた。アーサー王の墓<sup>グラスストンベリ</sup>地など、今は観光地になつているようだ」

「は——観光地？」

現地でどんな扱いを受けているのかと内心怯えていたセイバーは、ギルガメッシュの言葉を理解できぬという表情になつた。

今いる時代が、自分の治世から遙かな未来だと理解はしているが、彼女には在りし日の記憶が残っている。過去の懺悔と自己否定に満ちたセイバーにとつて、つい先日まで自分がいた土地が人気のスポットになつてきているというのは、二重の意味で理解し難いものだつた。

「アーサー王生誕の地に、花の魔術師めの洞窟——ああ、カムランの丘もあつたな。我は数日かけて見て回つたが、どこもなかなか賑わつていたぞ」

「……何が言いたい」

「まだ解らぬか。アーサー王という英雄が築き上げた功績、貴様という為政者が見せた王道は、この時代でも輝いているということだ」

人類史に名前を刻んだ英雄は数多い。

王族、戦士、学者、政治家。民族、地域、宗教、国家ごとに多種多様な英雄が存在し、歴史や文化に強い影響を与えてきた。

しかし、英雄たちの中にも格の差は存在する。一つの集落で崇められている勇者と、土地や人種の垣根を超えて名を轟かせた覇者であれば、一般的には後者がより上位の格を持つといえるだろう。

英霊としての格や強さは人類史における知名度、ひいては信仰が影響する要素が大きいが、アーサー王は極めて強力な英霊の一人である。それは即ち、彼女がそれだけ大勢の人々に知られている——英雄として認められているという証左。

「国が滅びたといったな、セイバー。だが、国と人とは別のものよ。人間というのはな、その生命力で神どもから星の覇権を奪い取つた種族の名だ。たかが国が消えた程度で、人間どもが、奴らが生み出したものがそうそう消えるものか。」

そも、民どもが死に絶えているならば我らの記録など残るまい。貴様が英霊としてこの時代に存在していること、それ自体が貴様の功績の証明だ。

伝説にしる悪評にしる、アーサーという王の業績は民どもが千年先まで伝え継いだのだろう。おまえが守った、おまえに救われた人間は、それなりにいたということさ」

衝撃で、セイバーの目が見開かれた。血みどろの内戦を引き起こし、時空を超えた先でまでかつての臣下に剣を向けられる顛末を迎えた彼女は、結果的に自らのしたことは悪政だったのだと結論づけていた。

かつての過ちを償うために、セイバーは聖杯を求めている。その悲願は執念を超えて強迫観念の域に近く、この世全ての悪に魂を汚染されてなお、彼女の身を突き動かしている。

英雄王の言葉は、その根底を揺るがすものだった。彼個人の評ではなく、客観的な証拠を突きつけられたことが、感情的な反論を封じてしまう。

「聖杯で過去を覆す——なるほど、よかろう。地獄へ続く悪路であろうと、道を選ぶ権利はおまえの自由だからな。

だが、歴史への干渉がどのような影響を引き起こすのかは私の眼でも未知数だ。最悪の場合は、先の私の予測が実現しよう。しかし、最善の場合……そうさな。貴様の想定通り、より優れた王が選定され直され、時代が乱れなく進んだとしよう。その場合です

ら、貴様の選択は、理想を踏み躪るものになる。

アーサー王の姿を見た人間が作り上げ、この時代まで残した文化や伝承。それを見た後の時代に、アーサー王の功績を夢見て英雄となった者もいるやもしれん。我の宝物庫にもないそれらの財を、貶めようとしている愚か者が貴様だ。なにせ、貴様の後に続いたモノ、その全てを消し去ろうとしているのだからな！」

「な——っ」

セイバーは危うく剣を取り落とすところだった。慌てて手に力を込め直すが、微かな震えが止まらない。

己が間違っていると糾弾されたことは初めてではない。十年前、かの征服王と言葉を交えた際、彼はセイバーの王としての在り方を批判した。欲望のままに大陸を制した王と、国民の救済に忠を尽くした王とでは道が交わる道理がなく、セイバーは征服王の理解を得られなかったことにある意味では納得していた。

その席には英雄王もいたのだが、彼はセイバーを肯定するでも否定するでもなく、何がツボに入ったのか不愉快なまでに笑い転げていた。まがりなりにも征服王とは議論の余地があつたが、英雄王は話の通じる相手ではない——セイバーはそう断じ、以降は彼を警戒すべき不快な敵と認識した。

何故自分が嘲笑されたのか、その時のセイバーにはまるで分からなかつた。当時の英

雄王にも、それを語るつもりはなかつただろう。しかし、十年経つた今になって、セイバーはその理由を突きつけられてしまった。

民を救うと訴えるのと同じ口で、救つた民を踏み躪ると公言する。しかもそれを、何一つ理解していないままに。形は違うにせよ、王であり政治家であつた者からすれば、セイバーの姿はさぞ滑稽に映つたに違いない。

「かつてのおまえは美しかつた。身に余る理想を掲げ、どのような現実にも屈さぬという、その信念が純粹だつたからだ。手段はどうあれ、おまえはよりよい未来という『先』を目指していた。

だというのに、今の貴様はなんだ。ただ過去の失敗を帳消しにしようと足掻き、生まれる犠牲から目を背け、手段に拘らぬなどと戯言を吐いて自分自身すらも騙している。自らを善と信じる殺戮者など、滑稽を通り越して醜悪だ。

普段であれば捨て置いたのだがな。まがりなりにも、貴様は我が価値ある宝として見出した女だ。輝きを失い、朽ちさせるには惜しい。我の仕事を阻まんという愚か者に、丁寧語でやつてやっている寛容を知れ、セイバー」

ギルガメッシュの言い分は身勝手だつた。セイバーという人間を一方的に評価し、断罪し、拳句に恩着せがましい態度を取る相手など、一蹴して然るべきだろう。

十年前のセイバーであれば、おそらくそうしていた。征服王と三人で盃を交えた宴席

のように、侮辱なら剣を以て語れと一喝したに違いない。しかし——今の彼女は、動くことさえできないほど打ちのめされていた。英雄王の言葉は、今の彼女が抛り所としていたものを、ずたずたに引き裂いたのだ。

いや……引き裂いたというよりは、ペールを剥がしたというべきだろう。セイバーが見ようとしていなかったもの、セイバーが目を背けていたものを、ギルガメツシユは最初から見抜いていた。おそらくは、十年前のあの時から。

『セイバー。おまえの願いは、おまえを信じた者たちへの裏切りではないのか?』

記憶を失っている間も、この男の根底は変わらなかつた。自分という人格を形作る根本である、過去の記憶。それが消え去つてもなお、彼の言動が揺らがなかつたのは。

「我は人間を裁定する王だ。人間どもが生み出す知識を、技術を、財として収め価値を測るのが私の仕事だ。その我を差し置いて、財を無価値と断ずるばかりか、財そのものを消し去ろうなど、度し難いにも程がある」

その王道が、何よりも強固だからだろう。

常人の理解と隔絶した、ある種狂っているように見えて、英雄王の言葉には芯が通っている。途方もなく身勝手な物言いだ、彼の目線、彼の王道からすれば、それは至極当然の内容なのだ。

翻つて、セイバーはどうか。人々によりよい営みを、故国に安寧をもたらそうと走り



続けてきたが、信念と行動が矛盾していることを示されてしまった。信念の正誤ではなく、信じた理念に背を向けていると詰られては、言い返しようがなかった。

彼女は、かつて生まれてしまった大勢の犠牲を救おうと心に決めていた。そのためなら、どんな代償でも払う心算だった。セイバーが見ていたものは、あの血塗れの戦場であり、彼女に失望して去っていった臣下や民衆の姿だったからだ。

だが、ギルガメツシユは彼女の功績が現代まで残っていると語った。それはアーサー王に救われた者が、確かに存在したという証拠。犠牲をなかつたことにするというの——その一方で、救つたはずの人々を殺すということになる。

「……いや。いや、違う。私より優れた王を選び直せば、私が救つた人はそのままに、さらに大勢の人を助けることができるはず——」

「少なくともあの小僧は、未来を見据えていたぞ」

それでも、と縋るセイバーの言葉を、ギルガメツシユは切つて捨てた。

衛宮士郎——英雄王のマスターは、十年前の大火に巻き込まれ、多くの死を目の当たりにした。それを自己の責任であるとし、罪を償おうと身をすり減らす姿には、セイバーも思うところがあった。

しかし、士郎はセイバーとは違い、聖杯を求めていないという。セイバーのように救えた人がいたわけでもなく、彼はただ苦痛を受け、被害を見てきただけの立場。聖杯戦

争による災禍は誰が得したわけでもなく、ただ死と絶望を撒き散らしたただけだったのだから、その過去を帳消しにするというのはノーリスクの選択肢だ。今のセイバーのような葛藤も必要ない。

だから尚更、セイバーには分からない。どうして彼が聖杯に価値を見いださないのか。どうしてギルガメッシュが、そんな彼を肯定しているのか——。

「簡単な話だ。過去を帳消しにするというのは、その過去に耐えた者どもへの侮辱に他ならぬ」

「——っ」

「ふん。その顔を見れば、おまえの考えていることぐらい我でなくとも読めるわ。」

人類の歴史も、人の生も、その全てが幸福に溢れているわけではない。誰の得にもならぬ、誰にとつても起きぬ方がよかった出来事など数多あろう。それによつて失われたモノも数知れぬ。

だが、どんな物事にも必ず残るモノはある。それが財産であれ、負債であれな。己の過失によらぬ出来事に苦しみ、過去に苛まされながらも、それでも負債に屈するまいと前に進む者はいるのだ——あの小僧のように。過去を変える手段を示されても、未来の可能性に牙を剥かれても、『それでも』と前に進めるのが人間というものだ。我が認める『価値あるもの』だ。

貴様の愚かな考えは、ヤツの矜持への最大の侮辱だ。その傷を、その苦しみを無価値と断じられるのは本人のみ。

それをなんだ貴様は。苦しいなら聖杯で過去を変えればよいだと？ 負債と戦うあの男に価値はないと？ 神にでもなつたつもりか、たわけッ！」

英雄王の一喝に、今度こそセイバーは怯んだ。彼の怒りは正當なものだと、頭よりも先に心が理解してしまっていた。雷に打たれたような衝撃が、彼女の心を駆け巡る。

『——その滅びは必定だ。悼みもしよう。涙も流そう。だが決して悔やみはしない。

ましてそれを覆すなど！ そんな愚行は、余とともに時代を築いた全ての人間に対する侮辱である！』

十年前、征服王イスカンダルから向けられた怒声。あの怒りの意味が、今になってようやく理解できた。

英雄王にとっての価値ある財。征服王にとっての臣下との絆。セイバーの悲願は、彼らの重んじるものに泥を塗る行為に等しいのだ。

誰も彼もが死に絶えた、カムランの丘という血塗れの地獄。彼女を見限り、裏切つていった臣下たち。だが——よく考えてみれば、国民や臣下の全てが裏切つたわけでも、全員が死んでしまったわけでもない。あの内乱は深い爪痕を残しただろうが、艱難辛苦に耐え、今の英国へ至る道筋を築き上げた者たちがいたはずだ。自分の治世を否定し、

歴史を書き換えるということは、彼らの存在そのものを貶める恥知らずな決断ではないのか。

「つ——では、犠牲となった者たちはどうなる!? 苦しみに耐えた者たちが尊いと、彼らの功績を汚すなどというのなら、私の過ちで死んでしまった皆へどう顔向けすれば——」  
「馬鹿め。全ての人間を満たし、生かすことなど不可能だ。それすら理解せずに王を名乗るか、小娘。

違うだろう。犠牲が生じると、輝かしい未来ばかりではないと、おまえには分かっていたはずだ。それでも、と前へ進むに足る光が、おまえの裡にはあつたはずだ。

思い出せ騎士王。おまえは一体、何が欲しかったのだ」  
自分が本当に欲しかったもの。

その言葉が鍵になったように、靄に覆われていたかつての記憶が、溢れるように広がった。摩耗していた記憶が、呪いに侵されていた魂が、この一瞬はつきりと蘇ったのだ。

——もう、ずっと昔の話だった。

それを抜いた者が王となる、という聖剣。国中の名だたる騎士が集まり、その剣を抜こうと試みたが、誰一人栄光を掴むことは叶わなかった。

誰にも抜けないなら挑戦する意味もないと、騎士たちは剣に興味をなくして離れて

いった。そうして、岩に刺さった剣だけがぼつんと取り残された静寂に、ただ独り近づいたのが彼女だった。

剣に手をかけようとした時、魔術師は言った。それを手にすれば、待っているのは破滅だと。あらゆる人間に恨まれ、惨たらしい最期を迎えるのだと。その光景を、悲劇に満ちた未来を、はつきりと見せられた。

だけど。

『——多くの人が笑っていました。それはきつと、間違いではないと思います』

そうだ。自分は、この結末を知っていた。だから後悔などしないと、最後まで誓っていたはずではなかったか。

だって、見せられた未来にあつたものは、それだけではなかったから。苦難や惨劇を乗り越えて、笑って暮らしている人たちの姿があつたから。ああ、どうしてそんなことを忘れていたのか。剣を抜いたあの時から、答えは自分の中にあつたのだ。

犠牲にしたものがある。失われたものがある。いつか必ず、終わりの日がやってくる。だけど——そこには必ず、残されるものもある。

「そう、か——。英雄王。だからこそ、あなたは不死の薬を打ち捨てたのですね」

彼の結論が、今なら問うまでもなく理解できる。

世界とは、そういうものなのだ。どれほど尊い命でも、どれほど偉大な功績でも、い

つか必ず土に還る日がやってくる。そして残されたものが輝き、新たなものが芽吹いていく。その移ろいこそが、人の世の根幹に他ならない。その枠から外れ、ただひとり不死となったところで、いったいどうして人の世界を測れようか。

彼が求めた不死も、自分が願った聖杯も、結局は同じことだ。聖杯に奇跡を願い、首尾良くそれが叶えられたところで、それでは今度こそ何も残らなくなってしまう。かつての自分の誓いも、人々の笑顔も、犠牲の意味も、何もかも。

『奇跡には代償が必要だ。アーサー王よ。君はその、一番大切なものを引き換えにすることになる』

聖剣を抜いた時、マーリンから告げられた言葉。あの魔術師は、この未来をも見通していたのだろうか。

「私の治世は——無駄ではなかった」

そうだ。多くの人が笑っている光景、あの日抱いた理想が叶った世界を、自分はもうこの目で見ている。

苦しみと死、恐怖と飢えが隣り合わせだったかつての治世と比べ、現代社会は凄まじいまでの進歩を遂げた。聖杯戦争の關係上、主に目にしたのは日本の風景だが、母国はこの国に並ぶ先進国だという。十年前も今も、自分は見ようとしていなかっただけで、榮譽ある英国の姿を一度ならず見聞きしていたはずだ。そこには間違いなく、笑顔と活

気が満ちていた。

なんだ——聖杯に願うまでもなく、自分の理想は、叶えられていたじゃないか。

「——む？」

いつの間にか、手から滑り落ちていた聖剣。垂直に突き刺さっていたそれを、ゆつくりと大地から持ち上げる。まるで、かつて選定の剣を抜いた時のように。

「なんのつもりだ、セイバー。この期に及んで、まだ貴様は聖杯に縋る気か？」

「……いいえ。私も、目が醒めました。私に聖杯は必要ない。私の願いは、もう叶っていたのですから」

文字通り、憑き物が落ちたかのような晴れ晴れとした表情。先ほどまでの半死人めいたものとは違う、生気に溢れた表情は、瞳の色こそ違えどかつてのセイバーのものと同じ。

しかし、穏やかな雰囲気とは裏腹に、彼女は聖剣を正眼に構えていた。その滑らかな動きには一分の隙もなく、星の剣はまっすぐギルガメッシュに向けている。

「だからこの戦いは、私の願ひとは関係がない。この場を任された騎士としての誇り、サーヴァントとしての責務——そして、騎士王としての意地です。

他の王に言い負かされ、やすやすと膝を屈したなど……それこそ、私の民に顔向けできませんから」

力強い微笑み。戦意に溢れたそれは、十二の会戦を勝ち抜いた勇士のもので。

「見たがつていたでしょう？ 私の聖剣を。この場で何度か振るいましたが——この剣の真価は、あんなものではない。」

ありがとうございます、英雄王。あなたのおかげで、私は光を取り戻すことができました。返礼は、この輝きに代えさせていただきます」

ザ、と踏みしめる足に力が籠もる。それと同時に、構えられた聖剣が、眩く黄金に輝き出した。黒々とした呪いに染まり、血のように走っていた赤い紋様が、洗われるように光に飲まれていく。数瞬の後、彼女が握る至上の剣は、星の輝きを完全に取り戻していた。

「——ク。ククク、フフ、フハハハ、ハーツハツハツハツハ！

そうだ！ それでこそ騎士王、それでこそ我が見込んだ女よ！ 後は払いとは言ったが、こうも早く良い対価を払ってくるか……！」

堂々たるセイバーの威容に、ギルガメツシュは上機嫌に笑い出した。そこには先ほどまでの嘲笑や冷笑の色はなく、ただ純粹に、良いものを見たという快なる笑い。呪いに侵され、自分を見失っていた彼女が再び立ち上がる姿は、この王をしても予想外だったのか。

ひとしきり肩を揺らして大笑した後で、頬に笑みを残したまま、指を鳴らすギルガ



メツシユ。途端、この空間を埋め尽くすような武具の大群が、ずらりと刃を覗かせる。英雄王の笑みは、純粋な楽しさのそれから、残酷さを滲ませたものへと変わっていた。「——それで、どうする？ その剣だけでは我へは勝ち得まい。まだ手があるのならば早々に披露するがいい。

我にここまで語らせたのだ、生半なものでは代金には程遠い。我を興じさせることが叶わぬなら、その対価は貴様の首となるぞ」

……ギルガメツシユの見立ては真実だ。

聖杯のバックアツプにより跳ね上がった身体能力。竜の炉心で生成され、それ以上に絶え間なく供給される無限の魔力。際限のない連射が可能な、最上級の対城宝具。

これだけの武装を備えても、英霊の頂点には届かない。英雄王が油断しており、慢心する余地があるなら押し切れただろうが、今の彼にそんな甘さは期待できない。この男は自分どころか、かつての円卓の騎士が総掛かりで挑まなければならぬ、次元違いの怪物だ。

故に——手札を増やす必要がある。

「ふう……っ」

大きく深呼吸するセイバー。莫大な魔力を、隅々まで行き渡らせる。

だが、聖杯から流れてくるものは魔力だけではない。膨大な呪詛が、悪意が、

この世全ての悪の力が牙を剥く。魂を侵す、悪であれという方向性には誰であれ逆らえない。正当な英霊であるセイバーが、蝕まれながらも自我を保っていることすら奇跡的なのだ。

それほどの力、それほどの呪い。故にこそ……この世全ての悪には、利用価値がある。魔力供給源である聖杯との経路に、ほんの少しだけ干渉する。僅かに多く、呪いの力が流れてくるように。

「ガ——ぐ、っ……!?!」

途端、セイバーの顔に苦悶が浮かぶ。体から、可視化できるほどの黒い魔力が立ち上がり、膝が崩れ落ちるのを剣を支えに辛うじて持ちこたえる。人類全てを滅ぼす呪いが、有り余る悪意を以て彼女を襲い始めた。

「馬鹿な——なんのつもりだ!?!」

さすがのギルガメッシュも、その異様に目を剥いた。セイバーのやっていることは、自殺行為以外の何物でもない。

マスターとサーヴァントを結ぶ経路はパイプのようなもので、その両端には蛇口がついている。どちらかの意図で供給量、需要量を絞ることも、また増やすことも可能だ。過去にはサーヴァント側が強制的にマスターから魔力を吸い上げ、供給量を制御する間もなくマスターが瀕死になった例もある。

魔力が増えればサーヴァントは強くなる。そういう意味では、魔力供給量を増やすのは正解だが、今のセイバーは立場が特殊すぎる。悪性呪詛に飲み込まれ、霊基そのものが悪意に汚染された彼女は、この世全ての悪と同調してしまっているのだ。

間にマスターを挟んでいるものの、彼女と聖杯の繋がりほとんど直結に近い。少し手を加えるだけで、滂沱と呪いが流れ込んでくるほどに。既に汚染されているため、呪われることは問題なくとも、自らの許容量を超えたエネルギーに晒され続ければ霊基そのものが保たなくなってしまう。風船に空気を入れ続ければ、いつか弾け飛ぶのと同じ道理だ。

「まだ、だ……い」

剣を支えにするセイバーが、修羅の形相で歯を食いしばった。荒れ狂う呪いを、膨大な魔力を、驚異的な意志で制御し、エネルギーの方向性を絞っていく。

——英霊アルトリアは、精霊や宝具による多数の加護を受けている。

水の上を泳ぐことなく駆け抜ける加護や、変わったところでは髪結の精霊の加護。中でも特筆すべきは、聖剣による不老の加護だ。

老いによる弱体化が発生しないというのは大きなアドバンテージになるが、それは成長による強化を得られないことと引き換えでもある。セイバーは膨大な魔力によって戦闘能力を底支えしているが、魔力を差し引いた素の身体能力の低さ、少女故の体格の

小ささは戦闘において不利に働く。格上の相手になるほど、その短所は無視できないものとなる。

この戦いでもそうだ。より長い手足があれば、英雄王の首に刃が届く機会があつた。より強い臂力があれば、劍戟で押し切れる機会があつた。より上の体格があれば、容易に投げ飛ばされることもなかつた。

故に——不老の加護を、今ここで消滅させる。

「ぐ……あ、ああ、ああああああ——ツツツ！」

魂が割れる。靈基が軋む。規格外の呪詛が、アルトリアの自我を蝕んでいく。

当然の展開だ。宝具の加護を、呪いの上書きによつて塗り潰そうなど正気の行いではない。そればかりか、加護が消えていくのに並行して、彼女の肉体は修正を受けているのだ。精霊によつて抑制されていたモノが溢れ出し、その揺り戻しが、現在の彼女に相応しいものへ靈基を書き換えていく。その苦痛は、尋常な精神で耐えうるものではない。

だが、それでも騎士王は。

「つ——こんな、痛みなど……！」

歯を食いしぼる。自分がしでかそうとしていたことに比べれば、こんな痛みは取るに足りない。自らの治世で失われた命の重さ、民が味わった苦しさは、この何倍にも及ぶ

だろう。

この世全ての悪……この呪いには、あるいは彼らの憎しみも含まれているのかもしれない。痛くて、苦しくて、どうにかなってしまいそうだ。

けれど。あの結末を、受け入れると決めた。聖杯による逃げを選ばず、彼らの犠牲を受け止めると。この怨嗟に耐え切らなければ、それこそ彼らに顔向けできない。この程度の痛み、乗り越えられずして何が王だというのだ。

乗り越えた上で、前を向く。そうでなければ、今までの自分の道に、自分の治世の結果に意味がなくなってしまう。そんな当たり前のことを、最初から知っていたはずのことを、自分はあの王に教えられた。

いけ好かない男だった。不愉快な人物だった。だけどあの英霊は、誰よりも偉大な英雄王だ。あらゆる英霊の先達が、彼女を『王』と呼んだのだ。ならば——王の矜持を見せずして、どうして騎士王などと名乗れようか。

剣を手放したくなる。膝をついてしまいそうになる。埒外の苦痛を、ただ意地だけで支えきる……！

「は、あ——ああああああ……つつつ！！」

一閃。

セイバーを取り巻いていた黒い呪いが、聖剣によつて散り散りになる。靄のように漂

う魔力の中から現れた彼女は——一瞬前とは、別人になっていた。

「なに……う？」

呆然とするギルガメツシュ。彼らしからぬ、戸惑いを隠しきれない表情は、それがどれだけ尋常ならざる事態なのかを物語っている。

一回り半ほど大きくなった身長。

すらりと長く伸びた手足。

メリハリが利きすぎるほどの体型。

小柄な少女だったセイバーは、大人の女性へと変身していた。元の外見からすれば、軽く十歳は年齢が違っている。

聖剣によつて抑制されていただけで、本来の年齢に相応しいのはこちらの姿なのだろう。成長に伴つてか、その体から感じられる力は、先程までと比べても優に一段階は跳ね上がっている。

もはや自分がまともに斬り合える相手ではないと、ギルガメツシュは即断した。今のセイバーと近接戦闘でやり合うならば、かつての朋友か、それこそヘラクレス並の身体能力が必要だろう。宝具によつて身体能力を跳ね上げることはできるが、技量差を考えれば相手にもなるまい。

「——ふむ。我としては、前の見た目の方が好みではあるが。こちらの方が骨はありそ

うだ。

「さすがに驚かされたぞ。よもや己が加護を帳消しにしたばかりか、靈基構造そのものを強引に書き換えるとはな。半歩の誤りで、バーサーカーめと変わらぬ獣と化していたところよ」

「このぐらいの無茶をしなければ、あなたには届きませんから。」

——先の私と同じだとはゆめ思わぬことだ、英雄王！」

苦笑いを見せた後、空気を切り替えるように言い放つセイバー。先程まで使わなかつた風王結界が轟と唸り、呪いの残滓を千々に吹き飛ばしていく。

それに応じるように、目を細めるギルガメッシュ。空間に溢れ出していた無数の鋒が、目に見えてその数を増す。その数は百や二百どころか、優に千を超えていた。

僅かな睨み合い——先に動いたのは、セイバーだった。

「はあ——ッ！」

神速の踏み込み。疾駆する地上の流星を、無数の宝具が打ち砕こうとするが。

「ぬ……!?!」

風王結界が、彼女の速度を押し上げた。

英雄王の予測より尚疾い動きに、宝具群は後塵を拝すばかり。ランサーにも比肩しやうかという速さを与えた風の宝具は、ようやく日の目を見たとはばかりに吹き荒れ、つい

でのように迫る刃を蹴散らした。

唯一、正面からの宝具投射が有効火力となるが、星の聖剣がその尽くを切り伏せる。鎧も強化されているのか、成長に合わせて形の変わった防具は、守りを潜り抜けた宝具を弾いて防ぎきってしまう。

攻防は刹那。ギルガメツシュが対応するより疾く、セイバーの剣が振るわれる……！

「ツ——」

破滅<sup>ゲ</sup>の黎明<sup>ム</sup>。星の聖剣に比肩する宝具が、斜めの軌道で受けに回る。

武器の性能は同等。しかし、二人には剣士としての差がありすぎた。まともに受けることさえできず、太陽の魔剣は弾き飛ばされ、返す刀が黄金の鎧を一閃！

——ギイイイイイーン！

響き渡る金属音。魔剣を弾いた影響で、威力が減衰していたこともあってか、超級の防具は斬撃を辛うじて防ぎきった。だが、燦然と輝く鎧には、剣の痕が深々と刻まれている。同じ場所に一撃を受ければ、次の刃は耐えきれまい。

トドメを刺そうとするセイバーだが、さすがに英雄王の対応が間に合った。上下左右から降り注ぐ宝具が足を阻み、これは突破できぬと諦めたセイバーは一旦距離を取る。

ここまでは、今までの戦闘の繰り返しにすぎない。セイバーは唯一の勝機である白兵戦に持ち込むべく距離を詰め、ギルガメツシュが猛攻を捌き切るといって一連の応酬。



違っているのは、セイバーは『距離を詰める』という行為のために数少ない手札を消費しており……そして、英雄王を相手に一度切った手札は二度と通用しないことだ。

自分の損傷を織り込んだ特攻は使ってしまった。次は罠にかけられ、窮地に陥った。能力の上昇と風の宝具によって、目論見を狂わせた今でさえ押しきれなかった。

ギルガメッシュの攻略法は、対応できない間に初見殺しで圧倒する以外に存在しない。どれほど強力な武器であろうと、どれほど特殊な能力であろうと、英雄王にはそれに対応する手札がある。

——セイバーは手札を晒してしまった。今の一撃で仕留められなかったのであれば、もう彼女に打つ手はない。上昇した身体能力も、強力な風の宝具も、既に想定内だ。

そう判断したギルガメッシュは、この戦闘を終わらせるべく無数の演算を始めた。セイバーに最も有効な宝具は何か。彼女に対し最も有効な戦術は何か。

普段の彼が、自らの頭脳をフルスペックで活用することはない。戦いなどという戯れに本気を出すなど、王の沽券に関わるからだ。英雄王が全力を出せば向かうところ敵なしであろうが、王が本気を晒すという時点で彼の矜持に瑕がつく。それ故の油断、それ故の慢心。

しかし、今の騎士王は同じ王として自身に挑んできている。この世<sup>アレンリア</sup>全ての悪<sup>リマユ</sup>に耐えきるどころか、呪いを利用して自身の霊基を書き換えるなど、ギルガメッシュをしても度

肝を抜かされた。それほどの覚悟を示し、それほどの矜持を見せられて、どうして生半な戦いができようか。

「だがここまでのだ。鎧に傷をつけたのはよかつたが、それでは我には遠く及ばぬ。よく抗った方だが、そろそろ引導を——」

——待て。セイバーが握る、あの槍はなんだ。

「聖槍、抜錨——」

聖劍ではない。いつから持ち替えたのか、桁外れの力を持つ槍をセイバーは振るつていた。力を押し留めるように封環が絡みついた、馬上槍のような長さの武器は、防御に不向きであるにも関わらず、その膨大な魔力で降り注ぐ宝具たちを薙ぎ払っていく。

——その槍を、最果てにて輝ける槍という。

アーサー王は生前、多くの武器を使用した。最も有名なのはエクスカリバーだが、巨人の剣であるマルミアドワーズ、変化能力を持つ盾ブリドウエンなど、彼女が用いたとされる武器は複数ある。モードレッド卿が振るつた燦然と輝く王剣も、元はと言えば彼女の所有物である。

中でも最も重要な局面で使用されたという槍が、聖槍ロンゴミニアド。救世主の生死を確認したロンギヌスの槍とも同一視される兵装である。

「複層封印、展開」

宝具の雨を防ぎ、弾き、払いながら、槍に絡まる封環がゆつくりと解けだした。聖剣の輝きにも劣らぬ、眩い黄金の光が現れ、粒子状の魔力が螺旋のように広がり始める。まるで封印が解かれるかのように、封環が外れるごとに輝きは大きくなり、溢れ出す魔力量は指数関数的に跳ね上がっていく。

……本来、セイバーというサーヴァントはこの武器を使用できない。

これには二重の要因があり、一つは彼女が正式な英霊ではないこと。死後に座に登録された存在ではなく、死の寸前の状態で召喚されるという特殊な事情を経ているため、セイバーはその時持っていた武器しか聖杯戦争に持ち込めなかった。それがエクスカリバーと、それに付随する風の宝具である。

もう一つは、サーヴァントというシステムそのものの事情による。英霊の情報を全て再現しようとするのは、聖杯を以てしても至難の業。サーヴァントシステムは、英霊たちの性能の一部を除外して情報量を制限することで、彼らの召喚を可能としている。今回の参加者で言えば、ヘラクレスは宝具のほとんどを持ち込むことができず、クー・フーリンも戦車や城といった宝具を使用できていない。ギルガメッシュが『宝物庫の鍵』を宝具とすることで、別次元にある宝物庫から無制限に武器を引っ張ってきているのは、ある意味システムの裏側を突いた反則技なのだ。

「目覚めの時です、我が槍！ 輝きは、今こそ此処に！」

では何故、彼女がこの槍を持っているのか。

答えは、先程用いた自滅に近い裏技だ。英霊の存在を定義する霊基を書き換えたことで、彼女はセイバーではなくなっている。剣士ではないのだから槍も持ち込める、という無茶苦茶な理論である。正式な英霊としてなら、彼女はこの武器を所有しているのだろうか、今やっていることは言ってしまうえば死後の前借りだ。

そしてもう一つは、聖杯の召喚機能の故障だ。そもそもセイバーは、遠坂凛に召喚される予定ではなかった。凛が用いた円卓の触媒は、アーサー王とギヤラハ<sup>騎士</sup>の<sup>騎</sup>士に限りは適用されない。別の事情から召喚が確定していたとはいえ、縁となった触媒は衛宮士郎が有していたにも関わらず、彼女は凛の下に姿を表した。

煽りを受けたのはギルガメッシュである。召喚対象のサーヴァントがいな場合、聖杯は英霊の座を参照して次の召喚対象を検索するが、どういうわけか現世に留まっていなかった——を転用したのだ。召喚システム、サーヴァントという存在の定義が、あやふやになってしまっている。

「感謝します、大英雄。<sup>ヘラクレレス</sup>あなたがいなければ、私はこの手を使えなかった」

それらの欠陥を利用し、本来なら持ち込めないはずの宝具を召喚してみせたのがヘラクレスだ。彼と直接剣を交えたセイバーは、その奇跡を目の当たりにしている。

とはいえ、それを成し遂げたのは膨大な魔力（令現）による後押し、最高位の英霊の格、小聖杯によるバックアップ。更には、尋常ならざる強固な意志だ。奇跡というのは、通常起こり得ない確率であるから奇跡という。

しかしここには、ヘラクレスが成し遂げた偉業の条件が全て揃っている。ならば——ヘラクレスにできたことを、アーサー王ができないはずがない。

——轟、と槍が唸る。

槍を取り巻く十三の拘束、その全てが解き放たれる。四方から刀剣が降り注ぐが、もはや迎撃の必要すらない。槍から広がる魔力の粒が霧状となり、宝具の軌道を狂わせて明後日の方向へ逸らしてしまう。

魔術世界に於いて、この聖槍は単なる武器ではない神造兵装とされる。世界の裏側で、もう終わった神秘の時代を封じるモノ。人には届かぬ最果ての塔をスケールダウンさせたそれは、超絶級の神秘を拘束によって押し留め、辛うじて英霊が扱う宝具としたものだ。並大抵の武器では足元にも及ばない。

「……………」

まずい、とギルガメッシュが目を見開く。

瞬時に跳ね上がっていく聖槍の脅威度に対し、繰り出す宝具の更新が追いつかない。なまじ相手の性能に対して、最適な宝具を合わせようとしたことが仇になった。有無を

言わせず、初手から高神秘・高火力の宝具を叩き込むべきだったのだ。

切り札を切るか。いや、宝具の召喚が間に合わない。自分が剣を引き抜くよりも、あの槍が放たれる方が早い——！

「空の彼方、大地の向こう。其は世界の果てに立つ——光の楔！」

収束する燐光。世界を穿つほどの魔力が、ただ一点に集められ——

”最果てにて輝ける槍——！”

槍の穂先から、黄金の奔流が放たれた。

大地も空気も宝具も、その光に触れたものは瞬時に蒸発する。世界の表裏を繋ぎ止めるに足る膨大なエネルギー。その神秘の一端は、現世にある物質全てを焼灼してしま

う。

純粋なエネルギー量でいえば、ロンゴミアドは聖剣と同等だ。しかし、あちらの真骨頂が斬撃であるのに対し、この一撃は刺突。破壊力は同等でも、貫通力という面で桁が違う。英雄王に予め召喚されていた宝具の盾、その尽くが、薄皮を貫くように破碎されていく——！

——激突。

驚きを露わにする英雄王を光が飲み込み、その後方にあつた山門を消し炭に変えた。それでも尚飽き足らぬ破壊のエネルギーは、空を貫いて遙か天上まで駆け上っていく。

天に神がいたとすれば、問答無用で叩き落としたであろう光量だった。

会心の一撃。エクスカリバーの斬撃は凌がれようと、ロンゴミニアドの槍撃は防ぎきれまい。これは決まったかと、東の間気を抜きかけたセイバーだったが――。

「……やってくれる。恐れ入ったぞ、騎士王」

地獄の底から響くような声。赤と金が入り混じった光が、聖槍の残滓を吹き飛ばした。

大地を踏みしめ、光の中から現れたのはギルガメッシュ。しかし、その姿は見る影もなくボロボロだった。

逆立っていた黄金の髪は、乱れるどころか下ろされているような状態。頭部を怪我したのか、額から赤い血を流している。黄金の鎧に至っては上半身が根こそぎ損壊し、溶けかけた素肌が嫌な音を立てて煙を上げている。甚大なダメージを負っていることは、傍目にも明らかだ。

だが、聖槍の真名開放を受けてこの程度で済んでいることがおかしい。疑問を抱いたセイバーは、彼の手に握られている槍の存在に気がついた。

運命の槍ロンギヌス。かつて円卓の騎士第二席、白光の騎士パーシヴァルが有していたもう一つの聖槍である。

振るえば王城さえ吹き飛ばし、敵に癒えない傷を与えろという対城宝具。その超絶た

る威力で、ロンゴミアドの一撃を軽減したのだろう。かつての部下が振るうその槍の力は、セイバー自身がよく知っている。

「我が槍を受けてその程度とは……恐れるべきはあなたです、英雄王。」

しかし、何故その槍を？ 時間を与えれば、あなたは聖槍にも対応したでしょう。ならばこそ、新たな宝具を使う隙は与えなかったはずですが」

「知れたことよ。切り札というのは、初めから準備しておくものだ。」

……とはいえ、私の見立ても甘かったか。まったく、飽きさせぬ女よ。こうまで次々に、私の読みを超えてくるとはな

アロンダイト。燦然と輝く王剣。転輪する勝利の剣。痛哭の幻奏。

セイバーの動揺を誘う目的も兼ねて、ギルガメッシュはかつての円卓の騎士が用いた宝具の原典、源流となった武具をすぐ近くに配置していた。運命の槍もその一つである。

宝物庫から召喚したのでは間に合わなかった。即時対応できるよう、すぐ側に置いていた武器。その柄に手が届いたことが、致死の一撃から辛うじて英雄王を守り抜いた。騎士王の一撃を円卓の武器が阻むという、あまりに皮肉めいた展開。

ぼつり、と槍から血のような魔力が滴る。それが体に落ちた瞬間、ギルガメッシュの流血がびたりと止まった。常に血を滴らせ、あらゆる傷を癒やすという伝承——破壊の



力のみにあらぬ、もう一つの聖槍が持つ神秘だった。

「音に聞こえた星の聖劍に、星を縫い止める聖槍。どちらも我が蔵にはない逸品だ。それほどの武器に認められるとは——フン、やはり貴様は騎士王の名に相応しい英雄ということよ。」

貴様に従った騎士ども、貴様を信じた民どもの輝き。聖杯の呪詛に飲まれ、尚も立ち上がるその気高い光。支払いには十分すぎるものを見せてもらったぞ。騎士王<sup>セイバ</sup>」

鎧は半壊し、ところどころが焦げ付き、あちこちに血の跡を残しながらも、英雄王の威光は微塵も陰らない。あまりに堂々たる威容に、セイバーは称賛されているのだと気づくまでしばしの時を要した。

他者を嘲笑う軽侮でも、女として見る厭らしい目でもない。ギルガメッシュは一人の王として、一人の人間として、この時初めてアルトリアという人物を評価していた。自身以外の万象を見下すこの男が、彼女を対等に見ていることが、いったいどれほど異様なことか。

「——では、こちらも、相応しい物を見せなければな」  
空気が変わる。

ギチ、と世界が軋んだような音さえした。死神の鎌が首に触れているような、怖気が走るほどの冷たさに、セイバーが思わず息を呑む。

彼女が最も頼りにする直感が、ここに来てかかってないほどの警鐘を鳴らす。未来予知に近いはずのそれは、甲高い悲鳴を上げるばかりで、明確なビジョンを見せてくれない。ただ一つ、『死』という恐怖だけが伝わってくる。

しかし、死の運び手となるはずの何千という宝具たちは、この時何故かき消えていた。大地に散乱し、突き刺さっていたはずの宝具さえ、霞のように消えていく。回収されたのだと気づき、その理由を想像するより早く——ギルガメツシュが、鍵のようなものを取り出した。

『<sup>ゲート・オブ・パレロン</sup>王の財宝』——ここには人類の知恵と技術、その全てが収蔵されている。貴様ら英霊が持つ宝具、その源流も元を辿れば我が蔵の一欠片に過ぎん。だが、それらは我しか持ち得ぬ武器というわけではない」

掌に収まるほどの柄と、歪な形状の刀身は、どちらかといえれば短剣を思わせる。しかしそれは、紛うことなき『鍵』だった。

ガシャン、と解錠の音が響く。鍵剣が揺れ動いたかと思うと、そこを起点にして、空中に途方もなく巨大な赤い紋様が描かれた。一つの大樹のように見えるそれこそは、黄金の宝物庫の縮図。人類が生み出す財宝、その系統樹に他ならない。

無数に分かれた枝の一つが、怪しく輝く。赤と白に点滅する光は、回路を走る信号のような動きで、大樹の根本へと向かっていき……鍵剣へと到達した刹那、眩い光が放た

れる。

その直後。英雄王の手には、異質な『剣』が握られており。

「——出番だ。起きるがいい、エア」

セイバーの体が凍る。あの剣が、『死』のイメージの根源だった。

剣だと判断できたのは、柄や刀身を持ち合わせているから。しかし、その刀身があまりにも異様だった。

赤い紋様の走る黒い円柱。それが三層に区切られ、互い違いに回転している。剣というより、現代の工作器具を思わせるような形状は、今までセイバーが目にしたどのような武器にも該当しない。

びゅうびゅう、と風が鳴る。円柱の回転は、触れば止まりそうなほどゆっくりであるにも関わらず、その音は竜巻のそれに等しかった。否、それは世界が恐怖した、命乞いの喘鳴だったのか。

重々しい円柱は、一つ一つが世界そのものを司っているようにも思えるほど、途方も無いエネルギーを有していた。あまりのスケールの違いに、現実感が湧いてこない。だというのに、体を凍りつかせる死の予感、ますます強くなるばかり。まるで人が持つ

遺伝子そのものが、あの剣に怯えているように。

「これは我しか持ち得ぬ武器。正真正銘、英雄王ギルガメッシュだけの『宝具』だ。これを見せるに相応しきは、我が認めたる真の勇者のみ」

エア。

エンキとも言われる、メソポタミア神話における創造神の石柱である。その名を冠すこれこそは、原初の地獄から天地を切り分け、世界を創造した剣。神々ですら及ばぬ巨人を両断した、究極の武器だった。

「セイバー、おまえの聖剣はあの程度ではないと豪語したな。ならば見せてみよ、その真髓を！ 貴様の王道、この英雄王が裁定してくれる——！」

徐々に回転を早める円柱。吹き出す魔力は空間を軋ませ、周囲には比喩ではない本物の竜巻が発生していた。

膨大と呼ぶのさえ馬鹿らしいほどのエネルギーが収束していく。その魔力量は、先の最果てにて輝ける槍さえ優に凌駕しよう。あまりの熱量に空気中の電子さえ狂ったのか、プラズマ化した大気がそこかしこで放電を起こしている。

到底一サーヴァントが振るつていい領域の力ではない。あれは神霊が行使する権能、世界の根底たる法則を書き換えるほどの神秘に他ならない。あれほどの力を制しうる英霊は天上天下に唯一人、あれこそ彼が『英雄王』たる力の象徴。

ならばこそ——騎士王<sup>セイバー</sup>は、力強く微笑んだ。

「いいだろう。ならば我が聖劍、我が王道の重み、その身でとくと味わうがいい！」

聖槍を聖劍へと持ち替える。この場に相応しきは、世界を繋ぐ錨ではない。今握るべきは、彼女が誇る王道の象徴だ。

聖杯から送られてくる無尽蔵の魔力、それを柄から叩き込む。だが、己が理想を思い出した彼女の劍は、もはや呪詛には染まらない。無限の悪意さえ跳ね除ける、彼女を信じた人々の想いが、刀身を眩く黄金に輝かせる。

人々の願いを蓄え、星の内部で精製された最強の幻想<sup>ラスト・ファンタズム</sup>。ただの暴力機関に過ぎなかつ

た先刻とは異なり、本来の役割を思い出した聖劍は、その真価を十全に発揮していた。

神靈の魔術行使に等しいほどのエネルギーが、輝ける劍に収束する。劍に課せられた十三の拘束が、次々と外されていく。美しい星の輝きと、制御された絶大な力は、まさしくアルトリアの王道の具現。人々の理想を背負い、道行きを照らし出す、暖かな光に他ならない。

「この灯りは星の希望。地を照らす命の証——！」

騎士王が笑う。己が劍に迷いはないと語るように。民が彼女に託したものの、後に残したものを、もう忘れないと謳うように。

「——裁きの時だ。世界を裂くは、我が乖離劍！」

英雄王が笑う。絶対王者として判決を下すように。騎士王が示す王道の形、それすらも見定め、裁定を告げると示すように。

——そして。

”約束された勝利の剣”——!

ただ一振りでも地を薙ぐ聖剣。光の断層による、究極の斬撃が解放され——

「——」天地乖離す開闢の星!

世界を両断する破滅の一閃。天地創造の究極の一が、真つ向から激突した。

——音が消える。

凄まじいまでの力の衝突に、全てが罅割れた。

竜巻が大地を蹂躪し、プラズマ化した大気は雷となつて空を廻る。辛うじて立っていた木々は根こそぎ吹き飛ばされ、神社の残骸は発火、融解を超えて蒸発していた。

恐るべき天変地異の数々は、ほんの余波に過ぎない。破壊の中心点は、地上に太陽が現れたに等しい猛威であり、核爆発にさえ比肩しようかという熱量が正面からせめぎ合っている。

子供の悪戯のような罅が、空間に次々と走っている。悲鳴を戯画化したような形は、文字通りの世界の断末魔。絶大なエネルギー、殊に乖離剣エアの副次効果である擬似的な時空断層が、世界そのものを振じ切っているのだ。

時間が止まったように感じられるほどの長時間か、目にも留まらぬほどの一瞬か。感覚さえ覚束なくなるほどの力のぶつけ合いは、どこまでも拮抗する。この瞬間、英雄王と騎士王は、確かに互いを理解していた。

ギルガメッシュは、ヒトの領分を超えた彼女の理想が、稀有な愚かさであると再確認した。しかし、届かぬ理想<sup>ほし</sup>を目指し、地上の全悪さえ跳ね除けた姿こそ、輝ける唯一の星。

力でこれをねじ伏せ、従わせようという以前の考えは、その価値に瑕をつけるものだ。星とは天にあつても地にあつても届かぬもの、だからこそ美しい。騎士王の王道は、自分が判を押すに足る『宝』である。

アルトリアは、孤高を選ばざるを得なかった彼の誇りを、初めて目の当たりにした。希望を集めた光とは真逆、個にして星さえ分かつ力こそが、彼の在り方の象徴。

人の価値を正しく測るためには、自分は世界の内側にはいけない。それはいったい、どれほどの孤独と重さだろう。ただ一人、世界の涯から全てを担う原初の王。英雄王の王道は、心から尊敬に値する。

永遠に続くかと思われた王道の激突は、しかし。

「——ああ。一步、届きませんでしたか」

拮抗が崩れる。敗北を悟ったセイバーが、ふっと口元を緩める。

そうして。聖剣の光は、世界を断つ風に吞まれていった。

——静寂に、金属音が鳴る。

それは、騎士王が地に膝をついた音だった。

全ての力を使い果たしたように、前のめりに崩れ落ちるセイバー。強化され、さらに頑強になっていたはずの鎧は、ずたずたに引き裂かれていた。髪結の加護さえ引き裂かれてしまったのか、流麗な金髪が血に染まって流れ落ちる。天地を割くほどの一斬は、ほぼ全て聖剣で相殺しきつたが——僅かな余波でさえ、彼女を打ち倒すには十分すぎるほどだった。

だが。五体満足であるのが不釣り合いに思えるほど、ボロボロに傷ついた状態でも。輝きの残滓を纏う聖剣だけは、力強く握られていた。例え地に伏せようとも、理想は手放さぬと訴えるように。

対するギルガメツシュは、乖離剣を振り下ろした姿勢のまま動かない。傲然と立つ英雄王と、地に伏せた騎士王。二人の勝敗は、ここに決した。

人々の理想を束ねる王と、世界の全てを背負う王。明暗を分けたのは、在り方宝具の違いだった。

騎士王が振るう約束エックされた勝利の剣は、都市や城塞すら蒸発させる対城宝具。その力は破滅的な領域であり、最強の聖剣の名に偽りは無い。



しかし——英雄王が執る乖離劍<sup>エ</sup>は、敵や国などという矮小な単位に用いるものではなかつた。この劍が裁くのは、天地に亘る世界そのもの。究極の対界宝具は、聖劍の光を世界ごと断ち切つたのだ。

「——見事」

短い、それだけの言葉。

それがどれほど価値を持つことか、彼を知る者がいれば目を見張つたことだろう。英雄王が他者に対し、敬意を以て称賛するなど、それ自体が神秘の領域だ。

現世においてその栄誉を授かつたのは、これまでにただ一人。乖離劍の一閃を人の身で潜り抜け、宝具の雨で穿たれても尚前進を止めなかつた、征服王イスカンダルのみである。彼方<sup>ト</sup>にこそ栄えありと謳い、最果て<sup>オケ</sup>の海<sup>ケ</sup>を目指して人の夢を束ねた王の生き様を、ギルガメツシユは本心から賞賛した。

しかし、今。

「見事だ、騎士王。そなたの王道は、このギルガメツシユが見定めた。この宇宙を時空<sup>トキ</sup>の果てまで駆けたとしても、そなたを超える星などあるまい」

英雄王は、彼に比肩する王として、アルトリアという英雄を裁定した。その価値こそは、唯一無二のものであると。

十年前の彼女は、考慮するに値しなかつた。かつての朋友を彷彿とさせる貴重な在り

方には価値を見出し、己が所有物にすると決断はしたが、それは愛玩動物に向ける視線に近い。無様な姿を愛でるだけで、対等な王だとは端から思っていないかったのだ。

今は違う。この世全ての悪がどれほどの難敵であるかは、ギルガメツシユ自身が身を持って知っている。その呪いに染まろうとも壊れず、かつて抱いた理想を思い出し、ついには呪いを跳ね除けるに至った彼女。絶え間ない苦痛と呪詛に晒され、過去の刃に苛まれながらも、セイバーはそれさえ耐えきった。

自らの理想は引き継がれ、遠い未来で叶っている。ならばこそ、自らの治世の結果を受け止め、その犠牲を背負い抜こう。過去ではなく未来へ進むのだと、光で道を切り開こう――。

口で言うのは簡単だ。為政者として、英雄として、自らの行いに責任を持つなど最低限の前提に過ぎない。とはいえ、だ。

全ての失敗をやり直せるという、甘い誘惑をちらつかされて。

親友だと思っていた臣下に、時空を超えてまで剣を向けられて。

人類全てを覆い尽くして余りある、触れれば発狂どころか即死するような呪いに侵されて。

苦痛と絶望の中、夢も理想も見えなくなつて、執念だけの残骸に成り果てて。

なおも己を取り戻せる者が、いったいどこにいますというのだ？　なお矜持を示せるも

のが、どれだけいるというのだ？

ギルガメッシュは、確かに彼女を誘導した。しかし、道を見失った者が正道に戻れるかどうかは、本人の魂の強さによる。呪詛を跳ね除けるだけでなく利用し、英雄王の喉元に牙を届かせたセイバーは、類を見ないほどの奇跡を起こしたのだ。

「価値ある宝を獲得し、これを保護する。それこそが我の王道だが——ふん。手元にな  
いからこそ、輝ける宝もあるか。

褒美だ、騎士王。その首は預けておく。今生の命、思うがままに使うがいい」

傲然と決断を告げる英雄王。セイバーは地面に崩れ落ちているが……僅かに、その背が動いている。彼女の再生能力を考えれば、そのうち回復するだろう。だが、ギルガメッシュにとどめを刺す気は毛頭なかった。

例えあつたとしても、すぐには動けなかつただろう。彼の纏う王気オーラは、あれほどの激戦を経て尚些かも衰えてはいないが、その体はセイバーに負けず劣らず傷だらけだった。

軽減したとはいえ、対城宝具の直撃に、最終宝具の全力使用。運命ロンギヌスの槍で外傷を治したからこそ立っていられるようなもので、十全からは程遠い。宝具も数え切れないほど損壊し、半分が消し飛んだ鎧も合わせれば、修復にどれだけ時間を要することか。

だが。

「勝ったんだな、ギルガメッシュ——つて、どうしたんだアンタ！　ボロボロじゃないか、大丈夫か？」

聞こえてきた馴染みある声に、王の口元が愉快げに歪む。

傷を癒やす薬などいくらでもある。すぐには動けぬ、などと言っていてられない。

この分では、あのマスターは聖杯の使い魔を根こそぎ退けてきたのだろう。己の価値を示した勇者に、どうして弱った姿など見せられようか。

「たわけ。この程度、かえってよい肩慣らしだ。」

首尾よく前座を潰してきたな、雑種。ならばよい——ここからが本番だ。貴様の宝を取り返しに行くぞ」

## 34. 進撃

柳洞寺地下、大空洞。

英雄王と騎士王の激戦は、重厚な岩盤と魔術防御に守られた地下深くにまで影響を与えていた。鳴り響く振動音や、揺れに伴ってパラパラと降り注ぐ岩の欠片は、常人であれば肝を冷やしたことだろう。

大聖杯が安置されるこの場所は、その重要性から高度な秘匿と防御が施されている。稼働を開始してから数百年に亘って動き続け、天変地異にさえ動じぬ魔術的設計は、未だ現在の科学技術が及ばぬ領域にある。理論上、ここは戦略核攻撃にも耐えうる強固さを誇るのだ。

「——それも、連中が下に矛先を向けぬ間に限るがな。その時は、主への信仰心が足りぬこの身を恨む他あるまい」

ズン、と響く重い衝撃。小規模な地震に等しい揺れだが、巖のように鍛え上げられた身体はびくともしない。

平たい岩場に腰掛けた言峰綺礼は、静かに目を瞑り、まるでサーヴァントの激戦音がクラシック音楽でもあるかのように寛いでいた。代行者として幾度となく激戦を潜り

抜け、第四次聖杯戦争さえ踏破した猛者は、休むことの重要性をよく理解している。その時が来るまでは、砲火の音が聞こえる戦場であろうとリラックスできるのが戦士の素養である。

「フム。四度目の折は、尻の青い小僧であつたがな。男子三日合わざれば刮目して見よとは言うが、十年も経てば相応に余裕も出るか。綺礼よ、愉しんでいるようではないか」  
うつすらと言峰が目を開ける。虫の群れに見えたものは、一度瞬きをした後には間桐臓硯へと変わっていた。

「私にとつて、アレの誕生を見届けるのは悲願だ。悲願を前にして心が昂ぶらぬのでは、健全な人間とは言えまい。もつとも、おまえにこの定義を適用できるかは疑問だが」

「カ。なに、儂も今宵は二百年ほど若返つた心地よ。魂の腐り落ちる苦しみから解き放たれる時が近づいておるのだからな。生まれた時より腐肉のモノなら、共感してもらえらるはずだがのう」

二人の間に、同盟者に対する仲間意識はない。皮肉に満ちた会話は、この二人がただ利害の一致によつて手を結んだことの証左だった。最終目的こそ異なれど、聖杯戦争を完遂させるといふ一点が、同盟の下支えとなつている。

「それで、上の様子はどんなものだ？」

「わからぬ、というのが正直なところよ。使い魔で様子を見ようと試みたが、見えている

という時点で近すぎる。まともに情報を送る前に、儂の可愛い蟲たちはみな焼かれてしまうたわ」

「ふむ——」

僅かに上を見る言峰。そのタイミングを見計らったように、一際大きく洞窟が揺れた。

黒化したセイバーは、恐ろしく強力なサーヴァントだ。だが、言峰の見立てでは、最終的に勝つのはギルガメッシュ。いつもの慢心をやらかす可能性がないではないが、彼の騎士王に対する執着は十年前から知っている。それに、いかに英雄王とはいえ、今のセイバー相手に手を抜けるものではないだろう。

「アーチャーを取り込まずにおいて正解だったの。土壇場の裏切りがなければ、セイバーと二騎で英雄王を相手取れたものを……」

まあよい。仮にセイバーが敗れたところで、英雄王も無傷とはいくまい。そこにアーチャーをぶつければよし、それで及ばずともその時には七騎分が揃っておるでな」

小聖杯に回収されたサーヴァントは、解放されると英霊の座へと戻っていく。その際に空く世界の外側への道を大聖杯で固定することで、根源へ至ろうというのが聖杯戦争のコンセプトだ。しかし、今回は小聖杯が二つに分かれているという異常事態のせいで、この二つを完璧にリンクさせるか、あるいは一方にサーヴァントの魂を寄せる調整

を行わない限り儀式が遂行できない。臓硯は令呪や召喚術についてはスペシャリストだが、聖杯の器に関してはインツベルンの領分であるため、この部分の最終調整に難航していた。この調整が終了していれば、ギルガメッシュを打倒するにしろセイバーが倒されるにしろ、即座にアーチャーを自害させれば七騎分の魂が揃うのだが、間に合いないのが実情だった。

上の状況はまるで見えぬが、大火力宝具が飛び交っているであろうことだけは確かだ。そんな戦場に、闇雲にアーチャーを介入させては、英雄王を討つどころか時間稼ぎになるかも怪しい。それよりはセイバーが倒された際、後詰めとして聖杯の調整が完了するまでの時間稼ぎに徹させれば良いというのが臓硯の判断である。

「アーチャーの配置は完了したのか」

「他愛ない。泥をたらしく飲ませてやったでな、もはや儂の命令しか聞かぬ傀儡よ。マスターは桜ゆえ、令呪を使うには少々手間だが、捨て石にそこまでは必要なかろうて」  
「呵呵、と笑う老翁。一方の言峰は、自分の元サーヴァントが悲惨な目に遭っていると  
いう話に、微塵も動じた様子を見せない。赤い弓兵は彼にとって単なる手駒に過ぎず、裏切られた時点で利用価値を失っている。再利用できるというのなら、そのマスターが自分であれ他者であれ関係はなかった。

激戦の余波に、揺れ続ける大空洞。先ほどより振動が大きくなっているのは、王たち



の戦いが佳境に入っているからか。再び上を見た言峰は、数秒考え込む仕草を見せた後、小さく頷いた。

「……なるほど。となれば、こちらの勝利は近いな。

が、不確定要素はまだ多い。こちらの目的を達成するには、確実に排除しておく必要がある。

アーチャーがギルガメッシュを止めるといふのなら、衛宮士郎の相手は私になるが——その前に、主に祈りを捧げてでも良いかね？」

「カ、堅物なのは変わらぬのう！ おぬしの父親も相当なものであったが、未だ神父であることに拘るか！ よいよい、好きにすればよからうて」

悲願が手に届きかけている余裕か、好々爺然とした笑みを見せる臓硯。それを最後に興味をなくしたのか、言峰に背を見せた老人は、小聖杯である二人の少女の方へ注意を向けた。……そう、背中を見せたのだ。

——神への祈りは、静かに始まった。

「——私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す」

「む……？」

歩き出そうとした臓硯の動きが止まる。いや、止まるというより、進めなくなつたという方が正しいか。

足元を見下ろした老人の目に、魔力の線が飛び込んでくる。その線を境に透明な壁が生じており、向こう側へ行くことができないのだ。

結界。中でもこれは、外部のものを排斥するのではなく、内部のものを逃がさぬための性質だ。大した強度でも精度でもないが、こんなモノが敷かれていること自体がおかしい。臓硯自身には、結界を張った覚えなどない——。

「綺礼、これは——ガ!？」

はつと臓硯が振り返った刹那。稲妻の如き剛拳が、老いた腹に炸裂した。

拗歩捶。八極拳の基礎にして、空手では逆突きとも呼ばれる一撃は、言峰ほどの達人が用いれば岩すら砕く猛威となる。大地を沈ませる踏み込みは絶大なエネルギーを与え、老怪の五臓六腑を一打にして破砕した。

「——我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない」

攻撃は止まらない。言峰は結界に叩きつけられた臓硯の頭を掴むと、鞭でも振るうかのように片手一本で投げ落とした。背骨が砕け散る、おぞましい怪音。

「グ、ガ——!?! 貴様、狂ったか!?! ここで儂を裏切れば、アーチャーの制御は——」

「配置が済んだと言ったのはおまえだ、臓硯。そして、アーチャーのマスターは間桐桜。ギルガメッシュと戦わせるのであれば、もはやおまえの出る幕はない」

立ち上がる隙さえ与えない。極め抜いた斧刃脚は、臓硯の足を払うどころか諸共にそ

の骨をへし折った。萎びた足が、あらゆる方向にねじ曲がる。

「——打ち砕かれよ。」

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。

休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

「お、のれ——儂を殺すか綺礼！ 聖杯に用はない、生まれ出るモノに用があるというのは偽りであつたか!？」

愚か者めが……儂を裏切り、おぬしは何を求め、何を願う？ よもや聖杯に、幸福とやらを託すつもりか!？」

黒鍵が舞う。霊体干渉に特化した刃は、人であることを捨てた魔蟲にも靦面に刺さり、ただの投擲で臓硯の両腕を千切り飛ばす。

反撃の暇などない。言峰が鍛え上げた套路、積み重ねた功夫は、数百年生きた魔術師をも凌駕する。死徒にも迫ろうかという戦闘能力に、虫ごときがどうして及ぼうか。

「これはあの男の受け売りだが。裏切りとは、同じ道を志しながら背中を討つことを言う。はじめから道が違ふのなら、それはただの共食いだ。間桐臓硯、おまえが散々繰り返ししてきたことだろう」

「カ——他者を陥れ、不幸を食らうおぬしが共食いを語るとはの！ 笑わせる、不幸しか

食せぬおぬしに、幸福が訪れることなど絶対にないわ！」

両手両足を破壊してなお、言峰の追撃は止まらない。恐るべき打撃が、蹴撃が、黒鍵が、老人の体を粉碎していく。常人ならば初手の一撃で絶命しているに違いないが、虫の集合体で人体を再現したに過ぎない臓硯にとつては、この程度は致命傷になり得ない。

故に。真に臓硯を滅ぼすのは、物理攻撃ではなく。

「——装うなかれ。」

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を」

洗礼詠唱、という魔術がある。

魔術を滅ぼすべき異端と定義し、魔術協会と長きに渡る確執を持つ聖堂教会において、公的に使用が認められた数少ないモノの一つ。主の教えに基づき、迷える魂を在るべき場所へと還す浄化の儀式である。

この魔術は物理的な効力を持たない。呪いを解くといった用途を除いて、生者に対してはほとんど意味をなさないが——人ならざるモノ、人であることを捨てたモノに対しては、絶大な効果を発揮する。聖堂教会の信仰、人類最大の魔術基盤の力は、異端を決して許さない。

「——休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。

永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

許しはここに。受肉した私が誓う」

「ク、カカカ……！ よかろう、好きにせよ！ だがな綺礼、貴様はしよせん、腐肉を食い漁る蛆虫に過ぎぬ。幸福という陽の光を浴びることなどない、世界の落伍者よ！ 儂から聖杯を奪ったところで、貴様の望みなぞ何一つ叶うものか……！」

手足を引きちぎられ、臓器を破碎され、臓硯の体はもはや頭部しか残っていない。体を構成していた無数の虫は、過剰なまでの暴力に耐えかね、血肉の破片となってそこら中に散らばっていた。

首だけになつても哄笑を続ける老魔術師。その脳髓を、ぐしやりと踏み潰して。

「——」<sup>キリエ・エレイツン</sup>「この魂に憐れみを」

人ならざる異形、人の生を超えてなお現世にしがみつく魂を、神の摂理が浄化する。魔力の燐光は、奇跡めいた輝きを伴い、老翁の哄笑をかき消していく。

この魔術こそは、穢れを浄化する聖なる祈り。清らかな部分など欠片も持たぬ、腐りきった虫の魂が抗える道理もない。五百年を生きた魔術師は、それ故に、信仰の力に敗れ去った。

——そうして。祈りの時間は、静かに終わりを迎える。

後に残されたのは、散らばる虫の肉片だけ。それを感情のない瞳で見下ろし、血に濡れた拳を引いた言峰は、小さく息を吐いた。

「間桐臓硯。おまえは一つ、勘違いをしていたな」

音が止む。

大空洞を揺るがせていた轟音は、いつしかぴたりと静まっていた。ギルガメッシュとセイバーの死闘が、ついに決着を見たのだろう。

踵を返す。勝敗の結果など見るまでもない。本来の力を取り戻した英雄王がどれほど圧倒的な存在なのか、それは元マスターであった自分がよく知っている。その相手はアーチャーに任せるべきだが——現マスターの前には、やはり自分が立つべきだ。

「私には特段、聖杯に託す願いなどない。私の望みは、聖杯から生まれ出るモノへの祝福。その点において、おまえを裏切ったわけではない」

去っていく言峰。胸元の十字架に触れた聖職者は、一瞬だけ足を止めて。

「——ただ。十年前から、おまえを殺しておこうと思っていただけだ」

どこから流れ込んできたのか、一陣の風が吹く。虫の残滓は、冬の冷気に押し飛ばされ、塵となって消えていった。

\*\*\*

「――トレリス 投影、オン 開始」

手に現れる双剣。アーチャーの膨大な経験値が流れ込んだ影響か、あれだけ苦しんだ工程が、いとも容易く再現できる。

左方より迫る影に、一刀を投擲。揺らめく異形は、宝具の刃に突き穿たれ――苦しむように震えた後、ばしやりと音を立てて破裂した。

「これで十二。くそ、何匹いやがるんだ……い」

干将・莫耶を再投影し、池から湧き出るように現れる魑魅魍魎に向き直る。聖杯から桜を経由して現れたという異形の群れは、嫌悪感を催す怪音とともに、次から次に陸へ上がろうとしていた。

意志がないのか、その動きは緩慢で、見てさえいれば恐れるに足りない。戦場に幾度か現れたあの影……便宜上『本体』と呼ぶが、アレと比べると脅威度は何段も落ちる。おそらく、攻撃範囲も攻撃力も大きく下回っているだろう。

アーチャーとの戦闘で、干将・莫耶の投影が可能になったことも幸いした。この武器は、怪魔に対する特効を持つ。『本体』ならまだしも、この程度の木っ端な連中なら鎧袖一触だ。

――だが。それを考慮してなお、数の暴力は絶大だった。

制限があるのか、同時に現れる数はせいぜい十体と少し。真つ黒に染まった池から現れると、陸地にいる俺に向けて次々寄ってくるのだが、倒せど倒せど数が減らない。倒した分だけ、再補充されているようだ。

終わりが見えないというのは神経がすり減る。加えて言うなら、こちらは一撃でも受ければアウト。いかに『本体』より脅威度が劣るとはいえ、あの呪いの塊に囚われて無事で済むとは到底思えない。掠めただけでも、ごっそり生命力を持つていかれるだろう。

「でも、ギルガメツシュがセイバーを倒すまで、ここで食い止めないと……ッ、横か！」  
 いつの間にかすると上がってきた影が、両腕らしき触手を伸ばして寄ってくる。即座に莫耶を投げつけて触手を切り落とし、弧を描くように飛んだ干将が、顔面らしき場所に突き刺さる。途端、風船のように破裂した怪物だったが、その後ろにはさらに一体……！

「野郎——」

がら空きの右手を腰に落とし、ホルスターから拳銃グロックを引き抜く。安全装置を外しながら照星を合わせ、胸部と思われる部分に二連射。初めての射撃と、腕への反動にも関わらず、切嗣の技量を再現した銃弾は怪物に吸い込まれていったが——。

「物理攻撃はやっぱりダメか」



当たってはいる。だが、すり抜けか吸収されでもしたかのように、金属の塊は何ら効力を発揮しなかった。

ギルガメッシュの見立てどおり、あれはこの世ならぬ虚数の概念で括られている。通常の物理攻撃はおろか、宝具ですら通用しまい。特別な効果を持つ宝具———それこそ、このような怪魔を切り払う干将・莫耶のような剣でなければ、黒い影は倒せない。

近づくのはリスクが高すぎるが、投擲で十分通用することは実証済み。しかし、宝具の投影は、代償に俺の魔力を奪っていく。ギルガメッシュの宝具と違って、際限なく繰り出せるわけではないのだ。

——ゴオン、と凄まじい音が響く。

距離があるせいで直接は見れないが、後方ではギルガメッシュとセイバーが激戦を繰り広げているのだろう。エクスカリバーらしき熱気さえ、何度かここまで伝わってきた。俺のいるこちら側に広範囲宝具が飛んでこないのは、ギルガメッシュが抑えてくれているからか。

「サーヴァントに任せつきりで、マスターが役立たずなんじゃ、立つ瀬がないよな！」

気合いを入れ直す。揺れながら触手を伸ばしてくる影に自分から距離を詰め、スライディングで躲しながら攻撃を避けると、すれ違いざまに即時投影からの一閃。次に上がってこようとする二体に双剣を一本ずつ投擲し、戦果を視認することなく、後続を一

掃するため次の手を用意する——。

「トレース投影、オン開始」

イメージするのは弓矢。弓はシンプルなものでいい。ただ矢を射ることさえできれば問題ない。

問題は矢の方だ。あの激闘で流れてきたアーチャーの経験値は、できると言っている。しかし、投影剣の形状を変化させ、矢として用いるなど聞いたことすらない。ぶっつけ本番で、果たしてできるものなのか。

「I am the bone of my sword」

創造された理念に共鳴し、

基本となる骨子を解析し、

構成される物質を準備し、

制作された技術を模倣し、

憑依すべく経験を学習し、

蓄積された年月を再現する。

本質は変わらない。その形を、在るべき姿に創り変える——！

「トレース投影、完了！」

右手に現れたのは、奇妙に捻じくれた黒白の矢。大弓にそれを番え、列をなして押し

寄せる影たちへ狙いを定める。

聖杯戦争が始まってから、俺はずっと剣ばかり使っていた。だけど、弓道部としての経験があるからか、弓の方が遙かにこの体に馴染む。まだ射る前から、弾道や結果の全てが見えてしまうほどに。

射出。一直線に飛んだ矢は、群れの真ん中の個体に命中した。胸部への直撃は有効だったのか、矢が突き刺さった影がのたうつように身を振らせ――。

「――是、壊れた幻想」  
爆発。

衝撃波と爆炎が、池ごと怪物たちを薙ぎ払った。対魔の神秘を含んだ爆裂は、影たちの触手を千々に引き裂き、元いた虚無へと還していく。

これは、未来の自分の秘奥チャーが一つ。投影した宝具を自爆させ、内包した魔力と神秘で広範囲を一掃する禁じ手だ。

通常の英霊であれば、自らの半身たる宝具を使い潰す戦術など決して用いないだろう。しかし、偽の宝具を生み出せる俺の投影魔術なら話は別だ。魔力の持つ限り、いくらでも投影宝具で代替できるから、このような裏技が生み出せる。宝具の質やそれを使いこなす力量に於いて、到底原典に及ばない贗作者フェイカーが編み出した必殺技。

「これで少しは時間が稼げるか。次は……あれ？」

ふと違和感に気づく。雨後の筍のように、池からよろよろと生えてきていた影たちが、ぴたりと出てこなくなった。

今の爆発が効いたのか……いや、そんなはずはない。あれは単に、出てきた個体を一掃しただけ。どうやって影が生み出されているのか、そのプロセスを俺は知らないし、干渉することもできない。ギルガメッシュの戦闘が終わるまで、ここで悪質なもぐらたたきを続けるしかないと思っていたのだが、唐突な変化に戸惑ってしまう。

影そのもののせいではないとすると、送り込んできている側の問題か。あれを使い魔として行使するのは桜だというが、その後ろで糸を引いているのは間桐臓硯だ。臓硯本人に、使い魔を送る余裕がない事態でも発生したのか。

「……………」

警戒を解かないまましばらく様子を伺うが、魔物を生み出し続けていた池はすっかり沈黙している。俺の周りでひよんひよんと飛ぶ自動迎撃宝具だけが、自分の出番はないかと催促しているようだった。

偶然にも、池が静まり返ったタイミングで、後方で響いていた大轟音も聞こえなくなった。ギルガメッシュとセイバーの戦いが、ついに決着を見たのだろうか。

このまま立ち尽くしても仕方がない。池に踵を返し、王たちの戦場へと移動する。柳洞寺の建物はもう見る影もない瓦礫の山と化しており、地形もぐちゃぐちゃに

なっているせいで、歩くのに難儀してしまう。

それでも、どうにか開けた空間に出ると。いつか夢で見た赤い剣を握るギルガメツシユが、堂々と立っているのが見えてきた……。その姿は、先ほどとはまるで別物になっている。

「勝ったんだな、ギルガメツシユ——つて、どうしたんだアンタ！　ボロボロじゃないか、大丈夫か？」

逆立っていた髪の毛は乱れ、上半身の鎧はどこかに消し飛んで、裸の素肌はそこかしこに血の跡が残っている。本人は余裕の顔で立っているが、よほど強烈なダメージを受けたであろうことは火を見るより明らかだ。

心配して駆け寄ると、フン、といったものように鼻で笑われる。黄金の空間へ赤い剣をしまったギルガメツシユは、大したことがないと言わんばかりに手を払う仕草を見せた。

「たわけ。この程度、かえってよい肩慣らしだ。

首尾よく前座を潰してきたな、雑種。ならばよい——ここからが本番だ。貴様の宝を取り返しに行くぞ」

「潰したっていうか、あつちが勝手に出てこなくなったただけなんだけど……」

先に行くのはいいとして、その前にセイバーはどうなったんだ。倒したのか？」

そう訊くと、あつちを見ろと顎を動かすギルガメツシュ。視線を追うと、なにかとんでもないエネルギーが激突したような断層とクレーターが広がっており、その向こうにうつ伏せになった人影を見つけた。

「……生きてるのか？」

「ああ。だが、ヤツが敵になることはもはやあるまい。捨て置いて構わぬ」

言葉こそ少ないが、ギルガメツシュはなぜだかひどく上機嫌だった。セイバーとの戦いで、なにか機嫌を良くするような出来事があったのだろうか。

深く聞きたいところだが、あまり悠長にしていられる余裕はない。まだサーヴァントを一騎戦闘不能にしただけで、ついぞ出てこなかったアーチャーと、マスター二人がこの後に控えている。その全てを排除し、呪われた聖杯を破壊しない限り、俺たちに勝利はない。

「よし。じゃあ、先に進もうか。桜とイリヤが待つてる。

……って言っても、どこに行けばいいんだ？ 大聖杯はこの地下にあるっていうけど、俺、入口なんか見たことないからな……」

「ハ。目を養え——と言いたいところだが、魔術師共が数百年隠し続けた本丸を、小僧に見つけよというのも難題か。

穴蔵の入り口ならば、既に目星をつけている。命が惜しくば我から離れるなよ、雑種」

俺の上を巡回していた円盤宝具が、英雄王の蔵に回収される。護衛の任はギルガメツシユが引き継ぐ、ということだろうか。

影たちは遠距離攻撃をまるで使わず、警戒していた言峰や臓硯、アーチャーも終ぞ現れずじまいだったため、持たせてもらった宝具の出番はなかった。俺たちを倒すなら、タイミングを見計らって横槍を入れてくるのが最も効果的だと思うのだが——俺ですら考えつくような手を、どうして敵は打つてこないのか。

不自然に影の増援が途絶えたことといい、もしかすると、敵に何らかのアクシデントが起こっているのかもしれない。攻め込むこちら側が不利な現状、相手に弱みがあるなら遠慮なく突かせてもらいたいところだが……。

「目星をつけたって、いったいどうやったんだ？ 今更だけど、こんな夜の山で手がかりもないんだから、苦勞するだろうなって思ってたのに」

「鍵はそこだ、雑種。手がかりがないことが、逆に宝への地図となる。」

この聖杯戦争は、根本である大聖杯が敵の手に落ちれば破綻する。それ故に、大聖杯へ向かう路には高度な隠蔽が施されているはずだ。何百年経とうと効力を持つ強力な魔術が、な」

「……！ もしかして、その隠蔽魔術から逆算して——」

「冴えているではないか。そう、場所は見えずとも魔術の痕跡までは隠しきれぬ。雑種

では『魔術が敷かれている』ことを見抜くのが精々だろうが、私の目には裸も同然。なまじ隠そうとしたばかりに、衣の厚さが目につくわ」

相変わらず、とんでもない目をしているサーヴァントだ。山全体から僅かな違和感を見つけ出し、魔術の痕跡を逆に辿って道を見つけ出すなど、この男にしか不可能だろう。「雑種、貴様は物品の解析を得意としていたな。長ずれば貴様もこの程度は見抜けるようになろう。」

貴様たち人間、殊に現世の雑種どもは視野が狭い。世界が広くなろうと、人の見える道はそうそう変わらぬ。見ようとしなければ、目の前のものしか見えぬのが人間という生き物よ。

故に心せよ、雑種。大事を成そうというのであれば、より遠く、より広くを見ることだ。その違い一つで、ほとんどの愚か者に先手が打てるだろうよ」

そう言つて腕を組むギルガメッシュ。この英霊の瞳には、既に戦いの終着点までが見えているようだった——。

\*\*\*

——洞穴への入り口は、巧妙に隠されていた。



山門から外れ、道なき道を進んでいき、流れる川を逆に辿る。すると、小さな横穴に  
行き当たった。

三步も進めば壁にぶつかって行き止まりになるその場所は、見つけること自体が困難  
な上に、仮に見つけられたとしても入ろうとさえ思わないだろう。

が、それこそが魔術による隠蔽。中には狭く細い、人が辛うじて歩けるぐらいの通路  
が、下へ下へと続いていた。

先導するギルガメツシュに続き、暗い道を降りていく。真つ暗で冷たい下り坂は、人  
の歩く道というよりは、大蛇の腹の中を思わせる。事実この道は、『この世<sup>アンリマ</sup>全ての悪』と  
いう怪物の胎へと繋がっているのだ。

決戦への道行きにしては、あまりに静かで暗い歩みに、そこはかとな不安を覚える。  
このまま怪物の腹で消化され、永遠に闇を彷徨うのではないかという、半ば妄想めいた  
恐怖。

だからだろうか。長い沈黙に堪えきれず、俺は先を進んでいるはずのサーヴァントへ  
と話しかけた。

「ギルガメツシュ。アンタ、この戦いが終わった後はどうするつもりなんだ」

「……藪から棒に訊ねてきたかと思えば、よほど死に急ぎたくなつたと見えるな、雑種」  
えつ。ちよつと待て、これそんなに機嫌悪くするような質問だったか……!?

わけがわからずに混乱していると、前の方から低い笑い声が響く。その声からすると、別段不愉快そうな感じはしないが……。

「なんだ、知らぬのか。大一番を前にして過去や未来を語り始める者は、高確率で死ぬという法則ジンクスがあるのだが」

「……………あつ」

聞いたことがある。確か、死亡フラグとかいうやつだ。

ホラー映画で一人だけ集団から離れて行動したり、戦争映画で突然婚約者の話をし始めたりするキャラクターは、次の場面でだいたい死んでいるという法則。もしかして今、俺は思い切りそれをやらかしているのではあるまいか。

一人で青くなっていると、ギルガメッシュの笑いが愉快げになる。この男の笑いの沸点は未だによくわからないが、どうも何かガツボに入ったらしい。

「ククッ、まあよい。無聊の慰みにはなろう。どの道、その程度の法則ジンクスを破る運氣がなければ、地上の全悪など倒せまい。

して、雑種よ。その質問の意図はなんだ？」

「いや……………これから最後の戦いなんだと思ったら、その後のことが気になっただけだ。

聖杯戦争が終われば、サーヴァントは英霊の座に戻る。だけど、現実の肉体を持ってアンタは違うだろ？ この先どうするんだろうと思つてさ。

「そういや、前回の聖杯戦争で呼び出されてから、もう十年こっちにいるんだっけ。どこかに家とかあつたりするの？」

「ああ、話してはなかったか。十年前の戦いで以降、我は言峰の屋敷に住んでいた。特段やることもなかったのな、ほとんどは幼年体に任せていたが。」

確かに、この戦が終われば私の愉しみは一つ減る。この先どうするかというのはいつの課題よな。さて……また幼年体に丸投げというのも芸がない。巡っておらぬ地を旅するか、はたまた新たな娯楽を見出すか」

幼年体……？　なんだかよくわからない単語が出てきたが、まあそれはいい。

ギルガメッシュの王としての仕事は、生前に終わってしまったている。サーヴァントとしての役目は、聖杯戦争の終了と同時になくなる。唯一、裁定者としての役割が残っているが、それは遙か未来の話なのだろう。

やるべきことがないから、娯楽を求める。この男の金ピカぶりからすると、財産には一生困らなそうだし、そういう第二の生もありなのかもしれない。カジノあたりで豪遊している絵面が、確かにぴったりだ。

「で、雑種よ。かく言う貴様はどうなのだ。」

貴様の戦いはまだ続く。が、戦が生き甲斐という野人でなければ、戦いだけの人生などに味はない。無味無臭の食い物を味わったところで何になる？

趣味の一つでも持たねば、人生を楽しむことは能わぬ。そして、楽しみを味わえぬのであれば、他者を助けることなど叶わぬ。余裕も楽しみもなく、ただ救うだけのモノなど、それは機械と同じだ」

機械と同じ存在——それが何を示唆しているのか。考えるまでもなく、赤い弓兵の姿が想起される。

あの男に楽しみなどなかった。あつたのはただ、強迫観念と苦悩に満ちた孤独だけ。そうして誰にも理解されず、誰を理解しようとしなかった男は、最後には皆に裏切られた。誰にも理解できない存在は、恐怖の対象でしかないのだから。

俺はあいつのようににはならない、と決断した。ならば、あいつと同じ道を選んではいけない。

趣味、と言えるものがないわけではない。料理の腕を磨いていくのは好きだし、夜を徹していじくり回したガラクタたちは土蔵に山ほど転がっている。銃もバイクも興味はあるし、ゲームだって嫌いじゃない。

だけど、それを心から楽しんでるか？ 寝食を忘れるほど、人生に食い込むほど没頭しているか？ と問われると自信がない。いや、そもそも、本当に『楽しい』と感じたことなどあつただろうか。心から笑つたことなどあつただろうか……？

——自問して、ぞつとした。

楽しさが分からないことではない。自分が笑うという機能さえ十分に持つていないこと。そして、今の今までそれにまるで気づかなかったことに、背筋が冷たくなった。俺の人生に、『楽しみ』や『笑い』は存在していない。客観的に見て、これはおかしい。それは、人間として最低限の機能のはずだ。そんなことに俺は、今の今まで気づいていなかったのか。

「……………」

愕然としているうちに、狭い通路はいつの間にか終わっていた。魔術の光なのか、緑色に照らされた、大きく広い一本道が俺たちを出迎える。

真つ暗闇から一転した明るい輝き。奥へ奥へと誘うその光は、どこか誘蛾灯めいている。先の見えぬ闇から解放されたというのに、仄かに抱いていた不安は、むしろ強くなっていた。

その理由は、生々しき。この通路全体に、おぞましく黒い活力が満ちている。それは奥に行くほど強まっているようで、今ここで感じられる力は、ほんの欠片に過ぎないのだろう。

生まれよう、生み出そうというエネルギー。しかし、その対象はこの世の呪いを煮詰めたもの。一步步ごとに、吐き気がするような薄気味悪さが増していく。生まれてはならないモノが、現れようとしていることへの嫌悪感。

だが。あつてはならないものが誕生することと、あるべきはずのものが欠落していること。その二つに、いつたいどれほどの差があるのだろうか。

「これが『この世全ての悪』とやらの臭気だ、雑種。人より生まれ出て、人を溶かし殺す呪いの獣。兵器としては確かに優秀だろうよ」

その異常すら、鼻で笑い捨てて。英雄王は、黄泉路を堂々と歩いていく。

「アレは己しか持たぬ妖魅だ。この世の全てが殺されれば、最後にはヤツという呪いだけになる。抗うために必要なのは、群れではなく個人の強さよ。アレが我を取り込めなかったのは、我という個の強さに劣っていたからだ。

だが、現世の雑種ではあの呪いには敵うまい。ただ数が多いだけの、漫然と生きる弱い個体などたかが知れている。我がウルクの民であれば別だろうが、さて」

サーヴァントに続く。生物としての本能が、この先に進むのは危険だと訴えているが、人間としての理性でそれをねじ伏せる。

直感は正しい。洞穴の奥に待ち構えているのは死だけだ。だからこそ、死地に辿り着かなければならない。この空間の外に、アレを出すわけにはいかない。

ホルスターの銃把を握り、己が成すべきことを再確認する。ある意味同質と言えるものであつても、呪われた聖杯に慈悲など無用。まずアレを倒さなければ、自分に向き合える日すら来なくなってしまう。

「覚えておけ、衛宮士郎。呪いというのは『この世<sup>ア</sup>全ての悪<sup>リ・マ</sup>』だけではない。人の世には、有形無形を問わぬ、幾多多数の呪いが溢れている。

呪いというのは、人の在り方を、その魂を捻じ曲げ汚染するものだ。強靱な自我を持たねば、人は容易く呪いに染まる。

貴様は私の問いに返す答えを持たなかった。『楽しみ』を持たぬ、一つのシステムだけで成り立つ機械は、それ故に一つが狂うだけで全てが破綻する。『楽しみ』とは人間であるための冗長性、と言つてもいいかもしれないな」

この世の快と悦を味わい尽くしたと豪語する英雄王。楽しさという事柄について饒舌なのは、この分野について一家言あるからだろうか。

たとえ話を出してくれたおかげで、言っている意味が理解できる。俺はよく機械を弄るが、重要な機構であればあるほど、必ず予備や補助といった、故障に備えるための冗長性が確保されているものだ。人間の場合、それが趣味や楽しみにあたるのだろう。

そういつたものを全て投げ捨てて、一つの目的だけを抱え続けて。その結果、目的が壊れた途端に魂まで破綻してしまった実例を、俺はつい昨晩目にしてる。ヤツから流れ込んできた記憶が、経験が、何より雄弁に物語っていた。

「雑種よ。貴様に一つ宿題だ。

この下らぬ茶番に幕を下ろし、<sup>聖杯戦争</sup>魔術師との抗争に挑むまで。それまでの間に、『楽し

み』を見出だせるようになっておけ。

そうさな——この教師役は、王たる我より身近にいる者の方が適していよう」

……重い宿題が出されてしまう。

本当に楽しいと思えること、心から笑えることが、俺にはない。代わりにあるのはなんだろうと自問した時、浮かび上がってきたのは、十年前の炎の夜だった。

多くの人が死に、多くの人を見捨てたあの夜で生き残ってしまった俺には、楽しいと思う資格などない。生き残ってしまい、助けられたのだから、自分は人のために生きなくちゃいけない。俺はずっとそう思っていた。

だが、そうやって突き進んだ結果を見た。自分の根底にあつたのは、理不尽さへの怒りだったことを思い出した。他人を助けたいという気持ちに偽りはないが、本当にその想いを貫きたいのなら、まず自分自身と向き合う必要があるのだろう。

「この宿題に解を出せぬ限り、貴様はどれだけ勝利を重ねようと、人間による呪いで醜悪な幕切れを迎えることになるだろう。そんな滑稽な顛末には何の面白みもない。

そうして、愚かに道を違えた末路が——」

通路が終わる。開けた空間が、俺たちを迎え入れる。

本当に地下なのかと疑いたくなるほどの、広大な面積。全力で走っても、端まで辿り着く前に息切れしてしまうだろう。天井も軽く十メートル以上はあり、部屋というより



はほとんどホールに近い。

けれど、これだけの広さだというのに、大聖杯らしきものはどこにも存在しなかった。このただっ広い空間でさえ、まだ中盤に過ぎないというのか。よく見渡してみれば、奥にはまだ道らしきものが見える。

——そして。その道の手前。人生そのものに立ち塞がる、障壁であるかのように。

「——あの偽物というわけだ」

もう一人の自分が、悠然と待ち構えていた。

「なんだ。今更になってのこのこ現れたか、贋作者」

ギルガメッシュが、嘲りと共に吐き捨てる。言峰も臓硯も、桜もイリヤも、他には誰もいない。この広間にいる人影は、あの弓兵ただ独りだ。

が、しかし。

「あいつ、本当にアーチャーか……?」

つい昨晚、死闘を繰り広げた相手を見間違えるはずがない。あの男は未来から召喚され、自分自身を殺そうとする異端の弓兵だ。だが、その容貌があまりにも変わりすぎている。

白い頭髮は、刈り上げたか切り落とされでもしたかのように短くなり、肌の色は褐色を通り越して真っ黒だ。赤かった外套さえ、泥のように黒ずんでいる。

そして何より、漂う雰囲気は別人だった。昨晚までのあの男からは、確たる己の意思、強い信念が感じられたが、今のヤツにそんなものはない。失ったというよりは、腐り落ちでもしたかのような禍々しきを感じる。身体だけでなく、魂まで黒く染まってしまったように――。

「哀れだな、雑種。どういう経緯かは知らぬが、あの泥に飲まれたか。反転、と言うよりは純粹な汚染だな。」

我やセイバーであればともかく、貴様ごとき三流の英霊では、満足な自我も残つてはいまい。それが私の前に立とうとは、滑稽どころか笑いも出ぬわ」

「まさか、聖杯の呪いか……！」

違和感の正体ははつきりした。あの男の状態は、セイバーと同じなのだ。

この一晩で何があったのか、俺に知る術はない。ギルガメツシュに受けた傷が禍々しい黒で塞がれている理由もわからないし、先の戦いで予測したアクシデントの正体がこれだと断言もできない。確たることは何一つ分らないが……ただ、強い憤りを感じた。あの英霊は、不当に貶められている。

セイバーもそうだ。バーサーカーもそうだ。信念があり、誇りがあり、俺なんかより何万倍もすごい英雄たち。そんな彼らの在り方を歪め、狂わせる呪いは、筆舌に尽くしがたい侮辱だ。許されていい道理がない。

あいつだってそうだ。その道は俺と相容れなかったかもしれないが、それでもあいつは英霊に辿り着くほどのことをやり遂げたのだ。それがあんな、生きる屍のように成り果てるなんて——呪われた聖杯は、一刻も早く破壊しなくてはならない。あいつがこうなっている理由が人為的なものとすれば、そんな邪悪は一秒だって生かしておいてはならない。

「……………」

ヤツと睨み合う。いや、睨むという表現は正しいのか。黒い弓兵は、ただ無機質な瞳でこちらを見つめている。そこに昨夜見せた人間味は欠片もなく、目的を果たすためだけの機械めいた冷たさがあった。

どうする。ここで黙っていればいるだけ、こちら側が不利になる。桜が聖杯の汚染に抗いきれず、暴走して無差別に呪いを撒き散らすようになってしまえば終わりだ。今夜中という時間制限の前に、なんとしても聖杯を破壊しなければならぬ。

ここに来るまでギルガメッシュは、セイバーとの戦闘で消耗した分、霊薬や回復道具を使用して自身の状態を万全にしている。いかに相性が悪いとはいえ、正面切つての戦いなら劣る理由はないだろう。こちらから、先制攻撃を仕掛けるか……？

「——」。オレが受けた命令は、英雄王の相手だけだ。その小僧に用はない。」

唐突に。澁んだ昏い声が、洞穴内に低く響いた。

一拍遅れて、その言葉の意味に驚愕する。あの男は、敵サーヴァントに止めを刺す機会を擲つてまで、俺を殺すことに拘つた。それほどの執念の塊が、まるで逆のことを言っている。恐るべき呪いは、弓兵から目的さえ奪つてしまったのか。

判断に困り、ちらりとギルガメッシュの様子を見る。セイバーを前にした時とは打つて変わつて、冷たい剣のような表情の英雄王は、こちらを見もせずた。に小さく頷いてみせた。

「贖作者フエイカーめの言葉に嘘はない。アレはもはや、命令を実行するだけの機械に過ぎぬ。自我を持たぬ機械が、命令以外の行動を取ることにはなからう」

そうか、と低く返す。あいつはもう、エミヤシロウでさえなくなつてしまったのかも  
しれない。

ギルガメッシュが判を押すなら疑いはない。あいつが俺を無視するというなら、こちら  
らは遠慮なく先に進ませてもらおう。

悠長に二人の決着を眺める余裕はなく、残る敵にサーヴァントは存在しない。恐るべき  
老魔術師と、底の見えぬ神父が待ち構えているだろうが——英霊でないのなら、  
暗殺者の刃が届く相手だ。  
魔術師殺し

「——ここは任せた、ギルガメッシュ。後から追いついてきてくれ」

「フン——良からう。あの見苦しい偽物は、我が引き受けた。我が贖作者フエイカーを仕留める前

に、虫程度は片付けておくがいい」

\*\*\*

——夢を見ていた。

現代より遙か昔、千年以上前のこと。まだ神秘の残り香が強く残っていた、その最後の時代。

地中海で覇権を誇っていた大帝国が、この時滅びを迎えようとしていた。外敵の猛威に耐えきれなくなったその国は、各地へ派遣していた軍を本土へと引き上げさせてしま

う。  
軍という抑止力、治安維持機構を喪った地方は、当然のように荒れ果てた。外部からは異種族が攻め込み、内部では村ごと、部族ごとに戦いが絶えない、暗い内戦が訪れたのだ。

その島国も、惨禍に喘ぐ地の一つだった。昼も夜もなく、悲鳴と剣戟の音が響くそこは、地上に現れた地獄だった。そんな闇の時代、一つの国で、ある王の跡継ぎが産声を上げる。

『なんとということだ。まさか女子とは——』

だが。不幸なことに、その嫡子は男子ではなかった。この時代において、為政者たる資格は男以外に存在しなかったのだ。

彼女は王の家臣である老騎士に育てられ、順調に成長を重ねた。混沌の時代の中でも、その少女には光るものがあり、彼女は誰に言われるでもなく自ら鍛錬を積み重ねた。断末魔に喘ぐ国を救えるのが王だけならば、次代の王たる自分はそれだけの強さを持たねばならないと、そう誓っていたがゆえに。

そうして、十五年あまりの月日が流れた。

その日は、魔術師によつて予言された、『相応しき者』を時代の王として選定する日である。国中から集まった騎士や領主たちは、我こそが王たらんという野望を胸に抱いていた。

選定の場に用意されていたものは、黄金の剣。岩に突き刺さった剣を引き抜けた者こそが、王の資格を持つ。名だたる騎士たちが次々と挑戦するが、誰一人として剣を引き抜けた者はおらず。誰にも抜けないのならもはや試す意味はないと、呆れた騎士たちは、別の手段で王を選ぶべくその場を離れていった。

後に残されたのは、その少女だけ。誰もいなくなつた選定の場に進み、岩に突き刺さつた剣に、ためらいなく手を伸ばそうとして。

『それを手にする前に、きちんと考えたほうがいい。それを手にしたが最後、君は人間で

はなくなるよ』

いつからそこに現れていたのか。声をかけたのは、白いフード付きのローブを纏った、銀髪の青年だった。

長い杖を持ち、超然たる雰囲気その人物は、その国で一番恐れられていた魔術師だった。容姿は若々しいにも関わらず、どこか老人のようにも感じられる。

その男の忠告に、少女はただ頷いた。人ではなくなる、王という機構になることがどれほど恐ろしいか、彼女は十分にわかっていた。人ではなくなつた者の末路が、どんなものになるのかも。

——それでも。

『多くの人が笑っていました。それはきつと、間違いではないと思います』

そうして、黄金の剣は引き抜かれ。伝説となる、王の時代が始まつた。

多くの騎士たちを従えた彼女は、軍神そのものだった。

父に代わつて王の座に就き、アーサー王となつた彼女は、ひたすらに戦い抜いた。十年月、十二もの会戦を、尽く勝利する大英雄。

彼女が女性だと気づく者もいた。しかし、そんな瑣末事を吹き飛ばすほど、彼女の功績は桁が外れていた。これだけの奇跡を前にして、性別を気にする者はいなかつたし、彼女の王としての機能はそれほどまでに優秀だった。……誰も、文句を口にできないほ

ど。

内乱を繰り返していた領主たちを統率し、侵略してくる外敵を撃破していく姿は、まさしく理想の王。突如現れて聖剣を抜き、王となった子供を快く思わぬ騎士たちは大勢いたが、皆その結果に黙らされた。内心に多くの不満を抱えながらも、騎士たちは彼女に従う他はない。

力と結果で全てを押さえつける若い王。玉座にいる時も、戦場にある時も、街を歩く時も、業務以外で彼女に話しかける人間はいない。その徹底的な孤立が、彼女の王としての実態だった。

それでも、彼女は理想の姿を維持し続けた。真実、彼女は国のために己を捧げたのだ。敵を滅ぼし、味方を守り、犠牲を抑える。戦時に於いて王の役割とは、いかにして犠牲リソースを振り分けるかというものだ。彼女は最も効率が良い戦略を選び、あらゆる敵を打倒し続けたが、そうするうちに騎士たちは犠牲リソースの配分に不満を抱き始めた。

備え、戦い、勝つ。騎士たちの心情になど配慮している余裕はない。そんな余分が許されるほど、この国に力は残っていない。そうして勝ち続けるうちに、ようやく荒れ果てた国は安定の兆しを見せ始めた。

——だが。有時から平時に移るにつれて、不満の声は大きくなっていった。

ある騎士は、王城から去っていった。ある騎士は、裏切りとしか取れぬ行為を働いた。



それらの問題も、それ以外の問題も、全ては王である彼女に押し付けられた。彼女から離れ、裏切り、不満を蓄積させながら、それでも周囲は彼女に理想の王であることを求め続けた。

少しずつ大きくなっていく歪みとズレ。それがいつか爆発するのは、自然の理だった。

——カムランの戦い。

アーサー王が王城を不在にした一時。その隙に、一人の騎士が反乱を起こした。

その火種は、あつという間に燃え広がった。予てより彼女に対し向けられていた不信と不満。今まで抑えつけられていたそれが、この一件を機に、連鎖反応を起こしたのだ。国は真つ二つに分かれ、あらゆる人間たちが互いを殺し合った。アーサー王が戻ってくる頃には、凄惨な戦いはもう止めようがないところまで拡大していた。

——それでも、彼女は理想の王だった。

今までと変わらず、王という機械として彼女は動いた。裏切られ、不満を抱かれることに、彼女はとつくに慣れきってしまった。感情を捨てた機械に、この程度で不満が出るはずもない。

自身に忠を誓っていた反逆者を斬り捨てる。かつて守った土地を焼き払う。人の笑顔で溢れていた街に、人だった肉塊を積み重ねる。今まで異民族に向けていた力をお

ての同胞に向け、彼女は屍山血河を築き上げた。

……けれどこの戦いは、今までのものとは段違いだった。彼女に忠実な騎士たちも次々に倒れ、無敵だったアーサー王自身もまた、少しずつ傷を負っていく。

そして、誰もいなくなった。

国は荒れ果て、人は死に絶える。血染めの丘で、動いているのは彼女独りだけ。孤高の王が、行き着いた末路がここだった。

自分の感情も人生も幸せも、何もかも放り捨てて。頑張って頑張って頑張って、戦って戦って戦い続けた。後世に名を残すほど、英霊の座にその名を刻むほど。

その結末が、この地獄だった。憎まれ、恨まれ、詰られ、最後には殺される。彼女の献身に対し、褒章として与えられたのは無限の悪意。守りたいと願った国も、人も、全てが炎の中に消えていった。報われるどころか、理解を得られる機会すら、ついで彼女には訪れなかったのだ。

丘を染め上げたのは、斬り捨てた臣下の血か、それとも騎士に突き刺された彼女の血か。赤い夕暮れとともに、彼女の生もまた、落日を迎えようとしている。

そんな、変えられない終わりを前にして。

「ふぎけんじゃないわよ」

はつと目が覚める。視界に映るのは、赤い丘ではなく、真つ暗な天井だった。

混乱する記憶。何がなんだかわからず、大きく息を吐いて深呼吸。少し体を動かすと、かけられていたタオルケットが落ちていった。

今の光景は夢だ。思い出せ。夢を見る前、意識を失う前、自分には一体何があつた——？

『——時臣師もさぞお喜びになることだろう』

「綺礼ツツツ！」

がば、と体を起こす遠坂凜。敵意とともに周囲を見渡すが、見えるのは暗闇だけだった。

瞬きをすると、徐々に夜目がきいてくる。この場所には見覚えがある。彼女が居候している衛宮邸の一角、自由に使っていると貸し出されている部屋だ。どうやらそこにかかされていたらしいと、今の状況を理解する。

「……そうだ。わたし、綺礼にやられて、その後衛宮くんと会って……」

記憶を辿る。実の親を殺した怨敵に、彼女はイリヤスフィールと二人がかりで挑み——代行者の戦闘能力の前に、敗北を喫したのだ。いかに優秀な魔術師とはいえ、まだ若い彼女たちでは、死線を潜り抜けてきた猛者の力には及ぶべくもなかった。

彼女が殺されていないのは、言峰がイリヤスフィールの確保を優先したため。神父にもう少し時間があれば、凜という少女は父親と同じ最期を迎えていたことだろう。逃げ

ることすら敵わないほど、凜の傷は深かったのだが――。

「あれ？ 傷が、消えてる……」

痛みを感じないことに違和感。服をたくし上げて体を見下ろすと、肋骨どころか臓器まで破碎されていた腹部は、痣の一つもなく完治していた。肺も片方は破れていたはずだが、息をしてもまったく息苦しさが無い。腕も足も、傷つき折れていた場所は軒並み元の状態へと戻っている。

「衛宮くん……じゃないわね。あの金ピカが助けてくれたのかしら」

死を覚悟していた傷だけに、こうも健康体になっていると拍子抜けだった。首を傾げつつ立ち上がろうとする凜だが、軽い立ち眩みを覚えてふらついてしまう。傷こそ治れど、体調はまだ万全とは言えない……今夜一晩休めば治るだろう、と彼女の直感も告げていたが、その一晩を寝て過ごすことなどできようはずもなかった。

時計を見ると、時刻は既に真夜中。屋敷に人の気配がないことからして、士郎と黄金のサーヴァントはとうに出撃したのだろう。今まさに、敵と剣を交えている最中かもしれない。

「……遅くなったけど、行かないと」

活を入れる。出遅れはしたが、まだ間に合いはする。ここで動かなければ、自分はそのためにこの十年を過ごしたのか。

——遠坂凜は、既にマスターではない。

聖杯戦争において、彼女は既に外様だ。その観点からすれば、戦場に向かう意味などない。彼女を守るサーヴァントは既に存在せず、そして彼女に聖杯を掴む資格はない。

だが、彼女は遠坂の魔術師だ。そして、恩義を忘れない一人の人間でもある。

衛宮士郎という少年に、彼女は何度も助けられた。魔術師としてはほとんど素人でありながら、彼は最前線で戦い続け、人の身でありながらサーヴァント・アサシンを撃破するという大殊勲を挙げている。彼と手を組んでいなければ、凜はとうに退場していただろう。

凜だけではなく、妹の桜もそうだ。仲の良い後輩というだけで、士郎は躊躇なく彼女を助けることに命を懸けた。ここまでのことをされておいて、後は任せたと自分一人残っているなど、そんな真似は凜の矜持が許さない。

『おまえの成長は、師として実に鼻が高い』

ギリ、と歯噛みする。士郎が戦っているであろう相手は、他ならぬ自分の怨敵。兄弟子という面をしながら、裏で凜を嘲笑っていた、言峰綺礼という悪徳神父。あの薄ら笑いを殴り飛ばしてやらなければ、自身の屈辱も、父の無念も晴らせない。

士郎を助ける。言峰を倒す。これは聖杯戦争とは関係なく、遠坂凜という人間が、決着をつけなければならないことだ。

しかし。聖杯戦争に参加した者として、元マスターとして——一人の友人として、彼女が果たすべき責任も残っている。

『——問おう。あなたが私のマスターか』

召喚に応じた、剣士セイバーのサーヴァント。ちよつとびっくりするぐらい綺麗な、金髪の子。

彼女が伝説のアーサー王だと知って、さすがに驚愕した。その強さは本物で、ヘラクレスという埒外の大英雄にも拮抗し、女怪メドゥーサ、魔女メディアを尽く討ち果たしてみせた。人間としても誠実で、その善良さは凜とよく噛み合った。凜は彼女のことを、単なるサーヴァントではなく友人だと考えていたし、向こうもそうだと嬉しいと思っている。

それ故に、この現状が許せない。

聖杯という極大呪詛に汚染され、セイバーは変わり果ててしまった。間桐臓硯の傀儡と化した彼女は、頼もしい戦友から恐るべき強敵へと立場を変えたのだ。

けれど、セイバーには自我も記憶も残っている。ならば何故、あのような外道に隷属しているのだろうか？

『だが、それならばセイバーと貴様は相容れぬな。あの小娘は貴様と異なり、聖杯に託す悲願を持っている。聖杯を求めぬマスターと、聖杯を求めるサーヴァント。どこかで胸

襟を開かねば、いずれ歪みが生じるだろうよ」

サーヴァントが戦う理由は、聖杯に託す悲願のため。思えば凜は、彼女の願いを聞いたことが一度もなかった。

黄金のサーヴァントの予言通り、凜とセイバーの道が分かたれてしまった理由。彼女が今敵対している理由は、きつとそこにあるのだろう。凜はそれを、ずっと知りたいと思ってきた。

「セイバーとの契約は、もうとつくに途切れてるっていうのに……なんで今更になって、サーヴァントの記憶なんか」

夢で見たもの。それは、アーサー王という英雄の歴史だった。

マスターとサーヴァントは、契約の経路パスを通じて互いの記憶を垣間見ることがあるという。間桐臓硯に奪われた時点で、彼女との契約は切れているはずだが、魔術回路の記憶領域フラグにでも情報の断片が残っていたのだろうか。

けれどそのおかげで、ようやく疑問の答えを知った。カムランの丘でセイバーが見せた表情、彼女がこだわり続けた王の責任を鑑みれば、どうして聖杯を求めたのかがわかる。……それが、無性に腹立たしい。

「セイバーのせいじゃない。あの子はもう、頑張りすぎるぐらい頑張った。それであんな終わり方をして……それでもまだ、あの子は責任を果たさなきゃって思ってる」

公私の『私』が欠如した、異常なまでの自己献身。強烈な自罰感情と、責任他者を果たすことへの拘泥。その姿は、この家の家主とよく似ているようだ。

「ああもう、なんで私の周りにはそんなやつばかりなのかしら」

誰か一人ぐらい、よく頑張ったと言ってやる人間はいなかったのか。彼女彼の周りの人間は、一体何をやっていったのか。

遠坂凜は、客観的に見て自分が努力家だと思っている。それ故に努力の価値を重く見ているし、頑張つて努力した人間は報われなければならないと信じている。

だからこそ。十分に責任を果たしているのに、何一つ報われていないのに——それでも頑張り続けて、傷つき続けて。誰かのため、何かのためと言いながら、自分の破滅しかない道に突っ走る。そんな人間、どうやったって放っておけない。

「わたしに、セイバーの願いをどうこうする資格があるかはわからないけど。それでも、一言言ってやらないと。それがマスターとして、友達としての責任つてもものでしょう」  
立ち上がる。

決戦の地は、消去法で柳洞寺だけだ。今から走れば、ちょうど魔術回路が絶好調になる時間帯にたどり着けるだろう。

虎の子の宝石は大半を使い果たしてしまったが、まだ幾つかストックはある。体調も万全ではないが、傷は癒えているのだから贅沢は言えない。



セイバーに一言言い、士郎を援護し、腐れ神父を最高のタイミングで横合いから殴りつける。途中参加の形になるが、レフェリーはいないのだから、誰にも文句は言わせない。

「行くわよ、わたし。今夜が天王山、やるからには派手に決めなきやね！」

——遠坂凜の、決戦の夜が始まった。

## 35. 決戦の地

——ノイズが走る。

過去が消える。記憶が消える。目的が消える。理念が消える。黒い泥が、何もかもを飲み込んでいく。

痛みを感じる。怒りを感じる。怨念を感じる。呪詛を感じる。黒い影が、何もかもを上書きしていく。

それは罪であり、それは悪であり、それは呪であった。抗いようのない力に、エ  
シ■ウという存在が塗り潰されていく。

人格が腐る。自我が溶ける。呪え、殺せ、償え、死ねという負の衝動が渦を巻く。いつまでも、終わりなく、ぐるぐると。

この世<sup>アンリ・マユ</sup>全ての悪。人類全てを覆い尽くす呪いの前には、英霊であろうと魂が保たない。神話の豪傑たるヘラクレスも、伝説の王者たるアーサー王も、霊基が歪められ汚染され、元の在り方を見失った。彼らほどの大英雄でさえそうなのだ、無銘の英霊ごときが耐えうる道理がない。

弓兵<sup>アーチャー</sup>として召喚されたサーヴァントは、そうして何もかもを失った。正当な英霊では

ない彼は、この極大呪詛へも一定の耐性を有していたが、限度というものがある。圧倒的な呪いの力に、己の中身さえ黒く染められた男は、真実無銘の英霊となったのだ。

『……ここに来るサーヴァントを殺せ』

黒化した男には、悲願も目標もない。奴隷として命令を<sup>サーヴァント</sup>実行し、際限なく溢れ出る負の力をぶつけるのみ。

視界は生きている。下半身のみを鎧で覆った黄金の英霊、殺せと命じられた相手は見えている。

しかし、男の目は完全に死んでいた。先ほど通した少年のことさえ、もう彼は正しく認識できていない。あの少年はサーヴァントではない、つまり殺す対象ではないと判断したから手を出さなかっただけ。その行動規則は、人形というより機械のそれだ。

理想も思想も、無心の執行者にはもはや残されていない。純粋な暴力装置が持つのは、戦うための技術だけ。呪いの果てに堕ちきっても、かつての戦闘能力は十全に発揮できる。

啜う鉄心——聖杯によって押し付けられた呪い、精神汚染の一種。自らの意思では彼の霊基を解体できなかつたこの世<sup>アンリマ</sup>全ての悪は、聖杯戦争を速やかに完遂させて自身を誕生させるべく、『サーヴァントとして戦え』という絶対命令を彼へ押し付けた。ここまで霊基を歪められ、反転を通り越して損壊している彼は、この技能<sup>スキル</sup>によって元の力を維持

しているのだ。

「無様よな。理念も執念も、己さえ見失ったか。セイバーはまだ自我を残していたが、貴様はもはや見るに堪えぬ。所詮は贗作者<sup>フェイカー</sup>、魂まで偽物に堕ちたか」

敵が何かを言っている。あの敵は何者か、その答えを男は承知していた。

ギルガメッシュ。人類最古にして最強の英雄王。もうどこで出会ったのかも思い出せないが、その真名と能力は把握している。およそほとんどの英霊はまともに戦うことさえ叶うまいが、男の性能であれば戦う術はある。何も恐れる必要はない。

「——そうだな、英雄王。オレにはもう何も無い。残ったものは、人殺しが得意という事実だけだ」

嗤う。その機能だけは、まだ辛うじて残されていた。

他にはもう何も無い。戦う力以外に、残っているものを探す方が難しい。戦闘機械は、ただその役割のままに、命じられた敵と戦うだけ——。

『——先輩。私のこと、助けてくれますか?』

剣を握ろうとした、その瞬間。何も見えない目で、自分を見上げる少女を思い出した。記憶が割れる。情報が壊れている。全体像は把握できない。容姿も臃気だ。名前すら、もはや思い出すことは叶わない。

それでも。あの少女が、何か大切なものだったことは覚えている。呪いに侵されて

も、自分がなくなっても、それだけは守らなければならない。もう消え去ったはずの何か、あの子を助けろと言っていた。

どこにいるのか、どんな状態だったのか、細かいことは何もわからない。敵の名前は覚えているのに、どうしていちばん大事なものを覚えていないのか。怒りという感情の残滓が残っていたことに、微かな驚きを抱く。

動けない。すぐ近くにいたはずだが、探しに行くことはできない。サーヴァントに対する命令が、聖杯の呪いが、この霊基を縛っている。あの英霊を打倒せねば、自分は動くことさえ儘ならない。戦い以外で可能なことといえば、この役立たずの体に刃を突き刺すぐらい……待て。

「英雄王。貴様は、あの……少女をどうするつもりだ」

直感だった。このサーヴァントとあの少女には、何か関わりがあるのではないか。その誰何は、黄金の英霊に心当たりがあつてほしいという懇願にも近い。

知らないならばそれでいい。一刻も早く、敵をこの場で打倒するだけ。しかし、もし知っているのなら。彼女を救おうという意志があるのなら、その時は。

「……うん？ ああ、聖杯の器どものことか。おかしなことよ、既に壊れた貴様が、壊れゆくモノを気にするとはな」

知っていた。黄金の英霊が口に行っているのは、間違いなくあの少女のことだ。男の祈

りは、奇跡に似た形で叶えられ——。

「壊れているなら、殺してやるのが慈悲であらうに」

——酷薄な嘲笑に、木っ端微塵に砕かれた。

感情が消える。胸にわずかに灯っていた、蠟燭の火が見えなくなる。

代わつて男の目に浮かんだのは、執念めいた敵意だった。死んでいたはずの瞳に力が宿る。命令されたからではなく、辛うじて残つた自分の意志で、この男は戦うことを決断した。

何もかも塗り潰された自分に、唯一残つたもの。あの少女を助けなければならぬという強迫観念。ここで黄金のサーヴァントを通せば、その最後の願いさえ塵になると確信したが故だった。

「……………」

無詠唱で干将・莫耶を投影。負担が少なく、魔力を通しやすく、一番手に馴染む武器。愛剣ともいえるこの二振りならば、どのような戦術にも対応できる。

意識がクリアになる。ノイズがかかっていた思考が、急速に鮮明になつていく。戦えという呪いのせい、少女を救うという誓いのせい、剣を執つた男は弓兵のサーヴァントへと戻っていた。

「——ほう？ どういうカラクリかは知らぬが、死に体が少しはマシになつたか。セイ

バーを下した今、貴様は所詮残り物に過ぎぬわけだが……。

よいぞ。齒向かうことを許す、贋作者<sup>フレイカー</sup>。その薄汚い手品で、精々我を興じさせるのだな」

パチン、と指が鳴る。ギルガメツシユの周囲に現れる黄金の門、その数は十二。

舐めている、と弓兵は嗤う。英雄王の代名詞たる宝具掃射、その火力を本気で向けられれば危ういが、たったこれだけでは何の脅威にもならない。リクエスト通り、手品を見せてやるでしょう。

——長剣、大斧、馬上槍、鎌、短刀。

門から放たれる原初宝具。着弾するまでのコンマ数秒の間に、その全てを分析し終える。武具の解析と投影だけに特化した英霊にとつては、あまりに容易い作業。

分析した情報を元に、まったく同じ武器を精製。二十七の魔術回路が唸りを上げ、アーチャーを取り巻くように十二本の武器が現れる。瞬きの間に複製、投影された贋作たちは、疾風のように飛ぶと親たる真作と激突する！

「無礼者めが——」

射出した宝具、その尽くを偽物に迎撃されたギルガメツシユは舌打ちして目を細めた。

アーチャーが複製した宝具は、どこまでも偽物に過ぎない。英雄王が保有する本物の

財に、質では及ぶべくもない。しかし、同等の質量と近しい神秘を有するのであれば、迎撃に使うには十分すぎる。

殺到する刃を撃ち落としたことで、アーチャーの身はフリーな状態だ。次の宝具が繰り出されるより早く、黒白の双剣が王に迫る――。

「ハッ。我へ刃を向けようとは、雑種風情が度し難い」

刹那。弓兵の動きを読んでいたのか、ギルガメツシユは黄金の双剣を振り抜いた。怪魔を屠る神秘の剣同士が鏖競り合い、飛び散る火花越しに二騎のサーヴァントが睨み合う。

だが、全力でのぶつかり合いは、次第に英雄王の優勢に傾いた。剣技であればアーチャーが圧倒するが、剣を振り抜こうとした時には、強烈な力で体勢が崩されている。身体能力で勝るギルガメツシユは、その優位を十全に理解しているのだ。単純に近づけば勝てるものでもない、男が認識を改めた時。

「頭が高いわ、跪け！」

咄嗟に飛び退いたアーチャーを掠めるように、空間を刃が蹂躪した。正面からの力押しに意識を誘導しておきながら、背後から死角を突く形での宝具射出。双剣で切り払い、身を守りながら、アーチャーは初歩的な罠に陥りかけたことを自嘲する。相手を油断させ、誘導し、罠に嵌めて始末するのは自分の戦術ではなかったか。



対峙する英雄王に浮かぶのは嘲笑。あのサーヴァントは、恐るべき鑑識眼でアーチャーの性質を、ともすればその経験すらも見抜いている。今の攻防は彼にとつては遊び、アーチャーに対する当てつけだ。

——舐められているうちに攻め切らねば危うい。

『ゲート、オブ、バビロン王の財宝』による宝具射出は相殺できる。あの恐るべき面制圧能力が封じられれば、純粹な個人対個人の戦いとなる。身体能力ではギルガメツシュが上回るが、アーチャーはその差を容易に覆す技量を持つ。英雄王を相手に、正面きつての正規戦で対抗可能なのがこの無銘の英霊だ。

そう。ギルガメツシュが舐めている間に限つては。

「トレイス、オン投影、開始」

激突で刃こぼれしていた夫婦剣を破棄、再投影。頑丈さに定評のある愛剣だが、わずか一度の鏖戦り合いで、その摩耗度は無視できない領域に到達していた。二合、三合は持つだろうが、それ以上砕けぬ確証はない。英雄王が振るう剣は、それほど古代の神秘を含有している。

武器の精度では勝ち目がない。ならば勝てる土俵で勝負をするまで。慢心する絶対王者を、自分のフィールドに引きずり下ろす——！

「I am the bone of my sword」

宝具が放たれる。その数は二十四、先ほどのちようど二倍。視るだけで解析を終えた弓兵は、複製品を投影、鏡合わせのように撃ち放った。その光景は一度目の焼き直し、この程度の数であれば贋作者の投影は優に間に合う。

金属音が響き、火花が舞い、衝撃が連続する。刃による舞踏会の中、意に介さず踏み込む黒い騎士。ギルガメッシュまでの距離を零にすると同時、双剣を鎧に叩き込む！

「ふん——」

英雄王が取り出したのは、紅の魔剣だった。明らかに振り抜いた動きとは異なる挙動を見せた剣に、虚を突かれたアーチャーの剣が揺れる。攻守が瞬時に入れ替わり、蛇のような軌道で迫る剣を、陰陽剣が上から叩き落として受けに回る。

『赤原獵犬』。英文学最古の叙事詩の主人公、ベオウルフが愛用した魔剣。そして、以前の戦いでアーチャーが使用した剣。それらの原典にあたる宝具は、血の匂いを嗅ぎつけ、独自に最適な軌道を判断して斬撃を調整する能力を持つ。英雄王自身の剣技に依らない、剣そのものから繰り出される魔技に、弓兵はたまらずたたらを踏んだ。

その隙を見逃すギルガメッシュではない。空いていた左手には、既に鋼の棍棒が握られている。横薙ぎに振るわれた鉄塊を、陰剣・莫耶が防御するが……。

「ぐ——!!?」

『鉄鎚蛇潰』。打撃に特化した武器の破壊力は、硝子のように投影剣を打ち砕いた。手

首から伝わる衝撃にアーチャーの顔が歪む。技量で圧倒しようという目論見を、武器の性能が先んじて潰しているのだ。

たまらず飛び退る弓兵。その後を追うように、刀剣槍斧が殺到する。武器の多彩さで主導権を握り、数を以て自由を奪う戦術は、アインツベルンの森でアーチャーが見せた展開そのものだ。つまり、ここまでの攻防すら遊ばれている。

それを理解したアーチャーは、心中で薄い笑みを浮かべた。侮られているのならそれこそ好機。盤面を覆す準備は、水面下で進んでいる。

「and fire is my blood. Steel is my body,

宝具掃射に投影宝具を併せて凌ぎ、複製が追いつかないものは双剣で弾く。それでも防御を抜けてきた刃が頬を掠め、黒い肌に朱線が走った。

アーチャーにとっては予想内のことだが、通常空間における戦闘では、地力でギルガメッシュが大きく勝る。宝具の射出攻撃を防ぐ手段があるという時点で、他の英霊よりはアーチャーの方が有利だが、宝具を視認・解析してから投影・射出するという受け身のプロセスを経るため、主導権は常に相手側に譲ってしまう。加えて、数十程度の宝具数であれば問題はないが、それが百、二百と増大した場合には処理が追いつかない。撃ち合いではいずれジリ貧になって圧殺されるだろう。

圧倒的な弾幕によって近づくことができず、仮に距離を詰められたとしても、罨に嵌められるか多彩な宝具で切り返される。英雄王に本腰を入れられればアーチャーの敗北は必至であり、その未来を変えるためには、もう少し時間を稼ぐ必要があった。

「I have created over a thousand blades.」  
 その場から大きく退却。ホール状の空間、その端まで距離を取ること、ギルガメツシユの宝具が着弾するまでの猶予をわずかに伸ばす。そうして生まれた一手の余裕で、迎撃宝具を投影し続ける間に、アーチャーは一つの大弓を用意した。

弓兵が剣を遣うことこそ、本来は邪道。剣の才能に恵まれず、弛まぬ努力で剣技を磨いたアーチャーだが、彼は弓術に於いて才を發揮する。狙撃手として戦うための武器が、この大弓だった。

番えるべきは、矢ではなく剣。螺旋のように捻じくれたそれは、ケルト神話の英雄フェルグス・マック・ロイが用いた『虹霓剣』。飛来する宝具に投影宝具をぶつけ、あるいは躲しながら、アーチャーは弓の照準を黄金の英霊に向けた。

「偽物に更に手を加えているな。武器への敬意を持ち合わせぬ愚か者めが——よからう。それほど贋作に自信があるのなら、採点をしてやろう」

相当の距離が空き、無数の宝具が飛び交っている中でも、恐るべき鑑識眼はひと目で

異様な剣の詳細を見抜いたのか。ふん、と鼻で笑ったギルガメツシユは、間断なく数十の宝具を撃ち続ける傍ら、黄金の空間から一振りの刃を取り出す。それは、アーチャーが投影したものによく酷似した形をしていた。

「偽・螺旋剣<sup>カランドボルグII</sup>——！」

先制攻撃とばかりに、捻れた矢を撃ち放つアーチャー。膨大な魔力を秘めた螺旋が、空間を引き裂きながら突き進む。対人に用いるには過剰すぎる威力は、本来軍勢に対して向けられるもの。

飛来する一矢は、人体に当たれば跡形もなく消滅させるに違いない。しかし、盾を取り出すでもなく矢をぶつけるでもなく、ギルガメツシユは手にした剣を大地に突き刺し――。

「——見るがいい。そして思い知れ。これが真作の重みというものだ」

矢が炸裂する、その直前。莫大なエネルギーが、噴火のように大地を破壊し尽くした。地面が割れるどころか岩盤がめくれ上がり、土砂と瓦礫と魔力が空間そのものを蹂躪していく。地震と津波が混ざったような天変地異の力に、軍勢をも吹き飛ばす一撃はあつさり押し潰された。それどころか、巨大な広間の端々に至るまで亀裂が広がり、次々と大地が爆裂して岩石を散弾として飛び散らせていく。それは、矢を打ち放ったアーチャーの場所も例外ではない。

「なに——!?!」

驚愕した弓兵が、恥も外聞もなく弓を捨てて疾駆する。大断層が隆起し、あるいは奈落へ続く地割れを生む猛威の中では、人もサーヴァントもさしたる違いはない。防御など考えるまでもない、全力で逃げ回らねば瞬時に押し潰されてしまう。

これほどの攻撃範囲、これほどの凄まじい破壊力は、対城ないし対地攻撃に用いられる地形破壊武器に等しい。大地にできた罅割れから、虹色の魔力が吹き出しているのが、より一層アーチャーに脅威を覚えさせた。

アーチャーが放った武器、『虹霓剣』の原典。丘を三つ切り裂いたという伝承の真実がここにある。この魔剣は対人ではなく、敵ごと大地を打ち砕く対地上宝具なのだ。洞窟ごと崩落するのではないかという一撃でさえ全力ではなく、最大火力で放てばこの円蔵山ごと更地に変える埒外の威力を秘めている。

「Unknown to Death, Nor known to Life」  
 だが、好機。

岩石の間を縫うように走りながら、アーチャーは意識を切り替えた。圧倒的な大破壊力は彼を窮地に陥らせたが、空間が土砂や飛礫で埋め尽くされている現状、ギルガメツシユの宝具投射は意味をなさない。視界も遮られているが、おかげでギルガメツシユがアーチャーの現在位置を把握することは不可能だろう。それに対し、アーチャーは破壊

の基点から動いていないであろう英雄王に奇襲を仕掛けることが可能だ。

走り、跳び、時には断層の側面を走り抜ける。すると弓兵の視界に、仁王立ちする男の後ろ姿が現れた。計算通り、ギルガメツシユの後方を取ることに成功。

「<sup>彼</sup>Have <sup>者</sup>with <sup>は</sup>stood <sup>に</sup> <sup>独</sup>pain <sup>り</sup>to <sup>劍</sup>create <sup>の</sup>many <sup>丘</sup>weapons<sup>で</sup>」

縦横無尽に岩石を回避しつつ、偽・螺旋劍を再投影。弓兵はこのまま相手が気づかぬうちに狙撃し、勝利を掴む心算だった。狙撃手とは、元より相手の意識外から狙い撃つもの。

隆起し、砕け、割れ続ける大地。二人の間を一瞬、飛んできた巨岩が遮断する。障害物が飛んでいき、再び相手が見えるようになった刹那——笑うギルガメツシユの視線に、アーチャーが凍りついた。

読まれていた。

「闇の中で敵の背を討つのは暗殺者の常道。貴様の考えなど読めるはずがないとでも思ったか、たわけ」

その硬直が、致命的な遅れを生んだ。

一矢を放つより早く、英雄王が白銀に煌めく劍を振るう。直後、岩石さえ溶かし尽して放たれる、膨大な熱量！

『転輪する勝利の剣』か——！』

武器の正体を解析したアーチャーが戦慄する。ギルガメッシュが握った武器は、かの太陽の騎士が振るつたとされるもう一振りの聖剣。『虹霓剣』に源流を持つとも、縁があるとも言われている宝具である。

原典であるのか、あるいは源流のどこかにあたる類似宝具であるのかは定かではないが、日輪を封じたとされるその火力は本物だった。灼熱の閃光は未だ乱れる大地ごと空間を焼灼し、アーチャーへ向けて迫っている。コンマ一秒で対策を取らねば、瞬時に消し炭になるだろう。

弓兵の思考が加速。回避は不可能。攻性宝具の真名開放は間に合わない。決断は一瞬、今ある最強の守りで耐えきる他はない——！

Yet, those hands will never hold anything.

咲き乱れる炎の華。迫る熱線に重ねるように、アーチャーが大きく右手を突き出す。

『熾天覆う七つの円環！』

七つの花弁が、聖剣の一閃と激突した。

かつてトロイア戦争で猛威を振るつた、神の一撃に比する投槍さえ防ぎきつたアイアスの盾。投擲宝具に対しては無類の防御性能を発揮する宝具ではあるが、太陽表面と同



等の熱量を前に、花卉のうち三枚がたちまちのうちに蒸発した。

残りの盾に魔力を込め、アーチャーは全力で灼熱に抗う。現代の英霊であるため保有魔力に乏しい彼だが、聖杯からの供給によってその弱点は解消されている。膨大な魔力の下支えがなければ、残りの盾ごととうに溶けてしまつていたことだろう。

また一枚、花卉が炎に消えていく。残りは三枚だが、聖剣の攻勢にも終わりが見えてきた。これならば凌ぎきつて切り返せると、アーチャーが次の手を考え始めた瞬間――

――爆裂。

「ぐ、お……ッ!?!」

爆風と衝撃波に、アーチャーの体がよろめく。その一撃は、まったく予想しない背後からのものだった。サーヴァントでなければ、これだけで命を落としていたに違いない。

吹き飛ばされなかったのは、盾を支えるために両足に全力を込めていたから。それでも痛みと驚きで集中が切れ、残り三枚の花弁のうち二枚が炎に負けて消滅した。血相を変えたアーチャーが、焦げて血を流す体など後回しと、有り余る魔力を最後の一枚に集中させる……!

「粉塵爆発とはな。英雄王め、どこでそんな知識を得た」

空气中に可燃性の粉塵が漂い、それが一定濃度になった時、引火すると爆発を起こす現象。工場や炭鉱などでたまに発生し、ニュースでも報じられることがある。

ただの土煙では発生しないはずだが、『虹霓剣』<sup>カラドボルグ</sup>が挟り返した大地には、石炭か金属片でも含まれていたのか。そこに『転輪する勝利の剣』<sup>テイルン</sup>の炎が着火したことで粉塵爆発が起き、盾で守られていない後方から衝撃が抜けてきたのだ。

熱線と爆炎の二重奏。だがそれでも、最後の一枚は抜かせない。花卉に罅が入り、魔術回路の酷使で弓兵の右腕が軋んでいたが、ひたすら粘りに粘る。そうして、破滅の波を防ぎきり……炎と盾が同時に消え去った瞬間、アーチャーは煙を上げる大地に片膝をついた。

「盾を敷いて防いだか。人形の分際で生き汚いではないか、雑種」

各所が焦げ、血を流し、満身創痍といった様子の弓兵。対する英雄王は、滅茶苦茶になった大地の中央で、聖剣を握ったまま唾っている。どちらが優勢かなど語るまでもなく、自然災害に等しい宝具を受けた洞穴は、崩壊していないのが奇跡的だった。

「どうした贗作者<sup>フェイカー</sup>。自慢の贗作は品切れか？ 隠し玉がないのであれば、執着する無念ごとそこで灰になるがいい」

人ならざる赤い瞳。口では笑っていても、蛇のようなその目だけは笑っていない。王者が放つ死の宣告は、熱の残滓が息吹くこの空間にあって尚絶対零度の冷たさを有して

いた。

勝ち目がない。それは最初から分かっていたことだ。アーチャーには豊富な戦術経験と現代戦の知識があるが、そんなものがなくても、英霊である時点でこの結果は見えている。あらゆる英霊の頂点たる英雄王に、並のサーヴァントでは及ぶべくもない。

では、何故挑んだのか。それは呪いに自我を飲まれつつも、消えない想いがあつたからだ。なんとしてもあの王を打倒し、少女を助けねばならないと、最後の心が叫んでいる。ここで諦めたが最後、エ■■■■シ■■ウの存在価値は完全に消え失せると。

しかし、未だ冴え渡る戦術家としての知見は別にある。そのためにアーチャーはギルガメツシユの宝具攻撃に耐え、手を変え品を変えて彼の王の首を狙ってみせた。

その目的は、勝利ではなく時間稼ぎ。戦いを演じることによって、男は千金にも勝る時間を稼ぎきった。通常空間で勝てないことを知りながら、ギリギリで死の淵を乗り越えきったのは——アーチャーは、通常空間以外であれば英雄王に勝てるからだ。

「——あるとも。隠し玉はある。お望みと言うなら、我が錬鉄の秘奥、その眼に焼き付けていくといい」

立ち上がる。

傷だらけでも、体中が軋んでいても、関係ないと男は立ち上がった。連動するように、黒い呪いが霧のように溢れ、彼の体を取り囲んで傷ついた部分を強引に修復していく。

呪詛に染まった膨大な魔力によって、靈基を治療するという荒業。それだけでも耐え難い痛みを感じるはずだが、男は微動だにしない。灰色を越え、白くなつた瞳には、決意の炎が燃えていた。

「ほう——」

笑みが消える。

英雄王の目の光が変わつた。滑稽な弱者を嘲弄する笑みは既がない。アーチャーの瞳を見たギルガメッシュは、宝物庫へ聖剣を放り投げると、その視線を鋭くした。この敵は侮れない何かを秘めていると、星の秘奥さえ見通す目は確信しているのだ。

「偽の宝具を生み出すことだけが私の特技——違うな。私の本質、英霊としての宝具は別にある」

中空に右手を翳すアーチャー。酷使し、血を吹き出していた腕は、聖杯の力で既に修復されていた。

大半の英霊がそうであるのと同様、彼もまた切り札の行使には莫大な魔力を必要とする。バックアップがある現状、それを躊躇する理由はないが、彼は今の今までカードを切ろうとしなかった。

その理由は詠唱時間。単純な真名解放とは異なり、本質的には大魔術であるそれは、長い詠唱を必要とする。それと悟られないようにしながら、裏で時間を稼いでいた理由

はそこだ。英雄王の宝具を凌ぎ、合間合間に攻め手の武器を投影していたせいで、処理能力の圧迫により本来以上の時間を要したが——今ここに、全ての準備が整った。

膨大な魔力が溢れ出す。炎の如き奔流が、アーチャーを中心に迸り——。

「UNLIMITED BLADE WORKS」  
 So as I pray,

——そして、世界が書き換えられた。

果てのない荒野。血を思わせる赤い夕暮れの中、墓標のように剣が立ち並んでいる。空には歯車が轟めき、巨人めいた存在感を放つ。

崩落寸前だった地下洞窟は、まったく別の空間……いや、別の世界に変わっていた。名剣名刀から無銘の鈍らまで、無数の剣が乱立する剣の丘。この世界の住人は、鈍色に輝く剣たちだけ。

固有結界『無限の剣製』。それが、英霊エミヤの宝具だった。

本来は悪魔や精霊が持つとされる、現実を侵食する異能。術者の心象風景をカタチにし、一つの法則を持った世界を創造する大禁呪。魔法に最も近いとされる、魔術師が到達する頂点の一つである。

剣を形成する要素で満たされたこの世界は、アーチャーが視認した武器を複製して保存する機能を持つ。彼が投影した武器は、全てここから持ち出したものに過ぎず、厳密

な投影魔術の原則とは異なっている。

聖杯から強制された技能スキルによってか、それとも最後に残った願いのためか。魂を汚染され、霊基を歪められて尚、アーチャーはこの世界の展開を可能とした。世界の奴隷と化し、聖杯の人形となっても消えぬ意志を示すように、空に浮く歯車がギシギシと音を立てている。

「……なるほど。前回はあの男、そして此度は貴様が固有結界の使い手というわけか。万象の王たる我の前で、別の世界を作り出そうなど笑わせてくれる。

それで？ どこを見ても贗作ばかりではないか。この貧相な蔵で貴様に何ができる」  
不快げに表情を歪めたギルガメッシュ。右手を掲げた彼に従い、空間から宝具が出現したところで——それが放たれるより早く、激突した刃に宝具が押し戻された。

「……!？」

「そう驚くことはない。私にできるのは、ちよつとした手品だけだ。ご理解いただけただかな」

自分だけの世界を展開したことで、人格の一部を取り戻したのか。ニヒルに笑うアーチャーが、驚愕する英雄王に嘯いた。

今までのように、射出された宝具を投影して相殺したのではない。宝物庫から鋒が現れた瞬間、どこからか飛んできた剣が、頭を押さえるように宝具を弾き飛ばしたのだ。

その形状は、宝物庫から現れた武器とまったく同じ。

視ただけで武器を複製し、貯蔵する——それが、この固有結界の本質だ。通常空間のように投影によって召喚するのとは違い、術者であるアーチャーが視認した瞬間、この世界にはその武器が用意されている。宝物庫からの召喚・発射というプロセスを経るゲイト・オブ・バビロン『王の財宝』よりも、固有結界が複製宝具を準備する方が一手早いのだ。

つまり。先ほどまでとは逆に、アーチャーはギルガメッシュの宝具を相殺しながら、常に先手を取り続けることが可能になる。何も相手の宝具召喚に合わせなくても、既に展開されている武器を投射すればいいだけなのだから。

「なに、お代は自慢の宝具で十分だ。披露してくればその分、私は相応しいサービスを提供しよう。錬鉄の極地、心ゆくまでご堪能あれ」

アーチャーの背後に、無数の剣たちが浮かび上がる。剣の丘から引き抜かれたそれらは、その全てが贗作。しかしながら、そこに宿る力は全てが本物だった。

立ち尽くすギルガメッシュと、偽物の武器たちを従えるアーチャー。その様子は、先ほどまでとはまるで真逆。驚愕から憤怒へと表情を変えていく英雄王に、贗作の主は口の端を吊り上げ——。

「行くぞ英雄王——武器の貯蔵は十分か」

凜猛に笑う剣製の英霊。戦場の形勢は、ここに逆転した。

\*\*\*

奥へ進む。

生暖かい風が、徐々に強くなってきた。この気持ちの悪い息吹の元凶へ近づいていることの証拠だ。

もうどれぐらい進んだだろうか。先ほどまで後ろで響いていた剣戟の音も、すっかり聞こえなくなった。ギルガメッシュは、果たしてあの男に勝利できただろうか——いや、あのサーヴァントが負けるはずがない。

どんな強敵が相手でも、どんな窮地に立たされても、ギルガメッシュは必ず壁を乗り越えてきた。俺のサーヴァントは最強の英雄王であり、そうである以上は案じる必要などどこにもない。

俺の役割は一つだけ。あいつが追いついてきて、いつもの憎まれ口を叩いてくる前に。全ての敵を打ち倒し、桜とイリヤを助けること。

「……出口か？」

その時、ふっと空間が開けた。

先ほどの広間とはまた違う、更に大きく開けた空間。天井は高く、遙か上まで続いて



いる。ビルがまるつと入りそうなほどの高さは、山をくり抜いているかのよう。

否、比喩ではなく事実として、ここは山をくり抜いて作られた空間なのだろう。元からあったものを利用したのか、人の手を加えたもののかは定かではないが、その目的はただ一つ。

ちようど正面。この空間の中央、祭壇のような崖に設けられた巨大なオブジェ。黒々と脈打ち、おぞましい存在感を放つそれこそが。

「大聖杯——」

どくん、と何かが脈打った気がした。

気のせいかな。いや、直感は違うと言っている。この空間に満ち満ちる生命力、生まれようとする意志を持つモノがここにいる。この聖杯戦争を狂わせ、多くの人間を巻き込んだ諸悪の根源。

この世全ての悪。アレを滅ぼすことこそが、俺たちの最終目的だ。

だがその前に、桜とイリヤを救出しなくては。洞穴はここで行き止まりのようだし、敵は二人を利用して聖杯戦争を完遂させる気なのだから、この空間のどこかにいなくてはおかしい。目を皿のようにして、周囲を見渡すと——。

「っ、いた……！」

洞窟のあちこちにある、高台めいた岩場。そのうちの一つに、二人の少女が横たわっ

ているのを発見した。

見違えるはずもない。桜とイリヤだ。二人の安否を確かめようと、一も二もなく駆け寄ろうとして、そこで。

「——待つていたぞ、衛宮士郎。そろそろ来ると思っていた」

岩場の前。祝福のように、大聖杯の仄暗い光を受けて。その男は、悠然とそこに立っていた。

漆黒の僧衣に包まれた長身。鍛え上げられた肉体と、厳めしい風貌。胸元に輝く十字架は、聖職者としての荘厳さを与えているが、この場に於いてそれは一種の威圧にも等しかった。

「言峰、綺礼——」

「ふむ。ここに来たのはおまえだけか。首尾通り、アーチャーはギルガメッシュを抑えているようだな」

今日の天気でも語るような口調で、淡々と語る黒衣の神父。その口ぶりがあまりにも平然としているものだから、束の間敵意を忘れてしまった。

顔をヤツに向けたまま、視線だけを左右に走らせる。サーヴァントを除いて、予測される敵は二名。言峰綺礼の他に、あの虫を操っていたマキリの老翁がいるはずだが――

「ああ、案ずることはない。間桐の老人ならば既に始末した。アレがこの場に現れることはあるまい。」

正真正銘——この空間には、私とおまえしかいないということだ」

どういふことだ。言峰と臓硯は、手を組んでいたはずではなかったか。それを裏切つたということか……？

神父の言葉に嘘はない。否、元より嘘を付く理由がない。代行者だつたという言峰と、数百年を生きる臓硯は、単体でも戦闘能力に於いて俺より優れているだろう。まどろっこしい嘘など吐かずとも、二人がかりで攻めてくれればいいだけの話だ。

教会の監督役という立場を裏切り、後見人であつた遠坂を裏切り、今度は臓硯まで裏切つた。この神父は、いったい何を考へている。十年前の戦いにも挑んだという男は、いったい何を目的としているのか。まさか本当に、世界を壊すことが願いだとも言うのか。

「——言峰。俺にはおまえがわからない。何もかもを裏切つて、おまえは結局何がしたいんだ。おまえは、そんなに聖杯が欲しかつたのか」

「いいや。私は聖杯に用はない。おまえの父親のように、聖杯に託す願いなど端から持ち合わせていない」

「……なに？」

聞き捨てならない言葉が出てきた。この男は、何故切嗣のことを知っている。こっちはこの神父のことを何も知らないのに、どうしてヤツは、訳知り顔で親父の願いを語るのか。

「おまえが、切嗣の何を知ってるっていうんだ」

「知っているとも。ヤツのことはよく知っている。十年前、私はギルガメツシユのマスターであり——セイバーのマスターであった衛宮切嗣と、聖杯を競った仲なのだから」  
そう言うと、言峰は体の後ろで手を組み、聳える大聖杯に目を向けた。その様子は、教会にいた時と何も変わらない、まるで信徒に向けて説教をするが如き平然さだった。この死地にあつても、この男が余裕を崩すことはないのか——いや。この死地こそが、言峰綺礼にとっての日常なのだろう。

「衛宮切嗣は、『正義の味方』とやらを目指していた。聖杯を求めたのは、恒久的世界平和を実現するためだという。全くもって、愚かしい冗談だ」

『……ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ』  
月の綺麗な夜を思い出す。

抜け殻のような姿で、ぼんやりとそう呟いた切嗣。その姿を、今でも鮮明に思い出せる。言峰の語りと、切嗣の思い出——そして、ギルガメツシユやセイバーから語られた魔術師殺しの姿、第四次聖杯戦争の顛末が、一つの像を結ぶ。

やっぱりそうだ。切嗣は、正義の味方になることを諦めてなんかいなかったのだ。だから銃を取り、命を賭けて聖杯戦争に臨んだのだろう。聖杯の力で、この世に正義をもたらすために。

……だけど、その理想は裏切られた。聖杯は呪いに汚染され、正しく願いを叶える機能をとうに失っていた。真実を知った切嗣は、絶望したに違いない。どうして親父がそんな風になってしまったのか、ようやく確証が持てた。

「……そうだな。切嗣が聖杯に願おうとしていたことは、確かに間違ってたのかもしれない。『正義の味方』を目指すのなら、聖杯に継るべきじゃなかったんだ」

切嗣の理想は、決して間違つたものではなかった。ただ、その実現手段を誤つてしまつただけ。

俺の言葉のどこかに驚いたのか、言峰が怪訝そうな顔をする。まるで、俺が切嗣を——『正義の味方』を否定するのはありえない、とでも言うように。

神父と初めて会つた日、聖杯戦争について触れた夜を思い出す。初対面のはずの男が、俺の願いをどうして知つた風に語るのかが不気味だったものだが、切嗣の願いを知っていたならそれも腑に落ちる。言峰はきつと、俺は切嗣の理想を継承する者だと最初から確信していたのだろう。

その読みは正しい。衛宮士郎が目指すものは『正義の味方』だ。ただその定義は、衛

宮切嗣が目指したものとも、赤い弓兵が求めたものとも異なるだけ。何故なら彼らは、理想へ至るための道を間違えていたのだから。

「だけど、切嗣は正しいことをした。十年前、親父が聖杯を壊してなければ、あの大火災よりももつと酷いことが起こってたはずだ。親父は間違えていたのかもしれないけど、最後は正しい道を選んだんだ」

そう。それだけは、絶対に間違っていないこと。切嗣が最後にその道を選んだから、衛宮士郎は今ここで立つていられる。事實は、それで十分だ。

「言峰。切嗣を否定するって言うなら、願いを持たないおまえにはいったい何があるっていうんだ」

「——何も無い」

ここで初めて。どこか遠くを見ていた言峰が、はつきりと俺の方を向いた。

その目に、思わず気圧される。男の瞳の中央にあるのは、虚無に等しい穴だった。そこを取り巻くように、怒りと苦悩の色が見え隠れする。俺は言峰と、ここに来てようやく対峙したのだが——こんな目をした人間とは、ただの一度も会ったことがない。

切嗣のように、理想を失った抜け殻ではない。赤い弓兵のように、理想に絶望したのでもない。何かを後天的に失ったのではなく、ただただ虚無がある。そういう、真つ暗に沈んだ瞳。

「私には、おまえたちが尊ぶ理想、何を犠牲にしても叶えたい願いなど存在しない。いや——それ以前に。犠牲を払うに値する『大切なもの』、おまえたちの呼ぶ幸福とやらが、私の裡には存在しなかった」

——それは、一体どれほどの空虚か。

「幼い頃から、私にはどのような概念も熱を与えなかった。目的もなく、理念もなく、幸福もなく、快樂もなく、安息もない。私には真実、何もなかったのだ。

故に、私は神の愛に縋った。人の世は私に福音を与えられない。しかし主の導きを以てすれば、世の価値観のどれ一つとして共感できぬ魂であつても、救われる道があると私は信じた。

——それが無意味だと解るまで、私は二十余年を無駄にした」

疑問があつた。

この男はガタイがいい割に、どうにもどこか胡散臭い。どこかで武器商人をやつていると言われれば信じてしまいそうなほど、初対面の時から、こいつは絶対に俺とは合わないやつだという確信があつた。神父様という文字面から想像される姿とはまるで違っている。

しかしながら、それでいて、この男には神父という役柄が似合ひすぎているのだ。修身のための苦行を重ね、何年にも亘つて神学を修め、聖職者として研鑽を積んだという

雰囲気。容姿ではなく、より奥底から滲み出ているそれは、言峰綺礼が真摯に己を鍛え抜いたことの証拠。その相反する性質が、この人物への理解を容易ならざるものになっている。

かつての言峰は、本当に敬虔な聖職者だったのだろう。ではどこで、この神父は道を違えたのか。

「十年前、ふとした縁から聖杯戦争に関わることとなった。その段に至っても、私は自らの魂の在り処を見つけられずにいた。聖杯戦争の中に道が見つかるかもしれないと、師を切り捨ててまで彷徨ったが、結局蒙を啓かれたのは最後の夜——衛宮切嗣が聖杯を破壊し、こぼれ落ちた泥が町を焼き払った折のことだ」

終わりにして、始まりの夜。

五百余名に亘る焼死者を出し、甚大な経済的損失を与えた、戦後最悪の大火災。聖杯という呪いによって引き起こされた災害に、衛宮士郎は巻き込まれ、その時それまでの人生のほとんどを焼き尽くされた。

言峰が最後の戦いまで生き残ったということは、当然そこにも深い関わりがある。切嗣と戦い、敗北して一度殺された男は、まさに災害の中心点にいたはずだ。そこでこの男は、一体何を目にしたのか。

「セイバーは消滅し、衛宮切嗣は聖杯を放棄した。最後に残ったのはアーチャーと、その



マスターである私だけ。聖杯が勝者の願望を聞き届けるといっているのであれば——あの光景こそが、私の求めていたものだった」

「な——」

両手を広げ、昂揚したように語る言峰。ヤツの目に映るあの夜の炎に、言葉を失う。地上に現出した地獄を思い出して——この男は、愉快で仕方がないというように笑っているのだ。

終わらない阿鼻叫喚。炎に卷かれた人の絶叫。悶え苦しみ、死んでいく人の断末魔。炭化し、捻じくれた遺体。ゴミのように消されていく無数の命。かつてヒトであった肉体の数々。

そんな酸鼻を極めた煉獄を、この男は。

「あれほど鮮やかな喜びを知ったのは、生まれて初めてだった。この時私は、真の意味で愉悅の感情を知ることが叶ったのだ。

まったく、それまでの人生のなんと無駄であったことか！ 善なることこそ尊いと、聖なるものこそ美しいと、そんな神の道を信じていたが故に、私はいつになっても満たされなかったのだ。

神の愛とは真逆の道、絶望と苦痛、邪悪と惨劇こそ、唯一私が生を実感できる世界だった。……あの瞬間、酒を飲めなかったことだけが唯一の心残りだな」

「……………」

理解する。

この男は、衛宮士郎の敵——いや、人類の敵だ。ここで殺しておかなければならない。魔術的な目的のために一般人を犠牲にする魔術師の方が、まだ理解できる。だが、人が苦しむ光景こそが楽しいと、人の死こそが愉快であると、心底から思えるばかりかそれを実現してしまえる人間。大量殺人者であり、精神病患者。あの地獄をまた顕現させようというのなら、言峰綺礼を生かしておいてはならない。

「……それで。あの夜をもう一度見たいからって、おまえは聖杯を獲りに来たのか」

「いいや、違う。あれは単なる『答え』に過ぎない。言峰綺礼は、邪悪でこそ満たされる人間である——その解答が真実であるならば、何故神の摂理に反する人間がこうして存在している？ 悪魔によってそうなったのではなく、生まれながらにして『悪』である存在が。

私のような怪異を生み出した方程式、初めから悪として生まれたモノが存在する意味が、必ずどこかにあるはずだ。そう……この世全ての悪のように」

どくん、と。大聖杯が、応えた音がした。

「誰にも望まれなかつたモノが生まれ落ちる意味。最初から悪であつたモノがこの世に存在する価値。そして——悪として生まれ落ちたモノが、悪として生き続けることに、

果たして罪があるのかどうか。悪である本人は、果たして何を感じるのか。

私はそれが知りたい。私の望みは、聖杯に願うものではなく、聖杯から生まれ落ちるモノによつてこそ叶えられる」

「馬鹿な……まさかおまえ、この世<sup>リ・マ</sup>全ての悪を召喚しようつていうのか!? そいつをこの世に呼び出すこと自体が——」

「間違っている、と? 何を言う。生まれてもいないモノに罪は問えない。悪であることが確定しているとしても、まだ罪を犯す前の無垢なる赤子は守つてやるべきではないかな」

手を広げたままの言峰が、黒い聖杯を背にする。それはまるで、この世<sup>リ・マ</sup>全ての悪を庇うような仕草だった。

ヤツの言うことは詭弁だ。生まれれば必ず死を撒き散らす存在を、捨て置くことこそが罪だろう。言峰個人の欲望を充足させるために、呪いが溢れ出ることを許し、何万何億という人間の命が奪われるのを見過ごせというのか。

だが、言峰の目には、罪悪感や後ろめたさのようなものは一切感じられない。自分には後悔も間違いもないという、この選択こそが唯一正しいのだという、そんな力の宿った瞳。

「……そうか。おまえは、俺とは逆なんだな。」

俺はこの世全ての悪を許せない。そいつは存在しているだけで、みんなの命を脅かす悪だ。俺はみんなのために——いや。俺自身が許せないから、そいつを始末する。だけど、おまえは」

「私は私の目的のために、この世全ての悪を誕生させる。その結果、幾多数多の命が失われようと、私にとっては福音となる。

自身の欲のために、生まれ出ずる命を奪い、その果てに人々が救われるか。

自身の欲のために、生まれ出ずる命を守り、その果てに人々が殺されるか。

おまえと私は、つまるところ、対極でありながら同質の願望を抱いているということだ」

「守りたいものと殺したいものが逆なだけで、根は同じってわけか。そのためにおまえは十年前から動き続けて、そのために俺は十年前から戦い続けた。そのただけに生きてきたんだ、今更譲る気なんかないよな」

言峰綺礼。この男は、やはり俺の敵だった。おそらくは、十年前からずっと。

自らの望みを叶えるために、遠坂の父さんを殺し、聖杯で街を焼き、桜とイリヤを傷つけ、遠坂を殺しかけ、世界を呪いで満たそうとしている悪党。衛宮士郎が正義の味方を目指すのであれば、裁かれぬ理不尽な暴力を許せないのであれば、民間人を傷つける魔術師を咎めるのであれば——是非もない。

ゆつくりと、ホルスターから銃を抜く。切嗣が愛用した、キャリコM950。対人制圧用としては、十分すぎる力を秘めた短機関銃。サブマシンガン

「ああ、よくわかった。なら、これ以上の問答に意味はない。

聖杯は叩き壊す。桜とイリヤは返してもらおう。おまえが、人間に危害を加える魔術師だつていうなら——」

——この場で死んでもらうだけだ。

銃口を向けて、冷たく告げる。すると、薄く笑った言峰は。

「十年ぶりだな、魔術師殺し。メイガス・マーダー。結局、蛙の子は蛙というわけか——いいだろう。十年前の雪辱を、晴らしておくのも悪くない。

だが、衛宮切嗣とおまえの間には、未だ以て大きな開きがある。何かで掛け算でもない限り、埋められる数値ではあるまい。

——命を賭ける。あるいは、この身に届くかもしれない——！  
筋肉を漲らせ、己の敵に躍りかかった——！

\*\*\*

ぼんやりと、空を見上げていた。

あれほどの激戦が嘘のように、周囲は静まり返っている。輝く月だけが、煌々と彼女を照らしていた。

膨大な魔力と再生能力のおかげで、瀕死の重傷はほとんど癒えている。彼女を倒した英雄王も、とどめを刺すことなくこの場を去った以上、動こうと思えば動ける状況。それでも彼女が横たわったままなのは、肉体的な問題ではなく、精神的なエネルギーが枯渇していたことであつた。

『私は、何をすれば——』

冬の風が頬を撫でる中、何度目になるかわからない問いを、彼女は自分自身に繰り返す。彼女にはもう、ここから動くべき理由が、動いたところで何をすればいいのかという目的が存在していなかった。

滅びゆく故国をどうにか救おうと足掻き続け、炎と血に消えゆく様を最後に見た。それでも諦められず、聖杯という奇跡に縋つたが、それは何の意味もないことを思い知らされた。王として、騎士として、ただ一つの目的のため走り続けてきた彼女は——目指すべき星が消えた今、歩む道を見失ってしまったのだ。

誰と戦えばいい？ どこを目指せばいい？ 握つたままの聖剣も、幾度となく身を救つた直感も、何の導きも示してくれない。どこへ向かえばいいのかさえ分からないのだから、起き上がることなどできようはずもなかった。

『彼なら、どのような選択をするのでしょうか』

生前見知った者たちは、敵にしろ味方にしろ、彼女という王や国を目的の中心にしている。それが意味のないものとなった現状、彼らの姿は問題を解決するサンプルとはなれない。

ならば、と彼女が思い浮かべたのは、自分を打ち倒した黄金の王。一人の戦士として、彼に再戦を挑みたいという気持ちがないではなかったが、彼女の冷静な部分がそれは無意味だと断じている。性能や武器の違いではなく、人として、王として彼を上回らねば、幾度挑んだところで勝てる道理がない。そも、生きる目的さえ見失った今の彼女が、どうして剣を執れるというのか。

彼の王であれば、このように悩むことなどあるまい。為政者としての役割を生前に終えており、願っても後悔も持たぬという彼は、しかし一切迷い悩む様子を見せたことはなかった。自分が直面している状況など、彼はとうの昔に打破しているのだらう。

『王としての勤めは終わった。サーヴァントとして召喚された目的は、意味のないものだった。ならば、私がここに存在する意味とは——』

「——あら。ちよつと見ない間に、ずいぶんいい女になったわね、セイバー」

聞き覚えのある声に、ふと顔を上げる。そこに立っていた少女の姿を認め、彼女は黄金の瞳を僅かに見開いた。

遠坂凜。セイバーを召喚した魔術師にして、マスターであった少女。そして——黒い影により主従契約が破棄されて以後は、彼女にとつては敵対者となった人物でもある。事実、アインツベルンの森の激闘では、セイバーは戦っていたバーサーカーもろとも彼女を殺傷する選択を厭わなかった。

不可抗力とはいえ、鞍替えをしたばかりか、かつての主の命を狙うなど騎士の風上にも置けぬ振る舞いである。悲願という呪いから解放たれ、元の自分を取り戻したセイバーは、後ろめたさのあまり凜を見ることができずに目を逸らしてしまった。

「つれないこと。マスターじゃなくなつたわたしはもう敵だから、話す必要もないってことかしら」

「……いいえ、そんなつもりは毛頭ない。ただ私は——あなたに合わせる顔がないのです」

寝転がったままでは無礼にも程があると、その場から立ち上がる。靈基ごと肉体情報を書き換えられたことで大人の女性に変貌したセイバーは、身長差で凜を見下ろすような形になったが、それすら申し訳が立たないと感じてしまう。

「私欲のために聖杯を求め、あなたに剣を向けた裏切り者。それが、私というサーヴァントです。今の私に、あなたと話す資格はない」

「ふうん。それなら、どうしてこんなところでのんびりしているのかしら。このまま



じゃ、聖杯は臓硯か綺札に取られるか、士郎に壊されるかのどっちかよ。聖杯がなくなったら、あなたの願いは叶わなくなると思うけど」

「——それは」

『いつか蘇る王』、アーサー王。あなたの願いは、滅びの結末を変えることでしよう。母国を救いに行くんじゃないの？」

凜の問いに、セイバーは思わずたじろいだ。召喚されて以降、彼女はギルガメッシュ以外に願いを語ったことはない。英雄王は所構わず言いふらすような性質ではないし、なぜかつてのマスターが、聖杯にかける彼女の願いを知っているのか。

「マスターとサーヴァントは、契約の経路パスを通して、相手の過去を夢に見ることがあるの。覗き見したみたいで申し訳ないけど……あなたのアーサー王としての過去を、わたしは見せてもらった。だからセイバーがどうして聖杯を求めているのか、ちよつとはわかったつもり。

こういう話、本当はもつと早くしておくべきだったんでしようけどね。剣を向けられたことに思うところがないわけじゃないけど、サーヴァントの願いも知らうとせずに戦わせてたなんて、わたしもマスターとして落ち度があったわ。

ま、過去のことは置いておきましょう。それより未来のことが先よ。今のあなたはどうか、セイバー？ まだ聖杯を求めて、臓硯の命令で戦うつもり？」

「……いいえ。私のマスターは桜でした。あの老人の命令に従っていたのは、桜を盾にされたことと——凜の言う通り、聖杯を手に入れるには、その方が効率が良かったためです。」

ですが、もう私に聖杯に託す願いはない。先の戦いで契約破棄の宝具でも使われたのか、もうこの身に契約の縛りはない。今の私に、剣を取る理由は残っていないのです」  
今度は凜の方が怪訝な顔になった。騎士としての矜持を曲げ、間接的とはいえ剣を向けられるほど聖杯を求めていたセイバーが、もう願いはないと言い放ったのだ。妙な顔をされるのは当然だろうと、セイバーは内心苦笑する。

「あなたが今口にした通りです、凜。『過去のことより、未来のこと』。私は過去に執着する余り、私の時代から紡がれたこの時代という未来を見ていなかった。不覚にも、そのことを他の王に教えられました。私の治世は誤りだったのかもしれませんが、その果てにこの時代があるのなら、全てが失敗だったというわけでもないのでしょうか」

「そう。それじゃ、もうサーヴァントとして戦う理由はないってわけね。あの金ピカがとどめを刺してないってことは、戦うことにはならないだろうと思っただけだよ……」

「……ま、いいわ。わたしは今から、綺礼と臓硯を叩き潰して、桜とイリヤを取り戻しに行く。あなたはどうするの、セイバー」

「……私は」

答えられない。理想も命令も願いも消えた今、セイバーには行動の指針が存在しない。何がしたいかと問われても、答えなど出ようはずがなかった。

言い淀む彼女を見て、一体何を感じたのか。考え込む仕草を見せた後、小さく頷いた凜は、セイバーへ向けて右手を差し出してきた。

「凜？」

「敵に回らないって言うなら、ちよつと手を貸してくれないかしら。もうわたしはマスターじゃないから、命令はできないけどね。」

士郎とアーチャーは、もう戦ってるのかもしれないけど……聖杯の中にいるヤツは、とんでもない怪物よ。あんなのが出てきた日には、最悪この世界が崩壊するわ。アレを止めるために、猫の手でも借りたいぐらい」

セイバーの手が強張る。マスターを裏切った不忠者として、今の彼女はどんな罵声でも受け止める覚悟だった。だというのに、凜は気にした素振りを見せないどころか、かつてのように再びセイバーに手を差し伸べたのだ。

震える手が、自然と胸元をpushさえつける。生前裏切られ続けてきたセイバーは、その痛みも重みも十分に知っている。それでも尚声をかけてくれたことが彼女には嬉しく、そしてそれ以上にひどい申し訳無さと罪悪感があった。

自分などに、今更凛の手を取る資格があるのか。どの面を下げて、彼女に手を貸そうと言えるのか。契約に縛られていたとはいえ、凛や士郎を巻き込んでもいいと宝具を使う決断をしたのは自分だ。そんな愚か者が、合わせる顔などあるはずがない。

「……無理に、とは言えない。あなたはもう、これ以上ないぐらい戦ってきたんだもの。わたしにできるのは、こうして手を差し出すことだけ。

わたし、二十年も生きていないし、現代いはあなたの時代とは全然違う。だから、セイバーが背負ってきたことがわかるなんて、口が裂けても言えない。それでも、自分があなたの立場だったら——もしかしたら、同じことをしたかもしれない。

日本には、お互い様っていう言葉があるわ。あなたはわたしに剣を向けたことに責任を感じてるのかもしれないけど、元はと言えばセイバーとの契約を奪われたのはわたしの落ち度。あなたが感じていることの一部は、わたしの責任でもあるの」

俯いていた顔を上げる。セイバーを見る凛の瞳には、彼女を責め立てているような色はまるでなかった。むしろ凛は、自分自身の至らなさこそを責める、やや影のある表情を見せている。

「全部を全部許す、っていうのは軽すぎるし、気にするなとも言えない。でも——先へ進んで、改めてやり直すことはできる。わたしは、できればその道を選びたい。サーヴァントじゃなくなっても、わたし、あなたとは友達でいたいもの。

ねえ、セイバー。あなたはどうしたいの？ わたしが伸ばした手は、あくまでも選択肢の一つ。もうあなたには、義務も契約も命令もない。あなた自身がやりたいことを、好きに選んでいいのよ」

最後の一言には、懇願のような響きが滲んでいた。それはセイバーの半生を、凜が追体験したことによるものだろうか。疑問を抱きつつも、セイバーは自分の心を振り返る。

自分自身がやりたいこと——その視点は、セイバーの人生には決定的に欠けていたものだった。彼女は常に義務感、『これをやらなければならない』という想いのみで生きてきたからだ。責務、騎士道、契約、王道、幾つもの縛りが彼女には課せられていた。

だけど、最初からそうだったのだろうか。いや、それはきつと違う。初めて剣を握ったのは、選定の剣を引き抜いたのは、自分がやりたいと思ったから。それは、彼女自身の願いから生まれた行為。

『思い出せ騎士王。おまえは一体、何が欲しかったのだ』

皆が同じことを言うのだな、と思う。アルトリアという少女が本当にやりたかったこと、本当に望んでいたこと。それは——。

「……私は、皆が笑って暮らせる世界を築きたかった」

その願いは、もう叶えられている。完璧ではないかもしれないが、かつての時代より

はよほど近い形で。

悲願も義務もなくなったという自由。それを受け止めるには、今のセイバーではまだ足りない。あの英雄王ならば、大胆に笑って娯楽を謳歌するのだろうか、今の自分に軽々しく同じ道を選ぶことはできない。身の振り方は、時間をかけて慎重に考える必要があるだろう。

だが、その贅沢はこの夜を乗り越えてからの話だ。臓硯と言峰が聖杯を手に入れば、自分を汚染したこの世全ての悪が溢れ出し、築かれた平和な時代を灰燼に帰す可能性が高い。まったく——自分はそんなことさえ思い至らず彼らに従い、そんなことさえ忘れてここでぼうつとしていたのかと、セイバーは自分に呆れて頭を横に振る。

やりたいこととやるべきことは、初めから一致していた。セイバーがかつて願い、今や叶ったものを踏みにじろうとする敵。この聖剣は、人々を傷つけるモノに対してこそ振るわれるものではなかったか。

「今の私は、もう王ではない。貴方のサーヴァントに戻るといふ恥知らずなことは言えない。貴方の剣には、もう戻れないのです。——ですが」

毅然と胸を張る。面を上げて、足を前に踏み出す。凜然とした美貌は、騎士としての誇りに満ちていて。

「貴方の敵は、私の願いの敵でもある。ですから——今一度、貴方の友として、私はこの

剣を振るいましょう」

そう言っつて、少女の手をそつと握ると。アルトリア・ペンドラゴンは、碧色の瞳を細めて微笑んだ。

## 36. 神話再臨

劍が舞う。

刃が衝突し、槍が圧壊し、斧が粉碎し、鉾が崩壊する。

鋼だけが聳える劍の丘で、轟音と火花の大合奏が響き渡り、破壊に次ぐ破壊が撒き散らされる。地獄のような光景の中、ギチギチと轟めく歯車の下で、二柱の英霊が激闘を繰り広げていた。

「——停止解凍、全投影連続層写……！」

呪言を口にするのは、白黒の双剣を握る黒衣の英霊。指揮者のように剣を振るうと、赤い丘に突き刺さっていた刃が独りでに抜け、彼の周囲を取り巻くように浮遊し始めた。それだけでなく、何も無いはずの空間から剣たちが生み出され、次々にその列に加わっていく。瞬きの間に何十という劍が空中に立ち並び、主の号令一下、戦車砲となつて飛翔する——！

「つ——ええい、薄汚い贗作ごときが……！」

舌打ちしたのは、黄金の双剣を握る、下肢のみを鎧に包んだ英霊。彼が剣を振るうと、何も無い空中に黄金の波紋が次々と現れ、そこから刃の切っ先が覗き始める。波紋は十



や二十どころではなく、百にも及ぼうかという数が生まれ続け、そこから同数の刃が姿を見せた。王の命令に従い、疾風のように飛び出した宝具群は、迫りくる贗作たちと激突するが――。

「ちい――」

押し負けたのは、黄金の軍勢の方だった。

何十という宝具たちは、その尽くがギルガメッシュに近い位置で撃ち落とされる。この光景は既に数度繰り返されていたが、その度に原初宝具が撃ち落とされる位置は近くなり、アーチャーとの距離もまた縮まっていく。

英雄王が誇る無双の宝具たち。人類史に燦然と輝く武具の群は、どれをとつても脅威であり、並の英霊であればただ一つを放たれただけでも対処に苦しもう。それほどの武器が、まるで効能を發揮せず押し込まれている理由は、致命的なまでの初速の差にあった。

固有結界『アンリミテッド・ブレイドワークス無限の剣製』は、それが展開された瞬間から、アーチャーがこれまでの戦いで目にしてきた武器たちをそれぞれ無限に近い数用意している。最初からあるものを投擲するだけのアーチャーに対し、宝物庫から宝具を召喚するギルガメッシュは一手後に回らざるを得ない。その一手の差はそのまま宝具の射出速度差になり、ギルガメッシュの宝具はトップスピードに乗る前に出鼻を挫かれてしまう。同等の質量が単

純にぶつかり合うのであれば、先手を取り速度で勝る方が優位なのは自明の理だ。

「せ………」

宝具同士が激突した直後に、アーチャーは間髪入れず次の手勢を送り込む。対する英雄王も即座に宝具で応射するが、迎撃される場所は先ほどより更に近くなり、飛んできた破片で鎧に守られていない上半身が僅かに傷ついた。初めは僅かだったはずの宝具速度差は、同じ工程が重なり続けたせいで、もはや傍目にも判るほど大きく開いている。

——このまま押しきれるか？

飛来する刀剣を切り払い——数十本の宝具が猛スピードで飛び交う以上、迎撃率は百%とはいかない——独語するアーチャー。無銘の贗作たちは、次々に先手を打って畳み掛けることで、ギルガメッシュの対応能力を奪っていた。剣が届く距離まで詰め切るか、宝具の応射が追いつかなくなるか、どちらかが成立すればアーチャーの勝利は決まる。文字通り、時間の問題だ。

だが、逆に言ってしまうえば、時間を与えてしまえば状況は逆転する。刀剣宝具の複製に特化した『無アンリミテッド限ブレイドワークスの剣製』と異なり、『王ゲート・オブ・パピロンの財宝』が内包する宝具のバリエーションは無限大だ。複製が困難、あるいは不可能な宝具を召喚する隙を与えてはいけない。隠し玉を持ち出される前に、勝負を決める必要がある。

「荒れ狂え……！」

劍の嵐が吹き荒れる。名だたる聖劍魔劍が、互いを撃ち落とそうとぶつかり合う。

空間が震えるほどの激突が繰り返される中、アーチャーはギルガメツシユまでの距離を、十メートルを切ろうかというラインまで詰めていた。宝物庫から矢継ぎ早に宝具を繰り出し、黄金の双劍で贗作宝具を叩き落とす男の姿は、もう目の前まで迫っている。

あと数手で勝負は決まる。冷静に歩を進め、劍を閃かせるアーチャーは、既に詰め合いに入っている。守護者として無数の戦闘経験を蓄積してきた弓兵には、油断も慢心もない。

——狙うのは一撃、確実な致命傷。

英雄王が有する財は無尽蔵、無限大だ。傷を癒やすという伝承が世界に数限りなく存在する以上、彼が持つ治癒宝具もまた膨大な量を誇るとアーチャーは判断している。どのような手傷を与えようとも、致命傷以外は全てが無意味。最悪の場合、靈核を砕いたとしても蘇生宝具で復活される可能性すらある。

確実に靈核を破壊し、かつ回復すら許さぬ副次効果を与える武器。アーチャーにはその心当たりがあるが、それを使うには更に対象へ近づかなければならない。劍の丘から次々に武具を叩きつけ、応射される宝具を贗作で撃ち落とす、切り払い、叩きつけ——何時間にも思える数秒の後、遂にギルガメツシユを射程に捉える！

「トレス、開始——その心臓、貫い受けよう」

陰陽劍を放棄し、無手となった弓兵。代わつてその手に握られていたのは、赤く禍々しい長槍だった。それを認めたギルガメツシユの瞳が見開かれ、憤怒の形相となる。

「貴様——」

ゲイ・ボルク。

アーチャーが持ち出した武器は、かのクー・フリーンの愛槍だった。弓兵の投影対象は基本的に刀剣武器に限られるが、その延長線上で槍や斧などの武器、または一定程度の防御宝具なども範囲内となる。直接その力を味わつたことがあるからか、今投影された魔槍は、本物と見紛う領域の神秘と精度を秘めていた。

確実に命中し、致命傷を与え、呪詛を残す死棘イバラの槍。これならば勝てる。ギルガメツシユがどのような治癒宝具、蘇生宝具を有していようと、使わせる前に確実に消滅させる。

弓兵の目論見を瞬時に見抜いたのだろう、ギルガメツシユは今までのようにそこから宝具を撃ち放つのではなく、黄金の波紋に右手を突つ込ませた。必殺の武器に抗うべく、何かを取り出そうとするギルガメツシユに——

「遅い！」 刺し穿つ死棘ボルトの槍 ——！

瞬間、赤い稲妻が閃いた。

三メートルもない至近距離から繰り出された魔槍は、物理法則ではありえぬ軌道を描

き、双劍の防禦さえ掻い潜ると、黄金の王を刺し貫く！

「ガ——!？」

朱い華が咲く。

必滅の槍を叩き込んだアーチャーは、返り血で黒い外套を汚しながら、そのままの勢いで駆け抜けた。最後の悪あがきか、未だ飛来する宝具を槍で薙ぎ払いつつ、戦果を確認するために振り返る。

——直後。叩きつけられた鮮烈な殺気に、アーチャーは魔槍で穿たれたのは自分の方だったのではという錯覚を抱いた。

「痴れ者が——狗いぬごとき你真似事で、我の玉体に傷をつけようとはな！ その不敬、八つ裂きにされても飽きたらぬ大罪と思え——!」

鎧に守られていない、裸の上半身。英雄王の胸には、赤い穴が穿たれていた。そこからロボトボトと鮮血が滴り、王の体と大地を汚していくが——倒れない。確実に槍を突き刺したにも関わらず、人ならざる紅の瞳は、烈火の如き怒りを湛えてアーチャーを睨み据えている……! !

——心臓を外したか! ?

躲しようのないタイミング、必殺の一撃、肉を貫く感触。甚大なダメージを与えたことは間違いないが……ギルガメッシュが未だ倒れぬことに、弓兵は己の失策を悟って齒

噛みした。直撃はさせたものの、紅の魔槍は王の心臓から逸れていたのだ。

明らかに尋常ではない量の血が傷口から流れているが、英雄王は未だ健在。その手に握られた、つい先程見たばかりの螺旋の剣を再び目にし、アーチャーは必殺の一撃が外れた理由を悟る。

「虹霓劍の禁忌か——！」

ケルト神話には、ゲツシユという概念が存在する。現代ではタブーを意味するアイルランドの言葉で、特定の縛りや制限と引き換えに恩恵をもたらす呪術の一つだ。

アルスター縁の者がカラドボルグを用いた場合、クー・フーリンは一度敗北しなければならぬ——それがこの剣にまつわるゲツシユ。英雄王が用いた剣はあくまでもカラドボルグの原典であるため、厳密にはゲツシユは該当しないが、今回の場合はアーチャーが投影した武器がまずかった。

アーチャーはゲイ・ボルクを投影する際、所有者の技量や経験を再現している。いわば、一時的にクー・フーリンになっていようなものだ。そして、クー・フーリンであるならカラドボルグの前に敗北しなければならぬ。それが神話の、魔術世界のルールである。贋作者の投影武器は、その精度故に、神話の禁忌さえ忠実に守らざるを得なかったのだ。

ギルガメッシュはメソポタミア神話の英雄であるため、ケルト神話との関わりはない

が、彼はあらゆる宝具を所有する全英霊の原典——アルスターどころか、あらゆる神話体系の英雄に縁があるともいえる。その結果がこれで、ゲイ・ボルクは命中こそしたものの、因果逆転の効力も回復阻害の呪詛も発揮されず、致命傷を与え損ねる顛末となった。

「ちい——！」

舌打ちしたアーチャーが、劍の丘から宝具群を浮遊させ、手負いの英雄王目掛けて雨霰と劍を降らせる。しかしながら、魔槍を命中させた後で相討ち狙いの悪あがきを恐れたため、アーチャーはせっかく詰めていた距離を離している。元の初速差ゆえ、応射するギルガメツシュの宝具は優位に立って叩き落とせるが、先ほどと違って英雄王には距離分の余裕ができていた。

「手品師にしてはよくやった方だ。確かに我も肝を冷やされた。だが——貴様は愚かにも一線を越えた。薄汚い贗作ごときで我の首を狙おうとは笑止！」

雑種風情が、鍍金<sup>メッキ</sup>で出来た偽物が、王たる我に届くと本気で思っているのか。その思いがかり、粉微塵に叩き潰すとしよう……！」

宝具を降らせ、再投影した双劍を振るいながら地を駆けるアーチャー。だが、一息で詰め切るにはその距離はあまりに遠く、ギルガメツシュが透明な小瓶を取り出す余裕を与えてしまう。血を流し続ける傷に、小瓶の中身が振りかけられると——致命傷の半歩

手前だったそこは、数秒としないうちに塞がれ、一瞬にして万全の状態を取り戻した。あらゆる傷を癒やすという伝承を秘めた、古代神話の治癒の霊薬。

せめて回復阻害の呪詛だけでも発揮できていれば、解呪を必要とする分手間がかかり、その一手の差で再度詰め切れることも出来ただろう。しかし現実には、せつかく与えた大ダメージは、たちまちのうちに治療されてしまった。

「それがどうした。私が有利なことに変わりはない……!」

叩き込まれる猛烈な火力。もはや爆撃に等しい全周囲砲火に、ギルガメツシユもまた全周囲に宝具を出現させて対抗するが、元の速度差故に再びジリジリと圧されていく。傷の回復にリソースを割いた分、新たに射出宝具を選定し直す余裕がなかったため、質の低い刀剣武具を手当たり次第に撃ち出すだけでは同じ展開になるのは自明の理だ。

このままでは先ほどの攻防の再現だ。いずれギルガメツシユは投影宝具の弾幕に押し切られるか、近づいてきたアーチャーに切り伏せられる。だが、英雄王に焦燥の色はなく、自慢の宝具を次々に撃墜されているにも関わらず余裕のある表情だった。黒白の双剣を構え、接近してくるアーチャーに対し、最初に見せた黄金の双剣を取り出すギルガメツシユ。

神話の怪物と戦うために作られた一対の兵装。『ゲート・オブ・パピロ王の財宝』が使用不能だった間も唯一使えた剣は、アーチャー自身も幾度か目にしている。しかし、どういうわけか――



今その剣を見たアーチャーは、死神の鎌が近づいてくる様を幻視した。

「私の宝具はほとんどが原典——つまり、貴様の贗作に限らず、どこかの雑種が派生品を手に入れているものだ。が、後の世の源流となったものにあらぬ、我自身の宝具を持たぬわけではない」

他のあらゆる英霊たちと同様、英霊の頂点であるからには、ギルガメツシユにもまた彼のみが持つ宝具が幾つか存在する。

一つは『天の鎖』<sup>エルキドゥ</sup>。彼の朋友の名を持つ、希少な対神兵装。いかに強大な力を持つ神霊であれ、この鎖から逃れることはできない。人類悪<sup>ビースト</sup>の領域に達した超抜種でさえ、この宝具は通用する。

一つは『乖離劍』<sup>エプ</sup>。創造神の名を冠する、唯一無二の対界宝具。神霊級の領域まで幅を広げれば、世界を対象とする宝具がないわけではないが、世界そのものを破壊・創造する究極の権能はこの剣のみに許されたもの。

そして、その他に。彼が生前愛用し、森の神<sup>フワ</sup>や天の牡牛<sup>グガランナ</sup>との戦いに用いた黄金の武具がある。それが超高硬度の鎧であり、彼らのような超級の魔にさえ通用する剣。

鎧には副次効果として、石化のような特殊な呪詛を防ぐ効能があつた。ならば——剣の方も、ただ形の変わる武器というだけであるはずがない。

「本来、貴様ごとき凡俗に見せてやるものではないが、それほど贗作を自慢したいという

のであれば是非もない」

双剣の柄尻が合体し、一つの大弓となる。

刃の先端から伸びた魔力の弦。ギルガメッシュが右手で引くと、矢の先端があるはずの位置に、今まで彼が放ったものとは異なる異形が出現した。黄金の翼を持つそれは、中央に一つの紅球とそれを取り囲むような六つの蒼球を有し、生き物のようにも魔法陣のようにも見受けられる。

明らかに異様な光景に、アーチャーの警戒度が跳ね上がる。形勢不利であるこの局面で取り出したということは、並の武器であるはずがない。ギルガメッシュへの接近を試みつつ、彼は遠距離武器への対抗手段となる『熾<sup>ロ</sup>天覆<sup>イ</sup>う七つの円環』の投影準備にかか  
るが――。

「真実を見せてやろう、心して受け取るが良い――！」

放たれる一矢。しかしそれは、アーチャーに向かうどころか、まったくあらぬ方向へ飛んでいくとそのまま大地に突き刺さった。

盾を投影するまでもなく、攻撃が自分に向けられなかったことに、意図を判じかねて怪訝な顔をするアーチャーだったが……ギルガメッシュの浮かべた冷酷な笑みに、背筋が冷たくなる感覚を覚える。準備してある盾の用意はそのまま、英雄王に対して降らせる宝具とは別に、自分の近くにくつかの宝具を呼び寄せる。この盤面で放った一矢

が、果たして無意味であるものか。

——アーチャーの懸念は正しかった。

この時、固有結界の外側——それどころか、この惑星の外側。大気圏外の衛星軌道上に、七つの黄金の矢が現れていた。一つ一つが星と見紛う輝きを持つ矢は、そのまま流れ星めいて地球へと落ちる中、融合するように一つの矢へと収束する。何人かの人間が、流星に気づいて夜空を見上げる中、それは日本の冬木市へ向かっていき……そして唐突に消滅した。

次の瞬間。それが転移したのは、アーチャーの固有結界の内側だった。

「なんだ——!?!」

自らの世界の中に突如出現した異物。弓兵が驚愕して見上げる中、空で廻る歯車の上に出現した流星は、輝きと共に天空に赤い紋様を走らせた。ちょうど、ギルガメツシユが先ほど放った矢のあたりを中心にして。

夕暮れの世界が、さらなる赤色で埋め尽くされる異様な光景。アーチャーが愕然とする中、哄笑した英雄王は弓を掲げて高らかに謳い上げる。

「天を見よ、滅びの火は満ちた！ 来たれ、ナピユシテムの大波よ！」

——そして。世界は、大波に押し潰された。

ありとあらゆる空間から、膨大な水流が現れたのだ。鉄砲水のレベルではなく、津波

の域にすら留まらない。無より現れ、大地を洗い流す大海嘯。四方八方から迫る高さ數十メートルもの水の壁は、空に浮かぶ歯車も地を埋め尽くす劍群も、何もかも一切合財をたちまちのうちに飲み込んでいく。

反射的に、英雄王に向けていた宝具群を大津波に飛ばすアーチャーだったが、巨象に蟻が歯向かうようなものだった。岩を斬る劍も、地を割く槍も、その尽くが大波の前に押し負ける。炎も、雷も、氷も、その莫大な質量のほんの一部を削り取ることしかできない。圧倒的なまでの水流は一息に無数の名劍魔劍を飲み込み、その神秘と水圧を以て木っ端微塵に砕け散らせた。

「っ——!？」

何百、何千という劍が投擲されるが足止めにもならない。空も大地も宝具も、全てが洗い流され蹂躪されていく。瞬きの中に迫ってきた波は、絶望するアーチャーも高笑いするギルガメッシュも、諸共に大質量の下に押し潰してしまった。後にはただ、無尽の海が満ちるのみ。

「——」

……そうして、世界のすべてに大海が満ちた後。ざぱん、と海を割って、黄金の輝舟が姿を表した。天へ駆けていく『黄金帆船』の玉座には、嗤う英雄王が君臨している。水除けの宝具か、それとも所有者故の特権か、彼だけはこの大海嘯の中でも無傷だった。



た。あれは発動直後だったために真価を發揮できず、水を呼ぶことすら叶わなかったが故の限定発動の結果に過ぎない。

あの瞬間を一日目の昼とした場合、今この時間は、六日目を終えて七日目に差し掛かったタイミングになる。最大の威力を發揮した終末剣<sup>エンキ</sup>は、何千何万という投影宝具を歯牙にもかけず、固有結界という世界全てを大津波で肅清したのだ。これほど桁外れの攻撃は、それこそ神霊の権能に等しい。たかが一英霊に抗しうるものではない。

「く、はは、ふははははははは——ん？」

目障りな贗作も、贗作を生み出した偽物も、威を示して押し潰したことが愉快なのか。哄笑する英雄王だったが、ふと違和感に気づいたのか。突如それを中断した。

消えていない。

所有者が消滅するか、あるいは維持不可能なほどのダメージを受ければ、その固有結界は消滅する。だが、『無<sup>アンリミテッド</sup>限<sup>フレイドワークス</sup>の剣製』は未だに健在だ。空の歯車も地の贗作も全て水に沈んだというのに、世界自体は未だ消えていない。

ということとは、即ち。

——その時、海が割れた。

世界を埋め尽くしていた大水が真っ二つに別れる。とてつもない質量の海が、何か超自然的な力で押しつけられ割り開かれていく様は、まるで神話の奇跡だった。

再び露わになつた大地に立つていたのは、杖のようなものを掲げたアーチャー。五体満足どころか、水に濡れてすらいらない弓兵は、真つ白な瞳で空に浮く帆船を睨め上げている。その姿を眼下に認めて、ギルガメッシュは口の端を吊り上げた。

「なるほど。預言者<sup>モーセ</sup>の杖か。この我に神の奇跡とやらを見せつけようとは、つくづく神経を逆撫でする雑種だ」

モーセの海割り。

旧約聖書の「出エジプト記」などに現れる預言者であり、多くの宗教において重要とされる人物。彼が起こした奇跡の一つがこの光景である。

弾圧され、奴隷化されていた民を率いたモーセは、エジプト軍に海辺まで追い詰められる。ところが、彼が杖を掲げると海が左右に割れ、民たちはその道を渡って逃げ延びることに成功したというのが伝説だ。

アーチャーが投影した杖は、まさにその奇跡を再現していた。終末<sup>エンキ</sup>剣は洪水という途方も無いスケールの天災を起こすが、そこには指向性がなく、現れるものはあくまでも一つの現象に過ぎない。世界を押し潰して海に沈めるなら、海を割り道を開く宝具が通用するのは当然の帰結だった。

「投影<sup>トレイス</sup>、開始<sup>オン</sup>——」

次いで、アーチャーは役目を終えた杖を捨てると、開けた道が閉じる前に空中へと飛

び上がった。その足には、神秘を宿す靴が履かれている。

地上のみならず、空中や海上を自在に走る靴。北欧神話において、いたずら好きの神ロキが所有していたとされる宝具である。それを投影したアーチャーは、海の上まで飛翔すると、ギルガメツシュが乗る空中戦艦の正面に立ちはだかった。

黄金とエメラルドで構成され、マハーバーラタ、ラーマーヤナの二大叙事詩に名を残す飛行装置。こと空を飛ぶという点に限って、アーチャーが投影した靴は決してそれに劣るものではない。その事実を不愉快に感じたのか、ギルガメツシュは直前までの上機嫌さを打ち消すと、双眸に剣呑な気配を纏わせた。

「たかが贗作者フェイカーの分際で、私の体に傷をつけたばかりか、王の舞う天に昇るとは……度し難いにも程があるぞ、下郎」

「貴様の時代ならともかく、現代において空は人の世界だ。それが嫌ならば、古代の田舎地元にでも引つ込んでいるといい」

英雄王の威圧に挑発を以て返すアーチャー。しかしながら、さすがの彼も、圧倒的優位だった戦局が変わったのを内心認めざるを得なかった。

『王の財宝』に対する『無限の剣製』の優位性、その最たるものは固有結界内に予め武器が設置されているという点だ。ところが、対界宝具による大海嘯によって、用意されていた無数の武器たちはその全てが破壊しつくされた。アーチャーが新たに



武具を呼び出すには、一から投影し直す他はない。

この固有結界は、刀剣武具を構成するありとあらゆる要素を内包するため、ただ投影するだけでもその速度・精度は段違いだ。再投影にかかる魔力も、聖杯からの供給がある限り考慮する必要はない。だが、ギルガメツシユとの間にあった宝具射出の速度差という優位は失われたも同然だ。宝物庫から召喚・射出するギルガメツシユと、新たに贖作武器を投影・射出するアーチャーではその速度は互角。通常空間よりはまだマシなので、不利になったわけではないというのがアーチャーにとつて救いだった。

「これでようやく五分というわけか。既にハンデは失われた。喜ぶがいい、英雄王」

「思いつがるなよ凡俗。貴様ごときがこの我と対等だと？——笑わせる。首を差し出し、惨めに慈悲を乞うが礼であろう……！」

大海の上、夕暮れの空で対峙する二人。第二ラウンドは、神話の中でも稀に見る空中戦から始まった。

「——投影、完了。行け！」

五十を超える投影宝具。いづれ劣らぬ矛が、刀が、槍が、空間を激震させながら大空を飛翔する。一つ一つが誘導弾に等しい火力を有する弾丸は、まさに死神の申し子。最新鋭の制空戦闘機でさえ、一度に保有できるミサイルはせいぜいが十程度だというのに、それが五十余りというのはもはや埒外を超えた火力に尽きる。

しかし、それほど驚異的な宝具群の連射は、攻撃を主たる目的としたものではなく。

「ぐ、おっ——！」

むしろ、防御のための迎撃用途だった。

「それら、どうした贗作者！<sup>フエイカー</sup> 上手く真似ねばたちまち死ぬぞー！」

邪悪に嗤うギルガメッシュ。ヴィマーナを疾駆させ、無数の波紋から宝具を召喚し続ける彼は、その恐るべき火力を十二分に發揮していた。

先ほどまで彼を抑え込めていたのは、先手を取り、宝具の速度差で対応する暇を与えていなかった部分が大きい。その縛りがなくなった今、余裕を持って宝具を選択・射出可能になったギルガメッシュは、次から次に破壊の矢を撃ち出し続ける。宝具が激突する甲高い悲鳴は、まるで葉莢が飛び散るような音でもあった。

これが英雄王の恐ろしい対応能力だ。初見殺しで圧倒していても、態勢を立て直す暇を与えれば、たちまちのうちに対応されてしまう。たとえ今、初期状態のように予め投

影宝具が準備されていたとしても、あれほど一方的な展開にはなるまい。

だが、アーチャーに焦りの色はない。初手でやや押し込まれたのは認めるが、それはギルガメッシュの宝具展開数を見誤ったが故。互角ならば未だ五分の勝負ができるし、何より、無限の魔力がある今、アーチャーもまた宝具の展開数は天井知らず——！

「なに、ほんの小手調べー！」

迎撃しきれなかった宝具の刃が突き刺さり、右手と左脇腹から血が飛び散る。その痛みすら笑い飛ばし、聖杯の呪詛で強引に傷を修復すると、アーチャーは何もない空中を踏みしめて跳んだ。

一息で数百メートルを飛翔した弓兵は、物理法則に囚われぬ軽快な動きで空を馳せる輝舟に追隨すると、先ほどの倍以上——百を超える投影宝具を同時展開。名だたる聖劍魔劍を、それこそ機関銃のように乱射していく。一つ一つが炎や雷、氷や水、あるいは呪いや毒といった概念を内包する規格外の制圧射撃。

膨大な宝具の弾幕は、同じく放たれたギルガメッシュの宝具と激突・破壊されつつも、その幾つかがヴィマーナの許まで辿り着いた。上下左右に飛び回る空中戦艦に対し、さながら蛇のような執念で猛追した宝具たちは、しかしその直前で防御宝具に迎撃されてしまう。宝具が砕け散る爆風の中、舟を操って空へ昇る英雄王には、獰猛な笑みが浮かんでいた。

「ファン——空中戦を味わうのは、十年前の狂<sup>バトラー</sup>犬以来か。慢心ゆえ一度は不覚を取ったが、この我に二度同じ手を通じるはずがなからう」

ヴィマーナが急旋回。猛烈に宝具を撃ち出しながら、自らを追撃する猪口才な弓兵に向き直る。戦闘機の機動ではありえない、ほとんどその場での百八十度のターンは、まさしく思考と同速で天を翔けるといふ伝承のとおり。

音速を超える速度で、正面から宝具を撃ち合いながら、二人の騎士が近づいていく。三秒後の正面衝突を前にして、ギルガメツシユの口元には残忍な、アーチャーの口元には皮肉げな笑み。幾つかの刀剣がヴィマーナの船体を擦り、幾つかの槍斧はアーチャーの体を掠つたが、二人に浮かぶ笑みは消えない。そしてそのまま、何十という砲撃を交えながら――。

「跪け、下郎。蹂躪するとはこういうことだ！」

先手を取つたのはギルガメツシユだった。

英雄王が駆る空中戦艦は、一千万トンに及ぶ超体積であろうと粉碎する大出力を誇っている。正面からぶつかれば、それだけでも対軍どころか対城宝具に匹敵する破壊力だ。その有り余るパワーを以て正面から粉碎しにかかるのだろうと読んでいたアーチャーは、眼前で突如急上昇したヴィマーナの前に虚を突かれ、次いで降ってきたモノに青ざめる羽目に陥った。

山が降ってきた、と弓兵は思った。それは事実、大山に匹敵する大きさと質量を有している。無数の武器を目にしてきた、解析に特化したアーチャーの瞳は、コンマ一秒の後にそれがとんでもない化け物級の剣であると判断した。

――千山斬りイ拓ガく翠リの地平マ。

メソポタミア神話において、戦いの神ザババが有した剣の一つである。斬山剣という

別名を持つそれは、人が振るえるサイズの剣ではない。あれは神が用いるための武器、超級の神造兵装の一つ。

物理的に山さえ切り裂けるほど規格外の剣は、その刃に地平線概念を有しており、「天と地は分かたれてるもの」という理を押し付けることによつて千の山だろうと一斬する途轍もない宝具だ。しかし、今ここで用いられたように、ただの質量武器としてもこの剣は尋常ならざる威力を秘めている。上下左右どこへ逃げようと、その凄まじい体積から逃れるには間に合わず、圧潰するより他に道はない。

間違ひなく詰みの一手だが、アーチャーは冷静さを失つていない。人の力では、神罰の一撃には敵いようもないが——では、英雄の業であればどうか？

「――<sup>トレイス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始」

幾度となく口にした詠唱。一秒後の死を前にして、その言葉に焦燥はない。

思い描くのは一つの大剣。暗殺者の魔剣にも、騎士王の聖剣にも、謎の怪魔の触腕にさえ屈しなかつた大英雄の剣。アーチャーの腕ではあの剣は扱えないが、当人の怪力と技量ごと複製すれば話は別だ。

投影途中にあつた、ヴィマーナと撃ち合うための宝具を全て途中破棄。二十七の魔術回路、その尽くを単一の技術の再現に回す。己の全ては、今この窮地を打開するために。

「<sup>トリガー</sup>投影、<sup>オンプ</sup>装填」

右手に大剣が現れる。人の身には余る大きさだが、それでも尚、迫りくる斬山剣に比べれば爪楊枝ほどのサイズに過ぎない。

巨神の剣に対抗するには、あまりに心許ない武器。下段に岩の剣を構えた贗作者は、自ら死の山へと挑みかかり――

「全<sup>セツ</sup>工程<sup>ト</sup>投影完了」――」  
ナイライブズブレイドワークス  
 是、射殺す百頭」

一息の間に、九つの連撃が解き放たれた――！

――激突。

上方からの切り下ろし、唐竹割り、薙ぎ払い、下方からの切り上げ、斜めからの一斬、正面からの刺突――上下左右中央、あらゆる方向からほとんど同時に斬撃が放たれ、それが一点に集中した。膨大な破壊のエネルギーは、横向きに降ってきた巨剣に直撃し、そのまま刀身を穿ち抜く！

「おおおおおおお――ッ！」

神造宝具の破片が、空中に撒き散らされた。ヘラクレスの剣技は、針の穴を貫くような極限のコントロールによって、遂に神の試練を打ち破つてのけたのだ。

斬山剣の側面をぶち抜き、死の包囲網から脱出したアーチャーは、その勢いのままヴィマーナまで急上昇。黄金の船体めがけて、続けざまに大英雄の剣を振りかぶる。

彼我の距離は既に指呼の間だ。戦艦に搭載されている迎撃宝具は大半が対射撃武器

用であり、この距離から『射殺す百頭』の斬撃を放てば、船ごと叩き落とすことが可能だろう。ヴィマーナを墜とせば、ギルガメツシュは自ら生み出した大海へ真つ逆さまに突つ込むことになる。

窮地からの逆転。詰みの一手を碎かれることを予期していなかったのか、『千山斬り拓く翠の地平』を突破した後、英雄王の迎撃はなかった。相手の対処が間に合わぬうちに、掴んだ流れのまま、一気呵成に押し切る……！

「——とでも思ったか？」

英雄王に浮かぶ悪辣な笑み。いつそ淫靡にさえ感じる微笑に、直感の警鐘を聞いたアーチャーは、連続発動しようとしていた剣技を中断。左方から迫りくる熱を感じた、弓兵の顔に焦燥が浮かぶ。いつの間にか召喚していたのか、空を割るように迫っていたのは、斬山剣に比するほどの巨大な剣。

——万海灼き祓う暁の水平。

イガリマと対になる、戦いの神が有したもう一つの剣。捻れた刀身から、複数の炎が刃を形成する異形は、人の手に依らぬ力で編まれたモノ。有する熱量は現代兵器のそれさえ及びもつかない。

これは「水平線」の概念を持つ斬海剣。イガリマが千の山を切り裂くのならば、この剣は万の海すら灼き祓う。空と海の境界を暁の炎で一つにする、溶け混じる領域を生み

出す溶鉱炉だ。常世全てを融解させる神の炎に、人の力でどうして抗えようか。

迫りくる炎の波に、アーチャーの思考が高速で回転。イガリマと同じく回避は不能、この間合いとあの巨大さでは、どこへ逃げようとも伸びた炎が体を灼く。かといって英雄王に特攻するのは悪手であり、そこすらも炎の攻撃範囲。それでいて玉座に腰掛ける彼は、アーチャーが動揺した一瞬で自分だけ周到に防御宝具を展開しているのだから、悪質という他はなかった。

英雄王の乗る舟は守られ、弓兵だけが炎に焼き尽くされるといふ絵面。斬山剣を抜けてくることさえ予想して、ギルガメツシユはこの罠を用意していたに違いない。

「く——」

二つ目の神の試練。人の領域を超えたモノは、アーチャーには投影できない。『<sup>ガ</sup>転輪する<sup>ラ</sup>勝利の<sup>テイ</sup>剣<sup>ン</sup>』さえ凌駕する炎を、贗作者が生み出せる道理がない。できるわけがないと、ギルガメツシユは笑っている。

故に、アーチャーは。

「ぬおおおおおおお——ッ！」

躊躇なく、破滅へのギアを踏み込んだ。

ぶわ、と彼の周囲に黒の霧が出現し、膨大な「悪」の気配が現れる。自分と繋がる『<sup>ア</sup>この世<sup>ン</sup>全<sup>リ</sup>ての<sup>マ</sup>悪<sup>ユ</sup>』の経路<sup>バ</sup>、アーチャーは一気にそれをこじ開けたのだ。



騎士王のように、呪いをねじ伏せて従えるのではない。自分はどのようになろうと知ったことではない、ただ力だけを寄越せという後先考えない滅びの一手。溢れ出る無限の呪詛に、肌には入墨めいた紋様が浮かび上がり、心象風景を映し出す夕暮れの空さえ、冥夜の黒へと変質していく――。

月の綺麗な夜、養父と空を見上げた光景。

始まりの夜、金髪碧眼の少女騎士と出会った光景。

いつかの夕暮れ、憧れていた同級生と夕日を眺めた光景。

摩耗しきった弓兵の心の中に、それでも残されていた、本当に大切なものたち。真っ黒な悪意に、呪詛に、殺意に、それらが上書きされ塗り潰されていく。自分を構成するものたち、自我を形作るものたちが、次々と黒塗りになっていく。

……それでも構わない。いちばん大切なものさえ、覚えていればいい。

脳を弄り回され、内臓を掻き混ぜられるような激痛と不快感の中、弓兵はそう割り切った。どれだけ自分が破壊されようとも、聖杯からの呪いによって、戦う技能だけは衰えない。

それならばいい。元より相手は格上だ。ヒトであることを捨てる程度で牙が届くなら安いもの。あの暴虐の王に立ち向かうためなら、最後に残ったモノを守るためなら、どれほど代償を払おうと知ったことか。

「I am the bone of my sword.」

炎に卷かれるより先に、弓兵の体は黒焦げのような有様となっていた。膨大な呪詛が体中に入墨となつて浮かび上がり、灰のように白かつた瞳は赤黒い呪いで塗り固められている。人形を通り越して、死人に近いような外観。

されど——可視化出来るほどの呪詛と共に、アーチャーが有する魔力量は、途方も無い領域まで跳ね上がっていた。呪いに染まつた魔力を、直結でそのまま供給されたことによる、霊基の損壊を顧みない自己強化。

審判の炎が来る。善も悪も、祝福も呪詛も、万象一切を曙光に溶かす赫色の剣閃。逃れようのない裁きを前に、男の手には、黒く染まつた聖剣が握られており——。

「全工程投影完了——」永久に呪う暗黒の剣。」

黒竜の咆哮が、夜の大空に解き放たれた。呪いをカタチとした莫大な魔力と、斬海剣が織りなす火炎地獄がぶつかり合う。黒い世界を赤く染めるほどの、高エネルギー同士のせめぎ合い。

だが、その拮抗は次第に神の剣に傾き始めた。究極の聖剣が、神代の熱量に膝を屈しようとしている。その趨勢は、武器の質の差によつて生み出されたものだった。

『約束された勝利の剣』は神造兵装の一つだ。精霊によつて、星の外敵を討つために铸造された剣は、人の理解が及ぶものではない。故に、アーチャーが投影することは叶わ

ない。できるのはせいぜい、衛宮士郎が模倣した『終末剣』<sup>エンキ</sup>のような、外殻だけの投影だろう。

その不可能を可能にしたのが、剣の製造に特化した固有結界と、聖杯による無限の魔力だ。回路が焼き付こうが魔力が不足しようが、呪いによつて無理やり補うことで、アーチャーは聖剣の投影を可能とした。

だがそれは、どうやつても模造品でしかない。本物の聖剣を騎士王が振るえば、あるいはこの炎さえ相殺したかもしれないが、膨大な代償を払つた上でも贗作者<sup>フェイカー</sup>にはこれが限度。勝敗は、最初から見えている。

当然、それは弓兵自身も理解していて。

「限界を超えろ……い」<sup>ブローケン・ファンタズム</sup>　壊れた幻想！」

びし、と何かが割れる音が響いた。

それは、漆黒の魔剣に入った罅の音。直後、悲鳴のように唸りを上げ、呪いの剣からさらなる光刃が生み出された！

宝具自身を使い潰すことで、そこに蓄蔵されていた全ての魔力を注ぎ込む、自爆前提の禁断の秘奥。英霊であればまず使わない禁じ手の使用は、聖剣から放たれる熱量を跳ね上げ、空を薙ぐ炎の剣を一拳に押し返してみせる。遂に打ち負かされた神の剣は、あらゆる方向へ吹き飛んでいき——その代償に、偽の聖剣は木っ端微塵に砕け散つた。

徒手となつた黒い弓兵。しかし、彼の身は終ぞ無傷。異様な容姿に成り果て、計測の埒外にある呪詛を纏つていても、アーチャーは『万海灼き祓う暁の水平』による肅清を掻い潜つてみせたのだ。

「ほう——」

その奇跡を目の当たりにしたギルガメツシュから、さすがに笑みが消えた。

終末剣。千山斬り拓く翠の地平。万海灼き祓う暁の水平。いずれ劣らぬ超絶の神造兵装、英雄王が誇る宝物の中でも頂点に近い武器たちである。英雄たるもの、一度であればその猛威を掻い潜ることは可能だろうが、三度も続くのは異常に過ぎる。ましてや、それを贗作者風情が成し遂げたというのは、到底許容できるものではない。

否。あれは既に、贗作者ですらなく。

「なるほど。弓兵……いや、復讐者と化しているな。そうまで我を恐れたか、この世全ての悪」

アーチャーが起こした奇跡の絡繰り。ヴィマーナの上から彼を観察していた英雄王は、ややしばらくしてその真実に気づいた。

英霊の性能は予め決まっている。ましてや、聖杯により召喚されているサーヴァントなら尚更だ。英霊の全性能を再現するのが困難だからこそ、聖杯はサーヴァントという枠組みに収まるよう、英霊の情報を制限し扱いやすくしている。セイバーやバーサー

カーのように、超一級の英霊であれば、その枠を跨ぎ超えることも可能かもしれないが——フエイカー贗作者のような二流三流の英霊が性能上限を超えるには、聖杯そのものの後押しが必要だ。

ギルガメツシュには汚染されたアーチャー越しに、この世全ての悪の恐怖が見えていた。十年前、あらゆる生命を否定する死の泥を以てしても取り込めず、ただ外界に弾き出すしかなかった怪物こそが英雄王である。先のセイバーとの一戦で、微睡みから目覚め始めていた悪神は、自らを滅ぼしに来た天敵に抗おうとしていた。神造宝具を相殺するほどの異常極まる強化は、いわば弓兵と聖杯の利害一致の結果——いや。今のアーチャーは、もうほとんど、この世全ての悪そのものとなっているのだ。

「面白い。悪神との戦いは久方ぶりだ。フエイカー贗作者風情に、ア私の宝物をここまで使うのは腹立たしいが——神殺しならば是非もない。『この世全ての悪』を名乗るのであれば、貴様の力、この英雄王に示してみよ！」

哄笑するギルガメツシュ。それを聞いたアーチャーは、滾り溢れる膨大な魔力を解放し——その場から、爆発的に加速した！

ごう、と衝撃波が響く。無尽蔵の魔力を叩き込んだことで、無理やり性能限界を超えた速度を發揮させられた飛行宝具は、自壊寸前で赤黒い魔力の燐光を放っていた。それはアーチャーの体全体に波及しており、赤と黒の魔力に包まれながら俊足の英霊もかく

やという迅さで飛び回る彼の姿は、最早死神の使徒と変わりにない。

飛行宝具が壊れたら、即時次の宝具を再投影すれば足りるという、宝具を使い捨てにすることが前提の過剰暴走<sup>オーバーロード</sup>。英霊の誇りを足蹴にするかの如き蛮行に、ギルガメツシュの口が獯猛に歪んだ。

「さあ、貴様はどこまでついて来れる——」

ピアニストのように、英雄王の指が踊る。直後、ヴィマーナは優美華麗そのものの動きで、消えるようにその場から発進した。

高速で飛翔する英霊同士が、互いの背後を奪い合おうと、猛烈な格闘機動<sup>ドッグフアイト</sup>を繰り広げる。その間、まるでミサイルの撃ち合いのように、膨大な数の宝具が二人の間を飛び交う。それは個人の戦いではなく、国同士の戦争そのものだった。

破壊、破壊、破壊、破壊、破壊、破壊。

剣が、刀が、槍が、矛が、槌が、斧が、鎌が、矢が、人が生み出してきた数々の武器たちが超音速でぶつかり合い、撃ち落とされ、その破片を魔力と共に撒き散らしている。秒間何十と響き渡る破砕音は、機関銃の連続掃射と変わりない。異なっているのはその破壊規模で、宝具が激突する度に生まれる爆炎は、それだけで軍艦さえ傾けようかという破壊力を有していた。

ギルガメツシュが宝具を連続展開し、アーチャーが贗作を連続投影する。無限の宝具

と無限の魔力の下支えを受ける両者に、弾切れなどあるはずもない。互いの首を狙うべく無数の宝具が飛び、攻撃と迎撃を繰り返していく。煌びやかな宝具が秒間何十と浪費され、色とりどりに世界に概念を撒き散らしていく様は、まるで神話の最終決戦だった。

故に決着をつけるには、どちらかが決め手に訴える必要がある。

「投影、完了——」 熾天覆う七つの円環！

先に手札を切ったのは、アーチャーだった。

度重なる激突の末に、背後を取った弓兵は盾を展開。投擲宝具に対して絶対の防御性能を持つそれは、この局面においてはまさに最適解。七枚の盾を前面に押し立て、空中を踏みしめて加速するアーチャーは、稼ぎ出した時間で更なる切り札を引きずり出す――。

「——鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

投影するのは黒白の夫婦剣。アーチャーが長く用いた、二刀一对の愛剣。

セイバーの聖剣、ランサーの魔槍。英霊が愛用する武器には、真名解放を始めとしたそれぞれの奥義が存在する。幾多の決戦、数多の死闘で、難敵を打ち負かしてきた必殺の構え。英雄王にそれはなく——そして、アーチャーはそれを保有している。

空間を裂いて飛来する宝具を盾で弾きながら、生み出したばかりの双剣を即座に投擲。同時に用意しておいた無数の宝具を掃射し、ヴィーマーナの防御処理を飽和させる

と、左右から迫る一撃を以て操縦者の首を狙う……！！

「フーン——」

指を鳴らすギルガメツシュ。即時召喚された二挺の槍が、あっさりとは双剣を弾き飛ばす。その瞬間に、空を駆けたアーチャーは。

「——凍結、解除」

接近。雪崩のように降り注ぐ投影宝具に、ヴィマーナの対空火器は未だ飽和状態。ここまでの攻防で、相手の限界防衛ラインは見えている。

用意していた宝具を、撃ち合いの均衡を破るほどに短期連続掃射。この一手を凌がれば、アーチャーは一気に不利になる。ギルガメツシュが展開する宝具群に、投影宝具が追いつかなくなる。

だが構わない。元よりこの工程は必殺。この攻撃で、全ての勝負を決めれば良い。

「同じ武器？ ハッ、馬鹿の一つ覚えが——」

干将・莫耶を再投影したアーチャーを、ギルガメツシュが嗤う。ヴィマーナの火器は一時的に使えなくなっているが、何も彼自身が宝物庫から宝具を呼び出せば済むことだ。防御を突き抜けて迫るアーチャーに、原初宝具が火を噴き——その、直前。

「——心技、泰山二至り」

英雄王の背後から、飛来する一本目の干将——！



「なに——」

目を見開く英雄王。ヴィマーナが急速降下し、後方からの奇襲を躲す。だがそれを読んでいたアーチャーが、手にした莫耶を以て切りかかった！

「散れッ！」

「雑種ぞうごとときが……！」

陰劍・莫耶と、終末劍エンキが激突。アーチャーの全力の打ち込みは、しかし神造兵装の神秘には届かず、あつさりとは碎かれてしまう。

背後からの不意打ち、正面からの斬撃。その両方を見抜き、即時対処して見せたギルガメツシュの戦略眼は非凡そのものだ。並の敵であればどちらかを受けきれずに切り伏せられている。

だが。アーチャーが打った手は、並の敵を相手にするものではない。

「——心技こころぎ、黄河みづをわかっヲ渡ル」

二度、背後から押し寄せる劍。今度のそれは、一本目の莫耶。この双劍は二対で一つであり、遠くにある片方はもう片方に引き寄せられる性質を持つ。故に双劍、故に夫婦劍。

一度目の同時攻撃は凄い。ならば、二度目の同時攻撃はどうか——。

「読んでいるぞ！」

笑う。

そうだ。凡百の英霊とは話が違う。相手はこの世のすべてを見通す英雄王。その神の瞳が、この事態を読めていないはずがない。

黄金の波紋から出現したのは、魔杖。そこから放たれた大魔術、神代の雷撃が、神速を以て背後からの莫耶を打ち砕く。同時、横薙ぎに振るわれたアーチャーの干将に、同じ軌道で放たれる神の剣！

——砕かれる。

アーチャーが双剣使いなら、相手が振るう武器も双剣。一手目を右の剣で防いだのならば、二手目は左の剣で凌がれるが道理。弓兵の渾身の攻撃、二つの双剣による四重連撃はその尽くが防御された。

もう先はない。対空砲火を相殺し、防御宝具を潜り抜け、ギルガメツシユの喉元まで迫り、双剣の防御さえ打ち破った。

しかし、これ以上は手詰まり。今すぐにこの場から撤退せねば、一秒後には無限の宝具がこの身を襲う。攻守は逆転し、大量の手札を一気に消費したアーチャーは窮地に追いやられるだろう。

そう。この一秒を埋める、次の手を残していなければ……！

「——唯名、別天二納メ」

最初から用意していた設計図を読み込み、三本目の双剣を再投影。それを見たギルガメツシユの笑みが消える。

瞬時の判断で、ギルガメツシユが双剣から手を離す。空いた手に、宝物庫から呼び出した別の宝具を握ろうとする。そう、判断力と戦略眼に優れた英雄王ならば必ずそうする。終末剣での防御に拘泥すれば間に合わないが、一秒以下で別の武器に切り替えれば間に合うのだ。

その読みを、アーチャーこそが読んでいた。だからこの一瞬、武器を取ろうとしたその瞬間に、この隠し手が通用する。

「我ノリ・メ・タンゲレに触れぬ」——！」

ギルガメツシユの動きが止まる。いや、止めさせられる。その体に絡みついているのは、赤く輝く聖なる布。

この聖遺物こそは、マグダラの聖骸布。男性を拘束するという概念を持つ、かつて聖人の遺骸を包んだ拘束宝具である——！

「な——」

この一瞬、ギルガメツシユの四肢は縛られた。完全に動きが固まり、無防備な状態となったのだ。

ならば届く。この剣は届く。その身を守る宝具も鎧も既がない。練りに練った、計算

の果てに生み出された、千載一遇の好機。弓兵が積み重ねてきた戦術経験が、英雄王の戦略眼を上回った一瞬。

「両雄、共二命ヲ別ツ……!」

決まった。

左右から振りかぶられる双剣。紛れもない決着の一撃が、英雄王の首を刈り取りに行き

「天の鎖よ——」

——寸前。王の朋友が、その一撃を払い除けた。

「ぬ——ッ!」

必殺の三撃目。その双剣が、現れた鎖によつて弾き飛ばされたのだ。

突如空間に現れたそれは、ギルガメツシュが予め準備していたものではない。彼が友のことを信じており、そして友がその声に答えた以上、この光景は必然だ。真の友とは、窮地に手を差し出すことを厭わない存在を言う。

アーチャーに、彼にしか持ち得ぬ必殺の構えがあつたように。ギルガメツシュには、彼にしか持ち得ぬ無二の友が存在しただけ。その差がアーチャーの勝機を作り、そしてギルガメツシュの窮地を救い出した。

「く——」

限界を超えた、最後の斬撃さえ凌がれた。縦横無尽に空間から迸り、英雄王を守るように展開する鎖を突破する手段は、今この瞬間どこにも存在しなかった。歯噛みし、後方に跳躍するアーチャーを追うように、息を吹き返したヴィマーナの対空火器が宝具の魔弾を乱射していく。

そして、その一方で。

「——やってくれ」

自らの首を撫でたギルガメッシュ。その指には、赤い血が付着していた。

最後のアーチャーの斬撃、布石に布石を重ねた渾身の一撃は、ほとんど決まりかけていた。英雄王が最も信を置く鎖が、コンマ一秒間に合ったことが、文字通りの間一髪で彼の首を繋いだ。双剣の先端は彼の首に届き、そこに僅かな傷を付けていたのだ。

今の攻撃で一時的に手札を消費しきったのか、半自動で放たれている宝具投射や魔杖による遠隔攻撃を、アーチャーは迎撃ではなくひたすら動き回ること回避し続けている。再び手札が揃うまで、受けの構えを取るつもりなのだろう。

ゲイ・ボルクによる初手の必殺狙い。三度に亘る神造宝具の打破。そして、鶴翼三連と聖骸布による畳み掛け。この期に及んでは認めるしかない。追い詰められているのは、ギルガメッシュの方だった。

このまま戦いを続けられれば、いずれ同じ展開になる。アーチャーの奇襲をどこかで処理

できなくなれば終わりだ。治癒宝具や蘇生宝具があることぐらい、アーチャーはどうに読んでいよう。それを上回る手を、敵は確実に打ってくる。

「これが現代の神の力か。少々、我も慢心が過ぎたらしい」

アーチャーだけではここまでの展開にはなっていない。固有結界という切り札は確かに有利だが、ギルガメッシュが本腰を入れれば趨勢がひっくり返る程度のものだ。

聖杯だけでもこんな展開にはなりえない。すべての生命を呪い殺す泥、その総量をしてしても殺すどころか影響を与えることすら叶わなかった規格外が英雄王である。

だが、その両者が手を組んだ時。その脅威は、森羅万象の頂点に立つ英雄王にさえ届く。届いてしまう。

悪神『この世全ての悪』——ギルガメッシュが相手にしているのは、もはや贗作者ではない。復讐者の靈基を持つ、現代に蘇った神靈である。ヒトが作り上げた呪いの塊は、遂に神となってこの世界に顕現していた。

もちろん、アーチャーと半ば一体化しているだけであって、サーヴァントに過ぎない以上その在り方は不安定だ。現実世界に根を下ろすには、サーヴァントでは核となりえない。されど——それが有する力は、神そのものと遜色ない。アーチャーが纏う極大の呪詛は、一種の呪装防壁となっており、低級の宝具であればそれだけで弾いているような始末なのだ。



単なる刃だけではない。この世ならぬ炎を纏う剣、どんな距離でも命中する槍、相手の魔力を奪い取る鎌、空間ごと敵を凍結する刀、どんな防御も貫通する刃、無数の概念が存在する。

百や千、万や億——いいや、そんな矮小な数値では断じてない。過去・現在・未来・並行世界を問わず、人類が作り上げた、あるいは手にしてきた、戦うための技術の数々。宝物庫の中に眠る全ての宝具、全ての財宝が、世界そのものを埋め尽くそうという勢いで顕現していく。英雄王を中心に、果てのない闇夜に広がり続ける刃は、まさに無尽にして無限の権化。

『ゲート・オブ・パピロン王の財宝』。人類の知恵と技術、その全てが蓄蔵される神の宝物庫。今この瞬間も増え続ける神秘の目録、その全力がこれだった。英雄王が今まで見せていたものは、このほんの一滴にも過ぎない。

人類の神話・伝承・物語・知識・技術の全てがここに集結していた。これはもう、人や軍、城や国といった単位に用いられるものではない。神霊の権能に依らず、人の手で世界を滅ぼすための、人類の叡智を積み重ねた宝物にして人類という種族の縮図。これほどの力、これほどの財を統べられるのは、天上天下に唯一人であろう。

究極の一振りから数打ちに至るまで、全ての財を召喚したギルガメッシュ。彼の在り方の象徴、最強の軍隊を従えた英雄王は、その全力を以て号令を下し——。



”天地波濤す終局の刻”——!

——その光景を、アーチャーは確かに見ていた。

想像を絶する数の宝具展開。常に油断と慢心に満ちた英雄王、彼の本気の全力は、大半の感情を喪失した今のアーチャーさえ背筋を凍らせるものだった。

どれほど強大な敵であろうと、あの力は圧倒する。何故なら、英雄王の背後に並ぶ武器こそは人類そのもの。まさしく人類全てを統べる絶対王者であり、あれが敗れる時は人類という種が滅びる時だ。贗作者フェイカー風情が届くものではない。

だが、彼は贗作者、武器の偽物を作り出すことに特化した英霊。そしてこの空間、アンリミテッド・フレイドワークス『無限の剣製』は、宝具の複製と貯蔵に特化した要素のみで構成された世界である。数限りなく増えていく宝具たち、その全てを、つぶさに見たアーチャーは片端から複製していく。人間の処理能力が到底及ぶ領域ではないが、見ただけで複製するという固有結界の特性と、聖杯による魔力供給が下支えとなった。

腕を振るアーチャー。呪いを引き出しすぎたせいで、その体は真つ黒に染まり、視認さえ危ぶまれるような呪いの塊——否、悪神そのものと化していた。この神の権能は、あらゆる武器を模倣し、複製すること。彼を中心に、まるで鏡合わせのように、無限の宝具が広がっていく。爆発的な速度で広がり続ける剣たちは、その一つ一つが聖杯の呪いで真つ黒に染まり、投影によって劣化した性能を押し上げるほどの呪装宝具となって

いた。

投影できない宝具もある。『王の財宝』ゲイト・オブ・バビロンのラインナップは無量大で、戦車や戦艦や魔杖、あるいは超級の武器や神造兵装などは模倣のしようがない。その分をアーチャーは、一つの魔剣を百個複製することで補った。全てが一品物の英雄王の宝具と違い、アーチャーの複製品はいくらでも無尽蔵に投影が可能だ。恐るべき威力を持つ聖剣魔剣が、凄まじい呪いによつて強化され、何千何万と複製されて固有結界に広がっていく。固有結界という世界そのものの力によつて、無数無限の贋作宝具を従えたアーチャー。呪われた模倣品を従える現代の悪神は、その全霊を以て呪言を発し――。

「全投影、待機――」ソードパレル・フルバースト 呪装投影・無限掃射!

英雄王の誇る人類軍と、悪神が操る呪いの軍。睨み合う二つの軍勢が、究極の“力”を解放し――

――ありとあらゆる砲火が、一斉に炸裂した。

全てが、割れる。

『王の財宝』ゲイト・オブ・バビロンから放たれた宝具と、『無限の剣製』アンリミテッド・ブレイドワークスから放たれた贋作は、世界そのものを蹂躪した。

あらゆる概念が入り乱れ、交わり、弾き合い、溶け、砕け、裂き、破れ、生まれ、朽

ちる。炎の魔剣は水の刃に打ち消され、光の聖杖は闇の呪いに飲み込まれ、全てを貫く槍は全てを防ぐ盾と相打ちになって砕け、無数の軍勢が次々に激突しては消滅していく。一つ一つが英霊の全力に比する武器たちが、雑兵のように使い捨てられ消えていく。

撒き散らされる破壊が生み出した光景は、「黒」だった。破壊された贗作宝具から溢れ出す呪詛が、毒の霧となって世界を覆い尽くしていくのだ。『天地波濤す終局の刻』と『呪装投影・無限掃射』の激戦により、破壊されかけていた固有結界は、その溢れた呪いで無理矢理に修復されていく。ここは既に剣の世界ではなく、死の世界となっていた。

何もかもがぶつかり、消えていく終わりの光景。座乗する黄金帆船すら呪装宝具の猛打を受け、墜ちていく中、すべてを見ていたギルガメツシュは。

「——裁定の時だ。起きよ、エア」

宝物庫の最奥から、最後の剣を引き抜いていた。

——ごおん、と風が鳴る。

無数無限に打ち砕かれ、闇の中へと消えていく宝具の爆風。その全てを吹き飛ばすように、凄絶な嵐が吹き荒れた。収束する暴風は、剣の使い手目指して飛来する呪装宝具のみならず、自ら展開した宝具群さえも巻き添えにして打ち払っていく。

傲然と回転する神の剣は、一秒ごとにその回転数を早めていた。周囲に満ちる風も魔

力も呪いさえも、自分が従えるべき弱者に過ぎぬと、黒い剣身が飲み込んでいく。三つに別れた円柱は、その一つ一つが大陸どころか、星さえ鳴動させるほど埒外の力を放っている。これこそはヒトの認識せかいより遙か先に神が造りしモノ、世界に始まりと終わりを齎す開闢の剣。

乖離剣が従えるエネルギーは、もう人類の秤で計測できる領域を超えていた。ギルガメツシユとアーチャーが展開した宝具群、その全てに比するか、あるいは上回るほどの力。天地創世の奇跡を演ずるにあたって尚、英雄王は悠然と笑い――。

「貴様には地の理では生温い。天の理を示してやる」

その瞬間、宝物庫に控えていた宝具たちが励起した。

攻撃力強化、攻撃範囲強化、火力強化、威力増大、属性付与、概念強化、筋力上昇、幸運付与、魔力供給、魔力補助――。

防御力低下、回避能力低下、火力低下、威力減衰、属性弱体、概念弱体、筋力低下、不運付与、魔力剥奪、魔力妨害――。

英雄王への強化バフと敵対者への弱体化デバフが、何千何万と重ねられる。同時、ギルガメツシユは宝物庫から供給される魔力と己が生成する魔力、その全てを愛剣に叩き込んだ。既に高速で回転していた乖離剣の刃は、爆発的なエネルギー供給によって超高速で廻り出し、その有り余る力は時空間にさえ亀裂を入れ始めた。

ギルガメッシュの魔力回路が励起し、赤い入墨のような紋様が体中に浮かび上がる。それは体中に黒い入墨を宿し、呪いの塊を宿したアーチャーとは対象的な神々しさ。ほんの僅かなミスで自分さえ滅ぼしうるであろう、創世神話にしか語られぬ神の力を携えて、英雄王は傲然と構えを取る。

「――原初を語る。天地は分かれ、無は開闢を言祝ぐ。世界を裂くは、我が乖離剣！」

これこそはあらゆる「死の国」の原典。世界が定まるより以前、数十億年の昔、この星は生命の存在さえ許されぬ原初の地獄であった。その地獄を切り分け、無から有を作り出し、星にカタチを与えたのが乖離剣である。全ての英霊の頂点たる英雄王が振るう、あらゆる宝具の頂点たる剣。

音も光も時も空も、何もかもが破壊の中に消え去った世界で、唯一煌々と輝ける星。終わりゆく世界の中、天地には我のみと高らかに謳い上げるその様は、英雄王の魂の具現。万象一切を裁定する、究極の王者の姿だった。

「星々を廻す渦、天上の地獄とは創世前夜の祝着よ！」

真空が、竜巻が、大嵐が、雷鳴が、あらゆる天変地異が乖離剣を中心にして沸き起こる。それは騎士王を相手に地上で見せたものとは、文字通り桁が違っていた。発動前の単なる余波でしかないのに、無数の災害、一つ一つが対城宝具さえ凌駕しようかという力が、神罰めいて荒れ狂っている。空間に入るひび割れは、擬似的な時空断層なのか。

因果も次元も時空も世界も、この世の全てを破壊し創造する神の剣。それを振るわれべき対象は、無尽の宝具が激突する終焉の戦場、そこを挟んだ対岸から恐るべき神威を目の当たりにしていた。

「——ッ」

戦慄する。アレには抗い得ないと、見ただけでアーチャーには理解できた。

英雄王が執る最終宝具は、人間に許された力を逸脱している。あんなものが放たれたが最後、この世界は真つ二つに切り裂かれるだろう。

あの武器の外観を模倣するどころか、そもそも解析・理解することすらできない。あれは神霊の大権能がカタチとなったもの、剣という概念に収まらぬものを投影することは不可能。聖剣を投影して抗おうにも、鎧袖一触粉砕されるが運命<sup>さだめ</sup>。

アレに立ち向かうなど愚の骨頂、世界を切り裂く剣に耐えうるには、世界から逃げ出す宝具を用いるぐらいしか手立てはない。そんな超宝具はアーチャーのストックには存在せず、また存在したとしても投影することなど叶うまい。

アーチャー単体ではどうしようもない。故に——。

「力を貸せ、聖杯——対価はくれてやる。既に腐れたこの体、好きなように喰らうがいい！」

聖杯との経路<sup>パス</sup>、その出口を極限までこじ開けた。霊格の損傷など端から度外視、自分







英雄王が今裁定を下す——！

”天地乖離す開闢の星——!!!”

——世界を創造した究極の一撃が、此処に顕現した。

黄金の王が振り抜いた剣は、世界に奈落を生み出した。時空間が罅割れ、因果律が破断し、次元も法則も尽くが崩壊する。神の刃は、森羅万象あらゆる存在を救さず、四方千里を消滅させて虚無の穴へと陥おとしていく。

擬似的な時空断層が全周囲に走り、空間が前衛芸術のような姿に成り果てる。灼熱と極寒、暴虐に満ちた天変地異には、如何なる命も生きられない。この猛威ですら副産物に過ぎず、星を断ち切る斬撃の中央は、紛うことなき絶望の虚無。吹き荒れる暴風は、怯えた世界の慟哭か。

これが天地創造の究極の一、乖離剣エアがかざす真実だった。

地上で振るった一撃など、この武器にとっては単なる児戯。神の刃が秘める権能、それを全力で行使したならば、世界そのものが崩壊してしまう。対界宝具の分類に偽りはなく、それ故にこの剣は普段は真価を發揮し得ない。星の抑止力カも人の抑止力アも、その存在を決して救さず使用者ごと世界から排除にかかるからだ。

しかし、ここは固有結界——この世ならぬ世界の内側。抑止力の対象外となるフィールドにおいて、乖離剣は遂にその奇跡を具現化させた。英雄王が示す創世の真実に、ど



意識を取り戻した時。洞窟に倒れ伏すアーチャーには、体の感覚が存在しなかった。霧がかつたような思考の中、頭を働かせる。ノイズ混じりの記憶は、『この世全ての悪』から力を引き出そうとした瞬間、極限の苦痛と共に途絶えていた。あの瞬間、自分は完全に聖杯の意志に乗っ取られていたのだろう。

自我が消え、記憶が消え、魂魄が消えた。霊基を構成するありとあらゆる要素が、呪いの泥で黒塗りされた。だというのに何故、自分は存在を保っているのか。疑問に思ひ、横たわったまま己の体を見下ろしたアーチャーは。

「——ああ。私の、敗北か」

左半身が振じ切れていることを認識し、自身の死を受け入れた。

左腕も左足も、体からちぎれて消失している。そればかりか、左胸から脇腹にかけても大きく抉られ、そこからは命の水が滂沱と零れ落ちていた。当然、その内にある心臓——霊核が備わった部分も、完膚なきまでに破壊されている。即死していないのは、人間ではなくサーヴァントであることと、彼が持つ単独行動の技能故だった。

先ほどのように、聖杯の呪いで霊基を修復することは不可能だ。これはもうそういう次元の損傷ではない。それ以前に、自身を苛んでいたはずの無尽の呪いは、綺麗さっぱり消滅してしまっている。残ったのは、どうしようもなく損壊し摩耗した霊基のみ。

状況から逆算するに、自分は『この世全ての悪』に飲み込まれ——そしてその悪神は、

英雄王によつて打ち碎かれた。あれだけの呪いを消し飛ばす力など想像を絶している。自分が消滅していないのは、悪神の中核に存在したが故、最も手厚く守られていたからだろうか。それにしても、蒸発していないのは奇跡の領域だろう。

そう結論づけたアーチャーは、血を吐く唇を苦笑いの形に歪める。その奇跡さえ、一秒後の死を先延ばしにしなければに過ぎないというのが皮肉だった。霊核が破壊され尽くした今、アーチャーの消滅は確定事項であり、放置しておいても二分と持たないだろう。既に痛みさえ感じない体であり、残った右手以外は動かすことさえ叶わない。

「偽物にしてはよく戦った。この我に本気を出させるとは、千年語り継ぐに値する栄誉だろうよ。満足して死ね、贗作者<sup>フェイク</sup>」

赤い剣を握った宿敵が近づいてくる。英雄王の体には、傷の一つも残つてはいなかった。

黙つていても消えるだけだというのに、敗残兵相手に念入りなことだと、皮肉げに笑うアーチャー。死に体の彼目掛けて、無慈悲に乖離<sup>エ</sup>剣<sup>ア</sup>を振り上げたギルガメツシュは――

「ぬ？」

――気付いた時には、遅かった。

「貴様、よもやそこま、ガ——!!??」

ギルガメツシユの体が沈む。底なしの影の沼に、ズブズブと飲み込まれていく。

逃げ場などない。荒れ果てた洞窟は、ほんの一瞬で、影が満ちる死地へと変わっていた。足掻く間さえなく、王の玉体は黒い影に沈み——そして、完全に見えなくなった。

「カ、カカ、呵々々々々々々々々々——!!!」

あまりの異常に、辛うじて開けられる右目を見開いて驚愕するアーチャー。その耳に、不快極まる笑い声が届く。首だけを動かして様子を伺うと、離れた場所で、一人の少女が立っていた。

それは、アーチャーが魂を擲ってまで助けようとした少女の姿。しかし、その口から放たれる笑いは、あまりにも不釣り合いな嘎れた老翁の声だった。

外観はあの少女だが、中身は違う。何者かに乗っ取られているか操られていると、アーチャーの頭脳は即断。呪詛に晒され、黒塗りと穴開きだらけの記憶の中、どこかでアレこそが最後の敵だと訴えている。

——ギルガメツシユは一つ忘れていた。

天敵を排除するため、『この世全ての悪』は蓄えた膨大なリソースを注ぎ込んで、アーチャーを核とした不完全体を誕生させた。しかし、そこに注ぎ込んだ魔力資源は全てで

はない。力のほとんどは振り分けたが、聖杯にはまだ『この世<sup>ア</sup>全ての悪<sup>マ</sup>』の本体が潜んでいる。そして、アーチャーとは別の窓口から、その呪いは黒い影として現れることが可能だったのだ。

「力、いかに伝説の英雄王とて、足元を掬われるのは弱いと見えるわ！ 王を殺すのは古来よりこれ、暗殺者と相場が決まっておる。今のでほれ、聖杯に焚べる魂はあと一つよ！

「ご苦労だったのうアーチャー！ おぬしの踏ん張りのおかげで、マキリ五百年の野望が成就しようぞ——！」

マキリ。マキリ・ゾオルケン  
間桐臓硯。

壊れた弓兵に辛うじて残る記憶領域。その名前は、確かに刻まれていた。倒さねばならない、少女を救う上での障害として、アーチャーの脳はその名を記憶していたのだ。今の今まで、呪いの泥の中に埋もれていた名だが、霊核だけでなく呪いも破壊されているせいか、はつきりと思い出した。

『——間桐臓硯は油断できる相手ではない。虫にいつ寝首をかかれるかという不安もある。ここはもう一つばかり、保険をかけておきたいところだ。』

アーチャー。そのために、君はまず、狙った敵だけを葬り去る武器を用意しろ。あの老人は蟲の集合体であり、本体はどこかに潜んでいる。表向きの虫を駆逐することで、

一時的に行動不能には追い込めるだろうが、時間が経てば復活するだろう。

あの蟲に引導を渡すためには、どこかにいる本体を殺さなければならぬ。私の読みでは、それはおそらく——』

それを口にしたのは誰だったか。きつかけがあれば思い出せるかもしれないが、今のアーチャーに記憶を引き出すことは叶わなかった。しかし、重要と断じたその会話だけは、はつきりと記憶している。その時の思考の推移すらも。

アーチャーが投影可能な宝具は、刀剣を基本としたものにこそ限られるが、そのバリエーションは多岐に亘る。この時、会話の主が口にしたような宝具もその中には当然含まれていた。

奇遇にも、それはこの時、アーチャーが用意しようと考えていた武器と一致していた。彼はこの会話の主の裏切りに備えて、速やかにターゲットだけを狙い撃てる宝具を思い浮かべていたのだ。その直後からアーチャーは、己の魔術回路の一本に、常時その宝具の設計図と投影用の魔力を準備させていた。

——そして、それは今なお有効だ。

「呵々、おぬしには褒美を与えねばならぬな、アーチャー！ おぬしを影に取り込むのは容易いが、どの道数分で消える命。最期の時間をゆるりと満喫するがよい！ その灯火が消えた後、おぬしの魂は、儂の悲願の礎にさせてもらうでな。カカ、呵々々々……！」

『助けてください、先輩——』

少女の体で、老人の口が何かを言っている。しかし弓兵の鷹の目は、その頬に涙が伝うのを——ほんの僅かに、異なる声が混じったのを見逃さなかった。それは蟲に操られ、体を奪われながらも、なお諦めぬ少女の抵抗の証だった。

「——待ってろ、桜」

その名前だけは。最も大切な名前だけは、どれだけ自分が壊れようとも、心の奥に残っていた。

弓兵の魂に火が灯る。既に朽ちた蠟燭の、最後の一片が熱くなる。わずか数分だけ残された命、辛うじて動く右腕、残り滓のような残存魔力、その全てを今ここで使い果たすと男は決断した。

「それにしても綺礼め、儂の虫たちを砕いてくれたばかりか、教会の術まで使うとはの。おかげで、動けるまでに時を無駄にしたわ——桜を通じてしか動けぬとは、まっこと不便な有様よ。」

じゃが、それも今少しの辛抱。聖杯の器は儂の手の中、そして器は間もなく満たされる。あの小倅、悲願が成った暁には、ゆるりと縊り殺してくれようぞ——！」

間桐臓硯には蟲の体が存在する。だというのに、今わざわざ少女の体を使って動いているのは、そちらの体が破壊されたからに違いない。メインが破壊されてバックアップ



に移行した——いや、その逆か。表の体が使えなくなつたからこそ、裏の本体が出てこざるを得なかつたのだ。つまり間桐臓硯の本体は、あの少女のどこかに潜んでいる。

事前に聞いていた話と、現状の状況が一致した。そこまでは確定事項だ。だとするならば——少女を操る上で、その命令元は体の中枢になければならない。即ち、脳か心臓のどちらかだ。

壊れた情報を引きずり出す。砕けた記憶を呼び覚ます。少女の性質、臓硯の情報、飛び散つた断片を繋ぎ合わせる。虫の根源は、いつたいどちらに潜んでいるのか——。

「ッ——<sup>トリス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始……！」

最後の投影。それだけで残つた魔力が失われ、早くも男の体が透け始める。しかしその瞳には、決意の炎が燃え盛つていた。

残つた右手に握られたのは、豪華な拵えの黄金の剣。七つの星が描かれたそれには、大層な力は宿っていない。この剣は際立つた神秘も、強大な破壊力もなく、ただ単一の機能だけに特化した武器。

呵々大笑する老翁は気づかない。死にゆくサーヴァントに何が出来てもなしと、高を括つた虫は勝利の美酒に浸っている。そこにこそ、弓兵が付け込む隙がある。

「力、今少し、今少しで肉の腐れぬ体が——ぬ？」

ようやく異変に気づいたのか、少女の顔で醜悪に笑つていた老怪が、くるりとア—

チャーを振り返る。その瞬間、男は逆手に握った剣を投擲し――

「邪悪を祓え、七星剣――！」

一直線に、少女の心臓へと突き刺した！

「ギ――ガ、ギ、ギアアアアアアアアアア――！！！！？」  
キサマ、正気か!? 負け犬の分際で、

桜ごことこの儂を――!?!」

「いや。死ぬのは貴様だけだ、間桐臓硯」

心臓を穿たれ、背を反らして絶叫する老人。だが、その苦悶の声とは裏腹に、剣が突き刺さった部分からは一滴の血も溢れてはいなかった。それどころか、確かに刃に貫かれているのに、少女の体にはまったく傷がついていないという矛盾。

七星剣――それは、古代中国や日本において、儀礼用に用いられた剣の一種である。道教思想に基づくそれは、破邪や鎮護の力が宿るとされ、百金の価値にも勝ると古文書に記されている。アーチャーが投影したのは、かつて目にした現存する七星剣の一つ。

古代に铸造され、人の想念と歴史を積み重ねてきた剣は、時として神秘を宿すことがある。この剣が持つのは破邪の力――善なるものは傷つけず、悪意あるものだけを滅ぼす概念である。悪を祓う力は、少女の心臓に巢食っていた虫の本体だけを貫いたのだ。

「足元がお留守なのは貴様も同じだったな。少女の体に寄生し、人を食らう怪物め。貴様の野望が何かは知らんが、今こそ墓場に入る時だ」

「ガ、ギ——キサマキサマキサマキサマアアアア……！ わ、儂の、この儂の悲願をキサマごときに……おのれ、今一步、今一步で不老不死が——」

「ふん……酷い召喚だったか、最後はまあ悪くない。悪党の死に様ほど見応えのある見世物もないからな——良い断末魔だ、間桐臓硯」

苦痛に悶えて踊り狂う虫の妖怪は、そうしてぐしやりと崩れ落ちた。五百年を生き、人の体を捨て、魂を腐らせながら人間に寄生し続けた妖怪。そのおぞましい体で、幾度も窮地を潜り抜けてきた魔術師は、遂にこの世にしがみつけなくなったのだ。

支配者がいなくなった少女が倒れる。文字通り、憑き物が落ちたように、その表情は苦悶から安堵へと変わっていた。恐ろしい怪物から解き放たれた、その穏やかな顔を見届けて、男はほうつと息を吐く。その体は、もうほとんど粒子になっていて。

「ろくな先輩じゃなかったけど、最後の最後に、少しは助けてやれたか。遅くなって、悪かった。

それじゃ、オレは先に行くよ——達者でな、桜」

最後に、それだけを言い残して。エミヤシロウは、笑顔で戦場を去っていった。

## 37. この世全ての悪

——巨影が迫る。

十メートルを一息で無にする箭疾歩。極め抜かれた体術と、身に纏う鮮烈な殺気が、神父を実体以上に巨大な敵に見せていた。

三秒後の死を幻視する。岩をも穿つ剛拳が、この身を粉碎する確実な未来。拭えぬ恐怖を感じながら、それでも俺の右手は冷静に、重い銃把を握りしめていた。初手の必殺には、初手の必殺を以て応えるのみ。

人差し指を引金に、迫る敵を照星に。まるでそこだけ誰かが乗り移りでもしたかのような正確さで、死を運ぶ担い手を打ち破るべく、流れるように人差し指に力を込める。瞬間、膨大なエネルギーが銃口から溢れ出した。

発砲。

人間を葬るには十分すぎる威力を持つ、9×19mmパラベラム弾。言峰がどれだけ速かろうと、秒間<sup>約400</sup>メートル<sup>約400</sup>メートルを飛ぶ運動エネルギー弾に及ぶ筈がない。バラ撒かれた死の弾丸に、男の肉体は正面から激突し——。

「な——！」

「む？」

その声は同時だった。

銃弾を浴びた言峰は、まともに直撃したにも関わらず、その場から横つ飛びに跳躍した。最短ルートでの接近戦を諦め、一足で数メートルも移動してみせた男の顔には驚き。

一方の俺も、驚愕に口が開いていた。予想より強い反動のせいで、銃弾はやや雑に飛び散ったが、それでも間違ひなく命中したはずなのだ。胴体に複数発当たれば、制圧どころか即死もあり得るだろうに、まるで無傷とはいったいどういうカラクリなのか。

……いや、無傷ではない。言峰の足元には、ほんの僅かだが血が滴り落ちている。だが、あんなものは掠り傷に過ぎまい。魔術を使った様子もないのに、銃弾のダメージをほとんど受けていない理由は。

「防弾チョッキか……！ 神父のクセに、なんだってそんなもん着てやがる」

「女の髪と呪符を練り込んだ特注品なのだがな。それを上回ってくるとは——徹甲<sup>A</sup>弾<sup>P</sup>か。衛宮切嗣め、癪な置き土産を残してくれる」

迂闊だった。考えてみれば、言峰は切嗣の戦術を知っている。銃を使う相手となれば、防弾装備の一つや二つ持ち込むのは当然だ。

だが、ヤツの目論見も完全とはいかなかった。切嗣が用意した銃弾は、防弾衣を想定して貫通力を強化したモデル。言峰の防御を完全に無効化はできなかったが、その衝撃だけでも正面からの突撃を断念させ、血を流す程度のダメージは与えたと見える。

銃弾は必殺の手段になり得ず、防弾衣は想定のパフォーマンスを発揮しない。予想外の事態が発生した硬直は、しかし言峰が走り出したことで崩された。

「シッ——！」

戦闘経験において、言峰は俺より上だ。反応が遅れた俺が射撃するより早く、立ち並ぶ岩影に飛び込んだヤツの手が光る。その直後、空間を裂いて飛来する刃！

「……ッ——！」

短機関銃キャリコを乱射。弾幕を張り、死の刃の射線を阻んで撃ち落とす。ギルガメッシュの宝具掃射、あの呆れるほどの速度と威力を見慣れていたからこそ成せた曲芸。

五十発分の大容量マガジンは、その恩恵を十分に発揮した。だが、刃を迎撃しきった直後、引金から伝わる鈍い空音。

しまった、速射フルオートだとこんなに早く弾切れに……！

「フ——！」

最初からそれが狙いだっただろう。銃からカチンと虚しい音が響いた刹那、身を守る岩から飛び出した言峰は、疾風の勢いで飛び出した。その両手には、先程投擲してき

た刃が握られている。

黒鍵。千年以上もの間、聖堂教会に伝わる概念礼装。聖典の頁で編まれた刃は、対魔に特化し、一部の代行者が用いるソレは吸血鬼の王たる死徒にさえ通用するといふ。人間相手に適した武器ではないが、あんなものを食らって無事で済むはずがない。

こちらの右手の銃は弾切れ。リロードする隙は無し。捨てて投影宝具による迎撃を狙うか——いや、それは悪手だ。言峰の動きは対人格闘術を極めた達人のもの。銃の有りを捨てて白兵戦を挑めばたちまちのうちに手詰まりになる。

考えろ。自分の手札と相手の動き。そうだ、まだ俺には左手が空いている……！

「同調、開始——」

魔術師殺し

銃に染み付いた衛宮切嗣の記憶。利き手と逆の手だろうと、その力量は些かも揺るがない。圧倒的な速度で疾駆する代行者相手に、左腰のホルスターから銃を引き抜く。

メインウェポン短機関銃のバックアップとして、サブウェポン拳銃を装備しておくのは常識。当然読んでいたの

だろう、言峰は両手に握る黒鍵を交差させ、ウィークポイントである頭部と胸部を守りつつ走るが——。

「狙いはそこじゃなく」

照準、発砲。一度上で試射をしていたおかげで、グロツク17を扱う流れは完璧だった。

小刻みに引金を絞り、狙い撃つのは、走っている言峰の両足。切嗣の腕を模倣しただけに過ぎない俺では、細いターゲットへ必中させることは不可能だが、豊富な装弾数がそれをカバーする。数撃ちや当たる、の具現だ。全力疾走中の体、その重心を支える足に、一発でも銃撃を受ければどうなるか。

「ぐ——！」

言峰がよろめく。その瞬間に突進を諦め、防御ではなく攻撃に切り替えて黒鍵を投擲してきた言峰は、そのまま転がるように近くの岩陰に滑り込んだ。拳銃を連射して牽制しながら、身を竦めて悪質な置き土産を躲し、鏡合わせのように俺も手近な岩の後ろに身を隠す。

ここは概ね平坦な地形だが、地下洞窟という立地のせいか、そこかしこに隆起した柱やら岩やらが並んでいる。これは俺にとつてもヤツにとつても有効に使える武器だ。

稼いだ時間のうちに、銃の弾倉を交換しながら、こちらの手札と敵の性能を分析。

俺が持つ装備は、短機関銃、拳銃、破片手榴弾フラググレネード、閃光音響手榴弾スタングレネード、投影魔術、そして最後の切り札。

言峰が持つのは防弾装備と黒鍵、対人格闘術。遠坂の父に師事していたというのなら、一定程度の魔術も使えるだろう。

体格、戦闘経験、格闘技術、いずれにおいても俺は劣る。ああいう相手は狙撃か暗殺



で仕留めるのが一番だ。こうして正面からやりあっている時点でこちらが不利であり、近づかれれば負けると直感する。

9 mm 弾では有効打にならない。アサルトライフルの 7. 62 mm 弾か、対物狙撃銃の 12. 7 mm 弾でないと言峰の防御は抜けないが……それだけの火力を出せるのは、切嗣が残してくれた最後の切り札のみ。投影魔術を組み合わせて、なんとかやっていくしかない。

「どうした。来ないのならばこちらから行くが」

洞窟に声が響く。そこには、優位に立っていることへの驕りも油断も感じられない。言峰は代行者として、淡々と獲物を仕留めようとしている。

そう。これは狩るか狩られるかの殺し合いだ。サーヴァントではない、人間相手の戦い。だが、現代社会では禁忌とされる行為に、今の俺は何ら嫌悪感を抱いていない。そんな余分を容れる隙などなく、精神を鋼に変えたかのように、思考を冴え渡らせて敵を討つ術を模索する。あるいはこれが、衛宮切嗣の日常だったのか。

ならば教えてやる。魔術師殺しの前に、狩られる獲物はどちらなのかということを一

「待たせたな。今行ってやるから待つてろ……！」

岩陰から飛び出す。両手に握るのは、ピンを外した破片手榴弾。

言峰が隠れる場所を左右から挟み込むように、山なりに手榴弾を投擲。爆発まであと二秒、車両さえ吹き飛ばす現代火器の力を思い知れ……！

——爆裂。

トリメチレントリニトロアミン<sup>R</sup>、トリニトロトルエン<sup>T</sup>を混合させた軍用爆薬が牙を向いた。半径5メートル以内の人間を即死させる爆風と、半径15メートルを蹂躪する鉄片が吹き荒れ、人が辛うじて身を隠せる程度の岩が砕け散る。ならば当然、そこに潜んでいた言峰も木っ端微塵になっっているはずで——。

「……！」

上空に殺気。見れば、何メートルも飛び上がっていた言峰が、猛禽類のように降下しているところだった。人外の跳躍力によつて、ヤツは手榴弾の殺傷範囲から逃れたのだ。

……そうだ。逃げ場はそこにしかない。言峰の身体能力であれば、そう出ることには分かつていた。一手先の死を避けるために、ヤツは自ら、逃げ場のない空中という牢獄へ飛び込んだ……！

手榴弾<sup>M</sup>を投擲した直後、引き抜いていた短機関銃<sup>キヤレコ</sup>を右手で構える。胴体にはほとんど効果がないが、無防備な頭部であればどうか。50発分の徹甲弾<sup>A</sup>、防げるものなら防いでみる！

「喰らえ——！」

連射、連射、連射。

硝煙と藥莢が舞い、大量の弾丸が暗殺者へと殺到する。暴力の具現は、躲しようのない敵へ過たず収束し——

「な……っ!?」

すり抜けた。

まるで悪質な手品のように、弾丸は言峰の体を通り抜けていった。目を疑った直後、銃弾に貫かれた男の体は霞のように消えていく。これはまさか。

「幻影魔術か——！」

視覚に作用するものか、それとも空間に作用するものか。カラクリに気づいた瞬間、透明なボールを剥がしたかのように、空間に無傷の言峰が現れる。距離は至近、銃による迎撃は間に合わない——！

「フツ——！」

「トレス投影、開始……！」

振りかざされる黒鍵。刹那の判断でキャレコを手放し、空いた手に黄金の剣を投影。神速の刺突に、辛うじて防御が間に合った。

が、安堵したのも束の間。渾身の力で握りしめている双剣が、見る見るうちに押し込

まれていく。こいつ、どんな馬鹿力してやがる……!」

「ぐ……教会じや魔術はご法度のはずだろ! 神父のくせに、妙な手口を使いやがって……!」

「毒を以て毒を制すという言葉があるだろう。埋葬機関の面々には、魔術を極めた者もいる。

私のこれは所詮猿真似。師に及第点をもらった程度に過ぎぬが——未熟者相手には、これでも十分なようだ」

言峰の口元には笑み。直後、足元に地震のような揺れが走り——途方もない剛力が、握った双剣を弾き飛ばした!

「——ッ!?!」

震脚。

足を踏み鳴らした反動によって推進力を発生させ、打撃の威力を底上げする八極拳の技の一つ。言峰はそれを鏢競り合う黒鍵へと応用し、こちらの防御を打ち砕いたのか。

想定外の使用をしたためか、言峰の力に耐えられなかったのか、ヤツの黒鍵はへし折れてしまっている。しかし、八極拳使いにとつてそれが如何程の問題になるうか。武器を捨てた言峰の拳は、こちらの肺腑を打ち砕くべく握り込まれている……!」

「——トレス投影」

判断が速い。動きが速い。俺が一手読む間に、言峰は二手目を放っている。これが聖堂教会代行者、死徒さえ屠る怪物の疾さか。

アーチャーと対峙した際は、相手の思考が、動きが読めるという優位があつた。だが、この男にそんなものは望めない。俺にできるのはただ一つ、少ない手札を組み合わせることのみ――。

「開始……！」

黄金剣の再投影。間一髪間に合つた宝具に、戦車砲めいた秘拳が炸裂する。金剛八式、衝捶の一撃。

腕ごと弾け飛んだのではないかという衝撃で、後方に体が薙ぐ。手から剣が吹き飛ばなかつたのは、ほとんど奇跡の領域だ。なんとか踏み留まってカウンターを放とうとするが、その瞬間にはもう、言峰の擺脚はいきやくが右手の剣を弾き飛ばしていた。

蹴りを放つた直後に軸足を入れ替え、渾身の右たんきやく脚が受けに回つた左手の剣を粉碎する。急造の投影品とはいえ、たつた数撃で宝具を砕くなど、なんて馬鹿げた戦闘能力……！

「……なくそ——！」

髪の毛を数本持つていかれながら、放たれた川掌をギリギリ躲し、黄金より貴重な一秒で双剣を再投影。続けざまに繰り出された頂肘を凌ぐが、もう余裕なんて一ミリも

残っていない。圧倒的なまでの近接戦闘能力、このままでは一分と保たずジリ貧になつて押し負ける。

タイプは違うが、この男の拳術であれば葛木とも五分に戦えるだろう。つまり言峰は、サーヴァントとさえ殴り合えるほど桁外れの技量の持ち主だ。接近戦に持ち込まれた時点で勝機がない。

俺の勝ち筋は遠距離戦だ。言峰が黒鍵の投擲以外に手札を持たないのに対し、こちらには銃も手榴弾も投影宝具もある。なんとしても、この絶望的な距離から逃げ出さなければいけないが——機関銃のような連続攻撃に、こちらの対処が間に合わない！

「嘖ッ——！」

右の剣が弾かれた途端、伸び切った腕に言峰の左手が添えられ、動きを封じると共に右手の突きが稲妻の速度で迫った。左手の剣を合わせて凌ぐが、コンクリートさえ砕きそうな力に押し負け、後ろに二歩退かされる。これ幸いと距離を取ろうとするも、それより早く言峰の活歩がヤツの体をゼロ距離に保つ……！

ダメだ、言峰の攻撃範囲から逃れる隙がない。近づかれれば負けるという当初の予測は正しく、間合いの差こそが俺とヤツの勝負を決める。だというのに、ランサーのような機動力も、ライダーのような移動宝具も持たない俺には切れる手札が——待てよ、宝具？

「ええい、一か八か！」

何度目になるかもわからない言峰の魔拳を、双剣を重ねて防御。攻撃がヒットした瞬間に目を瞑り——直後、拳を受けた宝具を自爆させる！

——轟音。

途轍もない爆風と衝撃波に、俺と言峰の体が、それぞれ真逆の方向に吹き飛ばされた。十メートル以上吹き飛んだ体は、岩の大地を無様に転がり、受け身を取ることさえ叶わず肺から息が押し出される。

宝具に込められた魔力を暴走させて自爆させる禁じ手の中の禁じ手、アーチャーの必殺技の一つである『壊れた幻想』ブローケン・ファンタズム。手榴弾で自爆するに等しい暴拳に、地に伏せた全身が悲鳴を上げていた。

頭はぐらぐらと揺れ、耳にはキーンという嫌な音。全身は擦り傷で血だらけだし、この分だと骨に罅が入っていてもおかしくない。せつかく治療してもらったばかりなのに、俺の体はあつという間にボロボロになってしまった。

だが、言峰の攻撃をまともに受けていれば、こんなものでは済まなかっただろう。体中の苦痛信号を無視し、ゆつくりとその場に立ち上がる。今の一撃で、ヤツにどれだけの手傷を負わせたか、一刻も早く確認しないと。

「ぐ、っ——よもや己が武具を自壊させるとはな。殺されるよりも早く死に急ぐとは、お

まえは自殺志願者かね、衛宮士郎」

二十メートル以上は先だろう。ふらつく視界でどうにか伺うと、林立する岩柱の一つに叩きつけられていた言峰が、よろよると立ち上がるところだった。傍目に見ても俺に負けず劣らずボロボロの男は、大きく肩で息をしている。

『壊れた幻想』は、半ば博打ではあったものの、何の勝算もなしに使ったわけではない。あんな至近距離で炸裂させる以上、どうあつてもこちらの反動ダメージは防げないが、爆発の指向性はある程度操作できる。ヤツの意識が攻撃に向いていたところに、まともに奇襲を喰らわせながら、自分の被害は最小限に抑えたのだ。あれで決着がついていてくれれば幸いだったが——歴戦の代行者は、そこまで生ぬるい敵ではなかった。

「冗談。人類全てを巻き添えに自殺しようとしてるヤツなんか言われたくないね」

怪我を負い、まだ聴覚が少しおかしいが、両手も両足も動く。この体はまだ戦えると、自身の機能を再確認。

一方の言峰は、爆発をまともに受けた右手がほとんどちぎれかかっていた。頭部からも流血していて、右目は流れる血で塞がれている。防弾装衣も焼け焦げ擦り切れていて、当初ほどの防御能力は見込めまい。事実上、言峰の戦闘能力はここに来て半減した。しかし、こちらにも短機関銃を失い、拳銃の残弾も残り少ない。破片手榴弾も使い切り、残った武器は閃光音響手榴弾が一つと文字通りの切り札だけ。あとは投影魔術でやり



くりするしかない。

これでヤツとの戦力差はようやく五分か——いや、それでもまだこちらが不利だろう。ヤツは右手一本と右の視界を代償に、両足をほぼ無傷で耐え凌いだ。機動力が奪えなかった以上、再び距離を詰められれば一卷の終わりだ。同じ手札は二度も通用しない。

無表情に血と肉の塊になった右手を見下ろすと、激痛を感じさせない冷徹さで残った左腕を握り、突進の構えを取る言峰。それに合わせるようにホルスターからグロツクを引き抜き、弾倉に異常がないことを確認。遊底を引くのと、ヤツが走り出すのは同時であり——第三ラウンドは、またも遠距離から始まった。

「喰らいやがれ……！」

右手でグロツクを連射、連射、連射。9mmパラベラム弾の豪雨を、残った左腕を掲げて盾にした言峰が突っ込んでくる。人間を制圧するには十分すぎる火力でも、代行者の肉体と防弾装衣は物ともしない。全身を釣瓶打つ衝撃も何のその、言峰は足さばきすら読めぬ挙動でたちまちに五メートルを詰めてみせた。

これが効かないことは先刻承知だ。腕一本を削がれようと、代行者の能力は攻防とも遥か格上。本命はそちらではなく、左手に握った筒状の物体にある。

拳銃の狙いを上半身と頭部に集中させ、左腕にそこを防御させることで、もともと半

滅していた視界をさらに制限。残り十五メートルまで言峰が迫ったところで、ヤツの視界外から左手に握った物を投げつける。どういふ感覚器官をしているのか、大きく跳躍して投擲物を回避した言峰だったが、次の瞬間。

——バァンッ！

太陽が炸裂したような光と音が、宙に跳んだ言峰の体を打ち据えた。防弾装衣を掲げて攻撃に備えていた言峰だったが、光と音を防ぎ切れることは叶わず、着地に失敗して大きく体勢を崩した。

閃光音響手榴弾スタングレネードが生み出す、100万カンデラの閃光と170デシベルを超える轟音。本来は閉鎖空間で人員の制圧に用いられる非致死性兵器だが、これを受けた人間はしばらくの間視聴覚を完全に封じられる。

安全圏であるはずのこの位置で、備えていても頭がぐらつくほどの衝撃だ。よろめき、片膝をついた今の言峰は、まともに周囲を知覚することさえ叶うまい。いかに代行者とはいえ、復帰に数秒は要するはず。

——ここだ。千載一遇の好機。ヤツを仕留めるならここしかない。

拳銃を戻す暇さえもどかしい。右手を離してグロックを捨て、コートの内側に提げていた、最後の一挺に手を伸ばす。切嗣が残した最後の遺産、その一撃を以て、無防備な神父に引導を渡そうと——。

「——え？」

ふと、視界の端になにか白いものが見えた。こちらに迫ってくるそれに、反射的に左腕を掲げた直後、肉を抉られる強烈な痛み！

腕を貫く赤い衝撃に、切り札を引き抜こうとした動作が強制中断される。見れば左手の中央、骨の合間を縫うようにして、深々と刃が突き刺さっていた。

「が、あ——!?」

鮮血が流れる光景を直接見たことで、受けた傷の実感が強まったのか。目の前が真っ赤になったが、歯を砕けそうなほど食いしばって耐え凌ぐ。あの野郎、いつ黒鍵を投擲していやがった!?

「言峰、てめえ……!」

「軽率に抜かぬ方が身のためだぞ、衛宮。下手に黒鍵を引き剥がせば、一気に血を失うことになる。失血死が好みであれば止めはせんがな」

ふてぶてしく笑い、言峰がゆるりと立ち上がる。ほんの数秒で、ヤツはもう衝撃から回復していた。

罠に嵌めて確殺するはずが、逆にこちらの片手を奪われた。あまつさえ、言峰にはわざわざこちらに助言する余裕まであった。俺とヤツの間にある、途方もない戦闘経験値の壁を感じる——宝具の爆破で深手を負わせられたのは奇跡に近いだろう。

と。なんの感情もなくこちらを睥睨していた虚無の瞳が、唐突に俺から視線を逸らした。何を見つけたのかと、痛みを堪えて警戒を深めると。

「ふむ。失血を待つのも一興とは思ったが——どうやら、悠長に事を構える時間はないようだ」

何を、と問い質そうとした刹那、地面が大きく鳴動した。洞窟全体が軋むような揺れに、足がもつれて転びそうになる。

地震ではないと直感する。では何者かの介入か。だが、この場には俺と言峰しかおらず、他にあるのは大きくそびえた大聖杯だけ——まさか。

はつと気づいて振り仰ぐ。洞穴の最奥にそびえる構造物が視界に入った瞬間、それと目が合った。

「  
」  
何かが、俺を見ている。

広大な洞窟にあつてなお、存在感を主張する大聖杯。その内側に、どす黒く染まった強烈な悪意を感じる。内にいる何者かは、明らかに外を凝視していた。

ぞつとするような感覚。ただ見られているという感じがあるというだけでこの異様だ。あの中に潜むモノが外に出れば、見るだけで狂死しかねない。その前にあれを滅ぼさなければという焦りに、背筋に冷たい汗が滴つたのがわかった。

だが、そんな俺を嘲笑うかのように。

「——え？」

びしり、と空間に罅が入る。

まるで子供が紙に描いた落書きのように、大聖杯の手前、洞窟の中空に歪な円状の何かが現れた。ブラックホールめいて黒いそれは、球というよりは穴に近いか。呼吸さえ忘れて異様さに見入っていると、穴の内側がうねるように動き——そこから、漆黒の泥が溢れ出した！

「な——何だよ、あれ……！」

「ほう。残るサーヴァントが少なくなつたからか？ 正式な儀式もまだだというのに、もう門が開きかけるとはな。『この世<sup>ア</sup>すべての悪<sup>リ</sup>』<sup>マ</sup>は、よほど急いで生まれたがついてると見える」

どくん。どくん。どくん。

幻聴か、それとも実際に音が響いているのか。大聖杯が、脈打つように揺らいでいる。その鼓動に應じるように、見上げるような高さの穴から、どす黒い泥が地面に落ちていく様子は——

——十年前の、炎の夜と同じだった。

「前回は溢れた泥が街を焼き払つたものだが、此度はそこまでの勢いは見られんな。手

順を踏まねば、やはりこぼれ落ちるのは断片程度か」

吐き気を堪える俺を一顧だにせず、自らの流血にさえ無頓着に、異常な光景を眺める言峰。その間にも滴る黒泥は洞窟に滴り続け、侵食された地面は、まるで酸でも浴びたかのように嫌な煙を上げていた。あれに生物が触れればどうなるかは想像に難くない。

見ている間にも溢れた泥は増えていく。あつという間に黒く禍々しい池が出来上がり、それに留まらず、四方へ川のように泥が流れていく。つて、呑気に見ていられる状況じゃない、このままだとじきに俺たちまで飲み込まれる……！

「アレは私にとつては福音だが、おまえたちにとつては呪いとなる。一度外へと溢れ出せば、この星を地獄が覆うだろう。『この世すべての悪』の誕生は近い、止めたければ急ぐといい」

「おまえ、他人事みたいに言いやがって……い！」

「実際、私にとつては他人事だ。私は『この世すべての悪』の誕生を見届け、その果てにある答えが知りたい。その過程でどれほどの副産物が生じようと、私の知りうるところではない——いや、より多くの悲劇が生じれば、心が満たされる糧にはなるか。

十年前の火災は悪くなかった。無念のまま朽ちる人間の叫び、苦痛に泣き喚く人間の絶望——あれほど心を躍らせるものはない」

言葉を失う。口元に笑みを浮かべ、朗々とそう語る神父の姿はあまりにも異様だつ

た。

教会で説法を解くのと同じように、いつそ神聖ささえ感じる素振りまで、言峰は地獄を愉しいと語っている。自分の行動でどれだけの犠牲が生じようと、こいつは本心から何の痛痒も感じていないのだ。相互理解など望みようもない、人類社会に対する侵略者。

一刻も早く息の根を止め、聖杯を破壊するしかない。しかし、どうやって。短機関銃キヤリコも、拳銃グロックも、手榴弾も使い果たした。俺に切れる手札といえば、他には。

「さて。まだ私と戦うか、衛宮士郎。おまえと私の間には、未だ埋めがたい差が横たわっている。渾身の隠し玉は、私を葬るには一手不足だった。状況を覆す手立てが、おまえには残っているのかな」

皮肉げに笑う言峰。ほとんど嘲弄に近いそれを、殺意を以て睨み返す。

俺と言峰を隔てる壁。その高さを埋めるための手札。かつての切嗣にはあつたはずのものが、今の俺には届かない。貫かれた左手を庇いながら、俺は窮地に立たされていくことを認めざるを得なかった――。

\*\*\*

「ここが一番奥ね。あれが冬木の大聖杯か……なんて言うか、見るからにやばいって

う雰囲気出してゐるわね」

山の地下とは思えぬほど広大な空間、そして中央で禍々しく聳える大聖杯の威容を見て、凜はふんと鼻を鳴らした。遠坂家が作成に関わったというアーティファクトだが、おそらく直に目にした人間はかなり前の先祖まで遡らねば見当たらない。普段であれば、魔術史に残るであろう偉大な功績を垣間見て感慨の一つでも抱いたかもしれないが、今の凜にそんな殊勝な気持ちはなかった。

「遠巻きに見てるだけでも危険物の臭いがぶんぶんするわ。これ、何百年もこのままだったのかしら。この有様を見たら、父さんでも聖杯戦争を止めめに動いたでしょうね」  
 「かつて戦った魔竜、ヴォーテイガーンを思い出します。昼でありながら夜の帳に覆われ、光を食らう影の化身。ここまで悪の気配が強まっているということとは、『この世すべての悪』の力が増しているのでしょうか」

凜に続き、洞穴から姿を現したのはセイバーだった。ギルガメッシュとの死闘でずたずたになっていた傷や服装は、強力な自己再生能力によって修復されている。凜よりも一回り高い、大人の体格になった彼女は、その腕に一人の少女を抱えていた。

「いよいよラスボスってわけね。もう悠長に調査するなんて言つてられる段階じゃないわ、こんなの。」

「ご先祖様に怒られそうだけど、セイバーが言ったとおりなら、あれを放っておくわけ



にはいかない。セイバー、あなたの宝具で大聖杯を破壊できそう？」

「万全の状態であれば造作もありませんが、先の戦いの傷が重く、当面の戦闘は難しいかと。申し訳ありません、凜」

「しようがないわよ、相手が相手だもの。まさか、アーチャーの正体が人類最古の英雄王だったなんて……土郎のやつ、またとんでもないサーヴァントを呼び出したわね。暴君で有名な英霊だもの、そりゃああれだけ偉そうなはずだわ」

地下洞窟を抜けてくるまで、セイバーは凜にこれまでの経緯を説明していた。言峰の攻撃で人事不省に陥っていた凜はそれ以降の状況を知らず、セイバーの話と状況からの推察でようやく何が起きているのかを理解したのだった。

「わたしが綺礼と戦ってる間に、土郎とギルガメッシュは敵のアーチャーを撃退。わたしを助けに戻ってきた後、そのまま柳洞寺に殴りこんでセイバーと交戦、そして今に至ると。」

それにしても、ここに来るまで静かすぎたのは変よね。途中で倒れてた桜を助け出せただけで、土郎たちも綺礼たちも見当たらないし、罠の一つも置いてないんだもの」

「広場らしい場所で激しい戦闘の痕跡がありました、サーヴァントの姿はありませんでした。状況から見て、戦闘が起きてからは時間が経っていないようですが……なにか、私たちの予想できない事態になっているのかもしれないですね」

道中、大聖杯があるこの終着点に近い広さのホールがあったのだが、そこは怪獣でも現れたのかというような凄惨な有様に成り果てていた。明らかにサーヴァントの力が振るわれたと思しき空間は歩くことすら困難で、洞窟全体が崩落しかけており、埋もれていた奥へ続く道はセイバーの力がなければ切り開けなかつただろう。

凜たちは知る由もないが、ギルガメッシュとアーチャーの激闘が現実世界ではなく固有結界に推移したことで、彼女たちは二人と遭遇せずに移動することができていた。凜とセイバーが塞がれていた道を進もうと奮闘している間に、固有結界の解除場所がずれたことで、広間ではなく奥へ続く道の途中で決着がついていたのだが、その後に見れた二人は何故か桜一人が倒れている光景に首を傾げるだけだった。

「こういう時は闇雲に動くよりも、まず味方を探して合流しましょうか。セイバー、ここからなにか見えたりしない？」

「……凜、あちらを」

セイバーが洞窟の一角を示す。凜がそちらを見ると、洞窟内に隆起している岩場の上に、白い人影が横たわっていた。

「イリヤスフィール？　なんであんなところに……助けに行くわよ、セイバー」

そう言うが早い、魔術で強化された脚力で走り出す凜。片手に気を失ったままの桜を抱え、不測の事態に備えてもう片手に聖剣を召喚すると、セイバーも彼女の後に続く。

誰にでもよく見えるような位置に、小聖杯であるイリヤスフィールが一人だけぼつんと寝かされている。明らかに臭い状況に、セイバーは警戒心を最大限に高めていたが、何の妨害も受けずたどり着けてしまったことに肩透かしを受けた気分だった。

「イリヤスフィール、大丈夫？ 怪我はない？」

セイバーが周囲を警戒する間、凜がイリヤスフィールを抱き起こす。桜の方は未だ意識不明だが、こちらは単に寝かされていただけのようで、凜が体を数度揺すると薄つすらと白い眼が開いた。

「ん……リン……？ 無事、だったの……？」

「それはこっちの台詞よ。大丈夫？ あの後、何があったの？」

「コトミネに捕まった後、ヘンな薬を嗅がされて……その後から、ずーっとぼんやりした感じが続いて……。ごめんなさい、よくわからないの。コトミネと、誰か……おじいちゃんみたいな人が言い争ってるみたいな音は、ちよつとだけ聞こえたんだけど」

「おじいちゃん？ それって、臓硯のことかしら。綺礼と言い争ってた……？」

言い争う言峰と臓硯。予想されていた敵の妨害や迎撃がまったくなかった理由。小聖杯という聖杯戦争を左右するキーカードが、一人は洞窟の途中、一人は高台の上への魔術的な意図もなく放置されていた状況。加えて――。

「凜。少し先にですが、虫の死骸のようなものが散らばっています。あれは……？」

背後に控え、周囲を見渡していたセイバーが声をかけてくる。諸々の状況を鑑みた凜は、今までに得た情報を集約し、この不可解な様相にひとまずの仮定を導き出した。

「なんとなく、状況が見えてきたわ。手を組んでいた綺礼と臓硯は、たぶん仲間割れを起こしたのよ。こんなに簡単にここまでたどり着けたのも、防衛体制が整っていないのも、そう考えれば納得がいくわ。」

もし臓硯が無事なら、気持ち悪い蟲や罌がうじやうじやあつたはず。それがまつたくないつていうことは、綺礼が臓硯を不意打ちで始末したつてことでしようね」

元より師事していた凜の父や、凜本人、そればかりか聖杯戦争の審判役という立場さえ裏切つた男である。むしろ臓硯と仲良くしている方が不自然だ。

問題なのは、未だ以て言峰の目的が見えてこないこと。セイバーから聞いた、十年前最後に残っていたマスターが言峰だったという証言からして、言峰が聖杯を狙っているのは明白だ。だが、聖杯がとうにまともに機能しない呪いの塊になっている事実を知らないはずがない。兄弟子が何を考えているのか、凜にはさっぱり分からなかったが、ろくでもないことに違いないという確信はあつた。

「敵は一人減つたし、桜とイリヤも助け出せた。向こうが勝手に内輪揉めで自滅してくれたんだからラッキーね。となると、残つた問題は」

「シロウたちとコトミネ、そしてあの大聖杯ですね。凜が言つたとおり、シロウと合流

し、然る後に敵を叩くのが常道でしょう。まずは——」  
 びしり、と何かが割れる音がした。

凜もセイバーも、意識が朦朧としているイリヤスフィールすらも、一斉に音がした方向を振り仰ぐ。すると大聖杯の正面に暗黒の穴が開き、みるみるうちに、そこから毒々しい汚泥が溢れ始めた。赤黒く、人間の断片めいた色合いの泥は、たちまちのうちに容積を増やしておぞましい池を作っていく。

仏教に語られる血の池地獄。血にかかわる罪を犯した者が墮とされるといふ伝承は、あるいはこの光景だったのか。洞窟に現れたそれは、常世全ての生命を殺したいという悪意に満ちていた。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

—— ■ ■。

見るだけで正気を蝕まれるような呪いに、凜の表情がひきつる。魔術師の知識としてではなく人間の本能として、アレは触れてはいけないものだど直感した。アインツベル

ンの森で見た黒い泥は、この呪いのほんの一部に過ぎなかったのだろう。

「つ……………！ 下がってください、凜。あれに触れば英霊とて身を蝕まれる。人間であればひとたまりもありません」

「なに、あの気持ち悪いの…………。もしかして、アレが『この世すべての悪』だっていうの…………？」

じゆうじゆうと湯気を立てる黒い泥。悲鳴を上げて逃げ出さずに堪えているのは、凜に魔術師としての矜持があつたからだ。みつともない姿を見せるわけにはいかない、余裕を持つて優雅たれと、内なる恐怖を押さえつける。並の人間であれば、この時点で発狂していてもおかしくはなかつた。

「冗談。いろいろ罫は予想してたけど、あんなのが出てくるなんて聞いてないつての……………！ ここまで楽できてラッキーなんて思ってたら、とんでもないしっぺ返しを食らわされたわね。」

さつさと逃げたいところだけど、アレが聖杯の中身だつていうなら、放つておいても止まらないわよね。街まで溢れ出したりなんてしたら——

想像した凜が戦慄する。あの泥が洞窟から溢れ出し、際限なく冬木の地を侵していく光景。十年前の大火災すら比較にならない、恐ろしい地獄が顕現することだろう。

臓硯や言峰が聖杯を使えば、そのような未来が待っていることは想像していた。しか

しセイバーが未だ健在な今、聖杯を使う条件は満たされていない——いや。もしギルガメッシュとあの謎のサーヴァントが、既に諸共に斃れているとしたら。

「そのパターンだったらゲームオーバーだけど……それなら、綺礼がごそこそ隠れてる理由はないわね。だとすると、綺礼は衛宮くんとまだ戦つてる……？」

セイバー、『約束された勝利の剣』はまだ使えない？」

「申し訳ありません。私がギルガメッシュに受けた宝具の中には、回復障害の呪詛も多く含まれていたようで、動ける程度まで回復はしましたがそれ以上は……叶うならば、あの泥ごと聖杯を破壊していただくのですが」

「やっぱりダメか。あの金ピカ、女の子相手にちよつとは手加減しなさいっての……！」  
舌打ちする。セイバーの宝具が使用できれば、ここに辿り着いた時点で勝負は決まっていた。

だが、セイバーの存在はそもそもが想定外。単独でこの場所に乗り込むつもりだった凜は、自分一人で決着をつけることを考え、十年間溜め込んだ秘蔵の寶石を全て使い切るつもりで持ち込んでいる。しかし、あの泥をどうにかできたとしても、大聖杯を吹き飛ばすには火力が足りなかった。この状況を打開できるとすれば、それは——

「土郎!？」

藁にもすがる思いで、使えるものがないかと周囲を見渡した時だった。洞窟の反対側

に、見慣れた人影が飛び込んでくる。立ち並ぶ岩場の関係で、ちょうど凧の位置からしか見えない場所だった。

周囲を警戒していたセイバーが、驚いたように凧を振り返る。一瞬前まで洗面を浮かべていた顔には、代わって希望の色が見えている。

「つ——！ シロウがいたのですか!?!」

「うん、あっちの方。よく見えないけど、綺礼と戦ってるみたいね。セイバー、今すぐ士郎を助けに……」

ここから駆け出そうと、凧が前傾姿勢になった時。

「——、——、——!」

洞窟が振動した。

「ごおん」と何かが砕ける音。凧が振り向くと、わずか二十メートルほど先にあった、岩の柱が崩れ去るところだった。いつの間そこにそこまで侵食していたのか、その根本には黒い泥が巻き付いている。

際限なく孔から溢れ続ける泥は、池になり、次いで川になり、洞窟のそこかしこを無遠慮に汚染し続けていた。それだけでなく、広がっていく呪いの川からは、うねうねと触手のような影が無数に生えている。よく見ればその影の先端は、まるで死体のような人間の腕の形をしていた。



その川が、腕が、明らかに指向性を持つて凜たちが立つ岩場に迫ってきている。何かを求めるように伸ばされたどす黒い腕は、さながら悪質なホラー映画めいていた。

「やっば……ちよつとよそ見してる間に何よこれ！ イリヤスフィール、ちよつとまずいことになってるわよ。立てる？ 走れる？」

「っ、ん……ごめんさい、リン……。まだ、頭がふらふらしてて……立ち上がるのはちよつと、無理、かも……」

呪いの川が迫ってくるおぞましい光景に、イリヤスフィールの顔から血の気が引く。必死に立ち上がろうとする少女だったが、体に力が入らないのかその場に倒れてしまい、慌ててセイバーがその腕を支えた。

その、一瞬。僅かな隙を見計らったように、泥から生えた呪いの腕が急に伸長し、触手のように岩場の上へ迫っていた。蛇を思わせるそれは、するするとイリヤスフィールに伸び、その細首を掴み上げようと――！

「Aufh・ren！」

間一髪、凜の魔術が閃いた。

ガンドでは威力不足と見て放たれた紅の宝石が、触手の中心を爆裂で吹き飛ばす。砕け散った黒い腕は、べちゃりと地面に落下し、元いた呪いの泥へと還っていった。

だが、その抵抗を嘲笑うかのようにして、川からは無数の腕が生えてくる。泥が垂れ

流される孔は遠くにあったはずなのに、地上に溢れた地獄は、もう凜たちがいる岩場の根本まで広がっていた。このままぼうっとしていれば、あと五分もしないうちに、凜たちはあの腕の仲間入りをすることになるだろう。

「早すぎる……！ イリヤを狙ったつてことは、こいつら、聖杯の器を逃したくないのね」

広がり続ける黒い川に、凜の頬に冷や汗が伝う。臓硯や言峰による罨、あるいはサーヴァントによる奇襲は想定していたが、こんな星そのものを染めていくような悪夢は彼女の想定を外れていた。

しかし、今すぐ逃げたいという焦燥に吞まれそうになりつつも、凜の頭脳は高速で回転していた。明らかにイリヤスフィールを標的にしていたということとは、『この世すべての悪』は彼女を必要としている。それはつまり、未だ聖杯戦争の最終儀式が完了しておらず、あの泥は小聖杯がなければ存在を保ち続けられないという証拠。

「そういうことか。なら、まだチャンスはある——！ セイバー、悪いんだけど、桜とイリヤを連れて外まで逃げてちようだい」

「な——凜、貴方はどうするのですか」

桜を背負い、イリヤを支えていたセイバーが瞠目する。この状況でサーヴァントを矢面に立たせず魔術師が残るなど、正気の選択肢ではない。いかに凜が才ある魔術師であ

ろうと、あの泥に抗いうるはずがなかった。

「士郎を助けるわ。アーチャーギルガメッシュがどこにいるのかわからないけど、アイツは一人で綺札と戦ってる。このままだと綺札には勝てないし、放っておくわけにはいかないでしょ。士郎を助けて、ついでに聖杯もぶつ壊してくるわ。」

「だけど、桜とイリヤは『この世すべての悪』に狙われてる。わたし一人じゃ、二人を連れて逃げるのは無理。士郎を助ける役と、二人を逃がす役——その割り振りは、こうするしかないのよ」

「——ちよつと待って、リン」

ここで、辛うじて上体を起こしたイリヤスフィールが声を上げた。先ほどよりも意識が鮮明になってきたのか、紅の瞳にはしっかりとした意志が宿っている。

「自らの服に手を当てた彼女が何事かを呟くと、紫のシャツの下半分が輝きを放ち、分離して何か別のものに変形していく。服の半分が消え、インナーの白地が見える寒そうな姿になってしまったのを代償に、イリヤスフィールの真上には小さな鳥が元氣よく羽ばたいていた。」

「これって、あのミニ魔術師みたいな使い魔……?」

「服に仕込んでおいた緊急用だから、あんまり強くはないんだけど。リンの指示に従うようにしておいたから、よければ使って。今のわたしには、これぐらいしかできないか

ら。

シロウをよろしくね、リン。無事に連れて帰ってこなかったら、承知しないんだから」「ありがとう、イリヤスフィール。そういうことなら、ありがたく使わせてもらう。土郎は首根つこ捕まえて引つ張ってくるから、安心して待つてなさい。

——つと、もう無駄話をしてる余裕はないみたいね。セイバー、悪いんだけど、二人のことを頼んだわ」

「承知しました。ご武運を、マスター」

凜との契約はとうに消えているはずだが、セイバーの中では、未だに彼女が主なのか。小さく頷いたセイバーは、二人を抱えあげると跳躍して崖から駆け下りていった。

『この世すべての悪』が暴れている影響か、洞窟はみしみしと軋んでいて、岩の断片がセイバーの体へと降り注ぐ。しかしサーヴァントの身体能力は岩を触れさせることもせず、立ちふさがる黒い泥さえ一蹴して、セイバーは戦場を離れていった。

「——さてと」

三人を見送り、凜が洞窟を見渡す。岩場の周囲は黒い腕が取り囲み、じわじわと水位を増し続ける呪いの川は、あと二分もせず凜のいる場所を飲み込むだろう。自然の暴威に等しい大軍を相手に、凜が頼みとするのは、自分自身と空を舞う小さな鋼の鳥のみ。「いよいよ最終決戦つてわけね。土郎を助けて、綺礼をぶっ飛ばして、この泥も大聖杯も

ぶつ壊す。ここまでコケにされた礼、熨斗つけて返してやろうじゃない！」

「ぼちん、と頬を叩いて活を入れる。戦意に溢れる双眸は、この窮地にあつても些かも怯んだ様子を見せない。実を言えば、傷の治療は未だ完全ではなく、動くたびに凜の腹部には鈍い痛みが走っているのだが、その程度で彼女を止めることが叶おうはずもない。」

懐から取り出したのは、十年魔力を溜め込み続けた秘蔵のトパーズ<sup>黄</sup>。家どころか戦車さえ吹き飛ばして余りある大火力を叩きつけ、泥の中に道を作ると、凜は一目散に走り出した！

「E i n K <sup>灰</sup> . r p e r <sup>に</sup> , i s t e i n K <sup>塵</sup> . r p e r <sup>に</sup> !」

\*\*\*

「——困っているようだね、ギル。助けが必要かい？」

ふと目を見開くと、彼は戦場にいた。

元は森だったのたのであろうその場所には、樹齢数百年はあるであろう巨木が何千とそびえ立っている。しかし今、その大半は焼かれ砕かれ、荘厳な自然は見るも無惨な姿に変わり果てていた。



返すその様は、まるで子供の癩癩を何万倍というスケールに広げたようだった。

ギルガメツシュを認識しているかどうかも怪しい。近づけば無数の腕が殴りつけるように迫ってくるが、それはおそらく反射だろう。明らかに触れてはならない色の腕を切り払い、無闇な接近は悪手であると判断したギルガメツシュは、遠巻きに見ている緑の人影にふと気づいた。

「エルキドウ？ 貴様、何をやっている。この痴れ者を始末する、疾く手を貸すがいい！」

「残念だけど、それはできないんだ。今回、僕の役割は傍観者だからね」

「なに——？！」

ギルガメツシュの目がつり上がる。共に怪物に挑みに来たはずの親友が何を言っているのか、彼の頭脳を以てしても即座には理解できなかった。

長い緑の髪に白い貫頭衣姿のエルキドウは、大木に背中を預けたまま、何ら動く様子を見せない。おかしい。この状況、本来のエルキドウは、ギルガメツシュですら引くほど激烈な攻撃性を顕にしていたはずではなかったか——？

「おまえ——」

もはや無視しきれない違和感に、ギルガメツシュの動きが止まる。しかし、その瞬間を見計らったように、それまで無秩序に暴れていた無数の腕が一斉にギルガメツシュへ

と襲いかかった!

「ぬう……!」

まだ無事な木々や岩を盾にし、黄金の双剣を振るい、怪物の猛攻を躲し続ける。反撃の暇などない。腕を切り落とそうとも叩き潰そうともすぐに再生し、その間に他の腕が押し寄せてくる。

圧倒的な物量差。だが、物量ならば自分が劣るはずがない——いや、自分は何を持つていた? またも襲い来る違和感に、頭の一部が痛みを訴える。足がふらついたギルガメッシュに、赤黒い腕たちが手刀を作り、四方八方から殺到する!

「な——」

間に合わない。わけがわからないまま、無数の腕たちが体を貫き、一瞬で意識が——  
——暗転。

\*\*\*

「——起きなよ、ギル。まだ戦いは終わっていない。このままだと、あの女神の思い通りだよ」

その声で意識が戻る。体を確認するが、手足も胴も無事だ。



周囲を見渡すと、今いるのは森ではなく、広大な平原だった。ぼつぼつと木や川が散在しているだけの、長閑で、いつそ寂しきさえ覚えるような風景だったが、中央にいる異物が雰囲気を塗り替えていた。

それは、巨大な竜巻だった。直径は街一つ分にも及ぶだろうか？ 竜巻の内側には赤く光る目が二つあり、分厚い雲を突き破るようにして一對の角が生えている。雷と風を従えたそれは、単なる自然現象ではあり得ない。それを見た瞬間、ギルガメツシユは再び情報を思い出す。

—— 神々が使役する、最大最強の神獣、グガラシナ 天の牡牛。

—— 女神イシユタルが、ウルクを滅ぼすために送り込んできた刺客。

—— ウルクを守り、あれを滅ぼすために自分は戦わなければならない。

腕を振り、無数の宝具を召喚する。人が敵を滅ぼすために生み出した、剣、槍、矛、槌、といった武具の数々。それらを従え、宙を駆ける黄金の船に飛び乗ったところで、ギルガメツシユは無視しきれない違和感に気づく。

自分は先ほどまで、森ツツの番人ツツと戦っていたはずではなかったか。窮地を脱することができず、敗北した記憶もある。あれは悪夢か何かだったのか？

「グガラシナ——！」

天の牡牛グガラシナが咆哮する。雷が炸裂し、膨大なエネルギーが刃のようにギルガメツシユへ

と押し寄せる。

颯爽と黄金帆船<sup>グイマーナ</sup>を飛翔させ、盾の宝具で雷撃を弾くと、召喚した宝具を撃ち出して猛反撃するギルガメッシュ。炎や風、雷や氷、毒や呪いが巨大な神獣に炸裂するが、あまりに質量がありすぎるせいかまるで効いている様子がない。一方、その間に放たれる暴風や雷撃は、こちらでも数十の宝具を撃ち出さなければ相殺すら叶わない。

埒が明かない、と舌打ちする。攻撃を防ぐことはできるが、怪物の侵攻を止められない。大火力宝具で盤面を変えようにも、怪物の攻撃一つ一つが絶大な射程範囲を誇るせいでまるで隙がない。

この状況を打開するには、最低でももう一人、自身と同格の戦闘能力を持つ存在が必要だ。その考えに思い至った刹那、ギルガメッシュは自分の親友の存在を思い出した。いや、そもそもなぜこの瞬間まで忘れていたのだろう。

「手を貸せ、エルキドゥ！ あの狂牛めを調伏し、恥知らずの女神に躡をくれてやる！」  
振り仰ぐと、離れた高空に緑の人影が浮いているのが見えた。どれほど強大な敵であろうと、エルキドゥがいれば物の数ではない。いつも通り、威勢の良い声を上げたギルガメッシュだが——普段ならば即座に呼応するはずの親友は、なぜか動く様子を見せなかった。

「……？ どうした、エルキドゥ」



\*\*\*

「どっだ、( )は——？」

ふと気づくと、そこは川の畔だった。

穏やかな日差し。羽ばたく鳥の音。魚が跳ねる水しぶき。争いとは無縁の、暇が重くなるような平和な光景が、そこには広がっていた。

怪物も神獣もない、平和そのものといった空間。自分が木陰にいることに気づいたギルガメツシユは、そのまま微睡んでしまいたい気持ちに駆られる。寝転がろうとした刹那、彼は自分が何かを持っていることに気づいた。

「む。これは——」

一見して、何の変哲もない草。しかし、それが途方も無い価値を秘めた霊草であることを、ギルガメツシユは知っていた。この霊草を手に入れるためにどれほどの苦労を重ねてきたのか、記憶の洪水が一気に蘇る。

——何十年という月日を、これを探すために注ぎ込んだ。

——数え切れないほどの危機に晒され、窮地に追い込まれた。

——この世の果てまで訪ねてようやく、自分は勝利を手にしたのだ。

地上の生命に遍く訪れる、寿命という制約。この靈草はその絶望を打ち払う、不老不死という効能を秘めているのだ。これほどの財宝を手に入れた存在は、天上天下にただ一人しかおるまい。

ギルガメツシュの心を充実感が満たす。ウルクに凱旋すれば、民草は喝采の声で迎えることだろう。

だが、今の自分は長い放浪の旅で汚れきつている。そもそもこの小川には、体を清める目的で立ち寄ったのではなかったか。一度荷物置いて、清涼な流れに身を任せよう。

「——ん？」

そう独りごち、川の方を振り向いた時だった。せせらぎの中央に、いつの間にか人影が佇んでいる。その人物を見たギルガメツシュは、怪訝さに紅の瞳を細めた。

「エルキドゥ？」

「——やあ。ついに手に入れたんだね、ギル」

両手を広げ、嬉しそうな表情を浮かべているのはエルキドゥだった。どうして彼がここにいるのか——違和感が過るが、それよりも今は高揚の方が勝る。勝利の証を、ギルガメツシュは高々と親友に掲げてみせた。

「いかにも。これこそが死を打ち破る、神どもが隠し続けた秘宝よ。これでおまえの無

念を晴らすこともできよう——む？」

傲然と語ったところで、何か致命的なおかしさに気づく。自分の発した言葉の意味を確かめたギルガメツシユは、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

彼が不老不死を求めたのは、そもそもエルキドウが呪いによつて殺されたことがきっかけだった。ならばなぜ——

——死んだはずのエルキドウがここに立っているのか？

「それは嬉しいよ。やつと君ノ願いガ叶うんダね」

どろり、とエルキドウの輪郭が崩れる。親友の見た目をしていたのは、どす黒いナニカだった。

黒く禍々しく、赤い血のようなものを滴らせるソレが腕を振るうと、世界が一瞬で変貌した。穏やかな日差しは冥夜に、羽ばたく鳥の音は悲鳴に、魚が跳ねる水しぶきは肉が破裂する血の音に。赤と黒で彩られた、吐き気を催すような地獄が顕現する。

その中央で、エルキドウらしいナニカがにいつと笑った。半月状の笑みが、黒い影の中にはつきりと刻まれる。

おぞましい異常さに、混乱した表情のギルガメツシユが一步退く。周囲で風に揺らんでいた草木が、今や無数の骨や亡者の腕に変わっていることに気づき、秀麗な顔に陰しさが宿る。

「サあ、それを飲みナヨ。ボくの無念ヲ晴ラシテくれるンダロウ？ ソれを飲んで、ボくと同じカラダになロウよ」

真つ黒な異形が、指らしきものを向けてくる。それが指し示すのは、ギルガメツシュが握っていた霊草。

ふと見下ろすと、神々しさを纏っていた緑の草は、赤黒い内臓めいた何かに変わり果てていた。どくんどくと脈打つそれは、まるで心臓を思わせる。それに脚らしきものが無数に生え、手の中をかさかさとい回り始めるに至つては、豪胆なギルガメツシュもさすがに放り捨てざるを得なかった。

「ドウして捨てルンダイ？ それハ君ガ欲シカツたモノだろウ？」

かつて木や草だった腕や骨たちに目が生え、その目が一斉にギルガメツシュを凝視する。赤黒く染まった無数の目は、怒りと嘆きを訴えかけているようだった。

もう一步ギルガメツシュが退くが、背後に何者かの気配を感じる。はつと振り仰ぐと、先ほどまで大木があつたはずの場所には、巨大な顔が浮かんでいた。エルキドウのカタチをした顔だけの異形は、にこつと無垢な笑みを浮かべ——その顔が、まるで酸を浴びたように溶け始める。血と肉の塊になりながら、それでも人の顔らしき形を留めてケタケタと笑うそれは、まさしく悪夢の具現だった。

しかし、常人ならばこれだけで発狂しかねない異常さに、ギルガメツシュは微かに表

情を歪めたのみ。顔の化け物を一瞥した彼は、最初に現れたヒトガタの怪物に向き直ると、ぎろりと鋭く睨みつけた。

「——誰だ、貴様は」

「ひどいなあ。ボクのことヲ忘れてしまつたノカイ？　ぼくはキミのトモだチダロウ？」

「痴れ者が。我が友がそのような口を利くものか」

常軌を逸した世界にあつても、彼は冷静さを失わない。ギルガメツシュの眼は、エルキドゥを騙る存在は偽物であると断じていた。いや、偽物なのはそれだけではなく——

「貴様だけではない。目に見えているものも、音も、匂いも——否、この世界そのものが偽物か。この我を謀ろうとは、思い上がったな！」

状況が把握できない。情報が欠落している。記憶にノイズが混じっているようで、何がどうなっているのか正確には分からない。

だが、そのような些事はどうでも良かった。戦うべき敵は目の前にいる。周囲を未知の怪物に囲まれていようと、ギルガメツシュの胸に恐れはない。あるのはただ、無二の朋友を騙り、友情を愚弄した罪人への怒りのみ。

右手をかざす。魂の半身、英霊としての象徴は、異界めいた空間であろうと関係なく



馳せ参じる。旋轉する神の劍に、巨大な顔も、亡者たちの腕も、明らかに怯んだ様子を見せた。

「ギル、ぼくは——」

「薄汚い口を閉じよ、贗作がッ！　一掃せよ、エア！　この偽物どもに、眞実を知らしめてやるがいい！」

赤い烈風が走る。地を薙ぐ一撃は、彼を取り巻く異形たちを粉微塵に吹き飛ばした。それだけでなく、赤黒く変わり果てていた世界そのものに、割れるように罅が刻まれていく。

英雄王が執る乖離劍<sup>エ</sup>は、世界そのものを破壊する宝具。ボールが剥がれるように、悪夢の光景は砕け散っていき、そして——。

\*\*\*

「おいおい、マジかよ……。せつかくアンタ専用にわざわざステージを作ったつてのに、ぶつ壊して出てきやがった……。どういふ精神<sup>メンタル</sup>してんだよ、アンタ」

天も地もなく、ただ黒一色に染まった空間。その中心に立つ人物は、呆れたように首を振ってみせた。

少年から青年になりかけている、という年の頃。茶色の肌を覆い尽くすように刻まれた黒い入れ墨。頭と腰部に赤い布を巻き、黄色く目をぎらつかせるその様は、およそ尋常な存在ではなかった。

しかしながら、異彩を放つ外観であっても、ギルガメッシュはその顔貌に見覚えがあった。配色こそ違えど、その人物は、明らかに彼のマスターである衛宮士郎に酷似している。

「誰だ、貴様は」

「おいおい、誰だとはぐい挨拶だな。十年前にも一回アンタとは会ってるじゃねーか。もう記憶も思い出せてるだろう？」

英霊でさえ怯むほどの威圧に、謎の人物はケタケタと笑ってみせる。その無礼さは不愉快だったが、今は現状を把握する方が先決と、ギルガメッシュはひとまず誅罰を後回しにした。

先ほどまでどうにも不鮮明だった記憶が、今はすつきりとしている。アーチャーとの激闘の後、突如黒い影に飲み込まれたところから意識が消えているが、その後は先ほどまでの幻覚——いや、幻影を見せる結界の中に囚われていたのだろう。

半神の英霊であるギルガメッシュは幾つかの特殊な能力を持つが、その中には『記憶を忘れることがない』というものがある。言い換えれば、彼の記憶が異常を来すのは外

的要因しかない。そしてこの世界において、今だけでなく、ギルガメッシュの記憶に長らく蓋をし続けていた存在は。

「なるほど、貴様は聖杯——いや、『この世全ての悪』と呼ぶべきか」

「あつたりー。最弱英霊アヴェンジャー、人呼んでアンリマユ。めでたく本邦初登場、つてね」

人を喰ったような笑みを浮かべ、道化師のように一礼してみせる男——アンリマユ。聖杯の中に潜んでいた悪意は、悪神という伝承にはまるでそぐわない軽妙さを伴っていた。しばらくその姿を眺めていたギルガメッシュは、ふむと納得したように頷く。

「察するに、貴様の正体は虚無か。小僧の皮を被らねば、意思疎通すら叶わぬと見た。それで、貴様ごとき偽物が王たる我に何を望む」

「うっわ、一発で正体バラすのやめてくれませんかねえ……これだから王様つてのはおつかねえんだよ。あの女のコの方も、オレの呪いを弾いちやうしさあ……」

肩を竦めてヤダヤダ、と軽く語るアンリマユ。人間のようには振る舞っているが、ギルガメッシュが見抜いたように、彼の内側には何も無い。

もともとアンリマユという英霊は、とある村に住んでいた青年だった。しかし、その村にあった宗教が原因で、人身御供としてありとあらゆる拷問の末に殺されることになる。結果として宗教を通じ、その村を救った「英雄」として、彼は英霊の座の末端に刻

まれたのだ。

人間としての名前は呪術的に剥奪され、人格は生前の苛烈極まる拷問の影響で精神ごとと消滅している。誰かの「殻」を借り、その人格を模倣しなければ人間のように振る舞うことさえできない——それが、彼の歪な在り方だった。

「んで、何が望みって話だっけ。んー……何も無いんだけど、強いて言えばここでオレとお喋りしてもらおうことかな」

「なに？」

「アンタがもつと弱ければ話は別だったんだけど、王様、アンタ強すぎるんだよ」

アンリマユがぱちんと指を鳴らす。すると、黒一色だった世界に、モニターのようなものが現れた。

モニターの中に映っているのは、ギルガメッシュとセイバー。しかし、それは先の戦いの光景ではない。ホールのような場所で、出現した聖杯を背後に向かい合う二人の姿は、第四次聖杯戦争のものだった。

見ている間にセイバーが宝具を発動し、ギルガメッシュは間一髪聖剣の閃光から逃れる。しかしその直後、聖杯の内側から溢れ出した「泥」の中に、黄金のサーヴァントは飲み込まれてしまった。

「本来だったらここで終わりだった。英霊といつても人間である以上、オレの呪いから

は逃れられない。そしてサーヴアントである以上、聖杯には逆らえない。アンタはどうやって、ここで溶けて消えるはずだった。だけど」

シーンが切り替わる。燃える夜の下、黒く濁った泥が破裂する。そこから現れたのは、黄金比の均整を備える完璧なる肉体——サーヴアント・アーチャーが、霊体ではなく肉の体を得て、英雄王ギルガメッシュとして再誕した光景だった。

「アンタは戻ってきた。どうやったのかは知らないが、アンタはオレの呪いに耐えた——いや、そもそも呪いを受け付けなかった。この時オレは、アンタがヤバイやつだつてことに気がついたのさ」

再び指が鳴る。モニターを消したアンリマユは、さて、とギルガメッシュに振り返つた。

「今回、アンタは序盤からいろいろあつたみたいだけど、アレは残念ながらオレのせいじゃない。十年前のどつかのマスターが仕掛けた爆薬が、地震で誤作動したせいで、召喚システムの一部がおかしくなつちまったのが原因さ。ほんとは何十年か後に、この聖杯ごとぶつ壊す予定だったんだらうけど、自然現象で計画が狂つちまったんだらうな。んでまあ今回も、アンタは終盤まで生き残った。アンタがヤバいつてことはわかつてたから、オレもどうかしようって無い頭を捻つたわけさ」

今度は二つのモニターが現れる。一つは柳洞寺跡、ギルガメッシュとセイバーが斬り

合っている光景。もう一つは無限に剣が立ち並ぶ世界、ギルガメツシュとアーチャーが宝具を撃ち合っている光景。どちらも、すぐ直前の出来事だ。

見ているうちに戦いは進み、画面の中で、ギルガメツシュと対決していたセイバーとアーチャーがそれぞれ黒い呪いに飲み込まれてしまう。

「聖杯的にはルール違反なんだけど、だいぶ鼻肩したつもりだったんだぜ？ だけど」

セイバーを包み込んでいた黒い靄が吹き飛ばされる。中から現れたのは、呪いや悪意など微塵も残っていない、輝ける騎士王の威容。

アーチャーを包む黒い呪いはどこまでも膨れ上がり、恐るべき巨人の姿となる。しかし赤い旋風が、その巨人を一刀両断してしまう。

「アーサー王の方はオレの呪いを弾いちまうし、赤いおっさんの方はあんだけりソース使わせてやったのにアンタに負けちまった。正直、もうこりや無理だと思ったよ」

両手を上げてひらひらと振って見せるアンリマユ。どこから取り出したのか、右手にはわざわざ白い布のようなものを巻いていた。

「だけどもあ、捨てる神あれば拾う神あり、つてな。ま、巷だとオレが神サマつてことになってるらしいが」

モニターが消える。ぱちん、と柏手を打つてみせたアンリマユは、どこからともなく現れた椅子に腰掛けて。

「この山に来てからアンタ、オレ対策にずっと宝具を用意してたみたいだけど、赤いおっさんとの戦いでそれも剥がれちゃった。それでこのこ、生身で奈落到ち落ちちゃったんだから、もうさすがに打つ手なしだろ」

白い布が放られる。すると、黒い空間からゆつと触手のようなものが伸び、布を一瞬で飲み込んでしまった。後にはただ、虚無の静けさが響くのみ。囚われた布は、光を見ることなどできはしない。

「そう。アンタはもう、どうやってもここから抜け出せない。アンタを汚染するのは無理でも、体の方から溶かしちまえば話は別だ。おとなしく、オレが生まれるための栄養になつてくれ」

パチン。

今度指を鳴らしたのは、ギルガメツシュの方だった。本来ならば、即座に呼応した無数の宝具がアンリマユを串刺しにするはずだったが——何も起きない。その様子にギルガメツシュの目が細まり、アンリマユはにいつと滴るような笑みを浮かべてみせる。

「そいつは無駄だ。さっきの部屋はちつとばかり特別だったけど、ここにあるのはアンタの精神だけ。自慢の宝具は出禁だし、そもそもアンタ、まともに動くこともできないだろ？」

擲揄するようなアンリマユに、ギルガメッシュは沈黙で応える。彼の言う通りだった。口と、辛うじて上半身は動かせるが、腰から下は黒い鎖のようなもので縛り付けられていた。

この場では誰が囚人で誰が看守なのか、その鎖を見れば一目瞭然だった。不快げに頬を歪ませるギルガメッシュ。

「アンタを相手にするのに、何十年も溜め込んだ魔力はだいぶなくなっちゃったけど、ラッキーなことにアンタは特別みたいだ。英霊三騎分以上の魂なんてマジでバケモンだよ。」

ま、そういうわけで、アンタはここで自分の体が溶けてなくなるまで大人しくオレとお喋りしてくれればそれでいい。や、オレもヒトと話すのなんてもう覚えてないぐらいいろくだからさ、冥土の土産に付き合つてよ。……あ、冥土に行くのはアンタの方だったか」

アンリマユは、これはいけねえ、とふざけて額を叩く。そこには敵意も悪意もまったくない。アンリマユはただ彼の本能として、ただ生まれたいからそうしている。彼は別段、ギルガメッシュに思うところがあるわけではなく、ただ自分が危険だから防衛行動を取り、また自分が生まれるために必要だから取り込もうとしているだけだった。

「つてことで、今回の聖杯戦争はこれにてゲームセット。めでたく俺が生まれて、あとは



人間の皆さんがオレを祝<sup>のろ</sup>つてくれるっていうワケ。

前回はもう少しつとで邪魔が入ったけど、今回は対策もバツチリ。騎士王ちゃん  
は回復できてないし、アンタはここから出られない。前回と違ってアンタの魔力はすつ  
からかんだし、アンタを取り込んだのは端末じゃなくて本体の方」

各サーヴァントと繋がっている聖杯には、戦闘の情報も筒抜けなのだろう。激闘を続  
けたギルガメッシュには、確かにほとんど魔力が残っていないかった。

本来ならば問題にはなり得ない。ギルガメッシュは半神として、騎士王の竜の心臓に  
も劣らぬ魔力生成能力があるし、それ以前に宝物庫には魔力回復・供給用の宝具など掃  
いて捨てるほど有り余っている。しかし、ギルガメッシュが影に飲み込まれたのは、回  
復する暇もない戦闘直後のタイミングだった。

有り余る魔力で無理やり脱出することもできない。また、影の力自体も、今回は聖杯  
と直結しているため脅威度が段違いだ。何をどう見渡しても、八方塞がりの状態であり  
。

「要するに。ゲームオーバーだよ、王様」

首を掻き切る仕草をするアンリマユ。それは明らかかな、勝者の余裕だった。

「さっきの幻覚で諦めてくれるかなーって思ったんだけど、アンタ全然へこたれない、つ  
ていうか幻覚破っちゃやしあ……あれ、わざわざアンタ専用に一生懸命考えて作った

んだぜ？

そんなわけで、しようがないから説明会にシフトすることにしました。どっちにしろアンタの負けは決まってるんだけど、ただ黙っただけつても面白くないし、こういうシチュも面白いだろ？ あれだよ、探偵もので犯人を追い詰める時の探偵みたいなさ。あなたを犯人です！ ……いや、犯人はオレなだけどね？」

赤いバンダナを覆面のようにしておどけてみせるアンリマユ。おもむろに立ち上がった黒い英霊は、動けずに固まっているギルガメツシュに近づくと、馴れ馴れしくぽんと肩を叩いてきて。

「まあ王様、また次回頑張ってくれよ！ アンタはここで負けても英霊の座にカムバーツク、あとは高みの見物だ。もつとも、オレが生まれちまうとこの星は終わっちゃうだろうから、次回があるかどうかはわかんないけどな！」

「——次回だと？」

黙って聞いていたギルガメツシュが、小さくそう呟く。そこには紛れもない、嘲弄の意志が混じっていた。

「やはり偽物は偽物だな。聖杯の中に溶け、そんなことさえ忘れたか英霊もどき。また次があるなどと、そのような情弱な考えでいるから、貴様はいつも敗者の側なのだ」

「敗者ねえ。オレが負け組なのはその通りなんだけど、アンタも大概人のことは言えな

いぜ、王様」

指が鳴る。三度現れたモニターは、その数も三枚に増えていた。

今度映っているのは、ギルガメツシュの記憶にない光景だった。記憶に存在しないにも関わらず自分が映っているという光景に一瞬驚くが、優れた頭脳はすぐに答えを導き出す。

聖杯はサーヴァント召喚に関連して、英霊の座にアクセスする機能を持っている。そして英霊の座とは、時系列や並行世界の概念の上位にあたる、根源の渦に近い場所に存在するモノだ。そこには下位にあたる時系列や並行世界の情報も格納されている。今回の聖杯戦争で、まだ存在していない未来の英霊であるアーチャーが召喚されたのはそういうカラクリだ。

つまり目の前に見えているものも、おそらくは英霊の座に存在する並行世界の情報なのだろう。そう結論付けたギルガメツシュは平然としていたが、その様子を見ていたアンリマユはつまらなそうに唇を突き出してみせた。

「いやアンタ、これ見ても驚きもしないのかよ……まあいいや、とりあえずVTRをどうぞ」

アンリマユが、もったいぶったように腕を振る。三枚のモニターが若干近づき、大写しになる。そこに流れる映像は、数々の『敗北』の光景だった。

——月の聖杯ムーンセルと一体化し、神に等しい存在となった魔性菩薩。その埒外の権能によつて、数千光年の彼方に消し飛ばされるギルガメツシュ。

——地上に現れたイシュタルの謀略で、黄金の宝物庫が封印されてしまう。武器を使えない状況下で、最強ヒュドラの毒に倒されるギルガメツシュ。

——海を、大地を埋め尽くす創世神ティアマト。無限に溢れ出る魔獣に破壊しつくされる街と、神罰にも等しい攻撃に射抜かれるギルガメツシュ。

全英霊中最強の英雄王が、追い詰められ、成す術なく倒されていく。ギルガメツシュという英霊を知る者からすれば信じがたい光景に、アンリマユはひゅーつと下手な口笛を吹いてみせた。

「今度は幻覚じゃないぜ？　これは真正正銘、本当に起きた出来事だ。今回もそうだし、どの世界でもそうさ。王様、いつも倒される側の敗者なのはアンタなんだぜ」

「……………」

「アンタは最強で、オレは最弱。だけど、結局は同じってワケだ。オレたちは英雄だなんだと言われようとも、本当の理不尽には勝てないようになってる、都合のいい悪役なのさ」

ここまで、へらへらと空虚な言葉を重ねてきたアンリマユが。その一言にだけは、微かな感情を籠めていた。自分を嗤わらったのか、それとも他人を嘲笑わらったのか。空虚なガラ

ス玉のようだった眼差しには、その一瞬、僅かに炎が宿っていて。

「だから、今回も残念でしたってコトで。もう諦めてくれていいんだぜ、そうすりゃオレの仕事もラクに——」

「——笑わせる」

ザ、と。

その瞬間、敗北の光景を流し続けていたモニターに、ちらつくようなノイズが走った。ん？ とアンリマユが首を捻った刹那、もう一度、モニターの映像が歪に揺れる。

「次がある？ 倒される側？ 理不尽には勝てぬ？ ——妄言も甚だしい。姿形を騙ろうとも、貴様のそれは上辺だけ。英雄の何たるかを、貴様は何も理解しておらん」

空気が震える。

この特殊な空間、現世と英霊の座を繋ぐ場所に、空気などあるはずがない。だというのに風が吹いたのを、アンリマユは確かに感じていた。

知らず、アンリマユの足が一步退く。そこで初めて、彼は自分に鳥肌が立っていることに気がついた。震えていたのは空気だけではなく、脅威を感じ取った彼自身もだったのだ。

「英雄とは、今の一瞬に命を賭けるものだ。たとえ詰られ謗られ、倒されるべき存在として石に打たれようとも諦めぬものだ。理不尽を超えるために、輝ける魂を燃やすものだ。英雄とは、それ故に奇跡を招き寄せ——それ故に、英雄として名を残すのだ」

面を上げるギルガメツシュ。ろくに身動きもできず、逃げ出すことも叶わぬ虜囚だというのに、王の瞳には些かの諦観もない。

敗北という現実を突きつけられているのに、何故この男の光は揺るがないのか。闇の中にあってなお輝く王氣<sup>オーラ</sup>にアンリマユが一步退いたと同時に、モニターに走っていたノイズが強まり、砂嵐を映し出したかのように乱れ始めた。数秒後、突如としてノイズがなくなる、そこには。

「な——」

アンリマユが絶句する。モニターに映し出されていたのは、先ほどまでと同じだったが——それは『敗北』ではなく、『勝利』の光景だった。

——遠い未来の宝具を使い、神の権能を打ち破ってみせたギルガメツシュ。マスターのバックアップを受けた神殺しの英霊は、ついに魔性菩薩に引導を渡す。

——どのような手段で復活したのか、エルキドゥと二人で進軍するギルガメツシュ。イシユタルを、森<sup>フ</sup>の番人<sup>ワ</sup>を、天<sup>グ</sup>の牡牛<sup>ガランナ</sup>を相手取る英雄王の顔には笑み。

——絶叫する創世神<sup>テイアマト</sup>。花の魔術師が、冥界の女主人が、至高の暗殺者が、その威容を

傷つけていく。皆の連携の末に、英雄王の執る乖離剣が、遂に未来を切り開いた。

絶対的な窮地。圧倒的な敗北。そこにありえないはずの奇跡が起こり、希望が絶望を塗り替えていく。凄惨な悲劇は、いつしか輝ける神話へと生まれ変わっていた。

「貴様が視たとおり、人の世は斯くもおぞましい。裏切りが蔓延り、努力は踏み躪られ、生まれが、育ちが、環境が、運が、あらゆる要素が身を苛む。地獄とは伝承の中ではなく、この現実からこそ存在する。

——だが。地獄の中でも這い上がり、星を掴もうと足掻くものにこそ、真の英雄たる資格がある」

朗々と語るギルガメッシュ。人ならざる神の瞳は、この聖杯戦争においてすら、人の価値を見定めていた。

偽物から本物に成り代わった者がいた。

理想を砕かれ、呪いに侵されても、諦めぬ者がいた。

悲願を踏み躪られ、従者を失っても、それでも戦う者がいた。

生まれの貴賤でもなく、能力の多寡でもなく、ただ意志を以て荒野を切り拓く者たち。英雄王はそういった人間こそを、尊ぶべき民と、価値ある宝だと認めている。

彼らこそが英雄、彼らこそが英霊。ならば、英雄の中の英雄、王の中の王とは如何なる存在か。

「不可能とは凡俗が定義するもの。諦観とは弱者が抱くもの。限界とは偽物の言い訳に過ぎん」

闇が揺れる。絶対者である『この世全ての悪』を除いて、何者も自由に動けぬはずの世界が軋む。ギルガメツシュを縛り付けていた鎖に、徐々に亀裂が入り始める。

当然だ。彼こそは英雄王。神々の世界に終焉を齎し、人類の世界を照らした原初の王。人も神も星さえも、彼の道を阻むことはできなかつた。いわんや——「この世全ての悪」など、いかほどの脅威になろうか。

びし、と一本の鎖が割れる。連鎖するように、ギルガメツシュの半身を覆う鎖たちが、怯えたように砕けていく。そればかりか、闇一色だった世界までもが、圧力に耐えかねたかの如く罅割れ始めた。

「絶望など生温い。敗北など片腹痛い。全てを乗り越え、総てを掴み取ってこそその王。故に——」

目を見開くアンリマユ。最後の一本の鎖が弾ける。拘束を振り払った男は、傲慢極まらない仕草で腕を組み——。

「——この世の全てなど、とうの昔に背負っている」

恒星すら眩むほど、燦然と輝く圧倒的な王氣。これが、絶対王者の姿だった。

世界そのものに対する宣戦布告、否、勝利宣言。決して折れず諦めず、欲望を極め抜



き、万象一切を手に入れ、そして人類を裁定する男。人を呪い尽くす悪意さえ、彼には些かの痛痒も与えることは叶わない。

「なんなんだよ」

アンリマユが戦慄する。立っていることすら忘れたのか、尻餅をついて見上げる悪神の顔には、畏怖。あらゆる悪意も絶望も跳ね除ける、想像を絶する存在を前に、星を呪い殺す怪物が震えていた。

支配者が揺らげば、空間の安定は崩れるだけ。ぼろぼろと溢れるように、暗黒の世界が剥がれていく。外側から響き渡るのは、英雄王の名を呼ぶ声。懇願のようにも、喝采のようにも聞こえるそれに、アンリマユが怯えたように退く。

王とは唯一にして絶対、それ故に孤高なる存在。しかし、如何なる時代であっても、英雄は人々に求められる。その圧倒的な煌めきに、かつて神々すら魅せられた。

「何者なんだよ、アンタ——」

被っていた皮さえ維持できない。アンリマユの姿が揺らぎ、溶けていく。その最後の問いに、傲然と笑った英雄王は。

「我は絶対にして始まりの王。英雄の中の英雄王、ギルガメッシュ——故に、貴様もそう呼ぶがいい」

世界が割れる。眩い光が、彼を呼ぶ声が、王の姿を包み込んだ——。

## 38. 黎明の星

「——『ア全て遠き理想郷』?」

「然り。貴様の奇妙な再生能力の理由、それは星の鞘が貴様に埋め込まれている故だ。聖剣と対になる、不老不死と再生能力を与える究極の宝具。そればかりは我の蔵にも収められておらぬ」

家を発ち、柳洞寺に乗り込む直前。武器や装備の確認をしている最中、ふと気になってギルガメッシュに訊ねたことがあった。

これから挑むのは、驚異的なマスターにサーヴァントたち。手札は何枚あっても足りないだろう。そこでこの聖杯戦争中、何度も俺を助けてくれた異様な再生能力のことを思い出したのだ。もしこの力が使えるのなら、これ以上ない武器になる。

「聖剣、ってことはセイバーの?　なんだってそんなもんが俺の体の中に入ってるんだ」  
「十年前、貴様の養父は騎士王のマスターだった。そして貴様は、十年前に死の淵を彷徨ったのだろうか?　簡単な話だ。衛宮切嗣という男は、貴様の命を繋ぐために騎士王の宝具を用いたのだ」

「親父が……そうだったのか。十年前も、バーサーカーに斬られた時も、なんで生きてる

んだらうって不思議だったんだけど、セイバーの宝具のおかげだったのか……。

でも、それなら心強いな。ギルガメッシュ、そんなにすごい武器が隠れてたんならもっと早く言ってくれれば——」

「たわけ」

緑茶を飲んでいたギルガメッシュが鼻で笑う。二週間も過ごしていれば、この男の言動の意味もだいたい分かってくる。これは、俺が何か見当違いなことを言っているパターンと見た。

「我が口にしなかったのは、その鞘は今使えぬからだ。それは持ち主であるアーサー王がいてこそ真価を發揮する。」

ヘラクレスに斬られた時に貴様が蘇ったのは、セイバーが近くにいたからだ。セイバーが敵陣についた以上、その宝具は何の効力も持たぬ。貴様の頼りにはならぬと知れ」

「つてことは、あてにはできないのか……参ったな。これから決戦なんだから、切り札の一枚ぐらい持つておきたかったんだけど」

「ふん、凡俗らしい考え方よ。古今東西、秘密兵器で一発逆転などという考えが通用した例はほとんどない。戦というのは事前におおよその勝敗がついているものだ。不確かな希望などに縋らず、地道に足元を固めるのが正道よ」

ぐうの音も出ない正論である。

希望を砕かれた俺は、肩を落としておとなしく銃器の手入れに戻ることにした。なんだかとてもない兵器が自分の中に眠っている、というちよつと憧れるシチュエーションだったのだが、現実はその甘くはなかつたらしい。

そんな俺のことを、愚か者に向ける目で見ている英雄王。ややしばらくして、湯呑みの緑茶を飲み終えたギルガメッシュは、呆れたように溜息を吐いてみせた。

「雑種よ。忘れているようだが、そもそも貴様、切り札なら最初から持っているだろう」「え？」

予想だにしない言葉に動揺する。顔を上げると、ギルガメッシュが俺の左手を指差している。そこにはサーヴァントへの絶対命令権である令呪が、赤い三画の輝きを放っていた。

\*\*\*

「——状況を覆す手立てが、おまえには残っているのかな」

言峰が笑う。こちらの不利を見越した笑みは、腹が立つほどの余裕に満ちている。あるいはそれは、『この世全ての悪』の誕生が近いことへの喜悦か。

実を言えば、手札はある。不利な盤面をひっくり返す一手も、ヤツの防弾装備を突破するための武器も、まだこちらには残っている。しかし、今使ったところで何の意味もない、というか使えない。

黒鍵が突き刺さったままの左手を——いや、左手に輝いている三つの印を見る。今まで一度たりとも使わなかった、マスターだけが所有する三画の切り札。これさえ使えれば、チェックメイトに持つていくことはできるが……。

「令呪は使わぬのかね、衛宮士郎。……いや、サーヴァントを呼び出しても無意味だと判断するだけの能力は持っているか」

俺の視線から、何を考えているか見抜いたのだろう。言峰の皮肉めいた言葉は、こちらの逡巡を把握しているようだった。

そうだ。令呪を使ってギルガメッシュを呼び出そうにも、言峰はアーチャーのマスターだ。おそらくヤツも令呪を保有しており、こちらが令呪を使ったタイミングに合わせて令呪を使われれば、無為にリソースを消耗するだけで終わってしまう。

今、サーヴァントには頼れない。令呪で戦局を変えるタイミングがあるとすれば、ギルガメッシュが確実にアーチャーを撃破したという確証が得られるか——あるいは言峰に、カウンターの令呪を使う暇を与えないか。

「もつとも——使えたとしても、ギルガメッシュが令呪に応えるとは思えんが」

「……なに？」

「これでも、おまえよりやつとの付き合いは長い。英雄王という英霊は、我が師の令呪を以てしても制御が叶わなかった男だ。未だおまえをマスターとしているだけでも驚きだが、令呪に付き従うほど従順な性質ではあるまい」

断言する言峰。そこには、ギルガメッシュという人物へのある種の信頼が感じられた。

第四次聖杯戦争の折より、十年間ギルガメッシュのマスターを務めた男。当然、あの傲慢な気性など知り尽くしていることだろう。言峰が口にする分析は、付き合いの短い俺自身でさえ何度か抱いた危惧だった。

自分のみを絶対と見なす英雄王が、唯唯諾諾と他者に従うなど、天地がひっくり返ってもありえない。サーヴァントへの絶対命令権である令呪でさえ、果たして頼みを聞かどうか。だが、戦いの直前、ギルガメッシュは――。

「ああ。悩むのは構わんが――その前に、足元の川に溺れぬことだな」

ハツとして横を見る。すると、空中の孔から溢れ出した黒泥が、濁流のようにこちらへ押し寄せてくるところだった。

見るからに禍々しい色の泥からは、まるで亡者の腕めいた触手がうねうねと伸びている。まずい、あんなものに捕まったら一巻の終わりだ！

「くっ……！」

思考を切り捨て、回避を優先。近くの高台に駆け上がり、間一髪で死の川から逃げ延びる。

いよいよもつて余裕がなくなってきた。あの泥が洞窟中を埋め尽くせば、悠長に大聖杯を吹き飛ばすどころか、戦っている暇さえなくなる。位置関係的に、あの流れは言峰がいた場所にも届いたはずだが……。

「あいつは……!?」

いない。

直前までそこに立っていたはずなのに、回避のために顔を背けた一瞬で、言峰の姿が消えていた。

背筋に走る寒気。見上げると、空中に高く跳ぶ影があつた。そしてそれより先んじて、襲い来る六本の剣の雨！

「っ——！ 投影、開始！」

左手の痛みを無視し、黄金の双剣を即時投影。右方に跳躍して大半から逃れつつ、直撃コースだった二本を弾いて迎撃。だが、その間に着地していた言峰は、こちら目掛けて人外で速度で疾走していた。あいつ、二十メートルは離れていたのにここまでジャンプして来たのか……！

拳銃も手榴弾もない。迎撃の手がないこちらを嘲笑うかのように、言峰の左手が煌めく。稲妻めいて迫る黒鍵を弾いた時には、もうヤツは目の前まで迫っている。一足に間合いを詰めるのは、八極拳の秘門たる活歩の歩法。

振りかざされる左肘。右手が破壊され、視界の半分が失われているのに、代行者の踏み込みは一切の負傷を感じさせない。絶技を極めた外門頂肘を、英雄王の技量を再現した双剣で受けるが、尋常ならざる剛力に足が地面にめり込んでいく。近接戦では勝機がないというのに、一瞬でヤツの間合いに持ち込まれた……！

「野郎……！」

右手で肘を受け流し、痛む左手に握った剣で斬りかかるが、跳ね上がった膝が刀身を叩いて軌道を逸らす。この男は全身が凶器、右手一本奪った程度ではまったく脅威が減じていない。

攻防は刹那。伸びた膝が更に一段跳ね、怒涛の二連撃が左手の剣を弾き飛ばす。直後、右手の剣に接した肘から強烈な衝撃が叩き込まれ、堪えきれずに武器を手放してしまふ。相手が敵でなければ絶賛していたであろう、お手本のような寸勁。

武装が落とされた。焦りでパニックになりそうになるが、言峰は思考の間隙を縫うように、僅かに退いて態勢を立て直していた。直後、地面が割れるほどの震脚を以て放たれる掌底。咄嗟に後ろに飛ぶが、胸をハンマーで殴られたような衝撃に息ができなくな



る——!

「ガ、アツ……!」

受け身を取ることすらできず、大地を削るようにして転がる。苦痛を示す信号が脳をガンガンと揺らし、視界には星が舞っている。必死で酸素を取り入れるが、その度に胸に響く痛み——肋骨の二、三本は、今ので折れたか罅が入ったに違いない。

「く、そ——」

胃腸の何処かを傷つけたのか、逆流してきた鮮血を吐き捨てる。それでも、攻撃が炸裂する寸前に跳んでダメージを減らしたから軽傷だ。まともに受けていれば、内臓が全て破裂して即死だっただろう。

よろめきながら、無様に立ち上がる。この状態ではもう、機敏な回避など望めないだろう。同じ一撃を放たれたら、今度こそ逃れる術はない。絶体絶命——その言葉が、頭に焼き付いて離れなかった。

「ほう、まだ立ち上がる気概があるか。十年前ならば、今ので確実に仕留めていたのだが——私も年を取った。人間、老いの衰えには逆らえぬらしい」

追撃を放つこともなく、掌底を繰り出したままの言峰は自嘲するように苦笑を浮かべていた。何故かという疑問は、よろめいた拍子に後ろに転げ落ちそうになったことで氷解する。

俺が殴り飛ばされた場所は高台の端だった。すぐ下では呪いの泥が川となって流れ、瘴気めいた湯気を立てている。人間を殺戮することに特化した、可視化された毒の塊。あの中に入るのは、溶鉱炉に落ちるのと同義だろう。

つまり、もう逃げ場もない。袋の鼠とはまさにこのことで、言峰は決着を急ぐ必要さえないのだ。

「……までだ、衛宮。遺言があるのなら聞いておくが」

「……ふざけるな。生憎、俺は諦めが悪いんだ」

頭痛を堪えて、すっかり馴染んだ黄金の双剣を投影する。頭も胸も腹も腕も足も、体中で痛くない場所を探すほうが難しい。投影魔術の連発で魔力にも余裕がなく、本能は今すぐ休んで眠ってしまいたいと訴えている。

だが、あの薄ら笑い。人が苦しむのが愉しいと、人が死ぬのが楽しいと、地獄を賛美するあの瞳。あんなやつに降参するなど、死んだほうがマシだった。ここで負けるなら、俺はこの十年、なんのために正義の味方を目指してきたのか。倒すべき悪に、人類の敵に立ち向かえないのなら、何が正義の味方だというのか……！

「刺し違えてでもお前は倒す。覚悟しろ、言峰」

血まみれの手で双剣を握る。令呪も、切嗣が残してくれた切り札も使う隙がない。最後に残された手段は——ヤツを宝具の自爆に巻き込むことだけ。

「そうか。ならばその足掻きごと、主の身許に導いてやるとしよう。十年前の精算は終わりだ、『この世全ての悪』の誕生を見届けなければならぬのでな——！」

神父が迫る。宙を穿つ拳は、銃弾にさえ迫る速さ。元より尋常ならざる身体能力の持ち主ではあつたが、これはあまりにも異常だつた。極限まで研ぎ澄まされた拳打は、大木どころかコンクリートさえ粉微塵に打ち砕こう。

——これは死んだ。

奇妙に遅く感じられる感覚の中、三秒後の死を確信する。どういう魔術を使ったのか、代行者の速度はここに来てサーヴァントにすら比肩していた。目測を狂わされた俺は、宝具を自爆させるのが間に合わない。それよりも早く、剛拳がこの頭を消し飛ばすだろう。

「言峰——！」

「さらばだ、衛宮。親子ともども、正義を抱いて朽ちるがいい」

死を覚悟する。最期まで目だけは逸らすまい、と怨敵を睨みつけた、その瞬間。

「——いいえ。死ぬのはアンタの方よ、クソ神父！」

突如として、鋼の怪鳥が言峰に襲いかかった！

「なに——!?!」

俺を仕留めようとしていた拳が急制動。常軌を逸した反応速度で、言峰が襲い来る飛燕を弾き飛ばす。確実に胴体を穿つ奇襲にさえ対応するとは、代行者の戦闘能力は人外のそれだ。

だが、言峰は唯一使える左手を繰り出した。がら空きになった胴体めがけて、地を這うように迫った魔女が、強烈な蹴りを炸裂させる——!

「ガッ……!」

流れるような連環腿。一撃目に呻きつつ、膝を掲げて追撃を防御した言峰だったが、その顔には明らかな困惑があった。それもそのはず、この局面での闖入者には俺も度肝を抜かれたのだから。

「凜……!?! おまえ、なぜここに——?」

「決まってるでしょ。アンタをぶちのめすために、地獄から舞い戻ってきたのよ!」

聖杯の泥に囲まれ、死地と化したこの場所。俺の窮地を助け、堂々とそう宣言したのは、誰あろう遠坂凜だった。

血の海に倒れ、瀕死の重傷だった姿は既にある。ギルガメッシュの霊薬が効いたのか、毅然と胸を張るその姿は、自信と活力に溢れていた。首の皮一枚で死を免れた事実と、遠坂が駆けつけてくれたことの喜びで、安堵のため息を吐いてしまう。

「遠坂……！ 無事だったのか？」

「ええ、士郎が助けてくれたおかげよ。遅くなって悪かったわね」

微笑んだ遠坂は、俺を庇うように言峰の前に立ち塞がる。その構えは、明らかに熟練した拳法使いのもの。あの代行者にダメージを与えたことといい、遠坂は魔術だけでなく、体術にも長けているようだ。

「正直、助かった。遠坂が来てくれなきゃ、俺はあいつにやられてた。おまえの借りを返すはずだったのに、この体たらくじゃ情けないよな」

「ま、しょうがないわよ。あのクソ神父、悔しいけど強さは本物だから。でも、私が来たからにはもう大丈夫。」

……そうそう。ここに来る前に、桜とイリヤスフィールは助けてきたから。今はセイバーがついててくれるから、そっちは安心して」

遠坂の言葉を肯定するように、鋼の鳥が小さく嘶く。どこかで見覚えがあると思ったら、それはアインツベルンの森でイリヤが用いた使い魔だった。

何がどうなったのかはわからないが、セイバーが再び俺たちの味方になってくれたというなら心強い。騎士王が二人を守ってくれているのなら、後顧の憂いなく目の前の戦いに専念できる。

「そっか……安心した。桜もイリヤも、助け出す前に言峰とぶつかったから、大丈

夫か心配だったんだ。何から何まで、遠坂には助けてもらってばかりだな」

「ここまでの分は、士郎に助けてもらった恩返し。ここからの分は後できっちり取り立ててあげるから、覚悟しておきなさい」

何日も聞いていなかったように感じる、力強い遠坂の声。呪いの泥が渦巻く地獄のよ  
うな場所に飛び込んで、躊躇いなく手を貸してくれる——まったく。俺は本当に、いい  
仲間恵まれたらしい。

と。言峰と相對しつつ、傍から見えていなければ分からないほど、遠坂がほんの僅かに  
後ろに下がった。同時に、俺だけに聞こえるような小声が囁かれる。

「あとは任せろ——って言いたいところだけど、ごめん。今のわたしじゃ、綺礼を抑えて  
おくのが精一杯。ここに来るまで、溜めてた宝石はほとんど使い切っちゃったし」

「……」

よく見れば。自信ありげな笑みを浮かべている遠坂の頬には、痛みを堪えるような脂  
汗が浮かんでいた。神代の霊薬はとんでもない効果を發揮したようだが、ギルガメツ  
シユの見立てでは、本来遠坂が動けるようになるのは今日の昼間だった。今の遠坂は傷  
が癒えきつておらず、かなり無理をしている状態なのだろう。

「だから、最後は士郎に任せる。その顔だと、まだ手は残ってるんでしよう？ わたしが  
綺礼を抑え込むから、その間にあいつを倒して」

そう言うと、一度こちらに振り返った遠坂は。

「——頼んだわよ」

笑顔を残して、一目散に戦地へと踏み込んでいった。

「ふん。舞台は既に終局だ。おまえの出る幕など残つてはいない。あの傷で生きていたのは驚きだが、兄弟子としての慈悲だ。迷わぬよう、今度こそ時臣師の許へ送つてやる

う——！」

「ハッ。士郎にそれだけやられてるくせによく言うわ。裏切り者のクソ野郎、死んでから天国でも地獄でも受取拒否されて、粗大ゴミ扱いで行き場に迷いなさいつての——！」

突貫からの双撞掌。左手首の纏で跳ね除けた言峰が、同時に足払いをかけて遠坂の体を崩しにかかる。熟練の鎖歩は、しかしそれを読んでいたのか、バックステップした遠坂に躲される。次いで放たれた冲捶をも回避し、懐に飛び込んだ遠坂は投げ技に推移しようとしたが、今度は言峰が蹴りを繰り出して牽制する。

一進一退の攻防。本調子ではない体で代行者とせめぎ合う遠坂が凄いのか、それとも左手一本と片目だけで遠坂とやり合う言峰が並外れているのか。数合の格闘の後、言峰の右目が見えていないことに気づいたらしい遠坂は、ヤツから見て右側——つまり、視界が奪われている側から猛攻をかけたのだが。

「あれはまさか、聴勁——!?!」

聞いたことがある。拳法使いも達人の領域となれば、視界を奪われていようと音だけで相手の行動を予期することができると。完全に見えていない方向から、しかもそちらの腕は死んでいるにも関わらず遠坂の打撃を捌き切る言峰は、あまりにも力量が隔絶している。

このままではまずい。言峰の化け物めいた技量を以てすれば、どこかで遠坂の攻撃が差し返される。その前に遠坂を掩護し、ヤツを打倒しなければいけないのだが。

「ダメだ、距離が近すぎる……今撃てば遠坂にも当たつちまう」

細かく立ち位置を変えながら繰り広げられる、クロスレンジでのインファイト。遠距離攻撃手段として残された最後の一挺では、遠坂ごと巻き込んでしまふ。どちらかだけを正確に射抜くなど、どんな狙撃手でも不可能だろう。

かといって、あの近接戦闘に介入することは不可能だ。俺には格闘戦の心得がないし、各部を損傷しすぎた体は、そもそも歩くだけでやつとの有様。

血だらけの左手で、それでもなお淡く輝く紋章を見つめる。戦いの最中に抜け飛んだのか、黒鍵が刺さっていた場所からは、今も鮮血が溢れ続けていた。このままでは遠坂だけでなく俺も遠からず倒れるだろう。頼りになる手札は、たった一枚だけ。

ならばここが切り時だ。遠坂と拳を交える言峰には、カウンターの令呪を使う隙など



ない。ボロ布のようになっていたコートを引きちぎり、高らかに左手を掲げる。

「令呪を以て命じる——」

流れる血を吹き飛ばすように煌めく、紅の令呪。遠坂の冲捶を仰げ反つて躲した言峰が、一瞬こちらを見て皮肉げに笑う。

その余裕は何なのか。釈然としないものを感じつつも、聖杯戦争の始まりから、一度たりとも使わなかった切り札に念を込める。今ここで、黄金のサーヴァントを召喚する！

「来てくれ、ギルガメッシュ——！」

直後。手の甲に刻まれた一画が、覚醒と共に光を放ち——。

「——言っただろう。あの男が、令呪の命令に応えるはずがないと」

何が起きることもなく。空間に溶けて、消えていった。

「……え？」

「ウソでしょ、令呪が効かない……!?!」

愕然とする。

令呪とは、サーヴァントに対する絶対命令権。空間転移程度は造作もないと、俺は何度も聞いていた。事実、イリヤがこれを使い、バーサーカーに理性を取り戻させるといふとんでもない掟破りを実行した場面さえ目撃している。

発動と同時に膨大な魔力が開放され、何か途方もない魔術が起動したような気配があった。令呪自体は、間違いないで発動していた。だというのに何故、ギルガメッシュがここに現れないのか……!?

「隙ができたな、凜——!」

「え——きやつ!?!」

動揺した遠坂が、言峰の後蹴腿をもろに喰らう。両手をクロスさせてガードするが、身長190cmを超える男の全力の蹴りを、体格で劣る側が受けきれはるが足りない。

電柱さえへし折るのではないかという苛烈極まる威力。軽々と吹き飛んだ遠坂は、一度大地に叩きつけられたが、反動を利用して四つん這いになると地を削って踏みとどまった。しかし、やはりダメージは甚大だったのか、唇の端から血が溢れている。

「遠坂っ!」

「年長者の言葉は聞いておくものだぞ、衛宮。あの男は災害のようなものだ。他のサーヴァントであれば首輪となる令呪も、英雄王には届くまい。」

半人前の魔術師の令呪であればなおさらだ。この聖杯戦争で、おまえはあの男の何を見てきたのかね」

駆け寄ろうとする俺を、嘲り混じりの声が制する。令呪による召喚が効かない——動揺する俺に、言峰の嘲弄は深く突き刺さった。

「なんでだ、ギルガメツシュ……」

欠けた令呪を見る。これが切り札だと示唆していたのは、他ならぬあのサーヴァント自身ではなかったのか。あれは嘘で、俺の命令になど応える気はなかったのだろうか。

元マスターである言峰は、ギルガメツシュという男をよく知っている。あれほどの宝具を持つサーヴァントであれば、令呪を無効化する能力を有していても何の不思議もない。あの気位の高い英霊が、令呪などという「命令」に従うはずがないと、言峰は最初から確信していたのだ。たかだか二週間しか付き合いない俺よりも、あの神父の方が、遥かにあの男を理解していたというのか。

事実として、ギルガメツシュは俺の声に応えてくれなかった。俺とあいつとの関係は、その程度のものだったのか……？

「——いや」

本当に、そうだろうか。

『此奴は、不遜にも我の光輝に縋らんとする魔術師だ。我に命を張る無礼者を、これ以上野放しにしておけるものか』

ほんの二週間ほど、それでも十年の長きに亘ったようにも思える、濃厚な時間を思い出す。

ギルガメツシュは傲慢で厳しく、仮借のない人物だったが、肝心な時にはいつも手を

貸してくれた。あの叱咤激励に、道を示してくれる慧眼に、いつたい何度救われてきたことだろう。マスターとしての義理立てはあったのかもしれないが、あのサーヴァントは俺に対して、一人の人間として接してくれて——最後には、認めてくれていたように思う。

『——ここは任せた、ギルガメツシユ。後から追いついてきてくれ』

『フン——良からう。あの見苦しい偽物は、我が引き受けた。我が贖作者を仕留める前に、虫程度は片付けておくがいい』

ここに来る直前の、最後の会話。

ギルガメツシユは、確かに追いついてくると言ったのだ。あの男が、自分で口にしたことを守らないはずがない。

来ると言ったならば必ず来る。あの広間で別れてからこれだけ時間が経っているのに、未だここに現れていないことがそもそもおかしい。アーチャーとの戦闘がまだ続いているのか？ ……いや、英雄王ほどのサーヴァントならとつくに勝利を収めているはずだ。

それに。

「あいつは、俺の声を無視するようなやつじゃない」

聖杯戦争の最初から、そうだった。

ギルガメツシユは俺の言葉を否定することはあつた。罵倒することもあつた。いつでもあの誇り高い英霊は厳しく、言い返しよのない正論を突きつけてきた。しかしながら、どんな状況にあつても、俺の言葉を無視することは一度たりともなかつたのだ。

サーヴァントとの契約は切れていない。令呪を通じて、俺の声は届いていたはずだ。にも関わらず何のリアクションも返つてこないということは、ギルガメツシユの身には令呪の呼び出しにも応じられないような異常事態が起こっている。そうとしか考えられない。

『人として生まれ落ちながら、その領分を超えた願いを持ち、己が欲のために憚りなく我を求め、真作への道を登らんとする。その稀有な愚かしさを、恥知らずな欲望を良しとするのが我の愉しみだ。これほど浅ましい人間を、我が救わずして誰が救う!』

何度も俺を助け、導き、救ってくれた偉大な英霊。俺にとってギルガメツシユとは、いつの間にかそういう人物になつていた。

だから。

「——俺は、ギルガメツシユを信じる!」

傷ついた左手をもう一度掲げる。そうだ、一画で駄目ならばもう一画分使つてやる——

!

「愚かな。ギルガメツシユに令呪など——いや、二画分とあれば万一もあるか。

手は打たせん。その腕、置いていくがいい……！」

言峰の左手から繰り出される三閃。一呼吸の間に、腕、腹、頭を狙った黒鍵が放たれる。急所を確実に射抜く剣の雨は、一つ一つが狙撃の精度。

射線は見えた。双剣で防御しようと構えるが、蓄積されたダメージのせいか、体の動きがいやに遅い。まずい、これでは防ぎきれない……！」

「させるもんですか！」

爆裂。

手榴弾のごとく弾けた宝石が、溢れる魔力を解き放った。黒鍵の二つは衝撃に耐えられずへし折れ、残った一つは鋼の怪鳥が自分の身を犠牲にして叩き落とす。危なかつた……迎撃してもらわなければ、どれか一発は確実に被弾しただろう。

攻撃を撃ち落とされた言峰が振り返る。その時には気合一閃、渾身のサポートをしてくれた遠坂がヤツの巨軀へ突撃していた。強烈なストレートが繰り出されたかと思えば弾かれ、再び激烈な死闘が展開される。

「ほう。骨は砕いたはずだが、まだ動けるとはな。復讐心とは存外、大きな力を与えるものだ」

「それだけじゃないっての……！ これはマスターとしての分、これはイリヤの分、これは士郎の分！ 腐れ神父、アンタには山ほど借りがあるんだから！」

肘打ちを回避してからの、目にも留まらぬ三連撃。蟀谷<sup>こめかみ</sup>、目元、腹部を打ち抜く拳が、まともに言峰にヒツトした。八極拳が誇る奥義、八大招・三迎不門顧。

いかに鍛え抜かれた筋肉の鎧とはいえ、このダメージは通ったのか、言峰が小さく呻く。即座に蹴りを繰り返すが、そこには僅かに精細さが欠けていた。

ほとんど千切れかかっている右手。頭部と右手から続く出血。全身を覆う裂傷、銃撃によるダメージ。言峰は怪物めいた代行者だが、サーヴァントではない。ここまでの戦いで、ヤツは確実に消耗し、疲弊している。

だが、消耗の度合いで言えばこちらの方がより深刻だった。俺は立っているのがやつとで、遠坂は文字通り血を吐きながら殴り合っている。治癒魔術は不得手だと言っていたから、あれは強化魔術と気合で無理やり動いているのだろう。後先考えない猛攻が途切れれば、その時が最後となる。

「今よ、士郎！」

遠坂の叫び。もうこれが、言峰を抑えておける最後のチャンスだった。千金にも勝る一瞬の間に、左手を掲げ、残った令呪を発動させる！

「令呪を以て希う！」

高らかな宣言。発動を阻止しようとしたか、言峰が黒鍵を投擲しようとしたが、遠坂の浸透勁がヤツの左手を打ち据えた。即座に投擲からカウンターに切り替え、遠坂の腕

を掴むと足白馬翻払いで体勢を崩させた言峰。まさしく攻防一体の套路、八極拳が理想とする妙技だったが、その時にはもう遅い。

頼みの綱は彼の王だけだ。足りない最後のピースを、最古にして最強の剣を、今！

「来てくれ、ギルガメッシュ——！」

赫と輝く令呪。莫大な魔力が手から迸り、全ての紋様が消えていく。聖杯戦争のマスターたる資格、二画目の令呪の喪失。決死の懇願に——そび聳える大聖杯の中で、何かが動いた。

「……………」

肌で感じられるほどの変化。言峰も遠坂も、俺の動きも一齐に止まる。サーヴァントは現れない。しかしその代わりに、悪意に満ちていた洞窟全体の雰囲気、明らかに異質なものになっていた。

困惑しているうちに、聖杯の孔から無秩序に溢れ、広がり続けていた呪いの泥が、突然びたりと動きを止める。明らかに超自然的な力が加わったその変化は、まるで何かに怯えているようでもあった。

次いで、四方八方に無秩序に伸ばされていた泥の触手が、一齐にその向きを変える。統一した意志の下に動いた触手たちが見ているのは、未だ泥を吐き出し続ける孔の下。その、呪詛と怨念の吹き溜まりの中から。



「——フン。この我を呼びつけるとは、手の焼ける契約者よな！」

黄金の英雄王が、泥を吹き飛ばして現れた。

逆立っていた髪は下ろされ、鎧の半分は損壊したまま。剥き出しになった肉体は傷だらけで、溶けかかっている部分さえある。

されど。その圧倒的な王気は、無尽の呪詛すら寄せ付けず。途方もなく眩い煌めきに、泥を統べる『この世全ての悪』さえ怯んだようだった。

「この世全ての悪だと？ 生温い！ その程度の呪いで、この英雄王を砕けるとでも思ったか！ たかが悪神ごとき、私の足元にも及ばぬと知れ——！」

洞窟を埋め尽くしていた泥が、泥から伸びた触手群が、一斉にギルガメッシュを急襲する。しかし、指が鳴る音が響いた刹那、現れた無数の宝具が呪いを紙切れのように吹き飛ばした。

剣が、槍が、矛が、槌が、英雄王に傳く数え切れぬ宝具たちが、『この世全ての悪』の汚染を駆逐していく。聖杯の泥が器物を吸収する属性を持つていようと、爆裂が、火炎が、雷撃が、氷槍が、その前に泥ごと滅却する。破壊という嵐が吹き荒れ、泥の河だけでなく、洞窟そのものが軋みを上げる。

人類全てを殺し尽くして余りある暴力を、それ以上の暴力が蹂躪する光景。それはさながら、神話の一節めいていた。

「馬鹿な——ギルガメツシュが、令呪に応えただと……!?!」

降り注ぐ瓦礫の中、言峰が絶句する。今の今まで薄ら笑いを崩さなかった神父は、驚愕を顔に張り付かせ、呆然とその場に立ち尽くしていた。

これだけの手傷を負ってなお揺らがなかった敵が、初めて晒した明確な隙。対峙していた遠坂が、それを見逃すはずもない。残されたありつただけの魔力を脚部に回し、赤い魔女は流星のように疾駆した。

「綺麗な……!!!」

「——っ!」

言峰が黒鍵を振るうが、遅い。俺にギルガメツシュを呼び出せるはずがないと慢心していた者と、俺を信じて背を預けてくれていた者。その心構えの差が、絶望的なまでの一秒となつて二人を隔てていた。

振り上げられる渾身の拳。もはや拳法の型などあつたものではない。あらゆる運動エネルギーを、積年の恨みを、全霊の力を乗せて放たれた一撃は、言峰の腹をしたたかに穿ち——

「——ガ、ツ……!」

その長身を、真つ向から打ちのめす！

血反吐が舞う。あまりにも鮮烈な攻撃は、輝いて見えるようだった。

今のは決まったと、間違いなく確信する。それほどの重み、それほどの直撃。鋼のよ  
うな肉体といえど、これを受けてはたまるまい。

しかしながら、遠坂も今の一撃で限界だった。言峰を殴りつけた一撃のまま、脚をも  
つれさせた遠坂がその場に倒れ込む。一方の言峰は、絶大なインパクトに大きくふらつ  
いたものの、未だ以て倒れない——聖堂教会代行者といふ人形ひとがたの修羅は、どこまで凄ま  
じい耐久力をしているのか。

左足で衝撃を流し切ると同時、振り上げられる右足。鉄槌に等しい踏みつけが、遠坂  
の体を砕こうと動く。が、その致命の報復に先んじて、倒れたままの遠坂がこちらを向  
いた。

「士郎っ！」

見開かれた翠の瞳。一秒後の死が待っているにも関わらず——遠坂の目は、今が好機  
だと言っていた。

世界が凍る。奇妙に遅くなった時間の中、目の前の光景を俯瞰する。

全体重を乗せた蹴撃は、間違いなく遠坂を殺すだろう。しかし、遠坂に意識を持って

いかれた言峰は、俺に背中を向けており——今この瞬間、衛宮士郎という存在を完全に失念していた。

先ほども、言峰は遠坂と戦いながら、常に俺や周囲の奇襲を警戒していた。だから遠坂ごと射抜く覚悟を固めたとしても切り札は抜けなかったし、令呪とて軽率には使えなかった。

だが、ギルガメッシュの召喚という精神的動揺と、遠坂が炸裂させた全力の一撃。俺の仲間たちが積み上げてくれた二つの光が、ほんの一瞬、代行者の余裕を奪い去つたのだ。あの男は今、俺への警戒を解いている！

「うおおおおおおおおお——！」

瞬間、痛みを忘れた。

十メートルの距離を駆け抜ける。投影した剣は投げ捨てた。剣では間に合わないと思断、ホルスターに収めていた、最後の一挺に右手を伸ばす。この時、この瞬間まで温存していた切嗣の忘れ形見は、あたかも最初からそうであつたかのようにぴたりと掌に収まった。

トンプソンセンサー・コンテナー。ただ一発の弾丸を装填することしかできない単発式拳銃。再装填にも時間を要する、およそ実戦的ではない、射撃競技に用いられる装備。されど——この銃は、幾多の魔術師を葬り去つた、魔術師殺し衛宮切嗣の最強の切り札。

「衛宮、士郎——！」

言峰が振り向く。見開かれた瞳。浮かぶのは、不意を突かれた動揺か、動けぬはずの敵が走り出したことへの驚愕か。

遠坂を屠ろうとしていた足が急制動。震脚となつて地を踏み鳴らし、連動した左手が跳ね上がる。八大招・立地通天炮。極め抜いた絶招は、殺意を凝縮した破壊兵器。しかし。

——今は、俺が早い！

「言峰、綺礼——！」

拳銃を構える。絞られた銃爪は、怨敵の拳に遙か先んじ——過たず、死の魔弾を解き放った。

「いっ——」

咆哮する炸薬。大型猛獣すら屠る。30—06スプリングフィールド弾を前に、防弾装備が如何ほどの効果を持つとか。狙撃用銃弾にさえ比肩する過剰極まりない火力は、装衣の護りを薄皮のように貫通して。

——言峰綺礼の心臓を、完膚なきまでに破砕した。

\*\*\*

決着は、ついた。

衛宮切嗣が残した最後の遺産。コンテナダーが発射可能な、30006スプリングフィールド弾は、個人用の防具では防御不可能、場合によつては非装甲戦闘車両さえ穿つほどの破滅的な威力を誇るが、この武器の真骨頂はそこではない。

起源弾——『切断』と『結合』、切嗣が有する魔術的な「起源」をカタチにした魔弾。この弾丸は、直撃した魔術師に対して致命的なダメージを与える効果を持つ。この弾丸を魔術で防御しようとした場合、弾丸が有する「起源」が魔術回路にまで干渉を及ぼすのだ。

切断され、めちやくちやに繋ぎ合わされる魔術回路。回路に流していた魔力が多ければ多いほど——つまり、より強大な魔術を使おうとすればするほど、魔術回路が破壊された時のダメージは甚大になる。魔術的防御に拠らなければ、30006スプリングフィールド弾を防ぐことはできず、そして魔術的防御に頼れば魔弾の効果で致命傷を負う。魔術師に死の二択を強いるところに、この魔弾の悪辣さがあつた。

「——」  
本来ならば上半身ごと砕け散ってもおかしくはない威力だったのだが、何かしら魔術的防御を敷いていたのか、弾丸は言峰の胸に穴を穿つだけに留まっている。しかし、も

う神父に戦う力はおろか、生命活動の余地すら残されていないことは明白だった。

奇妙なまでの静寂の中、拳を繰り出そうとした姿勢のまま、凍りついたように止まっている言峰。不思議そうに、胸に空いた穴を見下ろした後。

「——なぜ、おまえがその銃を持つている」

静かな声で、仇敵はそう訊ねてきた。

「これは、切嗣<sup>おやじ</sup>が俺に遺してくれたものだ。いつか魔術師殺しとして戦う時、きつと必要になるだろうって」

「——なるほど」

その一言に、どんな感情が籠められていたのだろうか。苦笑を漏らした言峰は、一度小さく息を吐いて。

「ならばこそ、私が敗れるのは必然だったか。衛宮切嗣、つくづくおまえは私の癪に障る。」

——おまえの勝ちだ、衛宮士郎。第五次聖杯戦争、最後のマスターよ。聖杯を前にし、その責務<sup>のぞみ</sup>を果たすがいい」

自らの敗北と、願望<sup>ねがひ</sup>が潰える瞬間を前にして。神父の声は、なお変わらず平然としていた。

あの教会で初めて会った時と同じように。いや、それ以前からずっとそうだったのだ

ろう。最期の最期まで、言峰綺礼という男は揺らがない。死の淵にあつても、この神父は自分を貫き続けた。

「ああ——俺の勝ちだ、言峰綺礼。おまえの願いは叶わない。俺は正義の味方として、この手で聖杯を破壊する」

「——」  
どさり、と。

そこが限界だったのか。神父の瘦躯が、力なく崩れ落ちる。大地に流れる生命の残滓は、どこか黒い泥めいていて——それが、言峰綺礼という男の最期だった。

\*\*\*

空間が揺れる。それは、さながら悲鳴のようだった。

最後の庇護者が倒れたことを、『この世<sup>ア</sup>全<sup>ン</sup>ての悪<sup>ユ</sup>』も把握しているのか。悪足掻きとばかりに、洞窟を埋め尽くした呪いの泥が津波のように隆起し、そこから生えた無数の触手が自らの脅威を排除しようと暴れまわる。何百何千という呪詛の塊は、一つ一つに執念めいた悪意を宿し、高台の上にいる俺たちへ急速に魔手を伸ばし始めた。

体は壊れ、武器も喪失し、最後の一発をも撃ち尽くした俺に、脅威から逃れる術はな



い。されど——

「勝利を掴んだようだな、雑種」

——今ここに、最強の剣が戻ってきた。

豪雨のように降りしきる弾丸。宝具から放たれる魔術や攻撃が、無限の敵を一蹴する。『ゲット・オブ・ビロン王の財宝』という人類の叡智は、人類そのものを滅ぼさんという脅威に容赦なく牙を剥いていた。

破壊の嵐を従え、黄金のサーヴァントが隣へ着地する。暗黒の泥の中から、派手にこちらまで跳んできたギルガメッシュは、いつものように腕を組んでみせた。その絶大な安心感に、思わず苦笑いしてしまう。

「首の皮一枚だったけどな。俺だけの力じゃあいつには敵わなかった。遠坂とイリヤと——アンタのおかげだ、ギルガメッシュ」

ちらりと横を見る。言峰にボディブローを叩き込んだ遠坂は、それで力を使い果たしたのか、うつ伏せになって気を失っている。怪我はしているようだが、どうやら命に別状はなさそうだ。

イリヤが送ってくれたのであろう使い魔は、黒鍵が突き刺さったまま地面に転がっている。あの鳥が体当たりで黒鍵を撃ち落とししてくれなければ、今頃俺は死体になっていた。イリヤにも、後でお礼を言わなければならない。

一人だけではダメだった。みんなを助けられたから、みんなの手助けがあったから、俺は今ここに立っている。言峰と俺を分けるものがあつたとすれば、きつとそこだろう——あいつは最後の最後まで誰の味方にもならず、誰を味方につけることもなく、自分だけで戦っていた。

「——そうか。言峰は死んだか」

それは、ギルガメツシユにしては珍しく、やや静かな声だった。

胸を撃ち抜かれ、物言わぬ軀となつた神父。第四次聖杯戦争を共に戦い、十年という日々を過ごした元契約者に、英雄王は何を思つたのだろう。数秒ほど遺体を眺めていたギルガメツシユは、やがて小さく息を吐いた。

「貴様の歩みを見届けるのも一興ではあつたが——神すら問い殺す貴様の求道は、人の前に敗れ去つたか。この星にはまだ、滅びるには惜しい宝が残つていたということだ。

ではな、綺礼よ。——いや、中々に愉しかったぞ」

この戦いが始まつてから、一度も言葉を交わさず、道が分かたれていた元主従。死ぬばそれまでと言い捨てるギルガメツシユが、それでも声をかけたのは、彼なりの慈悲だったのだろうか。

もしかしたら本来、最後に立ちほだかることになつた主従は、言峰とギルガメツシユだったのかもしれない。最大の敵になつたかもしれない男は、今や心強い味方となつ

て、隣で皮肉げな笑みを浮かべていた。

「——さて。全てのマスターとサーヴァントは倒れた。セイバーは例外として、残った者は貴様だけ。この意味が分かるか、雑種」

「ああ。今回の聖杯戦争——勝ったのは、俺たちだ」

勝利。

喜ばしい、胸が踊るような気持ちとともに語られるべき言葉だが——そのフレーズの、なんと虚しいことだろう。

酷使しすぎて悲鳴を上げる足を動かし、周囲をゆつくりと見渡す。どこを見ても、視界に映るのは悪夢のような光景だった。

悪意に染まった大聖杯。空中に開いた暗黒の孔。垂れ流される呪いの泥。無秩序に暴れる殺意の触手。この世の終わりのような凄惨さが、勝者に与えられる報酬だとするならば……聖杯戦争というシステムは、やはり最初から狂っていたのだ。

「どうだ、雑種。感想は？」

「ひどいもんだよ、まったく。胸糞が悪くなる。こんなもののために、どれだけの人が犠牲になったんだ」

俺が把握しているだけでも、十年前の大火災に、今回行方不明になった大勢の人。結界に巻き込まれた学校の生徒たち、キャスターに生命力を吸われた人たち、操られてい

たであろう柳洞寺の人たち。他にもいったい、どれだけの人が、どれだけの物が被害を受けたことだろう。

それだけの犠牲を重ねた上で、手に入るものがこの地獄だ。こんなに悪趣味で、救いがないものもないだろう。もしかしたら切嗣も、十年前同じものを目にしたのかもしれない——これを見て気分が良くなる者がいるとすれば、そいつは人の道を外れている。「——クク、なるほどな。貴様はそれでよい。これだけの戦いを経てなおその感性を貫けるなら、それはそれで一つの本物だろうさ。言峰ヤツとは違うが、おまえもまた我を飽きさせることはなさそうだ」

ギルガメツシユが不敵に笑う。俺同様にポロポロの体だというのに、英雄王の余裕には些かの陰りもない。最初から最後まで、言峰以上に自分を曲げることがないこの男は、やはりとんでもない人物だった。

「……つと、あんまりのんびりもしてられないか」

目の前まで伸びてきた呪いの触手を、三挺の宝具が消し飛ばす。孔から溢れ続ける泥は、いつの間にか洞窟のほとんどに充満していた。

死者の手のような呪いの触手が、俺たちがいる高台目指して下から殺到する。その尽くを放たれた宝具がねじ伏せるが、無尽蔵に追加され続ける黒泥を前にはいたちごとくに過ぎない。泥の大元にして、諸悪の根源——最大の敵を打ち砕く仕事が、まだ

俺たちには残っている。

「ギルガメツシュ」

話しかけると、黄金のサーヴァントがこちらを測るように見た。紅い瞳は、おまえが決めると言っている。弾丸宝具を撃ち続けているものの、飛んでくる火の粉を払うだけで、根本である孔や聖杯に見向きもしていないのはそういうことだろう。

そうだ。この戦いは俺のもの、勝利も敗北も俺が受け取るものだ、と、ギルガメツシュは最初に言っていた。自分は衛宮士郎という人間の戦いを愉しむのみだ、と。本気で手を貸してくれるようにはなつたものの、彼の役割はサーヴァントとしての補助サポート。決断は、マスターである俺が下さなければならぬ。

「マスターとして、最後の頼みがある」

左手に残された、ただ一つ輝く紋章。聖杯戦争の勝者たる証を高々と掲げる。

この戦いを終わらせるというのなら、令呪もここに置いていくべきだ。刻まれていた烙印、ギルガメツシュと俺を結ぶ始まりの縁よすが。そこに全ての想いを込め——マスターとして、決着の言葉を口にする。

「聖杯を壊し、聖杯戦争を終わらせてくれ」

「——承知した。下がっている、マスター」

消えていく令呪。紅い輝きが、儚く溶けて散っていく。

頼みを聞き届けたギルガメツシュは、一度だけ大きく頷くと、どこからか黄金の鍵剣を取り出した。何か門が開くような音が、一帯へ高らかに響き渡る。

「見事敵を討ち果たし、勝利を掴み取った褒美だ。この英雄王の真の力、秘蔵秘匿の宝物を見せてやろう——！」

鍵を中心に溢れ出す黄金の光。空中投影された、複雑な大樹のようなそれは、宝物庫の形を示す地図だったのか。その頂点で紅い光が煌めいたかと思うと、眩い映像は幻のように消えており——代わって、ギルガメツシュの手には一振りの剣が握られていた。

見ただけで背筋が震える。他の武器とは次元が違う、あの剣は投影どころか解析することさえ不可能だ。いつか見た黄金の夢、その中で燦然と輝いていた紅の剣。あれこそがギルガメツシュの本当の切り札、あらゆる宝具の中の頂点。

「——終幕だ。起きよ、エア」

王の命に従い、紅い剣が唸る。乖離<sup>エ</sup>剣<sup>ア</sup>と呼ばれたその、三つの円柱が互い違いに回転を始める。収束する膨大なエネルギーは、いつか見た星の聖剣さえ凌駕しよう。

いつの間にか、吹き荒れていた宝具の嵐は止んでいた。好機と見たか、おぞましい触手の群れが呪いを撒き散らしながら迫ってくるが、エアが巻き起こす暴風が仇なす敵を切り裂いていく。

回転する。

廻転する。

星すら揺るがすのではないかという重みを以て、円柱の回転が加速していく。泥の大波も、触手の大群も、崩落してくる岩盤さえ、その風の前には近づけない。

最古にして最強の英霊。なぜギルガメッシュが、あらゆる英雄たちの王と呼ばれているのか。世界の総てを統べる頂点、絶対王者たる証がこれだった。

右手を掲げる英雄王。握られた最強の剣が、赤い魔力を放出させる。吹き荒れる暴風は、竜巻のそれと何が違おう。かつて自然現象が神と畏れられていたならば、これこそが神罰の具現に違いない。

『この世全ての悪』。人類全てを呪い殺し、星の全てを覆い侵す悪の具現。多くの英霊を染め上げた悪神の前に、神の剣を構えた英雄王は——

”天地乖離す開闢の星”  
!!!

——天地創造を司る、裁定の一撃を振り下ろした。

具現化した虚無の”刃”が、時空を切り裂いて一直線に走る。海のような呪いの泥も、邪神めいた無数の触手も、瞬時にして蒸発した。存在そのものを世界ごと消滅させる斬撃に、いつたい誰が抗えようか。

泥を垂れ流す孔すら滅却した一撃は、そのまま大聖杯を直撃する。天地を分かつほどの破壊の刃に、『この世全ての悪』はぞつとするような悲鳴を上げ——星の渦の中に、何

もかもが飲み込まれた後。

「——衛宮士郎。これが、勝利の光景というものだ」

砕けた空から差し込む、清らかな朝の日差し。その輝きを見た時、ようやく——長い聖杯戦争は、終わりを告げたのだった。

\*\*\*

——欠けた夢を、見ていたようだ。

「先輩、起きてますか？」

土蔵に光が差し込んでくる。その明かりで、意識が覚醒した。

聞き慣れた優しい声に、うつすらと瞼を開ける。薄つすらと紫がかった髪に、整った柔らかな顔。いつもと変わらない、起こしに来てくれる後輩の姿がそこにはあった。

「ああ。おはよう、桜。体調は大丈夫なのか」

「もう。先輩ったら、毎朝同じことを聞くんですから。姉さんやイリヤさんたちのおかげで、すっかり元気になってますよ」

このとおりです、と力こぶを作る素振りをする桜。その明るさいっぱい姿に、自然と笑顔が浮かんでくる。



「そつか、それはよかつた。

……あれ。なんかいい匂いするけど、桜、もしかしてもう朝飯作つてくれてたりしたのか？」

「いえ、今日はアルトリアさんが。慣れてきたことですし、一人で挑戦したいと仰られたので、そろそろいいかなと思つてお任せしちゃいました」

「桜なりのテストつてわけか。セイバー……じゃなかつた。アルトリアも、最初はフライパンの使い方も知らなかつたのに、ずいぶん成長したもんだ」

「ギルガメツシユさんに煽られたのが、相当悔しかつたみたいですからね……」

その時の光景を思い出し、桜と顔を見合わせて苦笑いする。

『ふはははは、見よ！　これがデキる男の料理というものだ！』

んん？　そしてこの黒く捻くれたモノはなんだセイバー？　よもや貴様の国ではこれが料理というのではあるまいな？　聖杯の泥かと思違えたぞ、ふははは！　これでは

王としての格の差は明白よな！』

『~~~~~っ！　離してください、凜、シロウ！　今すぐこの不愉快な男をスープの海に沈めてやります！　あ、こら、今日という今日は逃がすものですか、英雄王——！』

何がどうしてそうなつたのか、料理対決などをする事になつたサーヴァントたち。

しかし、生前臣下に任せきりだつたアルトリアと、現世で十年間腕を磨いた——本人

曰く、言峰の作る麻婆料理から逃れるために致し方なく——ギルガメツシユでは比べ物にならなかつた。結果、涙目で震えるアルトリアをドヤ顔のギルガメツシユが煽りまくるといふ展開になり、激怒して宝具を抜こうとするアルトリアを抑えるのには大層苦労した。

歴史の教科書に載っている英傑たちだというのに、やっているのは小学生レベルの争いである。魔術協会の偉い人や、歴史の専門家が見れば泡を吹いて卒倒しそうな一幕だった。

「ま、これも平和の象徴つてことで。あれ、そういえば、イリヤはどうしてるんだ？」  
「えっと、イリヤさんでしたら——」

桜の声を遮るようにして、とたとたと駆けてくる足音。えいつ、と可愛らしく土蔵の扉を開けたのは、誰あろう白い少女だった。紫のワンピースに白いスカートという出で立ちで、にこにこ笑顔を覗かせたイリヤは。

「おはよう、シロウ！ 今日はい——って、あれ、どうしてサクラがここにいるの？」

「どうして、と言われましても……先輩を起こしに来るのは、わたしの楽しみですし」

「もう、シロウはわたしが起こしにいくつて決めたでしょ！ サクラばかりずるいんだから！」

むがー！ と抗議の構えを見せるイリヤを、苦笑いしていなす桜。このままでは話が

進まないの、居間に行くように促したが、移動している間も二人はずっとじやれている。年の離れた姉妹のような光景も、今ではそう珍しくなくなっていた。

連れ立って先に行く二人に続き、庭を歩いていると、ふと明るさに目が眩む。目を細めて見上げると、ちょうど太陽が雲の合間から姿を表したところで。青く暖かな大空は、すっかり春の陽気に染まっていた。

燦々と降り注ぐ日光。ぽかぽかと心地よい気温。流れる風は花の匂いを運んでおり、鳥の声が遠くで響く。それはあまりにもありふれた、尊い日常の風景で——あの戦いの爪痕など、何も感じさせないものだった。

——戦いの後始末は、思いのほか大事おわごとになった。

大聖杯を吹き飛ばし、命からがら地下から脱出した後、あの洞窟はすっかり崩壊してしまつた。聖杯にまつわる物はことごとくが消し飛ばされるか地面の下で、もう二度と日の目を見ることはないだろう。

あの晩の戦いを乗り越えた皆は、例外なくボロボロだった。俺も遠坂も骨や内臓が何箇所も損傷しており、ギルガメッシュの霊葉がなければ数ヶ月は療養生活を余儀なくされたことだろう。

重症だったのは桜だった。大聖杯の崩壊に伴つて小聖杯としての機能も停止し、身を蝕んでいたサーヴァントの魂や『この世全ての悪』との繋がりは消え去つたが、体のダ

メージが消えるわけではない。長年刻印虫に犯されていたこともあって酷い状態ではあったが、神代の霊薬と優秀な魔術師である遠坂、そして小聖杯に詳しいイリヤの助力でどうか日常生活を送れる程度には回復してくれた。心の傷も含めて継続的なケアは必要だが、ひとまず心配はなくなったと言つていい。

不思議だったのは、心臓付近にあった特殊な虫の痕跡だった。間桐臓硯の本体だったと思われるそれは、なぜか心臓には物理的な傷が一切ない状態で、剣で貫かれたように死んでいた。言峰の手によるものとしてはおかしく、桜は俺が助けてくれたと言うのだが、俺が桜と会えたのはセイバーが助け出してくれた後だったので辻褄が合わない。この謎だけは結局解けなかったが、聖杯がまともな奇跡の一つでも起こしていたのだろうか。

いずれにせよ、臓硯の呪縛は解けた。しかし、臓硯は死亡して行方不明扱い、義父である慎二の父も行方不明、慎二自体にもトラブルがあり、桜の身内は一気にいなくなつてしまった。虐待を受けていた彼女にとってはむしろよかったのかもしれないが、未成年にとって保護者が全員いなくなるというのは一大事だ。関係者一同と役所で複雑な話し合いが持たれた結果、とりあえず藤ねえが後見人になるということで一旦は落ち着いた。

そして、より深刻だったのはイリヤだった。彼女の体はそもそも、聖杯戦争の後のこ

とを考へて作られていなかたらしい。驚くことに俺よりも年上だという彼女が、小学程度度の容姿でしかないのもその影響だ。

最悪なことに、責任を取るべきアインツベルンは、最高傑作であるイリヤが敗退したと聞いて一族ごと自殺するとうとうとんでもない暴挙に出た。後にはごく僅かなホームンクルスと膨大な資産だけが残され、紆余曲折の末、彼女はその資産で腕の良い人形師に人間とまったく変わらない人形を作ってもらい、そちらに体を乗り換えることにした。イリヤが生きていけることを知った俺たちは安堵し、本人は『見てなさい！ これでセイバーと同じぐらいむっちりむちのないすばでいーになるんだから！』と息巻いているのは、今だから言える笑い話だろう。藤ねえにはイリヤが切嗣の娘であることを伝え、当面居候としてうちで過ごす許可を取っている。

ギルガメッシュとセイバーは、サーヴァントただけあつてなんともなかつた。前者は宝物庫の薬を飲んで勝手に復活していたし、セイバーは自己再生能力で傷を癒やしていた。

いつたいながあつたのか、再会したセイバーはとんでもなくスタイルの良いお姉さんになつていて、最初見た時は誰だかわからないほどだった。臓硯の下にいた事情を明かされ、何度も謝られたが、成長した姿に慣れるまでにはしばらく時間がかかつた。

聖杯の影響で受肉したセイバーは、大聖杯が無くなつた後でも消えることはない。わ

たしのサーヴァントなんだからわたしは面倒見るわよ、と言う遠坂のところにとりあえず身を預け、いつの間にか戸籍やら何やらも用意されていた彼女は、ゆっくり身の振り方を考えるらしい。本名であるアルトリアと名乗り始めたのは、何か心境の変化があったからなのか。

心境の変化といえば、ギルガメッシュとセイバーの関係も変わっていた。聖杯戦争の最中は同じ陣営に属しつつも不倶戴天の敵、相性が最悪といった感じだったが、戦いの中で何かがあったのだろうか。ギルガメッシュはセイバーを嘲ったり弄んだりすることとはなくなり、セイバーもギルガメッシュを嫌ったり避けたりする様子はなくなった。親しく話すことも増え、この間など二人きりで夜まで映画を見に行っていたものだから、俺と遠坂は心底首を傾げたものだ。

大人同士のいい雰囲気なのかと思えば、料理対決のような小学生と変わらないやり取りはするわ、ゲームで競って一喜一憂するわで、この二人の関係は結局よくわからない。少なくとも、十年越しの因縁だけはすつきり片付いたようだった。

あまりいい結末を迎えなかった者もいた。聖杯戦争の途中から行方不明になっていたライダーの仮マスター、間桐慎二は、隣町で錯乱状態になっているところを発見された。

どうやらライダーがキャスター陣営についた時に、何かキャスターの腹に据えかねる

ことをしでかしたのか、かなり強力に洗脳魔術のようなものを受けていたらしい。

キヤスターが消滅した後でもその影響は強く残り、脳にかなりのダメージが及んだようだ。後遺症や障害が残る可能性も大きく、桜は心配していたが、遠坂は因果応報ねと言つづやいたのみ。しでかしたことの報いを受けたと言えばそれまでだが、どうにも複雑な心情だ。

慎二より、もつと酷い状態の被害者もいた。聖堂教会の監督役という立場を裏切るばかりか、世界を滅ぼそうとした大罪人の家宅搜索を行うべく、遠坂が言峰教会へ踏み込んだのだが。その地下に、まるで苗床のようになった何人もの少年少女がいるのを見つけたのだ。

調べによると、言峰は契約していたギルガメツシュに魔力を供給する目的で、教会で引き取った孤児を生きたまま魔力タンクにしていたのだという。しかし、ギルガメツシュは十年前に受肉しており、外部からの魔力供給を必要としていない。つまりこれは、魔力供給を名目にした言峰の趣味であり、あの男がどれほど異常な精神をしていたのかを伺わせる。

あの神父の悪行はそれだけではなかった。言峰は魔術協会から派遣されたマスターを襲つてランサーの令呪を奪つており、そのマスターは左手を失つた瀕死の状態で発見された。一步間違えれば魔術協会との戦争待ったなし、児童虐待の事実が浮上すれば表

社会でも行政介入待ったなしという大スキャンダルに、聖堂教会は上から下まで大騒ぎになったらしい。

俺には分からない複雑な交渉の末、聖堂教会は魔術協会に大変な貸しを作り、今回の聖杯戦争の後始末のほとんどを担う羽目となった。犠牲者たちも教会に保護され、治療と支援も得られるらしい。それらの旗振り役として、言峰の後任に銀髪の修道女シスターがスタッフを引き連れて着任したと聞いたが、前任者のような異常な人間でないことを願うばかりだ。

それ以外にも、聖杯戦争は大きな被害を残した。大聖杯が安置されていた空洞が崩落する際の山崩れは、人的被害が出なかったとはいえかなりの騒動になり、戦闘で崩壊した柳洞寺と併せてニュースでも話題になった。また、あの夜の戦闘による光を目撃していた市民もおり、巷ではUFOの仕業だという噂が実しやかに囁かれている。

キャスターによるガス漏れを装った生命力の搾取、慎二が起こした穂群原学園での結界事件も大事だった。前者はキャスターの偽装が功を制し、そのままガス漏れということで話が片付いたが、後者は聖堂教会のスタッフが総出で教職員や生徒の治療や記憶操作を行う羽目になった。幸い犠牲者や後遺症が残る人間はおらず、あれは有毒ガスの発生というカバーストーリーがでっち上げられている。

黒い影の犠牲者——行方不明者とされる数十人の人々は、戻らなかった。あれは桜と



いう器を通じて現れた聖杯の中身が、魔力を取り込むために無差別に人間を襲っていたのが真相だった。これを知った桜は、強い罪悪感で鬱病半歩手前まで追い詰められたが、遠坂やイリヤや皆の慰めでやっと最近笑ってくれるようになった。黒い影は桜の体を媒介に勝手に現れていただけで、元はと言えば桜をそんな体にした臓硯が悪い。桜に責任はなく、自分を責める必要はないのだが、優しい彼女には心の傷になってしまったようだ。

諸悪の根源である大聖杯。それが汚染されていた経緯、破壊され消滅した事実は、魔術協会の方で問題になったらしい。あげく、二人も受肉した英霊が存在するという知らせに、時計塔の降霊科ユリフェイスや伝承科プリシサンなどは数世紀ぶりのお祭り騒ぎになったとか。協会側も聖堂教会に負けず劣らず大量のスタッフを送ってくるかと思われたものの、管理者セカンドオーナーである遠坂が目に隈を作るほど何度も折衝を行った末、どうにか控えめな調査で済むことになった。聖杯戦争の方が楽だった、と死んだ目で呟く遠坂に、俺はかける言葉を失ったものだ。

時計塔のお偉方は残念だろうが、大勢のスタッフを派遣して根掘り葉掘り嗅ぎ回ろうなら、怒った大英雄二人にロンドンが更地にされかねない。遠坂は魔術協会の交渉担当に、遠回しにそんな恫喝をしていたが、あれは半分本気でセイバーに命令する気でしたと思う。

「しーろーうー！　なにぼーつとしてるの、早くしないと朝ごはん冷めちゃうわよー！」  
と。我に返ると、居間から藤ねえが首を伸ばして手招きしているところだった。相変  
わらず朝から騒がしい人だと苦笑いしながら、そちらへ向けて歩いていく。

学園の結界事件が起きる直前、慎二が数名の女子生徒を襲う別の事件があった。それ  
に巻き込まれたクラスメイトの美綴綾子の見舞いのため、病院を訪れていた藤ねえは、  
運良く結界の被害を逃れることができた。

しかし、それで安泰だったかと言われるとそんなことはない。なまじ無事だった数少  
ない教職員だったために、生徒たちの見舞いから事後処理、保護者対応、休校になった  
影響による授業スケジュールの見直しなど、あらゆる仕事が発生していった。役所と  
学園と病院を駆け回っていた藤ねえはろくに帰ってくることもできず疲労困憊だった  
ようで、雷画爺さん曰くこんなことは藤ねえが生まれてこの方初めてだそうだ。

うちに顔を出す余裕ができたのもつい最近のことで、過労でげっそりと痩せた藤ねえ  
を見た時は仰天したものだ。遠坂も桜もたいそう心配したのだが、そこはさすがの  
タイガー。連日もりもりと山のようにご飯を食べ、あつという間に復活してしまった。  
やはり元氣な藤ねえがいないと日常が帰ってきた気がせず、すっかり元通りになつてく  
れてほつと一安心だ。

俺が居間に着くまでのわずか数歩の間に、イリヤとおかずの取り合い合戦でも始まっ

たのか、ぎゃー！ だのうびゃー！ だの謎の奇声が聞こえてくる。また始まったか、と思いつつひよいと居間を覗くと。

「あれ？ なんだ遠坂、おまえもいたのか」

「おはよう、衛宮くん。なんだとはご挨拶ですこと」

猫かぶりモードのあかいあくまが、につこりと鎮座ましましていた。藤ねえの前なので上品そうに振る舞っているが、目は笑っていない。いい加減遠坂の本性と仮面にも慣れてきたが、まったくいい性格をしていると思う。

聖杯戦争の後始末に大わらわだった遠坂も、処理が一段落したおかげで最近ちよちよこ家に顔を出すようになった。遠坂が話したのか桜が話したのか、二人が姉妹であることをいつの間にか藤ねえが知っており、何がどうしてそうなったのか『そうだ！ 遠坂さんもうちで桜ちゃんと一緒にご飯を食べればいいのよ！』などと宣ったのが全ての始まり。そもそもここは藤ねえじゃなく俺の家なのだが、家主を置き去りにして進んだ話し合いの結果、いつの間にかセイバーともども結構な頻度でうちで食卓を囲むこととなっていた。

おかげで、うちの台所の競争率は大変なことになっている。俺と桜はもちろん、遠坂も料理ができるし、たまにギルガメッシュも腕を振るうし、セイバーも練習したがるし、それを見てイリヤまで料理をしたがるものだからもうめちゃくちやだ。藤ねえは賑や

かなのを喜んで座っているが、料理を作ろうという努力を少しは見せたらどうなのだろうか。

「おはようございませす、シロウ」

藤ねえとイリヤがおかずの皿を競ってぎやーぎやーと言ひ合ひ、それを見て桜が困つたように笑い、遠坂は我関せずとテレビのニュースを眺める不思議な光景。空いている場所に座ると、台所からお盆を持った金髪の美女が姿を見せた。

「おはよう、セイ……じゃなかった、アルトリア。今日の朝ごはん、作ってくれたんだつてな」

「はい。まだまだシロウたちには及びませんが、誠心誠意作らせていただきました。今日の献立ならば、ギルガメツシユにつけている隙は与えないかと」

長い髪をポニーテールにまとめ、ライオンが描かれたエプロンを纏ったセイバーは、慣れた仕草でお盆を持つてくる。その上にあるのは卵焼きときんぴらがごぼうだが、以前の目も当てられない黒焦げの魔物と違って、猛特訓の末にかなり美味しそうな出来に仕上がっている。弟子の上達の速さに、師匠の一人として鼻が高い限りだ。

実は、地味に困つたのがセイバーの我が家での立ち位置だ。藤ねえは以前のセイバーを知っているのだが、まさかいきなり十年分成長しましたなどと言えるわけがない。

結局セイバーは本国に帰り、それとは無関係に遠坂の家を訪ねてきた知り合いがアル

トリア……という建前を藤ねえには説明している。切嗣とも昔の知り合いだという話をする。『がーん……切嗣さん、美人のお知り合いばかりいるのね……。イリヤちゃんっていう娘さんまでいるし……。』と何故だか一人でショックを受けていたのだが、まあ話は信じてくれたようでも何よりだ。

「うんうん、これで全員揃ったわねー。というわけで、今日も元気にー！」

おかずの配膳が終わったところで、藤ねえの音頭でいただきますと挨拶を唱和。こうして、今日も平和な一日が始まった。

「ねえ士郎、ギルガメツシユさんってまだ帰ってこないの？」

激しいおかず争奪バトルを繰り広げる片手間、藤ねえがそんなことを訊ねてくる。そういうえばクラス名アーチャーではなく本名を伝えていたんだなと思いつつ、俺は首を横に振る。

「いや、まだ連絡は入ってないな。しばらく旅に出るって言ってたから、そのうち珍しい土産でも持って帰ってくるんじゃないか」

「では、彼が戻るまでに、さらに修練を積んでおかなければ。以前のような屈辱、二度は甘受できません」

サーヴァントの反応速度で、肉団子を奪取したセイバーがぐつと拳を握る。料理対決で敗北を喫して以来、セイバーのやる気と向上心は見事なもので、これは俺もうかうか

していられないかもしれない。ただでさえ和食は桜、中華は遠坂に優勢を奪われつつあるのだし、そろそろ家主の力を知らしめてやらねばなるまいと決意。

「冒険家って大変よねー。すごい山の中とか海の底とかに行くんでしょ？ でもでも、一度ぐらい私も冒険してみたいなー」

「ボウケンかあ……ねえねえタイガ、この前テレビでやってたところ、オーストラリアって面白そうじゃない？ お休みの日に行ってみたいなー」

「う、うーん、海外はちよーつちハードル高いかなあ……」

ギルガメッシュは表向き冒険家ということになってるので、藤ねえとイリヤが楽しそうに騒いでいる。実際、生前は冥界にまで行った冒険のスペシャリストなので嘘はついていないはずだ。うん。

「……………冒険なら一生分したから、しばらくはいいかしらね」

ぼそつと死んだ目でつぶやいたのは遠坂。確かにあの聖杯戦争で、森の中から空の上、洞窟の底に至るまでさんざん冒険はしたと思う。大怪我をしたり死にかけたりした記憶を思い出すと、乾いた笑いしか出てこない。

それでも、全部が全部酷いマイナスの体験だったかというのと、決してそうではないように思う。その戦いという名の冒険の中、ずっと頼りになり続けたサーヴァントに目を向けるが——そこにはあの偉そうな男の姿はなく、一人分の空席が残るだけ。

一度だけため息を吐く。見上げると、飛び込んでくるのは我が家の天井。その更  
上、遙か空の彼方を思つて。

「ギルガメツシユ、今頃どこにいるんだらうな」

\*\*\*

月の綺麗な夜だった。

「雑種よ。此度の戦は決着を見た。貴様は生き残り、そして仲間も生き残った。並の魔  
術師にも満たぬマスターが、あらゆる魔術師と英霊を退け、悪神をも滅ぼした——これ  
は比類ない大戦果と言えよう。

だが、貴様という人間の戦いは今からが本番だ。これより先の長い旅路みちのりを、貴様はど  
う歩む」

しばらく前。

いつかの夜のように、縁側で星を見上げていると、ギルガメツシユがそんなことを訊  
ねてきた。

どういふ心境なのか、人ひとり分を隔てた距離で、俺と同じように夜空を見上げてい  
る英雄王。少し悩んだ末に、俺はうつすらと考えていたことを口に乘せた。

「そうだな……正直、聖杯戦争が始まるまで、俺はあんまり先のことを考えちゃいなかった。正義の味方になりたいってほんやり思っただけで、それが何なのか、どうすればなれるのか、何も分かってなかったんだ。ただ俺がなんとかしないと、それだけを考えてた」

だからこそ、悩み続けた。

その在り方は歪だと、何かがおかしいのだと、ギルガメツシユにも遠坂にもセイバーにも叱責された。俺自身にも道が見えていなかったのだから、今にして思えばおかしいのも当然だった。

しかし、この聖杯戦争でそれは変わった。俺は自分が許せなかったことが何だったのか気づき、正義の味方というカタチに一つの答えを見つけた。一人で走り続けたらどうなるかという末路と、仲間を頼ることの意味も学んだ。

「だからここからは、ちゃんと先を見て進むことにする。臓硯や言峰のような魔術師と戦うためには、ただ突っ走るだけでもダメだし、自分一人でもダメなんだ。」

そのために、まずは——そうだな。学園を卒業したら、大学に行こうと思うんだ」

「ほう？」

俺の答えが意外だったのか、ギルガメツシユが興味深そうに片眉を上げた。

「魔術師どもの学び舎、時計塔とやらを目指すのではないのか。あの娘は、その道を志し



ているようだが」

「遠坂はそうだろうな。けど、時計塔は魔術師のための組織だ。俺は魔術使いであつて、魔術を極めたいわけじゃない」

魔術師とは一般に、魔導の探究を通じて根源への到達を目指す研究者だ。だが俺は、根源なんかには毛ほどの興味もない。もちろん時計塔に行くことで得られるものは多いだろうが、本質的に、俺がなりたいものは魔術師ではない。

「俺の目標は、民間人を魔術師から守ること——守るための制度作りをすることだ。それが俺にとつての、正義の味方の一つの答えだ。

……実は、聖杯戦争の後始末で大騒ぎになつてた時、ちよつとした話を聞く機会があつただけだ」

一歩間違えれば冬木市どころか、世界中が壊滅していたという聖杯戦争。裏の世界は大騒動になり、魔術協会も聖堂教会も未だに後始末に奔走しているが、何もその二つの機関だけが魔道に関わる組織というだけではない。

「どうやら日本にも昔から、この手の問題をどうにかしようつていう機関はあつたらしい。けど小規模な組織がバラバラになつてただけで、有機的に動けてはいないようなんだ。そのせいで今回も、海外の組織でしかない魔術協会と聖堂教会に主導権を奪われた。

それで国の方で、新しく魔術的な問題に対処する専門機関を立ち上げようって話が出てきてさ。それに興味はないかって声をかけられたんだ」

国の顔にも表と裏がある。あわや国家の滅亡という事態に、裏側の組織がようやく重い腰を上げたらしい。事情を説明してくれたのは、魔術協会の面々に混じって事情聴取に来た一人の日本人だった。

旧来の組織の統廃合、表側の組織との連携、人員の確保など、実働体勢が整うまでの問題は山積み。新機関の名称すらまだ決まっておらず、禍特対だの退魔機関だのと仮の候補が上がっている段階で、ちゃんとした組織になるのは何年も先のことだそうだけだ。

「民間人を魔術師から守る、正義の味方。そのための組織作りができて、その中で戦えるなら、きつとやりがいがあると思う。そういうものがあれば、十年前の大火災も、今回の聖杯戦争だって、きつと被害を抑えられたはずだ」

「なるほど。そのために、時計塔ではなくこの国の学び舎を選んだわけか」

「一応、表向きは公務員ってことになるらしいし、今から関わりを持つなら日本にいた方がいいからな。遠坂ほど勉強はできないから、これから頑張らないといけないけど」

そうか、と小さく頷くギルガメッシュ。否定することも、肯定することもない。紅の瞳は静かに、じつと俺を裁定していた。

「個人ではなく仲間を、組織を作った上で戦うか。それがおまえの道か、衛宮士郎」

「ああ。俺はアーチャーのようにはならないし、ギルガメツシユのようにはなれない。俺の人生の答えは、結局俺にしか出せないんだ。

だから——この道が、間違つてないって信じてる」

そう、胸を張つて答えると。ギルガメツシユは、ふつと唇を緩めて微笑んだ。

いつもの嘲笑でも、高笑いでも、皮肉めいた笑みでもない。穏やかな笑いは、まるで俺の道行きを、そこから生まれるものを愉しみにしているかのようだった。

「長い旅路になるぞ、雑種。人を束ね、戦うというのは、生半な道ではない。一人で戦つた英雄は数知れぬが、貴様の道は尚険しいものとなろう。努、その魂を損なうな」

「——ああー！」

いつか、切嗣に誓つた夜のように。偉大な王の激励に、しっかりと前を向いて頷く。握つた拳は、理想を貫く覚悟の証だった。

それを見たギルガメツシユは、愉しそうに目を細めると、再び満天の夜空へ向き直る。小さく吹いた風が、黄金の髪をすつと浮かせた。

「——さて。実が成るのは暫し時を待たねばならぬか。それまでの娯楽を求め、我も少し旅に出るとしよう」

「旅つて、どっかに行つちやうのか？」

驚きに目を見開く。どうやら俺にとつて、ギルガメツシュがすぐ近くにいることはいつの間にか当たり前になってしまっていたらしい。訊ねる声は、自分でも驚くほど動揺が混じっていた。

「うむ。あの聖杯の居心地は最悪であったが、その中で一つ、面白いものを見てな」

そんな俺に、悪戯っぽい笑みで返すギルガメツシュ。彼の王らしくない、邪気のない好奇心に満ちた笑顔は、まるで少年のようにも見える。

「貴様が我を呼び出す直前、我は『この世<sup>ア</sup>全<sup>リ</sup>ての悪<sup>マ</sup>』めに囚われていた。その中でヤツは、並行世界の光景を見せてきたが——聞いて驚け。そこに映っていたのは、数百光年の彼方にある別天体、別の文明だった」

「えっ……ちよつと待て、それって宇宙人ってことか!？」

「然り。その軸の我は、月の聖杯戦争に喚ばれていてな。そこを勝ち抜いた後、宇宙旅行へと出向いたらしい」

いきなりとんでもない話になってきた。

S F小説か何かの世界に、思考がついていかない。ぽかんと口を開けていると、ギルガメツシュはフハハハと楽しげに笑う。

「いやなに、さしもの我も目を疑ったものだ。いずれ遠い未来の果て、雑種どもが星の海に漕ぎ出す日々は視ていたが、よもや一足先にその愉しみを味わう我がいるとはな！」

まったく我としたことが、自身を羨む日が来るとは思いもよらなんだわ。腐れた聖杯も、一つぐらいは味な真似をする」

「えーつと……それで、自分も宇宙に行きたくなつた感じか？」

「いかにも。私の責務しむとが意味を持つのは遙か彼方の話。その刻ときが来るまで、言つてしまえば我は暇でな。

私の治世で、呼び出されてからの十年で、この星のほとんどは見えて回つた。ならば一つ、この星を飛び出し、心躍る余暇に繰り出すのも一興であろう」

信じられないスケールの話である。

いや、そんなに気軽に宇宙旅行に出かけるつて……まあ確かに、ギルガメツシュの宝物庫なら宇宙船の一つや二つ入つていそうではあるけれど。

星空を見上げる。何万、何億光年の彼方から降り注ぐ光の欠片。俺はこの冬木だけでも精一杯なのに、ギルガメツシュはそんな遠くの宝に手を伸ばそうとしているのか。あまりにも実感が湧かなすぎて、まるで言葉が出てこない。

「なに、たまにはここにも顔を出そう。土産程度は持つてきてやる故、王の帰還を心待ちにしているがいい。

——ふむ、そうだな。この愉しみを味わうのが我一人というのも味気ない。どうだ雑種。貴様も一つ、星の舟に乗つてみるか」

「…………え!？」

今度こそ度肝を抜かれた。

いや、驚きすぎてさつきからずっと同じリアクションしかしていない気がする。宇宙旅行、というか冒険に同行しないかって、そんなトンデモスケールの提案を本気でしてきているのか——？

「ふははは、そう本気にするな、A U O ジョークだ。貴様にはまだ、この星でやるべきことが残っているよ」

俺がフリーズしていると、ギルガメッシュは豪快にそう笑い飛ばした。冗談なら良かったが……いや、冗談なのは最後の誘いだけか。宇宙旅行に行く件は本気らしく、それはそれでどう反応していいのかわからない。

しかし、さつきから驚かさねばなしで、驚いた様子を面白がられているというのもなんだか癪だ。たまには一つ、反撃をしてもいいだろう。

「ギルガメッシュ。たまには、うちに戻ってきてくれるんだよな」

「うむ、そう言ったが」

「俺はこの先大学を目指すって言ったし、やらなくちゃいけないこともたくさんあるけど……時間を取るタイミングも、きつとあるはずだ。」

だからその時になったら——俺も、一緒に連れて行ってくれないか」

これを聞いたギルガメツシユの顔といったら見ものだった。

大抵は笑うか、無表情か、怒るかの三択のギルガメツシユが——心の底から、本気で驚いた顔を浮かべていたのだ。この男の表情はだいぶ見てきたつもりだったが、こんな顔はこれが初めてだったように思う。

「確かアンタは、俺に一つ宿題を出してくれてたよな」

言峰との戦いの前、あの大空洞の地下で交わした言葉。そこで言われたことを、俺ははつきりと覚えている。

『雑種よ。貴様に一つ宿題だ。』

この下らぬ茶番に幕を下ろし、聖杯戦争魔術師との抗争となる大戦に挑むまで。それまでの間に、『楽しみ』を見出だせるようになっておけ。

そうさな——この教師役は、王たる我より身近にいる者の方が適していよう』

戦いが終わってから、俺は周りをよく見るようになった。すると、今まではまるで見落としていた、皆の「楽しみ」が少しずつ見えてきた。

桜は、あれで甘いものが大好きだ。コンビニスイーツの新作が出るとどれを買うかこっそり悩んでいるし、新都にスイーツ屋ができたと聞けば行きたそうにそわそわしている。それで体重計を見て時々凹んでいるのは、見なかったことにしてあげよう。

セイバーは、いろいろなことにチャレンジするようになった。騎士王ではなくアルト

リアとして生きることにした、という彼女は、目下のところ料理作りに熱中している。どうも彼女は食いしん坊らしく、自分で美味しいものを作ると好きなものを食べられると気づいたからか、そのあたりもモチベーションになつていようだ。

イリヤは、見るもの全てが新鮮らしい。ずっとアインツベルンの本拠地に閉じ込められていた彼女には、外の世界のあらゆるものが娯楽だった。散歩一つ取つても、食べ物一つ取つても、いつも嬉しそうに目を輝かせている。制作中だという人形に体を移し終えたら、彼女はどんな道を歩むのだろう。

遠坂の実態は実はまだ掴めていないため、今のところのサンプルは三者三様だが、どれも共通していることがある。それは、未知なるものへの期待というものだ。

新しいことを知る、知らなかったことを学ぶ、できなかったことができる。その達成感は、喜びは、きつとかげがえのないものだろう。今までは見る余裕すらなかったことだが、彼女たちを見ているうちに、それが少しずつわかつてきた。

「誰も知らない世界を見ることができたら、それはきつと、一生残る楽しみになると思う。正直に言うと、今の話を聞いて、ちよつとワクワクしてるんだ。

だから、いつか。俺に、星ユメを見せて欲しい」

そう、はつきり言い切ると。ふいに、弾けるような笑いが響いた。

「ク——はは、ふはは、ふははははは！ 我としたことが、これは一本取られたか！ こ



の我を笑い殺そうとは、まったく小癩な雑種よ！」

何がツボに入ったのか、腹を抑えて笑い転げているギルガメツシュ。自分の膝を何度も叩き、近所中に響き渡る勢いで大爆笑した男は、笑いすぎるあまり息も絶え絶えにこちらを向いた。

「我を水先案内人代わりに使おうとは、雑種の分際で恐れを知らぬ奴よ！ 自らの愉悅のために我に乞おうなど、そんな莫迦者はさしもの我も初めて目にしたわ。だが、乗るかと訊ねたのは確かに我だ。

よかろう！ 宿題に満点を出した褒美だ、我が旅路への同行を許す！ その時が訪れるまで、誰より先に星の海を行く愉しみを心待ちにしておくが良い！」

——それは、どれほどの榮譽だろう。

この星の外は、未だ人類が知らぬ未明の地だ。そんなところに踏み出そうというのだから、その道程は英雄王をしても生半なものではないだろう。誰かを連れて行くなど、足手まといを抱えるようなものだ。

だというのにギルガメツシュは、俺の同行を許すと言ってくれた。楽しみを見たいという俺の欲望を、誰より先に宇宙そらの果てを目にしたいという我儘を、ギルガメツシュは是としたのだ。

誰よりも冷酷な、唯一にして絶対の王者。人の世を外側から見守り、人を罰しながら

人の欲を認める裁定者。誰よりも先へ行き、人の世界を切り開いた英雄。そんなギルガメッシュが——その新たな叙事詩に、自分の席を用意しておいてくれるという。

自然と、口の端に笑みが溢れてしまう。まったく——こんな報酬を貰ってしまったら。この先の長い戦いを、誰よりも頑張るしなくなるんじゃないか。

「最後に王として、貴様に一つ命じることがある」

気がつく。ギルガメッシュは、黄金の鎧を纏っていた。

出会った時と何も変わらない、圧倒的な存在感。サーヴァントとして、英霊として、英雄王としての正装。その姿で、俺を見下ろしたギルガメッシュは。

「先に進むがいい、衛宮士郎。その無様な生涯を全うし、退屈な世に花を咲かせよ。その儀の完了を以て、我との契約を断ち切るものとする。

おまえの旅ならば、それは見応えのある物語となるであろう」

「ああ——約束するよ、ギルガメッシュ。俺はこれからも、正義の味方を張り続ける——」

月が綺麗な、夜空の下。

黎明を明に迎える星に、俺は新たな理想を誓う。いつかの夜を思わせる輝きは、衛宮士郎という人間に、新たな灯火を宿したのだった——。

## エピローグ

「——ようやくたどり着いたか。まったく、<sup>ワープ</sup>跳躍航法とやらも存外時間のかかるものだ」  
星を覆い尽くす巨大都市<sup>エキユメノポリス</sup>。

大気圏の高層にまで達する摩天<sup>スカイスクレイパー</sup>楼がひしめくように密集し、その合間を縫うように無数の乗り物が行き交っている。

その中でもひとときわ高い建造物から突き出た、正方形のプレートのような空間。そこに着陸した黄金の舟から、一人の人間<sup>ヒューマノイド</sup>種族が現れた。

「ほう、これがこの宙域<sup>セクター</sup>で最も発達した惑星か。些かばかり、せせこましいきらいはあるが——なに、これもまた文明の極致。愉しみがいがある」

風になびく黄金の髪。飾り気のない黒のライダージャケットに、首元にはネックレスというラフな格好だが、この男が着ればそれですら至上の一着のように見える。

美しさと、それ以上に絶大な存在感を纏わせた男は、舟が乗る正方形のプレート——<sup>ランディングパッド</sup>着陸所から身を乗り出す。地上からは数百メートル、いや、数千メートルの高層だが、男には微塵も臆する様子はない。男の紅の瞳は、眼下に広がる絶景に夢中になっていた。

——軌道上にある巨大戦艦。

——幾何学状の、自在に空を駆ける装置。

——二足歩行から触手型まで、あらゆる外見を持つ多種多様な種族たち。

——豪快に動く機械人形や、物資を転送する紋様といった、科学でも魔術でもない文明。

地球とはまるで異なる、まったく違う理の下に発展した惑星。新しい世界を目にした男は、開拓者の喜びに目を輝かせていた。

「冒険に繰り出すのも、我が蔵を完成させて以来か——いや、完成など世迷い言であつたな！ たかが星一つ、種族一つの財を収めた程度で満足するなど、我オレとしたことが欲が浅すぎた！

ヤツらへの土産となる宝も見繕わねばな。クク、セイバーの驚く顔が目には浮かぶわ！

星の裏側まで満ちる無数の塔は、まるで終わりが無いようだった。その中に数え切れぬほどの未知の生命が、知識が、技術が存在する事実には、男の心が弾む。

故郷の星では大英雄であっても、この星では名も知れぬただ一人の生命。新たなるステージで第一歩を踏み出し、ここから全てが始まるのだという悦びに、男の口端がつり上がる。常に「上」に立ち続けた男にとって、なんのしがらみもなく「下」から歩き出

すというのは、それ自体が心躍る体験であつた。

「我が往くは星の大海——まだ見ぬ新世界よ、このギルガメツシュを愉しませるがいい！」

星の風を味わうように、両手を広げる黄金の男。愉悦に唇を歪めた男は、空に響く笑い声を上げる。すべてを見通す瞳の先には、無限の世界が広がっていて。

——英雄王の、新たなる叙事詩が始まつた。

\*\*\*

F a t e / E p i c o f G i l g a m e s h

完